常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II

── 花前Ⅰ・中山新田II・中山新田III ──

1984

日本道路公団東京第一建設局

財団法人　千葉県文化財センター

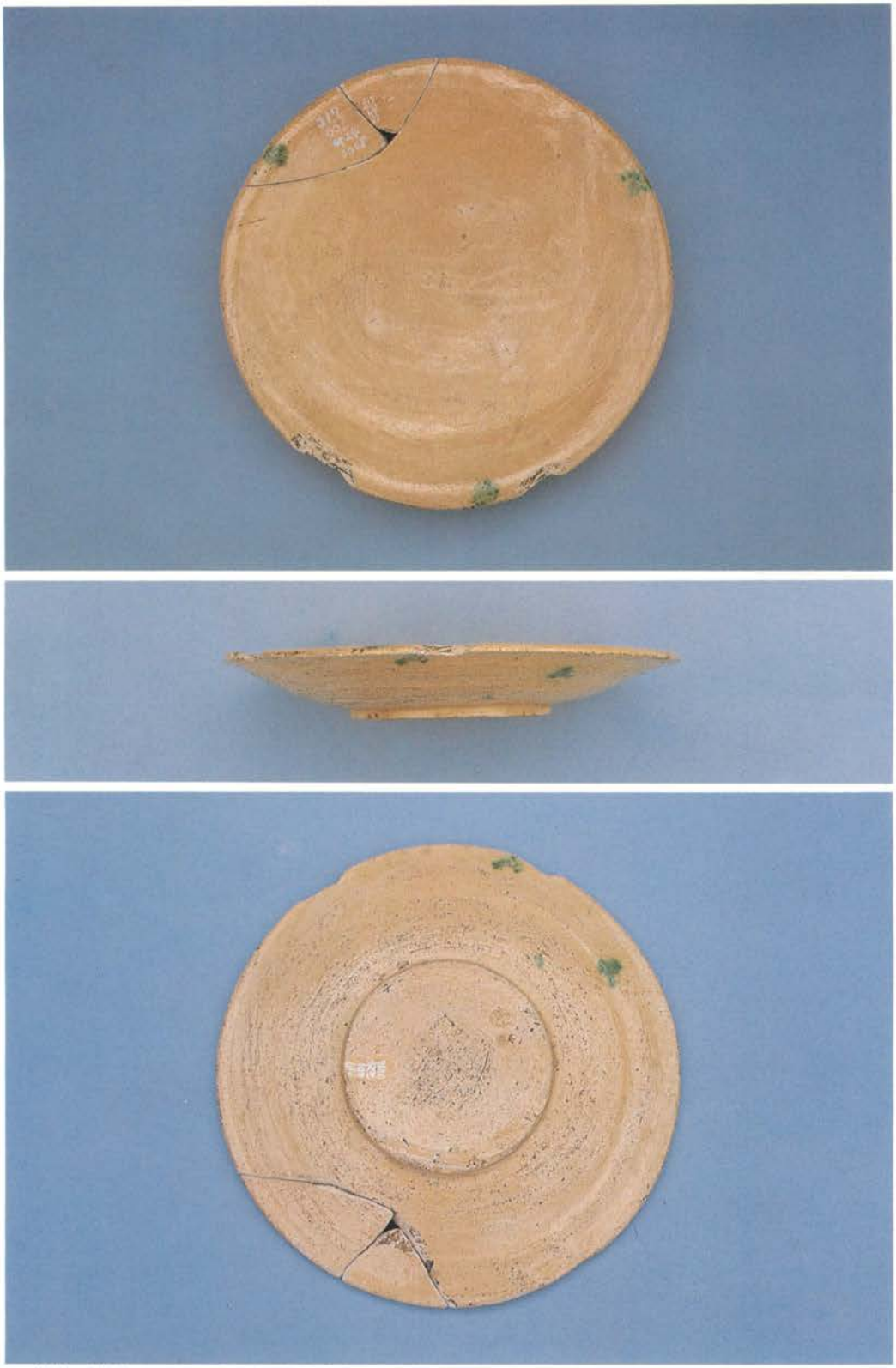
常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II

―― 花前(はなまえ)Ⅰ・中山新田(なかやましんでん)II・中山新田(なかやましんでん)III ――

1984

日本道路公団東京第一建設局

財団法人　千葉県文化財センター



花前 I 遺跡　10・11号掘立柱建物跡出土　二彩陶器

花前 I 遺跡　040住居跡出土　銅製柄杓

花前 I 遺跡　灰釉陶器椀

花前 I 遺跡　緑釉陶器片

序　　文

千葉県北西部に広がる下総台地は，先土器時代から近世に至るまでの，数多くの遺跡が存在することで知られております。

さて，近年，全国的に高速自動車道の整備が進んでおりますが，常磐自動車道もその一環として計画されたものであり，柏，流山の両市8.6㎞の区画にわたり建設されることとなりました。

このため工事に先立って昭和52年９月に日本道路公団と千葉県教育委員会との間で「常磐自動車道施行に伴う埋蔵文化財発掘調査実施に関する協定」が締結され，これに基づき昭和52年10月から千葉県文化財センターによって調査が始められました。６年にわたった発掘調査は昭和57年９月に終了し，約20か所の遺跡から数多くの貴重な資料を得ることができました。

現在は引き続いてこれらの整理作業が進められており，昭和57年には「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」が刊行されています。

このたび，柏市に所在する花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・同Ⅲ・八両野の各遺跡の整理が終了し，「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」として本報告書を刊行することになりました。

本報告書に収録した遺跡のうち，花前Ⅰ遺跡では縄文時代前期と奈良・平安時代の集落が検出され，特に奈良・平安時代の集落から二彩の皿，銅製の柄杓など貴重なものが出土しています。また，中山新田遺跡からは先土器時代，縄文時代を中心とした資料が，さらに八両野遺跡では江戸時代の高田台牧に属する馬土手が調査されました。

これらの遺構や遺物はみな下総台地の歴史を解明してゆく上で重要な資料となるものであります。

この報告書が，学術的な資料としてはもとより，多くの方々が歴史に対する理解を深めるために，広く活用されることを望む次第です。

最後に，寒さ暑さの中で調査に協力された多くの調査補助員の皆様に対して，心から謝意を表わすとともに，日本道路公団東京第一建設局，千葉県教育委員会の御協力，御指導に深く御礼申し上げます。

昭和59年３月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　今　井　　正

凡　　例

1　この報告書は，日本道路公団による，常磐自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録される内容は，千葉県柏市の花前Ⅰ・中山新田II・中山新田IIIの各遺跡の発掘調査報告である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，日本道路公団の委託を受け，千葉県教育庁文化課の要請と指導のもとに，財団法人千葉県文化財センターが行なった。

4　整理作業及び報告書の作成作業は，白石竹雄，岡川宏道の指導のもとに，清藤一順，鈴木定明，田中豪，郷掘英司，萩原恭一が行ない，鈴木文雄，石井ひろみ，海老原充，田井知二が協力した。なお発掘作業と基礎整理作業については，第Ⅰ篇1章を参照されたい。

5　原稿執筆は下記の分担で行ない，清藤一順，郷堀英司がこれを編集した。

清藤一順　第III篇2章1・第3章1・結語

田中　豪　第II篇2章2・第3章1，第III篇第1章・第2章2・第3章2，第IV篇第2章1・2・第3章1

郷堀英司　第Ⅰ篇1章第2章，第II篇第2章1・2・第3章2，第III篇第2章3・第3章3，第IV篇第2章3・第3章2

萩原恭一　第II篇3章2（8）

田井知二　第II篇2章2（3）

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

日本道路公団東京第1建設局及び同柏工事事務所，千葉県教育庁文化課

会田信行，穴沢義功，斉藤幸恵，宮文子，山浦清，及び多くの調査補助員，地元の方々

7　第1図地形図には，国土地理院著作発行，5万分の1「野田」を使用している。

8　歴史時代の出土遺物の表記については下図のようにした。またカマド内の土層についてはカマド構築材をスクリーントーンで表わし，その他を次のように表現している。

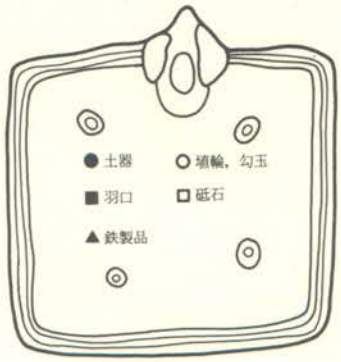
Ⅰ′．崩壊した構築材　II．カマド内堆積

III．流入土　IV．基底部　V．住居跡覆土

混入物

a，山砂　b，粘土　c，焼土　d，灰

e，炭　f，ローム



目　　次

序　文

凡　例

第Ⅰ篇　経過と環境

第１章　調査の経過と組織 ……1

第２章　環境 ……2

第Ⅱ篇　花前Ⅰ遺跡（217—001）

第１章　調査の方法と経過 ……4

第２章　遺構と遺物 ……5

１．先土器時代 …… 5

２．縄文時代 ……6

(1)遺構と出土遺物 ……7

(2)その他の遺物 ……56

(3)住居跡出土の動物遺体 ……111

３．歴史時代 ……118

第３章　小結 ……255

１．縄文時代 ……255

２．歴史時代 ……257

(1)土器分類 ……257

(2)共存関係の抽出 ……266

(3)実年代について ……268

(4)施釉陶器について ……269

(5)「爪形状圧痕」を有する土器について ……269

(6)鉄器と鉄滓について ……270

(7)埴輪について ……271

(8)その他の遺物について ……271

第Ⅲ篇　中山新田Ⅱ遺跡（217—007・008・011・014）

第１章　調査の方法と経過 ……273

第２章　遺構と遺物 ……276

１．先土器時代 ……276

２．縄文時代 ……335

3．歴史時代 ……440
第3章　小結 ……450
1．先土器時代 ……450
2．縄文時代 ……451
3．歴史時代 ……453
第IV篇　中山新田III遺跡（217—015）
第1章　調査の方法と経過 ……454
第2章　遺構と遺物 ……455
1．先土器時代 ……455
2．縄文時代 ……456
3．歴史時代 ……462
第3章　小結 ……466
1．縄文時代 ……466
2．歴史時代 ……466
結語 ……467

挿 図 目 次

花前Ⅰ遺跡

第 1 図　花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ遺跡及び周辺遺跡 ……3
第 2 図　先土器時代出土遺物 ……5
第 3 図　縄文時代遺構配置図 ……6
第 4 図　007住居跡 ……7
第 5 図　007住居跡出土土器 ……8
第 6 図　007住居跡出土土器 ……9
第 7 図　007住居跡出土遺物 ……10
第 8 図　008住居跡 ……12
第 9 図　ＰⅠセクション図（1/30） ……12
第 10 図　008住居跡出土土器 ……13
第 11 図　008住居跡出土土器 ……14
第 12 図　008住居跡出土土器 ……15
第 13 図　008住居跡出土遺物 ……16
第 14 図　021住居跡 ……17
第 15 図　021住居跡出土土器 ……18
第 16 図　021住居跡出土土器 ……19
第 17 図　025住居跡 ……20
第 18 図　025住居跡出土土器 ……20
第 19 図　025住居跡出土土器 ……21
第 20 図　026住居跡（上）・遺物出土状況（下） ……23
第 21 図　026住居跡出土土器 ……24
第 22 図　026住居跡出土遺物 ……25
第 23 図　031住居跡 ……26
第 24 図　031住居跡出土土器 ……27
第 25 図　052住居跡 ……28
第 26 図　052住居跡出土遺物 ……29
第 27 図　063住居跡 ……30
第 28 図　063住居跡出土遺物 ……30
第 29 図　103住居跡 ……31

第 30 図　103住居跡出土土器 ……32
第 31 図　103住居跡出土土器 ……33
第 32 図　103住居跡出土土器 ……35
第 33 図　103住居跡出土遺物 ……36
第 34 図　103住居跡出土貝刃 ……37
第 35 図　118住居跡 ……38
第 36 図　118住居跡出土土器 ……39
第 37 図　118住居跡出土土器 ……40
第 38 図　118住居跡遺物出土状況 ……40
第 39 図　118住居跡出土土器 ……41
第 40 図　119住居跡 ……43
第 41 図　119住居跡出土土器 ……44
第 42 図　119住居跡出土遺物 ……45
第 43 図　017住居跡 ……46
第 44 図　017住居跡出土土器 ……47
第 45 図　017住居跡出土土器 ……48
第 46 図　034住居跡 ……50
第 47 図　034住居跡出土土器 ……51
第 48 図　034住居跡出土土器 ……52
第 49 図　034住居跡出土土器 ……53
第 50 図　034住居跡出土遺物 ……54
第 51 図　034住居跡出土遺物 ……55
第 52 図　第１群～第２群Ｂ類土器 ……66
第 53 図　第２群Ｃ～Ｅ類土器 ……67
第 54 図　第２群Ｅ・Ｆ類土器 ……68
第 55 図　第２群Ｆ～Ｈ類土器 ……69
第 56 図　第２群Ｉ・Ｊ類土器 ……70
第 57 図　第２群Ｊ・Ｋ類土器 ……71
第 58 図　第２群Ｋ・Ｌ類～第３群Ｂ類土器 ……72
第 59 図　第３群Ａ・Ｃ類土器 ……73
第 60 図　第３群Ｃ～Ｅ類土器 ……74
第 61 図　第３群Ｅ～Ｇ類土器 ……75
第 62 図　第３群Ｇ類土器 ……76

第 63 図　第 3 群H類・第 4 群A類土器 ……77
第 64 図　第 4 群B～D類土器 ……78
第 65 図　第 4 群D・E類土器 ……79
第 66 図　第 4 群F・G類土器 ……80
第 67 図　第 4 群G・H類土器 ……81
第 68 図　第 4 群H類土器 ……82
第 69 図　第 4 群H・Ⅰ類土器 ……83
第 70 図　第 5 群土器 ……84
第 71 図　第 6 群・第 7 群A類土器 ……85
第 72 図　第 7 群A類土器 ……86
第 73 図　第 7 群B・C類土器 ……87
第 74 図　第 7 群D・E類土器 ……88
第 75 図　第 7 群F～H類土器 ……89
第 76 図　グリッド出土の土器 ……92
第 77 図　グリッド出土の土器 ……93
第 78 図　土器片錘・土製円板 ……95
第 79 図　尖頭器・石鏃・石錘 ……97
第 80 図　打製石斧 ……98
第 81 図　打製石斧 ……99
第 82 図　打製石斧・磨製石斧 ……100
第 83 図　磨製石斧 ……101
第 84 図　凹石 ……102
第 85 図　凹石 ……103
第 86 図　凹石・磨石 ……104
第 87 図　磨石・敲石 ……105
第 88 図　凹石・石皿 ……106
第 89 図　石皿 ……107
第 90 図　特殊石製品 ……108
第 91 図　103住居跡貝層サンプル採集位置 ……112
第 92 図　歴史時代遺構配置図 ……118
第 93 図　001住居跡 ……119
第 94 図　001住居跡出土遺物 ……120
第 95 図　001住居跡出土遺物 ……121

第 96 図　001住居跡出土遺物 ……122
第 97 図　002住居跡 ……127
第 98 図　002住居跡出土遺物 ……128
第 99 図　003住居跡 ……129
第 100 図　003住居跡出土遺物 ……130
第 101 図　004住居跡及び出土遺物 ……132
第 102 図　011住居跡 ……134
第 103 図　011住居跡カマド ……135
第 104 図　011住居跡出土遺物 ……136
第 105 図　011住居跡出土遺物 ……137
第 106 図　012住居跡 ……139
第 107 図　012住居跡出土遺物 ……140
第 108 図　014住居跡 ……141
第 109 図　016住居跡 ……142
第 110 図　016住居跡カマド ……143
第 111 図　014住居跡（1・2）・016住居跡出土遺物 ……144
第 112 図　016住居跡出土遺物 ……145
第 113 図　019住居跡及び出土遺物 ……147
第 114 図　019住居跡出土遺物 ……148
第 115 図　024住居跡 ……150
第 116 図　024住居跡出土遺物 ……151
第 117 図　027住居跡 ……153
第 118 図　028住居跡 ……154
第 119 図　028住居跡出土遺物 ……155
第 120 図　030住居跡 ……156
第 121 図　030住居跡カマド ……157
第 122 図　030住居跡出土遺物 ……158
第 123 図　030住居跡出土遺物 ……159
第 124 図　033住居跡 ……160
第 125 図　037住居跡 ……161
第 126 図　037住居跡カマド ……162
第 127 図　037住居跡出土遺物 ……163
第 128 図　039住居跡 ……165

第 129 図　039住居跡出土遺物 ……166
第 130 図　040住居跡 ……168
第 131 図　040住居跡カマド ……169
第 132 図　040住居跡出土遺物 ……170
第 133 図　040住居跡出土遺物 ……171
第 134 図　040住居跡出土遺物 ……172
第 135 図　040住居跡出土遺物 ……173
第 136 図　040住居跡出土遺物 ……174
第 137 図　041住居跡 ……179
第 138 図　041住居跡カマド ……180
第 139 図　041住居跡出土遺物 ……181
第 140 図　041住居跡出土遺物 ……182
第 141 図　041住居跡出土遺物 ……183
第 142 図　041住居跡出土遺物 ……184
第 143 図　042住居跡及び出土遺物 ……189
第 144 図　045住居跡及び出土遺物 ……190
第 145 図　046住居跡 ……192
第 146 図　046住居跡出土遺物 ……193
第 147 図　046住居跡出土遺物 ……194
第 148 図　047住居跡 ……196
第 149 図　047住居跡出土遺物 ……197
第 150 図　048住居跡 ……199
第 151 図　057住居跡 ……200
第 152 図　057住居跡出土遺物 ……201
第 153 図　058住居跡 ……203
第 154 図　058住居跡出土遺物 ……204
第 155 図　058住居跡出土遺物 ……205
第 156 図　058住居跡出土遺物 ……206
第 157 図　058住居跡出土遺物 ……207
第 158 図　058住居跡出土遺物 ……208
第 159 図　1 号掘立柱建物跡及び出土遺物 ……213
第 160 図　2 号掘立柱建物跡 ……214
第 161 図　3 号掘立柱建物跡 ……215

第162図　4号掘立柱建物跡及び出土遺物 ……216
第163図　5号掘立柱建物跡 ……217
第164図　6号掘立柱建物跡 ……218
第165図　7号掘立柱建物跡 ……219
第166図　7号掘立柱建物跡出土遺物 ……220
第167図　8号掘立柱建物跡及び出土遺物 ……221
第168図　9号掘立柱建物跡 ……223
第169図　10・11号掘立柱建物跡 ……224
第170図　9号(1～3・9)10号(4～8)掘立柱建物跡出土遺物 ……225
第171図　005溝・006・010土坑 ……227
第172図　010土坑出土遺物 ……228
第173図　050地下式土坑 ……230
第174図　051地下式土坑 ……231
第175図　060（上）・061地下式土坑 ……232
第176図　グリッド出土遺物（1） ……234
第177図　グリッド出土遺物（2） ……235
第178図　グリッド出土遺物（3） ……236
第179図　グリッド出土遺物（4） ……237
第180図　グリッド出土遺物（5） ……242
第181図　グリッド出土遺物（6） ……243
第182図　グリッド出土遺物（7） ……244
第183図　グリッド出土遺物（8） ……245
第184図　グリッド出土遺物（9） ……249
第185図　グリッド出土遺物（10） ……250
第186図　グリッド出土遺物（11） ……251
第187図　埴輪（1） ……252
第188図　埴輪（2） ……253
第189図　土師器坏形土器 ……263
第190図　須恵器坏形土器・土師器甕形土器 ……264
第191図　土師器甕形土器 ……265
第192図　土師器甕形土器・土師質須恵器坏形土器・須恵器皿形土器 ……266

中山新田II遺跡

第193図　中山新田遺跡配置図 ……273

第194図　中山新田II遺跡グリッド配置図 ……274
第195図　第1Aユニット出土遺物 ……278
第196図　第1Aユニット ……279
第197図　第1A，Cユニット出土遺物 ……281
第198図　第1A，Cユニット出土遺物 ……282
第199図　第1Bユニット出土遺物 ……283
第200図　第1B，Cユニット ……284
第201図　第1B，Cユニット出土遺物 ……285
第202図　第2ユニット ……286
第203図　第2，3，4，5ユニット出土遺物 ……287
第204図　第3ユニット ……288
第205図　第4，5ユニット ……289
第206図　第6，7ユニット ……291
第207図　第6，7ユニット出土遺物 ……292
第208図　第8ユニット ……293
第209図　第8ユニット出土遺物 ……294
第210図　第9，10ユニット ……296
第211図　第9，10ユニット出土遺物 ……297
第212図　第11ユニット ……298
第213図　第11ユニット出土遺物 ……299
第214図　第11ユニット出土遺物 ……301
第215図　第11ユニット出土遺物 ……302
第216図　第11ユニット出土遺物 ……303
第217図　第11ユニット出土遺物 ……304
第218図　第12ユニット ……305
第219図　第12ユニット出土遺物 ……306
第220図　第13ユニット ……307
第221図　第13ユニット出土遺物 ……308
第222図　第15ユニット ……309
第223図　第14，15，16ユニット出土遺物 ……310
第224図　第16ユニット ……311
第225図　第16ユニット出土遺物 ……313
第226図　第16ユニット出土遺物 ……314

第 227 図　第16ユニット出土遺物 ……315
第 228 図　第16ユニット出土遺物 ……316
第 229 図　第16ユニット出土遺物 ……317
第 230 図　第16ユニット出土遺物 ……318
第 231 図　第17，18ユニット ……319
第 232 図　第17，18ユニット出土遺物 ……320
第 233 図　第18，20ユニット出土遺物 ……321
第 234 図　第19，20ユニット ……322
第 235 図　第19ユニット出土遺物 ……323
第 236 図　第20ユニット出土遺物 ……324
第 237 図　第21ユニット出土遺物 ……325
第 238 図　第21ユニット ……326
第 239 図　単独出土遺物 ……327
第 240 図　遺構配置図 ……335
第 241 図　002住居跡 ……336
第 242 図　002住居跡出土土器 ……337
第 243 図　002住居跡内遺物出土状況図 ……338
第 244 図　002住居跡出土土器 ……339
第 245 図　002住居跡出土土器 ……340
第 246 図　002住居跡出土土器 ……341
第 247 図　002住居跡出土土器 ……342
第 248 図　002住居跡出土遺物 ……342
第 249 図　015住居跡 ……345
第 250 図　015住居跡出土土器 ……345
第 251 図　015住居跡出土遺物 ……346
第 252 図　029住居跡 ……347
第 253 図　029住居跡出土土器 ……347
第 254 図　029住居跡出土土器 ……348
第 255 図　039住居跡 ……349
第 256 図　039住居跡出土土器 ……350
第 257 図　043住居跡 ……351
第 258 図　043住居跡出土土器 ……351
第 259 図　055住居跡 ……352

第 260 図　055住居跡出土土器 ……353
第 261 図　055住居跡出土土器 ……354
第 262 図　055住居跡出土土器 ……355
第 263 図　055住居跡出土土器 ……357
第 264 図　055住居跡出土土器 ……358
第 265 図　055住居跡出土遺物 ……359
第 266 図　056住居跡 ……361
第 267 図　056住居跡出土土器 ……362
第 268 図　056住居跡出土土器 ……363
第 269 図　056住居跡出土遺物 ……364
第 270 図　057住居跡 ……365
第 271 図　057住居内埋甕炉 ……365
第 272 図　057住居跡出土遺物 ……366
第 273 図　061住居跡出土遺物 ……367
第 274 図　061住居跡 ……368
第 275 図　061住居跡出土土器 ……369
第 276 図　061住居跡出土土器 ……370
第 277 図　061住居跡出土土器 ……371
第 278 図　阿玉台期住居内遺物出土状況 ……372
第 279 図　阿玉台期住居内遺物出土状況 ……373
第 280 図　033竪穴状遺構 ……374
第 281 図　033・051・058土坑 ……375
第 282 図　054土坑 ……376
第 283 図　054土坑出土土器 ……376
第 284 図　062土坑 ……376
第 285 図　063・064・065土坑 ……377
第 286 図　066土坑及び出土土器 ……378
第 287 図　067土坑及び出土土器 ……379
第 288 図　067土坑出土土器 ……380
第 289 図　002土坑 ……381
第 290 図　003土坑 ……381
第 291 図　004土坑 ……382
第 292 図　040土坑 ……383

第293図　042土坑 ……384
第294図　048土坑 ……385
第295図　049土坑 ……386
第296図　050土坑 ……387
第297図　059土坑及び出土土器 ……388
第298図　尖頭器 ……395
第299図　第1群A～D類土器 ……397
第300図　第1群D類・第2群A・B類土器 ……398
第301図　第2群B～D類土器 ……399
第302図　第3群A類土器 ……400
第303図　第3群B類土器 ……401
第304図　第3群B類土器 ……402
第305図　第3群C・D類土器 ……403
第306図　第3群E・F類土器 ……404
第307図　第3群F・G類土器 ……405
第308図　第3群G～I類土器 ……406
第309図　第3群J類土器 ……407
第310図　第3群J・K類土器 ……408
第311図　第3群L類土器 ……409
第312図　第3群M・N類土器 ……410
第313図　第3群O類土器 ……411
第314図　第4群A～C類土器 ……412
第315図　第4群C・D類土器 ……413
第316図　第5・6群土器 ……414
第317図　第7群土器 ……415
第318図　グリッド出土の土器 ……418
第319図　グリッド出土の土器 ……419
第320図　グリッド出土の土器 ……420
第321図　グリッド出土の土器 ……421
第322図　土器片錘A類 ……423
第323図　土器片錘B・C類 ……424
第324図　土器片錘D・E類 ……425
第325図　土器片錘E類 ……426

第 326 図　土製円板 ……426
第 327 図　石鏃・石錐・玦状耳飾 ……433
第 328 図　打製石斧 ……434
第 329 図　打製石斧 ……435
第 330 図　打製石斧・磨製石斧 ……436
第 331 図　磨製石斧・凹石 ……437
第 332 図　凹石・石皿 ……438
第 333 図　磨石・敲石・石錘 ……439
第 334 図　020住居跡及び出土遺物 ……440
第 335 図　023住居跡及び出土遺物 ……441
第 336 図　024住居跡 ……443
第 337 図　025住居跡及び出土遺物 ……444
第 338 図　026・032住居跡及び出土遺物 ……445
第 339 図　野馬堀 ……447
第 340 図　住居分類 ……451

中山新田III遺跡

第 341 図　中山新田III遺跡グリッド，遺構配置図 ……454
第 342 図　グリッド出土の石器 ……455
第 343 図　グリッド出土の石器 ……456
第 344 図　グリッド出土の土器 ……457
第 345 図　005炉穴 ……458
第 346 図　005炉穴出土土器 ……458
第 347 図　003土坑 ……459
第 348 図　004土坑 ……459
第 349 図　004土坑出土土器 ……460
第 350 図　006土坑出土土器 ……460
第 351 図　006土坑 ……461
第 352 図　007住居跡 ……462
第 353 図　002溝及び008住居跡 ……462
第 354 図　009住居跡 ……463
第 355 図　009住居跡出土遺物 ……464

図 版 目 次

巻頭図版１　花前Ⅰ遺跡　10・11号掘立柱建物跡出土　二彩陶器
巻頭図版２　花前Ⅰ遺跡　040住居跡出土　銅製柄杓　灰釉陶器埦
　　花前Ⅰ遺跡　緑釉陶器片

花前Ⅰ遺跡

図版１　遺跡遠景，遺跡全景
図版２　007住居跡，007住居跡出土土器
図版３　007住居跡出土土器
図版４　008住居跡(上)及び出土土器
図版５　008住居跡出土土器
図版６　021住居跡，021住居跡出土土器
図版７　021住居跡出土土器，025住居跡出土土器
図版８　025住居跡，025住居跡出土土器
図版９　026住居跡，026住居跡貝層検出状況
図版10　026住居跡出土土器
図版11　026住居跡遺物出土状況，026住居跡出土土器
図版12　031住居跡，031住居跡出土土器
図版13　052住居跡，052住居跡貝層検出状況
図版14　103住居跡，103住居跡貝層検出状況
図版15　103住居跡貝層断面，103住居跡出土土器
図版16　103住居跡出土土器
図版17　103住居跡出土土器
図版18　103住居跡出土土器，118住居跡遺物出土状況
図版19　118住居跡，118住居跡出土土器
図版20　118住居跡出土土器
図版21　119住居跡，119住居跡出土遺物
図版22　119住居跡出土土器
図版23　017住居跡，017住居跡出土土器
図版24　034住居跡，034住居跡遺物出土状況
図版25　034住居跡出土土器
図版26　034住居跡出土土器

図版27　グリッド出土の土器
図版28　グリッド出土の土器
図版29　第１群・第２群Ａ類土器，第２群Ｂ～Ｄ類土器
図版30　第２群Ｅ・Ｆ類土器，第２群Ｆ～Ｈ類土器
図版31　第２群Ｉ類土器，第２群Ｊ・Ｋ類土器
図版32　第２群Ｋ・Ｌ類土器，第３群Ａ～Ｃ類土器
図版33　第３群Ｃ類土器，第３群Ｃ～Ｅ類土器
図版34　第３群Ｅ・Ｆ類土器，第３群Ｇ類土器
図版35　第３群Ｈ類土器，第４群Ａ・Ｂ類土器
図版36　第４群Ｃ・Ｄ類土器，第４群Ｅ類土器
図版37　第４群Ｆ類土器，第４群Ｇ類土器
図版38　第４群Ｈ類土器，第４群Ｉ類土器
図版39　第４群Ｈ類土器，第５群土器
図版40　土器片錘，打製石斧
図版41　打製石斧，磨製石斧
図版42　凹石・磨石，特殊石製品
図版43　103住居跡出土貝刃
図版44　001住居跡（上）・003住居跡
図版45　004住居跡（上）・011住居跡
図版46　012住居跡（上）・016住居跡
図版47　019住居跡（上）・024住居跡
図版48　027住居跡（上）・028住居跡
図版49　030住居跡（上）・033住居跡
図版50　037住居跡（上）・040住居跡
図版51　041住居跡（上）・045住居跡
図版52　046住居跡（上）・047住居跡
図版53　８号掘立柱建物跡（上）・１号掘立柱建物跡
図版54　051地下式土坑（上）・061地下式土坑
図版55　001住居跡出土遺物
図版56　002（１～４）・003（５～10）住居跡出土遺物
図版57　004（１・２）・011（３～８）住居跡出土遺物
図版58　011（１・２）・014（３）・019（４～６）・033（７）住居跡出土遺物
図版59　016住居跡出土遺物

図版60　024（1～4）・028（5）・030（6・7）・037（8～11）住居跡出土遺物
図版61　039住居跡出土遺物
図版62　040住居跡出土遺物
図版63　040住居跡出土遺物
図版64　041住居跡出土遺物
図版65　041（1～5）・042（6・7）・045（8）・047（9）住居跡出土遺物
図版66　046（1～6）・057（7～9）住居跡出土遺物
図版67　058住居跡出土遺物
図版68　058住居跡出土遺物
図版69　グリッド出土遺物

中山新田II遺跡

図版70　中山新田II－2・III遺跡を望む全景（東から）
　　中山新田II－1・2遺跡を望む全景（西南より）
図版71　中山新田II遺跡層序，C－09炭化粒検出状況
図版72　C－07炭化粒検出状況，第1ユニットA
図版73　第1ユニットC，第8ユニット
図版74　第8ユニット，第9ユニット
図版75　第11ユニット，第12ユニット
図版76　第12ユニット，第12ユニット（左），第13ユニット（右）
図版77　第13ユニット
図版78　第16ユニット，第17・18ユニット
図版79　第16ユニット
図版80　第19・20ユニット
図版81　第1ユニットA
図版82　第1ユニットA，第1ユニットC，第1ユニットA・C接合資料
図版83　第1ユニットB，第1ユニットC，第1ユニットB接合資料
図版84　第2ユニット，第3ユニット，第4ユニット，第5ユニット，第6ユニット
図版85　第7ユニット，第8ユニット
図版86　第9ユニット，第10ユニット，第11ユニット
図版87　第12ユニット，第14ユニット
図版88　第13ユニット，第15ユニット
図版89　第16ユニット
図版90　第16ユニット

図版91　第16ユニット
図版92　第16ユニット
図版93　第16ユニット
図版94　第17ユニット，第18ユニット
図版95　第19ユニット，第20ユニット
図版96　第20ユニット，第21ユニット，単独出土
図版97　061住居跡と対面する聖人塚遺跡
図版98　002住居跡，002住居跡周辺出土土器，002住居跡出土土器
図版99　002住居跡出土土器
図版100　002住居跡出土土器，002住居跡出土遺物
図版101　015住居跡，015住居跡出土土器
図版102　015住居跡出土土器，033竪穴状遺構
図版103　029住居跡，029住居跡出土土器
図版104　039住居跡，039住居跡出土土器
図版105　043住居跡
図版106　055住居跡，055住居跡出土土器
図版107　055住居跡出土土器
図版108　055住居跡出土土器
図版109　055住居跡出土土器，055住居跡出土遺物
図版110　056住居跡，056住居跡出土土器
図版111　056住居跡出土土器
図版112　057住居跡，057住居跡出土土器
図版113　061住居跡，061住居跡出土土器
図版114　061住居跡出土土器
図版115　002土坑，004土坑
図版116　040土坑，050土坑
図版117　054土坑遺物出土状況，054土坑出土土器，066土坑
図版118　067土坑，067土坑遺物出土状況，067土坑出土土器
図版119　グリッド出土の土器
図版120　グリッド出土の土器
図版121　グリッド出土の土器
図版122　第1群A～C類土器，第1群D類・第2群A類土器
図版123　第2群B・C類土器，第3群A類土器

図版124　第３群Ｂ類土器
図版125　第３群Ｃ・Ｄ類土器，第３群Ｅ・Ｆ類土器
図版126　第３群Ｇ～Ｉ類土器，第３群Ｉ・Ｊ類土器
図版127　第３群Ｊ・Ｋ類土器，第３群Ｌ類土器
図版128　第３群Ｍ・Ｎ類土器，第３群Ｏ類土器
図版129　第４群Ａ～Ｃ類土器，第４群Ｃ・Ｄ類土器
図版130　第５群土器，第７群土器
図版131　土器片錘Ａ類，土器片錘Ｂ・Ｃ類
図版132　土器片錘Ｄ・Ｅ類・土製円板
図版133　打製石斧，磨製石斧・磨石・敲石・石錘
図版134　020住居跡（上）・023住居跡
図版135　024住居跡（上）・025住居跡
図版136　026・032住居跡
図版137　020（１・２）・023（３～６）・025（７・８）・026（９）住居跡出土遺物
図版138　野馬堀（上）・野馬堀土層断面（中山新田Ⅱ－１遺跡内）
図版139　野馬堀調査前全景（上）・野馬堀土層断面・調査後全景（八両野遺跡）

中山新田Ⅲ遺跡

図版140　遺跡全景（調査前），（調査後）
図版141　005炉穴，005炉穴遺物出土状況及び土層断面
図版142　006土坑，006土坑出土土器
図版143　006土坑貝層断面，006土坑貝出土状況
図版144　グリッド出土の土器
図版145　グリッド出土の土器
図版146　007住居跡，008住居跡
図版147　009住居跡，009住居跡遺物出土状況
図版148　009住居跡出土遺物

第Ⅰ篇　経過と環境

第1章　調査の経過と組織

花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲの各遺跡は，日本道路公団によって計画された，常磐自動車道建設に際して記録保存の措置がとられることとなった遺跡である。

発掘調査は下記の通り組織・編成された。なお，今回の報告では遺跡の性格や位置によって遺跡名を統合したものがある。

花前Ⅰ遺跡（217－001）

調査期間　昭和52年10月1日～昭和53年2月23日，調査面積　4,500㎡

調査部長　西野　元，班長　岡川宏道，調査研究員　高橋賢一・種田斉吾

中山新田Ⅱ遺跡（217－007・008・011・014）

今回の報告で中山新田Ⅱ－1（007）・中山新田Ⅱ－2（008）・中山新田Ⅱ－3（011）・八両野（014）の4遺跡を統合して中山新田Ⅱ遺跡とする。

調査期間　昭和53年4月1日～昭和54年3月31日，調査面積　18,500㎡

調査部長　西野　元，班長　岡川宏道，調査研究員　矢戸三男・鈴木定明・佐久間　豊・太田文雄

調査期間　昭和54年4月1日～昭和54年7月31日，調査面積　11,850㎡

調査部長　白石竹雄，部長補佐　山田友治，班長　天野　努，調査研究員　田坂　浩・石倉亮治・岡田誠造・川島利道・田中　豪

調査期間　昭和56年3月1日～昭和56年3月31日，調査面積　1,000㎡

調査部長　白石竹雄，部長補佐　栗本佳弘，班長　天野　努，調査研究員　石倉亮治・郷堀英司

調査期間　昭和56年4月1日～昭和56年5月31日，調査面積　4,600㎡

調査部長　白石竹雄，部長補佐　天野　努，班長　清藤一順，主任調査研究員　鈴木定明

調査研究員　郷堀英司・萩原恭一・石井ひろみ

中山新田Ⅲ遺跡（217－015）

調査期間　昭和55年3月1日～昭和55年3月31日，調査面積　2,500㎡

調査部長　白石竹雄，部長補佐　山田友治，班長　天野　努，調査研究員　岡田誠造

以上のような組織が編成され，発掘調査にあたった。

第2章　環　　境

今回報告する花前Ⅰ遺跡，中山新田Ⅱ遺跡，中山新田Ⅲ遺跡の3遺跡は，いずれも柏市に所在する遺跡である。

柏市は千葉県北西部に位置し，南北に東京と結ばれる国鉄常磐線が，東西に千葉と埼玉を結ぶ幹線道路となる国道16号線が走り，交通至便なベッドタウンとして急速に宅地化が進行している。この地域は西を江戸川に，北東を現利根川に挟まれ，東には手賀沼が存在する。各遺跡は樹枝状に開析された小支谷に面する標高15～17mの台地上に立地する。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が所在する。縄文時代では下総台地西部に多数の貝塚などが存在する事が知られており，前期では，野田市山崎貝塚(1)が北西約5kmに，松戸市幸田貝塚(2)が南約5kmに所在する。集落跡としては，縄文時代から古墳時代までの複合遺跡である柏市鴻ノ巣遺跡(3)が南東約3.5kmにある。

古墳時代では流山市東深井古墳群(4)が西約2kmに，我孫子市我孫子古墳群(5)が南東約6kmに所在する。

歴史時代では，近年調査され，製鉄関連遺構を検出した流山市中ノ坪製鉄遺跡(6)が西約2kmに，大規模な集落跡である柏市中馬場遺跡(7)が東約5kmに所在する。

註

(1)野田市教育委員会　1976　「山崎貝塚」　『野田市文化財抄報』

(2)松戸市教育委員会　1971　「幸田貝塚　第1次（昭和45年度）調査概報」　『松戸市文化財調査小報4』

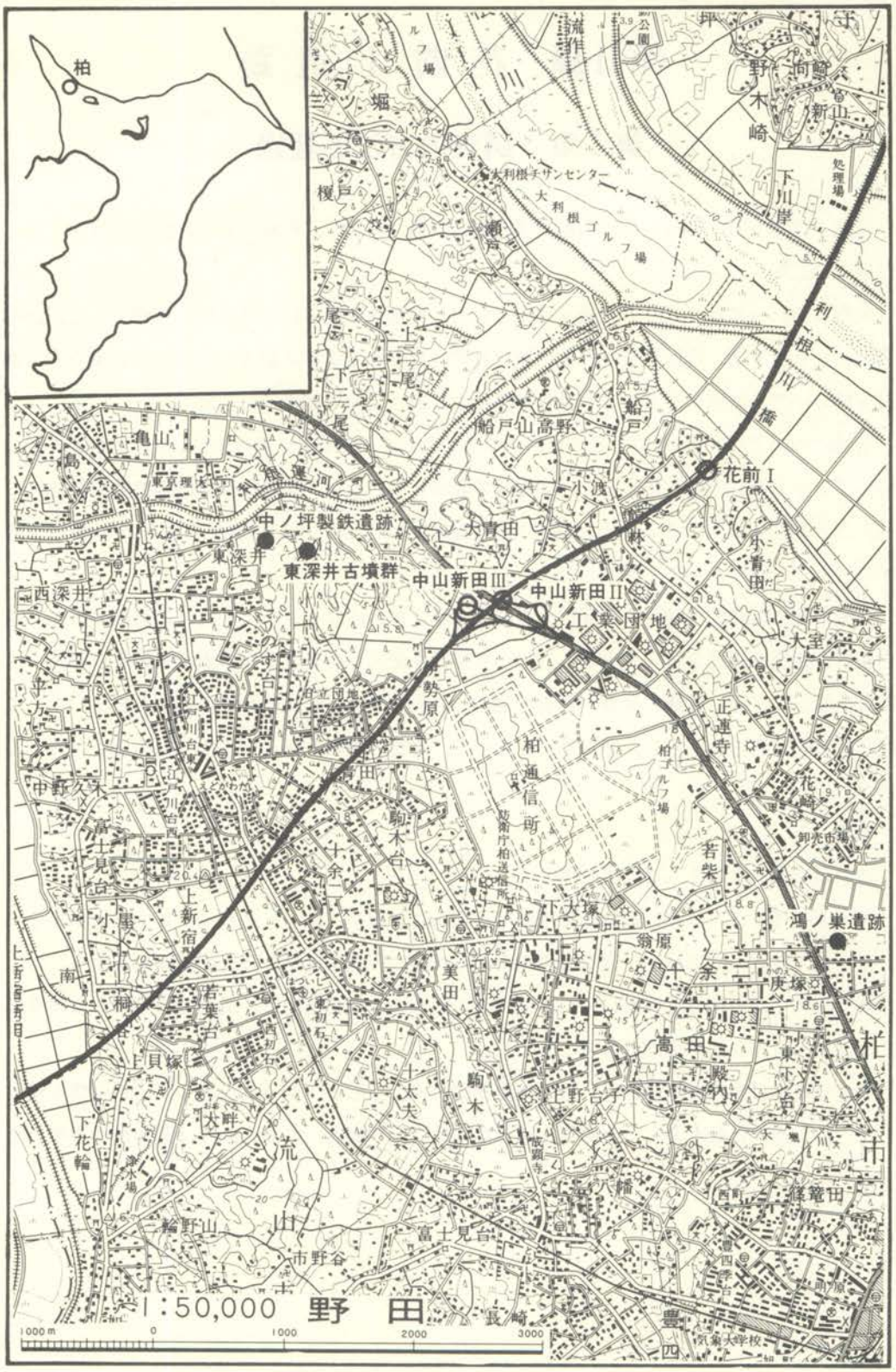
(3)古内　茂・矢戸三男　1974　『柏市鴻ノ巣遺跡』千葉県都市公社

(4)下津谷達男　1974　『流山市東深井古墳群—昭和43年度調査概報』

(5)東京大学考古学研究室　1974　『我孫子古墳群』

(6)穴沢義功　1981　『千葉県流山市中ノ坪Ⅰ・Ⅱ製鉄遺跡』　たたら研究会　昭和56年度大会発表要旨

(7)下津谷達男・古宮隆信　1972　『中馬場遺跡・妻子原遺跡』　日本国有鉄道常磐線複々線工事関係遺跡調査団



第1図　花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ遺跡及び周辺遺跡

第II篇　花前Ⅰ遺跡

第1章　調査の方法と経過

花前Ⅰ遺跡（217—001）は柏市船戸字花前1224他に所在し，利根川右岸の標高約16mを測る台地上に立地する。

発掘にあたってはグリッド方式を基本とした。発掘区の設定は公共座標を基準として，20m方眼のグリッドを，今回調査された区域だけが包含されるように組み，北から順に東方向へ番号を付し，さらに南のグリッドへ番号が移行するように01～30まで付した。

遺構については001から始まる3桁の番号を使用して，検出順に番号を付した。また調査時においてピットを1001から始まる4桁の番号で表現していたが，整理作業の過程で掘立柱建物の柱穴列と判明するものがあるため掘立柱建物跡については，西に位置するものから順に1号～11号までの番号を与えて報告した。

発掘調査は昭和52年10月より開始した。まず幅2mの南北トレンチを入れ，遺構の有無，遺物の包含状態の確認を行った上で，12月から重機を使用し調査区全面の表土除去を行った。この表土除去終了後，遺構の発掘，精査を開始し，翌53年2月にほぼ全域の調査を終了した。この段階で航空測量を実施し，2月28日をもって，器材の撤収も完了し，すべての調査を終了した。

概要

調査の結果，次のような成果を得た。

先土器時代では石器等の遺物の集中箇所は認められなかった。しかし，トレンチにかかる部分で1点，Ⅶ層の立川ローム層第II黒色帯から頁岩の円礫を素材とした片刃礫器が出土した。

縄文時代では前期の住居跡11軒，後期に属するもの2軒を検出し，遺物では早期から晩期まで及ぶが，主体は前・後期のものであった。

歴史時代では竪穴住居跡25軒，掘立柱建物跡11棟，土坑2，地下式土坑4，溝状遺構を検出した。出土遺物は量も多く，土師器，須恵器の他に施釉陶器，鉄器，鉄滓，銅製柄杓等極めて多彩であった。

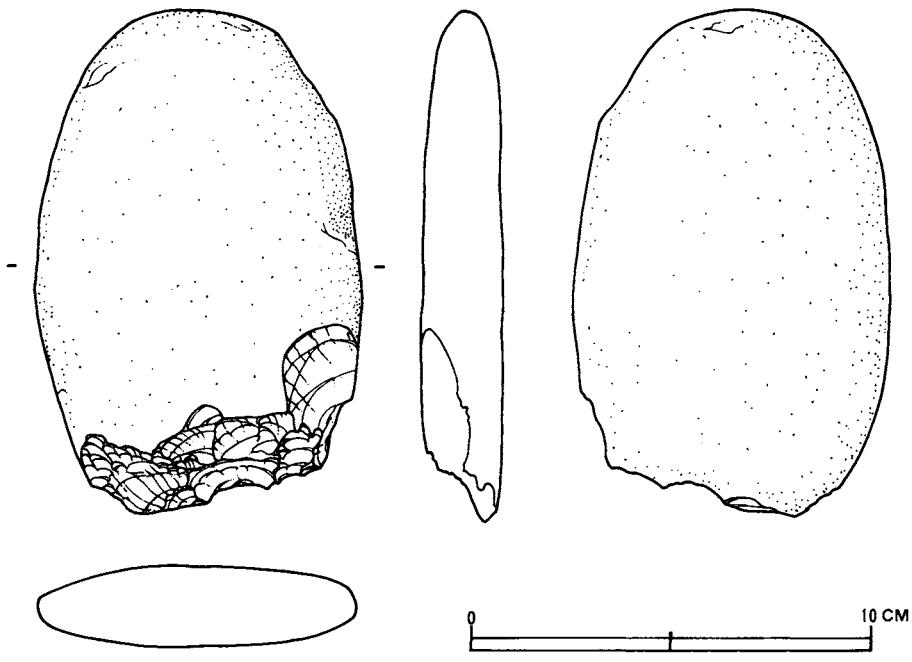
第２章　遺構と遺物

１．先土器時代

任意のトレンチを11・14グリッドの２か所に設定し，Ⅷ層（立川ローム最下部層）まで掘り下げたが，石器類の集中箇所は認められなかった。

図示した資料は11グリッドのトレンチから出土した遺物である。

扁平な頁岩の円礫を素材とした片刃礫器である。表裏とも平滑で，酸化鉄が附着しており，長さ9.6cm，幅6.5cm，厚さ1.7cm，刃先角は75°を測る。



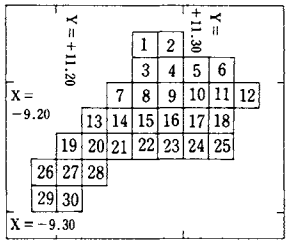
第２図　先土器時代出土遺物

2．縄文時代

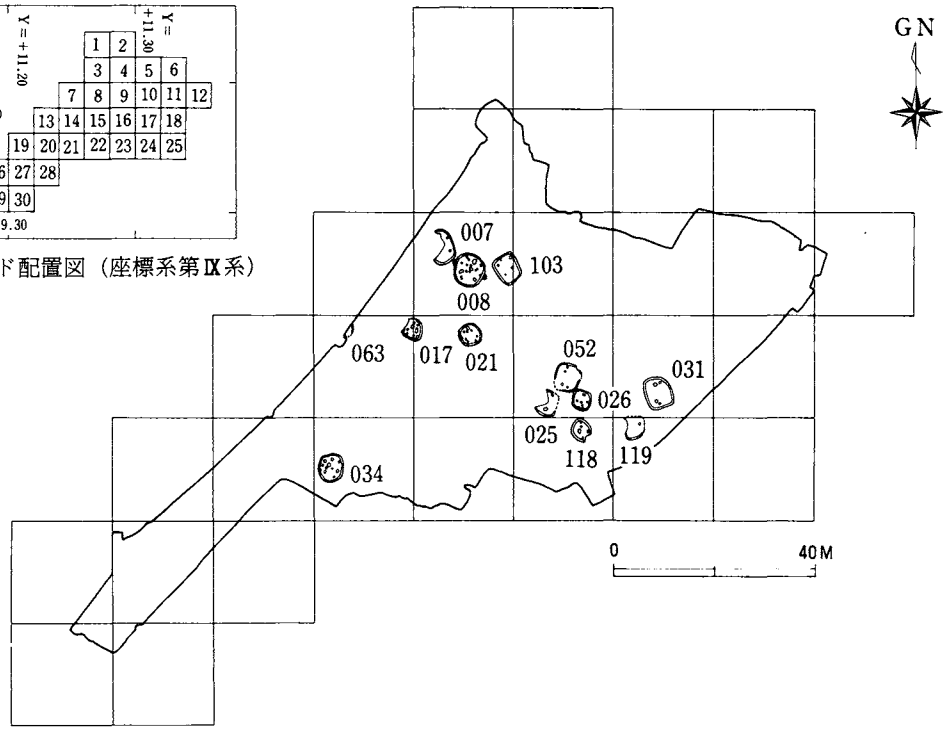
今回の調査においては縄文時代前期の住居跡11軒，後期の住居跡２軒を検出した。土坑は後世の建物跡や遺構等の重複によって明確に縄文時代のものとしては捉えることができなかった。ただ008住居跡の東側と西側に検出された土坑については覆土中に貝層が認められているため本時代の所産と考えられる。

包含層の遺物は早期の撚糸文土器から晩期に及んでいるが，その主体は前・後期の遺物であり他の時期の遺物は微量であった。

各住居は後期の034住居が１軒だけ西に位置する以外は西北と東南に分かれて集中しており，集落自体はさらに西へと広がるものと思われる。前期の住居は黒浜期のもの９軒（007・008・025・026・052・063・103・118・119住），浮島期２軒（021・031住）に分かれ，後期の住居（017・034住）は，堀之内期に比定される。前期の住居については浮島期の２軒と063住を除いて覆土中より貝層を検出しており，貝を中心とした採集生活の痕跡を認めることができる。

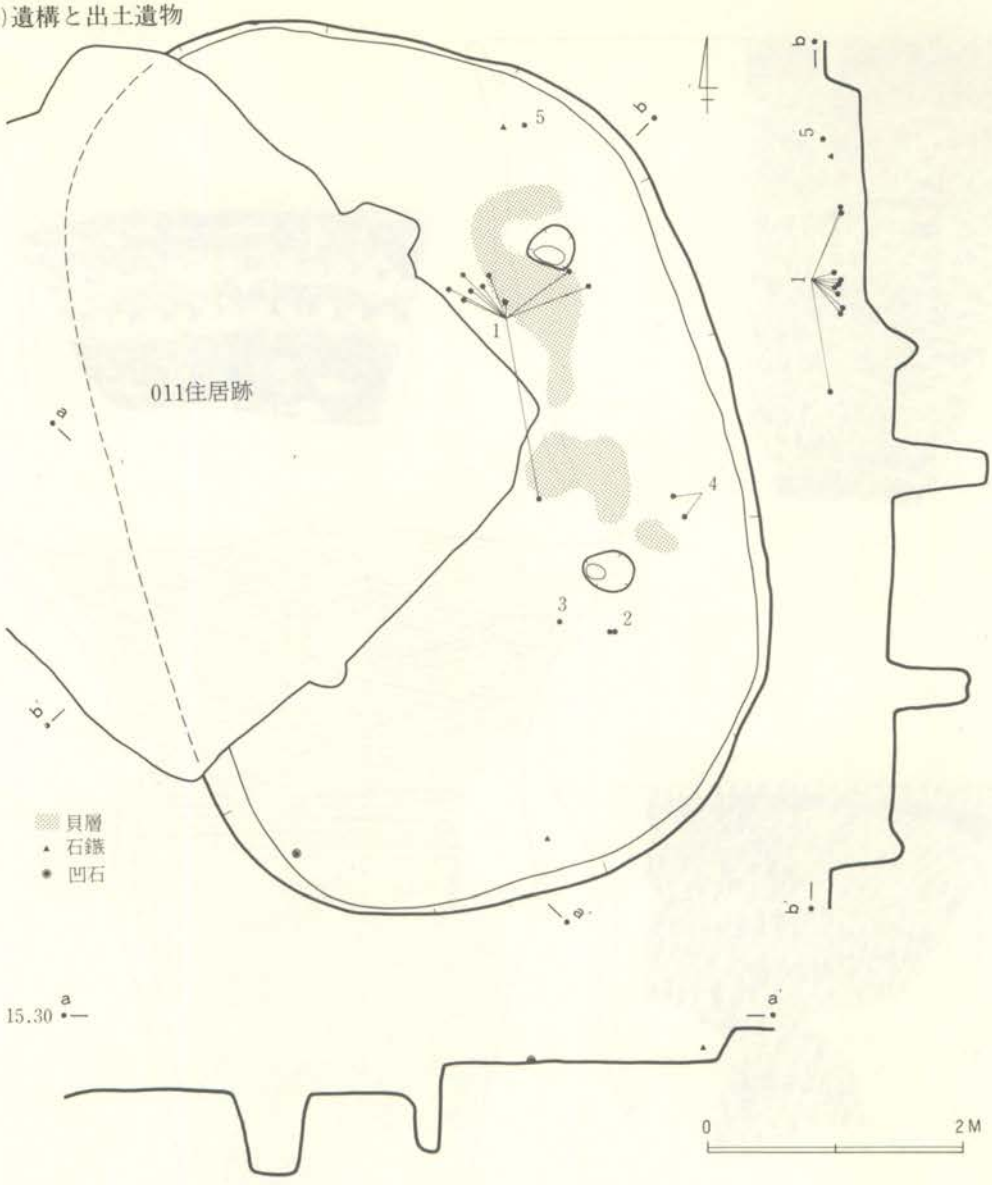


グリッド配置図（座標系第Ⅸ系）



第３図　縄文時代遺構配置図

(1)遺構と出土遺物



第4図　007 住居跡

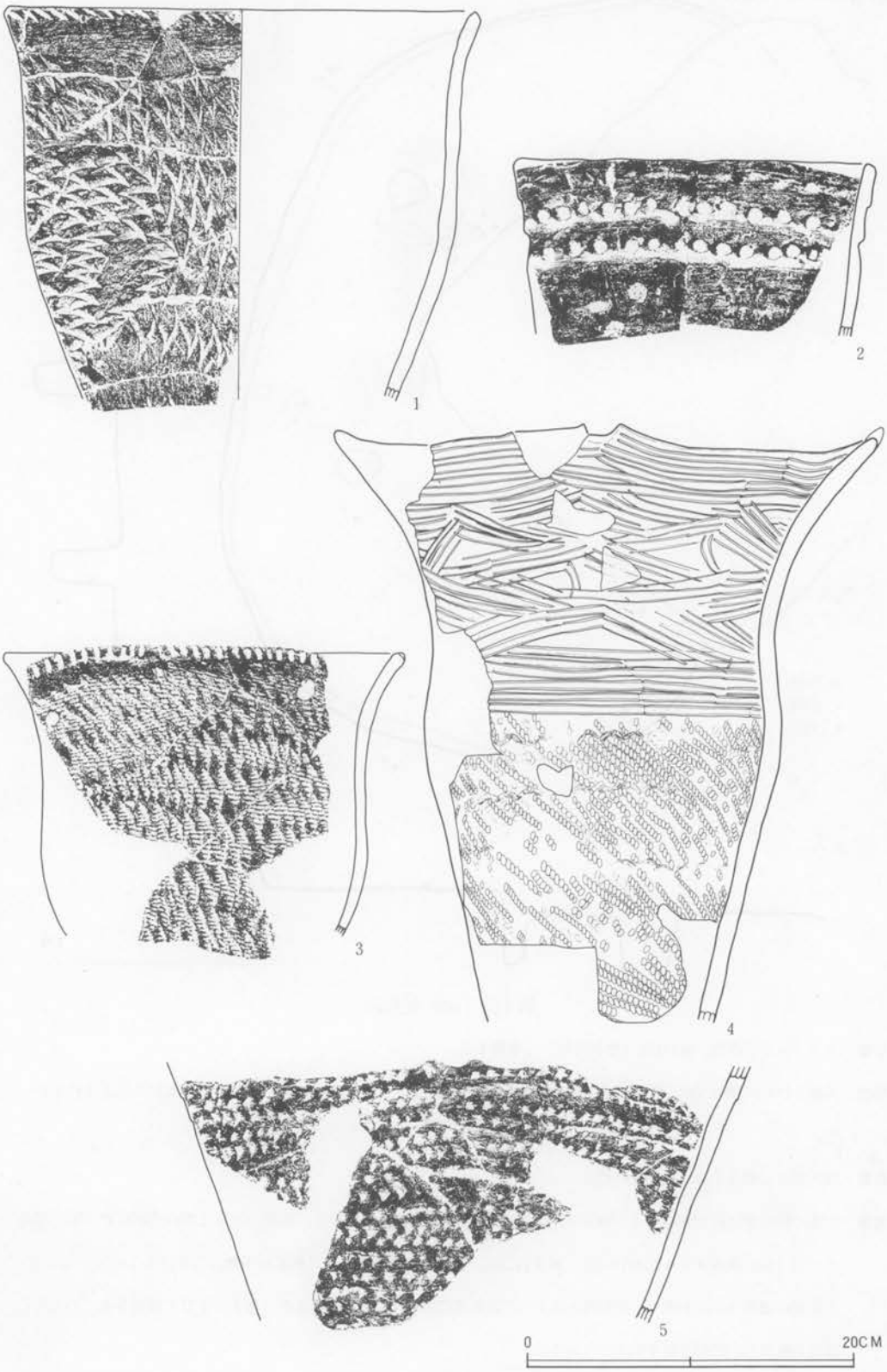
位置　8グリッド北西部，011住居（歴史時代）と重複する。

形状　長軸7.2m，短軸4.7m，壁高50cmを測るやや不整形楕円のプランを呈する。柱穴は東側に2本しか検出されなかった。

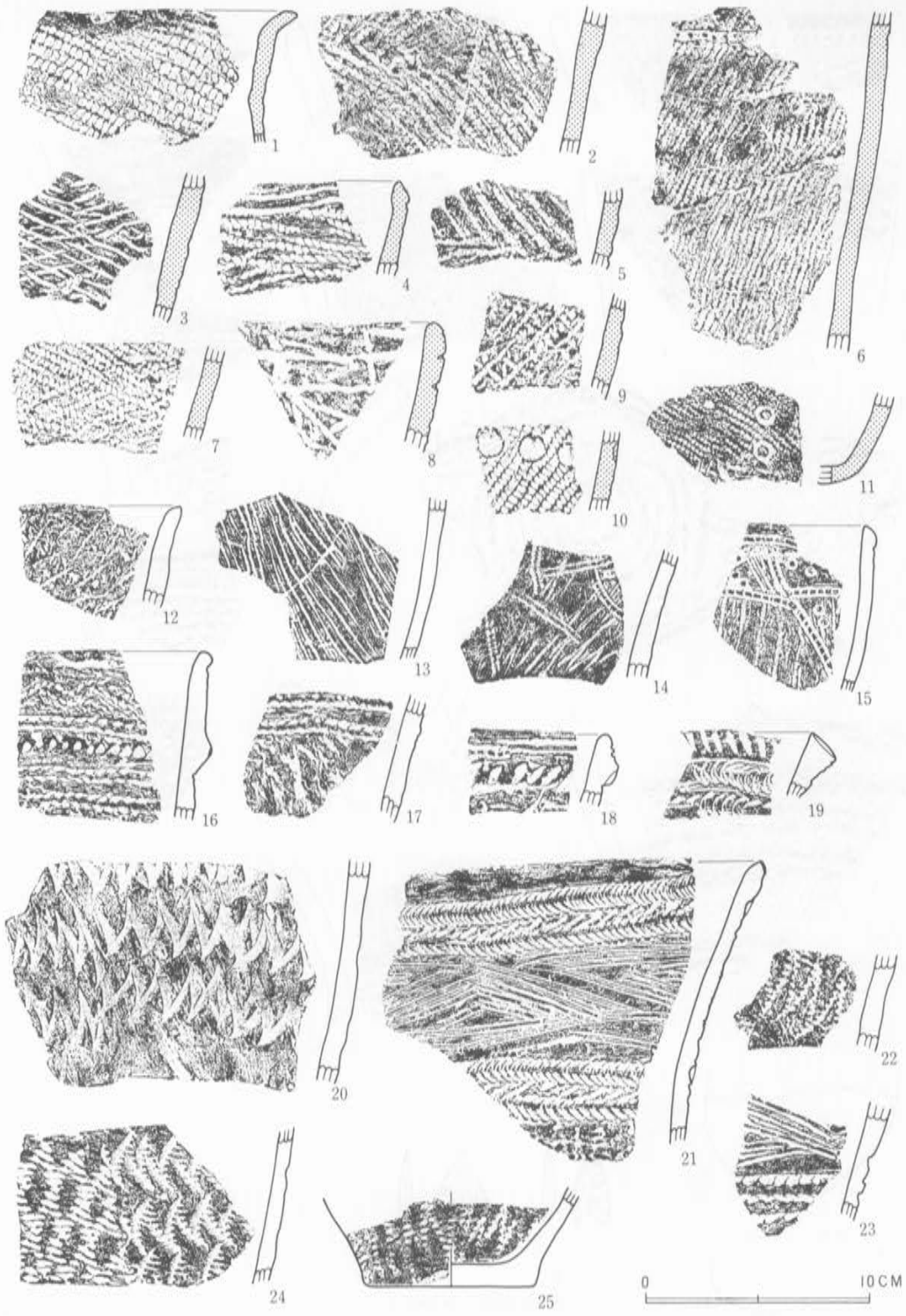
貝層　柱穴付近に混貝土層が検出された。

遺物　土器の総重量は約12.6kgでその時期は黒浜式～浮島・諸磯式に及んでいる。各期の比率は黒浜式が約47.7%，浮島式が14.7%，諸磯a・b式が18.4%，無文14.3%，沈線文・縄文5%で黒浜式が半数以上を占めている。しかし，黒浜期の遺物は小片が多く，大型破片はすべて浮島式であった。1は床直上から覆土にかけて検出されている。石器は石錐2点，凹石1点を出土している。

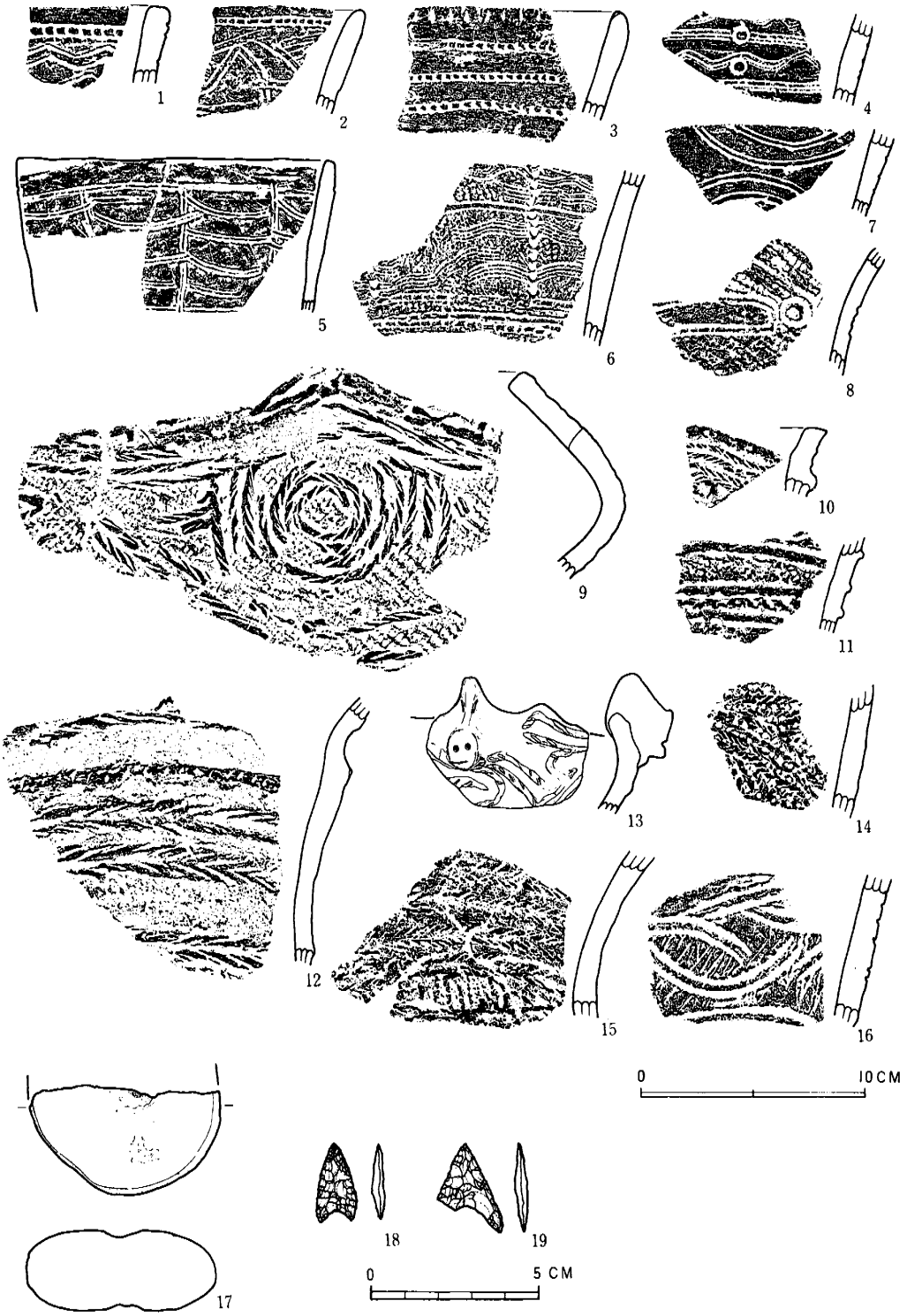
時期　黒浜期に比定される。



第5図　007 住居跡出土土器



第6図　007 住居跡出土土器



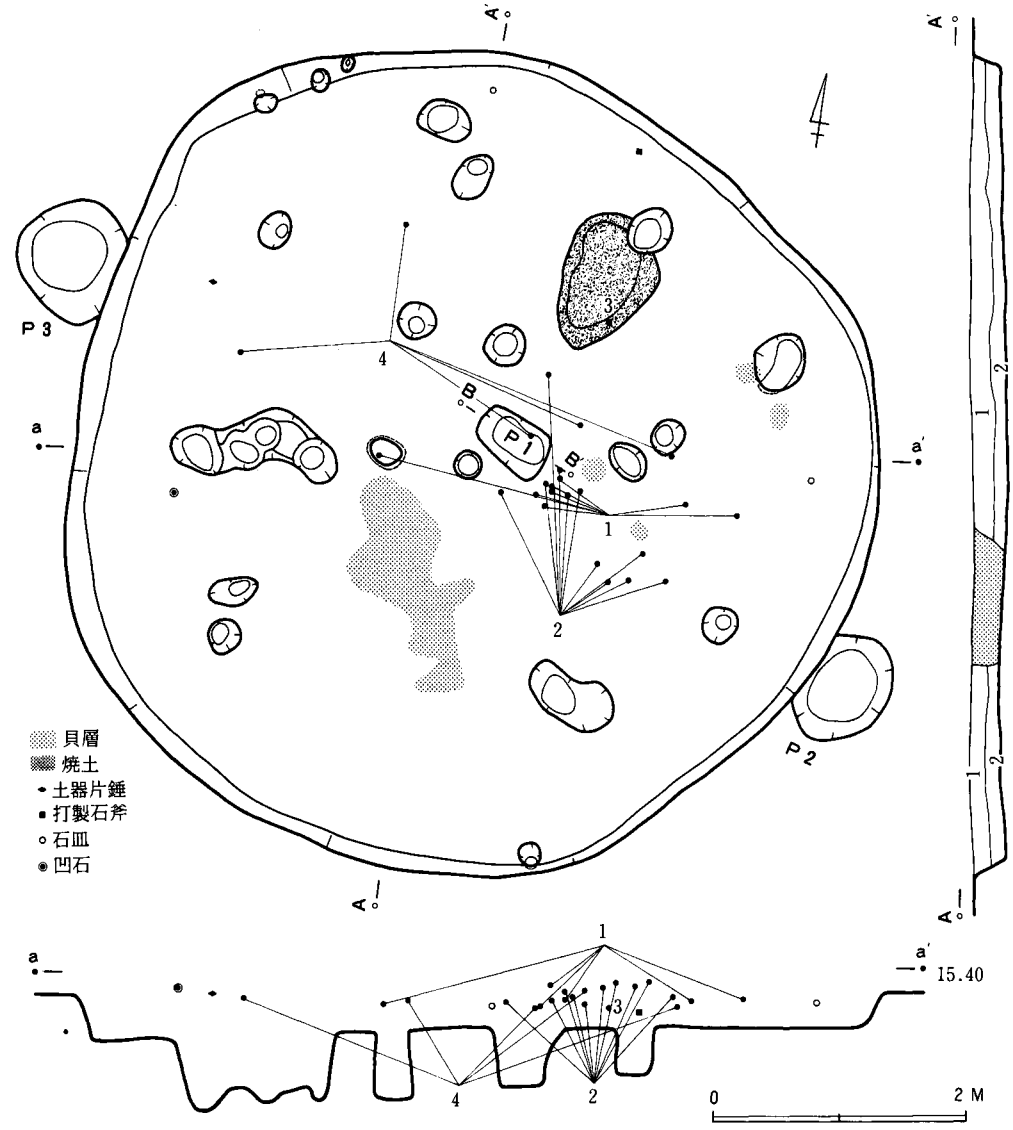
第7図　007 住居跡出土遺物

007住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第5図1	口縁をやや外反させ，胴下半より底部へ緩やかにすぼまる深鉢形土器。口唇部は，断面三角状に削ぎ，細い竹管による斜めの刻みを施している。口唇直下は若干の無文帯を残し，胴部にはハマグリ等による波状貝殻腹縁文を縦や横方向に施している。遺存度⅓	
2	やや小型の無文深鉢形土器。口辺に2段の輪積段を残し，その境界に指頭状の圧痕(凹凸文)を施している。遺存度⅓	
3	1よりも外反する深鉢形土器。口唇部には細い竹管工具による深い刻みが縦位に施してある。胴部にはアナダラ属の貝殻による波状貝殻腹縁文を施している。	2－1
4	口縁を大きく開き頸部以下をやや張り出す深鉢形土器。頸部より文様帯を2分し，胴下半には原体ＲＬの縄文を施している。胴上半には半截竹管による平行沈線を用い，口唇直下と頸部に廻らせ，文様帯を区画している。区画内には山形（「へ」の字）のモチーフを3段に渡って若干ずらしながら廻らせ，それによってできたひし形の無文部分に半弧状の平行沈線を縦位に施している。口縁は緩やかな波状を4単位で廻らせ，頂部には小さな抉りを施している。遺存度½	2－2
5	底部へ直線的にすぼまる深鉢胴部。口縁部に近いものらしく輪積段が2段残っている。文様は竹管工具を右斜め方向より刺突したと思われる三角文が横走している。遺存度¾	
第6図1～25	1，6は単節，2～5・7は異方向縄文で3・5・9は附加条の縄文である。8は細い竹管による沈線を施し，口縁に平行する沈線内には刺突を施している。10は指頭を押しつけて回転させたような円形圧痕を施す，11は円形竹管刺突文を施す。1～11は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。12～15は地文に撚糸文を持つもので14・15は有節平行沈線を施し，15はさらに円形竹管刺突文を施す。和田氏（1973）による浮島式Ⅰａ式に比定される。16～19・21・23は変形爪形文を施すもので，16～18は細い竹管工具を用いている。16は緩やかな隆帯を持ち，隆帯上には竹管工具による縦位の押圧を施している。16・17・21～25はアナダラ属の波状貝殻腹縁文を施す。21は第5図4の土器同様に2列の変形爪形文によって文様帯を区画し，区画内に山形の平行沈線を廻らしている。16～18は浮島Ⅰｂ式，19～23は浮島II式に比定される。	3
第7図1～19	1～8はすべて竹管工具による平行沈線文を主とするものである。1～3・6は結節平行沈線，4・8は円形竹管刺突文を施す。8は地文に原体ＲＬの縄文をもつ。5は細い半截竹管による肋骨文を施している。6は平行沈線や結節平行沈線にて横位に区画し，縦に半円形の刺突を施し，その内に櫛状の工具を用いて波状の沈線を施している。9～15は，浮線文を施す土器で，すべてヘラ状工具による刻みが付けられている。13は獣面付把手で鼻や目が明確に描かれており，イノシシに類似するものと思われる。1～8は諸磯ａ式，9～16は諸磯ｂ式に比定される。17は半分欠損の凹石で床面より検出されている。	3

008住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第12図1～21	1・2は同一個体で，細い竹管を用いて縦位に円形竹管刺突文を施し，刺突間を木の葉状のモチーフで満たしている。肋骨文や木の葉文に関連する文様と言える。文様帯下部は横走する平行沈線を施している。3は縦や横に平行沈線で区画し，区画内に円形竹管刺突文や斜線を施している。4は頸部に高い隆帯を廻らせている。文様は縦位の平行沈線上に円形竹管刺突文を施し，区画間には斜めの沈線を廻らせている。5は櫛歯状工具による平行沈線を施す。1～5は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。6～12・14・15は地文に縄文を有し，8・11は有節平行沈線，9～11は円形竹管刺突文を施している。14・15は磨消縄文の手法を用いている。13は有節平行沈線と平行沈線による木の葉文を施しているが，地文にアナダラ属による貝殻腹縁圧痕を有する。16は浮線文を施しヘラ状の工具で刻みをつけている。6～14・15は諸磯ａ式，16は諸磯ｂ式に比定される。17はハマグリ等，18はアナダラ属の波状貝殻腹縁文を施す。19は口唇部に半截竹管による刺突を施し，口辺にはコンパス文に類似した沈線を施している。20は波状口縁を呈し，Ｙ字状の隆帯を貼り付け隆帯上を押圧している。地文には半截竹管による刺突文を施している。21は口唇上に指頭によるゆるやかな圧痕を施し，口唇直下には半截竹管による刺突文を横走させている。胴部には原体ＬＲの結節回転文を施す。17～19は浮島式土器である。	5
第13図1～6	1・3～5は凹石で3を除いては両面とも磨られている。4は両側面共に凹を有する。2は石皿の破片。6は打製石斧で全周に刃部としての加工がなされている。	



第8図　008 住居跡

P 1　土層
1　暗褐色土層
2　貝ブロック　暗褐色土，ローム粒を含む。
3　褐色土層　ロームブロックを多量に含む。

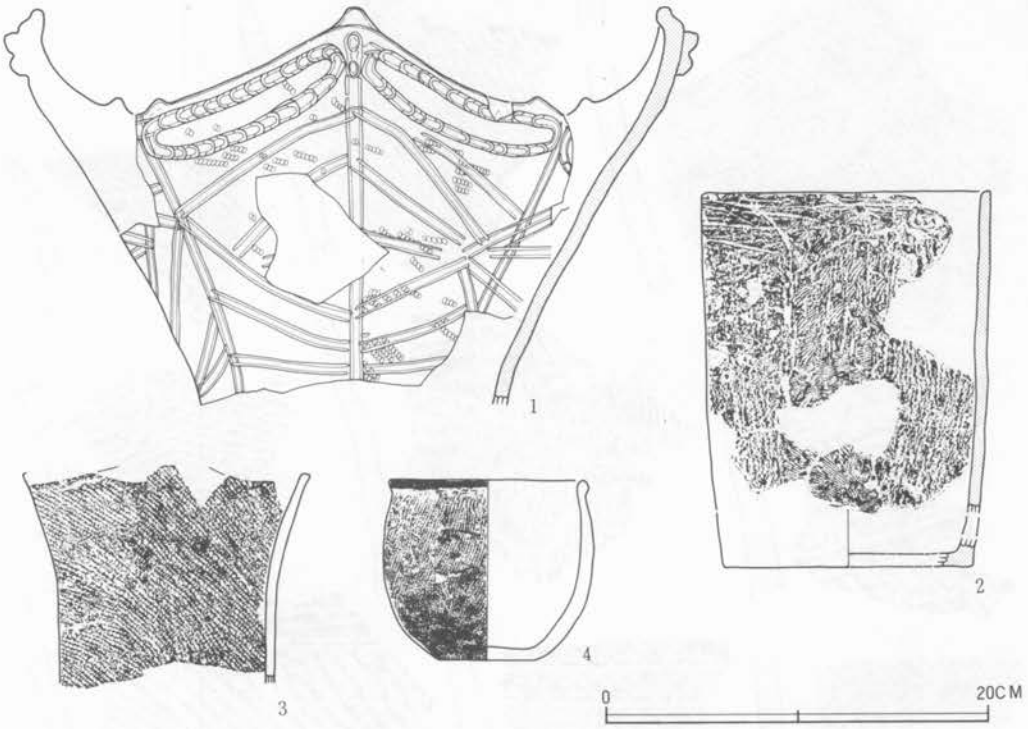
第9図　P 1 セクション図(1/30)

位　置　8グリッドほぼ中央部，007 住居跡の南東に近接する。

形　状
(検出状況)　直径6.2～6.5m程で壁高35cmを測るやや不整な円形を呈する。住居の中央よりやや南側には貝をブロック状に含む部分があり，ほぼ中央に位置するピットＰ１からも貝が検出されている。炉はＰ１より少し北側に位置する。住居の西と東に位置するピットＰ２，Ｐ３は本住居に伴うものではないものと考えられる。この２つのピットからも貝が検出されている。

遺　物　遺物総数は 505点を数え，その内石器は凹石４点，石皿１点，打製石斧２点，磨製石斧１点の計８点であった。土器はおよそ33.5kg出土し，その内訳は黒浜式土器が一番多く，約84.0%，諸磯ａ・ｂ式が 4.8%，浮島式が 1.3%，縄文・無文が 9.4%であった。

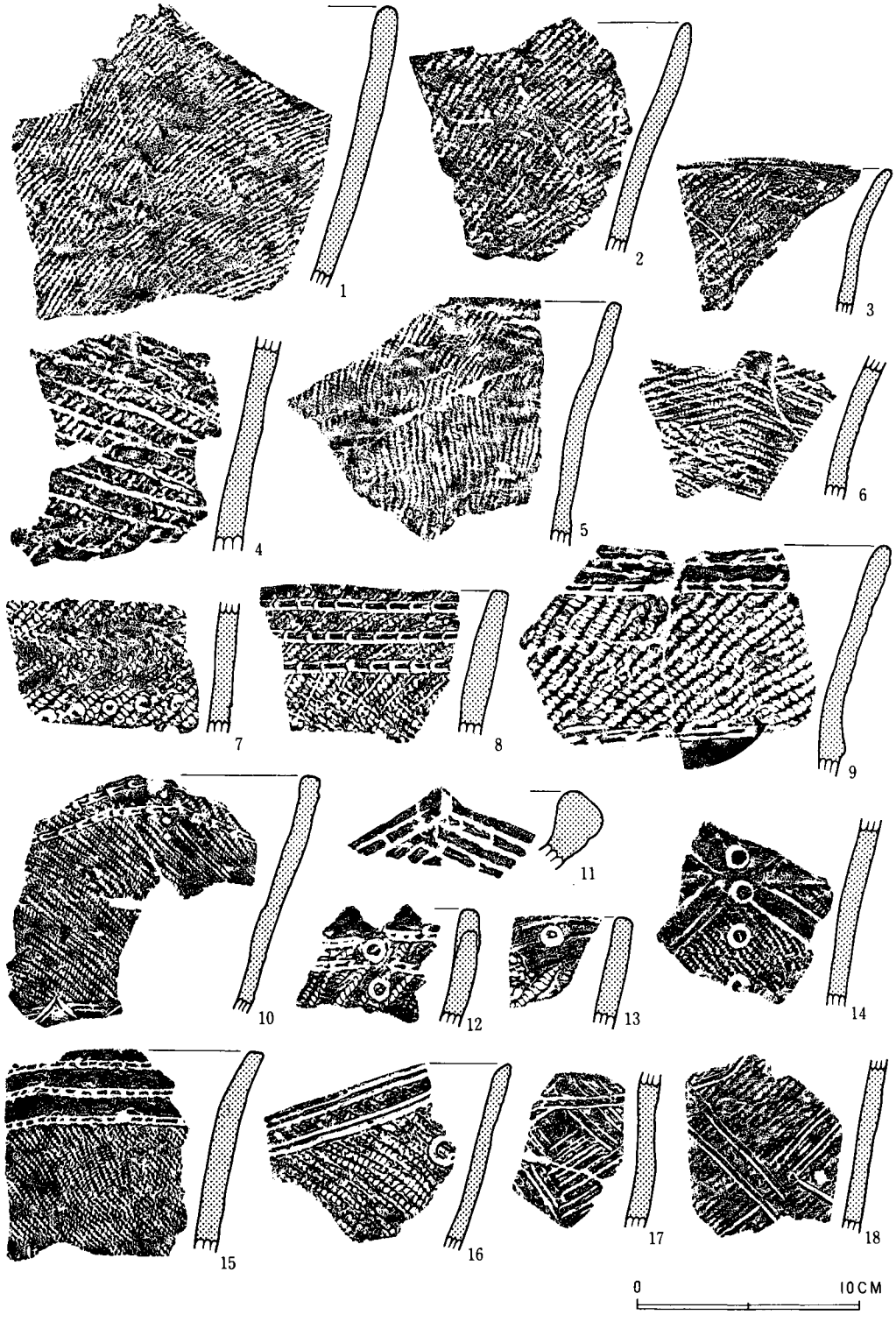
時　期　黒浜期に比定される。



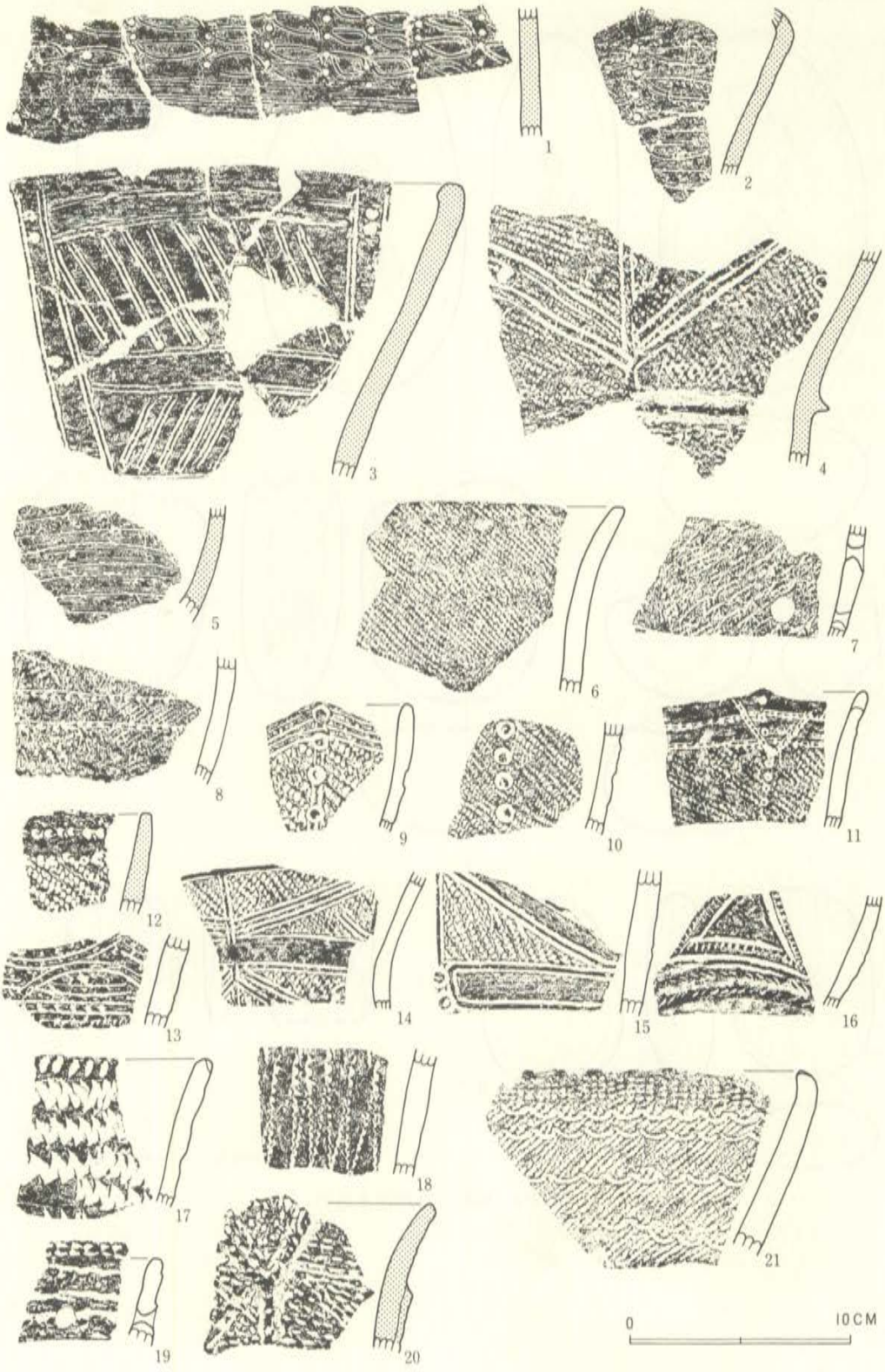
第10図　008 住居跡出土土器

008住居跡出土土器

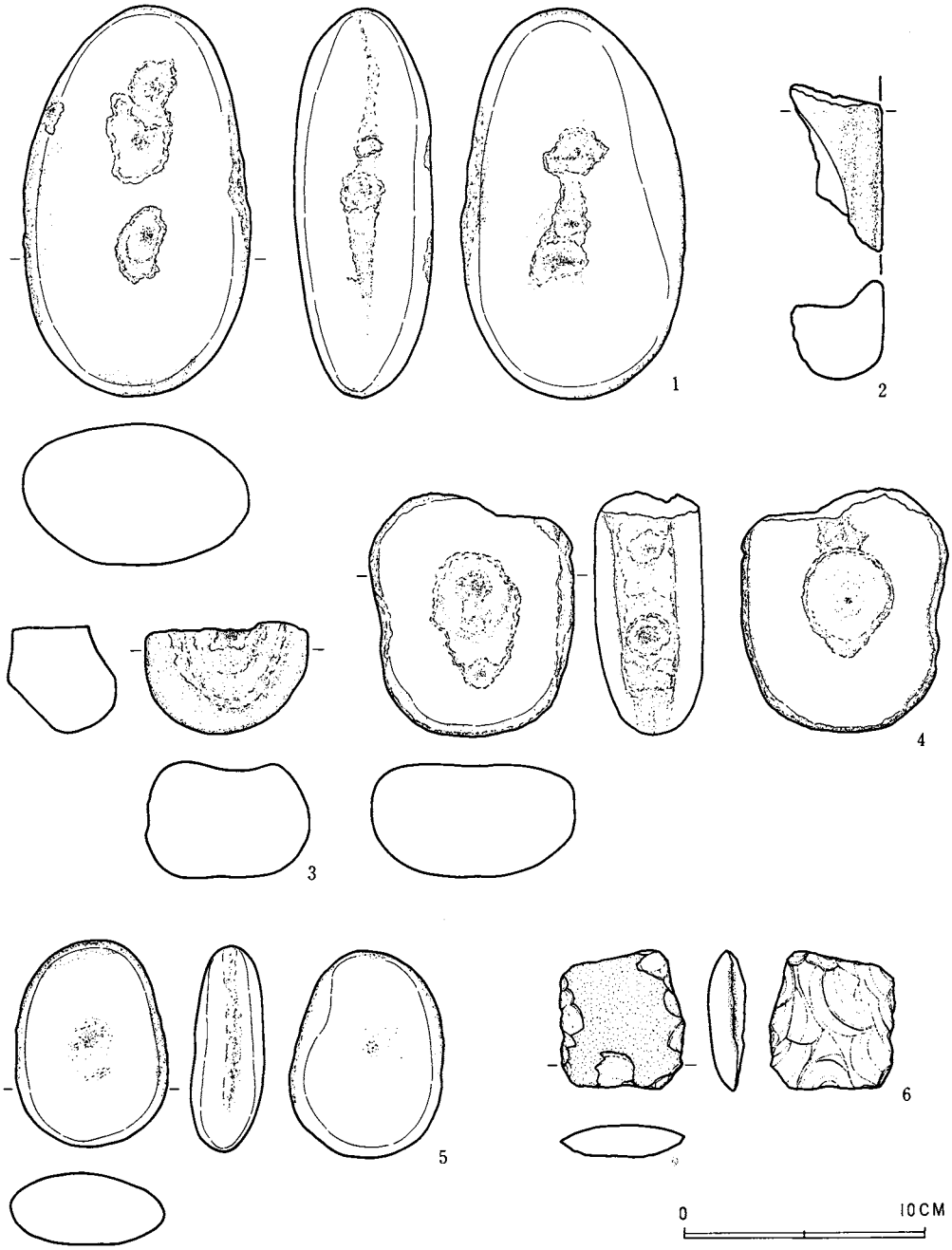
挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第10図 1	口縁を朝顔状に開き，角度の鋭い波状口縁を4単位で廻らせる深鉢形土器。口辺はやや内傾し，波状口縁頂部間には瘤状の突起をもつ。器内面はよく磨かれている。文様は波状頂部及び瘤状の突起より平行沈線を垂下させ縦位に区画し，区画間口辺部には結節平行沈線を楕円状に廻らせている。胴部はひし形状に平行沈線を施している。地文にはかすかに縄文が見える。遺存度½	4－1
2	平縁で円筒形を呈する深鉢形土器。器内面はよく磨かれている。口唇直下に浅い平行沈線を廻らせ，胴部にはアナダラ属の貝殻腹縁による縦位の圧痕や，その背圧痕を施している。遺存度⅓	4－2
3	口縁をやや開き胴以下は円筒状を呈する深鉢形土器。口縁は4単位の波状を呈するものと思われる。地文には原体ＲＬの細縄文を施す。遺存度½弱	4－3
4	小型の椀形土器。口唇部を丸く肥厚させ，口唇直下に若干の無文帯を有する。器面全体には原体ＲＬの単節細縄文を施す。器内面はよく研磨されている。底部は無文。遺存度⅔	4－4
第11図 1～18	1～18は地文に縄文を施すもので，4・8は附加条の縄文。6は撚糸文，他は単節の縄文である。8～12・15は結節平行沈線を施している。10・12～14・16は平行沈線の他に円形竹管刺突文を縦位に施している。17・18は平行沈線をひし形状に施している。	5



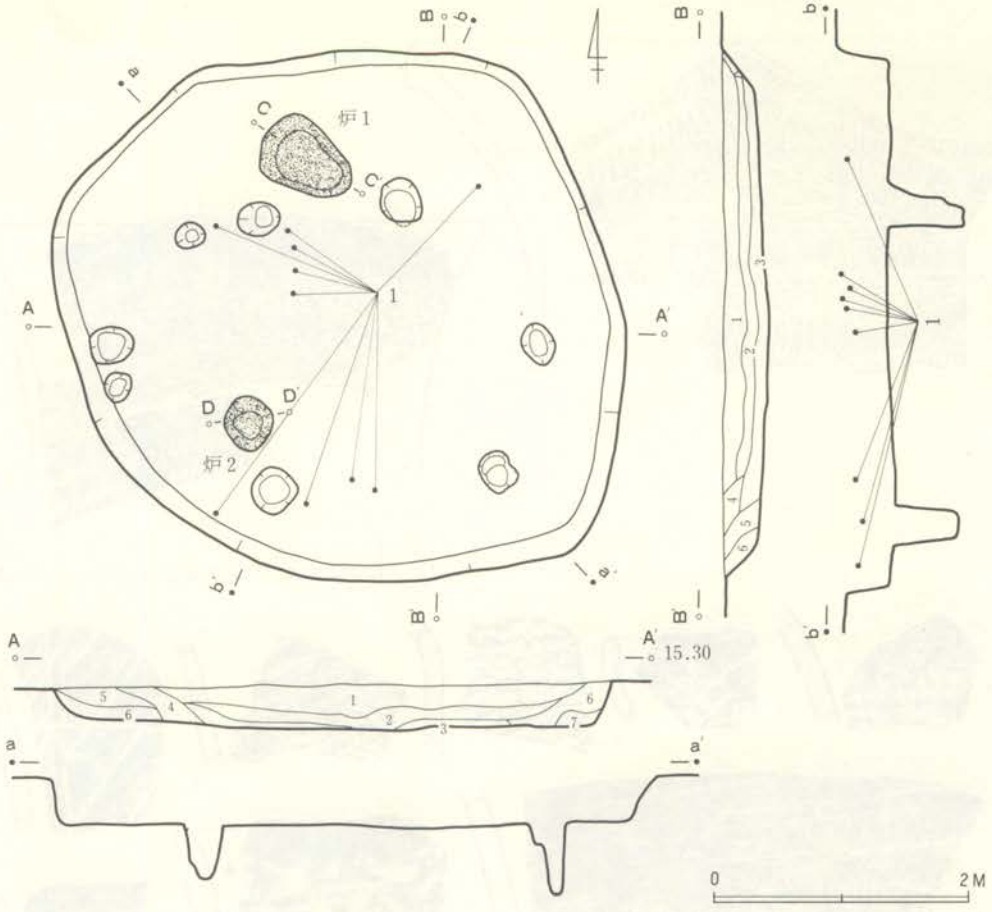
第11図　008 住居跡出土土器



第12図　008 住居跡出土土器



第13図　008 住居跡出土遺物



第14図　021 住居跡

021住居　土層

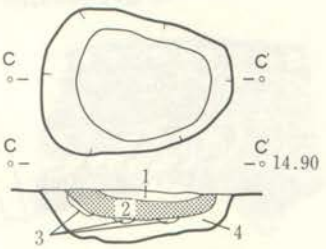
1　褐色土層　ローム微粒を多量，焼土粒を若干含む。
2　褐色土層　1層に比較してローム微粒が少ない。
3　明茶褐色土層　ローム粒を多量含む。
4　暗褐色土層　比較的やわらかい。
5　暗茶褐色土層　ローム粒を若干含む。
6　明褐色土層　ローム粒を若干含む。
7　茶褐色土層　堅くよくしまっている。

炉1　土層

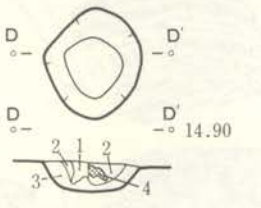
1　黒褐色土層　焼土粒を含む。
2　赤褐色土層　焼土ブロック，粒子を多量に含む。
3　明赤褐色土層
4　明茶褐色土層

炉2　土層

1　赤褐色土層　焼土粒を多く含む。
2　茶褐色土層　焼土粒を若干含む。
3　明茶褐色土層　硬く焼けている。
4　焼土ブロック



炉1　(1/30)



炉2　(1/30)

0　50CM

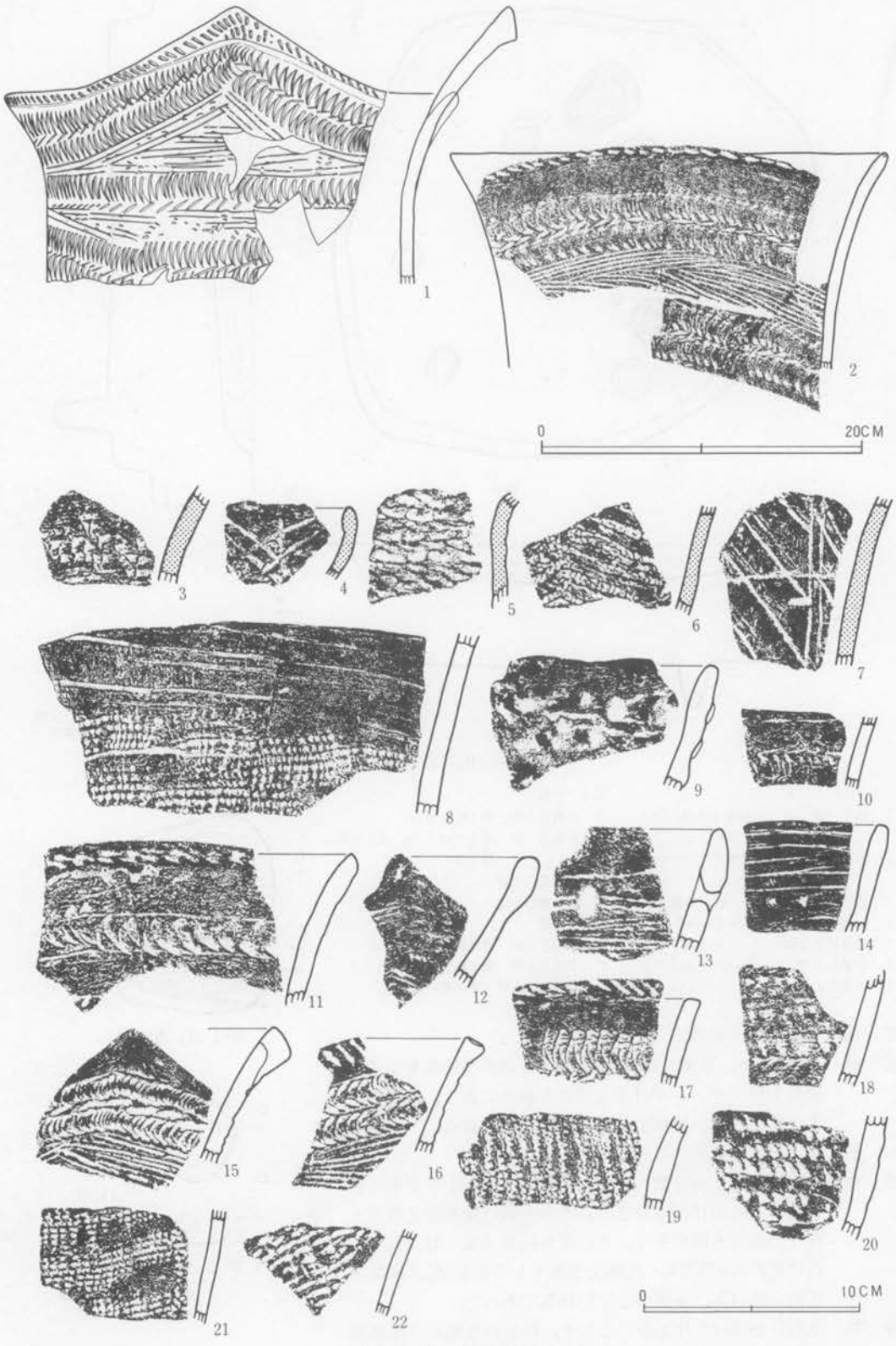
位　置　15グリッド北部。

形　状　長軸4.5m，短軸4.1m，壁高40cmを測る不整形を呈する隅丸方形プラン。炉は北と南の2か所にあり，北側の炉1は長軸70cm，南側の炉2は長軸43cmを測る。

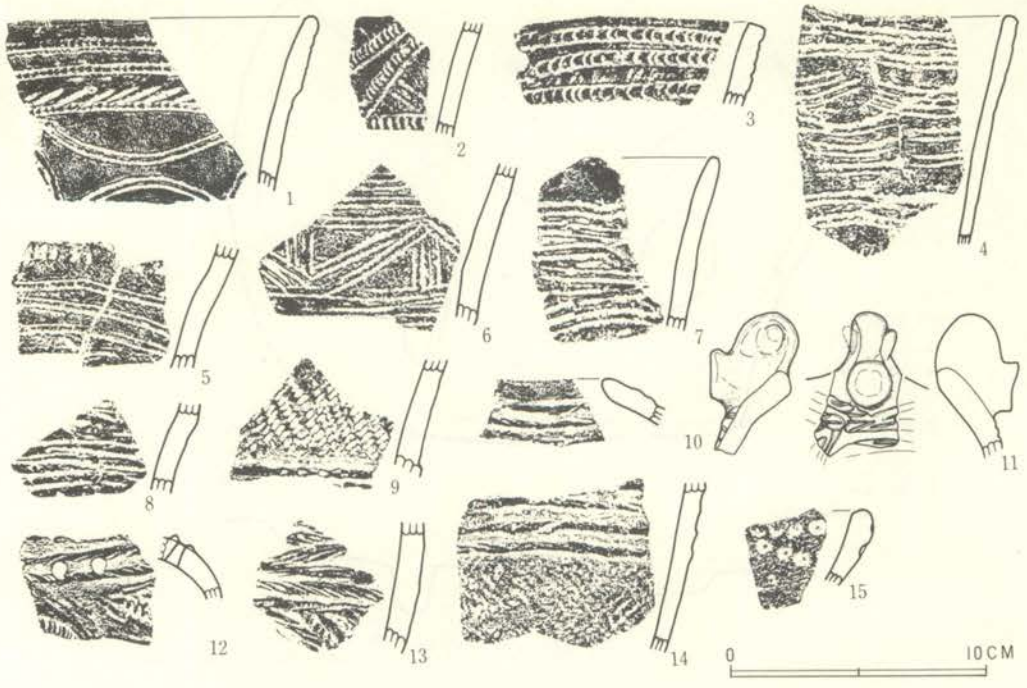
貝　層　覆土中には混入していない。

遺　物　遺物総数244点を数え，その内石器は凹石1点であった。土器はおよそ15.6kg出土し，その内訳は後期堀之内式土器と浮島式土器が多く，それぞれ約33.5%，31.8%で，他は黒浜式が3.3%，沈線文を施すものが3.5%，無文・底部が15.4%，一括の小片が16%であった。

時　期　後期の土器は小片が多いことや，住居の形態から浮島期に比定されるものと思われる。



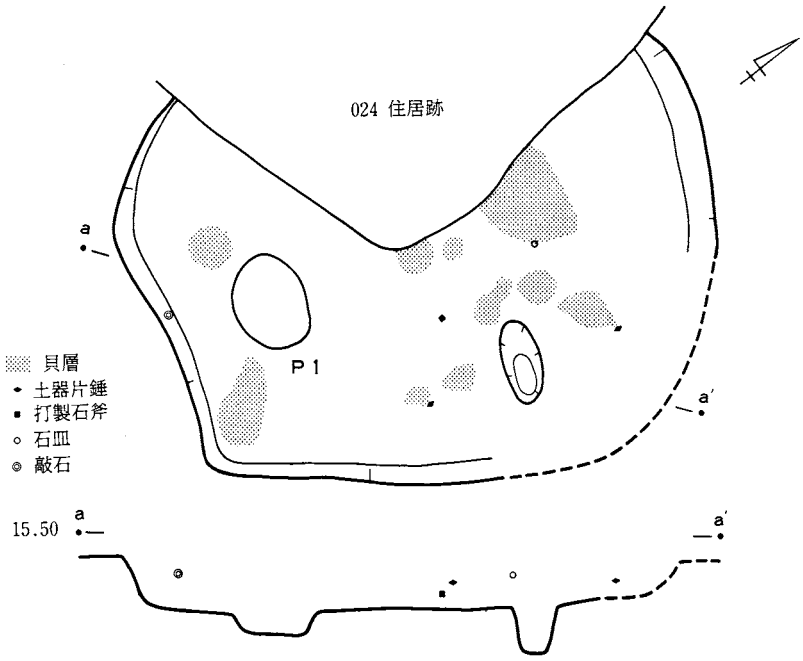
第15図　021 住居跡出土土器



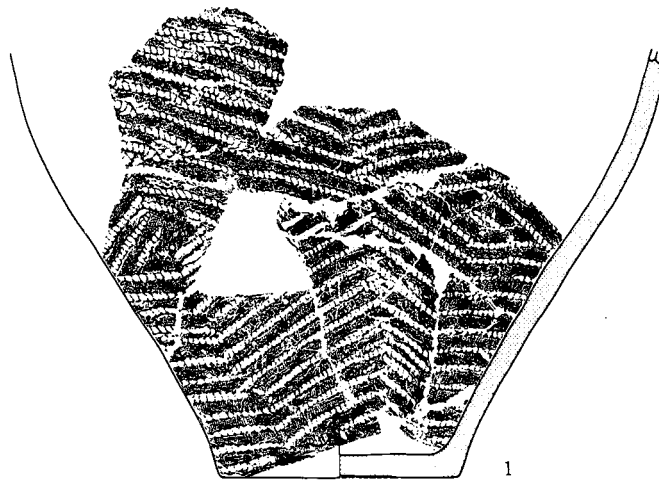
第16図　021 住居跡出土土器

021住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第15図 1	口縁を大きく山形に突き出した波状口縁を有する深鉢形土器。口唇部は内削ぎ状を呈し，竹管工具による斜めの刻みが施されている。文様はハマグリ等の貝殻腹縁による変形爪形文を1列ないし2列施した後，細い半截竹管工具を用いた平行沈線で区画し，さらにその上から同工具による刺突，ヘラ状工具による刻み等を施している。波状の単位は対面する口縁に小波状を有するものと思われる。遺存度⅓	6－2
2	外方に朝顔形に開いた口縁部破片。口唇部には1同様の刻みが口縁と平行に施されている。口縁部には凹凸の低いアナダラ属の貝殻腹縁による変形爪形文が2列に施されており，その間を細い竹管工具による平行沈線によって綾杉状に施している。遺存度⅓	6－1
3～22	3～7は胎土に繊維を含む。9は輪積段の境に指頭による圧痕を施している。11はハマグリ等の貝を用いて貝殻腹縁文を施し，その両側に沈線を施して区画している。口唇部には細い半截竹管による斜めの刻みを施している。15，16は2列の変形爪形文を施し，その下部には半截竹管による平行沈線を施している。17～22はアナダラ属による貝殻腹縁文を施している。	7
第16図 1～15	1・3は細い半截竹管による有節平行沈線を施すもので，1は2列の有節平行沈線下に緩やかな隆帯をもち，その隆帯上に斜めの沈線を施し，文様帯を区画し，口縁部下には同工具を用いた平行沈線を半弧状に施している。4～7は細い半截竹管による平行沈線を施している。4は口縁部文様帯を2列の平行沈線で区画し，その中に半弧状の沈線を満たしている。9・10・12～14は細い粘土紐を貼り付けた浮線文を施している。9は浮線文上に縄文を，他はヘラ状工具による刻みを施す。15は波状口縁で円形竹管刺突文を施す。第15図3～7は黒浜式，8～22は浮島式，第16図1～3は諸磯a式4～15は諸磯b式土器に比定される。	7



第17図　025 住居跡　0　2M



第18図　025 住居跡出土土器　0　20CM

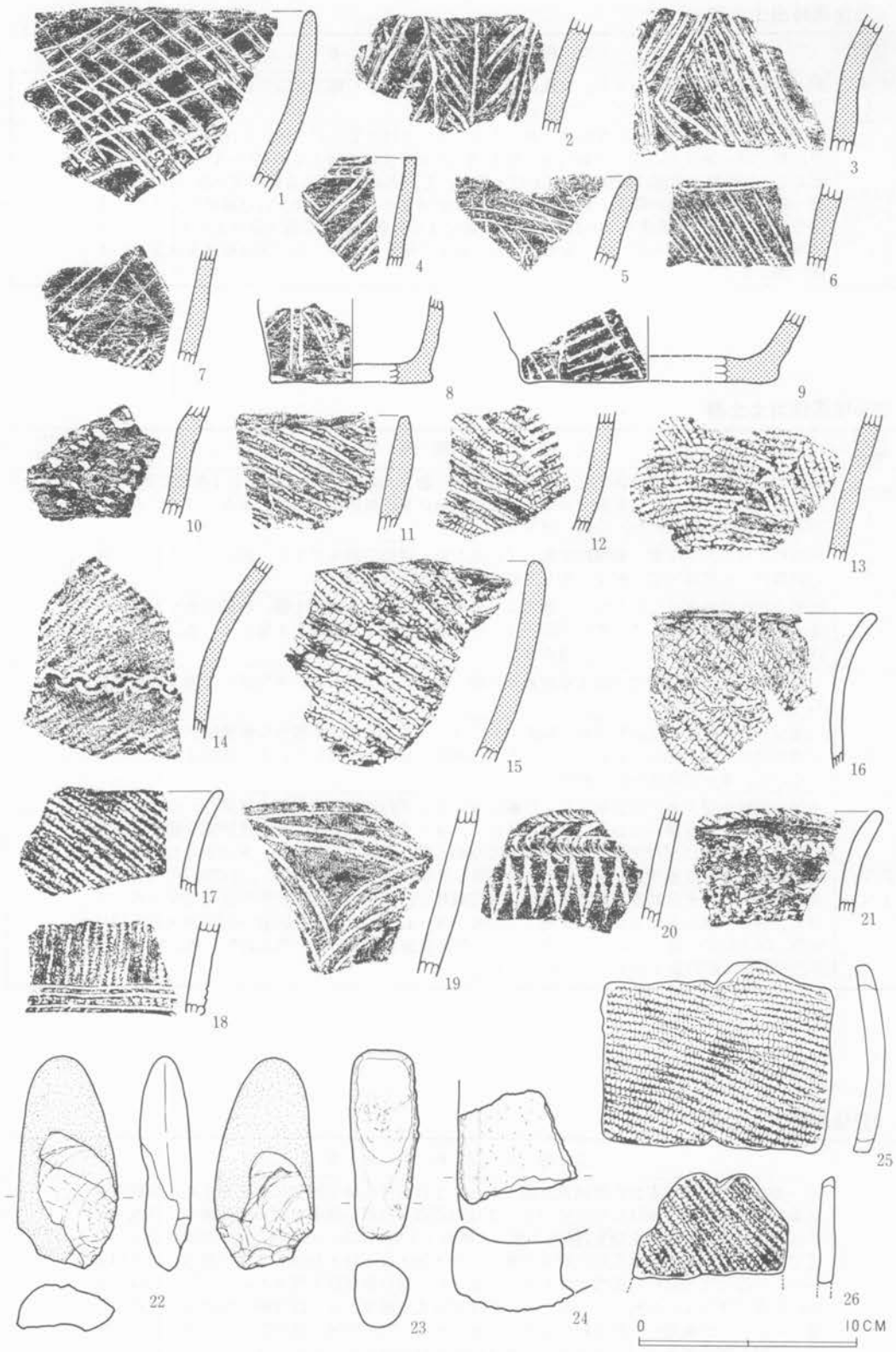
位　置　16グリッド南西部。052 住居跡に近接する。

形　状　長軸 4.7m，短軸３m(現存幅)，壁高40cmを測る不整形を呈する。西側４分の１は 024 住居(歴史時代)によって切られている。また北東の隅も後世の攪乱を受けている。さらにＰ１も上層よりの掘り込まれており，本住居に伴わないことが確認されている。床面は小さな凹凸が多いが硬くしまっている。

貝　層　点在した状況で検出されている。

遺　物　遺物総数70点を数える。石器は打製石斧１点，石皿１点，敲打器１点が検出されている。土器はおよそ4.5kg出土し，その内訳は黒浜式土器が多く約47.7%，諸磯b式が3.3%,浮島式が19,9%，縄文・沈線文・無文が 9.8%であった。

時　期　黒浜期に比定される。



第19図　025 住居跡出土土器

025住居跡出土土器

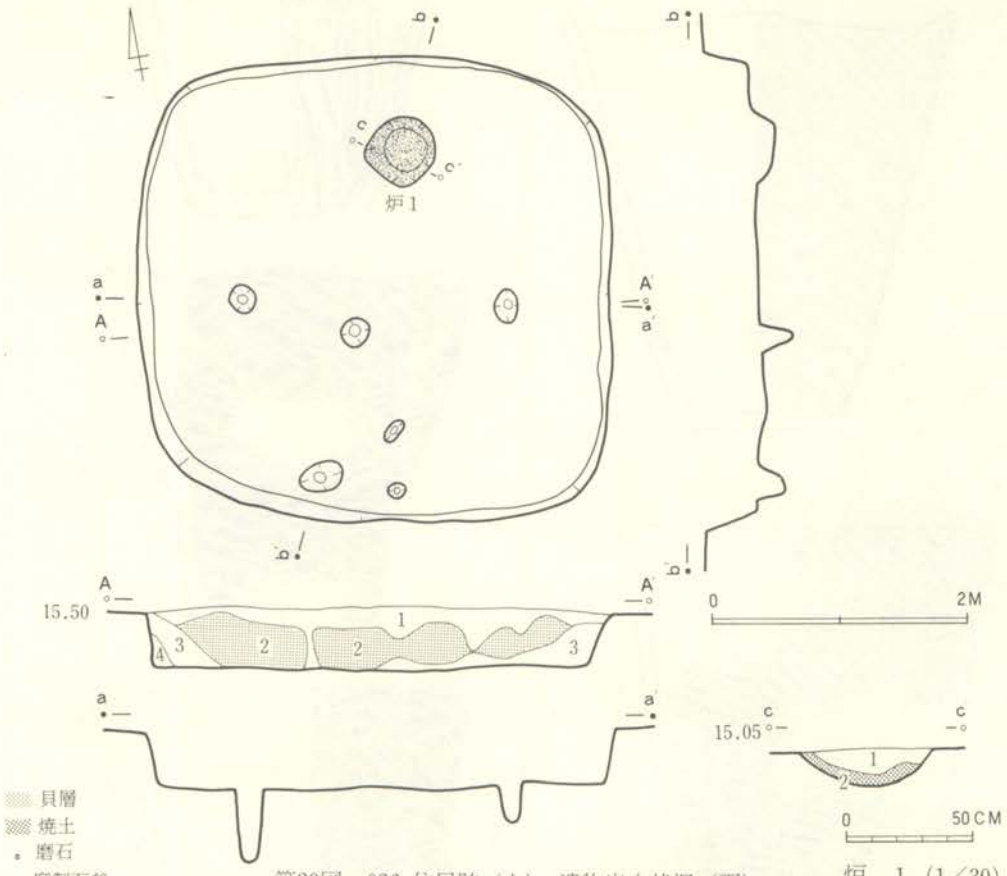
挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第18図1	胴の張る深鉢形土器の下半部。文様は条間のあいた附加条の縄文を山形状に施し，部分的にひし形のモチーフを作り出している。遺存度⅔	8－1
第19図1～24	1～15は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。1～9は竹管工具を用いた沈線文を施しており，格子状に施すもの(1)や半截竹管工具を用いた平行沈線を施すもの(2～4・6・8・9)がある。7は胴下半部に縄文をもつものと思われる。10は竹管による刺突文が施されている。11～13・15は附加条の縄文，14にはコンパス文が施されている。16～21は繊維を含まない土器である。16～19は諸磯式，20・21はアナダラ属による貝殻腹縁文を施す浮島式である。22～24は石器で，22は打製石斧，23は敲打器，24は石皿の破片である。25，26は繊維を含まない土器片錘である。	8

026住居跡出土土器

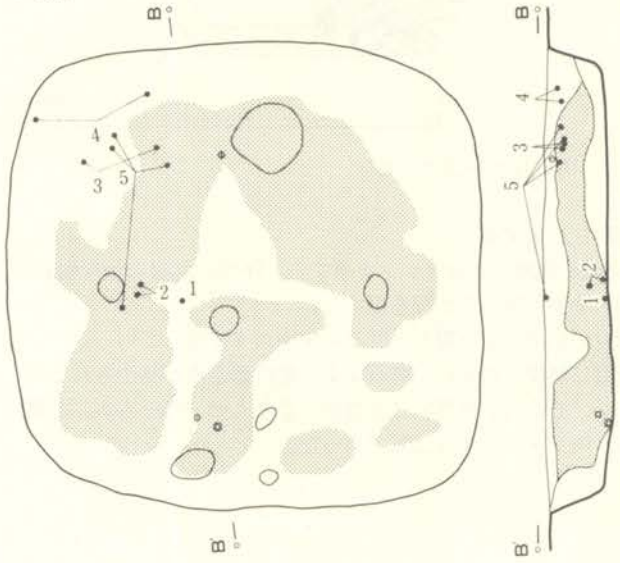
挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第21図1	口縁から底部にかけて直線的にすぼまる深鉢形土器。口縁は緩やかな波状を4単位で廻らす。胴部には附加条の縄文（単節ではなく，Rの無節にRの無節をL方向にまきつけている）を施す。遺存度，ほぼ完形，口縁一部を欠く。	10—1
2	深鉢形土器の胴下半部。輪積段で割れているため，疑似口縁を呈する。胴部にはアナダラ属の貝殻による腹縁圧痕を縦位に施している。遺存度ほぼ完形。	10—2
3	底部よりほぼ垂直にたち上がり，頸部より外側へふくらむ深鉢形土器。口縁は緩やかな波状を4単位で廻らせる。その波状頂部下よりひし形状に附加条の縄文を施している。器内面，底部ともによく磨かれている。遺存度⅖	10—3
4	口縁から底部に直線的にすぼまる深鉢形土器。胴部には原体LRの単節縄文を施す。遺存度¼	10—4
5	口縁がやや外反する浅鉢形土器。胴部中央には上下を2分する不整合な輪積段があり，そこを境に原体の細い縄文（LR）とやや太めの縄文（RL）を施している。底部は上げ底になっている。遺存度底部完形，胴部⅛	10—5
第22図1～24	1は小波状を呈する口縁部破片で，半截竹管による平行沈線で文様帯を区画し，その内に山形状のモチーフを描いている。2は格子状に，4～6は縦位に施された沈線間を綾杉状に施している。7・8は平行沈線を任意の間隔で左から右へと施文している。8はさらに胴下半に原体RLの縄文を施す。1～8の沈線文に関しては，すべて半截竹管による沈線(片側使用)，平行沈線文と考えられる。10は波状の口縁部破片で，隆帯の両側に円形竹管刺突文を施している。11は表裏ともに赤色塗料を施している。9・13～15は附加条，10～12・16・17・19は単節，18は無節の縄文を施す。21は両面および両側面を加工した小型の磨製石斧。22・23は磨石で測面に敲打痕を残す。24は敲石である。	11

031住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第24図1～31	1～5は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。2は波状口縁で地文に縄文をもち，半截竹管による平行沈線を区画状に施している。3は口辺直下に高い隆帯を廻らせ区画し，区画上部には破線状の平行沈線を施し，区画下部には撚糸文を網状に施している。6～20は浮島Ⅰ～Ⅱ式である。7・8・13は変形爪形文を施す。9・10・12・16・19はアナダラ属の，11・14はハマグリ等による波状貝殻腹縁文を施す。15・17～20は輪積段を残すもので，17・19は指頭状の圧痕（凹凸文）を施している。21～29は諸磯式土器である。21は細い有節平行沈線文を施しており，表裏面に赤色塗料の痕跡が認められる。22～26は半截竹管による平行沈線文を施す。24・25はキャリパー状を呈し，25は口唇部に指頭による圧痕を残す。27～28は，浮線文を施す。27・29はヘラ状工具による刻みを施す。	12



第20図　026 住居跡（上）・遺物出土状況（下）　　炉　1（1／30）



103 住居土層

1　黒色土層　ローム粒を含む。
2　純 貝 層　ほぼ全面に貝が充満する。
3　褐色土層　やや大きいロームブロックを含む。
4　褐色土層

炉1　土層

1　明褐色土層　若干の焼土粒を含む。
2　焼土

第21図　026 住居跡出土土器

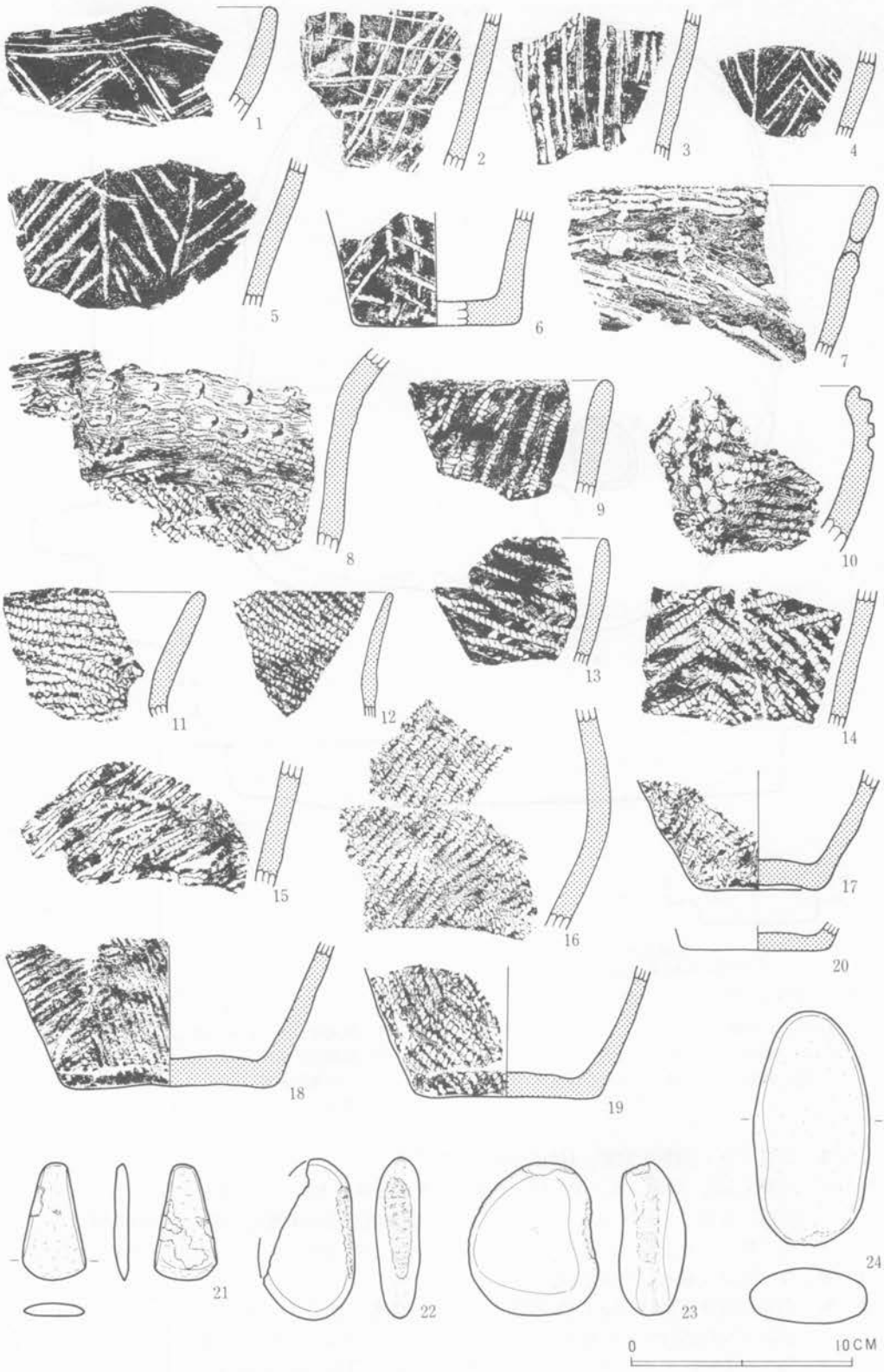
位　置　16グリッド南東部。052 住居跡に近接する。

形　状　一辺 3.6～3.7m，壁高45cmを測る隅丸方形のプランを呈する。住居の北側には長軸53cmの炉1があり，柱穴は全体的に南側へ寄った状況を呈する。

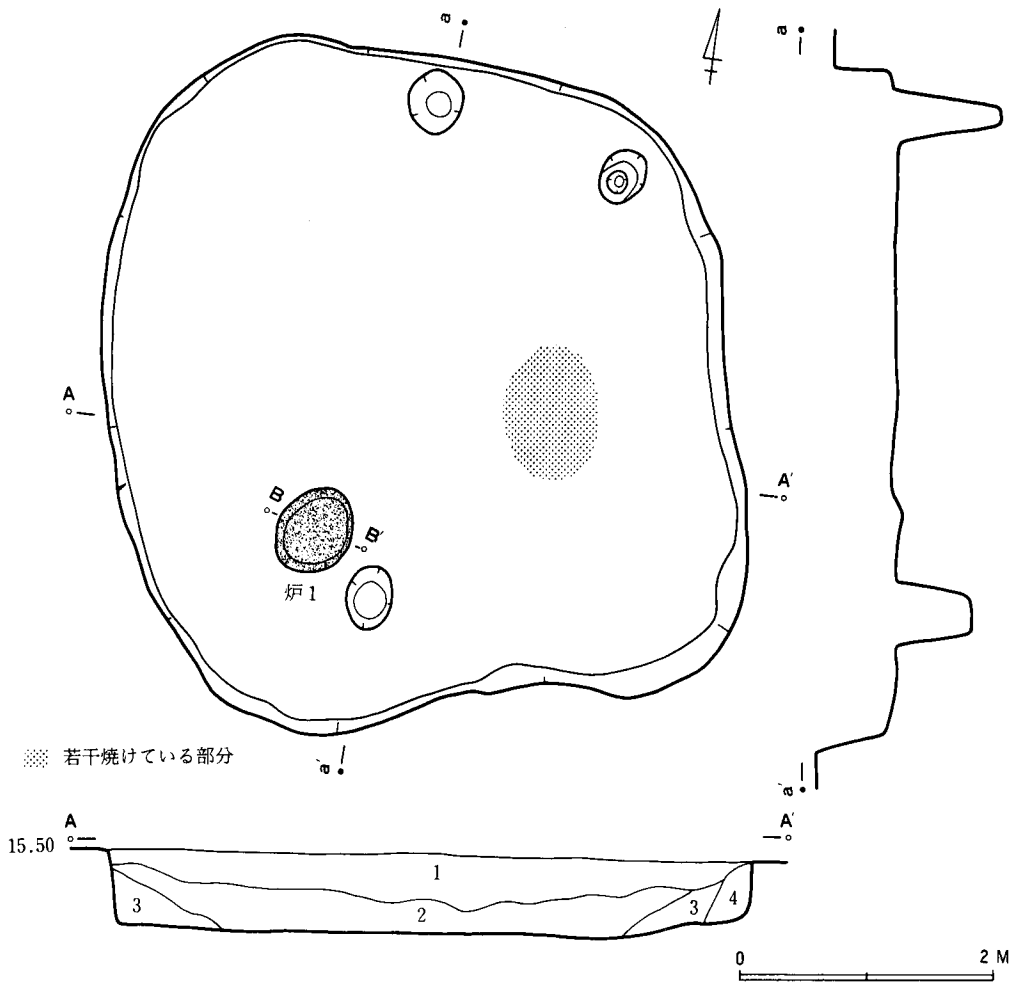
貝　層　純貝層が住居全体を覆っており，中央部では覆土上面から床面にまで達している。

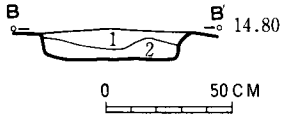
遺　物　遺物総数 177点を数える。石器は磨製石斧1点，磨石4点，敲打器2点が検出されている。土器はおよそ18.2kg出土し，その内訳は黒浜式土器が一番多く95.5%を占め，諸磯a式は 1.0%，浮島式は微量，縄文・無文が 1.2%であった。

時　期　黒浜期に比定される。



第22図　026 住居跡出土遺物





炉1 (1/30)

第23図　031 住居跡

炉1　土層

1　暗褐色土層　焼土粒を含む。
2　赤褐色土層　焼土粒および焼土ブロックを多量に含む。
1　暗褐色土層　若干の焼土を含む。
2　暗褐色土層
3　暗黄褐色土層
4　黄褐色土層

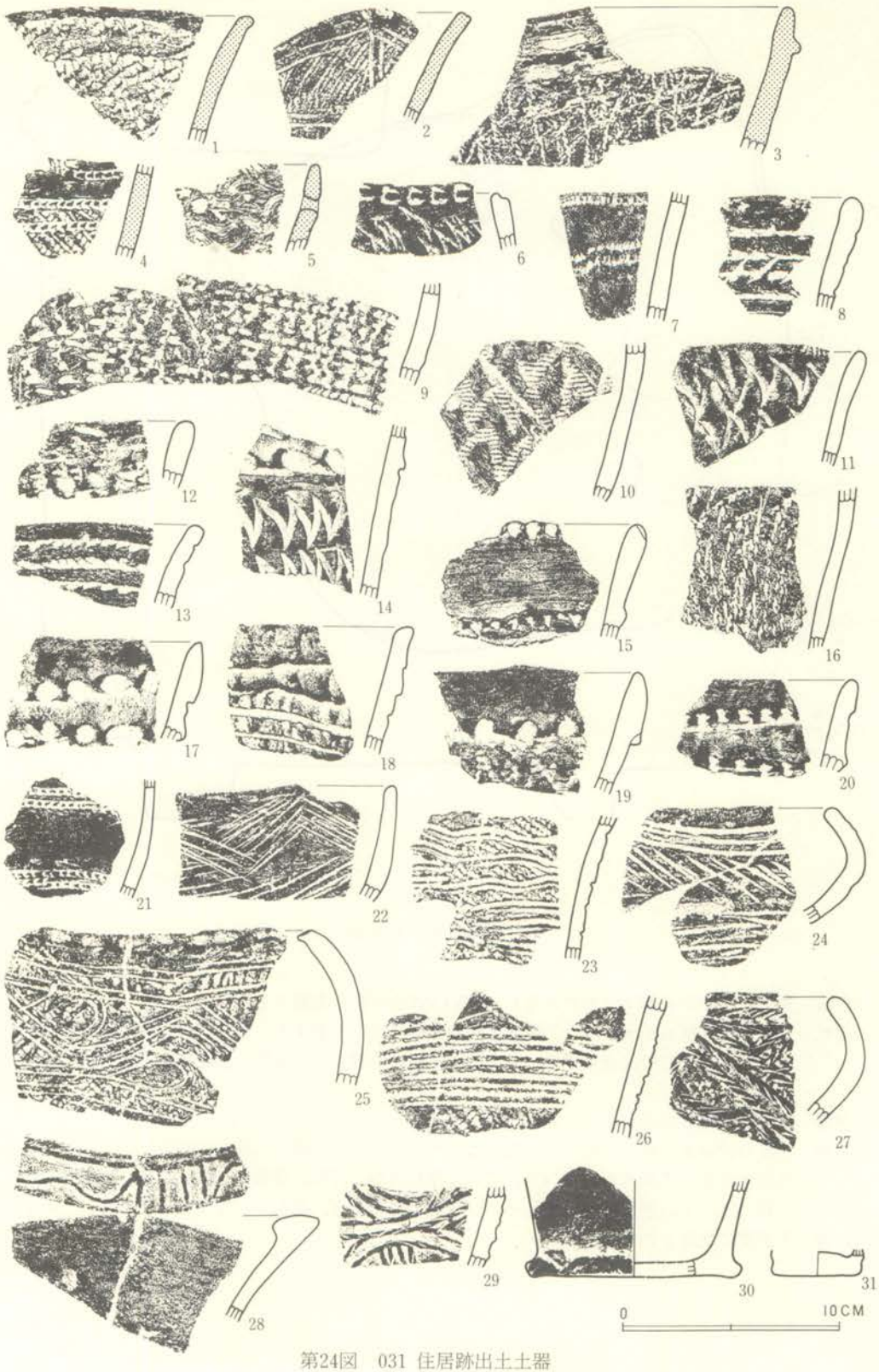
位　置　17グリッド南側中央部。119住居跡に近接する。

形　状　長軸5.5m，短軸５m，壁高60cmを測る不整形な隅丸方形プランを呈する。炉は住居の南西部に位置し，長軸70cmを測る。また，中央東側部分の床面には焼けた痕跡を残している。柱穴は北と南に位置するが，南側のピットは炉に近接するため柱穴とは考えにくい。

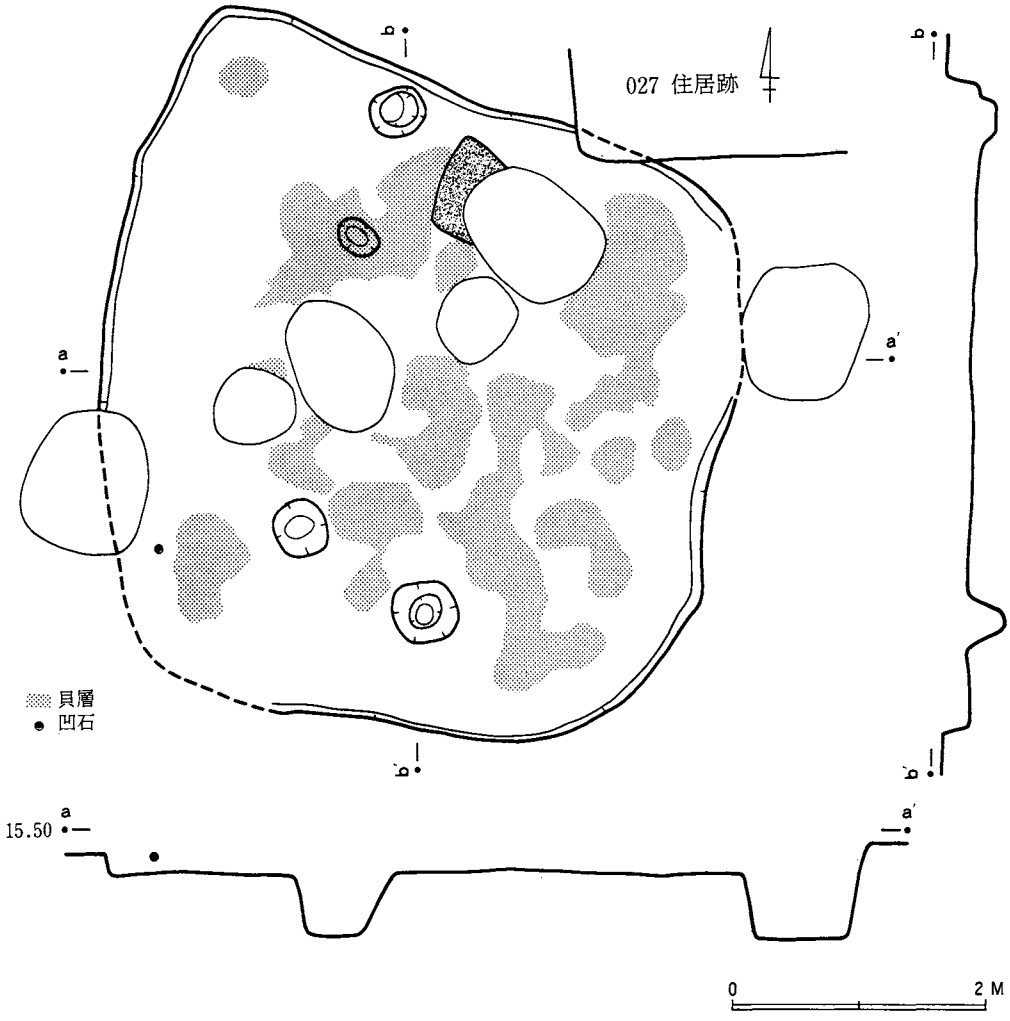
貝　層　覆土中には混入していない。

遺　物　土器の総重量は11.3kgでその時期は黒浜式～浮島・諸磯式に及んでいる。各期の比率は浮島式が約29.4％と一番多く，次いで黒浜式が15.5％，諸磯ａ式が0.5％，諸磯ｂが5.7％，その他沈線文，縄文が11.3％，無文8.2％，一括の小片が29.4％であった。

時　期　浮島期に比定される。



第24図　031 住居跡出土土器



第25図　052 住居跡

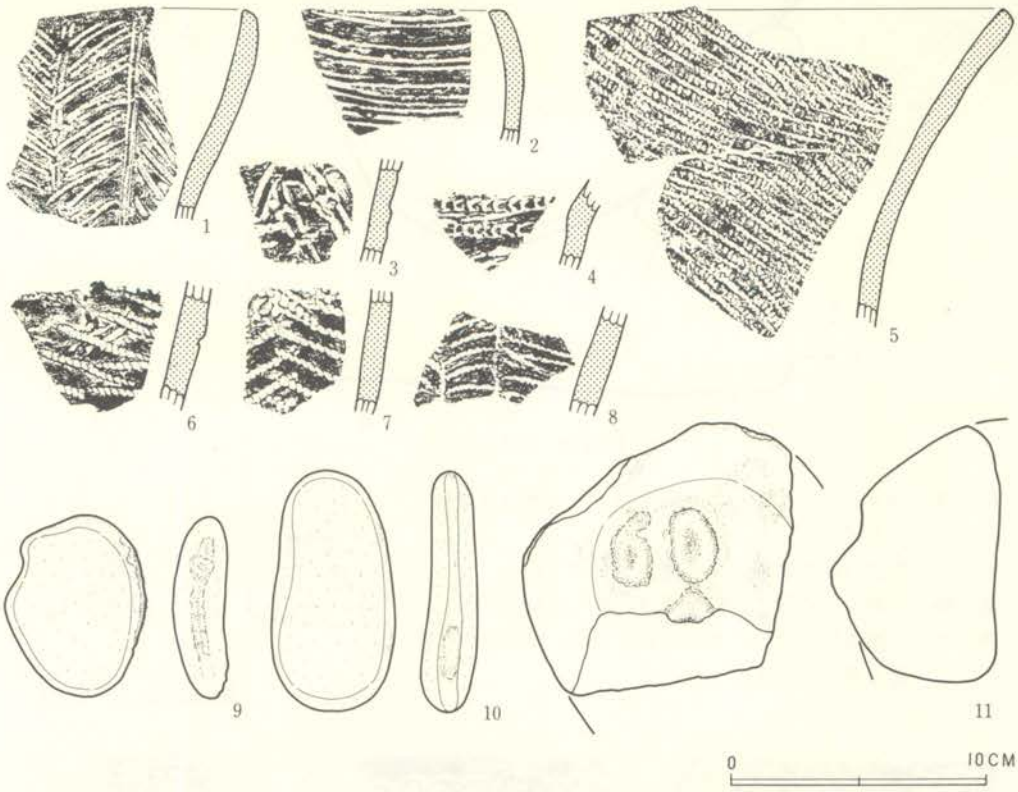
位置　16グリッド中央部よりやや南寄り。025・026住居跡に近接する。

形状　一辺5m，壁高25cmのやや不整形な隅丸方形プランを呈する。住居内には6号掘立柱建物跡があり，やや攪乱を受けている。炉は北側に位置するが東側を掘立柱によって切られている。

貝層　やや北西寄りに広がっている。

遺物　土器の総重量は約 5.8kgでその時期は黒浜式～浮島・諸磯式に及んでいる。
各期の比率は黒浜式が約74.4%，次いで浮島式が 2.7%，諸磯a・b式が3%，縄文・無文が13.1%，その他が 6.8%であった。石器は凹石1点，敲石3点を数える。

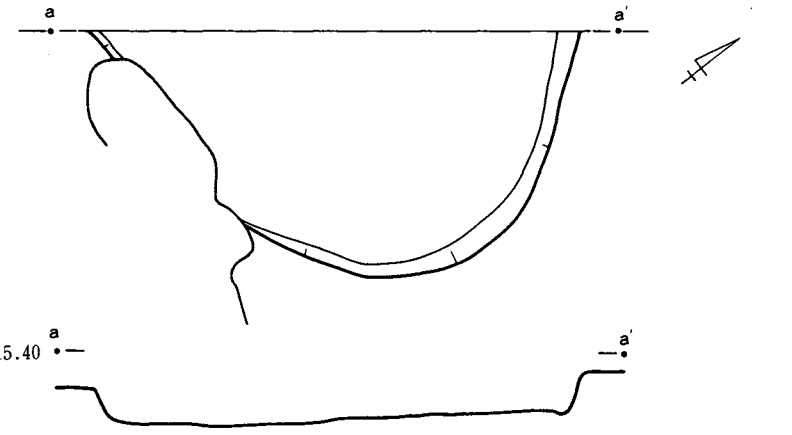
時期　黒浜期に比定される。



第26図　052 住居跡出土遺物

052 住居跡出土土器（第26図1～10）

1～4は半截竹管による平行沈線、結節平行沈線を施すものである。1は縦位に平行沈線を描き，沈線間は綾杉状に沈線を廻らしている。5～7は附加条の縄文を施すもので、6・7は異方向縄文である。8はアナダラ属の貝殻腹縁によって肋骨文状の圧痕が施されている。1～8は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。9・10は敲打具で側面に敲打痕が見られる。11は凹石である。



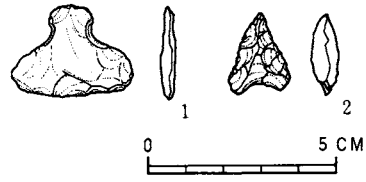
第27図　063 住居跡

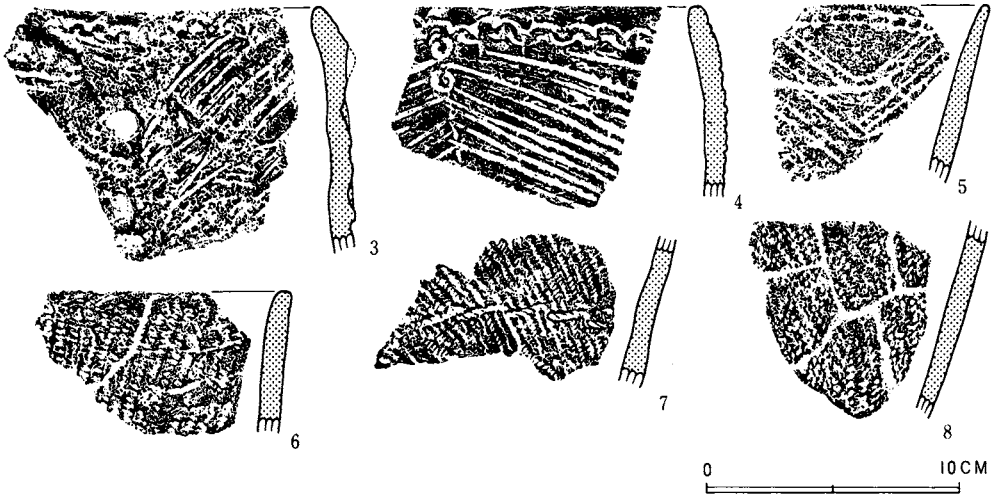
位　置　14グリッド北部。住居の半分以上は調査区域外下へと続いている。

形　状　南側は後世の溝による攪乱を受けている。

遺　物　総数8点を数え，内2点は石匙と石鏃であった。

時　期　貝層を伴わないため確定的ではないが黒浜期の所産と考えられる。

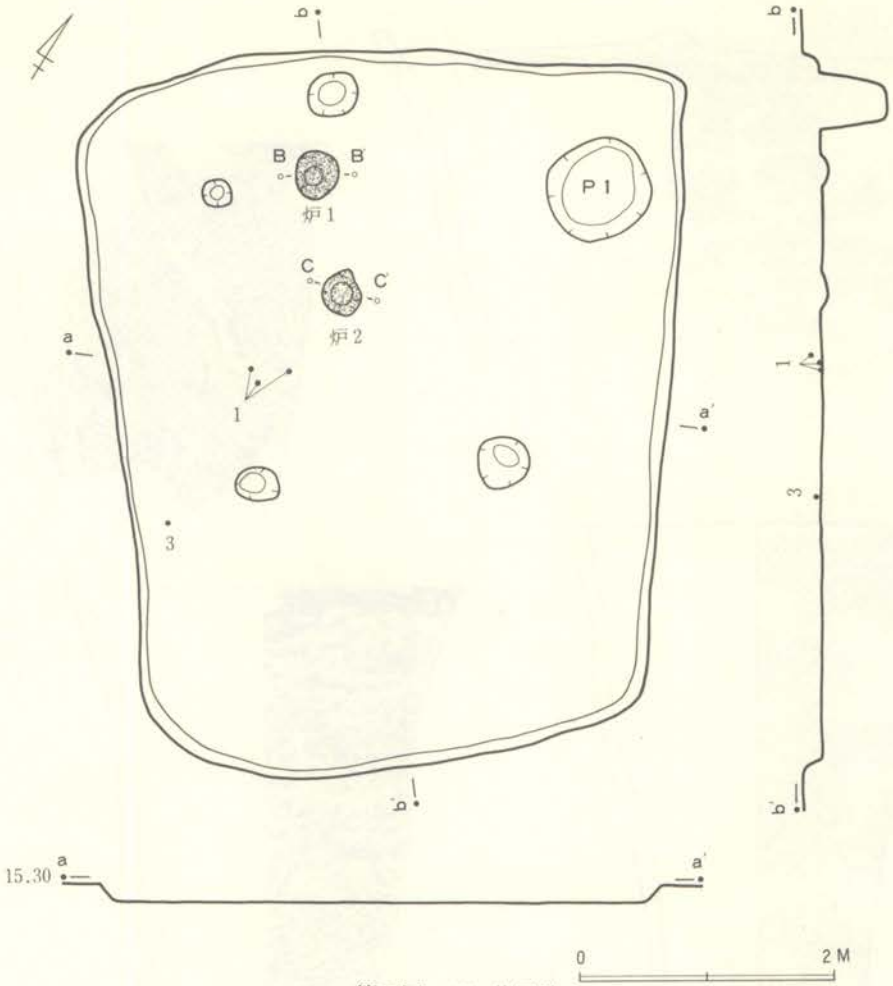




第28図　063 住居跡出土遺物

063 住居跡出土遺物（第28図1～8）

1は頁岩製の小型の石匙，2はチャート製の石鏃である。3～8は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。3～5は半截竹管による平行沈線を施している。3・4は口唇直下にコンパス文を施し，3は指頭状の圧痕を，4は円形竹管刺突文を縦位に施している。3は圧痕の上部に連弧状の隆帯を貼り付けている。5は口唇直下に有節平行沈線を廻らせ，胴部には平行沈線を山形状に廻らせている。



第29図　103 住居跡

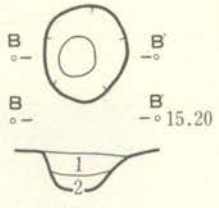
位　置　8グリッド東側，¼程9グリッドにまたがる。008住居跡と近接する。

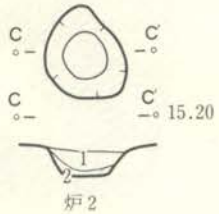
形　状　長軸5.7m，短軸4.8m，壁高15cmを測る隅丸の長方形プランを呈する。東北隅には直径80cm，深さ50cmを測る大型のピットＰ１を有する。炉は住居北半に２基存在し，北に位置する炉１は火床部が厚く，長時間火を受けている。

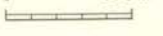
貝　層　住居全面を覆っており，本遺跡でも一番多く貝が投棄されている。

遺　物　土器の総重量は約32kgでその時期は黒浜式～浮島・諸磯式に及んでいる。各期の比率は黒浜式が圧倒的に多く91.3%を占め，次いで浮島式2.2%，諸磯a・b式 0.5%，縄文・無文 1.9%，その他が 3.6%であった。石器は磨製石斧２点，凹石１点，敲石１点の計４点を出している。

時　期　黒浜期に比定される。





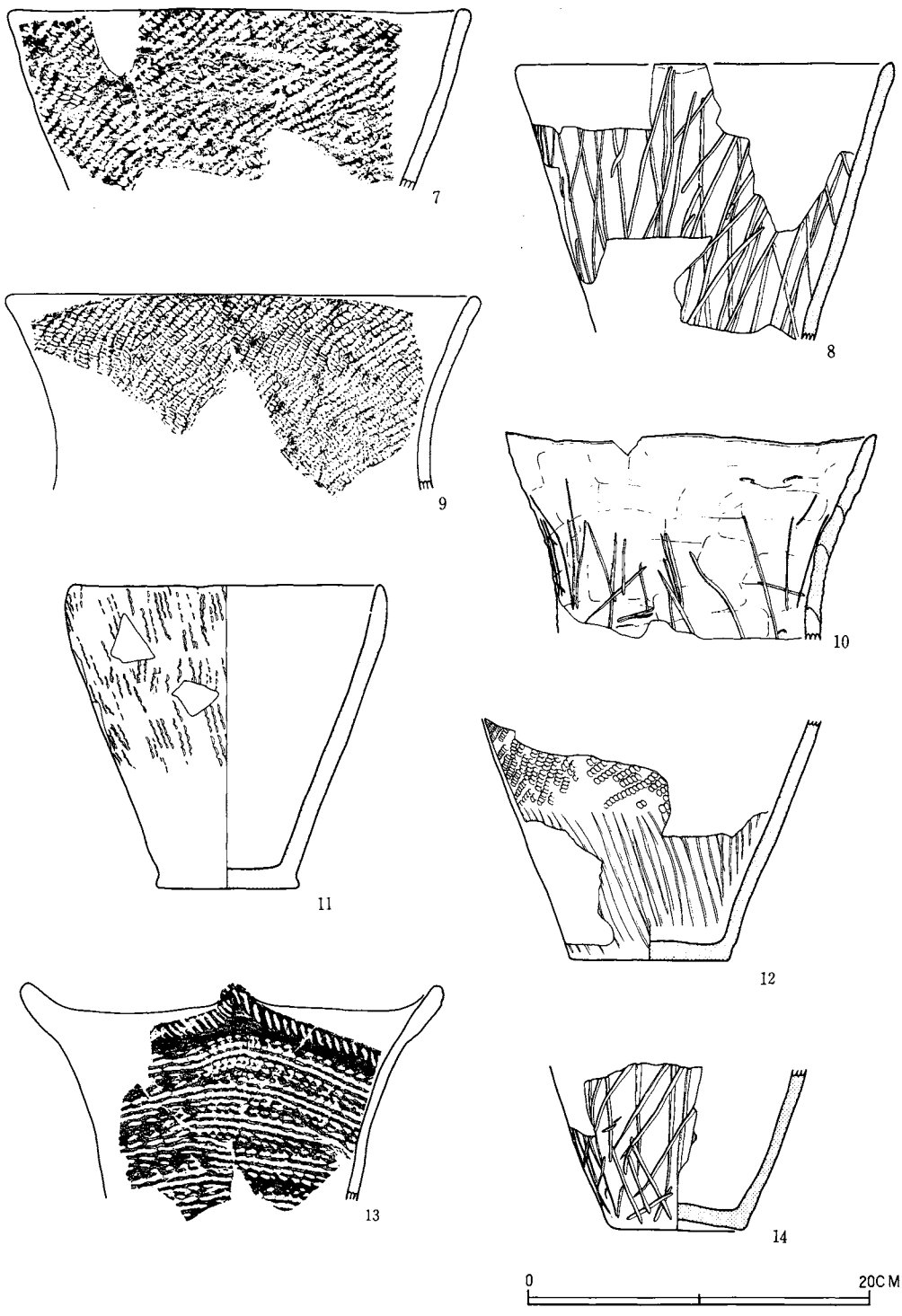


炉１・２　土層

1　黒褐色土層　焼土を混入する。

2　黄褐色土層　火を受けてぼろぼろになっている。

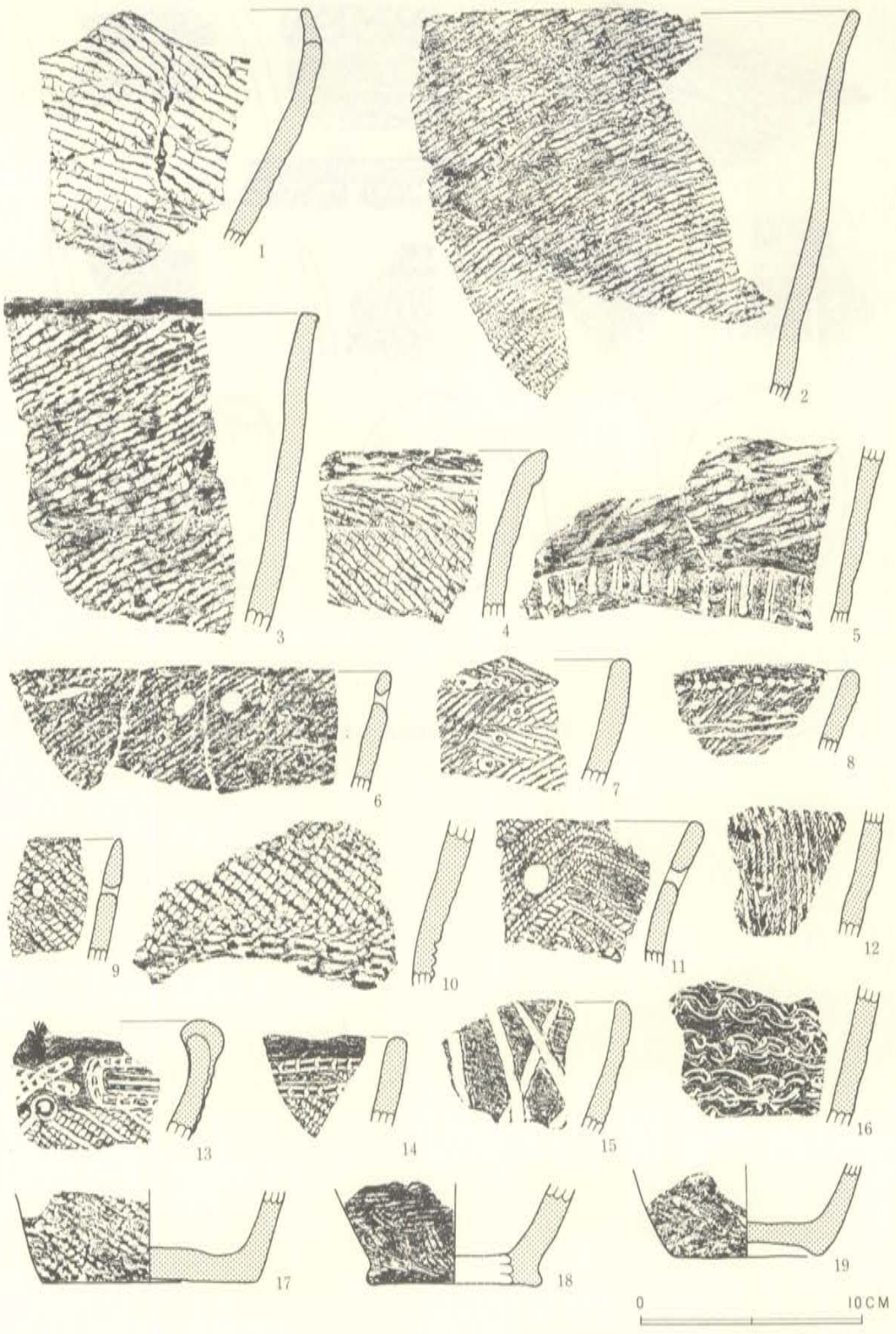
第30図　103 住居跡出土土器



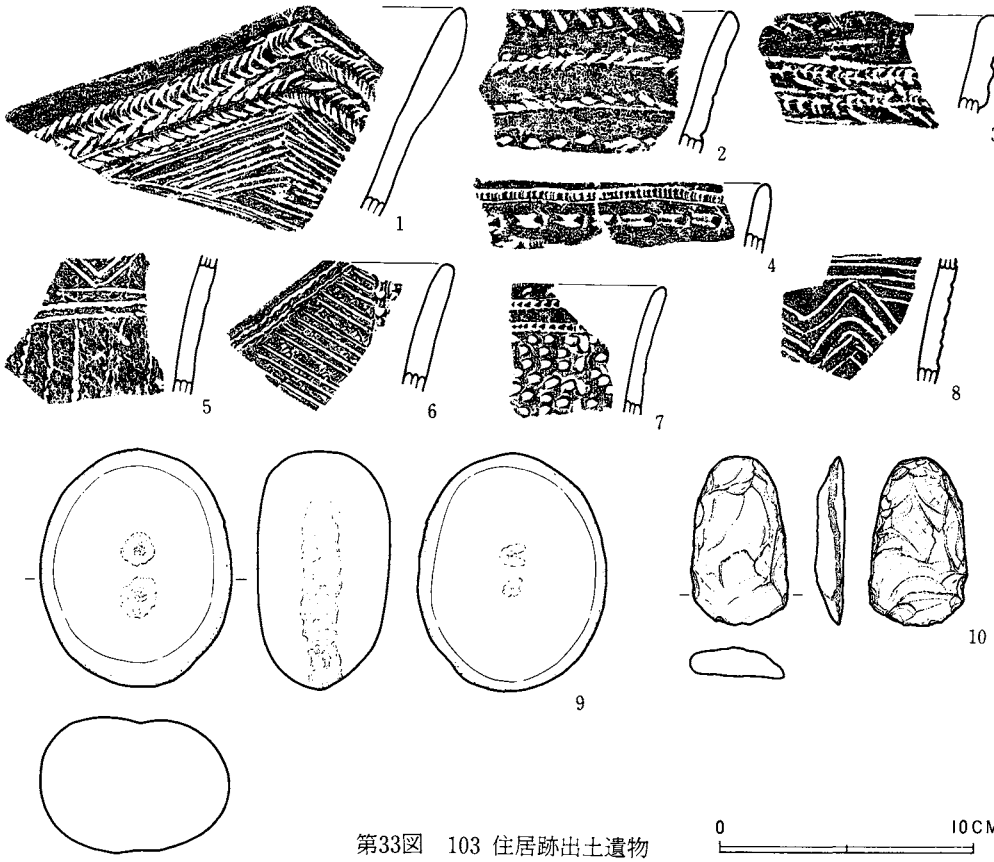
第31図　103 住居跡出土土器

103住居跡出土土器

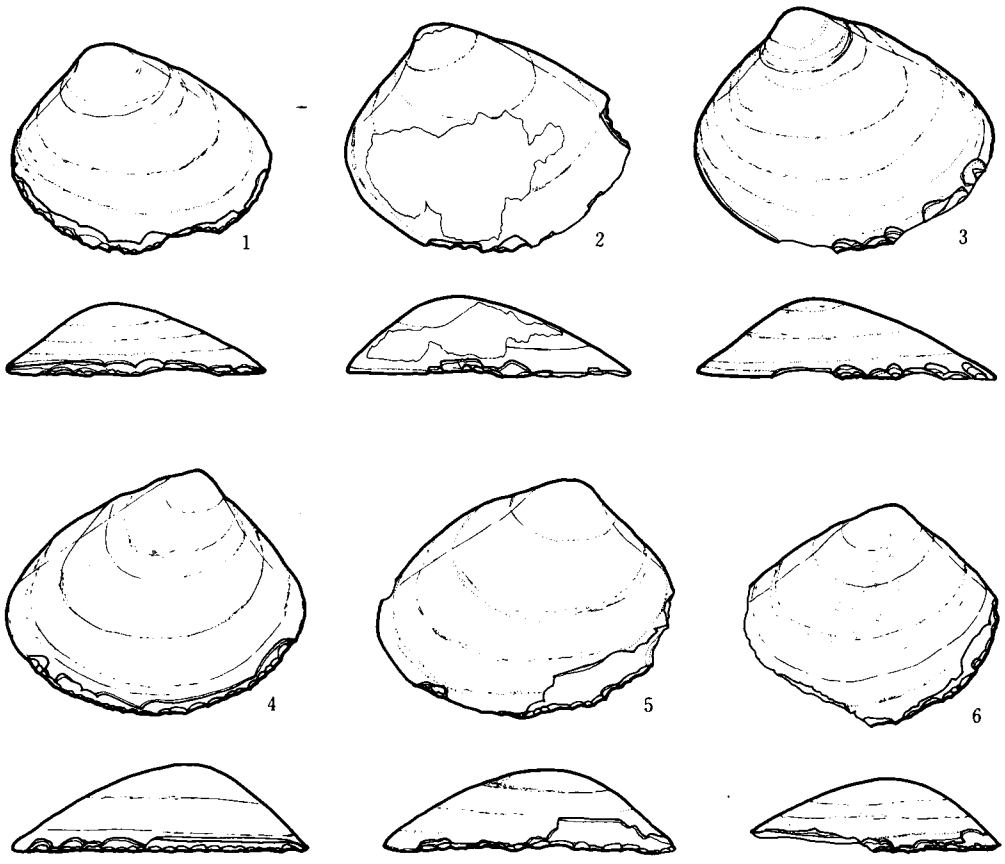
挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第30図 1	口縁を外反させ，緩やかな頸部をもつ，深鉢形土器。底部に近いと思われる部分はやや立ちぎみになっているところから器台の付くものと考えられる。口縁は小波状を4単位で廻らしている。文様は口唇直下に半截竹管による平行沈線を破線状に廻らせ，各波状頂部から縦位に同様の刻みを施している。地文には原体ＬＲの縄文を胴部中位あたりまで施している。床面直上より出土。遺存度ほぼ完形。	16— 1
2	口縁をやや外反させ，底部までなだらかにすぼまる深鉢形土器。胴部には羽状縄文を施している。遺存度¼	16— 2
3	口辺下に緩やかな頸部をもつ，円筒形状を呈する深鉢形土器。頸部器内面には稜をもつ。口唇部には指頭状の圧痕が施されており，小波状を呈する。器面全体には原体ＲＬの単節縄文を施す。底部は無文。遺存度ほぼ完形。	16— 3
4	2と同形の器形を呈す。文様帯として明確な区別はされていないが，胴下半には無節の縄文が施されている。無文帯のナデによって縄文が消されている状況を呈す。底部は無文。遺存度¾	16— 4
5	口縁部を直立させ，頸部より胴部を若干張り出す深鉢形土器。器面には原体ＲＬの縄文を施し，部分的に施文時の粘土かすを残している。遺存度½弱	16— 5
6	口縁から底部まで直線的にすぼまる深鉢形土器。口縁は平縁であるが不整形を呈す。器面には無節の縄文を施している。遺存度¾	16—6
第31図 7	6同様の器形を呈する深鉢口縁部破片。器面には原体ＲＬの縄文を施す。遺存度⅓	17— 1
8	直線的にすぼまる深鉢形土器。文様は不規則に格子状の沈線を施している。遺存度⅓	17— 2
9	口縁を外反させる口縁部破片。器面には原体ＬＲの縄文を施す。遺存度¼	17— 3
10	4と同形の器形を呈するものと思われ，口辺の無文部分の整形技法も同じである。異なる点は浅い沈線が縦方向に無造作に施されている点である。遺存度½弱	17— 4
11	口縁をやや内傾させ，底部まで直線的にすぼまる深鉢形土器。底部はやや張り出す。口縁は不整形を呈する平縁。文様は胴上半部にアナダラ属の貝殻腹縁による縦位の圧痕を施す。胴下半部は還元色を呈し，横ナデの整形痕を残す。遺存度口縁の1部を欠く。	17— 5
12	現存する文様帯は2分されており，原体ＬＲの縄文を若干磨消し，その上から半截竹管による平行沈線文を縦方向に施している。底部は無文。遺存度⅖	17— 6
13	口縁を外反させる深鉢形土器。口縁部は肥厚し，小波状を呈する突起をもつ。突起の単位数については不明であるが，4単位と考えられる。口唇部には棒状工具による縦位の刻みが施されており，胴部にはアナダラ属の貝殻腹縁による波状腹縁文を引きずるように施している。従来の連続波状貝殻文に比べると沈線的要素が強く，変っている。遺存度¼	18— 1
14	8同様の沈線文を施す底部破片	18— 2
第32図 1～19	1～8は地文として無節の縄文を施す。1は口縁をやや内傾させ，緩やかな波状口縁を呈する。胴部には施文時に生ずる粘土塊を残す。3は口唇部を扁平にする。4は口辺に無文帯を有し，そこに半截竹管による平行沈線を破線状に刻んでいる。5は輪積段より文様を2分し，上には無節の縄文，下には破線状平行沈線を縦位に施している。6は補修孔を有する。7・8は円形竹管刺突文を施す。11は2本の無節の縄文を附加した附加条の縄文を施す。12は撚糸文を施す。13，14は口縁に沿って有節平行沈線を施す。16はコンパス文を施している。1～19は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。	15
第33図 1～10	1～3は口辺に変形爪形文を施すもので，1は波状口縁で変形爪形文下には半截竹管による平行沈線を山形に施している。2の爪形文は幅が広く，口唇部には深い縦の刻みが施されている。4・5は地文に撚糸文をもち，細い半截竹管による平行沈線をその上に施している。1～3は浮島II式，4・5は浮島Ｉａ式と称されるものである。6～8も竹管による平行沈線文を主とするもので，6は平行沈線間に細かい刻みを施している。沈線下には破線状の刻みを横位に施す。7は竹管の刺突文を胴部に満たしている。6・7は諸磯ａ式，8は諸磯ｂ式に比定される。9は両面に凹をもつ凹石で，平面は磨っており，側面には敲打痕が認められる。10は小型の打製石斧で，刃部は片面の局部磨製によって作られている。	15



第32図　103 住居跡出土土器

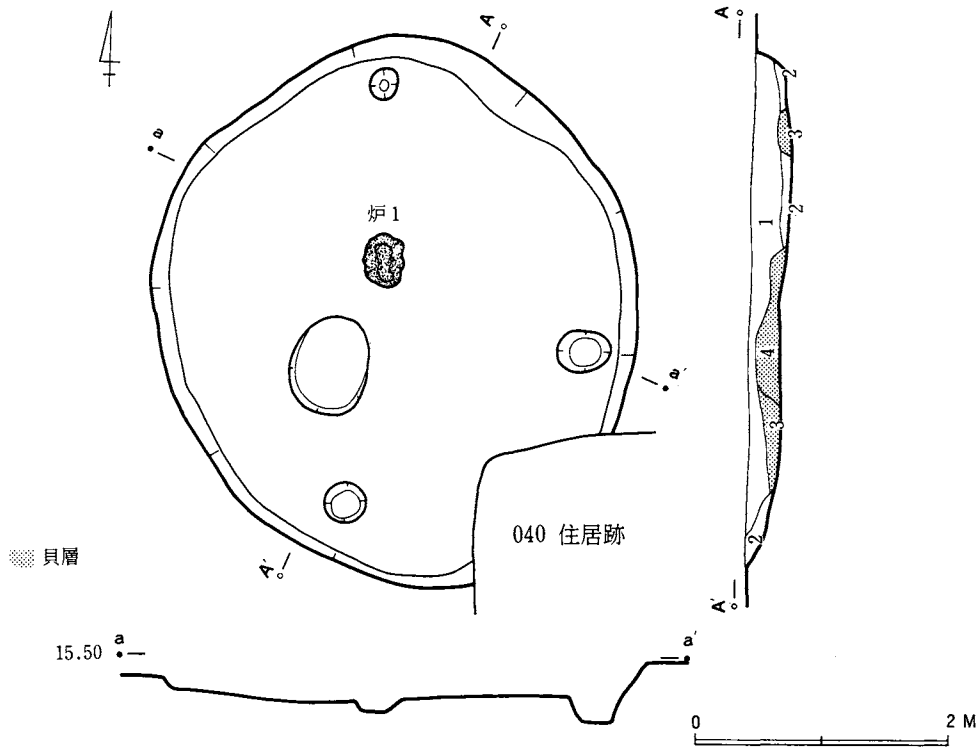


第33図　103 住居跡出土遺物



No	section no.	station no.	sample no.	種類	左右	殻長
1	3	9	6	ハマグリ	L	5.2
2	3	3	4	ハマグリ	L	(5.7)
3	3	11	6	ハマグリ	L	6.0
4	3	15	4	ハマグリ	R	6.0
5	3	7	2	ハマグリ	R	(6.0)
6	3	11	4	ハマグリ	R	(6.1)
7	3	11	1	ハマグリ	R	(5.6)

第34図　103 住居跡出土貝刃



第35図　118 住居跡

1　暗褐色土層　ローム粒を少量含む。
2　暗褐色土層
3　混貝土層
4　純貝層

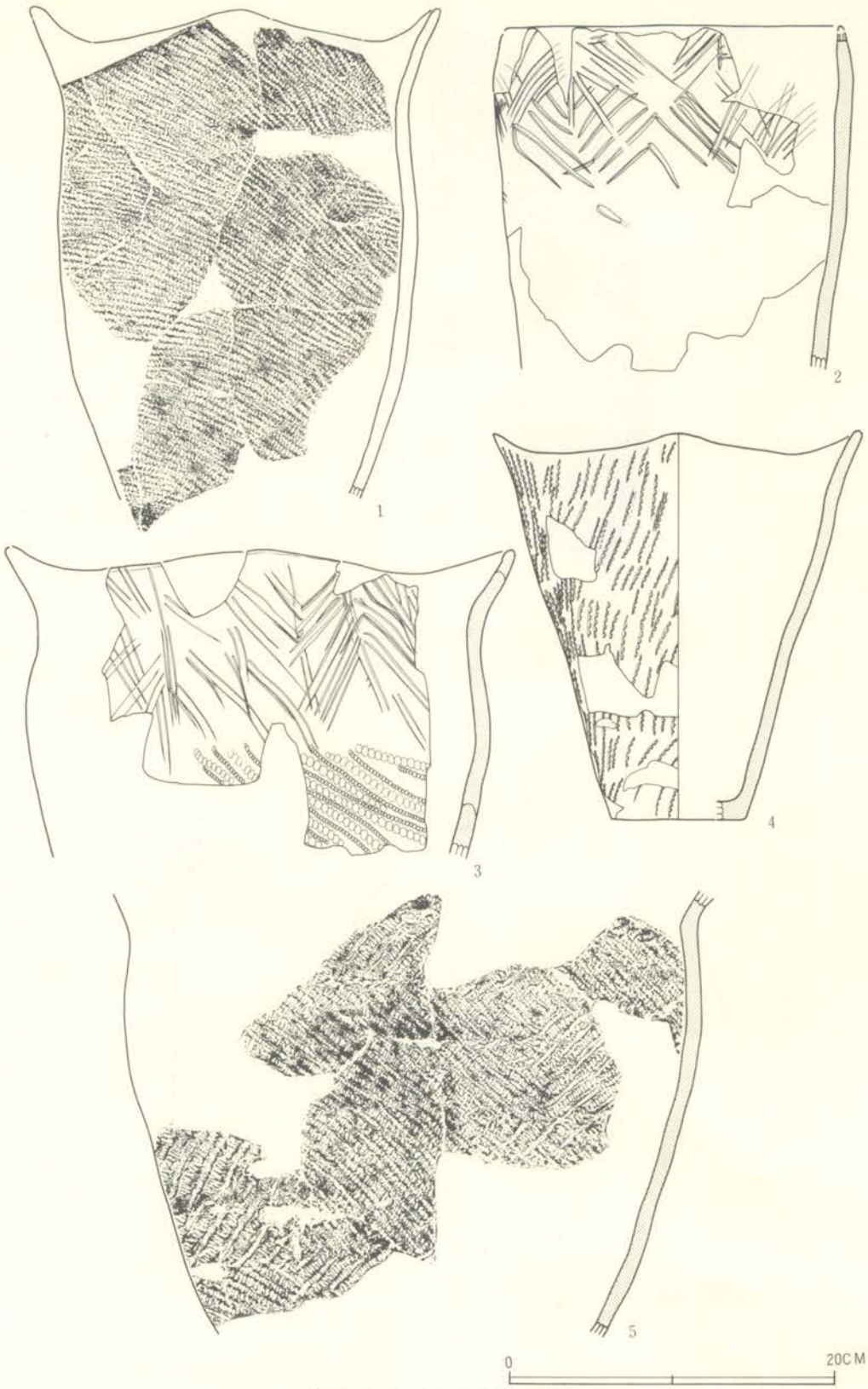
位　置　23グリッド北部。026 住居跡に近接する。

形　状　長軸4.1m，短軸3.8m，壁高30cmを測る円に近い楕円形プランを呈する。南西隅は 040 住居（歴史時代）によって切られている。炉はほぼ中央に位置する。炉の南西部はやや凹んでいる。

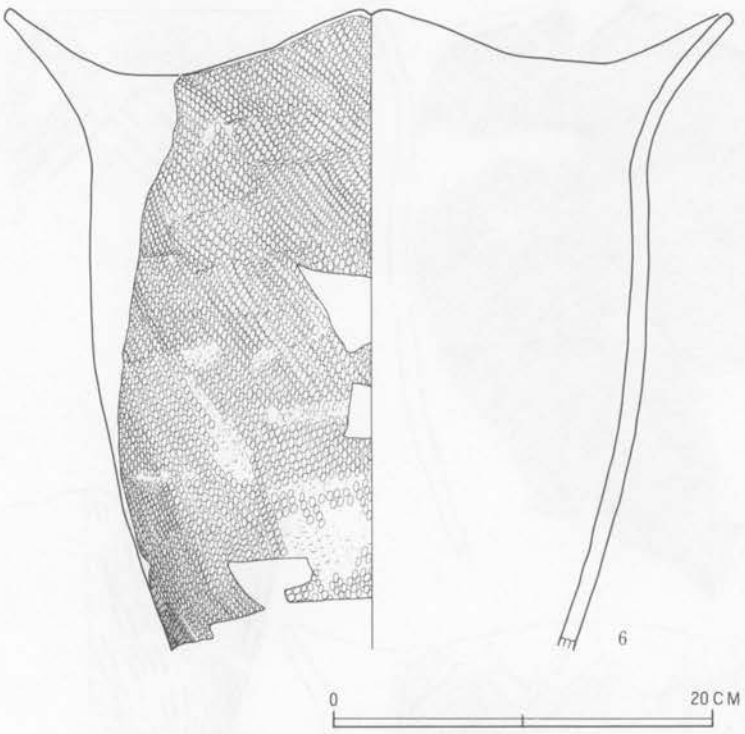
貝　層　床面より多量の貝を検出している。

遺　物　土器の総重量は約 7.3kgでその時期は，黒浜式～諸磯ａ・浮島式に及んでいる。各期の比率は黒浜式が一番多く57.5%，次いで諸磯ａ式42.1%，浮島式 0.4%であった。石器は石皿１点，磨石１点を出土している。

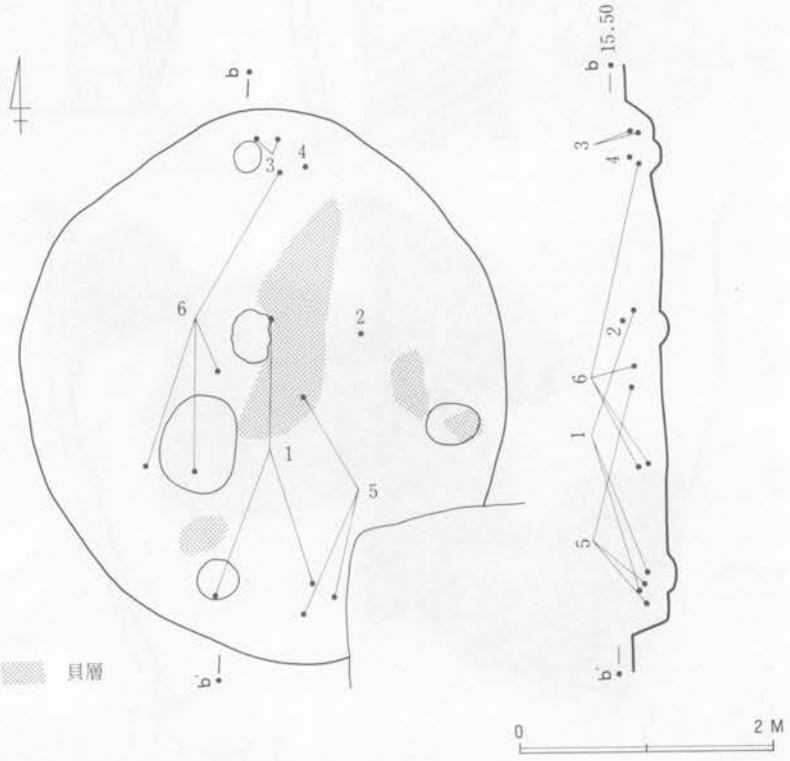
時　期　黒浜期に比定される。



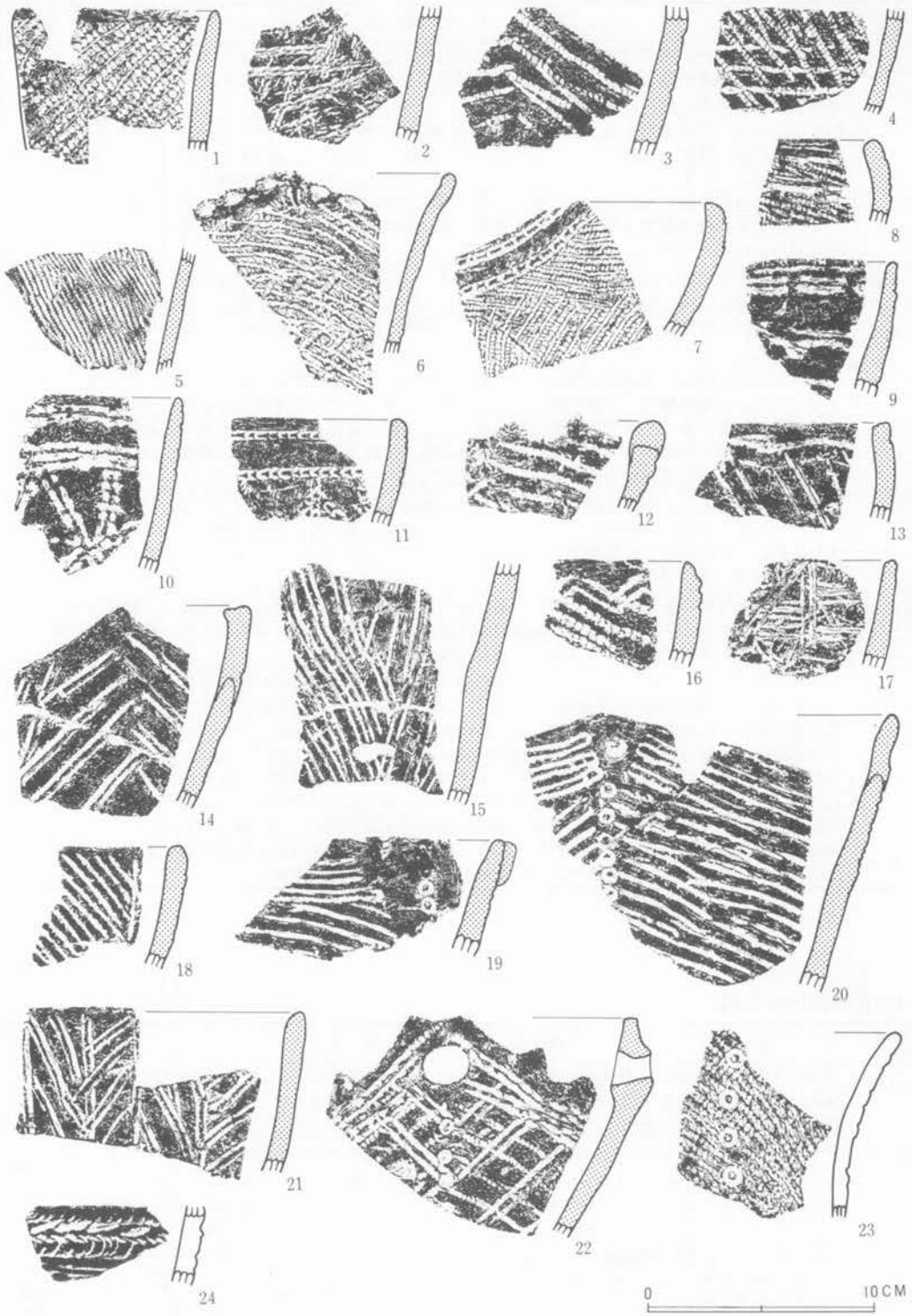
第36図　118 住居跡出土土器



第37図　118 住居跡出土土器



第38図　118 住居跡遺物出土状況



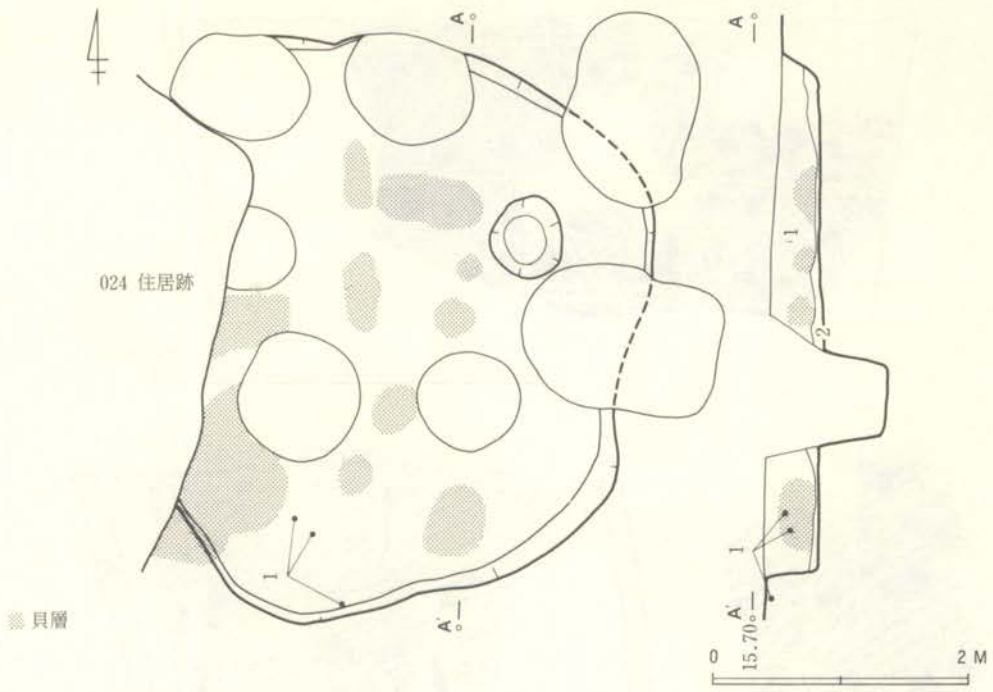
第39図　118 住居跡出土土器

118住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第36図 1	口縁部を外反させ，頸部にくびれを持ち，以下緩やかにふくらんで底部まですぼまる深鉢形土器。胎土に繊維の混入はない。口縁は小波状を呈し，4単位で廻らせている。全面に原体RLの単節の縄文を施す。遺存度⅔	20— 1
2	円筒形状を呈する深鉢形土器。文様帯としての意識的な区画はないが2分されるものである。胴上半部には半截竹管工具による平行沈線を，下段より山形（「へ」の字）に施し，その後上段を廻らせ，ひし形のモチーフを作り出している。そして，ひし形の中央部には1本ないし2本の平行沈線を縦に施している。胴下半部は器面全体が砂質で荒れているため不鮮明であるが，附加条の縄文を施しているものと思われる。また器内面には，これも不確定であるが，赤色塗料の痕跡らしきものが見られる。遺存度½	20— 3
3	口縁部は4単位で廻る緩やかな波状を呈し，口縁より直線的にすぼまる深鉢形土器。内面の整形は口縁付近で横方向，以下は縦方向に磨かれている。文様は器面全体にアナダラ属の貝殻腹縁の圧痕を縦位に施している。口縁部付近には補修孔を残す。遺存度ほぼ完形であるが底部を欠く。	20— 5
4	1同様の器形を呈する深鉢形土器破片。器面の状態や胎土は2に類以する。文様帯も2同様2分される。上部文様帯は半截竹管工具を用い縦位に施した平行沈線間を矢羽状に平行沈線で満たしている。よく肋骨文の祖形と言われている文様である。下部はやや太めの無節Lに細い無節RをR方向に附加したと思われる原体を用いた縄文を施している。裏面には2同様赤色塗料と思われる痕跡が全面に見られる。遺存度¼	20— 4
5	頸部にくびれをもち，胴部を緩やかに張り出す深鉢形土器。器形は恐らく1・4と同類のものと思われる。器内面は非常によく磨かれている。地文の縄文は，ゆるく撚り合わされた原体Lの単節が附加条のような条間を表出しているものと思われ，その原体をひし形状の異方向に施文している。遺存度½弱	20— 6
第37図 6	1・4・5と同様の器形を呈するが，一番口縁の波状が鋭く波状頂部には竹管による縦位の押圧が施されている。1同様胎土に繊維の混入はなく，2・4同様に器内面に赤色塗料の痕跡がうかがわれる。地文には原体RLの縄文を施す。遺存度⅔	20— 2
第39図 1～24	1～4・6・7・12・19・20・22は附加条の縄文を施す。1は単節に0段の原体を2は2本の無節を，7は単節に無節の原体を附加させたものである。6は波状口縁部破片で，口唇部には指頭などによる圧痕を施している。8～10・13～22は竹管工具を用いた沈線・平行沈線を施す。8・9は口縁に沿って平行沈線を破線状に施している。7・11は有節平行沈線，10も同様なものであるが節のつかない工具を用いている。19・20は円形竹管刺突文を施す同一個体と思われる。21は第36図3と同じモチーフを表現している。22は波状口縁部破片で口唇部には瘤状の貼付を行なっている。胴部には半截竹管による平行沈線や撚糸文等を施しており，19・20同様に縦位に円形竹管刺突文を有する。1～22は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。23は円形竹管刺突文を施す諸磯a式，24は変形爪形文を施す浮島式である。	19

119住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第41図 1	円筒形を呈する深鉢形土器口縁部破片。口唇部は小波状を呈する。地文には木目状撚糸文を施す。その上から半截竹管による平行沈線によって一定の間隔をもった沈線による横位の区画を行ない，下段の区画内には，さらに山形状に廻らせている。	21— 1
2～8	2～6は無節，7・8は単節の縄文を施す，2・3は縄文を施文する際の粘土かすを残す。	
第42図 1～22	1～3・6は地文に縄文をもち，1～3は円形竹管刺突文を施す。4は口唇直下に隆帯を廻らせ，隆帯の両側には半截竹管による抉りを破線状に施している。胴部には網目状の縄文を施す。5は列点状の刺突と結節平行沈線を互々に施している。7～9・12～16は半截竹管を用いた平行沈線を施す。15・16は緩やかなコンパス文を施す。10・11は格子状に沈線を廻らすもので，10は縄文の施文によって文様帯を2分している。第41図及び1～16は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。17はハマグリ，18はアナダラ属の連線波状貝殻腹縁文を施す浮島式である。21は凹石，22は石皿である。	22



1　暗褐色土層
2　暗黄褐色土層

第40図　119 住居跡

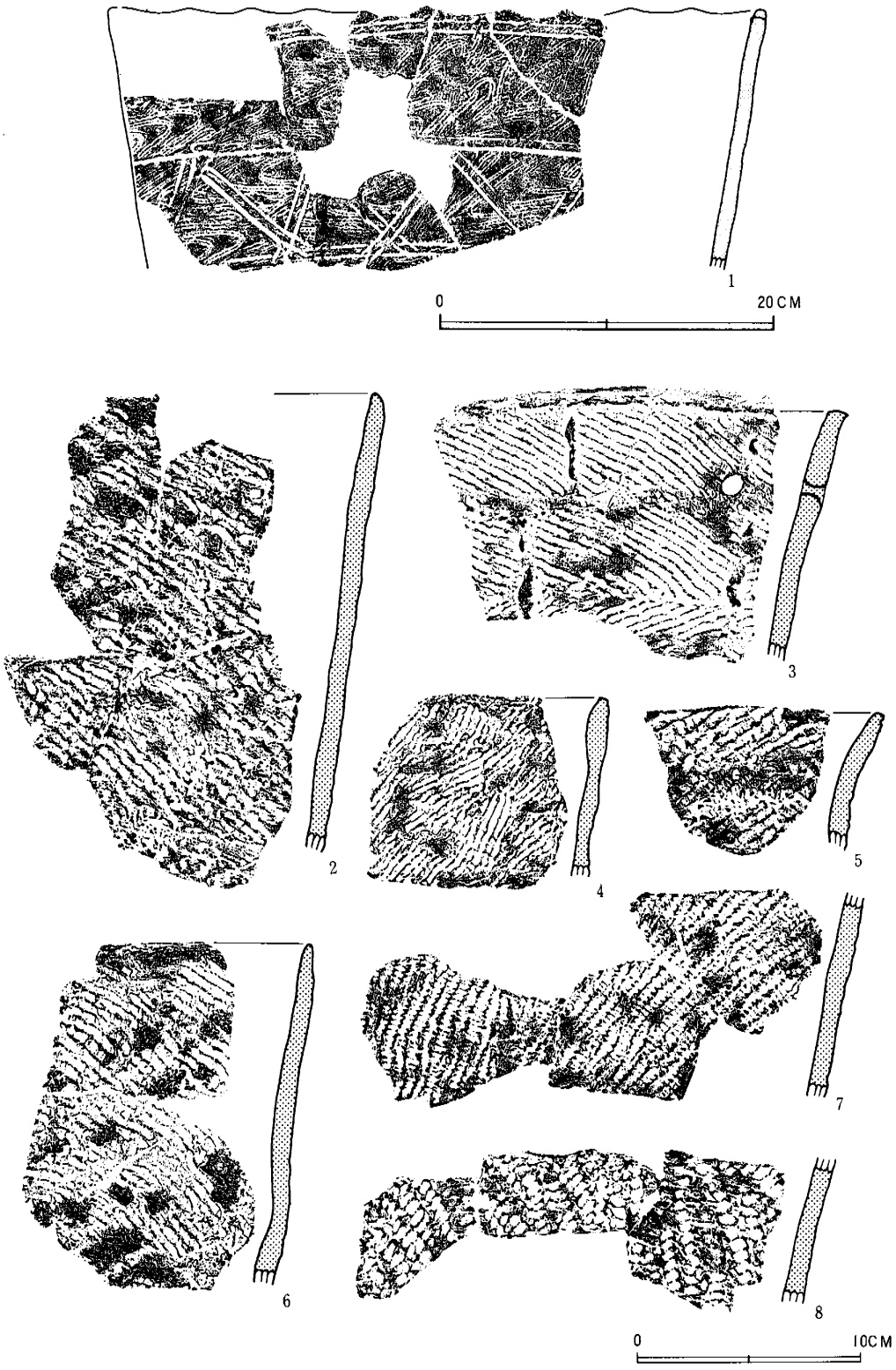
位　置　24グリッド北西部。031 住居跡に近接する。

形　状　長軸4.5m，短軸4.2m，壁高40cmを測る不整形プランを呈する。西側は 024住居(歴史時代) によって切られており，他に全面にわたって10号建物跡と重複している。炉は検出されなかった。

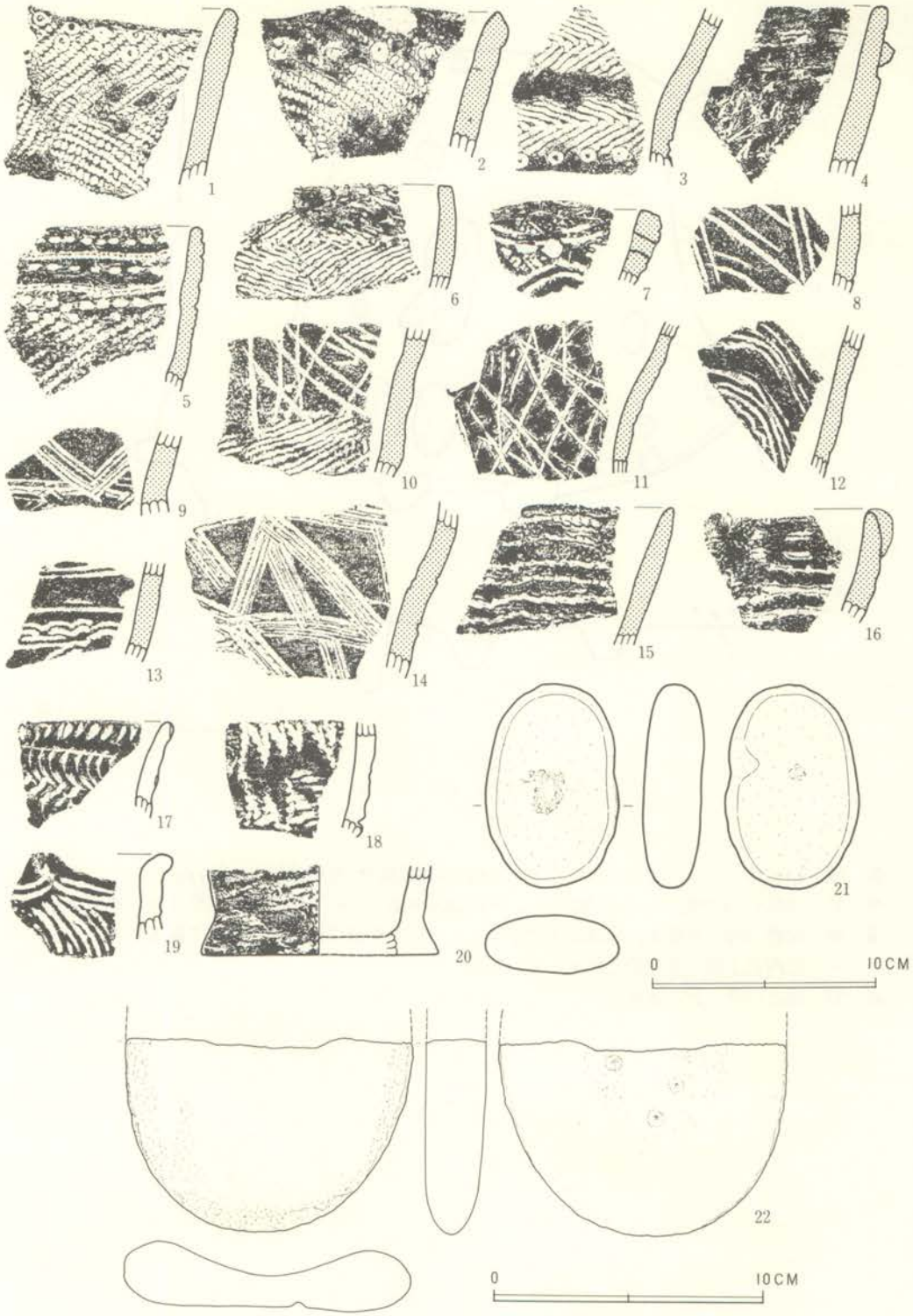
貝　層　南西寄りに部分的に検出された。

遺　物　土器の総重量は約 2.9kgで，その時期は黒浜式～浮島・諸磯b式に及んでいる。各期の比率は黒浜式が一番多く95.3%を占め，浮島式1.6%，諸磯ｂ式0.7%，その他2.3%であった。石器は打製石斧１点，磨石１点，石皿１点を出土している。

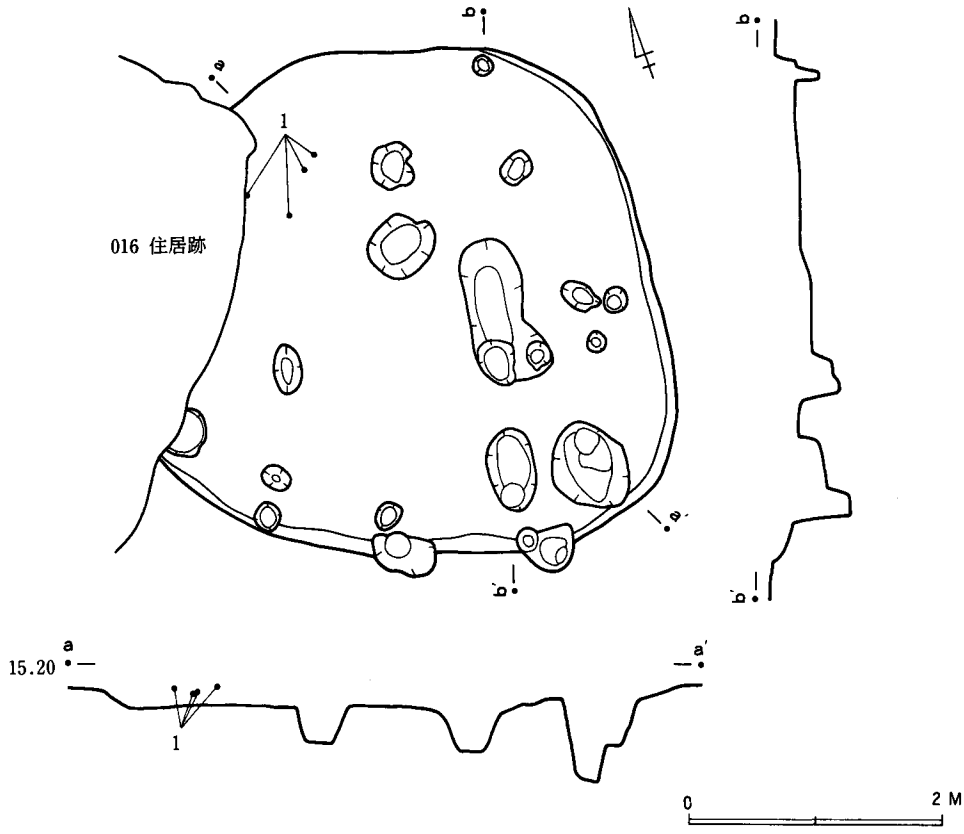
時　期　黒浜期に比定される。



第41図　119 住居跡出土土器

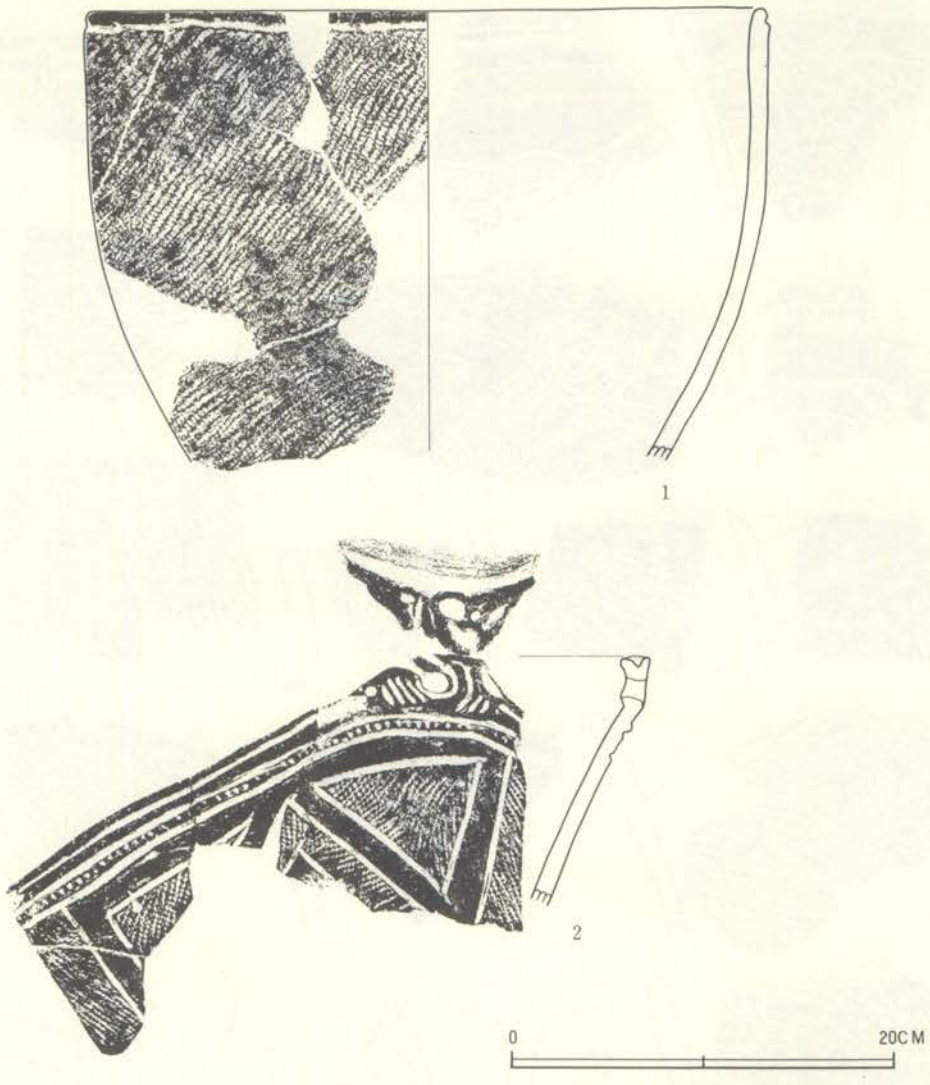


第42図　119 住居跡出土遺物

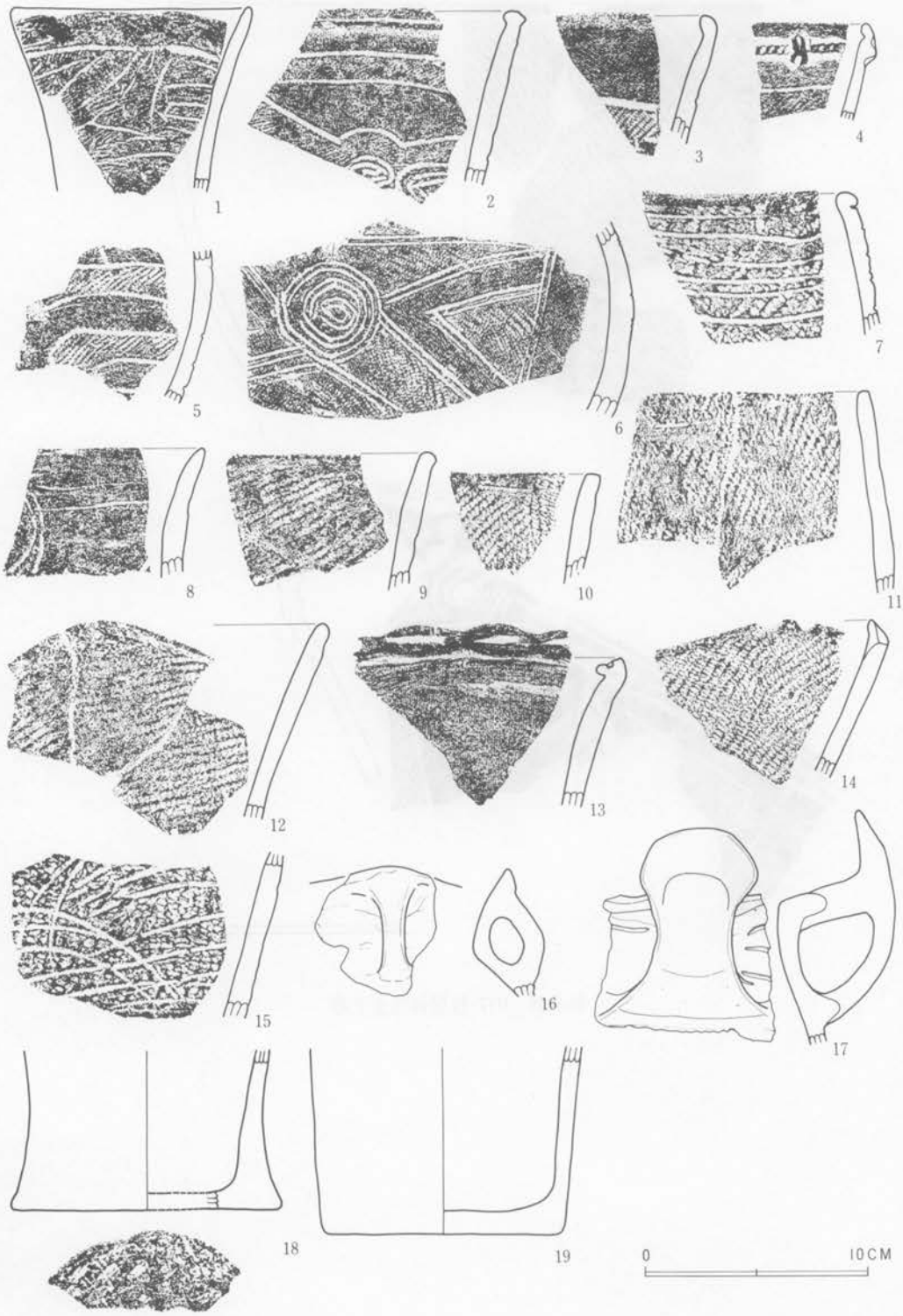


第43図　017 住居跡

位　置　14・15グリッド北部にまたがり，西側を016住居跡(歴史時代)に切られている。
形　状　長軸4.1m(現存幅)，短軸3.9m，壁高20cmを測るやや不整の隅丸方形プランを呈する。
遺　物　総数 104点を数え，ほぼ北半に集中している。黒浜式の土器片も若干混入しているが堀之内式土器を主体的に出土している。
時　期　堀之内期に比定される。



第44図　017 住居跡出土土器



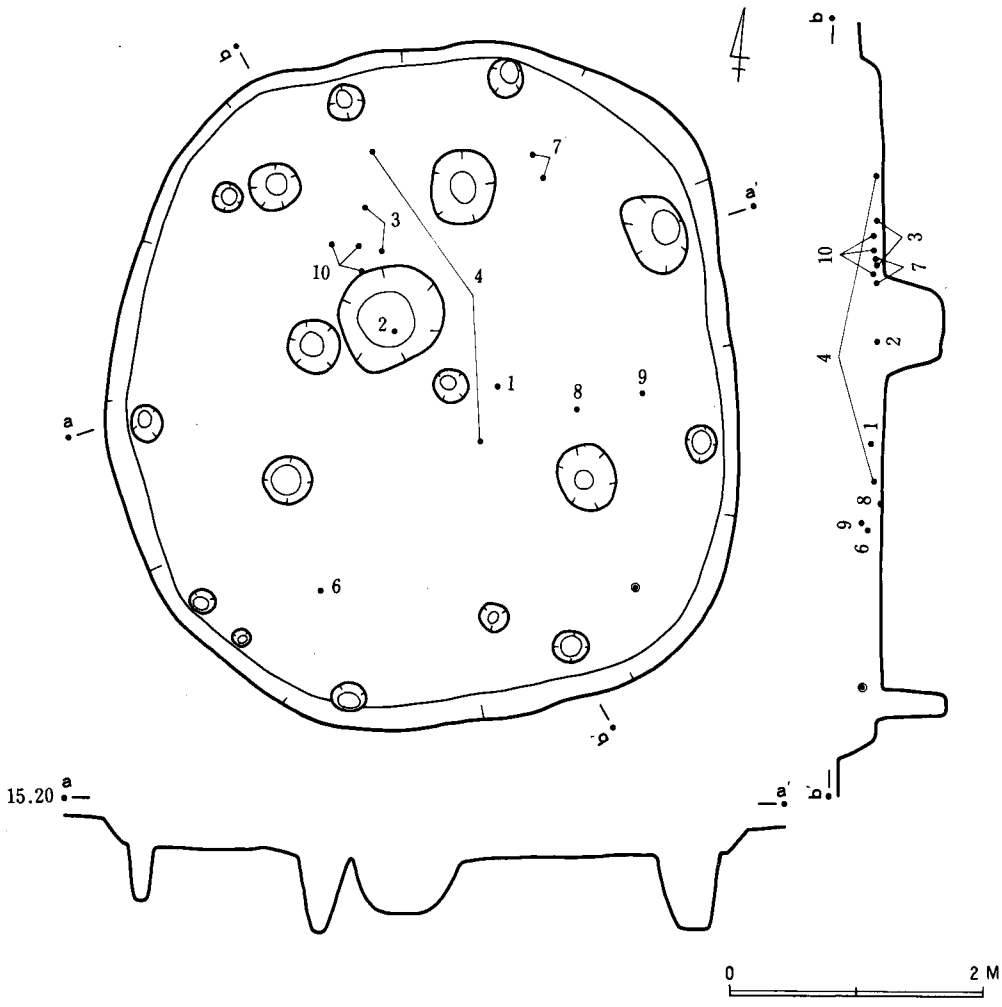
第45図　017 住居跡出土土器

017住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第44図1	口縁部をやや内傾させ胴下半よりすぼまる深鉢形土器。口唇直下に1条の沈線を廻らせ，口辺に無文帯を作り，胴部には原体ＬＲの縄文を施している。遺存度½	
2	口縁を朝顔形に開く深鉢形土器。口縁は緩やかな波状を呈し，波状頂部には有孔突起を施す。口唇直下の器内外面には1条の沈線を施す。口辺はさらに横位の隆帯により区画され，隆帯上には刻みを施す。胴部文様帯は磨消縄文の技法によって三角形のモチーフを表現している。	
第45図1～19	1は口縁を外反させる小型の深鉢形土器である。地文には無節の細縄文が施してあり，文様は横帯区画とその内に描かれる沈線によって表現されている。部分的に磨消されているものと思われる。器内面の口唇直下には一条の太い沈線を廻らせる。2～6は沈線と縄文によって文様を構成するもので区画によって無文帯を有する。7～12・14・15は粗製土器で7・15は縄文と沈線，8は沈線，他は地文に縄文を有する。13は無文の口縁部破片で，器内面口唇部にナツメ形の粘土紐を貼り付けている。	23

034住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第47図1	口縁より底部まで緩やかにすぼまる深鉢形土器。口縁には小波状を3単位で施し，波状部には孔があけられている。口唇下には一条の太い沈線を廻らせている。地文には原体ＬＲの縄文を施す。遺存度ほぼ完形。	25－1
2	1同様の器形を呈し，文様の割付から同様に3単位の小波状を有するものと思われる。文様は半截竹管による平行沈線によって縦区画を行ない，区画内にひし形や「ハ」の字状のモチーフを描いている。遺存度⅓	
3	口縁を内傾させ胴部をふくらませる鉢形土器。口縁部には4単位で突起を施す。文様は太い沈線によって口唇下と胴部縦位に施されている。遺存度⅔	25－3
4	口縁より直線的にすぼまる深鉢形土器。地文には複節の縄文を施しており，波状部より太い沈線を縦位に施している。遺存度底部完形⅗。	25－2
5	緩やかな波状口縁を有する小形の深鉢形土器。胴部には弧状の沈線を縦方向に満たしている。遺存度½弱	
6	円筒形を呈する深鉢形土器。口唇直下に無文帯を作り，胴部には無節の縄文を施している。遺存度⅔	
第48図7	口縁を内側に屈曲させ，4単位で波状を廻らせる深鉢形土器。波状頂部はさらに内傾し大型の突起を有する。文様は口唇直下の狭い屈曲部にのみ施されている。遺存度⅓	25－4 25－6
8	口縁より直線的にすぼまる深鉢形土器。胴上半部には無節の縄文が施されている。遺存度ほぼ完形	25－5
第49図1～14	1～9・11は地文に縄文を施し，太い棒状工具によって文様を構成するもので第7群Ａ類に比定される。1～5は口唇直下に1条の沈線を廻らせる。7は口辺を無文帯にしている。12～14第50図1～3は地文に縄文を施し，半截竹管による平行沈線によって文様を構成する第7群Ｂ類に比定される。	26
第50図1～14	6・7は口辺に紐線文を廻らせるもので，7はさらに横方向の刻みを施している。8は磨消縄文の技法を用いている。8は口唇直下に指頭状の圧痕を施している粗製土器である。13は粘土の輪積段上に刻みを施しているもので，粘土間の接合を助けるための手法と思われる。14は人面を表現したもので頭部は扁平で渦巻状の沈線を施している。土偶の頭部と思われるが把手の可能性もある。	26
第51図1～10	1・3は打製石斧，2・4は磨製石斧である。2は小型で剝離面をまだ残している。5・6は凹石で表面は磨られており側面は敲打痕を残している。7・8は側面に敲打痕を残し，9は全面を敲打している。10は石皿の破片である。	



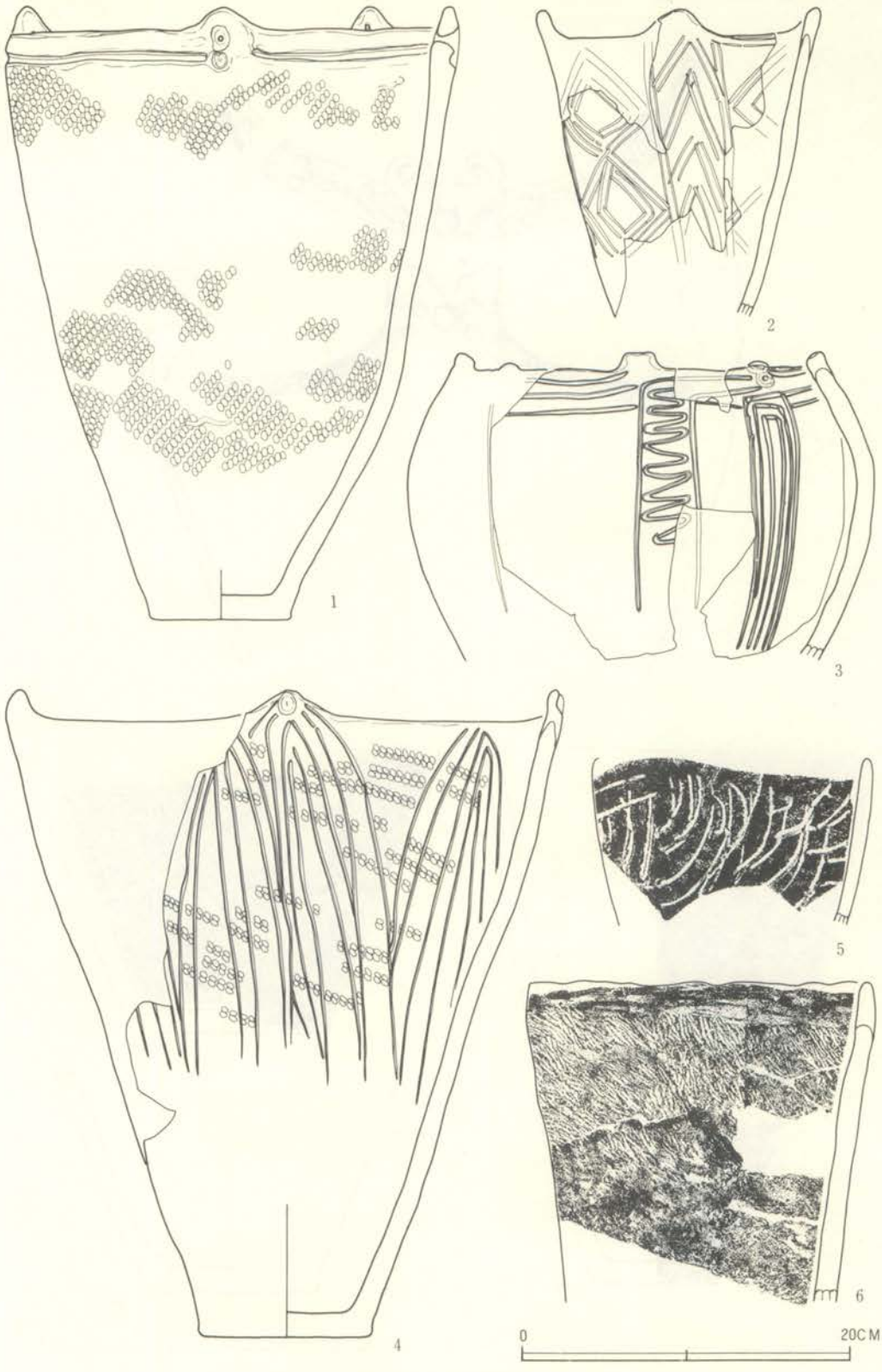
第46図　034 住居跡

位　置　21グリッド西側中央部。

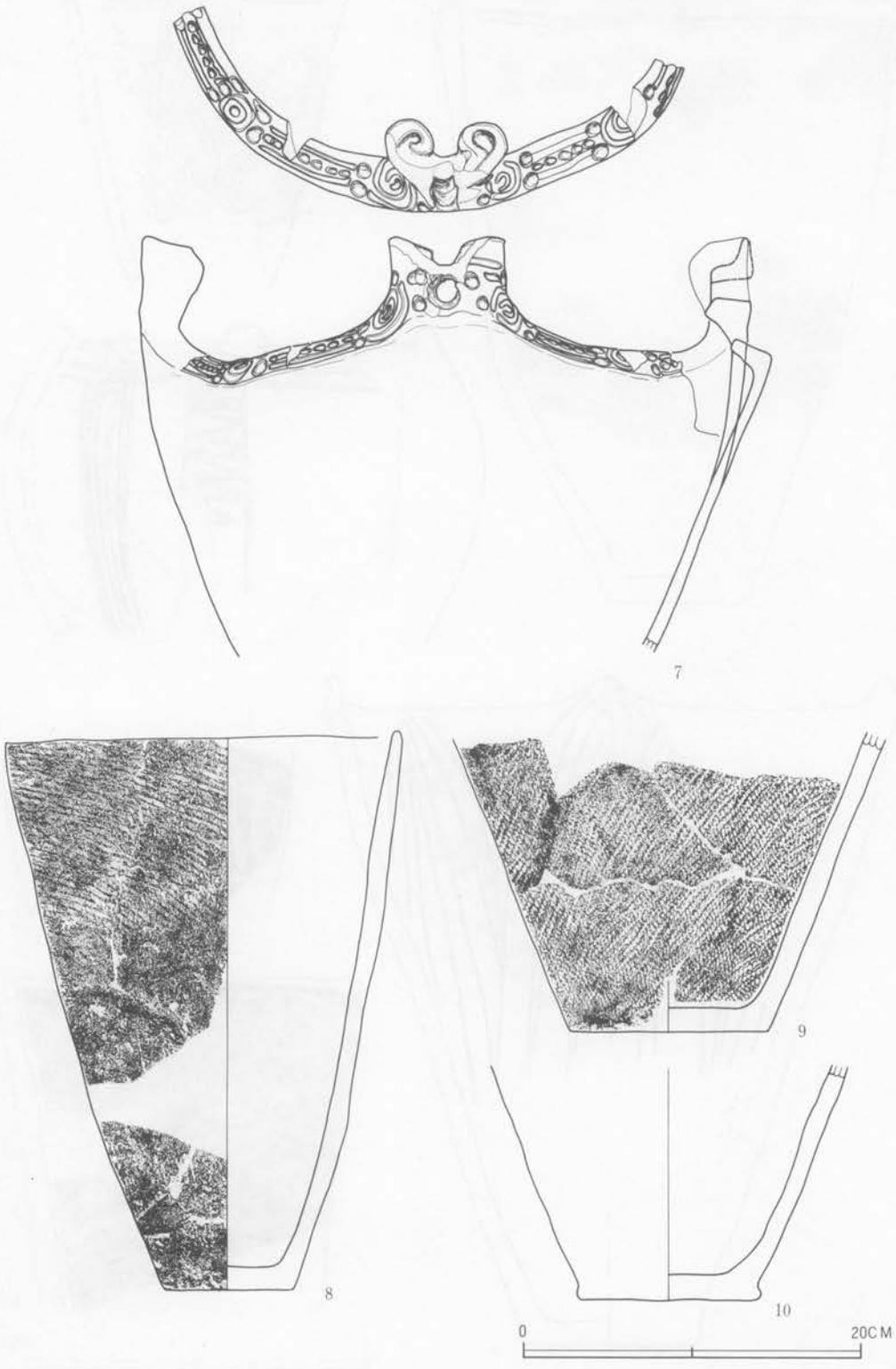
形　状　長軸5.3m，短軸５m，壁高30cmを測る隅丸方形状のプランを呈する。炉は直径約80cm，深さ50cmを測り，ほぼ中央に位置している。

遺　物　総重量約113.9kgで堀之内式土器が主体を占めている。石器は打製石斧３点，磨製石斧３点，凹石５点，磨石・敲石10点，石皿４点を出土している。

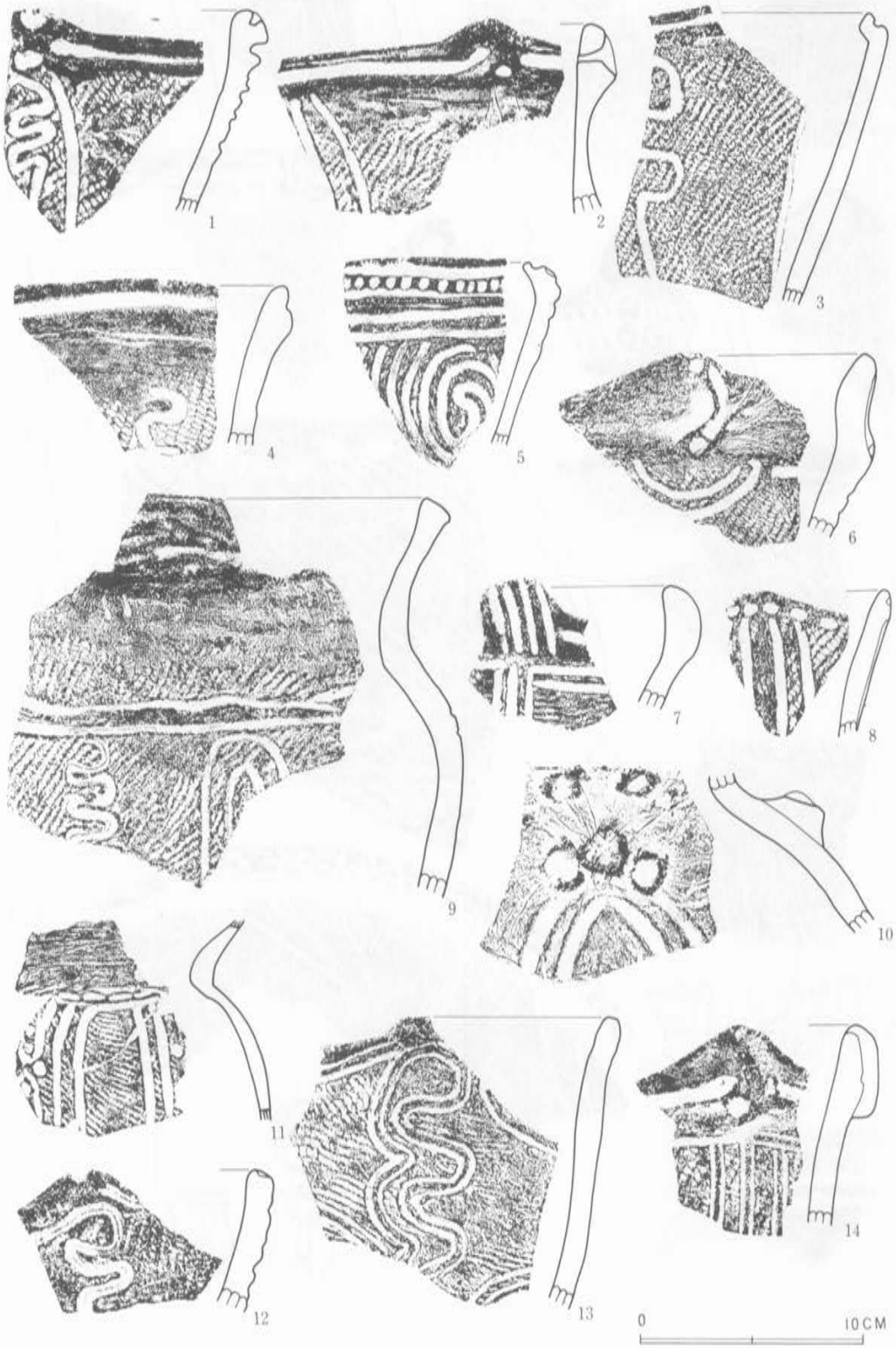
時　期　堀之内期に比定される。



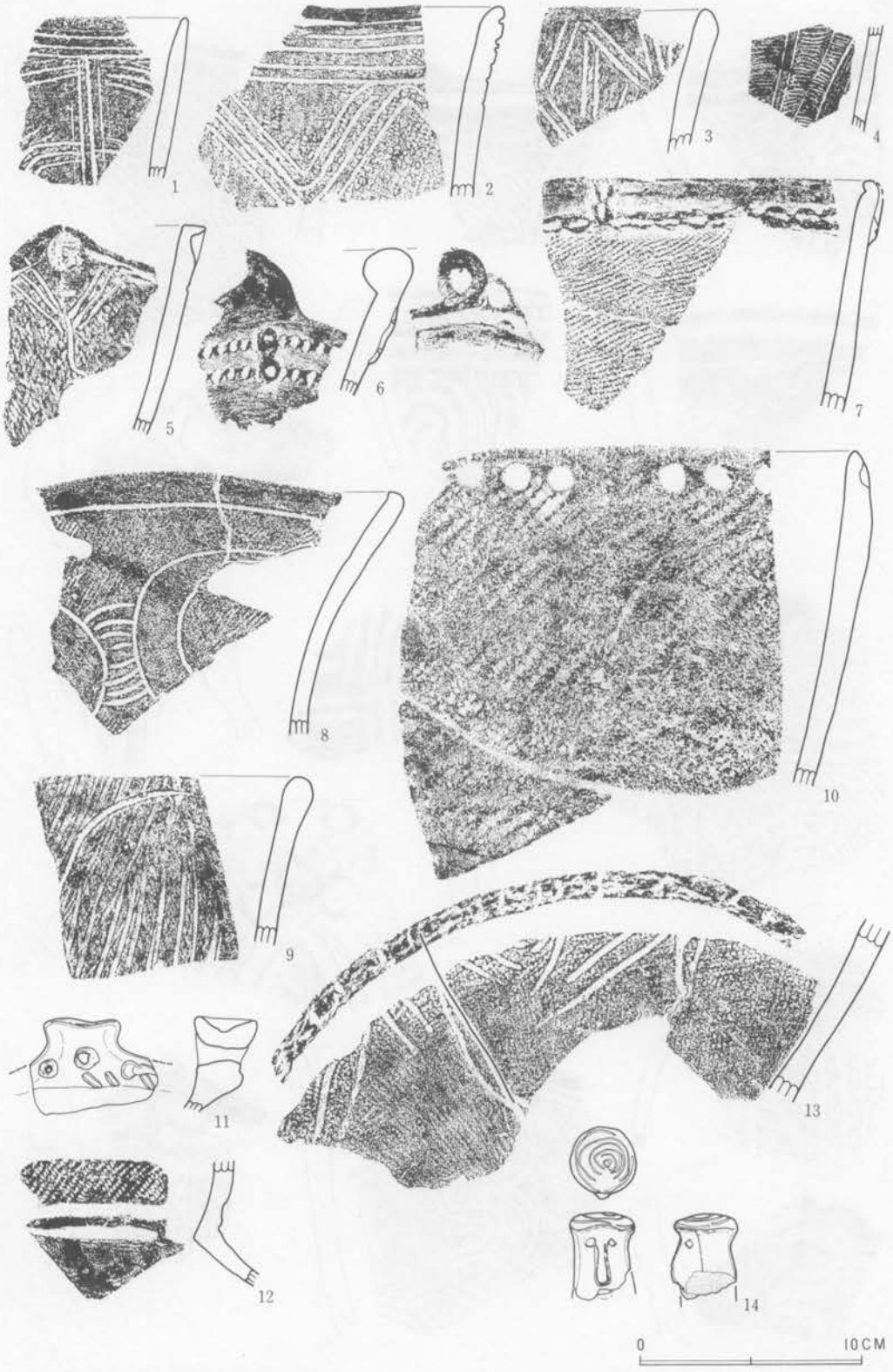
第47図　034 住居跡出土土器



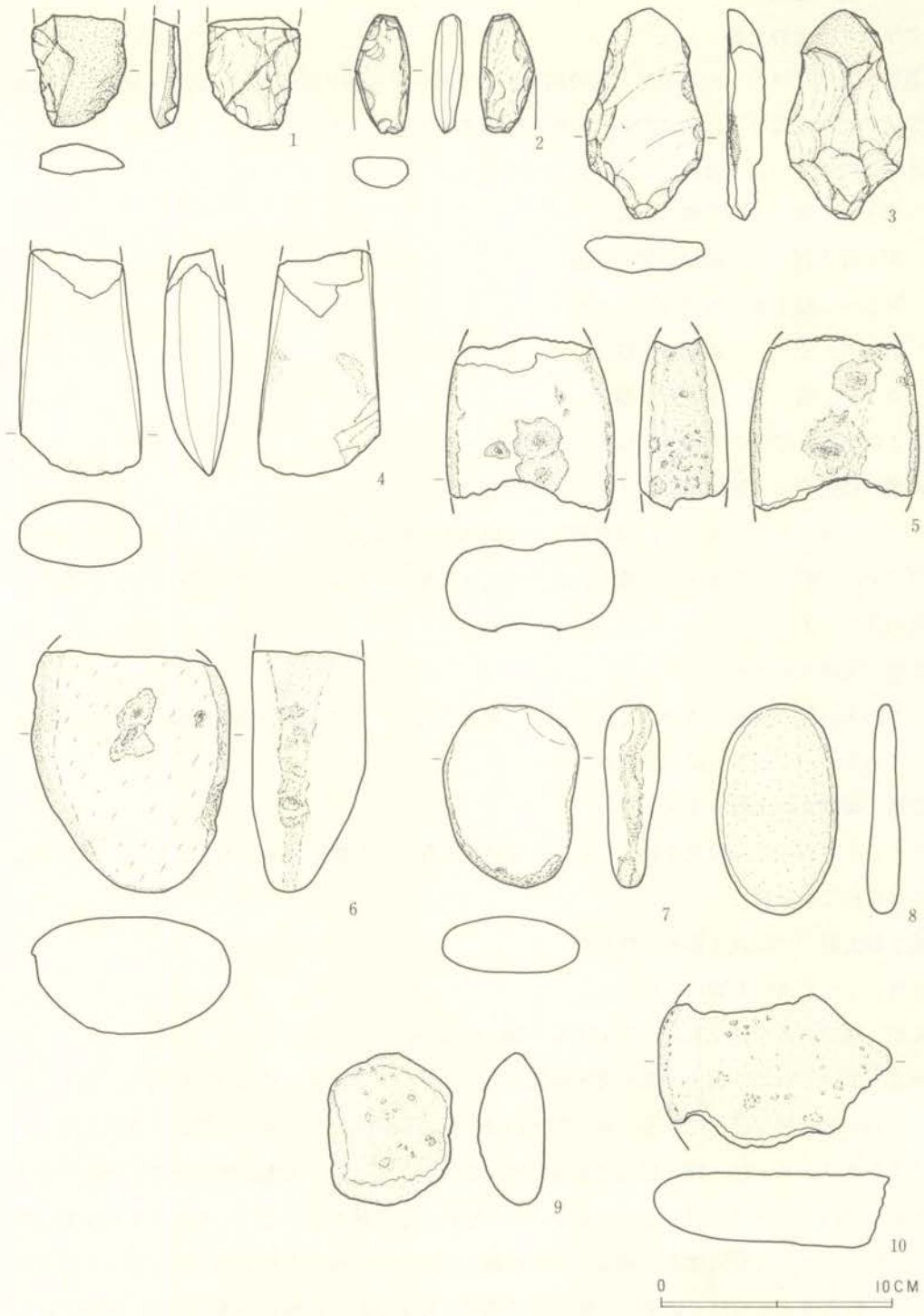
第48図　034 住居跡出土土器



第49図　034 住居跡出土土器



第50図　034 住居跡出土遺物



第51図　034 住居跡出土遺物

(2)その他の遺物

グリッド出土の土器

遺物の時期はほとんどが遺構と同時期のものであり，前期の黒浜式・浮島式・諸磯式，後期の堀之内式を主体とし，他に微量の早期の土器を混入していた。

各群の時期については以下に示すとおりである。

第1群土器　　早期の土器
第2群土器　　前期中葉の土器
第3～5群土器　前期後半の土器
第6群土器　　中期の土器
第7群土器　　後期の土器

第1群土器　早期の土器を一括した。

A類　撚糸文の土器（第52図1・2，図版29）

1は口唇部をやや外反させ，口唇直下より原体Lの撚糸文を施している。2は口唇部をやや肥厚させ，口唇には原体圧痕を施し，以下縄文を施文している。さらに口唇直下には指頭状の圧痕が施してある。

B類　沈線文の土器（3）

3本の太い沈線を斜行させ，それに対して垂直方向にアナダラ属の貝殻腹縁による刺突文を施している。田戸下層式に比定される。

C類　条痕文の土器（4・5）

4・5とも表面に条痕文を施している。5は口唇部に細い幅の圧痕を有し，口辺には補修孔があけられている。

第2群土器　黒浜式土器を一括した。

文様によってA～L類に分類した。

A類　縄文のみを施すもの（第52図6～20，図版29）

無節・単節・附加条縄文・撚糸文・原体圧痕文などがある。6～15は口縁部破片，16・17は底部・18～20は胴部破片である。6・13・15は単節の縄文を施す。6は口唇部に棒状工具による圧痕を施す。8・10・18・19は附加条の縄文を施し，8・18は1本，他は2本の無節の縄文を附加している。8は口唇部をやや肥厚させ，瘤状の小波状を廻らせている。7・17・20は撚糸文を施す。撚糸文か附加条の縄文かはその軸となるものが棒状工具か縄文かによって区別されるが，附加条のものはその条間に軸となる縄文が施文されない場合が多いため，判別しにくいようである。ただ，その条間が均等か不均等かによって判別するならば附加条の縄文の方が多いものと思われる。

B類　指頭状の円形圧痕を施すもの（第52図21～24）

地文に縄文を持ち，波状口縁を有するものに多く見られるようである。103住居跡より出土している第30図の土器などがその代表的なものであろう。円形圧痕はすべて縦位に施されており，21はそれを中心として両側に半截竹管工具による平行沈線を横走させている。24は口唇直下に磨消による無文帯を作り出している。

C類　口唇直下に半截竹管工具による連続刺突文を施すもの（第53図1～5）

すべて左から右方向へ施文されている。1・2は無節，3・4は単節の縄文，5は撚糸文を地文としている。5は2列の連続刺突文間に高い隆帯を施している。

D類　コンパス文を施すもの（6～13，第53図17・18）

6・8・11は波状口縁である。6は地文に無節の縄文を施しており，補修孔を有する。11は瘤状の小波状を廻らせている。12は横に区画された沈線間に1ないし2列のコンパス文を施している。13はコンパス文に用いられた半截竹管による斜行沈線を胴部に施している。

E類　地文を持たず1本の沈線で文様を施すもの（第53図17～26，第54図1・3～8，図版30）

沈線文は3種類に分かれる。

E－1　格子目状に施すもの（17～25）

口縁部はすべて平縁を呈する。17は胴下半部に縄文が施されている。

E－2　交差せずに縦・斜方向に施すもの（第54図1・3）

1は口唇直下に1条の沈線を廻らせ，口唇の内側に縦方向の刻みを施している。

E－3　縦に区画した沈線間に斜線を施すことによって肋骨文状（葉脈状）のモチーフを施すもの（4～8）

すべてが縦の沈線を施した後に斜線を施している。

F類　地文を持たず半截竹管による平行沈線を施すもの（第54図9～20，第55図1～6・10～12）

文様によって3種類に分かれる。

F－1　E－3同様のモチーフを描くもの（9～14）

9・10は緩やかな波状口縁を呈する。10は葉脈状ではなく，すべて同一方向の斜線で区画内を満たしている。13は縦と横の区画がなされており，区画した平行沈線上には半截竹管による連続刺突文を施している。

F－2　連続刺突文をやや長めに施したもの（第55図1～5）

1は口唇下に一段高い輪積段を残し，口辺には連続した破線状平行沈線を満たしており，胴部には斜行する沈線文が施されている。2～4も口唇直下に破線の文様帯を有し，胴部にも縦の破線文を施している。5は地文に斜行する沈線を有する。

F－3　その他の平行沈線文を有するもの（第54図15～20，第55図10・12）

15は櫛歯状工具による肋骨状文を施している。16は文様帯が刺突文によって横位に区画されており，区画内には2段に渡る縦の平行沈線が施されている。上段の平行沈線は施文具を立てて抉るように施してあり，下段は寝かせて平行の沈線だけが目立つように施文している。17は先の尖るような波状口縁を呈し，口唇部は平坦に整形されている。波状頂部下には高い瘤状の突起を有し，その下には注口のような穴があけられている。18・第55図10も先の鋭角な波状口縁を呈し，頂部は瘤状にふくらんでいる。10は胴部に波状沈線を施している。

G類　竹管による刺突文を施すもの（第55図6～9）

6は半截竹管による浅い連続刺突を行なっている。8は竹管を垂直方向に刺突している。

H類　貝殻を用いて施文を行なうもの（第55図14・16・17）

14は波状の貝殻条痕文を施している。16・17は貝殻腹縁による圧痕を施すもので16は上部文様帯に縄文を，17は左側に貝殻背圧痕を分離して施文している。

I類　地文に縄文を持ち，その上に半截竹管による平行沈線文を施すもの（第56図1～14，図版31）

口唇直下に1列ないし2列の平行沈線を施すものが多い。1は緩やかな波状口縁を呈し，波状間の口唇部には瘤状の突起物を施している。口唇部には竹管背面による圧痕が連続して施されている。2は注口状の突起を口唇下に施している。5は口唇部につまみ状の突起物を有する。10は波状頂部より縦に区画する平行沈線を施し，横走する沈線と交わる点に指頭状の円形圧痕を施している。11は口唇部に緩やかな指頭状の圧痕を施す。12は鋭角な波状を呈する口縁部で，頂部より縦に隆帯を貼り付け，途中より口縁に沿って廻らせている。隆帯上には縄文を施してある。13・14は縦と斜めの平行沈線を組合わせている。E－3類と同じモチーフである。

J類　地文に縄文を持ち，有節平行沈線を施すもの（第56図19～21・第57図1～4・6）

3・4・6は有節平行沈線間の縄文を磨消す技法を用いている。

K類　円形竹管刺突文を施すもの（第57図7～22・第58図1・6・7，図版31・32）

地文の有無と平行沈線・有節平行沈線との組合わせによっていくつかに分けられる。

K－1　地文に縄文を持ち，半截竹管による平行沈線を施したもの（7・11～16）

いずれの場合も円形竹管刺突文は縦位に施されており，15だけが縦に区画した沈線上に配置されている。竹管工具は細いものを使用している。16は条線を施している。

K－2　地文に縄文を持ち，数列の平行沈線・有節平行沈線間に無文帯を有するもの（18・20・21）

18・20は磨消縄文の技法を用いている。

K－3　その他のもの（19・22・第58図1・6・7）

19は口唇部に瘤状の突起を施してあり，地文にはアナダラ属の貝殻腹縁による圧痕文を縦位に施している。22・7は平行沈線によって肋骨状に施された縦の沈線上に円形竹管刺突文

を施している。1は口唇部に竹管背面を用いた圧痕を施し，細い2列の竹管刺突文によって口辺に無文帯を作り出している。6は角張った口縁を呈し，角部には刺突文を施している。

L類　地文を持たず，有節平行沈線を施すもの（第58図2・4・5）

2は口唇断面が三角形状を呈し，その頂部は深く三角形に抉られている。胴部には3列の有節平行沈線が施してあり，器面内外ともに丹が塗られている。4は波状口縁を呈し，口縁に沿って2列，波状頂部より縦に2列の有節平行沈線を施し，他に縦の平行沈線を施している。5は肋骨文状のモチーフを施文している。

第3群土器　浮島式土器を一括した。

文様によってA～H類に分類した。

A類　口縁部に数段の輪積段を残すもの（第58図8・9・第59図1～6）

A－1　口縁部を輪積段だけで構成するもの（8・9）

8は胴部にアナダラ属の波状貝殻腹縁文を施している。

A－2　口辺に半截竹管による縦方向の平行沈線を施すもの（第59図1～6）

1は胴部にハマグリ等による波状貝殻腹縁文を，3・6は横位の平行沈線を施している。

4・5は輪積の接合部に竹管による縦位の圧痕を施している。

B類　口縁部に指頭圧痕を施すもの（第58図10～21）

B－1　輪積段の接合部に施すもの（10～16）

16は口唇直下に竹管工具による縦の刻みを施している。

B－2　輪積段を残さない口縁に施すもの（18～21）

17・19・21は右から左へ指頭圧痕を施しており，口唇部には刻みを有する。21は地文に斜めの細い沈線を施している。18・20は真上から圧痕を施しており，18は胴部に変形爪形文，20は半截竹管による平行沈線を有する。

C類　ハマグリやアナダラ属等の波状貝殻腹縁文を施す口縁部破片（第59図7～24・第60図1～4・6・7，図版32・33）

C－1　平縁で口唇部に刻みを施さないもの（第59図7～11・18・21）

7・8はハマグリ等，他はアナダラ属の貝殻腹縁文を施している。

C－2　平縁で口唇部に竹管等による刻みを有するもの（12～21・24）

11・12・19は補修孔を有する。全てアナダラ属の腹縁文を施している。口唇部に施される刻みは(1)棒状工具による圧痕（12～14・16・17・19・20）と(2)半截竹管による刺突（15・24）とに分かれる。16・21は貝殻腹縁を引きずって施文している。

C－3　波状口縁で口唇部に刻みを施すもの（22・23）

C－4　口唇下に縦位の沈線を施すもの（第60図1～4・6・7）

全てアナダラ属の腹縁文を施している。2・4は半截竹管を用いている。

D類　いわゆる三角文を施すもの（第60図８～10）

口唇直下に細い半截竹管等を用いて縦方向の刻みを施している。

E類　変形爪形文を施す口縁部破片（第60図11～27・第61図１～６，図版33・34）

口唇及び口唇直下に縦方向の圧痕や沈線を施さないものと施すものに２分される。

E－１　圧痕を施さないもの（11・13・14・16・17）

11は幅の狭い変形爪形文を施している。16は爪形文間に半截竹管による圧痕を施している。

E－２　口唇上に圧痕を施すもの（12・15・18～27）

12は小波状を呈する口縁部破片で，口唇上から口辺にかけてヘラ状工具による刺突がなされている。18は胴部に半截竹管による平行沈線を施している。21は地文にアナダラ属の波状貝殻腹縁文を有し，その上に変形爪形文を施している。23は変形爪形文間に棒状工具による沈線を施している。

E－３　口唇部から口辺にかけて刺突文や条線を施すもの（第61図１～６）

１～３は半截竹管による刺突文が口辺に満たされている。

F類　その他の口縁部（第61図７～14）

７は口唇部に粘土紐を貼り付けたような段を残し，胴部には幅の広い平行沈線を施している。８は口辺にアナダラ属の貝殻腹縁を用いた圧痕を施している。10は幅の広い輪積段を残し，全面に半截竹管による連続刺突を行っている。12は地文にアナダラ属の波状貝殻腹縁文を有し，その上に圧痕文を廻らせている。

G類　胴部破片を一括した（第61図20～27・第62図，図版34）

G－１　ハマグリ等による波状貝殻腹縁文を施すもの（第61図20～27）

G－２　アナダラ属の波状貝殻腹縁文を施すもの（第62図１～８）

G－３　変形爪形文を施すもの（９～16）

G－４　三角文を施すもの（17・18）

H類　地文にアナダラ属の貝殻腹縁圧痕や撚糸文をもち，その上に細い半截竹管を用いて諸磯ａ式のモチーフを描くもの（第63図１～13，図版35）

１・２は地文にアナダラ属の貝殻腹縁圧痕を施す。他のものは撚糸文を施す。３・６・９・11～13は平行沈線とともに結節沈線を，４・８は連続爪形文を施している。８・10・11は縦位に竹管による刺突文を施している。

第４群土器　諸磯式土器を一括した。

A類　地文に縄文をもち，縦位に円形竹管刺突文を施すもの（第63図14～20）

それぞれ半截竹管による平行沈線や連続爪形文によって区画された無文帯を有する。

B類　肋骨文のモチーフを有するもの（第64図１～11）

肋骨文の中心となる縦の区画は２を除いてすべて半截竹管による平行沈線で施されており，

その上に円形竹管刺突文を施すもの（1～5）と連続爪形文を施すもの（6・7・9～11），指頭圧痕を施すもの（8）に分かれる。2は口唇直下に櫛状工具による縦の連続圧痕を施し，縦位の区画間にも同工具による波状沈線を施している。1は区画間に波状の平行沈線を施している。

C類　口縁部に波状平行沈線文を施すもの（第64図13～20，図版36）

13～16・18は直線となる平行沈線間に波状沈線を施すもので，13・14・16は円形竹管刺突文を縦位に施している。20は後から縦の沈線を施している。

D類　口縁部に刻みの施された隆帯を廻らせるもの（第64図21～31・第65図1～5）

施文されている平行沈線が細く隆帯が微隆起なもの（21～31）とやや大柄なもの（1～5）に分かれる。23は口縁から隆帯までの部分を肥厚させ文様帯を区画し，胴部には肋骨文のモチーフを施している。25～28は連続爪形文，29～31は結節平行沈線文を施している。30・31は指でつまんだような突起を持ち，31には丹が塗られている。1・2・5は結節平行沈線文を施している。

E類　細い結節平行沈線文や連続爪形文を主として施すもの（第65図6～19・21・23）

E－1　口縁に沿って複列施すもの（1～13・17）

13を除いてはすべて連続爪形文を施している。11・17は波状口縁部破片。17は三角形状を呈する波状口縁部破片で頂部より縦位に円形竹管刺突文を施しており，補修孔も5か所に見られる。

E－2　連続爪形文と磨消縄文を組み合わせたもの（17～19・21）

18は頸部より外反する深鉢形土器で，胴上半には木の葉文が施してある。

E－3　その他のもの（14～16・20・22・23）

14は波状頂部に瘤状の突起を施しており，口縁部には口縁に沿って半截竹管による平行押引沈線を施している。沈線頂部からは竹管による縦位の刺突文が施されている。20は甕の口縁部破片で口唇部は外側へ折り曲げられている。

F類　やや幅広の半截竹管による平行沈線文を施すもの（第66図1～23，図版37）

5～8は円形竹管刺突文を施している。16～23は口縁がキャリパー状に屈曲するもので19・20は口辺に渦巻状の貼り付けを行なっている。

G類　やや幅広の半截竹管による爪形文を施すもの（第66図24～27・第67図1～9）

1～3はE－1類同様，口縁に沿って複列の連続爪形文を施している。4は地文に撚糸文をもち，縦方向には半截竹管の連続刺突を行っている。6は結節沈線文を施している。

H類　浮線文を施すもの（第67図10～19，第68図，第69図・図版38・39）

H－1　浮線文を施しただけのもの（10・11・第69図10）

H－2　浮線文の上に縄文を施したもの（12～19）

13～15は口唇部に指頭状の圧痕を施している。

H－3　浮線文の上にヘラ状工具による刻みを施したもの（第69図9・11～19）

17は浮線文に沿って細い円形竹管の刺突を行っている。9・11～17は口縁が極端に内傾するキャリパー状を呈するもので，9・12は浮線文間に穴があけられている。

I類　獣面状突起を有するもの（第69図1～7）

1はヘラ刻みを有する浮線文を施す口縁部破片で，円形竹管刺突文も施されている。獣面はヘラ刻みによる「目」と立体的に突出した平面に「鼻・口」を表現しており，イノシシ等を型取ったものと思われる。2は結節浮線文を施しており，明確な獣面表現ではないが類似している。3は単なる浮線文を地文にもち，つまみ状に突出した部分には目のような円形竹管刺突文が施されている。4は1と同じ表現をしており，5・6は目・鼻・口を表現しないものである。7は全く他のものと異なり，三角形状に隆起した両側面に目らしき刺突文が施されている。地文には細い半截竹管による平行沈線が施されている。

第5群土器　その他の土器を一括した。

A類　沈線を主体とするもの（第70図1～13）

1～3は同一個体で口唇下に一条の沈線を施し口辺を区画し，区画内には円形竹管刺突文を施している。胴部には櫛状工具による条線を満たしている。4・13は半截竹管による平行沈線を綾杉状に施している。

B類　地文に縄文を施すもの（第70図14～16）

第6群土器　中期の土器を一括した（第71図1～7）

1～5は地文に縄文をもつもので，1は口唇部に細い竹管による円形竹管刺突文を施している。5は口辺に輪積段を有する。4は縦位に鋸歯状文を施している。6は口唇に刻みを施し，胴部には細い半截竹管による平行沈線を施している。7は口唇部を肥厚させ，そこから隆帯を懸垂させている。1～6は初頭に位置付けられるもので4・6は五領ケ台式に比定される。7は阿玉台式土器である。

第7群土器　堀之内式土器を一括した。

A類　地文に縄文をもち，棒状工具による太い沈線によって文様を構成するもの（第71図8～17，第72図）

A－1　平縁を呈するもの（第71図8～13）

A－2　緩やかな波状を呈するもの（第71図14～17，第72図1～3・5・6）

A－3　波状頂部に指頭状の圧痕を施すもの（4・7～12）

4・8は頂部より隆帯を垂下させ，刻みを施している。8の頂部は粘土紐を渦巻状に巻いて構成されている。10は波状突起の周囲に円形竹管刺突文を施している。12は波状頂部をU字状に丸め込んでいるため幅広の波状部を構成している。

A－4　波状口縁部に孔を有するもの（16～19）

B類　地文に縄文をもち，半截竹管による平行沈線によって文様を構成するもの（第73図1～13）

B－1　平縁を呈するもの（1・2・4・7）

B－2　波状口縁を呈するもの（3・5・6・9～13）

5・14は粘土紐の隆帯を貼り付け，刻みを施している。12・14は波状頂部を渦巻状に構成している。

C類　地文に縄文をもち，棒状工具による細い沈線によって文様を構成するもの（第73図15～20）

D類　地文をもたず沈線によって文様を構成するもの（第74図1～4，6～13）

1は口唇部に深い刺突痕を有する。8は半截竹管による平行沈線文を施している。

E類　細い紐線文を施す口縁部破片（第74図5・14～21）

胴部は沈線によって区画されており，磨消縄文や後から施された縄文などが満たされている。17～19は「8」字状のモチーフを貼り付けている。15・20は器内面まで文様を施している。

F類　磨消縄文の技法を用いて文様を構成するもの（第75図1～6）

G類　粗製土器を一括した。（第75図7～21）

G－1　地文に縄文をもち，口辺にのみ文様を施すもの（7～10）

G－2　口縁に太い紐線文を施すもの（12～21）

H類　その他の土器（第75図22）

加曽利B式土器に比定されるものが1点検出された。

土器片錘　（第78図1～20，図版40）

遺構より検出した分を含めて総数20点を数える。住居からは007－2点・008－3点・025－4点・052－2点を検出しており，その時期は黒浜期～浮島・諸磯期に比定される。当該期の土器片錘は例が少なく，今回のような大型のものが存在することは中期などに比較してその生業の違いの一端を表わしているものと思われる。1～14は胎土に繊維を含む黒浜式である。

土製円板　（21・22）

2点とも034住居跡より出土しているため，堀之内期の所産と思われる。

グリッド出土の石器

グリッド出土の石器総数は202点を数え，遺構からは58点を検出した。内訳は槍先形尖頭器２点，石鏃３点，石匙１点，石錘１点，打製石斧33点，磨製石斧23点，凹石46点，磨石10点，敲打器36点，石皿43点，その他の石器４点であった。

槍先形尖頭器（第79図１・２）

１は木葉形の形状を呈するもので基部は厚く平坦である。

石鏃（第79図３・4）

３は三角形を呈するもので両側の底角の部分がやや欠損している。

打製石斧（第80図～第82図１～５，図版40・41）

総数33点と一番多く検出されている。以下形状や製作方法等によって分類した。

A類　小型の打製石斧（１～４・７）

自然面を用いずに剝片を用いて周囲を剝離してあるものである。

B類　自然面を利用し，楕円形に近い形状を呈するもの（第80図5・6・8～13，第81図１～３・５）

小型のもの（第80図5・6・8～13）とそうでないもの（14・15・第81図１～３・５）とに分かれる。大半が両面に自然面を残し，周囲を剝離している。６・８・12は刃部に局部的な磨製を行っている。

C類　一般的に打製石斧とするもの（第81図４・７～９・第82図１～５）

形状は短冊型のもの（４・６・７）と分銅型のもの（８・９，第82図１～５）の２種類に分かれ，撥状のものは見られなかった。７は刃部を直線的に作り出している。分銅型を呈するものは８・５を除いてすべて表裏面に自然面を残している。

磨製石斧（第82図６～９，第83図，図版42）

大半が撥状を呈し，表裏面からの研磨による刃部を作り出している。６・７は小型の磨製石斧で，６は刃部のみが磨かれており胴部は敲打による整形を施している。７は両側面の研磨も行っている。８・９は表面に器面の調整のためと考えられる敲打痕を残している。第83図３は頭部に敲打痕が認められる。５・６は表裏より刃部を作り出すものとは異なる。６は敲打器と思われ刃部に向う程太くなっており，刃部は敲打によって磨滅している。８も同様の形状を呈する基部で両側面には敲打したような凹を有する。

凹石（第84図～第86図１～７）

自然の円礫を用いて表裏面に敲打による凹を有し，側面にも凹や敲打痕を残している。また表面には擦痕もあり，敲石および磨石の機能を有する。

磨石（第86図８・10～12，第87図１～３・９）

側面には敲打痕を有するものが多く，磨石だけの機能を持つものは認められない。第87図３・９などは砥石としての性格が強い。

敲石（第86図 9 ・13，第87図 4 ～ 8 ）

形状は磨石と変らないものが多く，擦痕がなく側面および表面に敲打痕が認められるものを敲石とした。第87図 8 などは棒状を呈するもので表裏面に敲打痕を残している。

石皿（第88図・第89図）

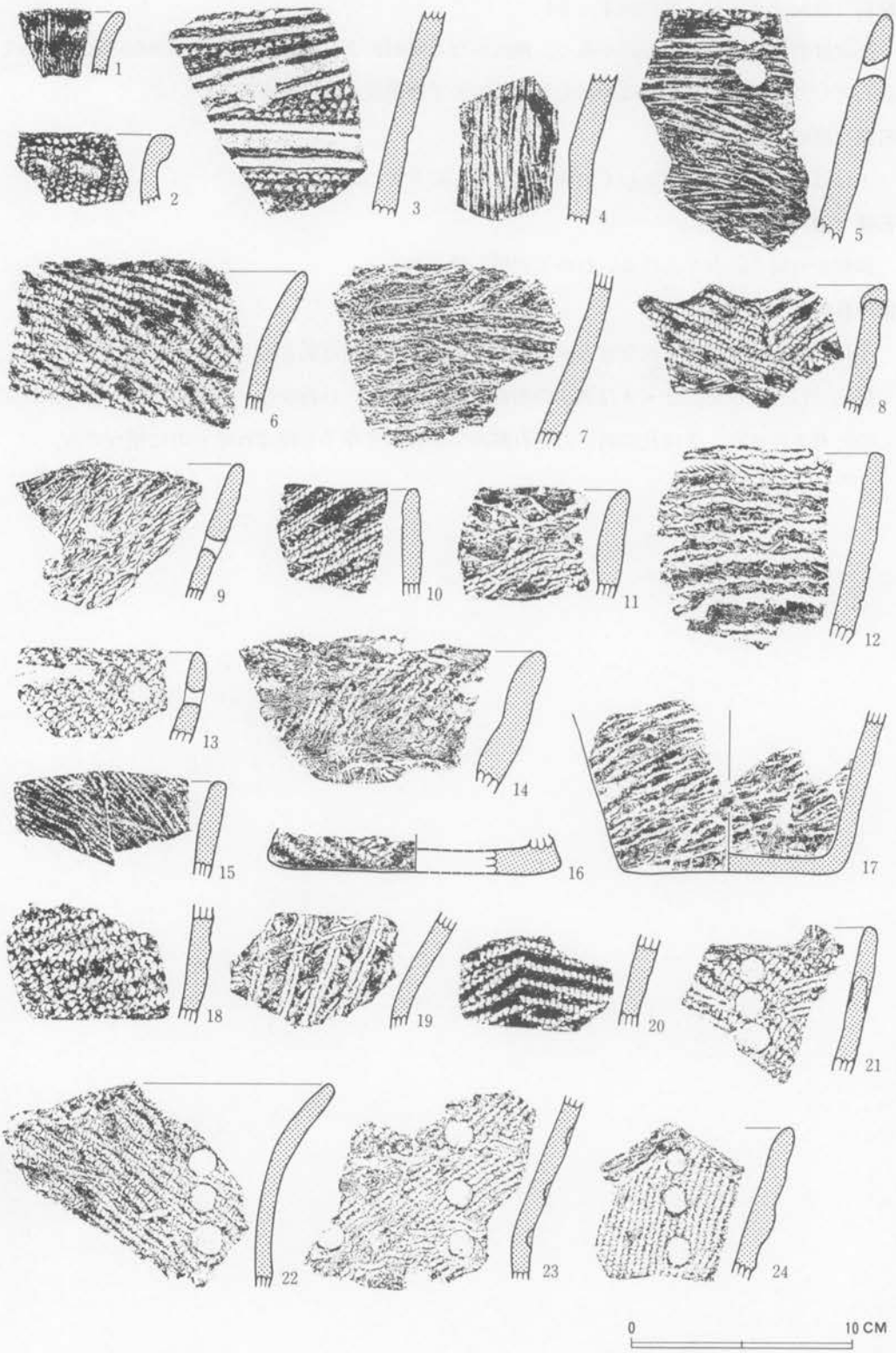
1 は石皿の欠損を凹石として二次加工したものと思われる。

石錘（第79図 5 ・ 6 ）

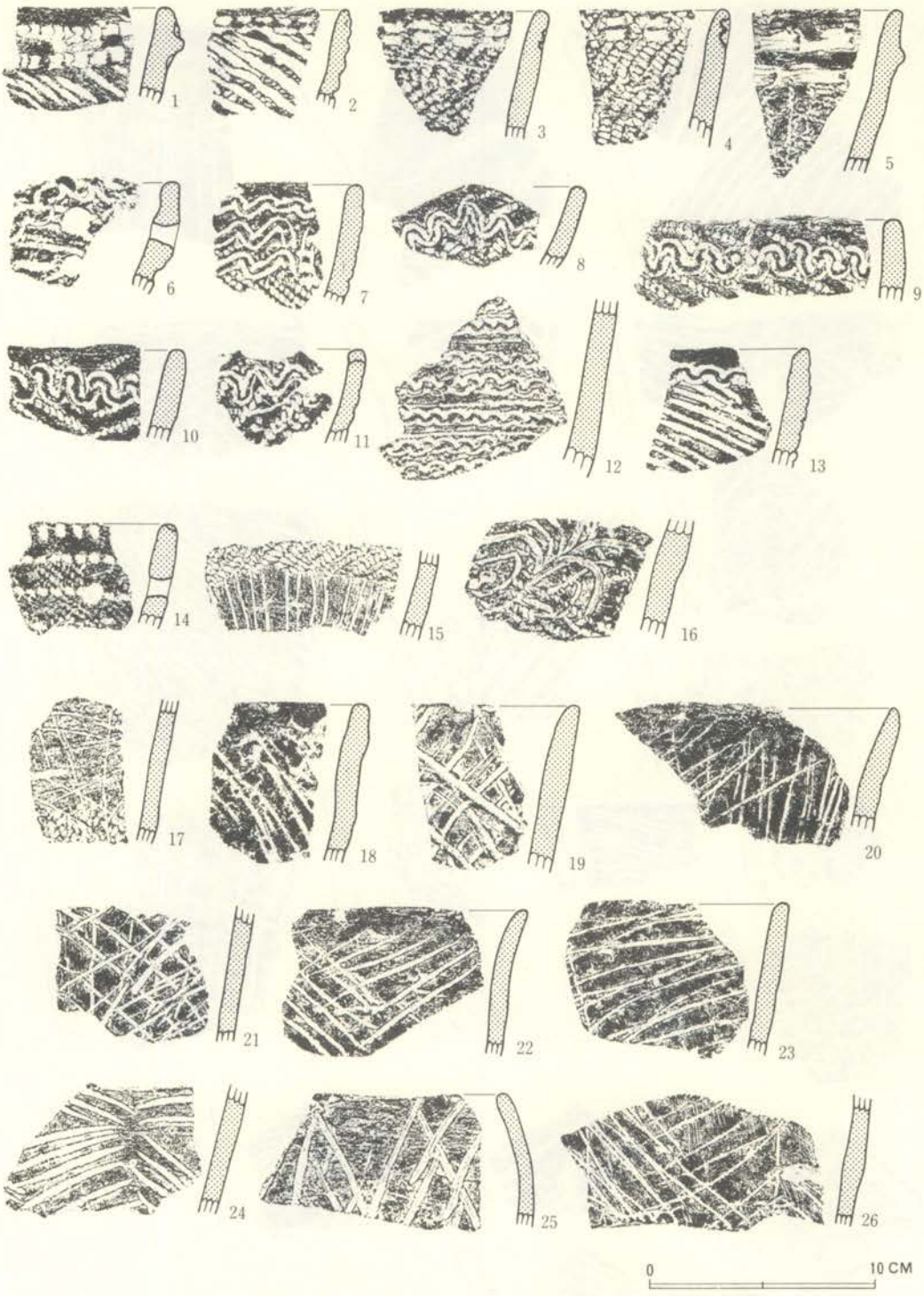
両側から切り込みを入れるいわゆる切目石錘である。

特殊石製品（第90図）

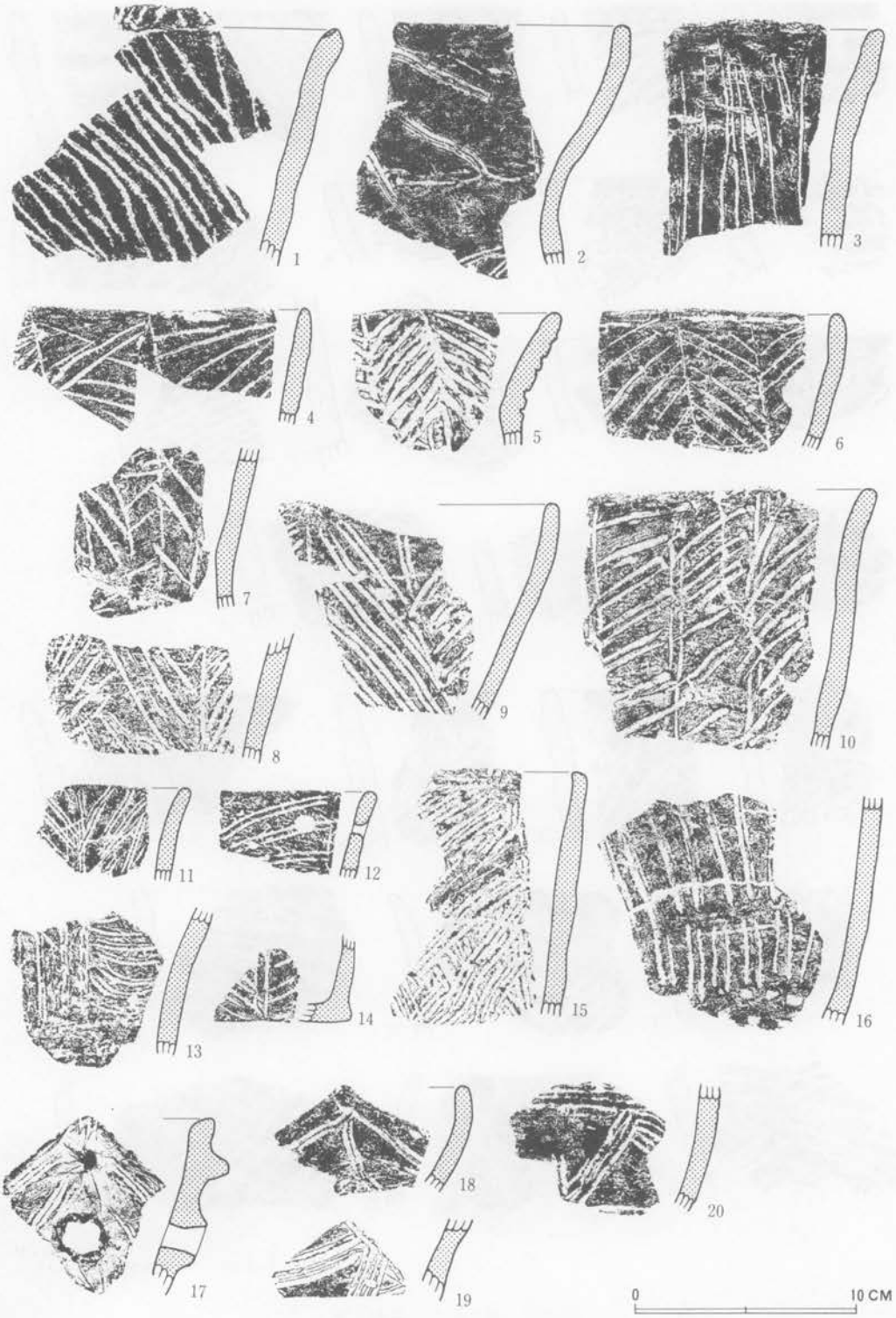
1 は人為的加工がなされたものか不明瞭であるが，周囲は砥ぎ出したような形状を呈するため製品として扱った。 2 ・ 4 は溝状の擦痕を残すもので，いわゆる「矢柄研磨器」と呼ばれるものと考えられる。 3 は孔のあいた軽石製品でいわゆる浮子と呼ばれるものに相当する。



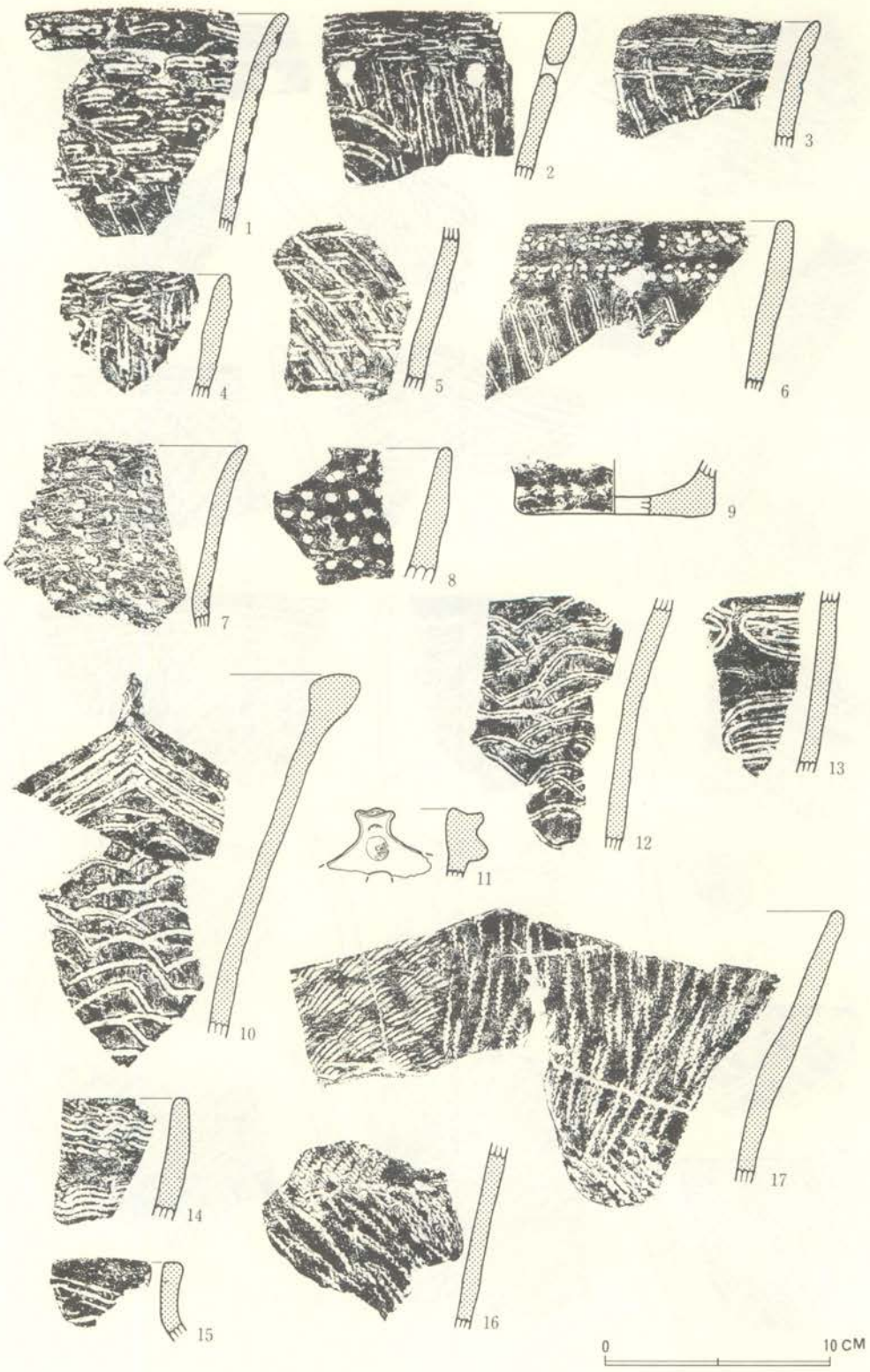
第52図　第１群～第２群Ｂ類土器



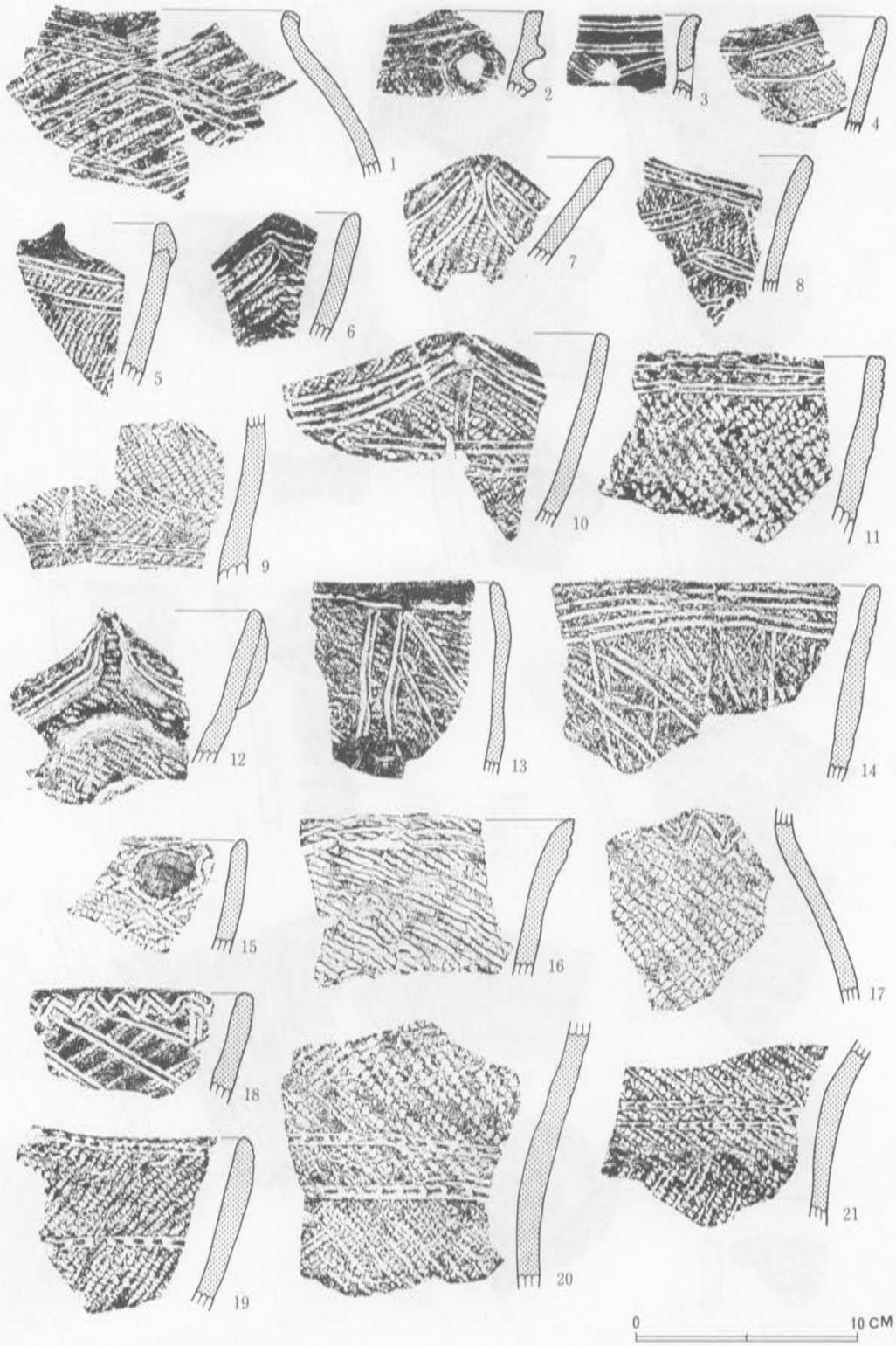
第53図　第２群Ｃ～Ｅ類土器



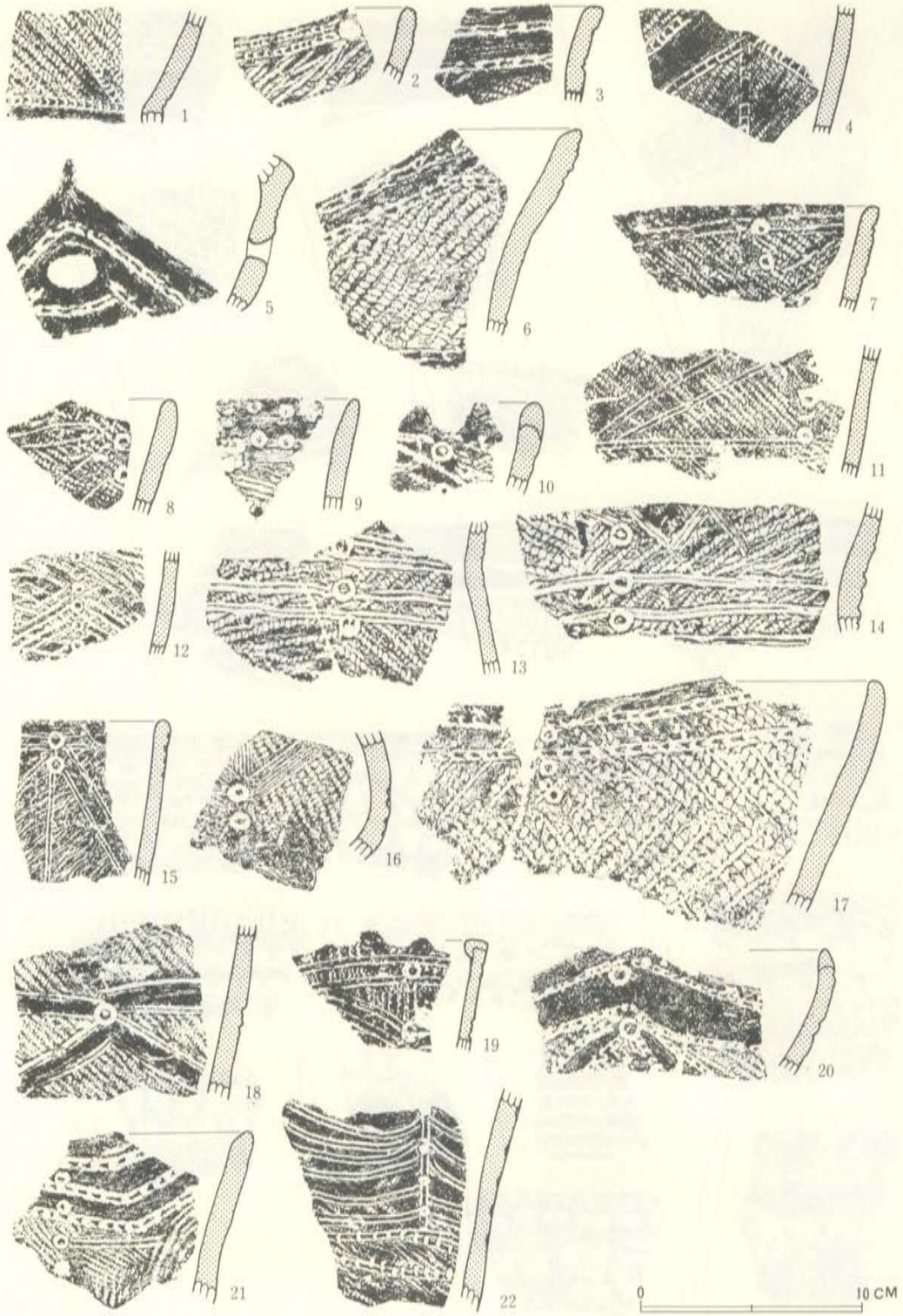
第54図　第２群Ｅ・Ｆ類土器



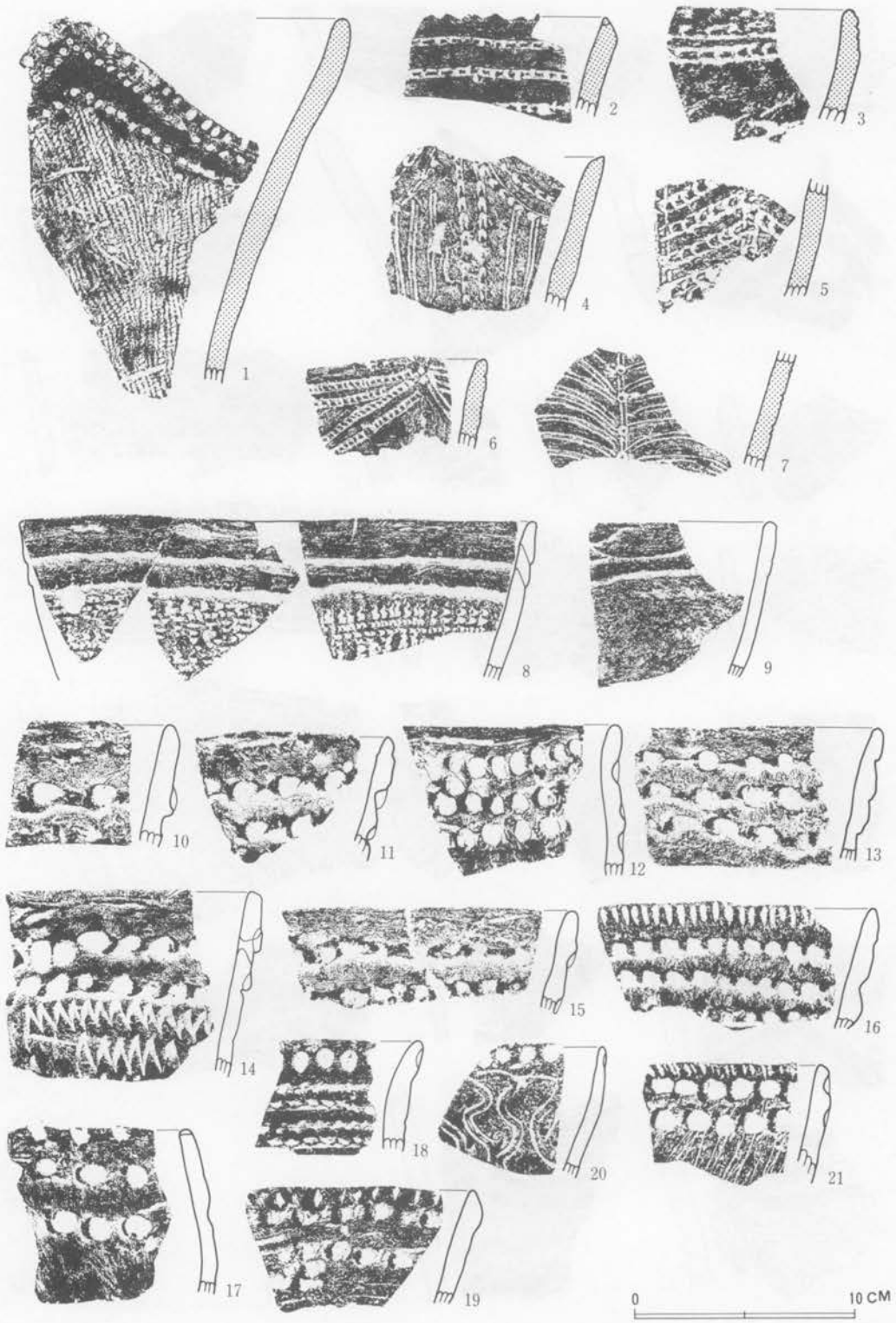
第55図　第２群Ｆ～Ｈ類土器



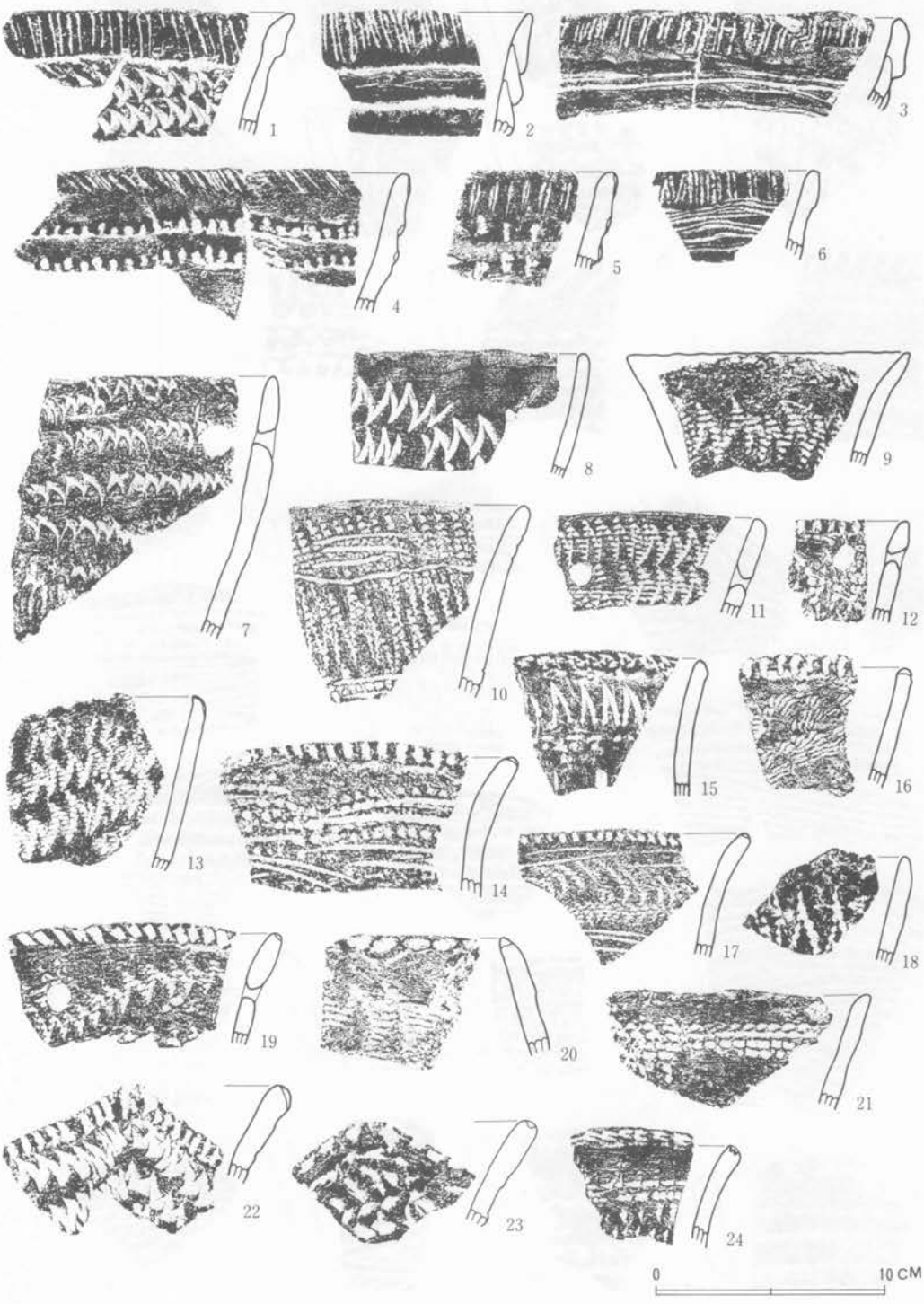
第56図　第２群Ｉ・Ｊ類土器



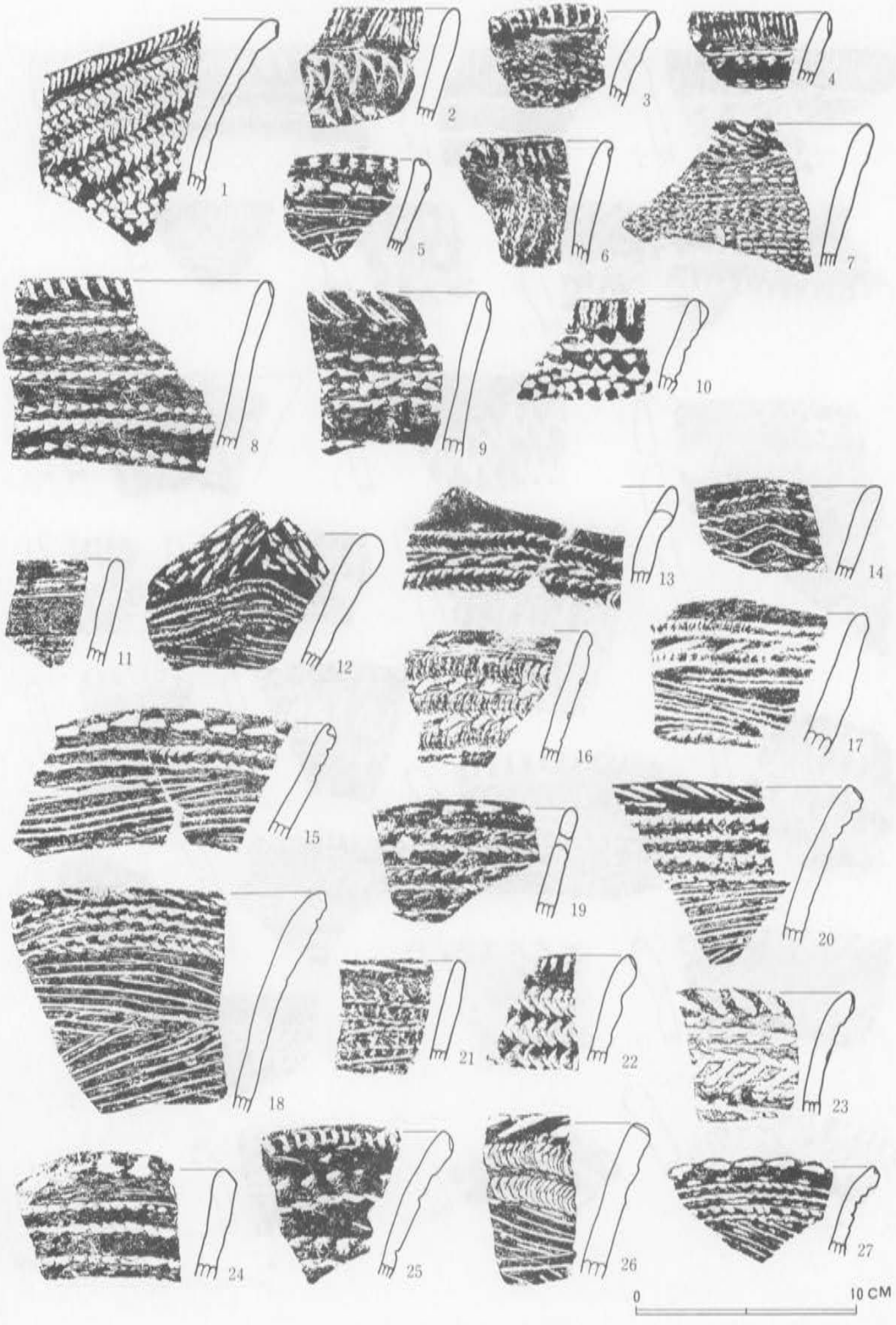
第57図　第２群Ｊ・Ｋ類土器



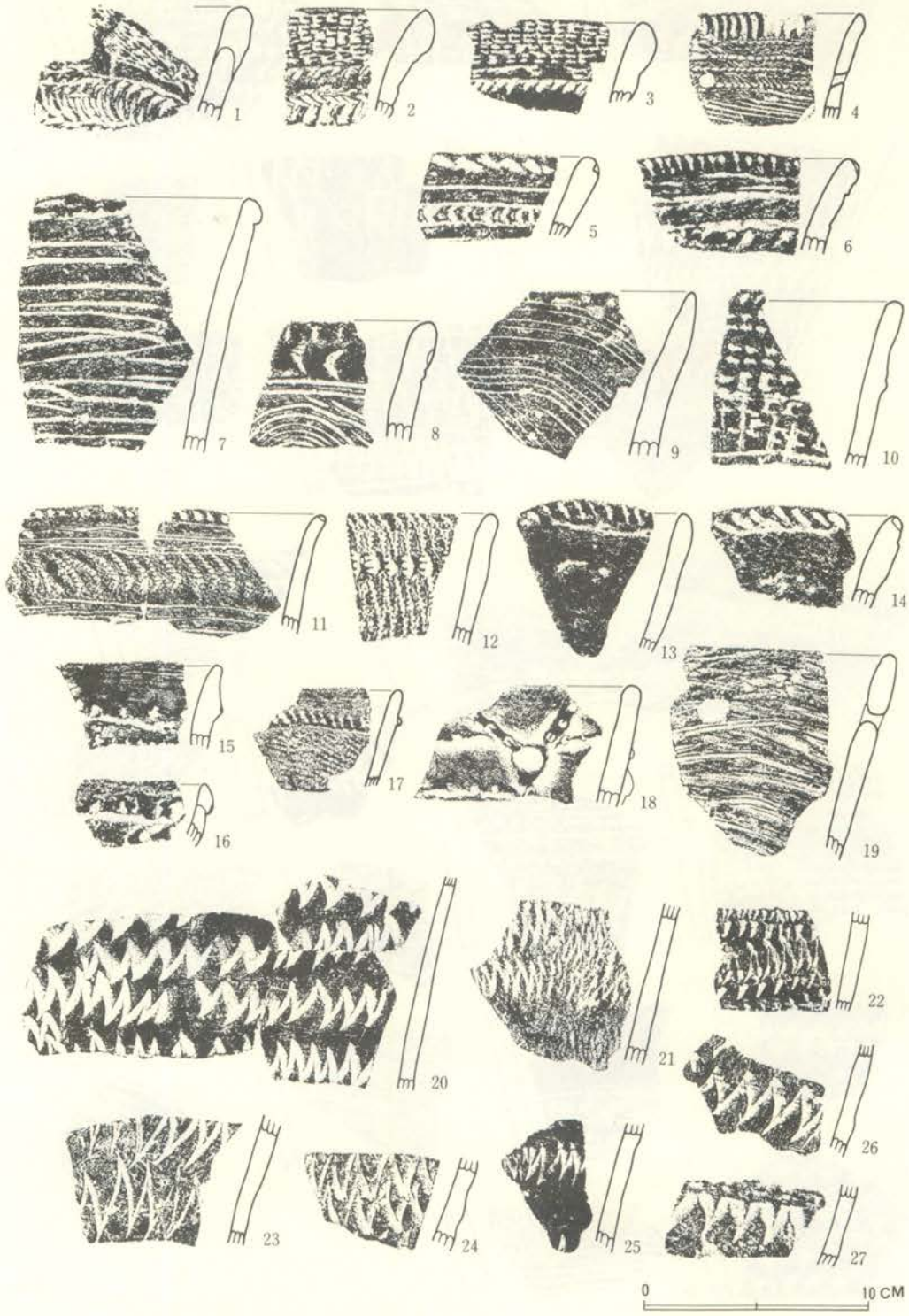
第58図　第２群K・L類～第３群B類土器



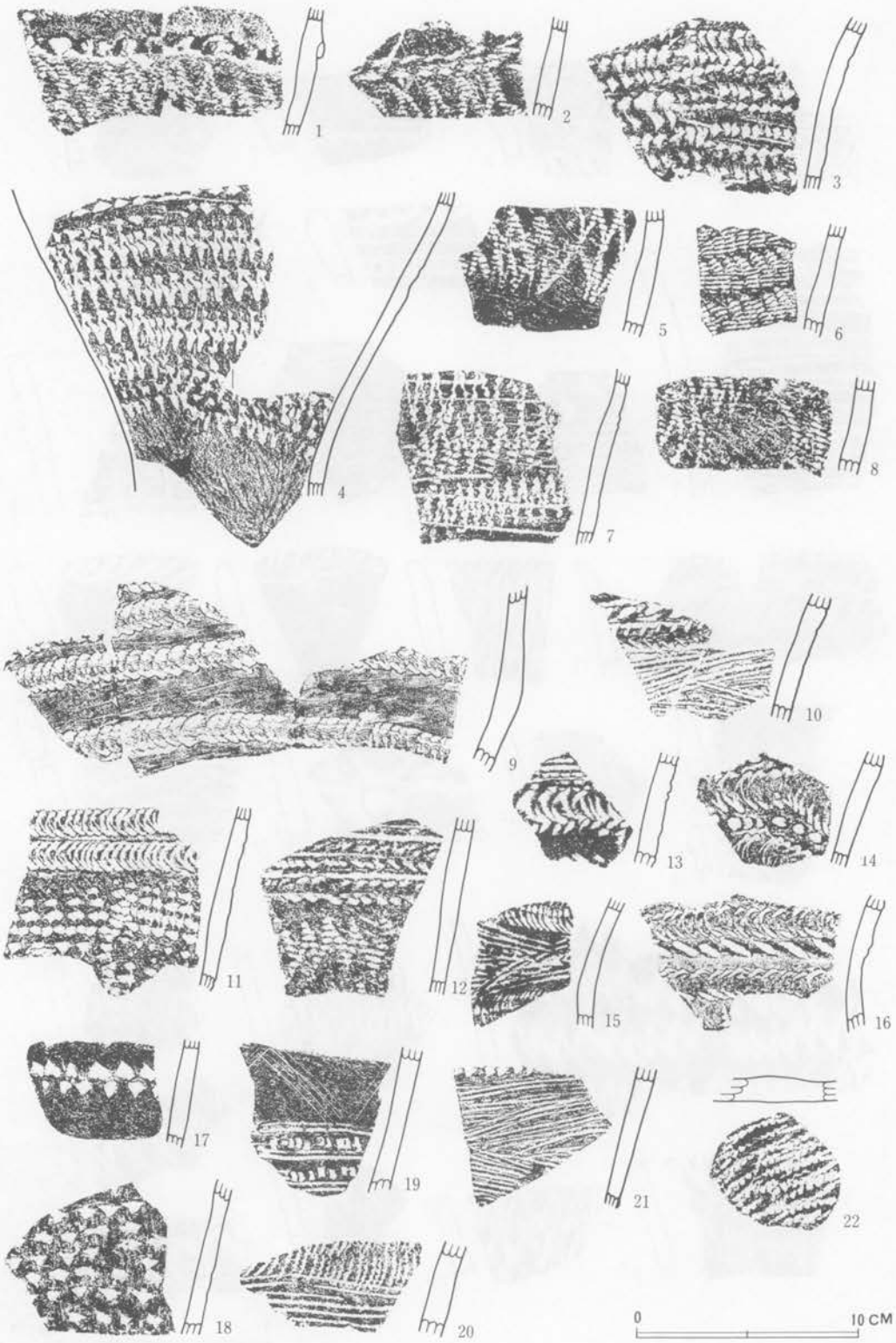
第59図　第３群Ａ・Ｃ類土器



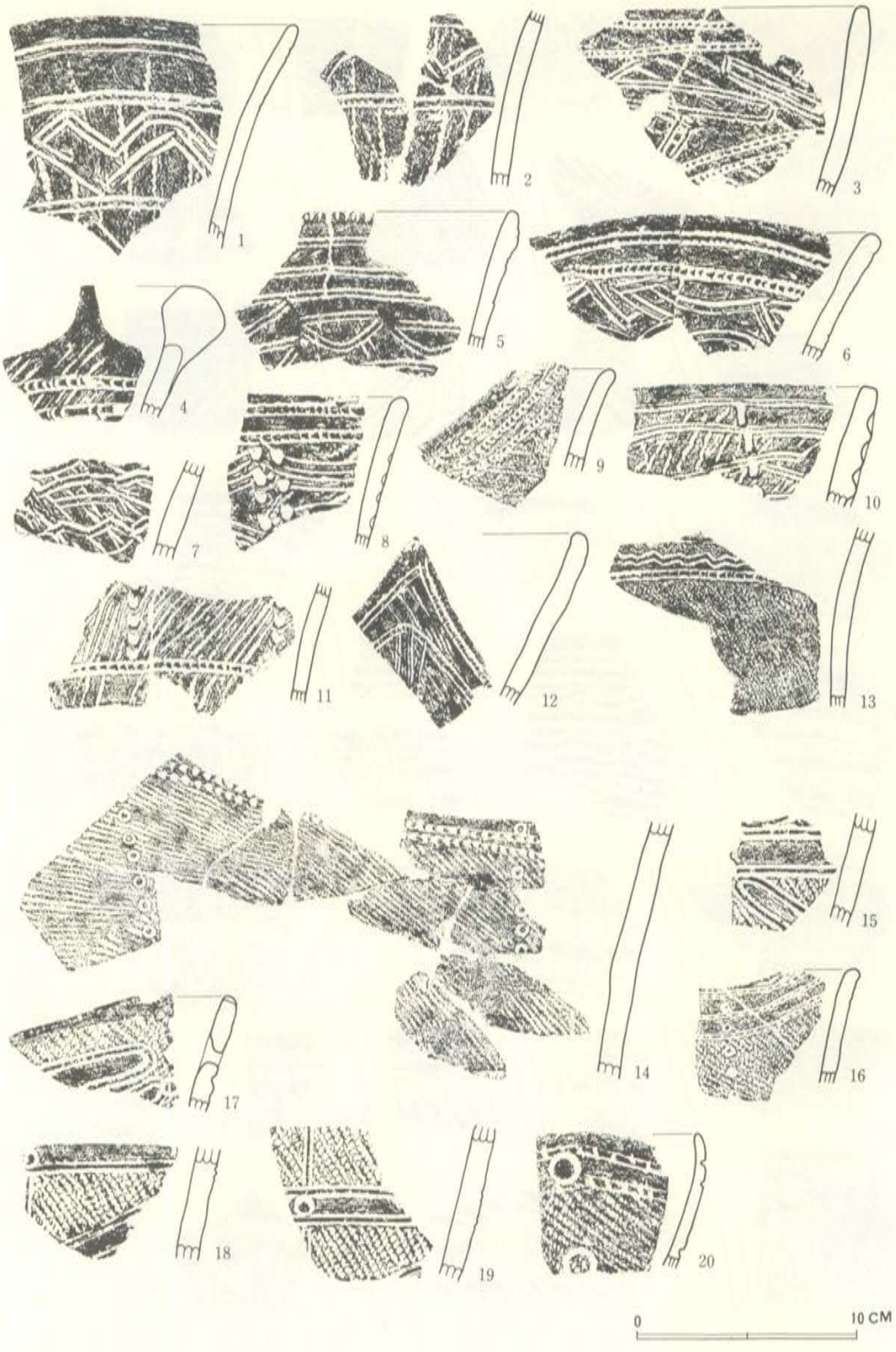
第60図　第３群Ｃ～Ｅ類土器



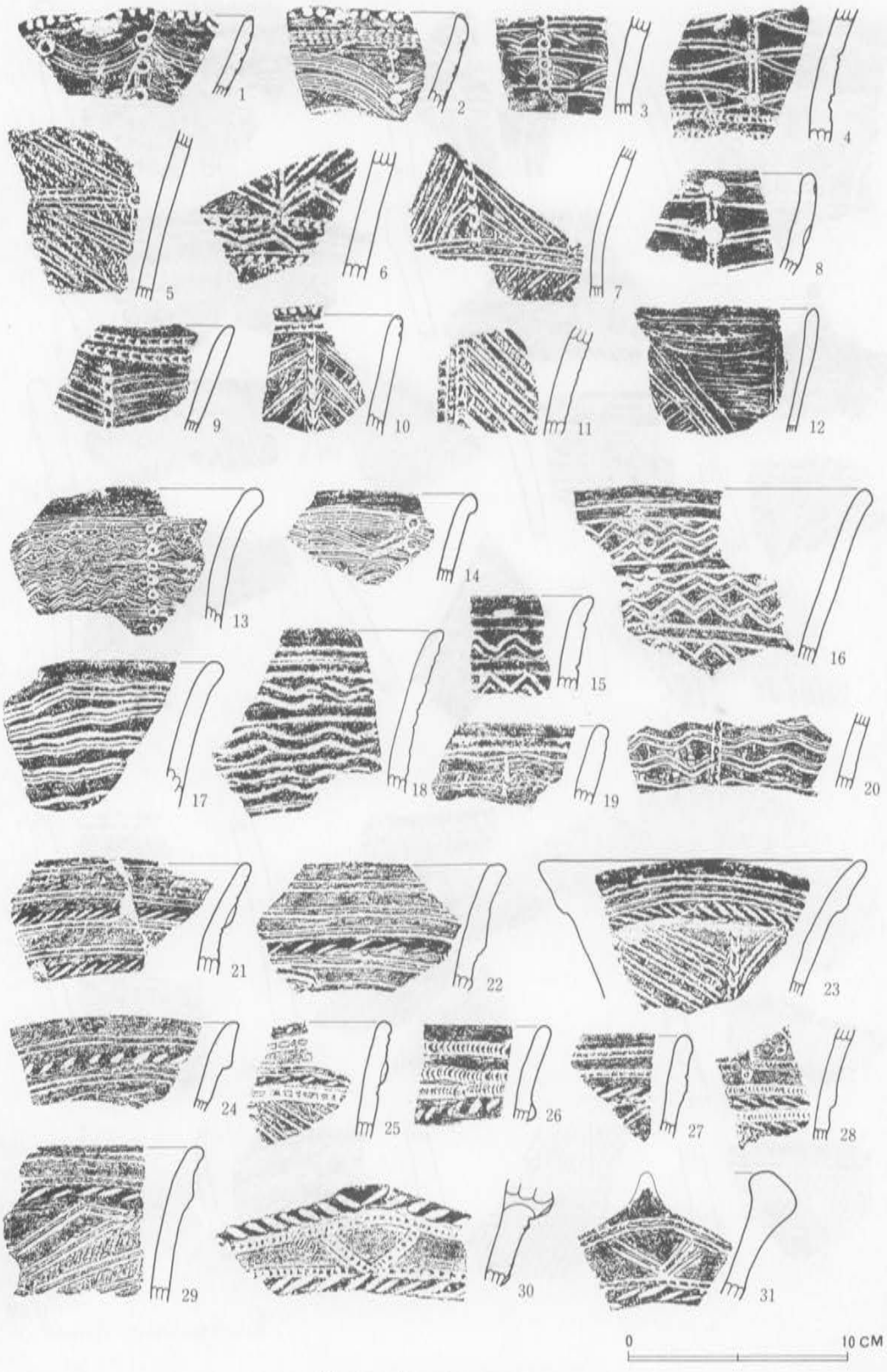
第61図　第３群Ｅ～Ｇ類土器



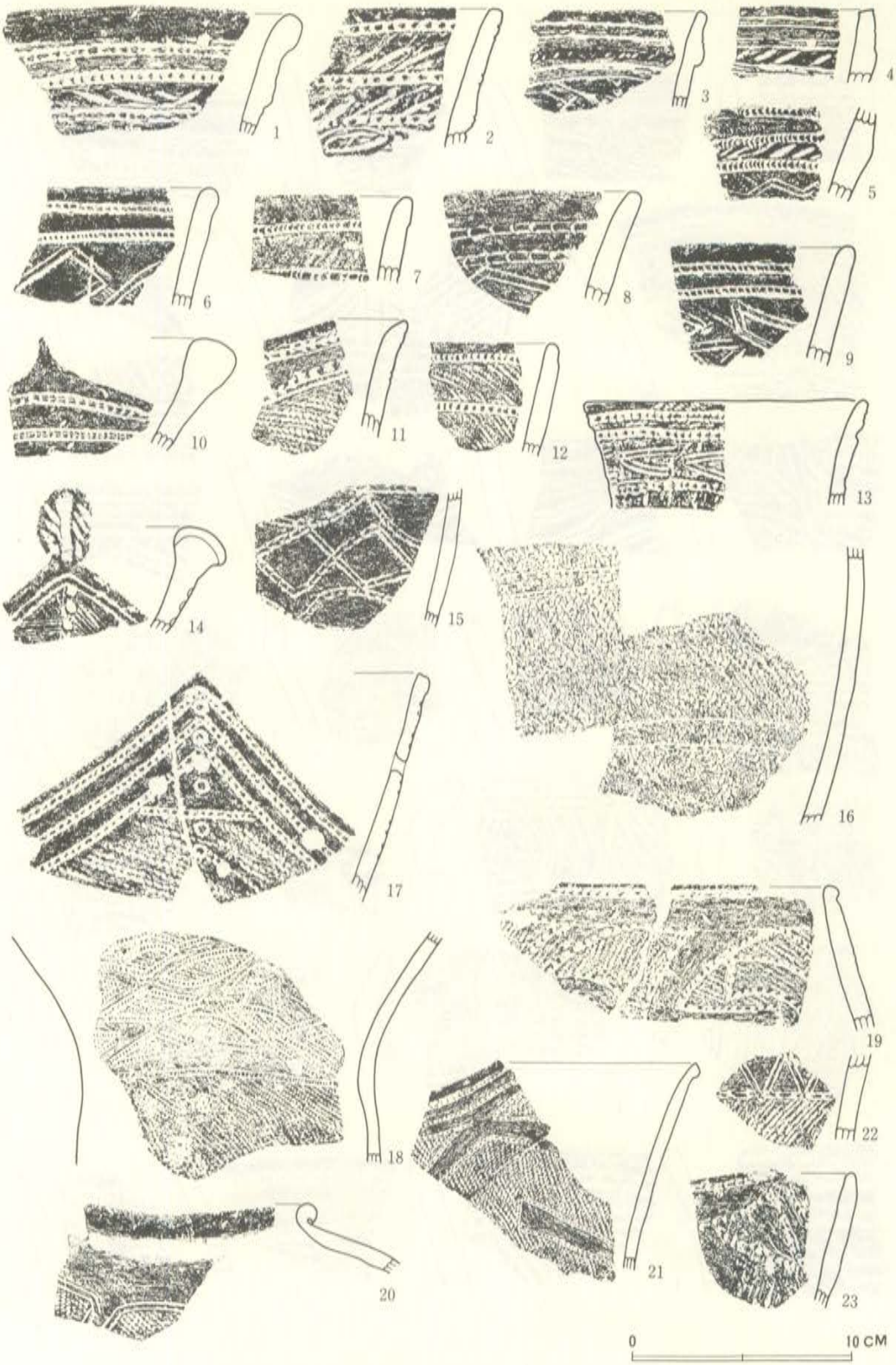
第62図　第３群Ｇ類土器



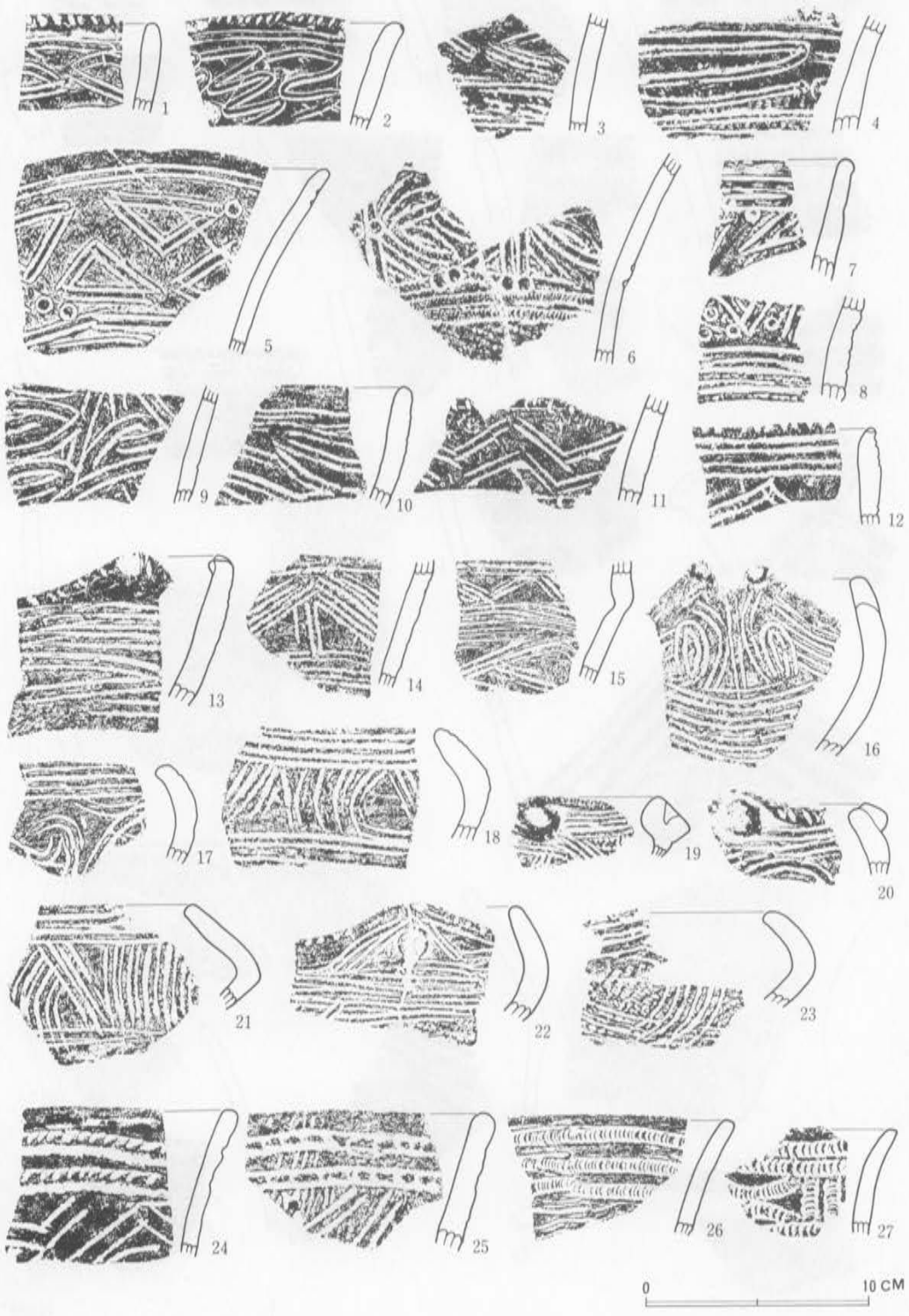
第63図　第３群Ｈ類・第４群Ａ類土器



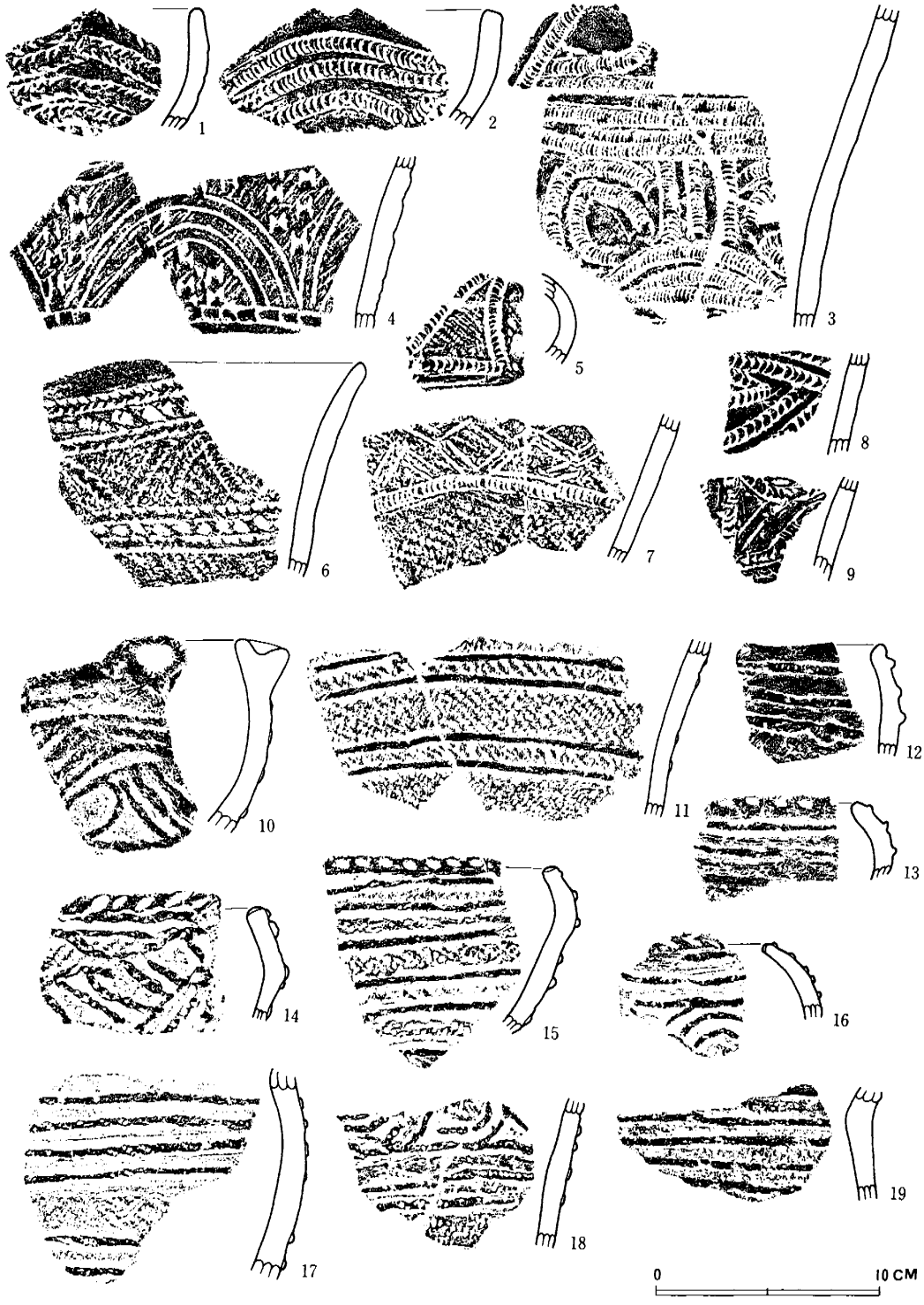
第64図　第４群Ｂ～Ｄ類土器



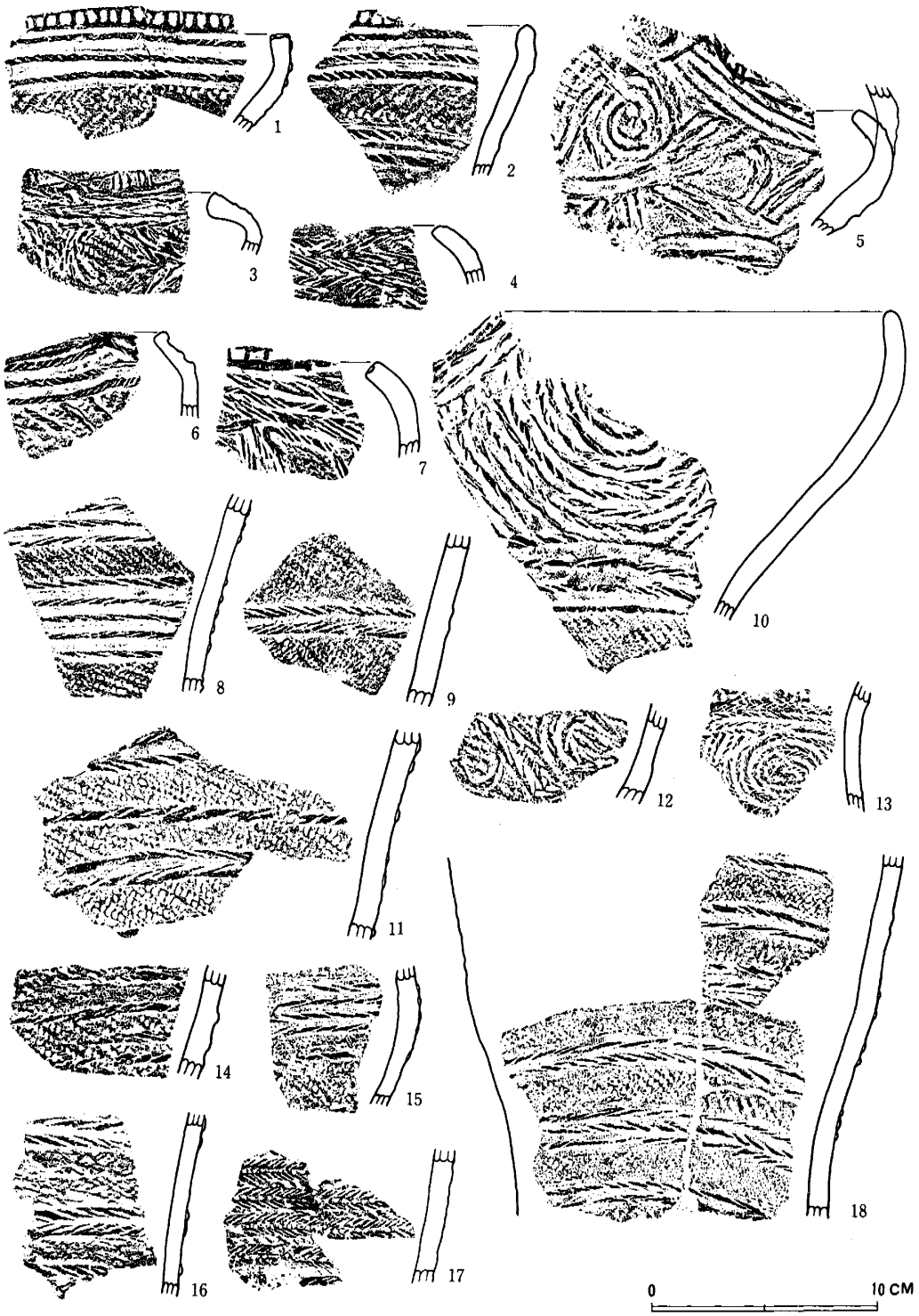
第65図　第４群Ｄ・Ｅ類土器



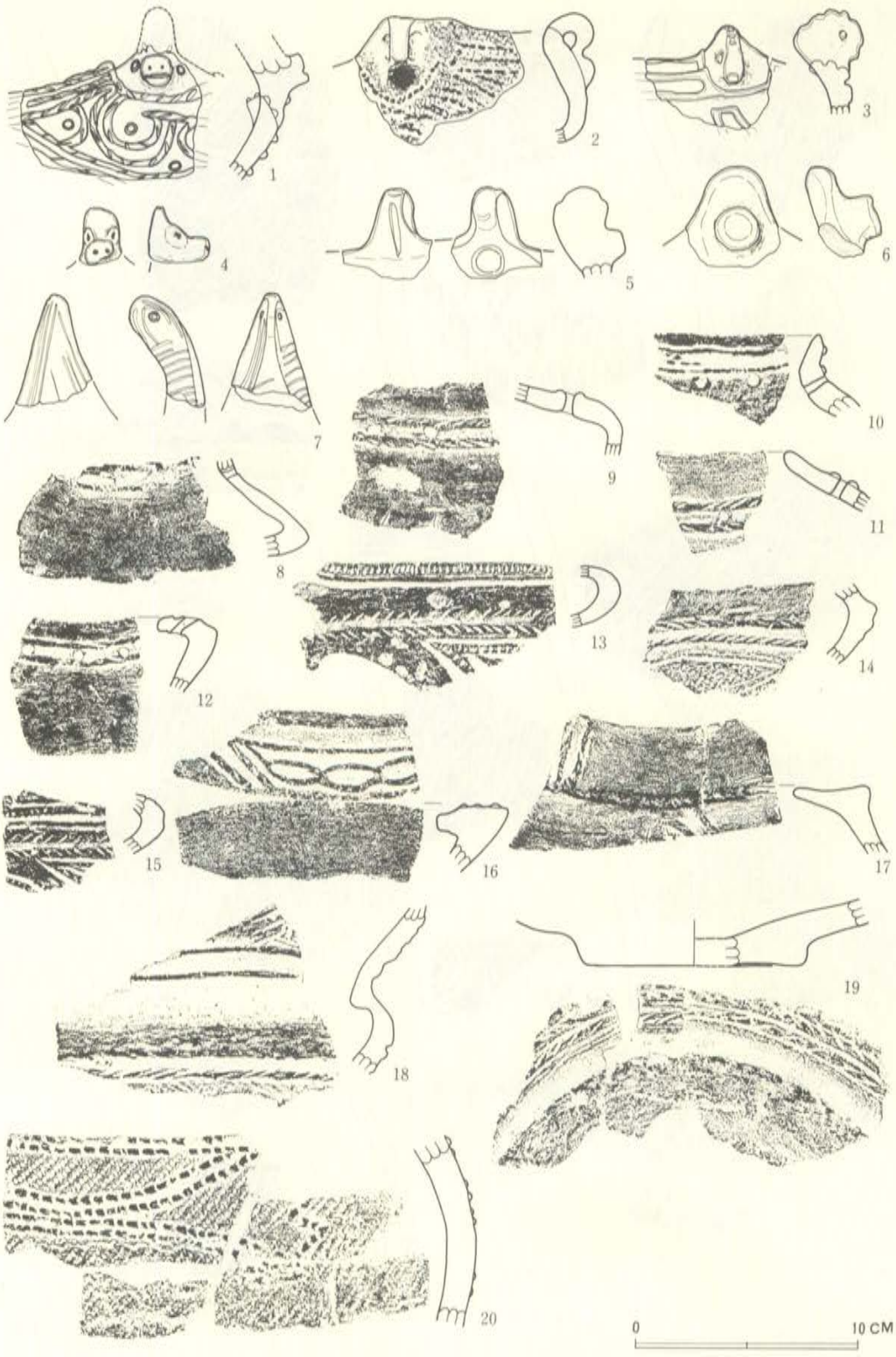
第66図　第４群Ｆ・Ｇ類土器



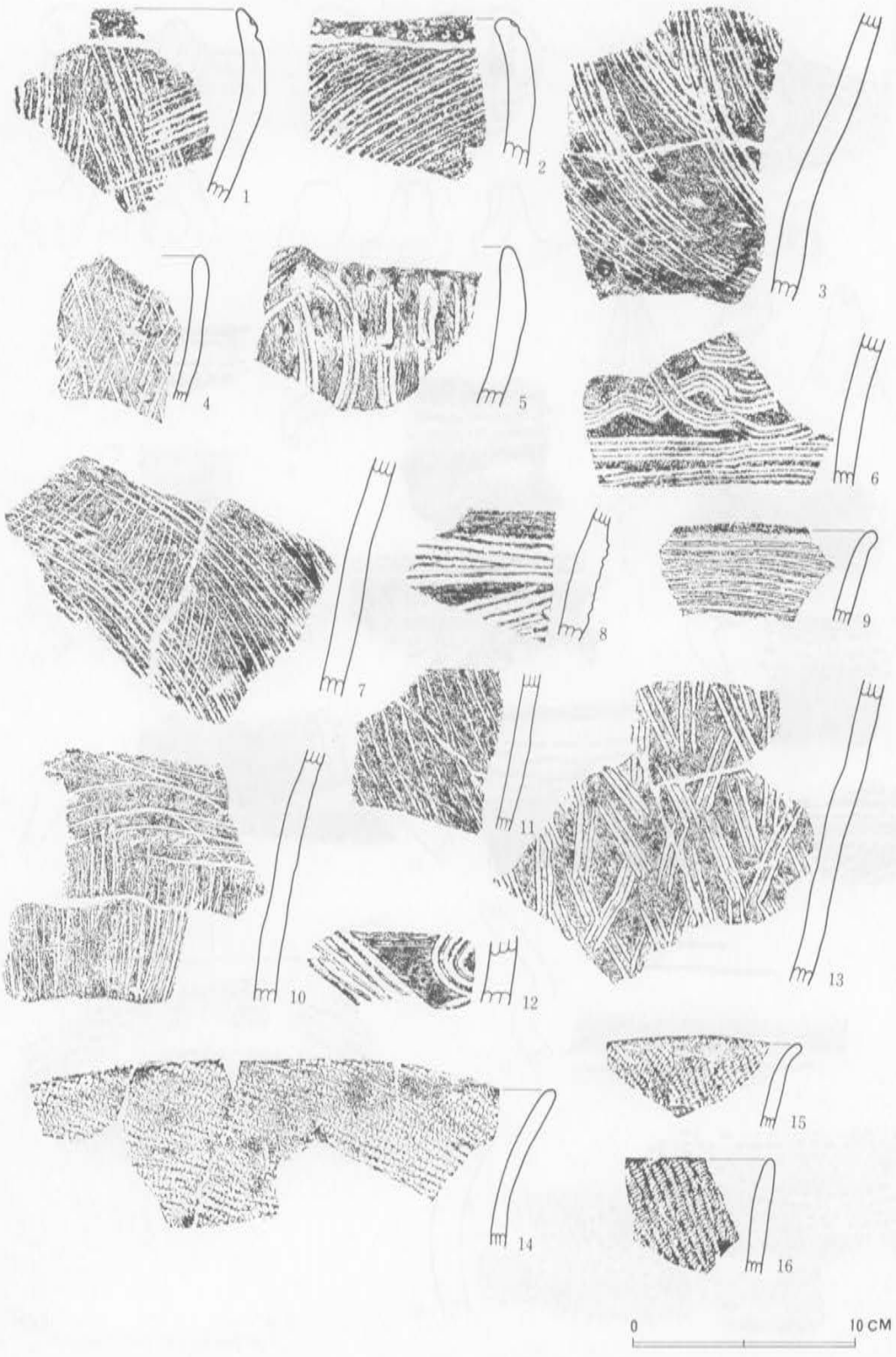
第67図　第４群Ｇ・Ｈ類土器



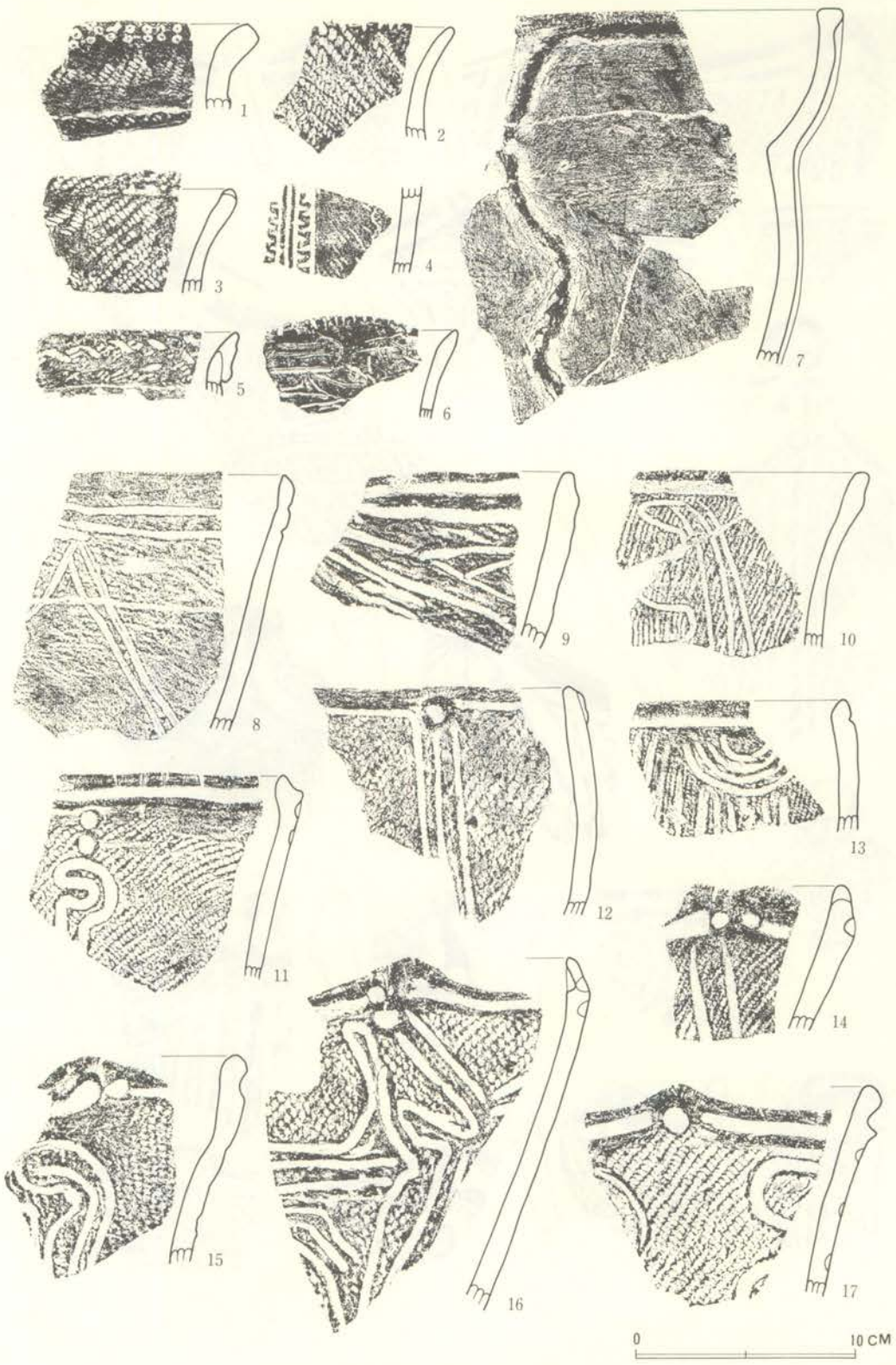
第68図　第４群Ｈ類土器



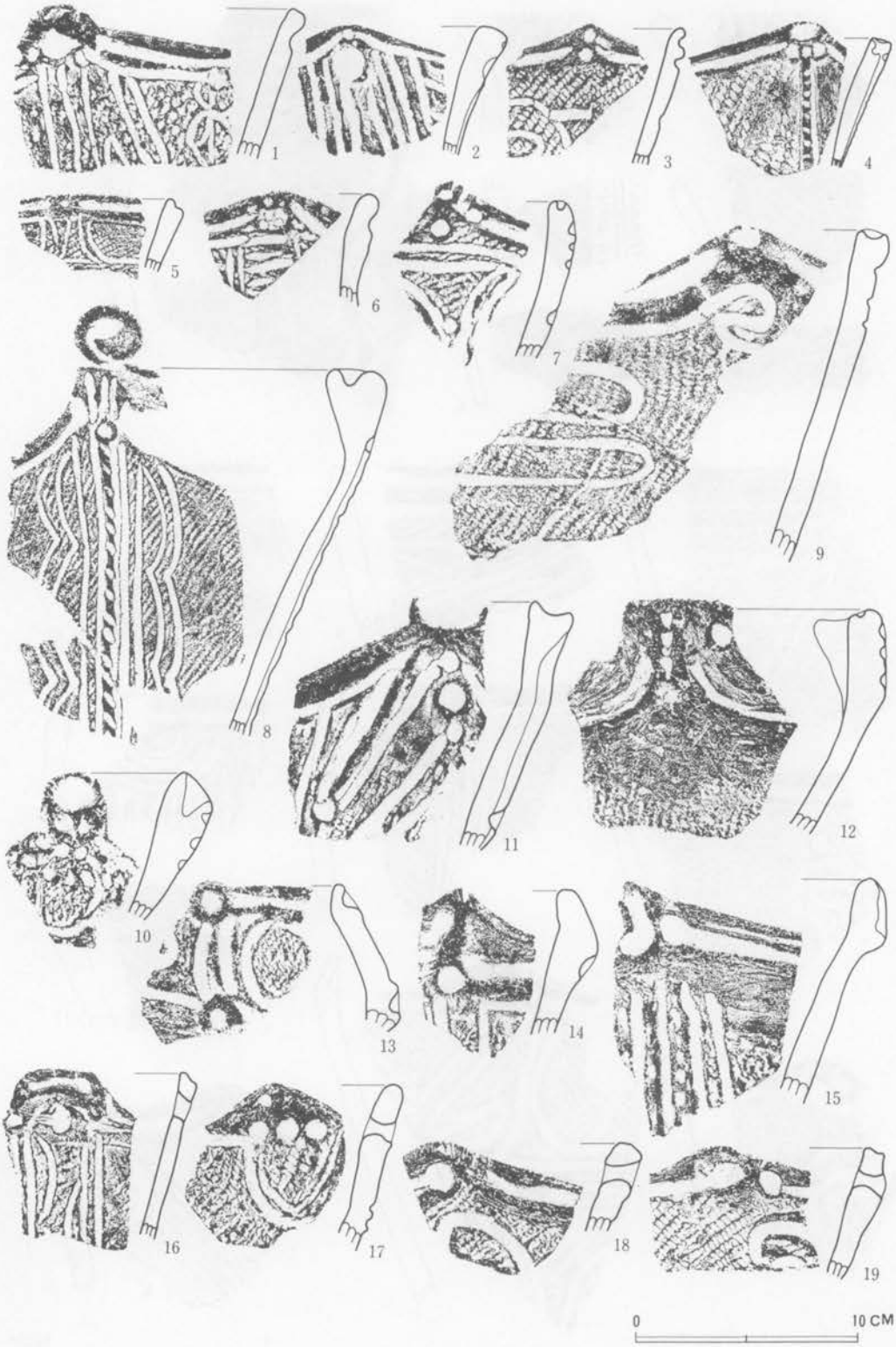
第69図　第４群Ｈ・Ｉ類土器



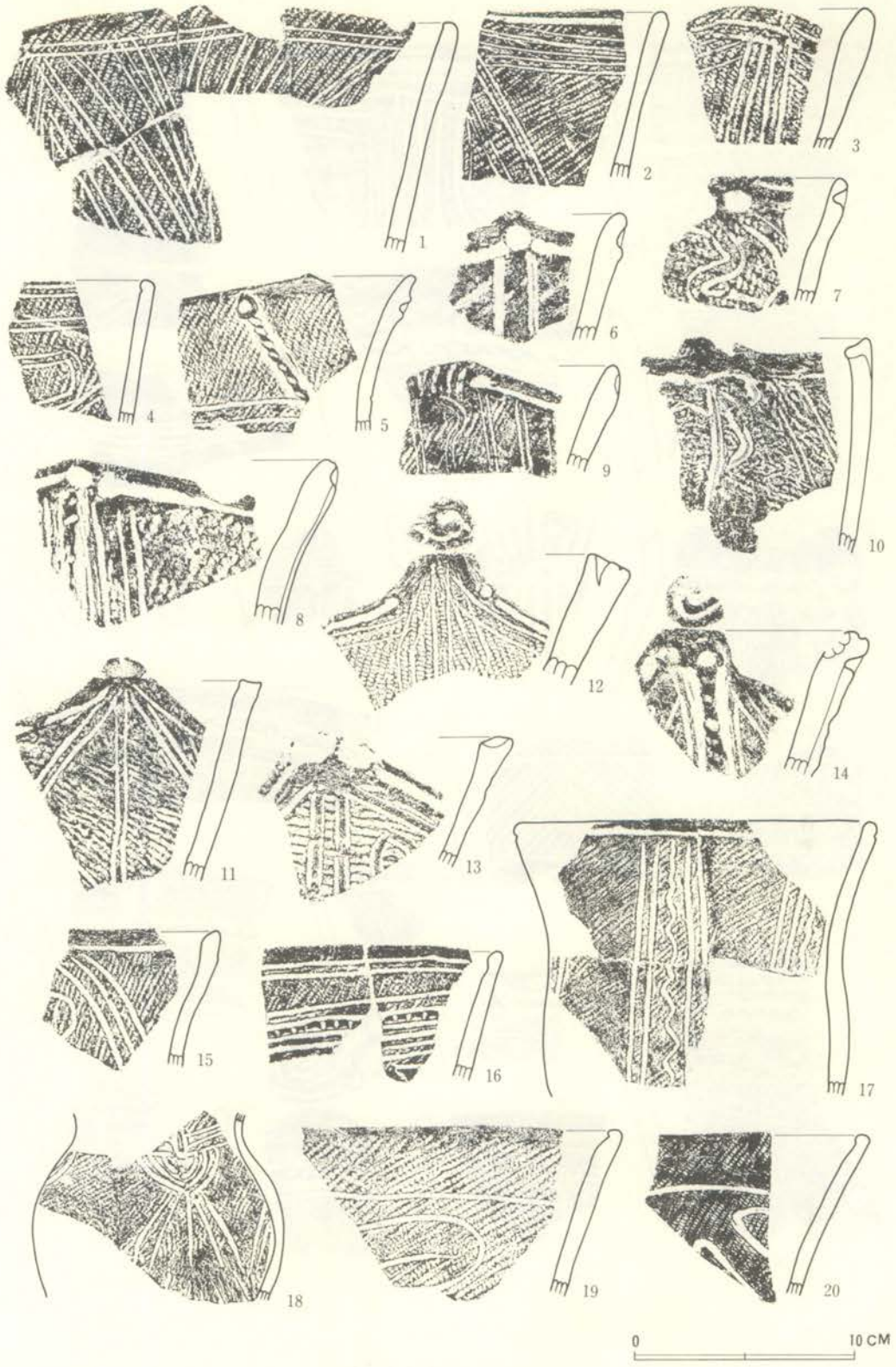
第70図　第５群土器



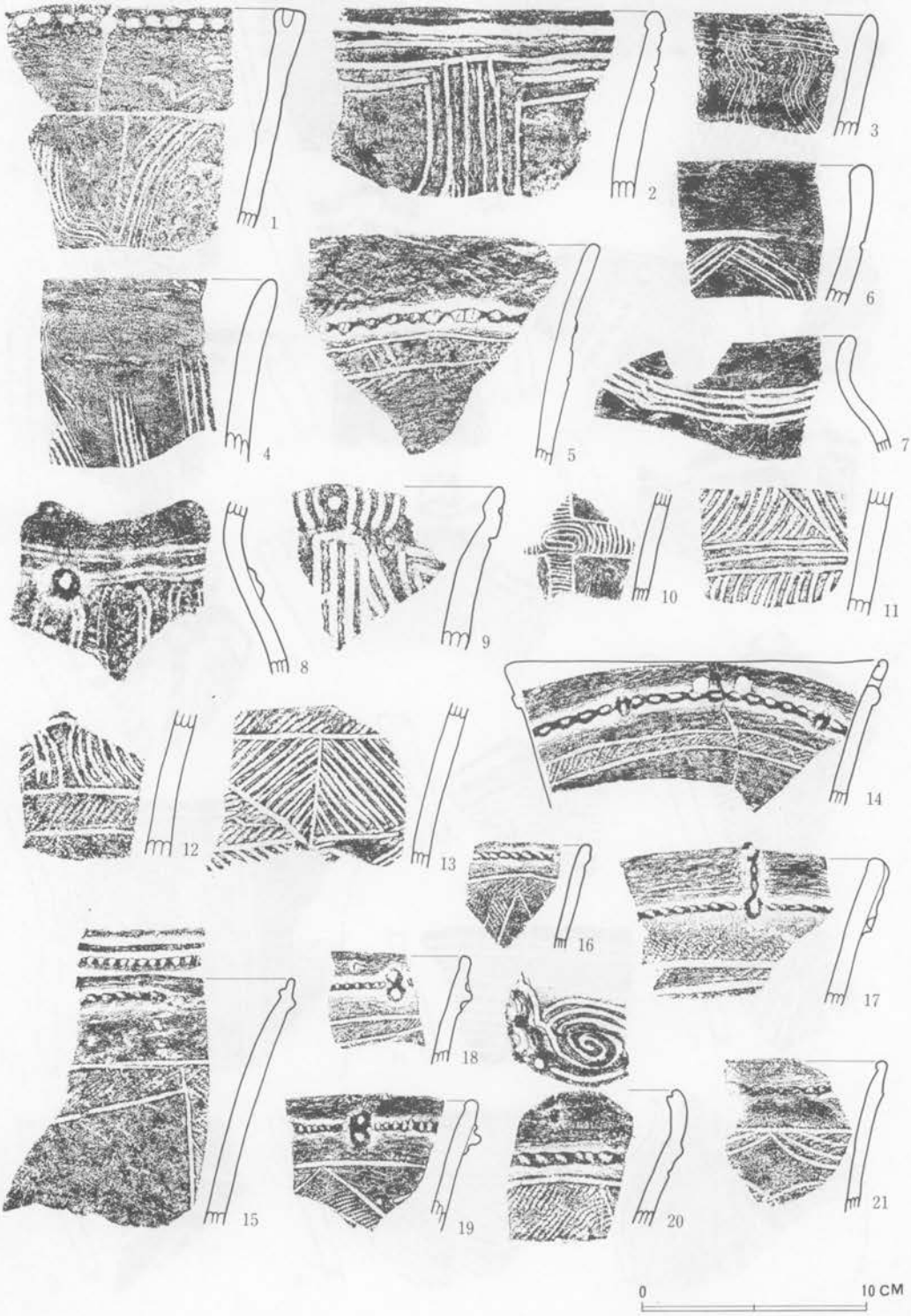
第71図　第6群・第7群A類土器



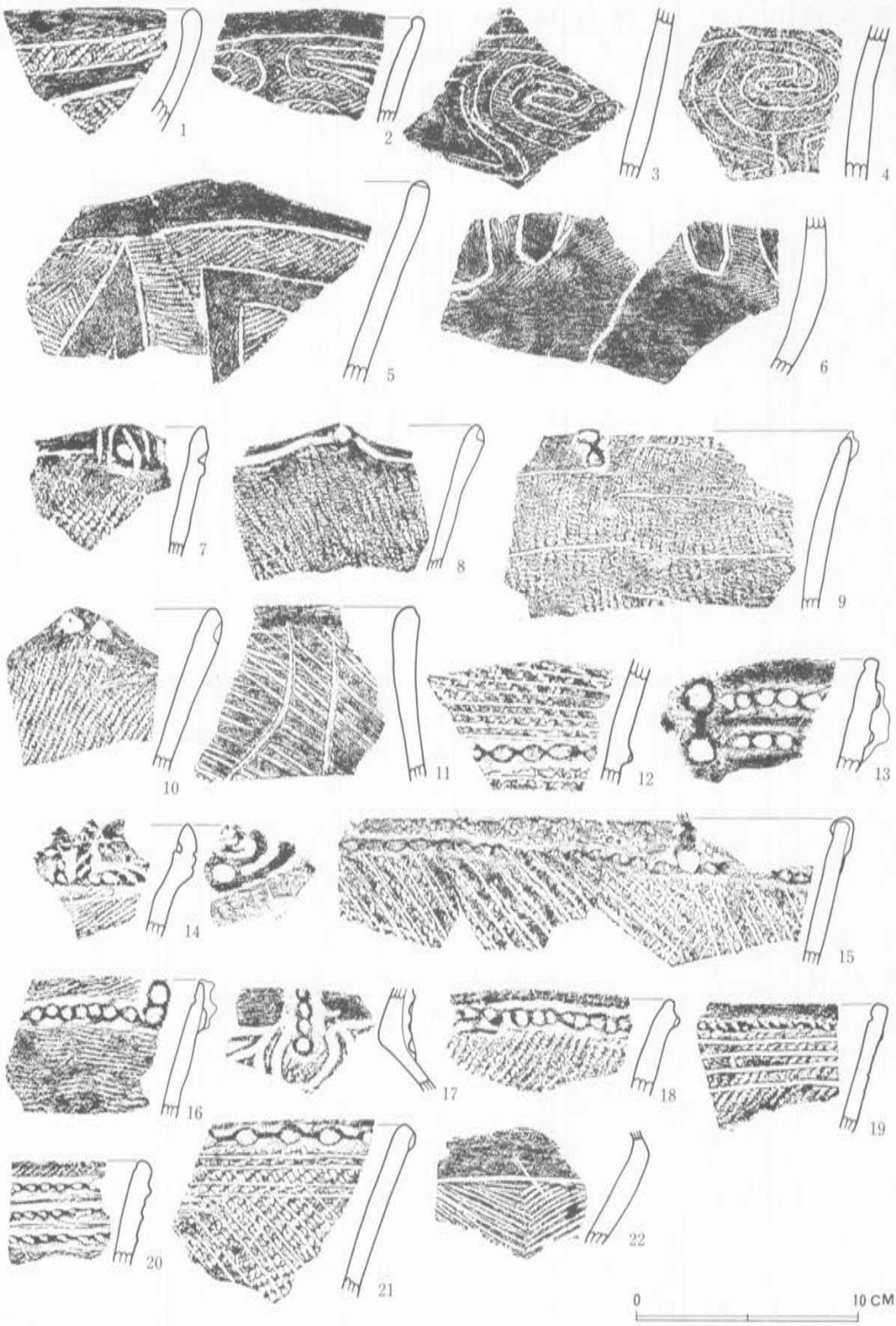
第72図　第７群Ａ類土器



第73図　第７群Ｂ・Ｃ類土器



第74図　第７群D・E類土器



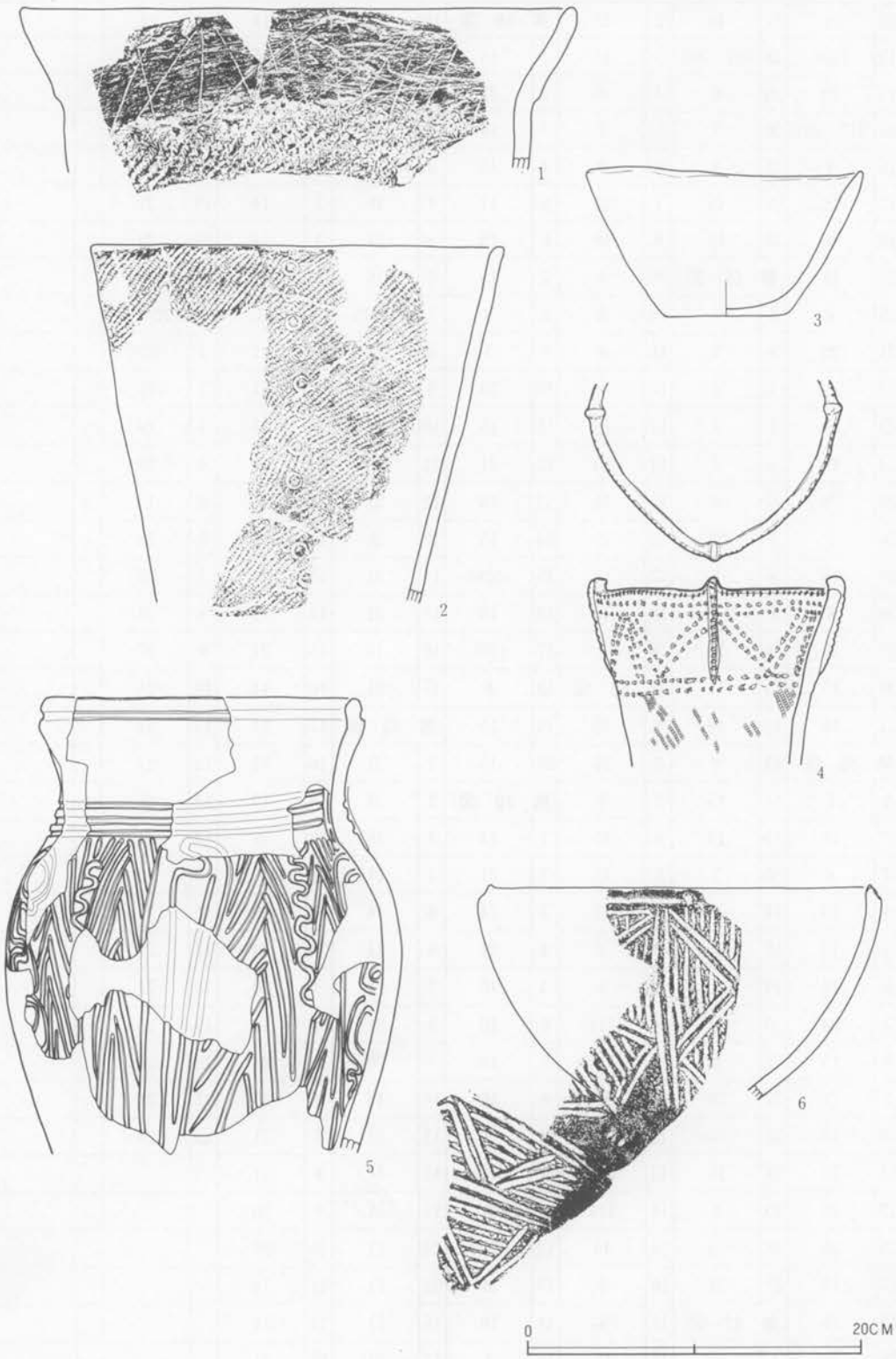
第75図　第７群Ｆ～Ｈ類土器

グリッド出土の土器　　（　）内は遺構番号

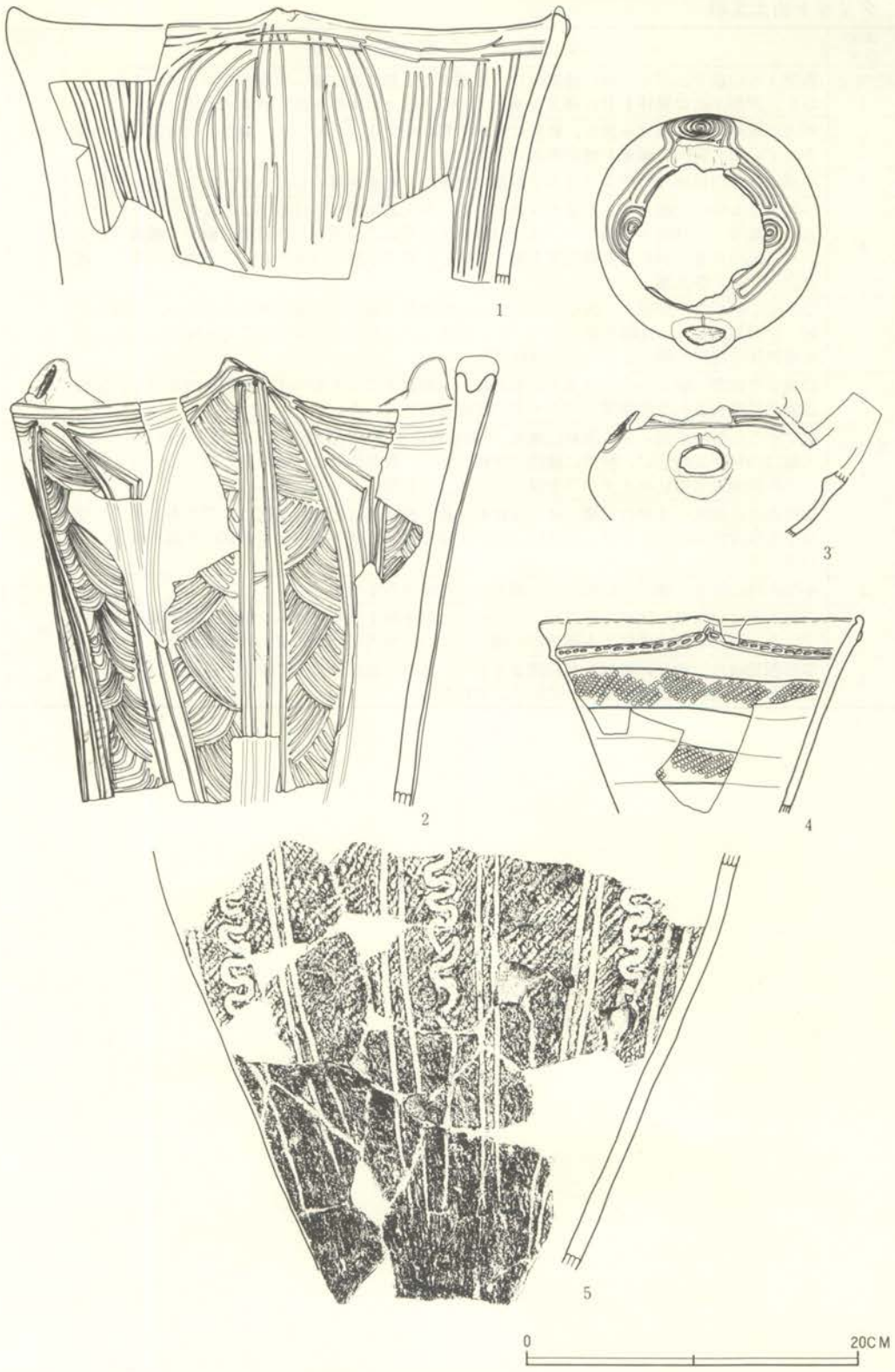
第 52 図		11	16	第 55 図		19	8	11	23	1	8	10	16	19	14
No.	グリッド	12	9	1	7	20	8	12	10	2	16	11	22	20	15
1	15	13	8	2	14	21	14	13	23	3	8	12	14	21	9
2	23	14	21	3	16	第 57 図		14	16	4	10	13	15	22	16
3	15	15	9	4	8	1	3	15	8	5	15	14	15	第 63 図	
4	20	16	14	5	(013)	2	15	16	21	6	10	15	8	1	14区
5	15	17	9	6	16	3	16	17	21	7	8	16	(030)	2	8
6	16	18	16	7	23	4	14	18	16	8	8	17	13	3	16
7	9	19	17	8	3	5	16	19	14	9	14	18	8	4	14
8	(041)	20	16	9	15	6	8	20	21	10	8	19	8	5	15
9	15	21	16	10	8･15	7	(028)	21	14	11	7	20	16	6	8･15
10	8	22	14	11	20	8	(028)	第 59 図		12	21	21	8	7	7
11	9	23	16	12	8	9	(041)	1	15	13	16	22	16	8	8
12	8	24	9	13	16	10	3	2	21	14	14	23	24	9	(041)
13	8	25	9	14	24	11	16	3	23	15	15	24	10	10	16
14	24	26	16	15	16	12	16	4	15	16	8	25	16	11	16
15	28	第 54 図		16	16	13	8	5	15	17	4	26	3	12	21
16	16	1	16	17	8	14	8	6	15	18	15	27	(030)	13	15
17	16	2	16	第 56 図		15	10	7	10	19	15	第 62 図		14	16
18	16	3	8	1	8	16	16	8	16	20	8	1	8	15	17
19	24	4	16	2	16	17	14	9	20	21	(016)	2	(030)	16	23
20	16	5	8	3	8	18	16	10	15	22	14	3	8	17	16
21	23	6	(056)	4	16	19	8	11	8	23	23	4	8	18	4
22	16	7	(056)	5	10	20	16	12	24	24	24	5	7	19	8
23	9	8	14	6	(028)	21	16	13	16	25	16	6	16	20	23
24	16	9	(056)	7	15	22	7	14	14	26	8	7	8	第 64 図	
第 53 図		10	(056)	8	7	第 58 図		15	24	27	15	8	7	1	8
1	16	11	16	9	23	1	16	16	23	第 61 図		9	16	2	(048)
2	16	12	14	10	(028)	2	14	17	15	1	(114)	10	(114)	3	16
3	8	13	15	11	20	3	20	18	(028)	2	8	11	8	4	16
4	10	14	20	12	8	4	15	19	8	3	16	12	14	5	7
5	9	15	16	13	21	5	24	20	9	4	9	13	16	6	16
6	16	16	16	14	8	6	16	21	8	5	17	14	24	7	8
7	(041)	17	16	15	(056)	7	16	22	8	6	8	15	(028)	8	16
8	14	18	16	16	9	8	15･8	23	16	7	7	16	8	9	16
9	(056)	19	(114)	17	9	9	15	24	17	8	21	17	8	10	7
10	16	20	4	18	16	10	16	第 60 図		9	14	18	8	11	8

グリッド出土の土器　　（　）内は遺構番号

12	21	17	16	2	15	第 69 図		16	7	18	14	14	21		
13	14区	18	217—001	3	15	1	15	第 71 図		19	15	15	21		
14	20	19	8	4	8	2	23	1	21	第 73 図		16	21		
15	217—001	20	9	5	7	3	16	2	23	1	21	17	21		
16	9	21	8	6	9	4	15	3	14	2	14	18	14		
17	16	22	15	7	21	5	17	4	16	3	14	19	21		
18	16	23	10	8	16	6	15	5	22	4	14	20	20		
19	16	第 66 図		9	7	7	15	6	16	5	21	21	19		
20	8	1	7	10	8	8	8	7	14・15	6	3	第 75 図			
21	20	2	7	11	8	9	3	8	22	7	21	1	(030)		
22	8	3	8	12	16	10	20	9	21	8	21	2	21		
23	8	4	3	13	16	11	15	10	21	9	21	3	14		
24	16	5	7	14	15	12	21	11	21	10	21	4	20		
25	20	6	8	15	15	13	16	12	21	11	21	5	14		
26	9	7	20	16	23	14	15	13	20	12	15	6	21		
27	16	8	8	17	15	15	(028)	14	21	13	21	7	20		
28	8	9	8	18	15	16	15	15	21	14	21	8	21		
29	16	10	15	19	8	17	14区	16	14	15	21	9	27		
30	15	11	15	第 68 図		18	8	17	21	16	14	10	21		
31	14	12	16	1	15	19	15	第 72 図		17	21	11	21		
第 65 図		13	8	2	21	20	15	1	21	18	21	12	21		
1	8	14	15	3	8	第 70 図		2	21	19	19	13	27		
2	15	15	15	4	15	1	14	3	16	20	27	14	21		
3	8	16	7	5	15	2	21	4	21	第 74 図		15	19		
4	23	17	8	6	15	3	14	5	14	1	20	16	21		
5	15	18	8	7	8	4	21	6	14	2	20	17	21		
6	16	19	15	8	8	5	16	7	21	3	20	18	21		
7	20	20	21	9	(114)	6	16	8	21	4	22	19	20		
8	15	21	9	10	(056)	7	14	9	20	5	21	20	21		
9	21	22	20	11	15	8	16	10	14	6	21	21	21		
10	16	23	(056)	12	22	9	9	11	21	7	21	22	24		
11	20	24	16	13	(041)	10	15	12	14	8	21				
12	16	25	8	14	(114)	11	8	13	21	9	20				
13	20	26	15	15	15	12	(114)	14	21	10	27				
14	16	27	21	16	8	13	21	15	21	11	14				
15	14	第 67 図		17	8	14	16	16	21	12	14				
16	9	1	15	18	15	15	8	17	21	13	21				



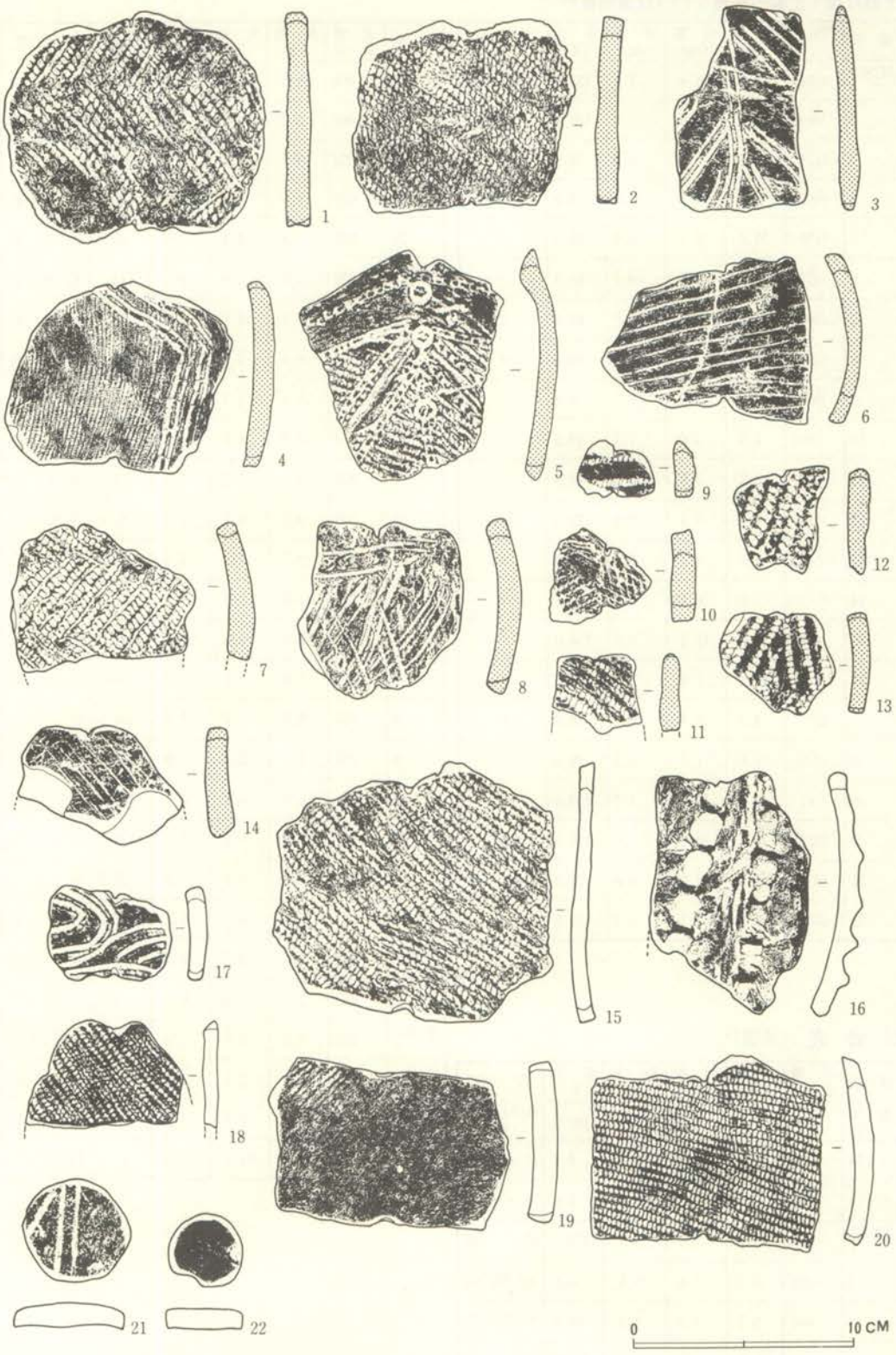
第76図　グリッド出土の土器



第77図　グリッド出土の土器

グリッド出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第76図1	頸部より口縁を広げる深鉢口縁部破片。頸部までは無文地に細い沈線を交差するよう施しており，頸部下には原体ＬＲの縄文を施している。胎土に繊維を含む黒浜式土器。	27－1
2	地文に原体ＲＬの縄文を施し，縦位に円形竹管刺突文を施している。縄文は口唇直下まで施されている。胎土に繊維を含む黒浜式土器。	27－3
3	小型の鉢。口唇部はやや尖りぎみで胴部は肥厚し，底面を薄くしている。無文。遺存度½	
4	小突起を４単位で廻らせる小型の深鉢形土器。各突起頂部からは垂下する隆帯を貼り付けており，隆帯上には刻みを施している。口縁部文様帯はこの垂下した隆帯の範囲で構成されており，細い竹管工具による刺突文を施している。胴下半部には原体ＲＬの細縄文を施す。遺存度⅔。第７群土器	27－4
5	口縁部をやや広げ頭部より胴をふくらませる深鉢形土器。口縁部は無文帯を呈し，口唇直下および頭部には太い沈線を廻らせている。頸部以下は波状の沈線を懸垂させ縦位に区画し間を綾杉状に沈線を満たしている。遺存度⅔	27－5
6	口縁より底部へ緩やかにすぼまる小型の鉢。口唇直下には１条の沈線を廻らせている。文様は縦位に満たされた沈線間にジグザグの沈線を施している。	
第77図1	緩やかな小波状を廻らせる深鉢口縁部。半截竹管による平行沈線によって施文を行っている。文様は口唇下に横位の，胴部に縦位の沈線を施し，波状頂部より幅のある縦位の区画を行ないその両側に半弧状のモチーフを描いている。遺存度⅔。	27－6
2	緩やかな小波状を３単位で廻らせる深鉢形土器。波状部は肥厚し頂部には凹を有する。文様は１同様波状頂部から垂下した沈線に弧状沈線を付随させ区画内にも弧状の沈線を満たしている。¾。	28－1
3	小型の注口土器。頸部下に施された渦巻状の沈線のみを残す。	28-2･4
4	口唇内面には１条の沈線を廻らせ，器外面には粘土紐を貼り付けヘラ状の工具で刺突を行っている。胴部には沈線による横位の区画を行ない区画内には原体ＲＬの縄文を施している。	28－3
5	深鉢胴部破片。地文に原体ＬＲの縄文を施し，２本の直線によって縦位の区画を行ない，１区画おきに波状沈線を懸垂させている。遺存度½	28－5



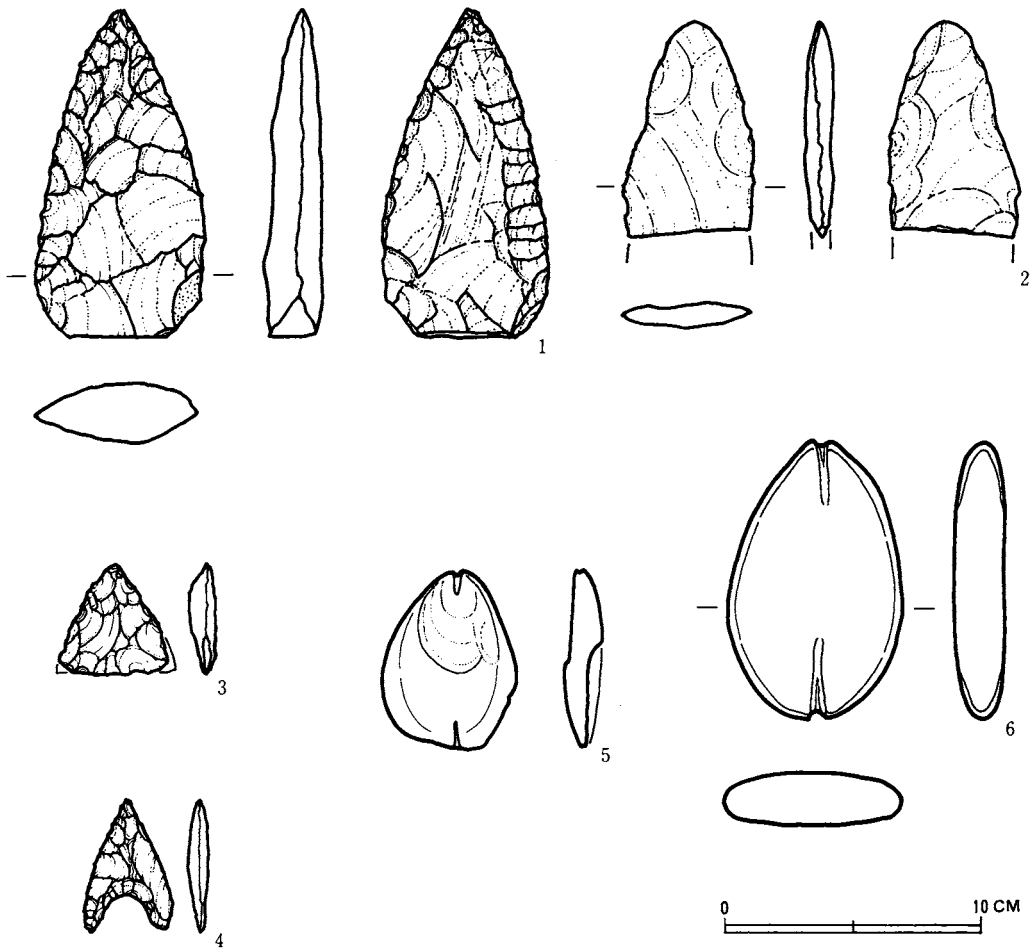
第78図　土器片錘・土製円板

土器片錘・土製円板表　（　）は遺構番号

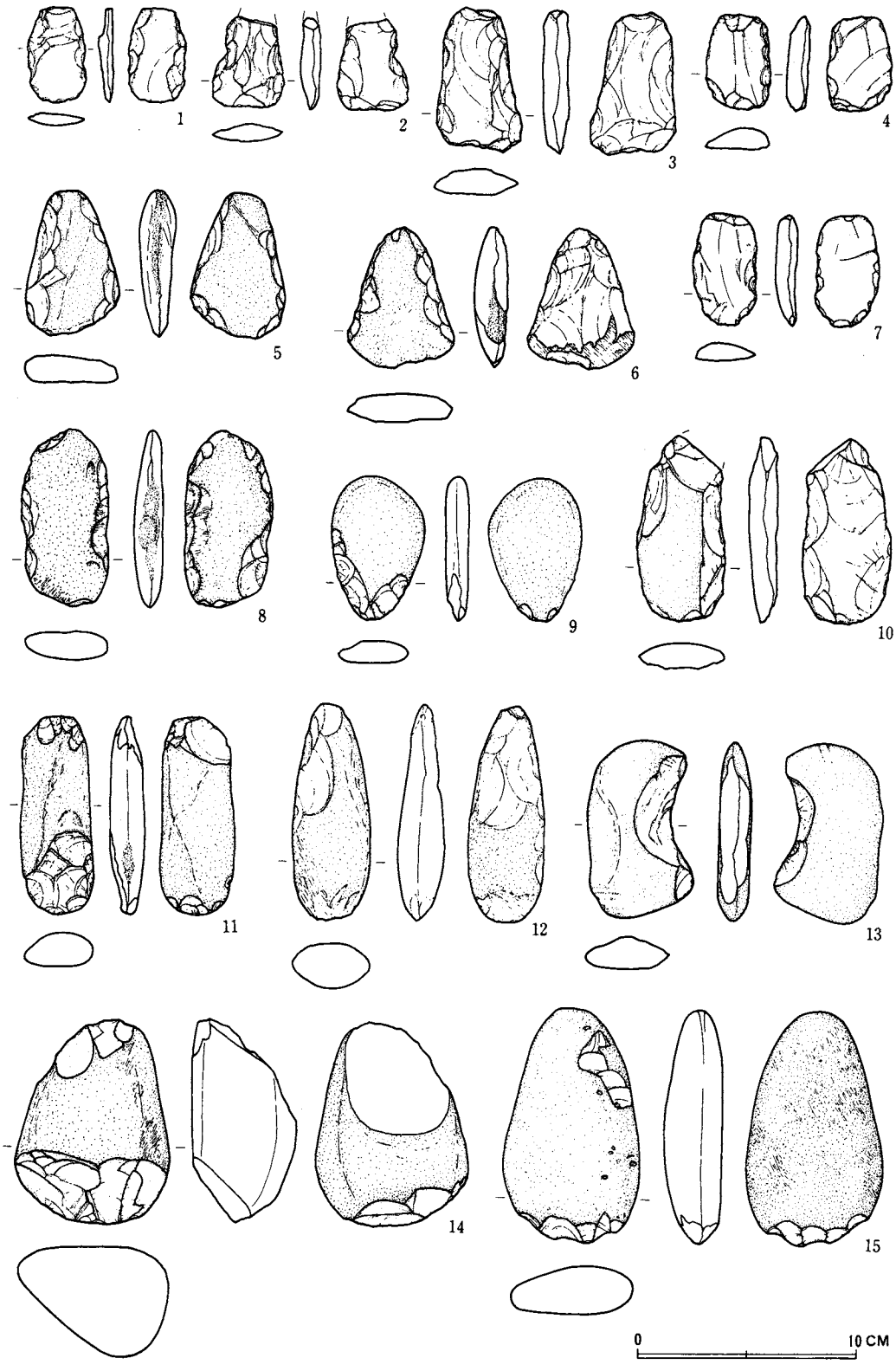
挿図	グリッドNo	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類
第78図 1	(008)	10.0	11.9	1.1	153.0	土器片錘
2	(008)	8.7	9.9	1.0	101.2	〃
3	G16	9.3	5.6	0.9	59.3	〃
4	(003)	8.7	11.1	1.0	114.5	〃
5	G08	10.2	9.5	1.0	91.0	〃
6	(025)	7.1	9.6	0.7	64.0	〃
7	(007)	6.2	8.2	0.8	64.5	〃
8	(024)	7.7	7.5	0.8	69.5	〃
9	(052)	2.5	3.5	0.9	9.0	〃
10	(103)	4.3	4.6	1.1	19.5	〃
11	(007)	(3.5)	3.8	1.0	14.0	〃
12	(024)	4.7	4.5	0.9	22.5	〃
13	(052)	4.6	4.8	0.9	25.0	〃
14	G15	(5.0)	(6.8)	0.7	42.5	〃
15	(008)	11.6	12.5	0.8	156.0	〃
16	(011)	10.5	7.0	1.1	85.5	〃
17	G21	4.3	5.4	0.7	26.0	〃
18	(025)	(4.8)	7.0	0.7	29.5	〃
19	G07	6.9	10.6	1.1	139.4	〃
20	(025)	8.5	10.6	1.0	109.0	〃
21	(034)	4.5	4.8	0.8	21.3	土製円板
22	(034)	3.1	3.2	0.9	13.5	〃

石器表　(遺構分)

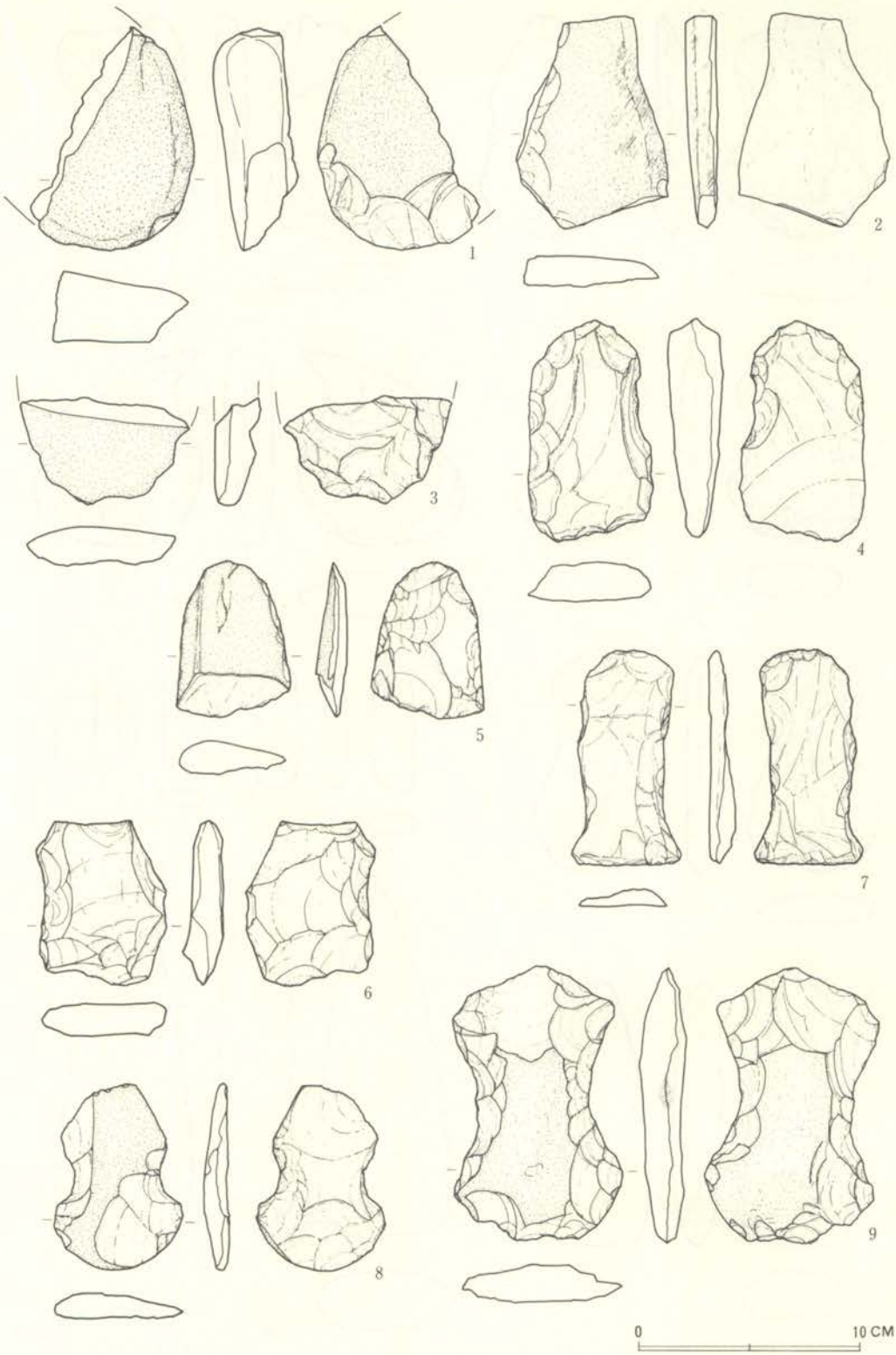
挿図	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
第7図 17	007	8.1	(4.7)	3.4	182.3	角閃石安山岩
18	007	2.2	1.2	0.4	0.7	チャート
19	007	2.5	(1.7)	0.4	0.9	チャート
第13図 1	008	15.2	9.5	5.8	1332.5	玲岩
2	008	(6.9)	(3.8)	3.5	57.0	多孔質安山岩
3	008	6.7	(4.3)	4.8	86.0	多孔質安山岩
4	008	(10.0)	8.5	4.5	573.0	玲岩
5	008	8.5	6.3	3.0	230.0	砂岩
6	008	5.7	5,2	1.5	56.0	頁岩
第19図 22	025	9.7	4.6	2.3	122.0	
23	025	8.6	3.2	3.0	99.5	玲岩
24	025	5.5	4.4	3.0	81.0	安山岩
第22図 21	026	5.2	2.8	0.7	14.2	粘板岩
22	026	7.2	(4.1)	2.0	83.5	砂岩
23	026	6.9	5.9	3.0	157.5	砂岩
24	026	10.4	5.3	2.5	197.5	砂岩
第51図 1	034	(4.8)	4.0	1.3	31.0	緑色片岩
2	034	5.1	2.3	1.3	24.0	緑色片岩
3	034	9.2	5.1	1.6	83.0	雲母片岩
4	034	(9.6)	5.3	2.9	342.0	輝緑岩
5	034	(7.4)	7.3	3.8	316.0	安山岩
6	034	(10.3)	8.6	4.9	547.0	玲岩
7	034	7.9	5.9	2.4	155.0	砂岩
8	034	9.0	5.2	1.4	101.5	砂岩
9	034	6.5	(5.4)	2.9	140.0	安山岩
10	034	(5.9)	(10.1)	3.1	162.5	多孔質安山岩
第26図 8	052	7.0	5.6	2.0	124.5	砂岩
9	052	9.3	4.9	2.1	138.5	砂岩
10	052	(9.9)	(10.5)	(6.4)	1001.5	玲岩
第28図 1	063	2.4	3.2	0.4	2.5	頁岩
2	063	2.1	(1.6)	0.7	1.7	チャート
第33図 9	103	9.2	7.6	5.2	551.0	輝石安山岩
10	103	6.5	3.9	1.2	45.0	頁岩
第42図 21	119	8.9	6.0	2.6		斑岩
22	119	(14.4)	21.4	4.5		輝石安山岩



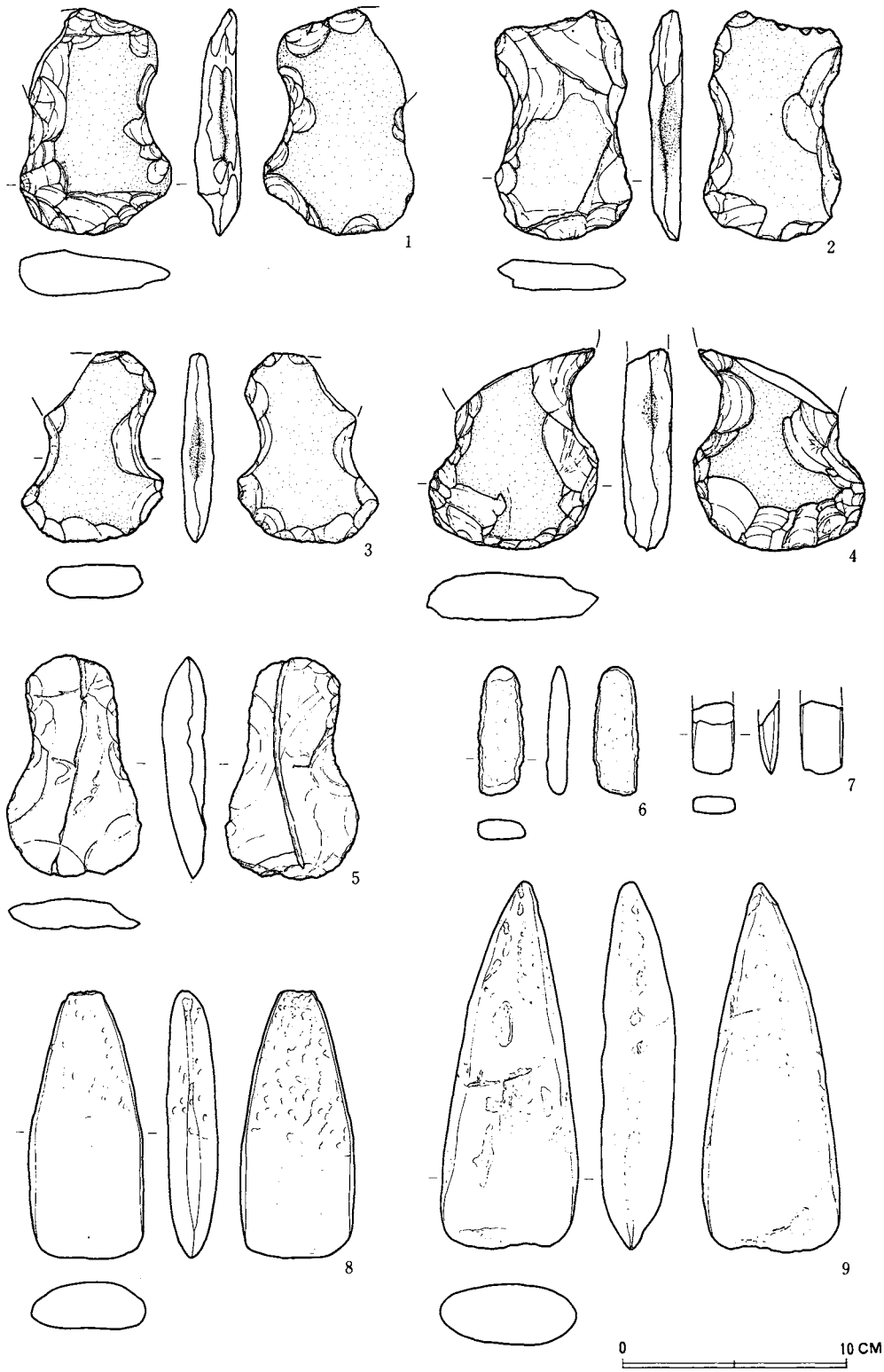
第79図　尖頭器・石鏃・石錘



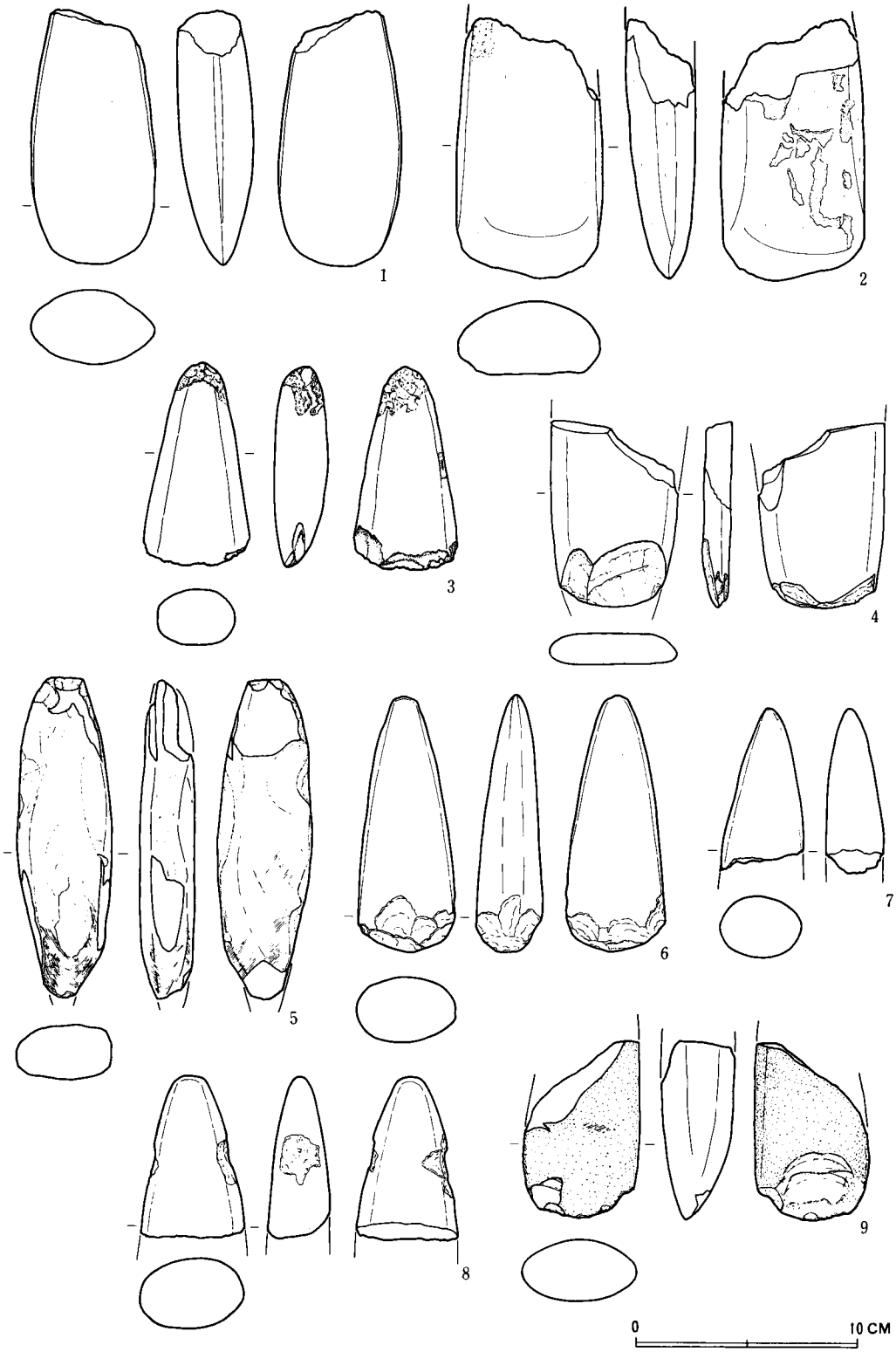
第80図　打製石斧



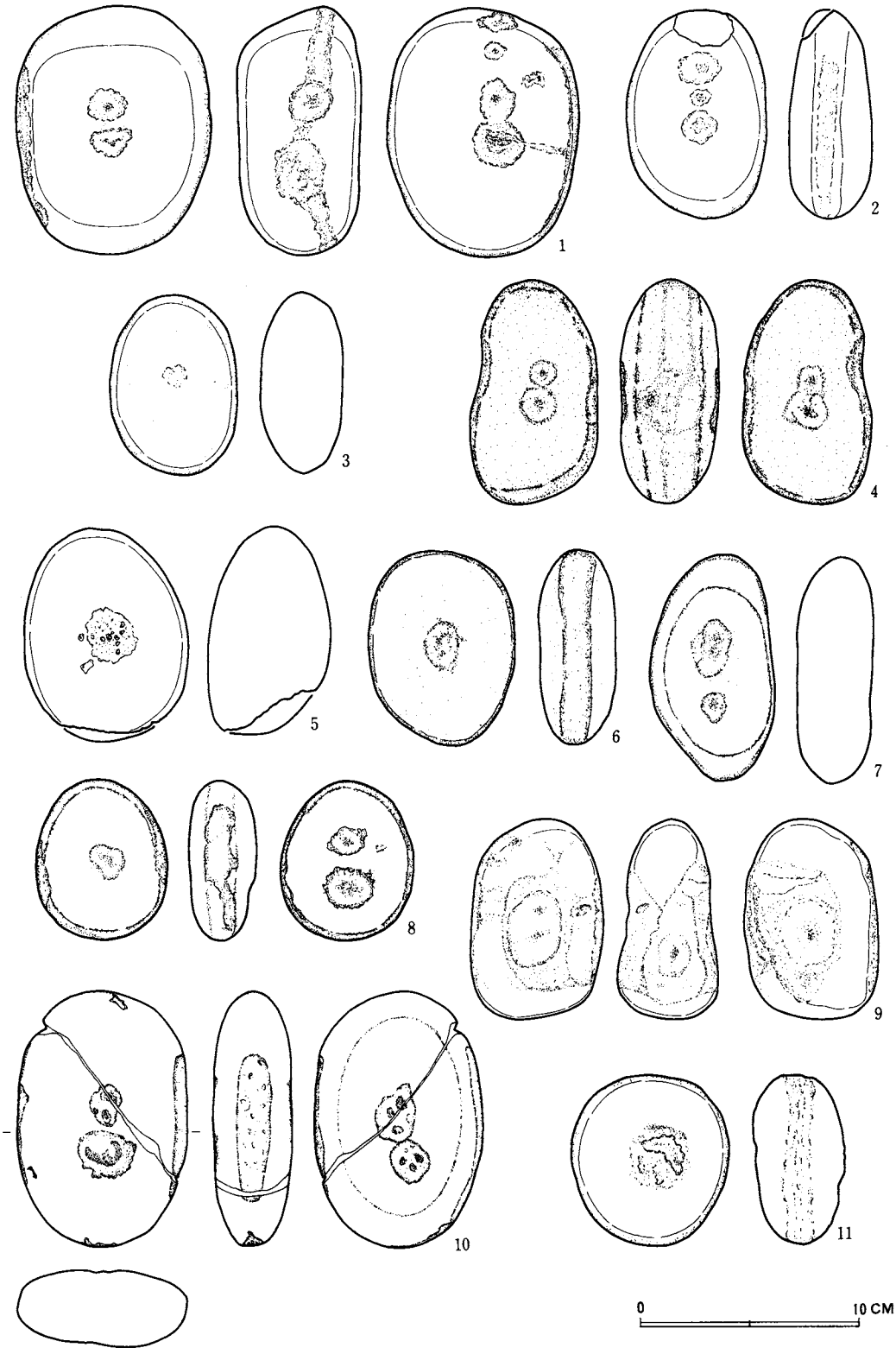
第81図　打製石斧



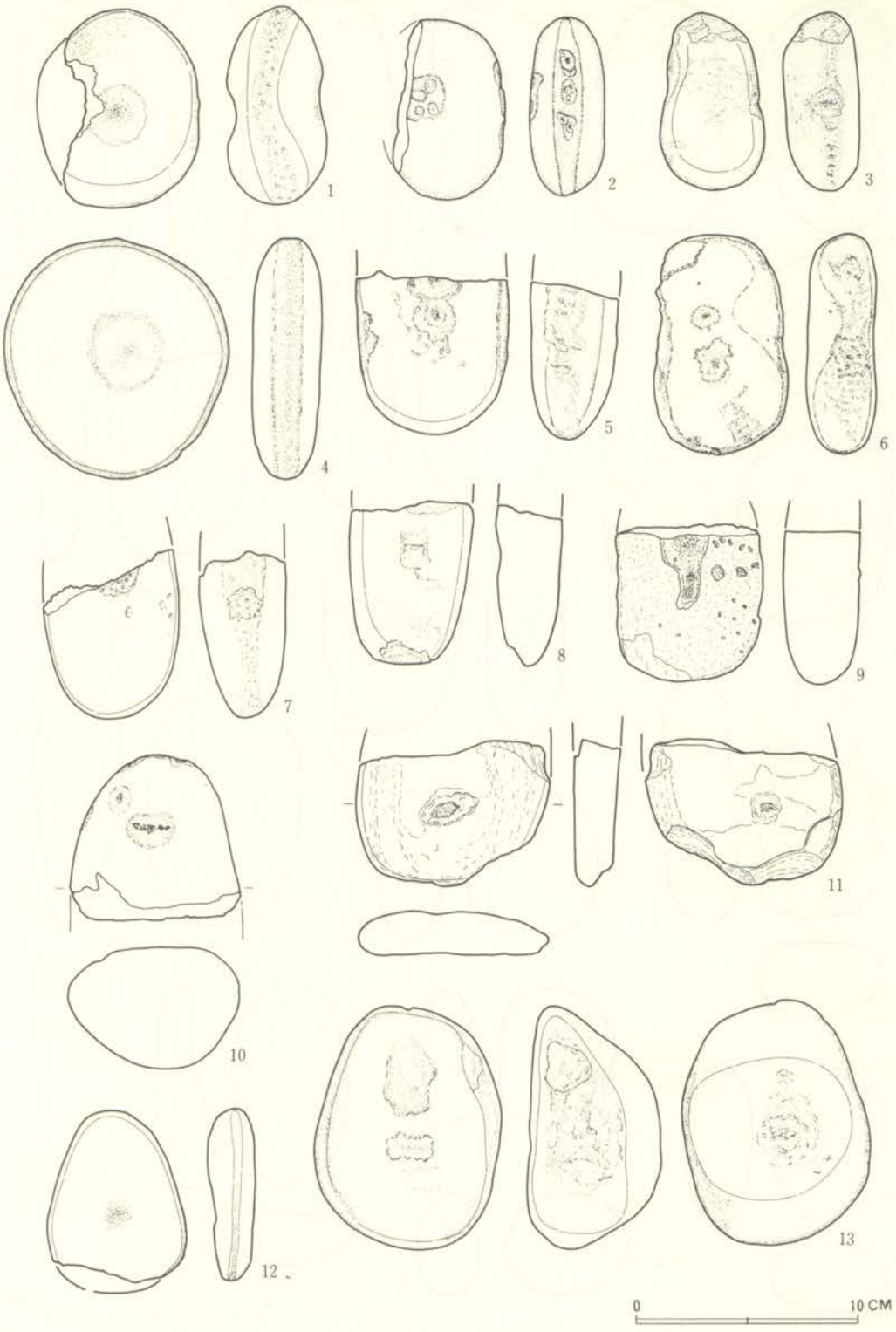
第82図　打製石斧・磨製石斧



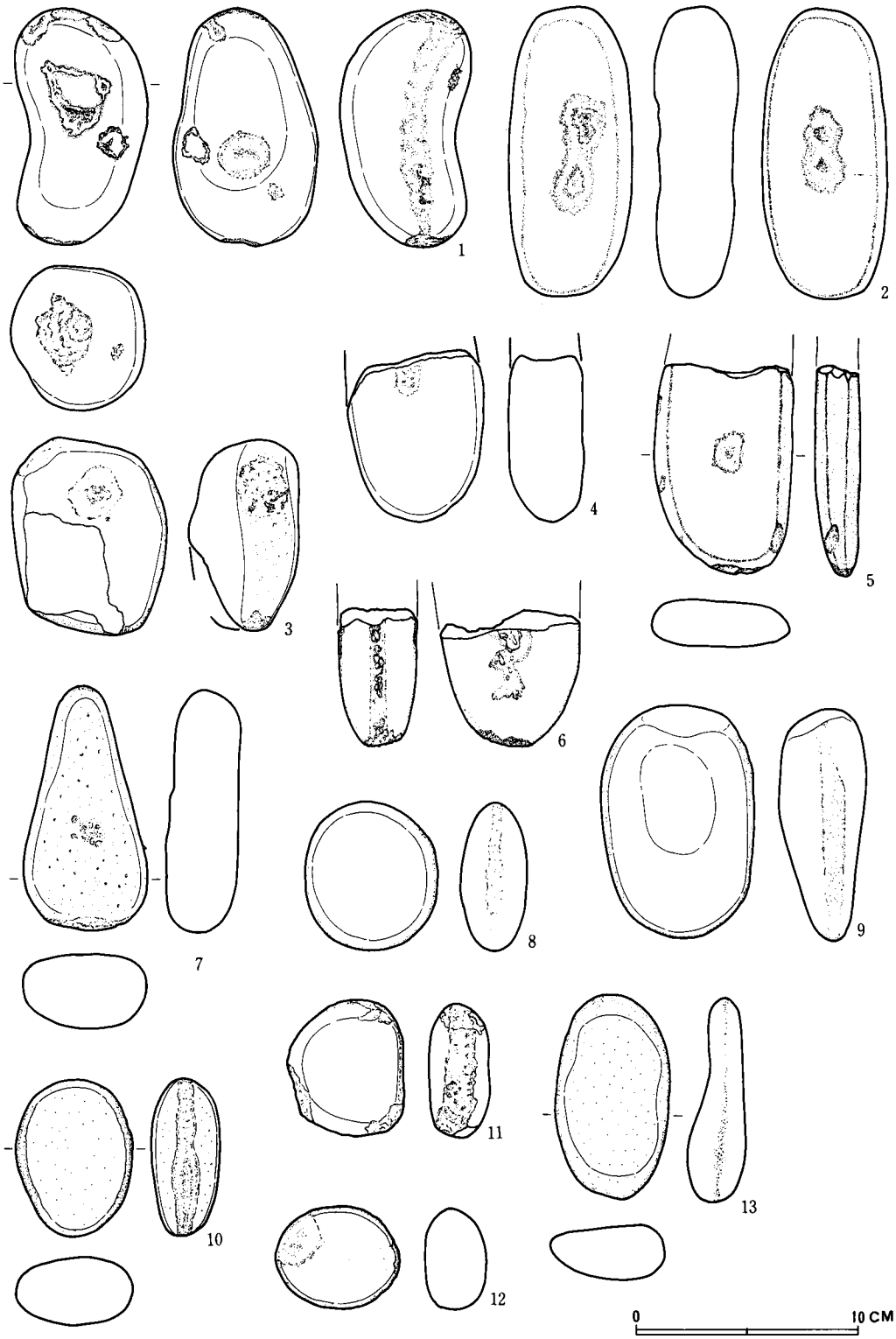
第83図　磨製石斧



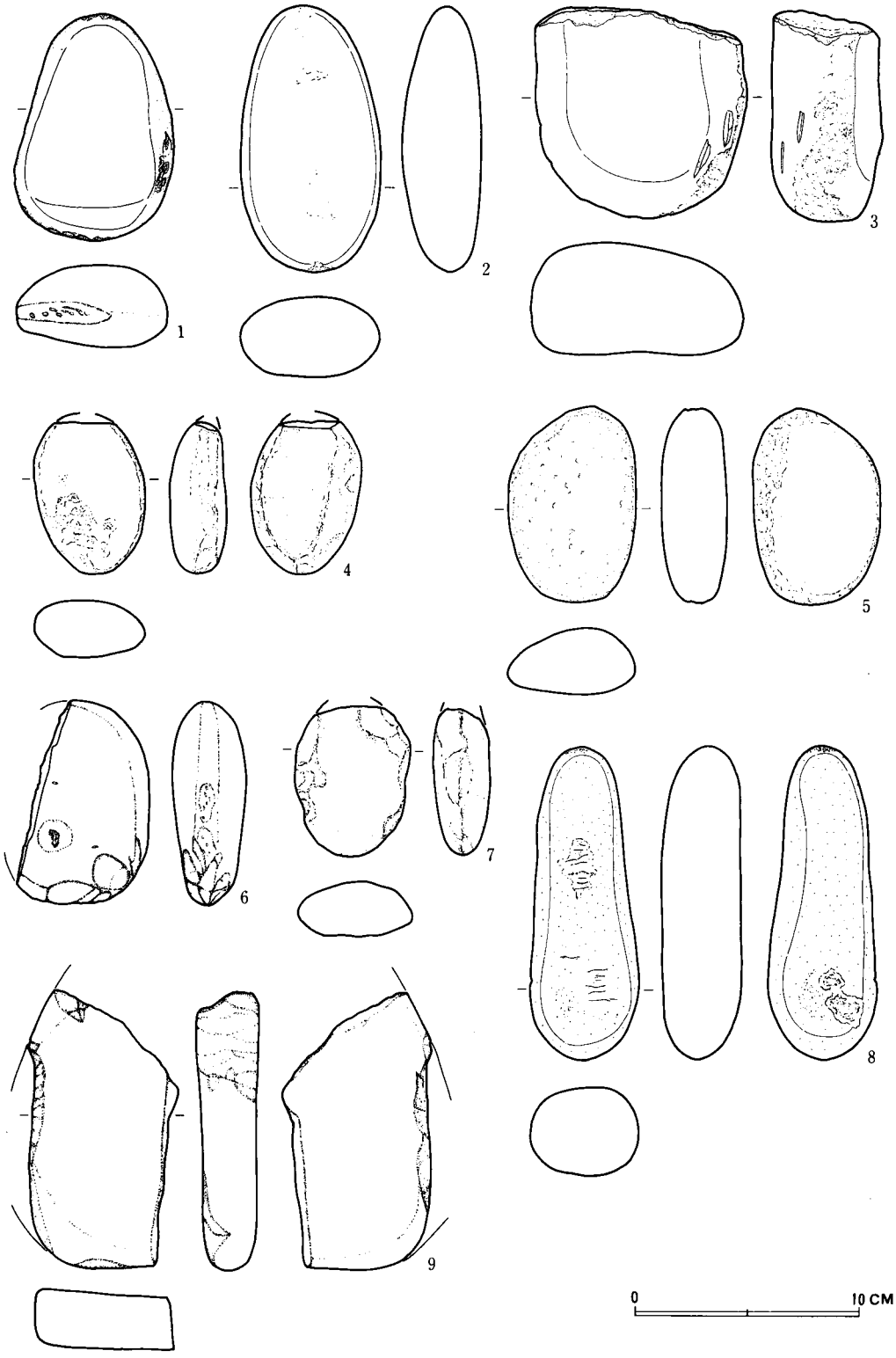
第84図　凹　　石



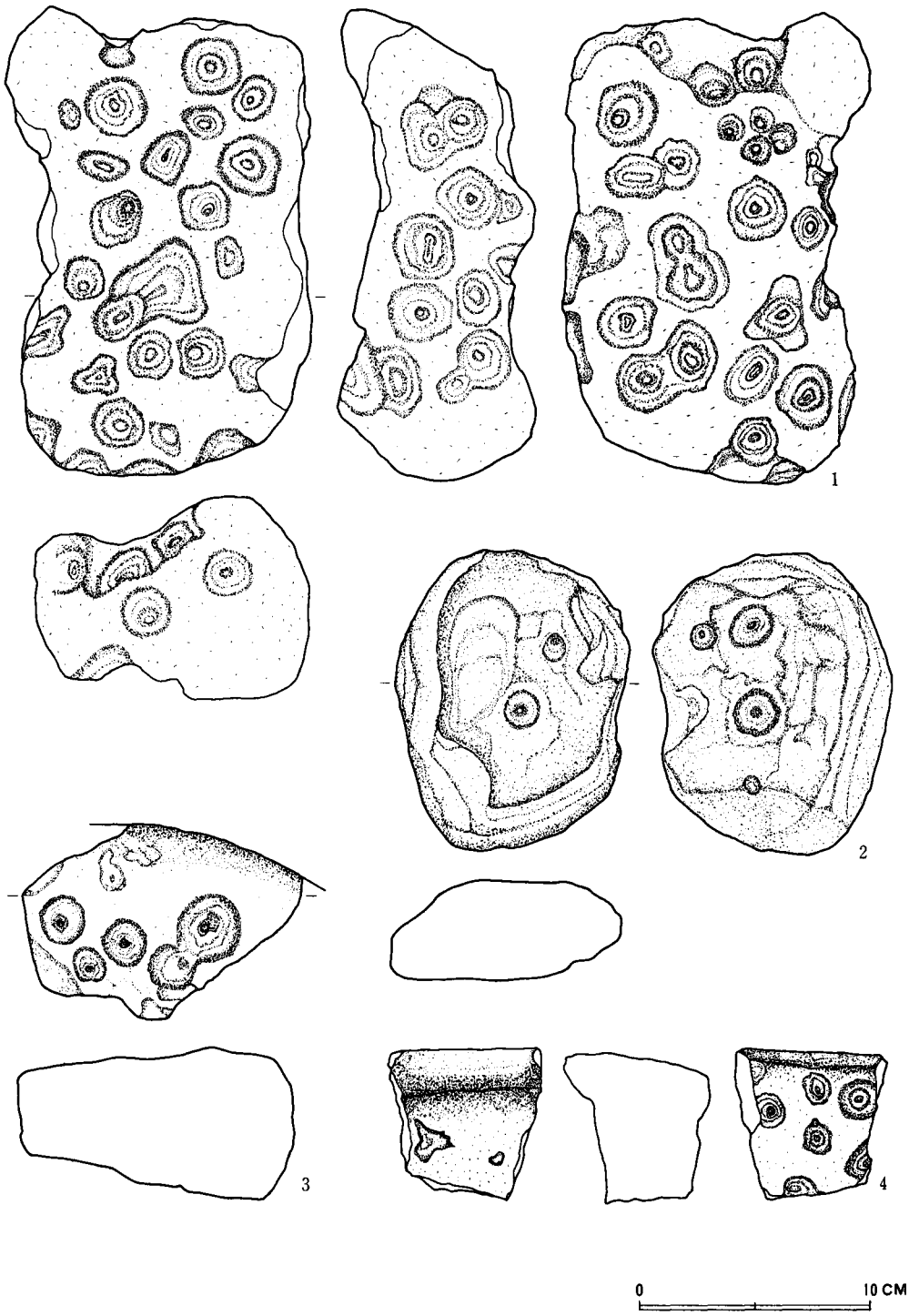
第85図　凹　　石



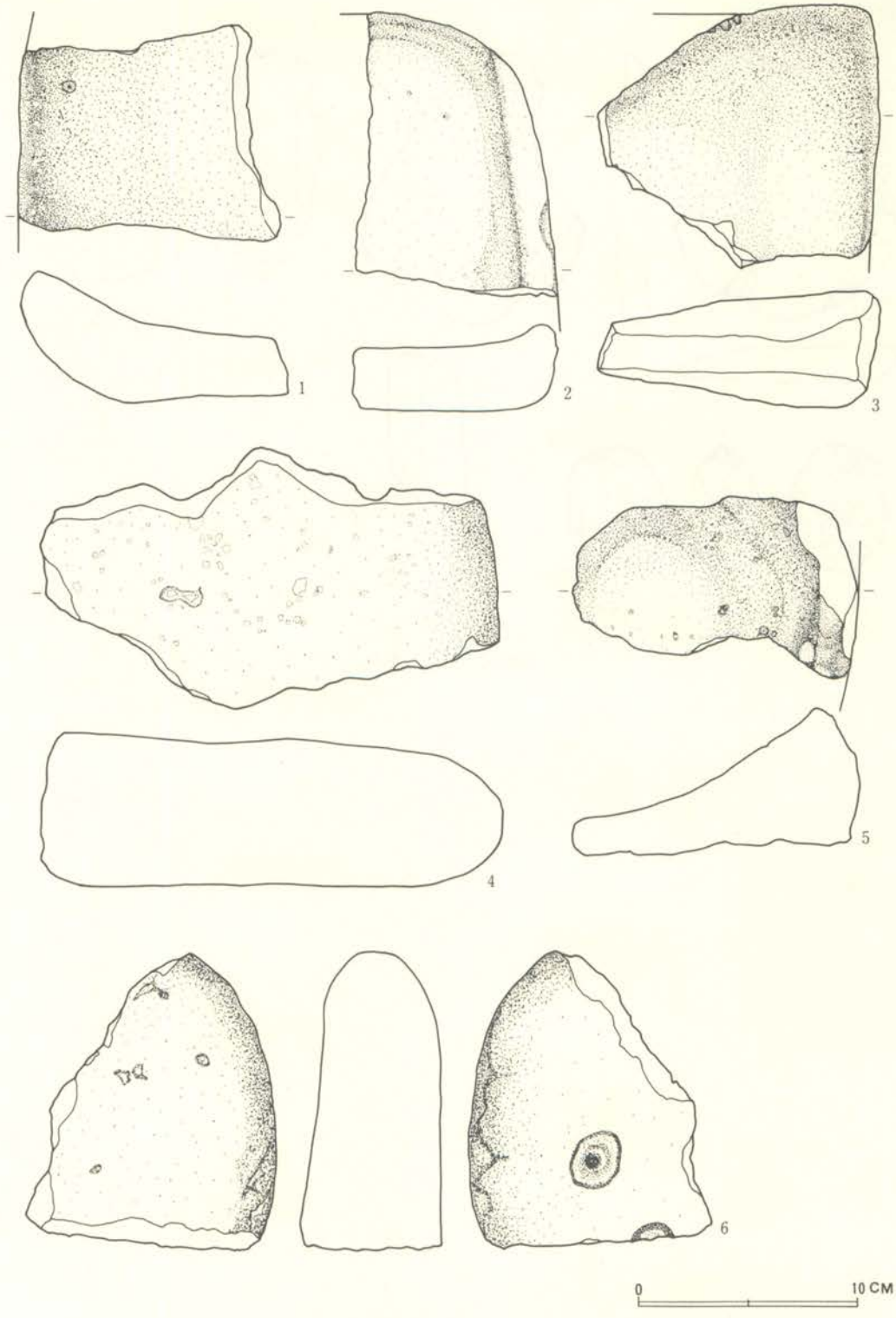
第86図　凹石・磨石



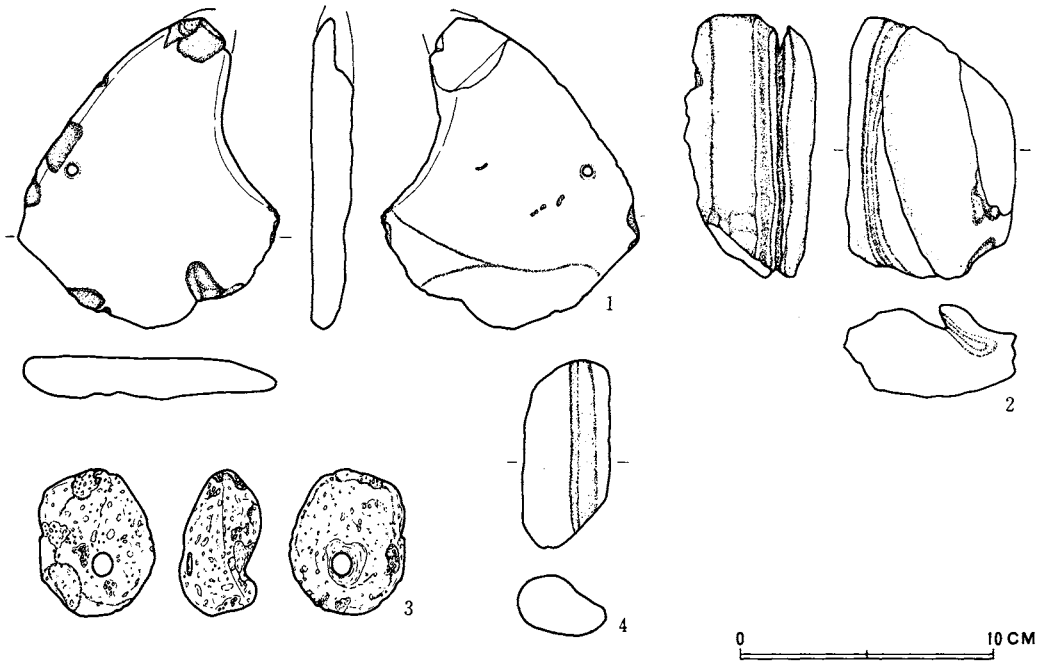
第87図　磨石・敲石



第88図　凹石・石皿



第89図　石　　Ⅲ



第90図　特殊石製品

石器表 （ ）は遺構番号

挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
第79図1	G11	6.4	3.3	1.1	28.5	砂岩
2	G15	(4.2)	2.5	0.6	7.5	粘板岩
3	G17	2.1	(2.1)	0.5	1.9	チャート
4	G21	2.6	1.7	0.4	1.0	チャート
5	(016)	3.5	2.6	0.6	7.2	頁岩
6	G20	5.3	3.5	1.1	28.0	細粒砂岩
第80図1	G14	4.4	2.5	0.6	9.0	細粒砂岩
2	G16	4.2	3.2	0.9	14.5	細粒砂岩
3	G24	6.6	4.0	1.3	45.5	緑色片岩
4	G16	4.4	3.0	1.0	19.8	頁岩
5	G16	6.6	4.3	1.6	56.8	蛇紋岩
6	G23	6.4	4.9	1.5	58.5	弱変成砂岩
7	G21	5.1	2.9	1.0	17.5	頁岩
8	G23	7.9	4.0	1.3	51.5	泥岩
9	G24	6.4	4.3	1.1	44.0	細粒砂岩
10	G16	8.4	4.0	1.4	58.0	頁岩
11	G23	8.8	3.4	1.6	66.0	細粒砂岩
12	G15	9.7	3.5	2.1	103.0	弱変成砂岩
13	G08	8.0	5.0	1.5	82.0	砂岩
14	G08	(9.1)	7.0	4.9	318.0	安山岩
15	G16	10.5	6.3	2.7	252.5	閃緑岩
第81図1	000	(10.1)	(7.4)	3.3	283.5	輝緑岩
2	G15	9.6	6.8	1.4	118.0	流紋岩
3	G08	(4.8)	(7.6)	(1.8)	76.0	粗粒砂岩
4	(010)	9.9	5.2	2.5	165.0	頁岩
5	G20	6.9	5.1	1.5	59.0	砂岩
6	G14	7.3	5.6	1.5	93.5	頁岩
7	G14	9.5	4.8	1.2	56.5	粘板岩
8	G14	8.4	5.8	1.1	51.5	頁岩
9	G21	12.3	7.3	2.0	186.0	凝灰岩
第82図1	G21	10.1	6.7	2.1	142.0	流紋岩
2	G14	10.3	6.2	1.5	126.0	流紋岩
3	G21	8.3	6.3	1.5	90.5	流紋岩
4	G22	8.9	7.6	2.2	179.0	砂岩
5	G07	9.7	5.8	1.9	111.0	頁岩
6	G14	5.6	2.1	1.1	18.0	頁岩
7	G21	3.2	1.9	1.0	9.5	珪質頁岩
8	G07	11.7	5.2	2.3	229.0	蛇紋岩
9	G07	15.7	5.7	3.3	462.0	蛇紋岩化した砂岩
第83図1	G13	(11.5)	5.6	3.4	348.0	緑泥石化した砂岩
2	G14-70	(11.7)	6.5	3.2	400.0	弱変成砂岩
3	G14	9.0	4.8	2.4	159.0	蛇紋岩
4	G26-30	(8.2)	(5.8)	1.3	106.5	細粒砂岩
5	G21	(14.2)	4.3	2.5	216.5	黒色片岩
6	G27	11.4	4.5	2.9	220.5	弱変成緑色砂岩
7	G08	(7.3)	3.7	2.8	92.0	緑泥石化した火山岩
8	G09	(7.3)	(4.6)	3.1	130.0	弱変成砂岩
9	G04	(7.9)	5.3	3.3	173.5	砂岩
第84図1	G16	11.4	9.0	5.6	956.0	花崗斑岩
2	G14	9.5	6.5	3.8	337.5	砂岩
3	(010)	8.1	5.8	3.8	272.0	玄武岩
4	G21	10.0	5.9	4.5	392.5	安山岩
5	G20	9.1	7.5	5.6	498.0	斑岩
6	G08	8.7	6.7	3.5	318.0	安山岩
7	G08	10.1	5.7	3.4	302.0	粗粒砂岩
8	G04	7.2	6.0	3.1	191.5	玲岩
9	G16	9.0	6.2	4.6	350.0	凝灰岩
10	G08	11.5	7.8	3.6	579.0	安山岩
11	000	7.6	7.1	4.2	330.5	斑岩
第85図1	G11	8.9	(6.2)	4.5	287.0	安山岩
2	G08	8.1	(5.0)	3.4	217.5	玲岩
3	G08	8.0	4.7	3.4	172.0	砂岩
4	G14-50	10.8	10.1	3.2	516.0	閃緑岩
5	G24	(6.9)	7.0	4.0	336.5	安山岩
6	G08	9.8	6.1	3.2	292.5	安山岩
7	000	(7.4)	6.1	4.9	226.0	安山岩
8	000	(7.2)	5.7	3.0	222.5	輝石安山岩

挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
9	G08	(6.8)	6.7	3.3	148.5	多孔質安山岩
10	G16	(7.4)	7.7	5.5	442.0	半花崗岩
11	(112)	(6.5)	8.8	2.1	166.5	雲母片岩
12	G08	(7.7)	6.2	2.1	157.0	斑岩
13	G21	10.9	8.6	6.1	797.5	安山岩
第86図1	(016)	10.7	6.5	6.4	602.0	安山岩
2	G21	13.2	5.6	3.8	448.0	安山岩
3	G15	8.8	6.9	5.0	457.5	安山岩
4	G16	(7.4)	6.2	3.5	222.0	砂岩
5	G15	(9.3)	6.3	2.0	201.0	細粒砂岩
6	G16	(6.0)	(6.4)	3.6	184.0	斑岩
7	G08	10.8	5.5	3.3	573.0	玲岩
8	G22	6.6	6.0	3.0	169.0	砂岩
9	G15	10.3	6.9	4.0	382.0	砂岩
10	G04	6.9	5.3	3.0	149.5	砂岩
11	G17	6.0	5.3	2.8	145.0	砂岩
12	G07	5.7	3.6	2.8	107.0	砂岩
13	G21	9.1	5.2	2.5	150.0	硬砂岩
第87図1	G24	10.2	7.1	3.7	366.0	硬砂岩
2	G09	11.9	6.3	3.5	362.5	砂岩
3	G15	(9.3)	9.5	5.0	632.5	細粒砂岩
4	G08	(6.7)	5.0	2.5	128.5	砂岩
5	G14	8.7	5.7	2.9	208.0	砂岩
6	G08	9.0	(6.0)	3.3	253.0	砂岩
7	000	(6.7)	5.2	2.5	109.0	砂岩
8	G08	13.9	4.9	3.8	675.5	細粒砂岩
9	G27	(12.3)	(6.7)	2.8	321.0	細粒砂岩
第88図1	G22	20.3	13.2	8.7	2100	輝石安山岩
2	G08	12.9	10.3	4.3	775	金雲母片岩
3	000	(12.0)	8.3	6.5	440	安山岩
4	G21	(6.5)	6.8	6.3	240	安山岩
第89図1	G14	(11.9)	(9.9)	3.7	610	安山岩
2	G16	(12.8)	(9.3)	3.1	410	安山岩
3	G20	(12.8)	(11.9)	5.2	630	多孔質安山岩

挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
4	G08	(20.9)	(11.7)	6.9	2100	石英玲岩
5	000	(13.1)	(8.1)	6.2	470	安山岩
6	G21	(13.4)	(11.3)	6.5	1140	安山岩
第90図1	G21	(12.2)	10.3	1.6	172.5	泥岩
2	G15	10.3	6.7	5.2	460	砂岩
3	G04	5.7	4.5	3.1	22.0	軽石
4	G08	7.3	3.5	2.3	77	珪質玲岩

(3)住居跡出土の動物遺体

貝層サンプル採取と処理・集計の方法について（第91図参照）

今回，同定・集計した花前Ⅰ遺跡の貝層のサンプルは，103号住居跡内に堆積していた貝層から採取されたもので住居跡は縄文時代前期の黒浜期に属すると考えられる。

採取および処理の方法は次のとおりである。

ⅰ）調査中に確認された貝層（平面積は約16㎡）に幅20cmのセクションを設定する（sec. 1～sec. 3)。

ⅱ）それぞれのセクションを任意に20cmごとに区切り，20cm×20cmのサンプル採取地点を設定する（st. 1～st. 16)。ただし，sec. 2-st. 6 のサンプルについては sec. 3 との関係から20cm×10cmの地点で採取を行った。

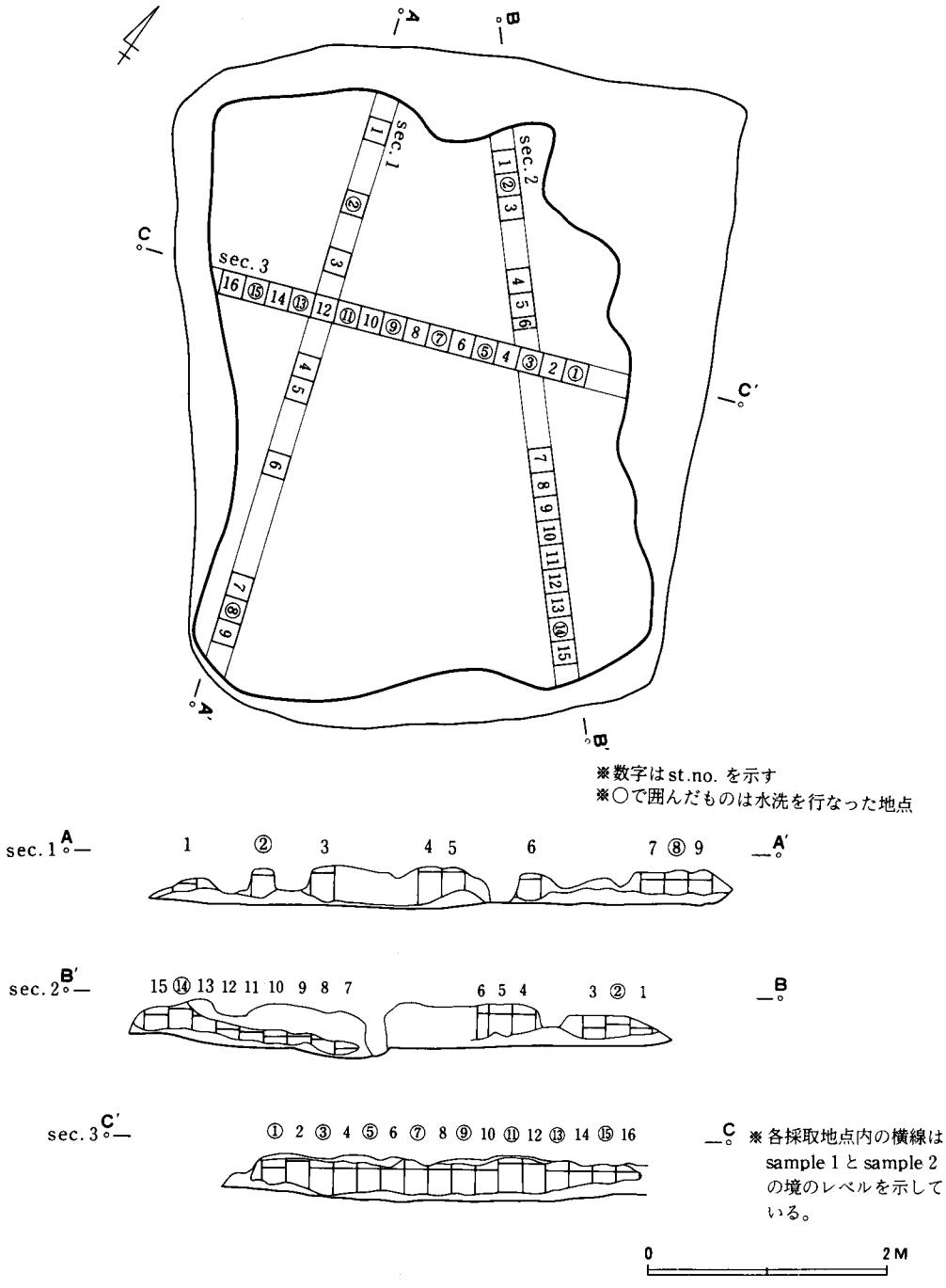
ⅲ）それぞれの採取地点の貝層を上から水平に 5 cmずつ採取する。これをサンプルの一単位（20cm×20cm× 5 cm＝2,000㎤）として上から番号を付ける（sample. 1～sample. 7)。従って各サンプルは sec. no., st. no., sample no. の組合せで表わされる。これ以後の記述では原則として，sec., st., sample の文字は省略する。例えば（2－4－2）の表記があれば，これは第2セクションの第4採取地点の上から2番目のサンプルであることを意味しているものとする。

ⅳ）このようにして採取されたサンプルの総数は40地点181サンプルであるが，水洗・同定・集計の作業を行ったのは，時間的な制約から12地点57サンプルにとどまった[*1)]。

ⅴ）それぞれのサンプルは9.52㎜，4.0㎜，2.0㎜，1.0㎜のメッシュを持つふるいを使って水洗し，各メッシュ面上に分離したものを乾燥後同定し，集計した。

ⅵ）貝類遺体のうち腹足類は，殻軸の残っているもののみを集計した。また斧足類遺体の集計は主歯を保存しているものを右殻と左殻を別々に行ない，数の多い方を用いた。同定および集計の方法については随時，主任調査研究員，小宮孟の教示を得た。

＊1）（3－5－3）は保管中に紛失し，分析できなかった。



第91図　103住居跡貝層サンプル採取位置

採取・同定の結果

(a)貝類遺体

第1表　貝層サンプル出土貝類種名一覧および集計総数

No.	種　名	学　名	総数	割合*)
腹足綱　Gastropoda				
前鰓亜綱　Prosobranchia				
原始腹足目　Archaeogastropoda				
ニシキウズガイ科　Trochidae				
1	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*	31	0.2
リュウテンサザエ科　Turbinidae				
2	スガイ	*Lunella coronata coreensis*	9	0.1
アマオブネ科　Neritidae				
3	カノコガイ	*Clithon sowerbianus*	4	+**)
中腹足目　Mesogastropoda				
ウミニナ科　Potamididae				
4	ウミニナ	*Batillaria sp.*	651	5.2
5	ヘナタリ	*Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata*	9	0.1
6	カワアイ	*Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis*	17	0.1
タマガイ科　Naticidae				
7	ツメタガイ	*Neverita (Glossaulax) didyma*	1	+
新腹足目　Neogastropoda				
アクキガイ科　Muricidae				
8	アカニシ	*Rapana thomasiana*	15	0.1
9	イボニシ	*Thais clavigera*	15	0.1
オリイレヨフバイ科　Nassariidae				
10	アラムシロ	*Hinia festiva*	9	0.1
斧足綱　Pelecypoda				
糸鰓亜綱　Filibranchia				
真多歯目　Eutaxodonta				
フネガイ科　Arcidae				
11	サルボウ	*Scapharca subcrenata*	227	1.6
タマキガイ科　Glycymeridae				
12	タマキガイ	*Glycymeris sp.*	1	+
13	ベンケイガイ	*Glycymeris (Veletuceta) albolineata*	1	+

No.	種　名	学　名	総数	割合
	翼形目　Pteromorphia			
	イタボガキ科　Ostreidae			
14	イタボガキ	*Ostrea denselamellosa*	8	0.1
15	マガキ	*Crassostrea gigas*	1170	9.3
	フナガタガイ科　Trapeziidae			
16	ウネナシトマヤガイ	*Trapezium (Neotrapezium) japonicum*	2	+
	弁鰓亜綱　Eulamellibranchia			
	異歯目　Heterodonta			
	マルスダレガイ科　Veneridae			
17	アサリ	*Ruditapes philippinarum*	5293	42.3
18	オキシジミ	*Cyclina sinensis*	605	4.8
19	カガミガイ	*Phacosoma japonicum*	8	0.1
20	ハマグリ	*Meretrix lusoria*	3673	29.4
	バカガイ科　Mactridae			
21	シオフキ	*Mactra veneriformis*	754	6.0
	マテガイ科　Solenidae			
22	マテガイ	*Solen (S.) strictus*	7	0.1
	ニッコウガイ科　Tellinidae			
23	サラガイ	*Peronidia venulosa*	3	+
	無面目　Adapedonta			
	オオノガイ科　Myidae			
24	オオノガイ	*Mya (Arenomya) arenaria oonogai*	1	+
	総　計		12514	99.7

*）集計総数に占める割合を表わす，単位はパーセント（%）
小数点以下第2位を四捨五入してある

**）＋は存在するが0.1%以下のものである

第２表　貝層サンプルにおける貝類遺体数

① sec. no.　②st. no.　③sample. no.

①	②	③ 貝種	1 イボキサゴ	2 スガイ	3 カノコガイ	4 ウミニナ	5 ヘナタリ	6 カワアイ	7 ツメタガイ	8 アカニシ	9 イボニシ	10 アラムシロ	11 サルボウ	12 タマキガイ	13 ベンケイガイ	14 イタボガキ	15 マガキ	16 ウネナシトマヤガイ	17 アサリ	18 オキシジミ	19 カガミガイ	20 ハマグリ	21 シオフキ	22 マテガイ	23 サラガイ	24 オオノガイ
1	2	1										1	68				1		54	2		55	3			
		2				6							22				24		28	8		58	11			
		3				5							8				5		80	3		125	15			
		4				5	1										17		35	29		34	6			
		5				2											8		19	22		25	6			
		計	0	0	0	18	1	0	0	0	0	1	98	0	0	0	55	0	216	64	0	292	41	0	0	0
	8	1				4							3			1	14		41			17	4			
		2				8	1						3				18		44			25	4			
		3				7	2						2			1	26		50			29	11			
		4	1			27	2						2				75		70	2		66	13			
		計	1	0	0	46	5	0	0	0	0	0	10	0	0	2	133	0	205	2	0	137	32	0	0	0
2	2	1				4							5				1		378	6		115	39			
		2				10							4				14		143	16		44	24			
		3	1			19			1				3			1	39		95	4		89	24			
		計	1	0	0	33	0	0	1	0	0	0	12	0	0	1	54	0	616	26	0	248	87	0	0	0
	14	1	2			13							2		1		37		93	13		59	11			
		2		1		22	1					1	1				47		102	1		43	24			
		3	1			7							2			1	8		126	5		50	23			
		4				17							1				40		8	1		41	19			
		計	3	1	0	59	1	0	0	0	0	1	6	0	1	1	132	0	329	20	0	193	77	0	0	0
3	1	1				13							4				6		77	5		87	12			
		2				13							4				50		148	4		94	12			
		3				1				1			4			1	4		187	1	1	48	12			
		4				5							2				1		244	2	1	18	10			
		計	0	0	0	32	0	0	0	1	0	0	14	0	0	1	61	0	656	12	2	247	46	0	0	0
	3	1	2			11							2				19		109	3		82	13			
		2				11		2				1	3				69		106	6		63	8			
		3	1			29	1			1		1					33		181	5	1	62	9			
		4				11				3			1				6		125	3		25	11			
		5	2			7		1								1	31		78	2		21	13	1		
		計	5	0	0	69	1	3	0	4	0	2	6	0	0	1	158	0	599	19	1	253	54	1	0	0
	5	1				4							3				6		55	1		55	5			
		2				14							7			1	33	1	119	11		115	34			1
		3	……（紛　失）……																							

①	②	③	貝種	1 イボキサゴ	2 スガイ	3 カノコガイ	4 ウミニナ	5 ヘナタリ	6 カワアイ	7 ツメタガイ	8 アカニシ	9 イボニシ	10 アラムシロ	11 サルボウ	12 タマキガイ	13 ベンケイガイ	14 イタボガキ	15 マガキ	16 ウネナシトマヤガイ	17 アサリ	18 オキシジミ	19 カガミガイ	20 ハマグリ	21 シオフキ	22 マテガイ	23 サラガイ	24 オオノガイ
3	5	4		2			15				1			5				26		120	3	1	92	26			
		5			2		7				1							11	1	97	4		43	15			
		6		2			3							1				10		60	8		54	24	1		
		計		**4**	**2**	**0**	**43**	**0**	**0**	**0**	**2**	**0**	**0**	**16**	**0**	**0**	**1**	**86**	**2**	**451**	**27**	**1**	**359**	**104**	**1**	**0**	**1**
	7	1					28							8				15		45	12		99	5			
		2		1			27							7				22		113	11		88	8			
		3		1			26							3				30		140	5		102	20			
		4		2			14											19		115	3		107	11			
		5					4							1				8		104	4		54	24	1		
		6					7											5		47	4		66	23			
		計		**4**	**0**	**0**	**106**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**29**	**0**	**0**	**0**	**99**	**0**	**564**	**39**	**0**	**516**	**91**	**1**	**0**	**0**
	9	1					13				1		1	3				19		71	12		95	14			
		2			1		13				1			3				26		69	2		73	17		1	
		3					20		9					2				82		70	4		45	25			
		4		5			12		2		1			2				10		171	5		119	19	1		
		5		1					1		2			1	1			6		104	6	1	93	17	1		
		6					3						1	1				5		55	1		31	2			
		計		**6**	**1**	**0**	**61**	**0**	**12**	**0**	**5**	**0**	**2**	**12**	**1**	**0**	**0**	**148**	**0**	**540**	**30**	**1**	**456**	**94**	**2**	**1**	**0**
	11	1			1		9							3				20		135	4		94	7			
		2					33		2					1				87		89	1		39	5			
		3					42	1						2				56		38	36		22	7	1		
		4		1	1		8				1	2		2				16		80	5		141	12			
		5			1		2					4		1				3		61	5	1	65	5			
		6		1	1		3				1	4		1				2		63	8	1	58	10			
		計		**2**	**4**	**0**	**97**	**1**	**2**	**0**	**2**	**10**	**0**	**10**	**0**	**0**	**0**	**184**	**0**	**466**	**59**	**2**	**419**	**46**	**1**	**0**	**0**
	13	1				4	38							6				38		93	54		54	18			
		2					20							1				4		62	60		41	9		1	
		3			1		4							3				3		38	11	1	123	7			
		4		1			6						1	3				1		70	7		117	10			
		5					3							1				3		71	13		83	10			
		計		**1**	**1**	**4**	**71**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**1**	**14**	**0**	**0**	**0**	**49**	**0**	**334**	**145**	**1**	**418**	**54**	**0**	**1**	**0**
	15	1					4					5						4		89	62		13	8			
		2		2			4				1		1				1	2		106	32		59	4	1	1	
		3		2			5											1		60	54		42	11			
		4					3						1					4		62	14		21	5			
		計		**4**	**0**	**0**	**16**	**0**	**0**	**0**	**1**	**5**	**2**	**0**	**0**	**0**	**1**	**11**	**0**	**317**	**162**	**0**	**135**	**28**	**1**	**1**	**0**

第1表および第2表は宮文子が作製し，郷堀・田井が編集した。

(b)魚類遺体

今回，魚類遺体に同定されたものは総数47点で，いずれも微小な椎体である。同定は小宮が行った。結果は以下のとおりである。

第3表　貝層サンプル出土の魚類遺体

魚　　名	同定部位	3							sec. no.
		1	3	5	7	9	11	計	st. no.
軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES									
種不明 Chondrichthyes order indet.	ce		1		1			2	
硬骨魚綱 OSTEICHTHYES									
真骨上目 Teleostei									
ニシン科種不明 Clupeidae gen sp. indet.	ce		1	9	16			26	
種不明 Order indet.	ce	2	2	2	10			16	
不明	ce	1				1	1	3	

ce：椎体

(c)その他の動物遺体

今回の貝層サンプルからは，先に述べた魚貝類以外に次のような動物遺体が検出されたが，詳しい同定は行っていない。

i）陸産貝類　ほとんど全てのサンプルから検出された。
キセルガイ，オカチョウジガイ等を多く含む。2.0㎜，1.0㎜メッシュ面上で分離される微小なものがほとんどである。

ii）フジツボ類
微小な殻片が若干のサンプルから検出された。

iii）カニ（3－7－4）
ハサミの部分の破片が一点のみ検出された。

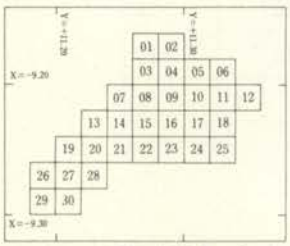
iv）ウニ（3－7－5，3－11－6）
微小な殻片が（3－7－5）から1点，（3－11－6）から16点，検出された。

3．歴史時代

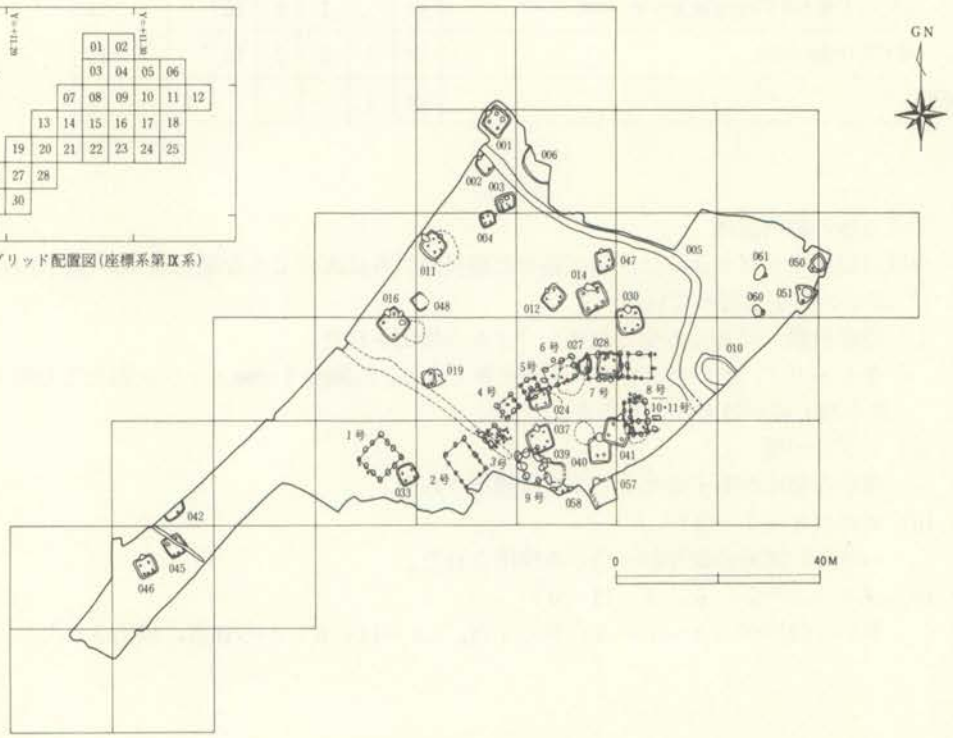
ここで取り扱う歴史時代とは，奈良・平安時代以後の遺構，遺物である。なお，遺物そのものは古墳時代に属する埴輪があるが，二次的に使用された時代が歴史時代となることから，この項で扱う。

検出した遺構は竪穴住居跡25軒，掘立柱建物跡11棟，土坑２，地下式土坑４，溝状遺構である。

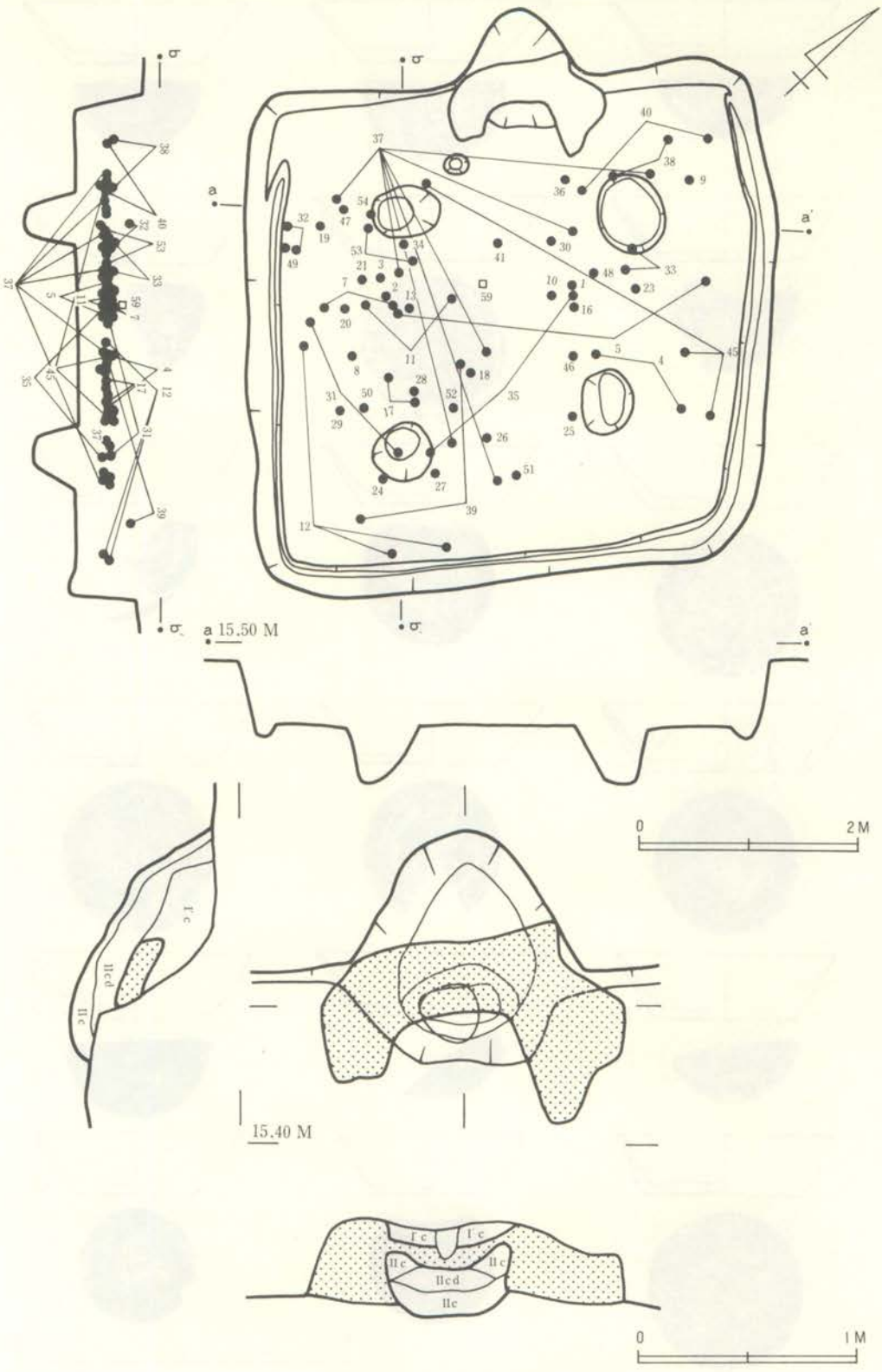
各遺構の配置と遺構番号は下図に示す通りである。竪穴住居跡と掘立柱建物跡は調査区の南東地域に集中しており，中央部が空白となる。このことは縄文時代の遺構のあり方にも共通している。また土坑と地下式土坑は005溝を境とした東側だけに検出されている。



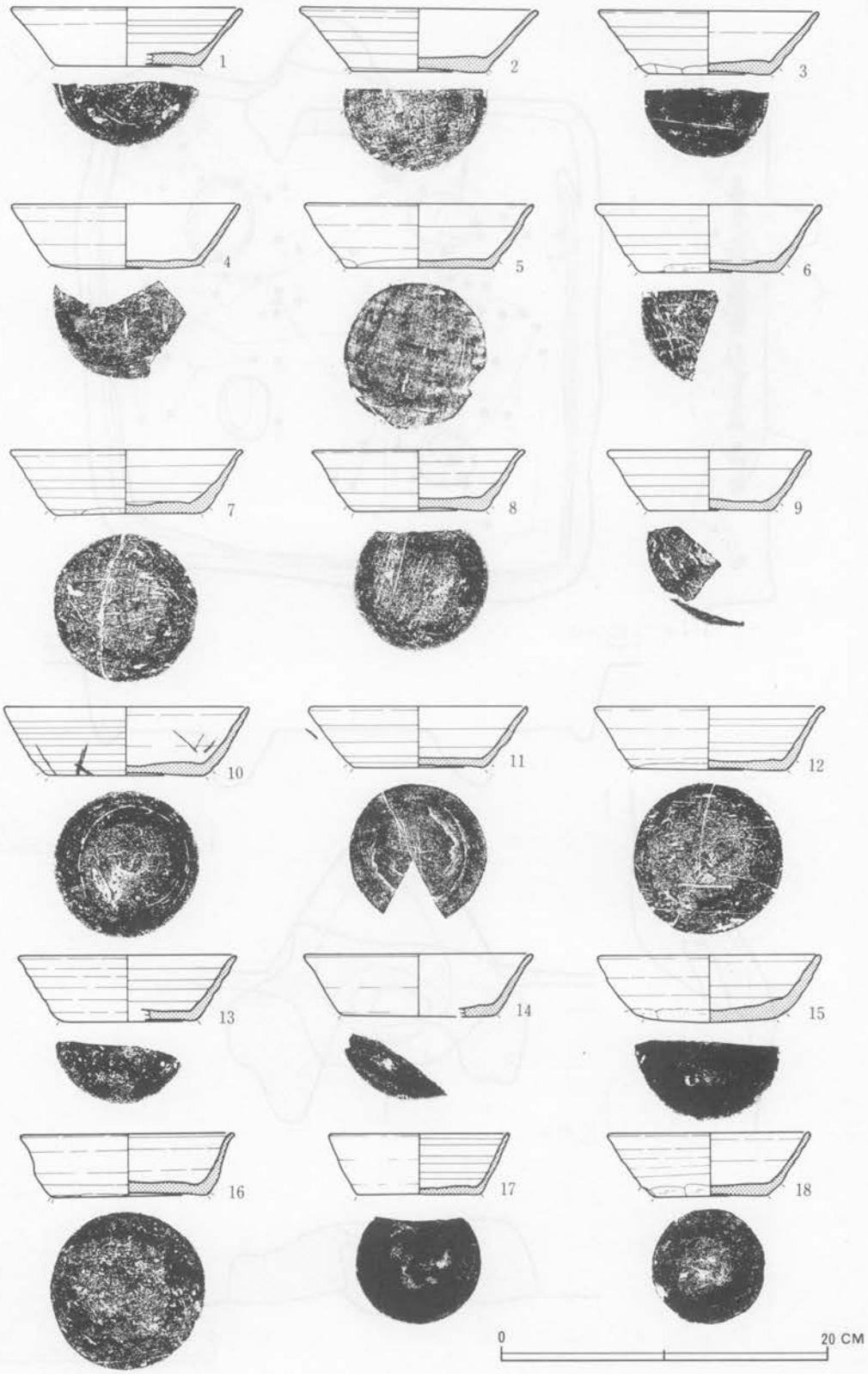
グリッド配置図(座標系第Ⅸ系)



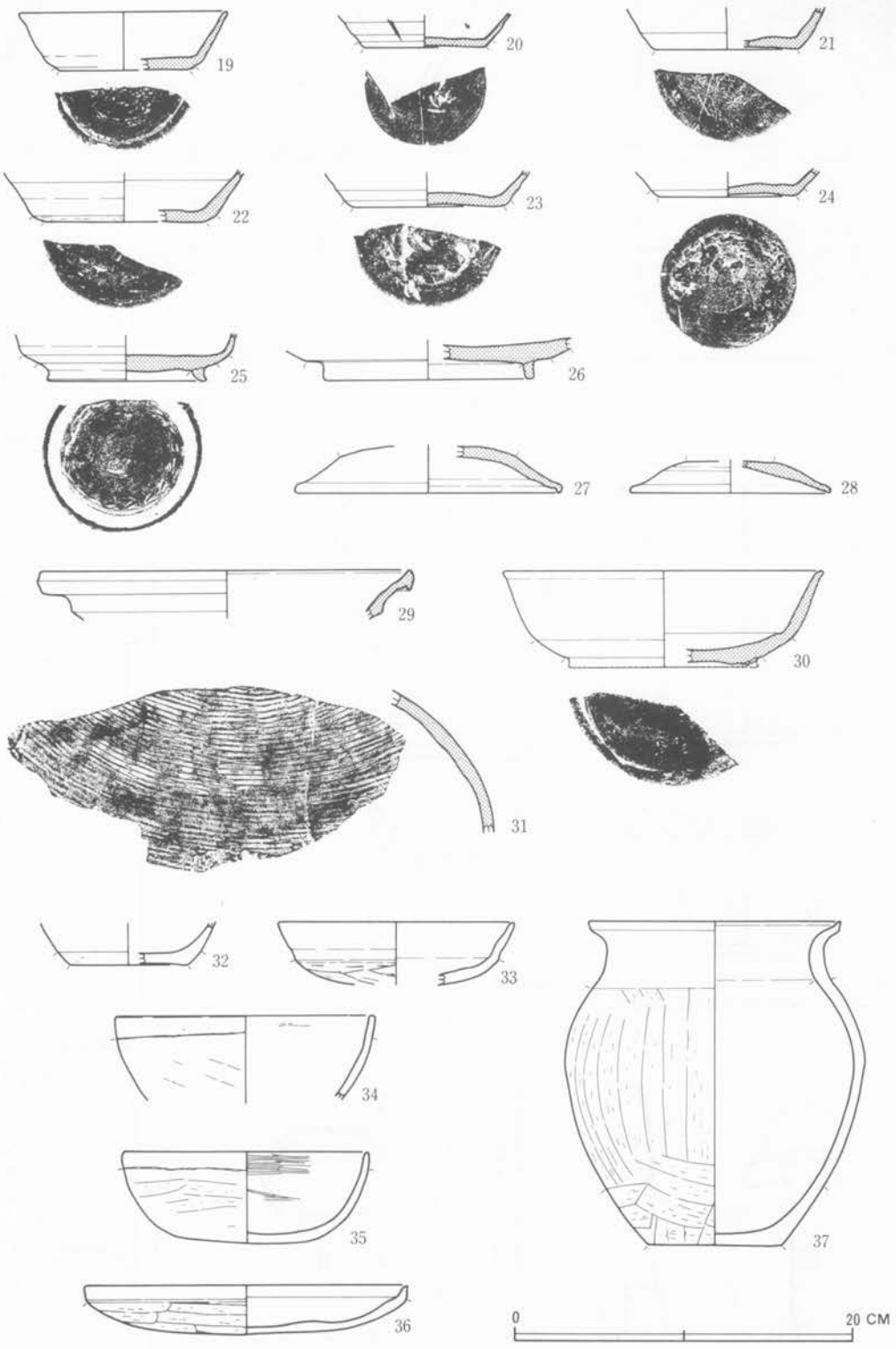
第92図　歴史時代遺構配置図



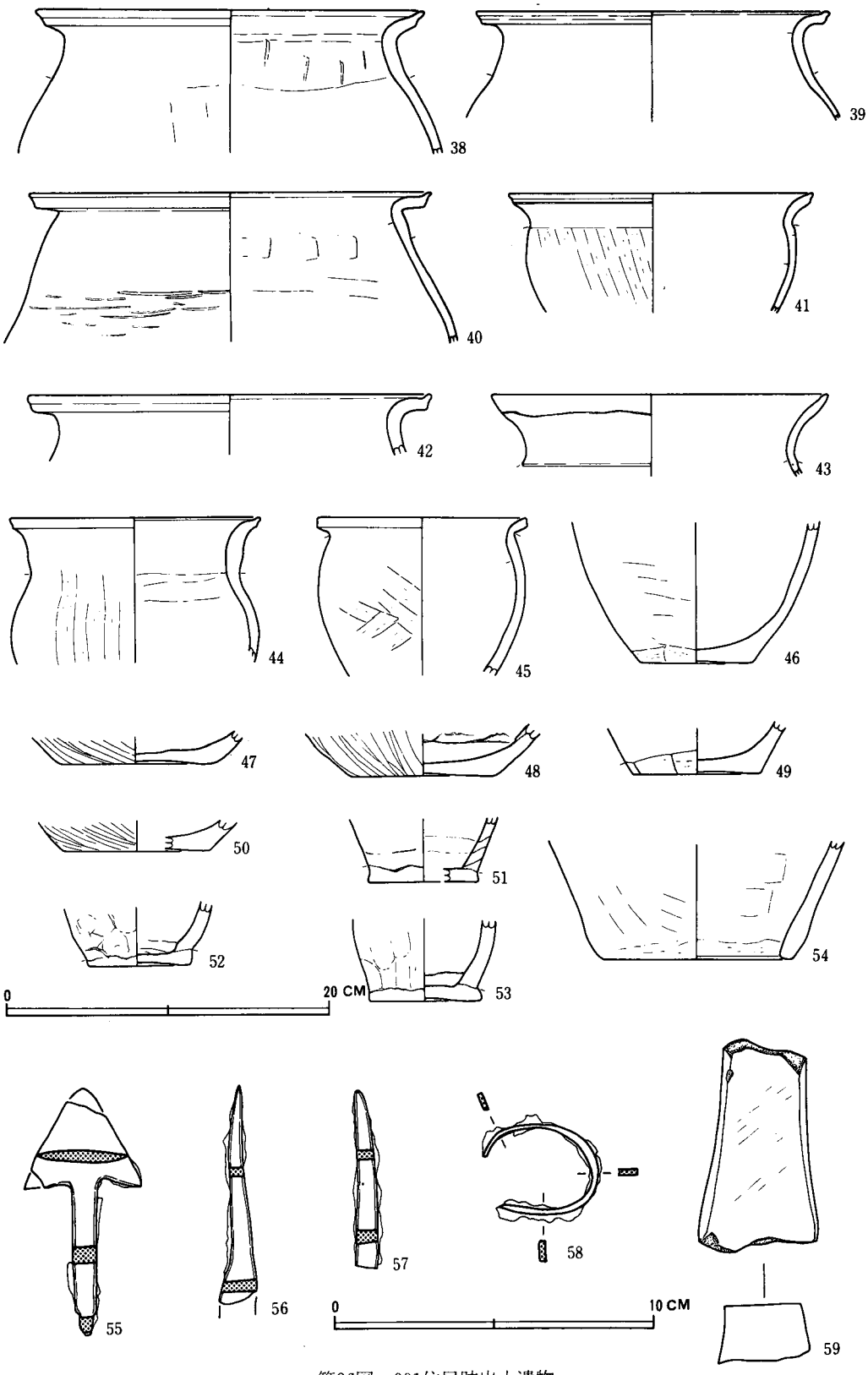
第93図　001 住居跡



第94図　001 住居跡出土遺物



第95図　001 住居跡出土遺物



第96図　001住居跡出土遺物

001住居跡

プラン　方形　　規　模　4.5×4.7m

主軸方向　N－54°－W　　現存壁高　50～60cm

カマド　北壁中央　　柱　穴　4本

周　溝　北壁を除き全周。幅10～20cm，深さ10cm

所　見　カマドの袖部の遺存は良好だが，天井部の多くは流出する。遺物出土量は極めて多いが，床面からの出土は無く，住居廃絶後の一括投棄されたものと考えられる。

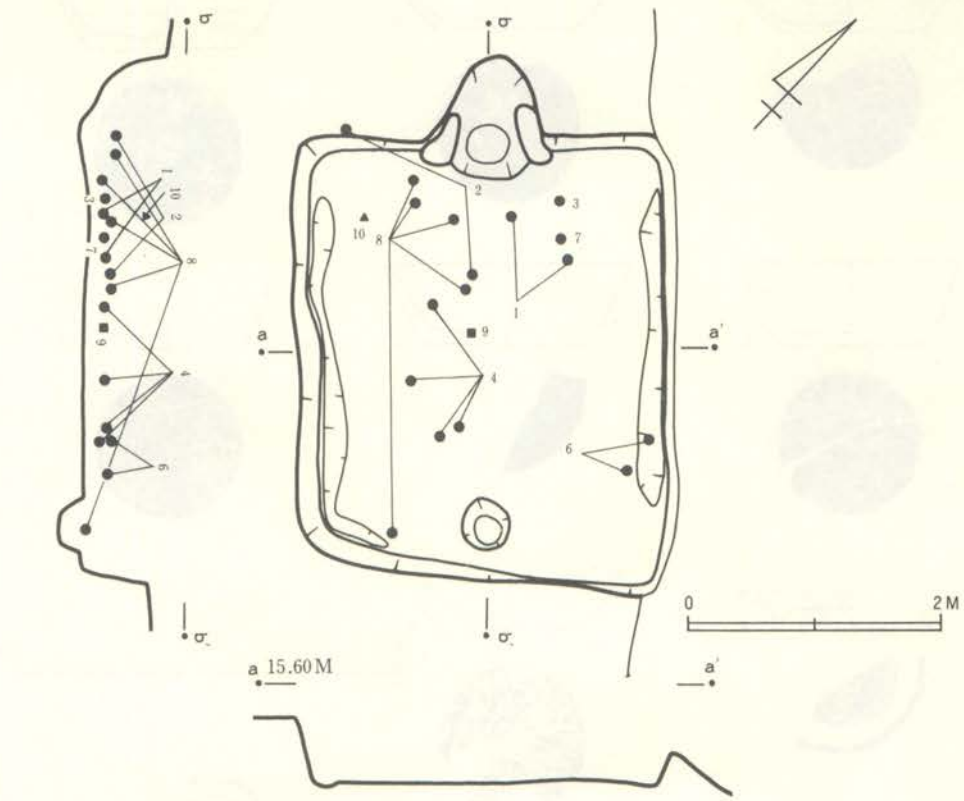
001住居跡出土遺物

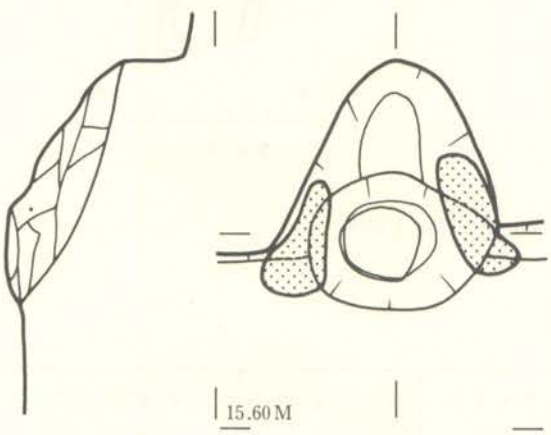
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（須恵器）	(13.8)	(3.6)	(8.8)	体部⅙ 底部⅓	体部内外-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り 回ヘラ削り	砂粒・石英-多	良	暗灰色	0140	
2	坏（須恵器）	(14.4)	3.9	(8.2)	⅓	体部内外-ヨコナデ 体部下端-摩耗のため調整不明 底部-切り離し不明，不定方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母-多	甘	灰白色	1094	R
3	坏（須恵器）	(13.4)	3.9	(7.4)	⅓	体部内外-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒-多	良	灰色	0229	R
4	坏（須恵器）	(13.8)	4.0	(9.0)	⅓	体部内外-ヨコナデ 体部下端-現存する部分は風化激しく調整不明 底部-切り離し不明，不定方向の手ヘラ削り	砂粒-多	良	灰白色	0150＋0158	R
5	坏（須恵器）	(13.8)	4.0	9.0	体部⅙を欠く	体部内外-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母-少	甘	灰白色	0180＋0431	R
6	坏（須恵器）	(13.5)	(4.2)	(8.6)	⅙	体部内外-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 不定方向の著しい手ヘラ削り	砂粒・長石-多 雲母-少	良	灰色	0507	R 口唇部が著しく肥厚する
7	坏（須恵器）	14.0	3.9	8.9	口縁⅔を欠く	体部内外-ヨコナデ 体端下端-右から左への手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	明灰色	0020＋0023＋0093	R 底部外面と体部外面に油煙
8	坏（須恵器）	(13.0)	3.7	8.0	体部⅓を欠く	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	長石・石英・雲母-多	良	灰色	0380	R
9	坏（須恵器）	(12.3)	3.7	(7.6)	⅓	体部内外-ヨコナデ 体部下端-ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 不定方向の手ヘラ削り	石英-少	良	内-暗褐色 外-灰白色	0315＋0316	R
10	坏（須恵器）	(14.8)	4.3	9.4	体部⅓を欠く	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 回ヘラ削り	微砂粒・雲母-多	良	灰白色	0521	R 内外面に火襷痕明瞭
11	坏（須恵器）	(13.2)	3.7	8.0	体部⅔を欠く	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の雑な手ヘラ削り	砂粒-多	やや甘	灰白色	0027＋0218＋0354	R 底部にヘラ記号あり

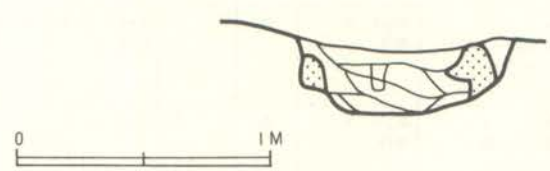
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
12	坏(須恵器)	13.8	3.9	9.4	口縁½を欠く	体部内外-ヨコナデ 体部下端-方向不明だが手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向のヘラ削り	砂粒-多	良	灰色	0298+ 0451+ 0476	R 体部下端に油煙少量附着 図版55-3
13	坏(須恵器)	(13.2)	(4.0)	(8.6)	⅓	体部内外-ヨコナデ 体部下端-風化激しいため調整不明 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒・雲母-少	やや甘	黄灰色	0429	R
14	坏(須恵器)	(14.0)	(3.7)	(9.4)	⅙	体部内外-ヨコナデ 体部下端-調整不明 底部-切り離し不明 不定方向の手ヘラ削り	砂粒・長石・雲母-多	甘	灰白色	0283	R
15	坏(須恵器)	(13.6)	4.1	8.0	⅜	体部内外-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 不定方向の手ヘラ削り	微砂粒-少	甘	灰白色	0367	R
16	坏(須恵器)	12.7	3.7	9.3	口縁の一部を欠き,ほぼ完形	体部内外-ヨコナデ 体部下端-方向不明だが手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 不定方向の手ヘラ削り	砂粒-多 雲母-少	良	明灰色	0520	R 坏内面に炭化物の附着 図版55-2
17	坏(須恵器)	(11.0)	3.6	7.7	口縁⅗を欠く	体部内外-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り 体部下端,底部の調整はなし	微砂粒-少	良	暗灰色	0279+ 0305	R 図版55-4
18	坏(須恵器)	12.2	3.8	7.0	⅔	体部内外-ヨコナデ 体部下端-右から左へ手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 底部中央を一定方向の手ヘラ削り後,円周にそって,周囲を手ヘラ削り	砂粒・長石-多	良	灰色	0086	R 図版55-1
19	坏(須恵器)	(12.2)	(3.5)	(7.6)	⅙	体部内外-ヨコナデ 体部下端～底部-回ヘラ削り	石英-多 雲母-少	甘	灰黄色	0441	
20	坏(須恵器)		〈1.9〉	(7.2)	体部～底部½	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 不定方向の手ヘラ削り	砂粒-極少	良	灰色	0025	火襷痕あり
21	坏(須恵器)			(8.4)	底部のみ	体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母-少	甘	黄灰色	0223	
22	坏(須恵器)			(9.4)	⅕	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	灰色	0384	
23	坏(須恵器)			8.8	底部½	体部下端-摩耗のため不明だが回ヘラ削りか 底部-回ヘラ切り 外縁回ヘラ削り	砂粒・雲母-少	やや甘	黄灰色	0145	R
24	坏(須恵器)			8.0	底部⅕	体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 雑な一定方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母-少	良	灰色	0470	R
25	高台付坏(須恵器)		高台高 0.6	高台径 9.4	⅔	坏部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ削り 高台-貼付けヨコナデ	雲母・石英-多	甘	灰褐色	0417	L 底部に爪状圧痕を残す 図版55-7
26	高台付盤(須恵器)		高台高 1.1	高台径 12.6	¼	盤-内外面ヨコナデ 下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 回ヘラ削り 高台-貼り付け,ヨコナデ	雲母・石英-多	良	灰白色	0301	

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
27	蓋（須恵器）	15.6	〈2.8〉		つまみを欠く½	天井部-回ヘラ削り 内外面-ヨコナデ	砂粒・雲母-少	良	灰色	0010+ 0475	
28	蓋（須恵器）	11.6	〈1.9〉		つまみを欠く⅙	天井部-回ヘラ削り 内外面-ヨコナデ	砂粒・雲母-少	良	灰色	0001+ 0048	
29	甕（須恵器）	21.8	〈2.9〉		½	口縁部内外面-ヨコナデ	微砂粒-少	良	灰色	0001+ 0036	
30	高台付埦（須恵器）	(18.6)	(5.7)	高台径 11.2	⅓	内外面～高台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	砂粒・雲母・石英-多	やや甘	内-灰白色 外-暗灰色	0332	
31	甕（須恵器）				胴上部⅓	胴部-平行叩き目	砂粒・雲母・石英-多	やや甘	灰白色	0024+ 0051	
32	坏（土師器）		〈2.5〉	(7.0)	½	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り	砂粒-多	良	明褐色	0011+ 0014	
33	坏（土師器）	(14.0)	(3.7)		¼	体部内面～口縁-ヨコナデ 体部外面-ヘラ削り	砂粒・雲母・石英-多	良	暗褐色	0260	
34	坏（土師器）	(14.8)	〈5.0〉		¼	内面-ヘラミガキ 口唇-ヨコナデ 外面-ヘラ削り	砂粒-少	良	内-明黄褐色 外-暗褐色	0101+ 0384	口縁部に輪積み痕
35	坏（土師器）	14.4	5.4		½	内面-ヘラミガキ 口唇-ヨコナデ 外面-ヘラ削り	微砂粒	良	内-明黄褐色 外-黒褐色	0010+ 0334+ 0384+ 0464	口縁部に輪積み痕
36	盤（土師器）	(19.0)	2.9		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 外面-ヘラ削り	微砂粒-多	やや甘	赤褐色	0389	
37	甕（土師器）	14.8	19.0	7.8	½	口頸部内外面-ヨコナデ 内面-ナデ 胴部-ヘラ削り 底部-ヘラ削り	砂粒-少	良	内-褐色 外-暗褐色	0010+ 0135+ 0195+ 0286+ 0425+ 0433+ 0440+ 0477	図版55-6
38	甕（土師器）	(24.0)	〈9.0〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒・雲母・石英-多	良	暗褐色	0198+ 0203	
39	甕（土師器）	(22.0)	〈7.8〉		⅓	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒・雲母・石英-多	良	暗褐色	0003+ 0272	
40	甕（土師器）	(25.0)	〈9.4〉		⅓	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒・雲母・長石・石英-多	良	赤褐色	0318+ 0323	
41	甕（土師器）	(19.6)	〈7.4〉		⅔	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-ヘラ削り	微砂粒-少	良	赤褐色	0010+ 0038+ 0241+ 0384	
42	甕（土師器）	(25.0)	〈3.7〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ	砂粒・雲母・石英-多	良	内-赤褐色 外-暗褐色	0488	
43	甕（土師器）	(22.0)	〈5.0〉		⅙	口縁部内外面-ヨコナデ	微砂粒・雲母-少	良	暗褐色		
44	甕（土師器）	(15.4)	〈9.0〉		⅙	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒-多	良	暗褐色	0384	
45	甕（土師器）	(13.0)	〈9.8〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-ヘラ削り	微砂粒-多	良	内-黒褐色 外-暗褐色	0159+ 0160+ 0166+ 0340	
46	甕（土師器）		〈8.7〉	7.0	底部全周 胴部⅕	胴部内面-ていねいなナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒-多	良	赤褐色	0148+ 0519	

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
47	甕(土師器)		〈1.7〉	9.0	底部½	外面-細いヘラ削り 底部-木葉痕,荒いヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	暗褐色	0224	
48	甕(土師器)		〈2.5〉	9.0	底部½	外面-細いヘラ削り 底部-木葉痕	砂粒・雲母・石英-多	良	内-暗褐色 外-黒褐色	0330	
49	甕(土師器)		〈2.8〉	8.0	底部⅓	外面-ヘラ削り 底部-木葉痕	砂粒-多	良	内-黒褐色 外-赤褐色	0013+ 0014	
50	甕(土師器)		〈1.8〉	9.0	底部⅓	外面-細いヘラ削り 底部-木葉痕	砂粒-多 雲母-少	良	暗褐色	0038+ 0384	
51	甕(土師器)		〈4.0〉	6.8	底部⅓	内面-ナデ 外面-ヘラ削りか 底部-木葉痕	砂粒	良	暗褐色	0001+ 0063	
52	甕(土師器)		〈3.5〉	6.4	底部のみ	内面-ヘラナデ 外面-荒いヘラ削り 底部-木葉痕	砂粒-多	良	淡赤褐色	0053	
53	甕(土師器)		〈5.0〉	6.8	底部⅔	内面-ナデ 外面-荒いヘラ削り 底部-木葉痕	砂粒	良	暗褐色	0108+ 0366+ 0367	
54	甑(土師器)		〈7.0〉	(11.4)	底部⅓	胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒・雲母・石英-多	良	暗褐色	0010+ 0225	
55	鉄鏃	全長(7.5) 篦被長4.0 茎長0.6	根巾(7.5) 巾0.8 巾0.5	身長0.35 長0.5 厚0.5						0384	15g 図版55-9
56	刀子	全長6.7	茎長5.6	茎巾0.5						0508	5g
57	棒状鉄製品	全長5.5	巾0.6	厚0.45						0508	3g
58	不明鉄製品	径3×4	巾0.6	厚0.15〜0.2						0016	6g
59	砥石	全長6.5	最大巾3.6	最大厚2.9						0350	図版55-8







002住居跡

プラン　方形　　規　模　3×3.5m

主軸方向　N－42°－W

現存壁高　20～50cm

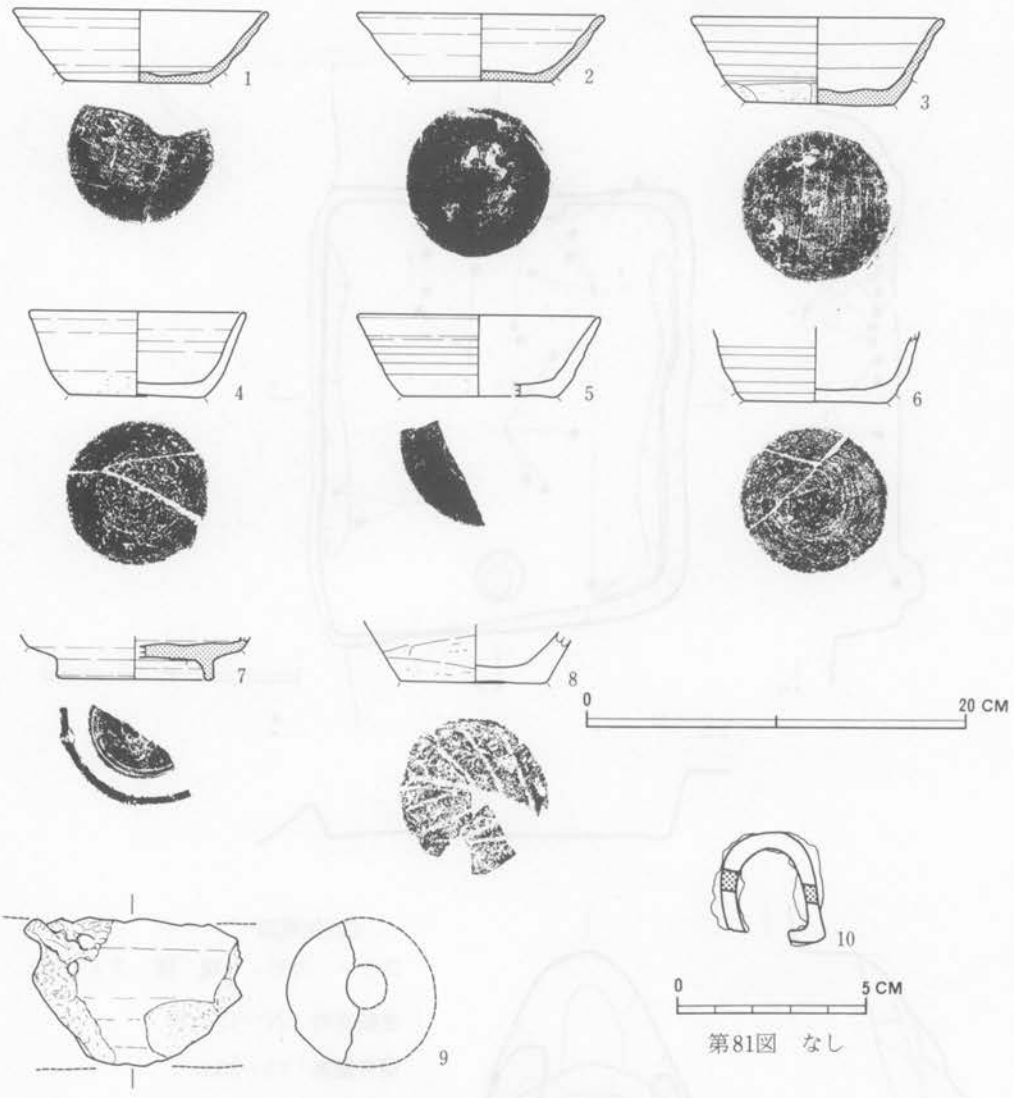
カマド　北壁中央　　柱　穴　1本

周　溝　東壁，西壁に幅20cm，深さ5cm

所　見　比較的小形の住居跡である。

東壁は後世の溝に切られている。

第97図　002 住居跡



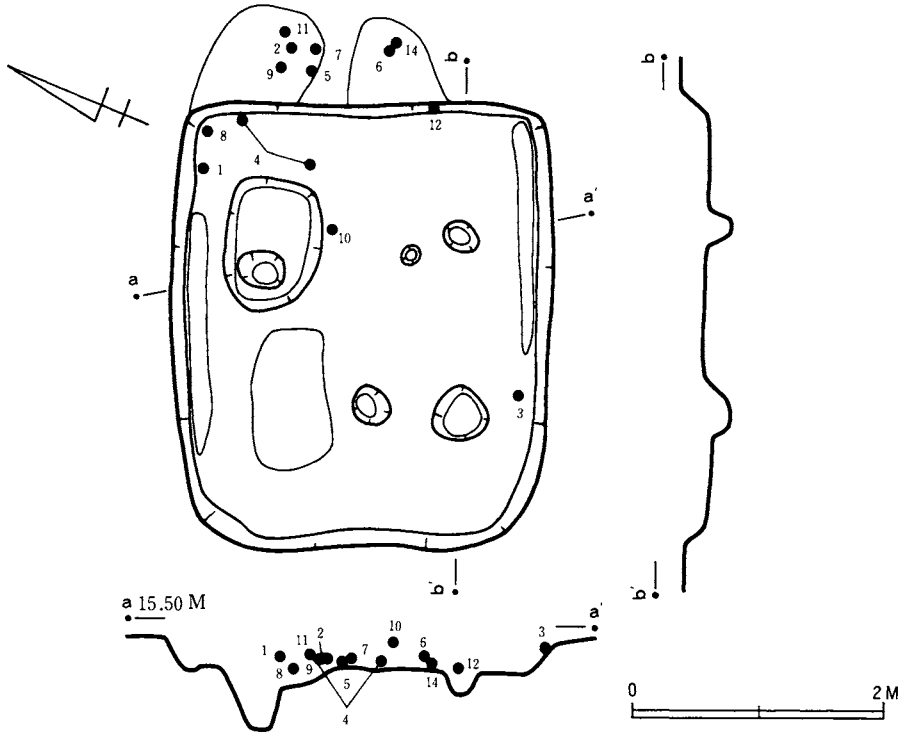
第81図　なし

第98図　002住居跡出土遺物

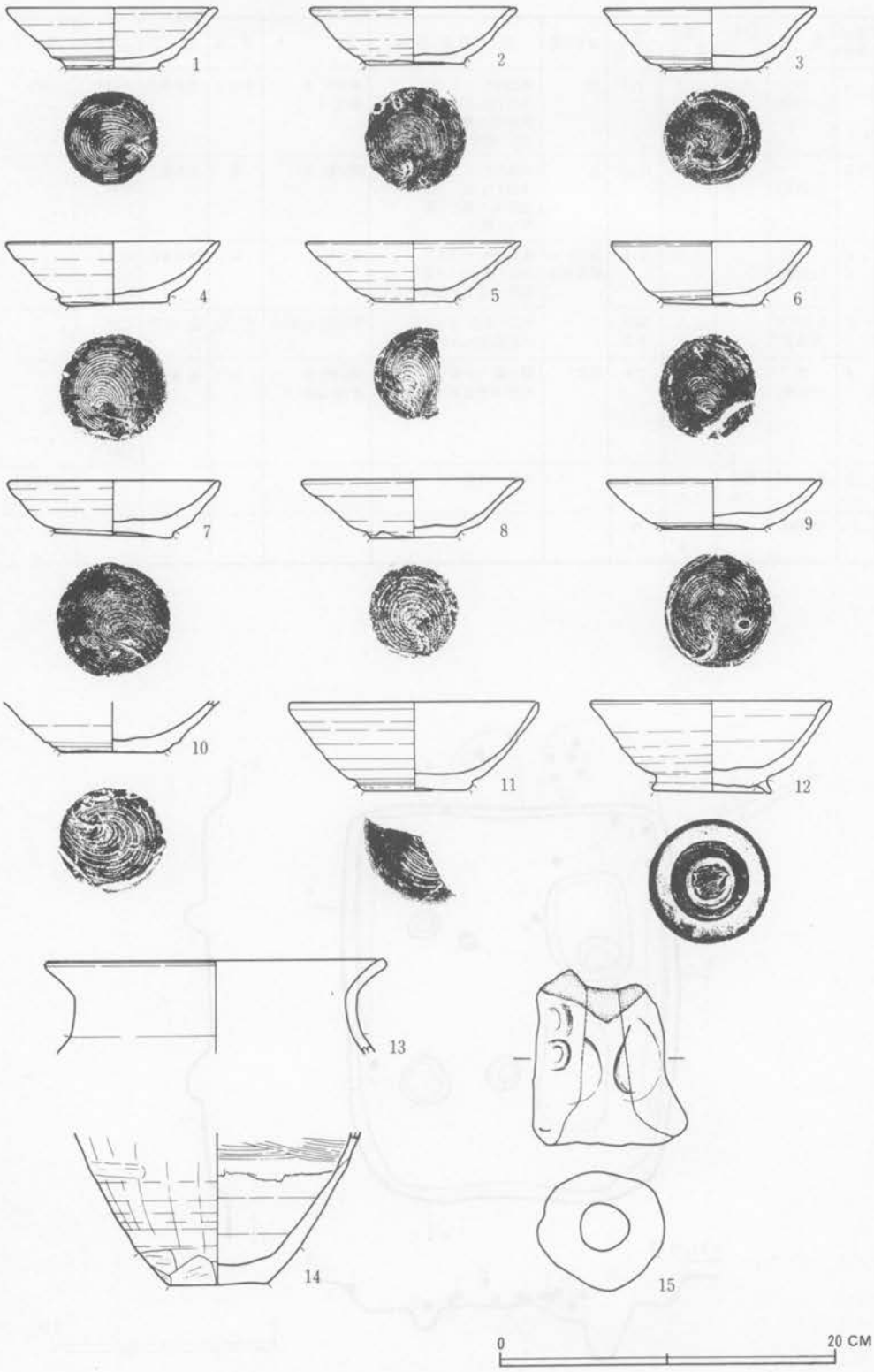
002住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（須恵器）	13.4	3.9	7.2	½	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母・石英-少	良	灰色	0173+ 0191	R 図版56-2
2	坏（須恵器）	(13.0)	(3.6)	(7.5)	口縁¼ 底部全周	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回転ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母 -少	良	灰色	0083+ 0187	R
3	坏（須恵器）	13.0	4.6	7.8	⅔	体部内外-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母・石英-少	良	灰色	0172	R 図版56-1

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
4	坏(土師器)	11.2	4.4	7.0	½	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	微砂粒-多 雲母-少	やや甘	淡赤褐色	0133+ 0134+ 0149+ 0138	図版56-3
5	坏(土師器)	(12.8)	(4.2)	(8.2)	⅓	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	微砂粒-多	良	淡赤褐色	0180+ 0193	
6	坏(土師器)		〈3.7〉	(7.4)	体部 ⅓ 底部全周	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-糸切りか回ヘラ削り	微砂粒	良	淡赤褐色	0128+ 0152+ 0180	
7	高台付坏(須恵器)		〈2.2〉	高台径 8.2	⅓	体部～高台-ヨコナデ 坏底部-回ヘラ削り	微砂粒・石英-多	やや甘	暗灰色	0192	
8	甕(土師器)		〈3.1〉	7.8	底部	胴下端-ヘラ削り 底部-木葉痕あり,調整なし	微砂粒-多 雲母・石英-少	良	暗褐色	0009+ 0160+ 0161+ 0184+ 0185	
9	羽口	外径 7.6	内径 2.1			外面-ヘラ削り					図版56-4
10	不明鉄製品		巾 0.4	厚 0.5						0105	10g



第99図　003 住居跡



第100図　003住居跡出土遺物

003住居跡

プラン　長方形　　**規　模**　2.9×3.5m

主軸方向　N－71°－E　　**現存壁高**　16～24cm

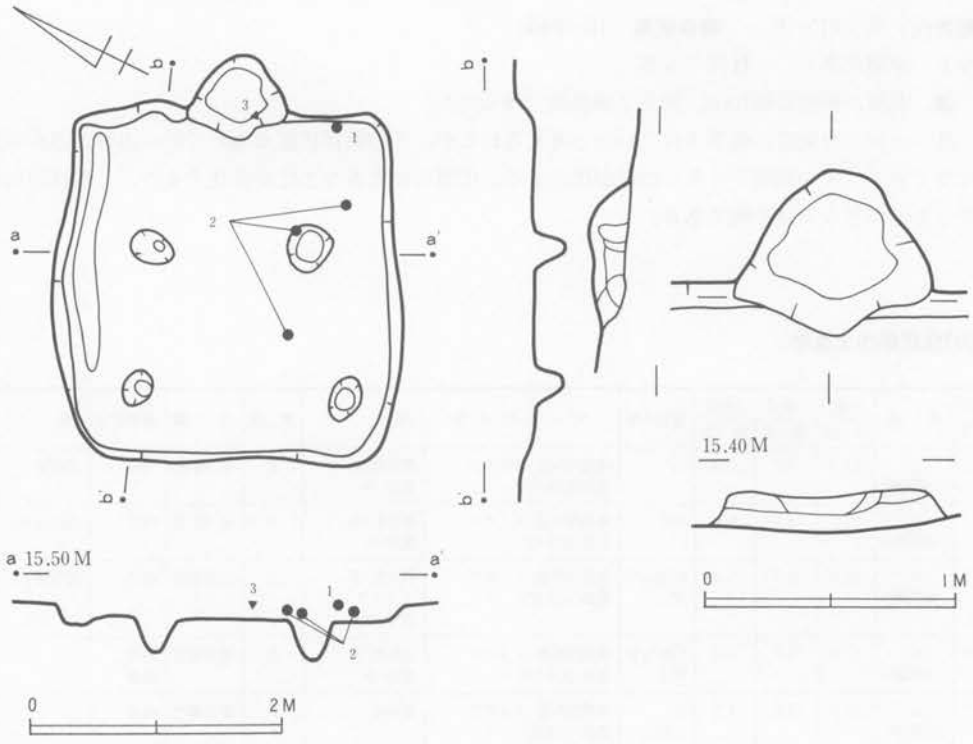
カマド　東壁北寄り　　**柱穴**　5本

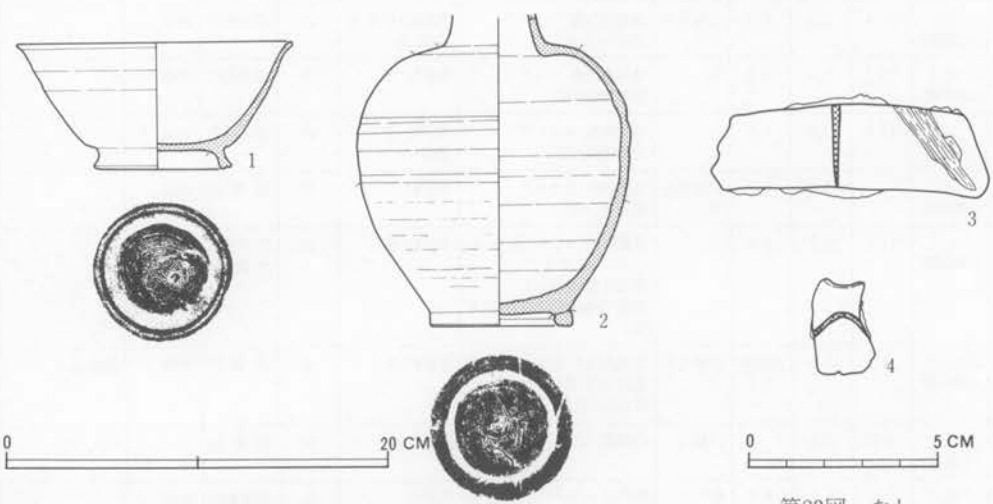
周　溝　北壁，南壁に幅10cm，深さ2cm前後で浅く作る。

所　見　カマドは東壁に構築されていたと考えられるが，その遺存状態は極めて悪く山砂が僅かに残る程度である。その周辺から多くの坏が出土する。床面には大きな土坑が存在するが，この住居に直接伴うものかどうかは不明である。

003住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（土師質須恵）	12.2	3.7	5.4	½	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒-多 雲母-少	良	暗褐色	0047	図版56-7
2	坏（土師質須恵）	12.2	3.5	6.0	完形	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒-多 雲母-少	良	暗褐色	0053	図版56-5
3	坏（土師質須恵）	12.4	3.7	5.4	口縁¼を欠く	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒-多 スコリア 雲母-少	良	淡赤褐色	0031	図版56-8
4	坏（土師質須恵）	12.6	3.7	6.5	口縁⅓を欠く	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒-多 雲母-少	良	暗赤褐色	0043 0049	
5	坏 土師質須恵）	(12.8)	3.6	4.8	½ 口縁¼	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒	良	暗赤褐色	0056	
6	坏（土師質須恵）	11.8	3.8	5.8	完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り	微砂粒 スコリア 雲母-少	良	赤褐色	0057	図版56-6
7	坏（土師質須恵）	12.4	3.5	7.0	口縁¼を欠く	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒・石英-多 雲母-少	良	淡赤褐色	0055	
8	坏（土師質須恵）	13.2	3.4	5.2	⅓	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒-多	良	淡赤褐色	0048	
9	坏（土師質須恵）	12.7	3.0	6.0	⅓	体部内外-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒-多 雲母-少	良	淡赤褐色	0054	
10	坏（土師質須恵）		〈3.0〉	6.2	口縁部を欠く	体部内外-ヨコナデ 底部-回糸切り	微砂粒	良	暗褐色	0002	
11	坏（土師質須恵）	(14.8)	(5.2)	(6.0)	⅓	体部内面-ヨコナデ後ていねいなヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 底部-外縁回ヘラ削り，回糸切り	微砂粒-多	良	内-暗褐色 外-淡褐色	0051	
12	高台付坏（土師質須恵）	14.2	5.5	高台径 7.1	口縁¼欠く	体部内外面-高台-ヨコナデ 底部-回糸切り回ヘラ削り，高台貼り付け	微砂粒-多	良	暗褐色	0059	図版56-9
13	甕（土師器）	(10.0)	〈5.5〉		口縁⅛	口縁部-ヨコナデ	微砂粒-多	良	暗褐色		
14	甕（土師器）		〈9.0〉	6.0	胴下半	胴内面-ヘラナデ及び木口状工具によるナデ 胴外面-ヘラ削り，成形はロクロ使用，その後ヘラ削り 底部-ヘラ削り	微砂粒	良	淡赤褐色	0058	
15	土製支脚						微砂粒-多	甘い	暗褐色	0060	羽口の転用か 図版56-10





第83図　なし

第83図　なし

第101図　004 住居跡及び出土遺物

004住居跡

プラン　正方形　　**規　模**　2.8×2.8m

主軸方向　N－67°－E　　**現存壁高**　12～15cm

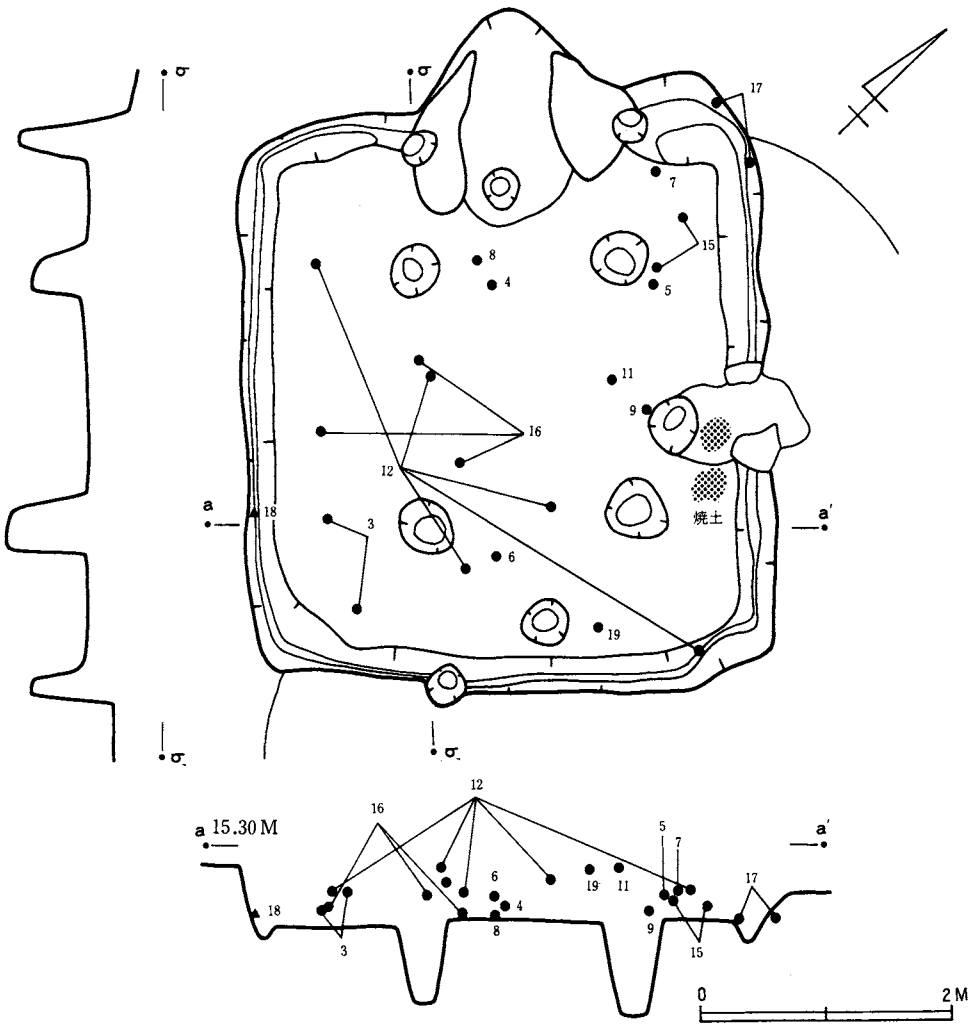
カマド　東壁中央　　**柱　穴**　4本

周　溝　北壁に幅15cm前後，深さ5cm前後

所　見　小形の住居跡である。カマドは遺存状況は極めて悪く，ほとんど残っていないと言えるものである。

004住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,(　)推定〈　〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	高台付坏 須恵器	14.3	6.5	高台径 7.2	口縁⅓を欠く	体部内外面～高台-ヨコナデ 底部-回糸切り	砂粒・小石(5～7mm)	良	黒灰色	0017＋ 0060	図版57-1
2	長頸壺 (須恵器)	胴径 14.5	〈11.0〉	高台径 7.6	⅔ 口頸部を欠く	胴～肩部-ヨコナデ 胴下半-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-回糸切り,回ヘラ削り	砂粒 密	良	灰色	0004＋ 0011＋ 0012＋ 0013＋ 0039＋ 0042	図版57-2
3	鉄鎌	全長 7.3	巾 2.2	厚 0.2						0021	木質部遺存 17g
4	不明鉄製品	全長 2.3	巾 1.5	厚 0.15							2g



第102図　011 住居跡

011住居跡

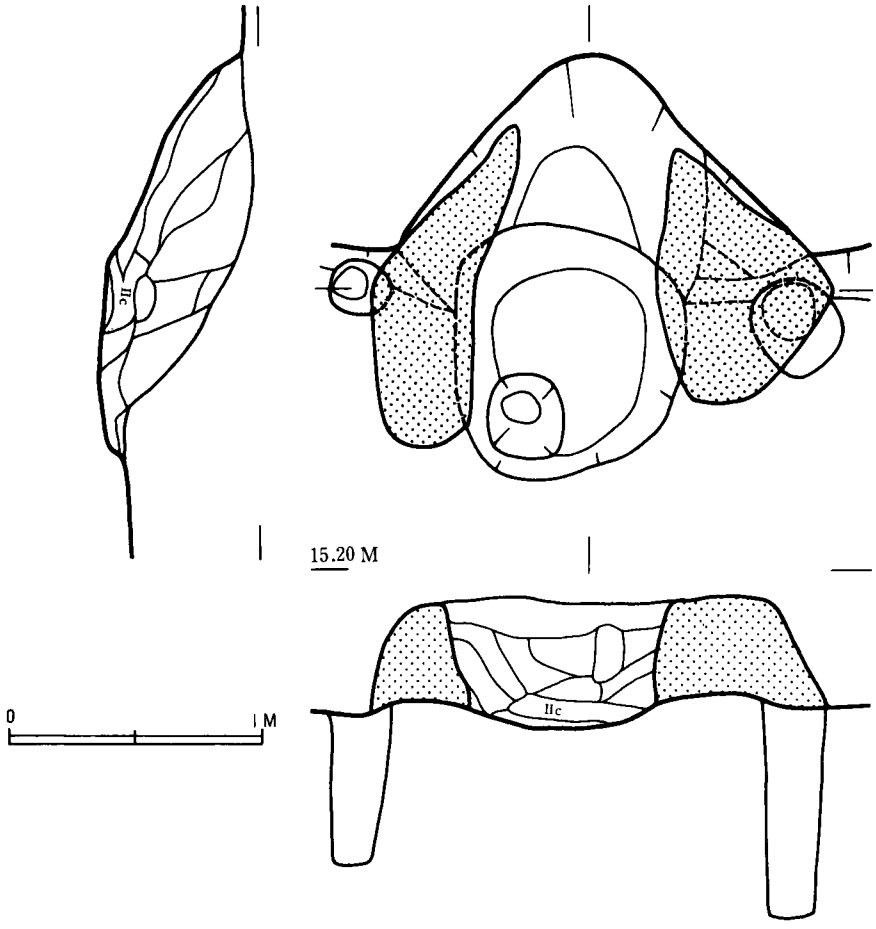
プラン　長方形　　**規　模**　4.7×4.3m

主軸方向　N－48°－W　　**現存壁高**　35～50cm

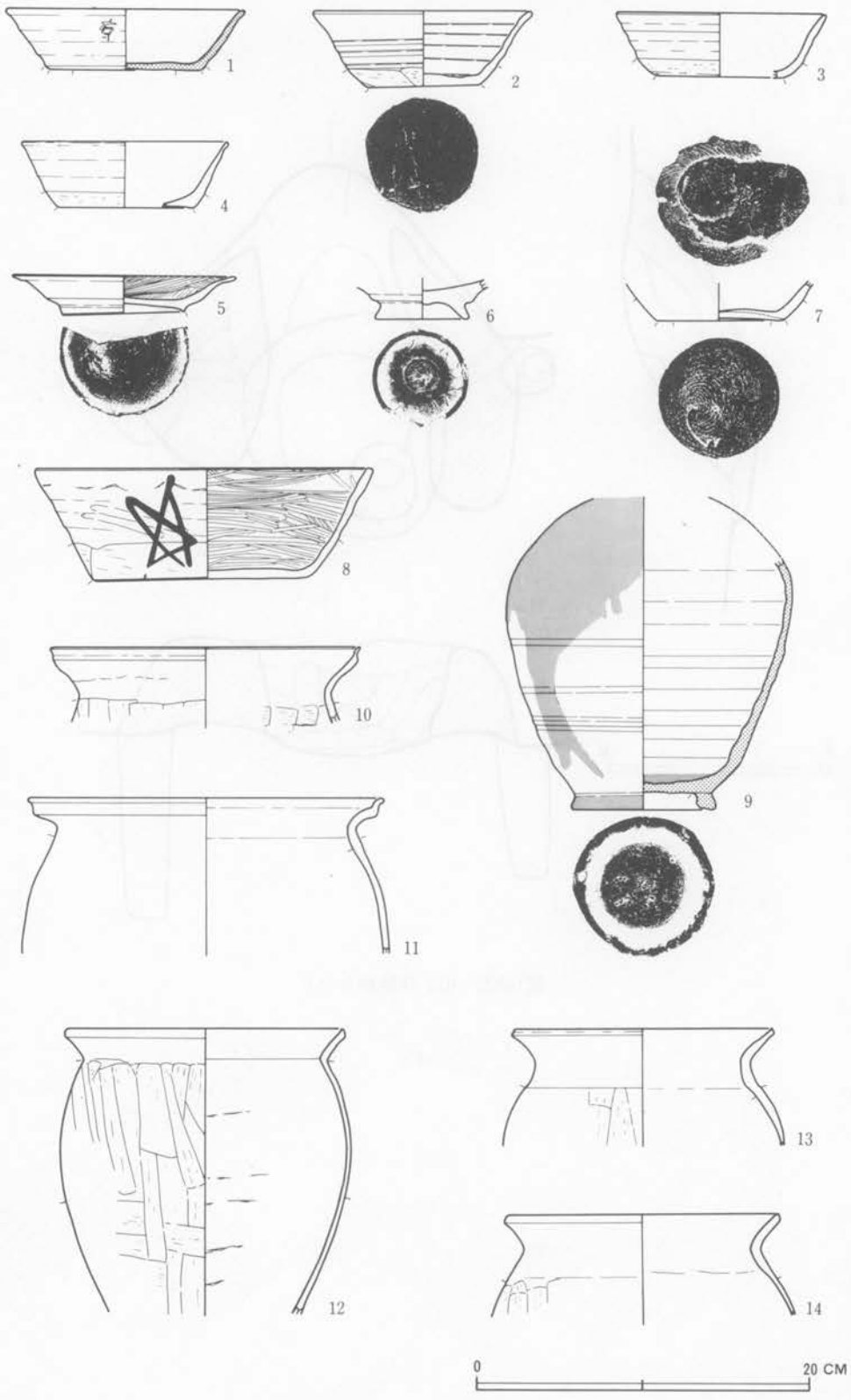
カマド　北壁，西壁に各１基設ける　　**柱　穴**　10本

周　溝　カマド部を除き全周する。幅20cm，深さ18cm

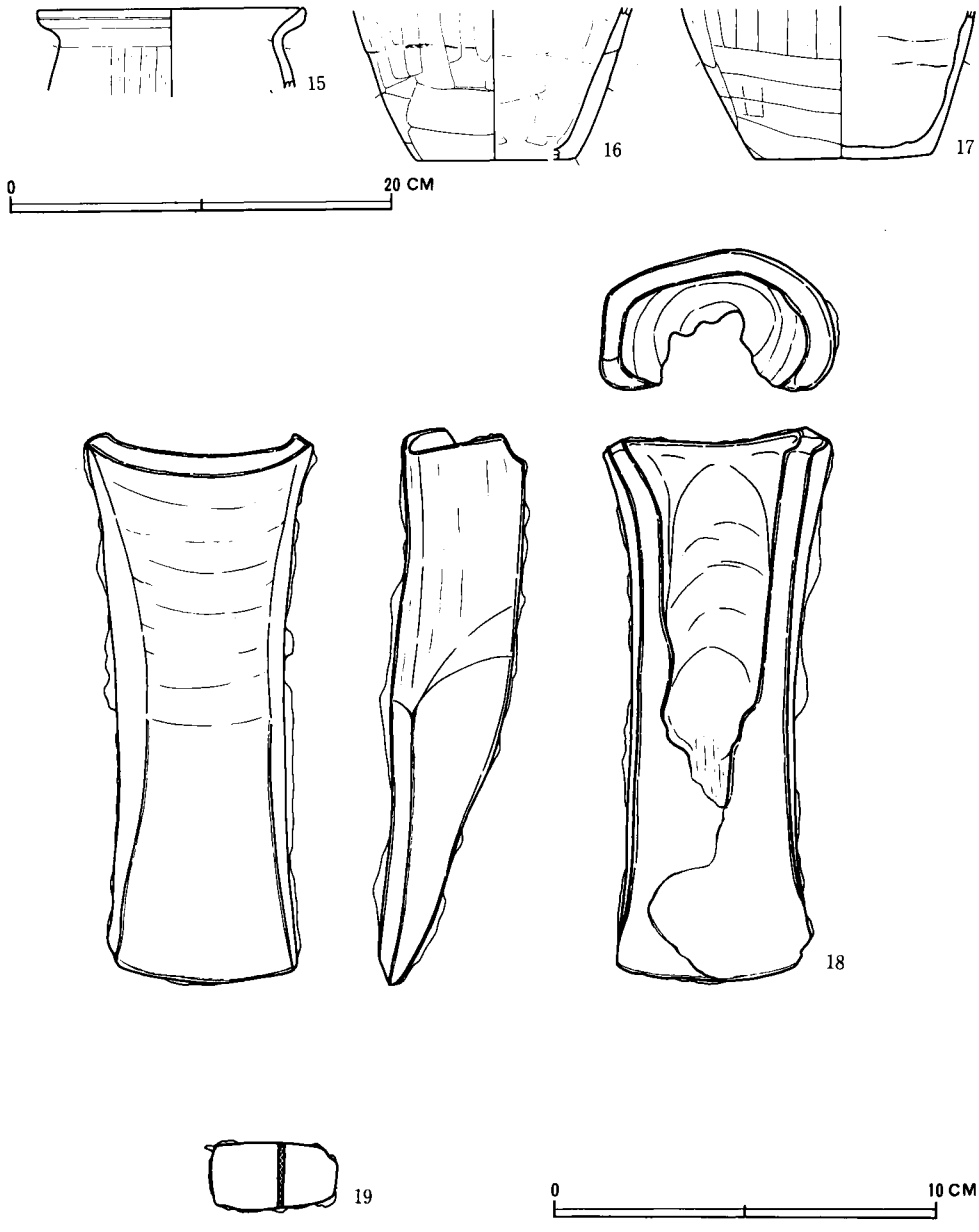
所　見　土器の他に鉄滓の出土量も多い。北壁のカマドと考えられる部分の周辺では２ケ所の焼けた床面が確認され，小鍛冶炉の可能性がある。南側は007縄文住居を切っている。



第103図　011 住居跡カマド



第104図　011住居跡出土遺物

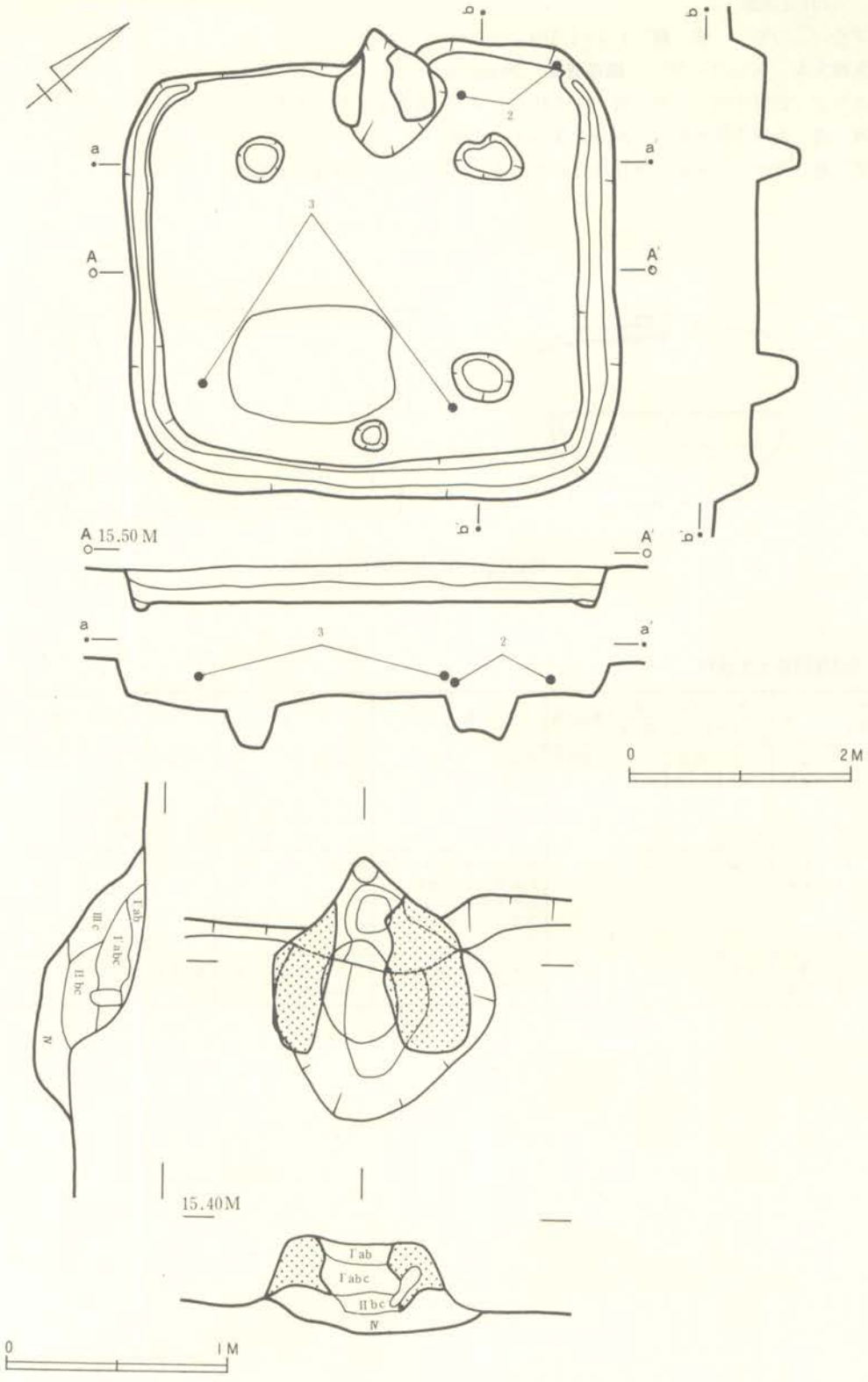


第105図　011住居跡出土遺物

011住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏 (須恵器)	14.2	3.7	8.9	½	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 外縁手ヘラ削り	雲母・砂粒-多	やや甘	内-灰白色 外-灰色		R 体部にヘラ書き
2	坏 (土師器)	13.5	4.8 〉 4.4	7.0	⅙	体部内外面-回転布ナデ 体部下端-ヘラ削り 底部-ヘラ削り	酸化鉄粒-少 密	良	淡乳褐色	0223+ 0407	R 図版57-3

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
3	坏(土師器)	12.6	3.9	7.6	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ削り	雲母・長石-若干多	良	乳褐色	0314+ 0334	R
4	坏(土師器)	12.4	4.0	8.2	2/3	体部内外面-布ナデ 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母-多	良	淡褐色	0391	R 内外面に黒斑あり 図版57-4
5	皿(土師器)	13.4	2.5 〜 2.2	7.4	1/2	体部内面-棒状ヘラ磨き 体部外面-回転布ナデ 底部-切り離し不明 高台削り出し	酸化鉄粒 長石-少 非常に密	良	淡乳褐色	0197	L 図版57-6
6	高台付坏(土師器)			5.7	高台のみ	内面-ヘラ磨き 底部-切り離し不明 それ以外回転ヨコナデ	非常に密 砂粒-ほとんど含まず	良	乳褐色	0402	
7	坏(土師器)		7.4		体部1/6 底部完存	体部内面-回転ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り後外縁回ヘラ削り	雲母・長石-多	普通	乳褐色	0190	R 円柱作り
8	鉢(土師器)	20.3	6.6	12.8	3/4	体部内面-回転ヨコナデ後全面棒状ヘラ工具による磨き 体部外面-回転ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-手ヘラ削り	酸化鉄粒・雲母-少	良	淡褐色	0261+ 0380	L 墨書 図版57-5
9	長頸壺(須恵器)	最怪 16.6	〈18.3〉	台径 8.6	口縁を欠く	胴部内外面-ヨコナデ 高台-貼り付け 底部-回糸切り	砂粒・長石-多	良	灰色	0382	R 二段成形 図版57-7
10	甕(土師器)	頸径 15.7			1/3	口縁付近,内外面布ナデそれ以下内面-横布ナデ,外面-ヘラ削り	スコリア粒 酸化鉄粒	良	橙褐色	0223	回転方向不明
11	甕(土師器)	21.2	〈9.3〉	最大径 22.0	口縁1/4 胴部1/4	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ	雲母・砂粒・石英・長石-多	良	暗褐色	0039	図版58-2
12	甕(土師器)	16.8	不明	不明	1/2	口縁部回転布ナデは胴部外面ヘラ整形によって切られている。従って,ヘラは布ナデ後の最後整形内面は,ヘラ整形時の凹凸が目立つ	雲母・石英粒等の砂粒-多	良	黄褐色	0057+ 0085+ 0122+ 0154+ 0398+ 0409	R 図版57-8
13	甕(土師器)	頸径 13.0			1/3	胴部内面-ヨコナデ 胴部外面-ヘラ削り 口縁部内外面-回転ヨコナデ	スコリア粒酸鉄粒雲母-多	良	橙褐色		回転方向不明
14	甕(土師器)	頸径 14.4			1/4	胴部外面-ヘラ削り 口縁部内外面-回転ヨコナデ	長石粒・雲母-多	普通	橙褐色		L
15	甕(土師器)	14..0	〈4.3〉		1/6	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部外面-ヘラ削り	雲母・砂粒-少密	良	淡黄褐色	0270+ 0272	
16	甕(土師器)			9.0	1/3	胴部内面-布ナデ(強い) 胴部外面-ヘラ削り 縦方向が後	酸化鉄粒・長石-多	堅緻	乳褐色	0140+ 0261+ 0301+ 0405+ 0406+ 0411	R
17	甕(土師器)		〈8.1〉	9.0	胴部下半のみ	胴部外面-ヘラ削り 胴部内面-ナデ 底部-不定方向のヘラ削り	砂粒・石英密	良	灰褐色	0014+ 0354+ 0356+ 0406	
18	鉄斧	全長 14.4	巾 4.6							0348	図版58-1 482g
19	不明鉄製品	全長 〈3.4〉	巾 1.7	厚 0.2						0001	5g



第106図　012 住居跡

012住居跡

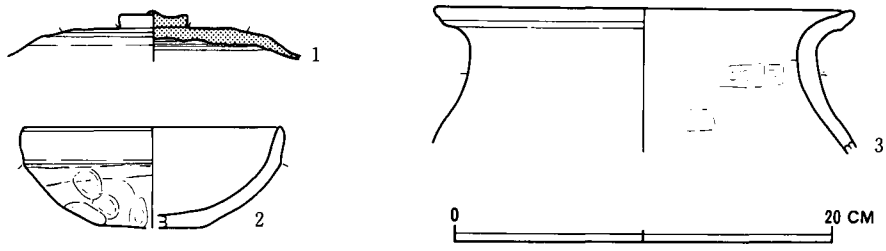
プラン　方形　　**規　模**　4.3×4.1m

主軸方向　N－51°－W　　**現存壁高**　30cm前後

カマド　西壁中央　　**柱　穴**　4本柱もカマドに対面する柱穴1本となるだろう

周　溝　西壁を除き幅12～24cm，深さ4～6cm

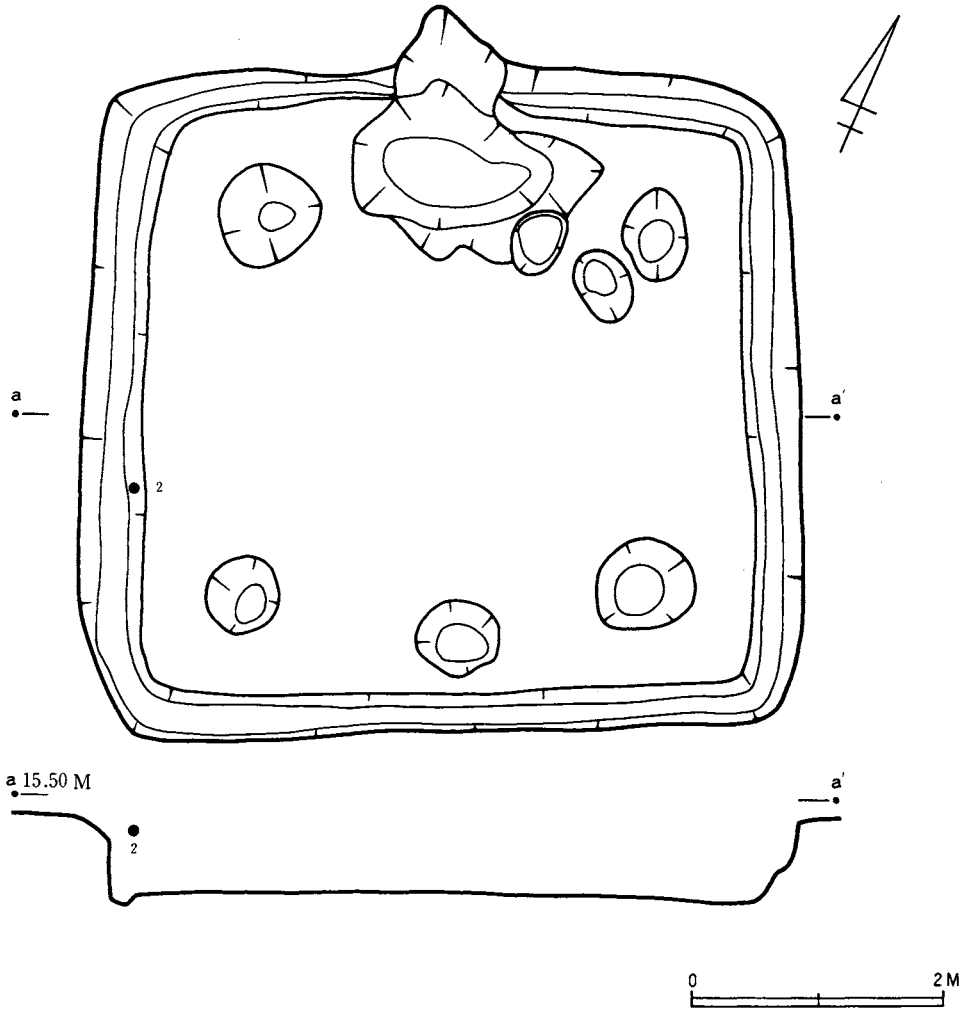
所　見　カマドの袖部の遺存は良好である。遺物の出土量は僅少である。



第107図　012住居跡出土遺物

012住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	蓋（須恵器）	〈15.2〉	〈2.3〉		口縁を欠く	天井部-回ヘラ削り 内外面-ヨコナデ	雲母・砂粒-少 密	良	灰褐色	0036＋0399（G09）＋0054（G16）	R
2	椀（土師器）	(13.6)	5.2	(6.2)	½	体部外面-粘土巻き上げ成形後,指頭による整形 底部-木葉痕有り 体部内面～口縁部-ヨコナデ	砂粒-少 密	良	淡赤褐色	0017＋0018	
3	甕（土師器）	(22.2)	〈7.0〉		口縁⅓	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ	雲母・砂粒・長石・石英-多	良	暗褐色	0012＋0032	



第108図　014 住居跡

014住居跡

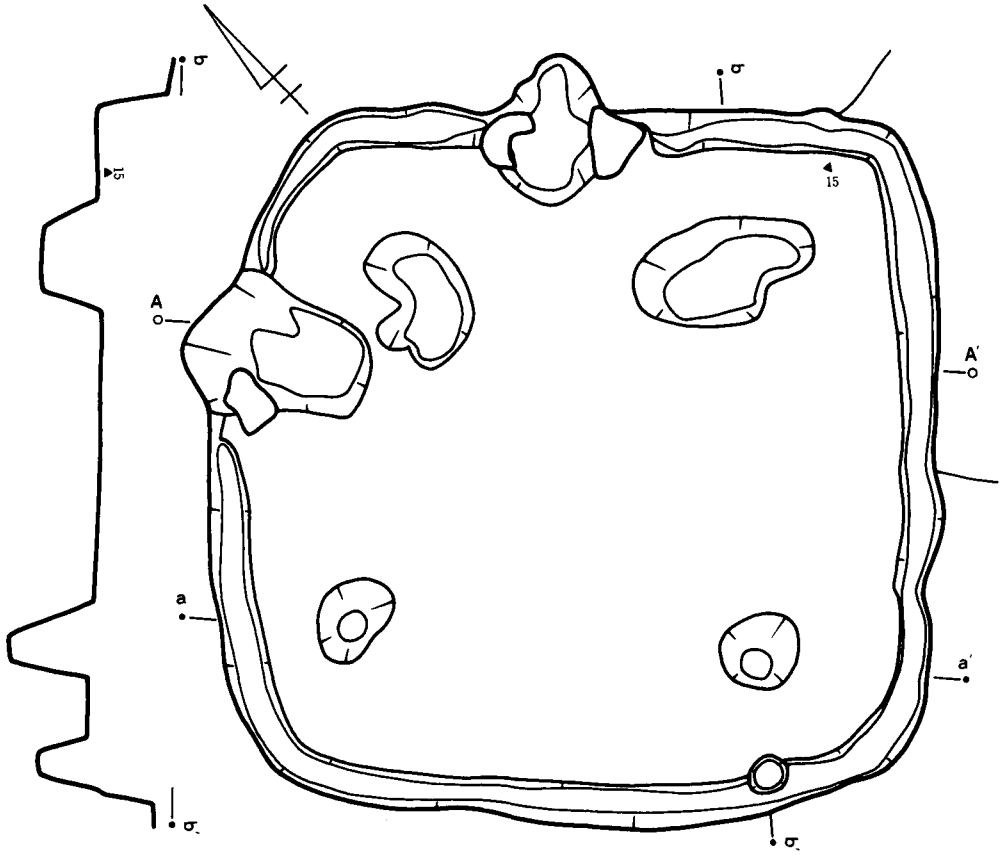
プラン　方形　　**規　模**　5.3×5.7m

主軸方向　N－24°－W　　**現存壁高**　60cm

カマド　北壁中央　　**柱　穴**　4本柱とカマドに対面する柱穴1本

周　溝　カマド部を除き全周，幅20cm，深さ10cm

所　見　比較的大形の住居である。カマドの遺存状態は悪く，掘り方のみが判明する程度である。遺物出土量は僅少。



016住居跡
1 黒 色 土 層
2 黒褐色土層
3 暗褐色土層 ローム粒を含む
4 黒褐色土層 焼土粒を含む

0 2M

第109図 016 住居跡

016住居跡

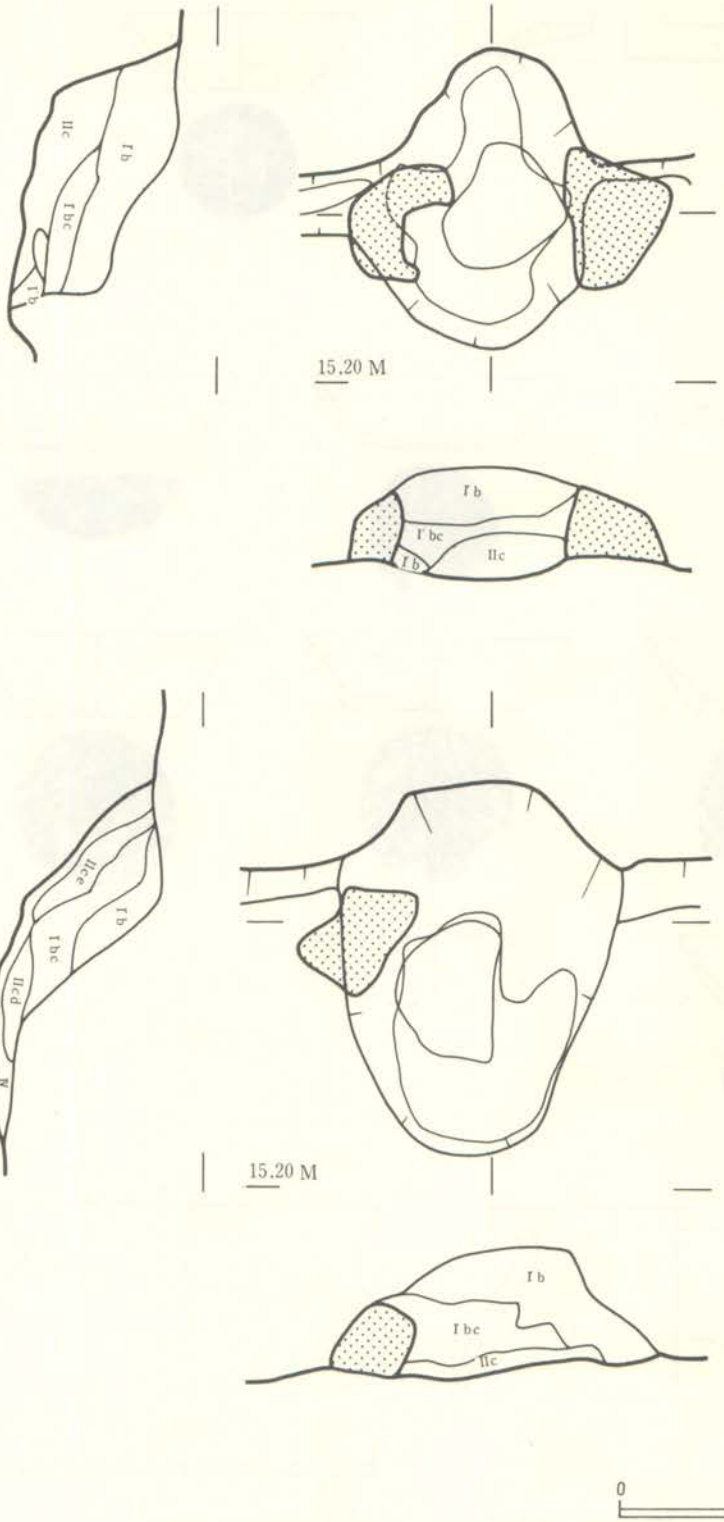
プラン 方形 **規 模** 5.5×5.7m

主軸方向 N−45°−W **現存壁高** 50～60cm

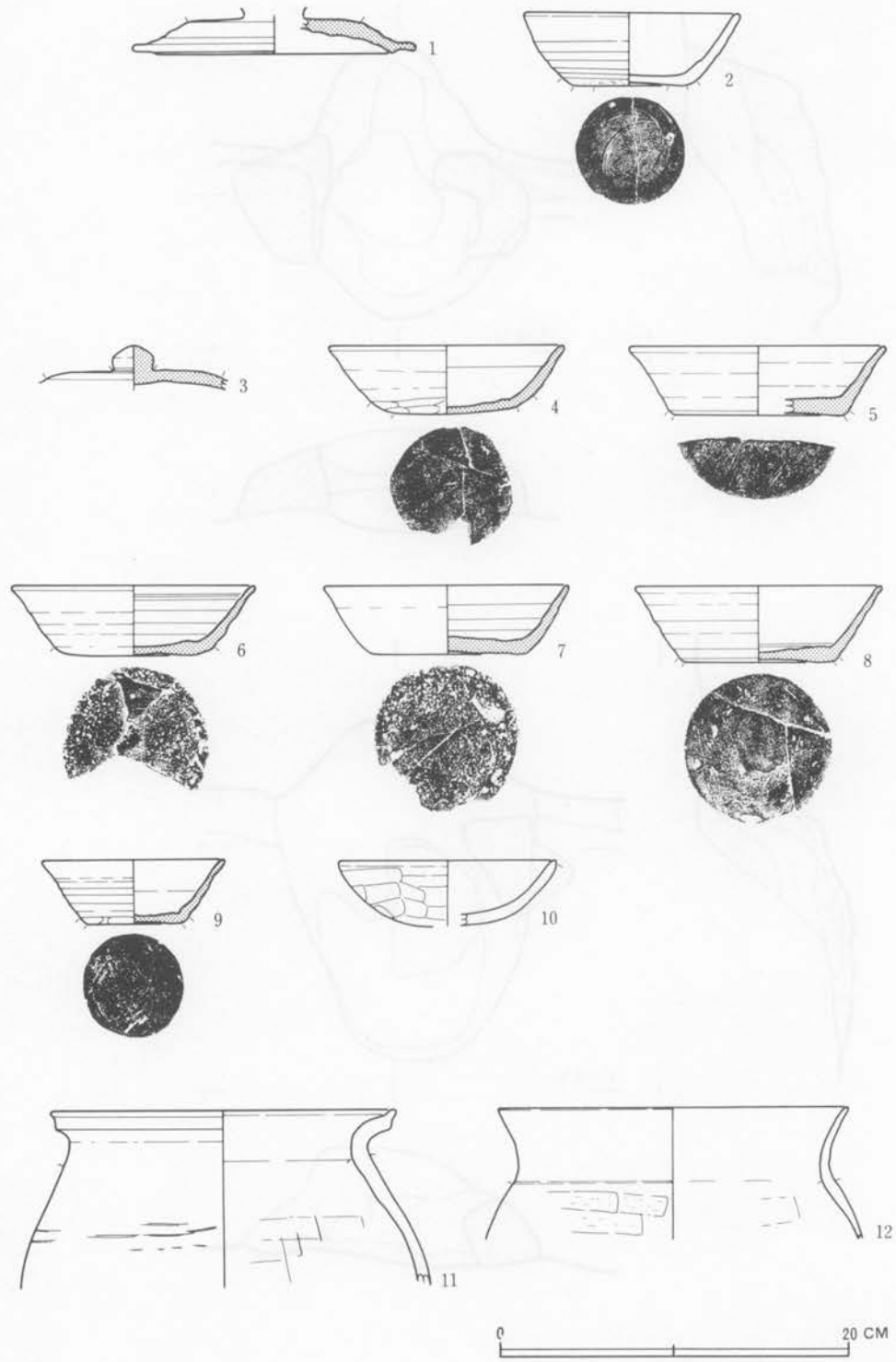
カマド 北壁，東壁に2基 **柱 穴** 4本柱の形態に，周溝に1本

周 溝 カマド部を除き全周，幅20cm，深さ3～5cm

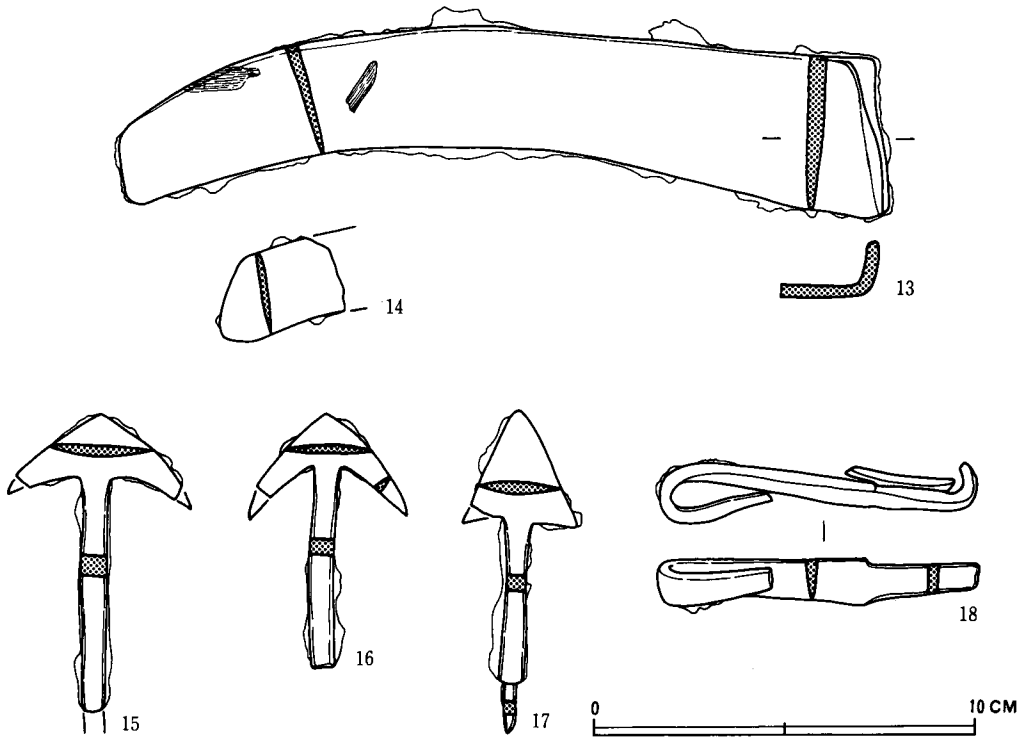
所 見 カマド2基を有する大形の住居跡である。カマドの遺存状態は悪く袖部が残る程度である。東壁隅は017縄文住居を切っている。



第110図　016 住居跡　カマド



第111図　014住居跡(１・２)・016住居跡出土遺物



第112図　016住居跡出土遺物

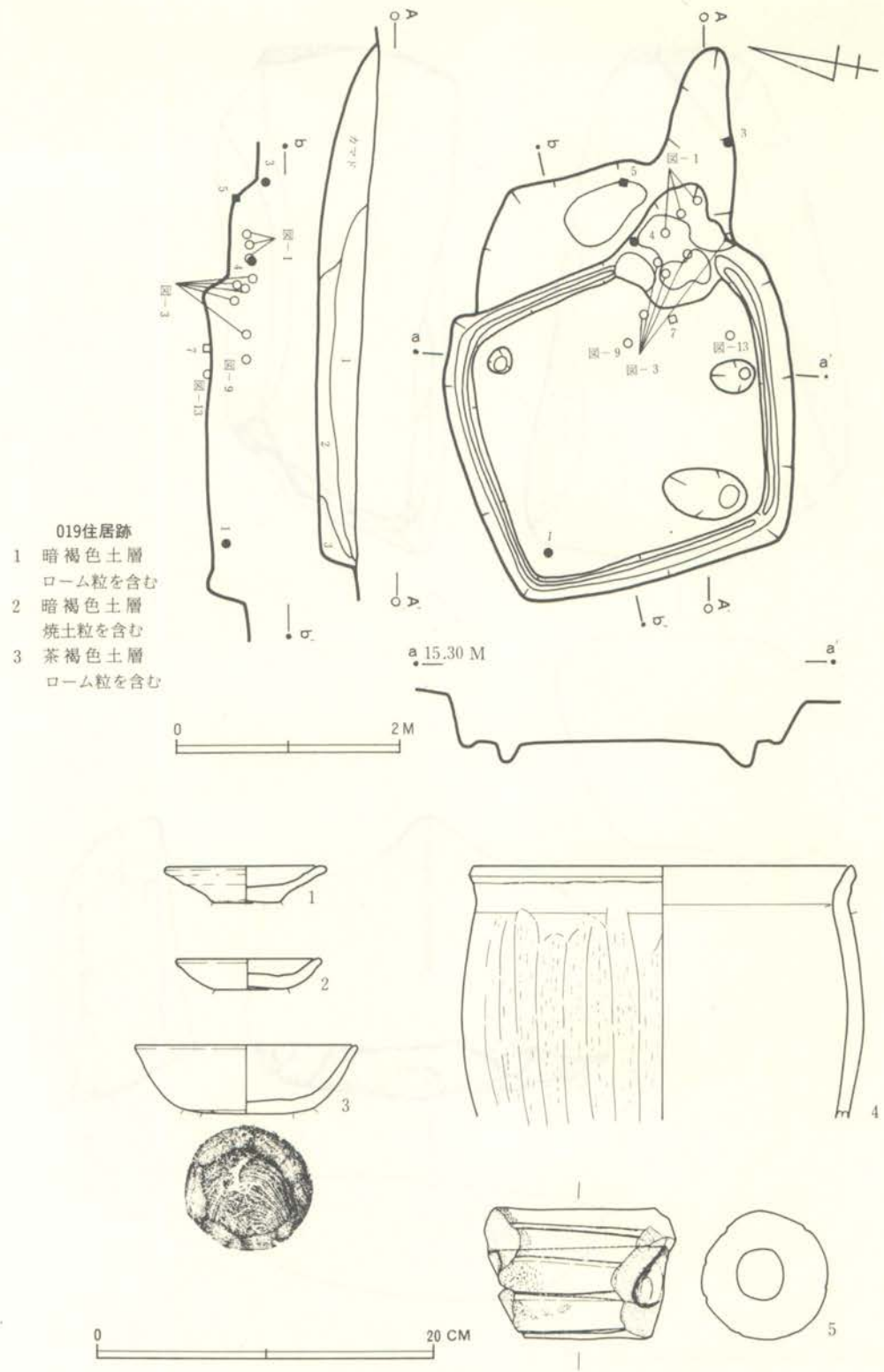
014住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	蓋（須恵器）	16.3	2.0	かえり径13.5	1/6	内外面-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り	雲母-多 砂粒-少	良	黒褐色	0003	
2	坏（土師器）	12.4	5.1	6.4	口縁1/3を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母・砂粒-少 密	良	暗褐色	0019	図版58-3

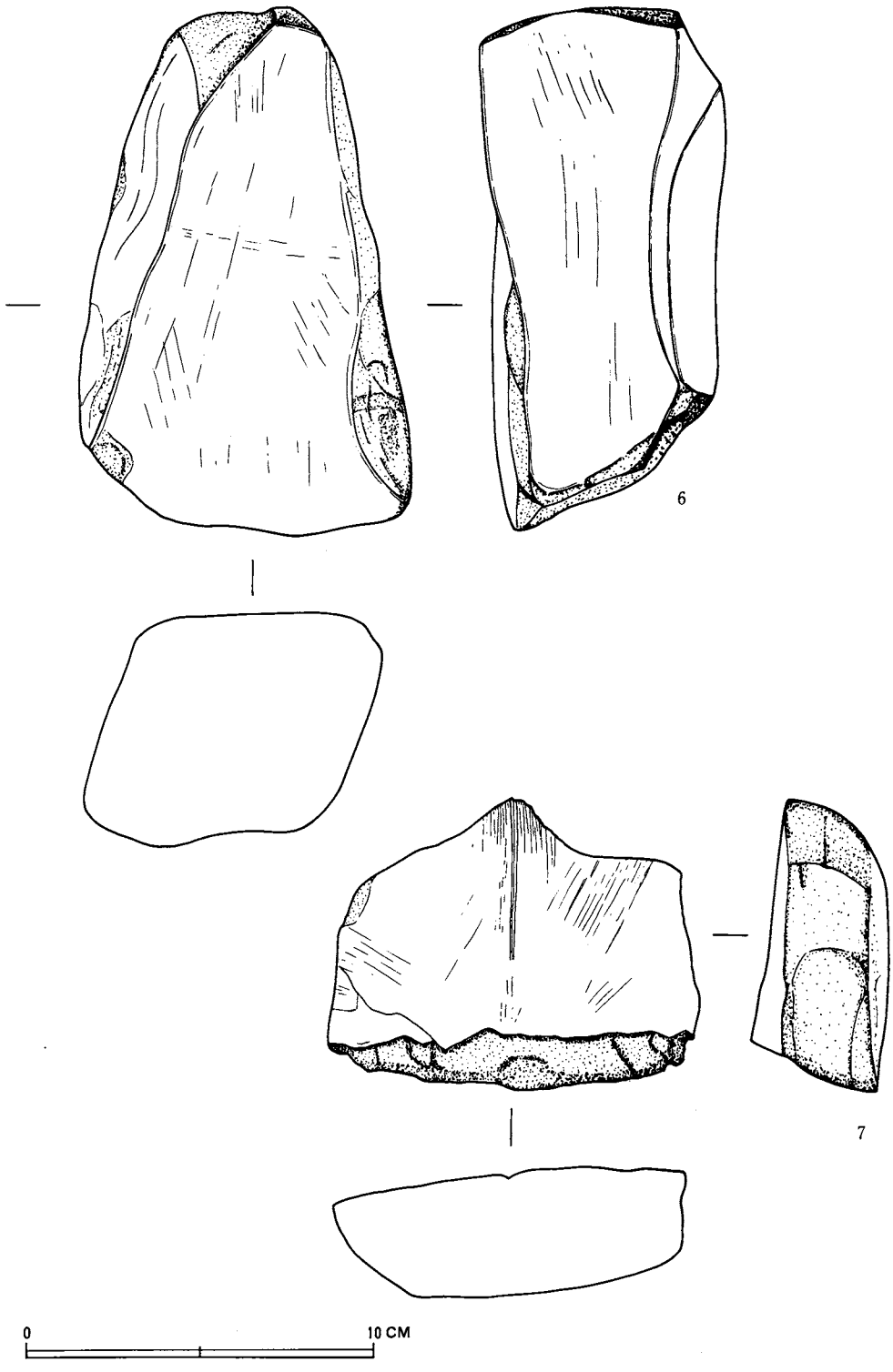
016住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
3	蓋（須恵器）	つまみ径2.4	つまみ高1.5			つまみ部-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り 口縁部-ヨコナデ	雲母・砂粒-多	良	灰色	0015	
4	坏（須恵器）	13.2	3.9	7.1	体部1/2を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手持ちヘラ削り 底部-切離し不明 一定手持ちヘラ削り	砂粒-多	良	灰色	0001+ 0005+ 0010+ 0011	
5	坏（須恵器）	14.4	4.0	9.6	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切離し不明 一定手持ちヘラ削り	砂粒-多	良	灰白色	0021	

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
6	坏(須恵器)	13.8	3.9	8.2	½	体部内外面-ヨコナデ 底部-回ヘラ切離し 風化著しく調整不明	砂粒・雲母-少 密	良	灰色	0020	図版59-1
7	坏(須恵器)	13.8	3.9	8.0	⅓	体部内外面-ヨコナデ 底部-回ヘラ切離し 一定手持ちヘラ削り	雲母・石英・砂粒 -多	やや甘	灰色	0014	L
8	坏(須恵器)	13.8	4.2	8.4	体部⅖を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り離し,不定方向の手持ちヘラ削り	雲母・砂粒-多	やや甘	灰白色	0001+ 0004+ 0005	
9	坏(須恵器)	10.4	3.6	5.8	口縁½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手持ちヘラ削り 底部-切離し不明 二方向の手持ヘラ削り	雲母・長石・砂粒 -多	良	暗灰色	0004	R
10	坏(土師器)	12.4	(3.7)		¼	内面～口縁-ヘラミガキ 体部-ヘラ削り	砂粒 密	良	暗褐色	0004+ 0016	
11	甕(土師器)	19.6	〈11.0〉		口縁¾	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヨコ方向のヘラナデ	雲母・砂粒-多	良	淡褐色	0001+ 0004+ 0015+ 0017	図版59-2
12	甕(土師器)	20.1	〈7.4〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒-多 雲母-少	良	赤褐色	0001+ 0015	
13	鎌	長さ 20.3	巾4.1 ～ 2.9	厚 0.4 ～ 0.3							102g 図版59-4
14	鎌	長さ 3.4	巾 2.1	厚 0.2						0001	6g
15	鉄鏃	全長 7.8 茎長 6.0	根巾 (4.2) 茎巾 0.7	茎厚 0.6						0018	14g 図版59-6
16	鉄鏃	全長 6.6 茎長 5.3	根巾 4.3 茎巾 0.5	茎厚 0.4						0011	11g 図版59-5
17	鉄鏃	全長 8.4 篦被長 4.2 茎長 1.3	根巾 (3.1) 巾 0.6 茎長 0.4	厚 0.5 茎厚 0.4						0011	15g 図版59-7
18	刀子										14g 故意に折りまげる



第113図　019住居跡及び出土遺物



第114図　019住居跡出土遺物

019住居跡

プラン　不整方形　　**規　模**　3×2.8m

主軸方向　N—73°—E　　**現存壁高**　45～50cm

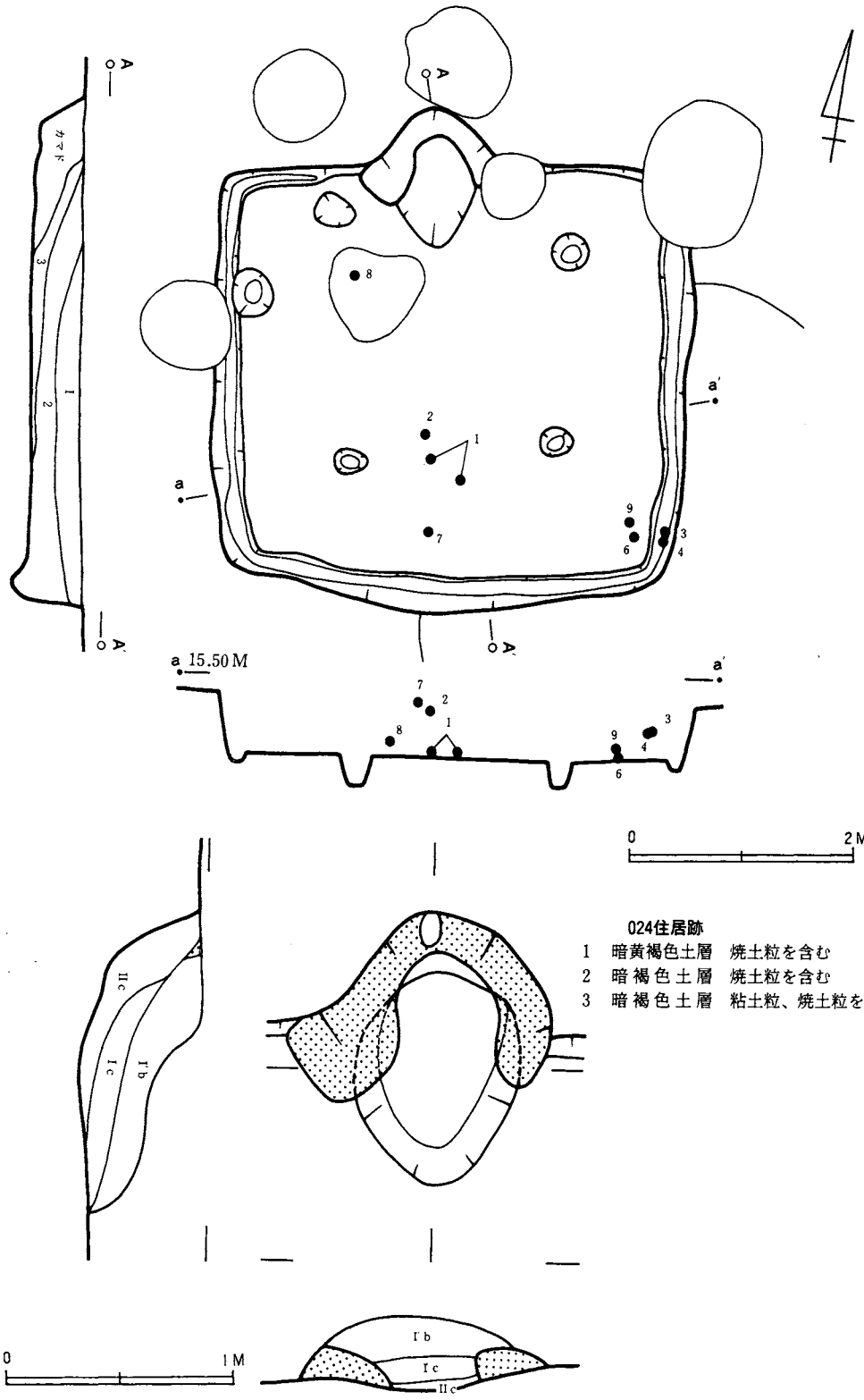
カマド　東壁隅に1基　　**柱　穴**　3本

周　溝　カマド部除き幅10～15cm，深さ5cmで全周

所　見　隅カマドとなるもので，カマド内には埴輪が出土する。壁材として使用したものと考えられる。東壁の外側に掘り込みが認められるが，住居はこの掘り込みを切って構築される。

019住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	皿（土師器）	(9.6)	2.1	(4.0)	1/3	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	砂粒-多 雲母-少	良	淡赤褐色	0064	
2	皿（土師器）	8.8	1.75	4.0		体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	砂粒-多 雲母-少	やや甘	暗褐色	0075	
3	坏（土師器）	13.4	3.9	6.0	完形	体部内面-ヨコナデ後ヨコ方向のヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 底部-回糸切り 外縁手ヘラ削り	砂粒・雲母-少	良	内-赤褐色 外-暗褐色	0071	図版58-4
4	甕（土師器）	22.6	〈14.7〉	-	1/4	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ていねいなナデ 胴部外面-ヘラ削り	雲母，微砂粒-少	良	暗褐色	0007	
5	羽口	径 7.5	長 〈11.0〉							0014	図版58-5
6	砥石	長 〈15.3〉	最大巾 〈8.1〉	最大厚 7.5						0082	
7	砥石	長 8.3	最大巾 10.2	最大厚 3.8						0022	



第115図 024 住居跡

024住居跡

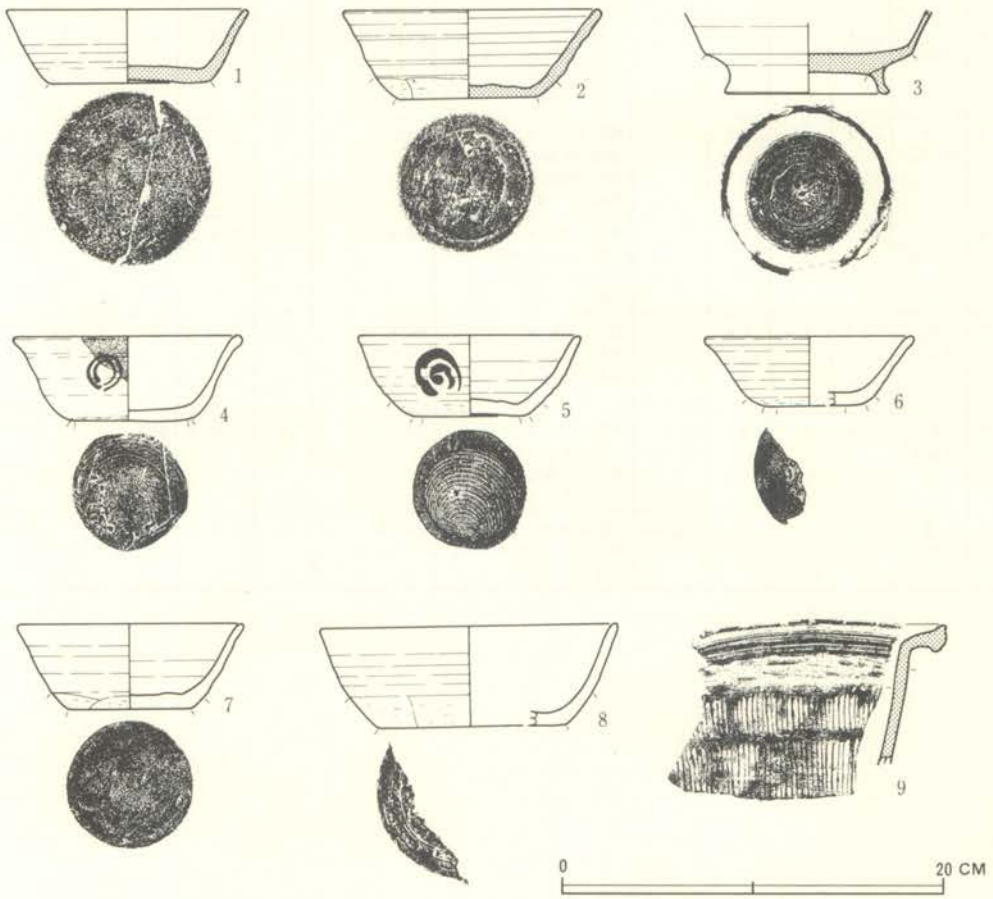
プラン　方形　　規　模　3.8×4.2m

主軸方向　N－10°－W　　現存壁高　45～55cm

カマド　北壁中央　　柱　穴　7本

周　溝　北壁を除き幅10～25cm，深さ10cm

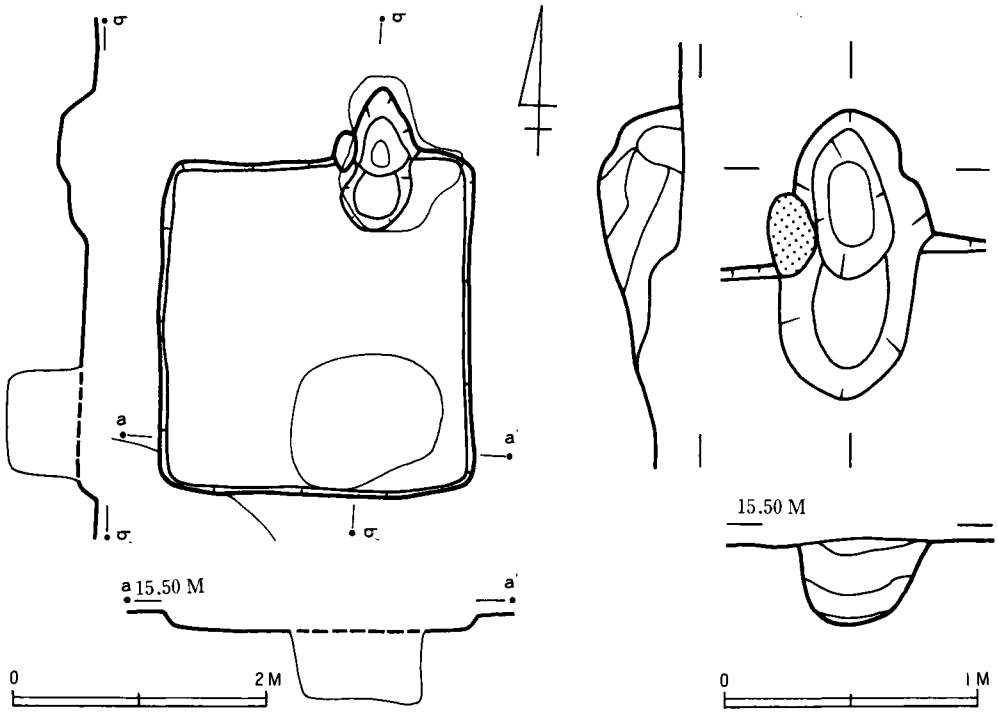
所　見　住居の北半分では5・6号掘立柱建物の柱穴と切り合うが，その新旧関係は不明である。南東部は025縄文住居を切っている。



第116図　024住居跡出土遺物

024住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏 (須恵器)	12.7	3.9	8.4	5/6	体部内外面-ヨコナデ 底部-切り離し不明 手持ちヘラ削り	砂粒・雲母	良	白青灰色	0007+ 0023	L
2	坏 (須恵器)	13.7	4.6	7.2	5/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母	良	青灰色	0005	R 図版60-1
3	高台付坏 (須恵器)	-	(4.2)	8.6	底部のみ	体部内外面～高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	細砂粒・雲母-少	良	青灰色	0024+ 0026+ 0029	R
4	坏 (土師器)	12.0	4.4	6.4	3/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手持ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	細砂粒・雲母-少	良	乳褐色	0017	墨書,体部に油煙 図版60-2
5	坏 (土師器)	(11.8)	4.2	6.0	5/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒	良	褐色	0028	墨書 図版60-4
6	坏 (土師器)	11.0	3.6	5.4	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ削り 外縁回ヘラ削り	細砂粒	良	乳褐色	0020+ 0025	
7	坏 (土師器)	11.9	4.4	6.4	3/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	細砂粒	良	乳褐色	0002	図版60-3
8	坏 (土師器)	15.8	5.2	(10.0)	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ据え置き 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒	良	赤褐色	0014	
9	甕 (須恵器)	-	-	-	口縁のみ	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-同心円状の叩き 胴部外面-叩き目	砂粒-多	良	青灰色	0027	



第117図　027 住居跡

027住居跡

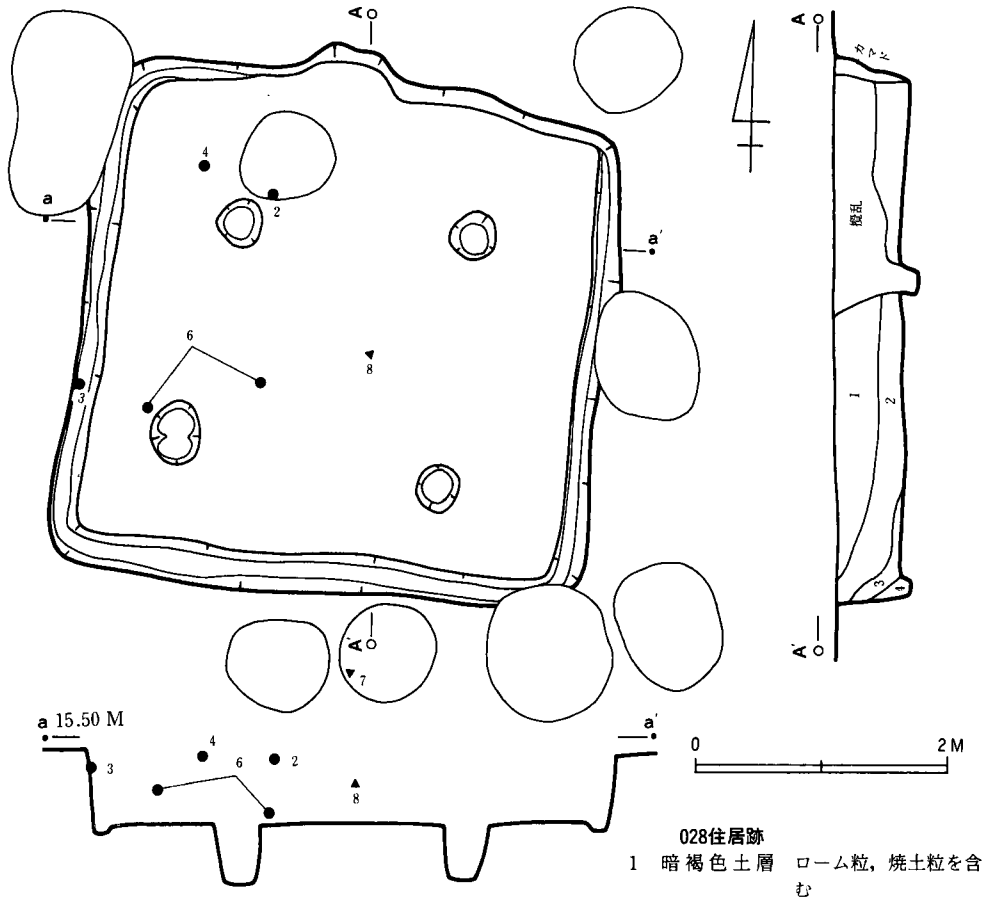
プラン　方形　　**規　模**　2.6×2.4m

主軸方向　N－3°－W　　**現存壁高**　10～12cm

カマド　北壁東寄り　　**柱　穴**　なし

周　溝　なし

所　見　小形の住居跡である。カマド部と床面南側は7号掘立柱建物の柱穴に切られている。



028住居跡
1 暗褐色土層 ローム粒，焼土粒を含む
2 暗褐色土層 粘土粒，焼土粒を含む
3 褐色土層 焼土粒を含む
4 黄褐色土層 ロームブロックを含む

第118図 028 住居跡

028住居跡

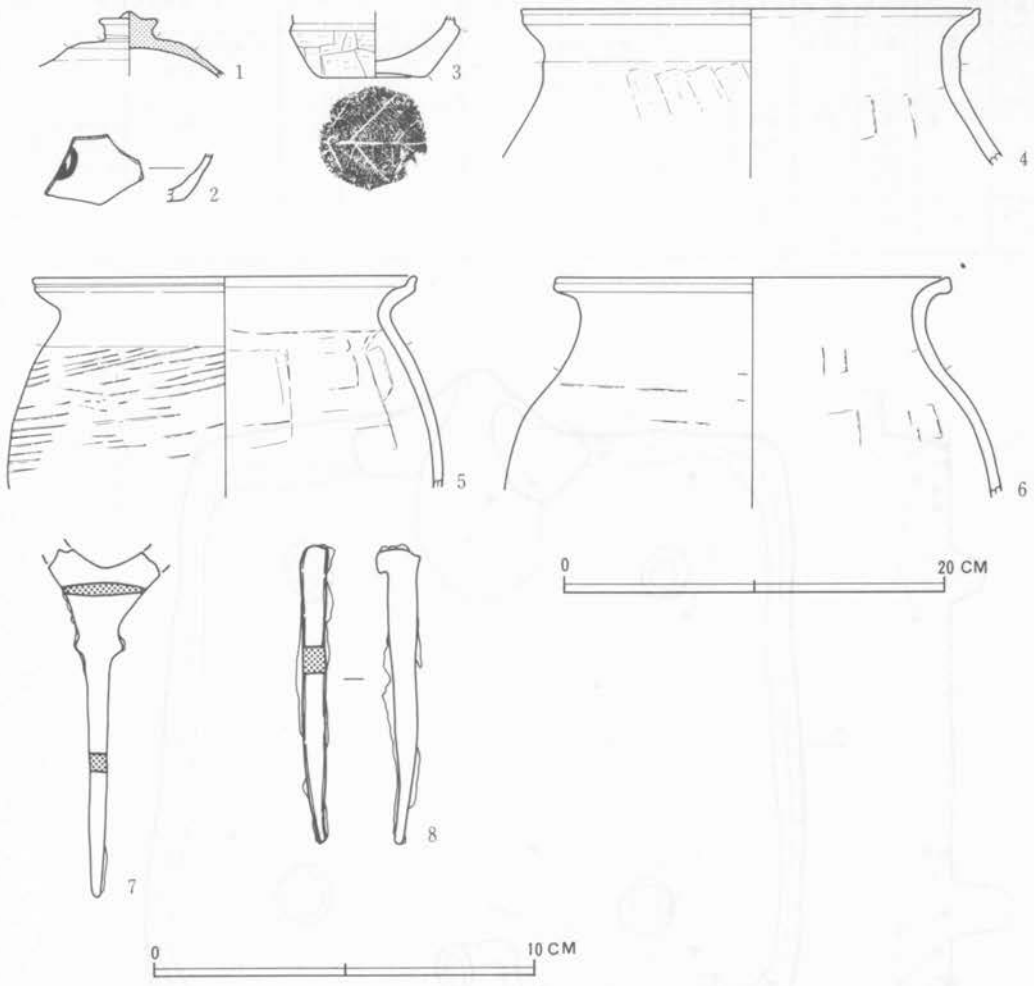
プラン 方形 **規模** 4×4.25m

主軸方向 N－9°－E **現存壁高** 50～55cm

カマド 北壁中央 **柱穴** 4本

周溝 北壁を除いて幅15～20cm，深さ5cm

所見 カマドの遺存状態は極めて悪く，焼土が僅かに残る程度である。7号掘立柱建物の柱穴により，3ケ所壁面が切られる。

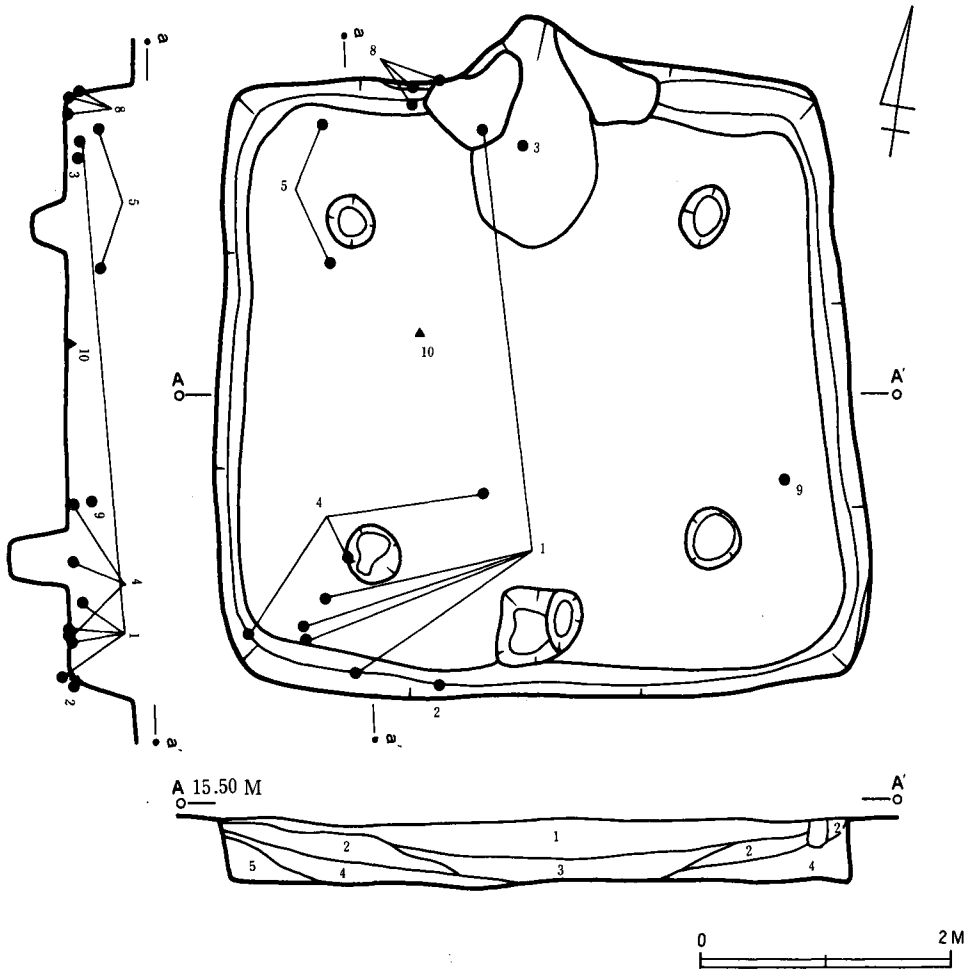


第119図　028住居跡出土遺物

028住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	蓋（須恵器）	つまみ径3.2	つまみ高1.5		¼	つまみ-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り 内面-口縁部-ヨコナデ	雲母・長石・砂粒-多	良	内-暗灰色 外-灰色	0170	
2	坏（土師器）		〈2.5〉		底部破片		砂粒-少 密	良	淡黄褐色	0033	墨書
3	甕（土師器）		〈3.2〉	5.8	口縁を欠く	体部内面-ナデ 体部外面-ヘラ削り 底部-木葉痕	砂粒・雲母-少 密	良	暗褐色	0074	
4	甕（土師器）	24.2	〈7.9〉		口縁¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	雲母・砂粒-多	良	暗褐色	0034	
5	甕（土師器）	20.2	11.0		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-平行叩き	砂粒-多	良	淡褐色	0023+ 0850 G16	

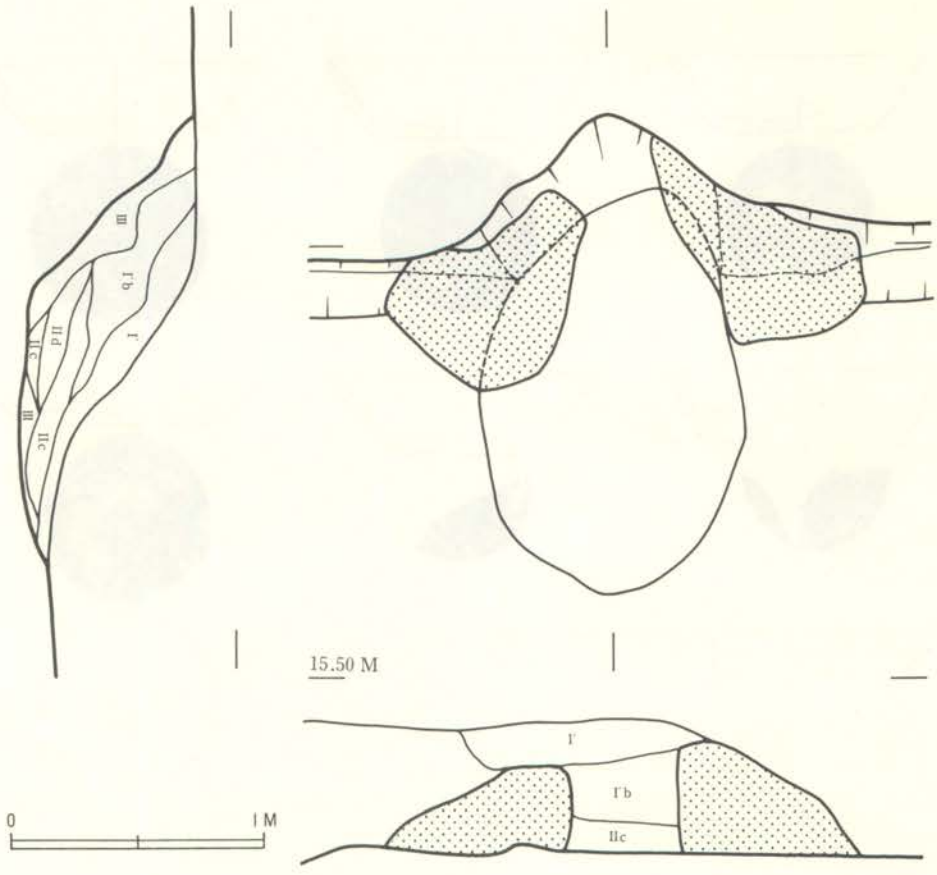
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
6	甕(土師器)	20.6	〈11.1〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	雲母・砂粒・長石-多	良	淡褐色	0107+0126	
7	鉄鏃	長〈9.0〉茎長6.2	茎巾0.5	茎厚0.5						0013	図版60-5 11g 7号掘立柱建物跡に伴うか
8	釘	全長7.7	巾0.6	厚0.6						0016	16g



第120図　030 住居跡

030住居跡

1　暗褐色土層　ローム粒，焼土を含む
2　暗褐色土層　軟質，ローム粒を含む
3　暗褐色土層　硬くしまる，ローム粒を含む
4　暗褐色土層　ローム粒，焼土，炭化物を含む
5　暗褐色土層　ロームブロックを含む



第121図　030 住居跡カマド

030住居跡

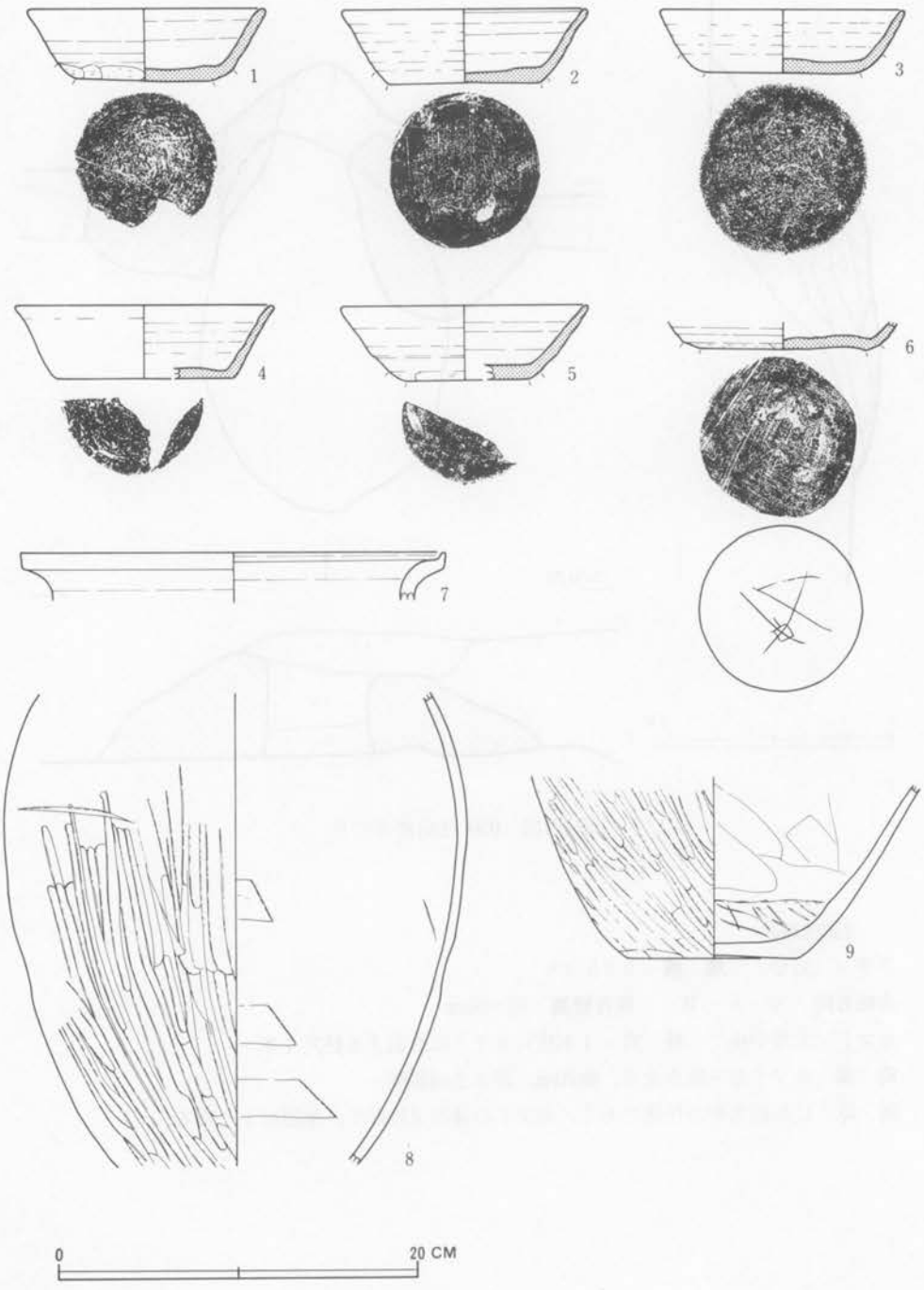
プラン　方形　　**規　模**　5×5.3m

主軸方向　N－8°－W　　**現存壁高**　45～50cm

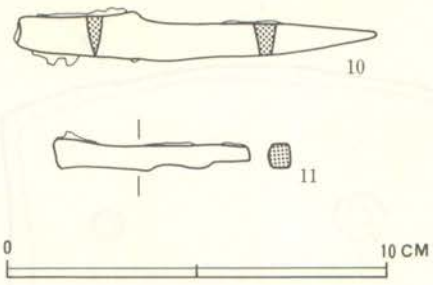
カマド　北壁中央　　**柱　穴**　4本柱にカマドに対面する柱穴1本

周　溝　カマド部を除き全周，幅20cm，深さ2cm前後

所　見　比較的大形の住居である。カマドの遺存は良好で，袖部はよく残る。



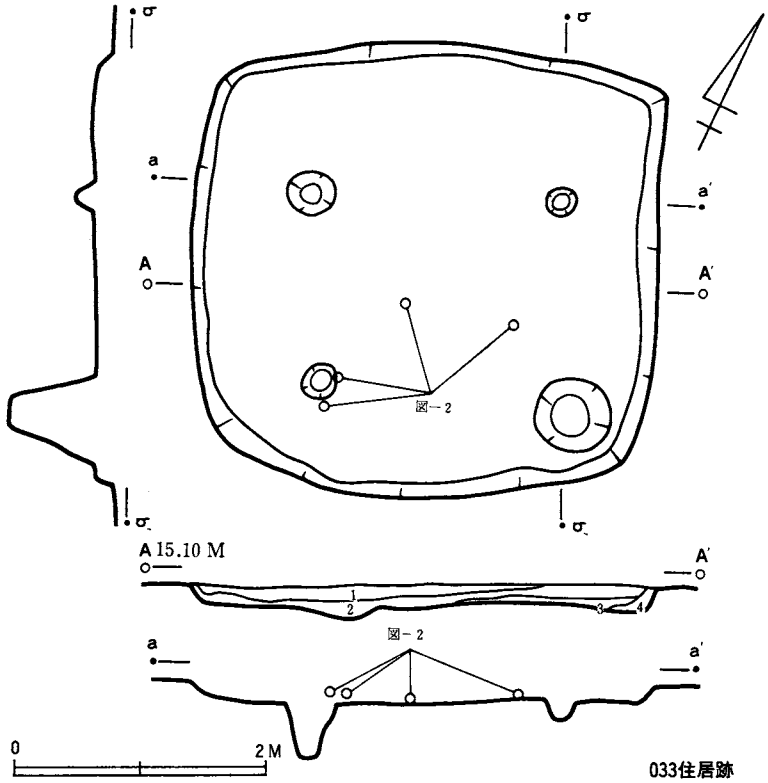
第122図　030住居跡出土遺物



第123図　030住居跡出土遺物

030住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（須恵器）	13.3	4.2	7.6	⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 回転ヘラ削り	砂粒	良	青灰色	0102+ 0103+ 0107+ 0114+ 0535	R 図版60-7
2	坏（須恵器）	13.9	4.2	8.8	完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 手ヘラ削り	雲母	良	灰色	0366	R 図版60-6
3	坏（須恵器）	13.8	3.6	8.8	⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	雲母・砂粒	良	黄青灰色	0534	R
4	坏（須恵器）	14.2	4.0	10.0	¼	体部内外面-ヨコナデ 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒	良	青灰色	0101+ 0380+ 0385	
5	坏（須恵器）	(14.0)	4.1	(7.0)	⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 手ヘラ削り	細砂粒・雲母	良	青灰色	0401+ 0498	
6	坏（須恵器）		〈1.5〉	9.2	底部のみ	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 二方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母	良	青灰色	0518	R
7	甕（土師器）	23.6	2.7		口縁のみ ⅕	胴部内外面-ヨコナデ	砂粒・雲母	良	茶褐色	0533	
8	甕（土師器）					胴部内面-ナデ 胴部外面-ヘラ磨き	砂粒・雲母	良	茶褐色	0536+ 0537+ 0538	
9	甕（土師器）		〈9.9〉	9.6	底部のみ	胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ磨き 底部-木葉痕	砂粒・雲母	良	乳褐色	0017	
10	刀子	全長 9.7 茎長 6.3	巾 1.0 茎巾 0.75	厚 0.45 茎厚 0.7						0514	12g
11	棒状鉄製品	長 5.3	巾 0.7	厚 0.7						0030	6g



第124図　033 住居跡

033住居跡

1　黒色土層　ロームブロックを少量含む
2　黒色土層　ロームブロックを多く含む
3　黒色土層　ローム粒を含む
4　褐色土層

033住居跡

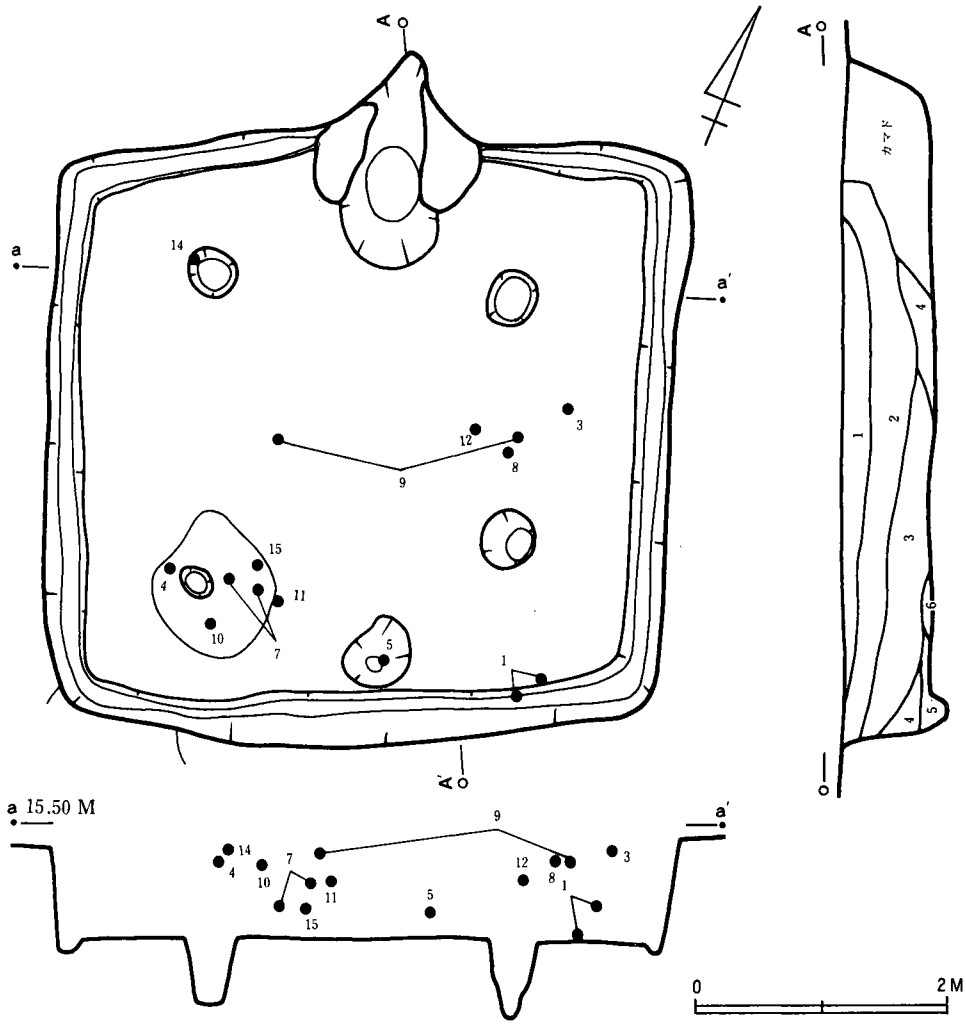
プラン　隅丸方形　　**規　模**　3.5×3.8m

主軸方向　N－21°－W　　**現存壁高**　15～20cm

カマド　なし　　**柱　穴**　4本

周　溝　なし

所　見　カマドが存在した痕跡は認められない。床面より埴輪片が出土する。



第125図　037 住居跡

037住居跡

1　暗褐色土層　ローム粒を含む
2　暗褐色土層　炭化物を含む
3　黒褐色土層　炭化物を含む
4　暗褐色土層　焼土を含む
5　暗褐色土層　ロームブロックを含む
6　焼　土　層

037住居跡

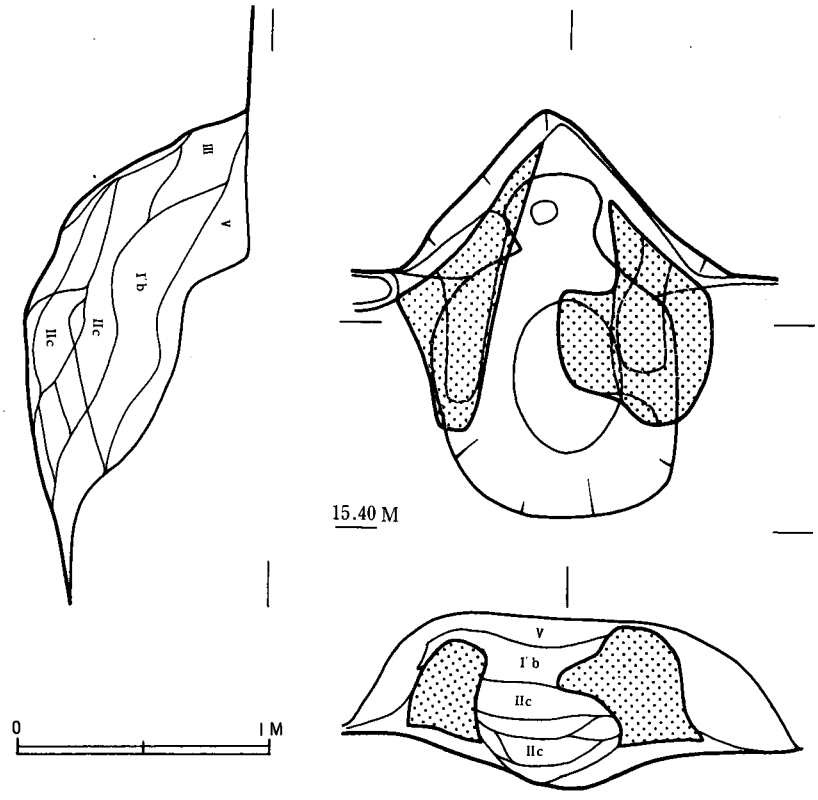
プラン　方形　　**規　模**　4.7×5.1m

主軸方向　N－23°－W　　**現存壁高**　70cm前後

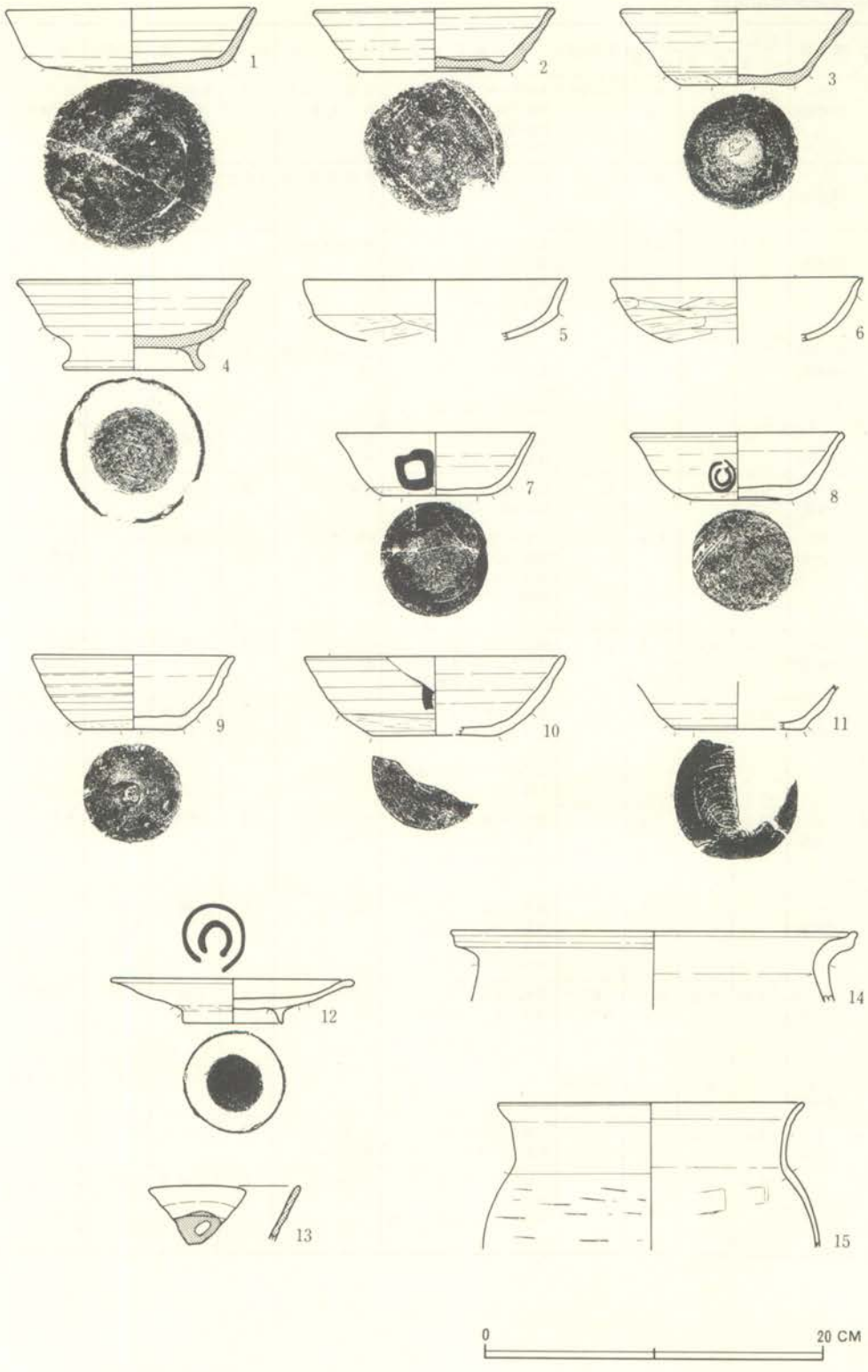
カマド　北壁中央　　**柱　穴**　4本柱にカマド対面の柱穴1本

周　溝　カマド部を除き全周，幅10～20cm，深さ5～10cm

所　見　比較的大きな住居である。床面近くから出土する遺物は少なく，大半は覆土の比較的上層から出土する。南西隅は9号掘立柱建物に切られている。



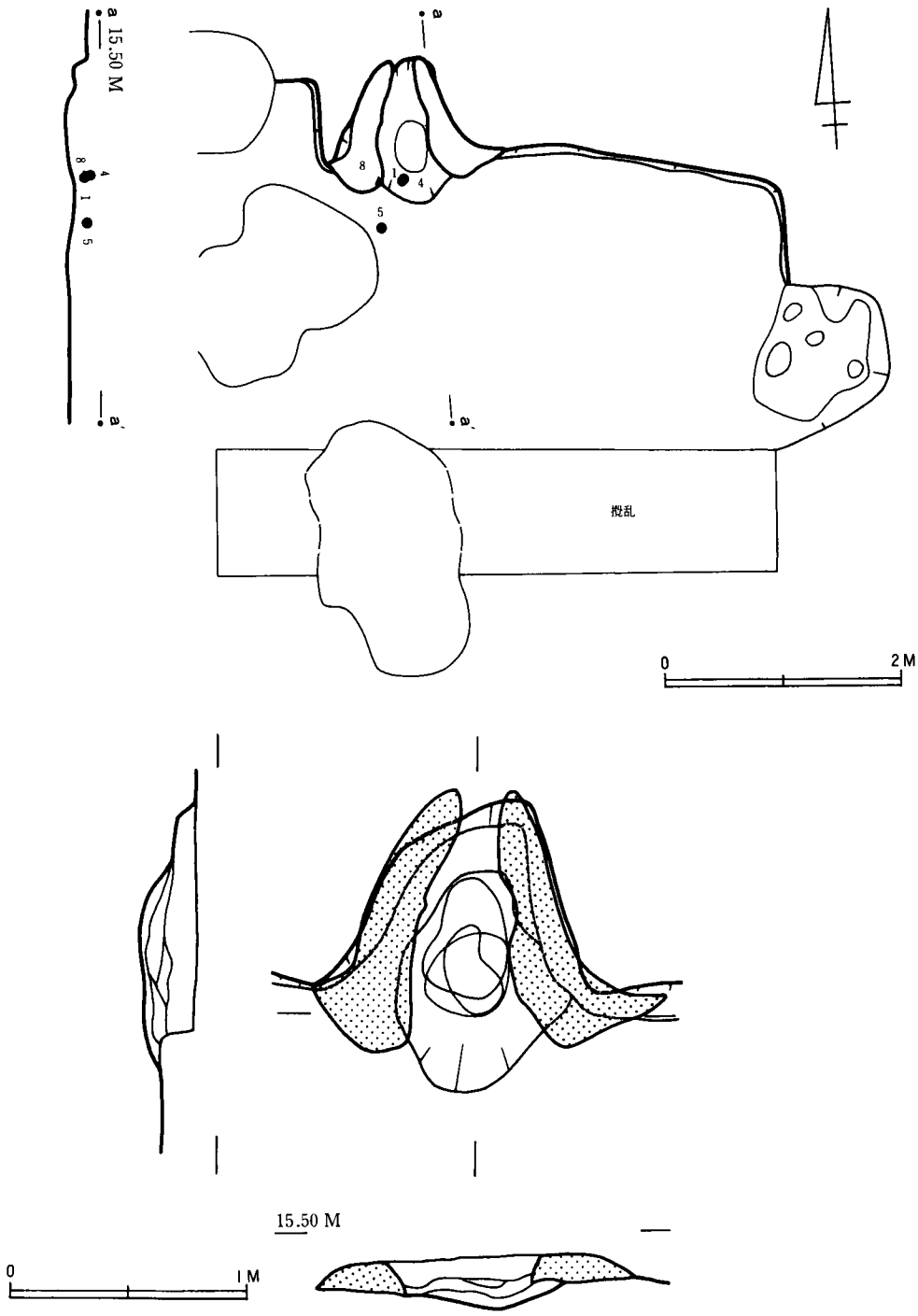
第126図　037 住居跡カマド



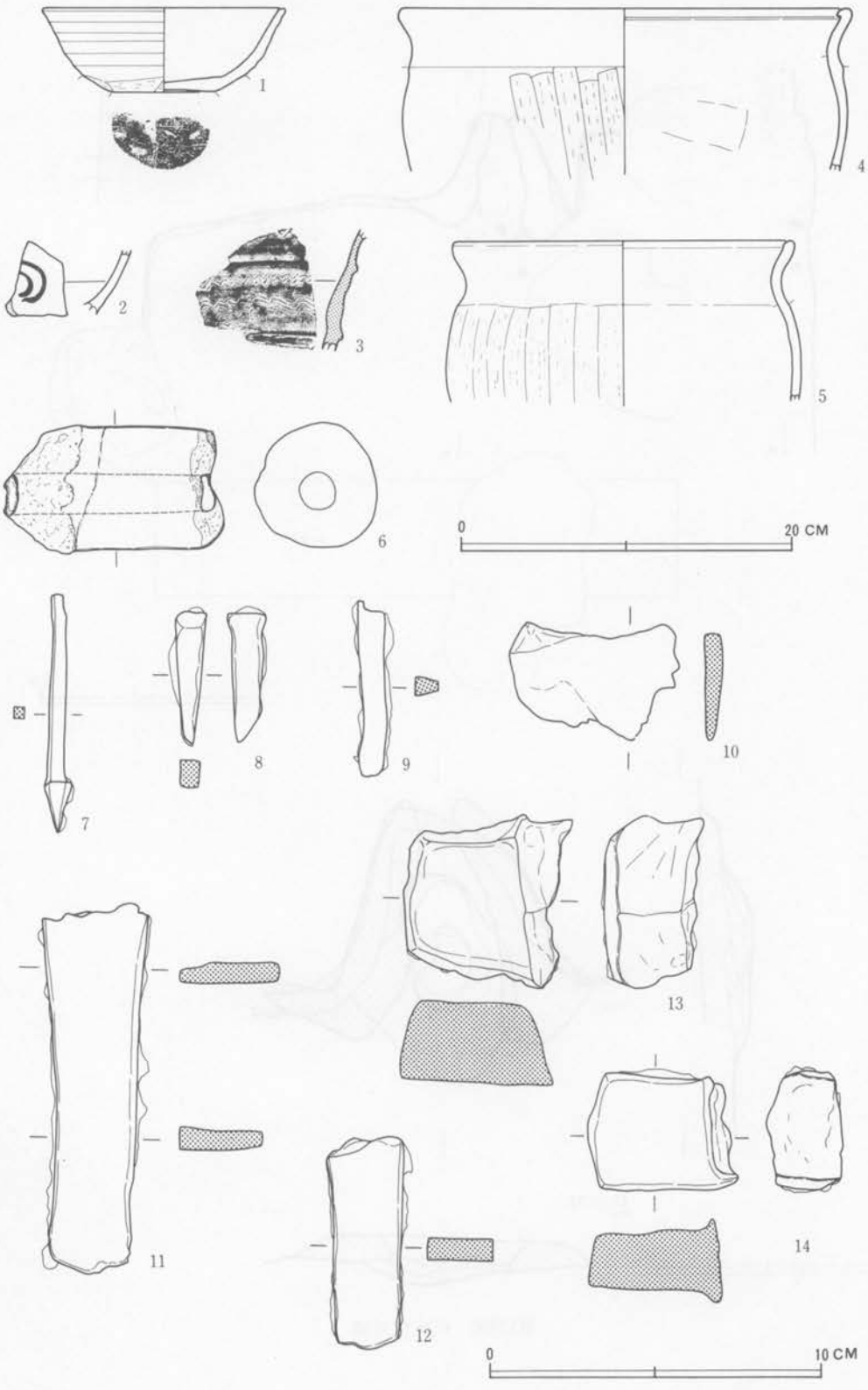
第127図　037住居跡出土遺物

037住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏(須恵器)	14.6	3.9	10.5(丸底)	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	雲母・砂粒・長石・石英-多	良	体部外面-黒色 それ以外-暗褐色	0038+0053 0040	R 図版60-8
2	坏(須恵器)	(14.1)	(3.7)	(9.0)	口縁½底部完	体部内外面-ヨコナデ 底部-切り離し不明 一定方向手ヘラ削り	雲母・砂粒・長石・石英-多	やや甘	灰色	0053	R
3	坏(須恵器)	(13.5)	(4.5)	(6.6)	⅙	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-不定方向の手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 外縁不定方向のヘラ削り	雲母・砂粒・長石	良	灰色	0026	R
4	高台付坏(須恵器)	13.6	5.3	8.0	口縁¼	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り	雲母・砂粒・石英-多	良	暗灰色	0016+0053+0054+0055	
5	坏(土師器)	15.6	3.5		¼	体部内外面-ヨコナデ 体部稜より下部-ヘラ削り	微砂粒-少 密	良	赤褐色	0036+0055	
6	坏(土師器)	14.8	3.7		¼	体部内面-ヨコナデ 体部外面-ヘラ削り	微砂粒-少	良	赤褐色	0054	
7	坏(土師器)	11.8	3.7	6.06	口縁部½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒・雲母 密	良	淡褐色	0013+0033+0053+0054+0055	R 墨書 図版60-11
8	坏(土師器)	12.4	4.0	5.8	完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り後無調整	砂粒・スコリア 密	良	淡褐色	0028	墨書 図版60-9
9	坏(土師器)	11.7	4.4	6.0	口縁⅓を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端～底部-回ヘラ削り 底部中央にわずかに回糸切り残す	砂粒・長石 密	良	淡褐色(一部黒斑)	0005+0027+0054	図版60-10
10	坏(土師器)	15.4	4.7	7.4	⅙	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	微砂粒・スコリア-少	良	明黄褐色	0015	墨書
11	坏(土師器)		〈2.6〉	7.6	⅔	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母・砂粒	良	淡褐色	0011+0055	
12	台付皿(土師器)	(14.0)	(2.6)	(5.9)	口縁の大半を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-回糸切り	砂粒・スコリア-少	良	淡褐色	0029	内面墨書
13	坏(須恵器)		〈3.3〉		口縁部破片					0054	体部に朱書
14	甕(土師器)	24.0	〈4.2〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部外面-不明	石英・雲母・砂粒・長石-多	良	暗褐色	0001	
15	甕(土師器)	(18.0)	〈8.6〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヨコ方向のヘラ削り	砂粒・雲母 密	良	淡褐色	0035	



第128図　039 住居跡



第129図　039住居跡出土遺物

039住居跡

プラン　方形か？　　**規　模**　不明

主軸方向　不明　　**現存壁高**　15cm

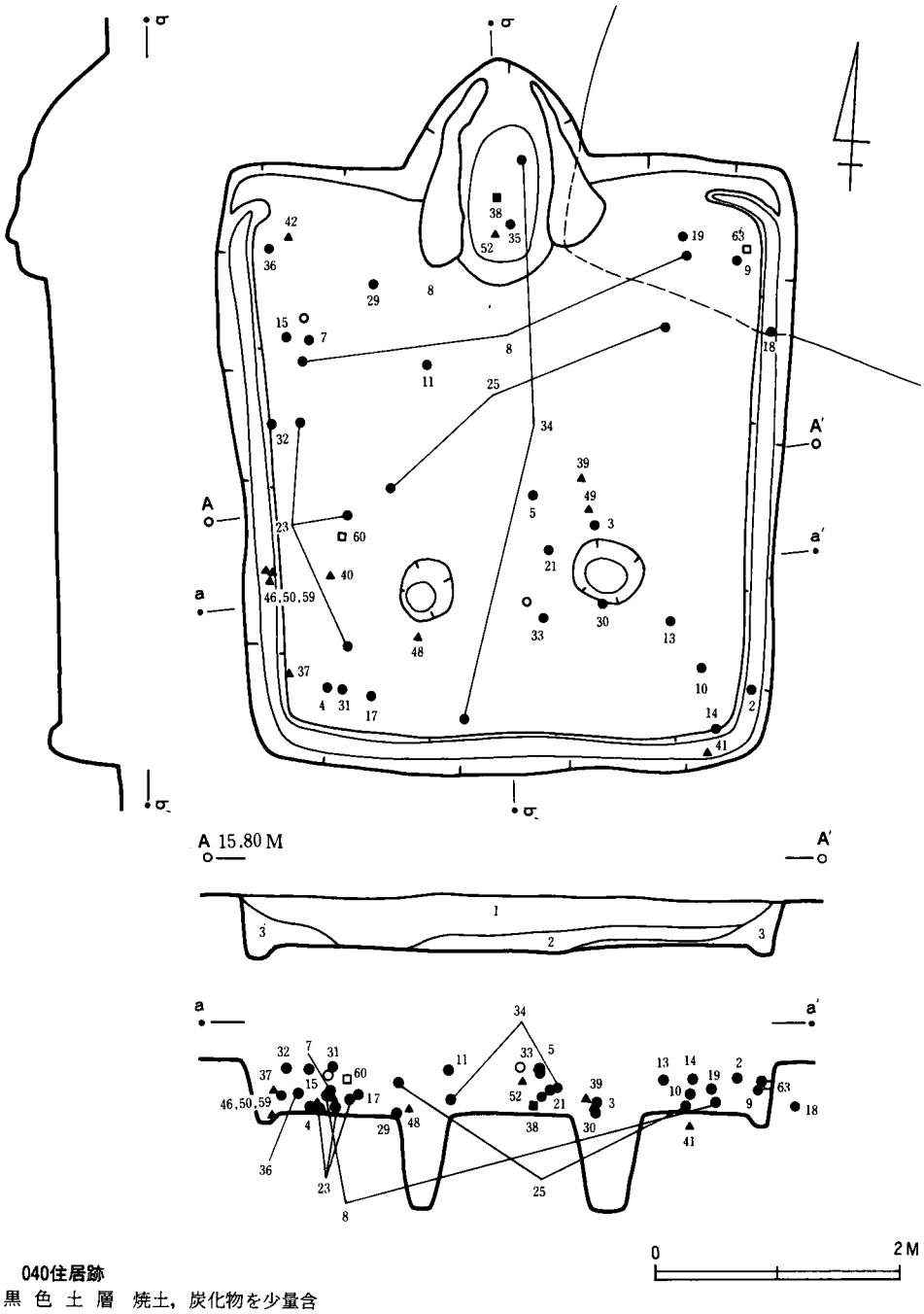
カマド　北壁中央　　**柱　穴**　不明

周　溝　不明

所　見　調査区の南側に位置する住居で，西側を9号掘立柱建物と切り合い，南側は後世の攪乱を受ける。遺存状態は極めて悪い。

039住居跡出土遺物

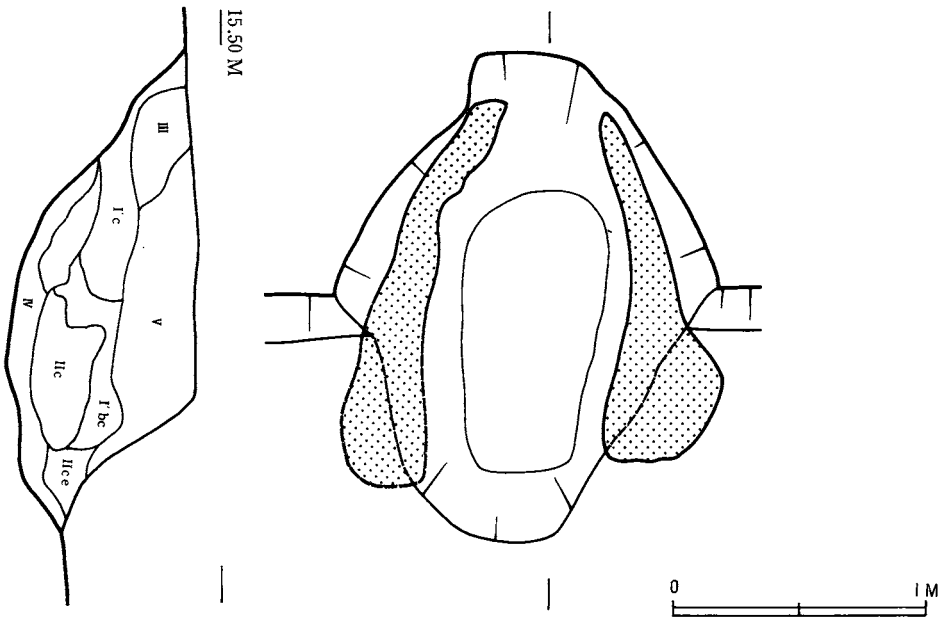
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（土師器）	14.4	5.1	6.4	½	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切りか 一定方向の手ヘラ削り	砂粒-多	やや甘	赤褐色	0017	図版61-1
2	坏（土師器）				体部破片		砂粒-少	良	淡褐色	0015	墨書
3	甕（須恵器）				頸部破片					0001+ 0486 (G23)	
4	甕（土師器）	27.2	〈9.8〉		¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	雲母・砂粒-多	良	明褐色	0005+ 0014+ 0019	
5	甕（土師器）	20.2	〈9.5〉		⅓	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り	雲母・砂粒-少	良	内-暗褐色 外-明褐色	0007+ 0452 (G23)+ 0694+ (G23)	
6	羽口									0024	図版61-2
7	錐？	全長 7.0	巾 0.35	厚 0.35						0014	図版61-3 7g
8	釘	全長 4.0	巾 0.6	厚 0.8						0010	8g
9	棒状鉄製品	全長 5.2	巾 0.7	厚 0.4 \ 0.6						0001	5g
10	板状鉄製品	全長 5.2	巾 2.6 \ 3.1	厚 0.5 \ 0.9						0014	29g
11	板状鉄素材	全長 10.9	巾 1.5 \ 2.0	厚 0.55 \ 0.6						0021	図版61-4 84g
12	板状鉄素材	全長 6.3	巾 2.0	厚 0.7						0016	図版61-5 55g
13	板状鉄素材	全長 4.5	巾 5.0	厚 2.4						0001	截ち割った後一部ひきちぎる 図版61-6 244g
14	板状鉄素材	全長 4.6	巾 3.5	厚1.85						0014	截ち割った後一部ひきちぎる 図版61-7 131g



040住居跡

1　黒色土層　焼土，炭化物を少量含む
2　黒色土層　炭化物を僅かに含む
3　褐色土層　ローム粒，焼土粒を少量含む

第130図　040 住居跡



第131図　040 住居跡カマド

040住居跡

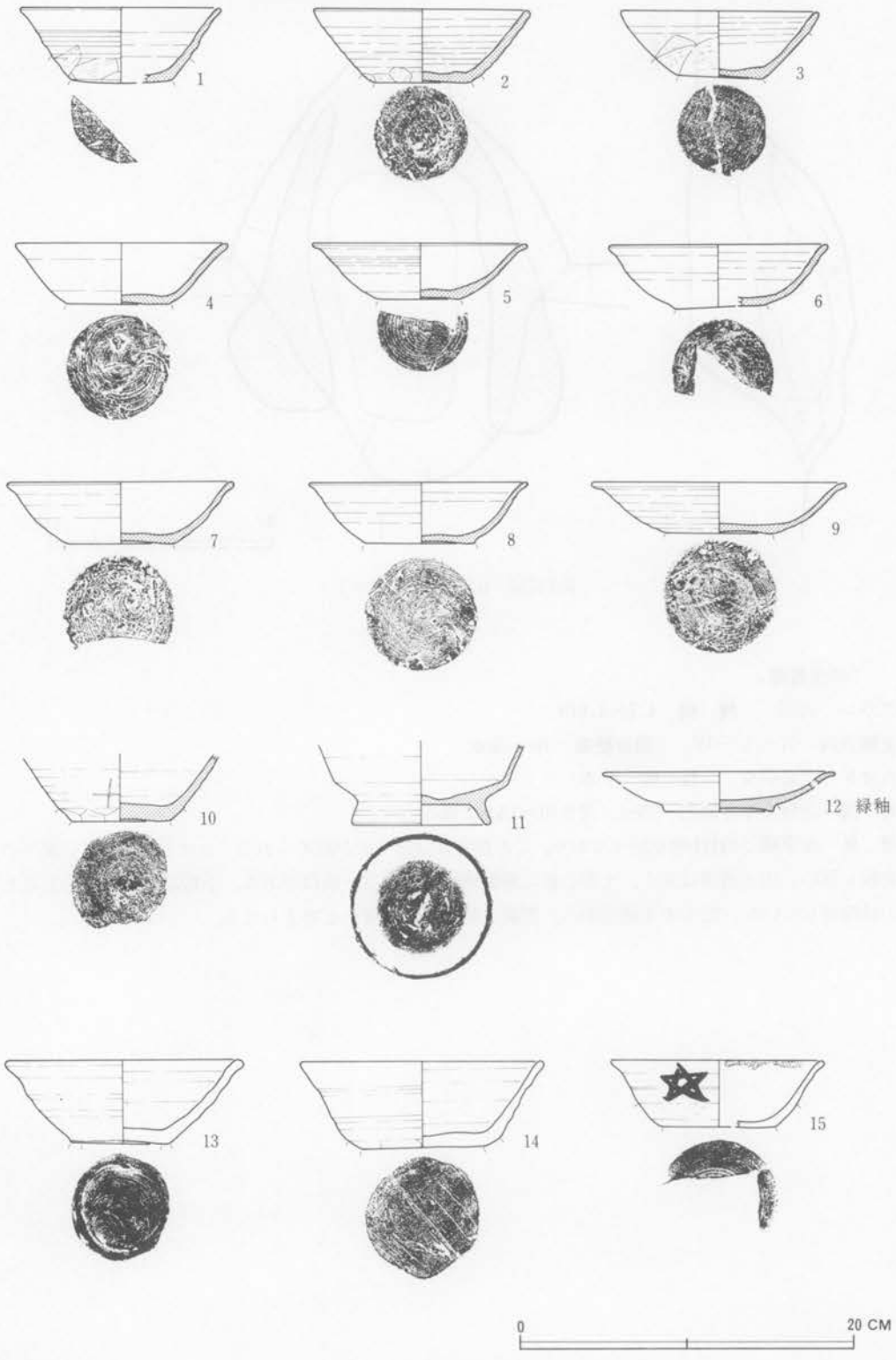
プラン　方形　　**規　模**　4.7×4.9m

主軸方向　N－5°－W　　**現存壁高**　40～55cm

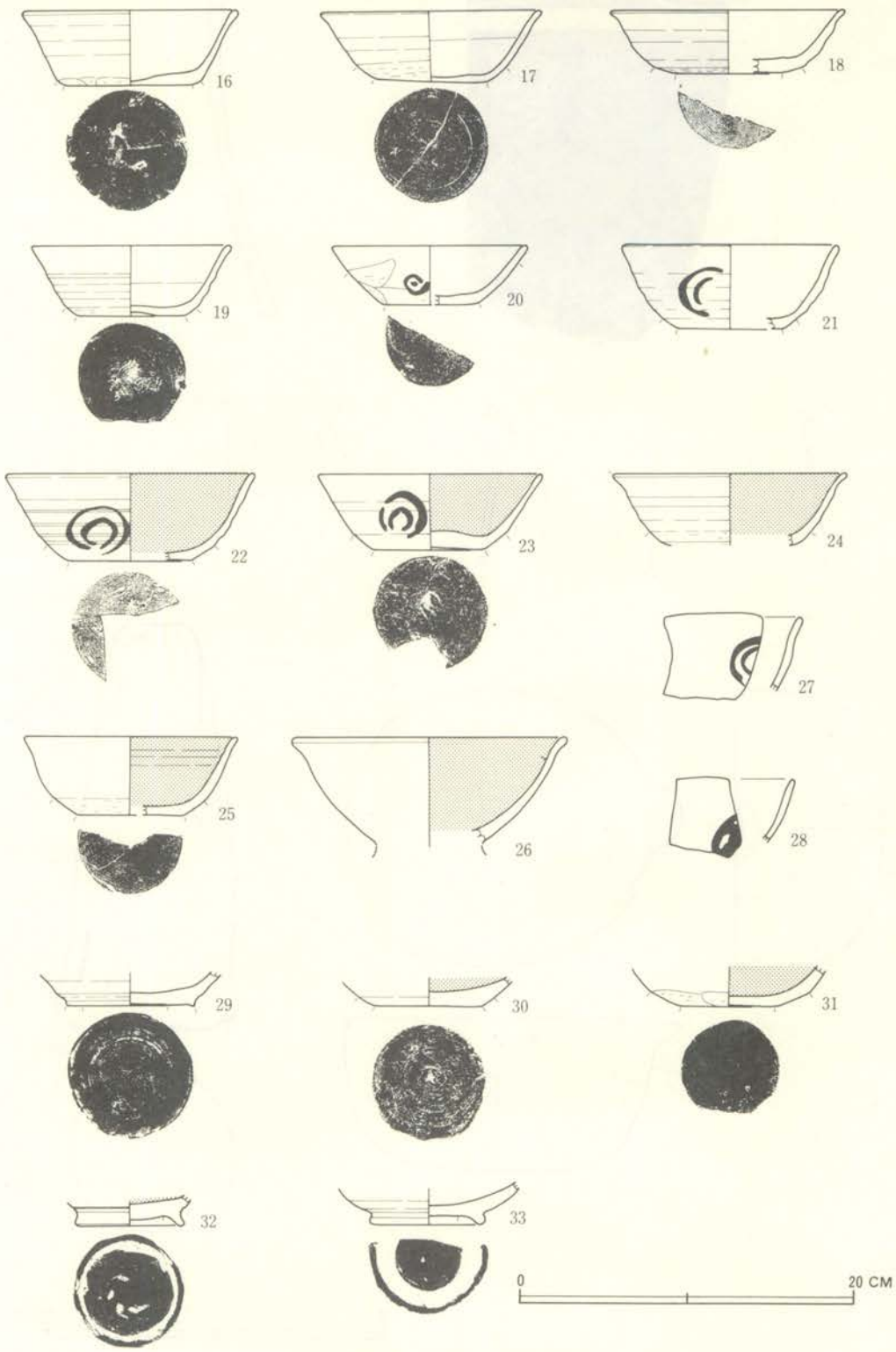
カマド　北壁中央　　**柱　穴**　2本

周　溝　北壁を除き幅25～35cm，深さ10～12cmで周る

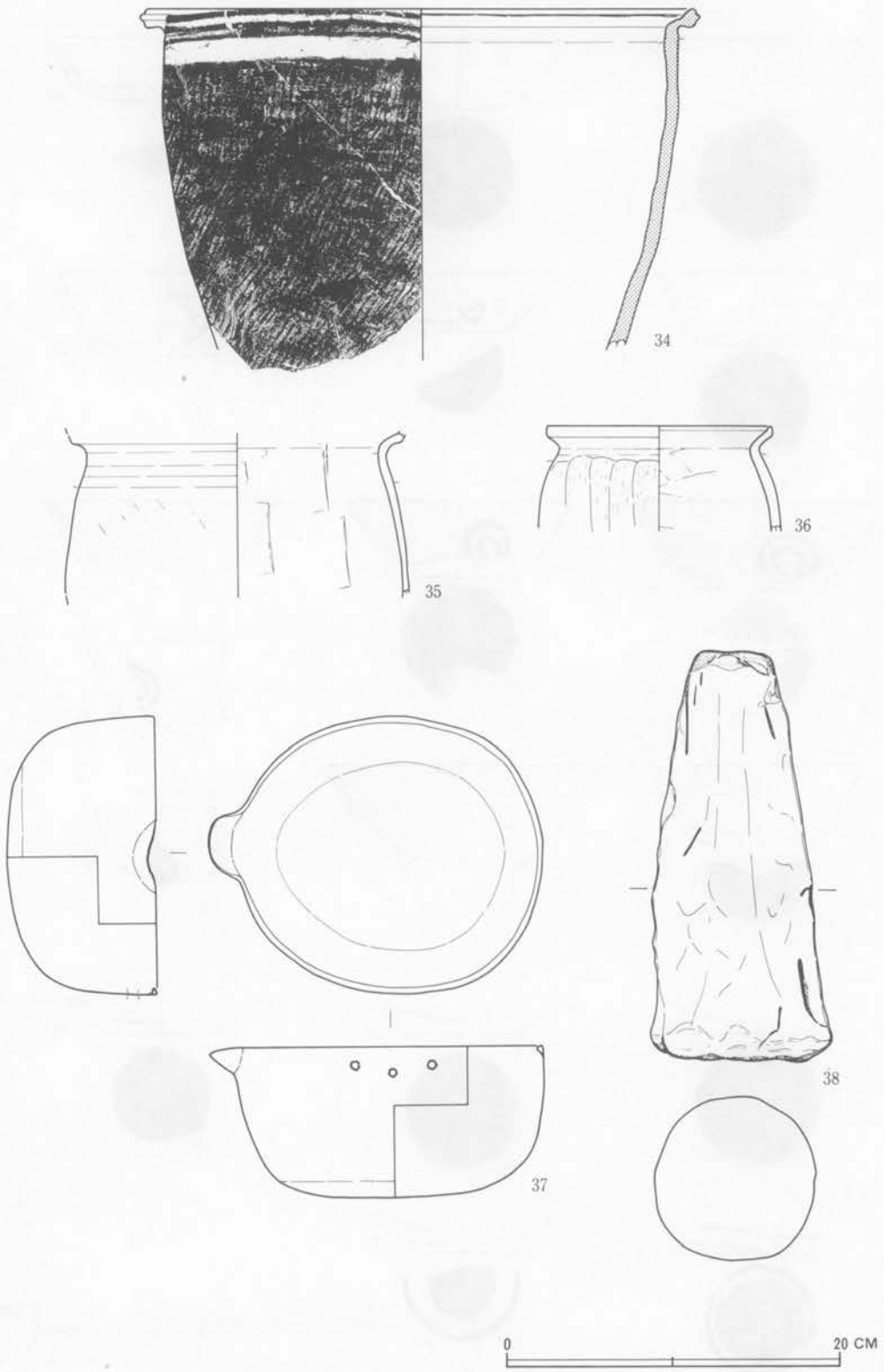
所　見　北東隅は041住居を切っており，この部分には貼り床が認められる。カマドは大きく，焼土の堆積も厚い。出土遺物は多く，土器の他に銅製柄杓，鉄製品，鉄滓がある。小鍛冶炉と考えられるものは存在しないが，出土する遺物から，製鉄に関連する住居かと考えられる。



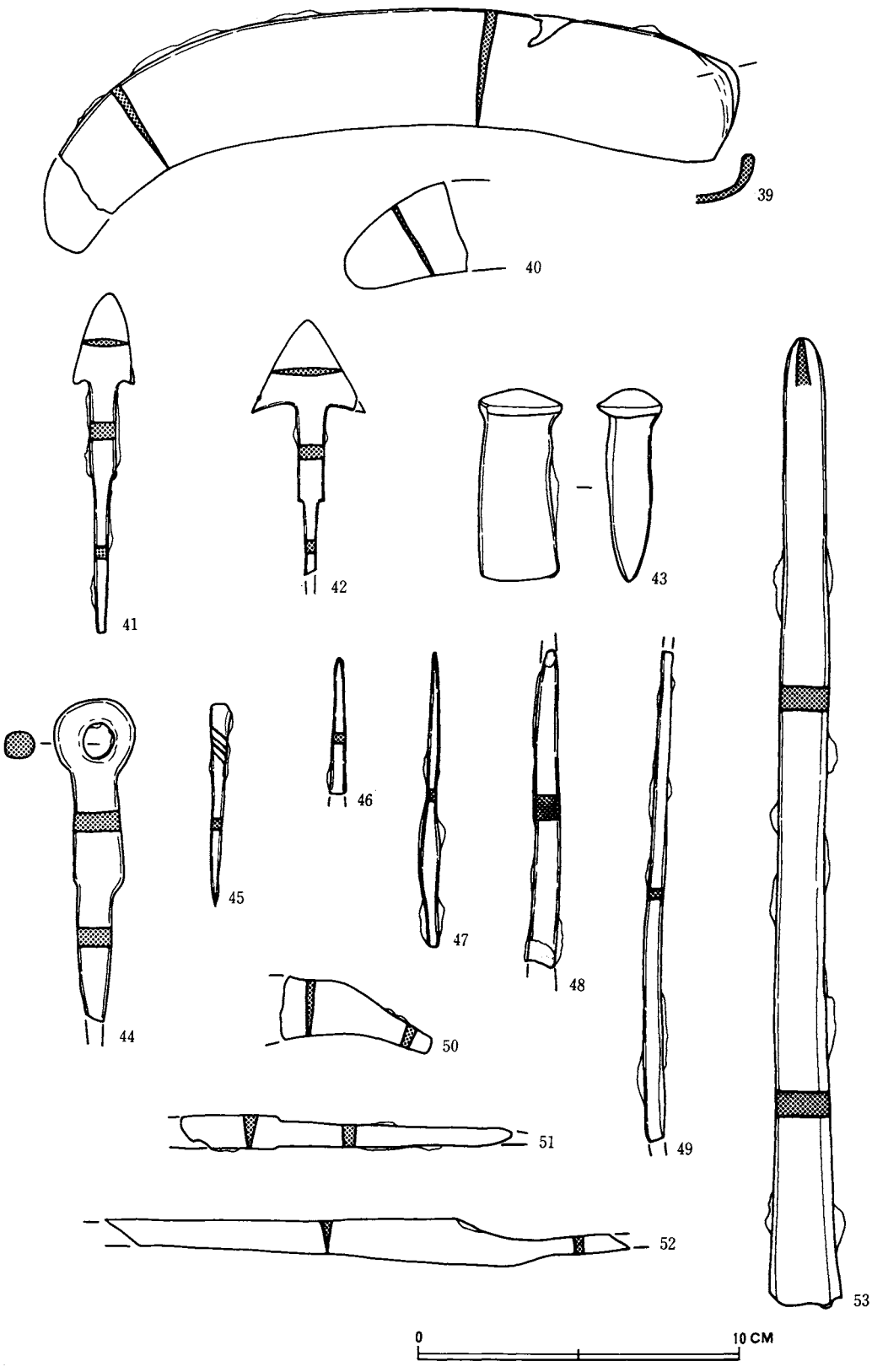
第132図　040住居跡出土遺物



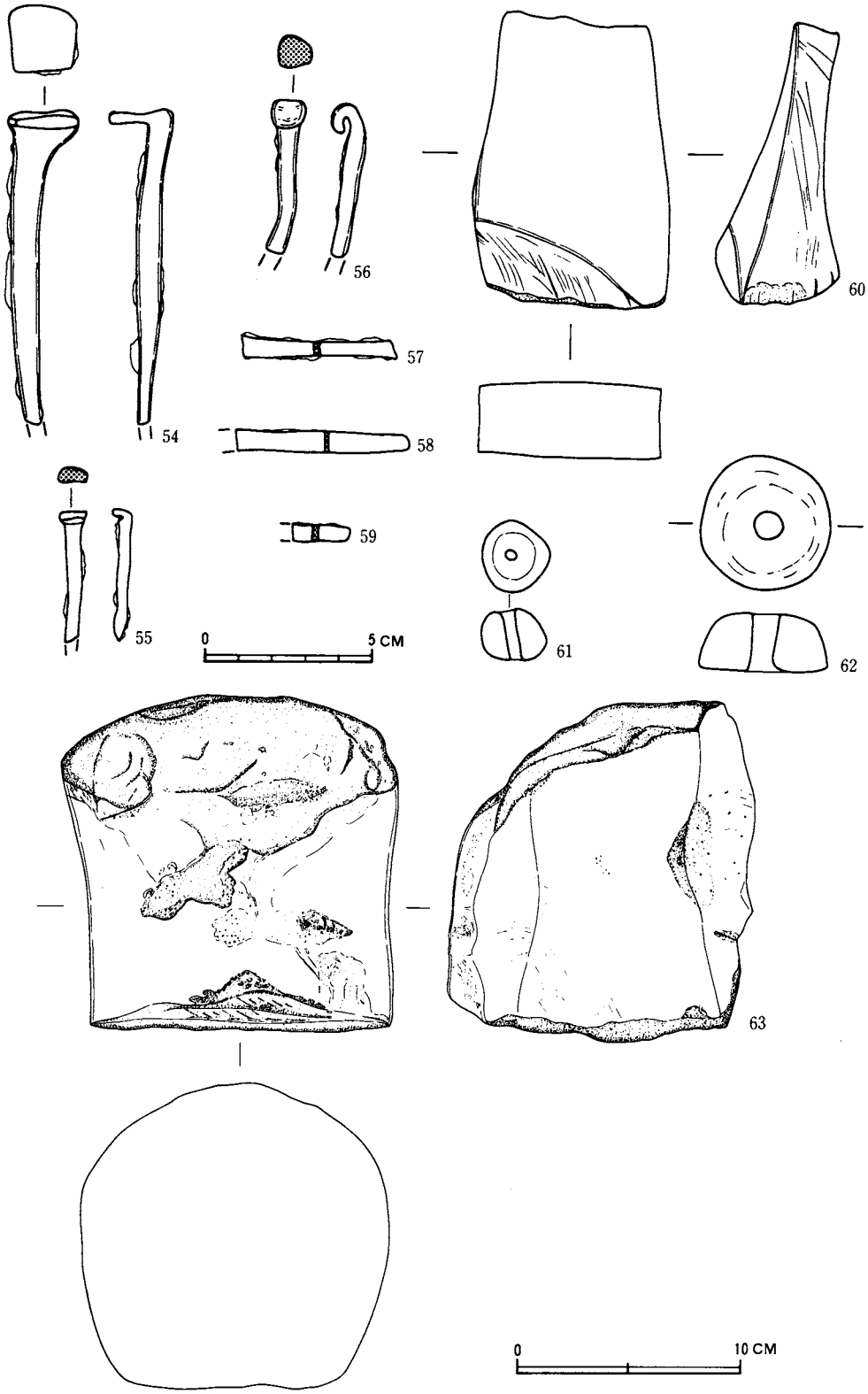
第133図　040住居跡出土遺物



第134図　040住居跡出土遺物



第135図　040住居跡出土遺物



第136図　040住居跡出土遺物

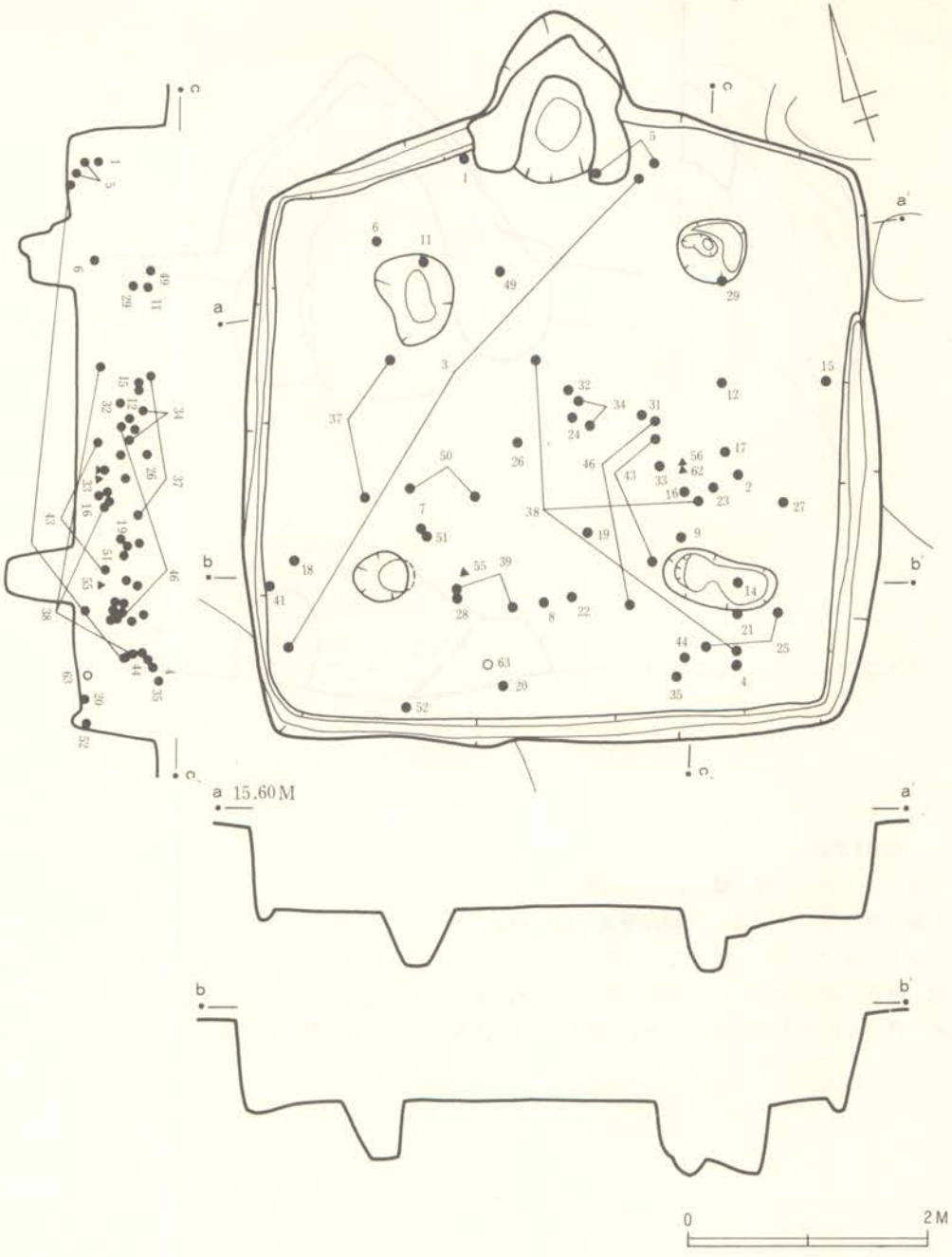
040住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（土師器相当）	11.6	4.5	6.0	¼	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向手ヘラ削り	微砂粒-少	良	明赤褐色	0182	
2	坏（須恵器）	13.1	4.4	6.0	ほぼ完	体部内外面-ヨコナデ 体部下端一一定方向の手ヘラ削り 底部-切り離し不明一定方向の手持ヘラ削り	大砂粒-多	良	濃青灰色	0131	R 図版62-1
3	坏（須恵器）	11.9	4.2	5.0	½	体部内面～外面上部-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒-多	良	青灰色	0052+ 0210	
4	坏（須恵器）	12.8	3.6	6.0	ほぼ完	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	大砂粒-少	良	白青灰色	0101+ 0145	R 図版62-3
5	坏（須恵器）	13.0	3.3	5.1	¼	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	細砂粒-少	良	青灰色	0011+ 0336	
6	坏（須恵器）	13.2	3.6	5.6	½	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部一一回糸切り	大砂粒-少	良	青灰色	0146	図版62-4
7	坏（須恵器）	13.5	3.6	6.4	⅓	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	大砂粒-少	良	白青灰色	0061+ 0146	
8	坏（須恵器）	13.2	3.6	6.4	⅔	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	大砂-多	良	青灰色	0062+ 0114+ 0119+ 0145	図版62-5
9	皿（須恵器）	15.2	3.0	6.4	½	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	砂粒 白色針状物	良	青灰色	0001	図版62-6
10	坏（須恵器）		〈3.7〉	5.6	⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明手ヘラ削り	大砂粒-多	良	内-濃青灰色 外-青灰色	0128	
11	高台付坏（須恵器）		4.7	8.4	高台部のみ完	体部内外面-ヨコナデ 高台部-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	砂粒-多	良	濃青灰色	0017	
12	緑釉皿	13.8	2.4	6.4	¼	体部内外面-磨き 体部下端～底部-削り出し	緻密	良	一部淡黄緑色 淡明黄色	0145+ 0146	
13	坏（土師器相当）	14.2	5.0	6.0	½	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	細砂粒-少	良	淡黄褐色	0113+ 0114+ 0145	口縁のまわりすすけている
14	坏（土師器）	14.8	5.2	7.4	½	体部内面-ヨコナデ後ていねいなヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	雲母-極少	良	褐色	0142	図版62-8
15	坏（土師器）	12.8	3.9	6.4	½	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ削り	細砂粒	良	乳褐色	0029+ 0089	墨書 体部内面上部に油煙の跡灯明皿に転用 第62図-7
16	坏（土師器）	13.0	4.6	7.6	⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端一一定方向の手ヘラ削り 底部-回糸切り 一定方向の手ヘラ削り	細砂粒-少	良	茶褐色	0147+ 0187	

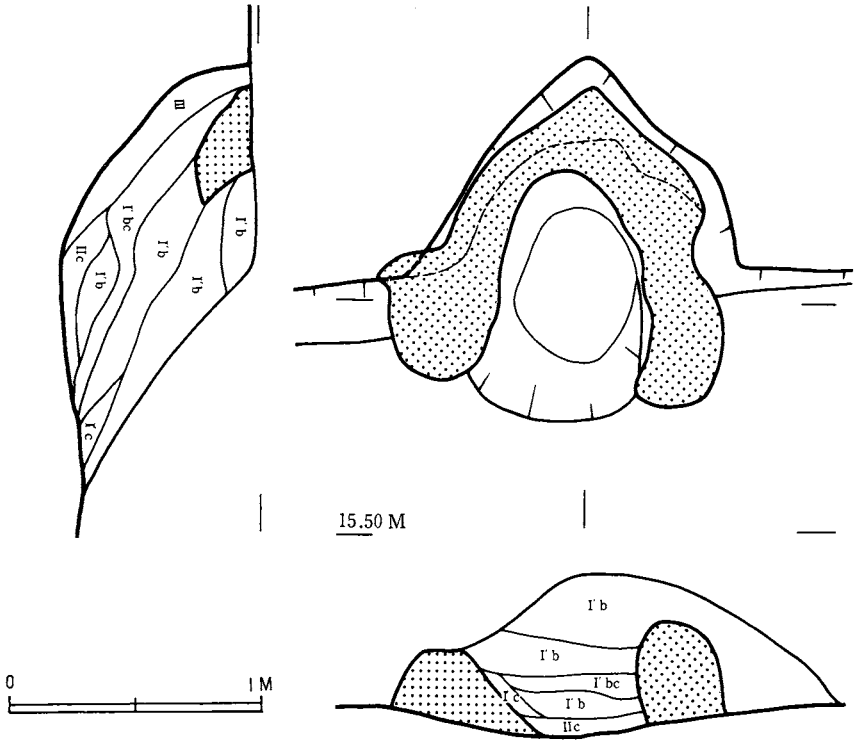
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
17	坏(土師器)	13.3	4.2	6.7	完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明	細砂粒-少	良	茶褐色	0149	図版62-2
18	坏(土師器)	13.8	3.8	6.2	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り	微砂粒・雲母-少	良	赤褐色	0118	
19	坏(土師器)	11.9	4.2	6.4	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り(中央に僅かに糸切り痕を残す)	細砂粒・雲母-少	良	乳褐色	0077+ 0147	
20	坏(土師器)	11.8	3.5	5.7	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 二方向の回ヘラ削り	細砂粒	良	白乳褐色	0186	墨書
21	坏(土師器)	12.6	5.0	6.2	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り	微砂粒・雲母-少 スコリア-多	良	明黄褐色	0045	墨書
22	坏(土師器)	14.6	5.2	7.3	1/3	体部内面-ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	微砂粒-少 スコリア-多	良	淡黄褐色	0146+ 0156	墨書,内黒
23	坏(土師器)	13.5	4.5	6.6	5/6	体部内面-ていねいなミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒・雲母	良	褐色	0038+ 0039+ 0091+ 0095+ 0146	墨書・内黒 図版62-10
24	坏(土師器)	13.6	4.3		1/3	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り	雲母-多 微砂粒・石英-少	良	淡褐色	0159	内黒
25	坏(土師器)	12.8	4.7	6.4	1/3	体部内面-ヨコナデ後ていねいなヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り	砂粒	良	褐色	0133+ 0145+ 0147+ 0157	内黒 図版62-9
26	高台付坏(土師器)	16.1	6.3		1/4	口縁部内面～体部外面-ヨコナデ 体部内面-ヨコナデ ヘラミガキ	砂粒・雲母・スコリア-少	良	暗赤褐色	0168	内黒
27	坏(土師器)					体部内外面-ヨコナデ	砂粒	良	乳褐色	0145	墨書
28	坏(土師器)					体部内外面-ヨコナデ	砂粒・雲母	良	乳褐色	0186	墨書
29	坏(土師器)		〈2.0〉	9.6	底部のみ	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り 外縁(1.2cm)回ヘラ削り	砂粒-少	良	褐色	0090	
30	坏(土師器)		〈1.6〉	6.4	底部のみ	体部内面-ていねいなヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明回ヘラ削り	砂粒	良	褐色	0111	内黒
31	坏(土師器)		〈2.4〉	5.6	底部のみ	体部内面-ていねいなヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切り 一定方向の手ヘラ削り	大きめの砂-多	良	黄褐色	0102	内黒

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
32	高台付坏(土師器)		〈7.8〉	6.6	底部のみ	体部内面-ていねいなヘラミガキ 高台部-ヨコナデ 底部-整形不明	雲母-少	良	明褐色	0035	内黒
33	高台付坏(土師器)		〈2.5〉	7.2	底部のみ	体部内面-ていねいなヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 高台部-ヨコナデ 底部-切り離し不明	細砂粒・雲母-少	良	内面底部-黒色 その他-明褐色	0048	
34	甕(須恵器)	33.0	〈20.0〉		1/4	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-平行叩き目	微砂粒・雲母-多	やや甘	灰褐色	0122+0177	
35	甕(土師器)		〈8.2〉		1/8	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-整形不明	砂粒-多	やや甘	暗褐色	0175	
36	甕(土師器)	13.4	〈6.0〉		1/2	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヨコ方向のヘラナデ木口状工具 胴部外面-ヘラ削り	砂粒	良	暗褐色	0166+0167+0182	
37	銅製杓	長径 20.3	短径 16.4	高さ 8.95						0100	片口
38	支脚	全長 24.0	径 11.0	-					灰褐色	0176	図版63-11
39	鎌	長 21.0	巾 3.7	厚 0.3						0049	図版63-7
40	鎌	長 3.8	巾 2.5	厚 0.1						0065	
41	鉄鏃	全長 10.05	根巾 (1.9) 茎巾 0.4	根厚 0.3 茎厚 0.4						0183	図版63-2 15g
42	鉄鏃	全長 7.9	根巾 (3.6) 茎巾 0.4	根厚 0.4 茎厚 0.4						0164	腸抉は弱い 図版63-1 13g
43	タガネ状工具	全長 5.9	皿巾 2.6 幹巾 2.2	皿厚 0.3 幹厚 1.1						0093	図版63-4 73g
44	不明鉄製品	全長 9.8								0157	図版63-8,36g
45	棒状鉄製品	全長 6.2	巾 0.3	厚 0.4							先端はねじられる,5g
46	棒状鉄製品									0093	2g
47	棒状鉄製品	全長 9.0	巾 0.4	厚 0.35							11g
48	棒状鉄製品	全長 9.7	巾 0.8	厚 0.7						0097	29g
49	棒状鉄製品	全長 15.0	巾 0.4	厚 0.3						0050	15g
50	刀子?									0093	8g
51	刀子	身長 3.0 茎長 7.3	身巾 1.0 茎巾 0.7	身厚 0.4 茎厚 0.4						0157	図版63-6 11g
52	刀子	全長 16.4	身巾 1.0 茎巾 0.5	身厚 0.4 茎厚 0.4						0058	図版63-5 22g
53	鉇?	全長 29.6	巾 1.7	厚 0.8						0078	図版63-3 未製品か,230g
54	釘	全長 9.3	皿巾 2.0 幹巾 0.5	皿厚 0.3 幹厚 0.8						0147	30g

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
55	釘	全長 3.9	皿巾 0.8 幹巾 0.4	皿厚 0.2 幹厚 0.3						0190	3g
56	釘	全長 4.7	皿巾 0.95 幹巾 0.5	皿厚 0.3 幹厚 0.5						0147	7g
57	刀子茎?	全長 4.7	巾 0.4	厚 0.2						0147	3g
58	刀子茎?	全長 5.3	巾 0.5	厚 0.1						0147	2g
59	刀子茎?									0093	0.4g
60	砥石	全長 8.8	最大巾 5.9	最大厚 3.6						0040	図版63-9
61	土玉	直径 2.0		厚 1.5	完		細砂粒	良	白褐色		
62	石製紡錘車	直径 3.9 孔径 0.9		厚 1.7						0179	図版63-10
63	金床?	全長 14.5	最大巾 15.0	最大厚 13.4						0075	鉄附着,側面砥石としても使用



第137図　041 住居跡



第138図　041 住居跡カマド

041住居跡

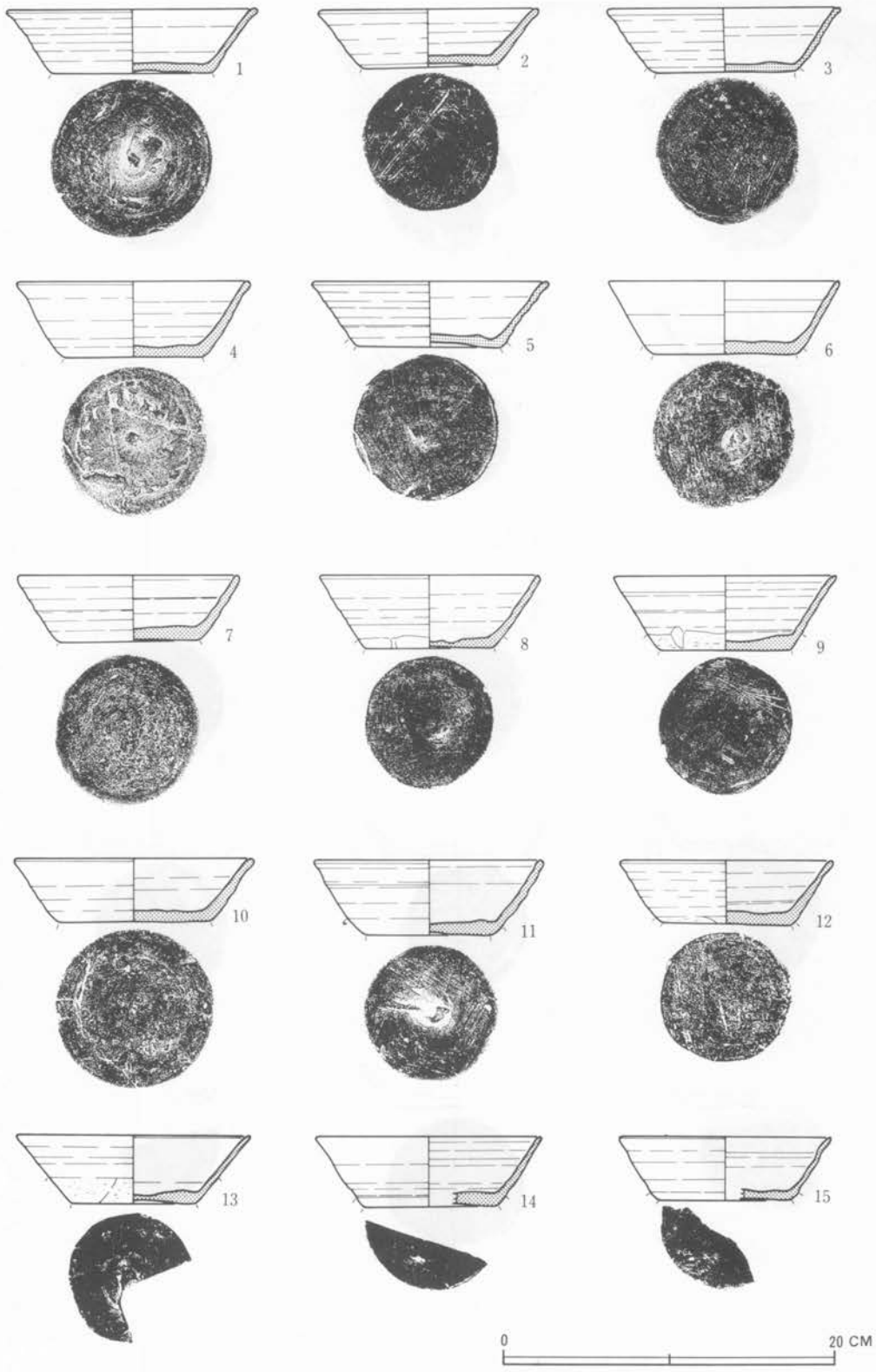
プラン　方形　　**規　模**　4.7×5.3m

主軸方向　N－17°－E　　**現存壁高**　65～80cm

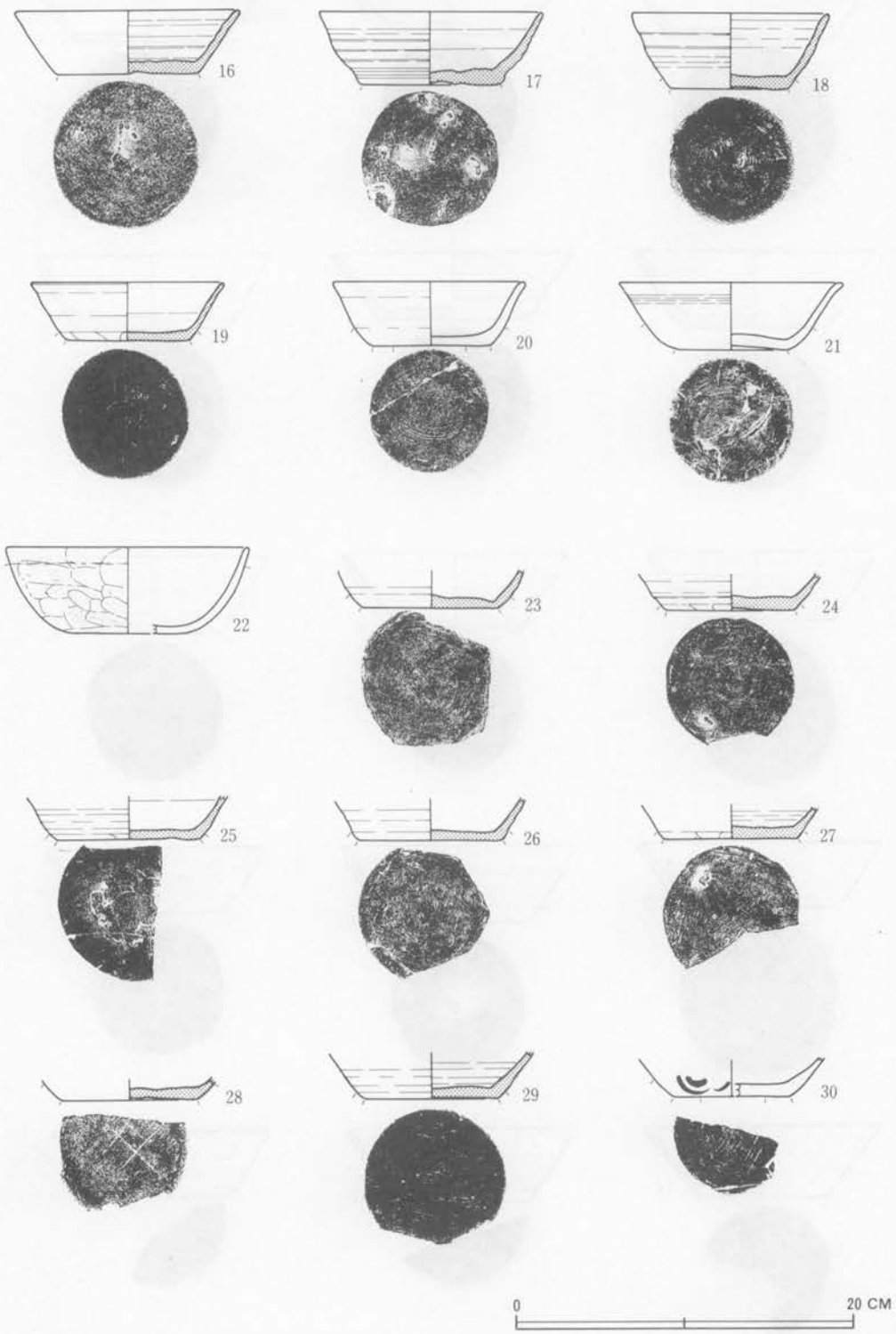
カマド　北壁中央　　**柱　穴**　4本

周　溝　北壁と東壁の一部を除き幅15～25cm，深さ5～15cm

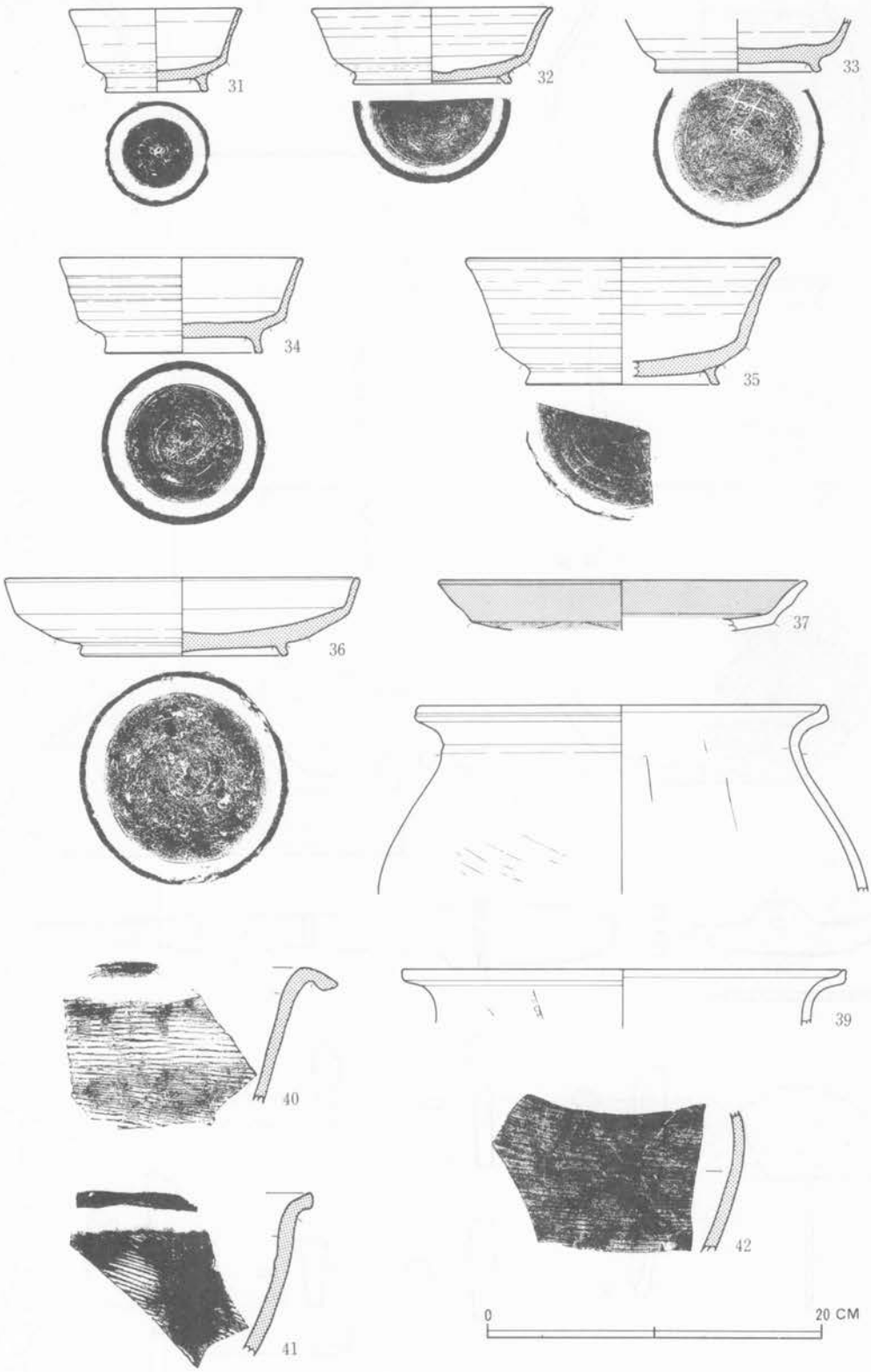
所　見　比較的大形の住居である。遺物出土量は多いが，大半は覆土中からの出土である。



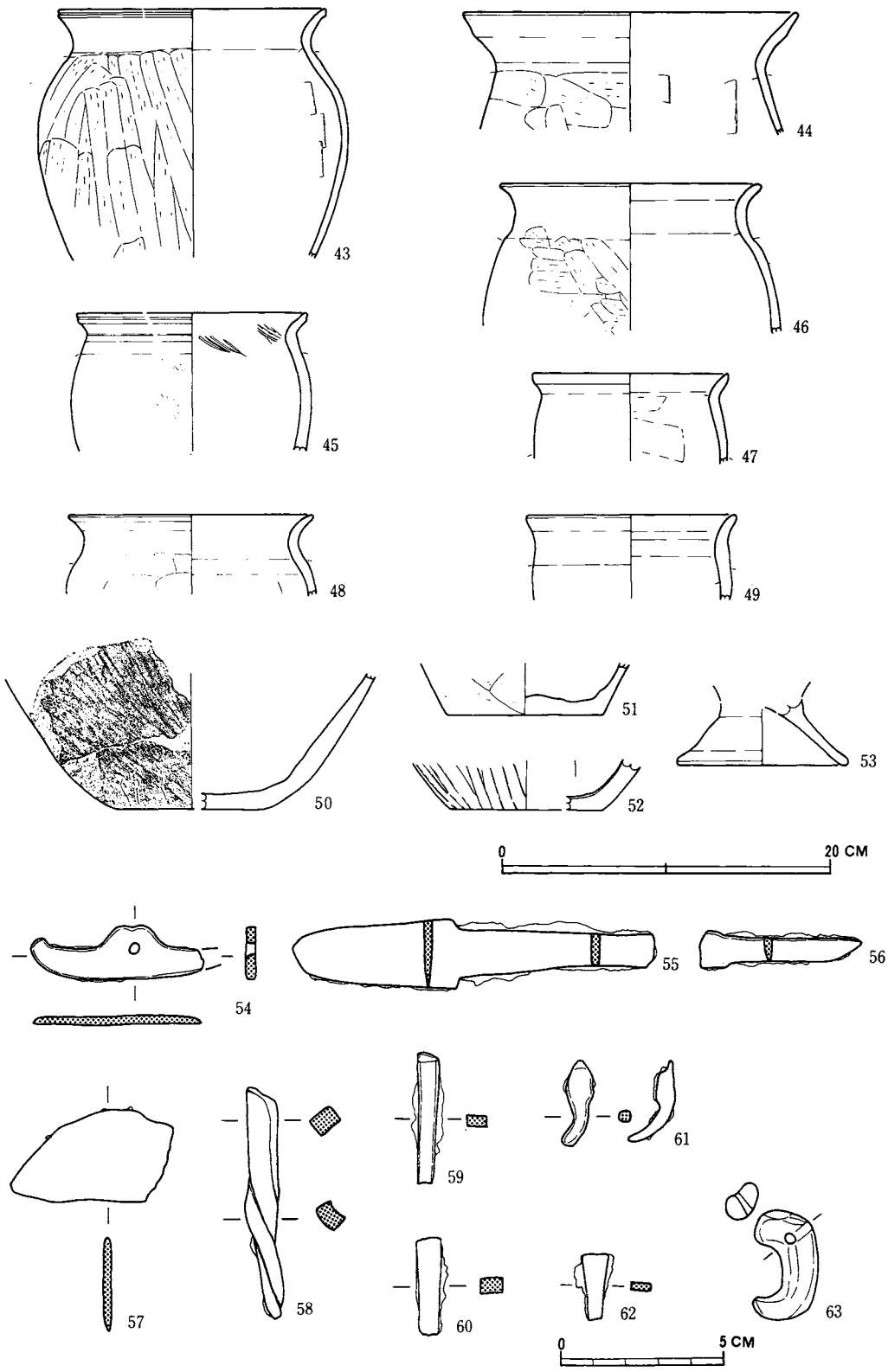
第139図　041住居跡出土遺物



第140図　041住居跡出土遺物



第141図　041住居跡出土遺物



第142図　041住居跡出土遺物

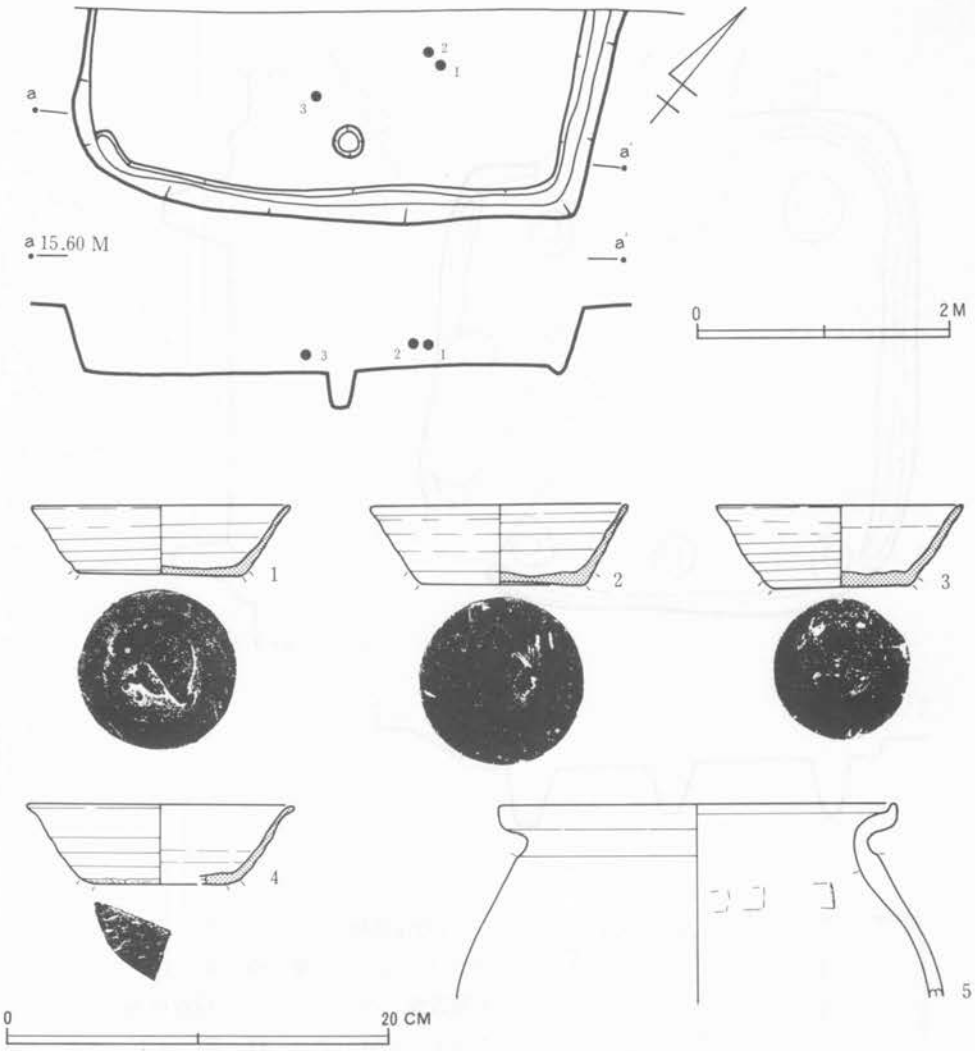
041住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏(須恵器)	15.2	3.9	9.7	7/8	体部内外面-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り 調整不明	細砂粒・雲母-少	良	灰褐色	0103	体部に鉄附着 図版64-4
2	坏(須恵器)	13.5	3.5	8.2	5/6	体部内外面-ヨコナデ 底部-切り離し不明 手ヘラ削り	砂粒-多	良	青灰色	0058	R 図版64-1
3	坏(須恵器)	14.2	3.9	8.2	3/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	細砂粒・雲母-少	良	白青灰色	0167+ 0185+ 0199	R
4	坏(須恵器)	14.2	4.5	8.4	2/3	体部内外面-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り	細砂粒・雲母-少	良	青灰色	0043+ 0129	R
5	坏(須恵器)	14.4	3.9	8.8	5/7	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	細砂粒・雲母-少	良	白青灰色	0186+ 0187	図版64-3
6	坏(須恵器)	14.0	4.3	8.9	口縁部1/2を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向手ヘラ削り	微砂粒・雲母	良	内面-灰色 外面-灰白色	0096+ 0104+ 0130	図版64-6
7	坏(須恵器)	13.4	4.0	8.4	5/7	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-摩耗のため調整不明 底部-回ヘラ切り 摩耗のため調整不明	細砂粒・雲母-少	良	茶青灰色	0138	R 図版64-2
8	坏(須恵器)	13.6	4.3	8.1	口縁部若干欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	微砂粒・雲母-多密	良	灰色	0179	図版64-5
9	坏(須恵器)	13.5	4.4	8.0	底部1/8	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	微砂粒・雲母-少密	良	内面-暗灰色 外面-灰色	0032	
10	坏(須恵器)	14.5	3.7	9.4	口縁を若干欠く	体部内外面-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り	細砂粒・雲母-少	良	灰白色	0185	
11	坏(須恵器)	14.1	4.5	7.6	3/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	細砂粒・雲母-少	良	白青灰色	0006+ 0104	
12	坏(須恵器)	(13.0)	3.9	7.9	口縁部を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・長石-多	良	暗黒灰色	0111	
13	坏(須恵器)	(14.1)	4.1	7.5	底部3/4 口縁1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-ヨコナデ後,手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り離し 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母-少	やや甘	内面-明灰色 外面-灰色	0130+ 0199+ 0201	
14	坏(須恵器)	(13.7)	4.3	(8.3)	底部1/2 口縁1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒・長石-少密	良	暗黒灰色	0019	
15	坏(須恵器)	(12.8)	3.9	(8.1)	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	砂粒・長石・雲母-多	良	明灰色	0113	内外面に火襷痕あり
16	坏(須恵器)	13.2	3.8	8.4	底部2/3	体部内外面-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・長石-多 雲母-若干	良	暗灰色	0092	

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
17	坏(須恵器)	13.4	4.4	8.6	口縁部½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母-少	良	青灰色	0059	底部に重ね焼きの痕跡3ケ所 図版64-7
18	坏(須恵器)	(11.6)	4.5	7.0	底部¼	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒・長石	良	暗灰色	0159+ 0199+ 0201	
19	坏(須恵器)	(11.5)	3.4	7.5	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	微砂粒・長石	やや甘	明灰色	0030	R
20	坏(土師器)	11.2	3.8	7.0	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	微砂粒-多	良	明赤褐色	0196	図版65-1
21	坏(土師器)	13.0	3.9	6.5	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切り	微砂粒-多 雲母-少	良	内面-黒色 外面-淡褐色	0021	口縁に鉄附着 図版64-8
22	坏(土師器)	(14.0)	5.0	丸底(6.9)	⅓	体部内面～口縁部外面-ていねいな手ヘラ削り 体部外面-手ヘラ削り	砂粒-多 密	良	淡赤褐色	0155+ 0158	
23	坏(須恵器)		〈2.2〉	8.0	底部のみ	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り	微砂粒-多 雲母-少	やや甘	灰色	0082+ 0130	
24	坏(須恵器)		〈2.2〉	7.7	底部のみ	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母-少	やや甘	明灰色	0120	
25	坏(須恵器)		〈2.5〉	8.5	底部½	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒・雲母-多	やや甘	明青灰色	0045+ 0050	
26	坏(須恵器)		〈2.5〉	8.8	底部⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	砂粒・長石-多	良	暗灰色	0122+ 0201	
27	坏(須恵器)		〈1.9〉	8.0	底部⅔	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・長石	良	青灰色	0087+ 0129	内部に火襷痕あり
28	坏(須恵器)		〈1.3〉	8.0	底部⅔	体部内面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母-少	やや甘	茶灰色	0145	底部に刻線あり
29	坏(須恵器)		〈2.7〉	8.1	口縁部を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	微砂粒-多 密	良	青灰色	0062	
30	坏(土師器)		〈2.2〉	(7.0)	底部½	体部内面-ヨコナデ 体部外面-手ヘラ削り 底部-回糸切り 手ヘラ削り	砂粒-多	良	淡褐色	0106	墨書
31	高台付坏(須恵器)	(10.4)	5.0	高台径6.1	底部½	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明,回ヘラ削り	微砂粒-多 雲母・長石	良	灰色	0035	図版64-9
32	高台付坏(須恵器)	(14.7)	4.6	高台径9.6	底部½ 口縁¼	体部内外面 ヨコナデ 体部下端 回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明,回ヘラ削り	微砂粒-多 密	良	青灰色	0121	色調,胎土とも特異

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
33	高台付坏(須恵器)		〈3.2〉	高台径 10.1	底部のみ	体部内外面～高台 ヨコナデ 底部 切り離し 不明 回ヘラ削り	微砂粒-多 雲母-少	やや甘	灰白色	0094	底部に刻線あり
34	高台付坏(須恵器)	(14.6)	5.7	高台径 9.4	口縁部¼を欠く	体部内外面 ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	微砂粒・雲母-多	良	灰色	0118+0119	図版64-10
35	大型高台付坏(須恵器)	(18.8)	7.5	高台径 (11.7)	¼	体部内外面 ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台 ヨコナデ 底部 切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒 多	良	青灰色	0049	
36	盤(須恵器)	21.3	4.7	高台径 12.4	口縁部½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端 回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	灰色	0104+0107	図版65-2
37	盤(土師器)	21.8	2.9	18.2	¼	体部内面～口縁部外面 ハラミガキ 体部下端-ヘラ削り	微砂粒 少 密	良	赤褐色	0009+0141	
38	甕(土師器)	24.4	〈11.0〉		⅓	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面 ヘラナデ,指ナデか 胴部外面-摩耗のため不明確ヘラナデか	砂粒-多	良	黄褐色	0042+0064+0081	
39	甕(土師器)	26.6	〈3.2〉		⅛	口縁部内外面 ヨコナデ	砂粒 多	良	黄褐色	0188+0192	
40	甕(須恵器)		〈9.0〉		口縁部破片	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-叩き目	砂粒 多	良	暗青灰色	0149	
41	甕(須恵器)		〈10.0〉		口縁部破片	口縁部内外面-ヨコナデ	微砂粒-多	良	灰白色	0168	
42	甕(須恵器)		〈8.5〉		胴部破片	胴部内面-ヨコ方向の木口状工具によるものか 胴部外面-叩き目	砂粒 多	良	青灰色	0202	
43	甕(土師器)	(15.2)	15.1	最大径 19.0	½	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内面 ヘラナデ 胴部外面 ヘラナデ	微砂粒-多	良	内面-暗褐色 外面-赤褐色	0078+0093+0129+0130	図版65-3
44	甕(土師器)	(20.6)	〈7.2〉		口縁部⅓	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面 ヘラナデ	砂粒-多 密	良	淡褐色	0046+0054+0130	
45	甕(土師器)	(14.1)	〈8.2〉	最大径 (14.6)	口縁部⅕	口縁部外面-ヨコナデ 胴部内面-ヨコナデ後ヘラ削り 胴部外面 摩耗のため判別不能。ヘラ削りか	砂粒-多	良	黒褐色	0202	
46	甕(土師器)	(16.0)	〈9.2〉		⅓	口縁内外面 ヨコナデ 胴部内面 ヨコナデ 胴部外面 ハラ削り	砂粒-多	良	暗赤褐色	0026+0036	
47	甕(土師器)	(12.0)	〈5.3〉		口縁部¼	胴部内面 ヘラナデ 口縁部内面～胴部外面-ヨコナデ	砂粒 多	良	赤褐色	0097	
48	甕(土師器)	(15.0)	〈5.0〉		⅓	胴部内面 ヨコナデ後一部ヘラナデ 口縁部外面-ヨコナデ 胴部外面 ヘラ削り	砂粒 多	良	内面-赤褐色 外面-黒褐色	0532	
49	甕(土師器)	12.9	〈5.1〉		口縁部½	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内面 ナデ 胴部外面 ヘラナデ	砂粒 多	良	濃褐色	0003+0104+0201	

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
50	甕(土師器)		〈7.8〉	9.2	胴下半部1/3	胴部内面-ナデ 胴部外面-ヘラ削り 底部-木葉痕有り	砂粒・石英・長石・雲母	良	暗褐色	0137+0140	
51	甕(土師器)		〈3.0〉	(9.6)	底部1/4	胴部内面-ナデ 胴部外面-ヨコナデ 底部-木葉痕有り	砂粒-多	良	内面-褐色 外面-黒褐色	0163	
52	甕(土師器)		〈3.0〉	9.4	底部周囲1/2	胴部内面-ナデ 胴部外面-ヘラミガキ 底部-木葉痕有り	砂粒-多	良	黄褐色	0193+0200	
53	台付甕(土師器)		〈4.0〉	台径10.5	台部のみ	台内外面-ヨコナデ	砂粒・雲母-多	やや甘	淡赤褐色	0195	
54	燧鉄	全長5.3	巾1.6	厚0.3						0106	図版65-4 8g
55	刀子	全長11.1 茎長6.0	巾2.0 茎巾1.0	厚0.25 茎厚0.3						0173	図版65-5 19g
56	刀子?	全長5.0 茎長4.0	巾0.75	厚0.28						0083	5g
57	板状鉄製品	全長5.0	巾2.8	厚0.2						0199	9g
58	棒状鉄製品	全長7.0	巾0.8	厚0.6						0201	ねじれあり 16g
59	棒状鉄製品	全長3.9	巾0.65	厚0.3						0200	4g
60	棒状鉄製品	全長3.0	巾0.7	厚0.55						0200	4g
61	不明鉄製品	全長2.6	巾0.8〜0.4	厚0.6〜0.4						0106	2g
62	棒状鉄製品	全長2.1	巾0.6	厚0.2						0083	2g
63	勾玉	長3.4 孔径0.25	巾1.3	厚0.85						0197	メノウ



第143図　042住居跡及び出土遺物

042住居跡

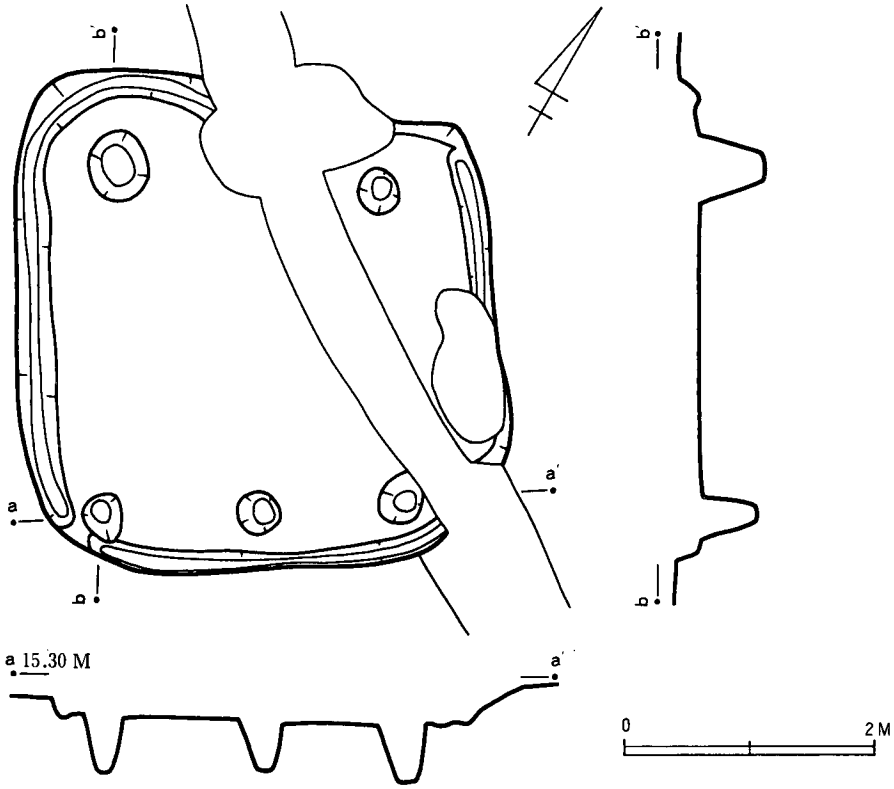
プラン　方形か？　　**規　模**　一辺4.2m

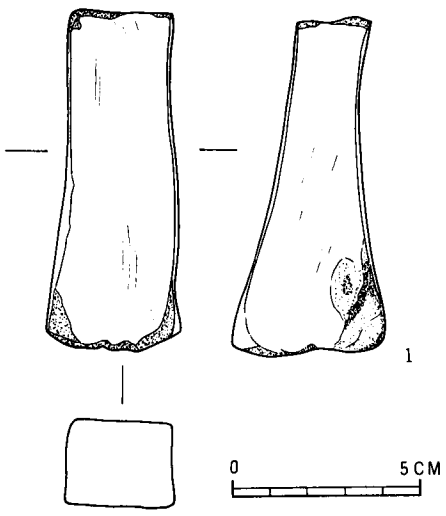
主軸方向　不明　　**現存壁高**　50cm

カマド　不明　　**柱　穴**　1本

周　溝　幅8～20cm，深さ7cm

所　見　住居の南側だけを調査したもので，その全容は不明である。





045住居跡

プラン　方形　　**規　模**　4×3.8m
主軸方向　N−32°−W　　**現存壁高**　15〜25cm
カマド　北壁中央　　**柱　穴**　5本
周　溝　幅18〜30cm，深さ3〜5cm
所　見　後世の溝に切られ，カマド部は僅かに焼土の痕跡をとどめる程度であった。

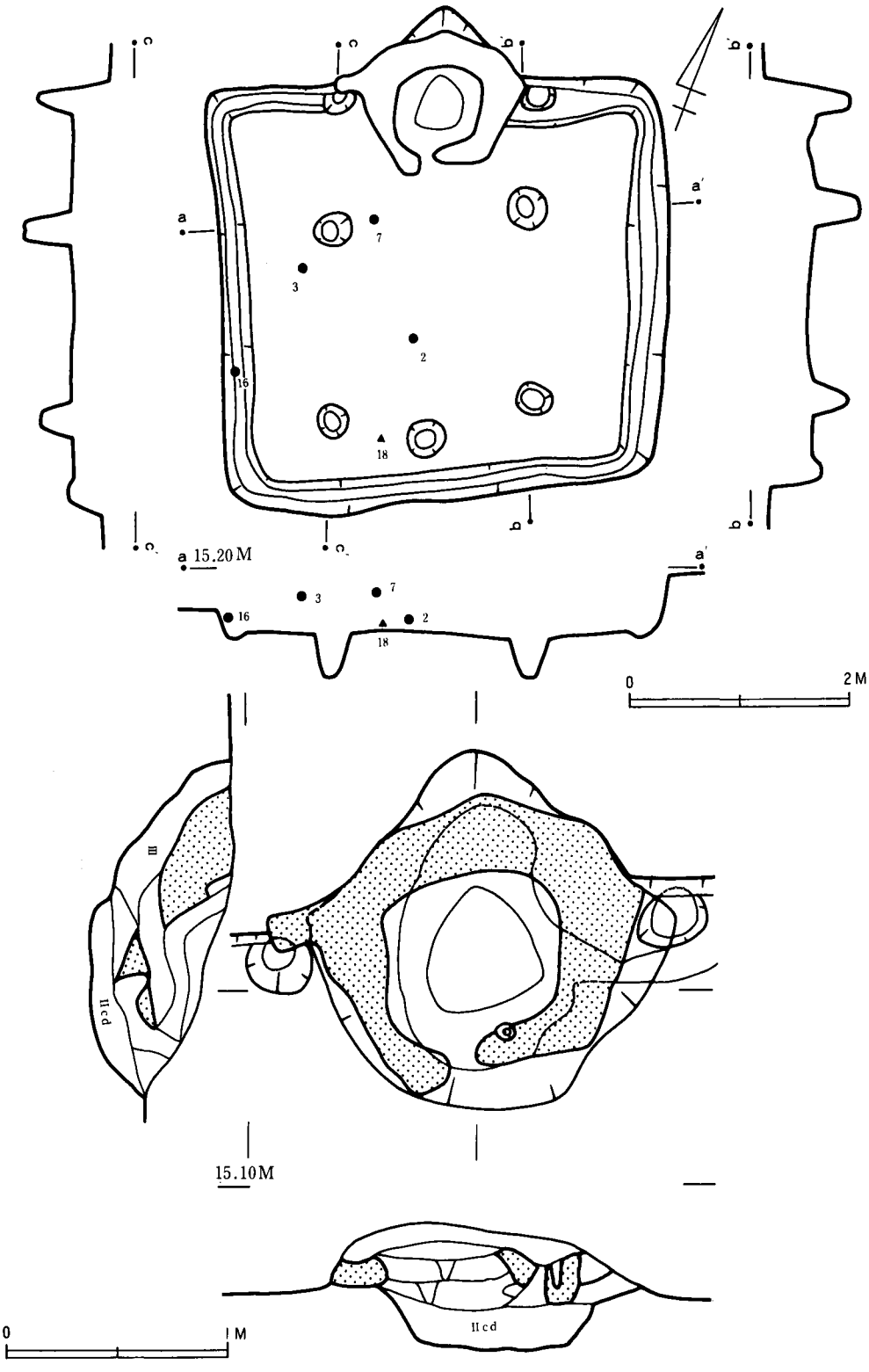
第144図　045 住居跡及び出土遺物

042住居跡出土遺物

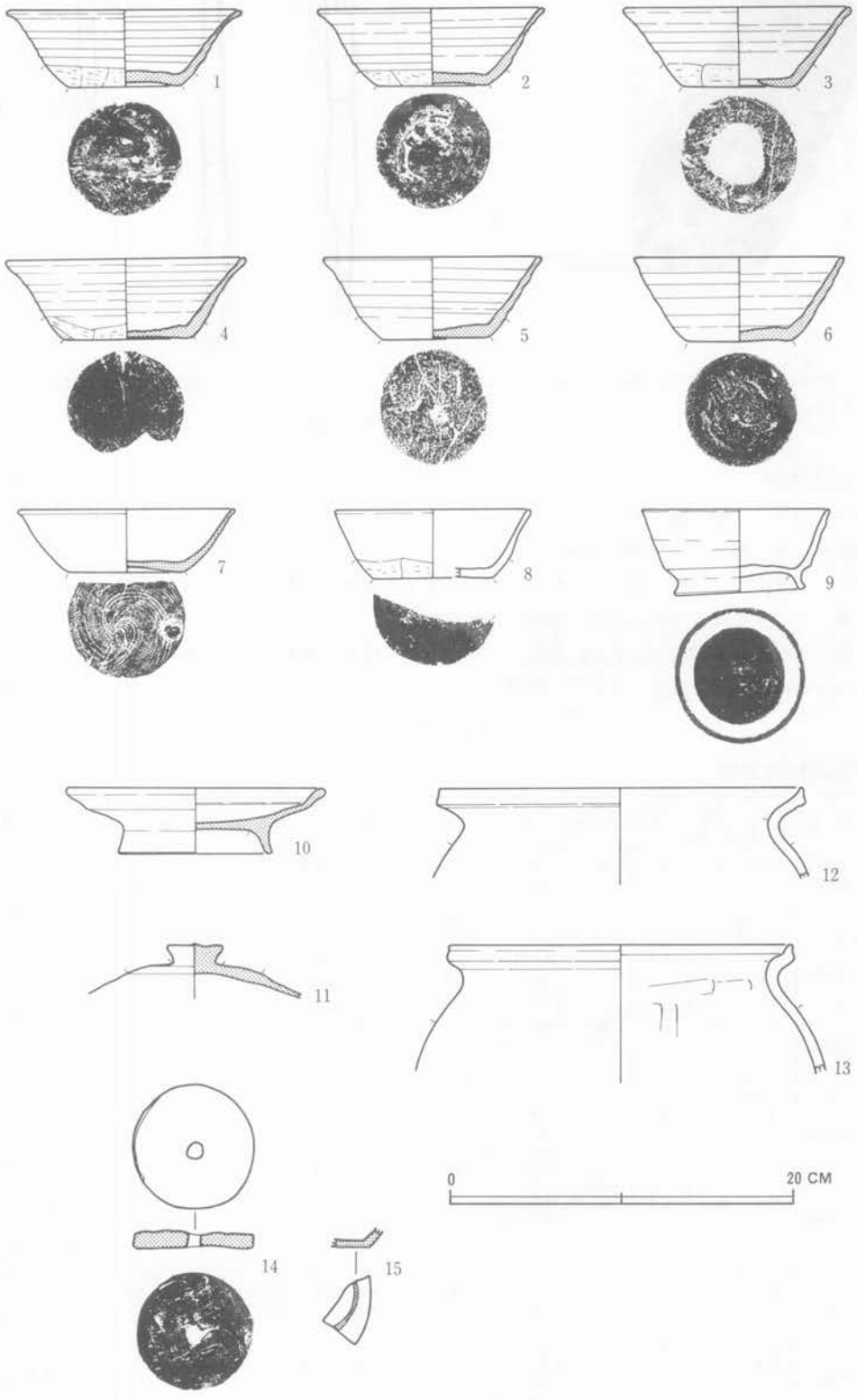
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏(須恵器)	13.6	3.5	8.6	口縁½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	雲母-少 砂粒・石英-多	良	暗灰色	0005	R 図版65-7
2	坏(須恵器)	13.4	4.2	8.6	口縁½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・石英-多	良	灰色	0003+ 0006	R
3	坏(須恵器)	13.0	4.2	7.2	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	雲母-少 砂粒・石英-多	良	灰白色	0003+ 0007	R 図版65-6
4	坏(須恵器)	14.0	4.2	6.8	⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・石英-多	良	灰色	0003+ 0004	
5	甕(土師器)	21.0	〈10.0〉		⅓	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-調整不明	雲母・砂粒・石英-多	良	暗褐色	0008+ 0062	

045住居跡出土遺物

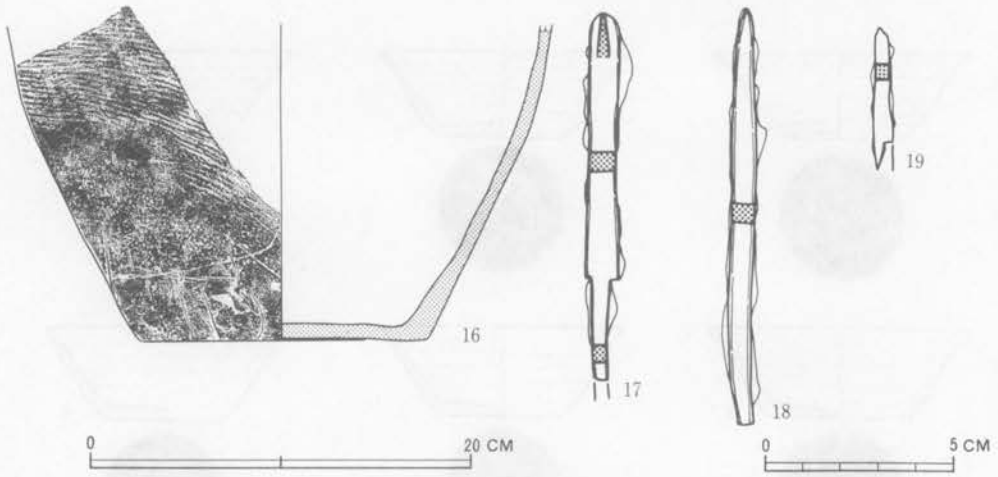
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	砥石	長 〈8.8〉	最大巾 〈3.3〉	最大厚 〈4.0〉						0004	図版65-8



第145図　046 住居跡



第146図　046住居跡出土遺物



第147図　046住居跡出土遺物

046住居跡

プラン　方形　　**規　模**　3.7×3.4m

主軸方向　N—22°—E　　**現存壁高**　25～55cm

カマド　北壁中央　　**柱　穴**　6本柱とカマドに対面する柱穴1本

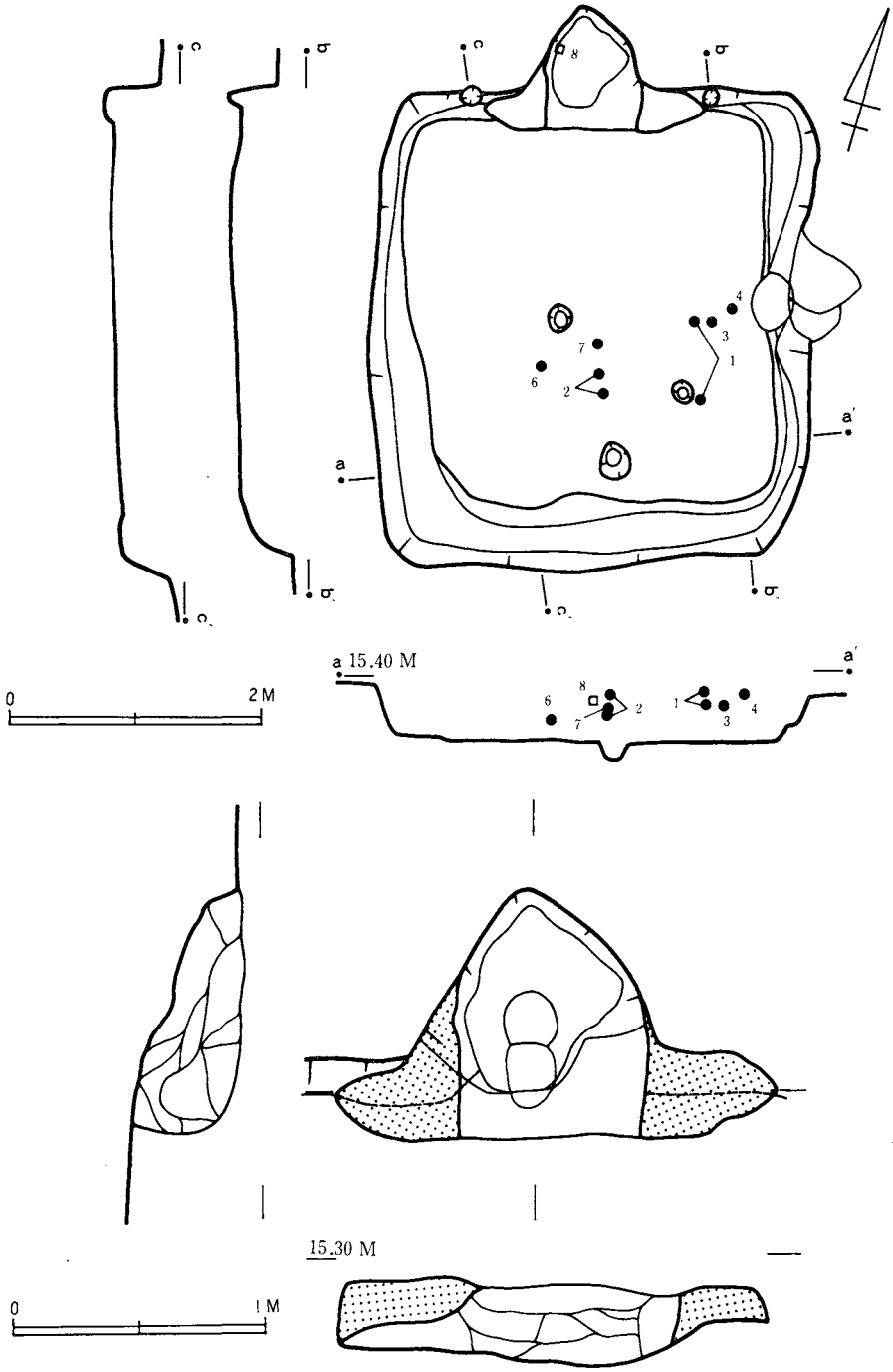
周　溝　カマドを除き全周，幅25～35cm，深さ5cm

所　見　主柱穴は6本柱となるが，北側の2本はカマド横の周溝中に設けられる。カマドの掘り込みは深く，その最下層に焼土と灰が厚く堆積する。

046住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（須恵器）	13.8	4.6	6.4	口縁¼を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ据え置き 底部-回ヘラ切り 不定方向手ヘラ削り	砂粒・石英-多	良	灰色	0002+0060	R 図版66-2
2	坏（須恵器）	13.2	4.5	6.4	口縁½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り	砂粒・石英-多 雲母-少	良	暗灰色	0014	R 図版66-1
3	坏（須恵器）	13.4	4.6	6.6	口縁½ 底部中央欠損	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部—一定方向の手ヘラ削り	砂粒・石英-多 雲母-少	良	灰褐色	0012	図版66-5
4	坏（須恵器）	14.0	4.7	7.6	½	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向のヘラ削り	雲母・砂粒-多	良	灰褐色	0003	L 図版66-4
5	坏（須恵器）	12.8	4.8	6.3	口縁½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ据え置き 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・石英-多	良	灰色	0005+0024	R 図版66-3
6	坏（須恵器）	12.2	4.9	6.0	¼	体部内外面-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	砂粒・石英-多 雲母-少	やや甘	灰色	0007	
7	坏（須恵器）	12.6	3.6	6.8	¼	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り 口唇部-強く外反する	砂粒・石英-多	良	灰色	0015	

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
8	坏(土師器)	11.4	4.0	7.0	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-調整不明	砂粒-多 雲母-少	甘	赤褐色	0004	
9	高台付坏(土師器)	11.0	4.8	7.7	2/3	体部内外面～高台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	雲母・微砂粒-少 密	良	淡褐色	0010+ 0018	図版66-6
10	台付皿(須恵器)	15.0	3.8	台径 9.0	口縁1/4を欠く	体部内外面～台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	雲母・砂粒・石英 -多	やや甘	灰色	0003+ 0005	
11	蓋(須恵器)	つまみ 径3.2	つまみ 高1.2		口縁を欠く	つまみ-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り 口縁～内面-ヨコナデ	雲母・砂粒・石英 -多	良	灰色	0003 +0060	R
12	甕(土師器)	21.2	〈5.2〉		1/4	口縁部内外面-ヨコナデ 体部内面-ヘラナデ	雲母・砂粒-多	良	淡褐色	0001+ 0003+ 0024	
13	甕(土師器)	20.1	7.3		1/3	口縁部内外面-ヨコナデ 体部内面-ヘラナデ	雲母・砂粒・石英 -多	良	暗褐色	0003+ 0005	
14	紡錘車(須恵)	長径 7.2 孔径 0.9	短径 7.0	幅 1.0		底部外面-一定方向の手ヘラ削り	砂粒・石英-多	良	灰色	0004	坏底部の再利用
15	坏(須恵器)				底部破片		砂粒・石英-多	良	灰色	0002	朱書
16	甕(須恵器)		〈16.5〉	15.0	1/3	胴部内面-ナデ 胴部外面-タタキ 胴部下端-ヘラ削り 底部-調整不明	砂粒・雲母-少	やや甘	灰白色	0011	
17	鉄鏃	全長 9.7 茎長 2.7	身巾 0.7 茎巾 0.4	身厚 0.5 茎厚 0.45						0004	13g
18	棒状鉄製品	全長 10.9	巾 0.6	厚 0.55						0013	16g
19	棒状鉄製品	全長 3.8	巾 0.4	厚 0.45						0001	3g



第148図　047 住居跡

047住居跡

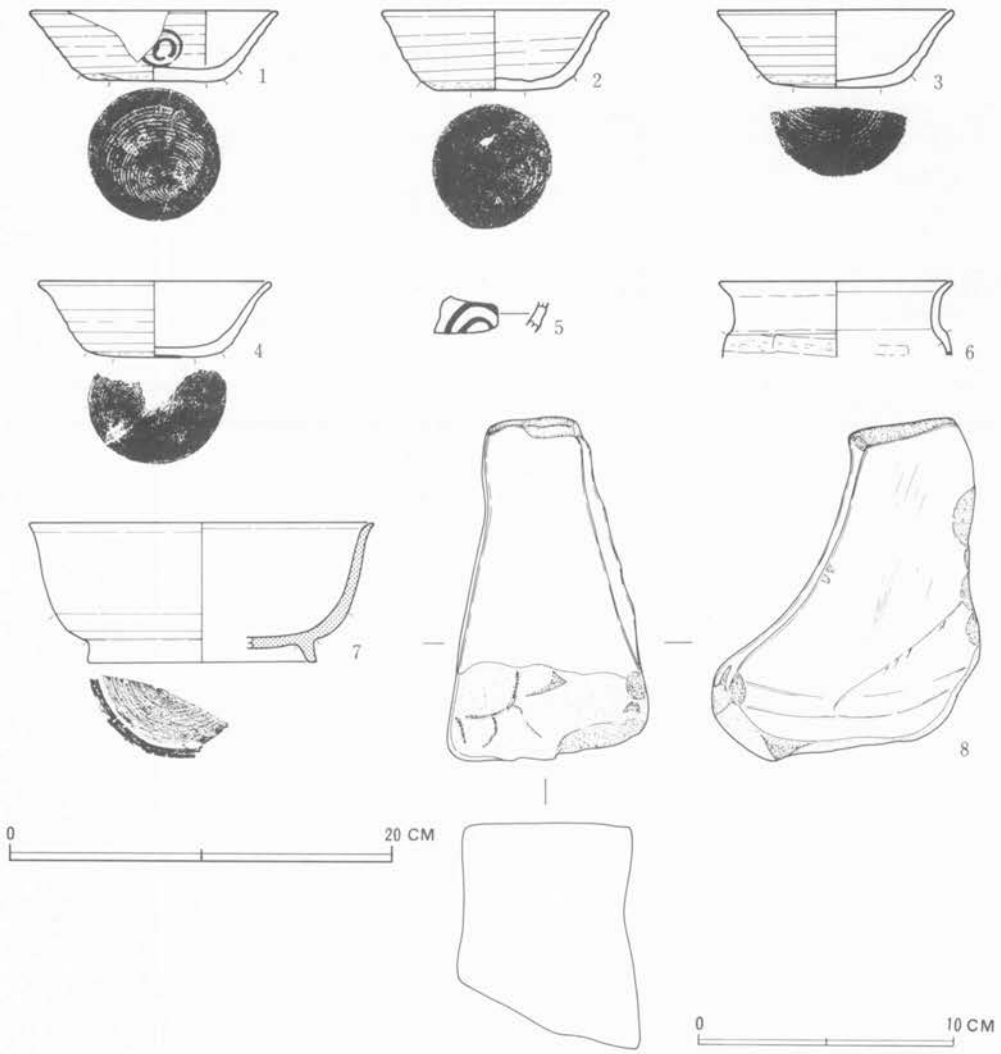
プラン　方形　　**規　模**　3.7×3.5m

主軸方向　N－16°－W　　**現存壁高**　30～40cm

カマド　北壁と東壁の中央部に各1基。　　**柱　穴**　壁柱穴2本

周　溝　幅20～40cm，深さ10cm

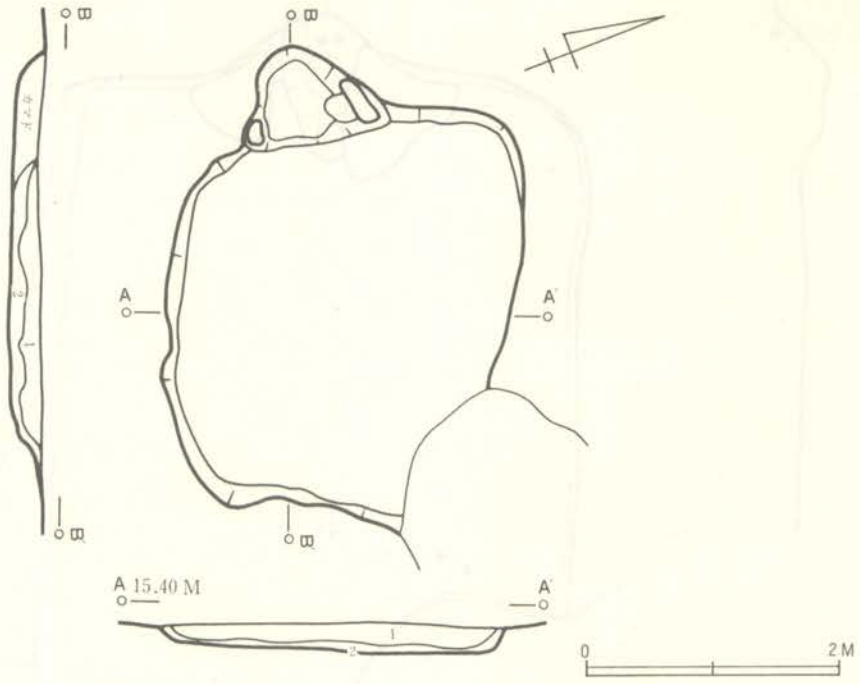
所　見　カマドの遺存状態は2基とも悪い。壁柱穴2本と床面に3本の柱穴を認めるが，全て掘り込みも浅く，径も小さい。



第149図　047住居跡出土遺物

047住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏 (土師器)	13.0	3.7	6.6	口縁部1/6を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒-少	良	淡褐色	0020+ 0024	墨書
2	坏 (土師器)	11.8	4.1	6.4	口縁を一部欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒・スコリア-少	良	淡褐色	0029+ 0030	
3	坏 (土師器)	12.4	4.0	6.6	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒-少 密	良	淡褐色	0022	
4	坏 (土師器)	12.2	4.0	6.2	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母・砂粒-少 密	良	暗褐色	0018+ 0041	
5	坏 (土師器)				体部破片				淡褐色	0042	墨書
6	甕 (土師器)	12.3	〈3.9〉		1/2	体部内面～口縁内外面-ヨコナデ 体部外面-ヘラ削り	砂粒・雲母-少	良	赤褐色	0012+ 0035	
7	高台付坏 (須恵器)	18.0	7.3	12.9	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	微砂粒・長石-少 白色針状物	良	灰色	0027+ 0042	永田・不入製品
8	砥石	長 〈13.2〉	最大巾 7.9	最大厚 18.7						0002	図版65-9

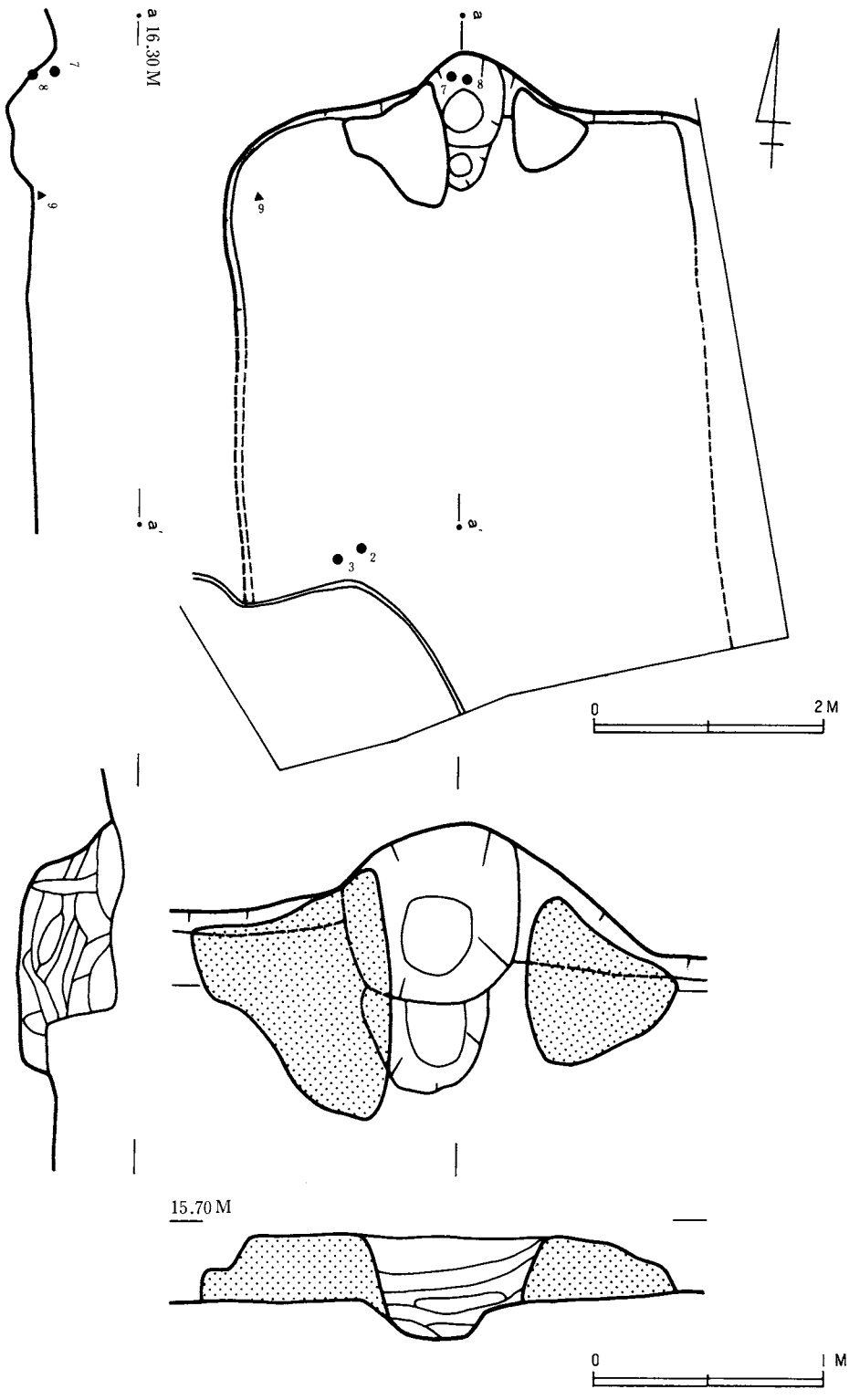


048住居跡
1　暗褐色土層　炭化物を少量含む
2　暗褐色土層　ロームブロックを含む

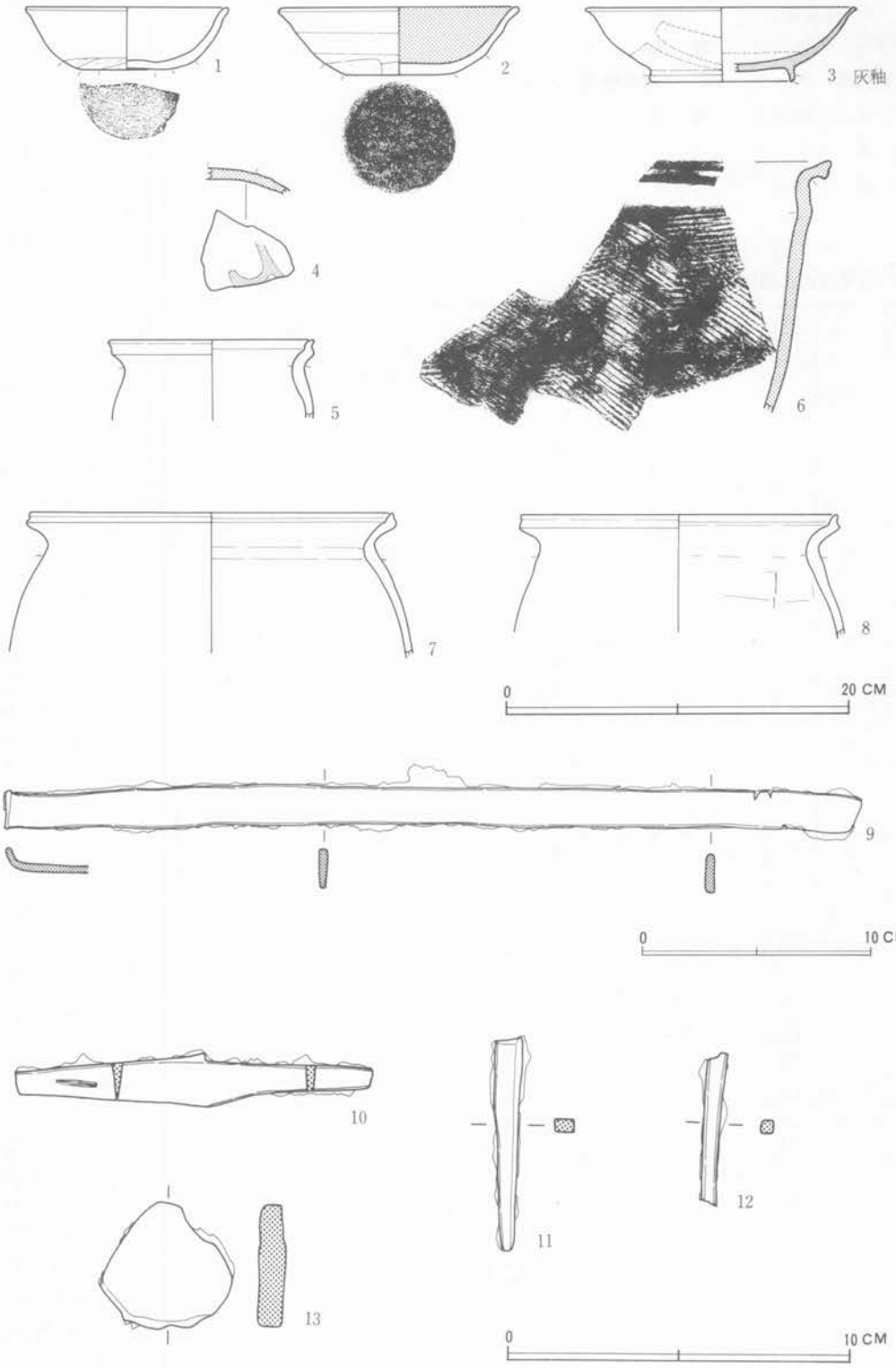
第150図　048 住居跡

048住居跡

プラン　不整方形　　規　模　2.9×2.6m
主軸方向　N－63°－W　　現存壁高　20～25cm
カマド　西壁中央　　柱　穴　なし
周　溝　なし
所　見　平面形は不整方形となり，全体に雑な作りとなる住居である。北東隅は後世の攪乱を受ける。



第151図　057 住居跡



第152図　057住居跡出土遺物

057住居跡

プラン　方形か？　　**規　模**　一辺4.2m

主軸方向　N－7°－W　　**現存壁高**　20cm

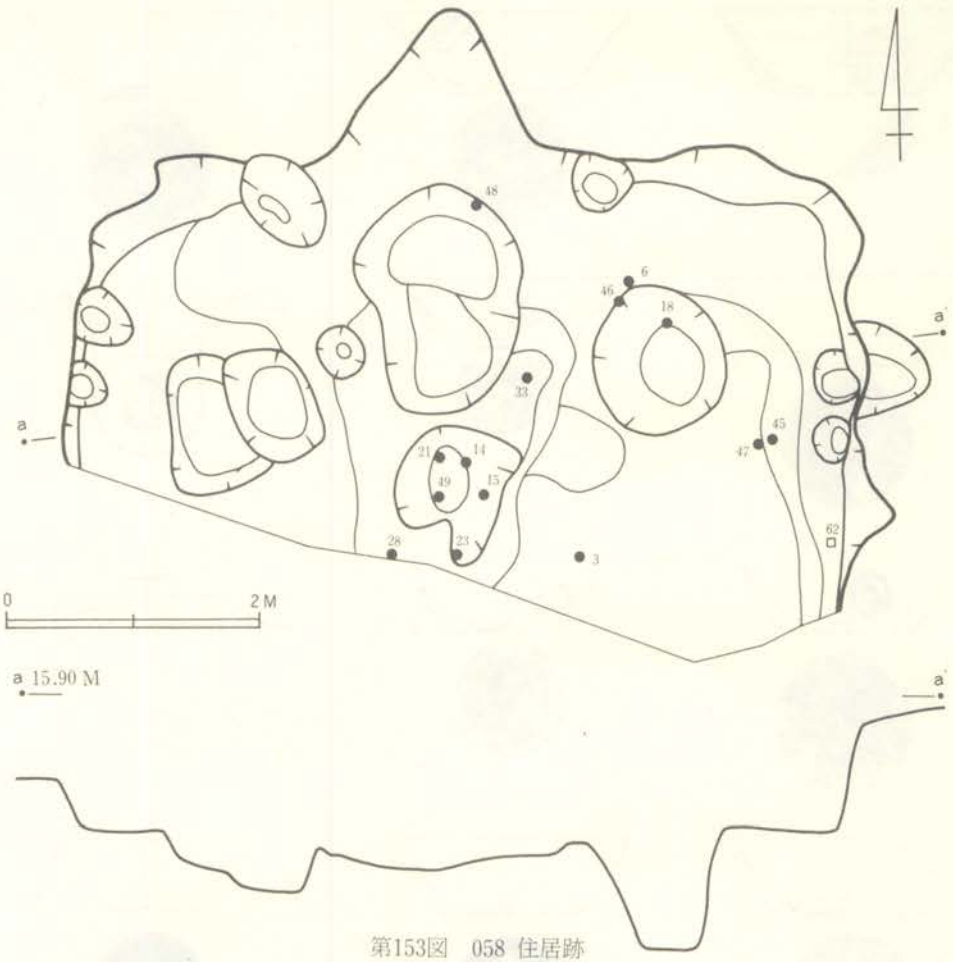
カマド　北壁中央　　**柱　穴**　なし

周　溝　なし

所　見　調査区の南端に位置する住居で，遺存状態は悪く，その全容を知ることはできない。

057住居跡出土遺物

挿図番号	器　種	法量,(　)推定〈　〉現存 口　径	器　高	底　径	遺存状態	成・整形手法	胎　　土	焼　成	色　　調	遺物番号	備　　考
1	坏（土師器）	11.6	3.7	5.0	¼	体部内面-ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁手ヘラ削り	雲母・砂粒・長石-多	良	淡赤褐色	0005	
2	坏（土師器）	14.2	4.0	6.2	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-ヘラ削り	砂粒-少 密	良	内-黒色 外-淡褐色	0006＋ 0023	内黒 図版66-7
3	埦（灰釉）	15.6	4.4	高台径 8.0	¼	体部内外面-施釉 高台-三ケ月高台 外面に不明瞭な稜 底部-回ヘラ削り	微砂粒-少 密	良	地-灰白色	0024＋ 0003 (G39)	黒笹90号窯
4	蓋（須恵器）				天井部破片	天井部-回ヘラ削り 口縁部 ヨコナデ	砂粒・長石 多		灰　　色	0009	朱書
5	甕（土師器）	12.0	〈4.6〉		口縁¼	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ	微砂粒-多	良	赤 褐 色	0025	
6	甕（須恵器）		〈14.5〉		⅛	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部外面 叩き	砂粒・長石-多	良	灰　　色	0001＋ 0002＋ 0007＋ 0001 (G23)	
7	甕（土師器）	21.2	〈8.4〉		⅓	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内面 ヘラナデ	微砂粒 多	良	淡 褐 色	0016	
8	甕（土師器）	18.6	〈6.8〉		口縁⅛	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内面 ナデ	雲母・微砂粒-少 密	良	暗 褐 色	0020	
9	板状鉄製品	全長 37.6	巾 1.7	厚 0.4						0022	図版66-9 149g
10	刀　子	全長 10.5 茎長 4.8	巾 1.05 茎巾 0.8	厚 0.3 茎厚 0.3						0012	図版66-8 18g
11	棒状鉄製品	6.2	0.6	0.4						0012	9g
12	棒状鉄製品	全長 4.4	巾 0.4	厚 0.4						0012	4g
13	板状鉄製品	全長 3.9	巾 3.5	厚 0.6						0010	37g



第153図　058 住居跡

058住居跡

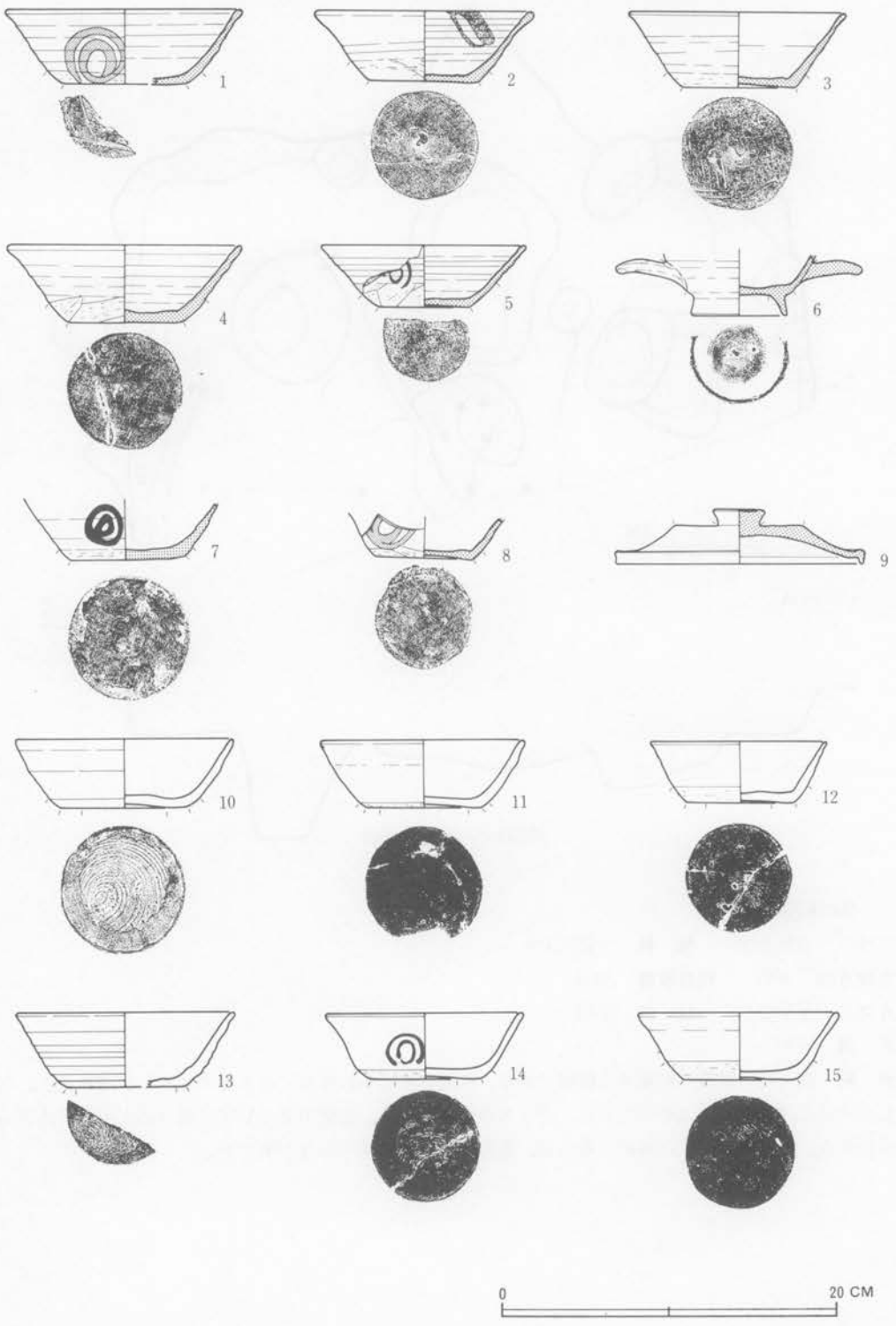
プラン　方形か？　　規　模　一辺6.4m

主軸方向　不明　　現存壁高　30cm

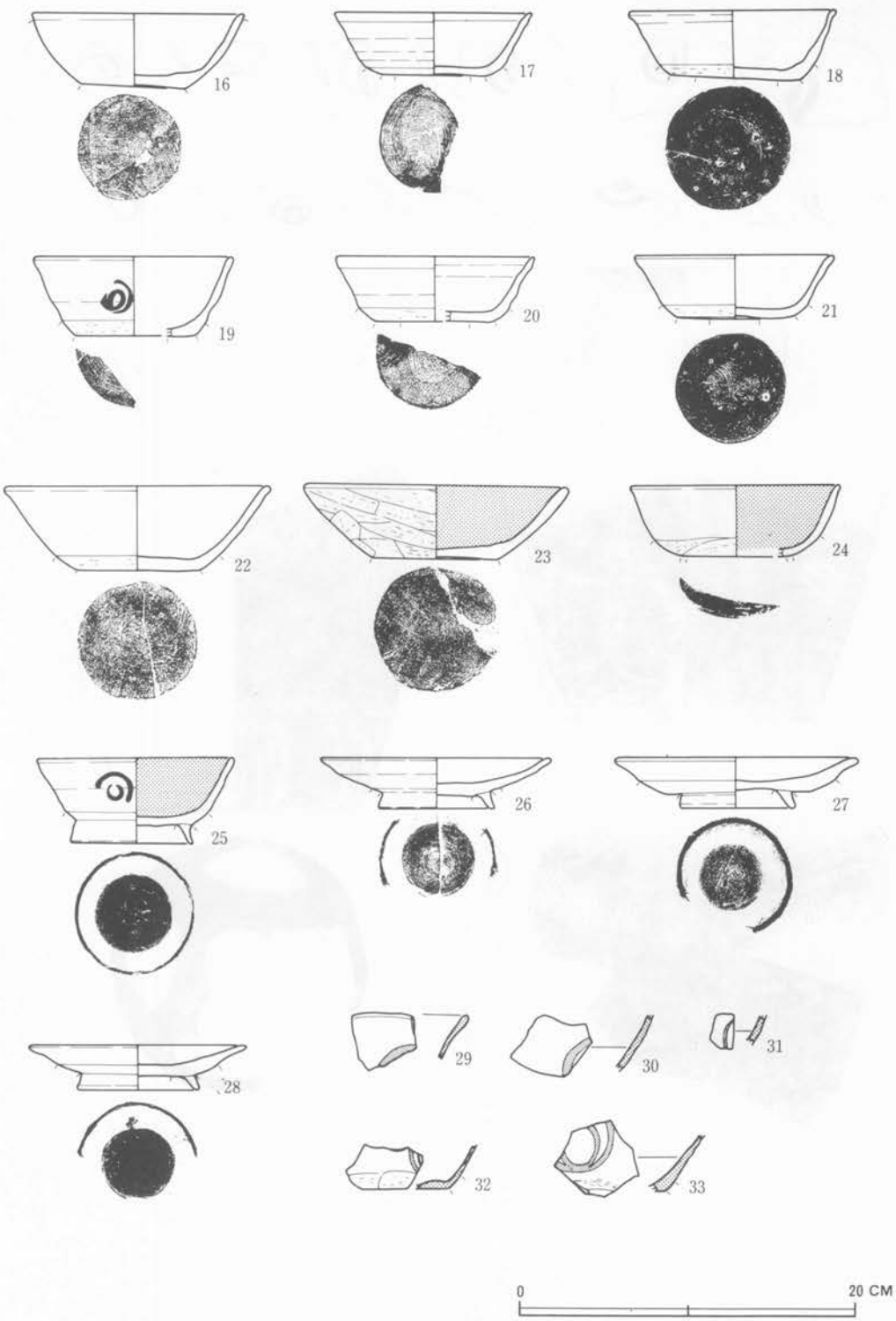
カマド　北壁中央　　柱　穴　不明

周　溝　不明

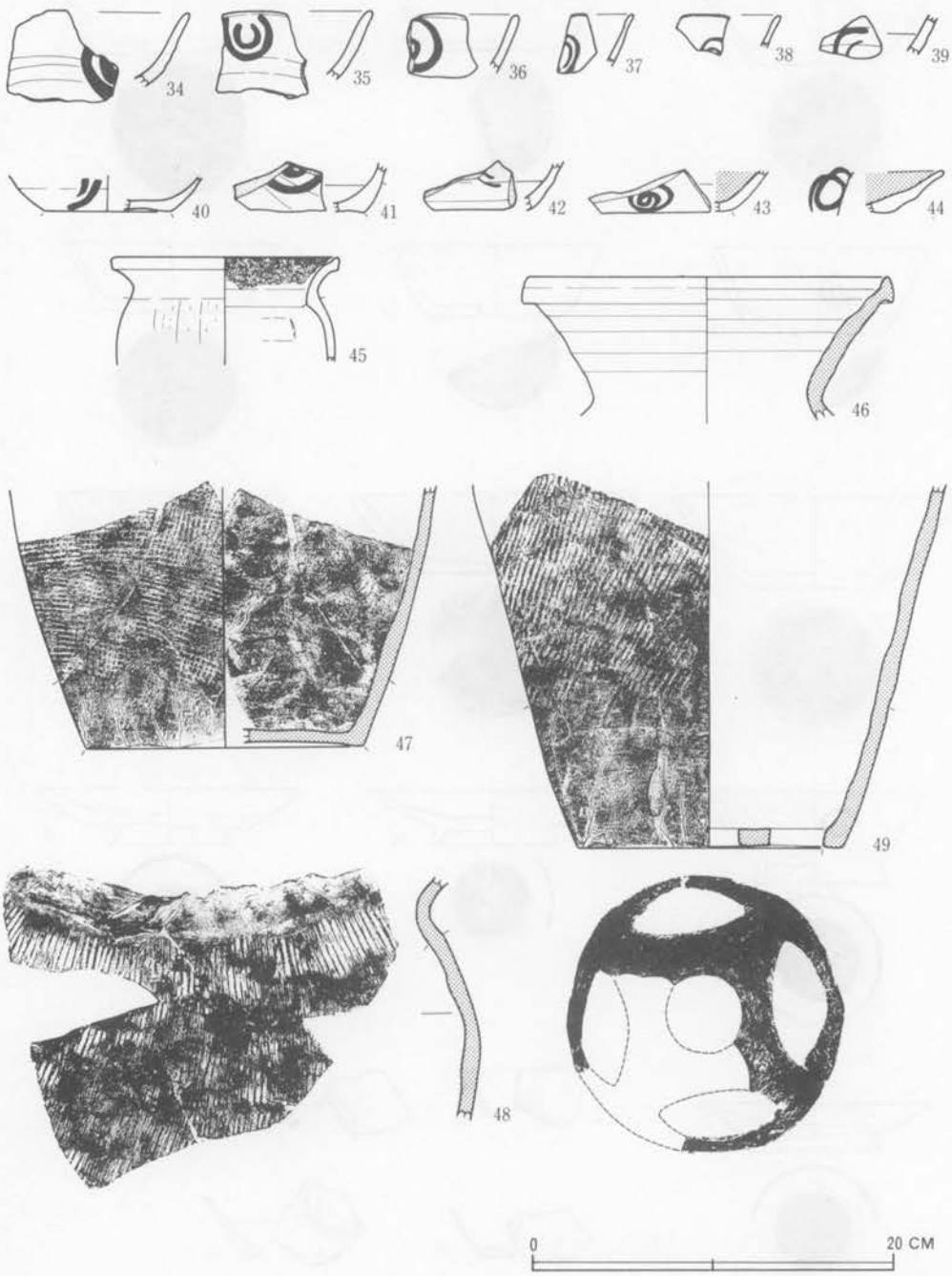
所　見　調査区の南端に位置する住居である。床面と考えられる面には多くのピットが認められ，どれが住居に伴うものかは不明である。カマドの遺存も悪く，北壁中央にV字に掘り込んだ掘り方のみ確認する。遺物の出土量は極めて多いが，直接この住居に伴うかは不明である。



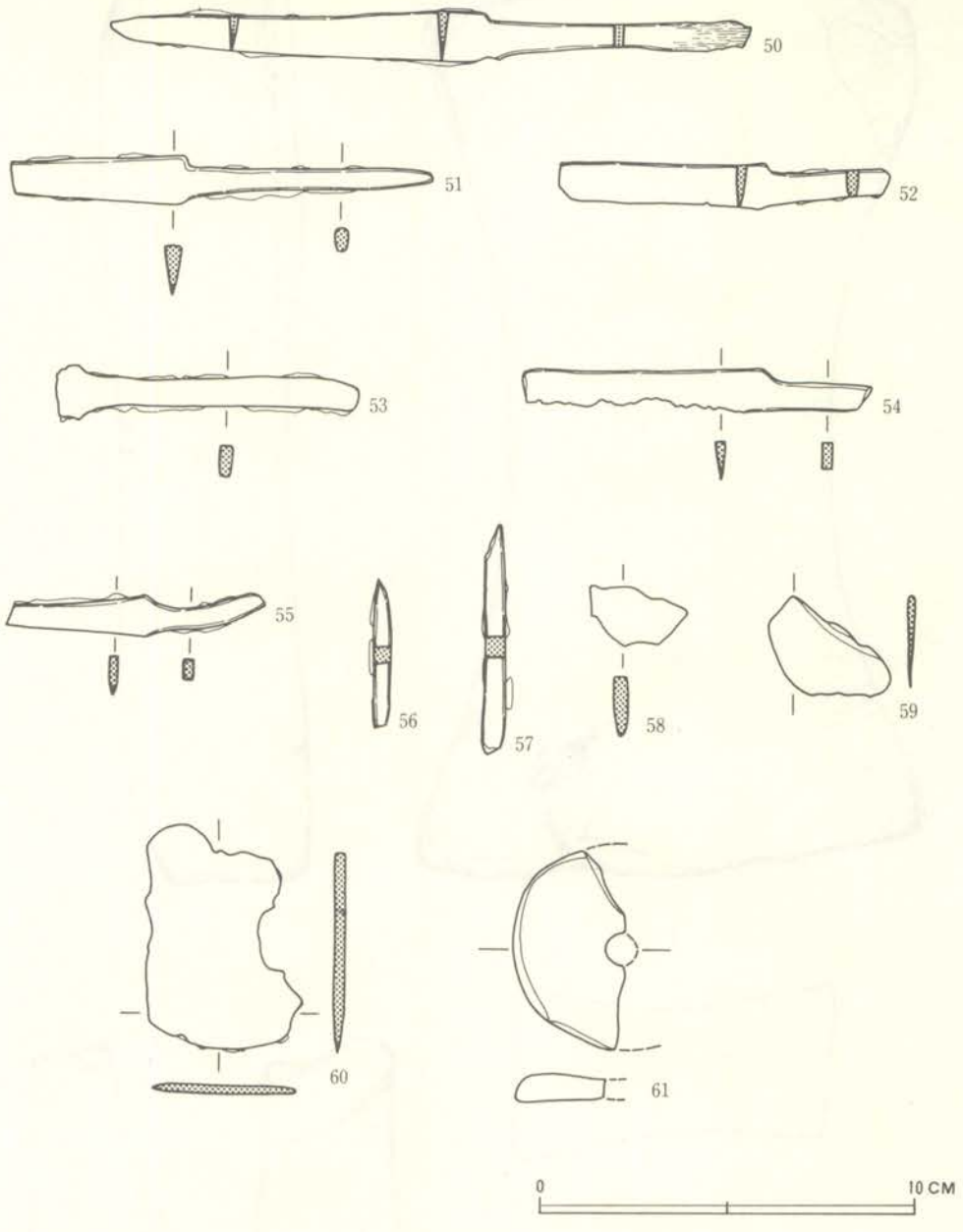
第154図　058住居跡出土遺物



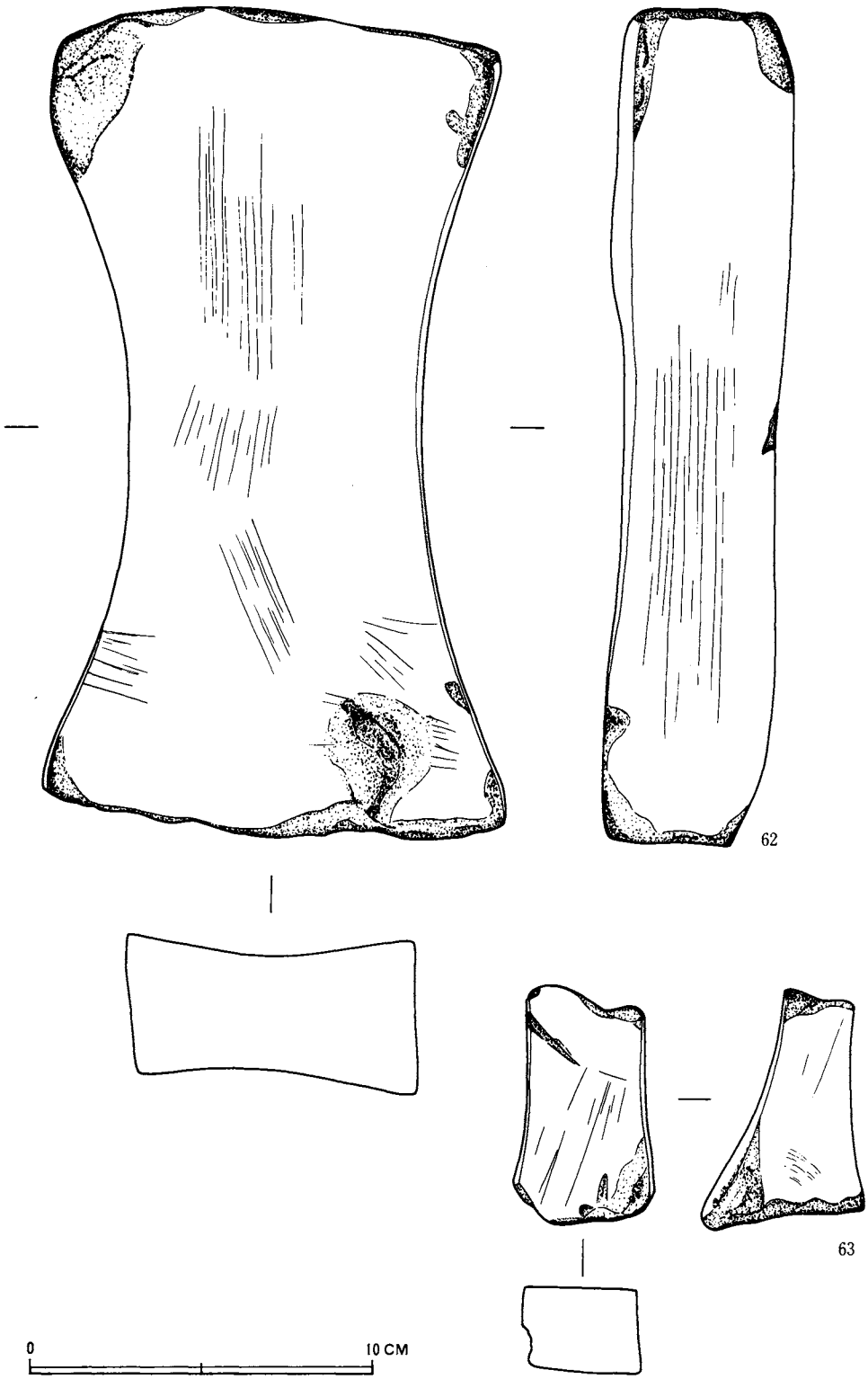
第155図　058住居跡出土遺物



第156図　058住居跡出土遺物



第157図　058住居跡出土遺物



第158図　058住居跡出土遺物

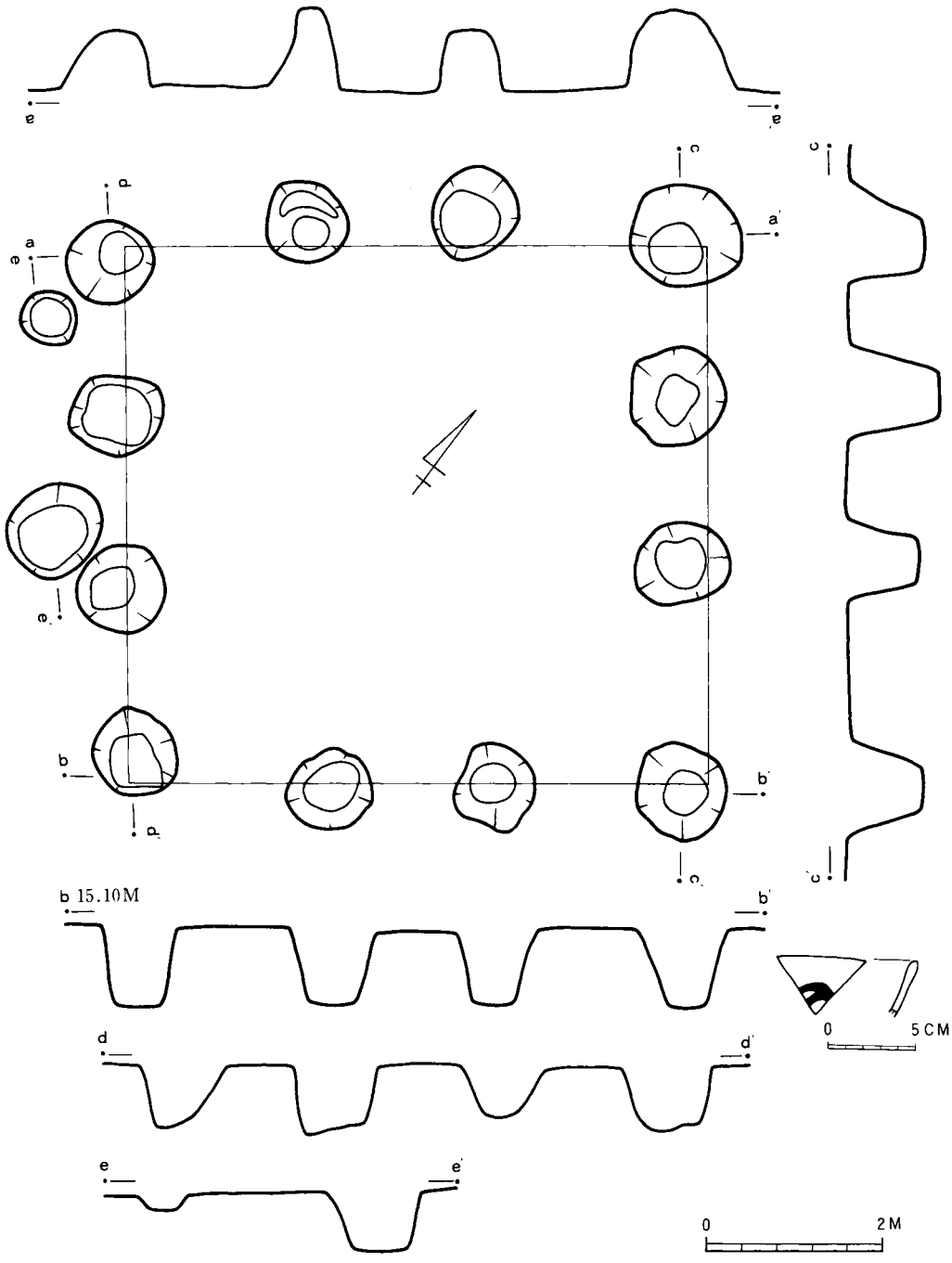
058住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏(須恵器)	14.2	4.5	7.2	1/8	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 不定方向手ヘラ削り	雲母-少 砂粒・石英-多	良	灰色	0078	朱書
2	坏(須恵器)	13.2	4.2	6.7	2/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り離し 不定方向手ヘラ削り	雲母・砂粒-多 長石-少	良	灰黒色 ～灰白色	0007+ 0078	L 炭化物附着 図版67-3
3	坏(須恵器)	13.1	4.6	6.9	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り,不定方向手ヘラ削り	雲母・微砂粒-少	良	暗灰色	0033	R 図版67-4
4	坏(須恵器)	14.0	4.6	6.9	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	雲母-多 微砂粒-少	良	暗灰色	0077+ 0091	R 図版67-2
5	坏(須恵器)	12.4	3.7	5.5	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒-多	良	明灰色	0013	R 墨書
6	把手付坏(須恵器)	把手長 2.9	〈3.7〉	高台径 5.8	口縁を欠く	体部内面-ヨコナデ 高台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	微砂粒-少	良	暗灰色	0026	R 図版67-5
7	坏(須恵器)		3.7	6.6	口縁を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 不定方向の手ヘラ削り	雲母・微砂粒-多	良	暗灰色	0015	R
8	坏(須恵器)		〈2.5〉	6.0	底部1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	雲母-少 砂粒・石英-多	良	灰色	0075	R 朱書
9	蓋(須恵器)	14.9 つまみ径 3.3	3.2 つまみ高 0.95		1/2	内面～口縁内外面-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り つまみ-ヨコナデ	雲母・微砂粒-多	良	灰色	0086	R 図版67-1
10	坏(土師器)	12.8	4.0	7.4	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	微砂粒・雲母-多	良	淡褐色	0090	
11	坏(土師器)	12.2	4.0	6.9	1/2	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母・微砂粒-少	良	淡褐色	0094	図版67-7
12	坏(土師器)	10.7	3.7	6.5	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母・微砂粒-少 密	良	淡褐色	0015+ 0019	
13	坏(土師器)	13.0	4.4	7.0	1/8	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	微砂粒・石英・雲母-少	良	淡黄褐色	0014	
14	坏(土師器)	11.9	3.9	6.7	口縁1/6を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母-多 微砂粒-少 密	良	赤褐色	0042	墨書 図版67-6
15	坏(土師器)	12.0	4.0	6.8	完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母・微砂粒-多 密	良	赤褐色	0039	図版67-9
16	坏(土師器)	12.7	4.4	6.2	口縁1/2を欠く	体部内面-ヨコナデ 体部外面-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 二方向の手ヘラ削り	雲母・微砂粒-多 密	良	淡褐色	0094	図版67-8

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
17	坏(土師器)	11.6	3.8	6.2	¼	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	微砂粒・雲母-多	良	赤褐色	0064	
18	坏(土師器)	12.4	4.0	7.9	口縁½を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	雲母・砂粒-少密	良	淡褐色	0072+0075	図版68-3
19	坏(土師器)	11.9	4.7	7.0	⅙	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-外縁回ヘラ削り	雲母・微砂粒-多密	良	淡褐色	0013	墨書 図版68-4
20	坏(土師器)	11.6	3.9	6.8	¼	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	微砂粒・雲母-多	良	赤褐色	0009	
21	坏(土師器)	11.9	3.8	7.2	⅓	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	微砂粒・雲母-多密	良	赤褐色	0043	
22	坏(土師器)	16.0	5.0	7.2	⅓	体部内面-ヨコナデ後,横位のヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	微砂粒・スコリア-少	良	淡褐色	0017	図版68-1
23	坏(土師器)	16.0	4.4	7.6	½	体部内面-ヨコナデ後荒いヘラミガキ 体部外面-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 不定方向の手ヘラ削り	雲母・砂粒-少	良	暗褐色	0036	内黒 図版67-10
24	坏(土師器)	12.6	4.2	6.6	½	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切り 手ヘラ削り	微砂粒-少	良	淡褐色	0001	内黒 図版68-2
25	高台付坏(土師器)	11.8	5.1	高台径7.4	⅔	体部内外面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-回糸切り	雲母・微砂粒-少密	良	赤褐色	0062+0064+0092	内黒,墨書
26	高台付皿(土師器)	14.0	3.0	高台径7.0	口縁⅓ 高台⅓	体部内外面-ヨコナデ後細かいヘラミガキ 体部下端-回ヘラ削り 台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	雲母・微砂粒-少密	良	淡褐色	0013+0077	図版68-5
27	高台付皿(土師器)	14.4	3.0	高台径6.9	口縁⅓を欠く	体部内面-ヨコナデ後細かいヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	微砂粒-少密	良	淡褐色	0068	図版68-6
28	高台付皿(土師器)	13.6	2.6	高台径7.3	口縁⅓ 高台½を欠く	体部内面-ヨコナデ後細かいヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 台-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り	雲母・微砂粒-少密	良	淡褐色	0045	図版68-7
29	坏(須恵器)		〈2.7〉		口縁部破片		雲母・微砂粒-少	良	暗灰色	0062	朱書
30	坏(須恵器)		〈3.5〉		体部破片		雲母・砂粒-多	良	暗灰色	0063	朱書
31	坏(須恵器)		〈1.9〉		体部破片		雲母・微砂粒	やや甘	灰白色	0012	朱書

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
32	坏（須恵器）		〈2.5〉		底部破片		雲母・砂粒-少 石英-多	良	暗灰色	0016	朱書
33	坏（須恵器）		〈3.2〉		底部破片		雲母-多 微砂粒-少	良	暗灰色	0052	朱書
34	坏（土師器）		〈4.1〉		口縁部破片		雲母・微砂粒-少	良	淡褐色	0017	墨書
35	坏（土師器）		〈3.8〉		口縁部破片		雲母-少 微砂粒-多	良	淡褐色	0017	墨書
36	坏（土師器）		〈3.2〉		口縁部破片				淡褐色	0094	墨書
37	坏（土師器）		〈2.9〉		口縁部破片				淡褐色	0011	墨書
38	坏（土師器）		〈1.9〉		口縁部破片				淡褐色	0062	墨書
39	坏（土師器）				体部破片				淡褐色	0011	墨書
40	坏（土師器）		〈1.9〉	7.0	底部破片	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り			淡褐色	0010	墨書
41	坏（土師器）		〈2.7〉		底部破片	体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り			淡褐色	0011	墨書
42	坏（土師器）		〈2.6〉		体部破片				淡褐色	0011	墨書
43	坏（土師器）		〈2.2〉		底部破片				淡褐色	0077	内黒,墨書
44	坏（土師器）		〈2.2〉		底部破片				淡褐色	0019	内黒,墨書
45	甕（土師器）	12.6	〈6.8〉		1/3	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヨコヘラ削り後タテヘラ削り	雲母・微砂粒-少 密	良	暗褐色	0040	口縁部内面に炭化物附着
46	甕（須恵器）	20.1	〈7.8〉		口頸部全周	口頸部内外面-ヨコナデ,粘土紐巻き上げ明瞭	砂粒-多	良	暗灰色	0001+0023+0020+0077+0085+0094	内外面自然釉 図版68-8
47	甕（須恵器）		〈14.1〉	15.4	胴下半1/2	胴部内面-ナデ 胴部外面-平行叩き 胴部外面下半-ヘラ削り	雲母・砂粒-多	やや甘	淡褐色～灰色	0011+0015+0059+0062+0063+0082	
48	甕（須恵器）		〈13.0〉		胴部1/3	頸部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-平行叩き	雲母・砂粒・石英-多	良	暗灰色	0009+0028+0062+0063+0078	
49	甕（須恵器）		〈19.7〉	14.6	胴部2/3	胴部内面-ナデ 胴部外面-平行叩き 胴部外面下半-ヘラ削り 底部-焼成前穿孔あり	雲母・微砂粒-少	良	灰白色	0068	
50	刀子	身長10.1 茎長7.0	身巾1.3 茎巾0.6	身厚0.3 茎厚0.3						0005	木質部遺存 図版68-9 23g
51	刀子	身長11.4 茎長6.6	身巾1.3 茎巾0.6	身厚0.5 茎厚0.4						0019	図版68-10 15g

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
52	刀子	身長 8.9 茎長 3.2	身巾 1.25 茎巾 0.75	身厚 0.3 茎厚 0.35						0094	11g
53	刀子	身長 8.1 茎長 7.3	茎巾 0.85	茎厚 0.4						0009	14g
54	刀子	身長 9.4 茎長 2.6	身巾 1.0 茎巾 0.7	身厚 0.3 茎厚 0.3						0009	7g
55	刀子	身長 7.0 茎長 3.0	身巾 1.5 茎巾 0.6	身厚 0.25 茎厚 0.3						0077	図版68-11 6g
56	棒状鉄製品	全長 3.9	巾 0.45	厚 0.45						0011	2g
57	棒状鉄製品	全長 6.1	巾 0.6	厚 0.6						0019	7g
58	板状鉄製品	全長 2.6	巾 1.6	厚 0.45						0009	4g
59	板状鉄製品	全長 3.3	巾 2.2	厚 0.2						0094	5g
60	板状鉄製品	全長 5.6	巾 3.8	厚 0.3						0010	17g
61	紡錘車(須恵)	直径 (5.6) 孔径 (0.9)		厚 0.7						0077	坏の再利用
62	砥石	現存長 〈24.4〉	最大巾 13.3	最大厚 4.9						0071	
63	砥石	現存長 〈6.9〉	最大巾 3.9	最大厚 4.3						0096	



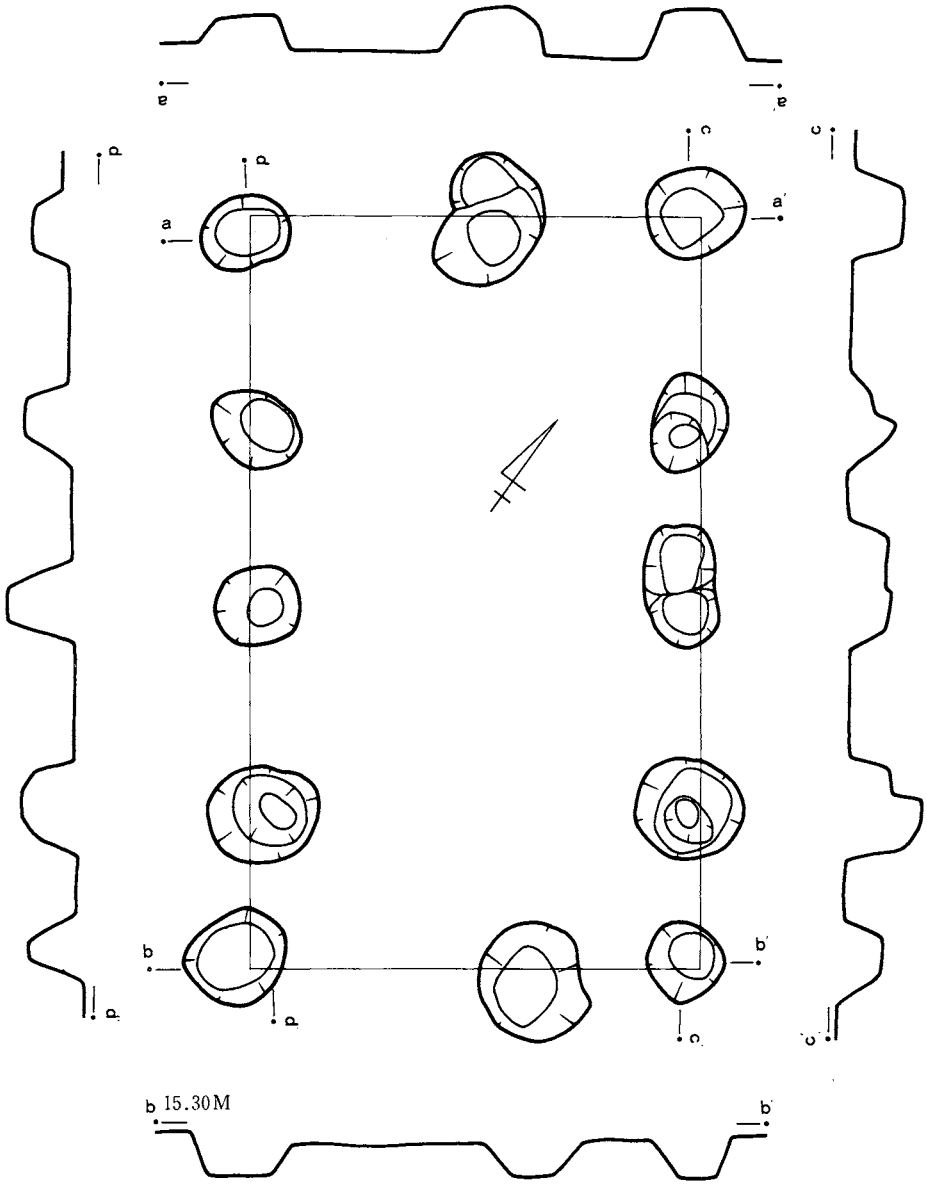
第159図　1号掘立柱建物跡及び出土遺物

1号掘立柱建物

規　模　桁行3間（6.6m）×梁間3間（6.0m）

棟方向　N－52°－E

所　見　柱穴掘方はほぼ円形を呈し掘方径0.9～1.0mを測る。西側柱列の外方に柱穴2本を検出したが，この建物跡も直接関係するかどうかは不明である。東西棟建物となる。図示した墨書土器は土師器坏の口縁部である。遺構確認の際に出土している。



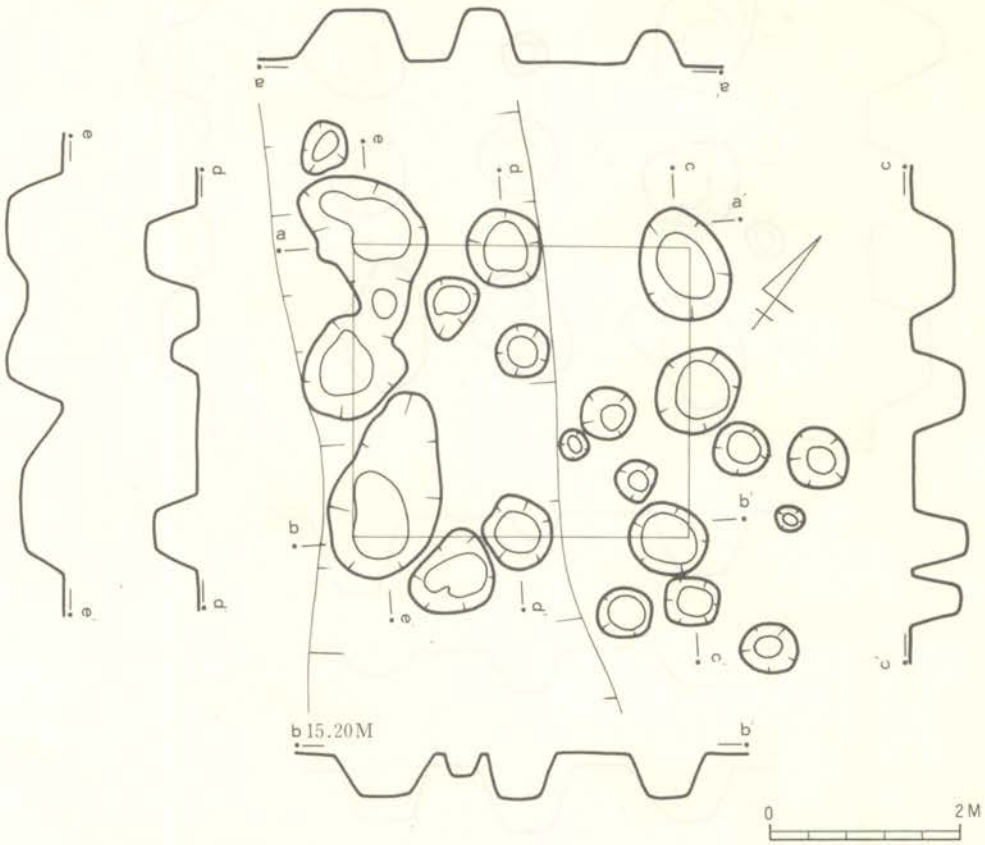
第160図　2号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物

規　模　桁行4間（7.8m）×梁間2間（4.8m）

棟方向　N－36°－W

所　見　柱穴掘方はほぼ円形を呈し掘方径1～1.2mを測る。南妻柱列の柱間寸法は偏りがある。南北棟建物である。



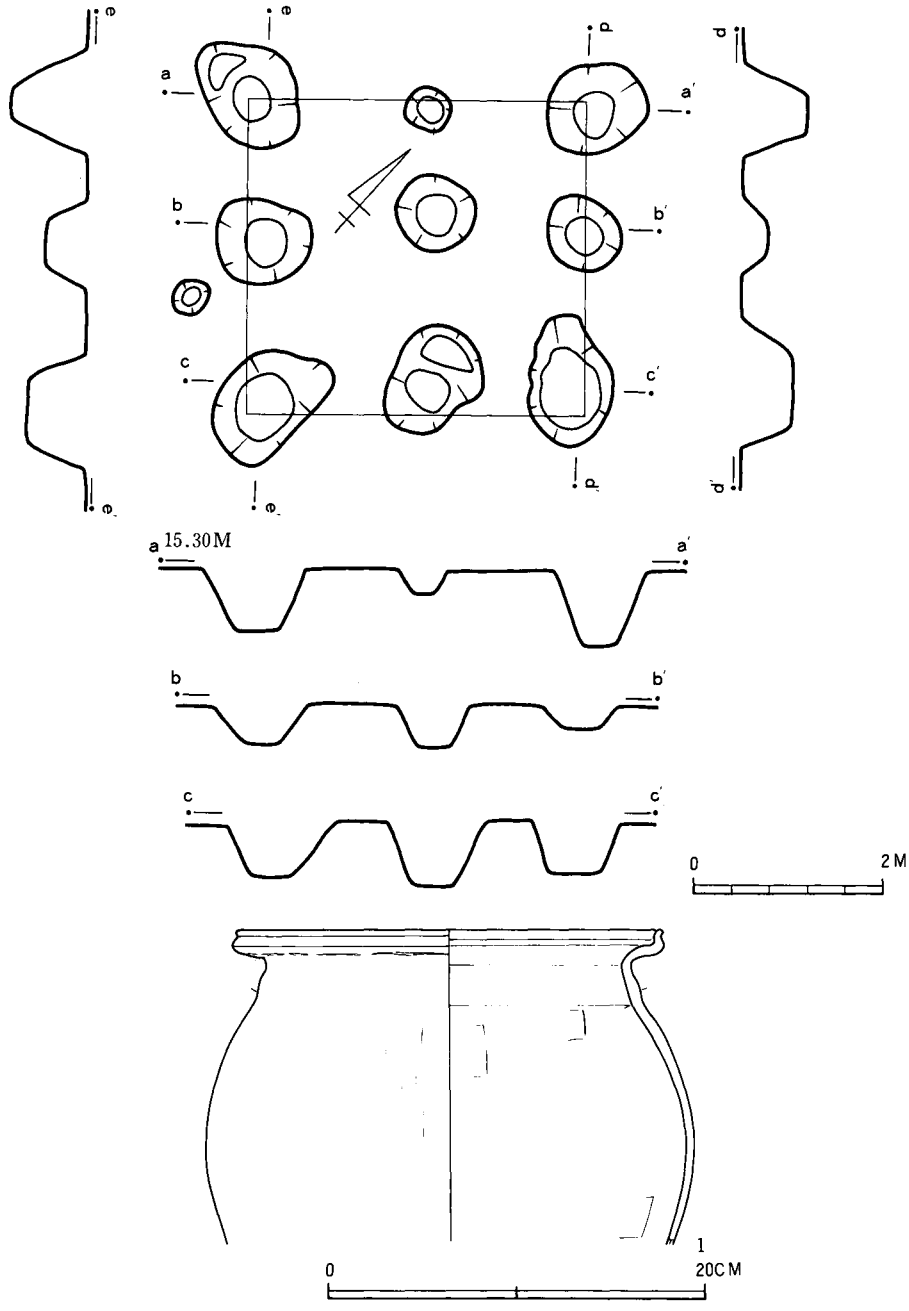
第161図　3号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物

規　模　桁行2間（3.6m）×梁間2間（3.0m）

棟方向　N－53°－E

所　見　東西棟建物である。後世の溝に切られ周辺には性格不明のピット群が存在するが，総柱の建物を推定した。



第162図　4号掘立柱建物跡及び出土遺物

4号掘立柱建物

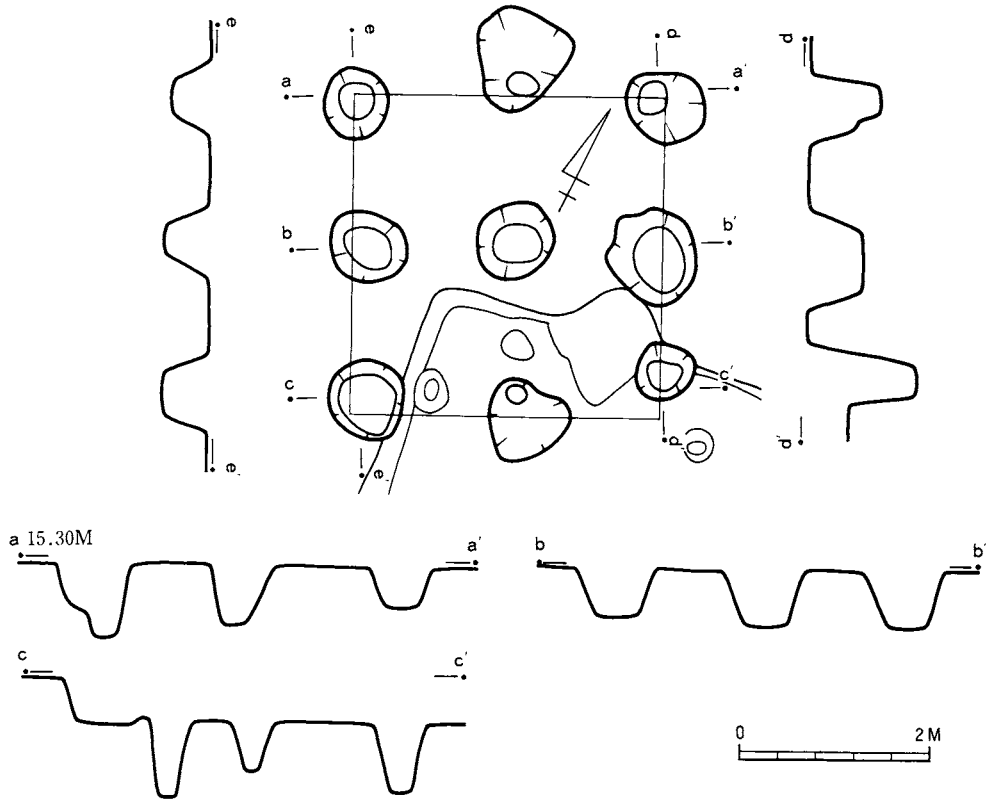
規　模　桁行2間（3.6m）×梁間2間（3.3m）

棟方向　N－47°－E

所　見　総柱の東西棟建物である。柱穴掘方径はばらつきがあるが，ほぼ円形を呈する。

4号掘立柱建物跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	甕(土師器)	22.5	16.4	胴径 25.8	¼	口縁内外-ヨコナデ 胴部外面-ヘラ削り 胴部内面-ヘラナデ	雲母・長石・砂粒-少	良	明褐色	0004	



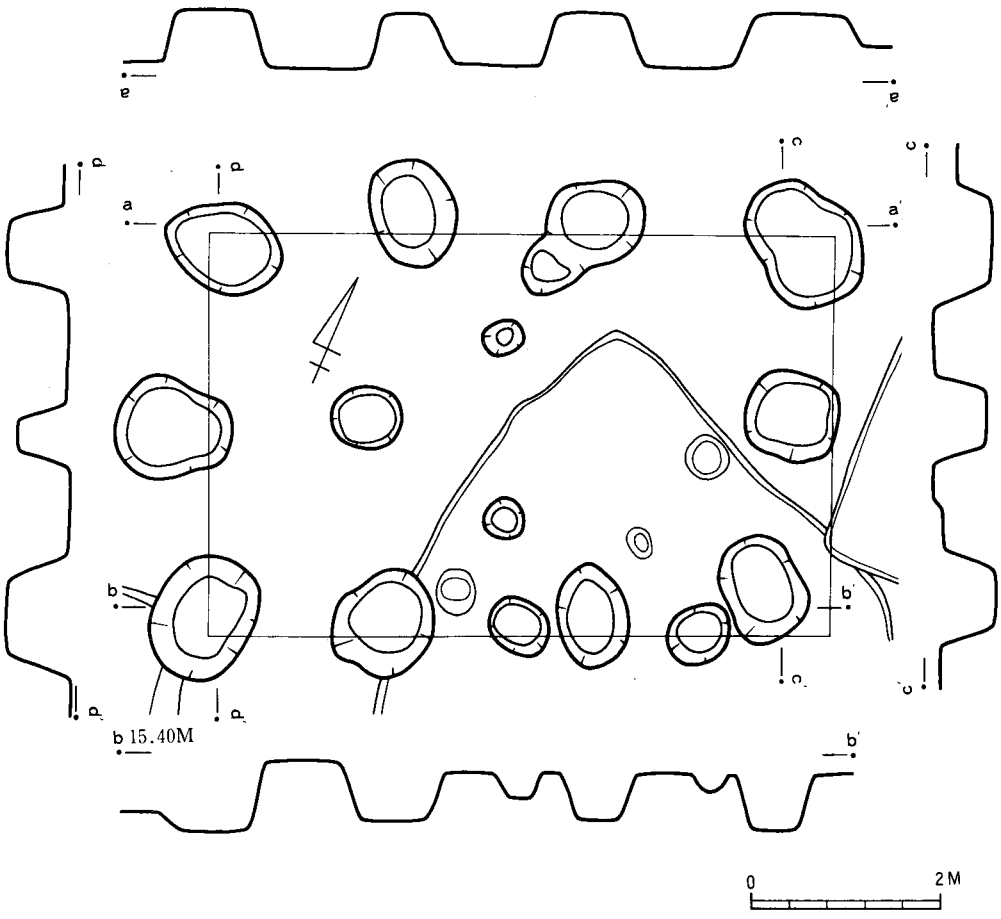
第163図　5号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物

規　模　桁行2間（3.3m）×梁間2間（3.3m）

棟方向　N－62°－E

所　見　総柱となり東西棟建物跡になると考えられる。柱穴掘方は径約80cmで円形を呈する。南側で024住居と切り合うが新旧関係は不明である。



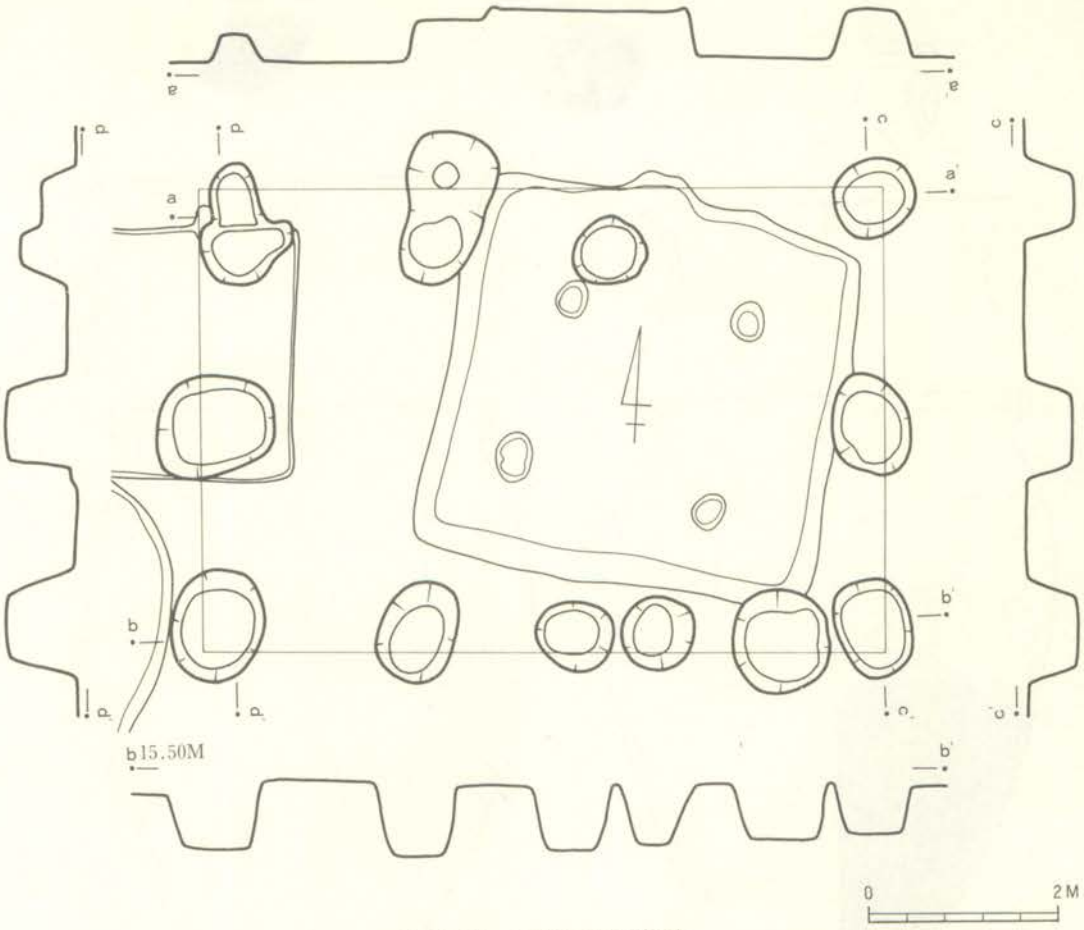
第164図　6号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物

規　模　桁行3間（6.6m）×梁間2間（4.2m）

棟方向　N－67°－E

所　見　東西棟建物である。西妻から1間目に間仕切があると考えられる。052縄文住居を切って建てられている。



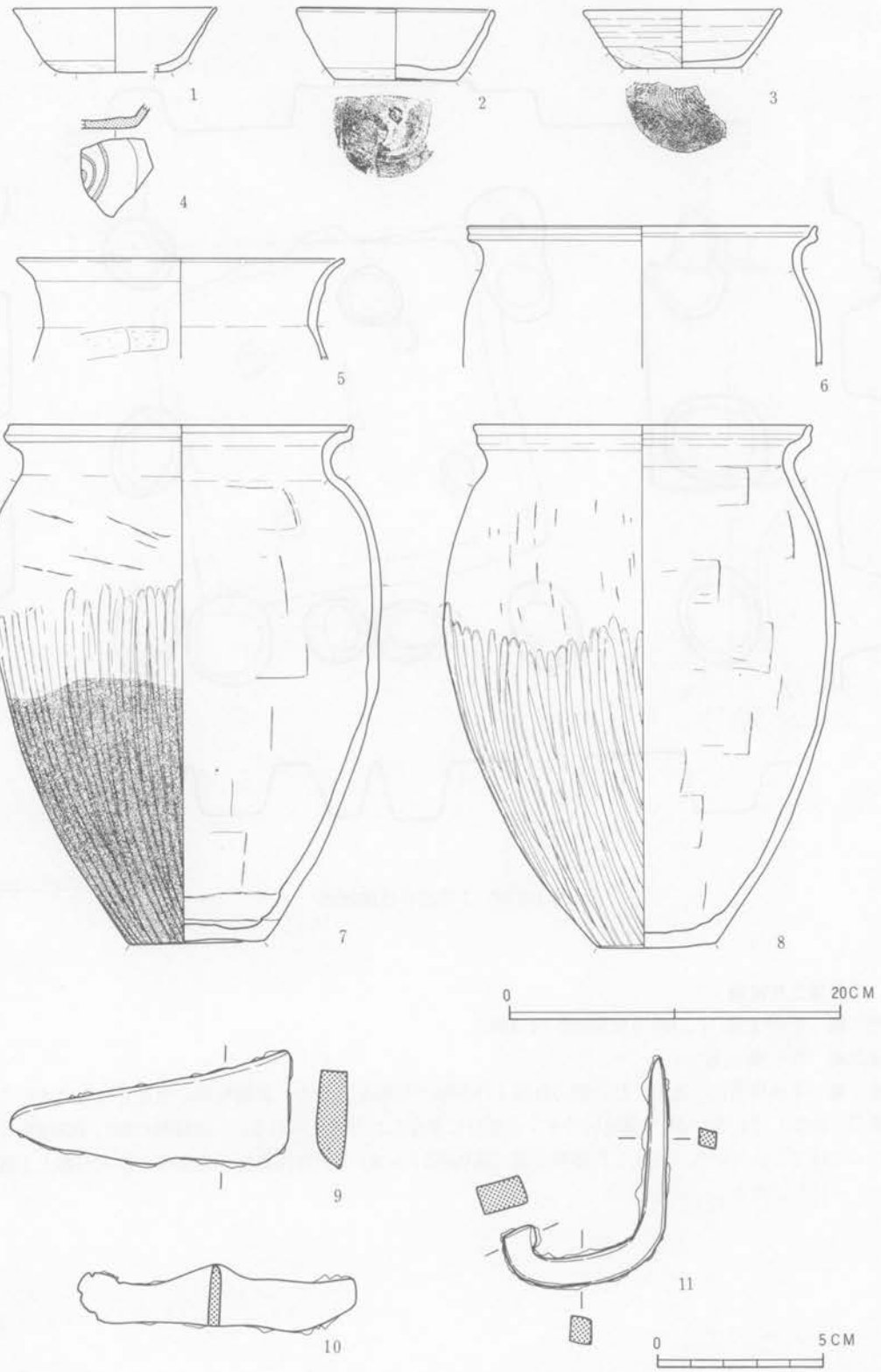
第165図　7号掘立柱建物跡

7号掘立柱建物

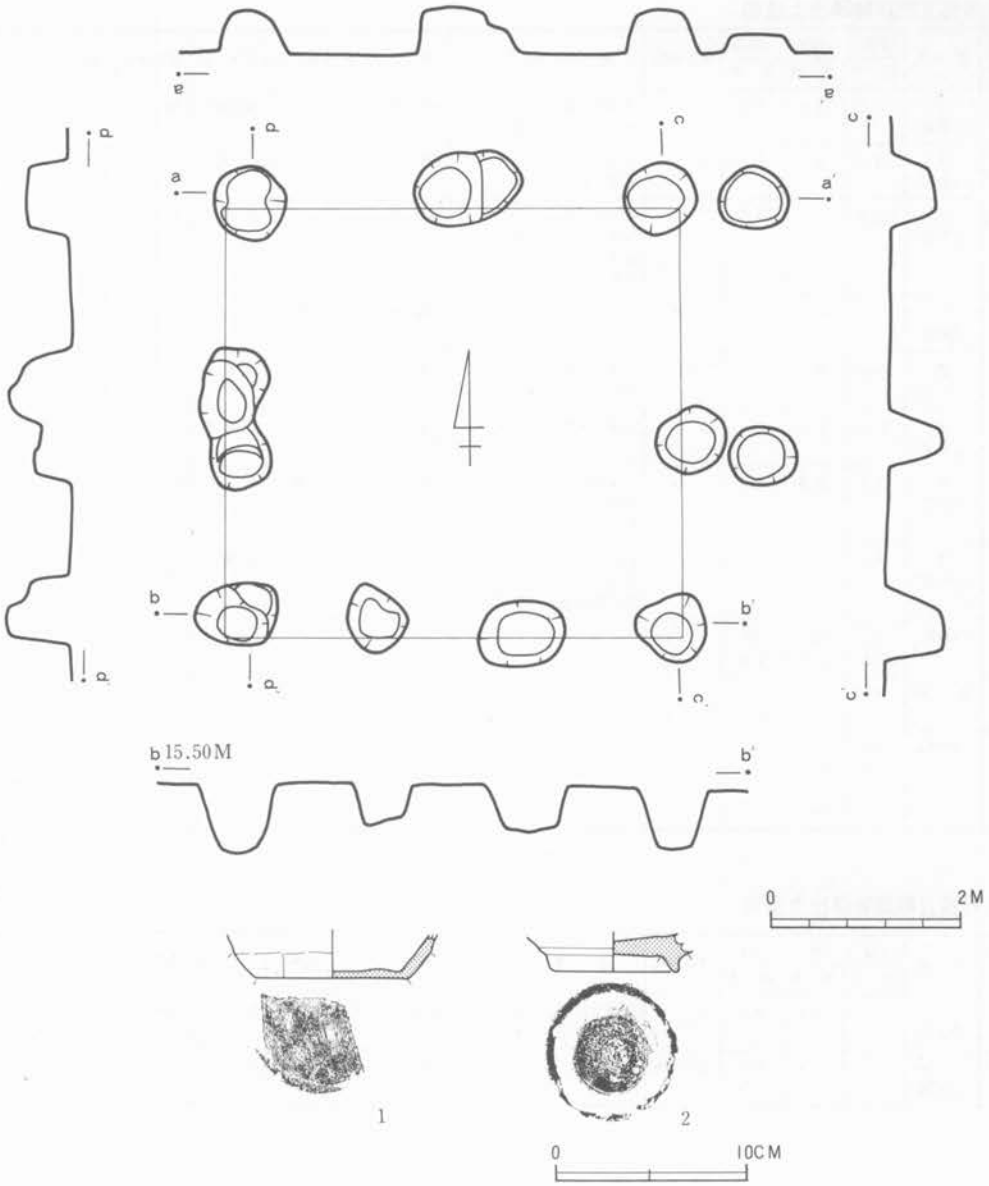
規　模　桁行3間（7.2m）×梁間2間（4.8m）

棟方向　N－86°－E

所　見　東西棟遺物である。柱穴掘方は径1m前後で円形を呈する。北側柱列の東第2柱穴にあたる部分を検出していないが，028住居のカマド部分に存在したと考えられる。この建物は027，028住居を切って建てられている。出土した甕形土器（第166図5～8）4点は西妻柱列の南端の柱穴の覆土上層から一括して出土している。



第166図　7号掘立柱建物跡出土遺物



第167図　8号掘立柱建物跡及び出土遺物

8号掘立柱建物

規　模　桁行2間（4.8m）×梁間2間（4.5m）

棟方向　N－89°－E

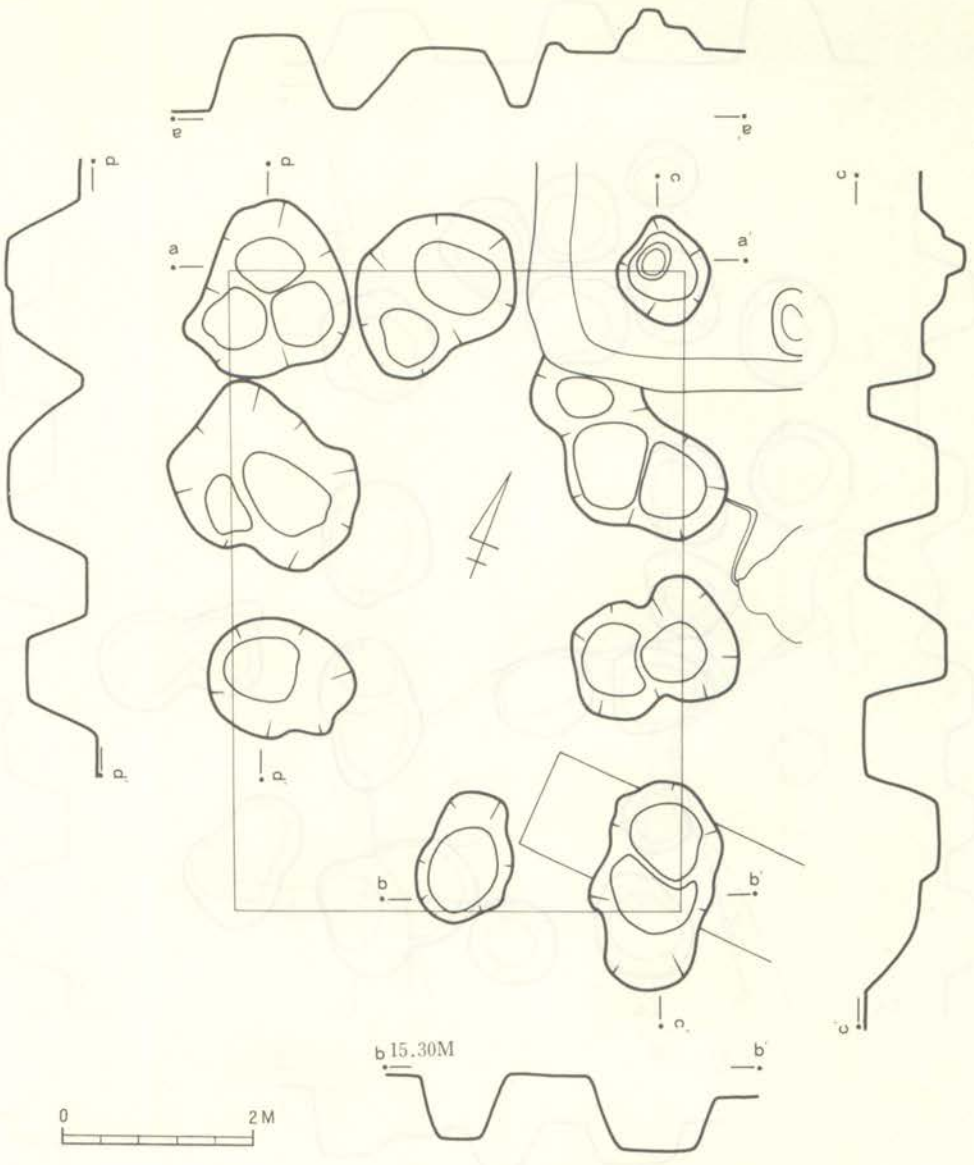
所　見　東西棟建物で，柱穴掘方径70cm前後の円形を呈し小形の掘方となる。遺物は東妻柱列中央の柱穴掘方覆土から出土する。

7号掘立柱建物跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏(土師器)	(12.2)	3.9	(6.8)	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り	砂粒-多 雲母-少	良	淡明褐色	0001	
2	坏(土師器)	(11.8)	4.3	(7.3)	1/5	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り	砂粒-多	良	淡明褐色	0001	
3	坏(土師器)	(12.0)	3.5	(7.0)	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切り後,周縁手ヘラ削り	砂粒-多	良	黄褐色	0004	
4	坏(須恵器)		〈1.3〉		底部破片		砂粒-多 雲母・長石-少	良	灰色	0001	底部に朱書
5	甕(土師器)	(19.7)	〈6.1〉		口縁2/3	口縁内外面-ヨコナデ 胴部外面-ヘラ削り	砂粒-多 雲母-少	良	赤褐色	0032+ 0033	
6	甕(土師器)	(21.2)	〈8.5〉		1/4	口縁内外面-ヨコナデ	砂粒-多 雲母-少	良	淡褐色	0032	
7	甕(土師器)	20.7	30.6	8.2	2/3	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-細いヘラ削り	砂粒・雲母・長石-多	良	褐色	0032+ 0033	胴部はススが附着
8	甕(土師器)	20.7	31.0	7.2	1/3	口縁内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-細いヘラ削り	砂粒・雲母・長石-多	良	明褐色	0032+ 0033	
9	板状鉄製品	長 8.4	巾 2.7	厚 1.0						0001	65g
10	燧鉄	長 8.3	巾 1.3	厚 0.35							17g
11	不明鉄製品	長 7.0	巾 0.5 〜 0.8	厚 0.5 〜 1.4							コの字状に曲る,鉄釘か 27g

8号掘立柱建物跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏(須恵器)		〈2.3〉	(8.3)	1/4	体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り手ヘラ削り	砂粒・長石-多	良	暗灰色	0004	
2	高台付坏(須恵器)		〈2.0〉	脚径 6.4	底部のみ	底部-回ヘラ切り	砂粒・長石-多	良	暗灰色	0004	



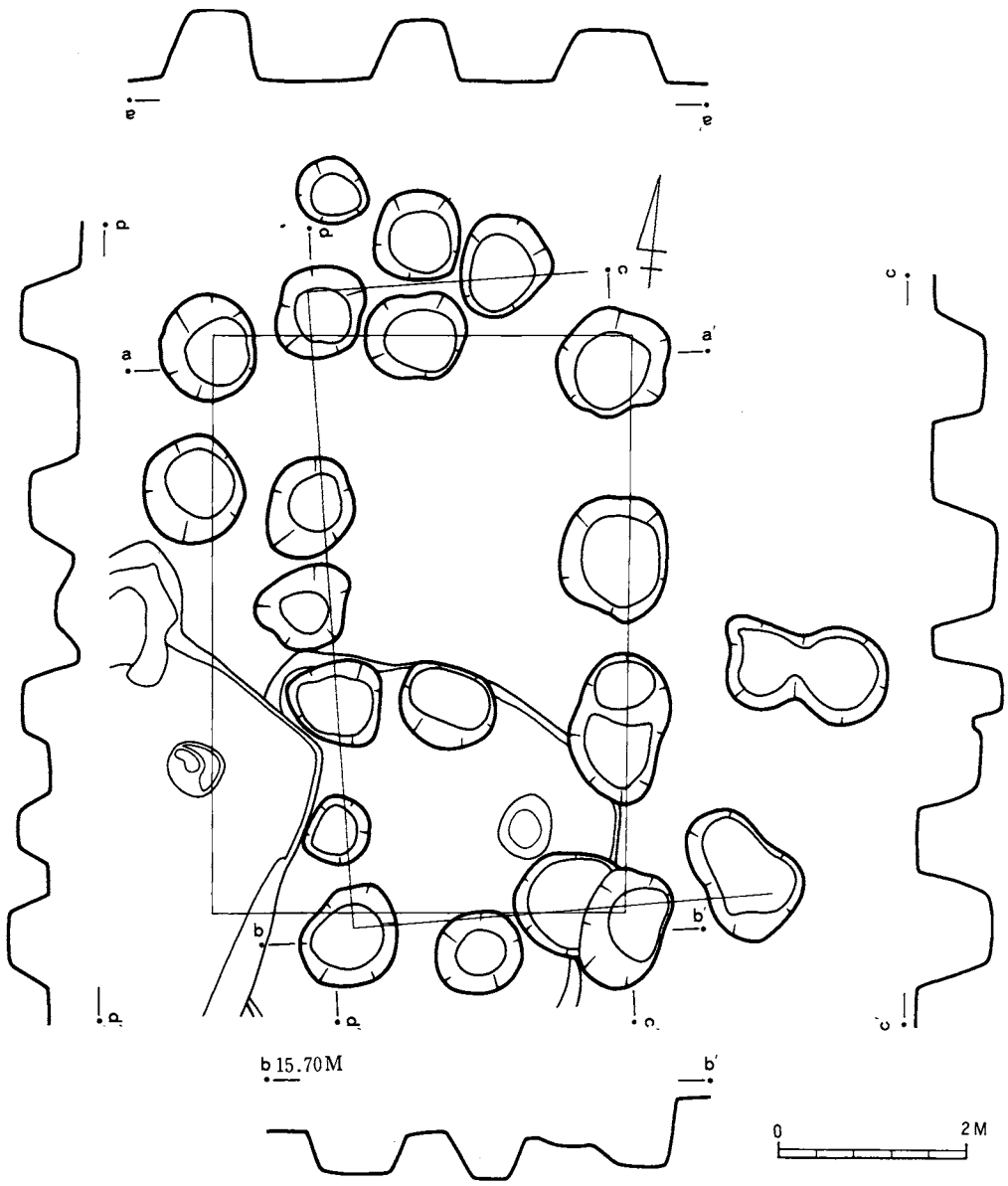
第168図　9号掘立柱建物跡

9号掘立柱建物

規　模　桁行3間（6.6m）×梁間2間（4.8m）

棟方向　N－21°－W

所　見　南北棟建物で西側柱の南柱穴は削平を受けるため検出できなかった。柱穴掘方は長径2m前後を測り大形となる。北東隅は037住居を切っている。図示した遺物は北妻柱列の掘方覆土中より出土する。



第169図　10・11号掘立柱建物跡

10・11号掘立柱建物

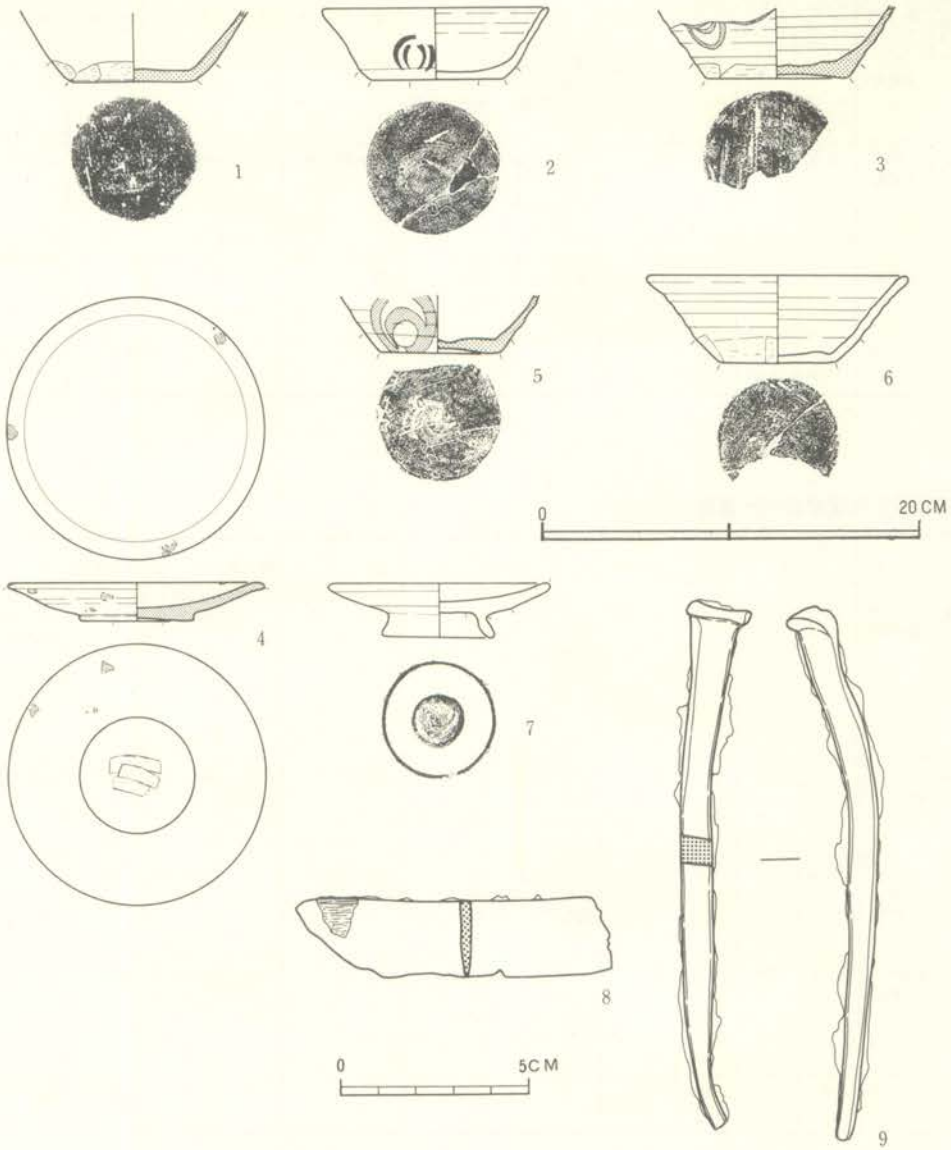
規　模　10号　桁行3間（6.6m）×梁間2間（4.8m）以上

11号　桁行3間（6.0m）×梁間2間（4.5m）

棟方向　10号　N－10°－W

11号　N－5°－W

所　見　柱穴は密集しており，南北棟建物2棟を推定したが，ともに建物の柱穴列全てを検出しているわけではない。10号建物は東側柱列を検出しておらず，11号建物も西側柱列の南半分を041住居と切り合うため確認していない。出土した二彩の皿は南妻柱列を確認する際に出土したものでこの掘立柱建物と直接関係する遺物であるかは不明である。



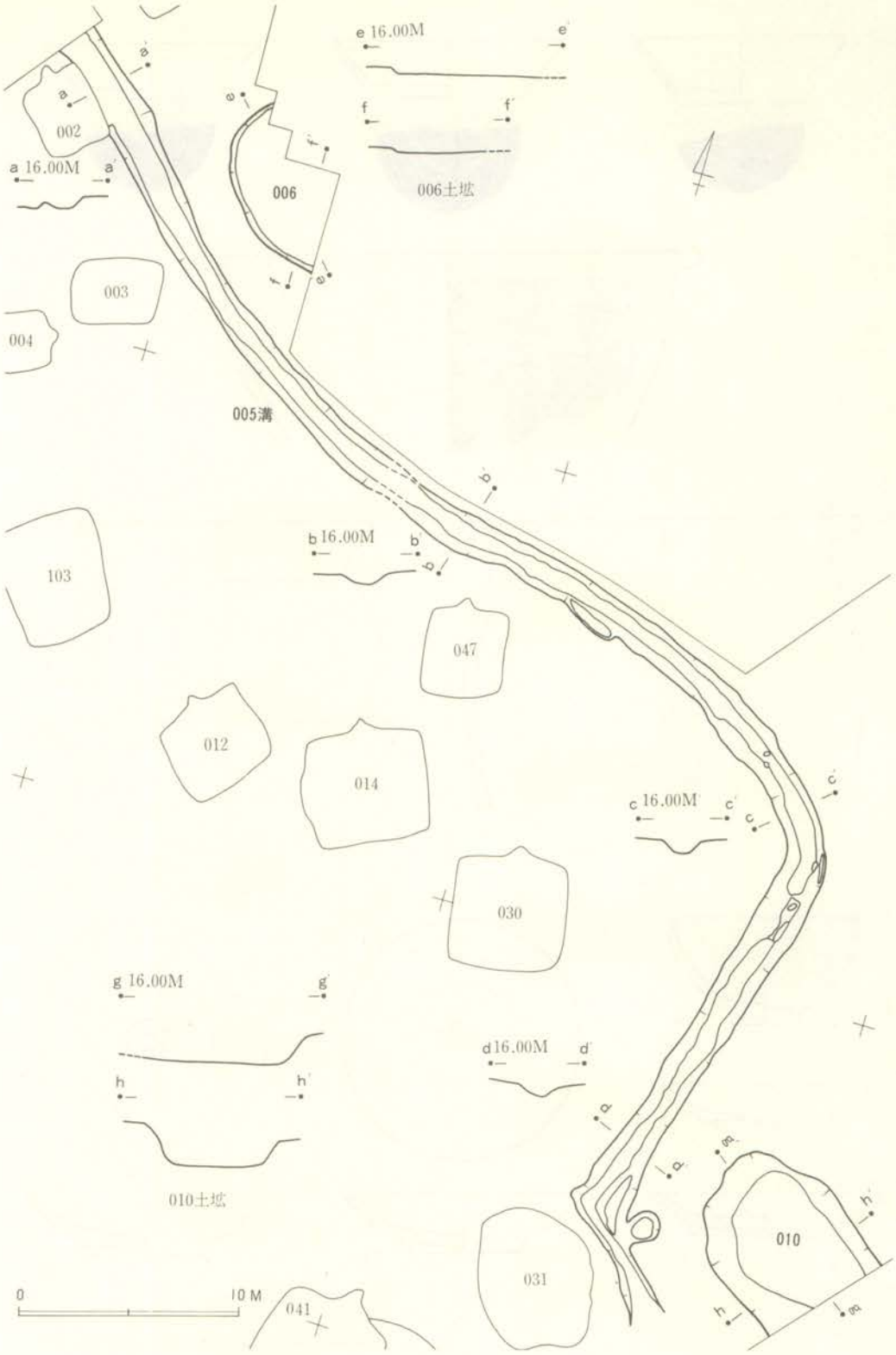
第170図　9号(1～3・9) 10号(4～8) 掘立柱建物跡出土遺物

9号掘立柱建物跡出土遺物

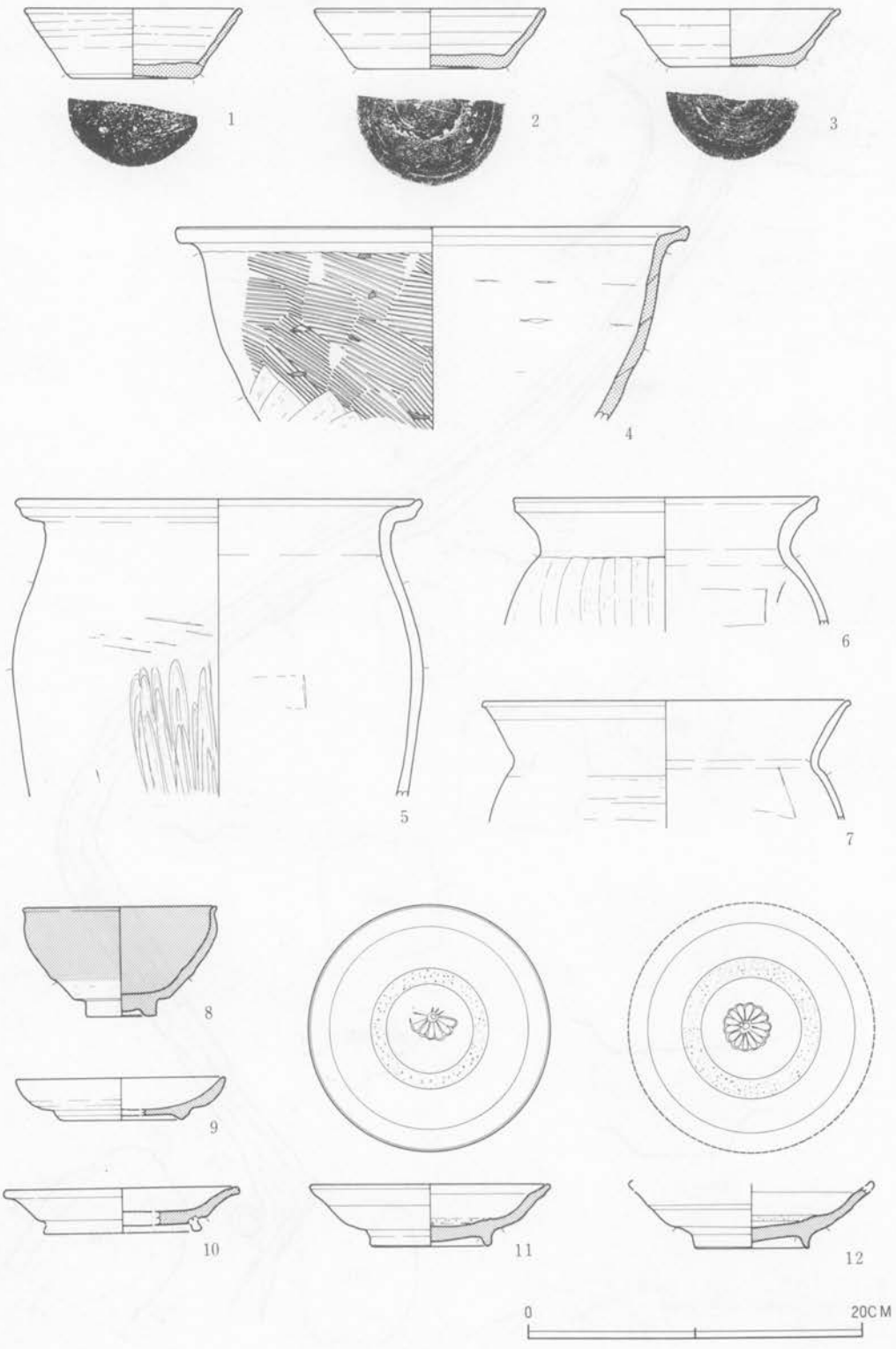
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏(須恵器)		〈3.7〉	6.2	口縁を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切離し不明手ヘラ削り	砂粒・長石-多	良	灰色	0001+0002	
2	坏(土師器)	(11.9)	〈3.8〉	7.0	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り後,周縁回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	明褐色	0001	体部に墨書
3	坏(須恵器)		〈3.7〉	7.4	2/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り後手ヘラ削り	砂粒・雲母・長石-多	良	灰色	0001	体部に朱書
9	鉄釘	長 13.7	巾 0.8	厚 0.75						0001	37g

10号掘立柱建物跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
4	二彩皿(緑釉陶器)	13.2	2.0	5.9	ほぼ完形	体部内面-ヘラミガキ 体部下半-回ヘラ削り 底部-回ヘラ削り中央に手ヘラ削り	密	良	淡黄色	0033	体部内面に3ケ所,外面に集中して3ケ所に,点彩し,緑色を発する 高台は削り出しによる
5	坏(須恵器)		〈3.7〉	6.4	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り後手ヘラ削り	砂粒-少	良	灰色	0006	体部に朱書
6	坏(土師質須恵器)	(13.4)	4.5	6.0	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り後手ヘラ削り	砂粒・雲母・長石-多	良	暗褐色	0006	
7	高台付皿(土師器)	11.4	2.8	5.8	1/2	体部内面-ヨコナデ後,ヘラミガキ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り後,回ヘラ削り	砂粒-少	良	明褐色	0012	
8	刀子	長 8.4	巾 2.0	厚 0.3						0001	10g



第171図　005 溝・006・010 土坑



第172図　010 土坑出土遺物

005溝

本遺跡調査区の北端から002住居を切って南東にのび，16グリッド内で南に走る溝である。この溝を境にして東側では奈良・平安時代の遺構・遺物は激減し、中近世の土坑，地下式土坑が検出される。

形　状　幅1.8～2.0m，深さ約50cmを測る。南端部は徐々に浅くなりこの先にはあまり延びないのではないかと考えられる。断面形はほぼ逆台形を呈する。

006土坑

形　状　調査区の北端近くで検出され，その全容を知ることはできないが平面形態は楕円形になると考えられる。長軸７m以上，短軸４m以上となる。深さは約30cmで床面は平坦になる。

遺　物　出土量は少なく，図示できるものはない。須恵器や土師器の破片の他に鉄分を多く含んだ鉄滓が少量出土した。

010土坑

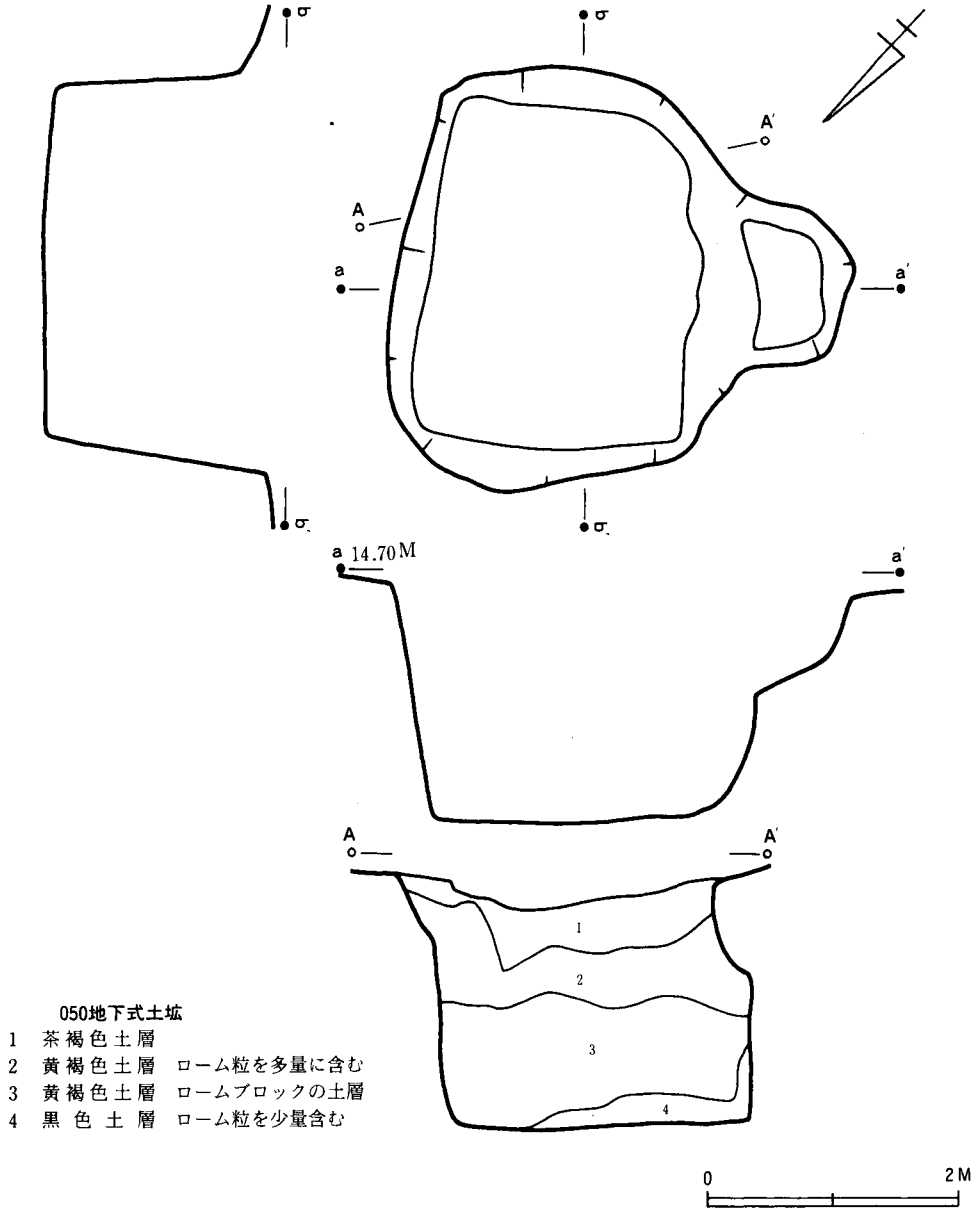
形　状　調査区の南東に位置し，調査区域外にさらに延びる土坑である。長軸7.5m以上，短軸6.3mを測り，平面形は長楕円形を呈すると考えられる。深さは１～1.5mと深く，床面は平坦になる。

遺　物　遺物量は多く，須恵器，土師器の他に中近世陶器が数多くある。また鉄滓の出土量も極めて多い。この土坑は製鉄に関連し，鉄滓の貯蔵的な役目をはたしていた可能性がある。

010土坑出土遺物

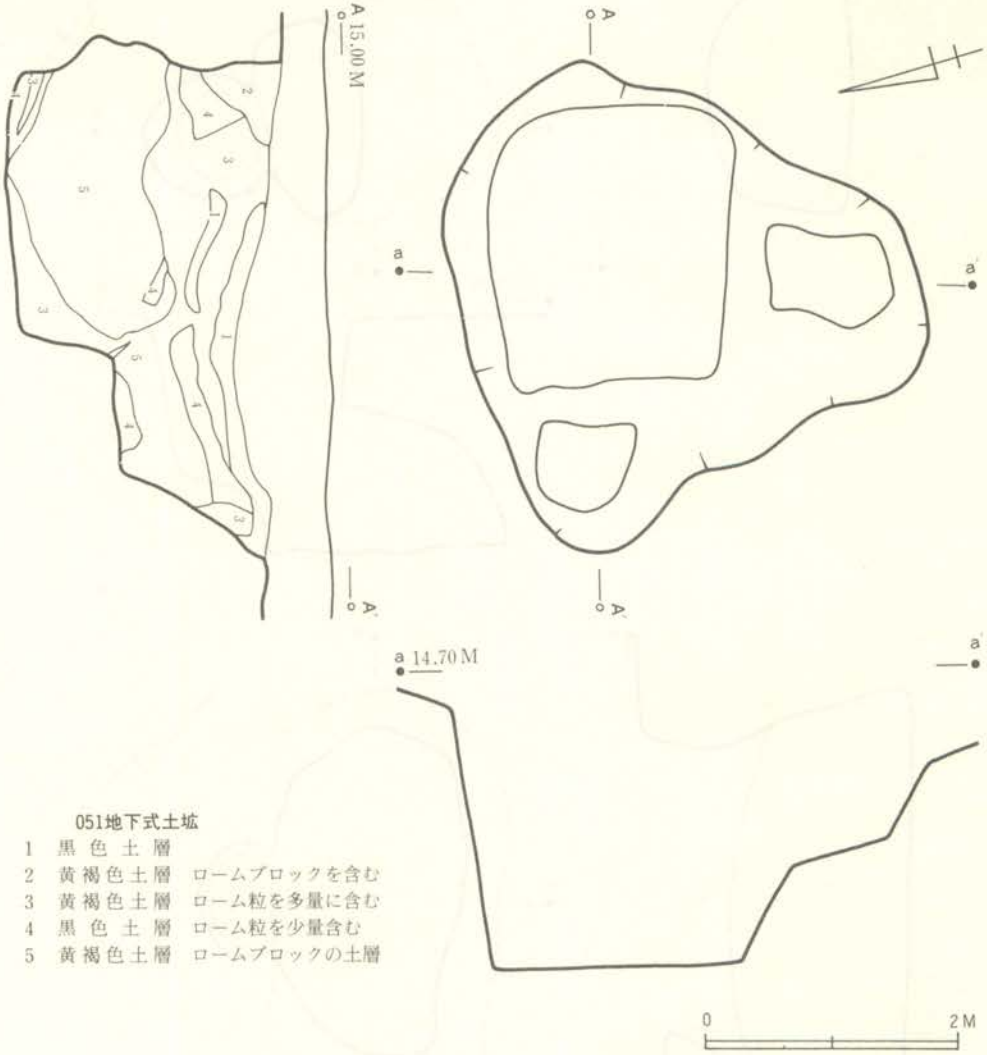
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（須恵器）	(13.0)	4.2	(7.3)	½	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切離し不明手ヘラ削り	砂粒・長石・雲母-多	良	灰白色		R
2	坏（須恵器）	13.8	3.6	8.7	⅓	体部内外-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り後回ヘラ削り	砂粒・雲母-少	良	灰白色		R
3	坏（須恵器）	(13.1)	3.4	(7.5)	⅓	体部内外-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り後回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	灰白色		R
4	甑？（須恵器）	(31.0)	〈12.0〉		¼	胴部外面-平行叩き 内面-ナデ	砂粒・雲母-少	良	青灰色		
5	甕（土師器）	(24.0)	〈17.5〉	胴径(24.6)	⅓	口縁部内外-ヨコナデ 胴部外面-細いヘラ削り 内面-ヘラナデ	砂粒・長石・雲母-多	良	橙褐色		
6	甕（土師器）	18.2	〈7.6〉		⅔	口縁部内外-ヨコナデ 胴部外面-タテ方向のヘラ削り 内面-ヘラナデ	砂粒-多	良	暗褐色		
7	甕（土師器）	21.8	〈7.0〉		½	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部外面-横方向のヘラ削り 内面-ヘラナデ	砂粒・雲母-少	良	暗褐色		
8	天目茶椀（陶器）	(11.4)	6.45	高台径4.2	⅓	体部下端-回ヘラ削り	砂粒 密	良	素地-白色	0045＋0453＋0668＋0780	釉は黒褐色をおびる
9	Ⅲ（灰釉）	(12.3)	2.5	(7.0)	⅓	高台は低く，断面三角を呈する	砂粒-少	良	素地-灰色	0652	釉は緑色をおびる
10	Ⅲ（灰釉）	(13.9)	〈2.3〉		高台を欠く	内面にトチン跡が残る	砂粒-少	良	素地-灰色	0165＋0607	釉は淡緑色をおびる
11	Ⅲ（灰釉）	14.3	3.6	高台径6.9	½	体部内外-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り 輪トチンの跡を残す	砂粒-多	良	素地-灰白色	0623	釉は乳白色をおびる 見込みに菊の印花文

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
12	Ⅲ（灰釉）	-	〈3.5〉	6.8	口縁を欠く	体部内外-ヨコナデ 底部-回ヘラ削り 輪トチン跡を残す	砂粒-多	良	素地-灰白色	0180+ 0657+ 0670+ 0672	見込みに菊の印花文



050地下式土坑
1 茶褐色土層
2 黄褐色土層 ローム粒を多量に含む
3 黄褐色土層 ロームブロックの土層
4 黒色土層 ローム粒を少量含む

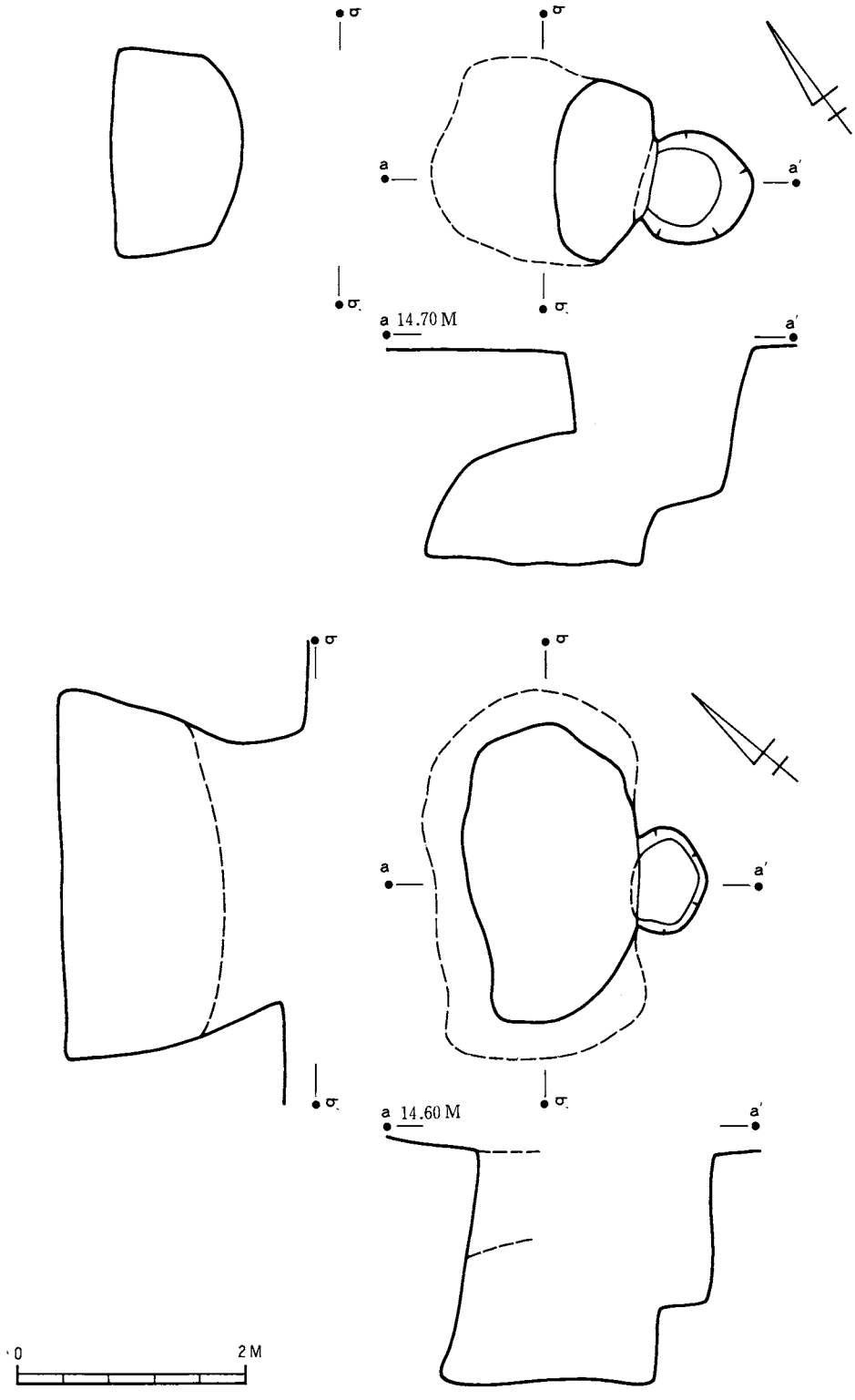
第173図 050 地下式土坑



051地下式土坑

1　黒 色 土 層
2　黄褐色土層　ロームブロックを含む
3　黄褐色土層　ローム粒を多量に含む
4　黒 色 土 層　ローム粒を少量含む
5　黄褐色土層　ロームブロックの土層

第174図　051 地下式土坑



第175図　060(上)・061 地下式土坑

050地下式土坑

形　状　竪坑部は深さ30～70cmとなり緩やかに傾斜する。横穴部床面は2.7×2.1mを測り長方形を呈する。天井部は崩落しているが，第3層がこの崩落した部分の堆積と考えられる。

051地下式土坑

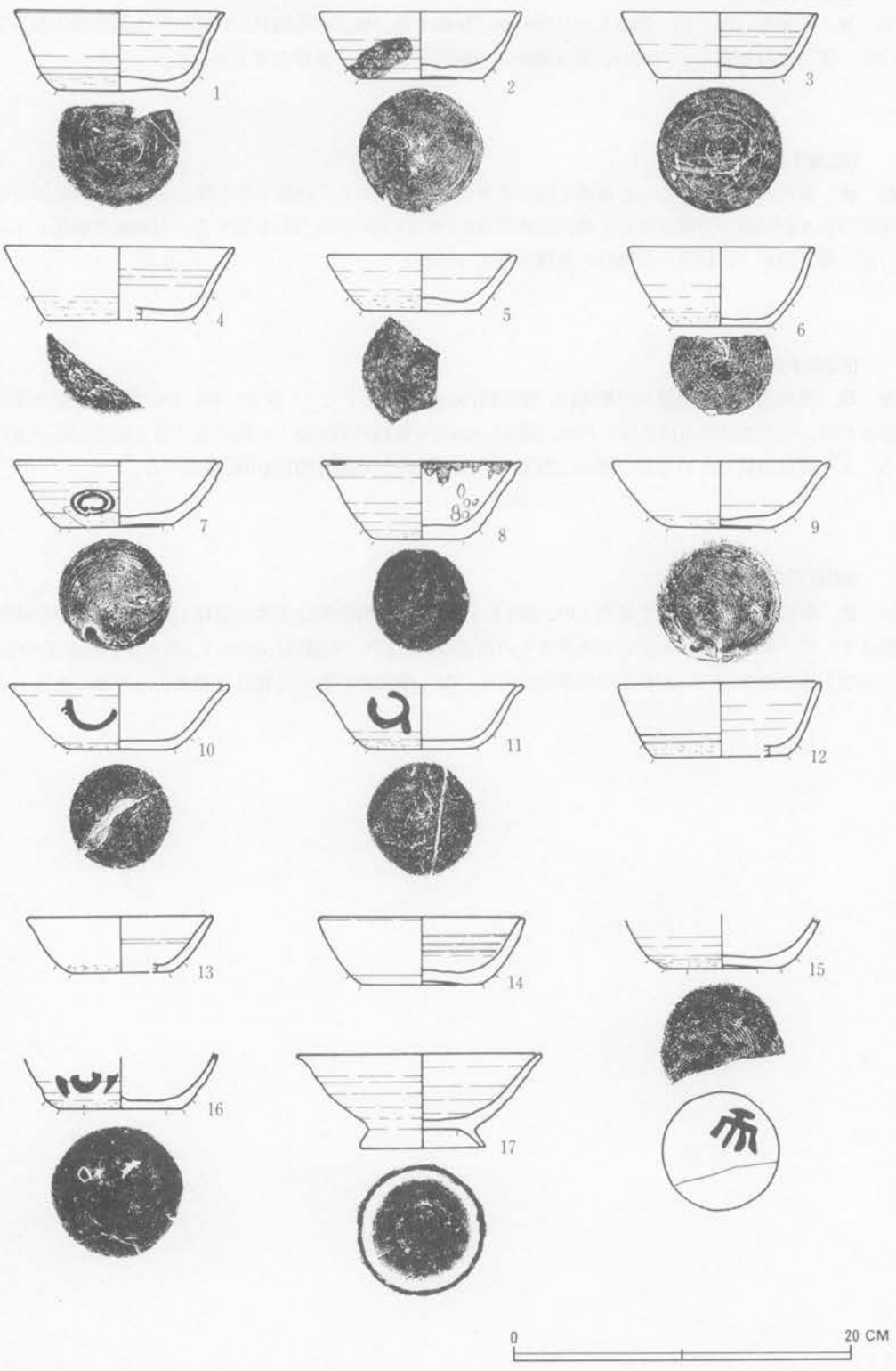
形　状　竪坑と考えられるものは西と南に2ヶ所ある。南のものは緩やかな傾斜をなす。西の竪坑は床面の長さ約90cmで方形となる。横穴部床面は2.1m×1.8mの長方形を呈する。天井部は崩落しているが，第5層がこの崩落した部分の堆積と考えられる。

060地下式土坑

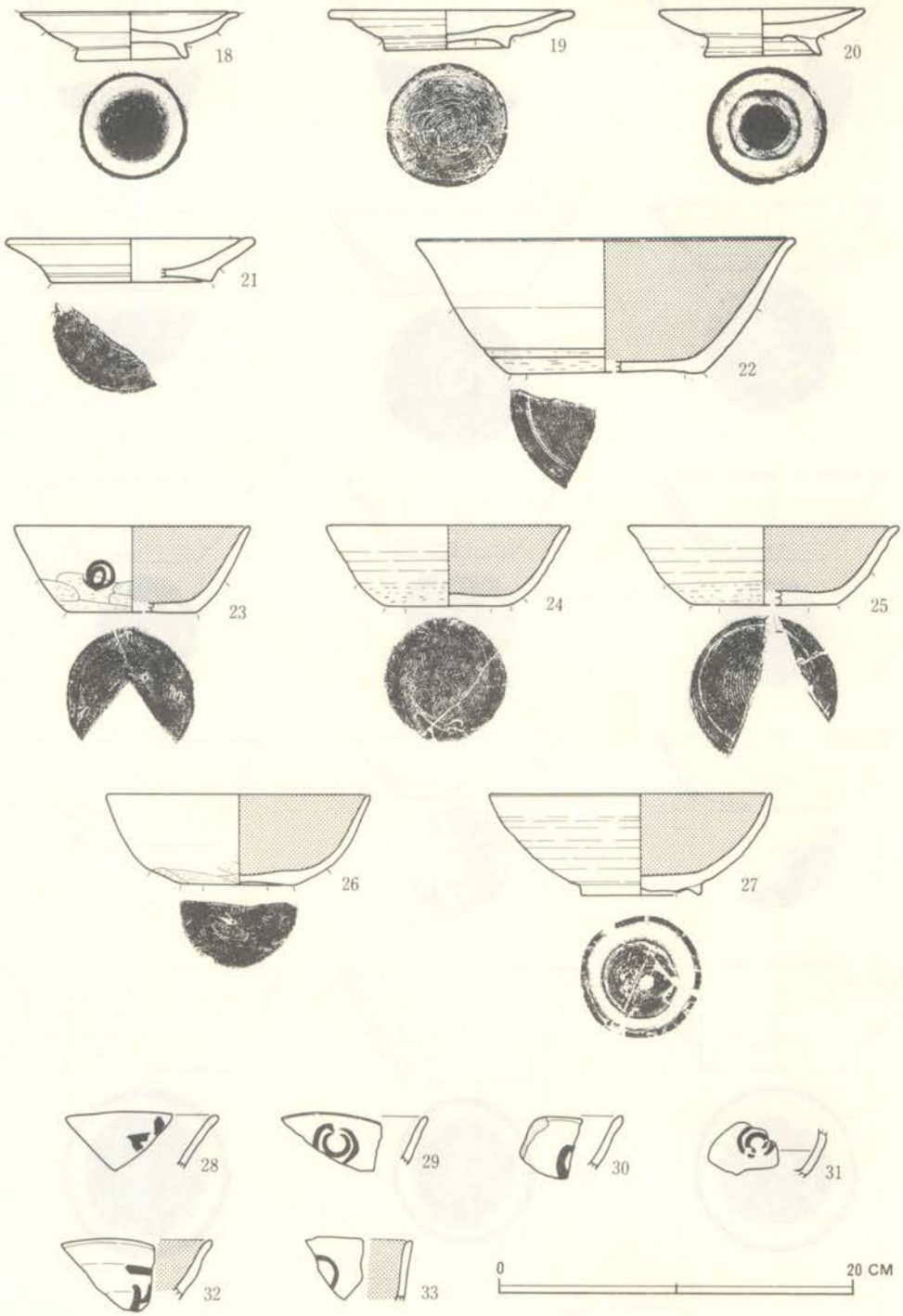
形　状　竪坑部の平面形は長径約90cm，短径約70cmの楕円形となる。深さは約1.3mでほぼ垂直に掘り込まれる。横穴部の床面は長径3.15m，短径1.8mの不整楕円形を呈し，他の地下式土坑と形態が異なる。天井部は崩落しているが，壁面に残る天井部の痕跡から高さ約1.4mを推定する。

060地下式土坑

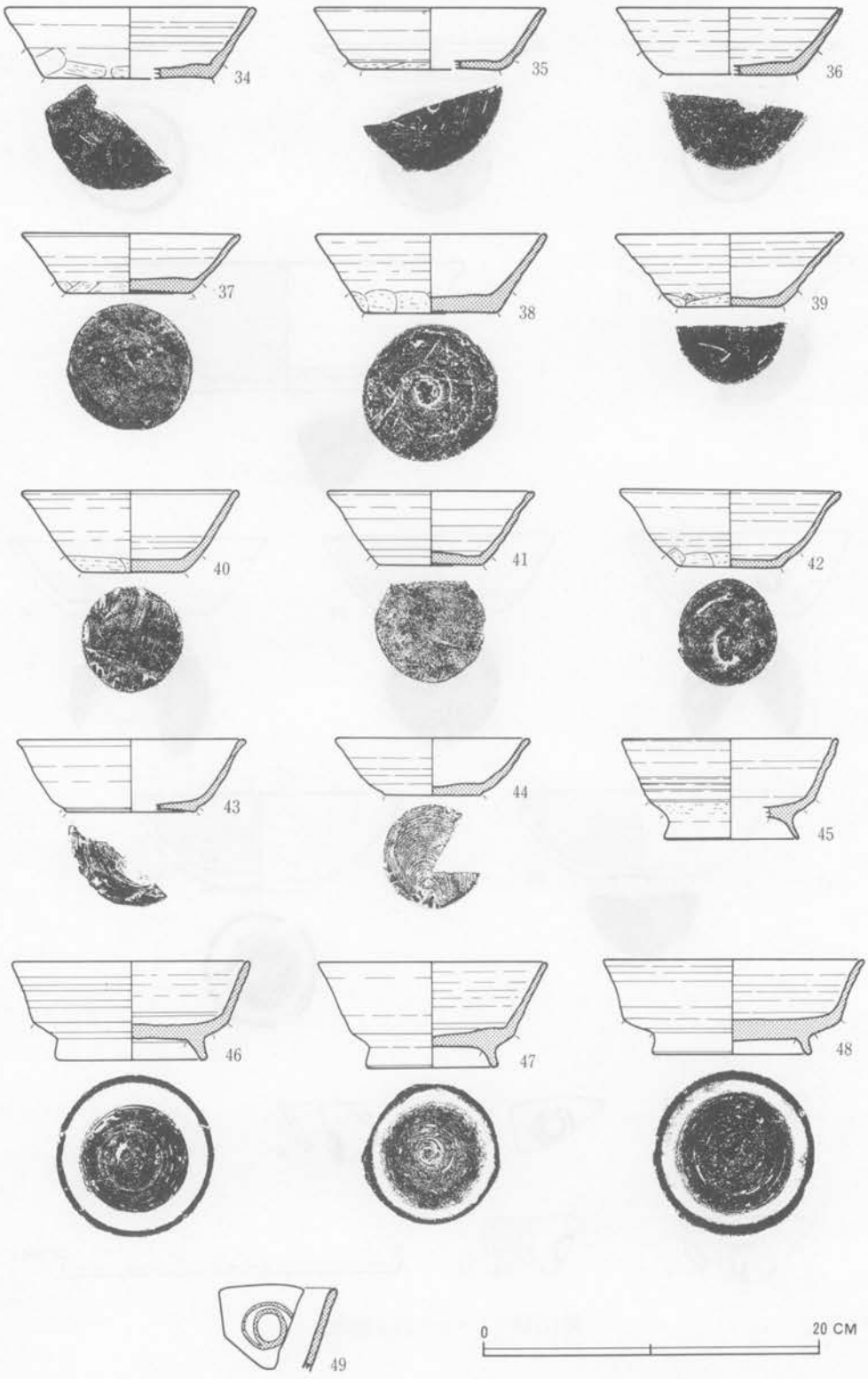
形　状　竪坑部は平面円形で径約1m，深さ1.3mとなる。横穴部は天井の遺存も比較的良好で断面形態はカマボコ状となる。床面から天井までの高さは約1.1m，床面は1.8m×1.7mの長方形を呈する。他の地下式土坑のように天井部の崩落がほとんどなく横穴部の覆土は軟質な黒褐色土の単一土層となる。



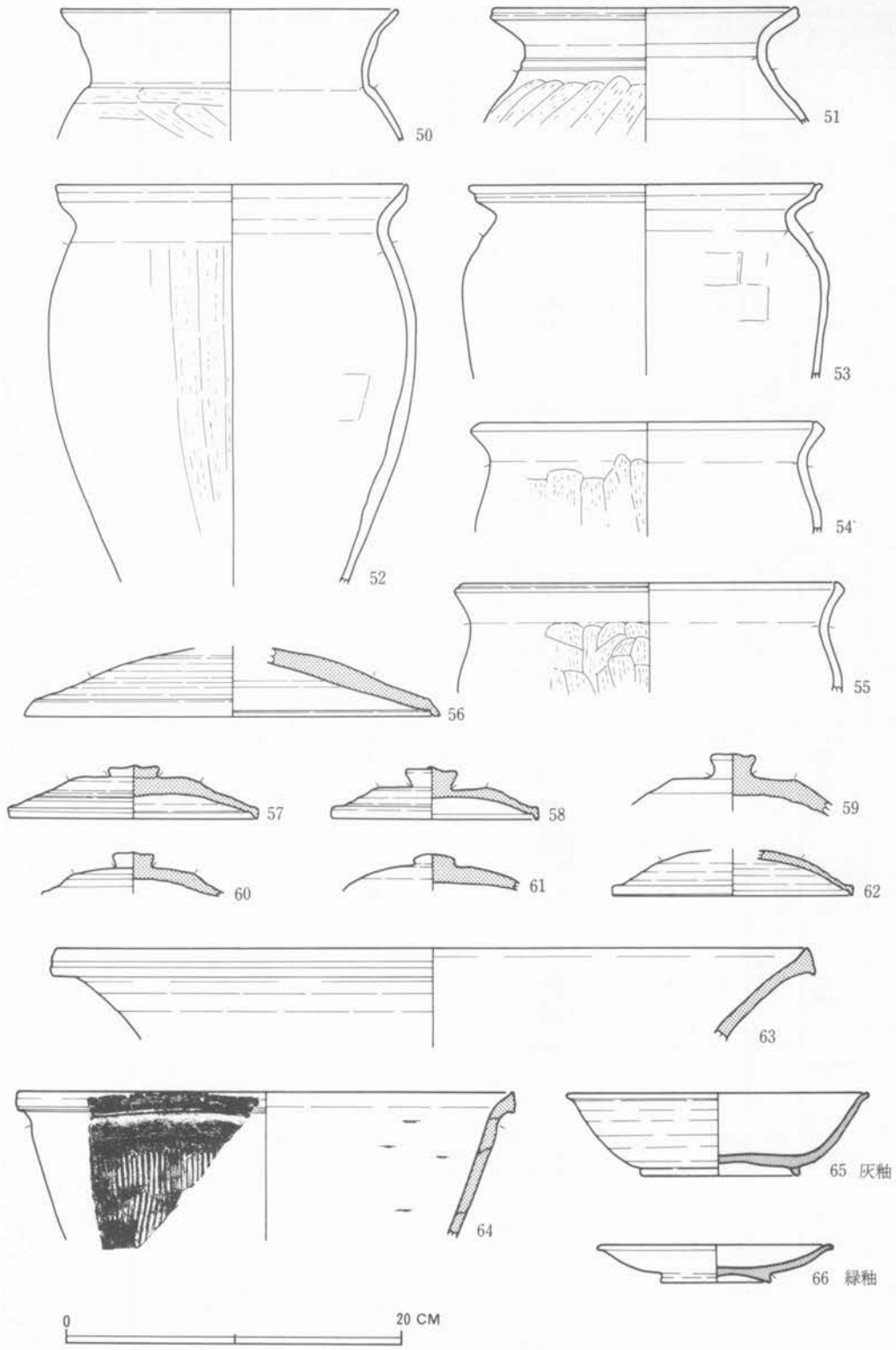
第176図　グリッド出土遺物(1)



第177図　グリッド出土遺物(2)



第178図　グリッド出土遺物(3)



第179図　グリッド出土遺物(4)

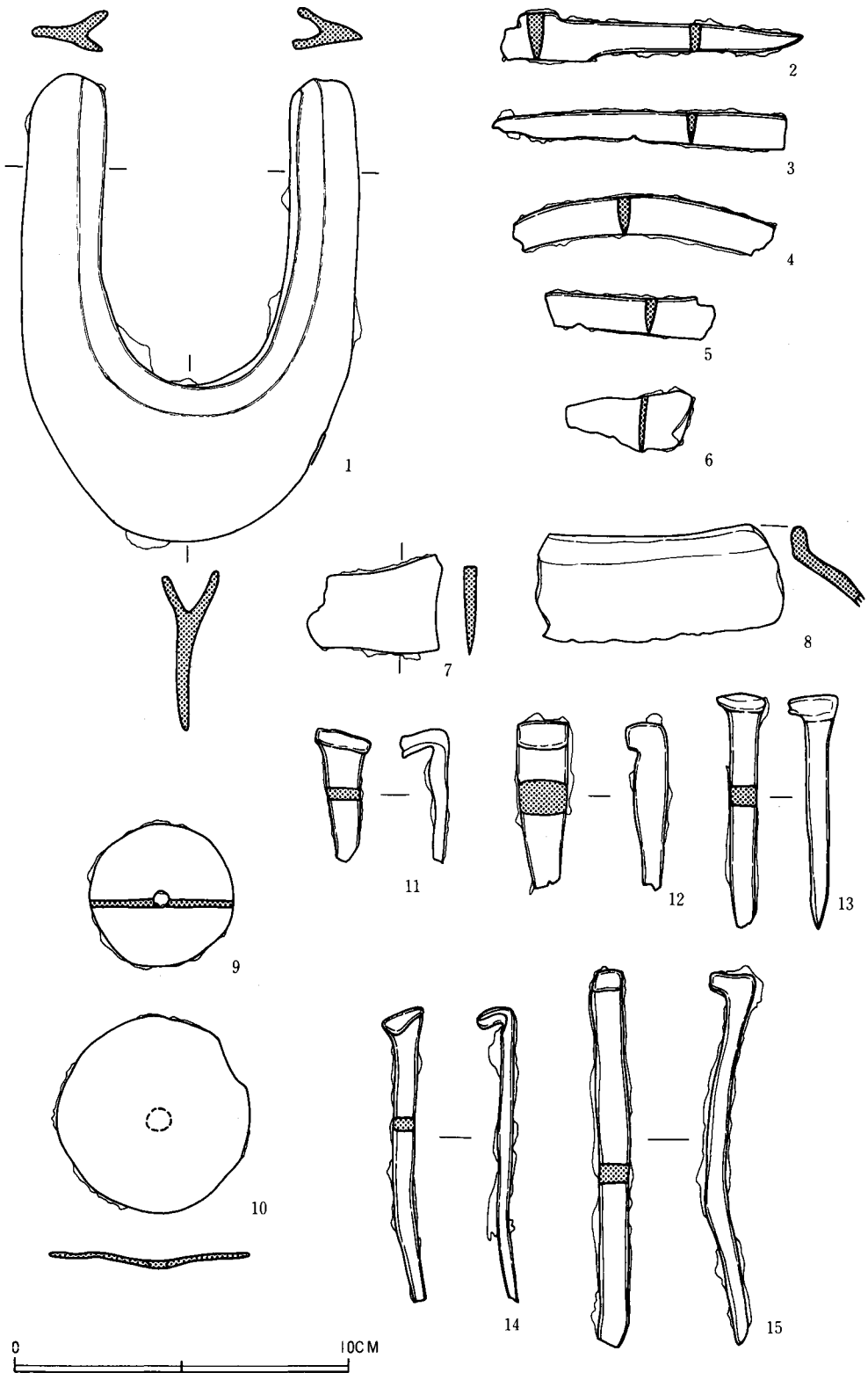
217-001グリッド出土遺物

捜図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	出土地点	備考
1	坏(土師器)	12.3	4.8	7.3	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	微砂粒-多	良	淡明褐色	1026	
2	坏(土師器)	12.1	4.0	7.4	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り	微砂粒・雲母-少	良	暗褐色	27G	体部～体部下端に油煙附着
3	坏(土師器)	11.8	3.9	7.4	3/5	体部内外面-ヨコナデ 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒-多	良	明褐色	15G	
4	坏(土師器)	(13.6)	4.3	(8.8)	底部1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り	砂粒	甘	赤褐色	16G	
5	坏(土師器)	(15.4)	3.3	(7.5)	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り	砂粒-少 雲母	良	乳褐色	16G	
6	坏(土師器)	11.0	4.6	6.0	底部1/5	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	白褐色	24G	R
7	坏(土師器)	12.1	3.9	6.6	口縁1/6を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒-多	良	淡黄褐色	24G	R 墨書
8	坏(土師器)	12.0	4.5	6.0	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り	砂粒	良	黄褐色	03G	口縁内外面に油煙附着 体部内面に剝離有り
9	坏(土師器)	13.0	4.9	6.0	1/5	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り	砂粒 雲母-少	良	褐色	03G	
10	坏(土師器)	13.0	3.8	6.0	1/5	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	褐色	16G	墨書 図版69-2
11	坏(土師器)	12.4	4.8	6.4	2/7	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 回ヘラ削り	砂粒 雲母-多	良	褐色	16G	墨書 図版69-1
12	坏(土師器)	12.0	4.3	8.0	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-不明	砂粒・雲母	良	褐色	17G	
13	坏(土師器)	(11.0)	3.3	(6.0)	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒	良	黄褐色	16G	
14	坏(土師器)	12.4	4.0	7.2	口縁1/6を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	甘	赤褐色	025	
15	坏(土師器)		〈2.9〉	(7.0)	底部1/2	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒	良	内-乳褐色 外-茶褐色	16G	墨書(底部)
16	坏(土師器)	(15.6)	〈3.0〉	7.4	底部のみ	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒	良	乳褐色	16G	墨書

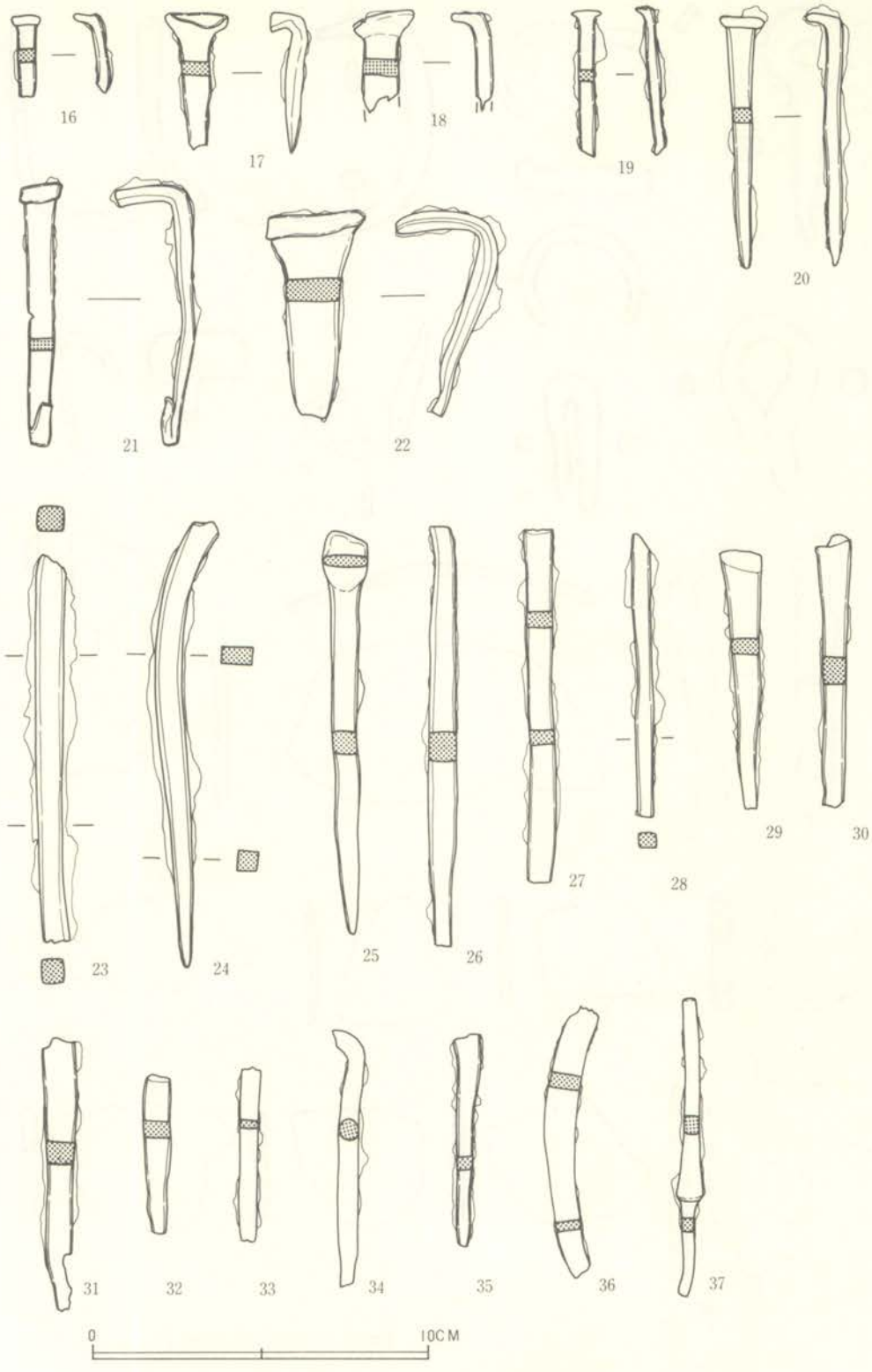
捜図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	出土地点	備考
17	高台付坏(土師器)	14.7	5.4	7.6	ほぼ完形	体部内外面～高台-ヨコナデ 底部-回糸切り	砂粒	良	褐色	16G	図版69-3
18	高台付皿(土師器)	12.4	2.7	台径 6.3	口縁¼を欠く	体部内面-ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台～底部-ヨコナデ	微砂粒-多	良	淡褐色	24G	
19	高台付皿(土師器)	14.0	2.2	7.2	½	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒 石英-少	良	乳褐色	16G	図版69-6
20	高台付皿(土師器)	11.6	3.6	6.6	¾	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面～高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明,回ヘラ削り	細砂粒	良	乳褐色	16G	図版69-5
21	皿(土師器)	13.7	2.4	9.1	¼	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 底部-回糸切り 回ヘラ削り	微砂粒-少	良	淡明褐色	8G	
22	鉢(土師器)	23.6	7.5	10.8	⅓	体部内面-ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒・雲母	良	褐色	24G	内黒
23	坏(土師器)	13.4	4.8	7.4	⅓	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒-多 雲母-少	良	黄褐色	16G	墨書,内黒
24	坏(土師器)	(14.0)	4.5	7.0	½	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒	良	黄褐色	16G	内黒
25	坏(土師器)	15.4	4.4	8.4	⅓	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	砂粒	良	黄褐色	16G	内黒
26	坏(土師器)	15.0	5.0	6.3	½	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回糸切り 外縁回ヘラ削り	微砂粒・雲母-少	良	赤褐色～暗褐色	16G	内黒
27	高台付坏(土師器)	(15.7)	5.7	6.8	½	体部内面-ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面～高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明 手ヘラ削り後回ヘラ削り	砂粒-少	良	褐色	16G	内黒 図版69-4
28	坏(土師器)				口縁部破片		砂粒	良	乳褐色	23G	墨書
29	坏(土師器)		〈2.6〉		口縁部破片		微砂粒-多 雲母-少	良	淡明褐色	118	墨書
30	坏(土師器)		〈3.0〉		口縁部破片		微砂粒-少	良	赤褐色	007	墨書
31	坏(土師器)				破片	体部内外面-ヨコナデ	砂粒	良	乳褐色	G24 024	墨書
32	坏(土師器)		〈3.4〉		口縁部破片	体部内面-ヘラミガキ 体部外面-ヨコナデ	微砂粒-少	良	明褐色	106	墨書 内黒

捜図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	出土地点	備考
33	坏(土師器)				口縁部破片	体部内外面-ヨコナデ	砂粒 雲母-少	良	褐色	8G	墨書「卩」か 内黒
34	坏(須恵器)	15.0	4.3	10.0	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 不定方向の手ヘラ削り	砂粒・雲母	良	白青灰色	17G	
35	坏(須恵器)	14.0	3.7	8.2	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 不定方向の手ヘラ削り	砂粒 雲母-多	良	内-灰白色 外-灰色	026	
36	坏(須恵器)	(13.4)	4.0	8.0	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明	砂粒・雲母	良	灰色	19G	
37	坏(須恵器)	13.4	3.5	7.4	1/6	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 一定方向の手ヘラ削り	砂粒-少	良	青灰色	23G	体部内外面に火襷痕 図版69-7
38	坏(須恵器)	(13.9)	4.7	8.0	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 手ヘラ削り	砂粒 雲母-多	良	灰色	15G	火襷痕
39	坏(須恵器)	(13.6)	4.4	(6.4)	1/3	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 手ヘラ削り	砂粒・雲母	良	青灰色	16G	
40	坏(須恵器)	13.0	4.8	6.0	ほぼ完形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-切り離し不明 一定方向の手ヘラ削り	砂粒-多 石英・長石-少	良	灰色	16G	
41	坏(須恵器)	12.2	4.4	6.3	体部1/6を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 回ヘラ削り	砂粒・雲母・石英-多	良	灰色	27G	
42	坏(須恵器)	(13.2)	4.5	6.0	口縁の大半を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-手ヘラ削り 底部-回ヘラ切り 回ヘラ削り	砂粒-多 雲母・石英	良	灰色	16G	
43	坏(須恵器)	(13.2)	(4.3)	(8.0)	1/6	体部内外面-ヨコナデ 底部-一度回糸切り失敗し,再度回糸切り。そのため底部は極めて薄い	砂粒-多 石英-少	良	暗灰色		
44	坏(須恵器)	11.8	3.4	6.0	1/6	体部内外面-ヨコナデ 底部-回糸切り	砂粒-多	良	青灰色	15G	
45	高台付坏(須恵器)	13.0	5.9	8.0	1/4	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ	砂粒・石英	良	灰白色	16G	
46	高台付坏(須恵器)	14.2	4.8	9.0	体部1/2を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明,回ヘラ削り	砂-多 (大きめの砂)	良	青灰色	8G	
47	高台付坏(須恵器)	13.6	6.2	8.0	1/6	体部内外面-ヨコナデ 高台-ヨコナデ 底部-回ヘラ切り,回ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	内-灰色 外-黒色	17G	
48	高台付坏(須恵器)	15.6	5.6	9.4	体部3/4を欠く	体部内外面-ヨコナデ 体部下端-回ヘラ削り 高台-ヨコナデ 底部-切り離し不明 回ヘラ削り	砂粒 雲母-多	良	白青灰色	24G	
49	坏(須恵器)				口縁部破片	体部内外面-ヨコナデ	砂粒-多	良	青灰色	21G	朱書

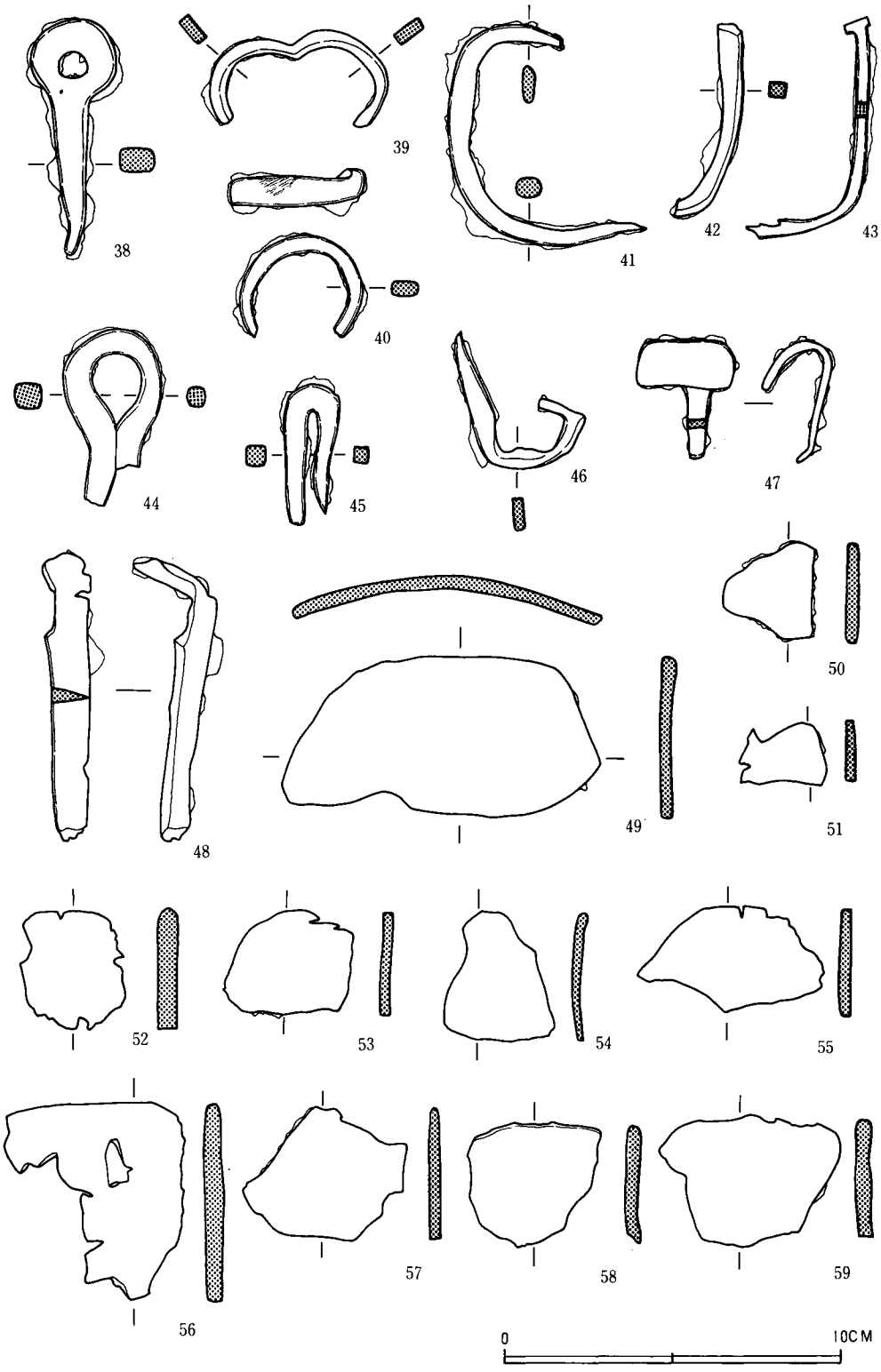
挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	出土地点	備考
50	甕(土師器)	20.0	〈7.8〉		1/3	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-手ヘラ削り	微砂粒-多 雲母-少	良	暗赤褐色	24G	
51	甕(土師器)	(18.0)	〈6.5〉		口縁のみ 1/8	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヨコナデ 胴部外面-手ヘラ削り	砂粒 雲母-少	良	暗褐色	16G	
52	甕(土師器)	21.0	〈23.5〉	胴径 22.0	1/4	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-縦方向のヘラ削り	砂粒 密	良	暗褐色	007	
53	甕(土師器)	21.0	〈11.5〉	胴径 22.0	1/4	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-手ヘラ削り	砂粒・雲母-多	良	暗褐色	007	
54	甕(土師器)	(20.0)	〈6.5〉		口縁のみ 1/6	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヨコナデ 胴部外面-手ヘラ削り	砂粒 雲母-極少	良	褐色	16G	
55	甕(土師器)	(22.6)	〈6.5〉		口縁のみ 1/8	口縁部内外面-ヨコナデ 胴部内面-ヨコナデ 胴部外面-手ヘラ削り	砂粒・雲母	良	褐色	16G	
56	蓋(須恵器)	25.0	〈4.0〉		1/6	内面～口縁部-ヨコナデ	砂粒	良	青灰色	8G	
57	蓋(須恵器)	14.8	3.1		1/3	つまみ-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り 内面～口縁部-ヨコナデ	砂粒	良	青灰色	23G	
58	蓋(須恵器)	12.4	3.1		完形	つまみ-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り 内面～口縁部-ヨコナデ	砂粒-多 石英	良	暗灰色	16G	
59	蓋(須恵器)	つまみ径 2.6	〈3.2〉 つまみ高 1.4		2/3	つまみ-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り	砂粒・雲母・長石・石英-多	やや甘	灰色		
60	蓋(須恵器)	つまみ径 2.4	〈2.4〉 つまみ高 0.9		1/6	つまみ-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り 内外面-ヨコナデ	微砂粒・雲母-多	やや甘	灰白色	8G	
61	蓋(須恵器)		〈2.0〉		1/3	外面-ヨコナデ 内面-ヨコナデ後ヘラ削り	砂粒・石英	良	灰色	16G	
62	蓋(須恵器)	14.6	2.7		1/7	内外面-ヨコナデ 天井部-回ヘラ削り	砂粒 雲母-多	良	灰色	16G	
63	甕(須恵器)	(45.0)			1/12	口縁部内外面-ヨコナデ	砂粒	良	灰白色	16G	
64	甕(須恵器)	30.0	〈8.5〉		口縁のみ 1/12	胴部内面～口縁部-ヨコナデ 胴部外面-叩き目	砂粒 雲母-多	良	茶青灰色	3G	
65	椀(灰釉)	18.0	4.9	9.3	口縁～体部の1/10を欠く	体部内外面-ヨコナデ(比較的強めのヨコナデか) 底部-ナデ・ヨコナデに先立ちヘラ削り	細砂粒 石英-少	良	地-灰白色 釉-灰緑色	9G	灰釉内面のみ刷毛ぬり 黒笹14号窯
66	台付皿(緑釉)	13.9	2.2	6.6	体部7/8を欠く	体部内外面-ミガキ 削り出し高台	微細砂粒-少 密	良	地-白色 釉-淡黄緑色	025	



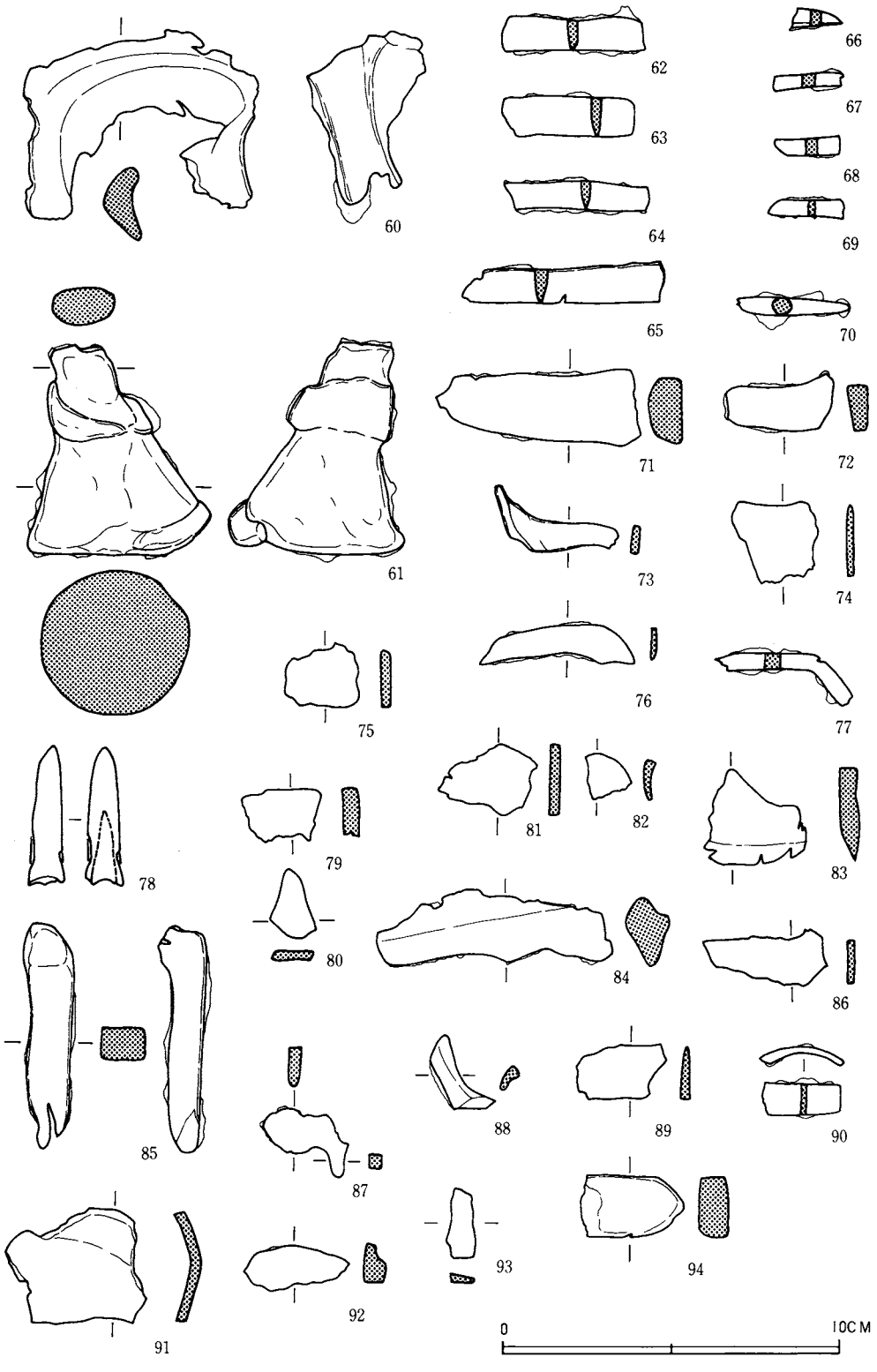
第180図　グリッド出土遺物(5)



第181図　グリッド出土遺物(6)



第182図　グリッド出土遺物(7)



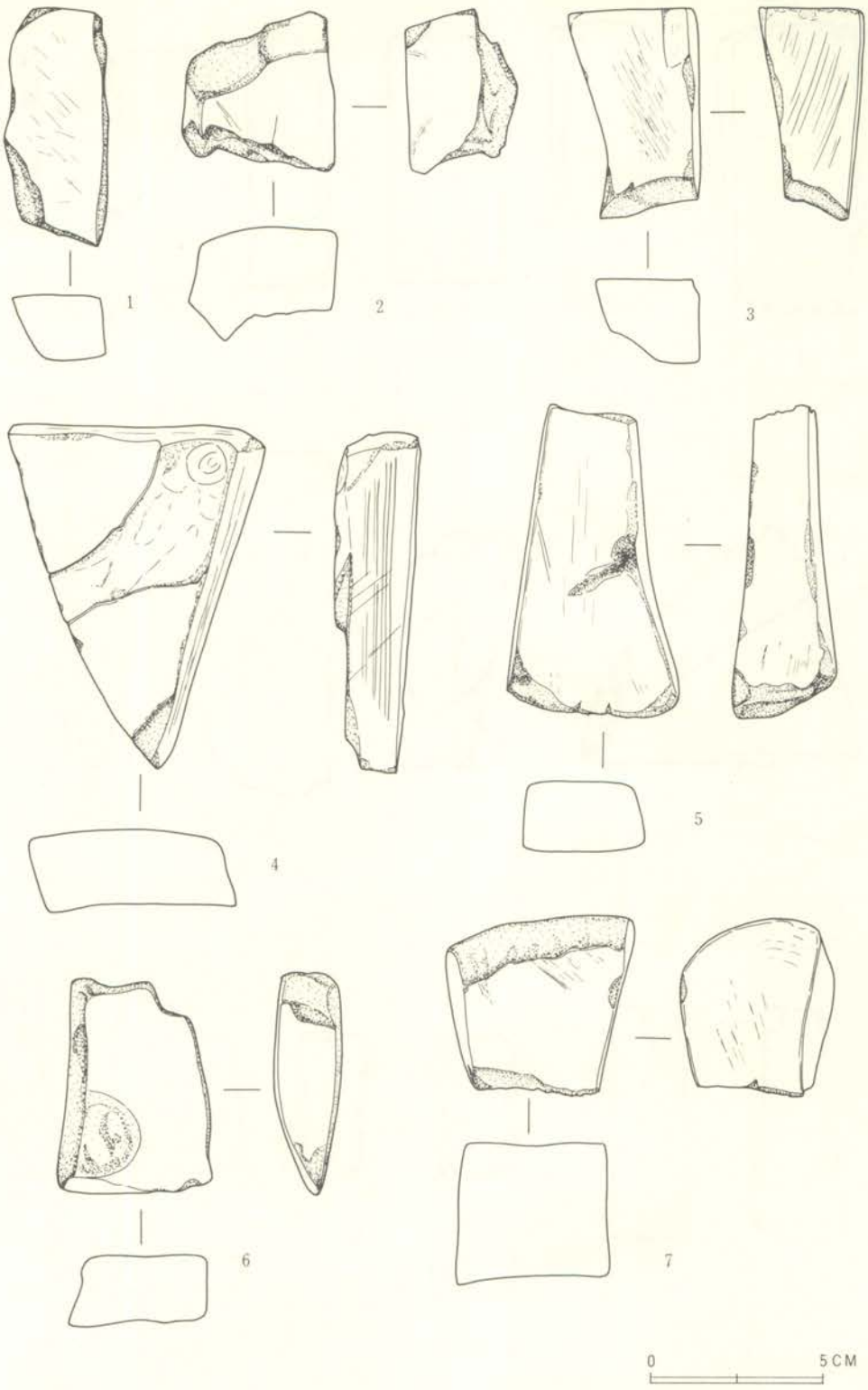
第183図　グリッド出土遺物(8)

グリッド出土鉄製品

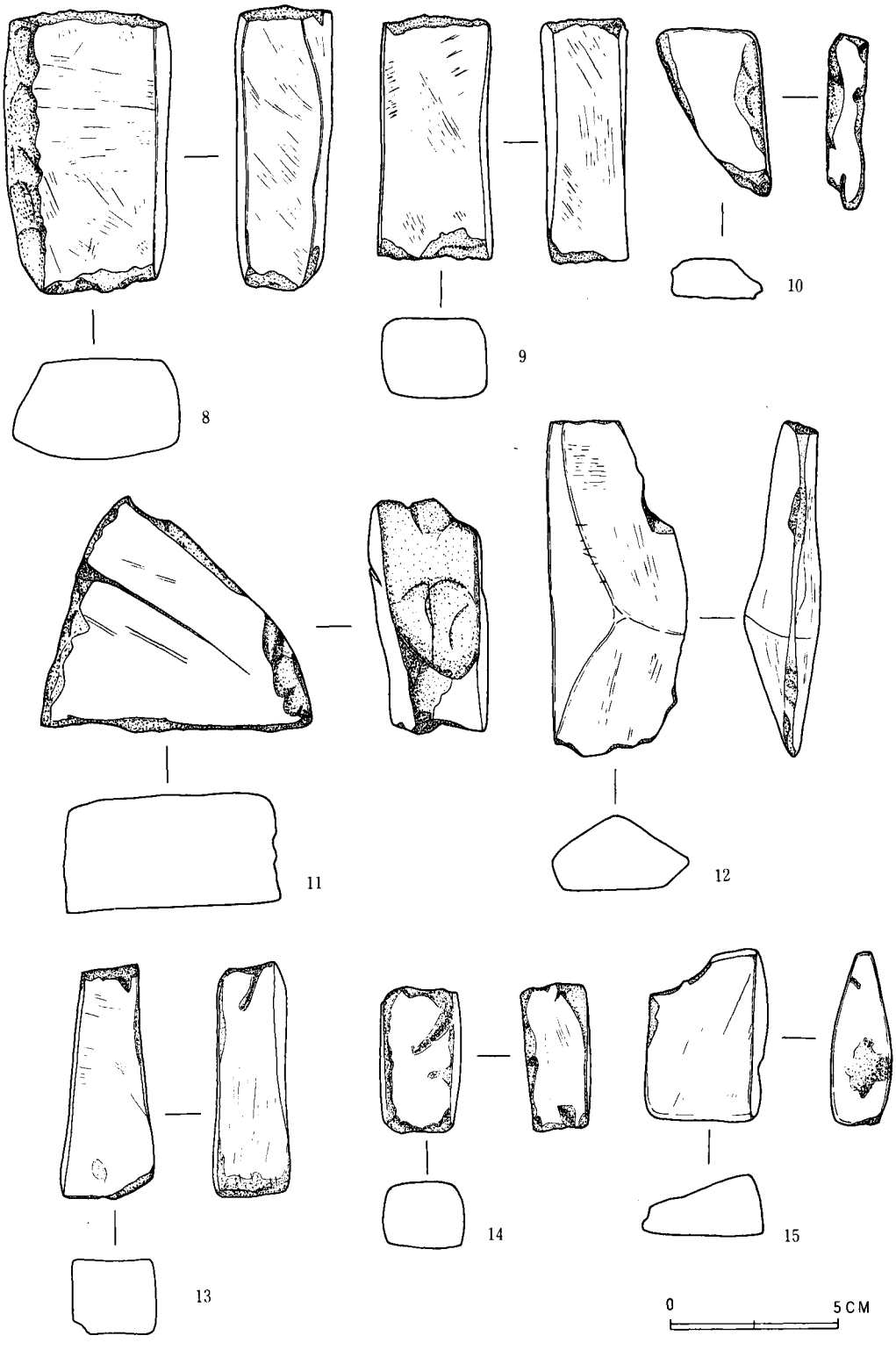
挿図番号	製品名	現存計測数値(cm)(g)				出土地点	備考
		長	巾	厚	重量(g)		
180図—1	鋤鍬先	13.8	10.0	0.4	169	16G	
2	刀子	身 9.1 茎 7.3	身 1.4 茎 0.8	身 0.55 茎 0.4	14	16G	
3	刀子?	8.8	0.95	0.35	10	1064	
4	不明	7.9	1.1	0.35	11	17G	
5	刀子	5.2	1.15	0.4	7	23G	
6	刀子?	3.9	1.7	0.2	5	17G	
7	鎌?	4.0	2.6	0.4	11	17G	
8	鉄鍋			0.4	49	11G	
9	紡錘車	紡輪径 4.3	孔径 0.5	厚 0.2	16	005	
10	紡錘車	紡輪径 6.0	孔径 0.65	厚 0.2	27	24G	
11	不明	4.0	1.0	0.4	7	17G	
12	不明	5.3	1.5	1.05	20	17G	
13	釘	7.0	0.75	0.6	24	15G	図版69—9
14	釘?	8.8	0.65	0.4	12	21G	
15	釘?	11.0	1.0	0.55	28	27G	
181図—16	釘	2.5	0.6	0.4	2		
17	不明	4.2	0.9	0.5	6	17G	
18	釘?	3.0	1.1	0.5	6		
19	釘?	4.5	0.5	0.4	3	006	
20	釘	7.8	0.6	0.5	11	08G	
21	釘?	8.0	0.8	0.4	16		
22	不明	6.2	1.7	0.7	33		
23	棒状製品	11.5	0.75～0.9	0.75	37	15G	
24	棒状製品	13.2	0.6～1.0	0.5～0.6	36	1048	
25	棒状製品	身11.9 茎10.1	身 1.3 茎 0.7	身 0.35 茎 0.7	26	23G	図版69—10
26	棒状製品	12.4	0.9	0.9	29	16G	
27	棒状製品	10.5	0.8	0.5	18	08G	
28	棒状製品	8.4	0.55	0.5	11	14G	
29	棒状製品	7.5	0.85	0.5	13	17G	
30	棒状製品	8.0	0.75	0.8	22	24G	
31	棒状製品	8.0	0.85	0.7	15	17G	
32	棒状製品	4.7	0.8	0.5	6	09G	
33	棒状製品	5.0	0.55	0.25	3	17G	
34	不明	7.7	0.6	0.6	9	03G	
35	棒状製品	6.3	0.5	0.45	5	16G	
36	不明	8.0	0.75～0.9	0.3～0.45	10	10G	

挿図番号	製品名	現存計測数値(cm)(g)				出土地点	備考
		長	巾	厚	重量(g)		
37	棒状製品	身 8.9 茎 2.8	身 0.5 茎 0.4	身 0.5 茎 0.4	9	19G	
182図—38	不明	全長 7.0 円形部径 2.6	巾0.85 孔径0.9	0.7	24	1024	
39	不明	5.4	0.9	0.35	12		
40	不明	4.0	0.9	0.5	9		木質部遺存
41	不明	7.8	0.6～1.1	0.35～0.7	24	08G	70と接合
42	不明	5.8	0.55	0.5	8	08G	
43	不明	6.75	0.45	0.5	6		
44	不明	5.2	0.6～0.9	0.6～0.75	18		
45	不明	4.0	0.5～0.6	0.5～0.6	8	23G	
46	不明	4.0	0.95	0.3	10	17G	
47	不明	3.7	0.6(2.9)	0.2(0.3)	11	17G	
48	不明	8.4	0.9	0.4		08G	
49	板状製品	9.5	4.7	0.5	74	17G	図版69— 8
50	板状製品	2.85	3.0	0.3	9	17G	
51	板状製品	2.6	1.9	0.3	3		
52	板状製品	3.1	3.5	0.6	16	052	
53	板状製品	3.9	3.0	0.3	8	17G	
54	板状製品	3.4	3.75	0.3	8	09G	
55	板状製品	5.5	2.9	0.35	13	17G	
56	板状製品	5.4	5.7	0.6	37	23G	
57	板状製品	4.9	3.7	0.4	13		
58	板状製品	4.0	3.6	0.45	22	18G	
59	板状製品	5.4	3.7	0.45	24	17G	
183図—60	不明	7.1	2.3	0.9	65	16G	
61	不明	6.3	小径1.1×1.9	大径 4.5	327	23G	
62	棒状製品	4.3	0.95	0.3	4	17G	
63	棒状製品	4.0	1.1	0.3	5	17G	
64	棒状製品	4.3	0.8	0.3	4	17G	
65	棒状製品	6.0	1.15	0.4	7	23G	
66	棒状製品	1.4	0.5	0.4	1		
67	棒状製品	1.9	0.5	0.4	1		
68	棒状製品	2.1	0.5	0.4	1		
69	棒状製品	2.3	0.5	0.25	1	17G	
70	棒状製品	3.3	0.55	0.55		08G	41と接合
71	不明	6.1	1.9	1.0	37	11G	
72	不明	3.3	1.4	0.5	10	018	

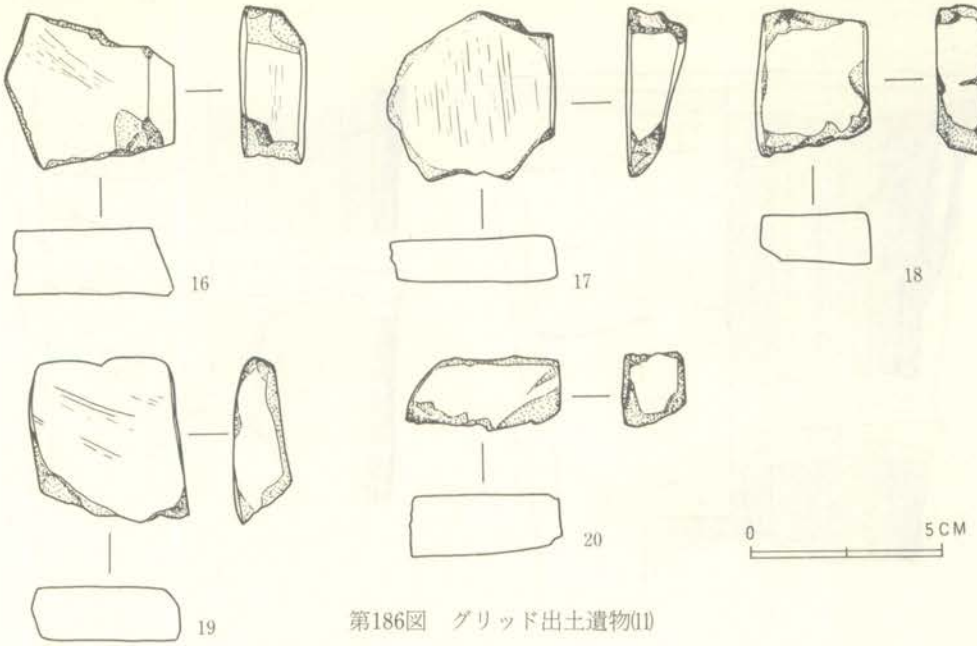
挿図番号	製品名	現存計測数値(cm)(g)				出土地点	備考
		長	巾	厚	重量(g)		
73	不明	3.8	0.85	0.25	5	17G	
74	不明	2.6	2.4	0.2	4	17G	
75	不明	2.3	1.65	0.35	5	17G	
76	不明	4.6	1.2	0.2	3	17G	
77	不明	4.2	0.5	0.5	4		
78	不明	4.1	0.85		5	052	
79	不明	2.5	1.4	0.5	6	17G	
80	不明	2.0	1.4	0.2	2	17G	
81	不明	3.0	2.2	0.35	5	17G	
82	不明	1.4	1.3	0.3	1	17G	
83	不明	3.0	2.7	0.5	11		
84	不明	6.65	1.35	1.0	28	052	
85	不明	7.1	2.0	1.35	41		
86	不明	3.7	1.4	0.25	4	23G	
87	不明	2.6	1.2	0.4	4	17G	
88	不明	2.2	0.8	0.3	2		
89	不明	2.7	1.6	0.3	3	21G	
90	不明	2.5	1.0	0.2	1	18G	
91	板状製品	4.2	3.3	0.45	18		
92	不明	3.1	1.2	0.7	8	11G	
93	不明	2.0	0.65	0.3	1	15G	
94	不明	3.1	1.75	0.9	19	08G	



第184図　グリッド出土遺物(9)



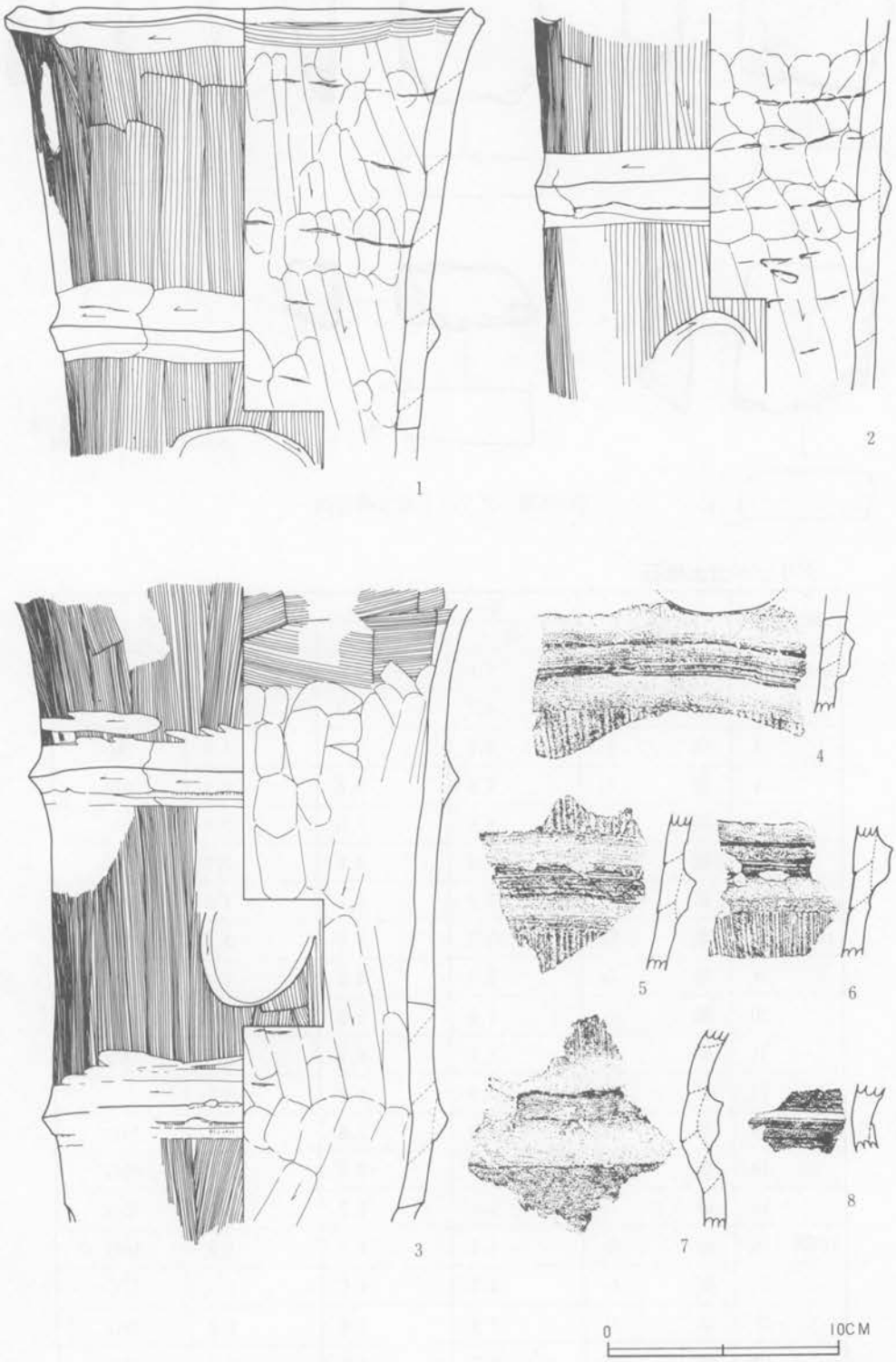
第185図　グリッド出土遺物(10)



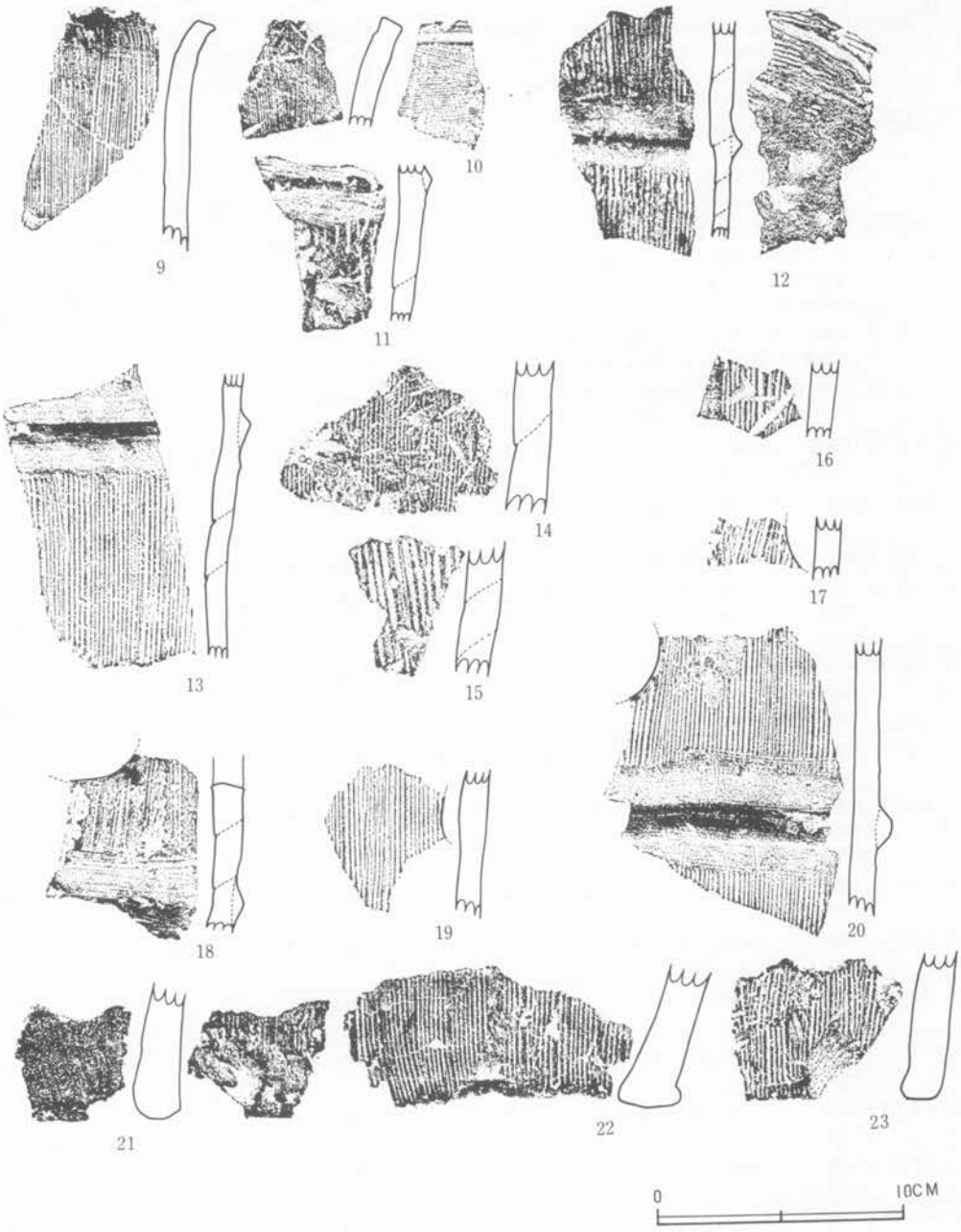
第186図　グリッド出土遺物(11)

グリッド出土砥石

挿図番号	製品名	法量 (cm)			出土地点
		長	巾	厚	
184図－1	砥石	7.0	3.1	1.9	16G
2	砥石	4.7	4.3	3.1	
3	砥石	6.2	3.7	3.0	19G
4	砥石	9.9	5.8	2.2	018
5	砥石	8.9	5.0	3.0	
6	砥石	6.3	4.0	2.0	16G
7	砥石	5.2	5.2	4.0	16G
185図－8	砥石	13.5	5.0	3.0	10G
9	砥石	7.3	3.3	2.4	27G
10	砥石	5.0	3.0	1.2	17G
11	砥石	7.1	8.1	3.5	14G
12	砥石	10.0	4.1	2.2	
13	砥石	7.0	2.6	2.1	14G
14	砥石	4.2	2.4	2.1	07G
15	砥石	5.0	3.2	2.0	15G
186図－16	砥石	4.1	4.3	1.8	16G
17	砥石	4.3	4.5	1.5	17G
18	砥石	2.9	2.9	1.4	19G
19	砥石	4.3	4.0	1.5	27G
20	砥石	1.9	4.0	1.6	16G



第187図　埴　輪 (1)



第188図　埴　輪 (2)

出土埴輪一覧表

挿図番号	器種	観察	胎土	焼成	色調	出土地点	備考
1	普通円筒	口径 21.0 cm, 第3凸帯径 17.0 cm。左回りの正立巻上げ。外面縦ハケ, 口縁附近のみ横ハケ, 口縁附近は最後にナデ。凸帯は断面台形と三角形が入り混じる。ハケ目単位24本/3 cm	酸化鉄粒, 長石スコリア-少	良	橙褐色	019	透孔は横長の楕円形かと思われる。粘土紐巾 3 cm
2	普通円筒	第2凸帯径 15.6 cm。右回り正立巻上げ, 外面縦ハケ, 内面縦方向のナデ。ハケ目単位15本/2.9 cm 凸帯は断面三角形。	雲母, 酸化鉄粒, スコリア-多	良	乳橙色	033	粘土紐巾 2.3 cm, 図版58-7二次加熱を受ける 透孔は縦長の楕円形
3	普通円筒	第2凸帯径 17.8 cm, 第3凸帯径 18.8 cm, 第2, 3凸帯間 14.2 cm。左回りの正立巻上げ, 口縁内面附近横ハケ, それ以下はナデ。外面縦ハケ。凸帯は断面三角形, ハケ目単位24本/3 cm	スコリア, 雲母を含む	良	橙褐色	019	透孔は縦長の楕円形 図版58-6
4	普通円筒	凸帯径 21.0 cm, 外面縦ハケ, 内面斜ハケ後ナデ。凸帯横方向のナデ。ハケ目単位12本/3.2cm	長石, スコリア-多	良	乳橙色	15G	粘土紐巾 1.0cm 透孔あり。
5	普通円筒	凸帯径 21.0 cm。内面ナデ, 外面縦ハケ凸帯横方向のナデ, ハケ目単位15本/3.2cm	長石, 酸化鉄粒	良	乳橙色	14G	粘土紐巾 2.0 cm
6	普通円筒	外面縦ハケ, 内面縦ナデ, 凸帯横方向のナデ。ハケ目単位16本/2.0 cm	酸化鉄粒, スコリア, 長石-多	良	橙褐色	040	粘土紐巾 1.5 cm
7	朝顔形円筒	頸径 21.0 cm。外面縦ハケ, 内面ナデ, ハケ目単位21本/2.1 cm	酸化鉄粒, スコリア, 長石-多	良	褐色	010	粘土紐巾 2.0 cm
8	朝顔形円筒	頸径 17.0 cm, 内外面凸帯, ナデ	酸化鉄粒, スコリア	良	乳褐色	14G	
9	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位11本/1.3 cm 口縁附近内面横ハケ, ハケ目単位13本/1.8 cm それ以下はナデ	酸化鉄粒, スコリア長石-多	良	橙褐色	019	
10	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位14本/1.7 cm 内面横ハケ, ハケ目単位14本/1.6 cm 口縁部横方向のナデ	酸化鉄粒-多	良	乳褐色	14G	
11	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位9本/1.6cm 内面, 凸帯ナデ。	酸化鉄粒, 長石-多	良	乳褐色	001	
12	普通円筒	凸帯より上の内面, ハケ, それ以下ナデ。外面ハケ目, ハケ目単位8本/2.1 cm 凸帯横方向のナデ	スコリア, 酸化鉄粒-多	良	乳褐色	24G	
13	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位14本/2.6 cm 内面縦ナデ, 凸帯横方向のナデ	雲母, 酸化鉄粒, 長石, スコリア-多	良	乳褐色	019	
14	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位12本/2.1cm 内面ナデ	スコリア, 酸化鉄粒	良	乳褐色	15G	円筒の基部に近い破片か
15	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位12本/4.2 cm 内面縦ナデ	酸化鉄粒, スコリア-多	良	橙褐色	15G	
16	普通円筒	外面縦ナデ, ハケ目単位10本/2.8 cm 内面縦ナデ	酸化鉄粒, スコリア, 長石-多	良	乳橙色	18G	外面のキズはヘラ記号か
17	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位10本/1.5 cm 内面縦ナデ。	酸化鉄粒, スコリア-多	良	橙褐色	020	透孔(円形)あり
18	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位10本/1.8 cm 内面縦ナデ	長石, 石英, スコリア	良	乳橙色	040	透孔(円形)あり
19	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位15本/1.4cm 内面凸帯ナデ。	酸化鉄粒, 長石-多	良	乳橙色	040	透孔(円形)あり 粘土紐巾 2.2 cm
20	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位20本/4.2 cm 内面縦ナデ, 凸帯横方向のナデ	酸化鉄粒, 石英, スコリア-多	良	橙褐色	040	透孔(円形)あり
21	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位摩耗のため不明 内面縦ハケ, ハケ目単位6本/1.5 cm 基底部ナデ	酸化鉄粒, スコリア	良	乳褐色	15G	基底部の粘土板接合痕あり
22	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位14本/2.8cm 内面縦ナデ	酸化鉄粒, スコリア-多	良	乳褐色	15G	基底部の粘土板接合痕あり
23	普通円筒	外面縦ハケ, ハケ目単位14本/2.5 cm 内面縦ナデ, 底部調整なし	雲母, 酸化鉄粒, スコリア	良	乳褐色	08G	基底部の粘土板接合痕あり

第3章　小　　結

1．縄文時代

今回検出された遺構は前期の住居跡11軒，土坑2基，後期の住居跡10軒，土坑2基，後期の住居跡2軒である。土坑に関しては008住居跡の東西に位置する2基を除いて，後世の攪乱が多いため明確に区別できなかった。

以下各住居及び土器について簡単に整理してみる。

前期の住居と出土土器

検出された10軒の住居は発掘区でも西北と東南に集中を見せ，大きく2分された状況を呈している。各住居の形状は隅丸の方形を呈するものが多く，他には円形に近いものもある。また，その規模は西北に位置する住居が比較的大型なのに対し，南東では小型のものが多い。炉は各住居に必ず1基ないし2基検出しており，今回炉を検出できなかった007・025・119住なども後世の遺構の重複による消失の可能性が強い。

住居の覆土中からは黒浜・浮島・諸磯ａ・諸磯ｂ式の土器を検出しているが各住居とも混在した状況を呈するため，住居ごとにその割合を表にしてみた。(第4表)

これによると黒浜式土器を主体的に伴出する住居跡は007・008・025・026・052・063・103・118・119住の9軒，浮島式土器を主体とするものは021・031住の2軒となる。浮島式を主体とする2軒は他の9軒と比較すると，形状や規模，炉などにおいては大差がないものの覆土中に貝層を含まず，本遺跡においてはこの2軒を最後に貝類を中心とした採集生活を終えたものと考えられる。

黒浜を主とする住居群でその前後関係を考える場合，やや問題となるのは007・063住である。

007住は覆土中より大形の浮島式土器を出土しているが，小片では黒浜式土器が圧倒的に多く，覆土中にも貝層が検出されているため黒浜期の所産に含めた。063住はその全形を明らかにできず，貝層も含まれないので単に覆土中の土器より黒浜期とするのは問題であろう。

他の住居においては同じ黒浜期においても若干の違いを見い出すことができる。

まず伴出土器であるが，覆土中より復原可能な土器を検出した住居は103・026・118・008住の4軒である。この内103住は一番多く貝類が堆積しており投棄された個体数も一番多い。器形はほとんどが平縁で円筒形を呈するものが多く文様も縄文を主体とした古い段階のものが大半を占めている。これに対し，026・118住では波状口縁を呈する土器が多く，026住では縄文と貝殻腹縁圧痕文を主としており，格子状のモチーフや文様帯を上下で2分するものが見られる。118住では026住とほぼ同じ構成をなすものの半截竹管工具を用いて格子状や助骨文状のモチーフをもつものが見られる。また，118住では繊維を含まず波状口縁を呈する大型の土器と繊維を含み貝殻腹縁による縦位の圧痕を施す土器が伴出しており，繊維を含まない黒浜式と捉えるも

のなのか問題を残している。008住は小型の土器が多く，前の2軒に比較してより半截竹管を用いたものが多く見られる。また，繊維を含まない小型の鉢（諸磯a式）も出土している。文様としては肋骨文状のモチーフに加えて有節平行沈線を施すものが見られ，より新しい段階の土器を含んでいる。これに対し破片のみを検出している住居は025・052・119住である。025住は基本的に026住に類似している。052住に関しては小片が多く明確にはその特徴を捉えられない。119住も黒浜式の古い段階から半截竹管を用いた新しい段階までのものが出土しているが，円形竹管刺突文や有節平行沈線文等が見られない点で008住ほど新しい段階ではないものと考えられる。

次に貝の投棄された状況を比較してみると純貝層を多量に含む住居は103・026・118住であり，ブロック状に広がりを見せるのは052住，他の住居は点在した状況を呈している。これらはやはり遺物の出土状況と比例するものであり，その生活の経過を考える上で重要な痕跡として捉えられる。

以上の事から住居の変遷を考慮するならば，007・063住を除いて103住→026・118住→052・025・119住→008住→021・031住という事を想定できよう。また，伴出土器に関しては度重なる投棄や，長期にわたっての遺構の重複などから新旧の混在のあることを十分考慮しなければならないだろう。

第4表　縄文時代前期住居内遺物出土比率

住居	総重量(kg)	型式及び特徴（%）								貝層
		黒浜	浮島	諸磯a	諸磯b	沈線文	縄文	無文	その他	
007	12.6	48	15	16	2	3	2	14	0	部分的なブロック
008	33.5	85	1	4	+	+	8	2	0	部分的なブロック
021	15.6	3	32	0	0	4	0	11	50	な し
025	4.5	86	2	0	3	+	6	3	+	部分的なブロック
026	18.2	98	+	1	+	0	+	1	0	多量に含む
031	11.3	16	29	+	6	10	2	8	29	な し
052	5.8	73	3	2	2	0	6	7	7	全面に散布
063	0.4	100	0	0	0	0	0	0	0	な し
103	32.0	93	2	+	+	0	+	1	4	多量に含む
118	7.3	58	+	42	0	0	0	0	+	多量に含む
119	2.9	96	2	0	+	0	0	0	2	部分的なブロック

（+）は1%未満

2．歴史時代

今回の調査では奈良・平安時代の竪穴住居跡25軒，掘立柱建物跡11棟を検出した。これらの遺構から出土した土器片数は166,725点を数え実測個体数も300点以上となった。このような多量の土器については遺構と密接な関係を有し，その考察においても決して切離して考えられるべきではないが，調査時の混乱のために一部現場における位置関係等不明になってしまったものが存在するため，今回の報告では遺物を中心として考察せざるを得ない。

以下の報告では土器分類を中心に若干の私見を述べることにする。

(1)土器分類

近年における奈良・平安時代の土器については活発な研究が進み，房総においても8世紀以降，四半世紀ごとの編年が行なわれるような状況である[1]。このような研究状況の中で下総西北部に位置する花前Ⅰ遺跡出土の土器群について分類を試みることは決して無駄とはならないと考える。

分類を行なう際には全ての器種を対象とすべきであるが，各器種によって出土量の差が大きいため，ここでは最も普遍的な遺物である坏形土器と甕形土器を中心として分類を行なう。

土師器坏形土器

土師器坏形土器はロクロ未使用のものと，ロクロ使用のものとによって2大別できるが，さらに底部の切離し手法とその後の調整手法および器形によりⅤ群17類に分類した。

Ⅰ群　ロクロ未使用によるもので粘土紐巻上げ成形による。出土数は少ないが器形により3分類される。

a類　体部外面に稜を有し，鬼高期にみられる坏形土器と似た器形を呈する。内面から口縁部外面にかけて横ナデを施し，体部には指頭痕を，底部には木葉痕を残す。胎土は粗いが，焼成は良好である。

b類　底部は丸底になり，浅い皿形土器のような器形を呈する。内面は篦磨きが施され，外面は横方向に手持篦削りされる。胎土は密であり，焼成も良好である。

c類　b類と異なり，底部を意識するために平底と丸底の中間的な形となる。器高は高さを増し，やや大形化する。体部は横方向の篦削りを施すが，口縁部には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。内面は丁寧な篦磨きを施すものもある。

Ⅱ群　ロクロ使用による土器群で，底径と口径の差が比較的小さいものである。体部は直線的に立ち上がり，器形は箱形を呈する。底部全面および体部下端は回転篦削りされる。

a類　口径／底径は約1.6となる。体部は約65°を測り，直線的に立ち上がる。焼成は総じて甘く，ロクロ目も弱い。切離し手法は，底部全面回転篦削りされるため不明である。

法量[2]　11.3—4.2—7.0cm

b類　器形および成形，調整技法はa類とほとんど違いはないが法量的にやや大形化する。焼成は良好となり，色調は乳橙色を呈するものが多い。

法量　12.3—4.4—7.6cm

III群　底部切離しは回転糸切りとなり，底部周縁および体部下端に回転篦削りを施す。体部は直線的に立ち上がるがII群土器よりも開き気味となる。

a類　底部は回転糸切離し後，周縁を幅広く回転篦削りし，体部下端も鋭く回転篦削りする。口縁部は徐々に肥厚して外反する。胎土に雲母を多量に含む点で特徴的である。色調は赤褐色を呈し，焼成も良好である。口径／底径は1.7前後となる。

法量　11.7—3.9—6.8cm

b類　a類と異なり口縁部は肥厚せずに外反する。法量的にやや大形化するが胎土，色調，焼成はa類と大差ない。

IV群　口径と底径の差が大きくなり，その比が1.8から2.0前後となる。器形はバラエティに富み，製品としても安定したものが多い。器形に大小の分化が認められ，内黒処理したものもあらわれる。

a類　口径13.5cm前後と16.0cm前後の二種がある。ともに体部は約50°で直線的に立ち上がる。底部全面篦削りされるが，体部は下端だけを篦削りするものと全面篦削りするものとがある。

法量　13.5—4.3—6.5cm

16.5—4.7—7.4cm

b類　IV群の中では比較的小形となり，小さな底部から僅かに内彎しながら立ち上がり，その後，直線的に口縁まで至る。底部全面と体部下端は回転篦削りされる。

法量　11.9—4.4—6.4cm

c類　体部は径6.5cm前後の小さな底部から大きく外反しながら立ち上がる。底部は回転糸切離し後，周縁を回転篦削りし，体部下端も回転篦削りする。ロクロ目は強く，焼成も良好となり，安定した製品が多い。

法量　12.3—4.0—6.5cm

d類　小さな底部から内彎しながら立ち上がり丸くおさめられた口縁に至る。底部は回転糸切離しで，周縁と体部下端は回転篦削りする。

法量　12.1—4.1—6.2cm

e類　底部から大きな曲線を描いて立ち上がり口縁部は僅かに外反する。埦とでも言うべき器形を呈する。底部は回転糸切離しされ，周縁は回転篦削りされる。体部下端も回転篦削りを施し，内面は篦磨きされる。

法量　12.1—4.0—6.3cm

f類　底部から約60°の角度で直線的に立ち上がり，ロクロ目が極めて強く残る点で特徴的である。底部全面と体部下端は手持篦削りを施す。

法量　13.0—4.6—6.9cm

g類　底部から僅かに内彎して立ち上がり体部は直線的になるもので，大形の製品である。体部下端は幅広く回転篦削りする。

法量　15.8—5.2—10.0cm

V群　底部の切離しは回転糸切りによるが，周縁は篦削りが施されず，無調整となる一群である。出土量は少ない。

a類　比較的大きな底部で，体部は直線的に立ち上がる。口縁はその厚みを徐々に減じて，尖り気味となる。体部下端は回転篦削りを施す。

法量　12.4—4.0—8.2cm

b類　体部は内彎しながら立ち上がり，口縁は僅かに外反する。体部下端は回転篦削りを施す。

法量　13.1—3.9—6.0cm

c類　底部から内彎して立ち上がり，体部は直線的にのびるものである。ロクロ目は弱く，体部下端の調整も判然としないが回転篦削りと思われる。

法量　13.0—3.9—6.5cm

須恵器坏形土器

須恵器坏形土器の底部切離し技法は回転篦切りが主体となり，その後の調整は篦削りを施すものが大半を占める。このため須恵器坏形土器の分類では器形を軸として，成整形の技法は副次的な分類の規準としV群13類に分けた。

I群　底部と体部の境が不明瞭で，丸底に近いものである。底部切離し技法は不明だが底部全面と体部下端は手持篦削りされる。

a類　全体に厚手の作りとなる。底部は丸底となり体部は直線的にのびる。口縁は丸くおさめられる。焼成は良好で丁寧な製品となる。

法量　13.6—4.1cm

b類　a類に比して体部の開きが大きくなり，薄手の作りとなり，やや粗雑となる。

法量　13.2—3.9cm

II群　底径は8～9cmと大きく，体部は直線的に立ち上がる一群である。

a類　口径14cm，底径8～9cmを測り，立ち上がり角度は約55°となる。焼成は総じて甘く，体部下端の調整痕が判然としないものが多い，底部は回転篦切り後，全面回転篦削りする。

法量　13.8—4.0—8.5cm

b類　a類に比してやや大形化し，焼成も良くなる。体部は直線的に立ち上がり，口縁は僅かに外反する。底部は回転篦切り後，無調整となるものが多い。

法量　14.2—3.8—9.0cm

c類　体部の立ち上がり角度は約56°でa・b類より大きくなる。器高も4cmを越えるものが多く深いものとなる。回転篦切り後，底部全面と体部下端は回転篦削りされる。

法量　13.9—4.2—8.4cm

d類　口径約12cmで小形になる。体部の立ち上がり角度は60°を越え，口径と底径の差は小さくなる。底部は回転篦切り後，無調整となる。

法量　11.9—3.8—8.0cm

III群　II群に比して底径は小さくなり，体部の立ち上がり角度も小さくなり開いた器形となる。

a類　口径約13cm，底径7cmを測り，体部の立ち上がり角度も50°と小さくなる。底部は回転篦切り後，全面手持篦削りされる。

法量　12.9—3.8—7.2cm

b類　やや大形で器高も4cmを越え，深くなる。口縁は外反する。体部下端は手持篦削りされる。

法量　13.7—4.2—7.2cm

IV群　胎土に長石，石英，雲母を多量に含む土器群で，口径は底径の2倍近くになる。底部は回転篦切離し後，全面手持篦削りされる。

a類　口径，器高ともに大形化する。口縁は肥厚して外反する。体部下端は幅広く手持ち篦削りを施す。

法量　13.4—4.5—6.8cm

b類　法量的にはa類に似るが，体部は直線的に立ち上がり，口縁も外反せず丸くおさめられる。体部下端は回転篦削りされる。

法量　13.7—4.3—7.3cm

c類　底径は5～6cmと小さく，体部の立ち上がり角度は約50～55°と小さく，直線的になる。底部は全面手持篦削りされ，体部下端も幅広く手持篦削りを施す。

法量　12.4—4.1—5.5cm

V群　底部は回転糸切離し後，無調整となるもので，量的には極めて少ない。

a類　底径は比較的大きく，V群土器の中では口径との差が小さくなる。体部は内彎しながら立ちあがり，口縁は外反する。胎土には長石，石英，雲母をほとんど含まず密であり，焼成も良好である。

法量　12.5—3.7—7.2cm

b類　口径は底径の2倍以上になり，器高も約3.5cmと低い。底部からゆるやかに彎曲して立ち上がり，口縁は外反する。胎土には細礫を含み，粗雑な作りとなる。焼成も甘い。

法量　13.1—3.5—5.9cm

土師器甕形土器

土師器甕形土器の出土破片数は最も多いが細片となるために器形全体を復元し得たものは少ない。このため口頸部の形態と胴部の調整手法を中心に分類を行ない14類に分けた。

A類　口縁は外反して丸くおさめられ，頸部から胴部へ移行する部位に軽い稜を残す。胴部は横方向の篦削り後，縦位に篦削りする。胴部の遺存が悪いため器形全体は知り得ないが，やや縦長の球形を呈すると考えられる。

B類　比較的小形のもので，短い口縁部は僅かに外反する。胴部の張り出しはほとんど無く，最大径は口径よりも小さくなる。

C類　口縁部は直線的に「く」の字状となり極めて薄い作りとなる。頸部から胴部へ移行する部位には，比較的明瞭な段をなすものもある。胴部上半は横位の篦削りを施す。

D類　A類と似るが，口唇部に明瞭な凹線を残す点で大きく異なる。最大径は胴部上半にあり，やや縦長の球形を呈する。胴部は縦位の篦削りを施す。

E類　口縁は，内傾した頸部から強く外反し，口唇部はさらにつまみ出されるもので，全体に厚い作りとなる。胴部の遺存するものはほとんど無いが，胴部上半から底部にかけて細い篦削りを施す。

F類　小形の甕形土器で，内傾した頸部から外反した口縁に至り，口唇部のつまみ出しは上

方にのびる。胴部中央から上半に最大径がある。胴部の調整は縦位に幅広い篦削りを施した後，下半部では横位に篦削りする。

G類　頸部は短く直立気味になる。口縁は強く外反して口唇部のつまみ出しも強い。胴上半部の張り出しは強く，底部に向って急激にすぼまる。胴部には細い篦削りが密に施される。

H類　口縁部は「く」の字状に外反し，つまみ出される口唇は長くのびる。胴部は縦位の篦削りが施される。全体に薄い作りとなる。

I類　H類と似るが口唇部のつまみ出しはほとんど無い。最大径は胴部上半にある。胴部は幅広い篦削りを縦位に施す。

J類　頸部はやや外傾し，口縁部は軽く外反する「コ」の字状口縁に近いものである。頸部と胴部の境は不明瞭となる。胴部上半は横位の篦削りを施し，薄手の作りとなる。

K類　頸部は直立し，口縁部は外反する。頸部と胴部の境は段をなして明瞭となり「コ」の字状口縁となる。胴部上半は横位の篦削りを施す。

L類　口縁部は短く，直線的に外傾する。口縁から胴部へ移行する部位には軽い稜をなす。胴部はわずかに彎曲して，縦位の篦削りを施す。全体に厚手の作りとなる。

M類　口縁部は外彎し，口唇部は丸く肥厚する。胴部はL類に比して張り出しが若干強くなり，口縁部と胴部の境に軽く稜をなす。胴部は縦位の篦削りを施す。

N類　口縁部は外反し，口唇部は内側に曲接して内面に明瞭な稜をなすものである。胴部には縦位の篦削りを施す。

以上の土器群の他に，量的には少なく限られた資料である土師質須恵器坏形土器と須恵器皿形土器について若干言及する。

土師質須恵器坏形土器

焼成は酸化焔焼成となるが，従来の土師器に比してやや硬質なもので，器形的には本遺跡出土の土師器にも須恵器の中にも共通性を見い出せない。

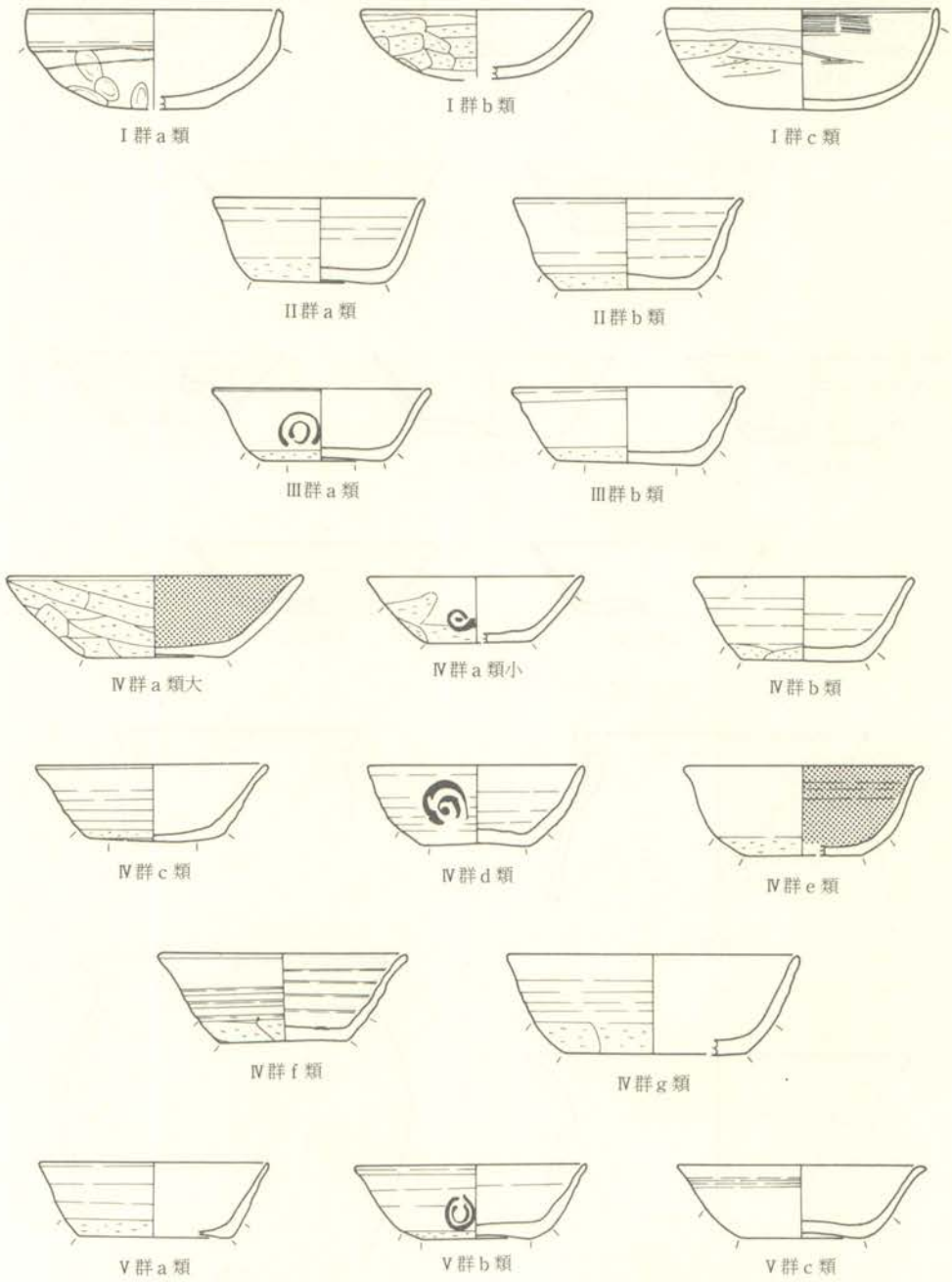
A類　底径は約6cmと小さく，口径は底径の2倍以上となる。器高も4.5cm以上となり深く，体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切離し後，周縁をわずかに回転篦削りする。胎土は比較的精選されたもので，色調は淡黄褐色を呈する。

B類　口径は底径の2倍以上となるが，A類よりも器高が低く，浅い坏形土器となる。底部はやや突出し，回転糸切離し後，無調整となる。色調は赤褐色を呈するものが多く，胎土はA類よりもやや粗い。

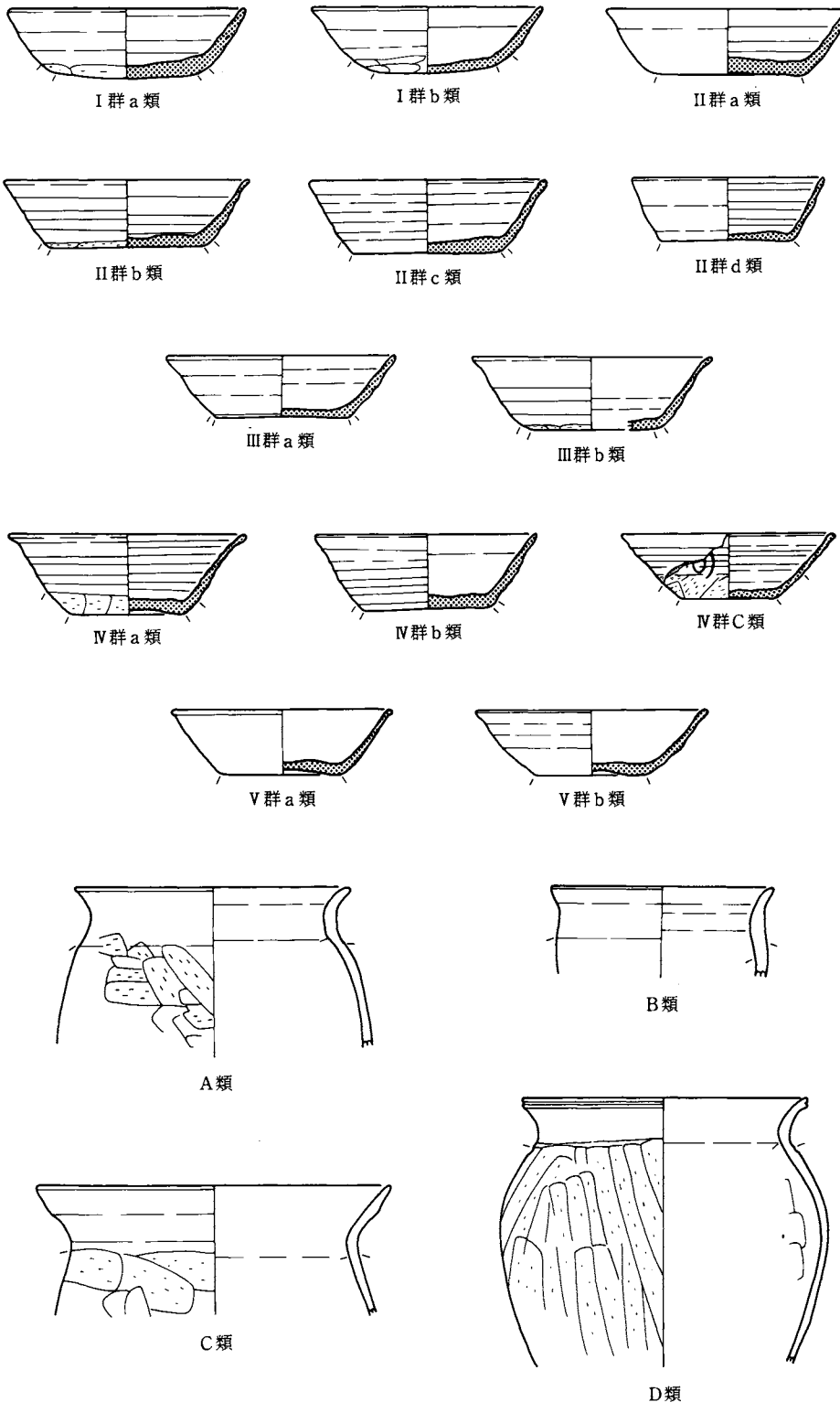
須恵器皿形土器

わずかに１点の出土であるが，胎土は須恵器坏形土器の中にほとんど見られない白色針状物を含むものである。

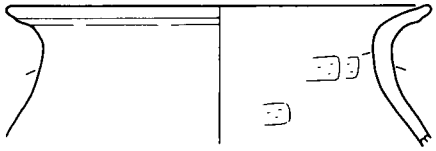
A類　口径15.2cm，器高3.0cm，底径6.4cmを測る。体部は内彎しながら低く立ちあがり，口縁は肥厚して外反するものである。底部は回転糸切離し後，無調整となる。



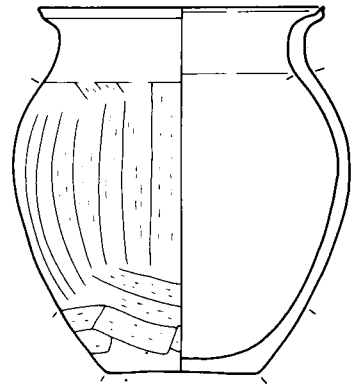
第189図　土師器坏形土器



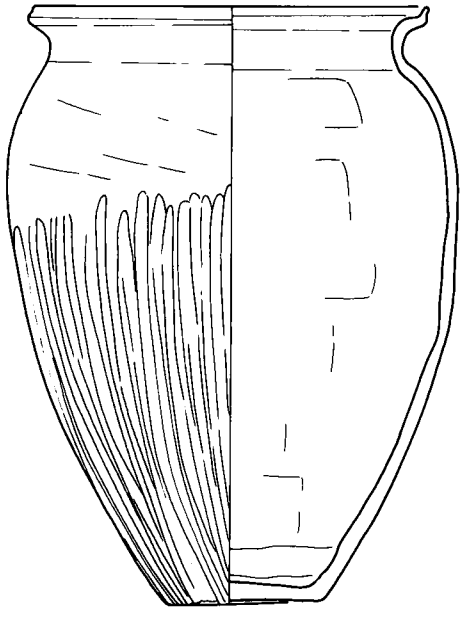
第190図　須恵器坏形土器・土師器甕形土器



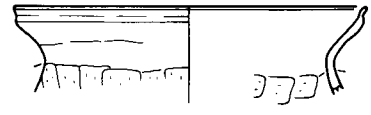
E類



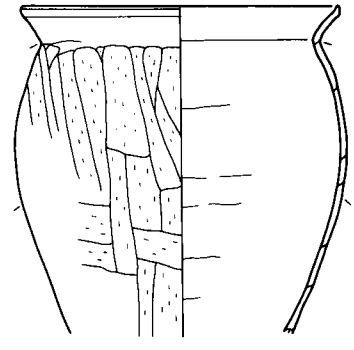
F類



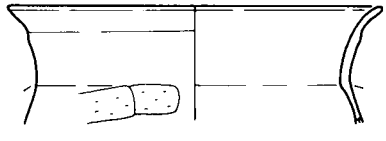
G類



H類



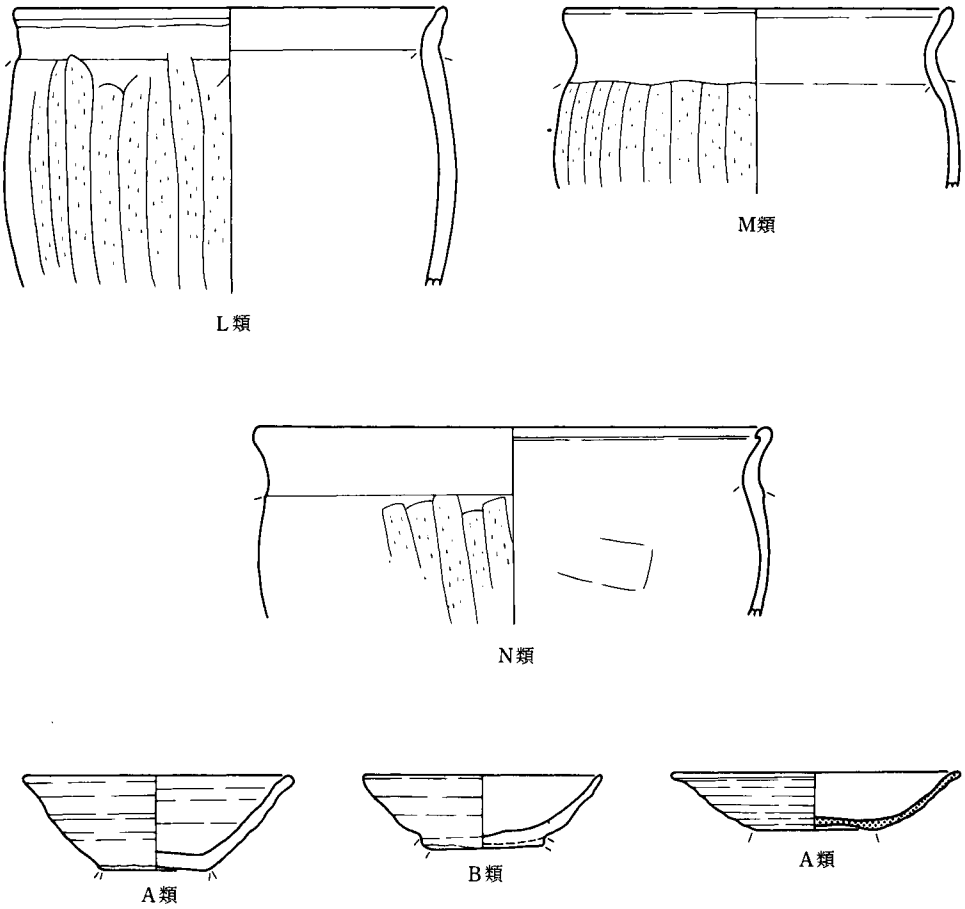
I類



J類

K類

第191図　土師器甕形土器



第192図　土師器甕形土器・土師質須恵器坏形土器・須恵器皿形土器

(2)共存関係の抽出

先に分類した土師器坏，須恵器坏，土師器甕について，共存関係の頻度を抽出するが，この方法については，山田水呑遺跡[3]，薬師寺南遺跡[4]等で用いられた共存関係頻度表を採用する。これについては山田水呑遺跡の報告の中で詳細に述べられているので，ここでは省略するが，当遺跡での共存関係の時間軸としては，土師器坏をその軸とする。

5群に分けた土師器坏を軸に共存関係頻度表（第5表）を見ると，次のような点が看取できる。

まずⅠ・Ⅱ群—Ⅲ群—Ⅳ群の3グループに大きく分けられ，さらにこれらが細分され，次の6期に細分することが可能である。

Ⅰ期

共伴する遺物が少ないが，土師器坏Ⅰ群a類に代表され，土師器甕E類が伴なう。この段階では良好な須恵器が伴出しないが012住居跡では口縁部を欠失した須恵器蓋があり，おそらく内

面にカエリを有した蓋となると思われるものである。

本期を代表する住居跡は012住居跡である。

II期

土師器坏Ⅰ群ｂ・ｃ類と須恵器坏Ⅰ・II群と土師器甕A～G類を代表とする。この他に赤彩された土師器盤形土器が伴なう例もある。

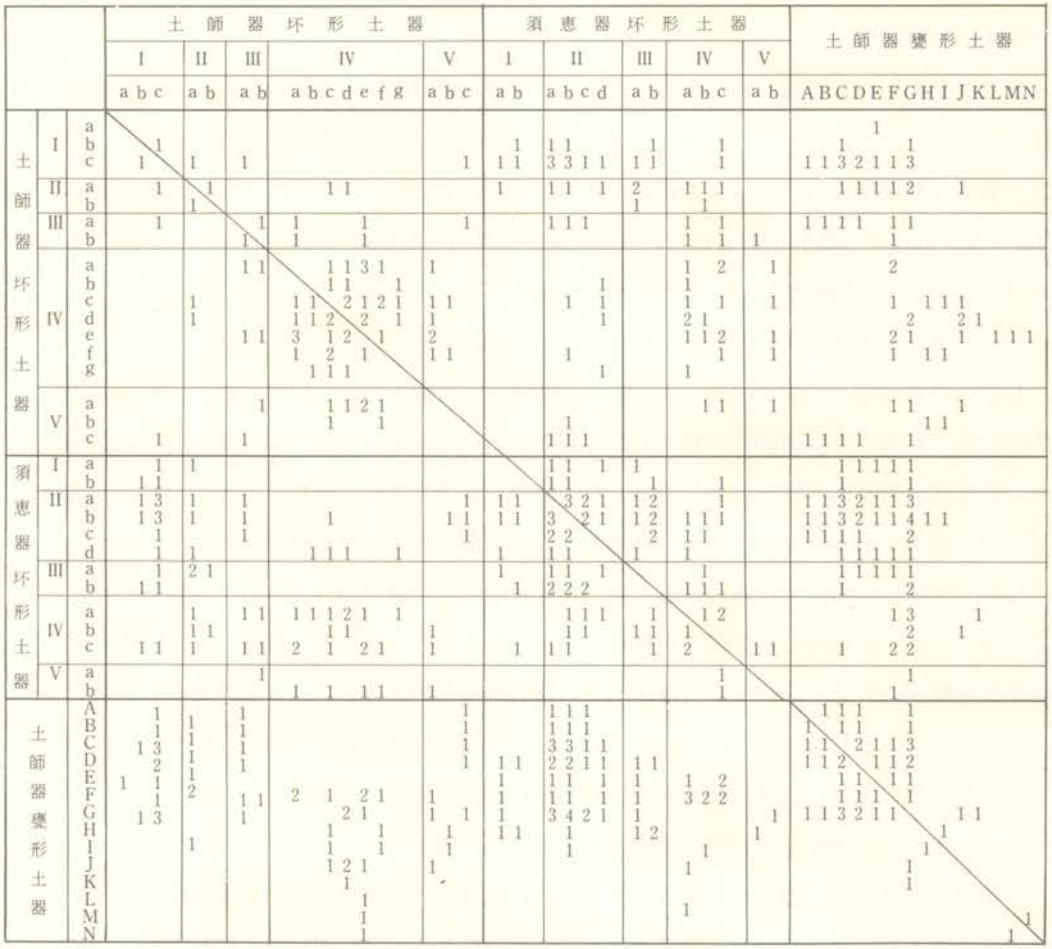
001，016，041住居跡が本期に属する。

III期

ロクロ使用の土師器坏が出現する段階であり，前期に見られた土師器坏Ⅰ群ｃ類とII群ａ・ｂ類を中心に，須恵器Ⅰ・II群の他にIII・IV群が加わる。

002・042住居跡が代表となる。

第５表　共存関係頻度表



IV期

土師器坏III群a・b類，IV群a・e類に須恵器坏II群a～c類，IV群a・c類が伴なう。土師器甕はA～D類とF・G類が共存する。

本期を代表する住居跡は046・058住居跡である。

V期

土師器坏IV・V群と須恵器坏IV・V群を中心とするもので，最もバラエティに富む。土師器甕はこの段階からA～E類を伴なわずにF～N類が主体となる。灰釉陶器や緑釉陶器はこの段階から共伴する。

011・019・024・037・039・040・047・057住居跡が本期に属する。

VI期以降

共存関係頻度表にはあらわれないが，前述したI期からV期の土器群を含まないものである。

003・004住居跡が該当する。

(3)実年代について

次に各期についての実年代を考えてみたい。I期は資料的に少ないので確実な共存関係を抽出できなかったが，この中で特徴的なことは，須恵器蓋にカエリを有する点である。このタイプの蓋の存続期間については8世紀第1四半世紀から第2四半世紀までの年代が考えられている[5]。また共存する甕形土器E類は，手賀沼周辺遺跡の鬼高期のものに良く見られる「中馬場タイプ」の甕に近い形態を示し，前時代的な様相を示すものと考えられる。

以上の事からI期は8世紀前半を中心とした時期を考えたい。

II期は須恵器坏が急激に増加する。また土師器盤形土器も，この段階に認められる。この盤形土器は下野薬師寺南遺跡で分類された第III類に属する形態である。この薬師寺南遺跡で得られた実年代は第II期8世紀中葉となり，この時期では須恵器が一般化すると言われ，当遺跡でも同様の現象がある。このことからII期を8世紀中葉に比定できると考える。

IV期は土師器坏III群に代表されるもので，佐倉市江原台遺跡のH26・H61号住居跡からは同様のタイプの土師器坏に富寿神宝を伴って出土している[6]。下総国分遺跡の土器編年を試みた佐々木和博氏の分類でも，江原台遺跡出土の富寿神宝との関連から9世紀中葉から後葉にややかかる年代を想定している[7]。また須恵器坏には回転糸切り無調整のものが出現する。この回転糸切り無調整の坏は，武蔵地方でも9世紀中葉以降から主体となる。

以上の事からIV期を9世紀中頃を中心とした時期と考える。

V期は本遺跡で最も盛行する段階と考えられ，土師器坏はバラエティに富み，この中で時間差を内包するかとも思われる。須恵器坏は量的に減少する。この段階で，緑釉陶器，灰釉陶器が共伴する。これらについては次の項で述べるが，9世紀後半から10世紀前半の年代が与えら

れるものである。また須恵器皿形土器A類もこの段階に共伴する。これは器形的に武蔵地方の御殿山25号窯式・花園支群2号窯に見られるものに近似している[8]。これらの事からV期を9世紀後葉から10世紀前葉に比定できるであろう。

VI期以降については実年代を考定するだけの根拠が得られないが，004住居跡出土遺物と003住居跡出土遺物を比較し，後者がより新しい段階のものと考えられる。003住居跡出土の土師質須恵器の一群には，まだ足高高台の付く器種が出現していない[9]。以上の事を考え合わせて，VI期以降を10世紀後半以降11世紀にかけての年代を考えたい。

III期については，これまでの各期の年代から考えて，8世紀後半から9世紀前半の年代を与えておく。

以上のように大きな年代幅で花前I遺跡出土土器群の年代を考えた。現在の土器編年研究では先にも述べたように8世紀以降，四半世紀ごとの編年が行なわれており，今回の結果では，これらの研究状況とは逆行するかのように年代幅を広くとって考えざるを得なかった。しかしながら実年代を確定する資料に乏しいこの地域にあっては，あせらずに，各地の資料との比較・検討を行ない，さらに緻密な編年作業を進めて行くことを今後の課題としたい。

(4)施釉陶器について

本遺跡出土の施釉陶器としては灰釉陶器と緑釉陶器がある。

灰釉陶器はいずれも埦で，1点はグリッド出土，もう1点は057住居跡から出土している。前者は腰がやや張り，口唇部は外反する。高台は角高台となり，内面の釉は刷毛塗りとなり，見込み部に三叉トチンの痕跡が認められ，猿投窯黒笹14号窯式に比定できる。後者は，釉が漬け掛けとなり，高台も三ケ月高台となるもので黒笹90号窯式のものである[10]。

緑釉陶器はすべて皿で，全面に淡緑色の釉がかかるものと，淡黄色に発色した釉を地として，その内外面に3箇所ずつ緑色の点斑文を施すものがある[11]。器形的には両者ともに酷似し，高台は削り出しによる蛇の目高台となる。胎土は灰白色を呈し緻密であるが焼成は土師質の軟質なものとなっている。以上の事からその生産地を考えると京都洛北の窯址群出土のものと類似性が高いと考えられる[12]。

これらの施釉陶器は黒笹14号窯式の灰釉埦を除いて，花前V期の土器群と共存する。緑釉陶器についての実年代については不明であるが黒笹90号窯式が10世紀前半に比定されており[13]，緑釉陶器についても，この時期を前後するものであろう。

(5)「爪形状圧痕」を有する土器について

ここで言う「爪形状圧痕」を有する土器は僅か1点だけで，001住居跡から出土したものである（第95図25図版55—7）。これは須恵器高台付坏の高台部の内側に，長さ0.7cm程の圧痕が，

断続的に一周するものである。このような圧痕について，楢崎彰一氏は，岐阜県老洞古窯址群の調査報告の中で，「爪形状圧痕」と呼び，高台貼付に関連する技法に付随する痕跡ではないかと考えている。そしてこの「爪形状圧痕」を有した遺物を出土する生産址を集成しており，これによれば，兵庫，岐阜，愛知の西日本に限られている(14)。

そこで本遺跡出土例に振り返ると，製品としては，下総地方で一般的に見られるもので搬入品の可能性は考えられないものである。窯址群の発見されていない下総地方ではあるが，この圧痕が西日本の生産址出土のものに限られていることを考えるならば，この「爪形状圧痕」が製作工人の移動や，技術の伝播などの種々の問題を提供するものと考えられ，今後の資料の増加を待ち検討を加えたいと考える。

(6)鉄器と鉄滓について

本遺跡出土の鉄器と鉄滓は出土量も多く，遺跡の性格を考える上でも重要である。

製品としては，鏃，鎌，刀子，斧，釘，燧鉄，錐，タガネ等の他に棒状や板状の不明製品がある。またこれらの他に未製品や，素材と考えられるものがある。

以上の遺物のあり方から見て製鉄に関するいくつかの問題点を提示する。

本遺跡では遺構として小鍛冶炉は認められない。しかし製品の中には鉄器生産を考えざるを得ない資料が存在する。

まず039住居跡出土の板状鉄素材である(第129図11～14)。これらは故意に断ち割られ，部分的に引きちぎるかのような痕跡が認められる。また040住居跡からはタガネと考えられる遺物（第135図43）もある。この住居跡では鉇の未製品と考えられる資料（第135図53）もあり，さらに今回出土した刀子の多くは刃部が極端に擦りへったものが多く，実際に使用するためと言うよりは，再利用するためのものではないかと考えられる。この一連の遺物は鉄器生産と再生産の過程を示すのではないかと思われる。

次に鉄滓であるが，出土鉄滓総数は1,818点を数える。これらについては磁着度の強いものを5として，以下全く磁着しないものまでの5段階に分類した(15)。その結果，鉄分の含有が高いと考えられる磁着度4・5のものは全体の6割を占めていた。このような鉄滓については，古代製鉄における第一次製品と考えられており(16)，意識的に選別された結果と考えられる。

これらの鉄器と鉄滓のあり方については，本遺跡と小支谷をはさんで対面する花前II遺跡(製錬炉や鍛冶炉が検出されている(17)。との関連を無視して考える訳にはいかず，次回の報告の中で，改めて検討することにするが，本遺跡では，前述した花前IV・V期に製鉄に関連した遺物が出現する。

(7)埴輪について

本遺跡から出土した埴輪は集落内一般住居跡覆土，及び一般住居址カマド構築材として検出されており，埴輪本来の出土の仕方はしていない。従って，資料としては，一等資料とはなりえないものばかりである。

これ等の埴輪は，恐らくこの集落の近辺に所在する古墳から抜き取ってきたものと思われる。当地域は下総型円筒埴輪の分布範囲に入っているが，下総型かどうかを見分けるには完形品か，又は下総型特有の朝顔形埴輪を伴出している事が必要となる。しかし，ここでは，それが出来ないので，他の要素から観察する。

第187図3に見られる第二段から最上段途中迄の最も残りの良いものを見ると，第三段の長さが14.5cmで，我孫子市内の我孫子古墳群に見られる典型的な下総型のものの数値に近く，又，ほぼ直線的に伸びる側線，細身の器体から見て，下総型の範疇に入ると見て良いであろう。従って，この資料を下総型とした場合，第187図1～3，第188図9～13は，その凸帯の形状の類似等の点から，同様の下総型期に入れて良いと考えられる。しかし，第187図4～6に見られるように凸帯断面が台形で比較的明瞭な2本の陵線を持つもの，又第187図7の朝顔形埴輪の破片のように，くびれ部の形状のはっきりしているものなどは，下総形以前一と云っても，それほど古い段階のものではないから，6世紀の中半頃。下総型のものは6世紀後半以降と考えられる。従って，この集落内の埴輪は時期の異なる2基もしくはそれ以上の古墳から抜きとられたものと考えられる。

(8)その他の遺物について

この他に墨書土器，朱書土器や，柄杓形銅製品について簡単にふれておく。

墨書土器，朱書土器ともに文字の書かれたものはなく大半は「◎」となり，この他に「☆」が描かれるものがある。これらの記号についても，花前II遺跡との関連が認められ，花前遺跡群全体を通して，後日検討することにしたい。ただし花前I遺跡では墨書は土師器に，朱書は須恵器に描くことが原則となっているようである。

柄杓形銅製品は花前V期に属する040住居跡から出土する。この平安時代における類例については管見ではない。しかし極めて類似したもので，7世紀と考えられる茨城県武者塚古墳の主体部より，副葬品として出土した完形の柄杓形銅製品がある(18)。

註

(1)史館同人・市立市川考古博物館　1983　シンポジウム『房総における奈良・平安時代の土器』

(2)ここでは分類した遺物の法量平均値を示し，口径一器高一底径の順に記載する。

(3)松村恵司ほか　1977　『山田水呑遺跡』　日本道路公団・山田遺跡調査会

(4)橋本澄朗ほか　1979　『薬師寺南遺跡』「栃木県埋蔵文化財調査報告書　第23集」栃木県教育委員会

(5)現在までのところ，このカエリのある蓋の存続期間については8世紀1四半期までとする考えが大半であるが，8世紀第2四半期までとする酒井清治氏の考えもある。

酒井清治　1981　「房総における須恵器生産の予察(Ⅰ)」　『史館』第13号

(6)高田　博ほか　1977　『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　千葉教育委員会・㈶千葉県文化財センター

(7)佐々木和博　1981　「下総国古代土器編年試論(1)下総国分遺跡を中心として」　『史館』第13号

(8)神奈川考古同人会　1983　「シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題　――相模国と周辺地域の様相――」　『神奈川考古』第14号

(9)服部敬史　1982　「南武蔵における古代末期の土器様相」　『東京考古』1

この中で足高高台の土器については古代末期土器群のメルクマールともなりうるとしている。分類ではD群以降，11世紀後半の年代を示している。

(10)名古屋大学　斉藤孝正氏の御教示による。

(11)この点斑文された土器については二彩と仮称しているが，その名称についても今後検討を要するであろう。なお，愛知県陶磁資料館　井上喜久男氏は白釉緑彩陶として扱っている。

井上喜久男　1982　「白釉緑彩陶について」　『月刊　考古学ジャーナル』No.211

(12)井上喜久男氏　平安博物館　寺島孝一氏より御教示をいただいた。

寺島孝一　1982　「畿内の緑釉陶窯」　『月刊考古学ジャーナル』No.211

(13)楢崎彰一　1982　『愛知県古窯跡群分布調査報告』(III)　愛知県教育委員会

(14)楢崎彰一　1980　『老洞古窯址群発掘調査報告書』　岐阜市教育委員会

(15)磁着度による分類については穴沢義功氏より多大なる御教示をいただいた。磁石と鉄滓が何mmの距離で着くかによって分けた。

(16)穴沢義功　1982　「古代製鉄炉の第一次製品について――千葉・中ノ坪遺跡の結果から――」たたら研究会昭和57年度大会発表要旨

(17)現在整理中であるが，製鉄関係遺構については一部発表されている。

鈴木定明ほか　1982　『千葉県文化財センター　研究紀要』7　㈶千葉県文化財センター

(18)筑波大学　岩崎卓也先生より御教示をいただいた。

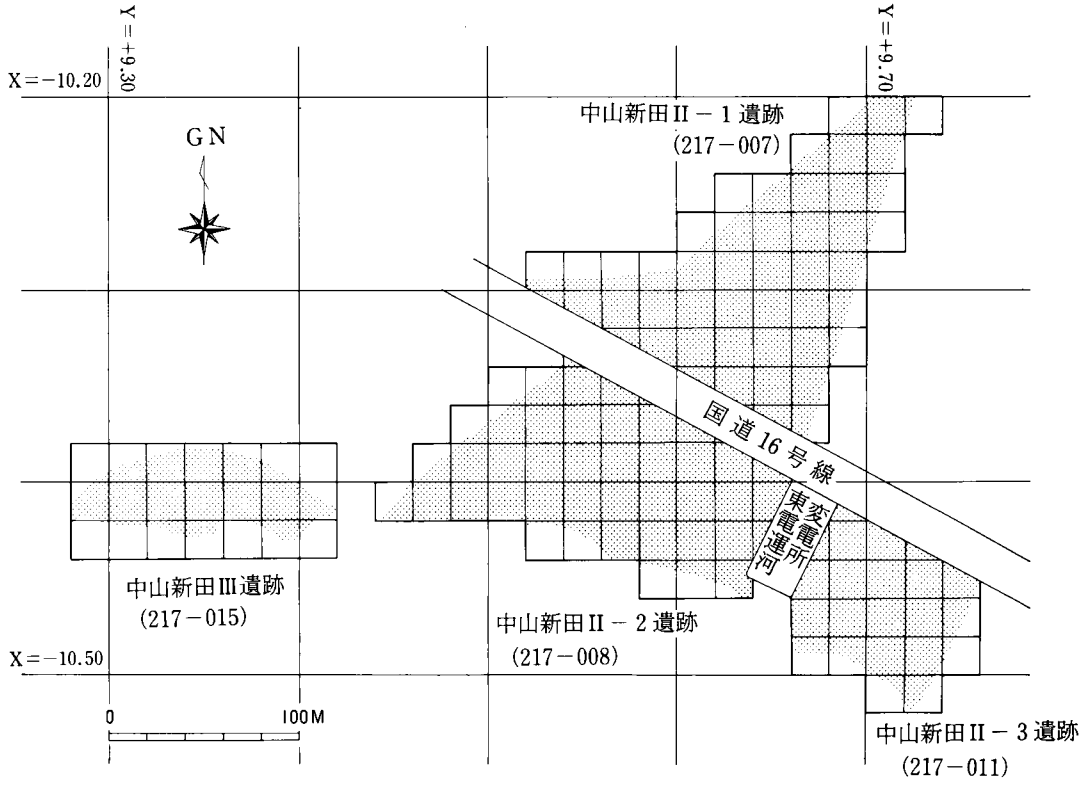
第Ⅲ篇　中山新田Ⅱ遺跡

第１章　調査の方法と経過

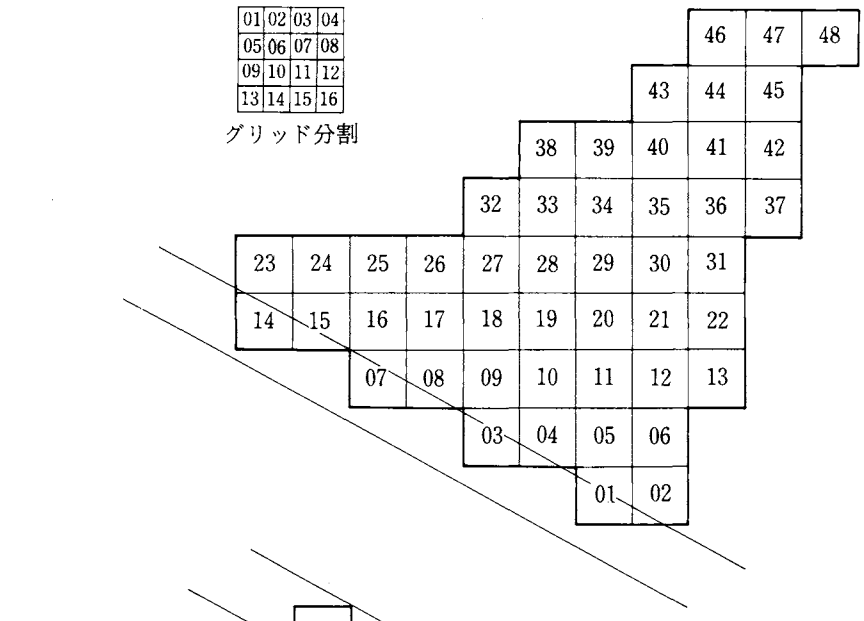
今回報告する中山新田Ⅱ遺跡は昭和53年度から昭和56年度にかけて調査された契約上の４遺跡，中山新田Ⅱ－１遺跡（217—007）・中山新田Ⅱ－２遺跡（217—008）・中山新田Ⅱ－３遺跡（217—011）・八両野遺跡（217—014）を総括し『中山新田Ⅱ遺跡』として報告するものである。

中山新田Ⅱ－１・Ⅱ－２遺跡は柏市大青田字八両野744他に所在し日本道路公団との契約上国道16号線の北側を「中山新田Ⅱ－１遺跡」南側を「中山新田Ⅱ－２遺跡」としている。「中山新田Ⅱ－３遺跡」は東京電力運河変電所の東側，柏市大青田字八両野709他に所在する。「八両野遺跡」は中山新田Ⅱ－１遺跡のさらに北に位置する野馬堀を対象とするもので中山新田Ⅱ－１・Ⅱ－２遺跡内東側に位置する野馬堀に連なるものである。（第193図参照）

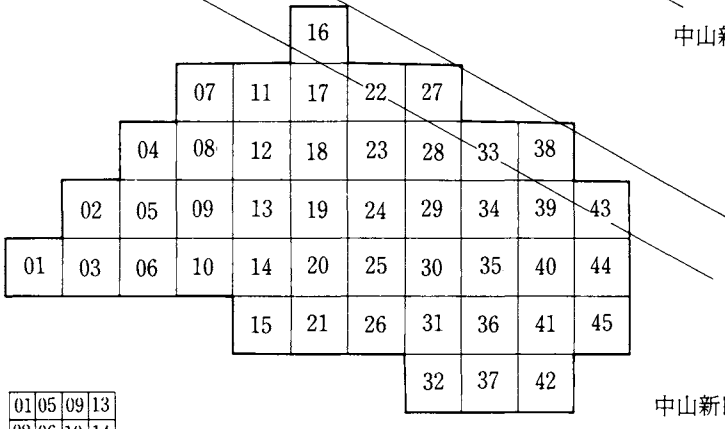
調査の方法は１辺20mの大グリッドを公共座標に合わせて設定し，その中をさらに５mの小



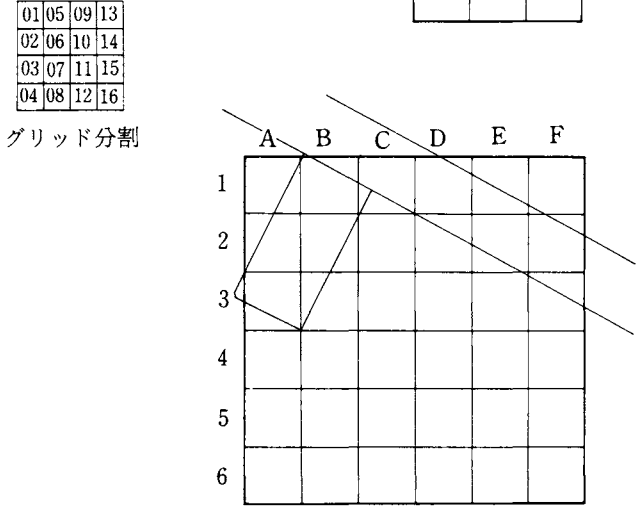
第193図　中山新田遺跡配置図



中山新田II－1遺跡(217－007)



中山新田II－2遺跡(217－008)



中山新田II－3遺跡(217－011)

第194図　中山新田II遺跡グリッド配置図

グリッドで分割するグリッド法を用い，包含層中の遺物はグリッド一括，各遺構に際しては座標に基づき測量・記録した。各グリッドの名称については第194図に示した。小グリッドの名称については中山新田II－1遺跡では横方向の番号配列を行ない，中山新田II－2・II－3遺跡においては縦方向の番号配列を行っている。

調査は中山新田II－1遺跡が昭和53年4月1日から昭和54年3月31日まで先土器時代から縄文・歴史時代の調査を終え，II－2遺跡はこれと平行して新期テフラ面の歴史時代の調査および一部の縄文時代の調査を終えている。

中山新田II－2遺跡はさらに次年度である昭和54年4月1日より7月31日まで東側部分（2次調査分）を残し先土器・縄文時代の調査を終了している。

中山新田II－3遺跡はII－2遺跡と平行し昭和54年4月1日～6月下旬にかけて1次の先土器・縄文時代の調査を行ない，2次調査も昭和56年3月1日～5月31日までII－2遺跡（2次調査分）とともに先土器時代から歴史時代の調査を行なっている。

八両野遺跡については昭和54年4月下旬～5月上旬にかけて野馬堀の調査を終了している。

概要

遺構・遺物は先土器時代から近世にわたって検出されている。

先土器時代の遺構はVI～VII層を主体としたユニットが多く，中山新田II－1遺跡西側において12か所，中山新田II－3遺跡において8か所検出している。

縄文時代の遺構は中期のものが大半で住居跡9軒，竪穴状遺構1基，土坑10基，陥し穴状土坑9基を検出している。包含層中の遺物は早期から晩期に及んでいるが中期の遺物以外はどの時期も微量であった。

歴史時代の遺構は全て中山新田II－2遺跡の台地縁辺部に集中しており，6軒を検出している。

近世の遺構は野馬土手部を失った野馬堀を検出した。

第２章　遺構と遺物

１．先土器時代

はじめに

先にも述べたとおり，今回報告する中山新田II遺跡とは，中山新田II－１，II－２，II－３の各遺跡を統合したものである。これらの３遺跡は，遺跡ごとの，また，年度ごとの調査により，グリッドの呼称の仕方，遺構番号の付与が，それぞれ個別になされており，同じ名称のグリッド，遺構が複数存在する結果を生じている。このため，報告するにあたり，遺構名は下記の通り呼び変える事とした。

報告書	調査時	報告書	調査時
	中山新田II－１(007)		中山新田II－３(011) 55年度調査
第１Aユニット	No.１，２ユニット	第11ユニット	Aブロック
第１Bユニット	No.14ユニット	第12ユニット	Bブロック
第１Cユニット	No.15ユニット	第13ユニット	Cブロック
第２ユニット	No.３ユニット	第14ユニット	Eブロック
第３ユニット	No.４ユニット		中山新田II－３(011)
第４ユニット	No.12ユニット		56年度調査
第５ユニット	No.９ユニット	第15ユニット	Aブロック
第６ユニット	No.６ユニット	第16ユニット	Bブロック
第７ユニット	No.10ユニット	第17ユニット	Cブロック
第８ユニット	No.11，13ユニット	第18ユニット	Cブロック
第９ユニット	No.17ユニット	第19ユニット	Dブロック
第10ユニット	No.18ユニット	第20ユニット	Dブロック
			中山新田II－２(008)
		第21ユニット	G03－T01

また，遺物出土状況図中に使用している各記号については下記の通りである。

▲ ナイフ形石器
○ 石核
◎ スクレーパー
☆ 礫器
✱ 調整痕，使用痕のある剥片
◉ 敲石，スリ石
□ 礫
● 剥片

(1) 土層

本遺跡で表記した土層名は，当センターで統一している内容で使用しており，それは以下のとおりである。

Ⅰ層	表土攪乱層	Ⅴ層	第Ⅰ暗色帯
Ⅱａ層	暗褐色土層	Ⅵ層	蛤良丹沢パミスを含む層
Ⅱｂ層	褐色土層（新期テフラ）	Ⅶ層	第Ⅱ暗色帯
Ⅱｃ層	暗褐色土層	Ⅷ層	立川ローム層最下部
Ⅲ層	立川ローム層軟質部	Ⅸ層	武蔵野ローム層
Ⅳ層	立川ローム層硬質部最上部		

(2) 遺構と遺物

第１Ａユニット

平面的には，長径約18m，短径約10mの範囲に，層位的にはⅦ層を中心に一部がⅥ層中より出土している。分布状態は，径約６m程度のものが２ケ所隣接しているような観がある。石器は，南東側より出土し，北西側からは４の使用痕の認められる剥片以外は，剥方，砕片のみである。遺物総数は76点である。

石器は，ナイフ形石器２点（１，２）の他調整の施された剥片１点（16—４），使用痕の認められる剥片４点（３，４，５，６），敲石２点（10，11）である。

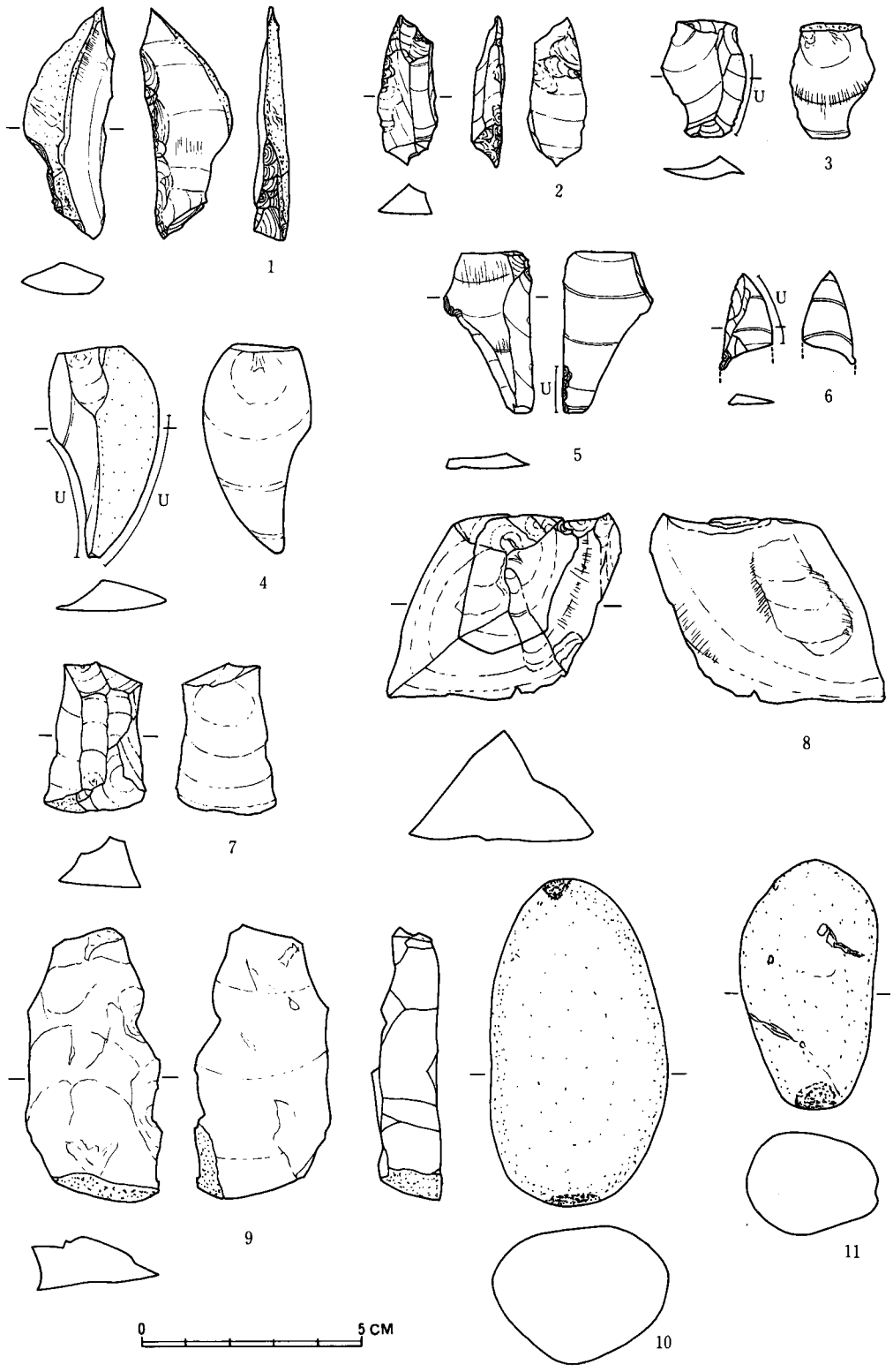
１は自然面を残し，基部を中心に調整剥離が施されている。２は，基部については右側から，刃部については左側からの調整剥離が行われている。３～６は，いづれも縦長剥片の下半分に使用した痕跡が認められる。６についてはナイフ形石器の可能性もある。10，11，13，14は敲石で，10，13は上，下端に，11，14は下端に使用痕が認められる。12の接合資料は，剥片のみ８点接合したものである。いづれも縦長剥片であり，１，３については上から，２については下から剥離されている。16—３，４は，第１Ｃユニットの石核，剥片と接合したもので，16—４は，下端に調整痕が認められる。

第１Ｂユニット

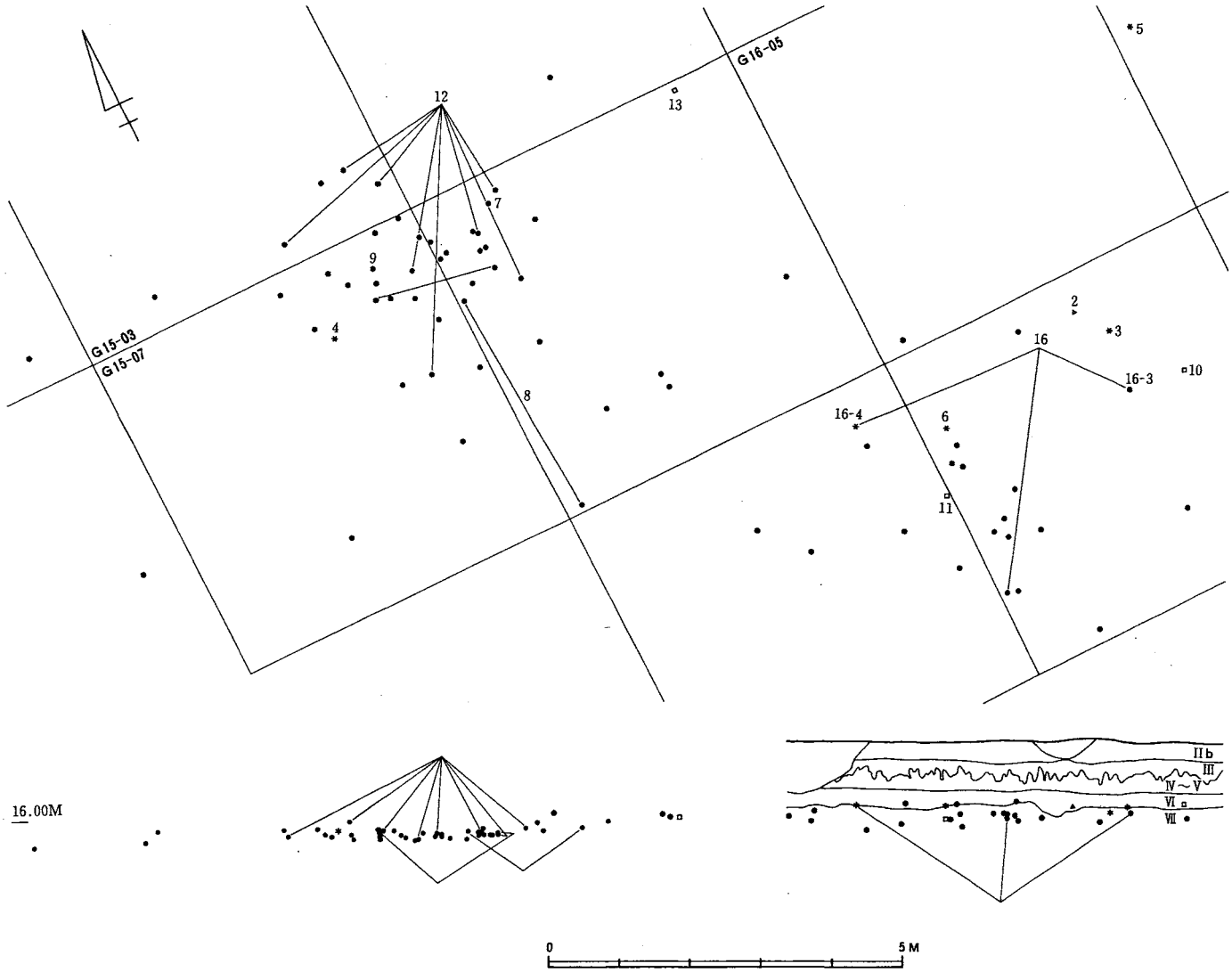
総数18点で，径約５mの範囲に分布しており，すべて，Ⅶ層中から出土している。遺物はすべて剥片であるが，20の接合資料がある。

第１Ｃユニット

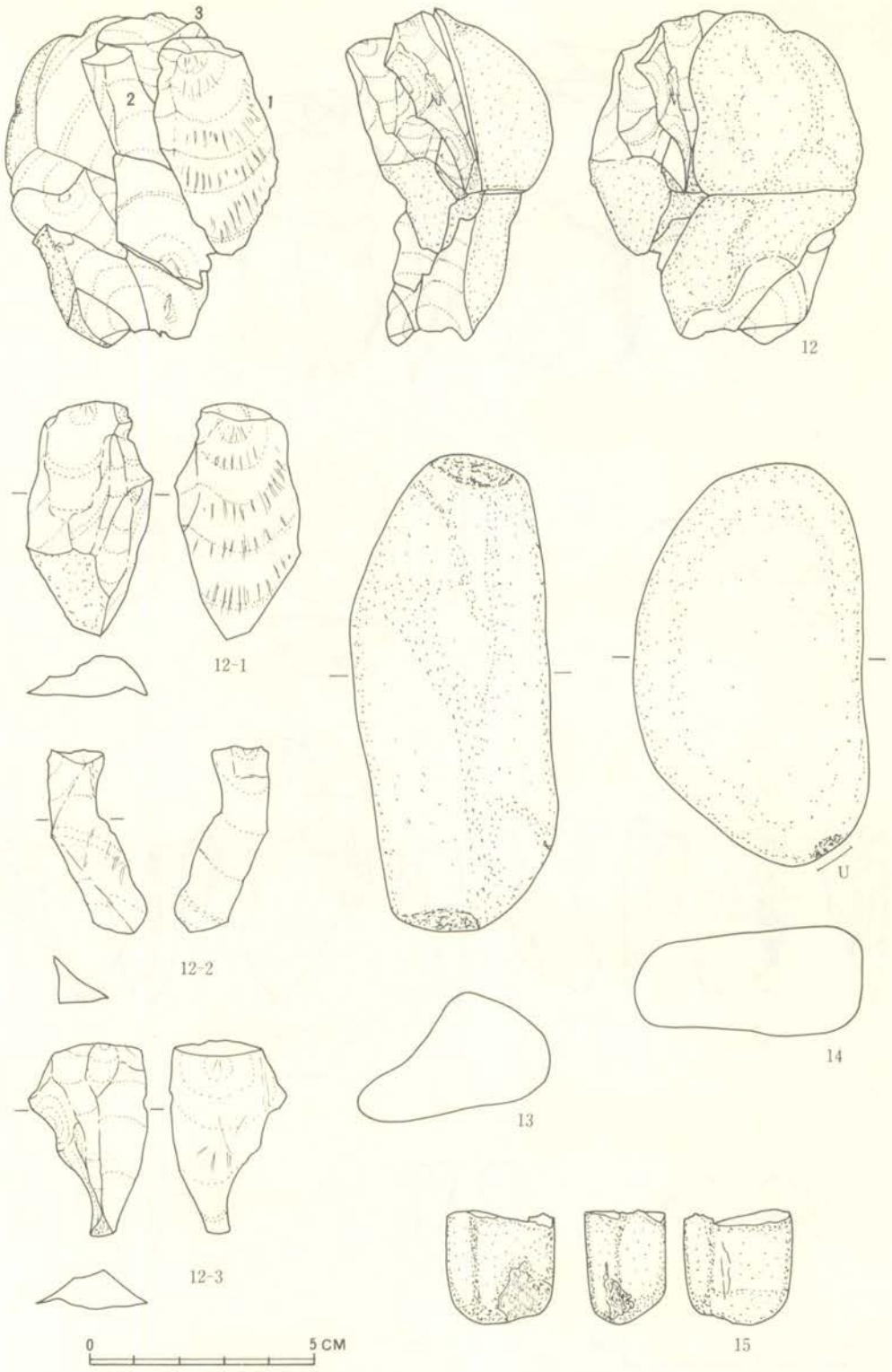
総数８点で，径約４mの範囲に分布しており，Ⅵ層からⅦ層にかけての出土である。15は小形の敲石の一部であり，右下に敲打痕が認められる。他はすべて剥片で，17は小形の横長剥片である。



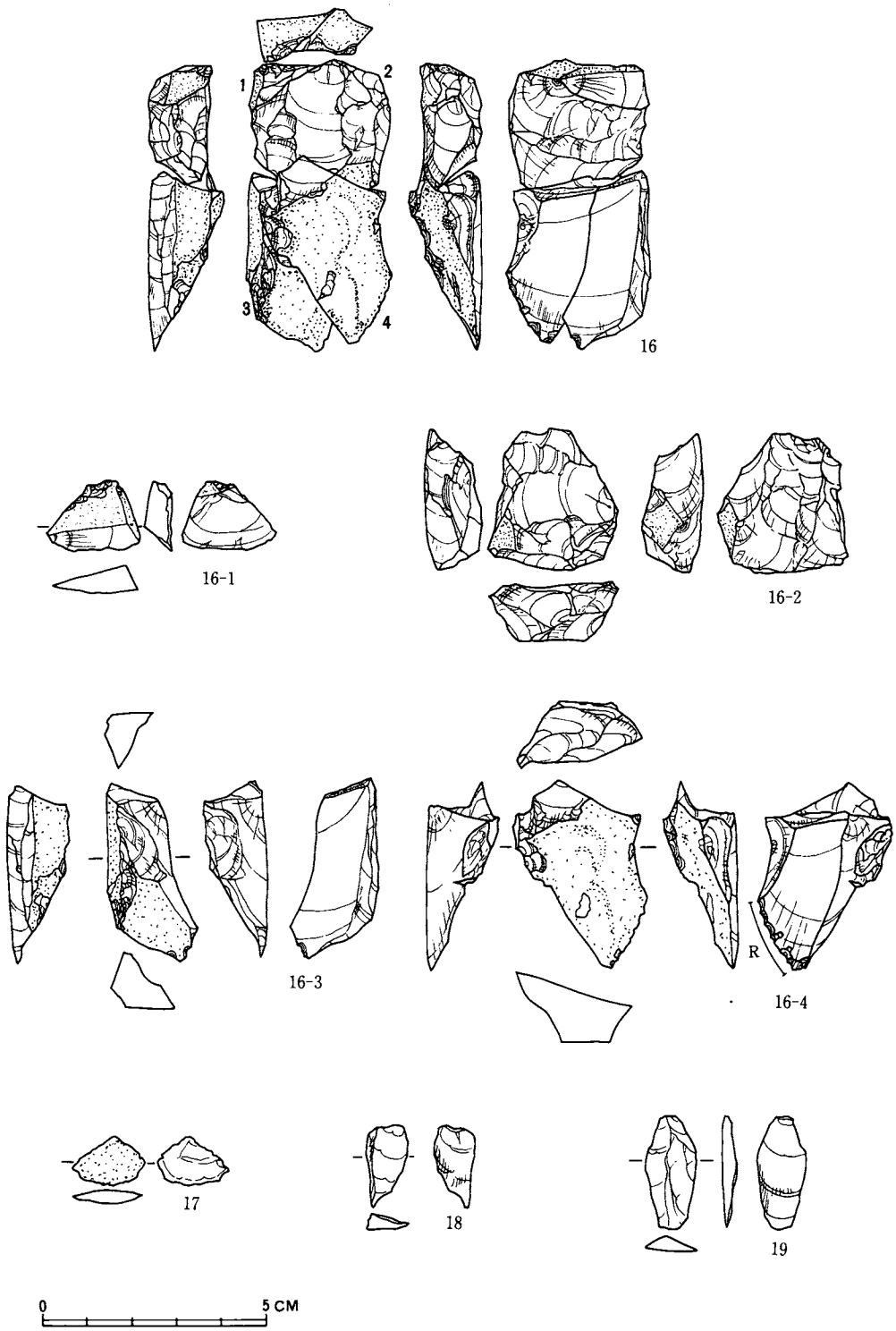
第195図　第１Ａユニット出土遺物



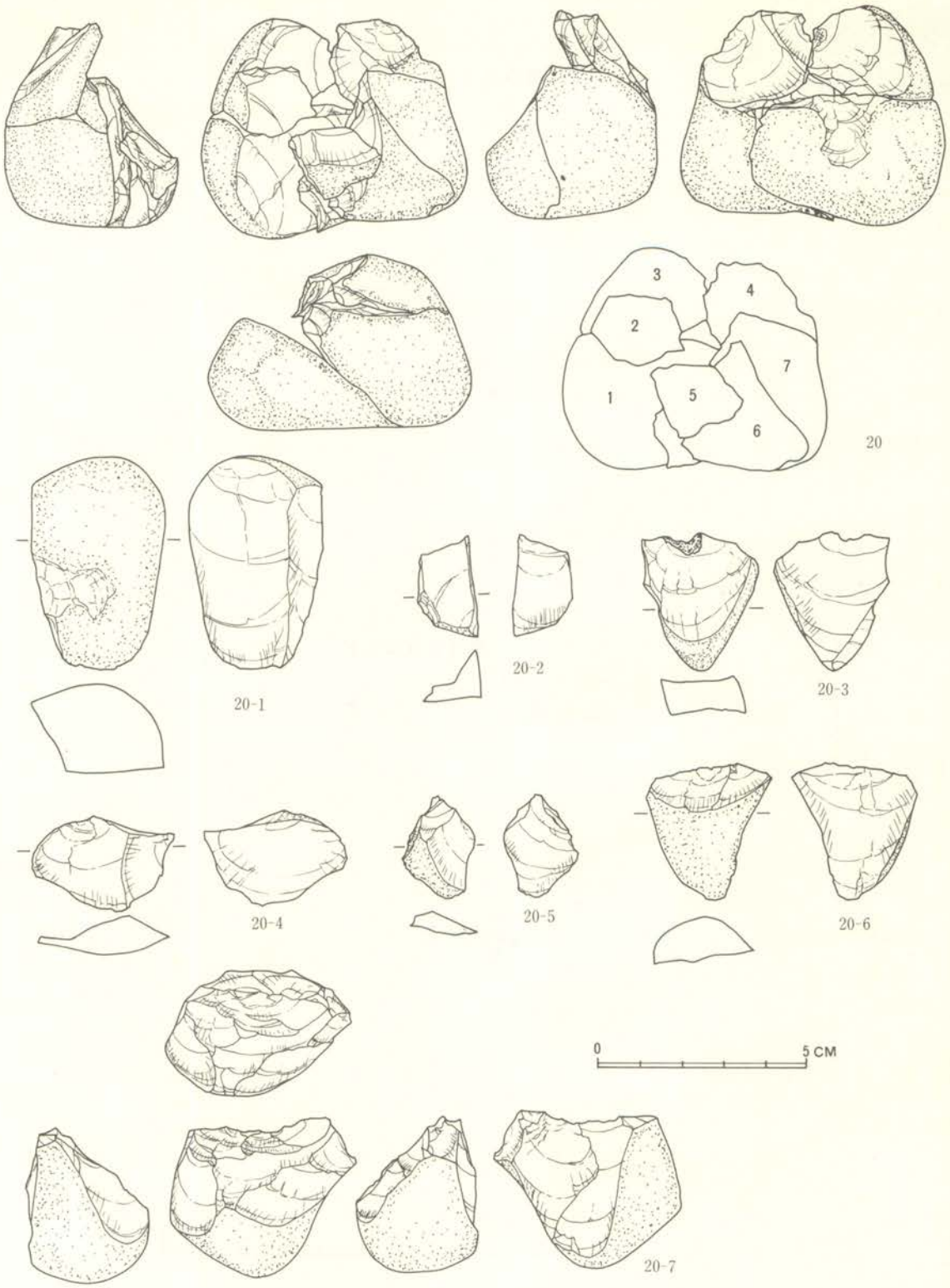
第196図　第１Ａユニット



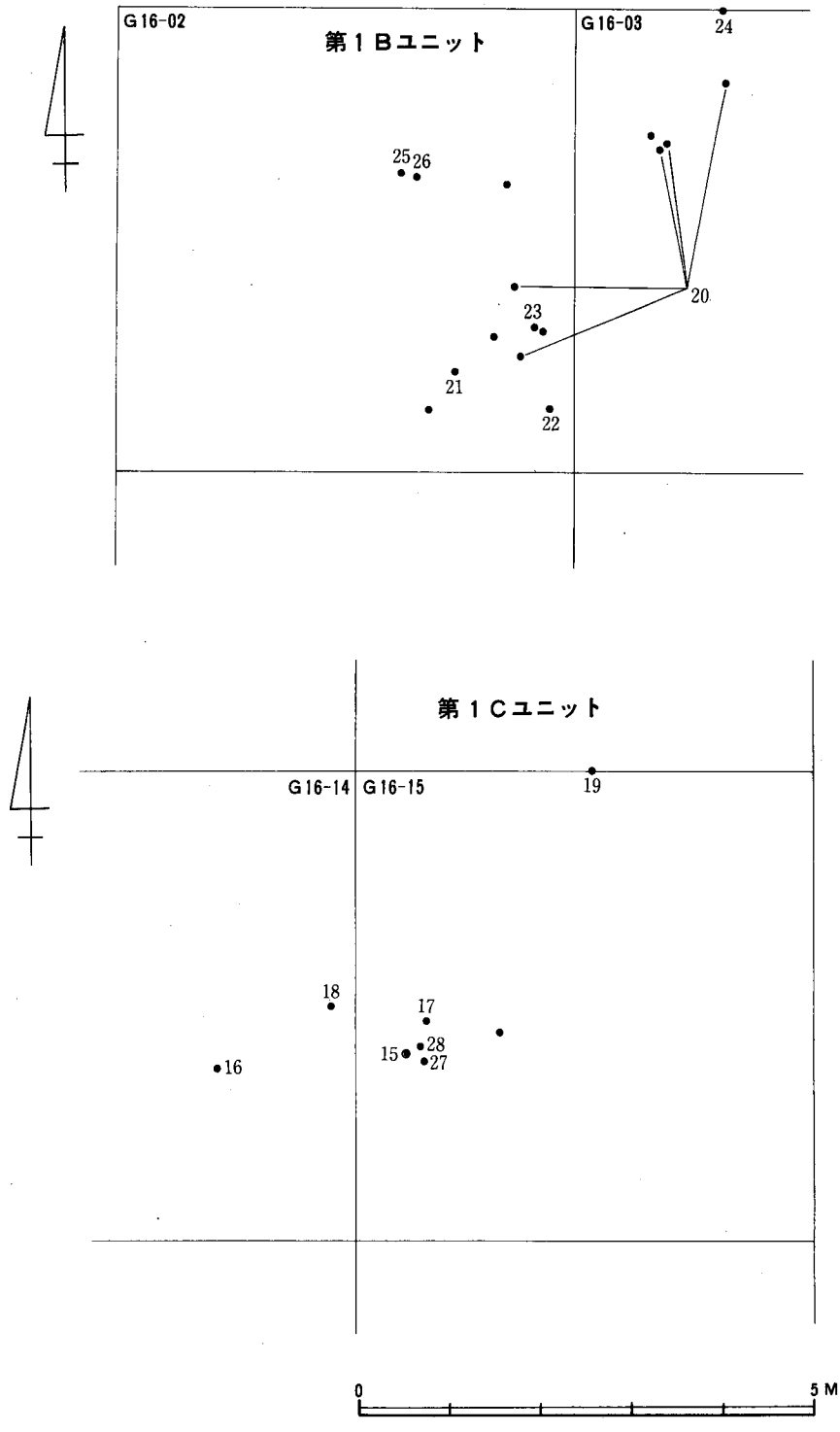
第197図　第１Ａ，Ｃユニット出土遺物



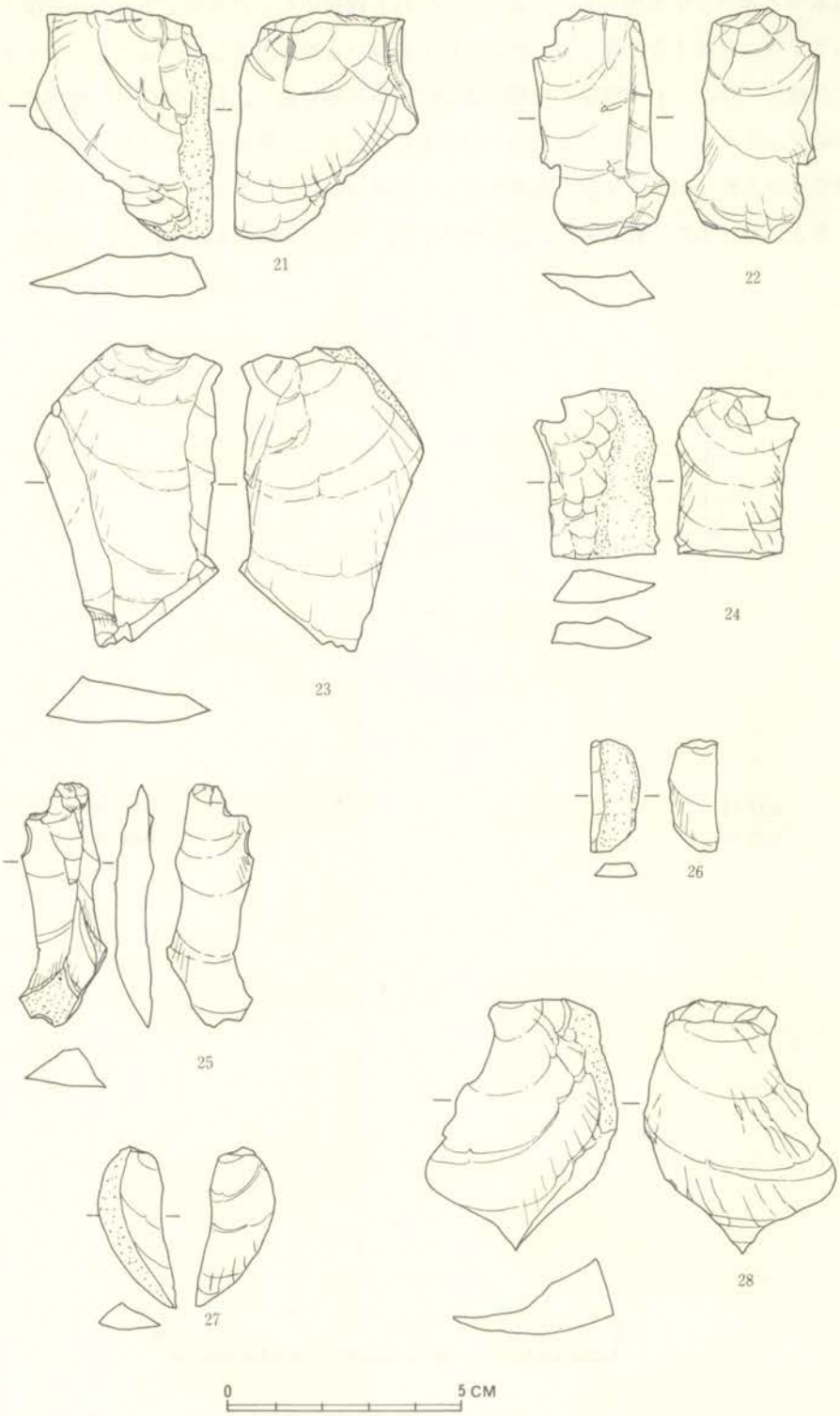
第198図　第１Ａ，Ｃユニット出土遺物



第199図　第１Ｂユニット出土遺物



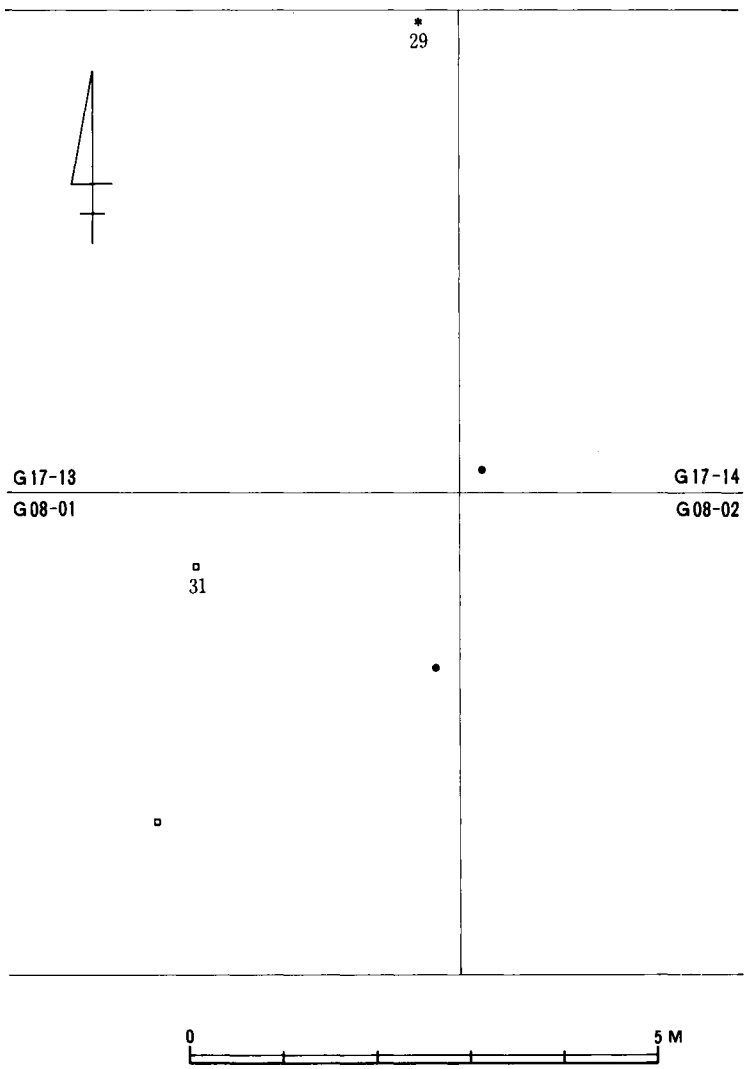
第200図　第１Ｂ，Ｃユニット



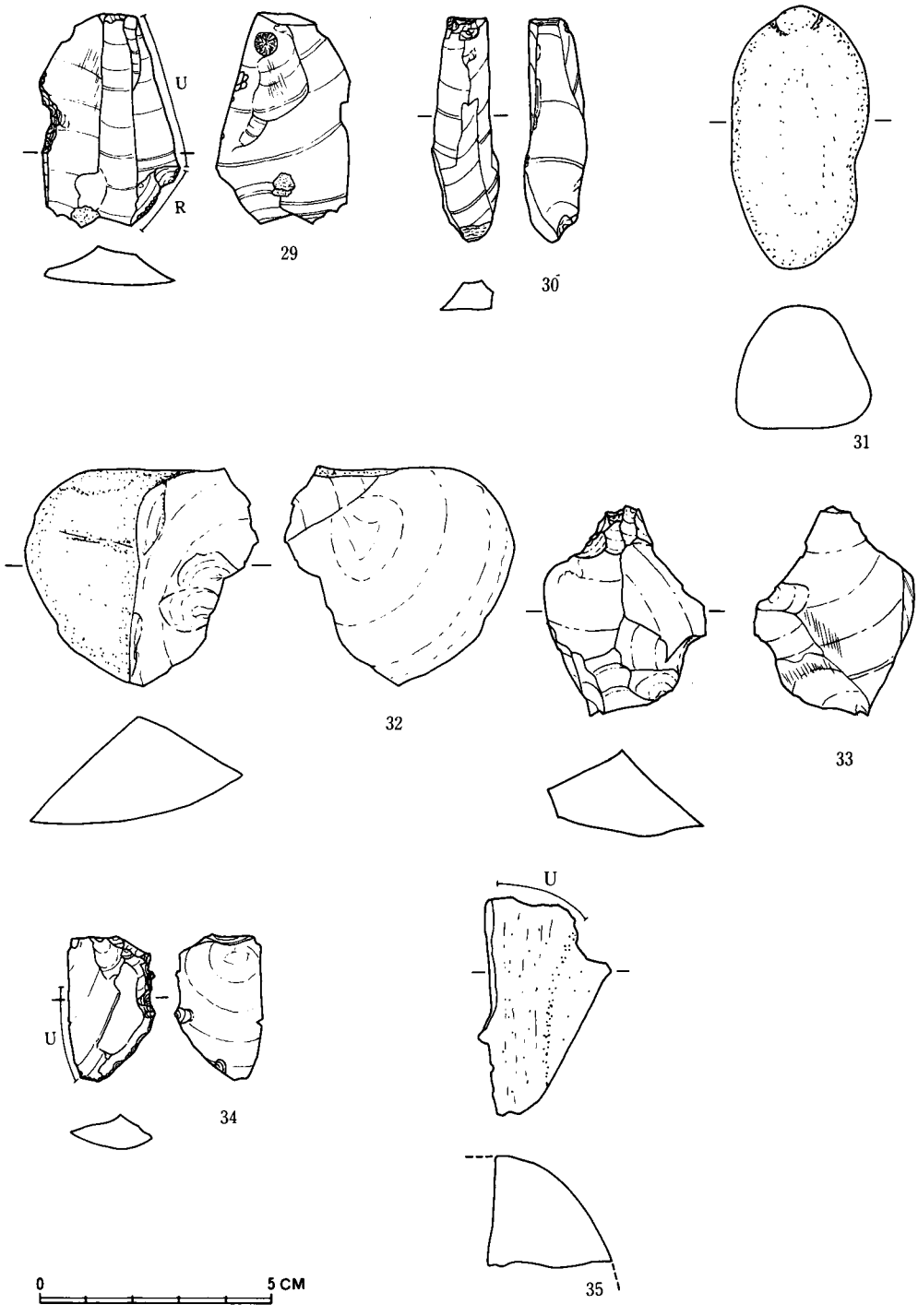
第201図　第１Ｂ，Ｃユニット出土遺物

第2ユニット

総数6点と非常に小規模のものであり，いづれもⅦ層中からの出土である。小規模ではあるが，石器1点，石核1点，礫2点，剝片2点と多様な遺物を出土しているユニットである。29は，左側縁の一部と，右下側縁の一部に表面に調整剝離を施し，右上側縁には使用痕が認められるもので，スクレイパーとして良いものであろう。30は，残核と思われるもので，上面には打面調整がなされており，3面に剝離を行った痕跡が残るが，2面は上より，1面は下よりの剝離である。31は小形の礫であり，この他に1点，やはり小形のものが出土している。



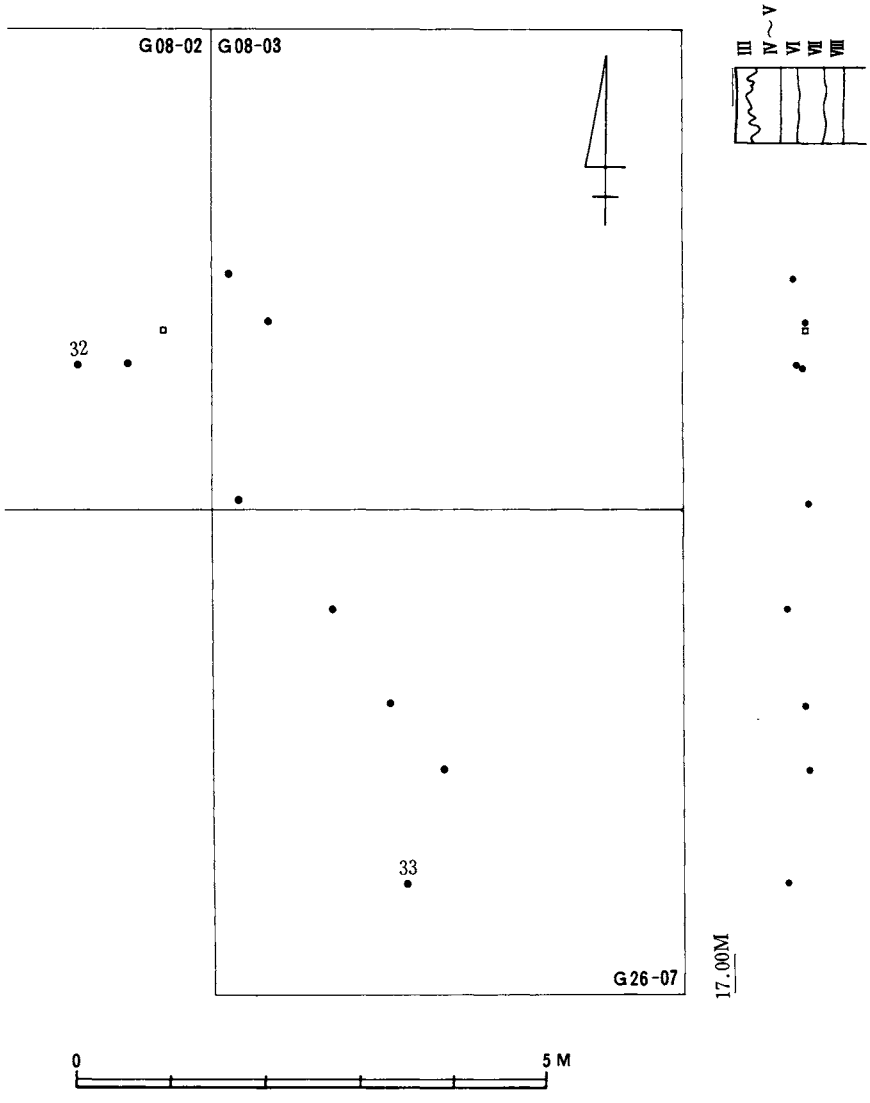
第202図　第2ユニット



第203図　第２，３，４，５ユニット出土遺物

第3ユニット

総数10点と小規模のものであり，VI層からVII層にかけて出土している。小形の礫片1点以外は剝片であり，石器は出土していない。

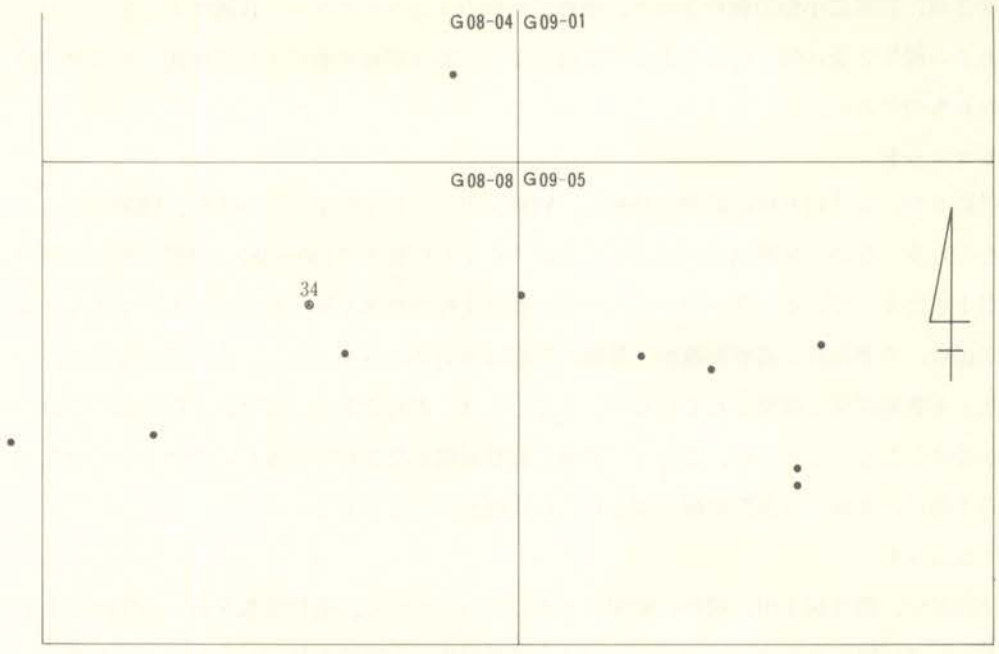


第204図　第3ユニット

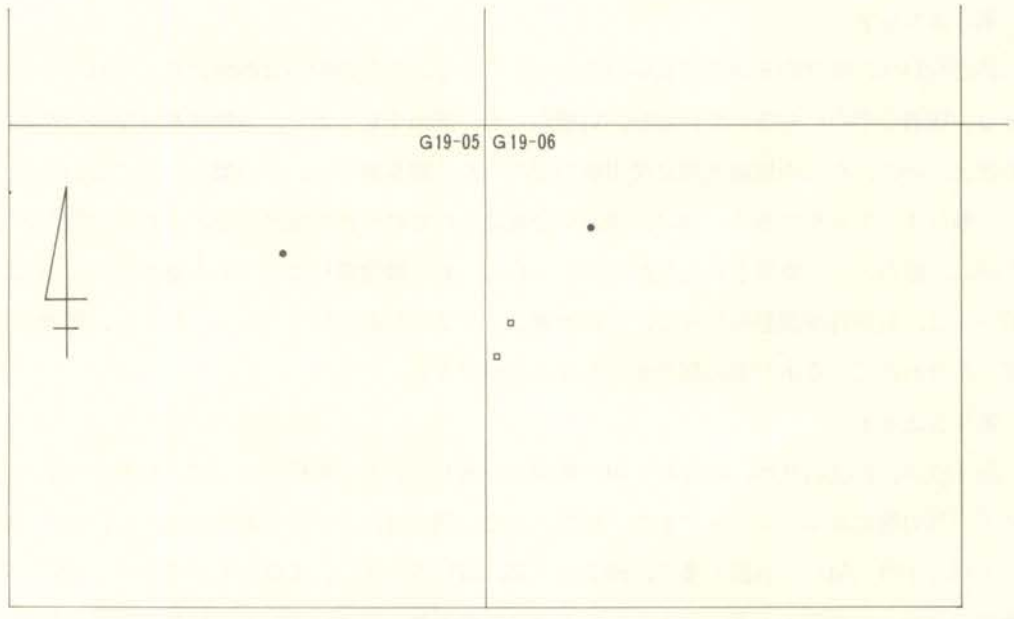
第4ユニット

長径約10m，短径約5mの範囲に分布しているが，総数11点と小規模のものであり，VII層を主とし，VI層中からも若干出土している。

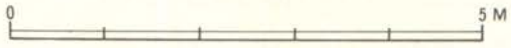
石器は34のスクレイパー1点のみで，他はすべて剝片である。34は，縦長剝片の下端および右側縁に調整剝離が正面のみ施されている。また左側縁には，使用痕が認められる。



第4ユニット



第5ユニット



第205図　第4，5ユニット

第5ユニット

礫片2点，非常に小形の剝片2点と，極めて小形のユニットであり，IV層中から出土したものである。礫片2点は同一母岩であるが接合しない。35は側縁を磨石として使用した痕跡が認められるものである。

第6ユニット

長径約9m，短径約6mの範囲に分布し，VI層を中心として出土しているが，VII層中に含まれるものも少くない。総数24点出土しているがナイフ形石器3点(36～38)，調整痕の施された剝片が1点出土している。36～38のナイフ形石器は比較的丸味を帯びた形状のものである。36の左側縁は，表裏両面に調整剝離が，基部の右側は表面にのみ施されている。37は左側縁，右側基部とも表裏両面に調整されているが，主としては，表面である。37は，2片折損していたものが接合したものであるが，主として表面に調整剝離がなされているものである。41は左右側面の下端に，表面のみ調整剝離がなされている縦長の剝片である。

第7ユニット

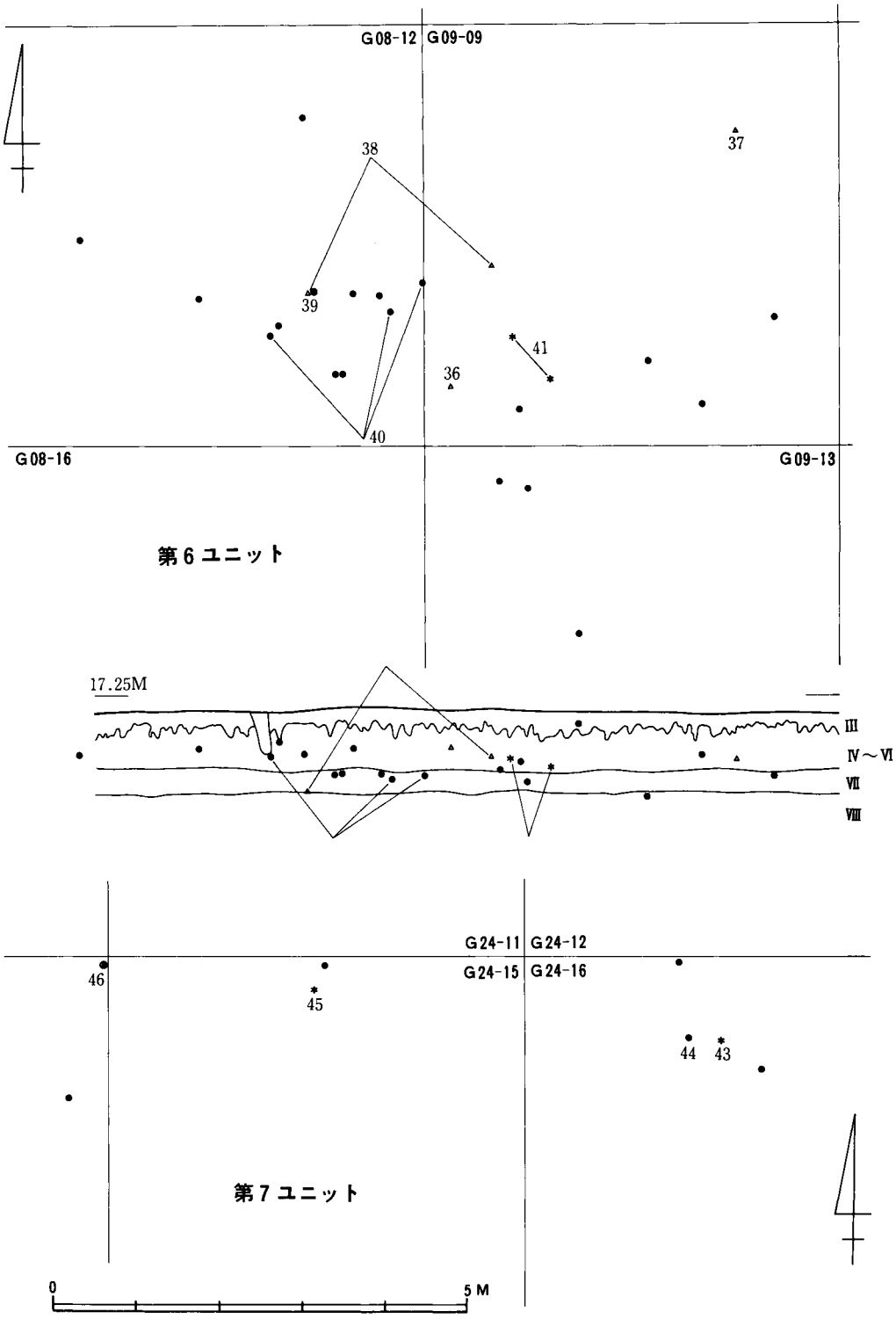
長径約8m，短径約1mの細長い範囲に分布しているもので，遺物総数8点と小規模のもので，主としてVII層中から出土している。43は，縦長剝片の下端部を使用したもので，左側縁には使用痕が認められる。45は，右側縁の上半分に，裏側に調整剝離を施した縦長の剝片である。46は断面三角形の礫の一部であるが，三面にはいづれも磨いた痕跡が認められる。

第8ユニット

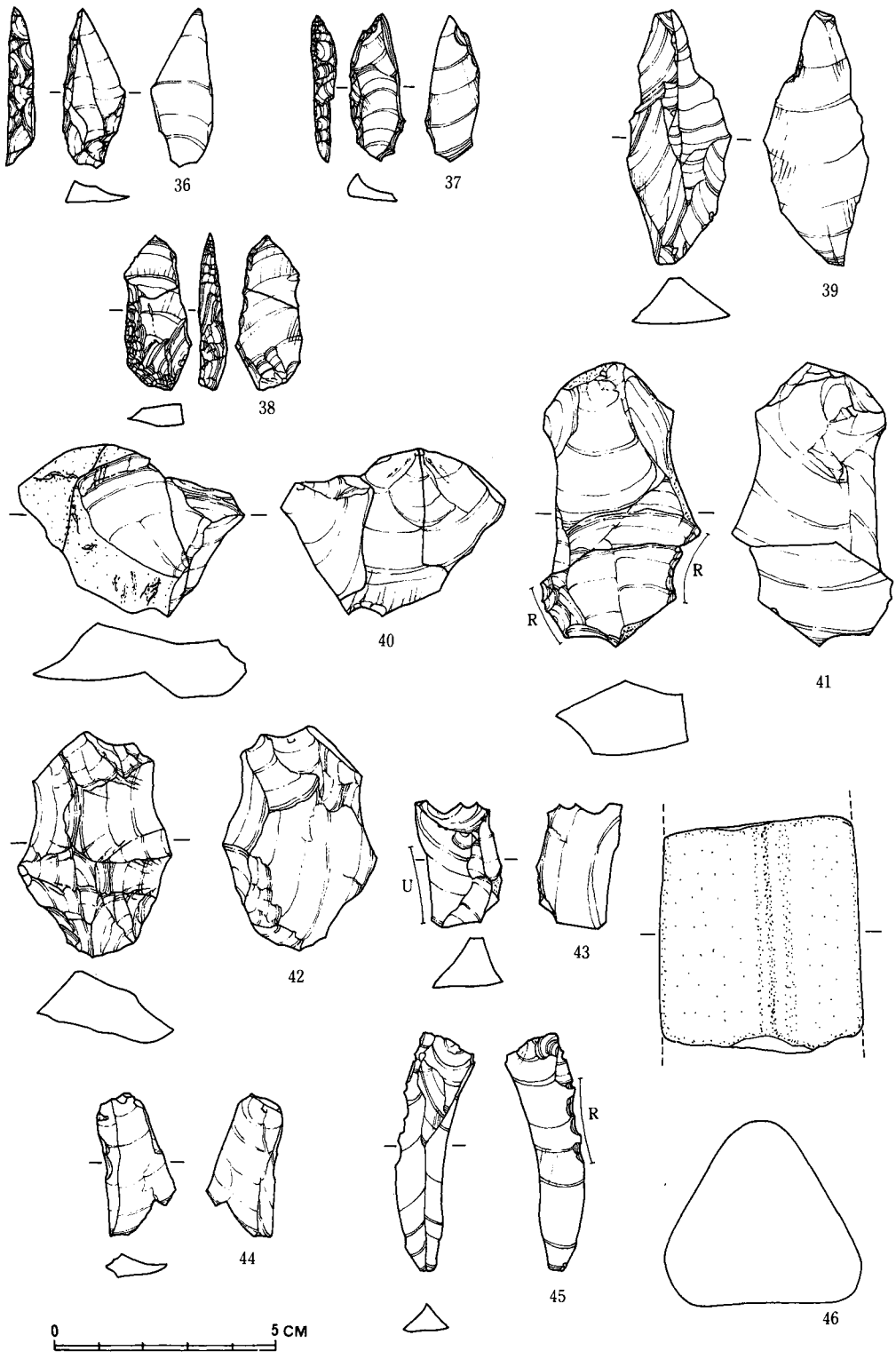
長径約14m，短径約6mの細長い分布を示すもので，分布の中心は西側に認められるものである。VII層を中心に分布しているが，VI層からも一部出土しており，遺物総数は56点である。石器は，49の，左右両側縁上部に使用痕の認められる縦長剝片と，50の磨石，51の敲石の3点で，他はすべて剝片である。50は，側面が全周にわたり磨かれた痕跡が認められ51は側面の3ケ所に，敲石として使用された痕跡が認められる。47の接合資料はいづれも剝片のみである。47—1は，石核打面調整の剝片で，この剝離により2の剝離を行っている。しかし，剝離は下よりも行われている事が他の剝片からも見る事ができる。

第9ユニット

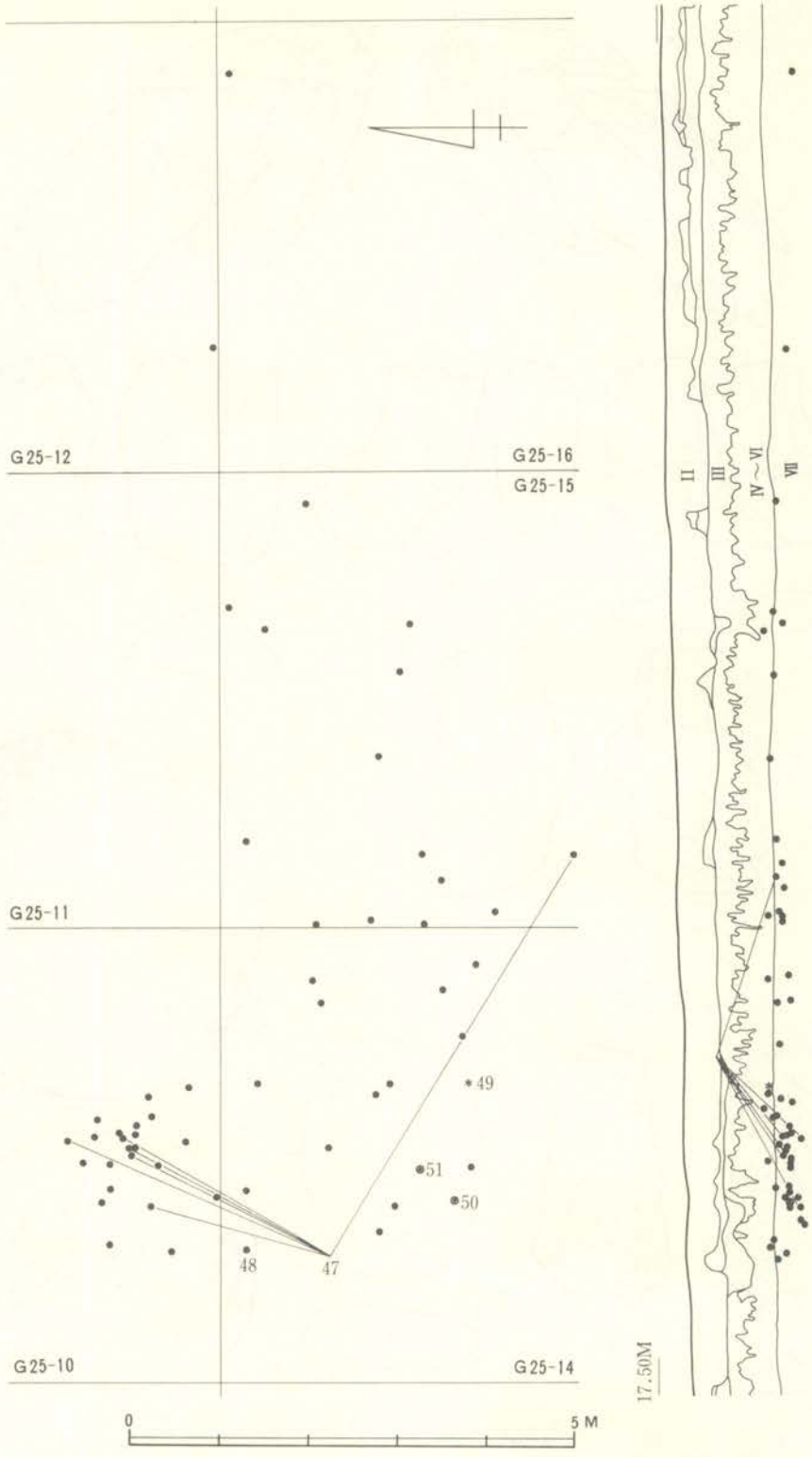
計8点が，長径約9m，短径約2mの範囲に分布している小規模のもので，VII層を中心として，一部VI層に及ぶユニットである。総数の少ない割には，ナイフ形石器2点（52，55）スクレイパー1点（54）と石器も多く，礫2点（56，57）も出土し，多様なものである。52は，左側面の上部，右側面の下部に，主として表側に調整剝離が施されている。縦長剝片を使用し，やや細身の形状で，先端の一部を欠損している。55は，ナイフ形石器の基部と思われ，左右両側面，下端面には，非常に緻密な調整剝離が表側に施されている。54はスクレイパーで，横長剝片の上端に，細い調整剝離を施している。56は，偏平な礫の一部で，ほぼ半分を欠損してい



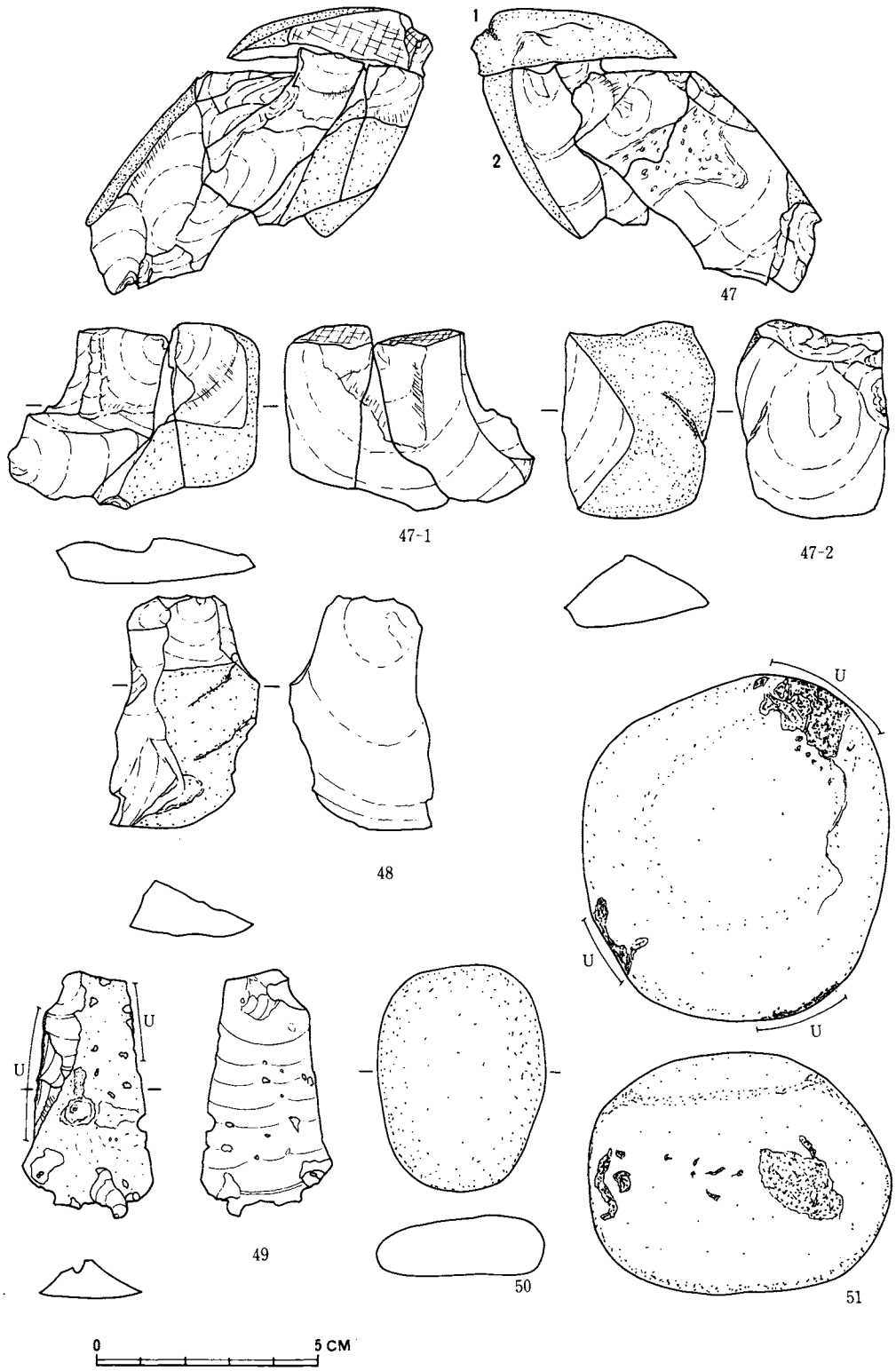
第206図　第6，7ユニット



第207図　第６，７ユニット出土遺物



第208図　第８ユニット



第209図　第８ユニット出土遺物

ると思われ，57はやや大形の礫である。

第10ユニット

径約50cmの範囲に，ナイフ形石器４点，いづれもIII層中から出土したものである。58は細身の形状で，基部と，右側面上部に，比較的簡単な調整剥離を行っている。裏面には調整剥離はなされていない。59は，厚手の縦長剥片を使用したもので，基部は表裏両面に，左側縁上部は表面にのみ調整剥離が施されている。60は，右側縁と左側縁基部に，丁寧な調整剥離が施されているもの，61は左側縁と右側縁基部にやはり表面に調整剥離が施されているものである。

第11ユニット

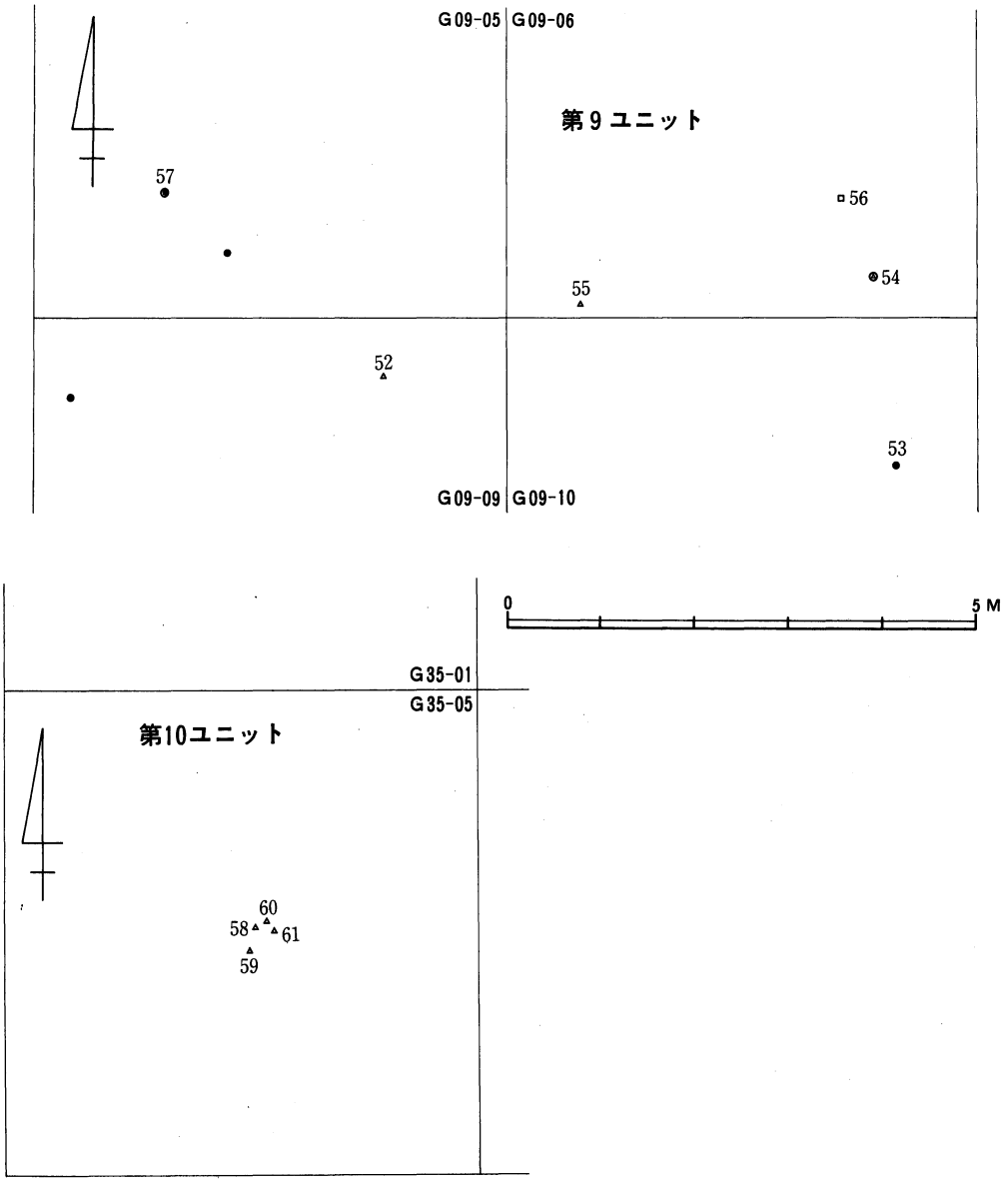
径約５mの範囲に101点が出土したもので，VII層下部からVIII層に及ぶものである。このユニットは，１点を除き，他はすべて同一の石材と思われる。しかし，まとまりを持って接合したものは，62，63，64の３資料であり，接合した点数は62が22点，63は４点，64は５点であった。62の接合資料中に，石核（62－９）が存在する。この石核は，１面に自然面を残し他の５面に剥離の痕跡を残している。上面，下面の剥離は，左右両側面，裏面の剥離に先行して行われている。上面は裏側より，下面も裏側より右側面は上面より，左側面は正面より，裏面は左側面より打撃が加えられるというように，石核を回転させつつ剥離を行っている事が伺える。この接合資料には，比較的大形のものが多く，また，横長の剥片が多いようである。63は，表皮付近の剥片の接合資料で，いづれも縦長剥片である。64は，剥離のごく初めの段階のものと思われ，１，２は打面調整の際の剥片である。65～72，74，81～84は，上記の３接合資料には接合しなかった剥片である。66は，右側縁部に調整剥離が認められ，ナイフ形石器であろうか。

第12ユニット

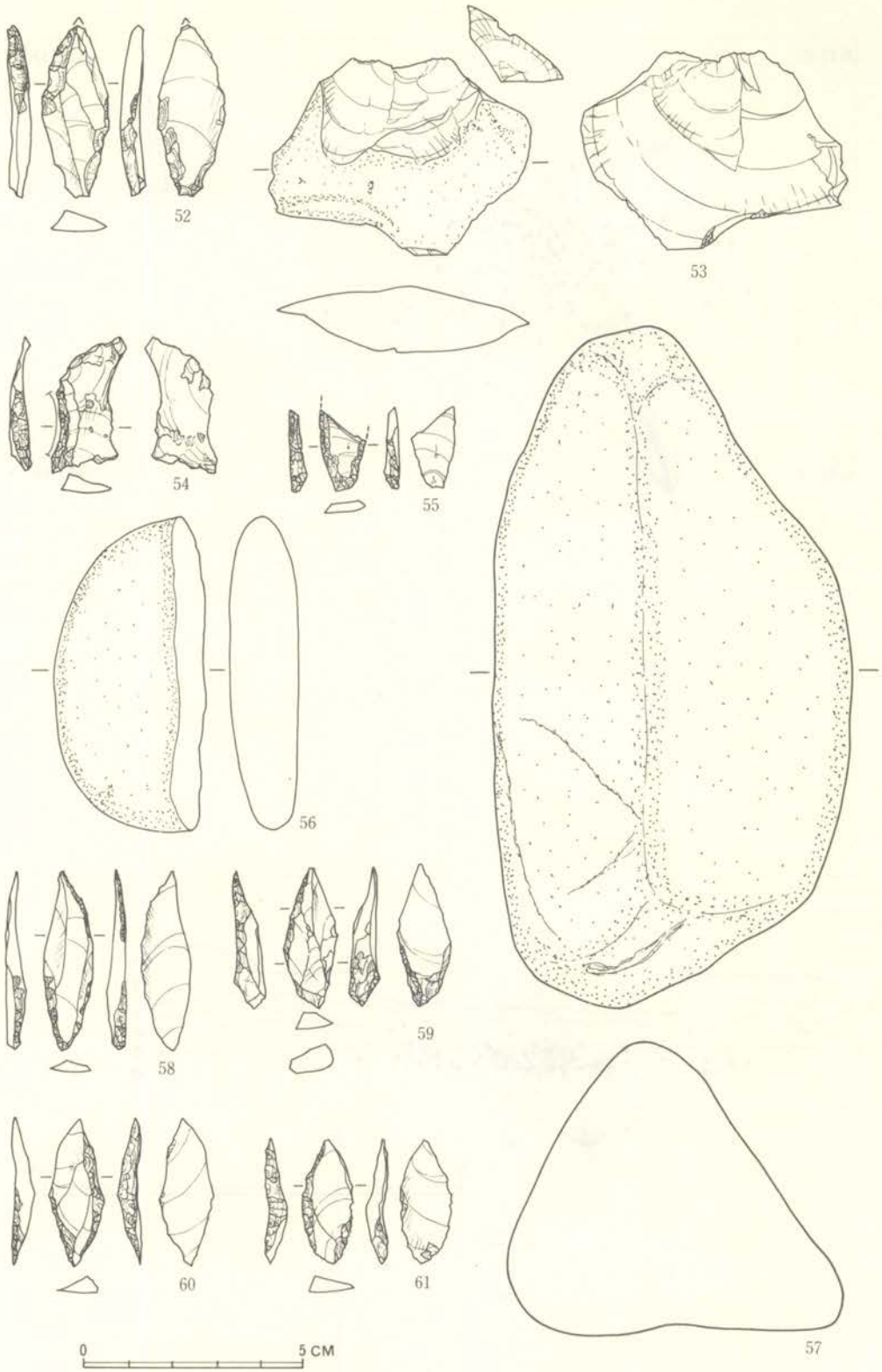
長径約10m，短径約７mの分布範囲でVI層を中心とした出土状況を示すものである。細かくは，径約５mの集中地点が北東と南西に認められ，２ケ所とも思われるが，相互に接合した資料の存在から，同一ユニットとした。85はチヨッパーで，自然礫の一端に，片面加工による刃を付けている。87，89は石核である。87は裏面，下面，左側面に自然面を残している。剥離を行った正面，上面，右側面のいづれも，各方向からの剥離を行っている。89は，比較的薄手のもので，正面，裏面ともやはり各方向からの剥離を行っている。86は剥方の下端に，非常に細かい調整剥離を行っているもので，左側縁にも使用痕が認められる。88は，縦長剥片の右側縁の裏側に，調整剥離を施したものである。

第13ユニット

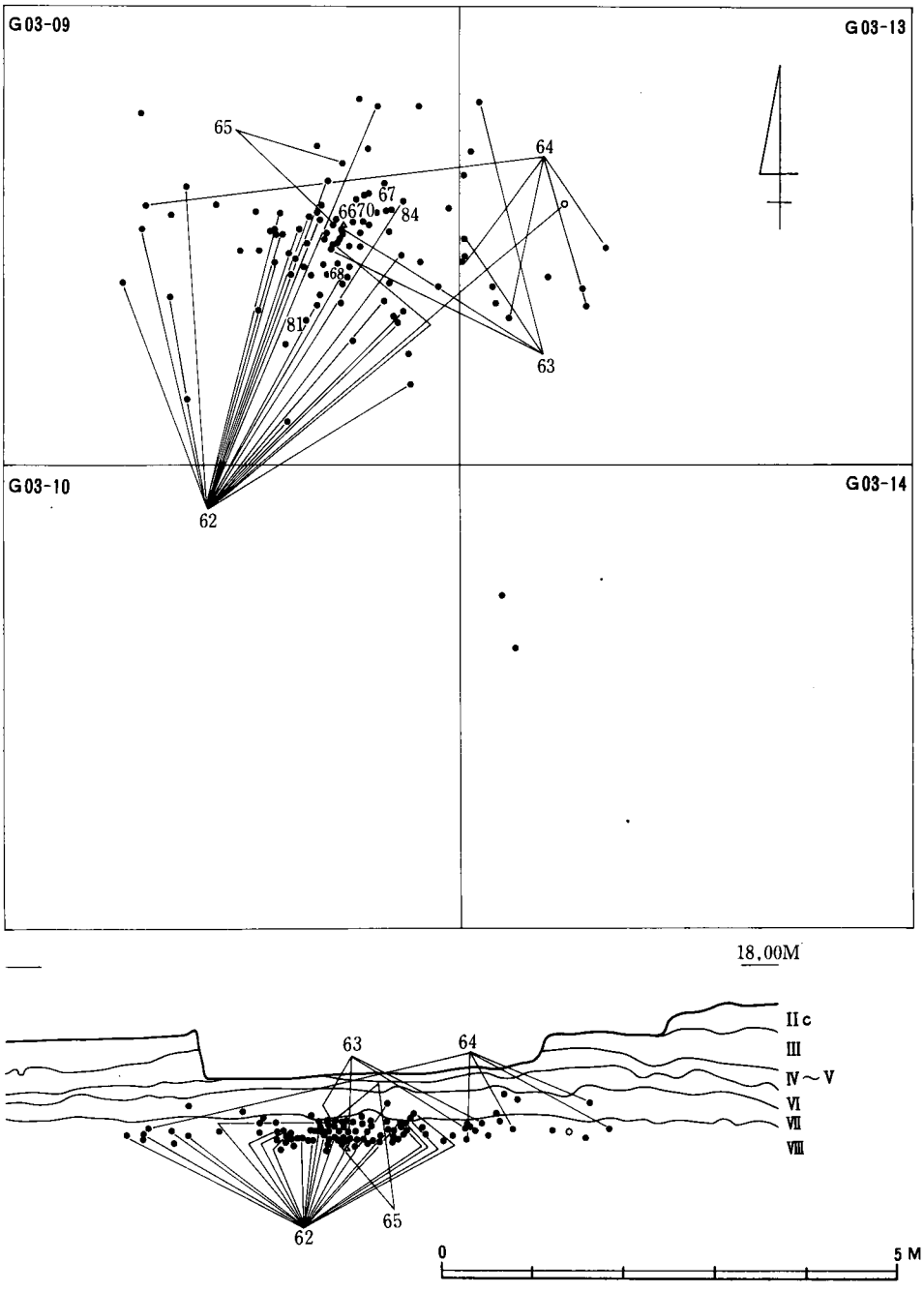
北東から南西にかけて，長径約12m，短径約７mの分布を示すものと，この南西部に接して分布しているものを一括した。総数174点でV層からVI層を中心に出土している。93はナイフ形石器で，基部の左側に，簡単な調整剥離が施されている。94はスクレイパーで，下端には自然面を残すが，左右両側縁には，正面，裏面ともに調整剥離が行われている。95はチョッパーで



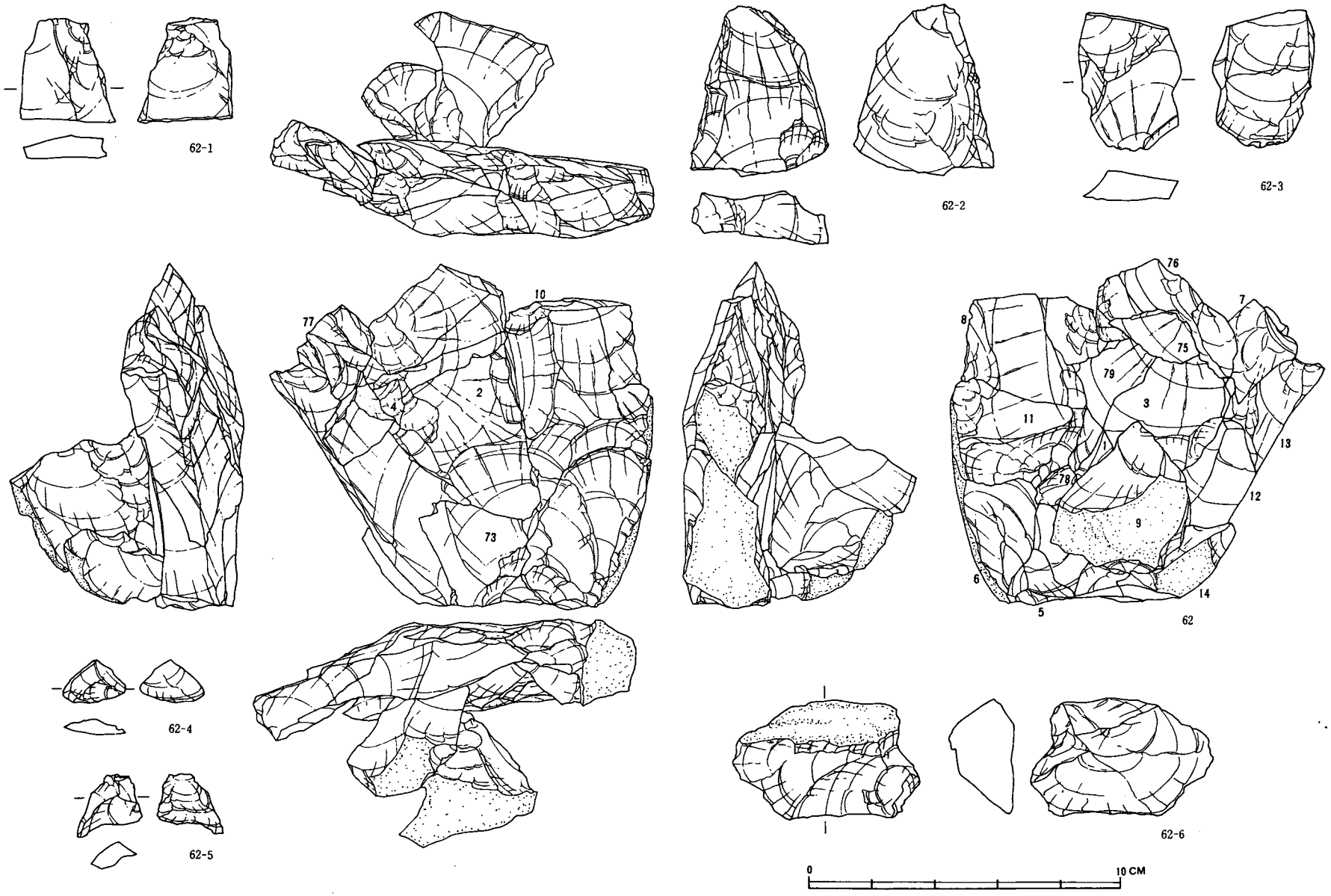
第210図　第9，10ユニット



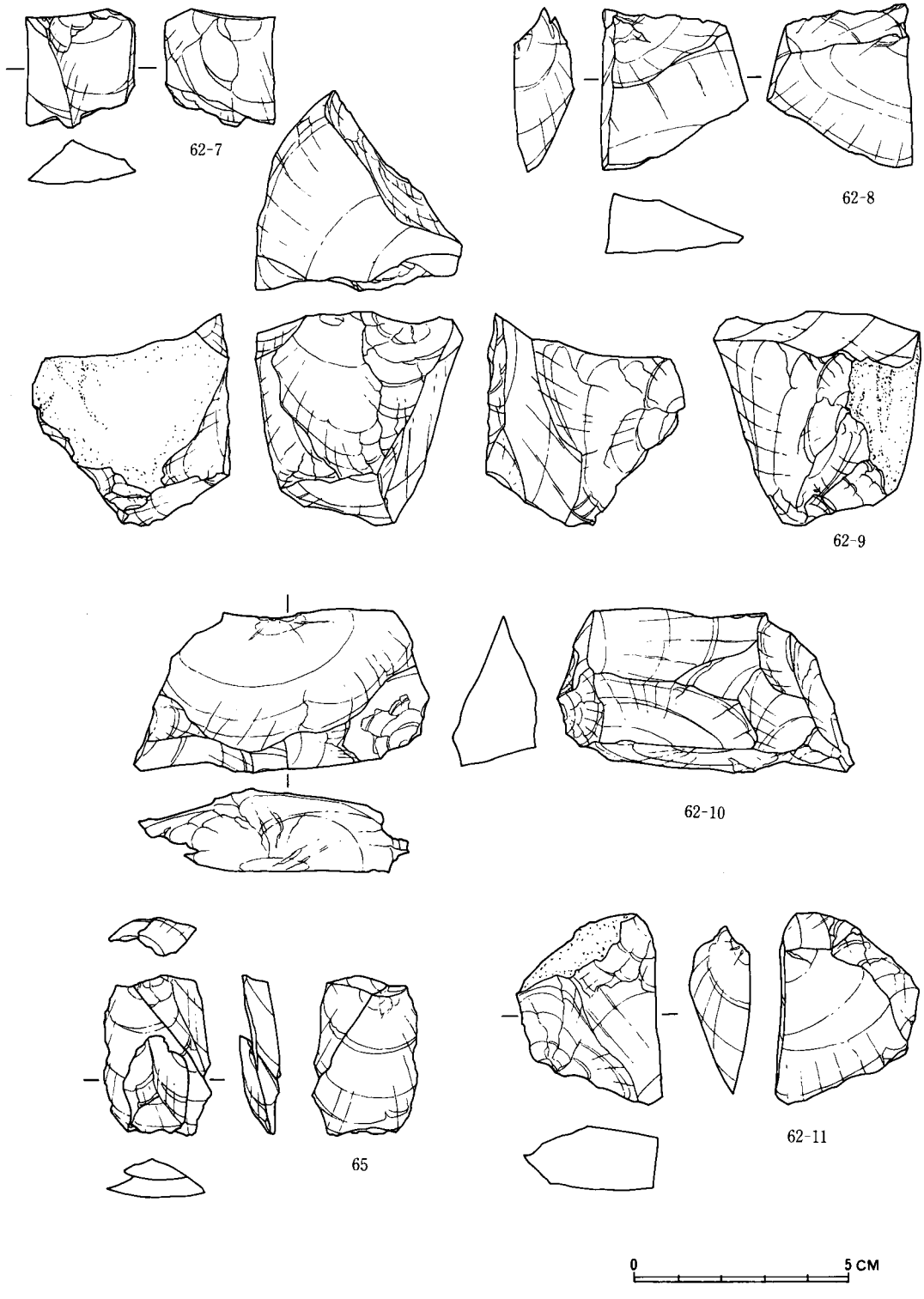
第211図　第9，10ユニット出土遺物



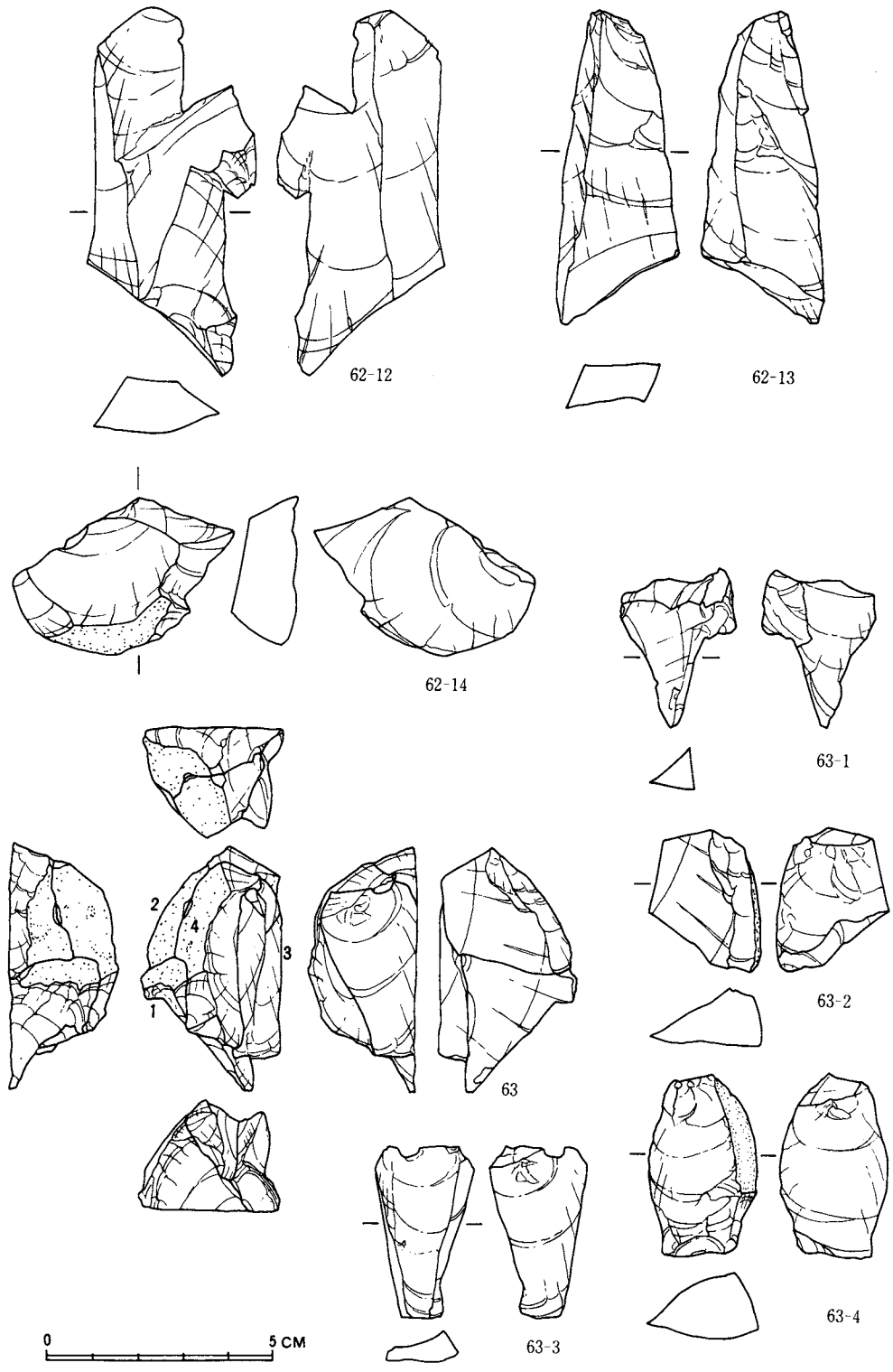
第212図　第11ユニット



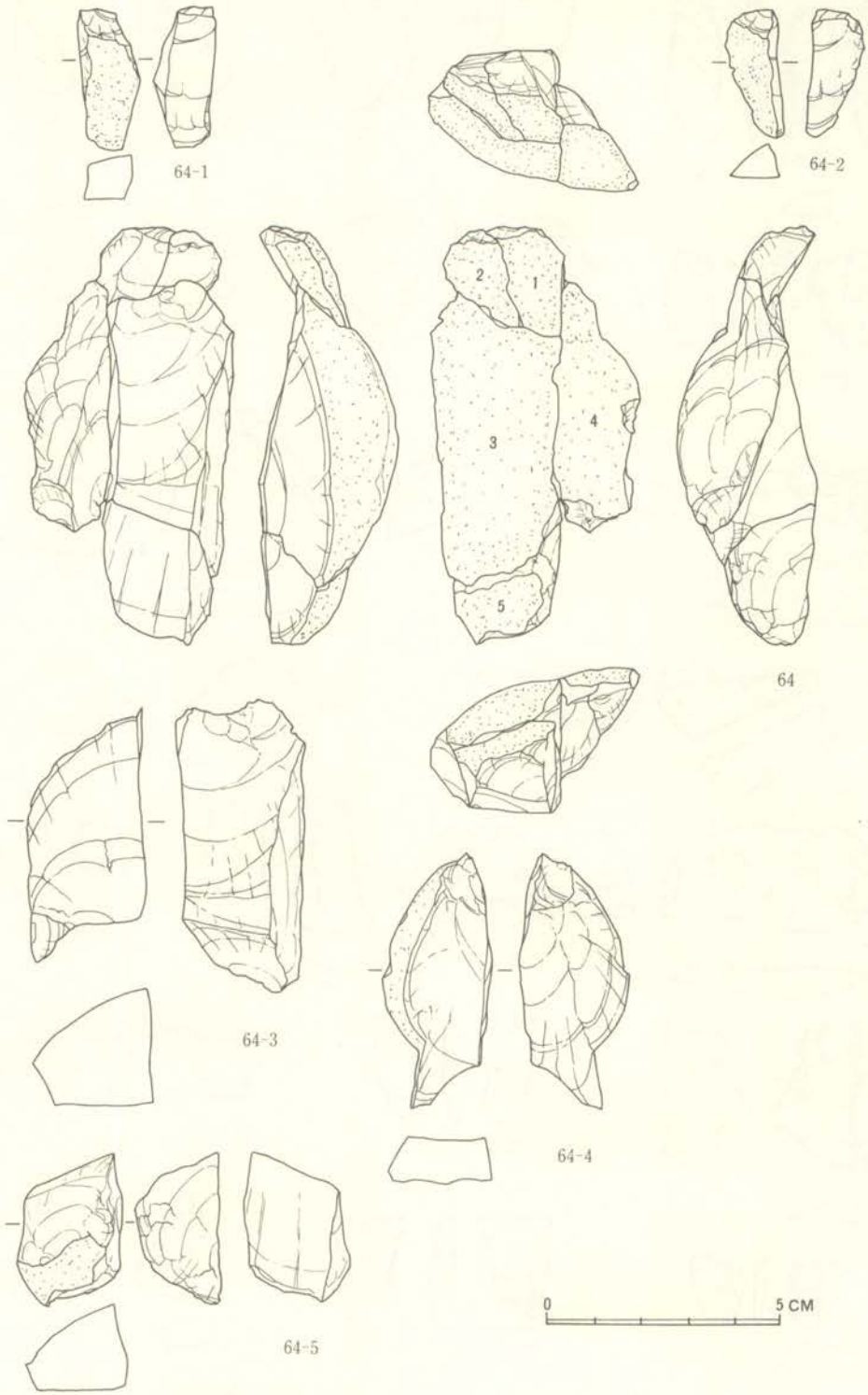
第213図　第11ユニット出土遺物



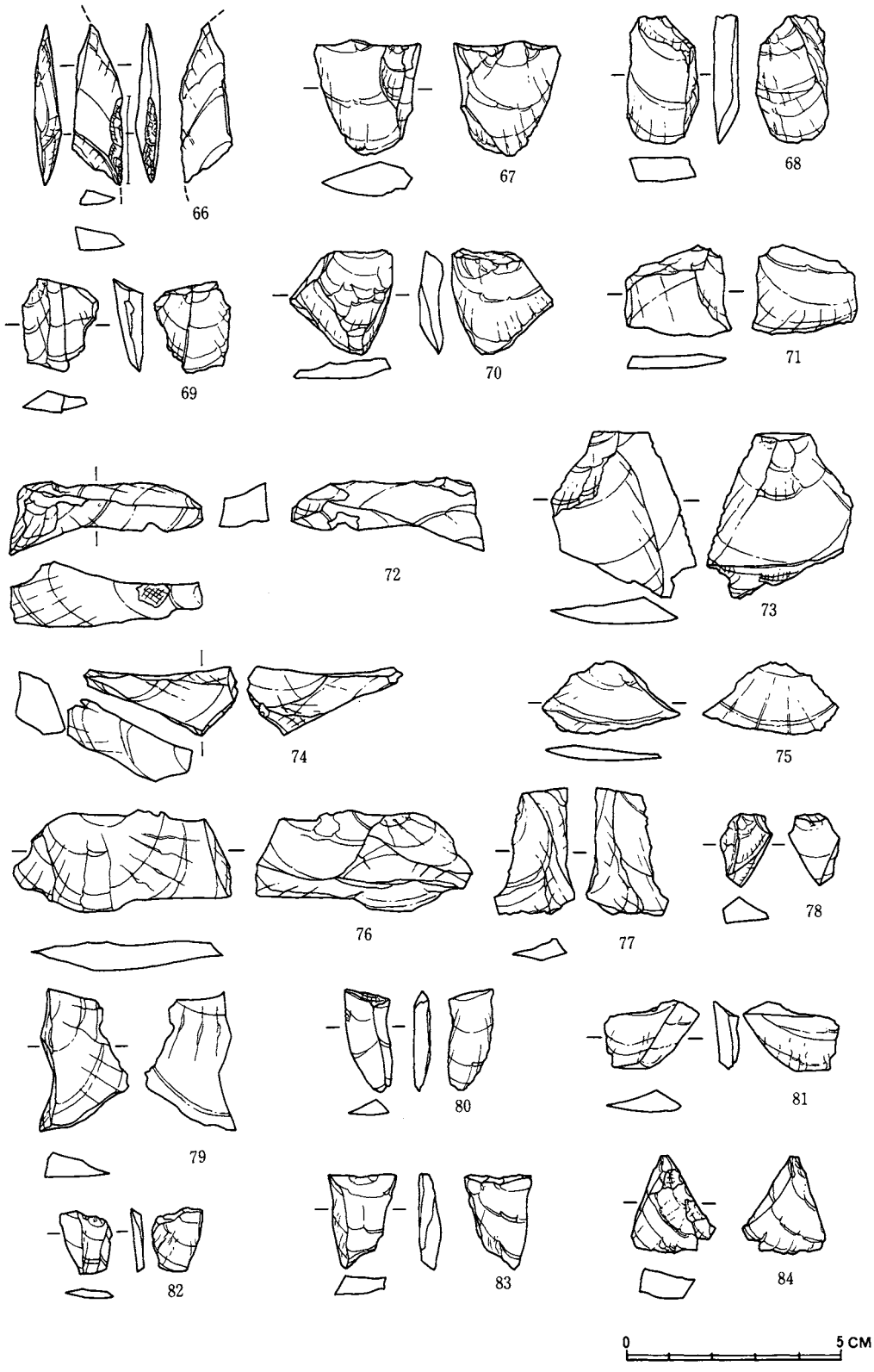
第214図　第11ユニット出土遺物



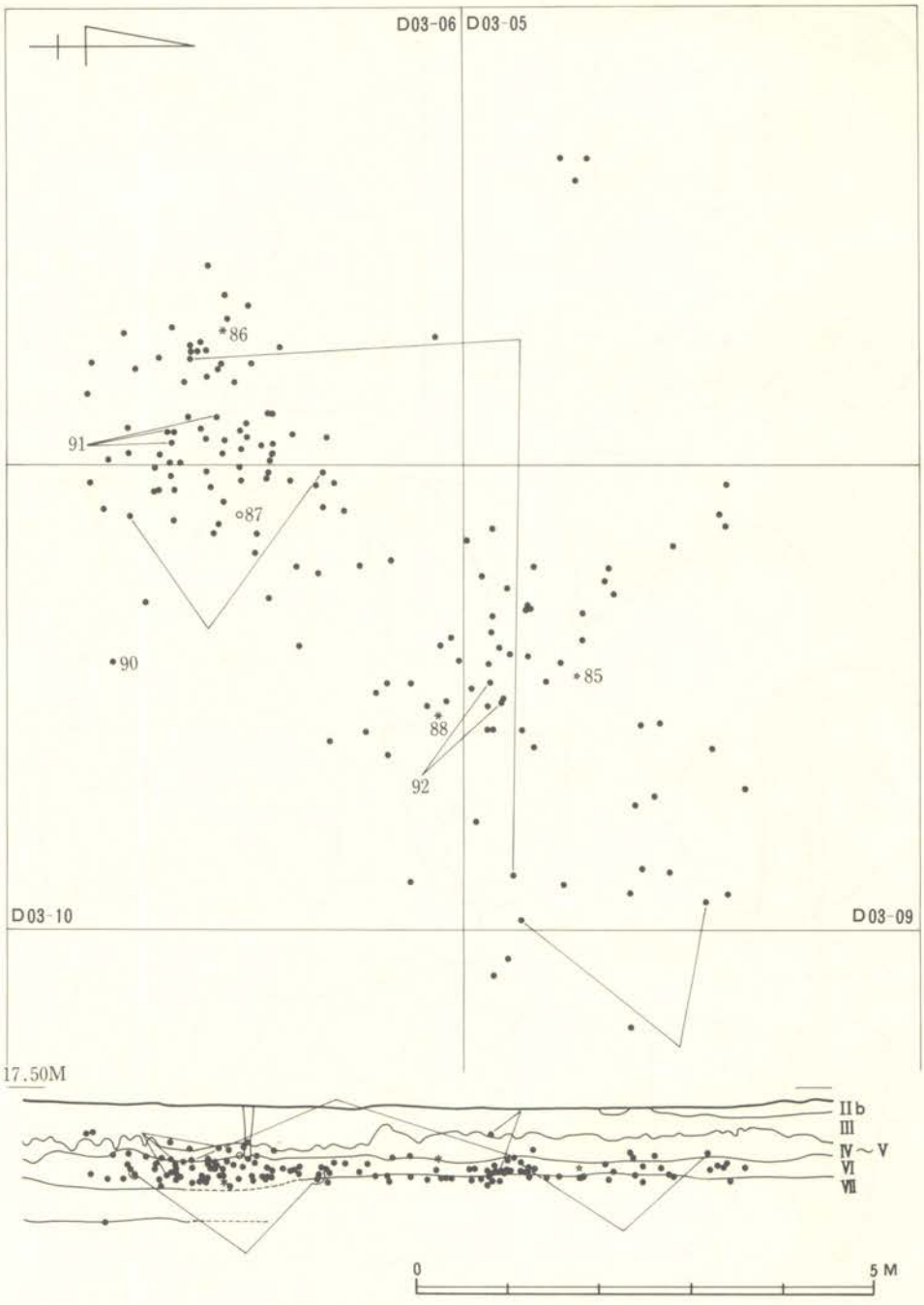
第215図　第11ユニット出土遺物



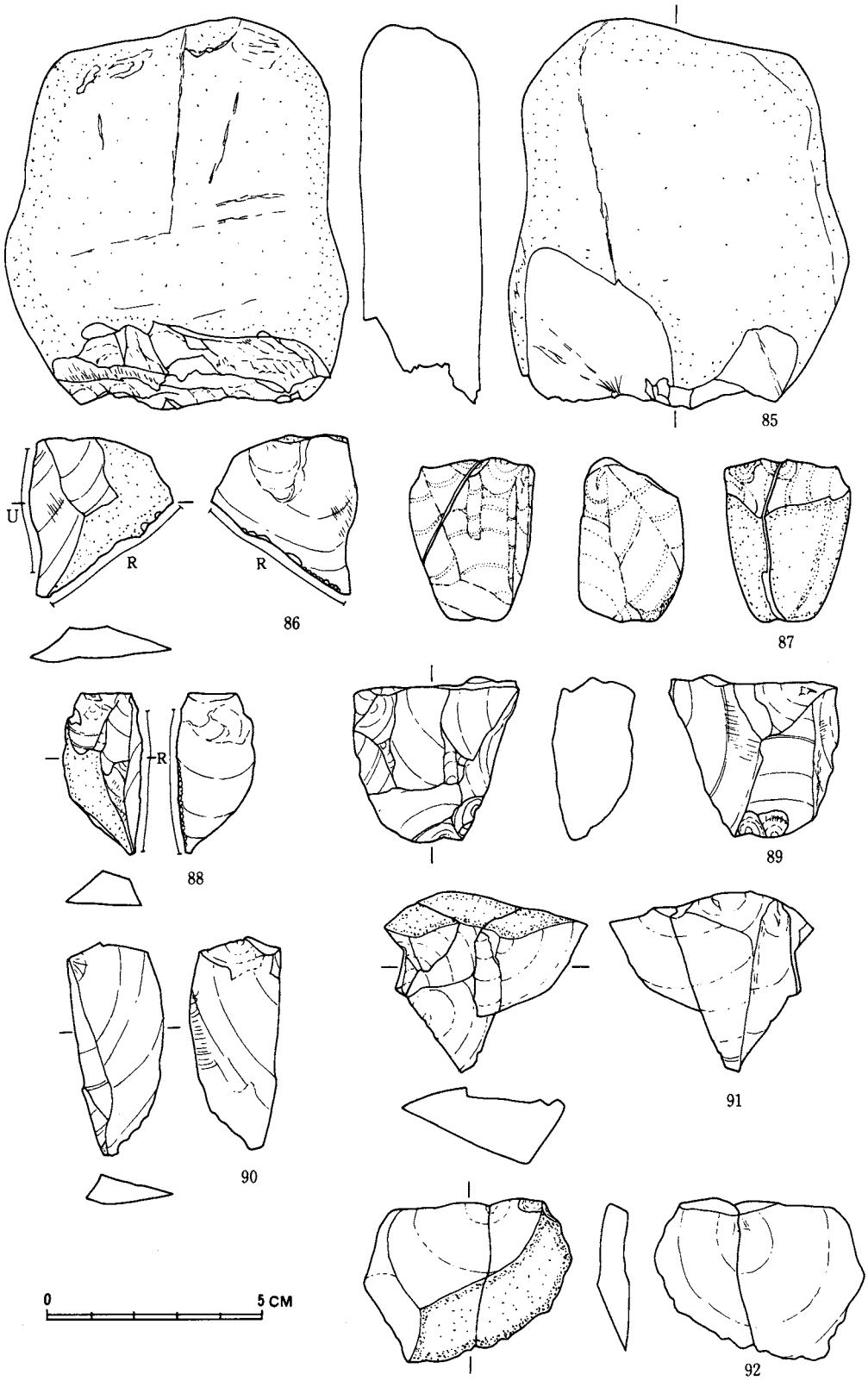
第216図　第11ユニット出土遺物



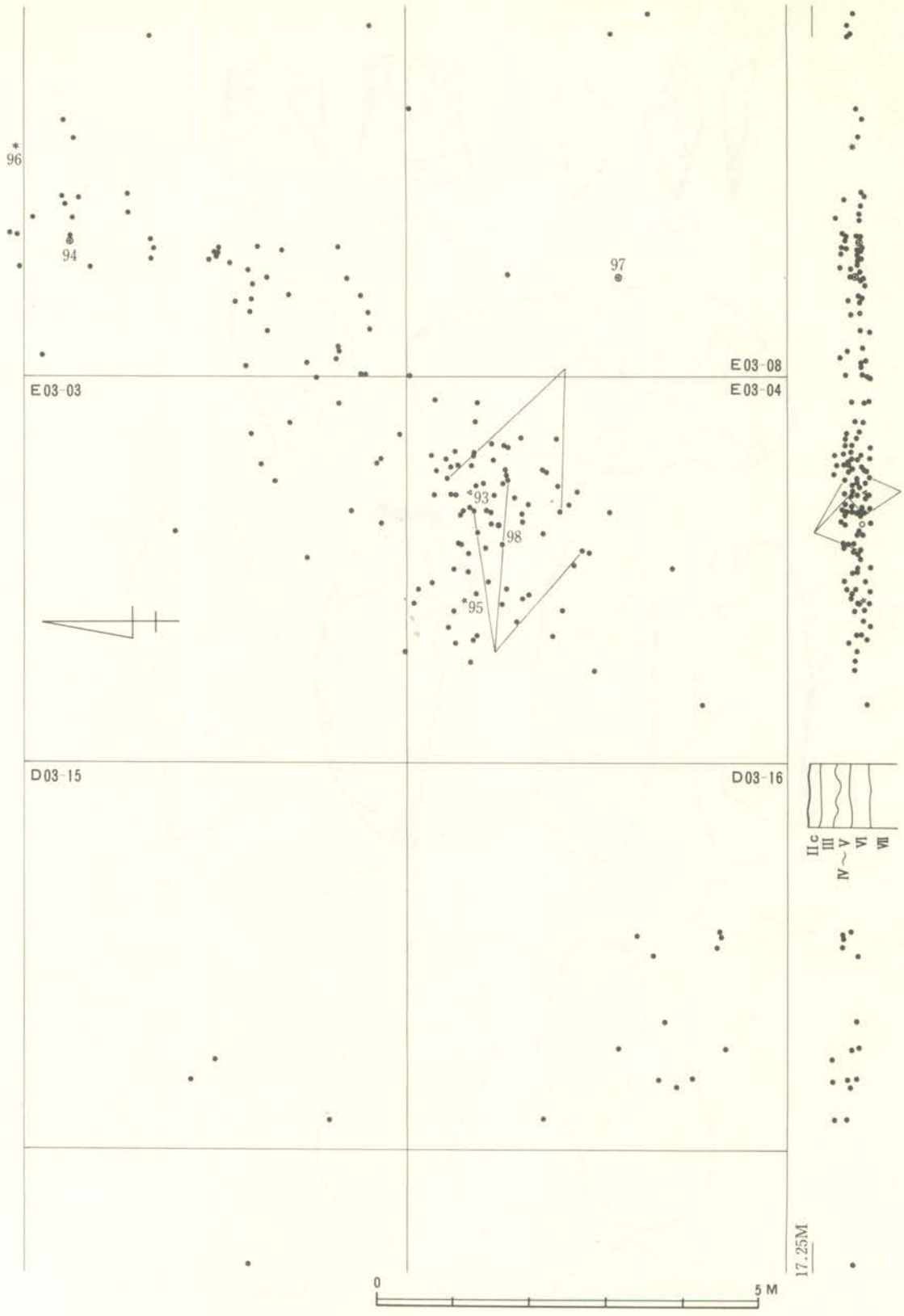
第217図　第11ユニット出土遺物



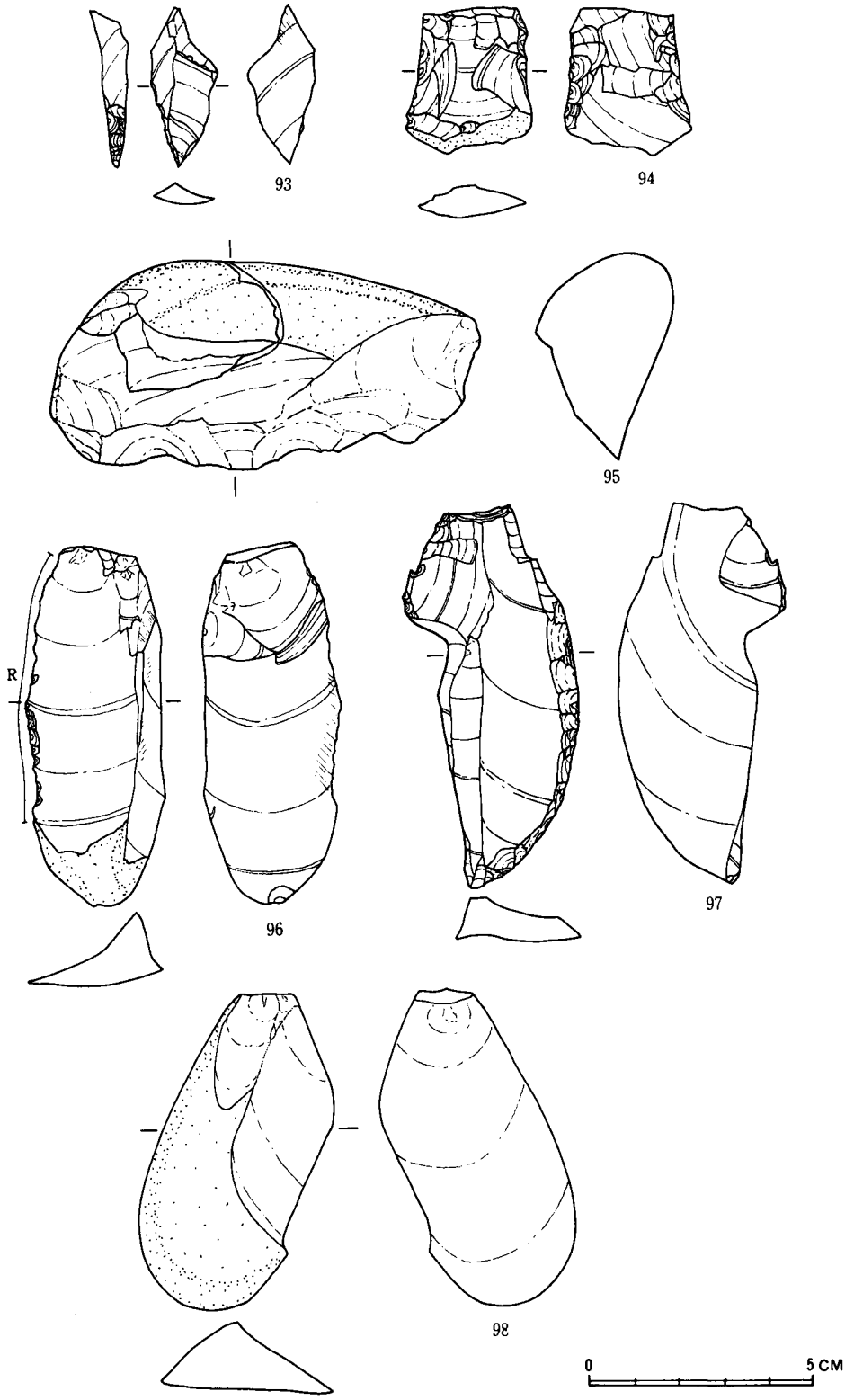
第218図　第12ユニット



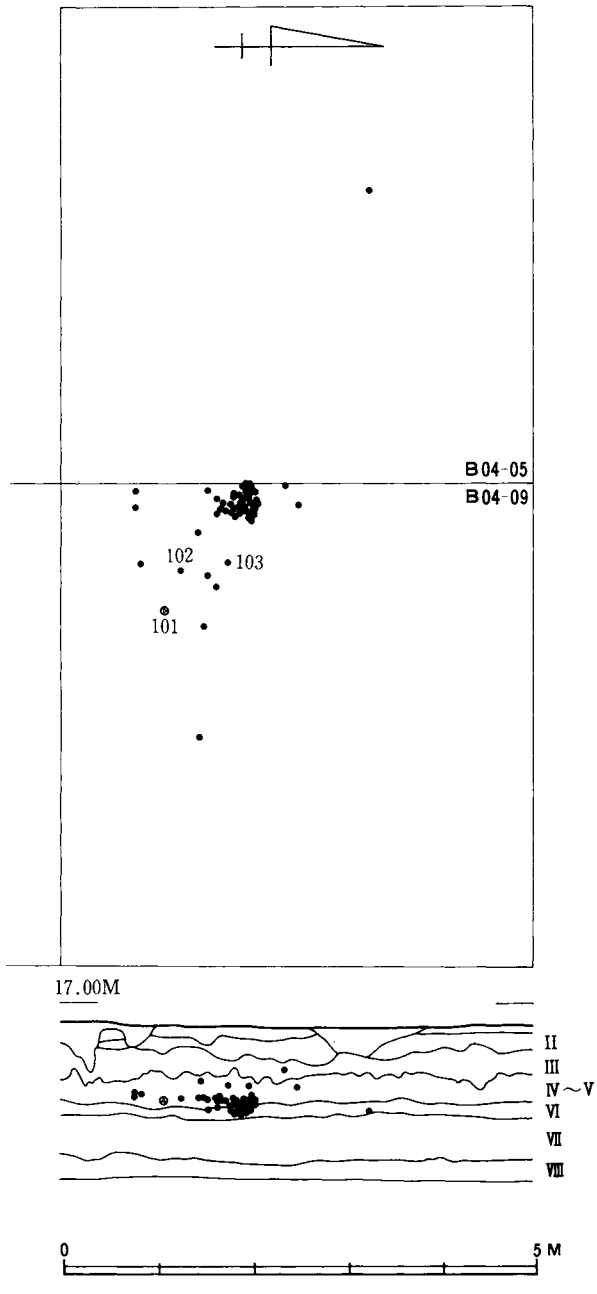
第219図　第12ユニット出土遺物



第220図　第13ユニット



第221図　第13ユニット出土遺物



第222図 第15ユニット

ある。96は縦長剝片の左側縁に，細い調整剝離が認められるものである。97はサイドスクレイパーで，右側縁には丁寧な調整剝離が正面のみに行われている。

第14ユニット

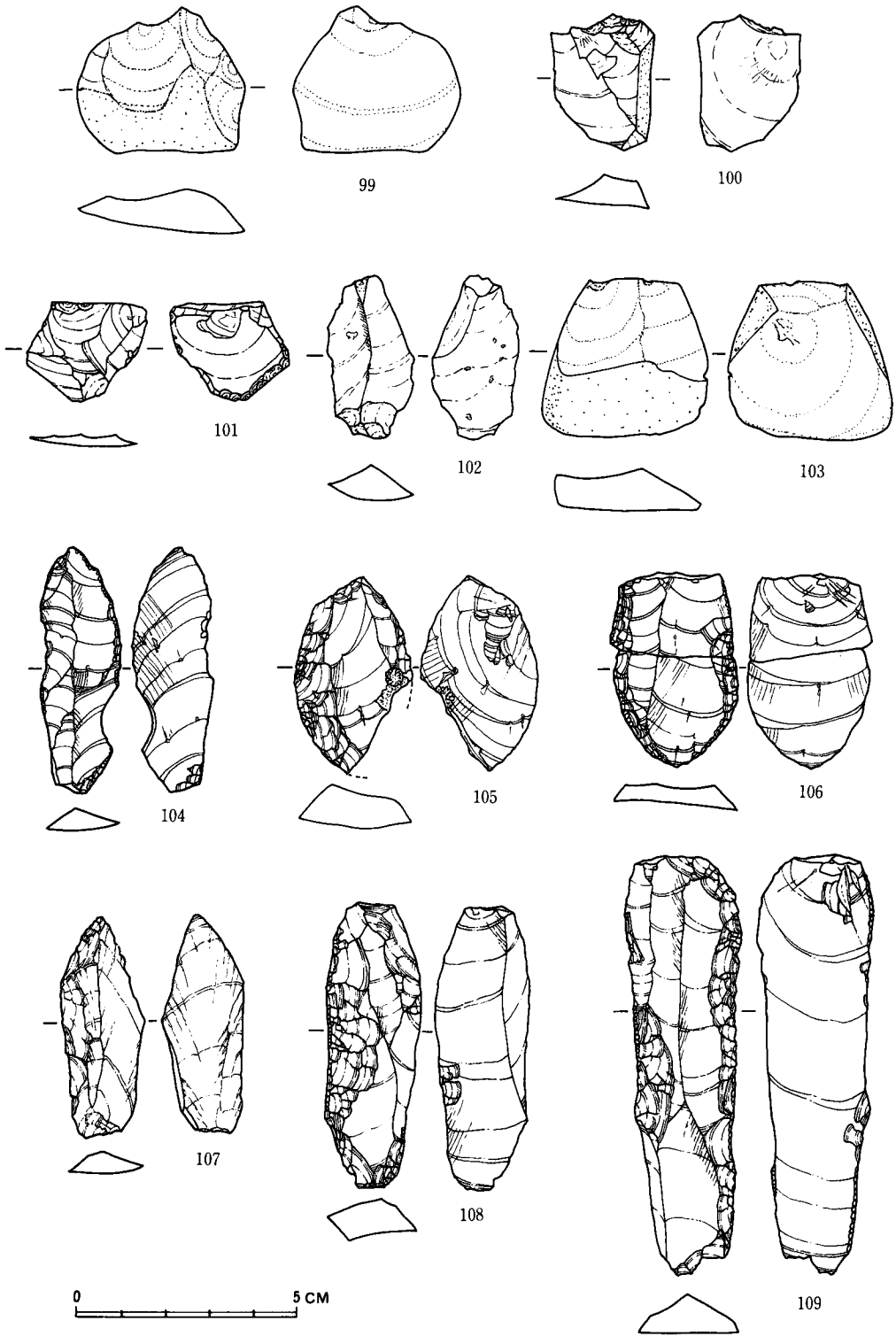
剝片のみが，V層中より出土したものである。

第15ユニット

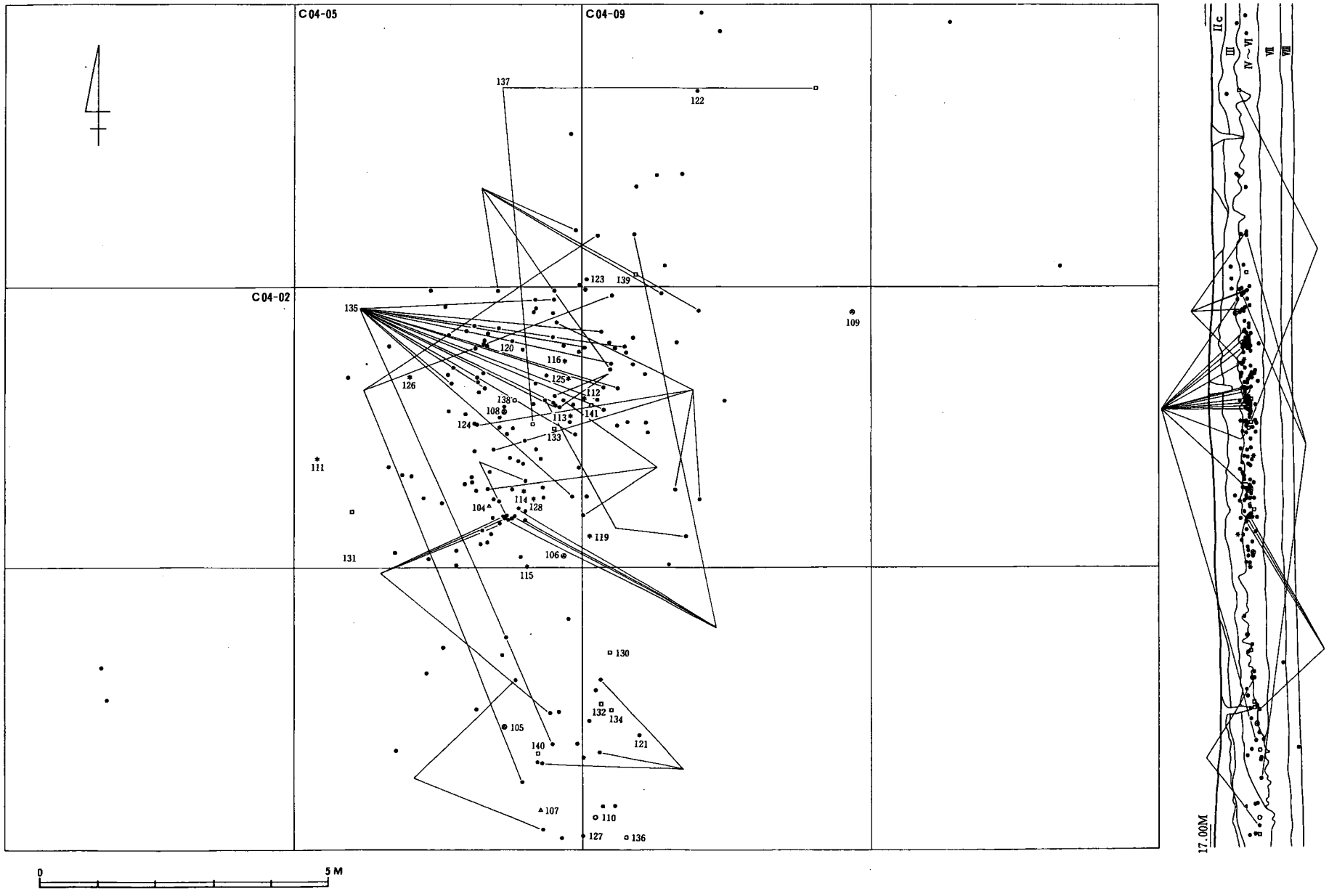
径約2mの範囲に，小形の剝片が46点集中しているものでV層を中心にIV層，VI層にも及んでいるものである。若干を除き，同一の石材である。101はスクレイパーで，下端の裏面に，調整剝離を施している。

第16ユニット

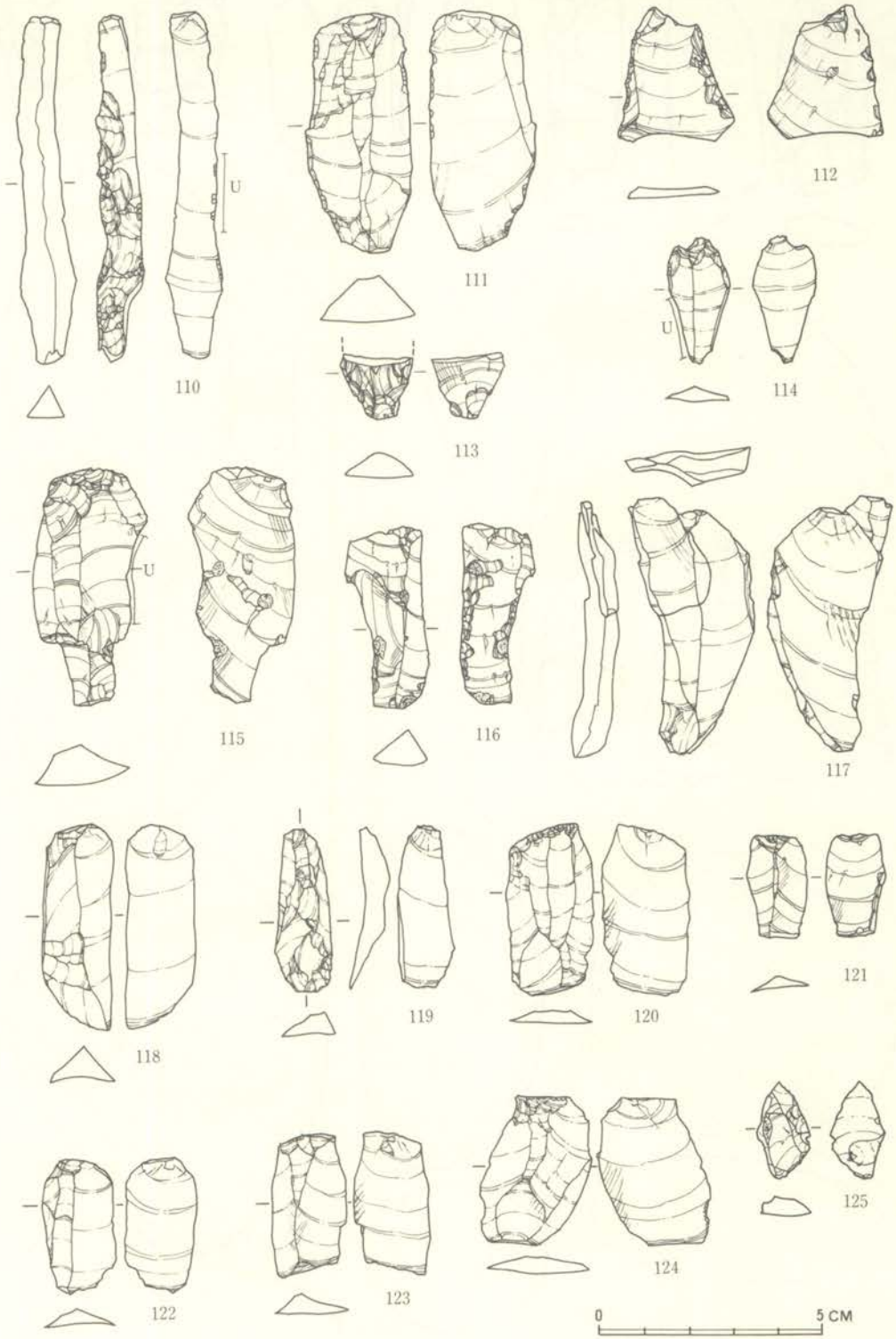
南北約16m，東西約7mの範囲に，分布の中心を有するもので，IV～V層上面付近から主として出土し，総数207点のユニットである。104，107，113はナイフ形石器と思われる。104は，左右両側縁の一部と基部に，簡単な調整剝離を施したものである。107は，左側縁の一部と先端に，やはり簡単な調整剝離を施しただけのものである。113は，基部のみ出土しているもので全容は明らかではない。105，106，108，109はスクレイパーである。105は一部欠損しているが，ラウンドスクレイパーと思われ，正面に丁寧な調整剝離が行われている。106，108，109はサイドスクレイパーで，いづれも，左右両側縁の正面に丁寧な調整剝離が施されている。106はやや丸味を帯びたものであるが108，109は細長い縦長剝片を使用している。110はスポールであるが，側縁の一部に使用痕が認められる。111，112，116は，調整剝離の施された剝片である。111は左側縁の下半分に，112は両側縁に，116は両側縁の中央部に施されており，いづれ



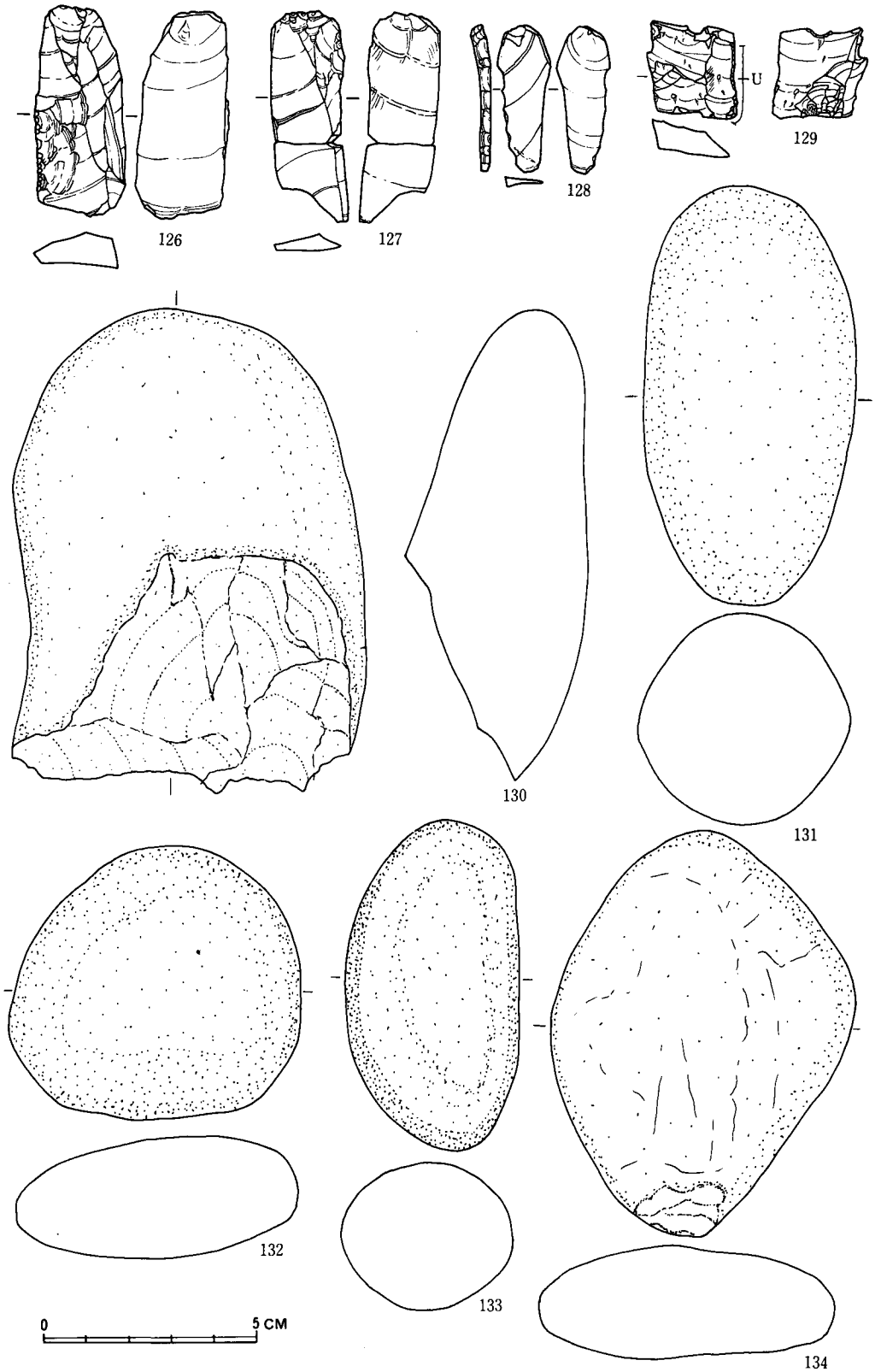
第223図　第14，15，16ユニット出土遺物



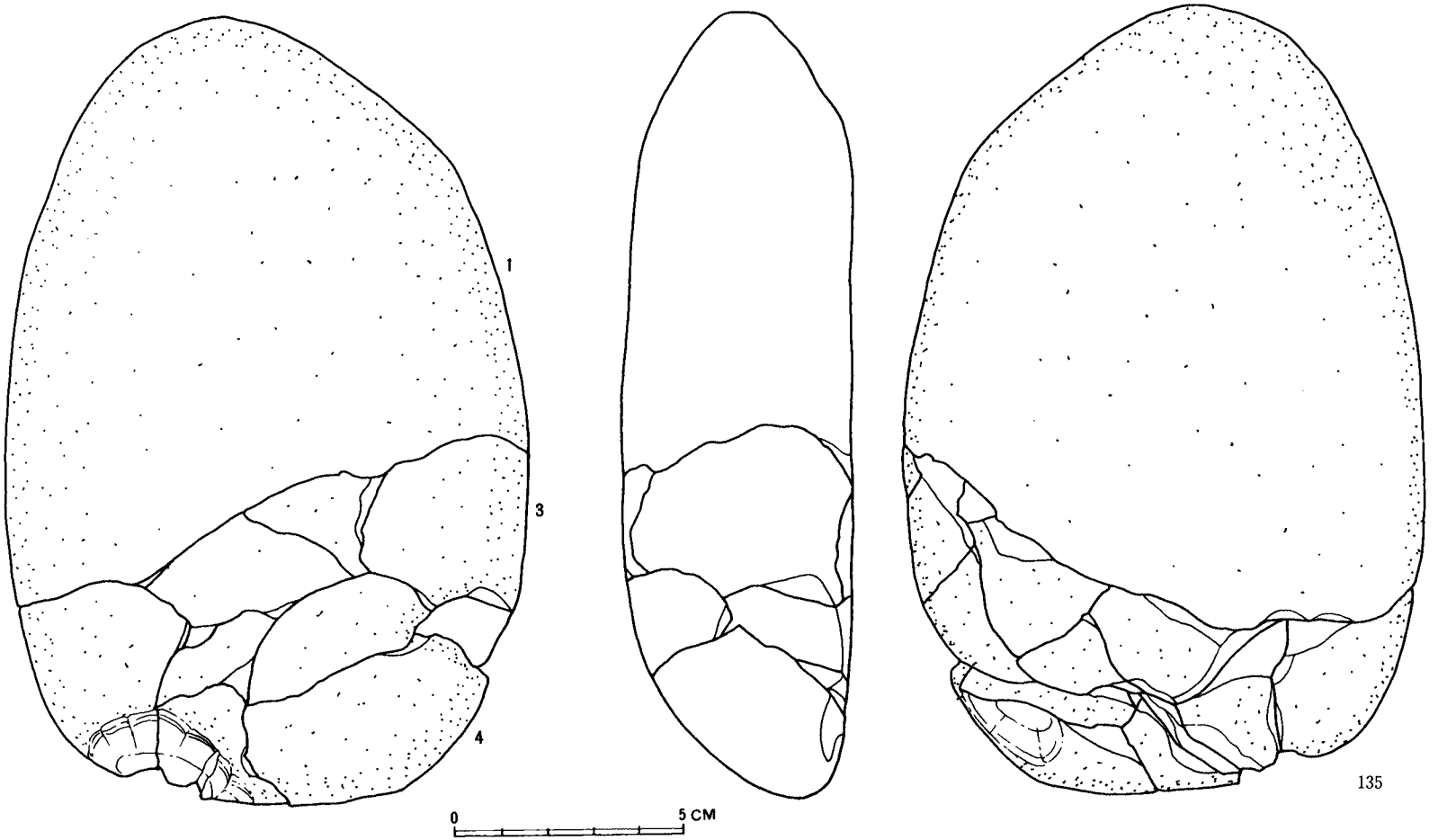
第224図　第16ユニット



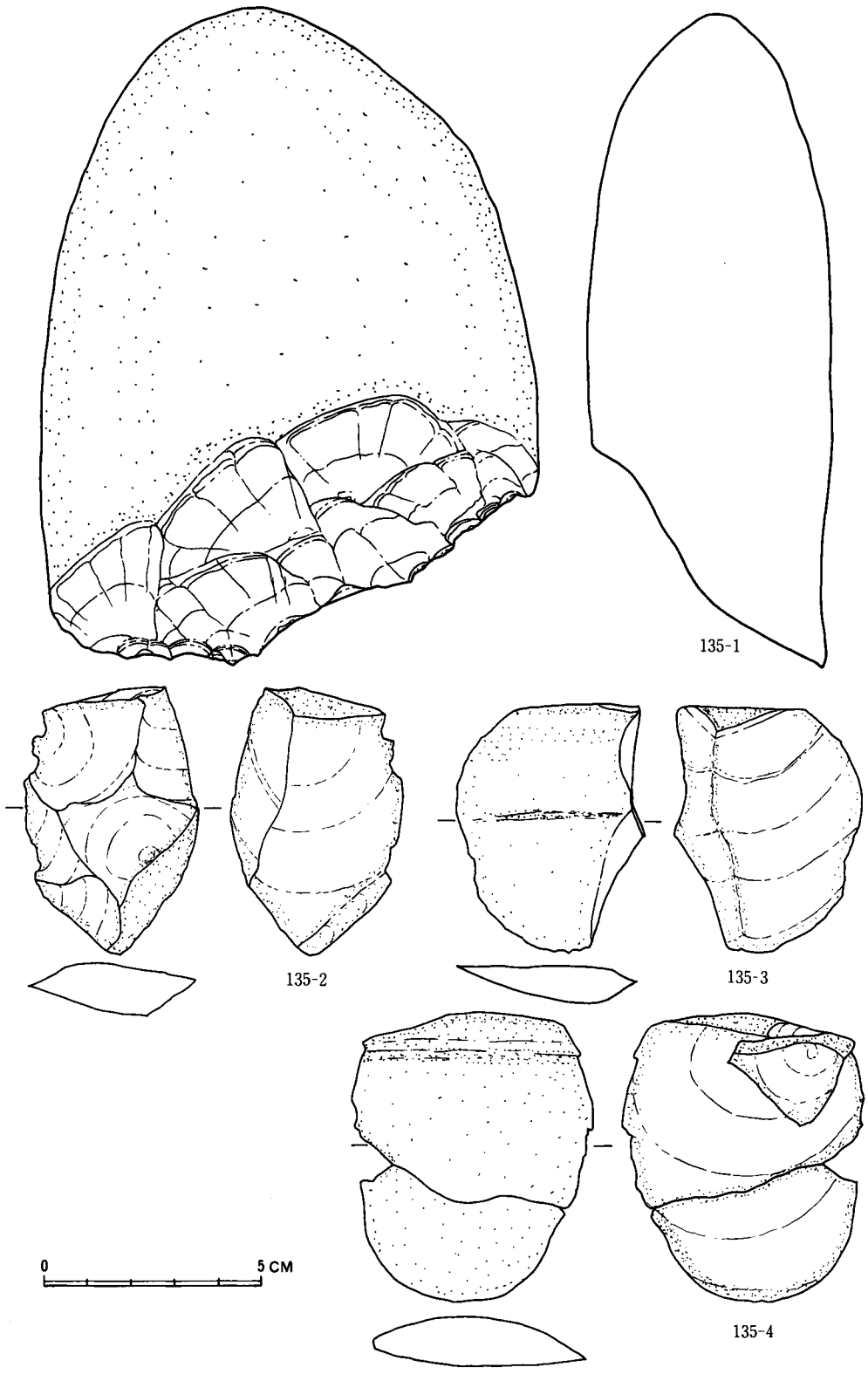
第225図　第16ユニット出土遺物



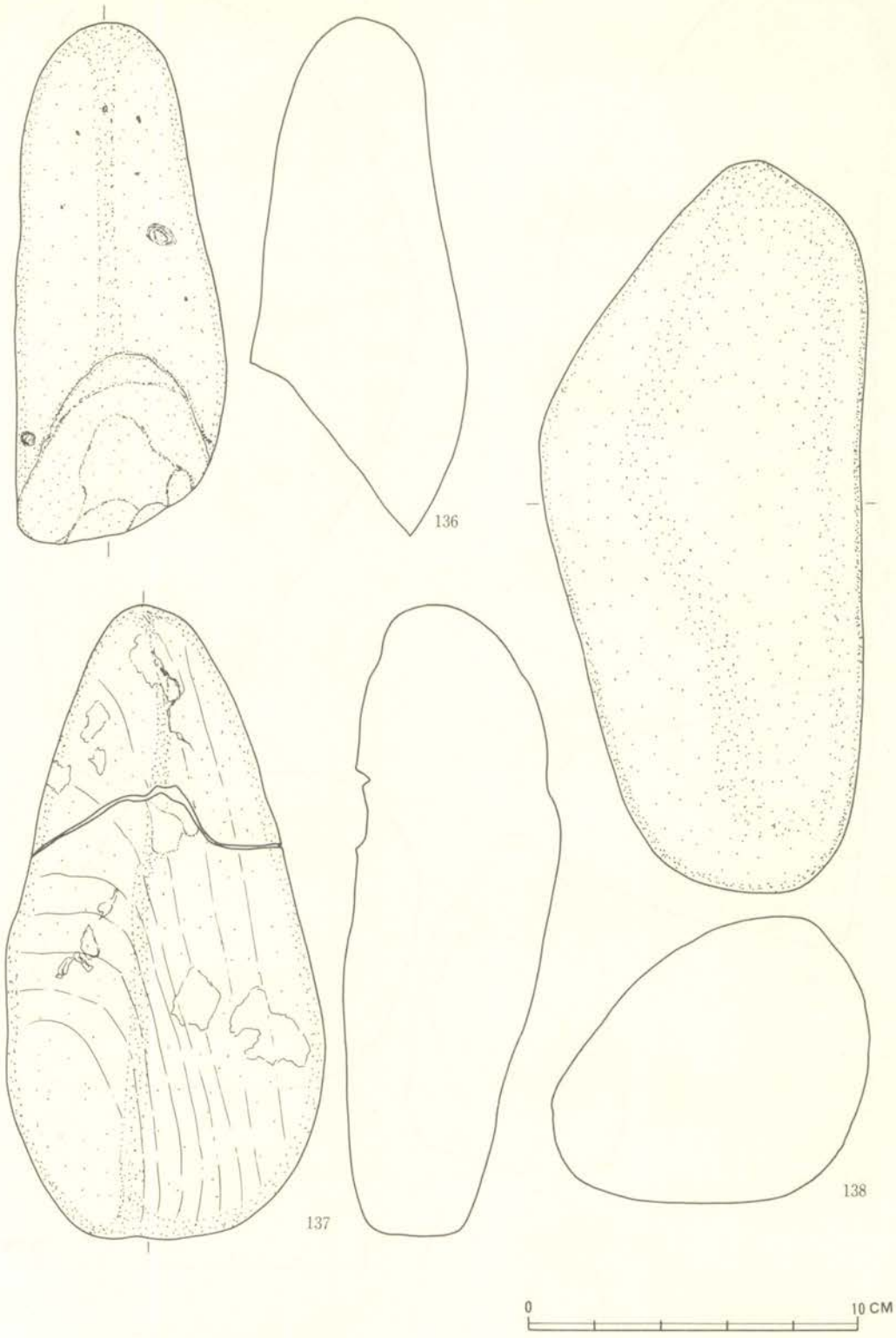
第226図　第16ユニット出土遺物



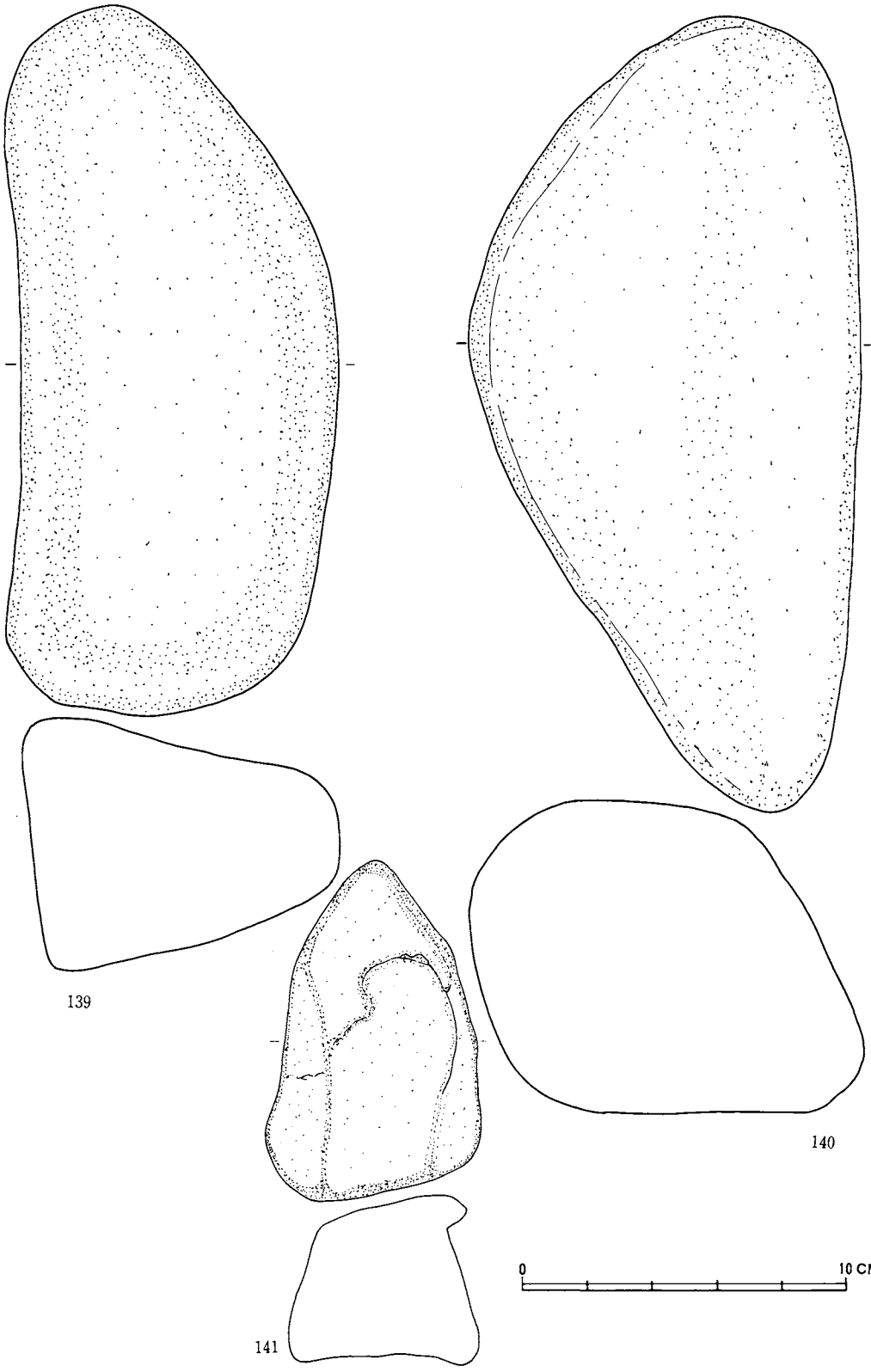
第227図　第16ユニット出土遺物



第228図　第16ユニット出土遺物

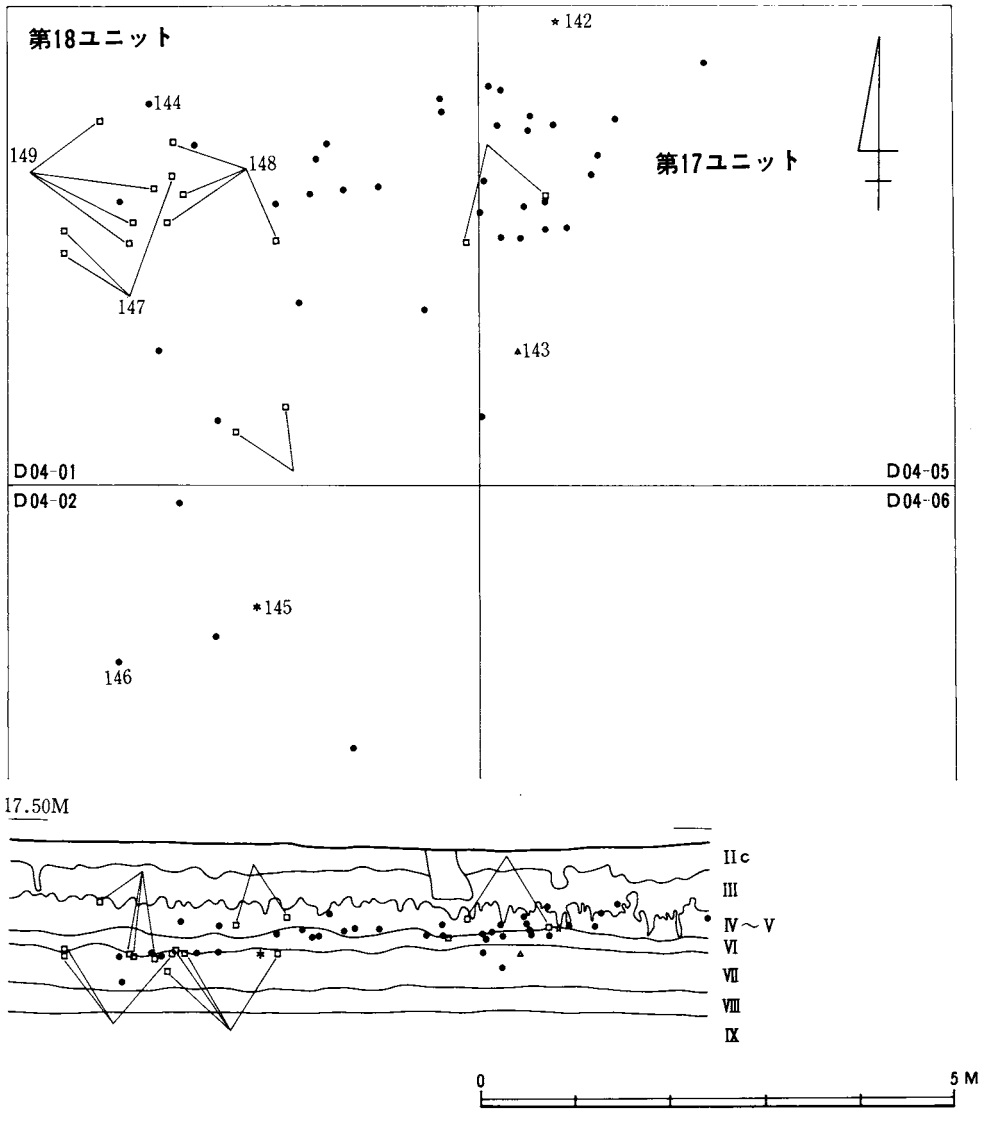


第229図　第16ユニット出土遺物

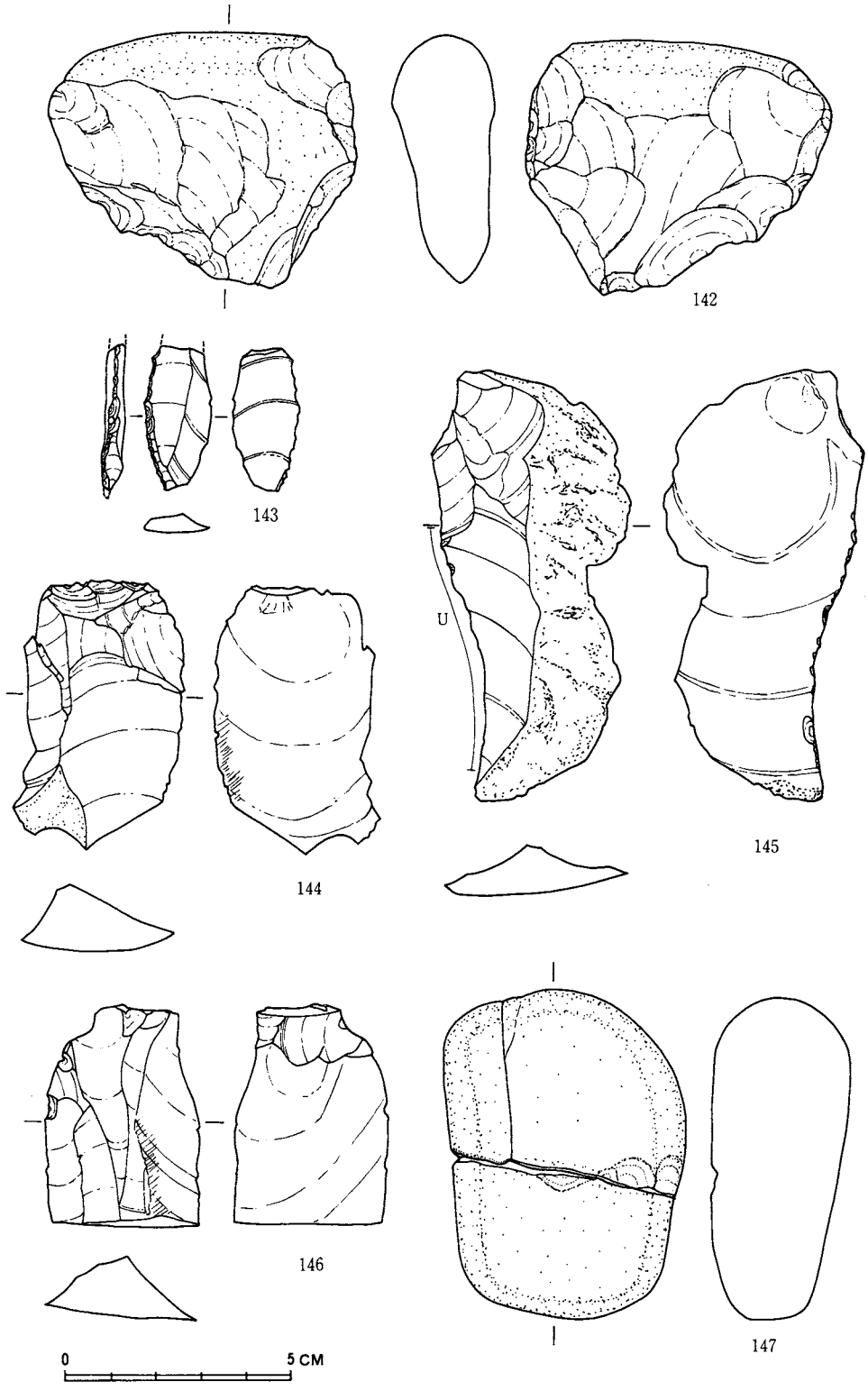


第230図　第16ユニット出土遺物

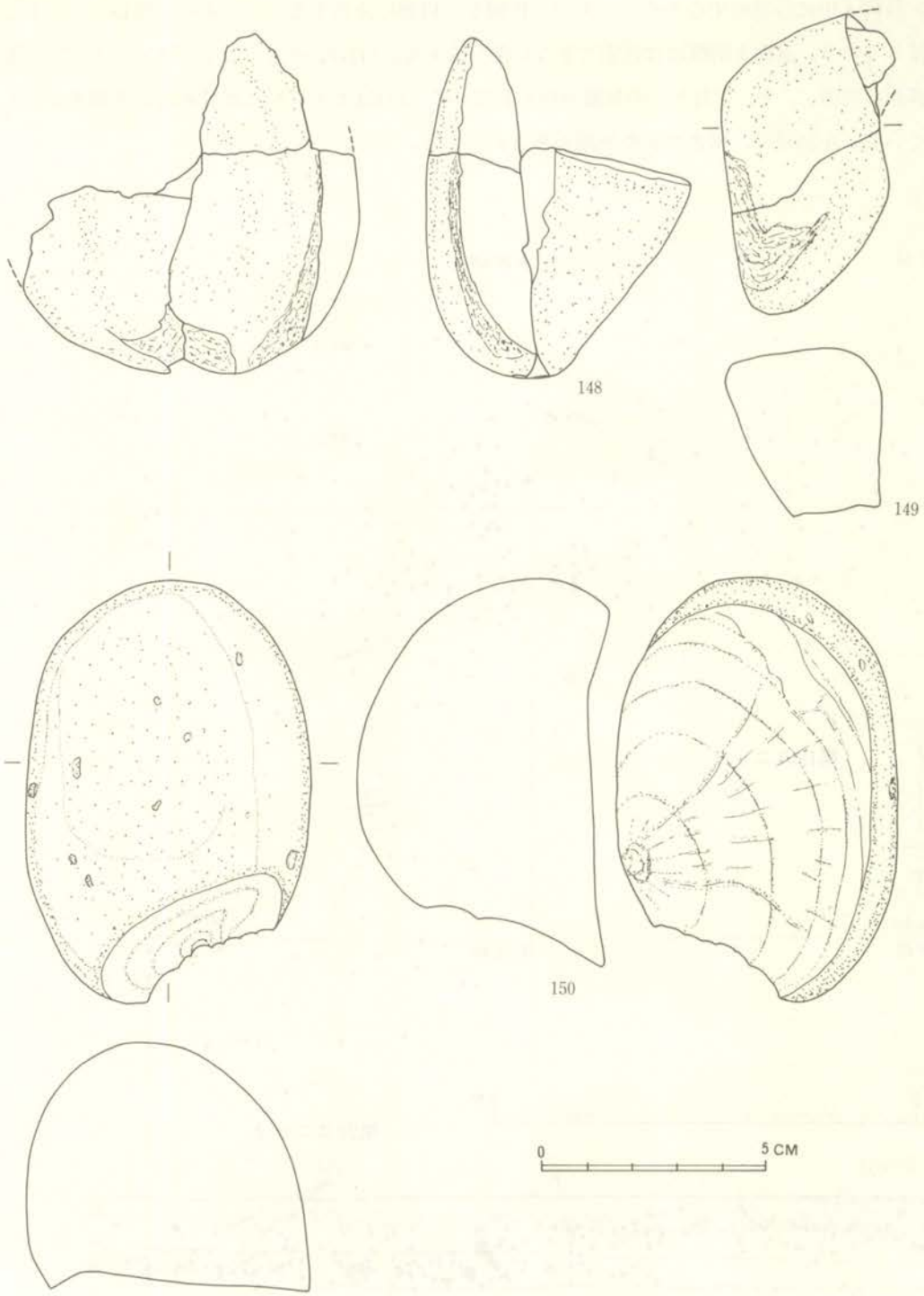
もスクレイパーとしても良いかも知れない。114，115，129は使用痕の認められる剝片である。114，115は縦長剝片そのものの側縁を使用している。130，135はチョッパーである。135は，接合した剝片により，母岩の形状を知り得るまでに復原できた。刃部をつくる剝離は，いづれも裏側に打撃を加えている。本ユニットからは，計11点の礫が出土している。小形のもの（131～133）から，大形のもの（137～140）まで大きさ，形状等一定ではない。また，特に使用痕も認められない。



第231図　第17，18ユニット



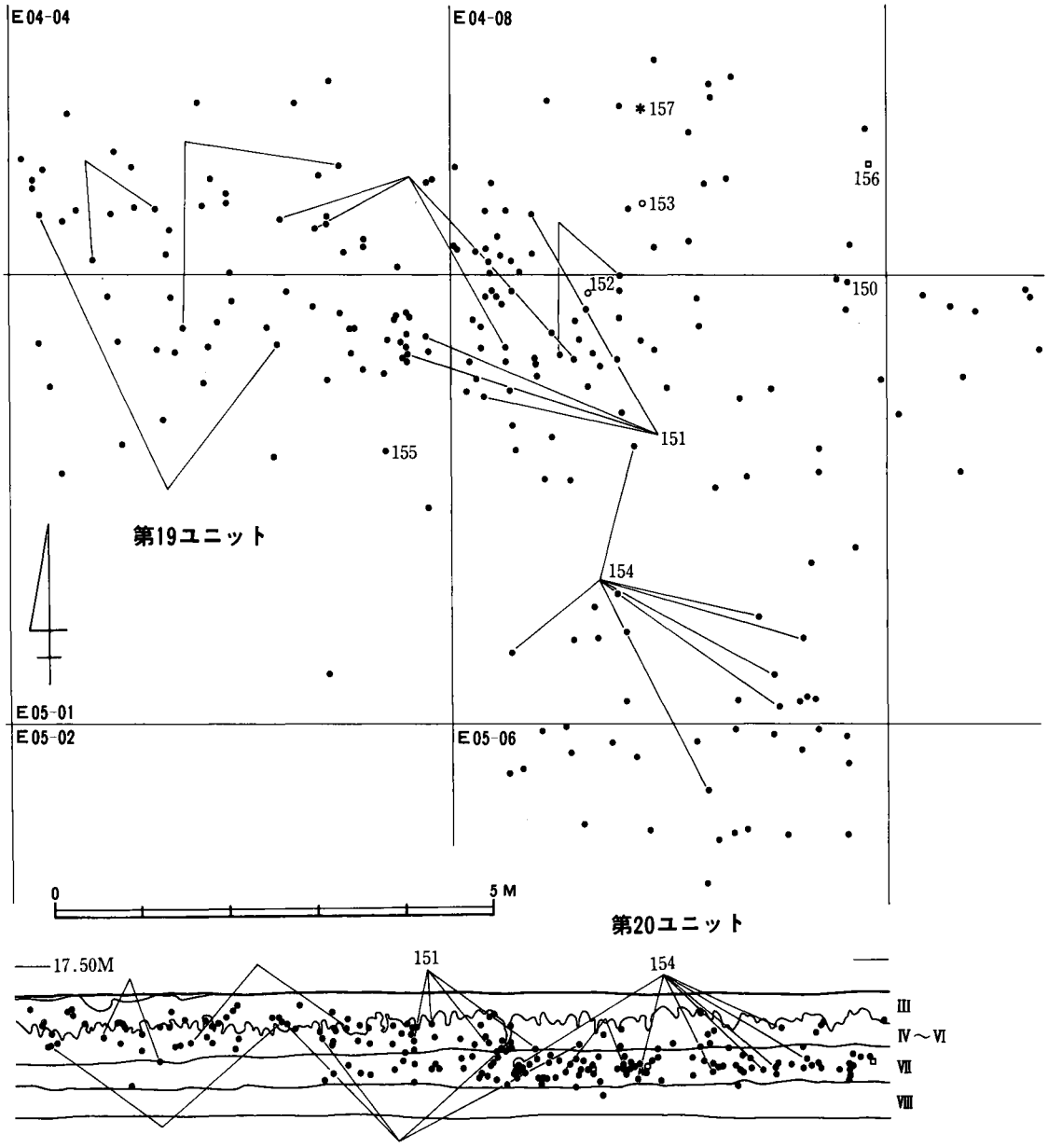
第232図　第17，18ユニット出土遺物



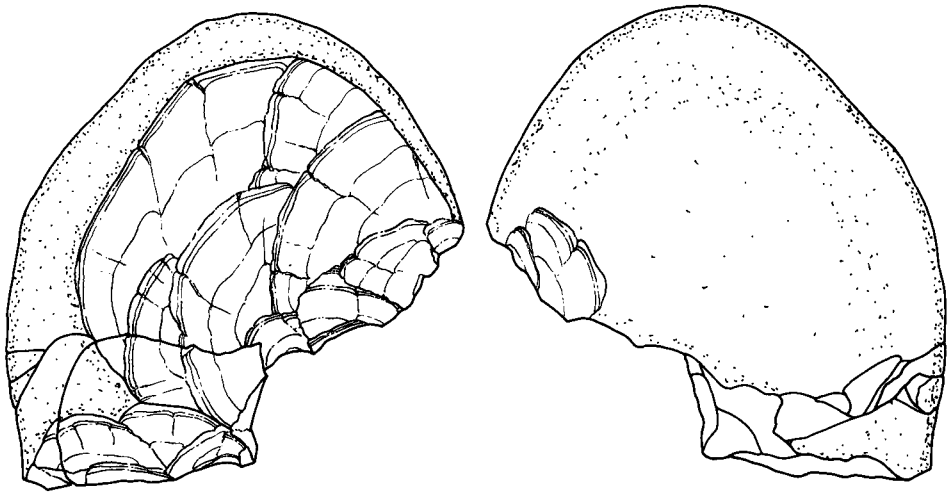
第233図　第18，20ユニット出土遺物

第17ユニット

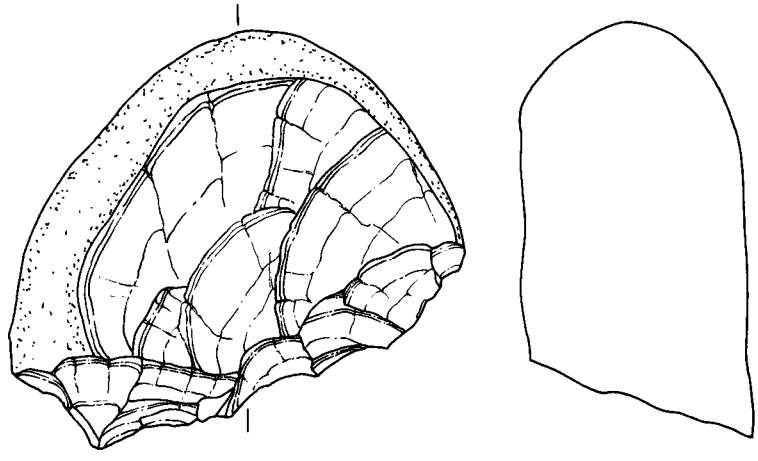
径約4mに分布の中心を有するものでIV層からVI層に分布するものである。第18ユニットと接しており，遺物を明瞭には区別できない部分もある。142は，チョッピングトゥールで，正面裏面の両面に，下，左右からの剝離が行われている。143はナイフ形石器であるが先端を欠損している。左側縁に，緻密な調整剝離が施されている。



第234図　第19，20ユニット

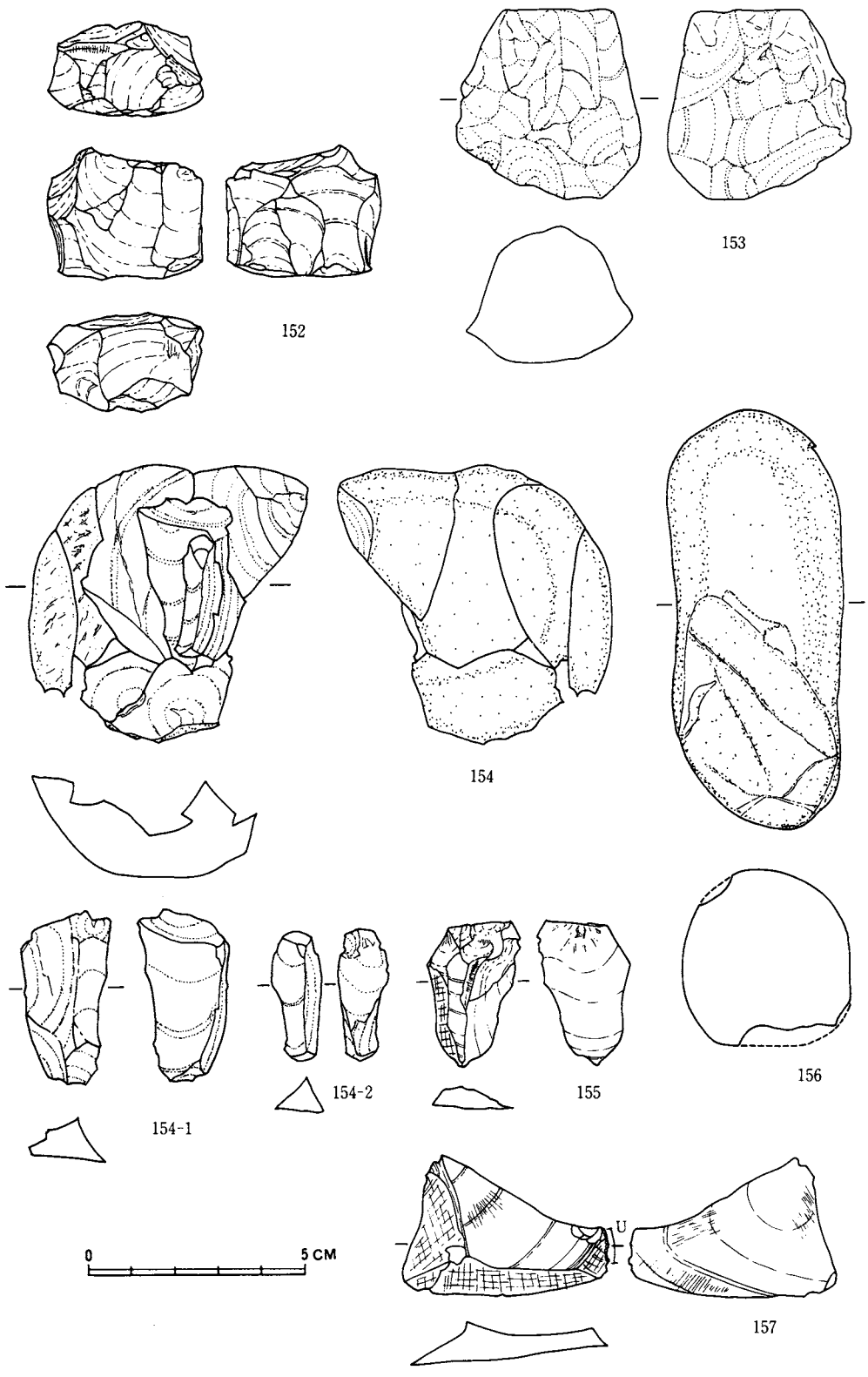


151



151-1

第235図　第19ユニット出土遺物



第236図　第20ユニット出土遺物

第18ユニット

径約6mの分布を示すもので，Ⅶ層上部を中心に出土している。このユニットからは，焼成を受けた3個体の礫が，いづれも破損して出土している。144～146は縦長の剝片であるが，145の左側縁には使用痕が認められる。147～149は，いづれも焼成を受けた礫である。

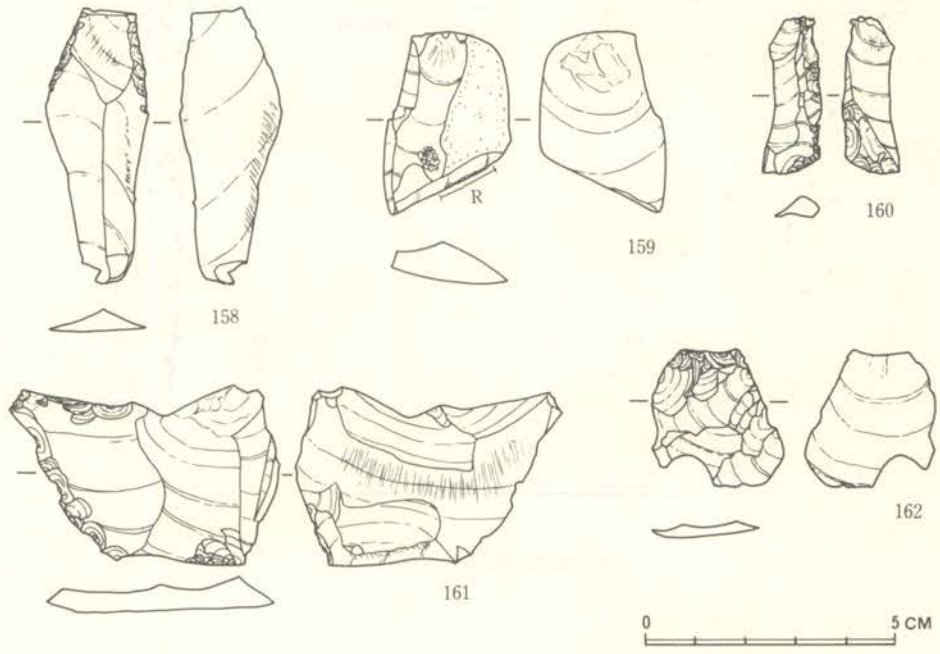
第19ユニット

長径約7m，短径約5mの範囲に分布し，Ⅲ層～Ⅳ層を中心に出土している。第20ユニットと重複しており，明瞭に区別できない部分もある。151以外はすべて剝片である。151はチョッパーで，下端より正面に，大きな剝離を行なっている。

第20ユニット

径約7mの範囲で，主としてⅦ層を中心に分布している。

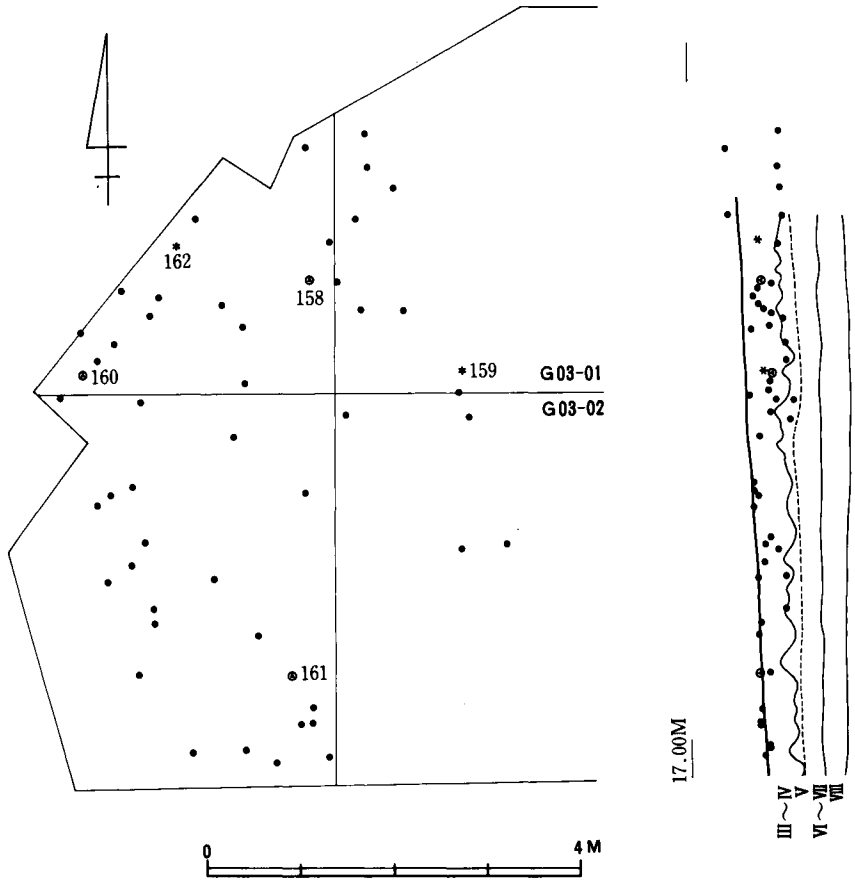
152，153は石核である。152は正面が上から，裏面，両側面は下からの剝離が行われている。153は，正面，裏面，両側面の剝離方向は一定ではない。154の接合資料は比較的小形の母岩である。剝離は上下両方向から行なわれており，縦長剝片を剝離している。157は横長の剝片であり，右側縁には使用痕が認められる。



第237図　第21ユニット出土遺物

第21ユニット

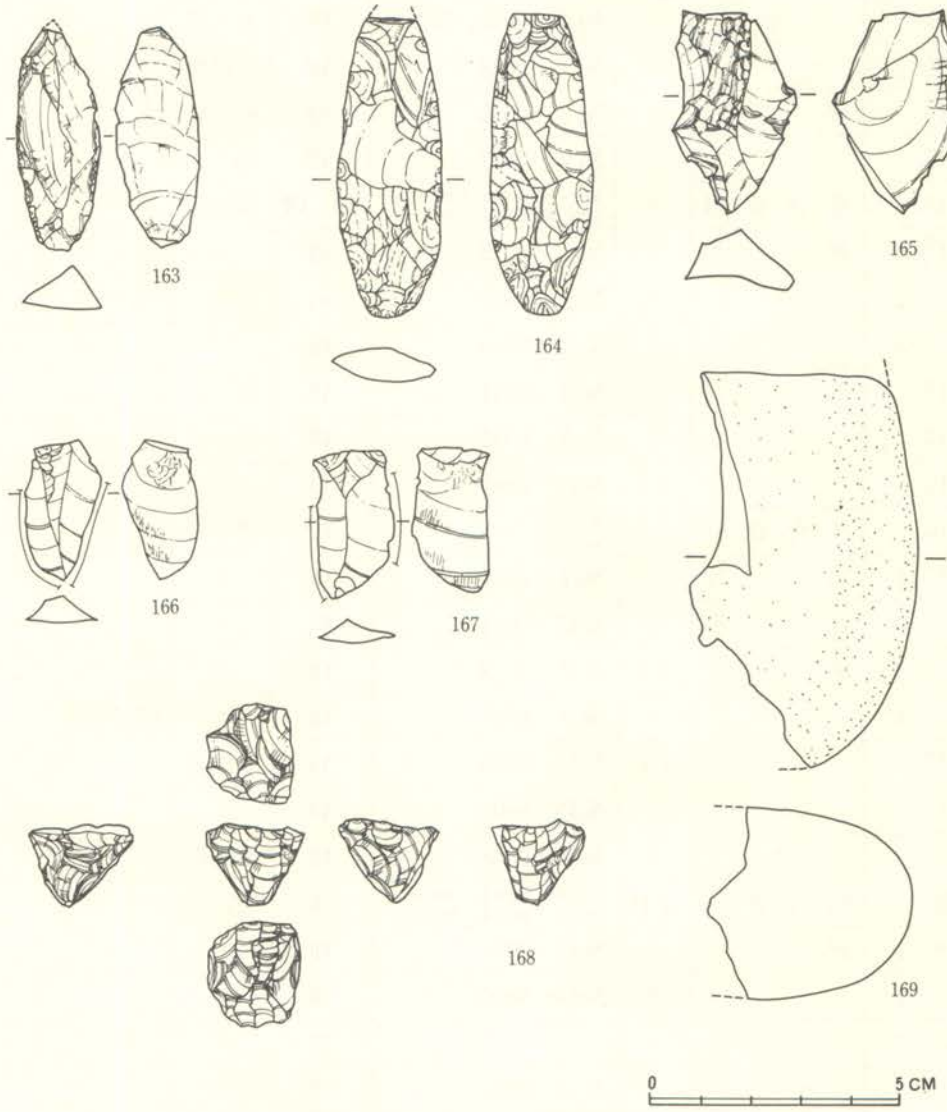
径７mの範囲に分布しているが，西側は調査区域外にも及ぶと思われる。ほとんどがIII層中よりの出土である。158，160，161はスクレイパーである。158は縦長剝片の左右両側縁の上部に調整剝離を行っている。160は右側縁及び下端の右側に調整剝離が施されている。161は比較的大形の剝片であるが，左側縁に調整剝離を行なっている。159は，下に，非常に細な調整剝離が行われているものである。



第238図　第21ユニット

単独出土の遺物

163はナイフ形石器で，先端の一部を欠損している。左右両側縁には細い調整剝離が施されている。164は柳葉形の尖頭器である。先端の一部を欠損しているが，表面，裏面ともに丁寧な剝離が行われている。168は細石核である。今回の調査では細石核はこの1点である。正面および裏面は上からの剝離が，両側面は横方向の剝離が行われている。166，167は小形の縦長剝片であるが，いづれも両側縁に使用痕が認められる。169は非常にもろい礫である。



第239図　単独出土遺物

挿図番号	名　　称	遺構	遺　物　番　号	出土層	石　質	備　　考
1	ナイフ形石器	1A	No.2－0001	IV～V	珪質頁岩	
2	〃	〃	No.2－0020	VI	〃	
3	剥　　片	〃	No.2－0019	VII	黒曜石	使用痕有
4	〃	〃	No.1－0036	VI	頁　岩	〃
5	〃	〃	No.2－0030	VII	黒曜石	〃
6	〃	〃	No.2－0017	VI	〃	〃
7	〃	〃	No.1－0046	VII	珪質頁岩	
8	〃	〃	No.1－0015、0026	VII	頁　岩	
9	〃	〃	No.1－0033	VII	流紋岩	
10	敲　　石	〃	No.2－0035	VII	砂　岩	
11	〃	〃	No.2－0013	VII	砂　岩	
12	接合資料	〃	No.1－0002、0003、0013、0016、0023、0029、0040、0045	VI、VII	安山岩	
12-1	剥　　片	〃	No.1－0023	VII	〃	
2	〃	〃	No.1－0002	VI	〃	
3	〃	〃	No.1－0016	VII	〃	
13	敲　　石	〃	No.2－0031	VII	頁　岩	
14	〃	〃	No.1－0042	VII	砂　岩	
15	〃	1C	No.15－0003	VI	〃	
16	接合資料	1A 1C	No.1－0021 No.2－0018、0023 No.15－0001	VII	黒曜石	
16-1	剥　　片	〃	No.1－0021	VII	〃	
-2	石　　核	〃	No.15－0001	VI	〃	
-3	剥　　片	1A	No.2－0018	VII	〃	
-4	〃	〃	No.2－0023	VII	〃	調整痕有
17	〃	1C	No.15－0006	VI	安山岩	
18	〃	〃	No.15－0002	VI	〃	
19	〃	〃	No.15－0008	VII	凝灰岩	
20	接合資料	1B	No.14－0004、0006、0012、0014、0015	VII	安山岩	
20-1	剥　　片	〃	No.14－0012	VII	〃	
-2	〃	〃	No.14－0006	VII	〃	
-3	〃	〃	〃	VII	〃	
-4	〃	〃	No.14－0004	VII	〃	
-5	〃	〃	No.14－0015	VII	〃	
-6	〃	1B	No.14－0014	VII	〃	
-7	〃	〃	No.14－0004	VII	〃	

挿図番号	名　　称	遺構	遺　物　番　号	出土層	石　質	備　　考
21	剝　　片	1 B	No.14—0007	Ⅶ	安山岩	
22	〃	〃	No.14—0005	Ⅶ	〃	
23	〃	〃	No.14—0007	Ⅶ	〃	
24	〃	〃	No.14—0016	Ⅶ	〃	
25	〃	〃	No.14—0011	Ⅵ	〃	
26	〃	〃	No.14—0010	Ⅵ	〃	
27	〃	1 C	No.15—0004	Ⅵ	〃	
28	〃	〃	No.15—0005	Ⅵ	〃	
29	〃	2	No. 3 —0007	Ⅶ	黒曜石	調整痕、使用痕有
30	石　　核	〃	No. 3 —0008	Ⅵ	珪質頁岩	
31	礫	〃	No. 3 —0004	Ⅶ	頁　岩	
32	剝　　片	3	No. 4 —0001	Ⅶ	安山岩	
33	〃	〃	No. 4 —0011	Ⅵ	チャート	
34	スクレーパー	4	No.12—0001	Ⅵ	黒曜石	使用痕有
35	ス　リ　石	5	No. 9 —0003	Ⅳ	安山岩	
36	ナイフ形石器	6	No. 6 —0014	Ⅴ	珪質頁岩	
37	〃	〃	No. 6 —0026	Ⅵ	黒曜石	
38	〃	〃	No. 6 —0008、0016	Ⅵ、Ⅶ	〃	
39	剝　　片	〃	No. 6 —0008	Ⅶ	〃	
40	〃	〃	No. 6 —0005、0013	Ⅵ、Ⅶ	珪質頁岩	
41	〃	〃	No. 6 —0015	Ⅶ	メノウ	調整痕、使用痕有
42	〃	〃	No. 6 —0028	Ⅵ	チャート	
43	〃	7	No.10—0002	Ⅶ	珪質粘板岩	使用痕有
44	〃	7	No.10—0003	Ⅵ	〃	
45	〃	〃	No.10—0007	Ⅶ	黒曜石	調整痕有
46	礫	〃	No.10—0009	Ⅶ	砂　岩	使用痕有
47	接合資料	8	C02-03-0036、0037 0043、0049、0053	Ⅶ	珪質頁岩	
-1	剝　　片	〃	C02-03-0043、0053	Ⅶ	〃	
-2	〃	〃	C02—03—0037	Ⅶ	〃	
48	〃	〃	C02—03—0026	Ⅶ	細粒砂岩	
49	〃	〃	C02—03—0045	Ⅶ	黒曜石	使用痕有
50	ス　リ　石	〃	C02—03—0046	Ⅶ	砂　岩	
51	敲　　石	〃	C02—03—0021	Ⅵ	メノウ	
52	ナイフ形石器	〃	No.17—0004	Ⅶ	珪質頁岩	

挿図番号	名　　称	遺構	遺　物　番　号	出土層	石　質	備　　考
53	剥　　片	9	No.17—0008	VI	安山岩	
54	スクレーパー	〃	No.17—0007	VI	黒曜石	
55	ナイフ形石器	〃	No.17—0005	VII	〃	
56	礫	〃	No.17—0006	VII	砂　岩	
57	〃	〃	No.17—0002	VII	〃	
58	ナイフ形石器	10	No.18—0002	III	珪質頁岩	
59	〃	〃	No.18—0001	III	〃	
60	〃	〃	No.18—0004	III	〃	
61	〃	〃	No.18—0003	III	〃	
62	接合資料	11	G03-09-0011、0013、0007、0009、0021、0023、0026、0032、0034、0035、0039、0044、0045、0046、0048、0056、0057、0058、0059、0066、0080、0082	VII	安山岩	
-1	剥　　片	〃	G03—09—0057	VII	〃	
-2	〃	〃	G03—09—0039	VII	〃	
-3	〃	〃	G03—09—0056	VII	〃	
-4	〃	〃	G03—09—0080	VII	〃	
-5	〃	〃	G03—09—0035	VII	〃	
-6	〃	〃	G03—09—0039	VII	〃	
-7	〃	11	G03—09—0007	VII	〃	
-8	〃	〃	G03—09—0006	VII	〃	
-9	石　　核	〃	G03—13—0011	VII	〃	
-10	剥　　片	〃	G03—09—0058	VII	〃	
-11	〃	〃	G03—09—0048	VII	〃	
-12	〃	11	G03—09—0082	VII	〃	
-13	〃	〃	G03—09—0046	VII	〃	
-14	〃	〃	G03—09—0048	VII	〃	
63	接合資料	〃	G03-09-0070、0072 G03-13-0001、0004	VII	〃	
-1	剥　　片	〃	G03—09—0070	VII	〃	
-2	〃	〃	G03—13—0001	VII	〃	
-3	〃	〃	G03—09—0072	VII	〃	
-4	〃	〃	G03—13—0004	VII	〃	
64	接合資料	〃	G03-09-0001 G03-13-0007、0009、0010、0013	VII	〃	
-1	剥　　片	〃	G03—13—0013	VII	〃	
-2	〃	〃	G03—13—0009	VII	〃	
-3	〃	〃	G03—13—0010	VII	〃	
-4	〃	〃	G03—09—0001	VII	〃	

挿図番号	名　　称	遺構	遺　物　番　号	出土層	石　質	備　　考
64-5	剥　　片	11	G03—13—0007	Ⅶ	安山岩	
65	〃	〃	G03-09-0028、0041	Ⅶ	〃	
66	ナイフ形石器	〃	G03—09—0085	Ⅶ	〃	
67	剥　　片	〃	G03—09—0027	Ⅶ	〃	
68	〃	〃	G03—09—0067	Ⅶ	〃	
69	〃	〃	G03-09-0003、0071	Ⅶ	〃	
70	〃	〃	G03—09—0081	Ⅶ	〃	
71	〃	〃	G03—09	Ⅶ	〃	
72	〃	〃	G03—09—0034	Ⅶ	〃	
73	〃	〃	G03—09—0023	Ⅵ	〃	62に接合
74	〃	〃	G03—09—0032	Ⅶ	〃	
75	〃	〃	G03—09—0066	Ⅶ	〃	62に接合
76	〃	〃	G03—09—0044	Ⅶ	〃	〃
77	〃	〃	G03—09—0026	Ⅶ	〃	〃
78	〃	〃	G03—09—0013	Ⅶ	〃	〃
79	〃	〃	G03—09—0059	Ⅶ	〃	〃
80	〃	11	G03—09—0011	Ⅶ	〃	〃
81	〃	〃	G03—09—0018	Ⅶ	〃	
82	〃	〃	G03—09—0015	Ⅶ	〃	
83	〃	〃	G03—09—0040	Ⅶ	〃	
84	〃	〃	G03—09—0077	Ⅶ	〃	
85	礫　　器	12	G06—09—0013	Ⅳ～Ⅴ	珪質頁岩	チョッパー
86	剥　　片	〃	G06—06—0039	Ⅵ	〃	使用痕、調整痕有
87	石　　核	〃	G06—10—0011	Ⅳ～Ⅴ	凝灰岩	
88	剥　　片	〃	G06—10—0002	Ⅳ～Ⅴ	珪質頁岩	調整痕有
89	石　　核	〃	G06—15—0002	Ⅳ～Ⅴ	〃	
90	剥　　片	〃	G06—10—0006	Ⅳ～Ⅴ	〃	
91	〃	〃	G06-06-0018、0024、0035	Ⅴ～Ⅵ	玄武岩	
92	〃	〃	G06-09-0008、0041	Ⅳ～Ⅴ	砂　岩	
93	ナイフ形石器	13	G08—04—0074	Ⅳ～Ⅴ	珪質頁岩	
94	スクレーパー	〃	G08—07—0035	Ⅳ～Ⅴ	〃	
95	礫　　器	〃	G08—04—0028	Ⅳ～Ⅴ	玄武岩	
96	剥　　片	〃	G08—06—0003	Ⅵ	珪質頁岩	調整痕有
97	スクレーパー	〃	G08—08—0003	Ⅳ～Ⅴ	〃	グレーバー(？)

挿図番号	名　　称	遺構	遺　物　番　号	出土層	石　質	備　　考
98	剝　　片	13	G08—04—0060	IV～V	凝灰岩	
99	〃	14	G06—16—0011	V	〃	
100	〃	〃	G06—16—0008	V	珪質頁岩	
101	スクレーパー	15	B 4 — 9 —0010	IV～V	黒曜石	
102	剝　　片	〃	B 4 — 9 —0008	IV～V	安山岩	
103	〃	〃	B 4 — 9 —0001	IV～V	〃	
104	ナイフ形石器	16	C 4 — 6 —0008	III	黒曜石	
105	スクレーパー	〃	C 4 — 7 —0003	III	〃	
106	〃	〃	C 4 — 4 —0005 C 4 — 6 —0098	IV～VI IV～VI	〃	
107	ナイフ形石器	〃	C 4 — 7 —0001	III	細粒砂岩	
108	スクレーパー	〃	C 4 — 6 —0035	IV～VI	珪質頁岩	
109	〃	〃	C 4 —10—0024	III	〃	
110	石　　核	16	C 4 —11—0013		〃	使用痕有
111	剝　　片	〃	C 4 — 6 —0118	IV	〃	調整痕有
112	〃	〃	C 4 —10—0030		黒曜石	〃
113	ナイフ形石器	〃	C 4 — 6 —0113	V	〃	
114	剝　　片	〃	C 4 — 6 —0061	IV	珪質頁岩	使用痕有
115	〃	〃	C 4 — 6 —0068	IV	黒曜石	〃
116	〃	〃	C 4 — 6 —0081	IV	〃	調整痕有
117	〃	〃	C 4 — 6 —0069	IV	珪質頁岩	
118	〃	〃	C 4 — 6 —0055	IV	〃	
119	〃	〃	C 4 —10—0032		〃	
120	〃	〃	C 4 — 6 —0033	III	〃	
121	〃	〃	C 4 —11—0012		黒曜石	
122	〃	〃	C 4 — 9 —0003		珪質頁岩	
123	〃	〃	C 4 — 9 —0008		〃	
124	〃	〃	C 4 — 6 —0083	IV	〃	
125	〃	〃	C 4 — 6 —0111	V	黒曜石	
126	〃	〃	C 4 — 6 —0038	III	頁　岩	
127	〃	〃	C 4 — 6 —0071 C 4 —11—0011	IV	〃	
128	〃	〃	C 4 — 6 —0060	IV	〃	スポール
129	〃	〃	C 4 —10		黒曜石	使用痕有
130	礫　　器	〃	C 4 —11—0002		頁　岩	
131	礫	〃	C 4 — 6 —0046	III	砂　岩	

挿図番号	名　　称	遺構	遺　物　番　号	出土層	石　質	備　　考
132	礫	16	C 4 —11—0004		砂　岩	
133	〃	〃	C 4 — 6 —0091	IV	〃	
134	〃	〃	C 4 —11—0005		頁　岩	
135	接合資料	〃	C4-6-0052、0087、0094 C4-10-0005、0008、0010、0017	IV	玄武岩	
135-1	礫　　器	16	C 4 —10—0005		〃	
-2	剝　　片	〃	C 4 —10—0028		〃	
-3	〃	〃	C 4 — 6 —0052 C 4 —10—0017	IV	〃	
-4	〃	〃	C 4 -10-0008、0010		〃	
136	礫	〃	C 4 —11—0014		砂　岩	
137	〃	〃	C 4 — 6 —0054 C 4 — 9 —0004	IV	ホルンフェルス	
138	〃	〃	C 4 — 6 —0019	III	砂　岩	
139	礫	〃	C 4 — 9 —0007		花崗岩	
140	〃	〃	C 4 — 7 —0002	III	砂　岩	
141	〃	〃	C 4 —10—0006		〃	
142	礫　　器	17	D 4 — 5 —0015	IV		
143	ナイフ形石器	〃	D 4 — 5 —0019	VII	珪質頁岩	
144	剝　　片	18	D 4 — 1 —0017	VII	〃	
145	〃	〃	D 4 — 2		〃	使用痕有
146	〃	〃	D 4 — 2 —0005	VI	〃	
147	礫	〃	D 4 - 1 -0020、0024、0025	VII	頁　岩	焼成を受けている
148	礫	〃	D 4 - 1 -0016、0018、0021、0028	VI、VII		〃
149	敲　　石	〃	D 4 - 1 -0001、0022、0023、0027	IV～V、VII	砂　岩	〃
150	礫	20	E S — 5 —0059	VII	珪質頁岩	
151	接合資料	19	E 4 — 8 —0003 E S -1-0020、0027、0035 E 5 — 5 —0061	VI III、IV～VI III	砂　岩	
151-1	礫　　器	20	E 5 — 5 —0061	III	〃	
152	石　　核	20	E 5 — 5 —0019	IV～VI	珪質頁岩	
153	石　　核	〃	E 4 — 8 —0017	VII	凝灰岩	
154	接合資料	20	E5-5-0017、0028、0029、0031、0045、0048 E 5 — 6 —0020	VII	安山岩	
154-1	剝　　片	〃	E 5 — 5 —0029	VII	〃	
-2	〃	〃	E 5 — 5 —0045	VII	〃	
155	〃	〃	E 5 — 1 —0021	IV～VI	〃	
156	礫	〃	E 4 — 8 —0022	VII	砂　岩	
157	剝　　片	〃	E 4 — 8 —0019	VII	黒曜石	使用痕有
158	スクレーパー	21	G 3 — T01—0008		珪質頁岩	ナイフ(？)

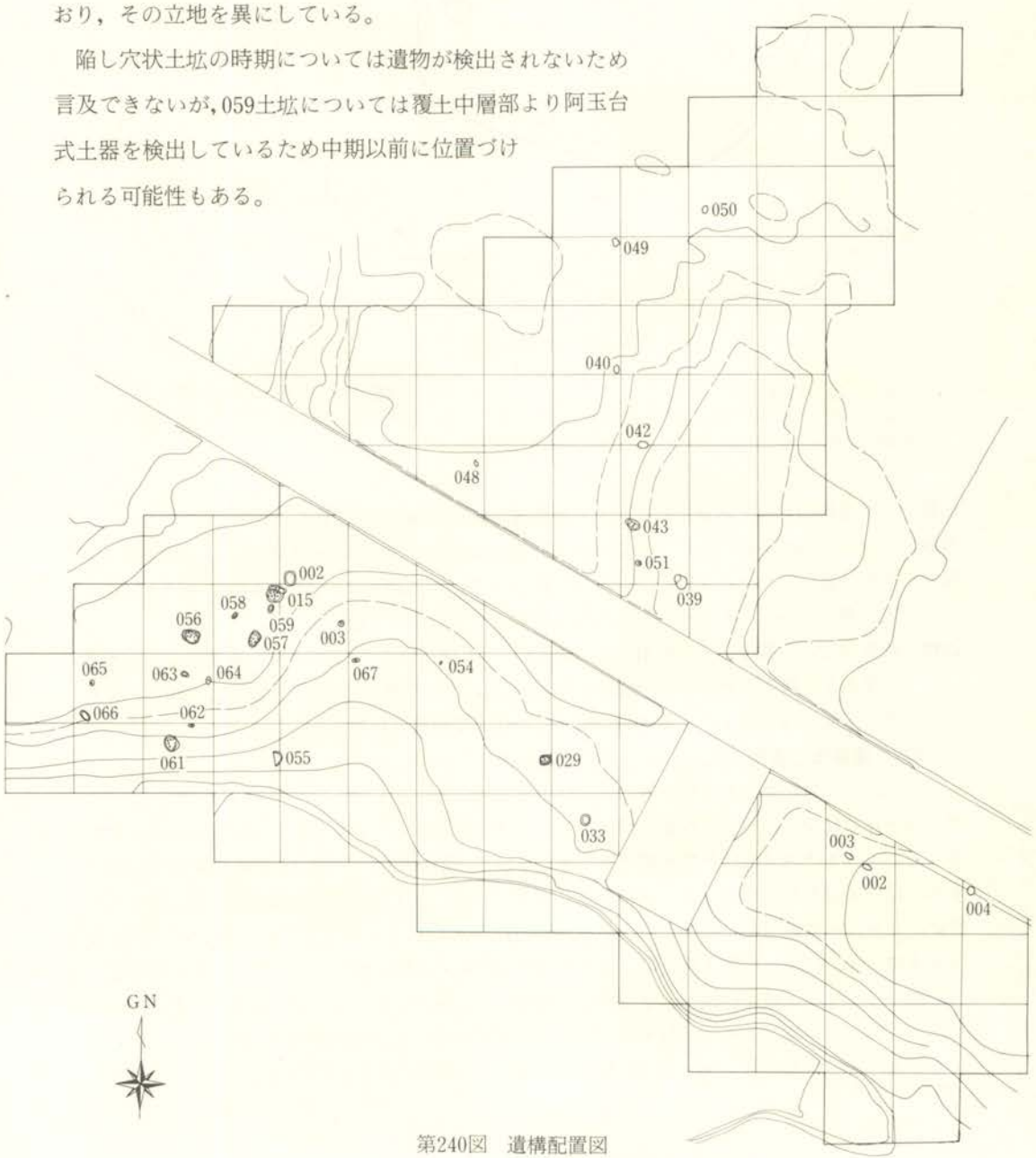
挿図番号	名　　称	遺構	遺　物　番　号	出土層	石　質	備　　考
159	剝　　片	〃	G 3－T01—0012		黒曜石	調整痕有
160	スクレーパー	〃	G 3－T01—0027		〃	
161	〃	〃	G 3－T01—0025		〃	
162	剝　　片	〃	G 3－T01—0026		〃	
163	ナイフ形石器		019—0001		チャート	
164	尖　頭　器		C 3－3—0001	III	頁　岩	
165	剝　　片		No. 7－0002	VII	珪質粘板岩	
166	〃		表採		黒曜石	使用痕有
167	〃		〃		〃	〃
168	細　石　核		表採		〃	
169	礫		G10—03	VII	砂　岩	

2．縄文時代

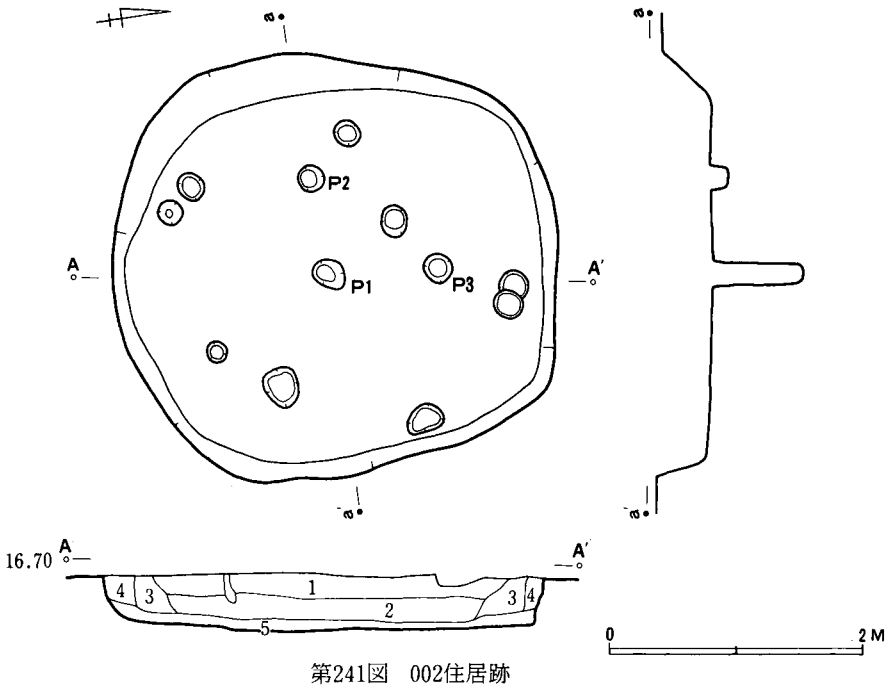
今回の調査で検出された遺構は住居跡９軒，竪穴状遺構１基，土坑10基，陥し穴状遺構９基であり，住居跡・土坑はすべて中期の阿玉台期に属するものと考えられる。包含層中からは早期から晩期にかけての遺物を検出したが，その主体は遺構同様中期の阿玉台式土器であった。

住居の立地は大半が西側（217—008）に位置し，比較的狭い範囲に集中しており，緩やかな傾斜をはさむせいか大きく東と西に分かれている。土坑は南西の住居付近に集中するものが多いが，陥し穴状土坑は東電変電所の東側（217—011）から北側（217—007）にかけて分布しており，その立地を異にしている。

陥し穴状土坑の時期については遺物が検出されないため言及できないが，059土坑については覆土中層部より阿玉台式土器を検出しているため中期以前に位置づけられる可能性もある。



第240図　遺構配置図



第241図　002住居跡

1　暗褐色土層　炭化粒を多く含む。
2　黒褐色土層　多量の炭化粒と若干の焼土粒を含む。
3　暗褐色土層　1層に比較して明るく，少量の炭化粒を含む。
4　黄褐色土層　少量の炭化粒を含む。
5　暗黄褐色土層多量の炭化粒，焼土粒を含む。

位置　（中山新田II－2遺跡）17グリッド西南部。015住居跡に近接する。

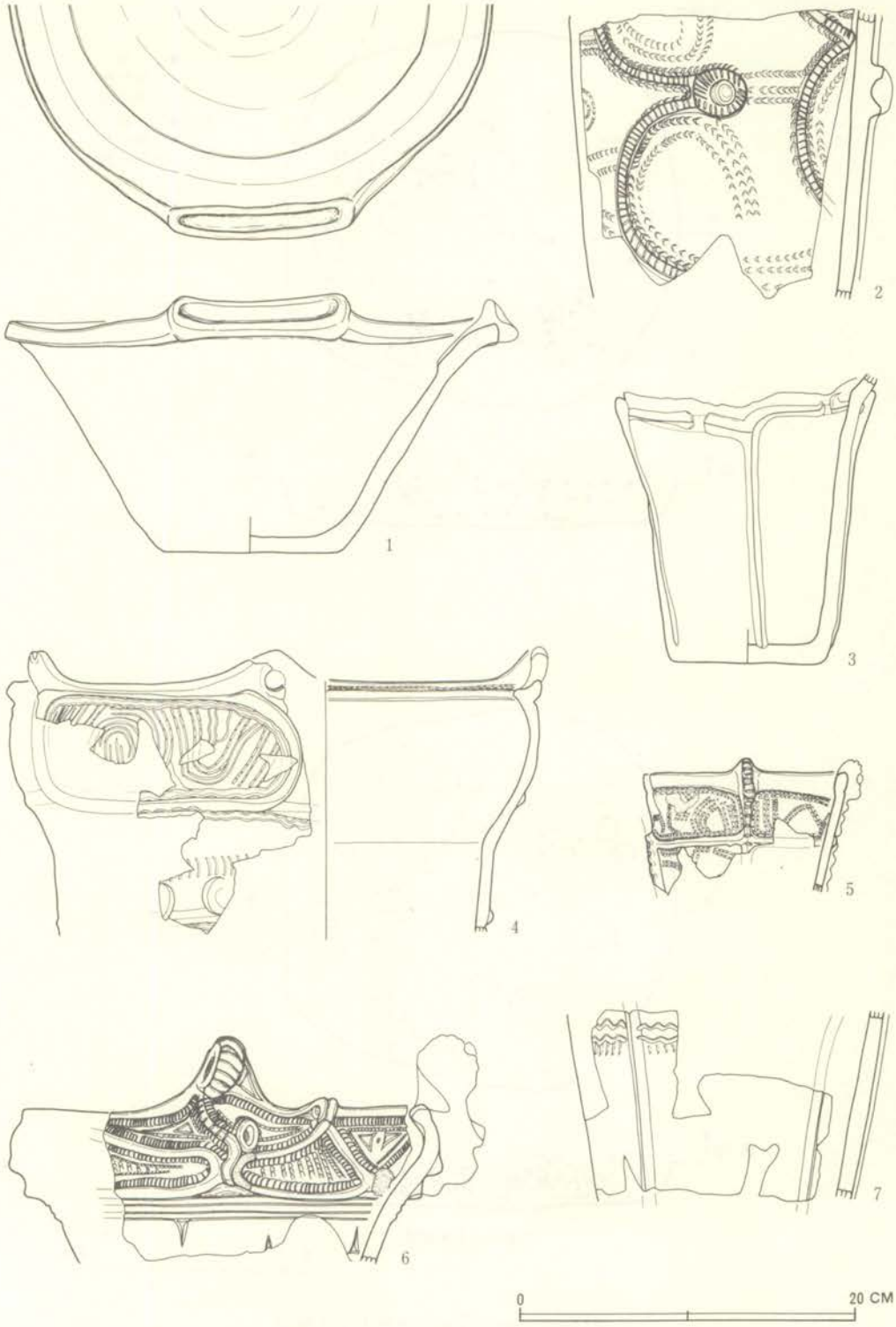
形状　南北に長軸3.5m，東西に短軸3.3m，壁高40cmを測る円に近い楕円形のプランを呈する。

柱穴　中央に直径約30cm，深さ72cmの主柱穴P1をもち，その西と北にやや深いP2（深さ15cm），P3（深さ12cm）の柱穴を付随させる。他のピットはすべて浅い。

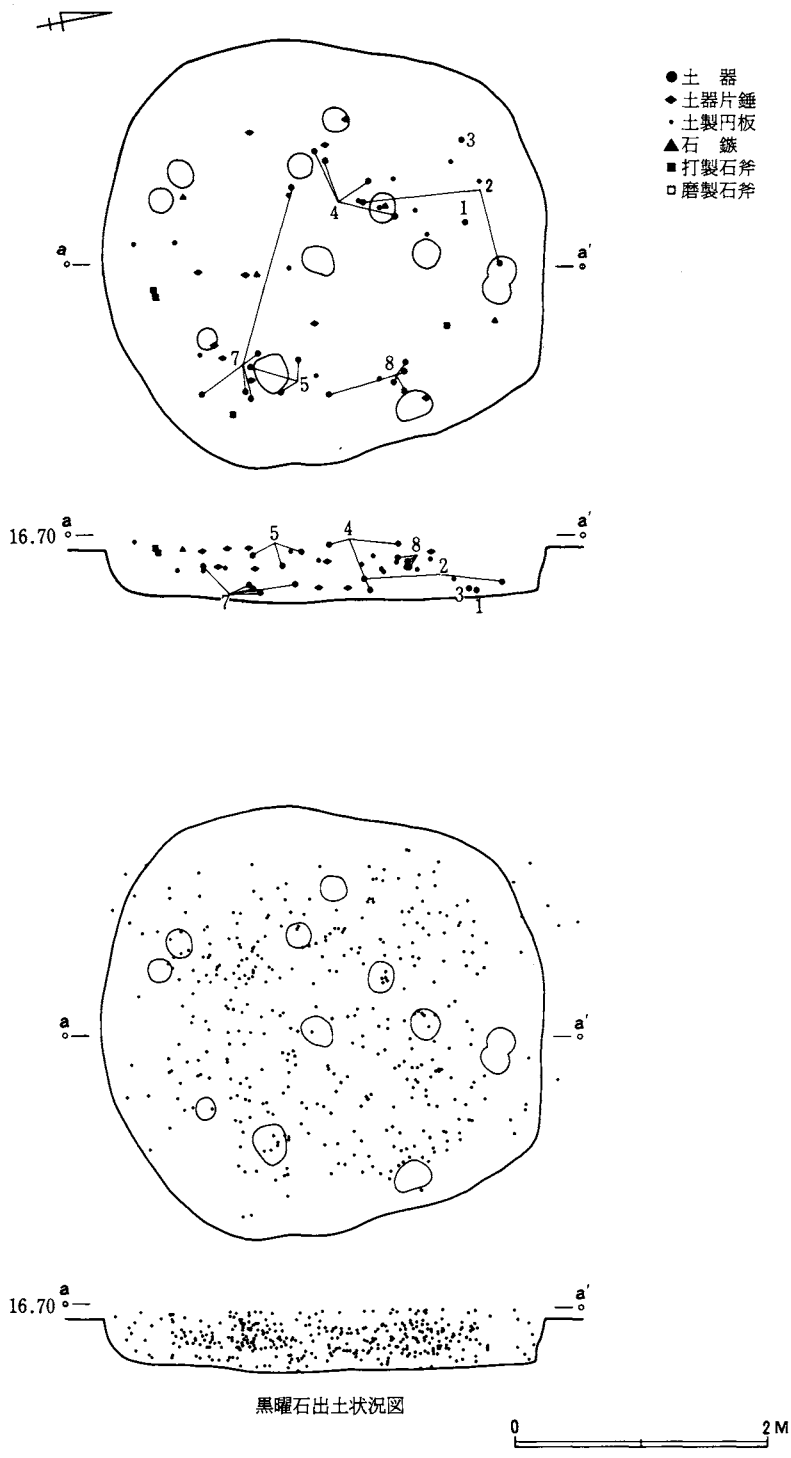
遺物　総数2052点を数え，その内415点（1080ｇ）が黒曜石のフレイクであり，本遺跡でも1番多く覆土より検出されている(第243図参照)。他に土器片錘（15点），土製円板（20点）等も多い。土器は床直上に1の浅鉢が置かれた状態で検出された。

002住居跡出土遺物（第245図～248図・図版100）

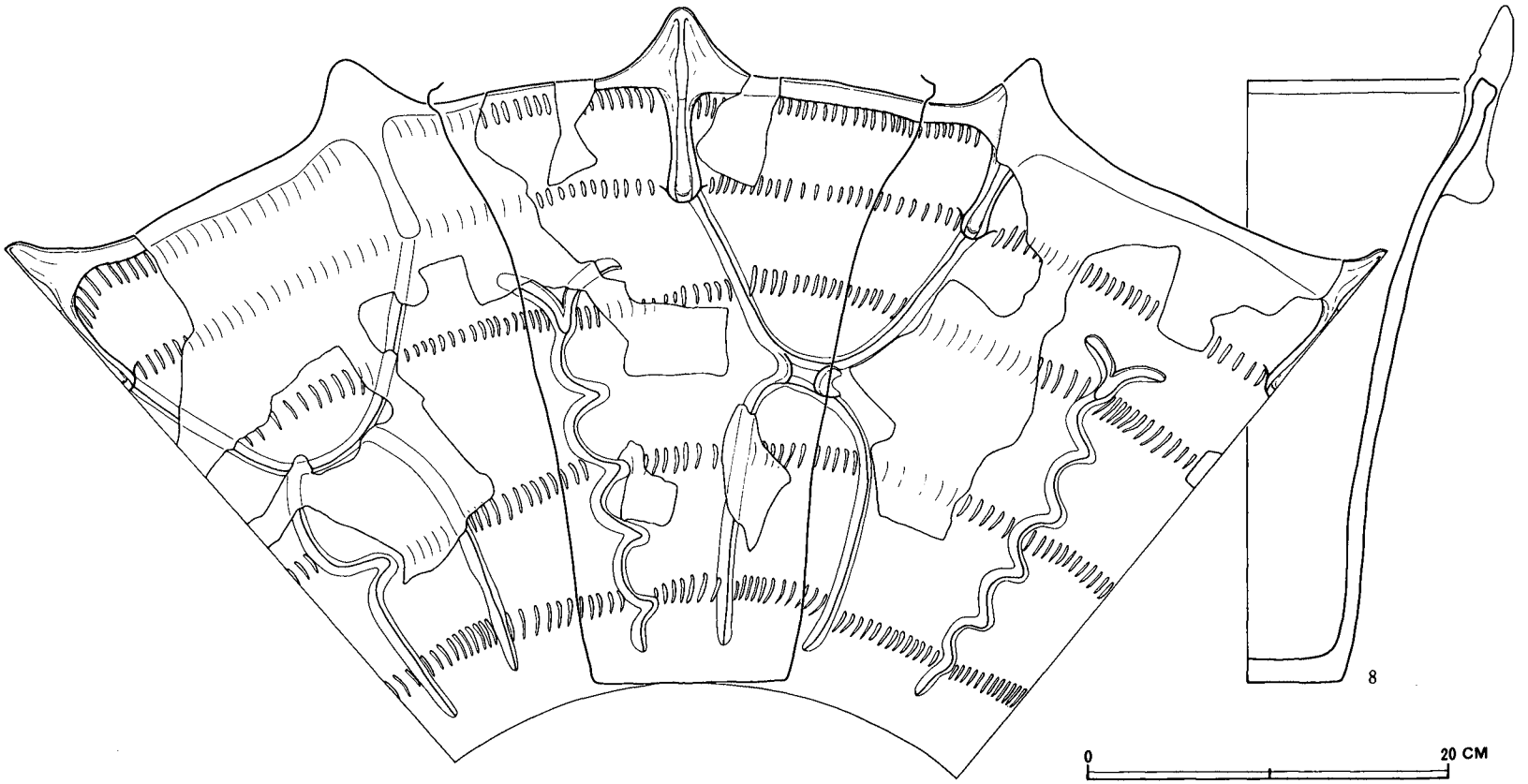
（第245図1～21）全て第3群土器である。1はE類，2～7・10・11・13・14はB類，8はC類，15～18はH類，19～21はG類に相当する。4は隆帯に沿って半截竹管による平行な押引文を施している。8は地文に円形竹管刺突文を施している。(第246図1～15）全て第3群N類に相当する。ほとんどが波状中央に高い隆帯を貼り付けている。3・8は頂部に円板状に粘土紐を貼り付けており，8は渦巻状に貼り付けている。(第247図1～18）1～6は第3群土器，7～10は浅鉢形土器口縁，12～15は第4群土器，16～18は第2群A・B類に相当する。1・2は半截竹管工具を用いており，1は平行沈線，2は押引と組合わせて施文している。12～15はペン先状の工具を用いて押引文を施すもので，14・15は三叉文が施されている。(第248図1～43）1～15は土器片錘，16～35は土製円板，36～39は打製石斧，40～43は石鏃である。



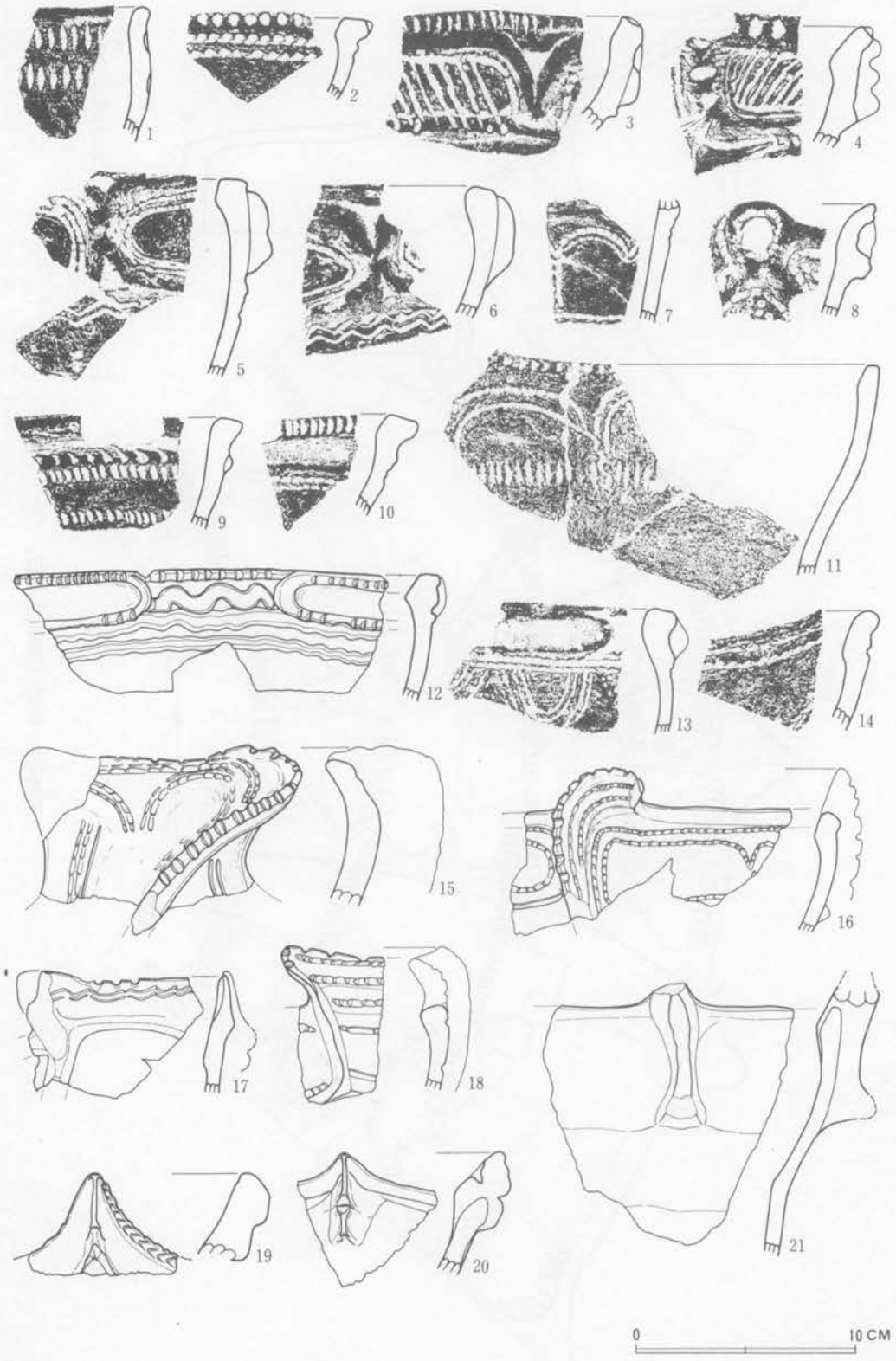
第242図　002住居跡出土土器



第243図　002住居跡内遺物出土状況図

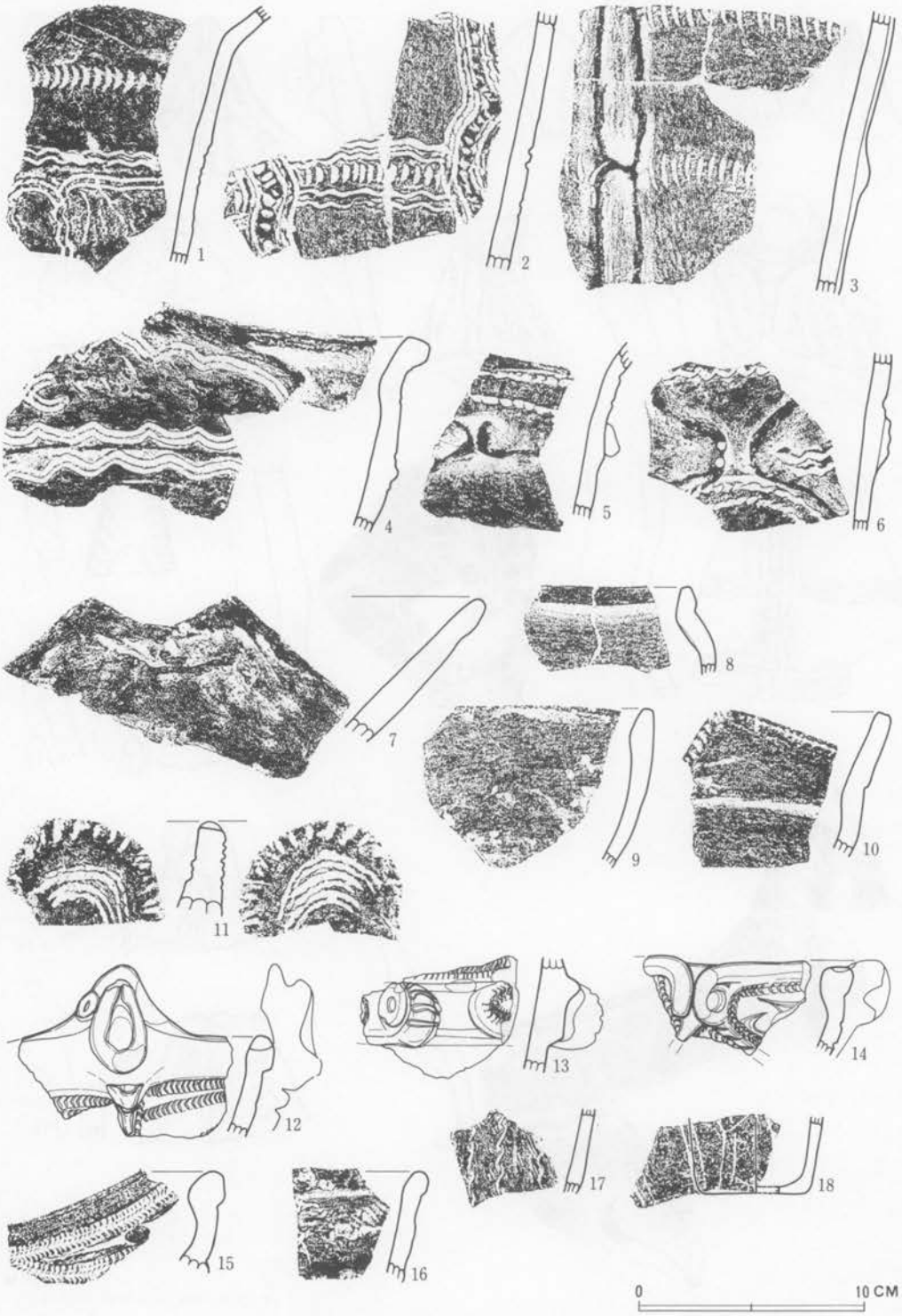


第244図　002住居跡出土土器

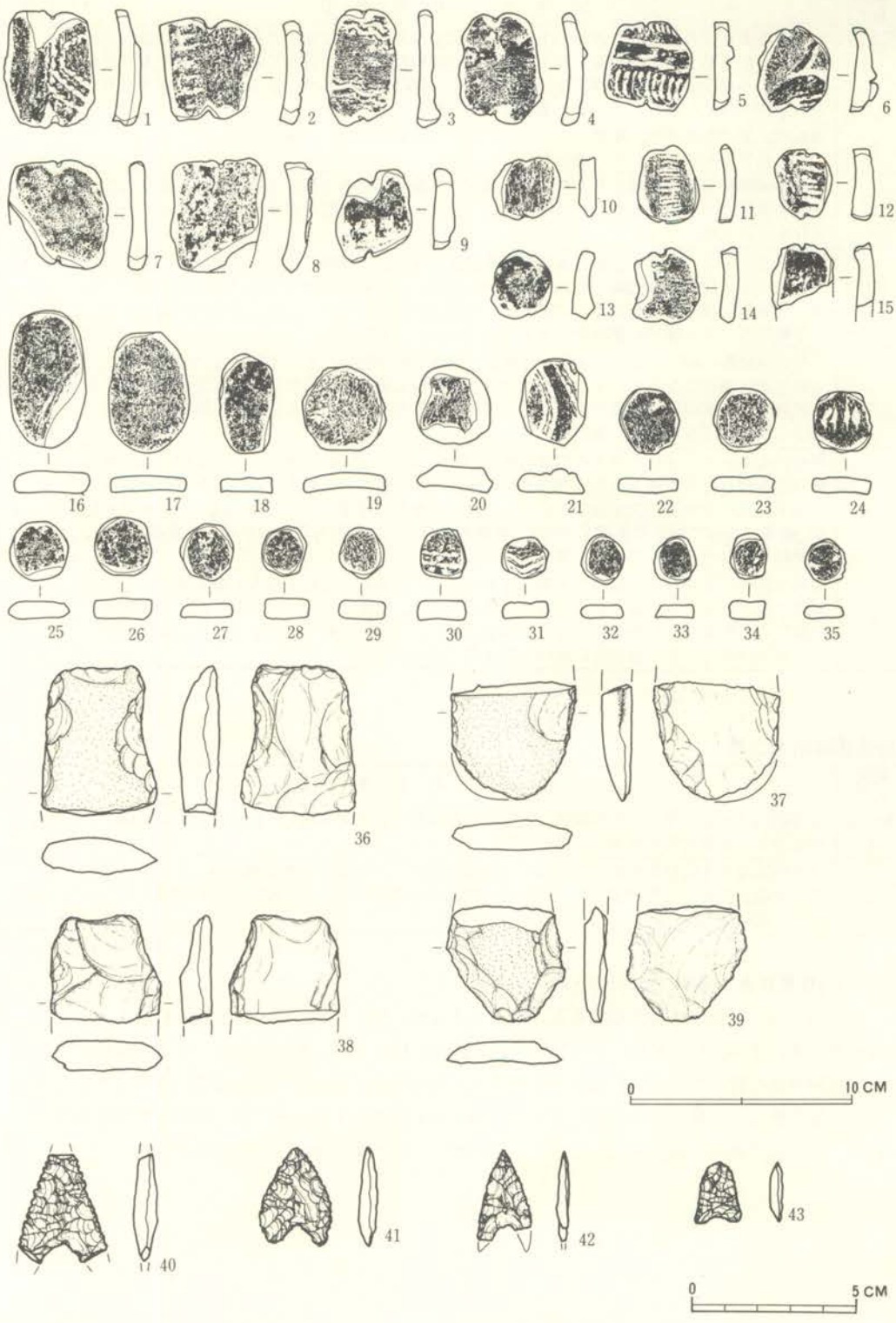


第245図　002住居跡出土土器

第246図　002住居跡出土土器



第247図　002住居跡出土土器



第248図　002住居跡出土遺物

002住居跡出土土器

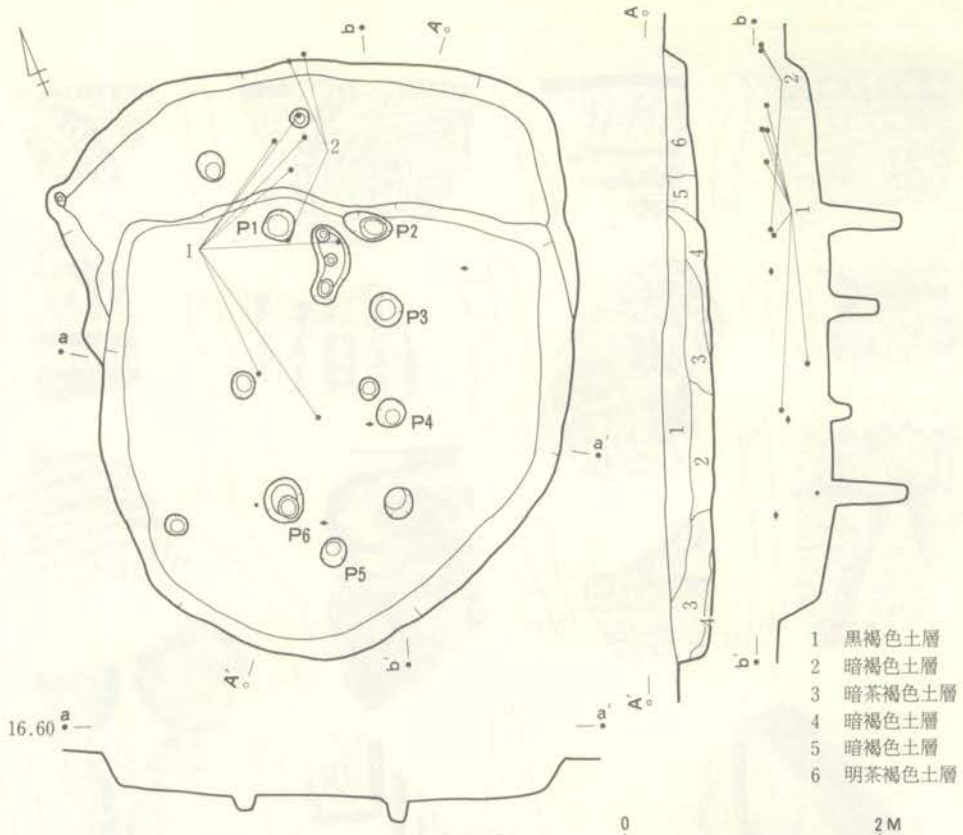
挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第242図 1	口縁を朝顔状に外反させた浅鉢形土器。床面に置かれた状態で検出された。胴部には口辺を構成している粘土紐の輪積痕を残す。器外面は特別な整形がなされておらず，火を受けた痕跡も認められない。文様は特にないが口唇部の一部分を隆起させ，把手のような部分を有する。器内面はよく磨かれている。遺存度ほぼ完形。	98－1 98－2
2	深鉢形土器の胴部破片。隆帯上にヘラ状工具による刻みを施し，隆帯に沿って2列のやや先の丸い角押文を施している。遺存度⅓	99－2
3	小型の深鉢形土器。頸部より上を欠く。頸部より縦の隆帯を4単位で貼り付け，隆帯頂部を横位の隆帯でつないでおり，その中間には小型のつまみ状突起を有する。床直上より出土。遺存度ほぼ完形。	99－4
4	緩やかなキャリパー状を呈する深鉢形土器口縁部破片。口縁部には対の小波状を4単位で廻らせている。口唇部は内傾している分肥厚しており，口唇上には2列の結節沈線を施している。口縁部文様帯は小波状ごとに隆帯による楕円区画を行なっている。区画内は隆帯に沿って半截竹管による波状の連続押引きを行なっている。遺存度¼	99－3
5	小型の深鉢形土器。つまみ状突起を4単位で口縁に貼り付け，その下にさらに隆帯を貼り付け縦位の区画を行なっている。口縁部はさらに横位の隆帯を貼り付け口縁部文様帯を作り出している。区画内には半截竹管による2列の押引文を満たしている。縦位の隆帯上には竹管による横位の圧痕を施す。遺存度⅓	98－4
6	緩やかなキャリパー状を呈する口縁部破片。002住居跡に近い所で検出された。頸部は半截竹管内面を押し付けて施された3列の平行沈線によって横帯の区画を行ない区画内には鋸歯状に上下交互の三角陰刻文を施している。口縁部文様帯は隆帯による三角形状のモチーフを配し，隆帯に沿って幅広の角押文を施す。区画内にはペン先状の竹管工具を用いた連続押引文，三角陰刻文などを施している。遺存度⅓	98－3
8	鋭角な波状口縁を有する深鉢形土器。4単位で廻る波状部には粘土紐を芯棒とするつまみ状突起が施されており，裏側にその痕跡を残している。文様はハマグリ等の貝殻による連続した縦位の貝殻腹縁圧痕を5段に渡って胴部に施し，その上に断面三角形を呈する隆帯を縦方向に貼り付けている。遺存度口縁の一部を欠くがほぼ完形。	99－1

015住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第250図 1	口径約14.5cmの小型の円筒形深鉢。胴部には原体ＲＬの縄文を施し，口唇直下には指頭で磨消したような無文帯を有する。遺存度¾	101-1
2	口径約10cmで1同様の器形を呈する。口唇部は肥厚し，1cm程の無文帯を有し，その下に幅広の半截竹管による角押文を施している。胴部には櫛状工具による縦位の平行沈線を施している。遺存度¾	101-2

015住居跡出土遺物（第251図・図版102）

3～15・17・21は第3群土器である。4・7はA類，22はB類，15・16・13はD類，3・9・14はF類，8はI類，11はK類，12はM類，15はN類に相当する。8は1段のつまみ状突起の上に丸く粘土紐を貼り付けている。17はやや隆起させた楕円区画を行っているもので，楕円の重なる部分には半截竹管による縦の刻みを施している。16・20・21は第4群土器，18・19は第2群A・B類に相当する。23は無節の縄文を施している。25～27は土器片錘，28は土製円板である。



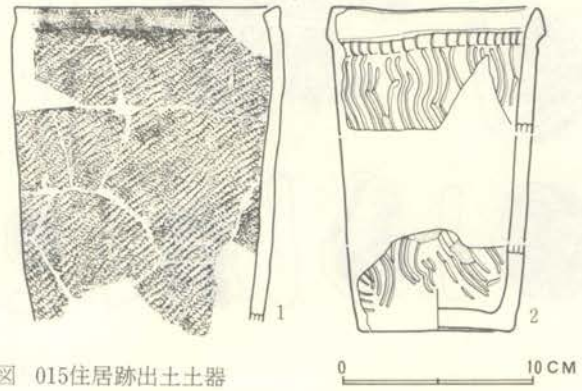
第249図　015住居跡

位置　（中山新田Ⅱ－２遺跡）12グリッド北東部。002住居跡に近接する。

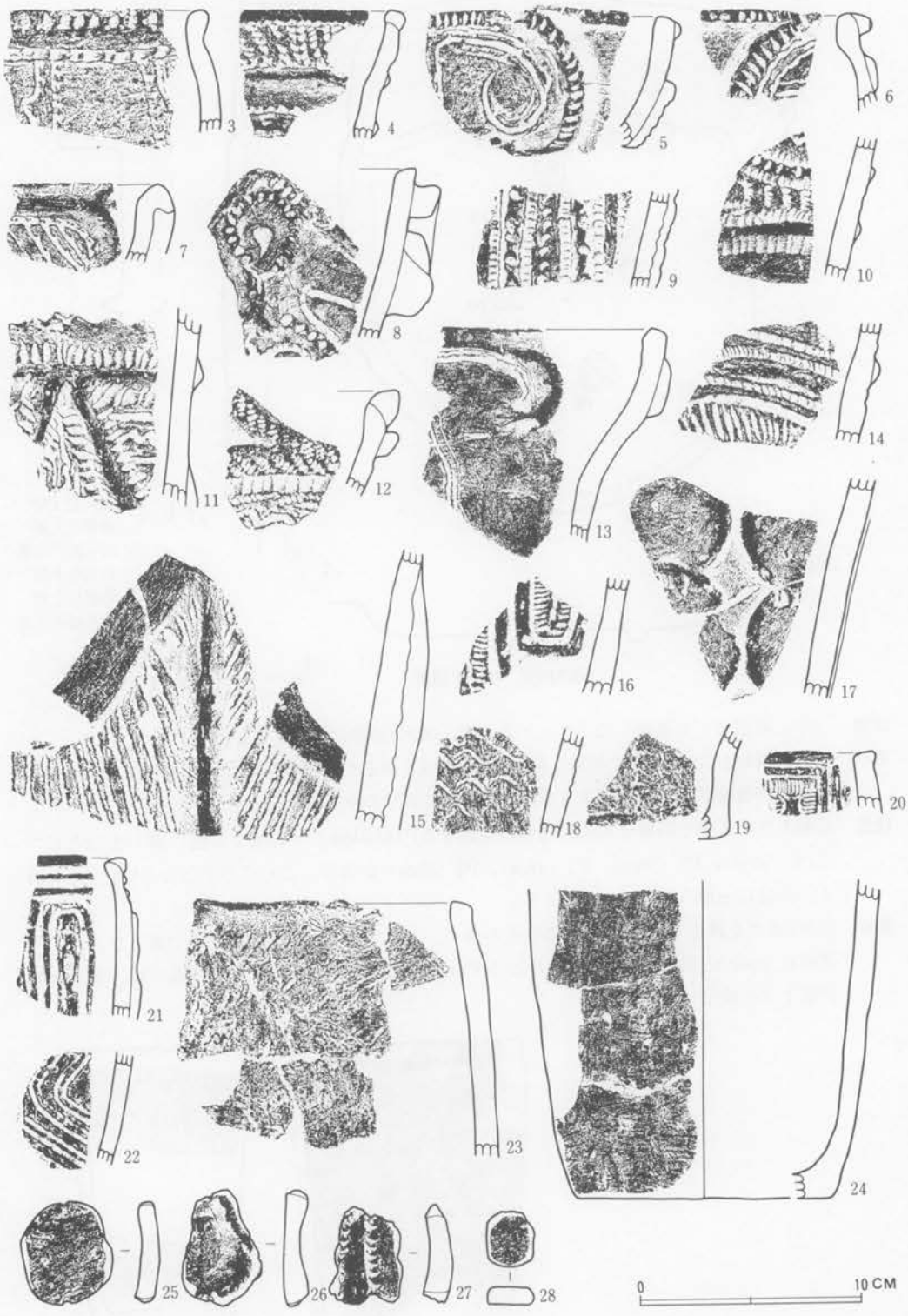
形状　南北に長軸4.7m，東西に短軸3.6m，壁高30cmを測るやや不整形のプランを呈する。住居北側¼は一番幅が広く，床面より一段高くなっておりテラス状を呈している。

柱穴　床面とテラス面との境にあるP2と南に位置するP4が60cmと一番深く，他に深いものとしてはP6（56cm），P5（50cm），P1（47cm），P3（39cm）があり，これらが主となる柱穴と思われる。他は15cm程の深さばかりである。

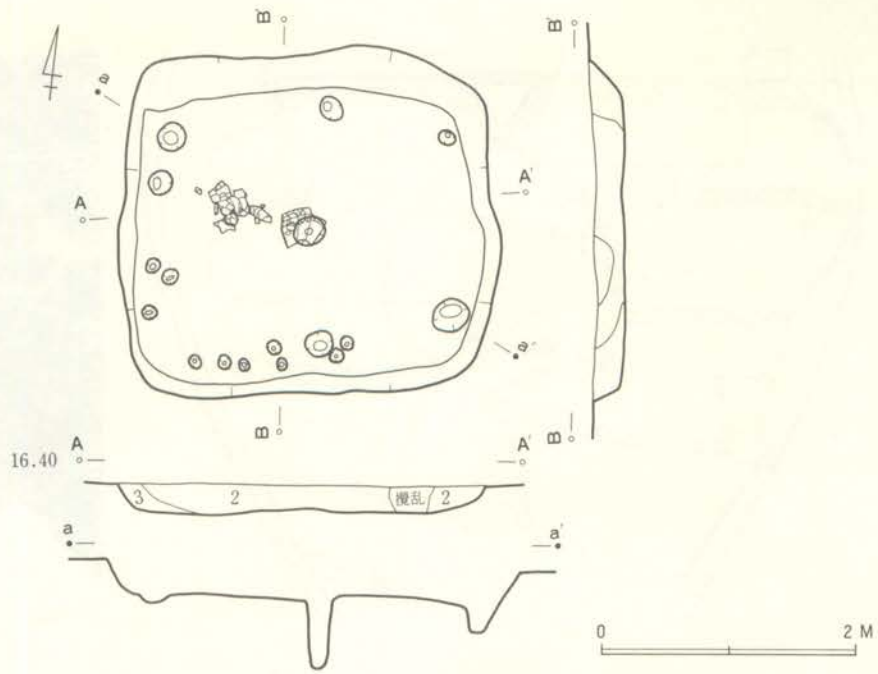
遺物　総数539点を数える。覆土上部に小片が多く，復原できたものは２点のみであった。
黒曜石は002住居跡のそばにもかかわらず40点（61.5ｇ）と少く，他に土器片錘３点，土製円板１点を検出している。



第250図　015住居跡出土土器



第251図　015住居跡出土遺物



029住居　土層
1　黒褐色土層
2　暗褐色土層
3　暗黄褐色土層

第252図　029 住居跡

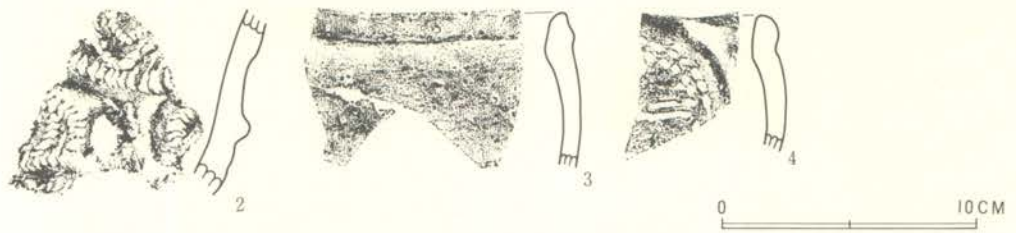
029住居跡

位置　（中山新田II－2遺跡）35グリッド東側中央部。033竪穴状遺構に近接する。

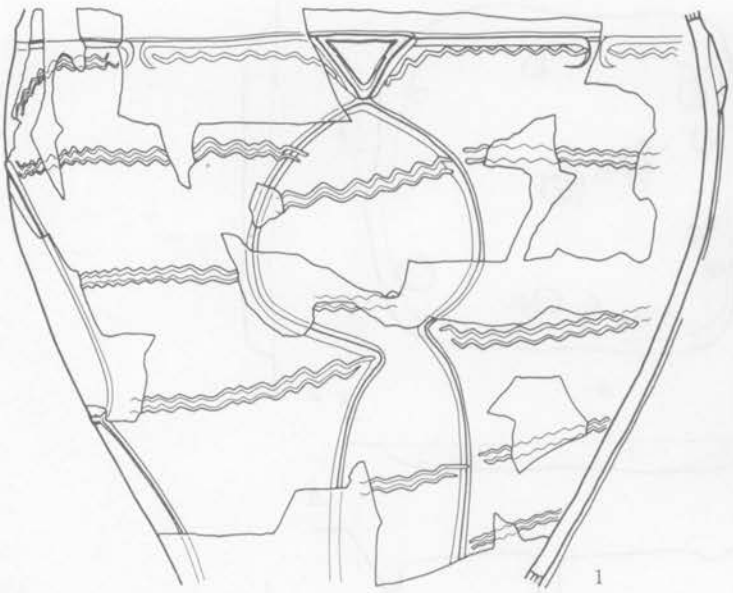
形状　東西に長軸3m，南北に短軸2.7m，壁高24cmを測る隅丸の長方形プランを呈する。

柱穴　中央に直径30cm，深さ55cmの主柱穴を有し，東南の隅に深さ20cm程の柱穴を付随させる。他のピットは非常に浅い。

遺物　総数20点を数える。大半が住居中央につぶれた状態で検出された深鉢形土器の破片であり，その半分は主柱穴上を覆っていた。



第253図　029 住居跡出土土器



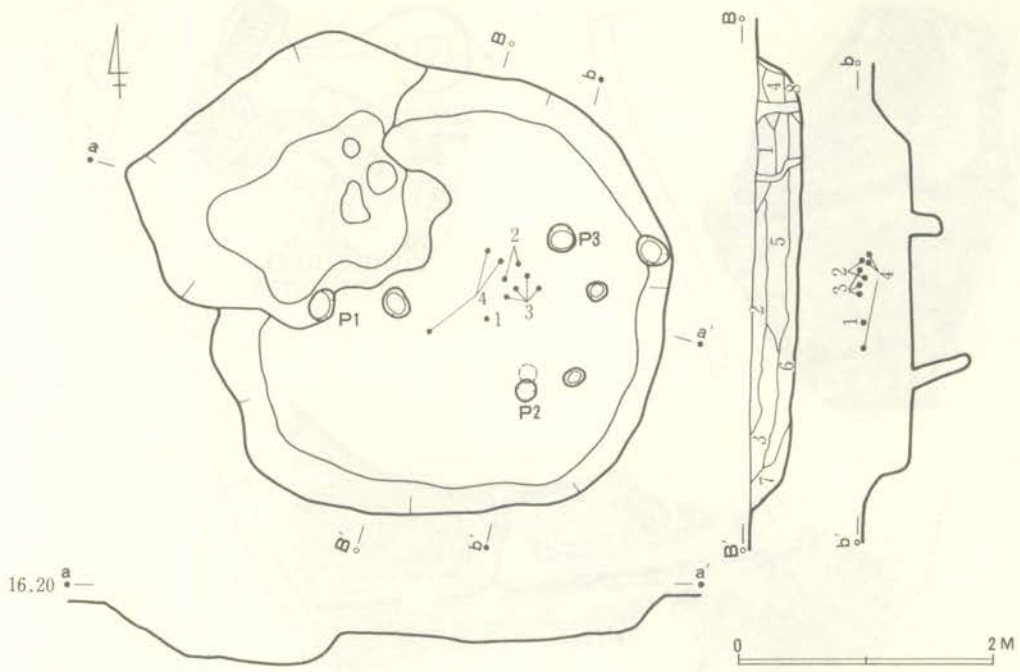
器内面に見える貝殻条痕

0 20 CM

第254図　029住居跡出土土器

029住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第254図 1	住居中央より検出した口縁乃び底部を欠損する深鉢形土器。文様は頸部に断面三角形の隆帯を施し，4単位でV字状の隆帯を貼り付け，その間にはX字状の隆帯を施している。胴部には半截竹管による波状の平行沈線を横位に施している。器内面には，アナダラ属の貝殻条痕による横方向の整形を行なっている。遺存度ほぼ完形。	103-1



第255図　039住居跡

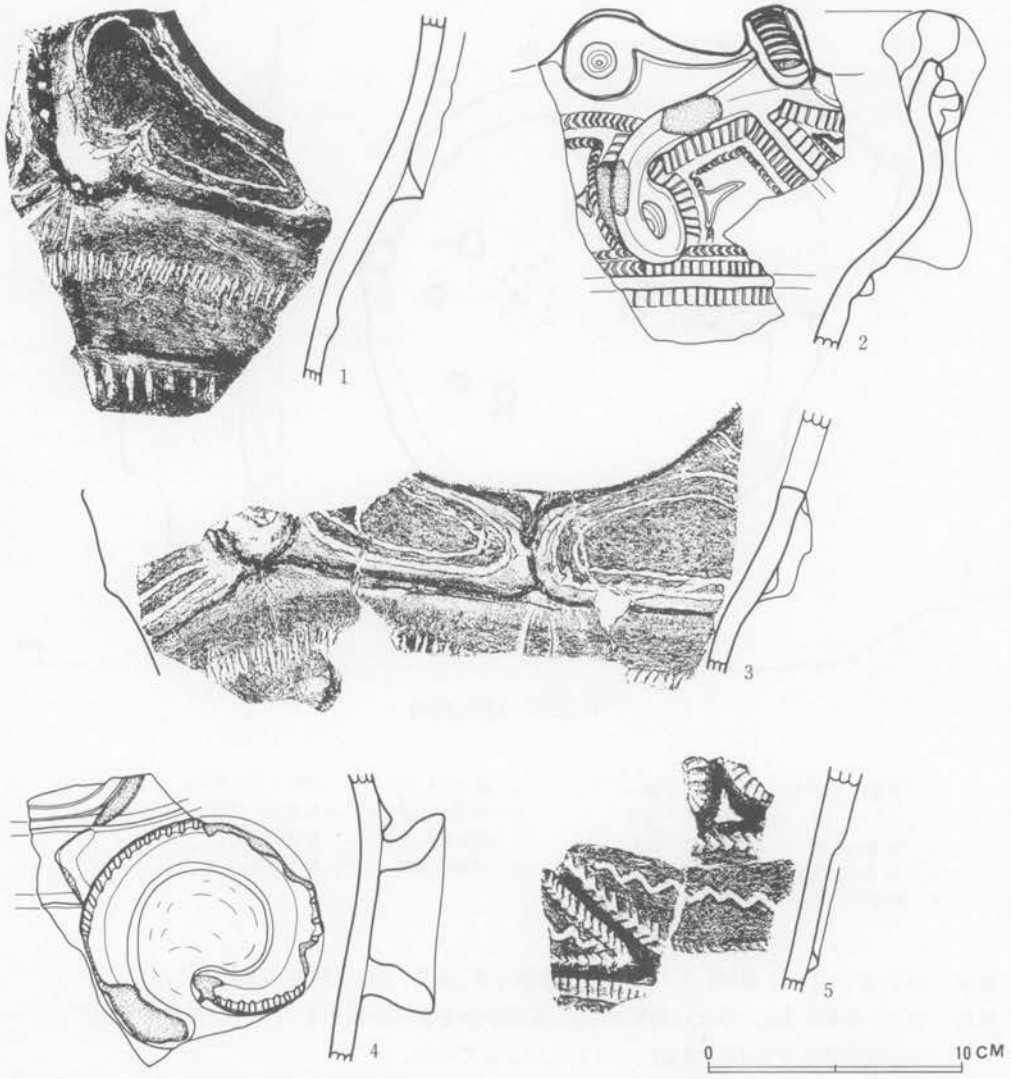
1　黒褐色土層　ローム粒を若干含み，やや褐色に近い色を呈する。
2　黒色土層　ローム粒を若干含む。
3　黒色土層　ローム粒を若干含む。
4　暗褐色土層　ローム粒を含む。
5　黒色土層　ローム微粒を若干含む。
6　黒色土層　ローム粒を若干含む。
7　暗黒褐色土層　ローム粒を若干含む。
8　暗褐色土層　ローム粒を含む。

位置　（中山新田II－1遺跡）1・5グリッド東側にまたがる。043住居跡に近接する。

形状　東西に長軸3.5m，南北に短軸3.4m，壁高36cmを測るほぼ円形のプランを呈する。北西の部分は風倒木と思われる攪乱によってこわされている。

柱穴　一番深いものは西側に位置するP1（57cm）で，他にP2（45cm），P3（25cm）がある。P2は斜めに掘り込まれている。他のピットは15cm程の浅いものであるが，攪乱内には深さ34cmのピットが確認されている。このピットについては本住居に付随するものか不明である。

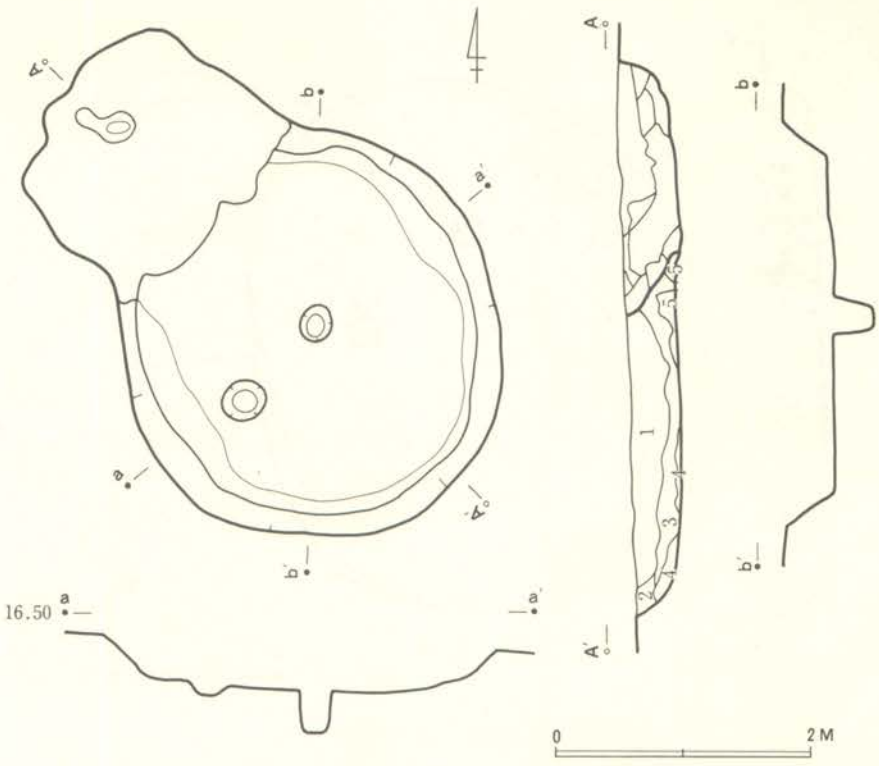
遺物　総数51点を数える。砕片が多く，実測，拓本の対象となるものは第256図のとおりである。



第256図　039住居跡出土土器

039住居跡出土土器（第256図）

1・3は同一個体である。扇状把手を4単位で廻らすもので口縁部には2列の有節線を施し，胴部には縦の刻みを廻らせている。2は幅広の竹管と大小のペン先状工具を用いた施文を行っている。胎土には雲母は混入されていない。4は大きい隆帯を半渦巻状に貼り付けた胴部破片である。5も2同様先の平担なものとペン先状の竹管工具を用いて押引文を施している。1・4は第3群土器で1はB類に相当する。2・5は第4群土器である。



第257図　043住居跡

1　黒色土層　ローム微粒，炭化粒を若干含む。
2　暗褐色土層　ローム粒を若干含む。
3　黒褐色土層　ローム微粒，炭化粒を若干含む。
4　暗褐色土層　ローム粒を含む。
5　暗褐色土層　砂質である。

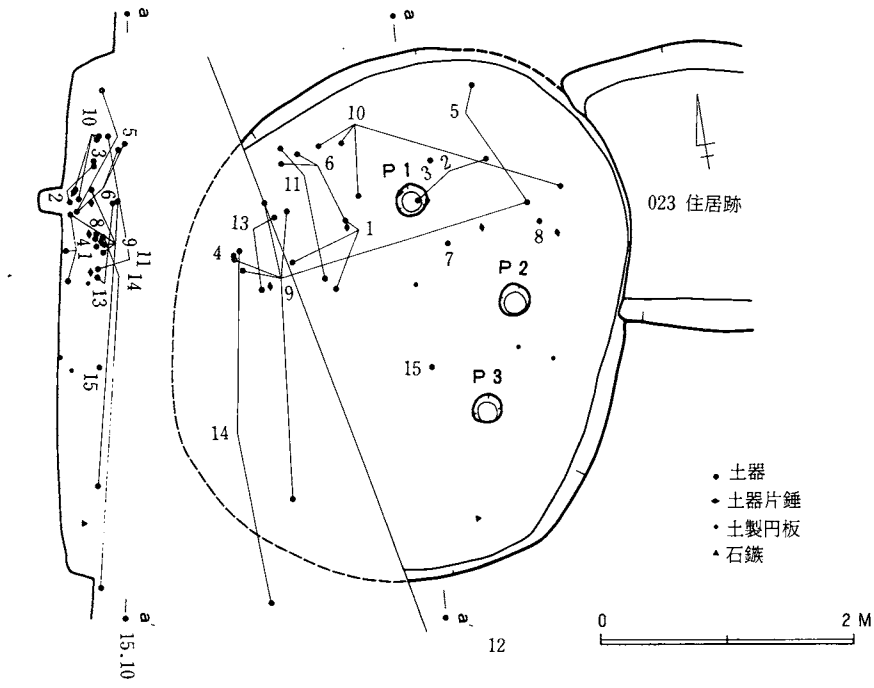
位置　（中山新田II－1遺跡）5グリッド北西隅に位置する。039住居跡に近接する。

形状　直径3.1m程の円形のプランを有する。北西部には風倒木痕と思われる攪乱がある。

柱穴　中央部に直径26cm，深さ32cmの主柱穴を有し，南西部に浅いピットを付随させる。

遺物　総数37点を数えるが大半が黒曜石のフレイクであった。第258図1は覆土上部より，2は床面に近い所で検出されている。

第258図　043住居跡出土土器



第259図　055 住居跡

位置　(中山新田II－2遺跡)14グリッド東側中央部。住居東北部は 023住居跡（歴史時代）に切られている。

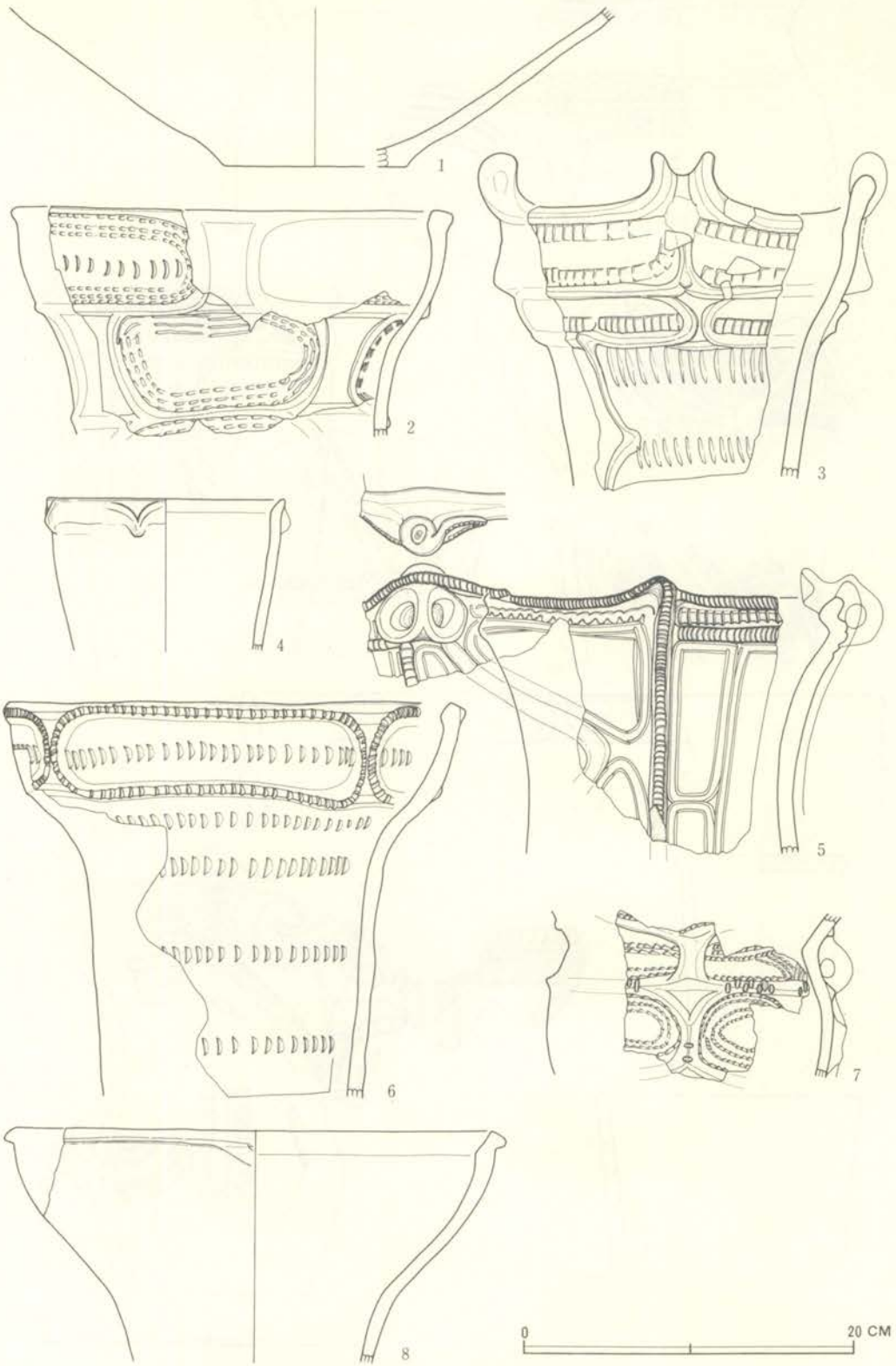
形状　南北に長軸4.1m，東西に短軸3.2m(現存幅)，壁高36cmを測る。プランは楕円形を呈するものと思われる。南西部分は覆土より床面下まで黒色土が堆積しており，プラン及び床面は検出されなかった。復原プランは遺物のドットマップより起こしたものである。

柱穴　各柱穴の深さはＰ１（20cm)・Ｐ２（50cm)・Ｐ３（50cm）である。

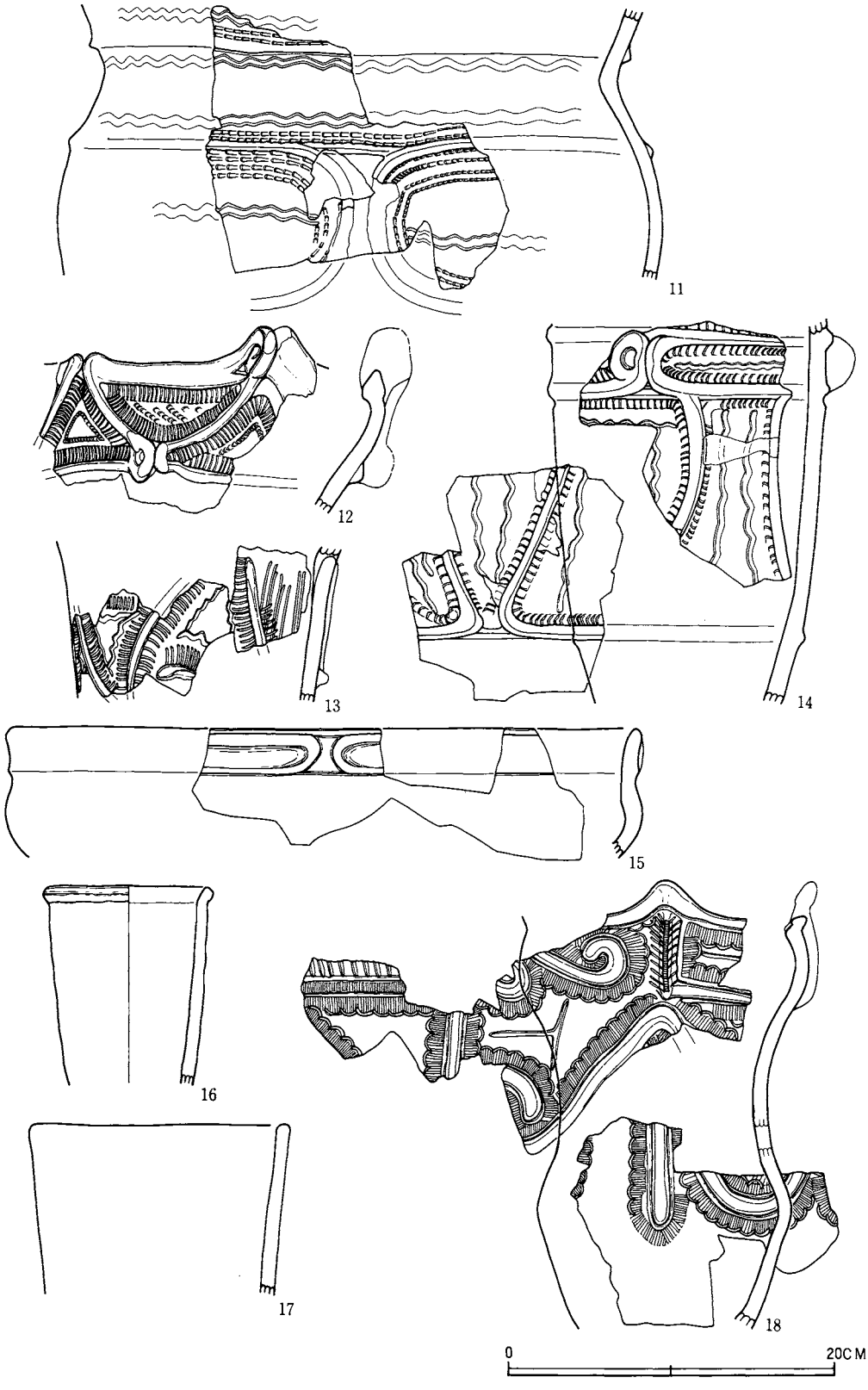
遺物　総数 356点を数える。住居の立地が傾斜地の中腹に位置するせいか覆土上層に大形の破片が多く検出された。他に土器片錘（10点)，土製円版（８点)，石鏃(２点）等が検出されている。

055住居跡出土遺物（第263図～第265図・図版109)

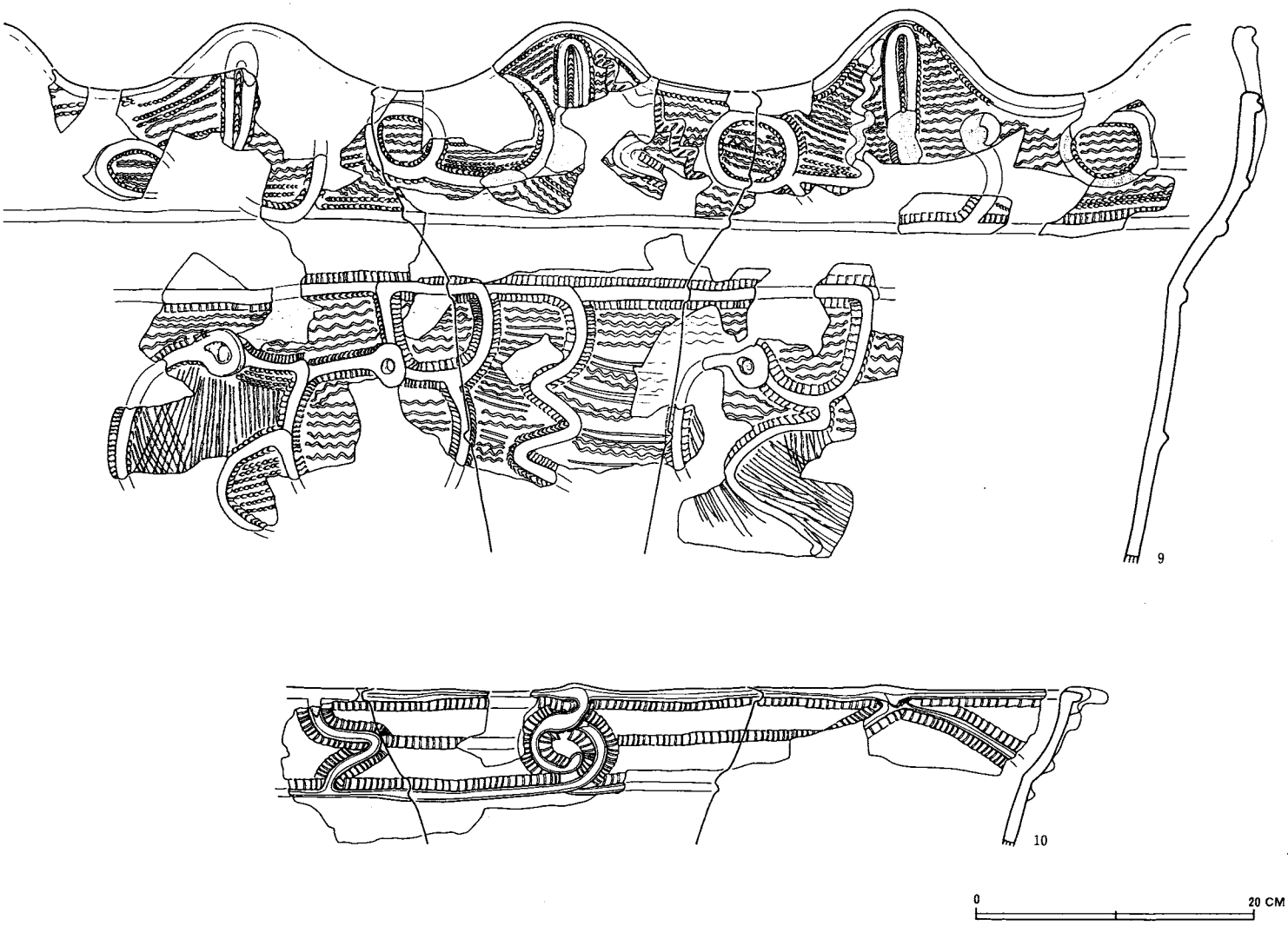
（第263図１～14）全て第３群土器である。２・４～９はＢ類，11はＣ類，３はＥ類，12はＨ類に相当する。２・４・８は棒状工具による３列の押引文を施している。他のＢ類は半截竹管による平行の押引文を施している。(第264図1～15）１・４・６～８は第４群土器，２は第３群Ｈ類，３・11は第２群Ａ類，５は第２群Ｂ類，９は第１群Ｂ類，10は第１群Ｃ類に相当する。３は中央になだらかな隆帯を施し，半截竹管による平行沈線で区画している。地文は原体ＲＬの縄文で隆帯上にも施している。９は地文に半截竹管による横位の条線を施し，その上に断面三角形を呈する粘土紐を貼り付けている。口唇内面にもさらに太い隆帯を施している。中部山岳に類例を求めることができる諸磯Ｃ式に相当する。(第265図１～22）１～11は土器片錘，12～19は土製円板，20～22は石鏃である。



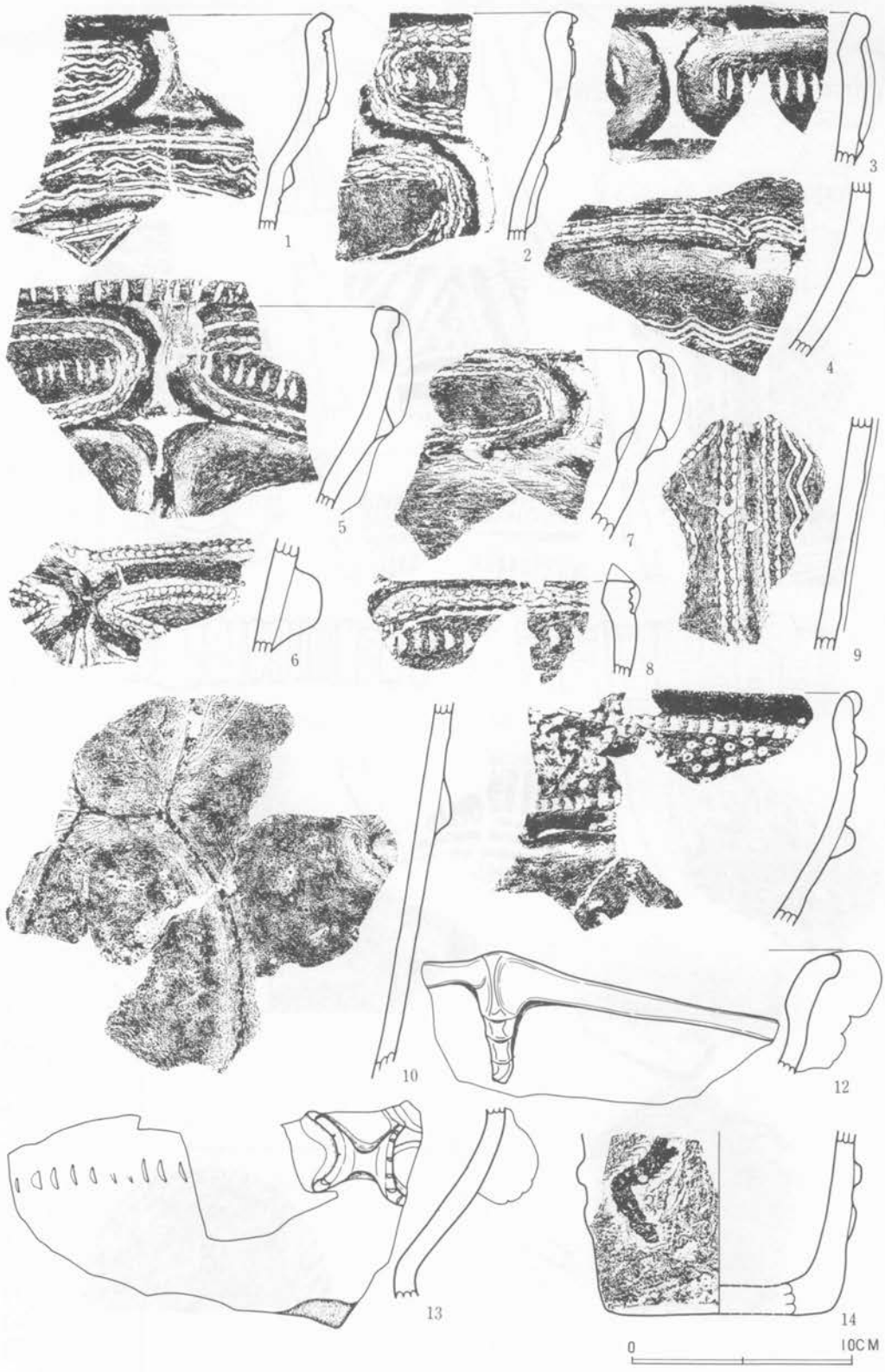
第260図　055住居跡出土土器



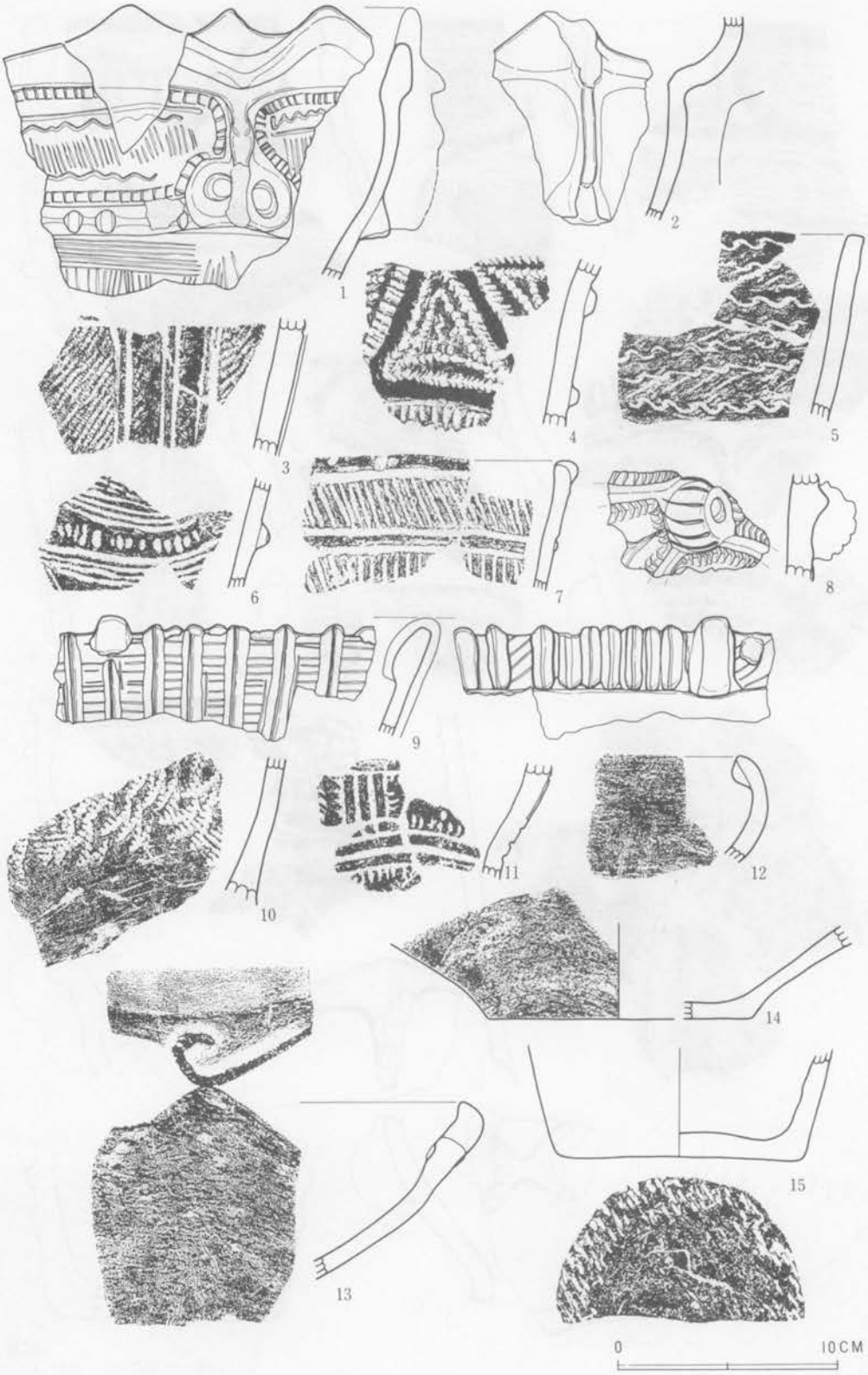
第261図　055 住居跡出土土器



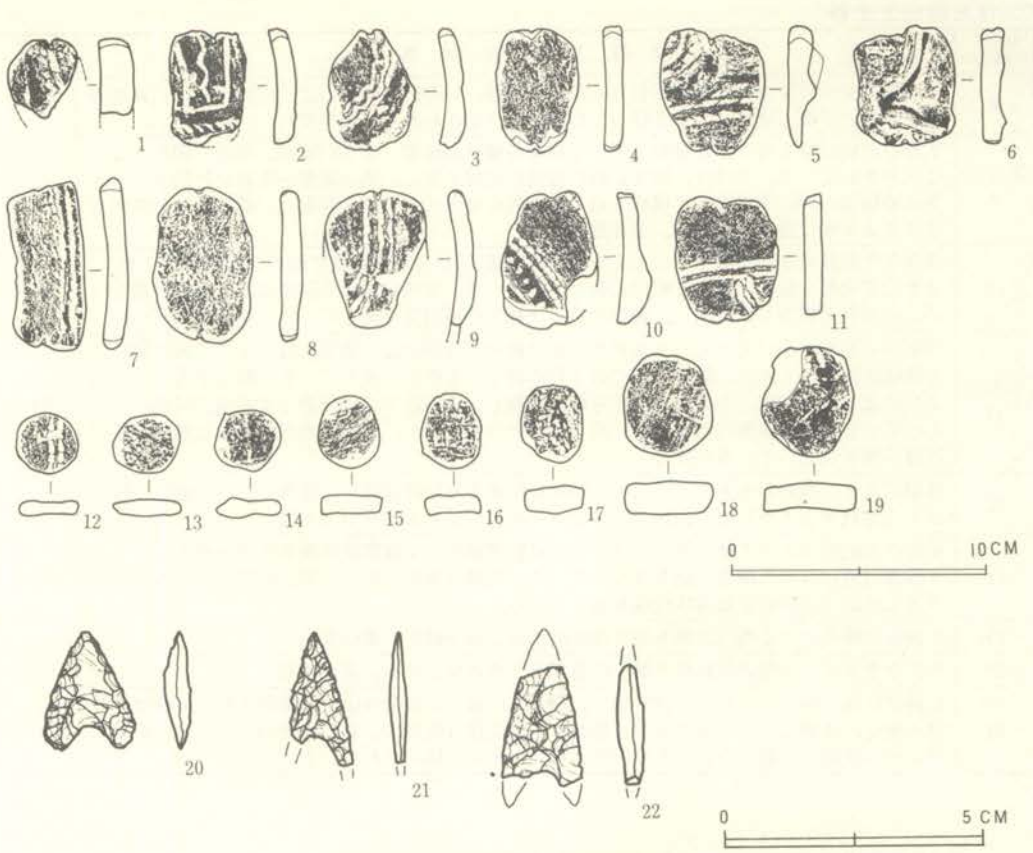
第262図　055住居跡出土土器



第263図　055 住居跡出土土器



第264図　055 住居跡出土土器



第265図　055 住居跡出土遺物

055住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第260図 1	口縁から底部にかけて直線的にすぼまる浅鉢形土器。底部には網代痕を有する。遺存度⅕	
2	頸部より緩やかに広がる口縁部破片。隆帯による楕円区画を口縁部から頸部にかけて2段にわたって施し，区画内には，隆帯に沿って細い竹管による3列の押引文を施している。遺存度⅓	106-1
3	緩やかなキャリパー状を呈する深鉢形土器。2つで1対をなす波状を4単位で廻らせるものと思われる。文様帯は頸部より2分され，口縁部文様帯は隆帯による楕円区画を2段に行い，区画内には幅広の角押文を施している。胴部にはハマグリ等による縦位の貝殻腹縁圧痕文と隆帯による懸垂文を施している。遺存度¼	106-2
4	円筒形を呈する小型の深鉢形土器。口唇部断面は三角形状を呈し，口辺には約1cm呈の幅で輪積痕を残す。そして4単位で1段のつまみ状隆帯を貼り付けている。胴部は無文。遺存度⅗	107-6
5	緩やかなキャリパー状を呈し，口唇部を内側に肥厚させる深鉢形土器。口辺には幅の狭い横位の文様帯をもち，胴部には縦位の文様区画を行なっている。口唇部には半截竹管内面を押し付けて連続押引きを行ない，胴部には同工具による平行沈線によって三角形や四角形の区画を施している。遺存度¼	107-1
6	口縁より頸部にかけて緩やかにすぼまり，頸部以下は直線的に底部へ移向する深鉢形土器。文様は口縁部に楕円形の隆帯区画を4単位で施し，隆帯上には，刻みを施す。区画内外には，竹管による縦方向の刻みを連続して数段にわたって施している。遺存度½弱	107-3
7	頸部以下をふくらませる胴部破片。頸部は横位の断面三角形状の隆帯によって区画され，一部に橋状把手を有する。文様は有節線状に角度を付けた押引文を2～4列施している。遺存度¼	108-1

055住居跡出土土器

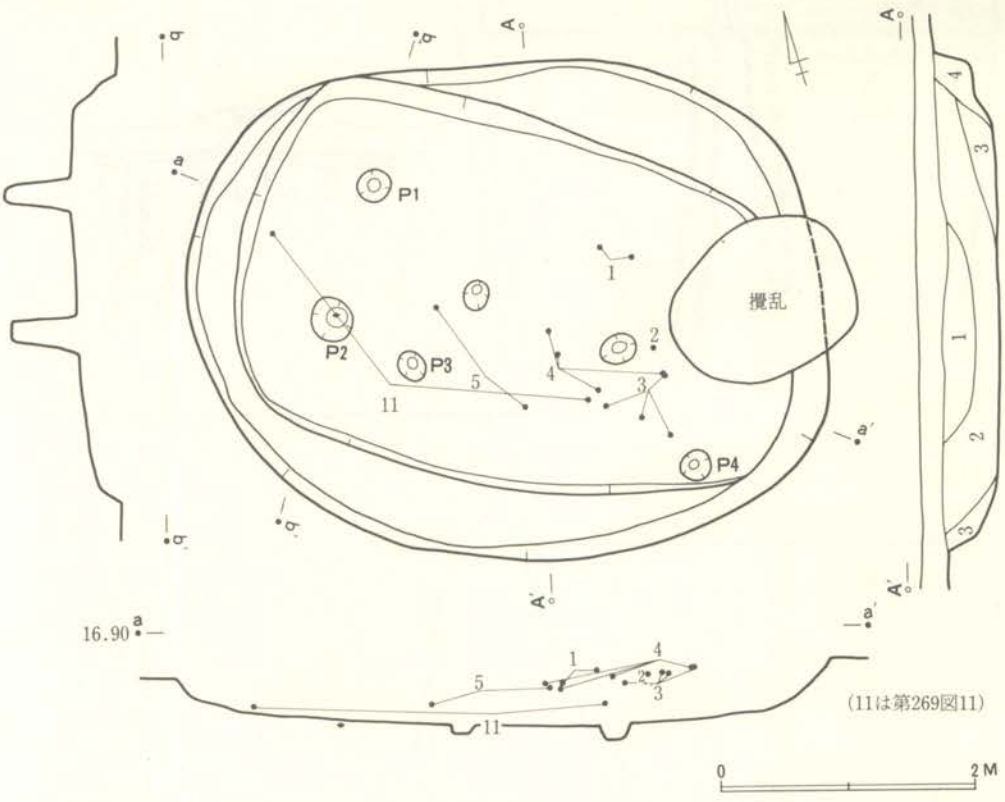
挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
8	口唇部をやや外反させ，頸部で括れる深鉢形土器。口唇部は隆帯のように突出し，口縁を廻っており，一部に隆帯による文様らしいものがうかがわれる。遺存度¼	107-5
第262図 9	大形の波状口縁を有する深鉢形土器。文様帯は横位の隆帯により口縁部，頸部，胴部の3つに区画されている。文様は，地文に細い波状の沈線を施し，他は隆帯とそれに付随するペン先状や幅広の押引文によって構成される。胴部に施された円形の突起は，明確な単位構成を成さず3か所に施されている。遺存度¾	107-4
10	頸部より口縁にかけて緩やかにふくらむ口縁部破片。口唇部は幅広で器外面に突出しており，4単位で突起を施し，隆帯を縦位に貼り付けている。文様は頸部に隆帯による横帯区画を行い，口縁部文様帯を作り出し，隆帯に沿って幅広の押引文を施している。遺存度⅔	106-2
第261図 11	頸部から胴部にかけてふくらみを見せる胴部破片。頸部には，隆帯をはさんで半截竹管による波状沈線を2本施し，隆帯上部には2列の押引文を横位に施している。胴部上方には，同工具による波状沈線，2列の押引文を横位に施し，その直下には隆帯による楕円区画が行なわれている。楕円区画内には隆帯に沿って2列の押引文が，また区画内中央には横位の波状沈線が施されている。遺存度¼	108-2
12	隆帯による三角形のモチーフによって口縁を区画する口縁部破片。隆帯に沿って幅広の竹管による連続押引きを行ない，区画内にはペン先状工具による押引文を施している。	
14	胴部から底部にかけて緩やかにすぼまる深鉢胴部破片。文様構成は横帯区画を基本としており頸部付近には楕円横帯区画を行なっている。文様は隆帯に沿って幅広の竹管による押引文を施しており区画内には波状沈線を施している。	108-3
15	口縁部に隆帯による楕円区画を施す浅鉢形土器口縁部破片。遺存度⅓	
16	円筒形を呈する小型の深鉢形土器。口唇部をやや外反させる。遺存度½	
18	口縁部は緩やかなキャリパー状を呈し，胴下半は緩やかに張り出す深鉢形土器。口縁は小波状を呈し，4単位で廻らせるものと思われる。文様は隆帯による渦巻状のモチーフに直角方向の細い沈線と半截竹管による半円形の刺突によって構成されている。	108-4

056住居跡出土遺物（第268図，第269図・図版110）

（第268図1～27）1～14は第3群土器である。4はA類，5・9・11・12はB類，6はD類，1はE類，2はH類，10・13・14はK類に相当する。1は2段のつまみ状突起を1対にして小型の扇状把手のような貼り付けを行っているが，口縁より隆起せず口縁は平縁を呈している。口唇下には貝殻腹縁による縦の刻みが施されている。B類に相当する。二列の押引文はすべて半截竹管工具が用いられている。

15～20は第2群B類，21～27は第2群A類に相当する。15～17・20は口辺に幅の狭い輪積段を残すもので，全面に結節回転文が施されている。20は輪積段によって区画された部分に半截竹管による縦の刻みが2段にわたって施されている。24～26は格子状に沈線が施されており，25・26は半截竹管を用いている。

（第269図1～19）1～7は第4群土器である。11・12は地文に無節の縄文を施している。17～19は土器片錘である。



1　黒褐色土層　全体に軟弱な土質を呈し，ローム粒が混入する。
2　暗褐色土層　1層に比較し，硬くしまり，1層と同様ローム粒が全体に点在する。また1層に比較し，褐色土が多く混入する。
3　暗褐色土層　褐色土，ソフトローム小ブロックを混入する。
4　褐 色 土 層　少量の暗褐色土を混入する。

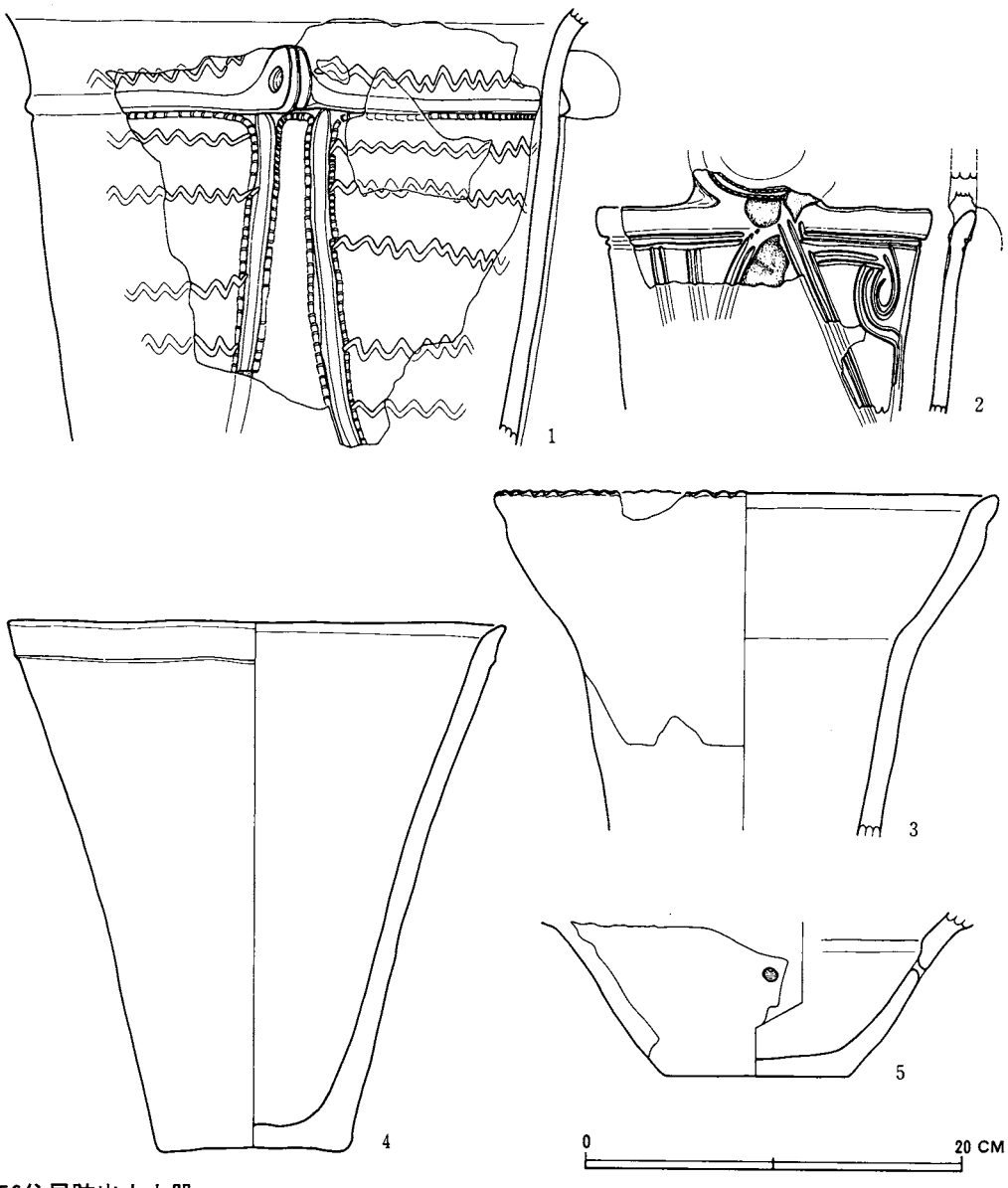
第266図　056住居跡

位置　（中山新田II－2遺跡）8グリッド南西部。057住居跡に近接する。

形状　東西に長軸5m，南北に短軸3.9m，壁高40cmを測る楕円形のプランを呈する。住居内はさらに楕円形に一段低くなっており，東側を除いて015住居跡に見られるようなテラス部分を作り出している。

柱穴　P1・P2は53cmと深く，主柱穴と考えられる。P3・P4は深さ21cm・27cmであり，やや浅めではあるが同等のものと思われる。他の2本はエレベーション図に見られるように浅い。

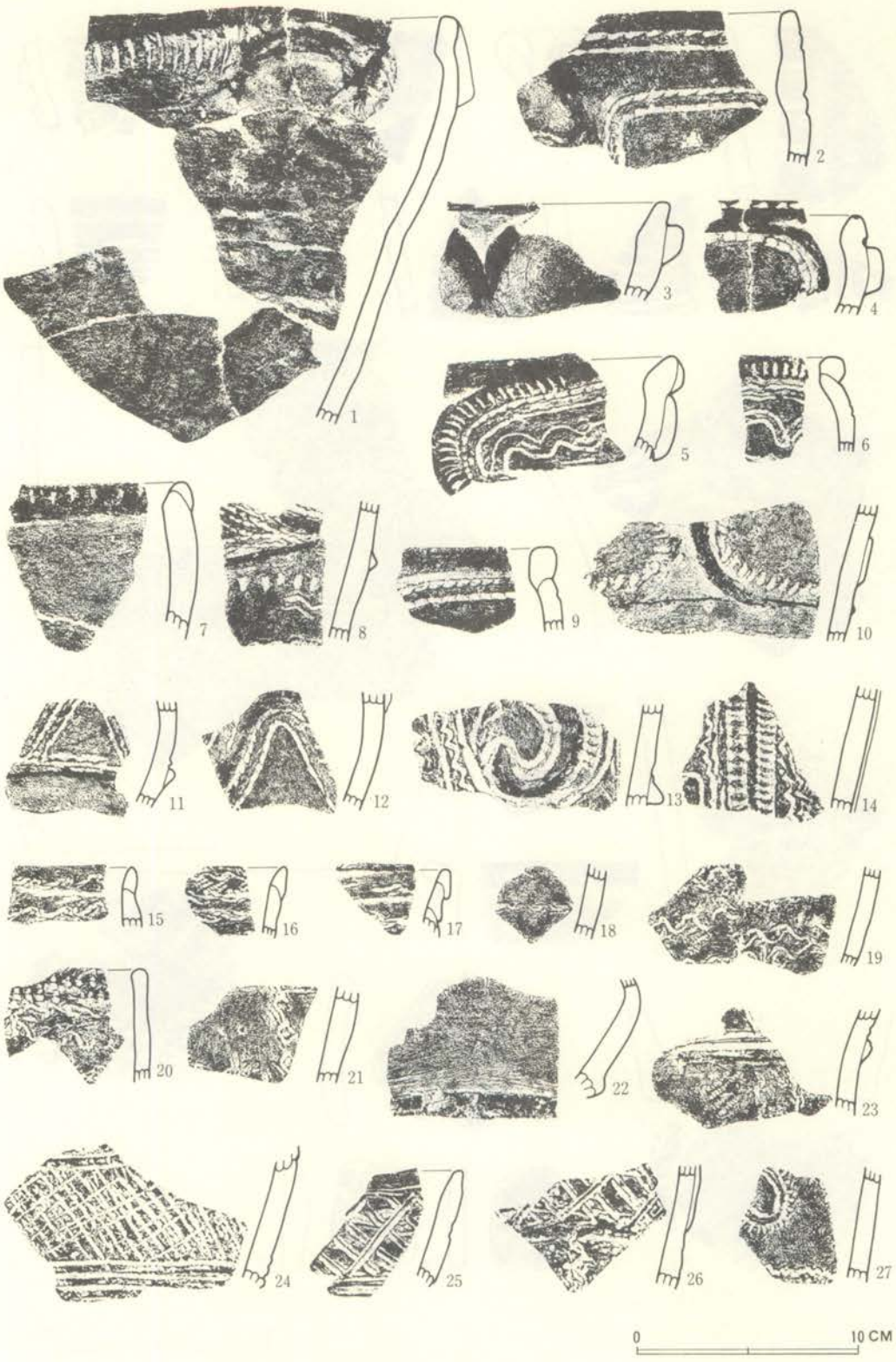
遺物　総数120点を数える。出土状況は散漫であるが，比較的床面に近いものが多く，平面ではテラス部分より内側に散布している。



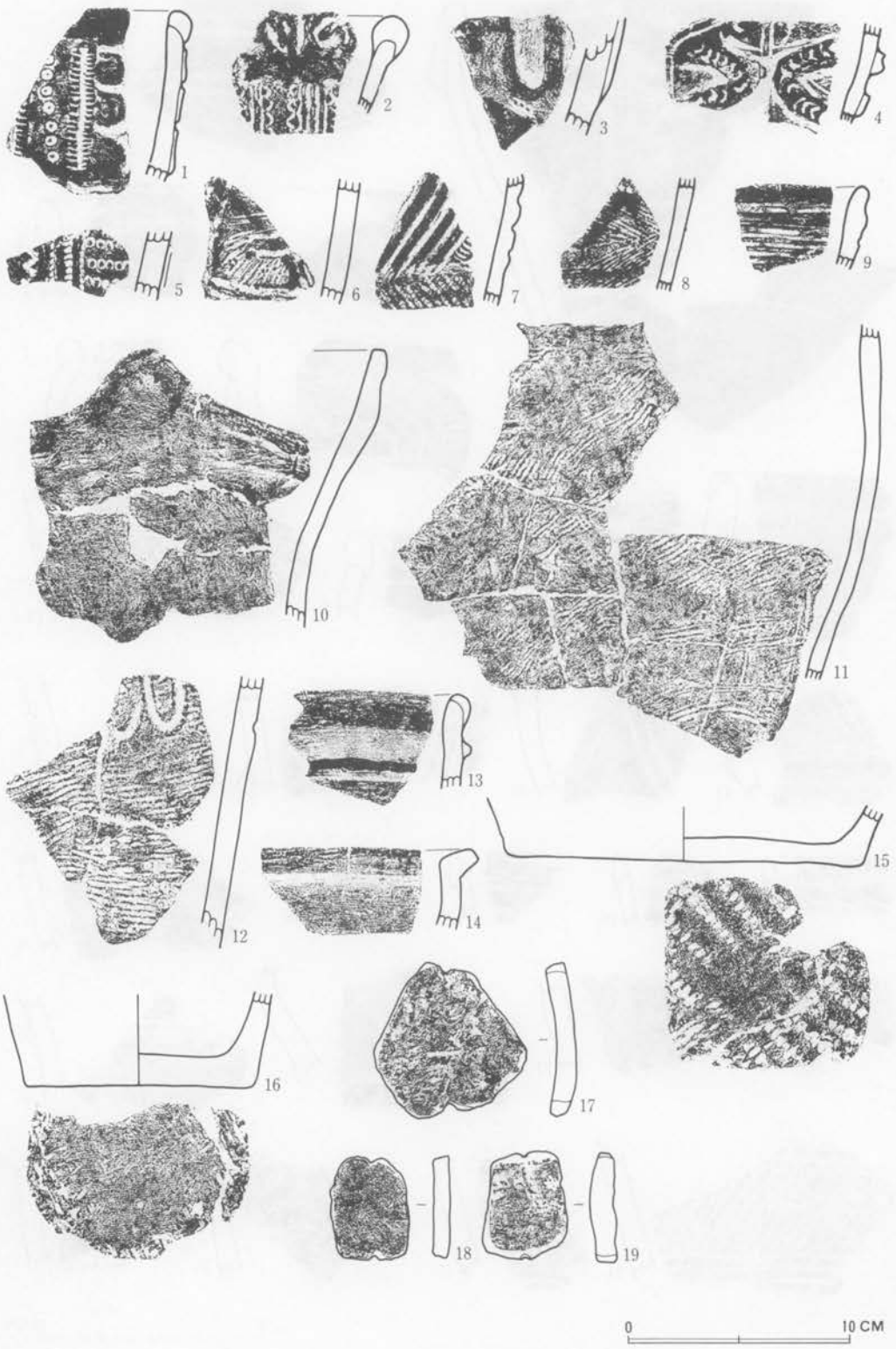
056住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第267図 1	胴部破片。頸部に横位の隆帯を貼り付け，把手状の突起を中心に2本の隆帯を垂下させている。突起は4単位で廻るものと思われる。文様は胴部に横方向の太い波状沈線と隆帯に沿って同竹管による押引文が施されている。遺存度¼	111-6
2	円筒形状を呈する小型の深鉢形土器。口縁部には橋状の突起を有するものと思われる。口辺は1段高く，文様は半截竹管を用いた平行沈線で描かれている。遺存度½	111-4
3	口縁を頸部より緩やかに開く無文の深鉢形土器。口唇部には棒状工具による刻みを有する。遺存度½	111-3
4	口縁より底部まで直線的にすぼまる無文の深鉢形土器。口縁部には帯状の隆帯を廻らせる。底部には網代痕なし。遺存度⅓	111-5
5	底部より緩やかに立上がり口縁部付近で外反する小型の浅鉢形土器。口縁部は欠損しているため全貌は不明。胴部には補修孔を有する。底部には網代痕なし。破片の⅓は055住の覆土中より出土。遺存度½	111-2

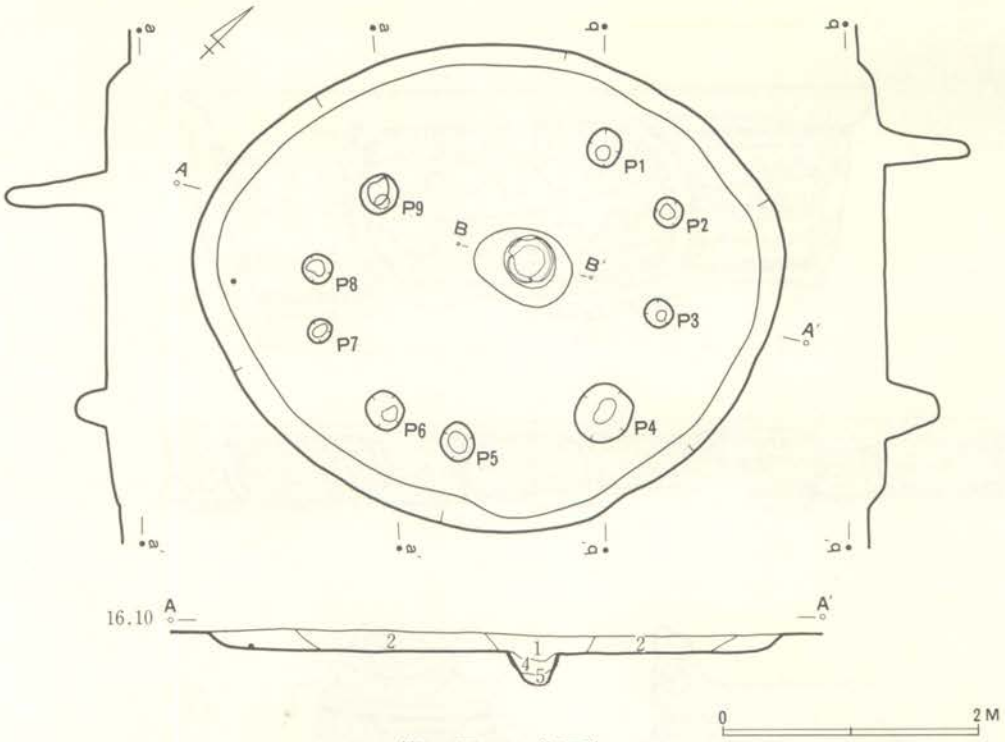
第267図　056住居跡出土土器



第268図　056住居跡出土土器

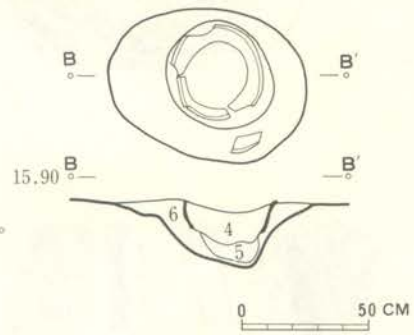


第269図　056住居跡出土遺物



第270図　057住居跡

1　黒色土層　若干の焼土粒を含む。
2　暗褐色土層　ローム粒を多量に含む。
3　暗褐色土層　比較的粒の荒いローム粒を含む。
4　黒色土層　ロームブロックを混入する。
5　黄褐色土層　黒色土を混入する。
6　黄褐色土層　火を受けたロームブロックを混入する。



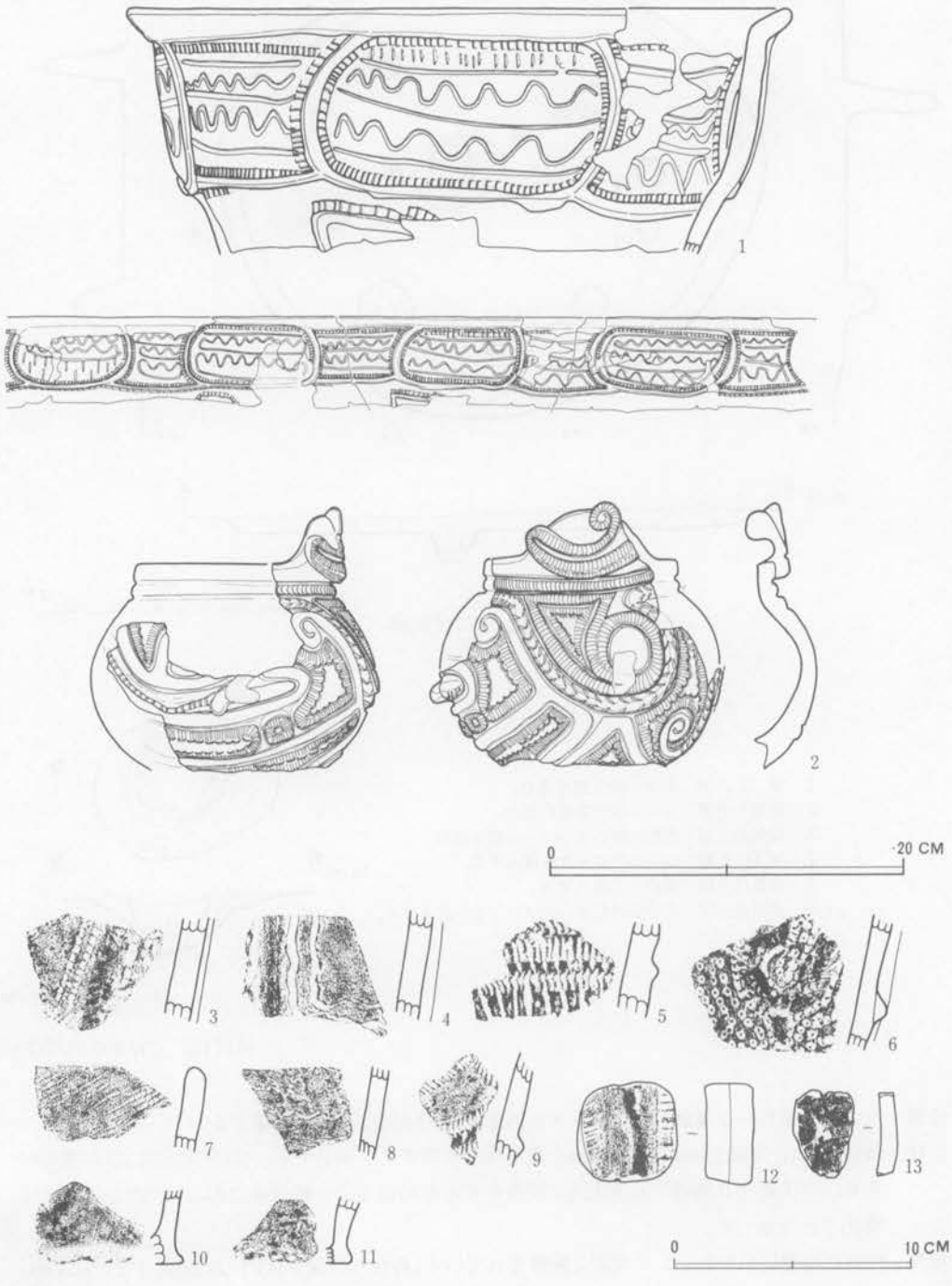
第271図　057住居内埋甕炉

位置　（中山新田Ⅱ－2遺跡）12グリッド南西部。015・056住居跡に近接する。

形状　長軸4.7m，短軸3.8m，壁高18cmを測る楕円形のプランを呈する。住居中央部には埋甕炉があり，中山新田Ⅱ遺跡でも住居内に炉を有するものはこの一軒のみである。炉内から焼土は検出されなかった。

柱穴　柱穴は埋甕炉を中心として周囲に配置されている。各柱穴の深さはP1(98.5cm)，P2(21.5cm)，P3（21.5cm），P4（28.5cm），P5（28cm），P6（39cm），P7（30cm），P8（21.5cm），P9（64cm）であり，P1・P9が深く他は30cm前後のである。

遺物　総数93点を数える。小片と黒曜石が多く，復原可能なものは南西隅の床直上より検出した2番の土器と埋甕の2点のみであった。



第272図　057住居跡出土遺物

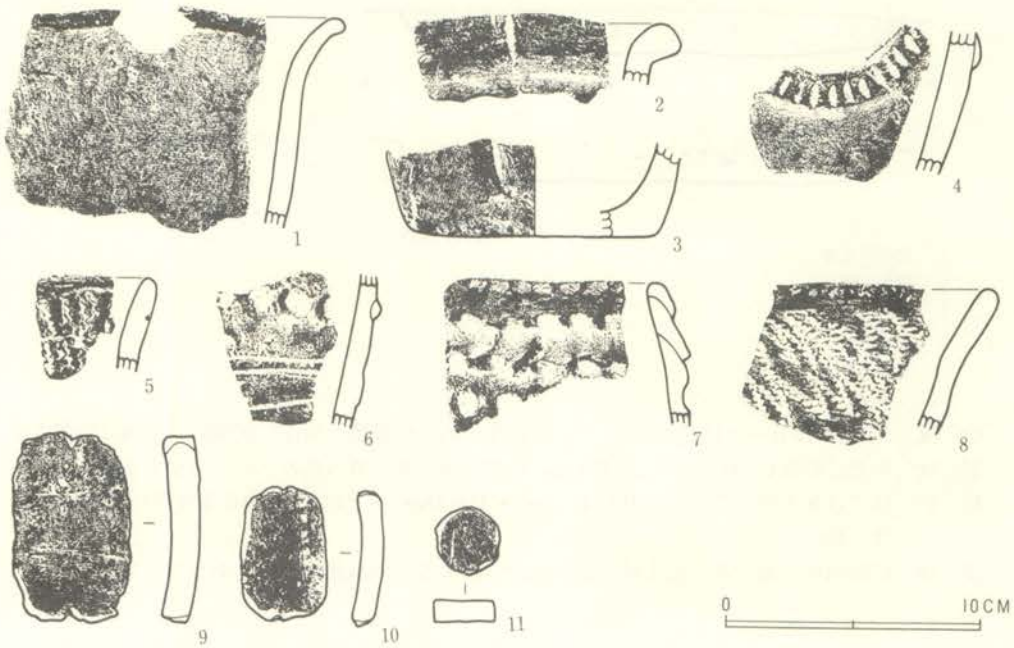
057住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第272図 1	住居中央より検出した埋甕。口唇部を外反させ頸部にかけて緩やかにすぼまる深鉢形土器口縁部。文様は口縁部に楕円形の隆帯区画を4単位で廻らし，幅広の竹管による押引文を隆帯に沿って施し，区画内外には直線や波状の沈線を施している。器内面には特に火を受けたような痕跡は認められない。遺存度ほぼ完形。	112-1 112-2
2	住居西南部床直上より検出。台付甕と考えられる。文様は半肉彫状に表現されており，口縁波状部分や口辺・胴部に表現された隆帯上にはヘラ状工具による細かい刻みが施されている。遺存度½	112-3
3～13	3・4は半截竹管を用いた2列の押引文と平行沈線をそれぞれ施している。6は地文に細い竹管を用いた円形竹管刺突文を施している。7・8は縄文を地文にもつもので8は横位の結節回転文を有する。12・13は土器片錘。	

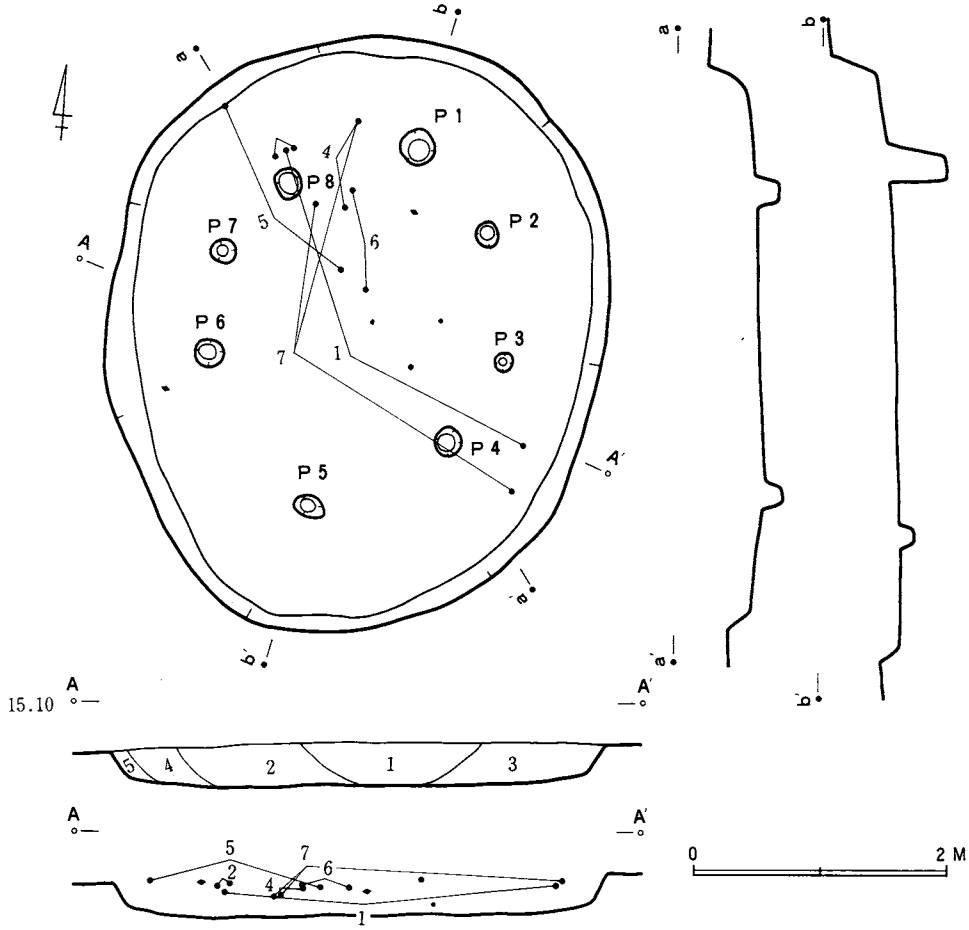
061 住居跡出土遺物（第273図，第277図・図版113）

（第277図1～27）1～23は第3群土器である。1・2はB類，6～13・7はK・L類，19～23はM類，3～5・14はN類に相当する。5は波状頂部にヘビのような貼付を行っている。13は幅広の角押文を緩やかな波状に施し，地文にはヘラ状工具による縦の沈線を満たしている。24～26は第2群A・B類に相当する。27は口辺に無文帯をもち，胴部には無節の縄文を施している。

（第273図1～11）1・2は無文土器，4は第4群土器，5～8は第1群C類土器である。6・7は輪積段に指頭による圧痕を施している。9・10は土器片錘，11は土製円板である。



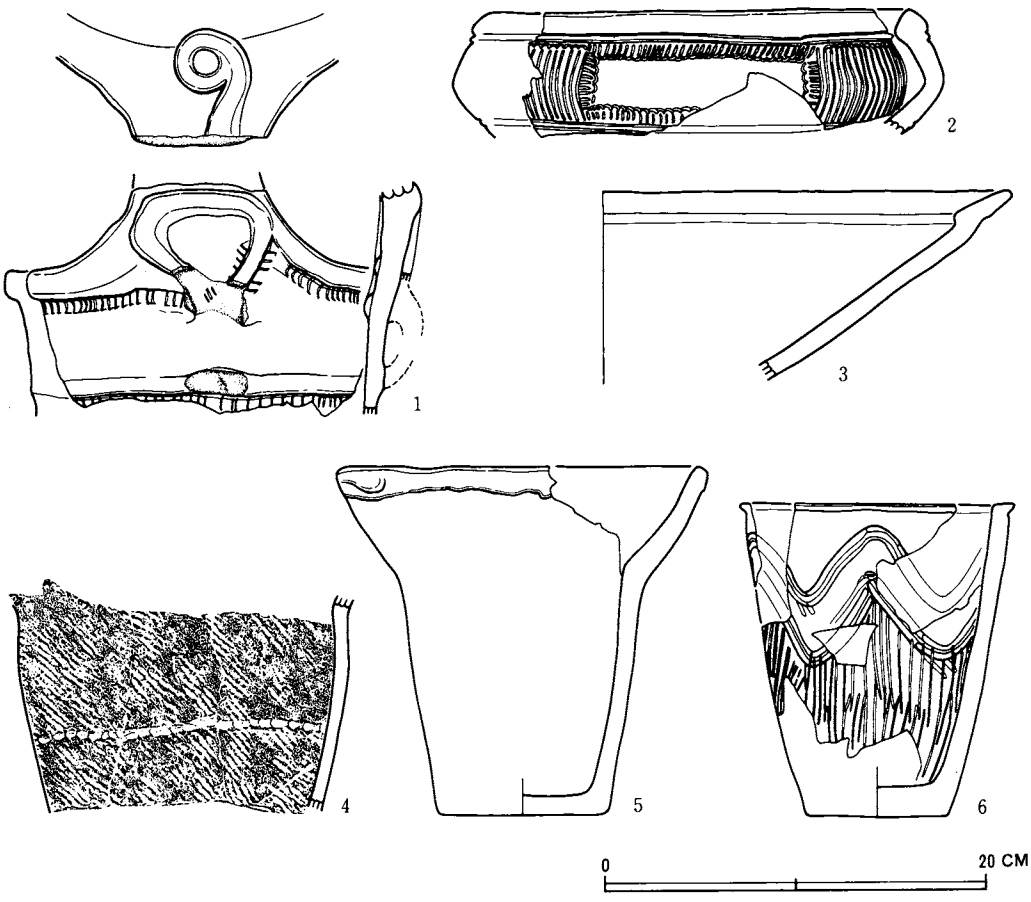
第273図　061 住居跡出土遺物



第274図　061 住居跡

1　暗褐色土層
2　褐色土層
3　褐色土層
4　暗褐色土層
5　黄褐色土層

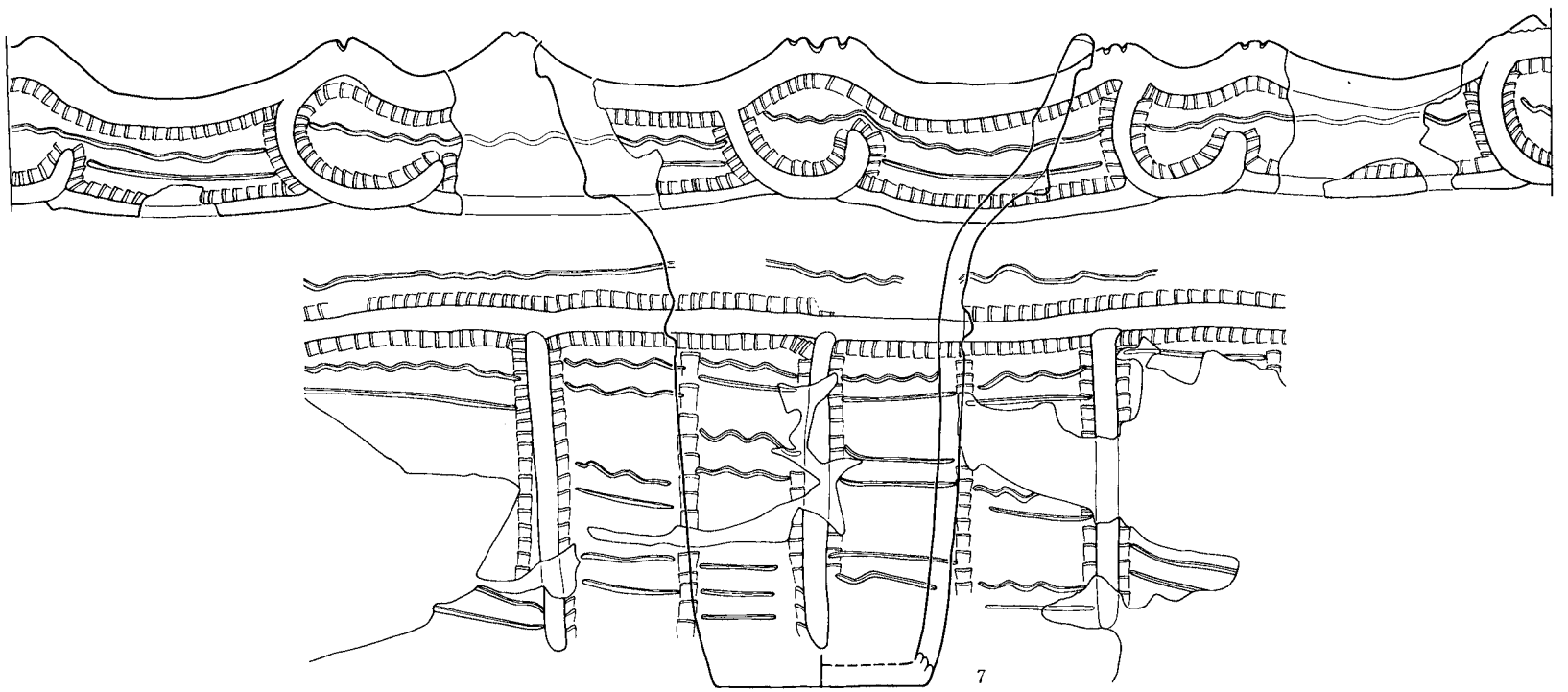
位　置　(中山新田II－2遺跡)10グリッド中央部。055 住居跡と同様に緩傾斜の中腹に位置する。
形　状　南北に長軸4.7m，東西に短軸4m，壁高34cmを測る楕円形のプランを呈する。
柱　穴　柱穴は8本廻っているがP1(47.5cm)・P4(18cm)・P8(18cm)の3本を除いては10cm前後と浅い。
遺　物　総数65点を数える。出土状況は斜面に位置するせいか北半分に集中している。



第275図　061住居跡出土土器

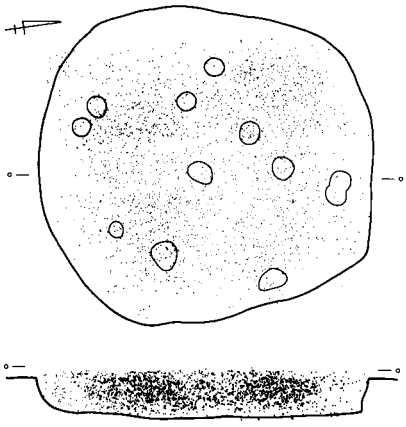
061住居跡出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第275図 1	扇状の波状口縁を有する口縁部破片。文様帯は，幅広の角押文で横帯区画されている。口縁波状部には表裏ともに隆帯を貼り付け，施文を行なっている。遺存度½	114-1
2	キャリパー状を呈する口縁部破片。文様帯は半截竹管による平行沈線によって横帯区画されている。区画内には同工具を用いて縦位の平行沈線や竹管断面を用いた半円形の刺突文によって窓枠状に区画し，平行沈線を付随させる施文を行なっている。窓枠状の区画内や横帯区画以下には，原体ＬＲの縄文が地文として施されている。遺存度⅓	114-3
4	地文に原体ＬＲの縄文を施し，胴中央部に細い半截竹管工具による１列の押引文を施している。遺存度⅔	114-2
5	口縁部を朝顔状に開く小型の深鉢形土器。口唇直下には若干の輪積痕を残す。胴部は無文で縦方向の整形がなされている。底部には網代痕なし。遺存度口縁部の½を欠く。	
6	円筒形状を呈する小型の深鉢形土器。口唇部は平坦で口唇直下は隆起している。文様は胴部に半截竹管工具による平行沈線を４単位で波状に廻らし，波状沈線以下にはヘラ状工具による縦位の沈線を施している。底部には網代痕なし。遺存度¾	114-5
第276図 7	文様帯を口縁部，頸部，胴部の３つに分け，緩やかな波状口縁を有する深鉢形土器。波状は２つで一対をなすものと単独のものとに分かれる。文様帯は高い隆帯によって区画されており，隆帯に沿って幅広の角押文を施している。胴部はさらに縦位の隆帯によって３つに区画されている。区画内には細い竹管による横位の波状沈線等を施している。遺存度ほぼ完形であるが底部を欠く。	114-4

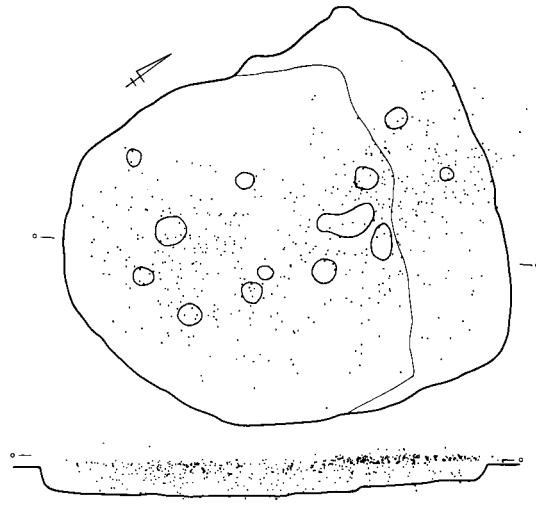


第276図　061住居跡出土土器

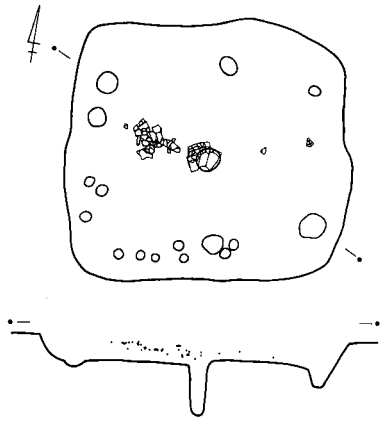
第277図　061 住居跡出土土器



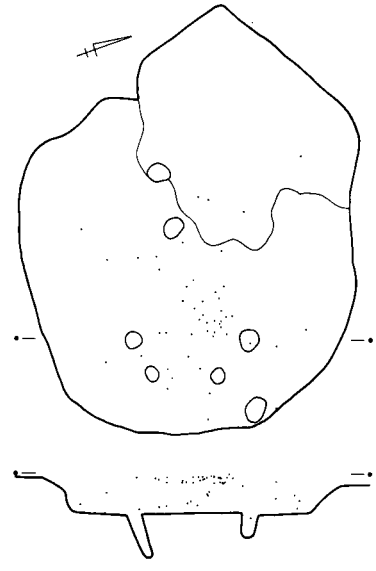
002住居跡



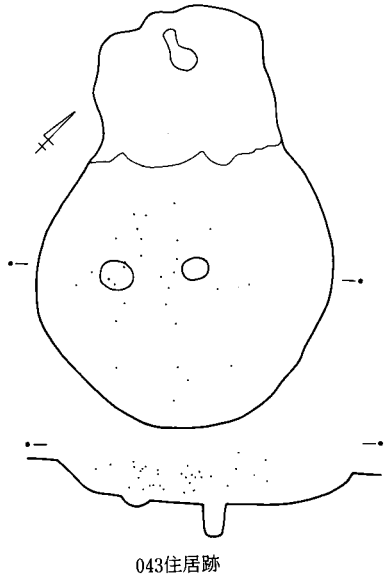
015住居跡



029住居跡

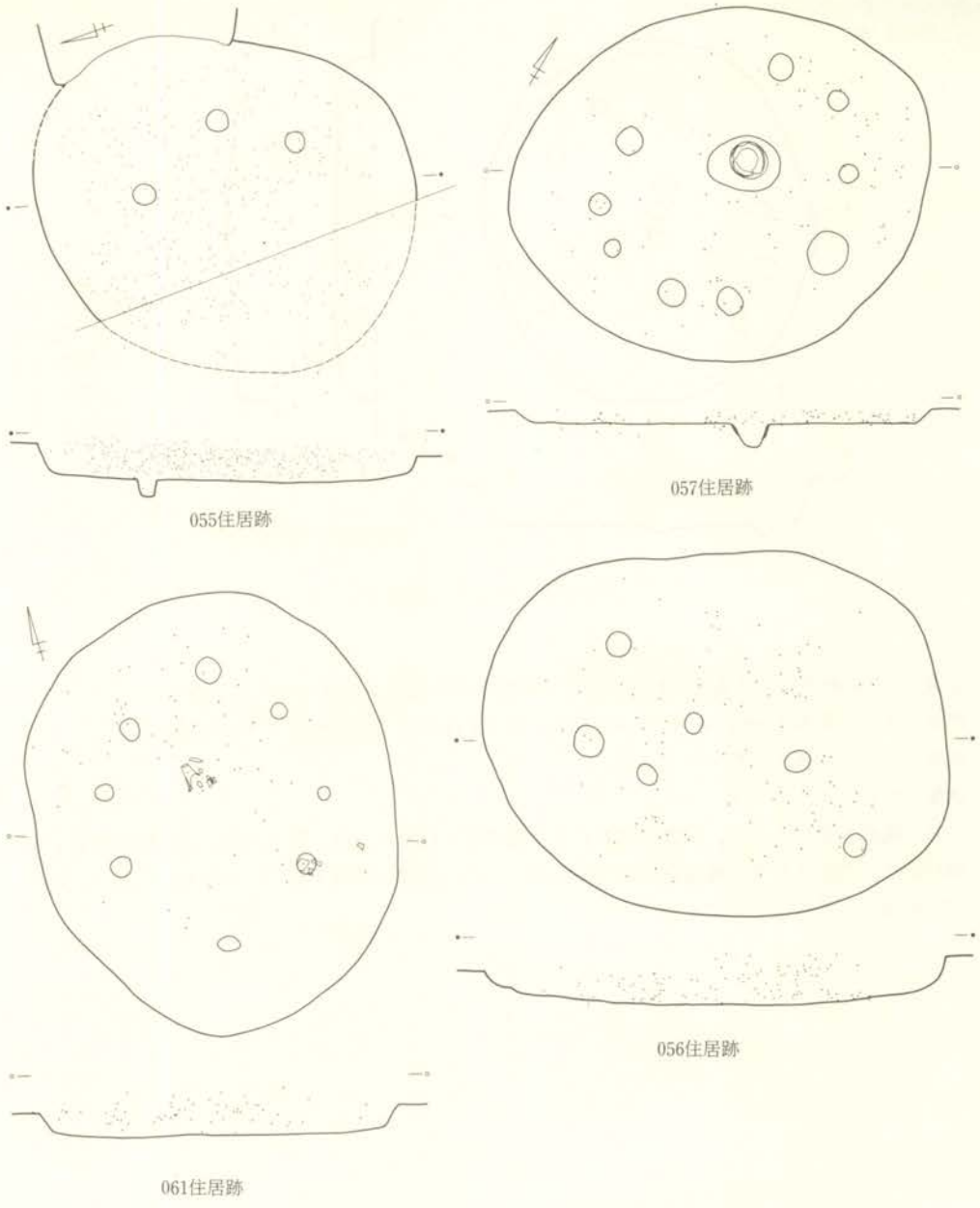


039住居跡

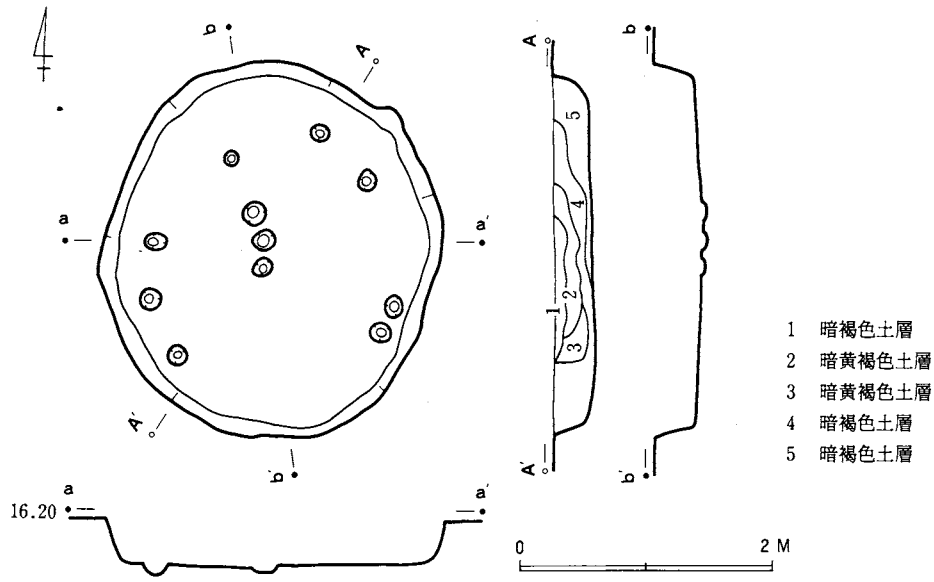


043住居跡

第278図　阿玉台期住居内遺物出土状況



第279図　阿玉台期住居内遺物出土状況



第280図　033 竪穴状遺構

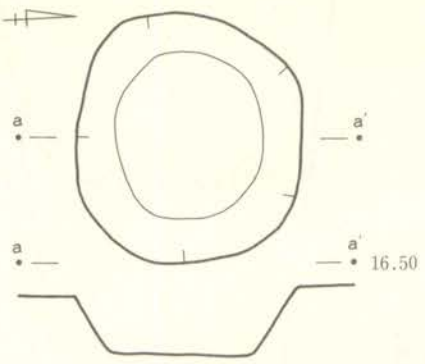
位置　（中山新田II－2遺跡）41グリッド中央部。029 住居よりさらに東に位置する。

形状　南北に長軸2.9m，東西に短軸2.6m，壁高33cmを測る楕円形のプランを呈する。

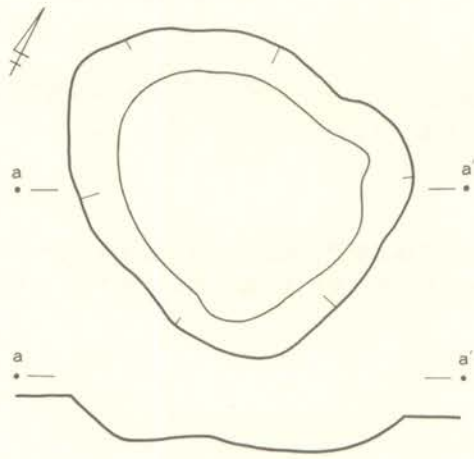
柱穴　すべてが浅く性格不明である。

遺物　なし。

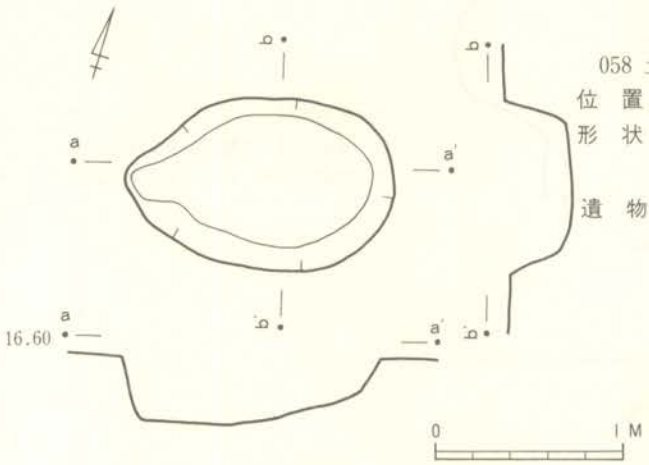
033 遺構は遺物もなく，調査時においては疑問視されているが，阿玉台期には同様の形状の遺構があり，対面する聖人塚遺跡においても同形態の住居跡が検出されているため，今回は一応竪穴状遺構として扱うものである。



003 土坑
位　置　(中山新田II－2遺跡)18グリッド東中央部。
形　状　長軸1m30cm，短軸1m18cm，深さ30cmを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　なし。

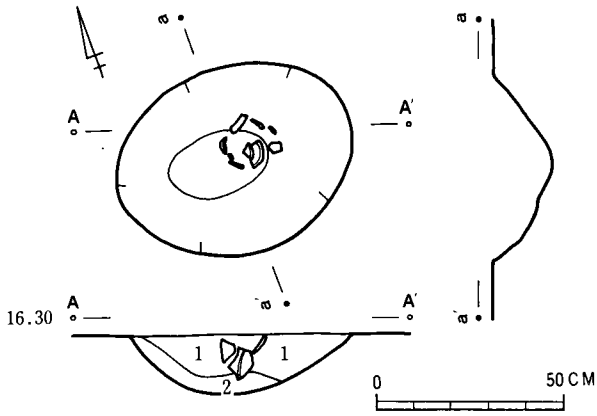


051 土坑
位　置　(中山新田II－1遺跡) 5グリッド南西部。
形　状　長軸1m84cm，短軸1m50cm，深さ20cmを測る不整形楕円のプランを呈する。
遺　物　なし。



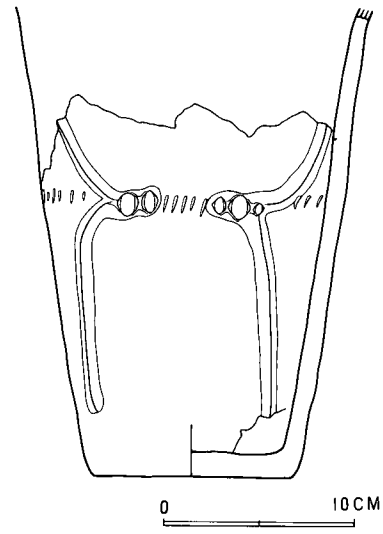
058 土坑
位　置　(中山新田II－2遺跡) 12グリッド中央部。
形　状　長軸1m40cm，短軸88cm，深さ34cmを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　なし。

第281図　003・051・058土坑



第282図　054 土坑

1　黄褐色土層　少量の暗褐色土を含む
2　黄褐色土層

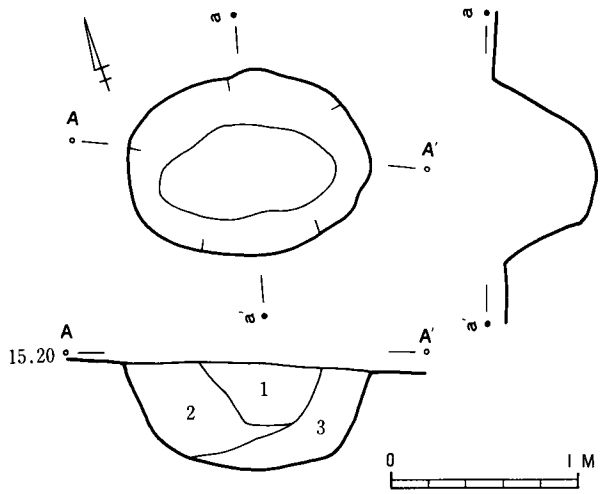


第283図　054 土坑出土土器

位　置　(中山新田II－2遺跡)29グリッド中央北西部。
形　状　長軸64cm，短軸50cm，深さ15cmを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　土坑中央に阿玉台式土器が立った状態で検出された。

054 土坑出土土器

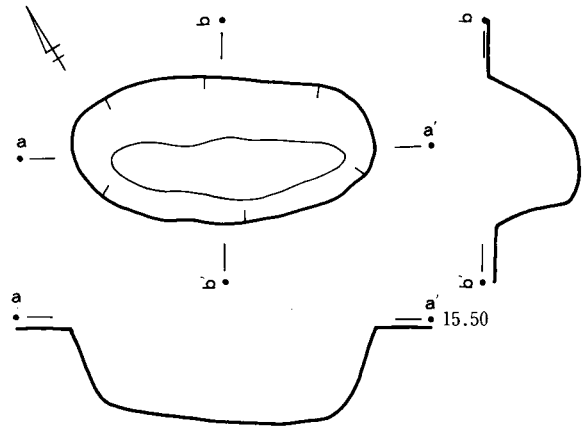
円筒形を呈する深鉢形土器胴下半部。地文は無文で文様は断面三角形状を呈する隆帯を貼り付け，屈曲する部分に指頭状の圧痕を施している。他にヘラ状工具による縦の刻みを廻らせている。底部に網代痕なし。遺存度4/5



第284図　062 土坑

1　褐色土層
2　褐色土層　黄褐色土を少量含む。
3　暗褐色土層　褐色土を少量含む。

位　置　(中山新田II－2遺跡)10グリッド北中央部。061 住居跡に近接する。
形　状　長軸 130cm，短軸94cm，深さ54cmを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　なし。

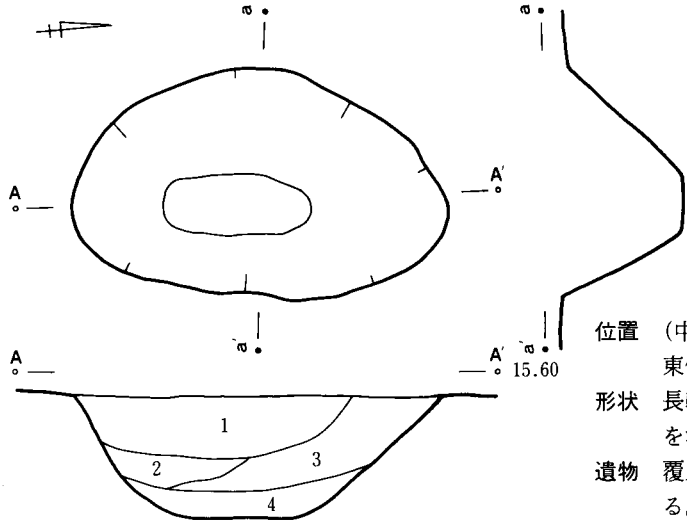


063 土坑

位置　(中山新田II－2遺跡) 9グリッド中央北側。064土坑に近接する。

形状　長軸1.6m，短軸0.8m，深さ50cmを測る楕円形のプランを呈する。

遺物　なし。



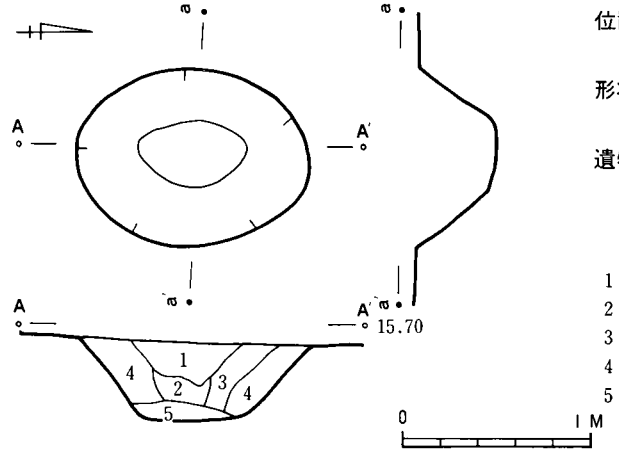
1　暗褐色土層
2　褐色土層
3　黒褐色土層
4　褐色土層

064 土坑

位置　(中山新田II－2遺跡) 9グリッド東側中央部。063土坑に近接する。

形状　長軸2m，短軸1.2m，深さ62cmを測る楕円形のプランを呈する。

遺物　覆土中より小片を数点検出している。



065 土坑

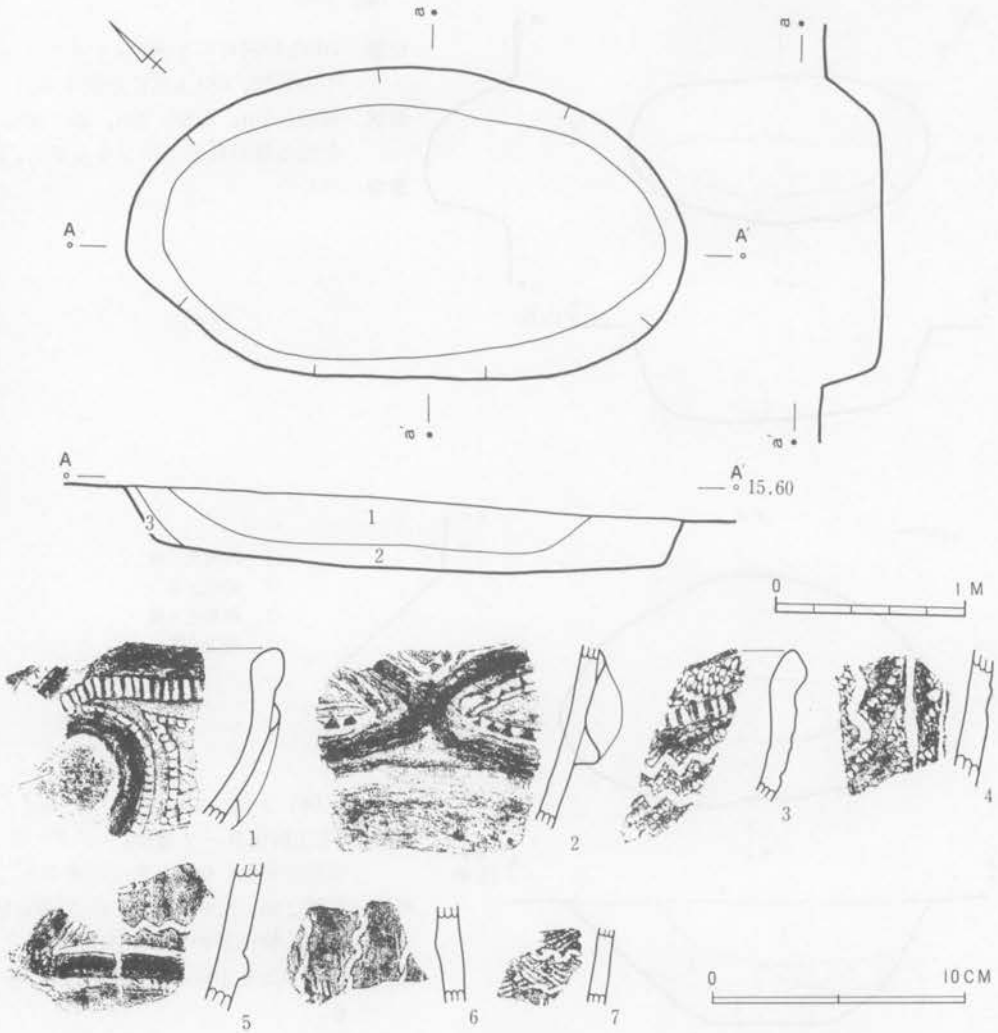
位置　(中山新田II－2遺跡) 5グリッド中央西側。066 土坑に近接する。

形状　長軸1.2m，短軸0.9m，深さ40cmを測る楕円形のプランを呈する。

遺物　なし。

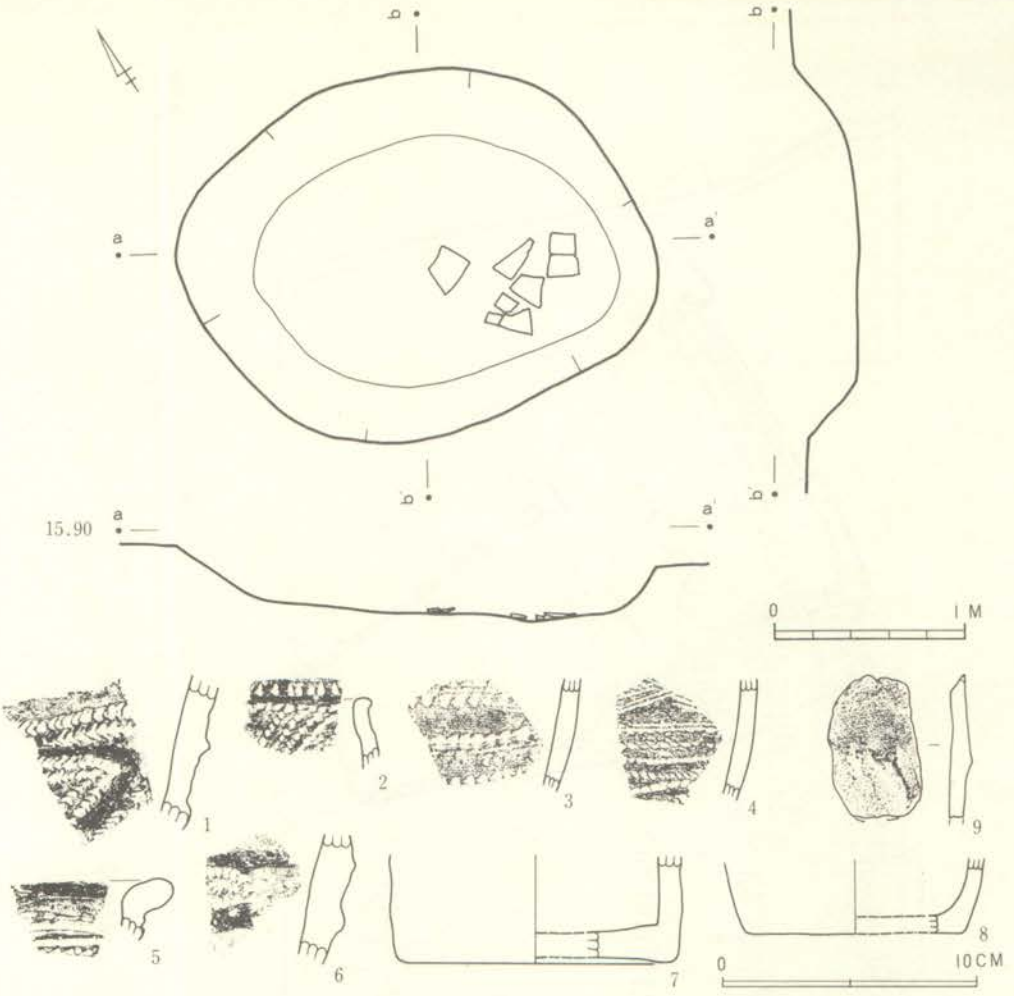
1　黒色土層　ローム粒を含む。
2　褐色土層　多量のロームブロックを含む。
3　黒色土層　ロームブロックを若干含む。
4　黒褐色土層　荒いローム粒を含む。
5　黒褐色土層　ロームを混入しない。

第285図　063・064・065 土坑



第286図　066 土坑及び出土土器

位　置　(中山新田Ⅱ－２遺跡) ５グリッド南西隅。
形　状　長軸３m，短軸1.6m，深さ38cmを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　総数７点を数える。１は幅の広い竹管と狭い竹管を使いわけて施文している。２は太い隆帯によって楕円区画を行ない、区画内には半截竹管による平行の押引文を施している。３は波状口縁の破片で地文に原体ＰＬの縄文を施している。６・７は縦と横の結節回転文を施している。１～５は阿玉台Ⅲ式，６・７は下小野・五領ヶ台式に比定される。

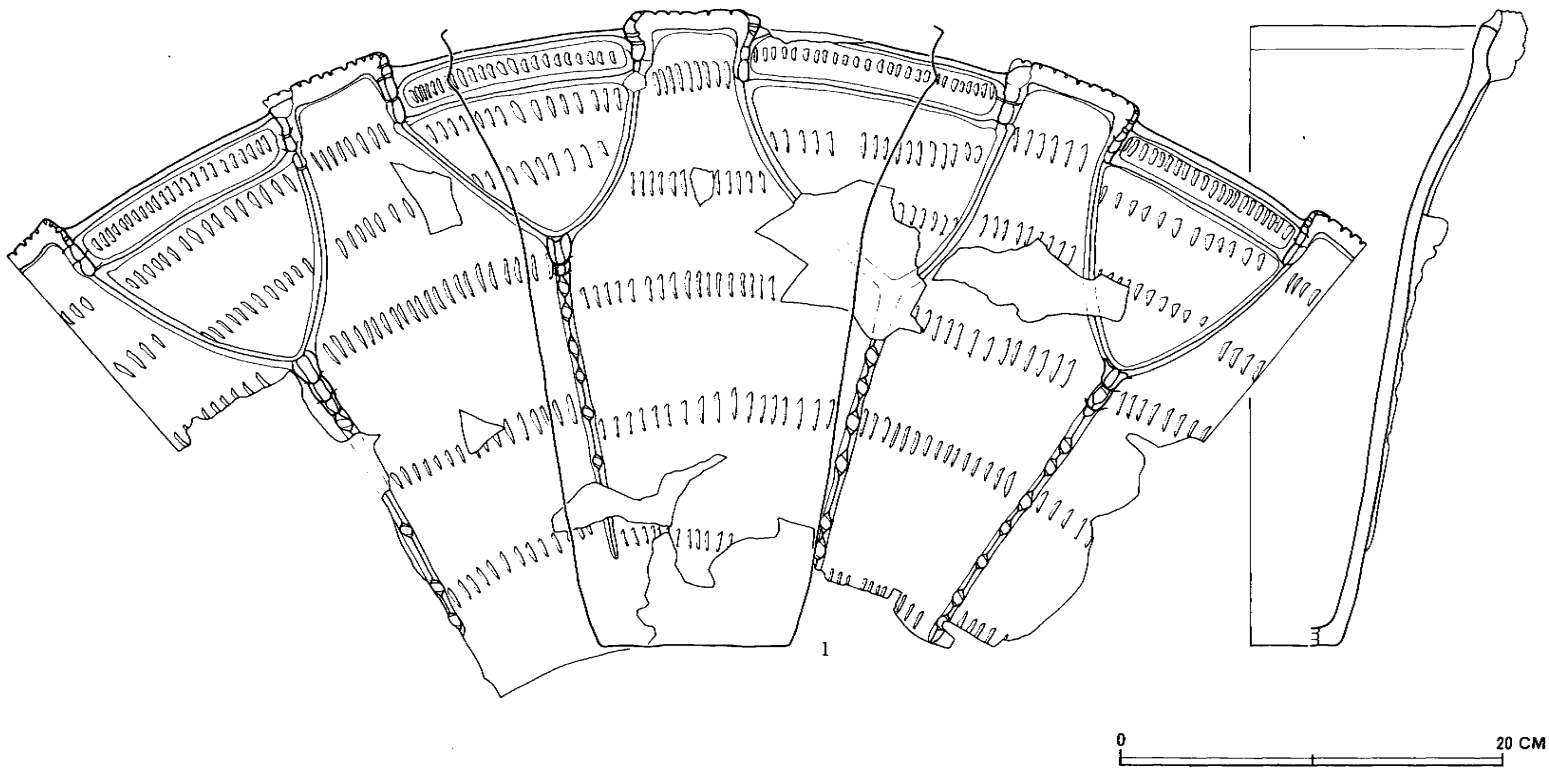


第287図　067 土坑及び出土土器

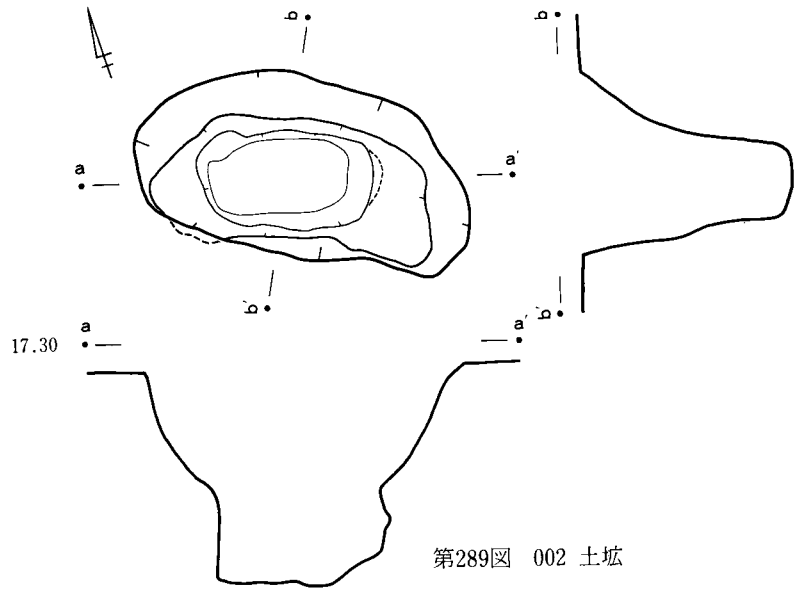
位　置　(中山新田II－2遺跡)24グリッド北西隅。
形　状　長軸2.5m，短軸1.9m，深さ28cmを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　床面からは阿玉台Ｉｂ式の深鉢形土器が倒れた状態で検出された。

067土坑出土土器

挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第288図 1	頸部より口縁を緩やかに広げ，小形の扇状把手を4単位で廻らせる深鉢形土器。扇状把手は，3段からなる2対のつまみ状突起により構成されており，突起間には断面三角形の隆帯によって口辺に横帯区画を行なっている。各つまみ状突起からは，さらに隆帯を斜めに貼り付けY字状のモチーフを作り出している。Y字状の二股部には2段のつまみ状突起を施し，以下の隆帯には指頭状の圧痕が施されている。地文はないが，貝殻腹縁によると思われる縦の刻みを数段に渡って胴部に廻らせている。遺存度ほぼ完形であるが底面を欠く。	118

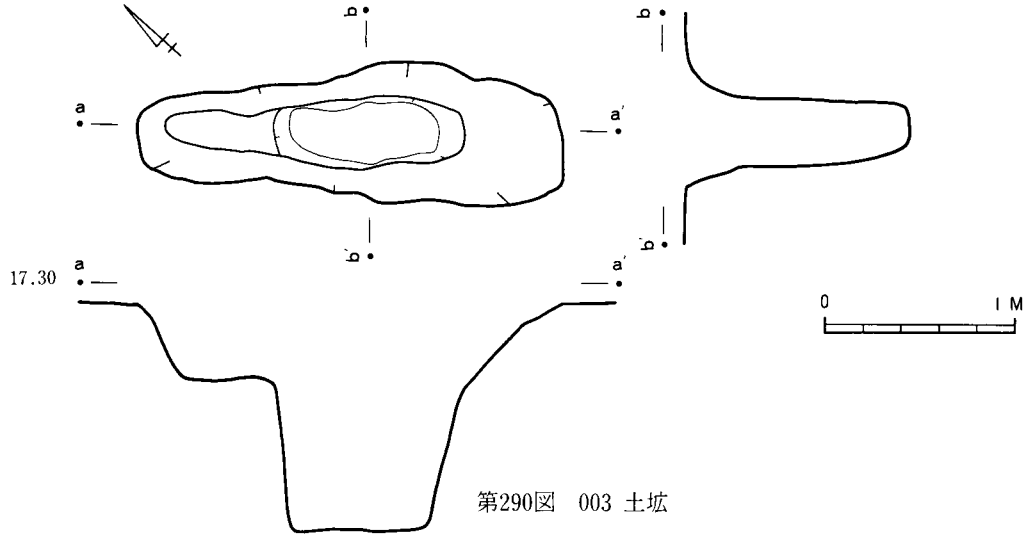


第288図　067土坑出土土器



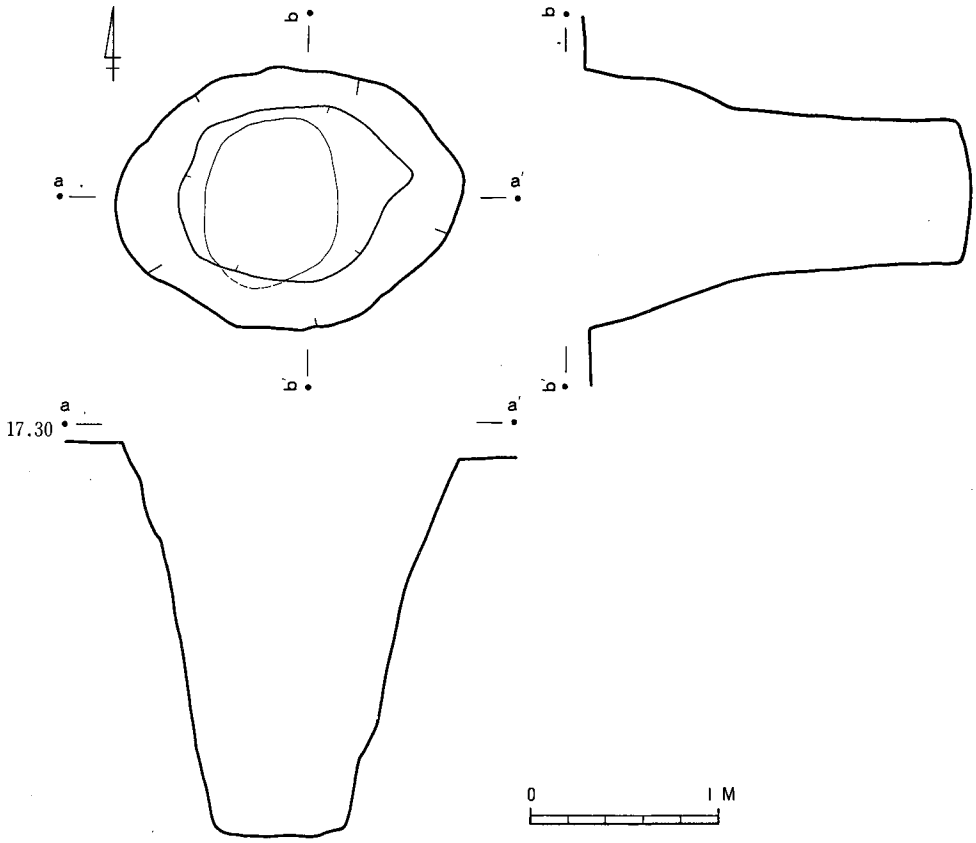
第289図　002 土坑

位　置　(中山新田II－3遺跡)D3グリッド北中央部。003 土坑に近接する。
形　状　陥し穴状土坑と言われるもので長軸1.8m，短軸0.9m，深さ 1.2mを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　なし。



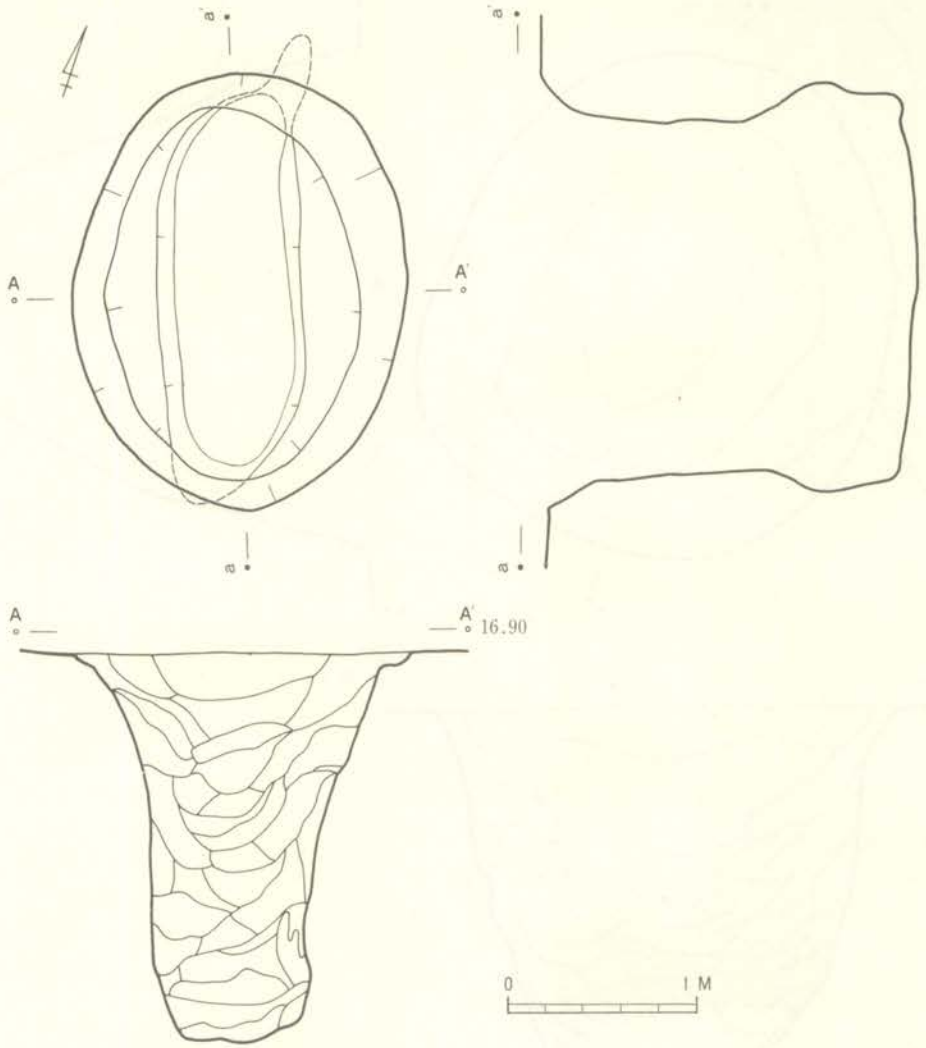
第290図　003 土坑

位　置　(中山新田II－3) D2グリッド南西部。002 土坑に近接する。
形　状　002 同様陥し穴状土坑と言われるもので長軸2.2m，短軸0.7m，深さ1.18mを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　なし。



第291図　004 土坑

位　置　(中山新田Ⅱ－３遺跡)Ｆ３グリッド西中央部。
形　状　長軸1.8m，短軸1.65m，深さ2mを測る楕円形のプランを呈する。断面形は井戸状を呈し，002・003の陥し穴状土坑とは若干異なる。
遺　物　なし。

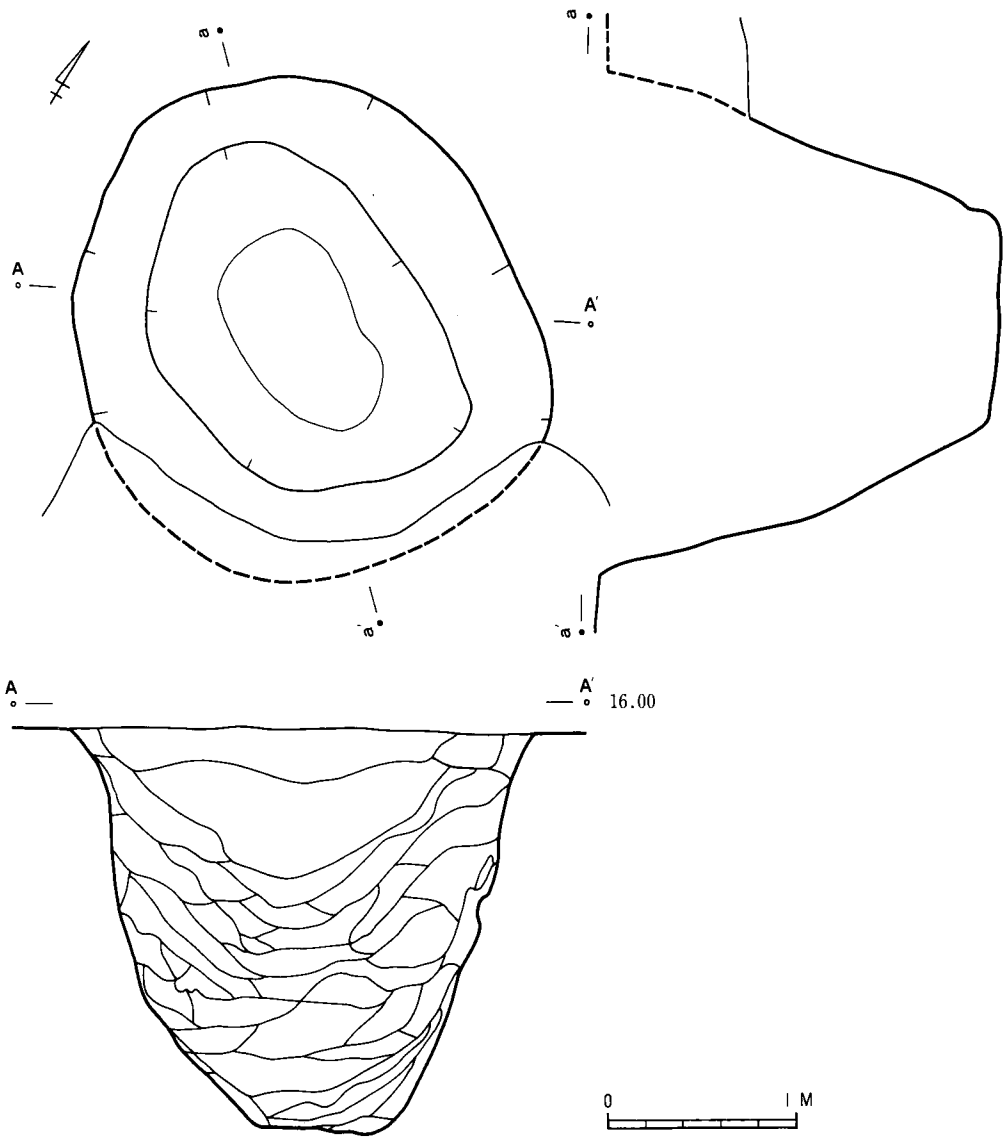


第292図　040 土坑

位　置　(中山新田II－1遺跡) 28グリッド東南部。041 土坑に近接する。

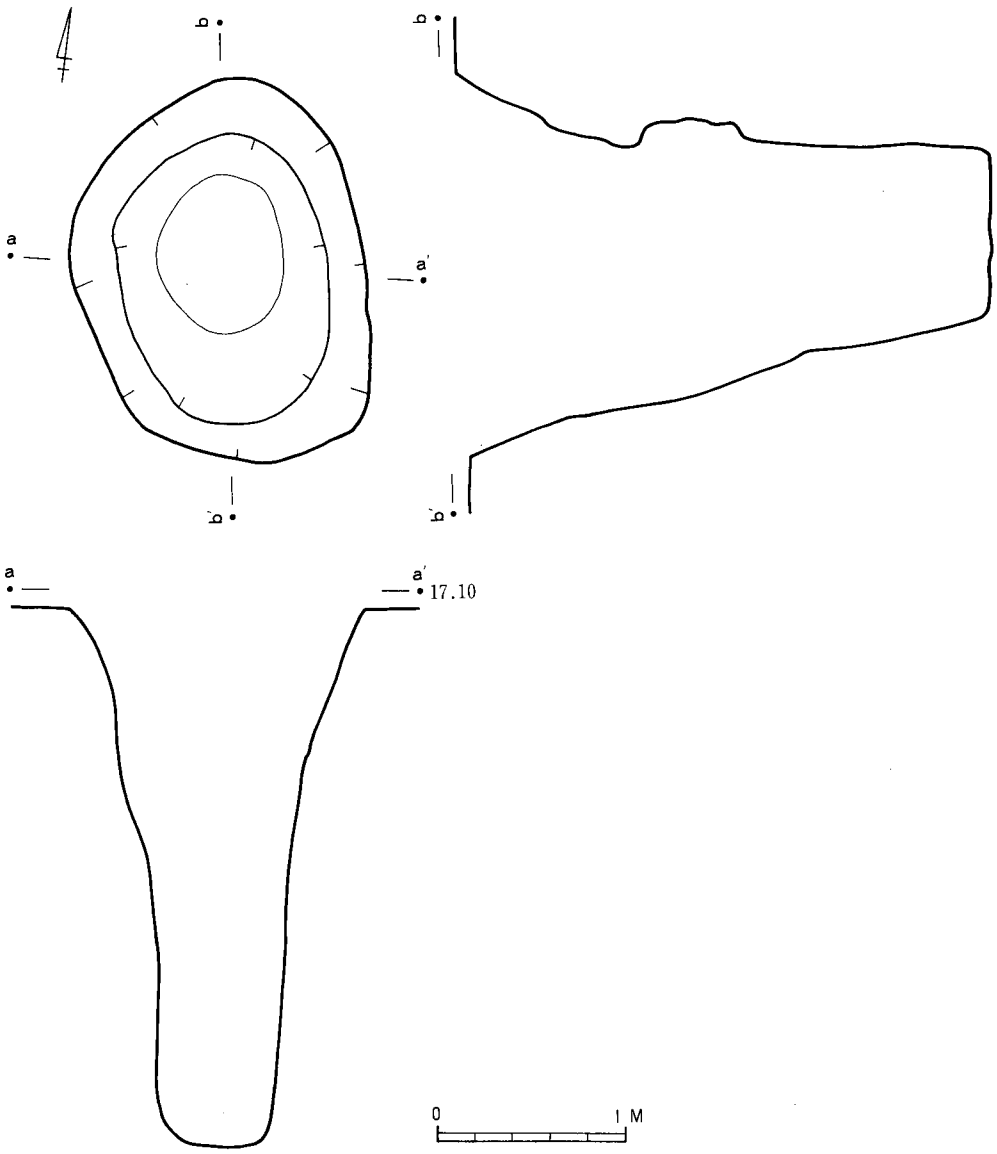
形　状　平面形は長軸2.3m，短軸1.7mの楕円形プランを呈し，底部長軸は2.5m，短軸0.6mで底部でやや長軸へ広がっている。深さは2mを測る。002・003同様に陥し穴状土坑と言われるものである。

遺　物　なし。



第293図　042 土坑

位　置　(中山新田II－1遺跡) 11・20グリッドにまたがる。
形　状　東西に長軸2.7m，南北に短軸2.4m，深さ2.1mを測る円に近い楕円形のプランを呈する。
　　断面形は緩やかに底部まですぼまっている。
遺　物　なし。

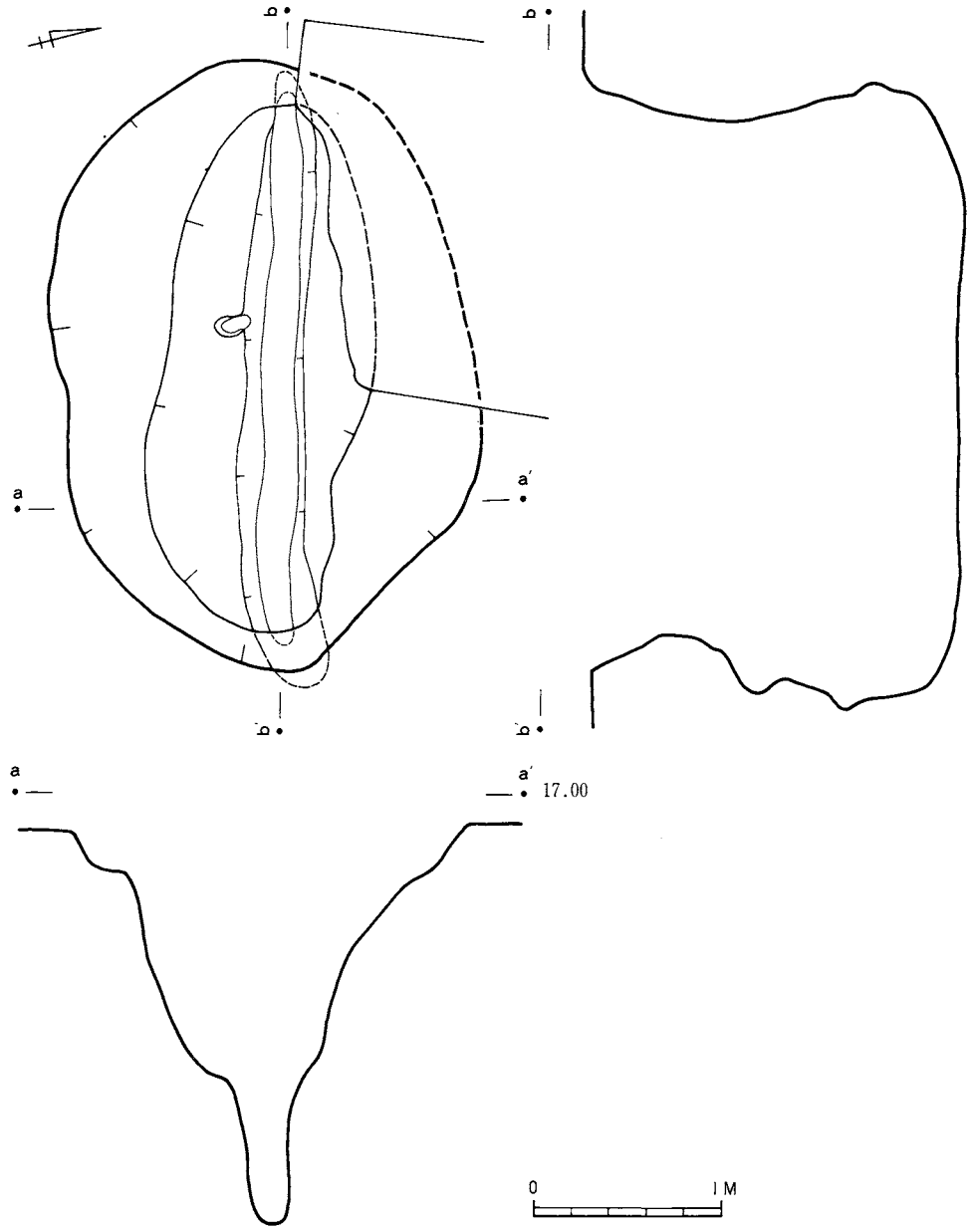


第294図　048 土坑

位　置　(中山新田II－1遺跡) 8グリッド東北部。

形　状　長軸2m，短軸1.5m，深さ2.8mを測る楕円形のプランを呈する。断面形は緩やかにすぼまる井戸状を呈する。

遺　物　なし。

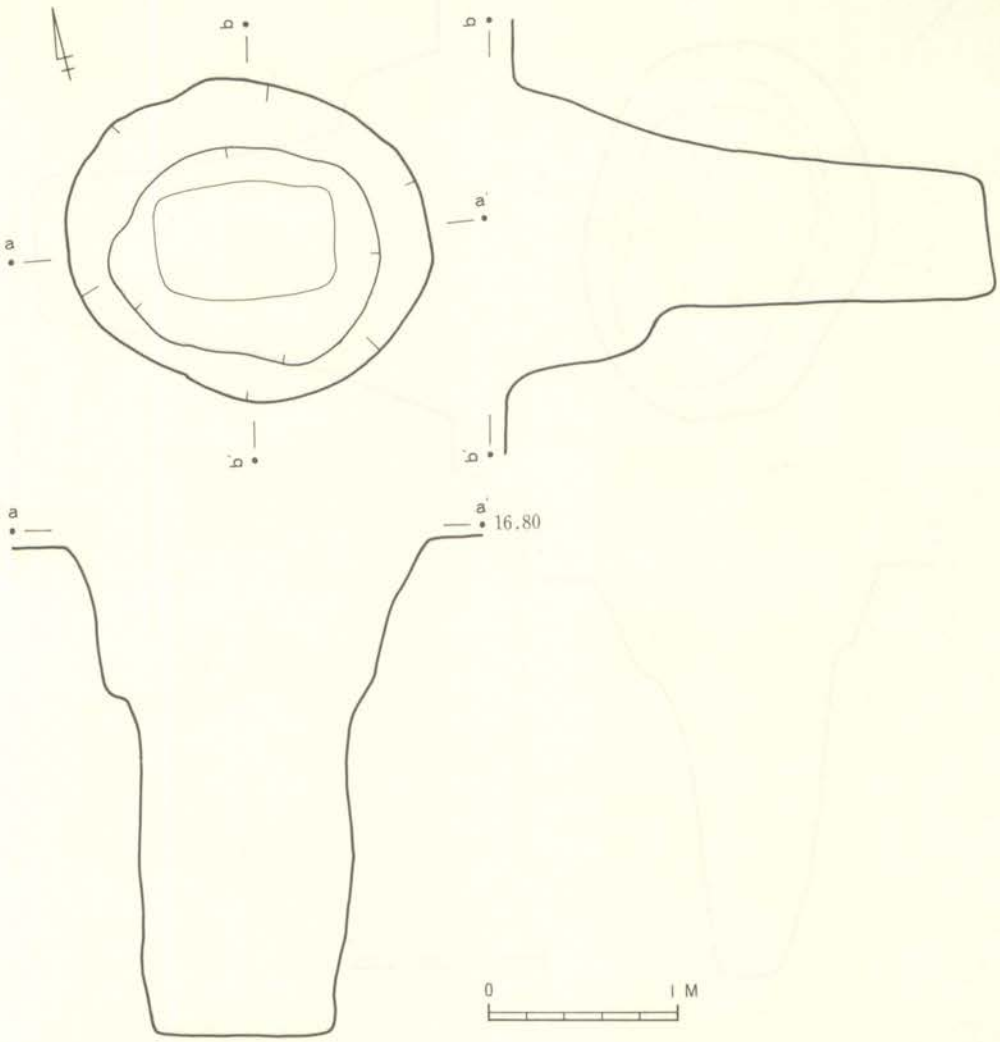


第295図　049 土坑

位　置　(中山新田II－1遺跡) 33グリッド東北隅。

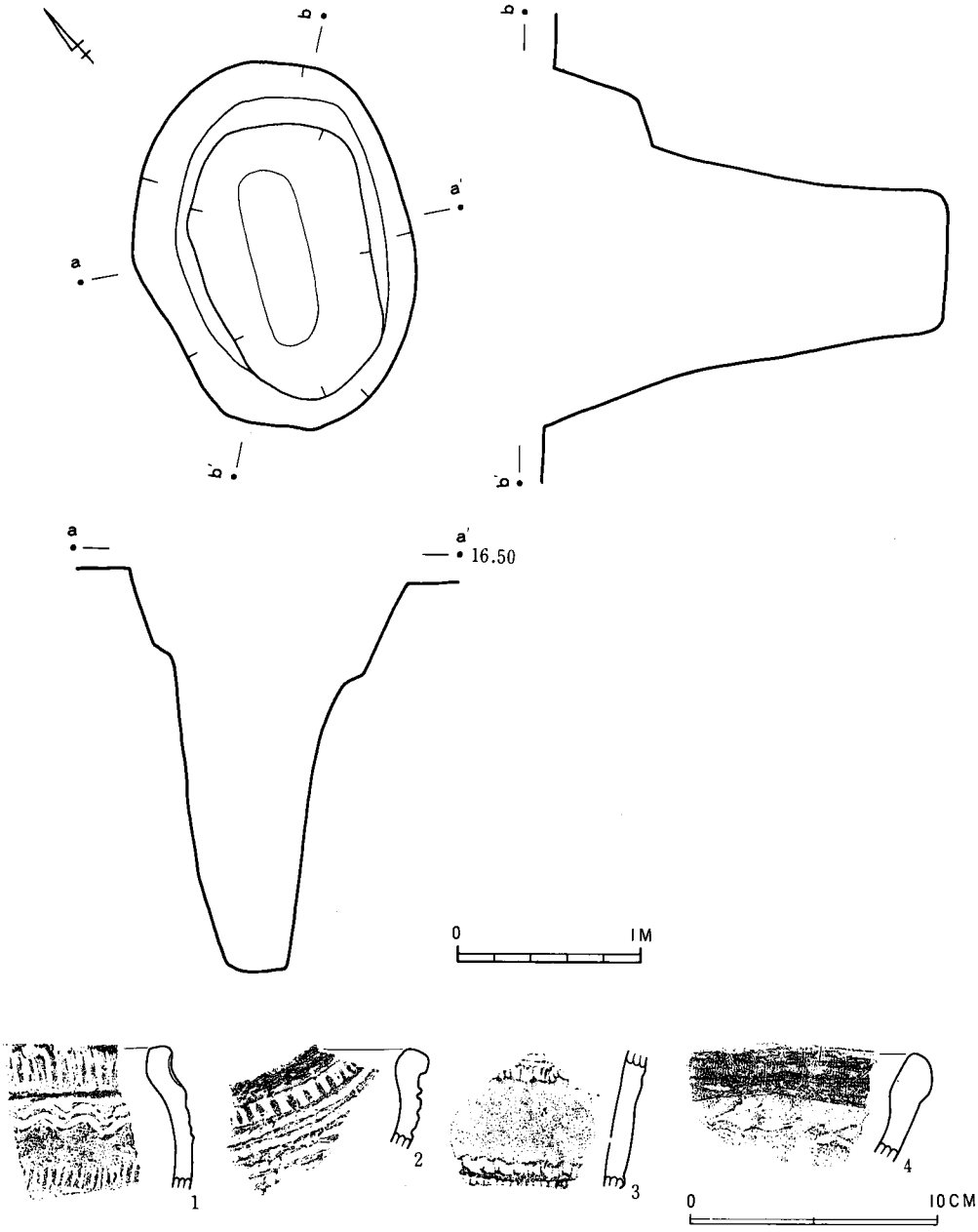
形　状　040土坑と同様の形態をとる。平面形は長軸3.2m，短軸2.2mの楕円形プランを呈し，底部長軸は3.2m，短軸0.3mを測る。長軸は途中で若干すぼまるもののほとんど同じ長さであるのに対し，短軸は底辺に至って急に狭くなっている。深さは2.1mを測る。

遺　物　なし。



第296図　050 土坑

位　置　（中山新田Ⅱ－１遺跡）40グリッド東中央部。
形　状　長軸1.9m，短軸1.7m，深さ2.5mを測る楕円形のプランを呈する。断面形は井戸状を呈する。
遺　物　なし。



第297図　059 土坑及び出土土器

位　置　(中山新田II－2遺跡)12グリッド東中央部。060 土坑・015住居跡に近接する。

形　状　長軸2m，短軸1.5m，深さ2.1mを測る楕円形のプランを呈する。断面形は開口部がやや広く，以下は井戸状を呈する。

遺　物　開口部より段がついてすぼまる中腹部より阿玉台式土器4点を検出した。

その他の遺物

グリッド出土の土器

各グリッドより出土した土器は早期から晩期にまで及んでいるが，早期・晩期は極めて少なく，前期が少量で大半が中期の土器片であった。各群の時期については以下に記した。

第1群土器　　早・前期の土器
第2群土器　　中期初頭の土器
第3～6群土器　中期の土器
第7群土器　　後・晩期の土器

第1群土器

A類　条痕文系の土器（第299図1・2，図版122）

1は口唇部に縦位の刻みをもつ。2は表裏に貝殻条痕を施す。

B類　諸磯式土器を一括した。（第299図5～13）

5・6は地文に縄文を施し，その上に半截竹管による連続爪形文を施し，8は沈線文，9・10は細い粘土紐を貼りつけ，その上から刻みを施す諸磯b式である。7・11～13は細い半截竹管による平行沈線上に粘土瘤をつけた諸磯c式土器である。

C類　浮島式土器を一括した。（第299図14～27・29～31）

C－1　沈線やいわゆる変形爪形文を施すもの（14～19）

14～17は口唇部に竹管や指頭によると思われる縦位の圧痕を施している。18・19は変形爪形文を横位に施している。

C－2　ハマグリやアナダラ属の貝殻腹縁を用いて連続波状貝殻文を施すもの（20～27）

20はハマグリによる貝殻腹縁文を施す。25・26は粘土の輪積の境に指頭による圧痕を施したものである。

C－3　連続三角刺突文を施すもの（29～31）

D類　興津式土器を一括した。（第299図28，第300図1～6）

6は波状口縁で，口唇直下に細い半截竹管による縦位の平行沈線を施し，その下にアナダラ属の貝殻腹縁による圧痕を施している。

第2群土器

A類　五領ヶ台式土器を一括した。（第300図11～24，26～30，図版122）

A－1　半截竹管工具を用いて平行沈線等の施文を行うもの（21～23・28）

22・23は格子状に沈線を施している。

A－2　竹管棒状工具を用いて沈線や刺突文を施すもの（11～20・24・26・27・29・30）

11～14・17・18・20は三角形の陰刻を施す。26・27は沈線間に鋸歯状文を施している。28・29は胴部に縦位の結節回転文を施している。

A－1は五領ケ台Ⅰ式，A－2は五領ケ台Ⅱ式に比定される。

B類　結節回転文を主体とするものを一括した。(第300図31～40，第301図1～18，図版123)

B－1　口縁部に輪積段をもたないもの（第300図32～36・38～40，第301図2～5）

2は単節の原体RLの圧痕を口唇に施している。4は竹管工具による刻みを横位に施している。5は内側に折り返した口縁を作り出している。

B－2　口辺部に幅の広い輪積段を残すもの（第300図31・37，第301図1）

B－3　口辺部に幅の狭い輪積段を残すもの（第301図6・8～10）

いずれも外側へ折り返してある口縁部破片で，6は折り返し部分に無節の縄文，8・10は無文で口唇部にヘラ状工具による縦位の刻みを，9は折り返し部分に縦の沈線を施している。8～10は折り返し接合部にも刻みを施している。

B－4　胴部破片を一括した。(11～18)

11～14は縦位，15～18は横位の結節回転文を施す。

C類　B類と異なり縄文原体の圧痕を施すもの（第301図19～23）

19は幅の狭い折り返し口縁をもち，口辺部には無節の原体圧痕を横位に施し，胴部には縦位の結節回転文を施す。20は単節の原体圧痕を口唇直下より斜めに施している。21・22は無節の原体圧痕を施しており，22は口唇上に一条廻らせ，さらに部分的に縦位の圧痕を施している。

D類　縄文の施されない円筒形の土器を一括した。(第301図24～28)

25は輪積段を残した器面上に縦位の沈線を施している。26・27は下から撫で上げるような整形がなされており，26はその上に半截竹管による平行沈線を施している。

第3群土器　阿玉台式土器を一括した。

A類　一条の細い有節線・結節沈線を施す口縁部破片を一括した。(第302図1～35，図版123)

A－1　窓枠状区画をもたずに1列の有節線・結節沈線を施すもの（1～18・20）

窓枠状を呈さないものの，やや肥厚した口唇直下に1列ないし，文様帯を意識した平行の有節線を施すものが多い。15～18・20は波状を呈する口縁部破片である。

A－2　窓枠状の隆起帯に沿って1列の有節線・結節を施すもの（19・21～29）

23は粘土紐を口唇部に貼り付けて縦に押圧している。25は肥厚させた口唇直下にアナダラ属の貝殻腹縁による縦の圧痕を施している。28は波状口縁で口縁には粘土紐を渦巻き状に貼り付け，その境界に沿って結節沈線を施している。

A－3　胴部破片を一括した。(30～35)

30にはY字状の貼り付けが施されている。

B類　2列ないし3列の細い結節沈線を施す口縁部破片を一括した。(第303図，第304図，図版124)

B－1　窓枠状区画をもたずに2列の有節線・結節沈線を施すもの（第303図1～15）

1～6・10・12は細い棒状工具による結節沈線，7～9・11は有節線を施す。10・11は口

唇上にも施している。

B－2　窓枠状区画に沿って2列の有節線・結節沈線を施すもの（第303図16～29）

有節線を施してあるものは28だけで，他はすべて結節沈線である。29は瘤状に突起をふくらませている。

B－3　波状口縁を一括した。（第304図1～10）

6は地文に原体LRの縄文を施し，その上に細い竹管を下から上へ突き上げるように刺突している。7は非常に高い隆帯を貼り付けてあり，下半分は橋状を呈する。

B－4　B－2のような窓枠状を呈さない隆帯表現のもの（第304図11～24）

12は半截竹管を用いた結節沈線で口唇部にも施してある。13は浅鉢形土器の口縁部と考えられ，口辺には隆帯による波状の隆帯を貼り付けてある。14は粘土紐を渦巻き状に貼り付けている。19は幅のある貝殻状の工具で縦位に刻みを施している。22も半截竹管を用いている。

C類　地文に竹管刺突文を施すもの（第305図1～9，図版125）

1はペン先状の竹管工具を用いた連続押引文を施す。勝坂式に比定される。3・5・8は細いヘラ状工具によって角度をつけた刺突を行っており，他は垂直方向から刺突された円形竹管刺突文を施している。

D類　棒状工具や半截竹管などによって2列の沈線を施す口縁部破片を一括した。(第305図10～35)

24個中半截竹管を用いたものは12の1点だけで他はすべて棒状工具によるものであった。なを，28・35は無文である。

D－1　窓枠状区画をもたないもの（10～23）

14・20は弱い押引きが行なわれている。21・22は波状口縁を呈する。

D－2　窓枠状区画を行なうもの（24～35）

24は球状の粘土を押しつけて円板状の貼り付けを行なっている。31は4・5本を同時に施文している。32は口唇直下に幅の狭い窓枠状の文様帯を作り，窓枠状区画を2段に渡って作り出している。上段の区画内には粘土紐を波状に貼り，鋸歯状を作り出している。

E類　縦の刻みを文様の主とするもの（第306図1～13）

竹管を用いるものと貝殻腹縁を用いるものに2分される。

E－1　竹管工具を用いるもの（1・3・4・10～12）

1は竹管の切り口と節目を残し，二重に刺突痕を残している。11は小波状を呈する口縁部で波状の裾からV形に粘土紐を貼り付けている。

E－2　貝殻を用いるもの（2・5～9・13）

5は口唇上にも刻みを施す。13は断面三角形を呈する隆帯を縦に貼り付け，口唇直下でY形に分けて隆帯上に棒状工具による押圧が施されている。

F類　やや幅の広い竹管工具を用いて結節沈線を施すものを一括した。(第306図14～24，第307

図1～8・10)

F－1　窓枠状を呈するもの（第306図14～24，第307図2～4）

F－2　窓枠状を呈さないもの（307図1・5～10)

8は太い粘土紐を橋状に貼り付け，その先をY形に分けている。

G類　口縁に粘土紐をつまんだ状態で貼り付けた，数段に分かれるつまみ状突起を有するものを一括した。(第307図11～21，図版126)

口縁が平縁のものと波状のものに2分される。

G－1　口縁が平縁を呈するもの（11～13・21)

11は中心に粘土棒による芯棒をもつ4段のつまみ状突起をもつ。他は芯棒をもたない。12・13は両方とも2段のつまみ状突起で，突起頂部には三角形の空間を残す。21は粘土紐の段痕を残さないように整形してあるが3段のつまみ状突起と思われる。

G－2　口縁が突起によって波状を呈するもの（14～20)

19・20は整形のため段痕が見えない。特に芯棒に粘土棒を使用しているような痕跡は認められないが，15は窓枠状区画に用いた隆帯を粘土棒がわりに製作している。14・17・19は貝殻による縦の刻みが施されており，14・17はハマグリのような貝殻，19はアナダラ属の貝殻を施文具としている。12・16・18は3段，14は4段，17は5段のつまみ状突起である。

H類　2つのつまみ状突起を土台として作り出される小型の扇状口縁を一括した。(第308図1～10)

1・6は3段のつまみ状突起で，他はすべて整形してあるためその製作技法については明瞭に捉えることができない。7～10はつまみ状突起間の扇部。

I類　いわゆる扇状把手を一括した。(第308図11～17)

H類を隆起させた形状をとるもの（11，12）と，波状を誇張した形状をとるもの（13～17）の2種類に分けられる。11・12は扇状縁辺部を棒状工具により押圧し，11は有節線文，12は2列の角押文を施している。13は波状頂部に1段のつまみ状突起を施し，頭部にはその痕跡を留めている。文様は半截竹管を用いて2列の押引文を施している。14は5段のつまみ状突起を施しているが，13のような痕跡は認められない。15～17は棒状工具を用いた施文を行なっており，15は軽い押圧を加えた2列の沈線，16は2列の波状沈線，17は3列の押引文を施している。16は2つの対をなす波状口縁部と思われる。

J類　2列ないし3列の押引文を施す胴部破片を一括した(第309図，第310図1～11，図版127)

J－1　2列の押引文を施すもの（第309図1～15)

棒状工具を用いるものと半截竹管を用いるものとに分かれる。後者は9～11で，9は半截竹管内面を器面に向けて施文しており，10・11はその逆の施文方法をとっている。

J－2　3列の押引文を施すもの（第309図16～25)

25は波状口縁部破片である。

J－3　2列の沈線を施すもの（第310図1～7・9～11）

3・9は半截竹管の内側を器面に当て，若干の押引きを行っている。他は竹管背面を用いたひご状工具によって施文されている。

K類　やや幅の広い竹管工具を用いるもの（第310図16～19）

L類　幅広の角押文を施す口縁部（第311図1～3・5～17）

1は角押文を施した後，数列の沈線を波状に施している。7は沈線による鋸歯状を表現している。15は胴部に条線の地文をもつ。

M類　やや幅広の沈線や縄文を施すもの（第312図1～8，図版128）

2は地文に櫛状工具による数条の沈線を施す。5は原体ＬＲ・6は原体ＲＬの縄文を地文に施す。

N類　大形の波状口縁を一括した。（第312図10～16）

17は原体ＬＲの縄文を地文とし，太い沈線を施している。15は地文に条線をもつ。

O類　突起物及び胴部破片を一括した。（第313図）

9は地文に条線を，11・12は縄文を施している。

第4群土器　勝坂式土器を一括した。（第314図，第315図，図版129）

A類　主として沈線による施文を行なうもの（第314図1～5・9～11・16）

4は口辺に原体ＬＲの縄文を施す。

B類　三叉文を施すもの（6～8・12・13）

C類　幅の異なる施文具やペン先状の施文具を用いるもの（17～26，第315図1～19）

C－1　幅の異なる施文具を用いるもの（20・第315図3・7・17）

7は幅広の角押文に沿って細い竹管による押引きを行なっている。隆帯上にはつまみ状の突起を貼り付けてある。17は大小のペン先状工具を用い，幅の広い押引文の上に逆方向から細い工具による押引きを行なっている。

C－2　ペン先状工具を用いるもの（17・19・21・25・26，第315図2・6・8～11・13・14・18・19）

8・9・13は三叉状の三角形の陰刻文を施す。

D類　隆帯による楕円形の区画を行なうもの（第315図20～22）

20・21は幅広の角押文と細いペン先状工具による押引文を施す。22は底部破片で同じ幅の角押文とペン先状の押引きを行なっている。

第5群土器　加曽利Ｅ式土器を一括した。（第316図1～10，図版130）

太い沈線によって生ずる隆起帯によって文様帯を区画し，区画内には縄文を施す。8の隆帯は貼り付けられている。2・4・6・8は口唇直下に幅の広い沈線を廻らす。7は口辺に無文

帯を作り，縄文の施されている文様帯との境は微隆起帯によって区画されている。7は加曽利E末期，他はEII式に比定される。

第6群土器　中期の浅鉢形土器を一括した。(第316図11～15)

口辺を肥厚させ，平縁・波状を呈する。口縁を朝顔状に開く器形が多い。

第7群土器　後・晩期の土器を一括した（第317図，図版130)

後期の遺物は少量であり，主として発掘区の北部より検出されている。

1・4は波状口縁で口唇に刻みを施し，頸部に無文帯をもつ。10・11は帯状の区画内に縄文を施し，区画間に縦位の瘤状の貼り付けを行なっている。1～6は加曽利B式，10・11は安行I式に比定される。

12は小波状を呈する口縁部破片で頸部に施された二条の沈線は，波状直下において2か所の刺突によって分断されている。波状裏面においても沈線が廻らされている。14は口唇の一部を楕円形に隆起させ，小波状を作り出している。器面には太い半截竹管で削り取ったような沈線を施している。12は大洞A平行，13・14は安行IIIC式に比定される。

土器片錘　(第322図～第325図，図版131・132)

グリッドより検出された土器片錘は160点を数え，他に住居跡から36点を検出した。時期は阿玉台式でも後半のIII～IV式にかけてのものが大半であった。

土器片錘の製作方法には断面を研磨することによって形状を整えるもの(1)と打ち欠いただけで研磨しないもの(2)が存在する。また，その素材となる土器片には文様や器の部位等の違いがある。そこで前回の報告同様，無文をA類，縄文をB類，有文（沈線表現のもの）をC類，隆帯を有するものをD類，口縁部をE類として以下に記した。

A－(1) 24点	B－(1) 10点	C－(1) 21点	D－(1) 22点	E－(1) 16点
(2) 33点		(2) 15点	(2) 12点	(2) 7点

文様の有無については前回同様顕著な違いを見い出せなかったが，研磨の有無については前者がほぼ6割を占めた。これは前回報告の2対1の割合に近い値であり，当該期の土器片錘製作の一傾向として注意すべき点であろう。

土製円板　(第326図)

住居跡からは総数30点を検出しており，002住居跡では21点を数える。グリッドからは総数70点を検出している。今回円板として抽出したものは周囲に擦痕を認められるものに限定した。

形状は円形のものが多く，土器片錘よりも小型のものに集中する。中には66～70のように隅丸の長方形を呈し，全く土器片錘と同形のものもある。文様に関しては無文のものが多く，土器片錘のように無作為に凹凸のあるものは避け，凹凸の少ないものに集中する傾向が伺える。このような点に研磨具としての可能性を残しているように思われる。

グリッド出土の石器

グリッド及び住居跡より検出した石器総数は110点を数える。その内訳は尖頭器２点，石鏃32点，石錐１点，打製石斧26点，磨製石斧７点，凹石８点，石皿２点，磨石・敲石30点，石錘１点，石製玦状耳飾１点であった。

尖頭器　（第298図１・２）

２点とも木葉形の形状を呈し，両面からの調整がなされている。

石鏃　（第327図１～32）

形状はほとんどのものが無茎で有茎を呈するものは30･32の２点である。石質はチャート（17点）・黒曜石（12点）・頁岩（２点）・玄武岩（１点）とチャート・黒曜石が大半を占めている。

石錐　（第327図33）

頁岩製でつまみを有し先端部へ向って細身になっている。

石製玦状耳飾　（第327図34）

蛇紋岩製で土製の玦状耳飾に比較すると非常に厚く，孔も大きくあけられている。

打製石斧　（第328図～第329図１～６，図版133）

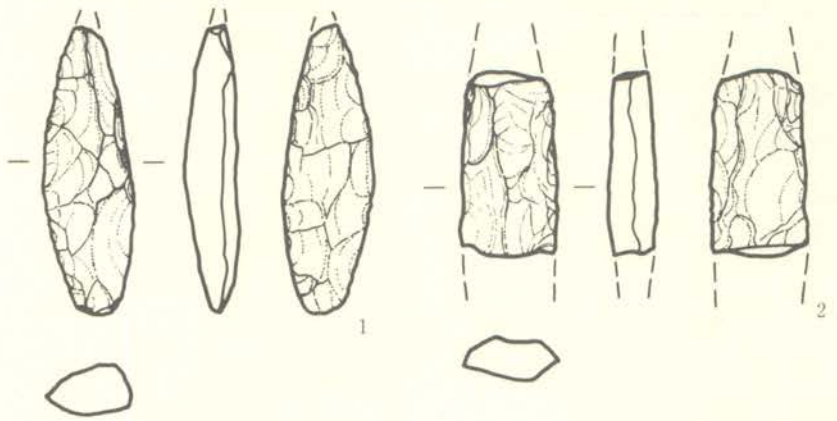
全体的に角がなく丸みをおびたものが多く，周辺にわたって調整されている。また，自然面を残すものも比較的多く，石質はほとんど砂岩を用いている。形状はいわゆる短冊形を呈するものが大半であるが，第328図４･５のように周囲に刃部を作るため円に近い形状を呈するものもある。第328図１・２は剝片を利用した小型の打製石斧である。

磨製石斧　（第330図７～９，第331図２～６）

小型のものが多く，表裏面から研磨して刃部を作り出しているものは第330図７・９，第331図２であった。第331図３・４は敲打痕を有し，４は石斧から敲打器への転用と考えられる。

凹石　（第331図６～８，第332図１～４・６，第333図10）

ほとんどが両面に敲打による凹を有し，側面にも敲打痕を残している。また表面には擦痕を



第298図　尖　頭　器

有するものが多く，敲石・磨石の機能を有する。

石皿　（第332図５）

１点のみ出土している。非常に厚みがあり石皿の端の部分に相当する。表裏面には凹を有する。

磨石・敲石　（第333図１～５・７～９・11～14）

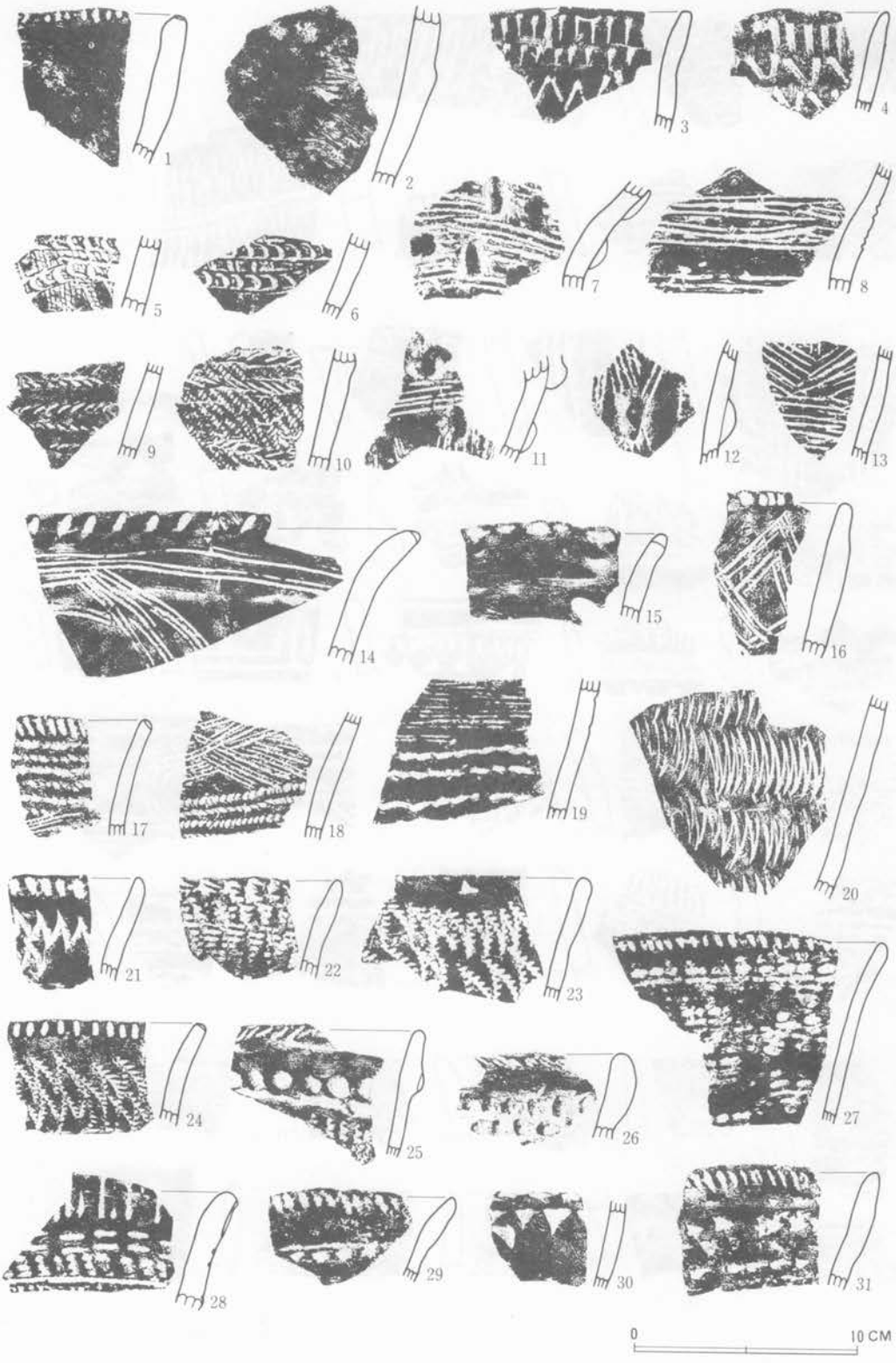
比較的小型のものが多く，円形のものと柱状のものに分かれる。円形のものは磨石に相当するがほとんどが周囲に敲打痕を残し，敲打具としても使用されている。４は全面に敲打痕を残している。柱状のものも周囲に敲打痕を有するが特に頭部を用いて敲打するものと考えられる。

石錘　（第333図16）

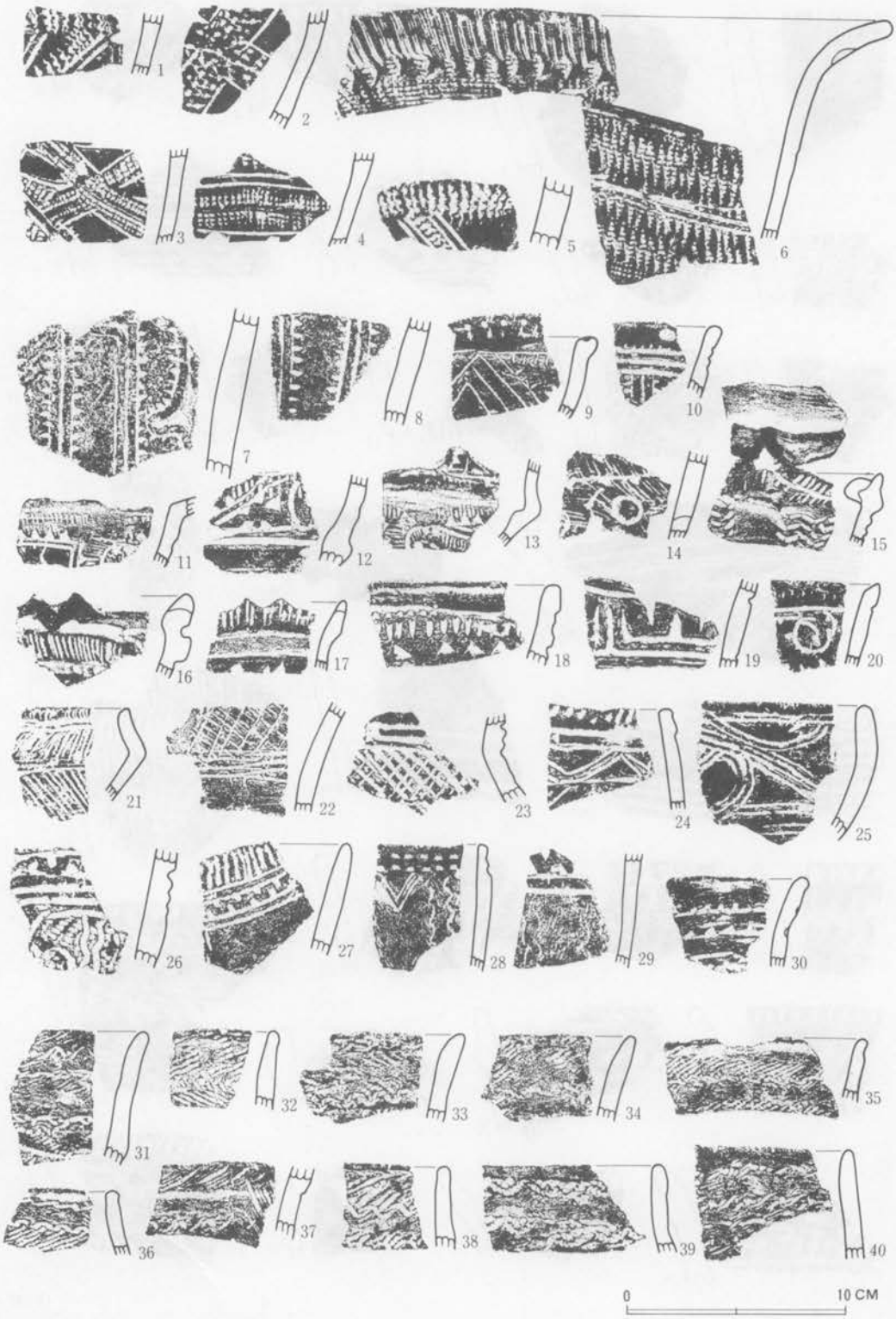
安山岩製で扁平な礫の両側を打ち欠いて作られている。

石　器　表　（遺構分）

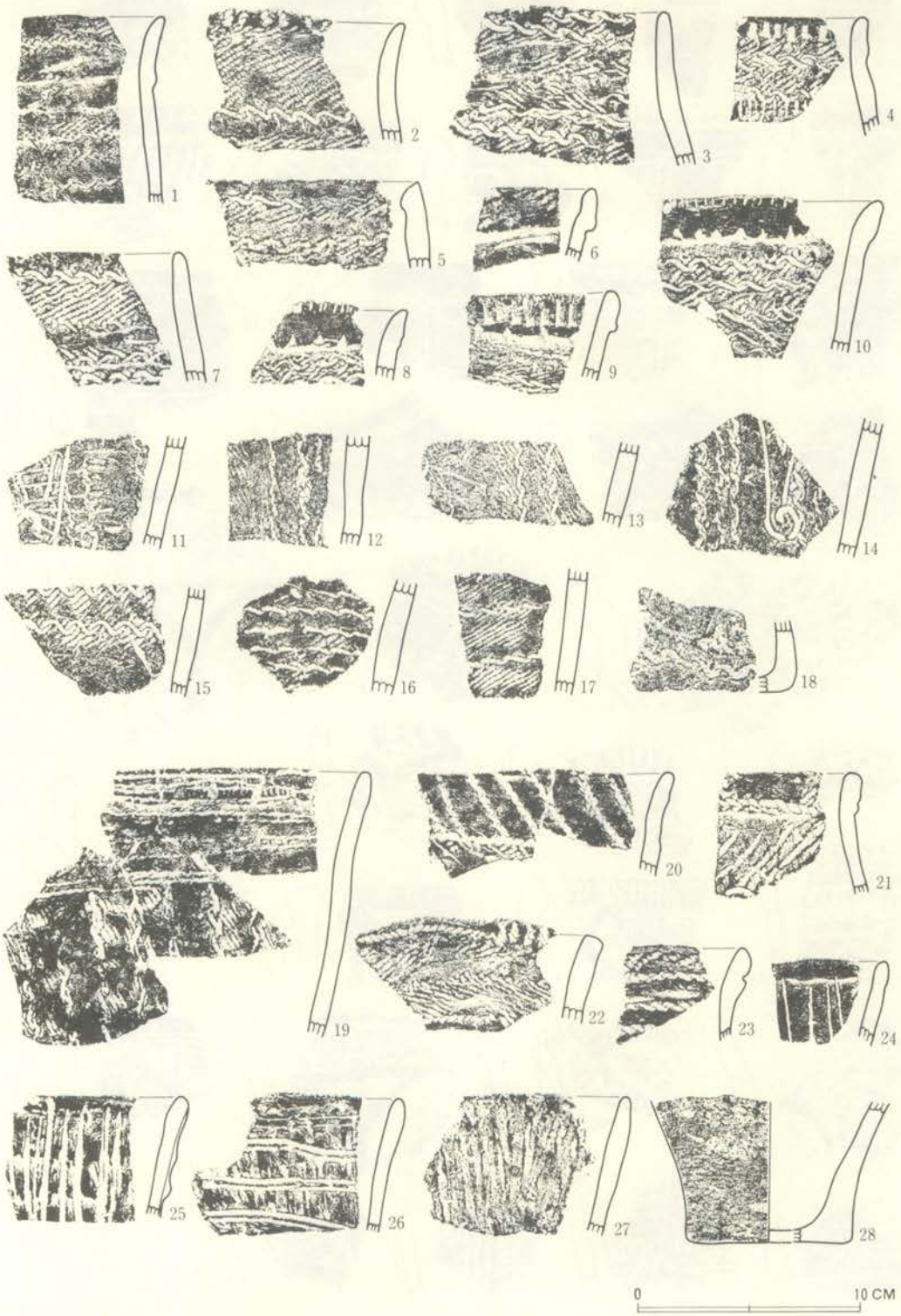
挿　図	遺構番号	長　軸 (cm)	短　軸 (cm)	厚　さ (cm)	重　さ (g)	石　質
第248図 36	002	(6.6)	5.2	1.6	87.0	砂　岩
37	002	(5.2)	5.7	1.3	53.6	砂　岩
38	002	(4.8)	5.1	1.4	47.6	流　紋　岩
39	002	(5.1)	5.4	0.9	32.8	安　山　岩
40	002	(1.8)	(1.4)	3.5	0.8	黒　躍　石
41	002	2.9	2.2	0.6	2.5	黒　曜　石
42	002	(2.6)	(1.7)	0.3	1.2	黒　曜　石
43	002	(1.8)	(1.4)	3.5	0.8	黒　曜　石
第265図 20	055	2.2	1.7	0.5	1.3	チャート
21	055	2.5	1.2	0.3	0.6	チャート
22	055	(2.3)	1.6	0.5	1.8	チャート



第299図　第１群Ａ～Ｄ類土器

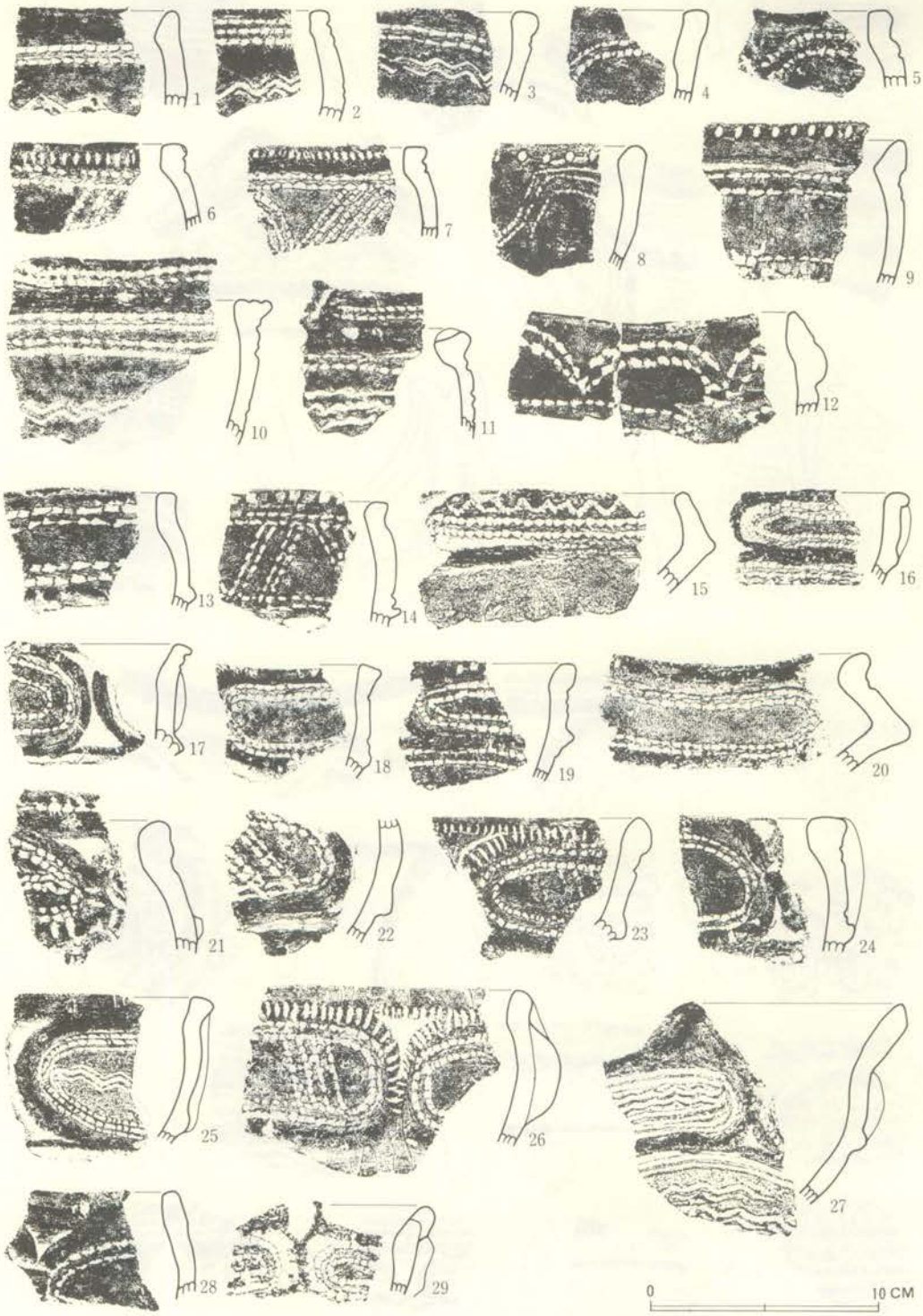


第300図　第１群Ｄ類・第２群Ａ・Ｂ類土器

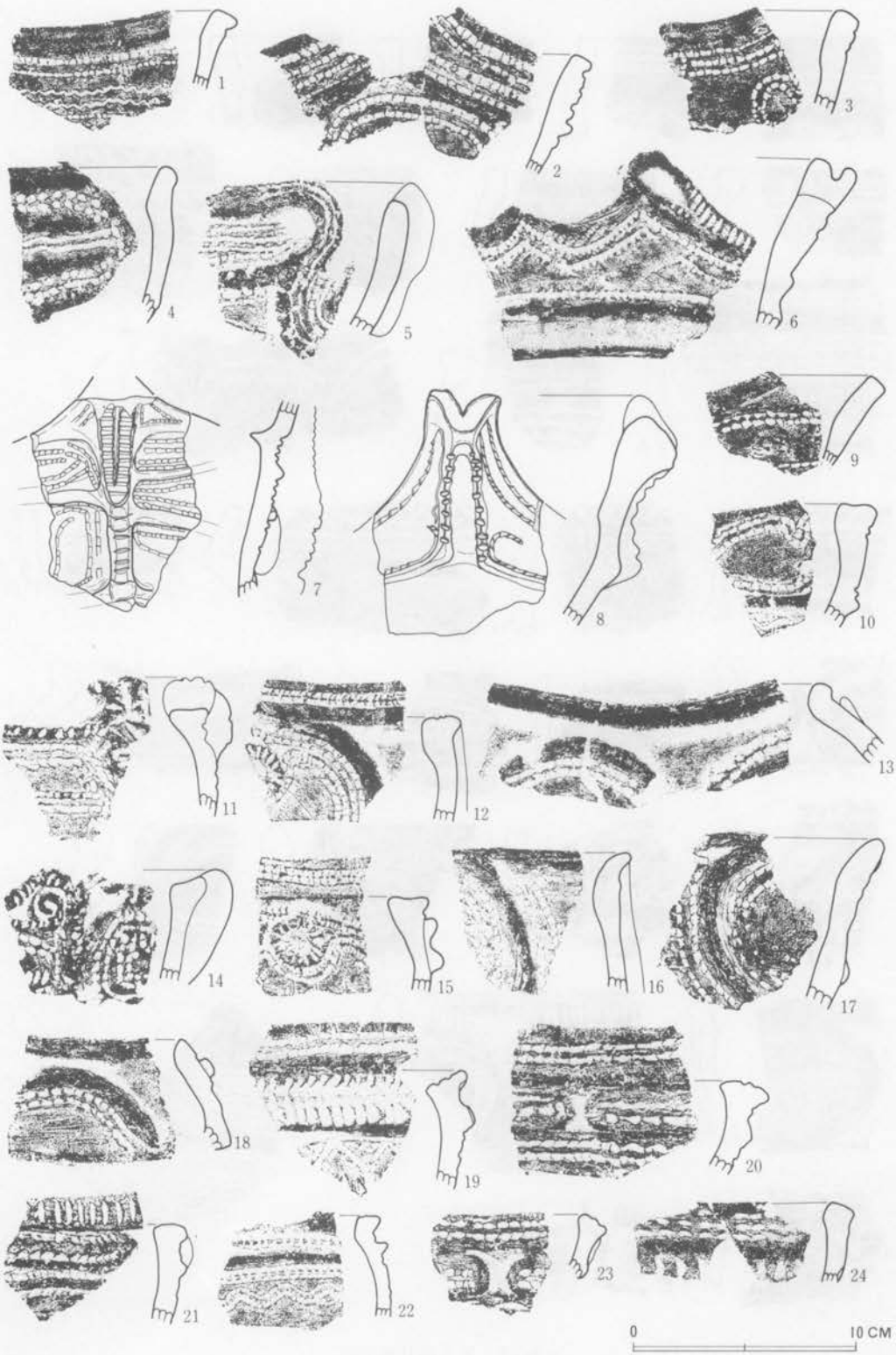


第301図　第２群Ｂ～Ｄ類土器

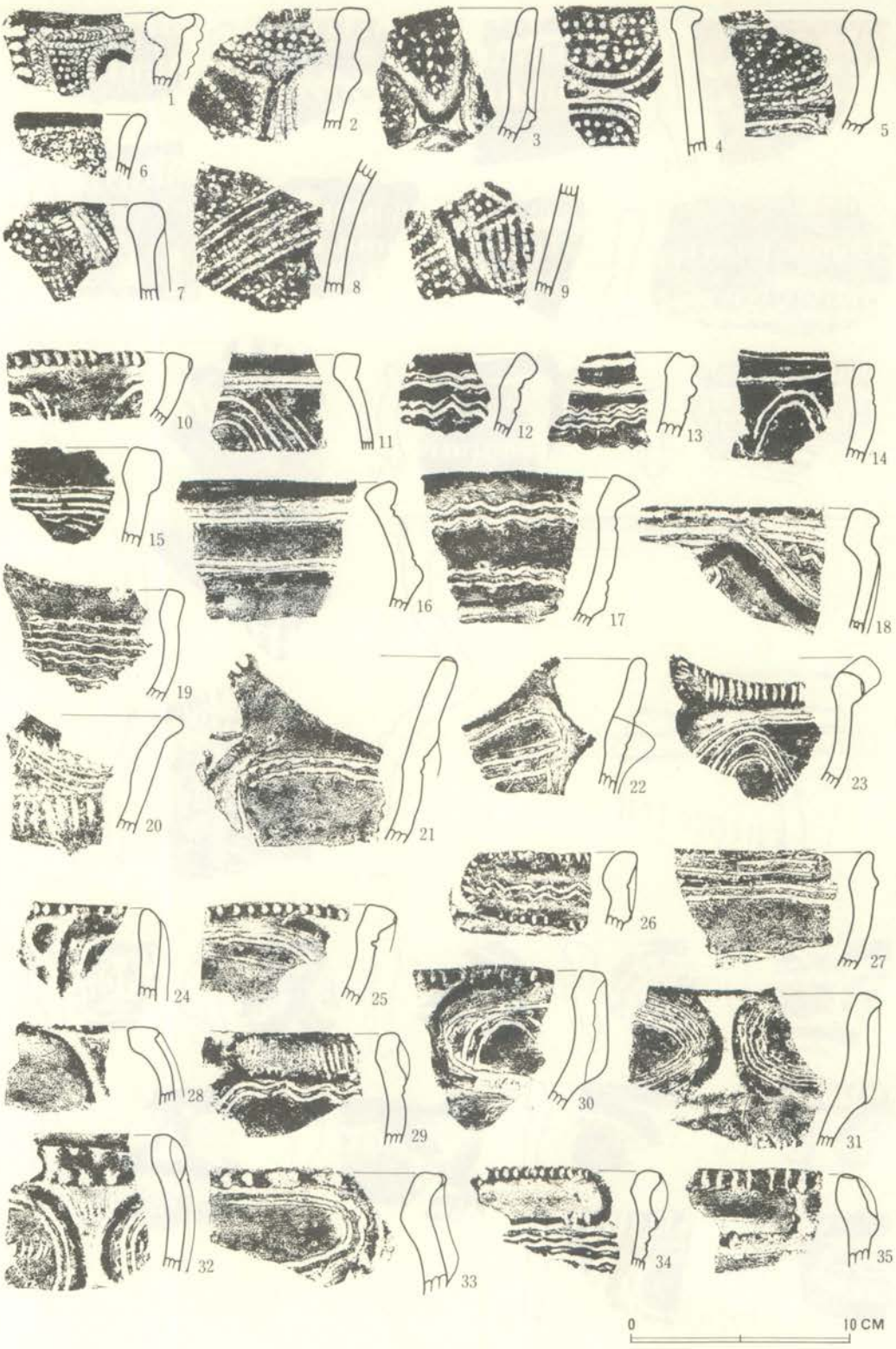
第302図　第３群Ａ類土器



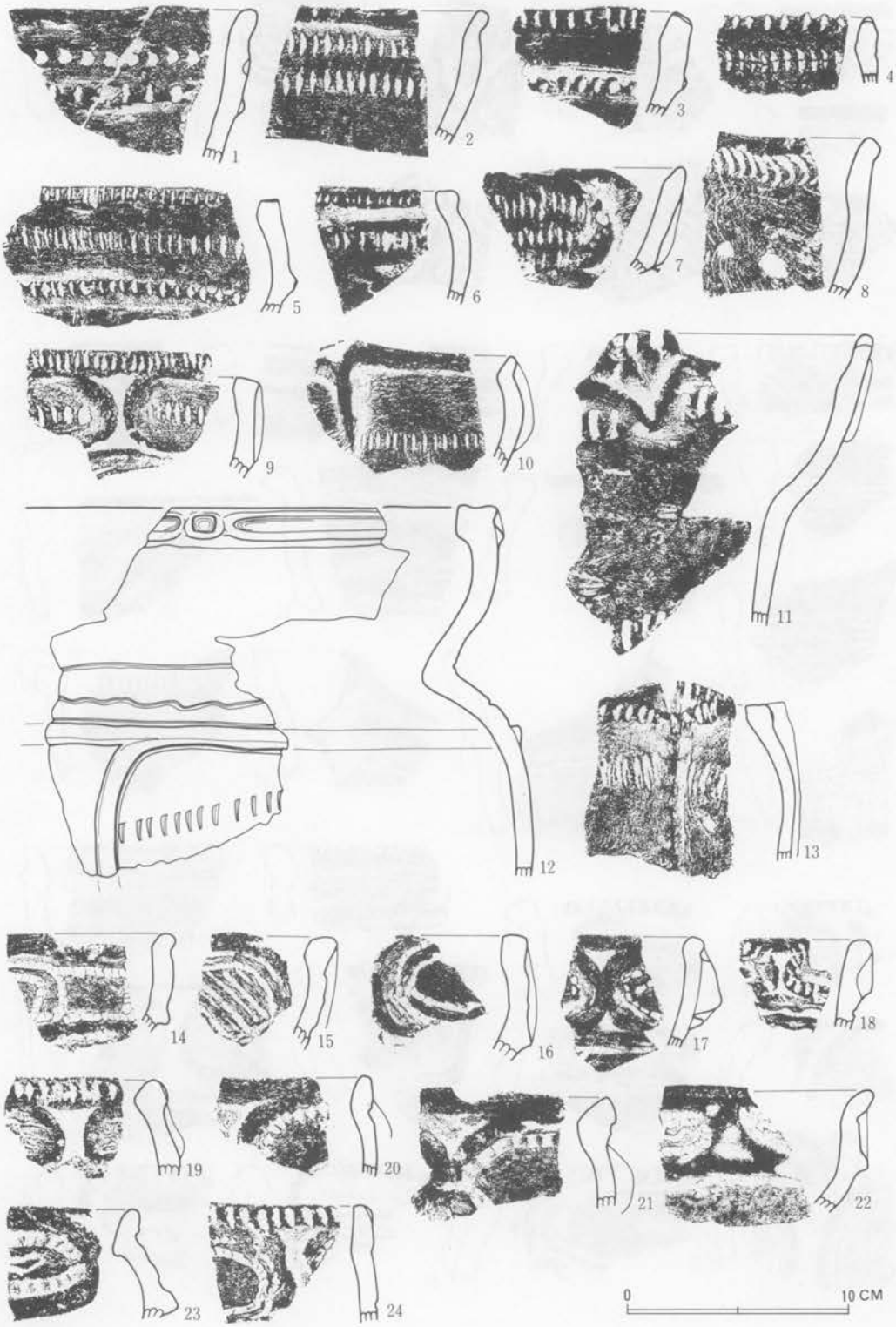
第303図　第３群Ｂ類土器



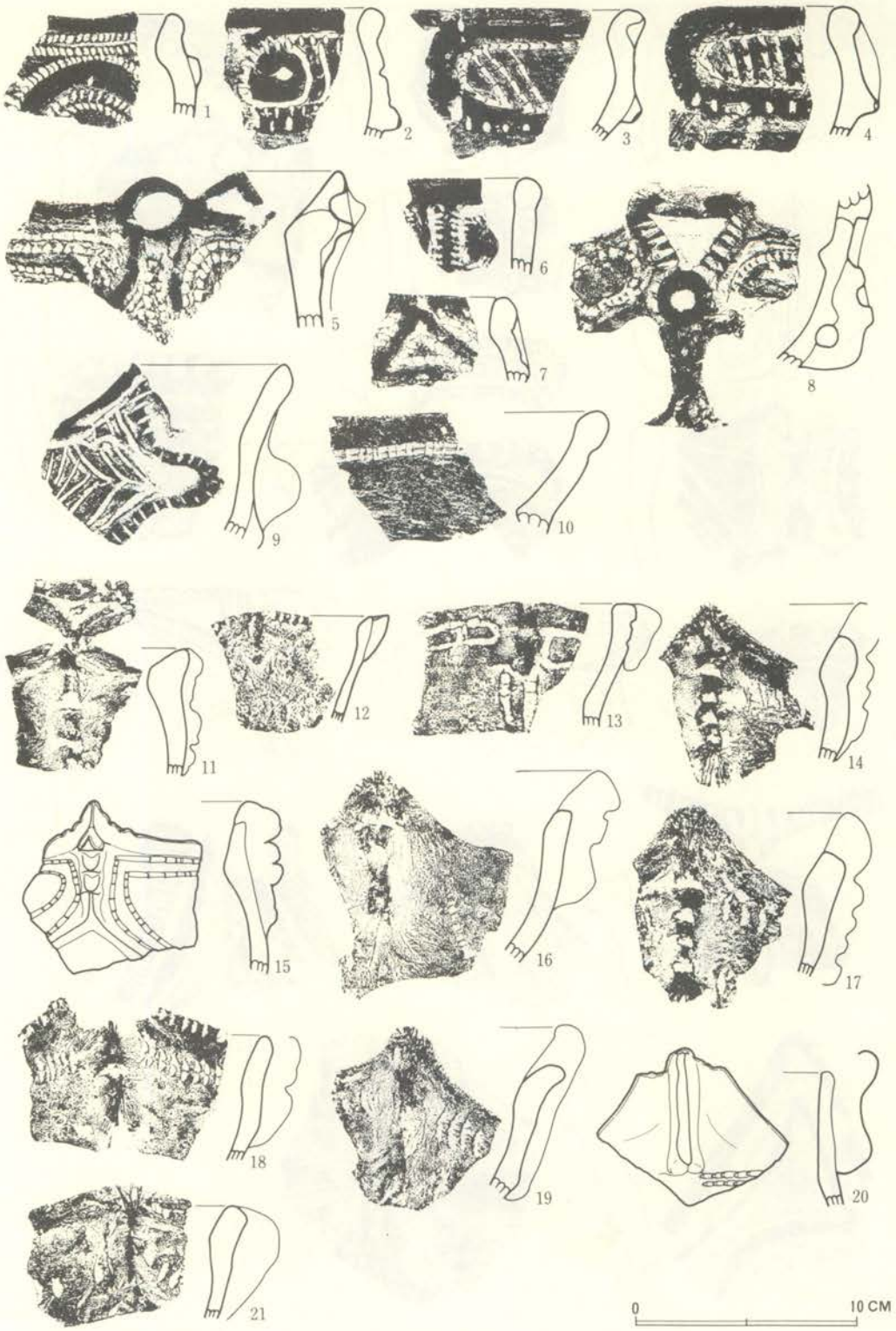
第304図　第３群Ｂ類土器



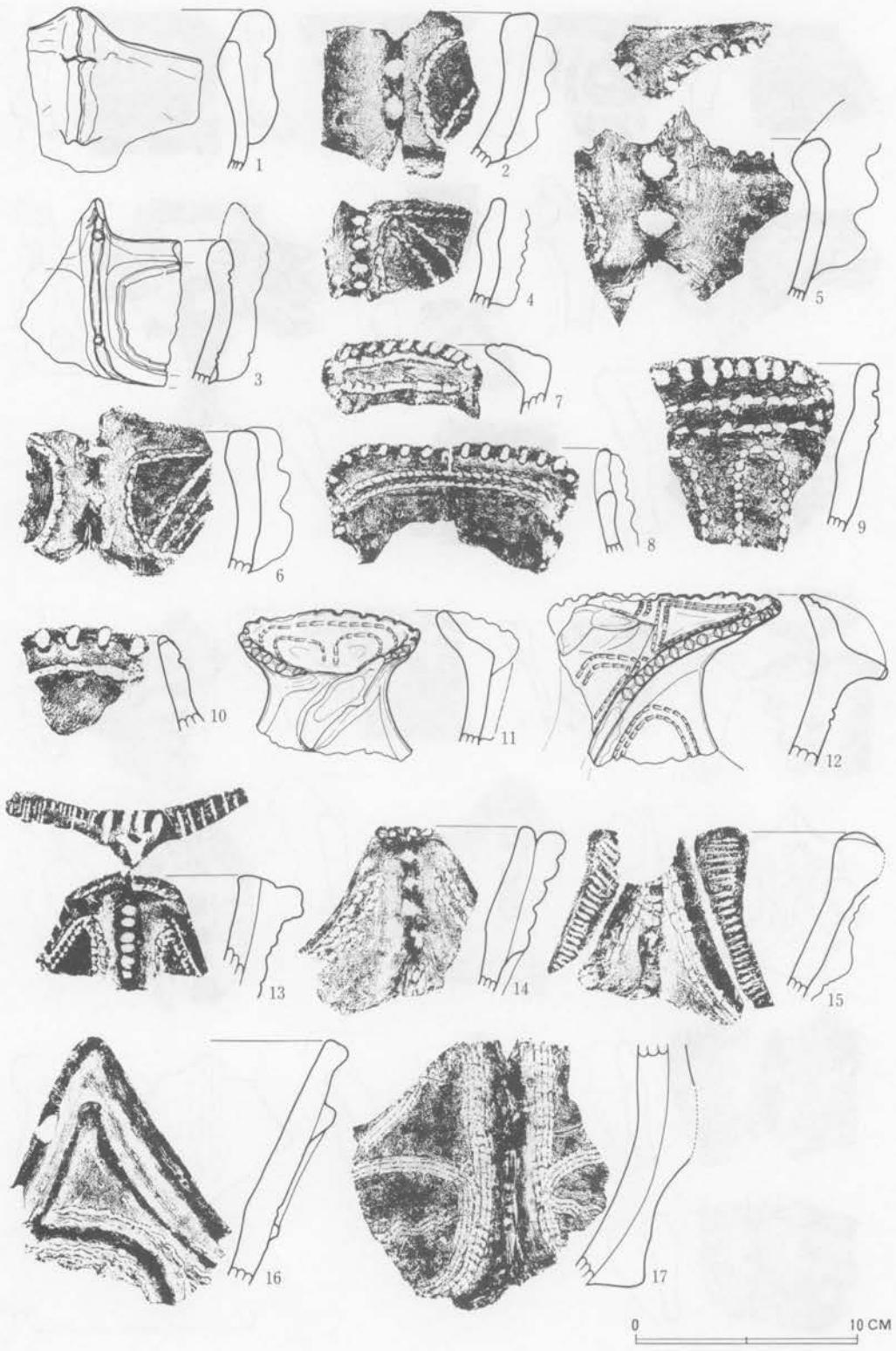
第305図　第３群Ｃ・Ｄ類土器



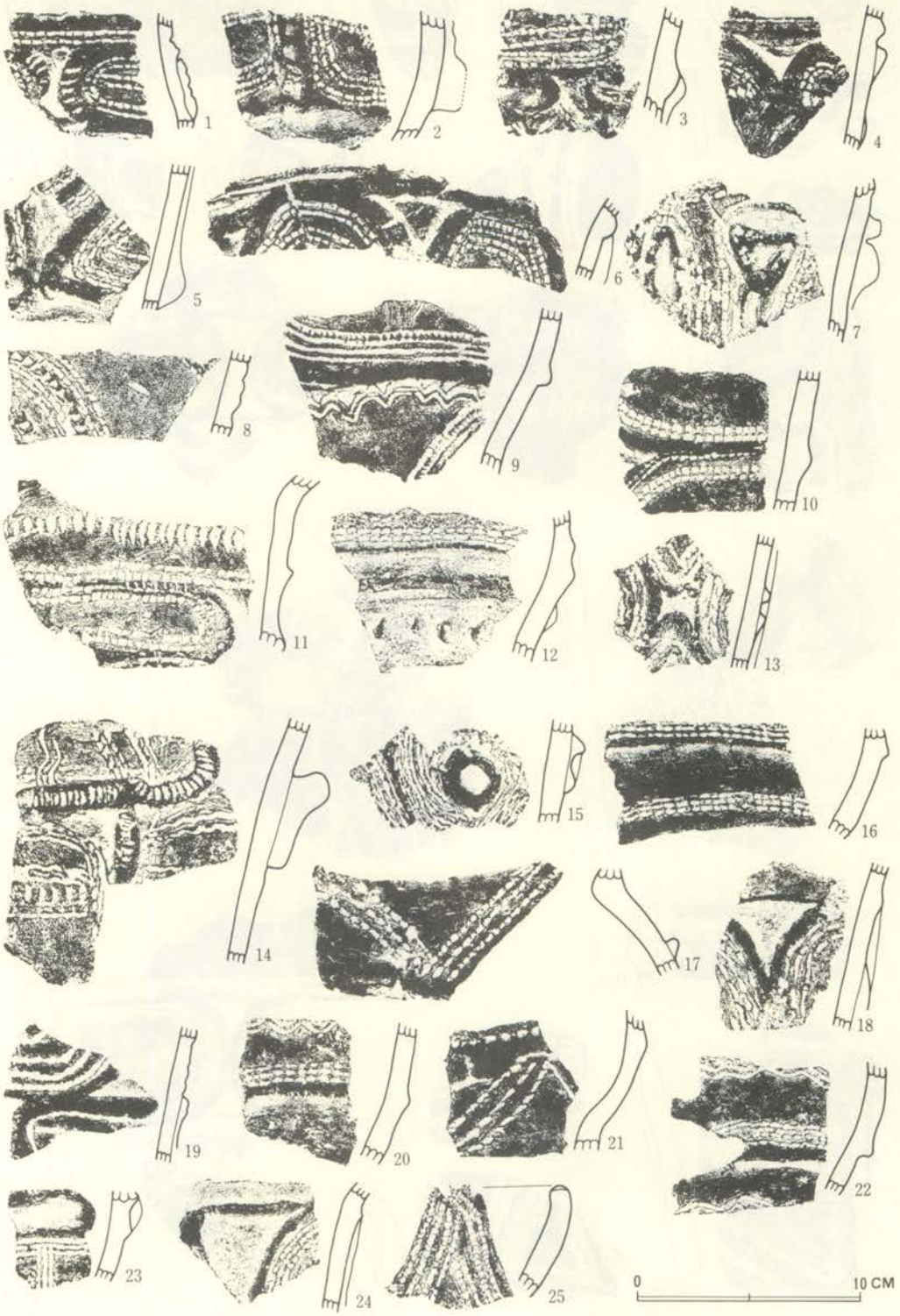
第306図　第３群Ｅ・Ｆ類土器



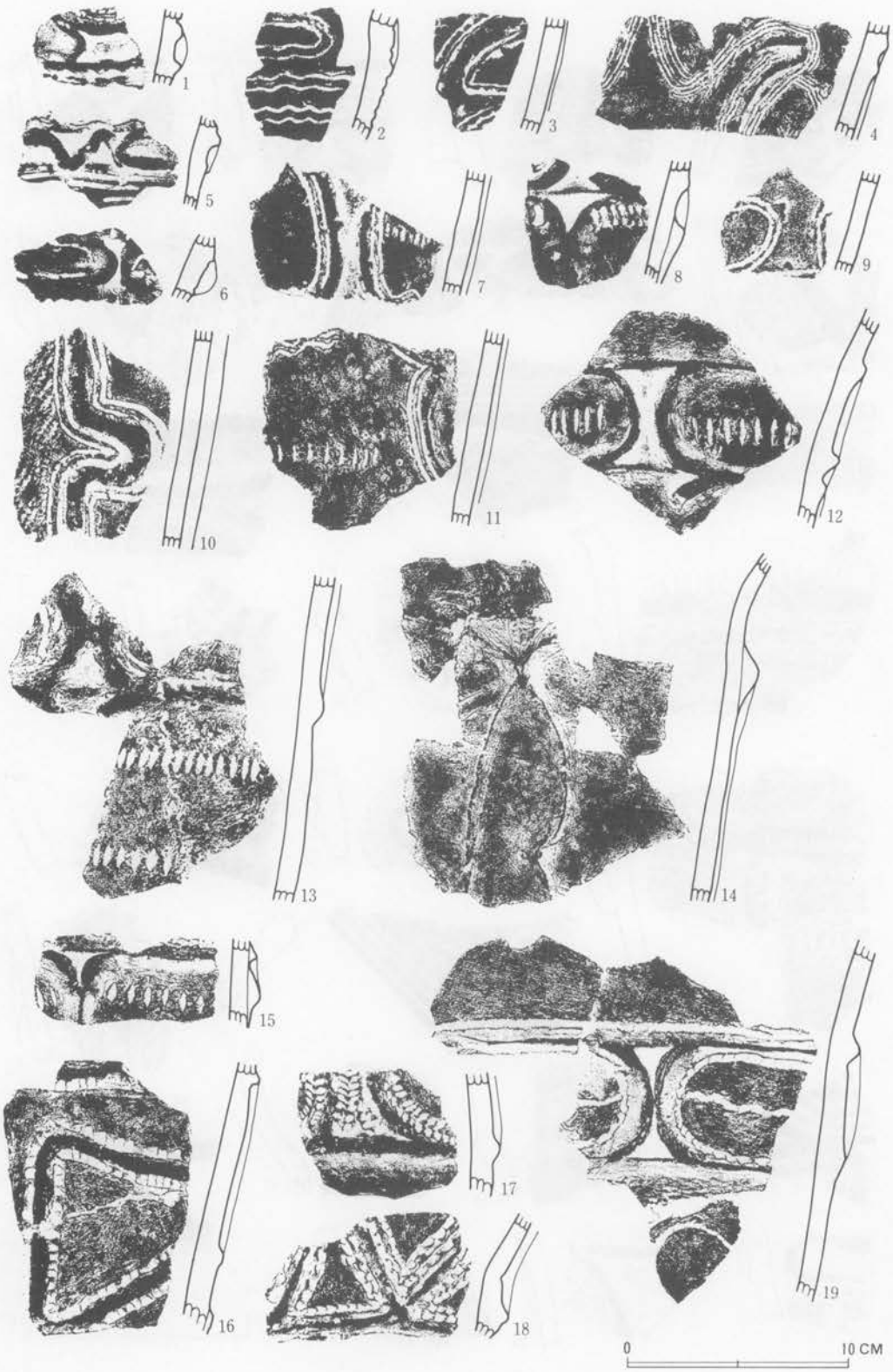
第307図　第３群Ｆ・Ｇ類土器



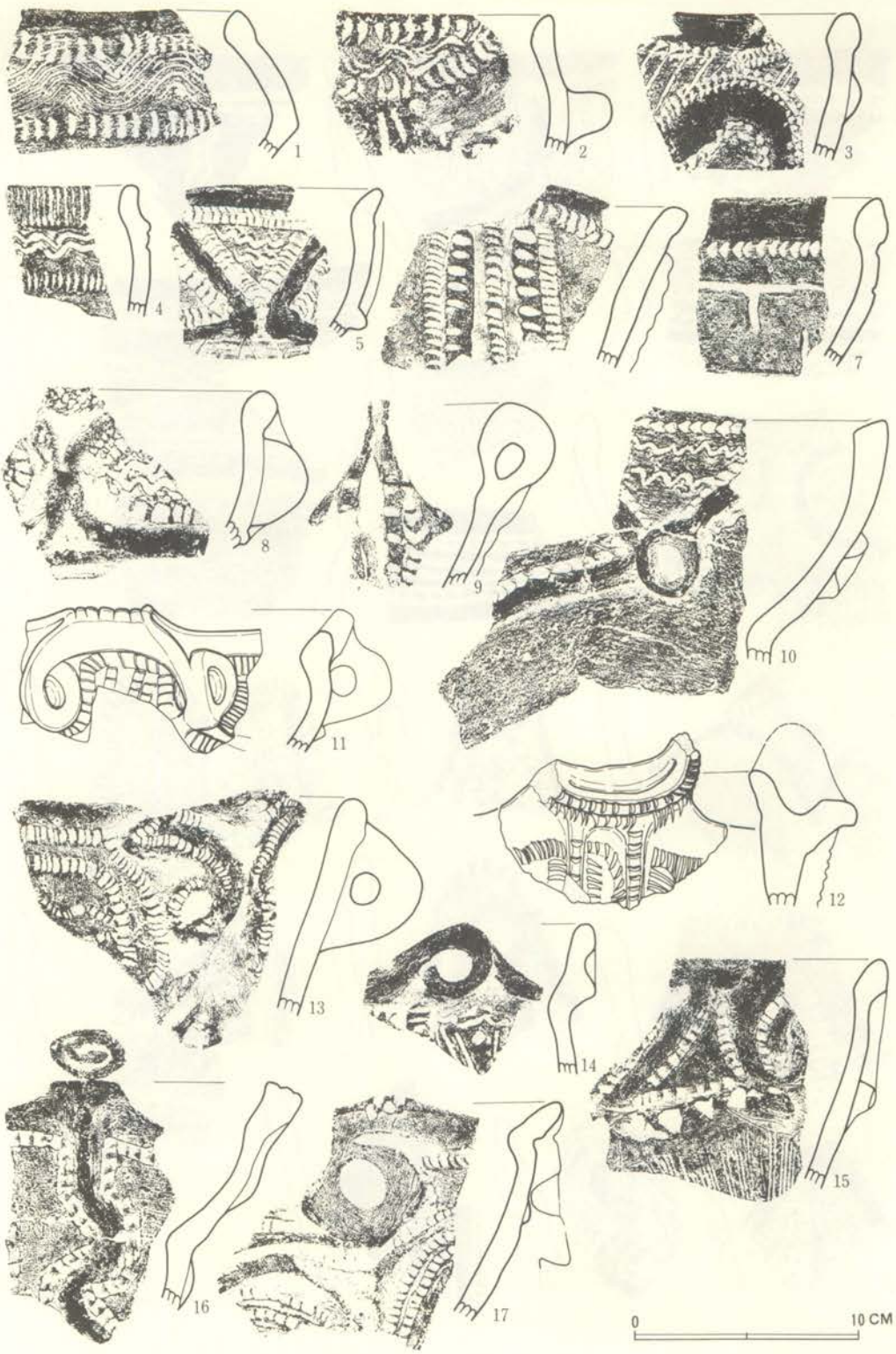
第308図　第３群Ｇ～Ｉ類土器



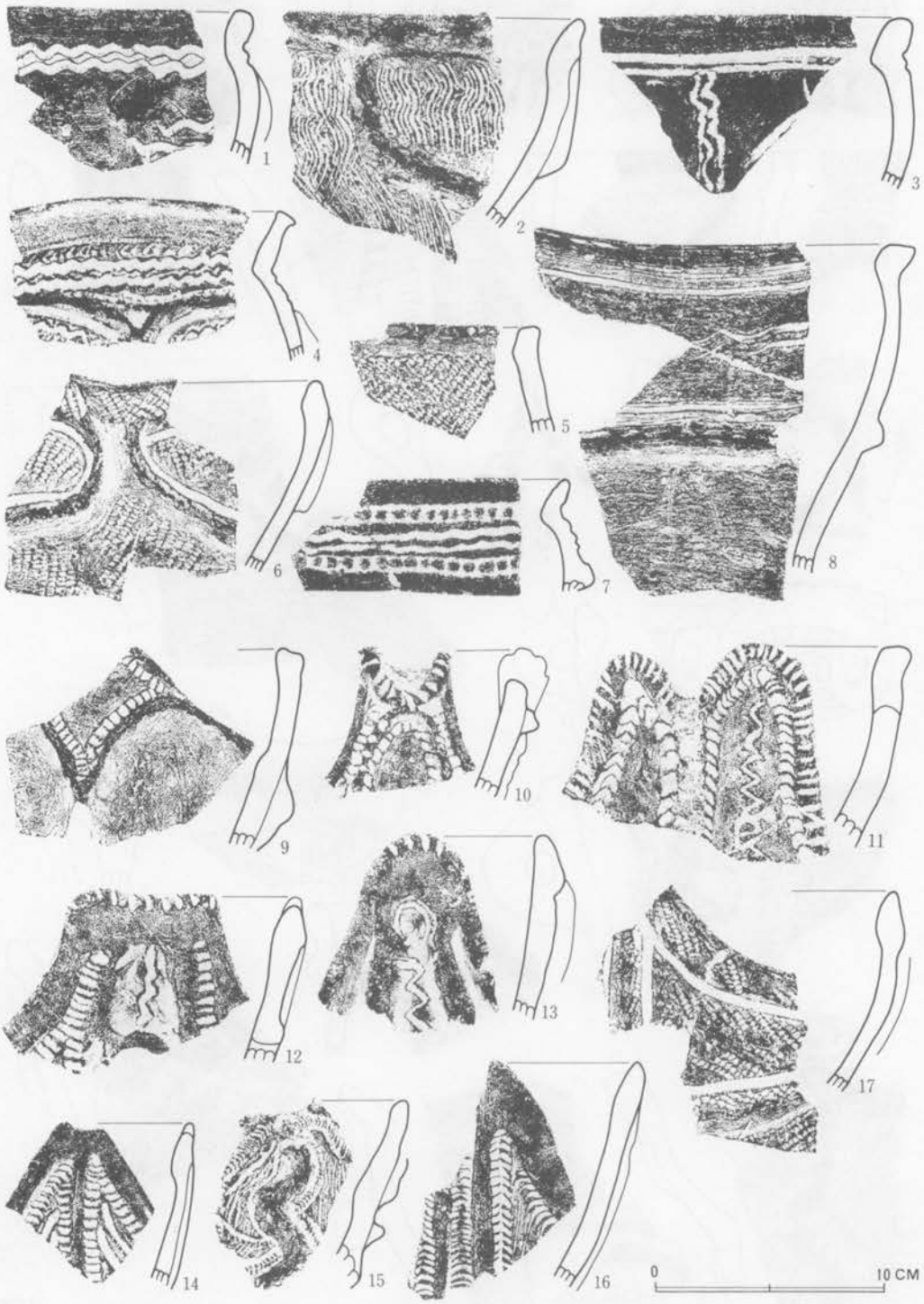
第309図　第３群Ｊ類土器



第310図　第３群Ｊ・Ｋ類土器

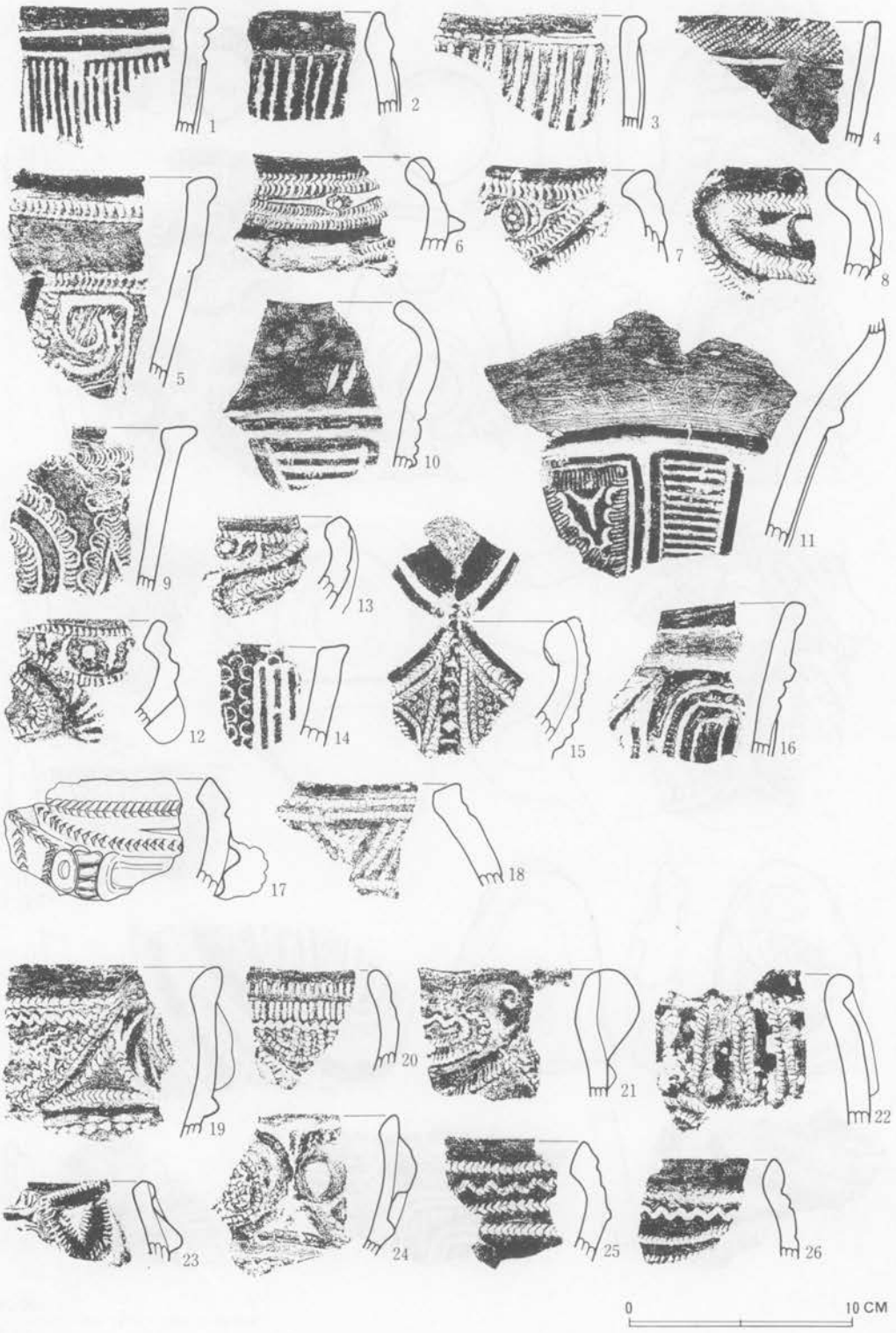


第311図　第３群Ｌ類土器

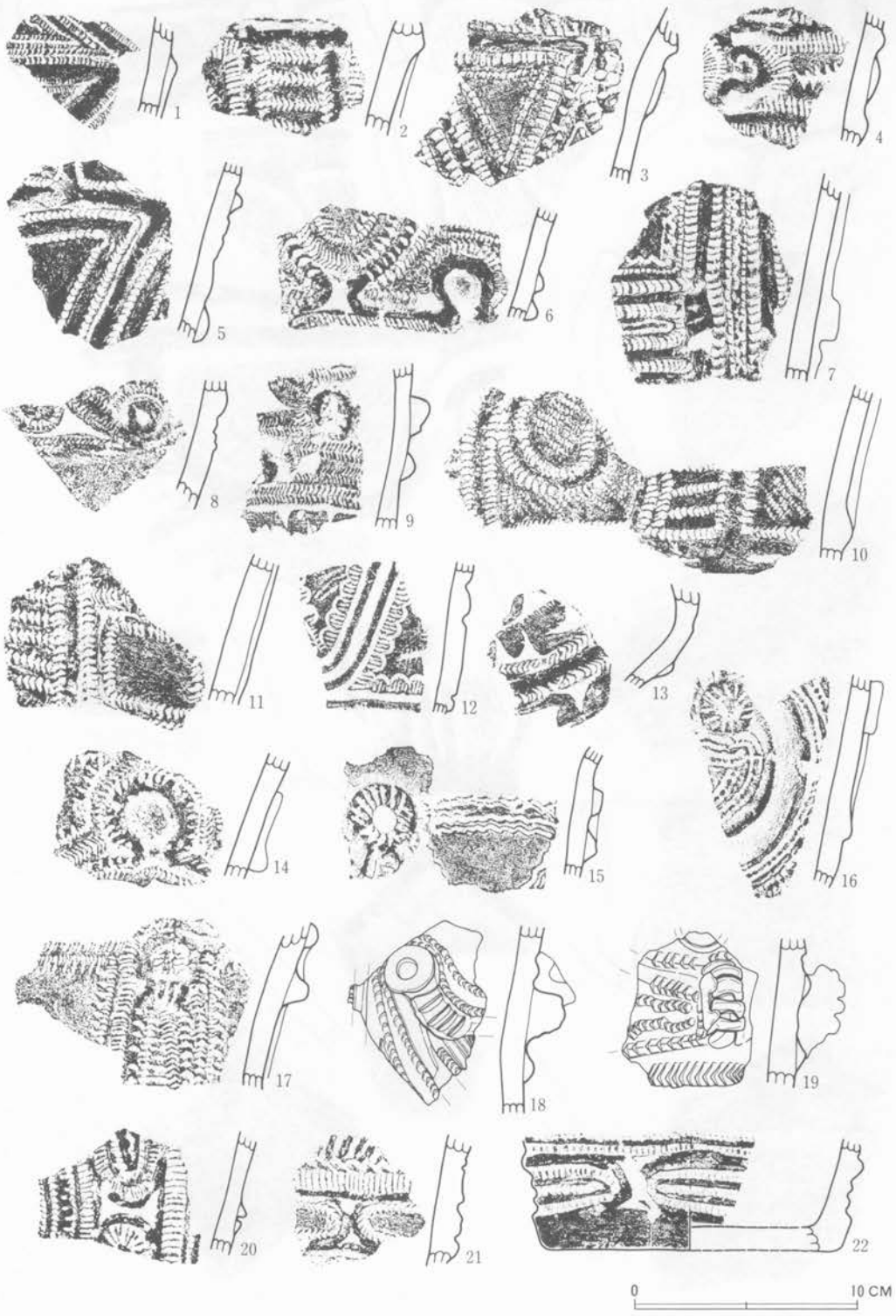


第312図　第３群M・N類土器

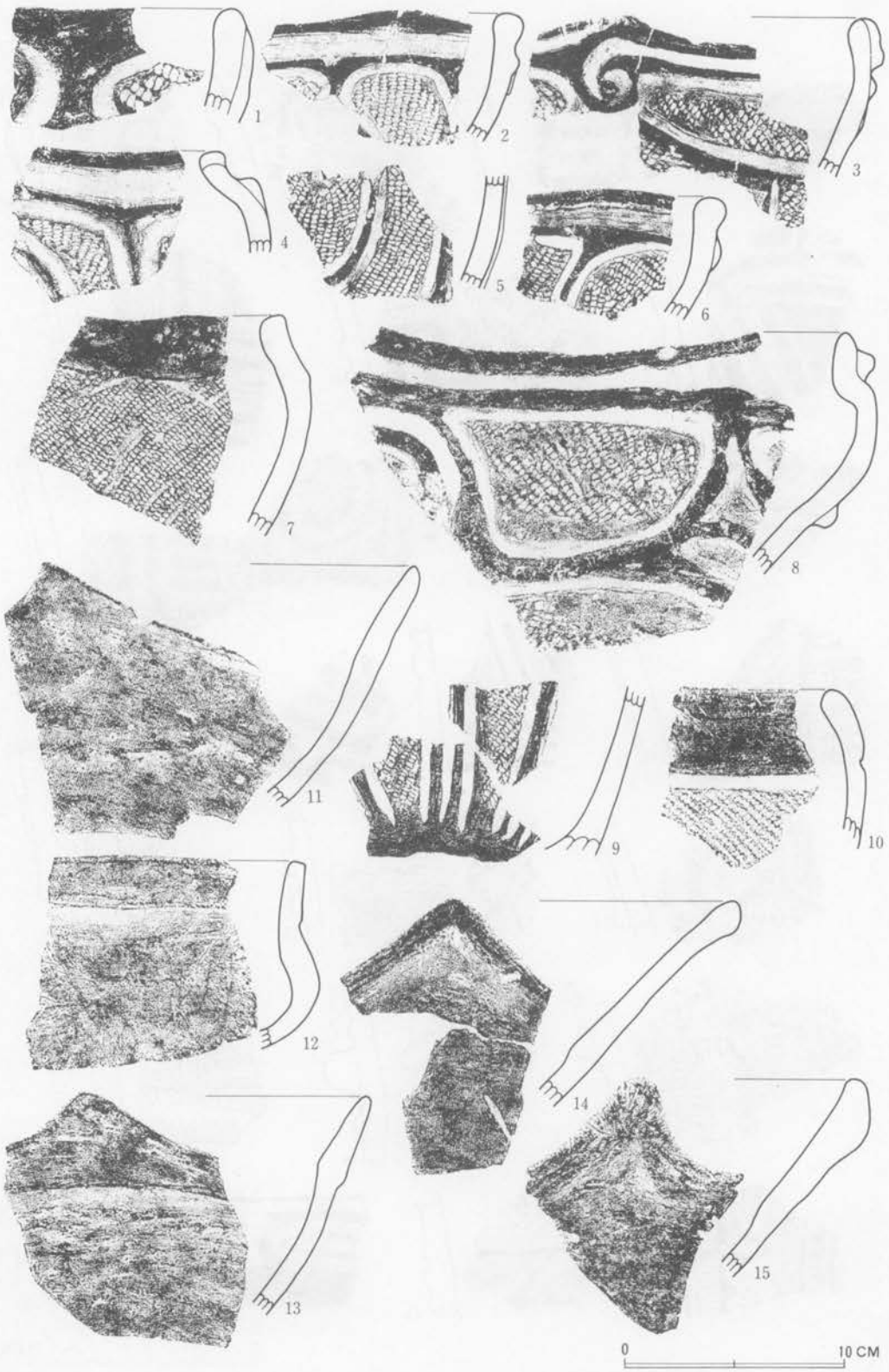
第313図　第３群Ｏ類土器



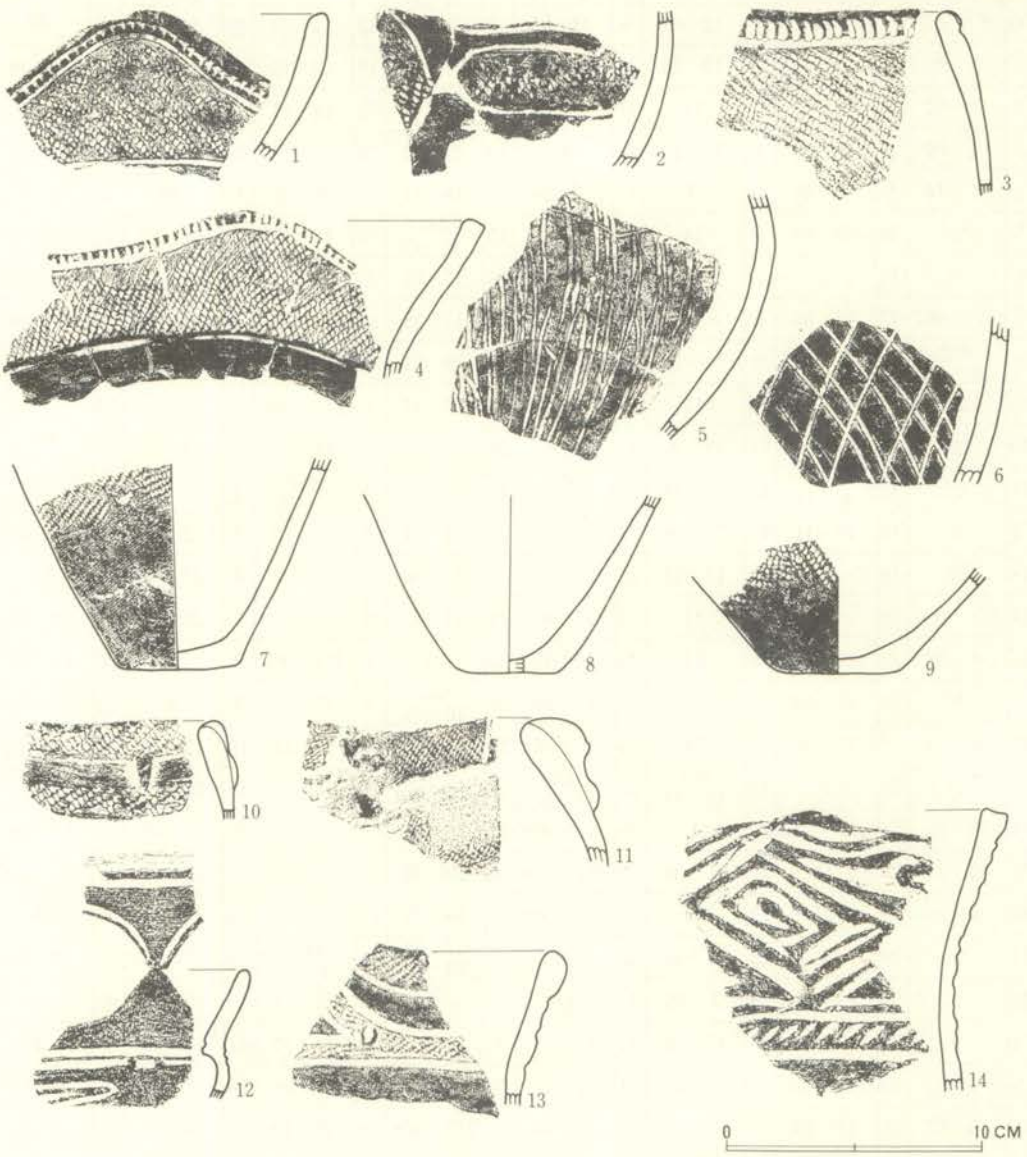
第314図　第４群Ａ～Ｃ類土器



第315図　第４群Ｃ・Ｄ類土器



第316図　第５・６群土器



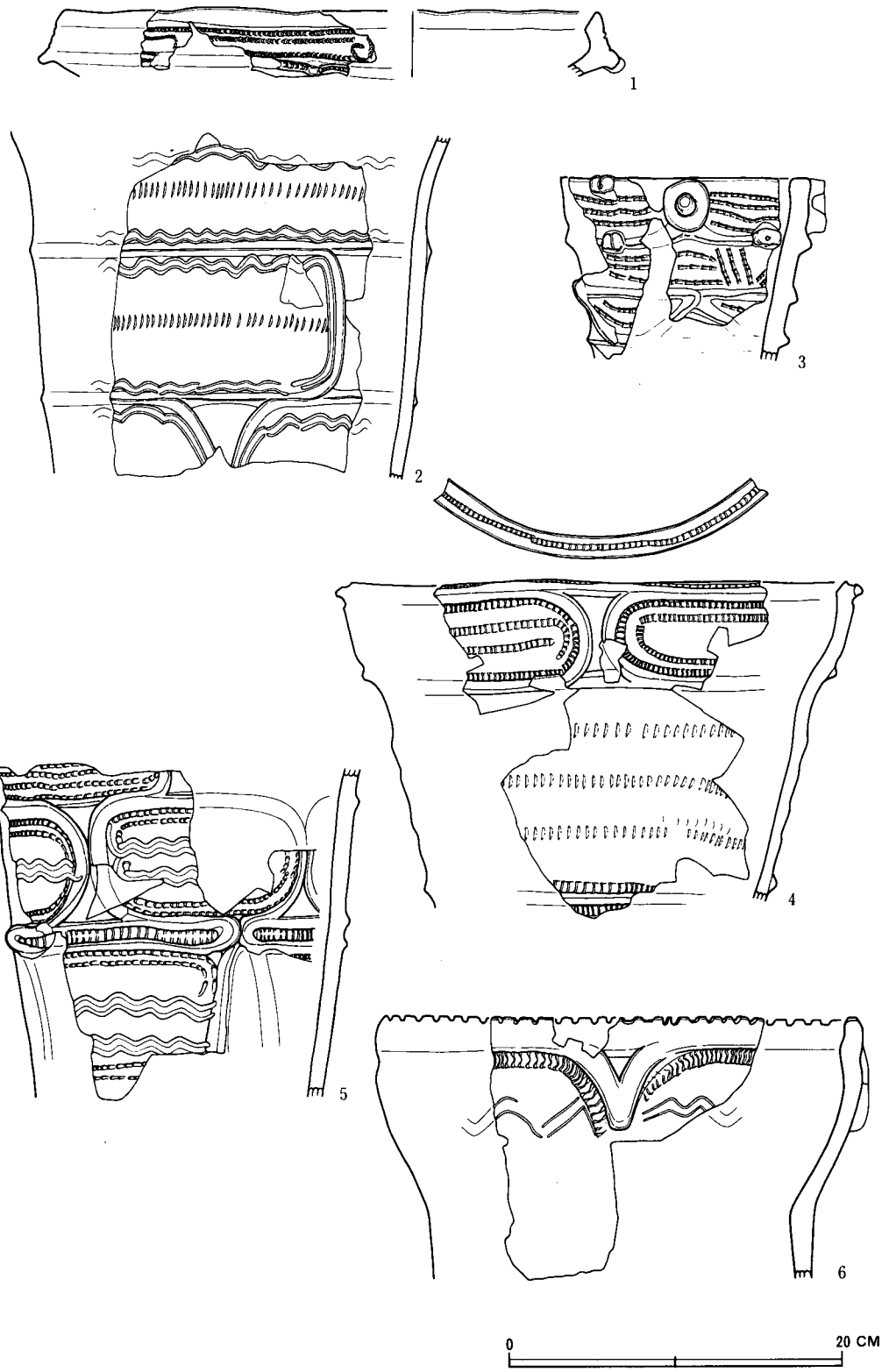
第317図　第７群土器

グリッド出土の土器（008はグリッド名のみ，007・011についてはコード名を記入した。）

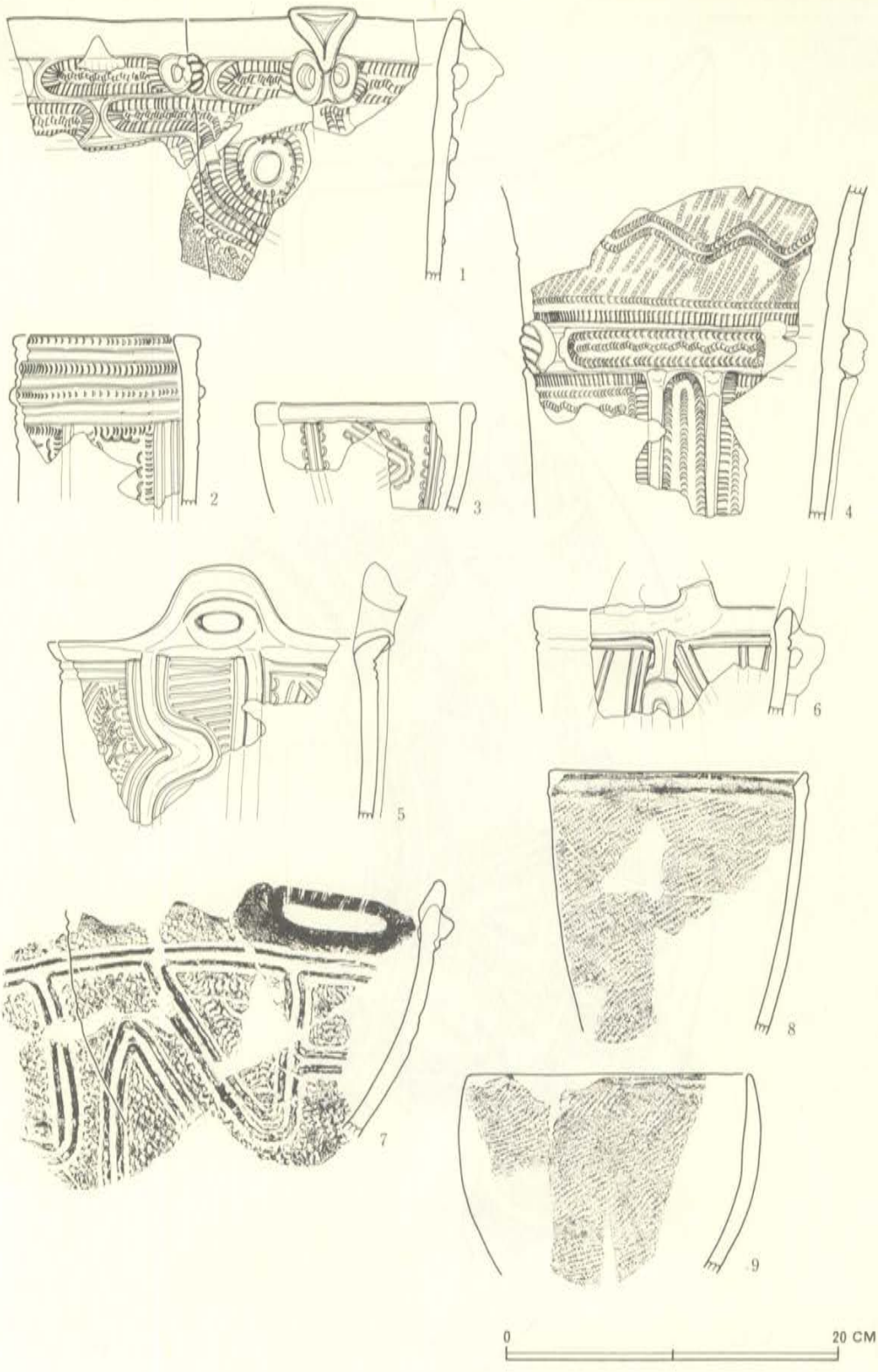
第 299 図		4	9—08	第 301 図		8	007 9—14	9	007 9—13	16	10	28	007 5—01	4	18—02
No.	グリッド	5	14	1	13—01	9	23—05	10	3	17	11—12	29	12—15	5	007 8—12
1	3—06	6	21	2	10—16	10	12—01	11	17—3	18	12—15	30	35	6	12—18
2	3—02	7	18—05	3	14	11	21	12	12—14 12—15	19	18—11	31	23—11	7	10—11
3	12—07	8	17—04	4	11—14	12	35	13	12—14	20	5—11	32	13	8	22—10
4	9—10	9	10—06	5	9	13	217—007	14	19—11	21	9—01	33	29	9	12—14
5	26	10	23—09	6	14	14	20	15	007 9—13	22	17—12	34	17—12	10	12—15
6	31	11	3	7	5	15	18—06	16	17—07	23	007 9—14	35	12—11	11	18—01
7	217—007	12	13—05	8	8—16	16	30	17	17—15	24	12—14	第 306 図		12	217—007
8	007 4—08	13	3—06	9	14—13	17	17—01	18	18—01	第 305 図		1	26	13	12—05
9	21	14	6—01	10	12	18	17	19	12—14	1	217—008	2	26	14	17—15
10	20	15	3	11	18—8	19	20	20	26	2	18—05	3	23—06	15	007 9—09
11	20	16	007 8—11	12	12—14	20	007 8—12	21	18—13	3	007 3—02	4	22—16	16	20
12	20	17	18—11	13	12—16	21	217—007	22	13—14	4	12—10	5	12—15	17	22—07
13	36	18	20	14	13—11	22	23—09	23	17—16	5	17—02	6	22—03	18	14
14	3—06	19	26	15	14	23	217—007	24	12—15	6	5	7	22—08	19	14—11
15	9—08	20	10—14	16	13	24	12—15	25	20	7	217—007	8	14	20	12—15
16	20	21	5—08	17	3	25	17—09	26	007 10—01	8	22—16	9	20	21	22—04
17	10—14	22	17—01	18	14	26	11—16	27	217—008	9	12—14	10	12—14	第 308 図	
18	14	23	2	19	007 17—10	27	007 18—09	28	18—3	10	18—01	11	23—13	1	007 16—13
19	10—06	24	217—007	20	1	28	217—008	29	18—14	11	26	12	23—09	2	12—10
20	13—14	25	21	21	6—06	29	217—008	第 304 図		12	35	13	17—06	3	217—008
21	9—10	26	29	22	26	30	217—008	1	18—15	13	20	14	12—11	4	26
22	20	27	6	23	14—10	31	26	2	17—08 23—05	14	007 4—02	15	17—06	5	23—02
23	9	28	12—12	24	3—06	32	12	3	007 9—13	15	12—14	16	12—13	6	9—04
24	3	29	17—01	25	17—10	33	12—15	4	28	16	12—12	17	17—03	7	29
25	011 4—09	30	217—008	26	9—03	34	12—11	5	36	17	18—09	18	12—11	8	18—05
26	13—02	31	12—16	27	5	35	11—16	6	217—008	18	10—10	19	23—02	9	007 9—12
27	9—06	32	3—13	28	007 27—13	第 303 図		7	26	19	17—01	20	17—05	10	12—16
28	14	33	9	第 302 図		1	19—10	8	5—11	20	17—03	21	12—11	11	007 9—13
29	20	34	17—06	1	18—15	2	23	9	11—13	21	29	22	11—08	12	18
30	8—12	35	9—10	2	20	3	17—01	10	18—1	22	36	23	2—14	13	6—14
31	12—13	36	6—07	3	22—08	4	26	11	18—15	23	13	24	12—15	14	30
第 300 図		37	13—11	4	007 19—11	5	25	12	12—15	24	17—08	第 307 図		15	007 4—02
1	007 4—05	38	14	5	39	6	20	13	11—14 19—04	25	26	1	12—16	16	20
2	9—08	39	11—14	6	12—14	7	18—01	14	12—15	26	26	2	18—13	17	27
3	10	40	13—09	7	007 4—12	8	39	15	007 9—10	27	36	3	17—02	第 309 図	

グリッド出土の土器

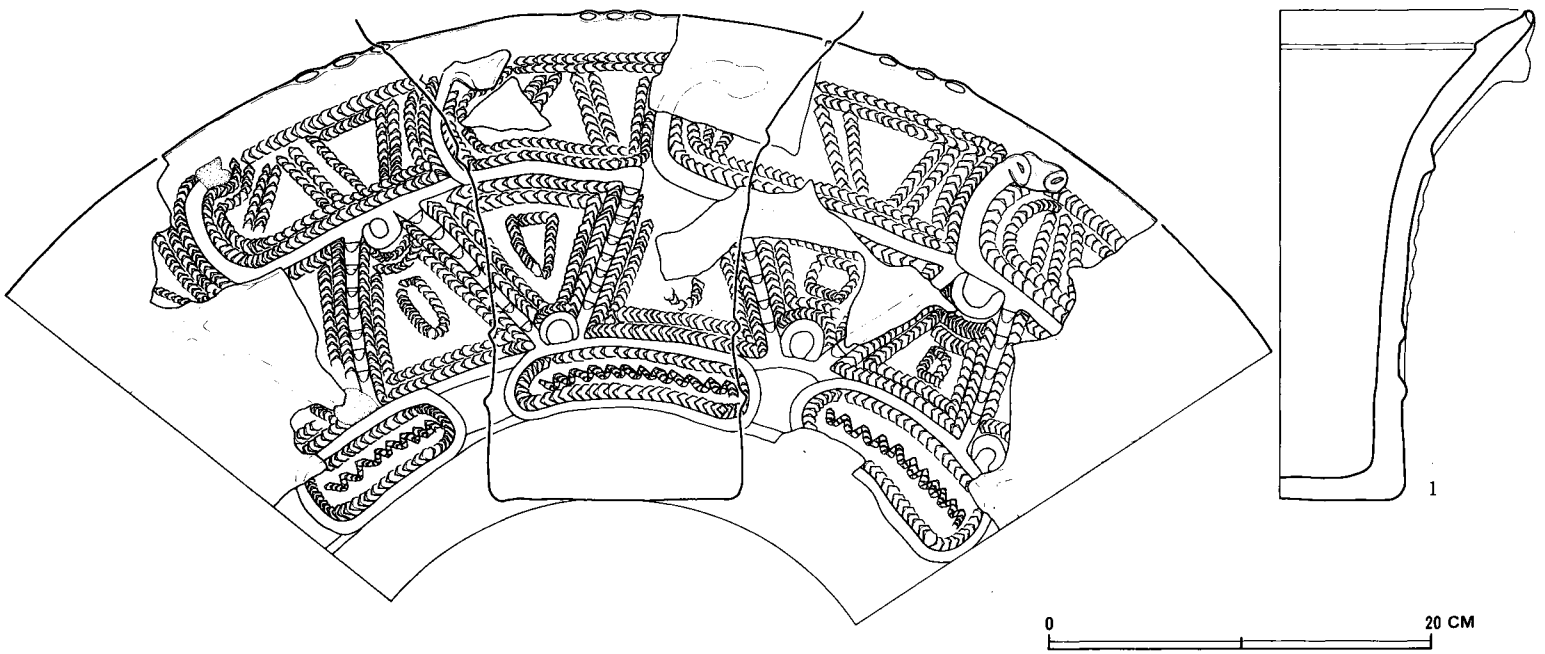
1	26	12	20	11	18—01	18	13—11	5	007 3—04										
2	18—06	13	007 7—03	12	11—12	19	18—05	6	007 10—09										
3	11—11	14	007 4—02	13	20	20	20	7	217—007										
4	007 8—02	15	217—008	14	17—08	21	007 8—12	8	3										
5	35	16	12—12	15	10	22	3	9	22—06										
6	20	17	12—13	16	19	23	12—15	10	217—007										
7	18—01	18	22—14	第 313 図		24	20	11	3										
8	22	19	29	1	10—03	25	217—007	12	007 9—14										
9	007 9—13	第 311 図		2	10	26	21	13	12—13										
10	26	1	11—04	3	10—14	第 315 図		14	3										
11	35	2	25	4	5	1	007 21—02	15	20										
12	008 002	3	11—07	5	14	2	20	第 317 図											
13	22—16	4	18—05	6	007 5-13•14	3	31	1	007 18—11										
14	12—12	5	12—13	7	008 057	4	20	2	007 28-14•15										
15	007 9—13	6	11—14	8	19—06	5	217—007	3	24										
16	18—02	7	12—16	9	10—03	6	007 16-12•16	4	217—007										
17	12—14	8	6	10	10—10	7	12—11	5	217—007										
18	008 055	9	10—03	11	217—008	8	17—02	6	19										
19	35	10	9—08	12	10—11	9	217—008	7	217—007										
20	14—06	11	17—04 17—08	第 314 図		10	19—07	8	217—007										
21	12—14	12	17	1	11—12	11	008 055	9	007 6—04										
22	12—14	13	10—10	2	12—13	12	18—08	10	007 27—13										
23	12—02	14	12—09	3	008 056	13	17—03	11	007 27—13										
24	19	15	20	4	217—007	14	12—11	12	011 4—01										
25	19—04	16	11—11 11—14	5	8—15	15	19—02	13	217—007										
第 310 図		17	007 5—09	6	007 9	16	217—007	14	007 30										
1	12—14	第 312 図		7	22—06	17	18—05												
2	22—12	1	12—13	8	007 4—03	18	35												
3	12—15	2	6	9	19—05 19—07	19	217—007												
4	18—04	3	6	10	12—16	20	217—007												
5	22—16	4	3	11	17—08	21	007 4—08												
6	17	5	11—11	12	17—04	22	39												
7	12—15	6	11—07 11—08	13	007 28—16	第 316 図													
8	18—08	7	6—11	14	6	1	8—11												
9	12—11	8	10—06	15	17—04	2	007 10—10												
10	13	9	11—12	16	007 4—02	3	5—10 5—13												
11	18—06	10	217—008	17	12—12	4	13												



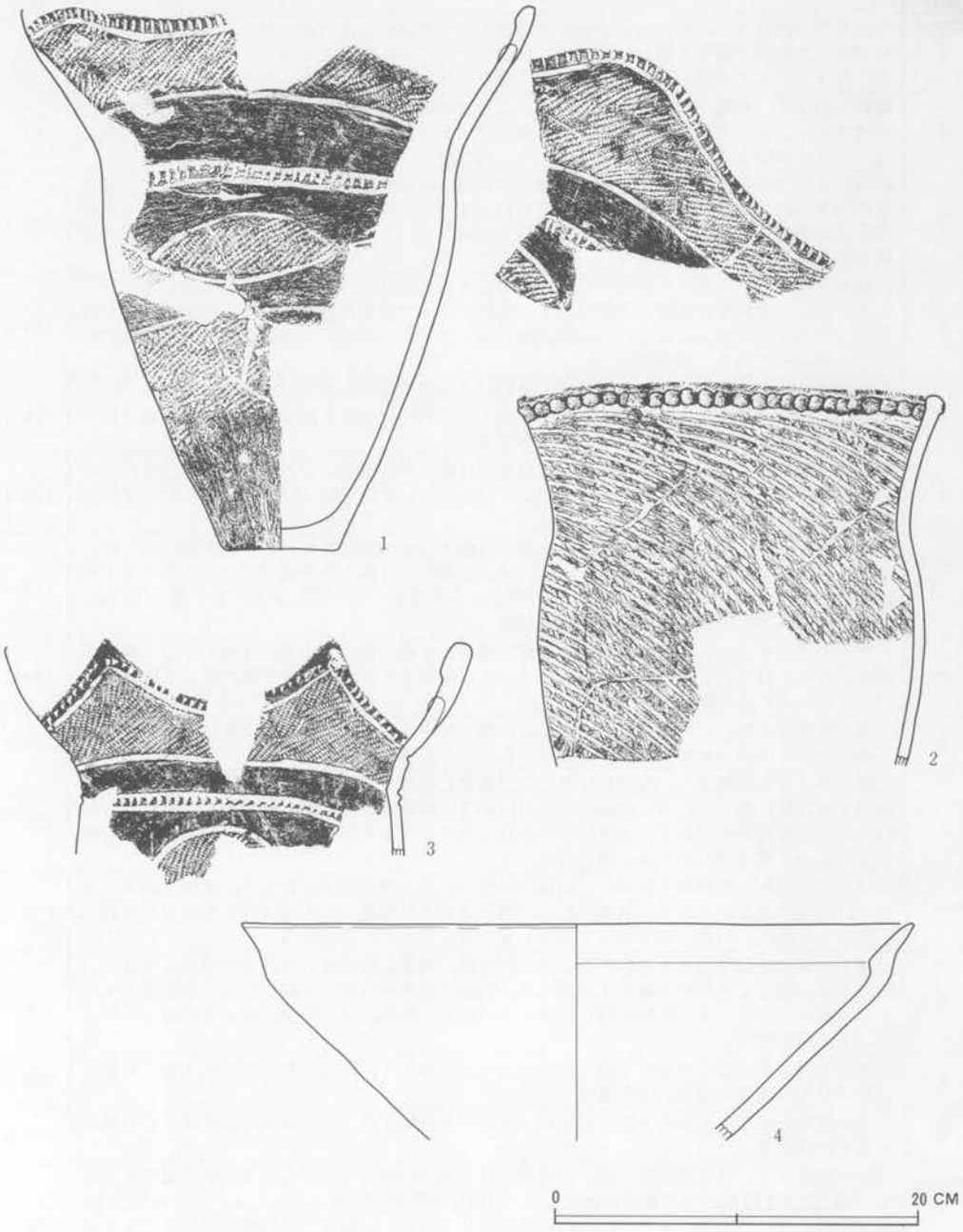
第318図　グリッド出土の土器



第319図　グリッド出土の土器



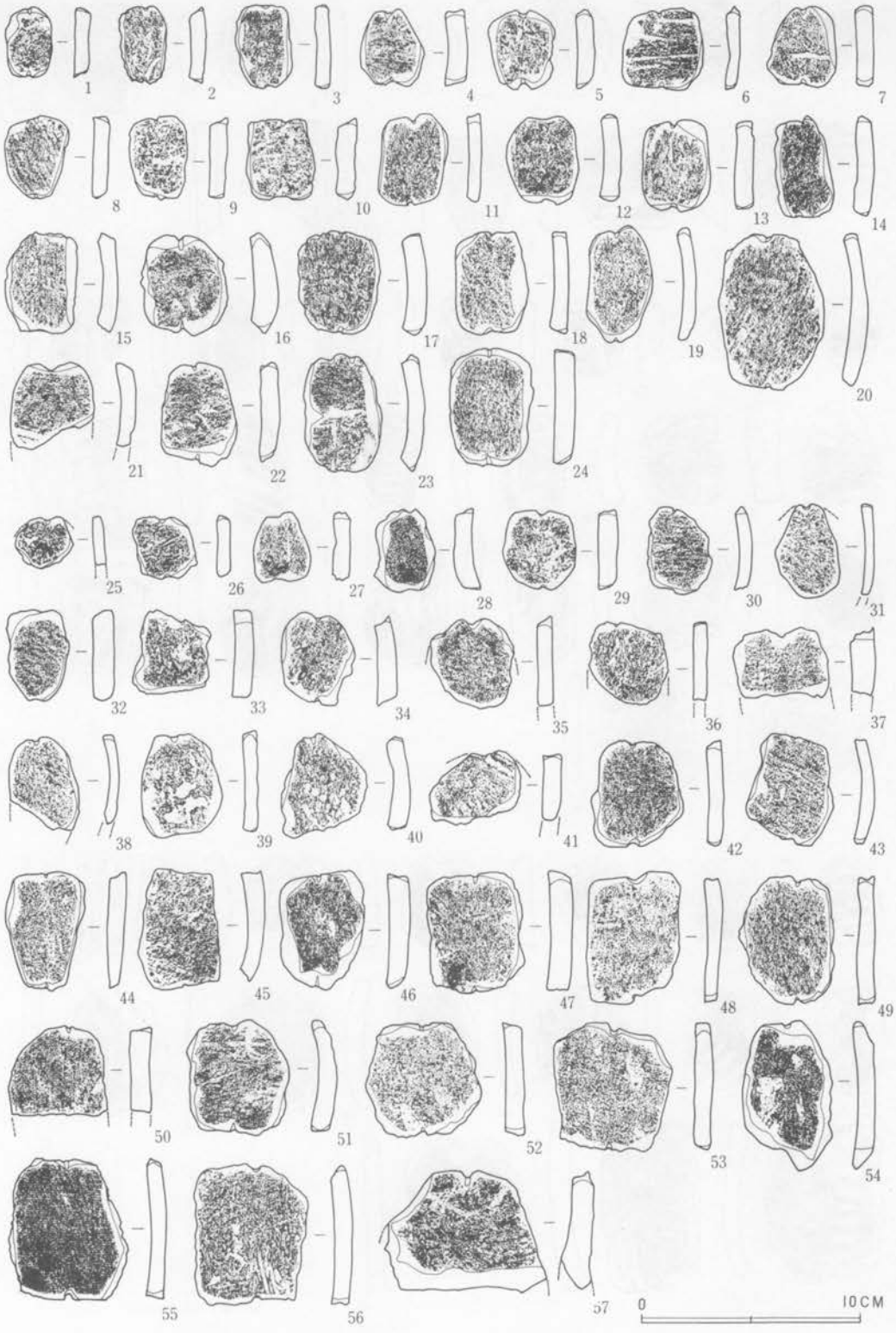
第320図　グリッド出土の土器



第321図　グリッド出土の土器

グリッド出土の土器

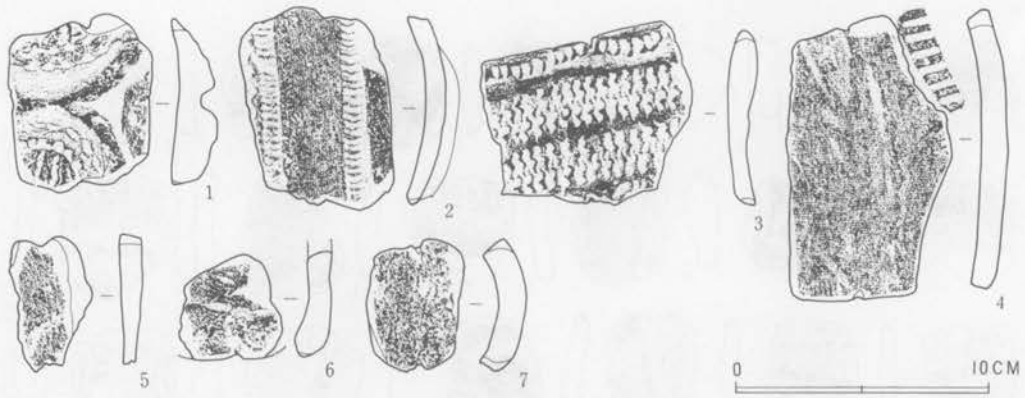
挿図番号	文様及び観察事項	図版番号
第318図1	口縁をやや内傾させ，幅の狭い口縁部文様帯を作る浅鉢形土器口縁部破片。文様帯下端部には突出した波状の隆帯を施し，隆帯上には細い竹管による押引文を施している。区画内にはペン先状工具による押引文を施している。遺存度⅙	
2	深鉢胴部破片。断面三角形を呈する隆帯によって横帯区画を行ない，区画内はさらに楕円に区画されている。文様は隆帯に沿って半截竹管による波状の平行沈線を施し，区画中央部にはヘラ状工具による縦の刻みを施している。遺存度¼	119-1
3	円筒形を呈する小型の深鉢形土器。文様帯は断面三角形を呈する太めの隆帯によって3段に横帯区画されており，区画内には細い竹管による押引文を満たしている。隆帯上には4単位で瘤状の突起を貼り付け，中央に刺突や刻みを施している。3段目の区画内には連弧状に隆帯を貼り付けている。遺存度⅓	119-5
4	口縁部を緩やかに外反する深鉢形土器。口辺はさらに外反し，口唇上には結節沈線を施している。口縁部文様帯は断面三角形を呈する隆帯によって横帯区画され，さらに楕円形の区画を行っている。区画内には2列の結節沈線を施している。胴部には浅い縦の刻みを数段にわたって廻らせている。遺存度¼	119-2
5	深鉢胴部破片。文様帯は断面三角形状の隆帯による横帯楕円区画と縦方向の区画に分かれている。文様は隆帯に沿って幅広の半截竹管による2列の押引文を施し，区画内には同工具を用いた平行沈線を波状に施している。遺存度⅓	119-3
6	頸部より緩やかに広がる口縁部破片。口唇部には細い半截竹管による縦の刻みが施されている。文様帯としての区画はないが，口辺にV字状の太い隆帯を貼り付け幅広の角押文を付随させている。遺存度¼	119-4
第319図1	円筒形を呈する小型の深鉢形土器。口縁部には幅3cm程の無文帯を有し，基本的にはその下2段にわたって横帯楕円区画を行なっている。区画内には幅広の半截竹管による押引文を楕円状に廻らせ，その中央部には細い半截竹管による角度をつけた押引文を波状に施している。地文には原体RLの縄文をもつ。遺存度½弱	119-6
2	円筒形を呈する小型の深鉢形土器。口縁部に隆帯と半截竹管による平行沈線によって横帯区画を行ない，以下は縦位の区画を行なっている。隆帯上や区画内には半截竹管による刺突を行なっている。遺存度⅓	120-2
3	小型の深鉢形土器。口唇部を肥厚させ口辺に無文帯を作り出している。文様は半截竹管による縦位の平行沈線と刺突文によって構成されている。遺存度¼	120-3
4	器厚のある深鉢胴部破片。頸部には地文に原体RLの縄文を施し，ペン先状を呈する2列の押引文を波状に施している。頸部下には楕円横帯区画を4単位で廻らせており，それ以下は縦位の区画を行なっている。文様はペン先状を呈する大小の工具と先の平坦なものによる押引文によって構成されている。遺存度⅓	120-4
5	深鉢口縁部破片。口唇部を肥厚し，口縁には厚みのある橋状把手を有する。文様は隆帯によって縦位に区画されており，区画内には半截竹管による隆起した平行沈線や刺突文，連続爪形文などを施している。地文として原体LRの縄文をもつ，遺存度¼	120-5
7	口縁より緩やかにすぼまる器形不明の深鉢形土器。地文に原体RLの縄文を施す。文様は口辺に半截竹管による平行沈線を1列廻らせ，胴部には2列の平行沈線により三角形状のモチーフを描いている。また平行沈線には刻みを付随させたり，ペン先状の押引文を施したりしている。遺存度½	121-1
8	円筒形を呈する小型の深鉢形土器。口唇部をやや肥厚させ，口辺に無文帯を有する。地文には原体RLの縄文を施す。遺存度⅓	121-2
9	小型の椀形を呈する深鉢形土器。口唇部は断面三角形状を呈する。地文には原体RLの縄文を施す。遺存度½	121-3
第320図1	口縁を朝顔状に広げる深鉢形土器。口唇部には3本の指頭による圧痕を5単位で廻らせている。文様帯は3段にわたる横帯区画をなし，上段は半円状の隆帯によって4分割されている。隆帯頂部にはへびの頭のような貼り付けがなされている。中段は三角形状のモチーフを8単位で廻らせ，その頂部には円状の貼り付けを行なっている。下段は3つの楕円区画を行なっている。区画内は大小のペン先状の工具を用いて押引文を施している。遺存度¾	120-1
第321図1	5単位の波状を有する深鉢形土器。文様帯は大きく分けて口縁部・頸部～胴中央部・胴下半部の3つに横帯区画しており，口縁部，胴下半部には原体LRの縄文を施している。頸部から胴中央部までは地文なく，レンズ状に区画された中だけ同縄文が施されている。遺存度½	121-4
2	頸部で若干括れる粗製深鉢形土器。口唇直下には粘土紐を貼り付け指頭で押し付けた紐線文を施している。胴部には荒い縄文の上に櫛歯状工具による斜めの沈線を施している。遺存度¾	121-6



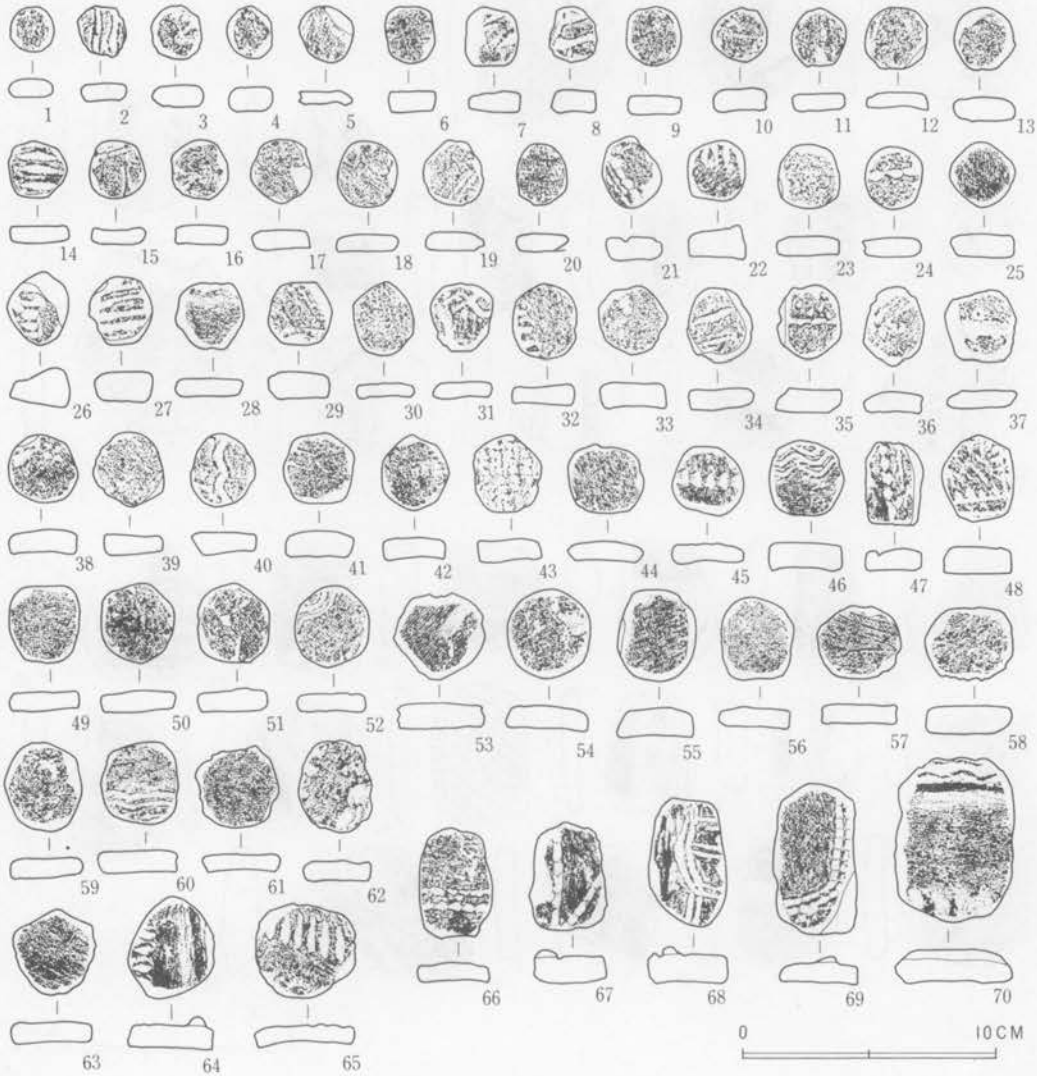
第322図　土器片錘A類

第323図　土器片錘B・C類

第324図　土器片錘D・E類



第325図　土器片錘E類



第326図　土製円板

土器片錘

挿図	グリッドNo	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類
第322図1	G19-02	3.3	2.2	0.6	7.5	A類
2	G19-02	3.6	2.2	0.7	7.0	〃
3	G19-06	3.9	2.5	0.7	10.5	〃
4	G12-13	3.6	3.0	1.0	14.0	〃
5	G34	3.7	3.1	0.8	13.5	〃
6	G18-07	3.9	3.7	0.5	12.0	〃
7	G20	3.8	3.2	0.8	13.5	〃
8	G12-12	3.8	2.8	0.7	12.0	〃
9	G12	4.0	2.6	0.8	11.0	〃
10	G17-05	3.7	3.1	0.9	16.5	〃
11	G18-06	4.2	3.1	0.6	14.5	〃
12	G12-16	3.9	3.3	0.8	18.0	〃
13	G10	4.2	3.1	0.9	18.5	〃
14	G21	4.7	2.6	0.8	15.0	〃
15	G21-11	4.5	3.3	0.8	20.0	〃
16	G10-14	4.6	4.0	1.1	28.0	〃
17	G10-14	4.6	3.8	1.0	20.0	〃
18	217-007 G3-02	4.7	3.3	0.8	18.5	〃
19	G21-T03	5.3	3.9	0.6	14.0	〃
20	G19-07	7.0	4.8	0.9	39.0	〃
21	G21-12	(3.9)	3.9	0.7	13.2	〃
22	G7-T02	4.8	3.4	0.8	17.0	〃
23	G13-09	5.3	3.6	0.9	24.0	〃
24	G19-01	5.3	3.7	1.0	28.0	〃
25	G12-14	(2.4)	(2.6)	0.5	4.3	〃
26	G12-14	2.8	2.7	0.6	7.0	〃
27	G8-11	3.2	2.6	0.8	10.5	〃
28	G4	3.7	2.6	1.0	14.0	〃
29	217-007 G9-13	3.6	3.3	0.9	15.5	〃
30	217-008	4.2	2.9	0.6	11.0	〃
31	G5-T04	(4.3)	(2.9)	0.5	8.0	〃
32	G12-15	4.1	2.9	1.0	14.5	〃
33	G6	3.8	3.4	0.9	15.0	〃
34	G12-11	4.3	3.5	0.9	16.0	〃
35	G19-T04	(4.0)	3.8	0.7	14.3	A類
36	G23-10	(3.7)	3.6	0.6	14.0	〃
37	G13	(3.2)	4.3	1.1	21.0	〃
38	G19	(4.3)	3.2	0.4	11.0	〃
39	G12-11	4.6	3.7	0.6	10.0	〃
40	G21	4.8	4.0	0.9	17.0	〃
41	G26	(3.1)	(4.2)	0.8	15.0	〃
42	G19-T04	4.9	4.2	0.7	20.0	〃
43	G12-15	5.2	4.0	0.6	20.0	〃
44	G20-T04	5.3	3.6	0.8	21.0	〃
45	G19-02	5.4	3.7	0.9	22.8	〃
46	G6	5.3	4.9	1.0	32.0	〃
47	G9-14	5.4	4.4	1.0	34.5	〃
48	G39	6.0	4.2	0.8	28.5	〃
49	G18-06	5.7	4.3	0.8	31.0	〃
50	G6	(4.1)	4.5	1.0	28.0	〃
51	G13-02	5.3	4.8	0.9	31.0	〃
52	G18-06	5.3	5.3	0.9	36.0	〃
53	G11-08	5.8	5.4	0.8	37.0	〃
54	217-008	6.9	4.1	0.9	21.0	〃
55	G6-01	6.5	5.5	0.8	39.8	〃
56	G18-1	6.5	6.2	0.8	40.3	〃
57	G11-12	(5.4)	(7.2)	1.3	65.0	〃
第323図1	G12	(3.4)	(3.1)	0.9	12.0	B類
2	217-008	4.1	3.1	0.8	14.0	〃
3	G13-06	5.0	4.4	0.8	23.0	〃
4	G19	4.2	4.2	1.6	30.0	〃
5	G13	3.8	3.7	0.8	16.5	〃
6	G20	5.4	4.7	1.0	38.0	〃
7	G17-08	(4.8)	6.0	1.2	39.0	〃
8	G8-11	4.5	4.6	0.8	25.0	〃
9	G9-10	4.7	3.4	0.9	19.0	〃
10	217-007	(5.4)	5.1	1.1	39.0	〃
11	G12-16	3.0	2.5	0.8	8.5	C類

挿図	グリッドNo	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類
12	G12-06	(2.9)	(3.6)	1.2	14.5	C類
13	G20	3.6	3.0	0.6	11.0	〃
14	G20-11	4.1	2.7	0.8	12.2	〃
15	G26	4.0	3.0	0.5	12.5	〃
16	G11-08	4.4	3.3	0.8	16.5	〃
17	G21	(4.2)	3.6	0.7	14.0	〃
18	G12-12	4.7	3.6	1.5	29.0	〃
19	G18-06	4.1	3.7	1.0	21.0	〃
20	G12-10	4.5	3.4	0.7	17.0	〃
21	G18-06	4.8	3.1	0.6	15.0	〃
22	217-008	5.2	2.9	1.1	22.5	〃
23	G11-07	6.0	4.1	1.0	40.0	〃
24	G12-12	5.0	3.7	1.5	37.5	〃
25	217；007 G9	4.5	4.4	0.6	20.0	〃
26	217-007 G37	6.0	3.1	0.8	20.0	〃
27	G12-15	5.5	3.8	0.6	19.0	〃
28	G24	5.5	4.0	0.9	26.5	〃
29	217-008	5.2	4.3	0.8	30.6	〃
30	G12-15	(4.8)	5.8	0.8	37.5	〃
31	G20-T04	6.9	4.3	0.6	31.5	〃
32	G19-07	3.9	3.2	0.8	15.0	〃
33	G18-15	4.0	2.8	0.7	13.5	〃
34	G18	4.1	3.4	1.0	17.0	〃
35	G10-03	4.0	4.7	0.8	20.0	〃
36	G12-11	4.5	3.9	0.9	31.5	〃
37	217-007 G11-04	4.6	4.6	1.2	38.0	〃
38	G18-14	5.1	3.1	0.8	15.5	〃
39	G21-T03	(4.9)	(3.1)	0.7	18.0	〃
40	G8-11	5.4	4.3	0.9	28.0	〃
41	217-007	6.0	4.3	0.9	32.0	〃
42	217-007 G4-01	5.8	4.3	0.8	28.5	〃
43	G28	6.0	4.8	0.8	36.5	〃
44	G23-02	7.2	5.5	1.0	54.5	〃
45	217-007	7.9	4.5	1.0	55.6	〃

挿図	グリッドNo	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類
46	G18-06	(6.7)	(5.4)	0.7	37.0	C類
第324図1	217-007	(2.7)	2.8	0.7	8.0	D類
2	G11-8	(3.3)	3.0	1.2	14.6	〃
3	G21	(3.1)	3.9	0.7	11.5	〃
4	G14	3.8	2.8	0.8	12.0	〃
5	G10-06	4.2	2.9	1.1	17.0	〃
6	217-007 G8-11	4.1	3.0	0.7	14.0	〃
7	G6-T03	4.5	3.5	1.0	22.0	〃
8	217-008	(2.5)	3.9	1.3	13.0	〃
9	G12-14	3.8	3.8	1.3	19.5	〃
10	G14-T04	4.8	3.7	0.8	21.0	〃
11	G18-11	4.2	4.5	0.8	19.0	〃
12	G19-06	5.0	4.0	0.7	23.0	〃
13	G12-16	(5.0)	4.7	1.0	22.0	〃
14	G18-15	3.8	3.6	0.7	14.5	〃
15	G18-06	4.5	3.6	0.9	18.5	〃
16	G12	4.9	3.4	0.7	19.0	〃
17	G12-13	(4.4)	4.2	0.9	27.0	〃
18	G12-15	4.8	4.5	1.0	26.0	〃
19	G25	5.1	4.0	1.2	29.0	〃
20	G10-02	5.1	5.1	1.5	40.0	〃
21	217-008	6.0	4.4	1.3	38.0	〃
22	G23-09	6.4	5.4	0.7	45.5	〃
23	217-007 G5-01	3.1	3.2	1.0	10.0	〃
24	G18-08	4.5	4.8	1.7	36.5	〃
25	G17-12	(3.0)	(2.6)	0.8	7.0	〃
26	G12-16	3.8	3.6	1.2	20.5	〃
27	G17-08	4.1	3.5	1.1	17.0	〃
28	G18-08	5.0	2.8	1.2	19.5	〃
29	G12-09	3.6	2.9	1.0	14.5	〃
30	G12-16	(4.6)	5.3	1.3	27.5	〃
31	G11-10	4.1	3.6	1.2	20.0	〃
32	G12-11	4.4	4.4	1.5	33.5	〃
33	G3-T01	4.7	4.8	1.0	33.0	〃

挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類
34	G20	8.0	6.2	1.0	53.2	D類
35	217-008	4.7	3.5	1.1	24.0	E類
36	G18-02	4.5	2.5	0.9	14.5	〃
37	G12	4.5	4.0	1.5	25.0	〃
38	G18-01	4.3	3.8	1.4	26.0	〃
39	G11-13	5.2	3.6	0.9	24.5	〃
40	G13-04	5.3	4.7	1.6	32.2	〃
41	G12-15	3.4	3.6	0.9	12.5	〃
42	G12-12	3.8	3.4	1.1	14.5	〃
43	G12-06	5.0	3.5	1.2	20.0	〃
44	G20-11	5.4	3.7	0.7	21.0	〃
45	G12-16	4.2	4.7	1.4	37.5	〃
46	G26	6.2	3.8	1.0	32.2	〃
47	G19	5.1	4.6	0.8	30.0	〃
48	G9-11	5.1	3.8	1.0	30.0	〃
49	217-007 G9-13	(4.4)	4.5	0.9	23.0	〃
50	G8-15	4.8	7.6	1.4	60.0	〃
第325図1	G20-11	6.7	5.6	1.7	60.0	〃
2	G12-15	8.0	5.5	1.4	69.0	〃
3	G26-T01	8.2	7.2	1.1	69.5	〃
4	G12-16	11.3	6.5	1.0	116.0	〃
5	G17-04	5.3	3.0	0.9	14.5	〃
6	G9	(4.0)	3.0	1.3	23.5	〃
7	G17-04	5.2	3.6	1.1	27.5	〃

土製円板

挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第326図1	217-007 G30	1.7	1.7	7.0	2.5	
2	G20-T04	1.9	1.8	0.6	4.0	
3	G18-10	2.0	2.0	0.8	5.0	
4	G19-06	2.0	1.7	0.9	5.0	
5	G13-14	2.2	2.1	0.5	4.5	
6	G05	2.2	1.9	0.8	5.5	
7	G19-04	2.3	2.1	0.8	5.0	
8	G26	2.1	1.8	0.8	5.0	
9	G26	2.2	2.1	0.7	6.0	
10	G19-04	2.1	2.1	0.8	4.5	
11	G17-03	2.3	2.1	0.7	4.0	
12	217-008	2.4	2.5	0.6	6.0	
13	G12-15	2.4	2.4	0.9	6.5	
14	G17-04	2.1	2.3	0.6	3.5	
15	G12-10	2.2	2.1	0.6	4.5	
16	G26	2.2	2.0	0.7	6.0	
17	G26	2.3	2.4	0.7	6.0	
18	G18-11	2.5	2.4	0.6	6.0	
19	G35-T02	2.5	2.4	0.7	6.0	
20	G08-15	2.4	2.1	0.7	5.0	
21	G02-14	2.7	2.2	0.9	7.0	
22	G08-12	2.3	2.3	1.7	8.5	
23	G13-04	2.5	2.5	0.7	5.5	
24	G10-06	2.4	2.3	0.7	5.0	
25	G09-13	2.5	2.6	0.9	7.0	
26	G25	2.9	2.3	1.5	10.0	
27	G04	2.7	2.3	1.1	9.5	
28	G18-05	2.6	2.7	0.7	7.5	
29	G17-04	2.5	2.4	1.0	8.0	
30	G09-04	2.9	2.3	0.4	5.8	
31	G23-09	2.7	2.3	0.6	5.5	
32	G18-12	2.9	2.5	0.8	8.0	
33	G12-16	2.7	2.6	0.9	9.0	
34	G18-11	2.9	2.6	0.8	8.0	
35	G26-T03	2.9	2.6	0.9	8.0	
36	G26	3.1	2.3	0.8	7.5	
37	G17-03	2.7	2.7	0.7	6.2	
38	G06-11	2.7	2.6	0.9	7.5	
39	G19-T04	2.9	2.3	0.8	8.2	
40	G12-07	2.8	2.5	0.8	7.5	

石器表

挿図	グリッドNo	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第326図41	217-007	2.3	2.7	1.0	10.0	
42	G12-14	3.0	2.5	0.8	9.5	
43	G18	3.0	2.5	0.8	8.5	
44	217-007	2.6	3.1	0.7	7.5	
45	217-007 G11-04	2.7	2.9	0.7	7.0	
46	G22-16	2.9	2.8	1.0	13.0	
47	G19-02	3.2	2.3	0.8	9.0	
48	G20-06	3.4	2.7	1.0	13.5	
49	G21	3.0	2.7	0.7	10.5	
50	G12-16	3.1	2.9	0.8	9.0	
51	G29	3.1	2.6	0.9	9.0	
52	G12-14	3.2	2.7	0.7	9.0	
53	G11-16	3.5	3.3	1.0	14.5	
54	G23-05	3.5	3.3	1.0	13.0	
55	G12-15	3.5	3.1	1.0	16.5	
56	G12-14	3.2	2.8	0.7	10.5	
57	217-007 G03-02	2.8	3.4	0.7	10.0	
58	217-007	2.8	3.5	1.6	13.0	
59	G22-02	3.4	2.8	0.8	12.0	
60	G17-05	3.2	3.0	0.8	12.0	
61	G18-02	3.0	3.0	0.6	10.5	
62	G17-03	3.6	2.8	0.8	11.5	
63	G22-16	3.2	3.2	0.8	11.0	
64	217-008	3.9	3.4	1.2	14.5	
65	217-007 G7-13	3.6	3.9	0.7	14.5	
66	G19-02	4.3	2.8	0.6	14.0	
67	G25	4.3	3.1	1.2	19.5	
68	G17-08	5.0	3.1	1.3	24.0	
69	G18-16	5.9	3.2	1.0	25.2	
70	G14-13	6.5	4.6	1.3	42.5	

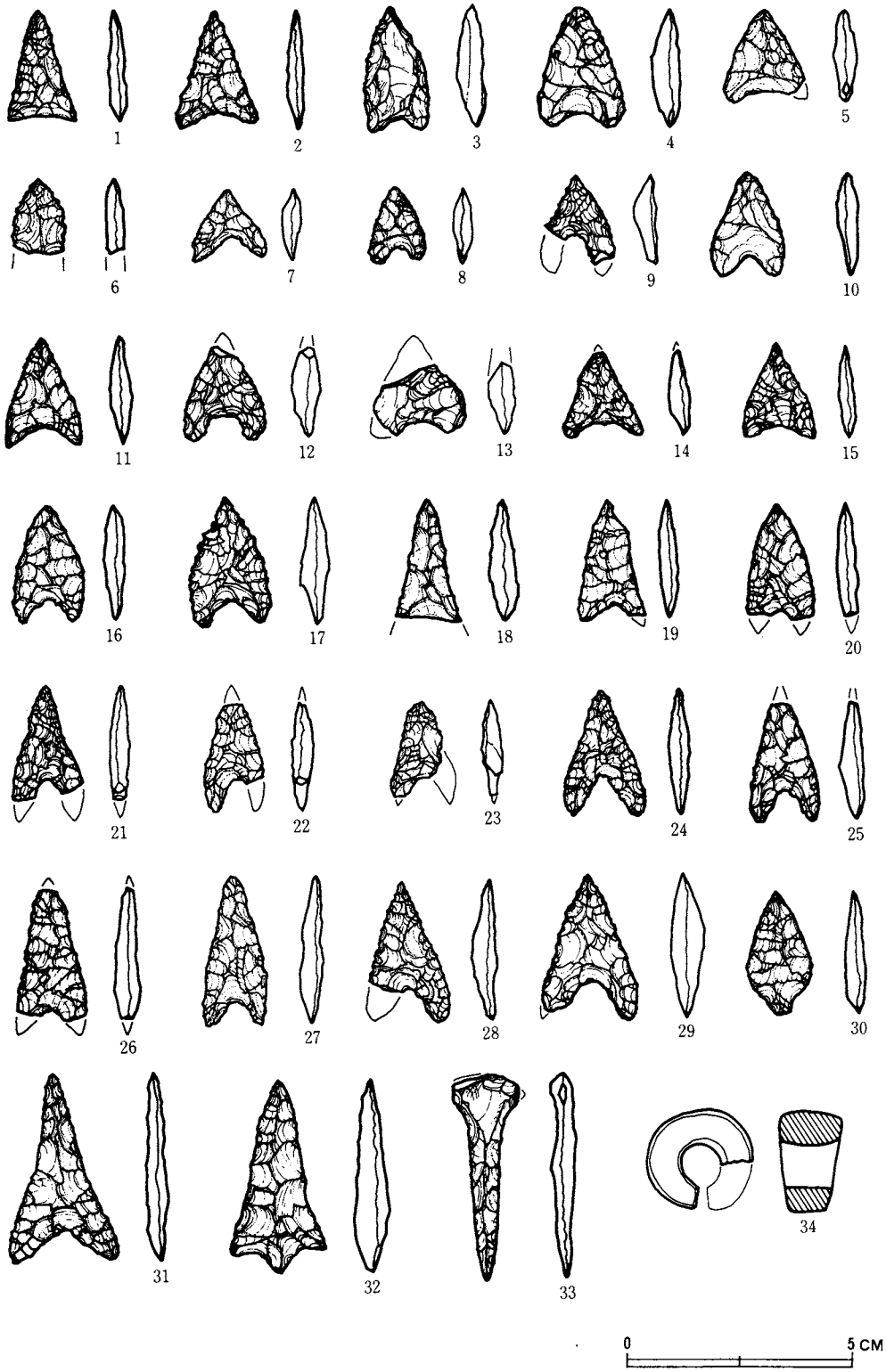
挿図	グリッドNo	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
第328図1	217-008	5.0	3.0	0.5	8.2	粘板岩
2	G12-11	5.7	3.1	1.1	18.5	細粒砂岩
3	217-007 000	7.4	3.5	1.0	37.0	流紋岩
4	217-011 B03-09	6.9	6.8	1.1	84.0	黒色片岩
5	217-007 G31	13.8	6.6	1.5	125.0	頁岩
6	217-007 G09	7.6	5.4	2.1	104.5	砂岩
7	G20-11	(6.3)	6.9	2.0	107.0	砂岩
8	G05	(7.7)	6.6	2.0	121.5	玄武岩
9	G35 -T02	9.6	4.7	2.2	89.0	砂岩
10	G22-16	8.7	5.0	2.5	110.5	砂岩
11	217-008	(4.8)	5.2	1.4	49.0	砂岩
第329図1	G12-12	8.9	4.4	2.4	127.0	細粒砂岩
2	G18-01	(7.1)	4.6	1.8	86.5	砂岩
3	G13-10	10.9	5.2	1.4	93.0	珪質細粒砂岩
4	G24	11.7	5.5	1.7	134.5	凝灰質砂岩
5	G26	11.9	6.2	2.3	179.0	玄武岩
6	G12-16	8.4	5.9	1.8	145.0	細粒砂岩
7	G35 -T02	11.3	5.2	1.7	110.0	粘板岩
8	G26 -T03	(10.8)	6.5	2.5	189.0	粘板岩
第330図1	G23	8.7	5.4	2.1	98.0	粘板岩
2	G20	(8.6)	5.2	2.4	128.0	硬砂岩
3	G18-08	10.9	4.3	2.7	121.0	砂岩
4	G22-16 G23-05	12.8	5.3	2.7	222.5	細粒砂岩
5	G05-03	14.4	4.9	2.4	167.0	硬砂岩
6	G22	14.1	5.8	2.4	284.5	粘板岩
7	217-008	8.5	5.5	1.7	93.8	頁岩
8	G12-15	4.4	4.2	3.3	96.0	砂岩
9	G22-03	6.5	3.9	0.9	35.0	蛇紋岩
第331図1	G31	10.0	(8.1)	5.2	481.0	砂岩
2	G18-03	(7.8)	5.1	3.0	186.0	蛇紋岩
3	217-007	6.6	5.8	2.8	164.5	玄武岩
4	G28	11.9	5.4	3.1	35.5	弱変成緑色砂岩
5	G11-16	(7.7)	4.4	2.6	147.0	弱変成緑色砂岩

挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
6	G17-03	6.7	5.5	3.6	190.0	安山岩
7	G20 -T04	8.7	6.5	3.8	345.5	石英斑岩
8	G35	8.0	6.7	3.6	283.0	安山岩
第332図1	G22-16 G23-13	8.4	6.8	4.8	422.0	角閃石安山岩
2	G26 -T03	8.9	5.3	3.9	311.0	角閃石安山岩
3	G13-14	7.6	7.5	4.3	359.0	角閃石安山岩
4	G26 T03	(8.2)	9.7	4.4	564.5	角閃石安山岩
5	G13 -T02	(16.1)	(12.3)	9.3	2200.0	弱変成砂岩
6	G20-05	6.4	7.3	2.4	133.5	中粒砂岩
7	217-007 000	9.1	(5.6)	4.9	349.5	玲岩
第333図1	G19-06	5.5	4.4	1.9	65.5	砂岩
2	G17-16	6.0	4.7	2.5	100.0	砂岩
3	G22-02	7.0	3.9	3.0	111.0	砂岩
4	G05-13	(7.4)	6.7	3.9	238.0	石英斑岩
5	G20	7.7	6.0	3.9	213.0	斑岩
6	000	6.1	5.0	3.1	150.5	硬砂岩
7	G13-05	8.3	5.2	3.0	185.0	珪質砂岩
8	G23-09	9.5	3.9	2.1	101.5	砂岩
9	217-007 G09	10.7	2.9	2.2	96.4	砂岩
10	G23-13	9.7	4.6	2.8	200.5	砂岩
11	G18-11	10.3	4.7	3.2	217.5	石英斑岩
12	217-008	14.6	6.6	4.4	643.0	閃緑岩
13	G25	11.0	4.3	2.0	138.0	砂岩
14	G18-13	8.8	4.9	2.8	168.0	砂岩
15	000	9.5	7.6	3.7	340.0	珪質砂岩
16	G05-11	5.1	4.9	0.9	32.0	細粒安山岩
第327図1	217-007 G14-04	2.5	1.5	0.4	0.9	黒曜石
2	217-007 G17-11	2.6	1.8	0.4	1.0	チャート
3	G20 -T05	2.7	1.5	0.6	2.1	黒曜石
4	G18-13	2.6	1.9	0.6	2.5	チャート
5	G23-04	2.0	(1.7)	0.5	1.3	玄武岩
6	217-007 G16-15	(1.7)	1.2	0.4	0.6	黒曜石
7	G24	1.6	1.6	0.4	0.5	チャート
8	G19-09	1.7	1.3	0.5	0.6	チャート

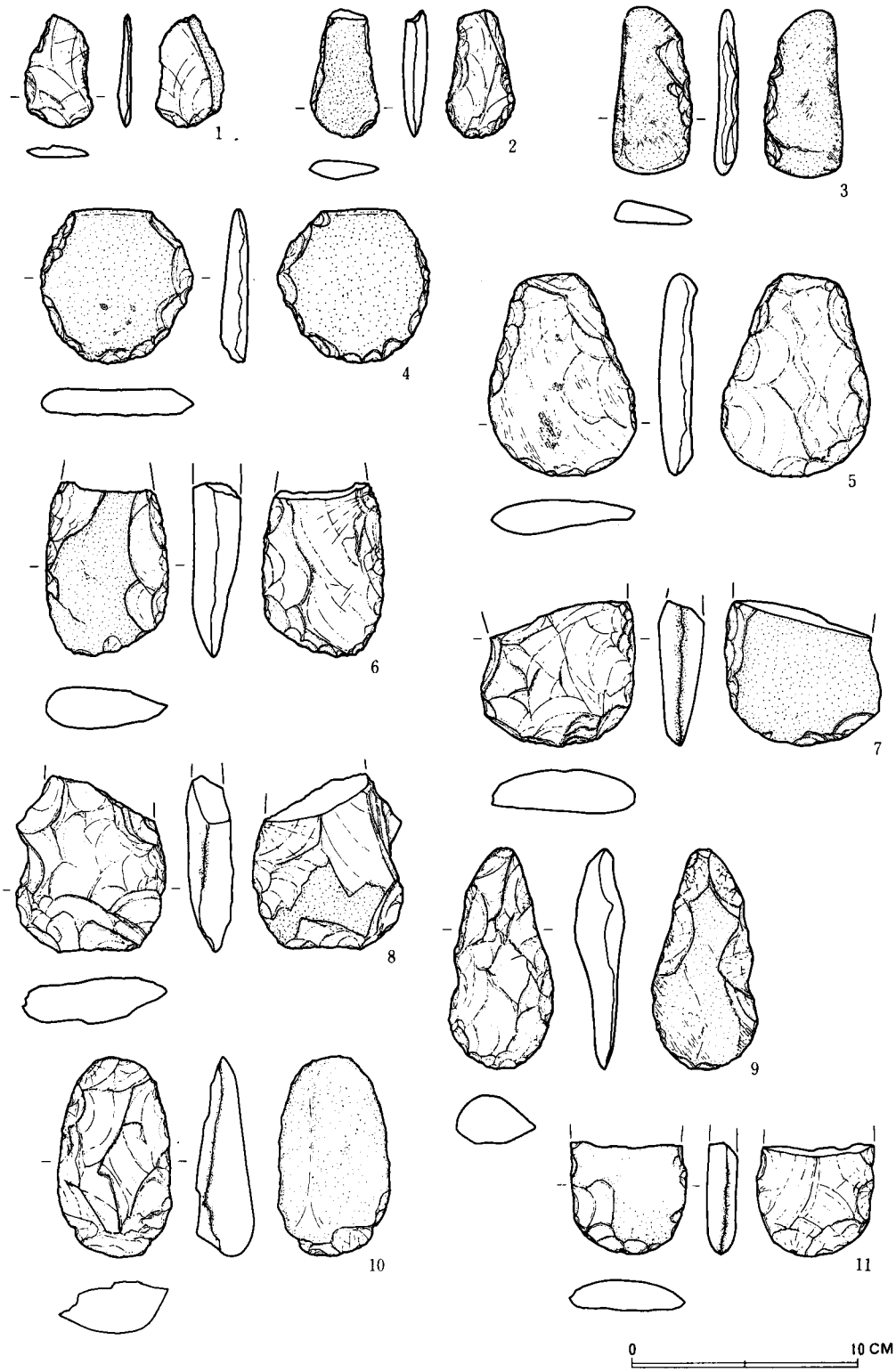
挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
9	G09	(2.0)	(1.4)	0.5	0.7	黒曜石
10	217-007 G19-11	2.3	1.6	0.5	1.4	珪質頁岩
11	217-011 B04-05	2.4	1.6	0.5	1.1	赤色チャート
12	G05	(2.0)	1.8	0.7	1.6	黒曜石
13	G12	(1.6)	2.0	0.6	1.2	黒曜石
14	217-007 G28-15	(1.8)	1.7	0.4	0.8	黒曜石
15	G12-11	2.0	1.5	0.4	0.8	黒曜石
16	G23	2.5	1.6	0.4	1.5	チャート
17	000	2.8	1.7	0.6	1.8	黒曜石
18	217-007 G28-15	(2.7)	(1.5)	0.6	1.3	チャート
19	G02- T02	2.6	1.5	0.4	1.2	チャート
20	G23-09	(2.5)	1.5	0.5	1.3	チャート
21	G17-03	(2.5)	1.6	0.4	0.9	黒曜石
22	G19-06	(2.4)	1.3	0.5	1.1	チャート
23	G03-10	(2.1)	(1.1)	0.5	0.7	黒曜石
24	217-007 G17-40	2.8	1.8	0.5	1.5	黒色頁岩
25	G12-11	(2.6)	1.5	0.6	1.5	チャート
26	G19-07	(2.9)	(1.5)	0.6	1.9	チャート
27	G40	3.3	1.4	0.5	1.8	チャート
28	G12-11	3.1	(1.7)	0.5	1.7	チャート
29	G13-19	3.2	2.1	0.7	2.6	黒曜石
30	217-007 G10-12	2.7	1.5	0.4	1.5	チャート
31	217-011	4.1	2.4	0.5	2.5	チャート
32	217-011 B04-09	4.2	2.2	0.7	3.8	チャート
33	217-007 G26-12	4.5	(1.5)	0.5	2.2	頁岩
34	217-007 G22-12	2.4	2.2	1.4	7.5	蛇紋岩

土器片錘・土製円板(遺構分)

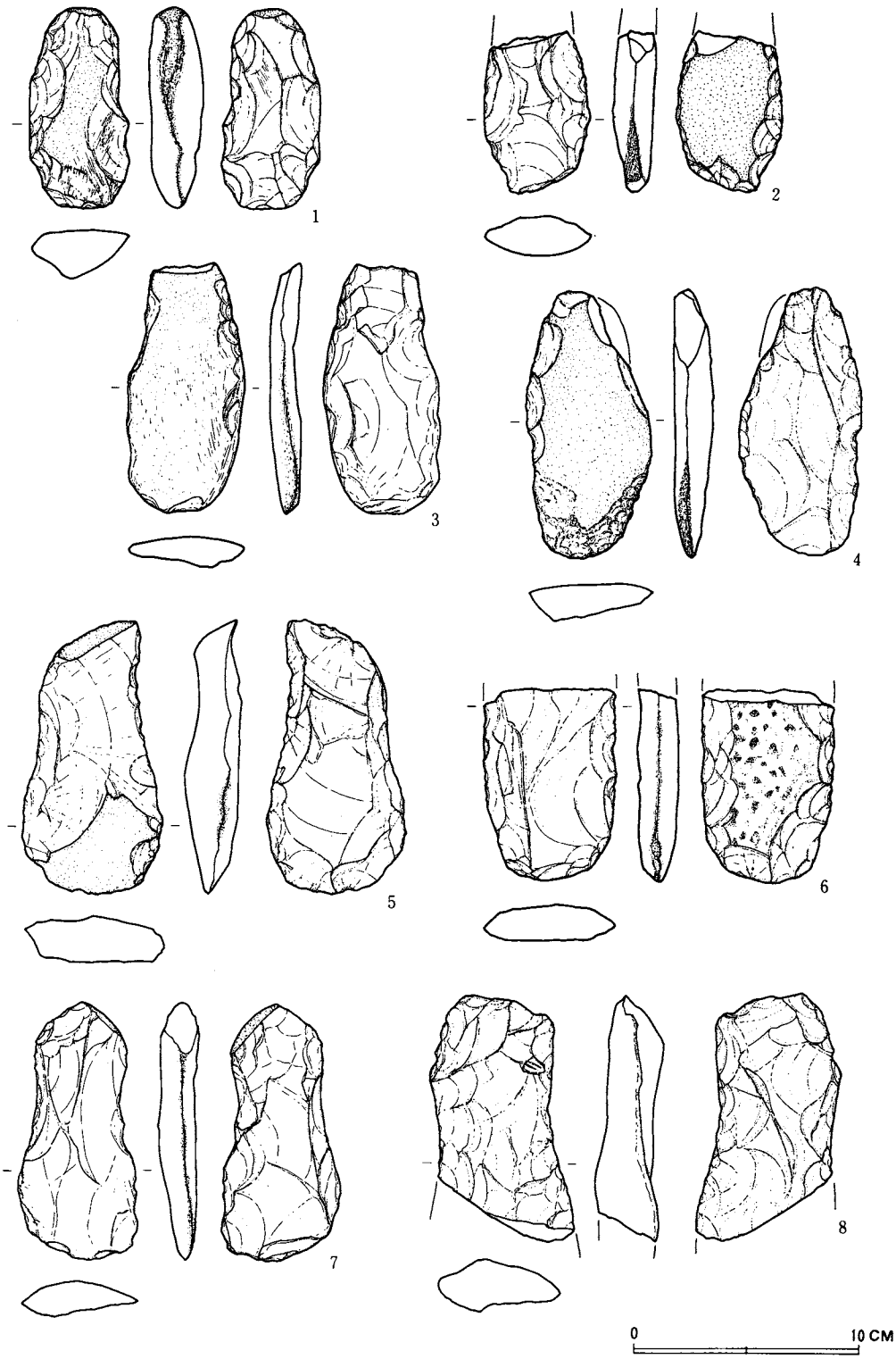
挿図	グリッドNo.	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類
第248図	002	5.4	4.1	1.1	25.0	土器片錘
2	〃	4.7	4.5	0.8	22.0	〃
3	〃	5.3	3.2	1.0	12.5	〃
4	〃	5.0	3.8	0.7	19.0	〃
5	〃	4.0	4.0	0.9	10.0	〃
6	〃	3.8	3.2	1.1	14.0	〃
7	〃	4.6	4.5	0.8	20.5	〃
8	〃	5.1	4.2	1.1	22.0	〃
9	〃	4.3	3.5	0.9	14.0	〃
10	〃	2.7	3.0	0.8	8.0	〃
11	〃	3.5	2.8	0.5	7.0	〃
12	〃	3.2	2.5	1.0	9.5	〃
13	〃	3.1	2.6	1.0	9.0	〃
14	〃	3.5	3.0	0.7	9.5	〃
15	〃	(2.8)	2.7	0.7	7.0	〃
16	〃	6.2	3.5	1.0	29.5	円板
17	〃	5.4	3.7	0.7	18.5	〃
18	〃	4.5	2.4	0.7	10.0	〃
19	〃	3.8	3.9	0.7	14.0	〃
20	〃	3.5	3.4	1.1	17.5	〃
21	〃	4.0	3.0	1.1	12.0	〃
22	〃	2.9	2.7	0.6	7.0	円板
23	〃	2.8	2.9	0.7	7.5	〃
24	〃	2.8	2.7	0.7	8.0	〃
25	〃	2.6	2.7	0.8	6.5	〃
26	〃	2.6	2.6	1.0	8.5	〃
27	〃	2.5	2.4	0.6	5.2	〃
28	〃	2.2	2.0	0.9	5.3	〃
29	〃	2.3	1.9	0.8	5.0	〃
30	〃	2.3	2.1	0.9	5.5	〃
31	〃	1.8	2.1	0.8	3.5	〃
32	〃	2.2	1.9	0.6	4.0	〃
33	〃	2.1	1.8	0.6	3.8	〃
34	002	2.0	1.6	0.8	3.5	円板
35	〃	2.0	1.8	0.5	2.5	〃
第251図25	015	4.6	4.2	0.9	22.7	土器片錘
26	〃	5.2	3.6	1.0	21.6	〃
27	〃	4.5	3.3	1.2	16.9	〃
28	〃	2.5	2.2	0.8	6.3	円板
第265図1	055	(3.9)	(2.6)	1.3	18.0	土器片錘
2	〃	4.6	3.0	0.8	22.5	〃
3	〃	4.8	3.4	0.9	18.5	〃
4	〃	4.9	3.3	0.7	18.0	土器片錘
5	〃	4.7	4.1	1.4	25.0	〃
6	〃	4.8	4.0	1.0	25.5	〃
7	〃	6.7	2.9	0.8	27.5	〃
8	〃	6.2	3.9	0.8	28.5	〃
9	〃	(5.4)	4.0	0.7	19.0	〃
10	〃	5.4	3.9	1.2	20.0	〃
11	〃	5.1	4.0	0.7	21.5	〃
12	〃	2.4	2.3	0.4	4.5	円板
13	〃	2.3	2.6	0.6	5.0	〃
14	〃	2.4	2.6	0.7	5.5	〃
15	〃	2.8	2.5	0.7	7.0	〃
16	〃	3.0	2.3	0.7	7.0	〃
17	〃	3.1	2.4	1.0	9.5	〃
18	〃	3.9	3.4	1.2	23.0	〃
19	〃	4.3	3.6	1.0	20.0	〃
第269図17	056	7.9	7.0	1.0	50.0	土器片錘
18	〃	4.6	3.6	0.7	20.0	〃
19	〃	4.8	3.9	1.2	25.0	〃
第272図12	057	4.2	4.3	2.0	34.5	〃
13	〃	3.6	2.5	0.7	8.0	〃
第273図9	061	7.2	4.5	1.2	64.5	土器片錘
10	〃	5.2	3.2	0.9	28.5	〃
11	〃	2.6	2.5	0.8	14.5	円板



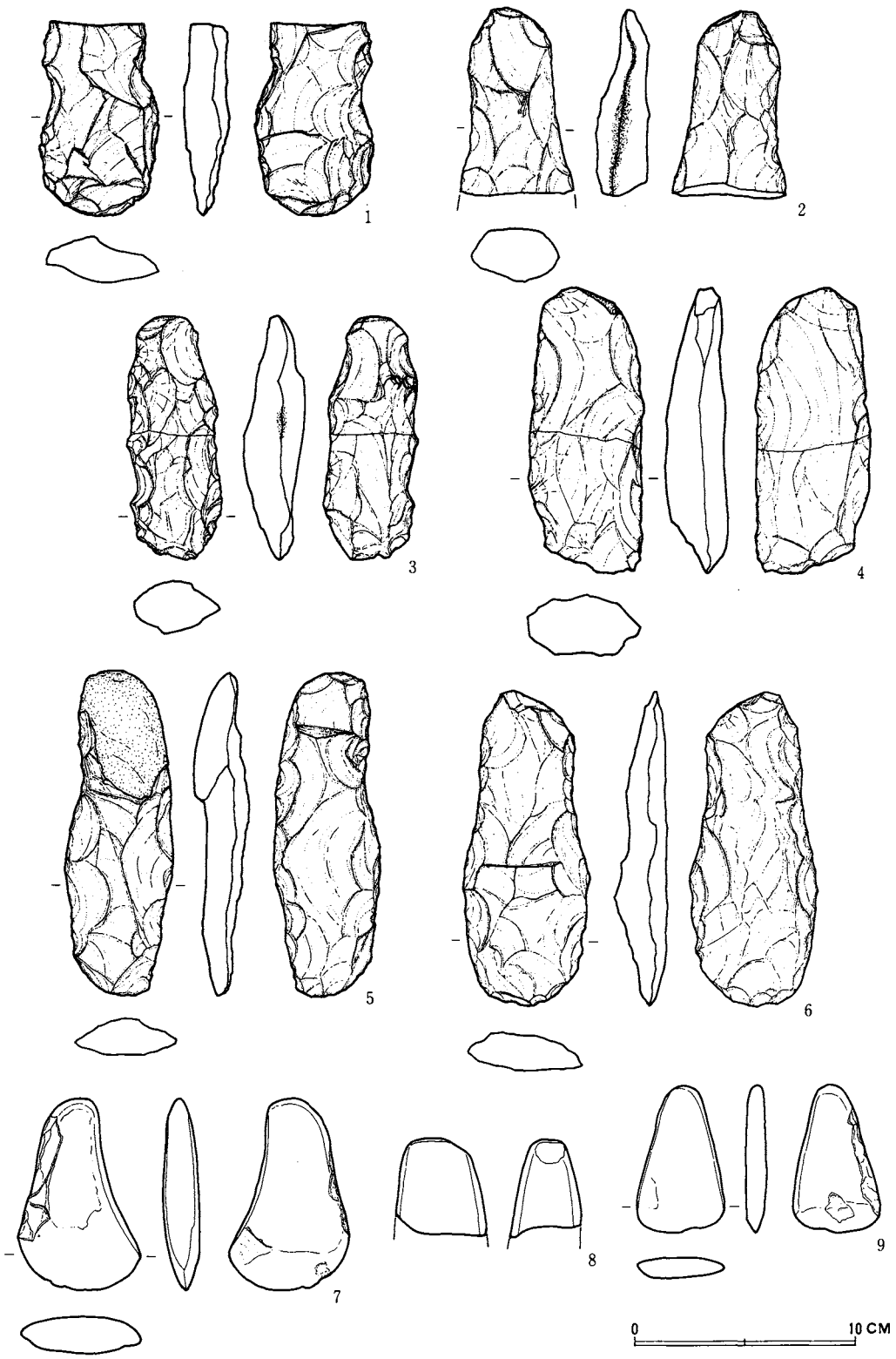
第327図　石鏃・石錐・玦状耳飾



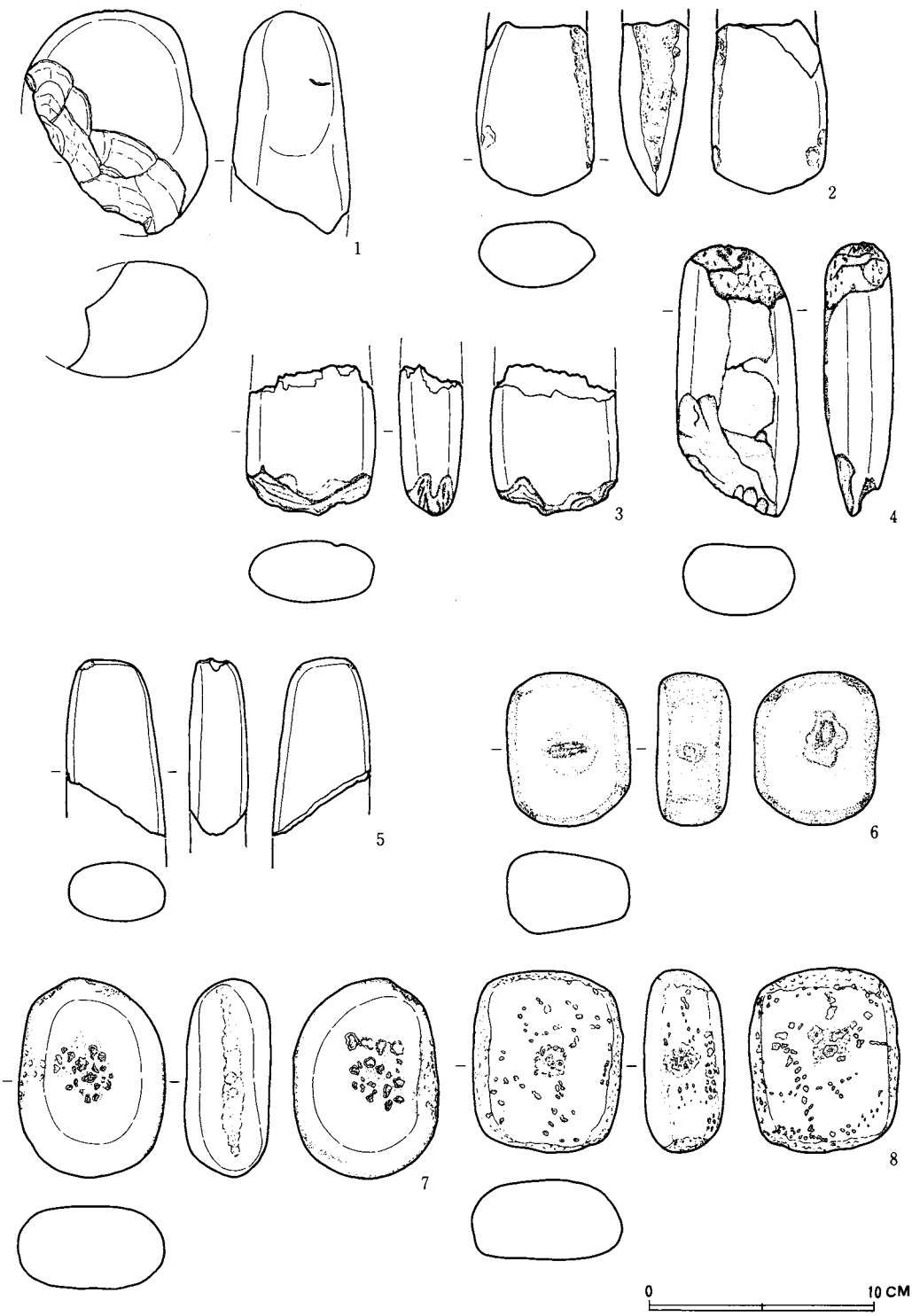
第328図　打製石斧



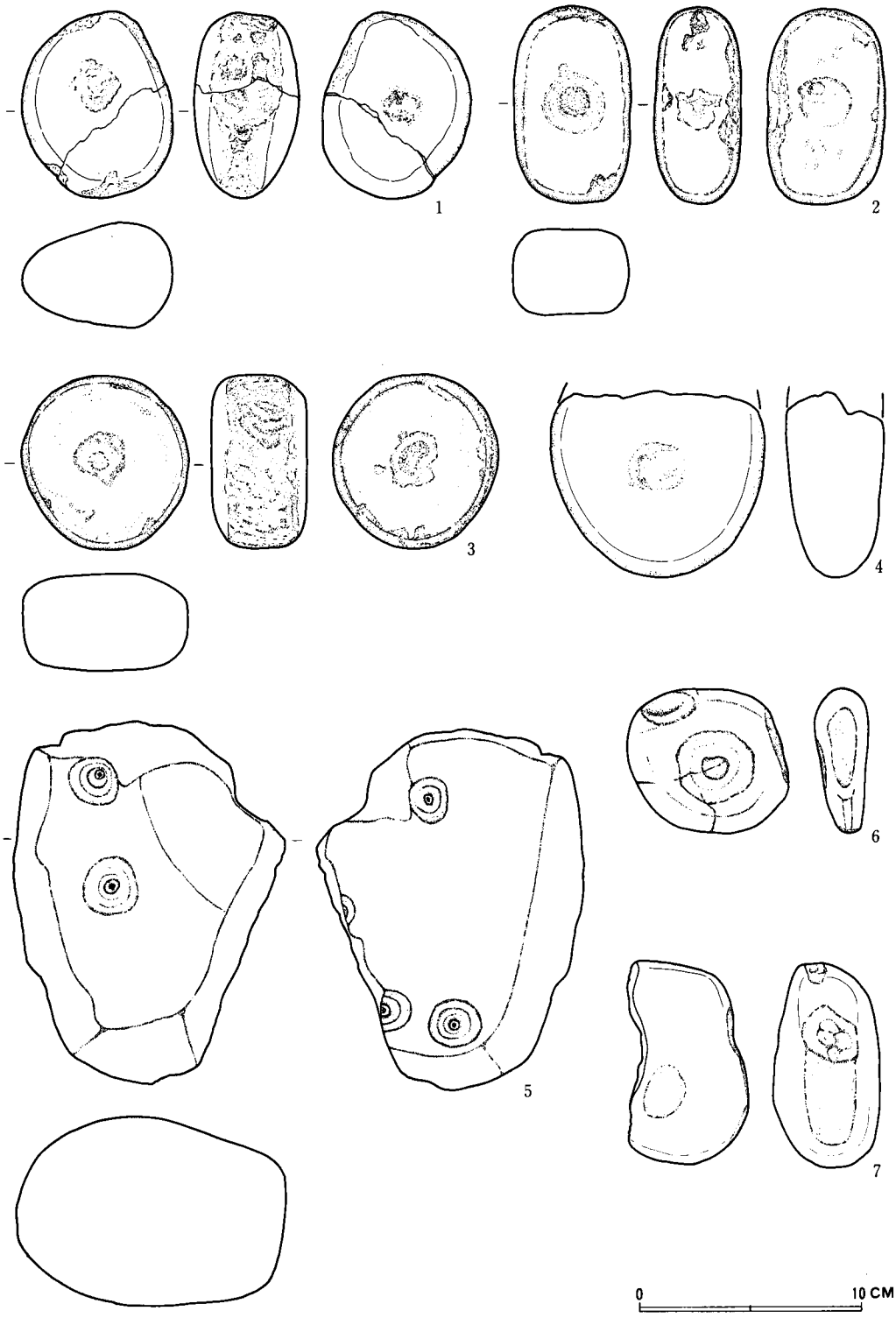
第329図　打製石斧



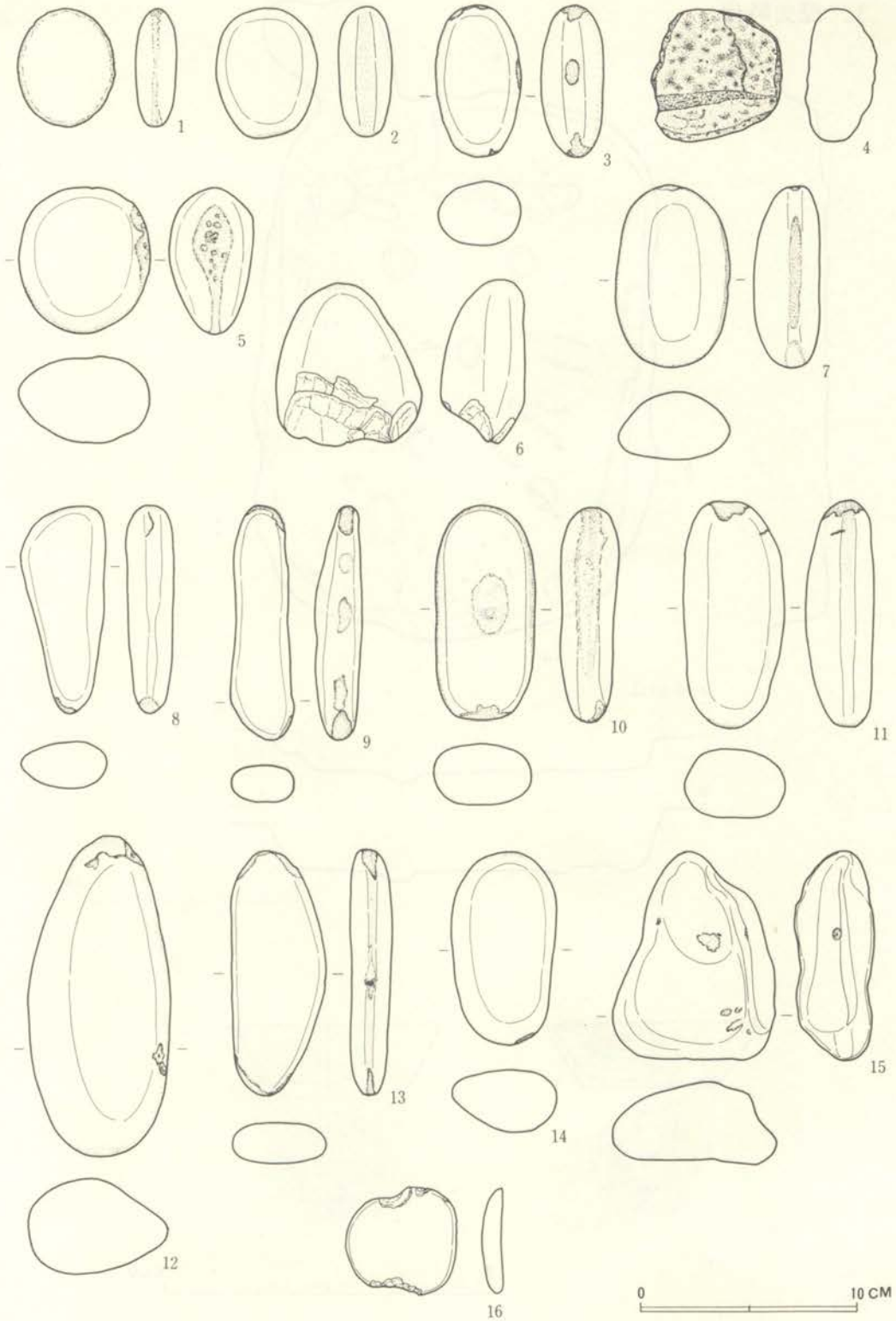
第330図　打製石斧・磨製石斧



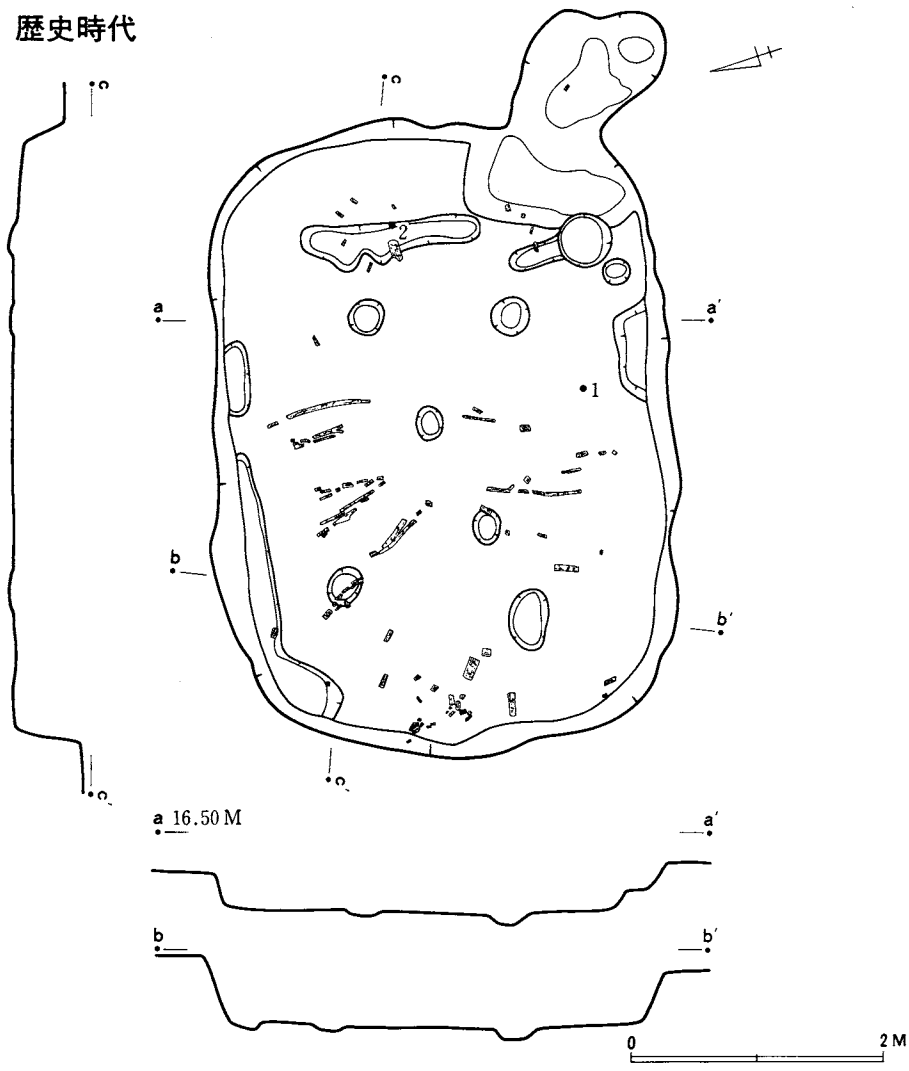
第331図　磨製石斧・凹石

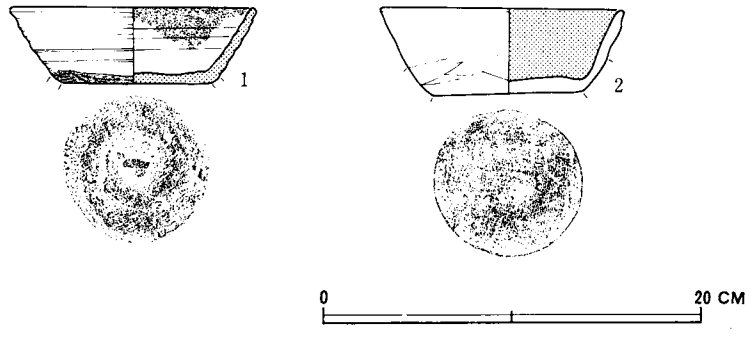


第332図　凹石・石皿

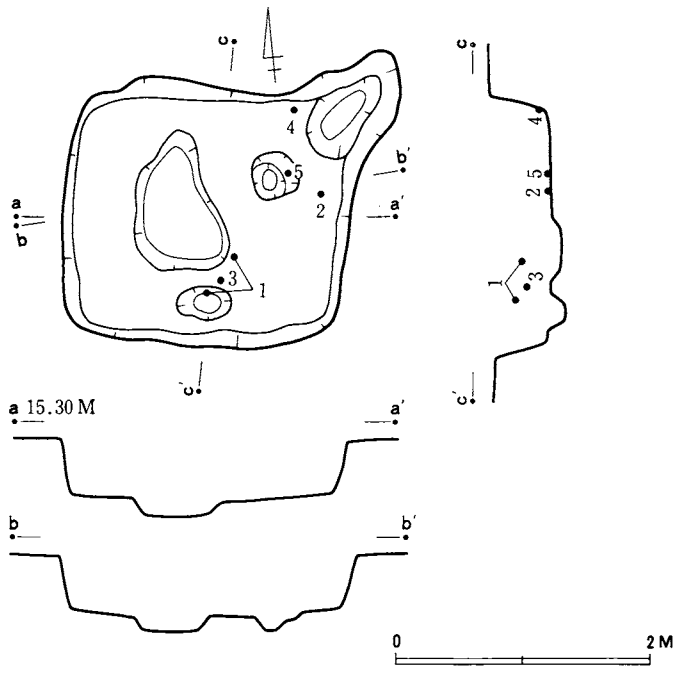


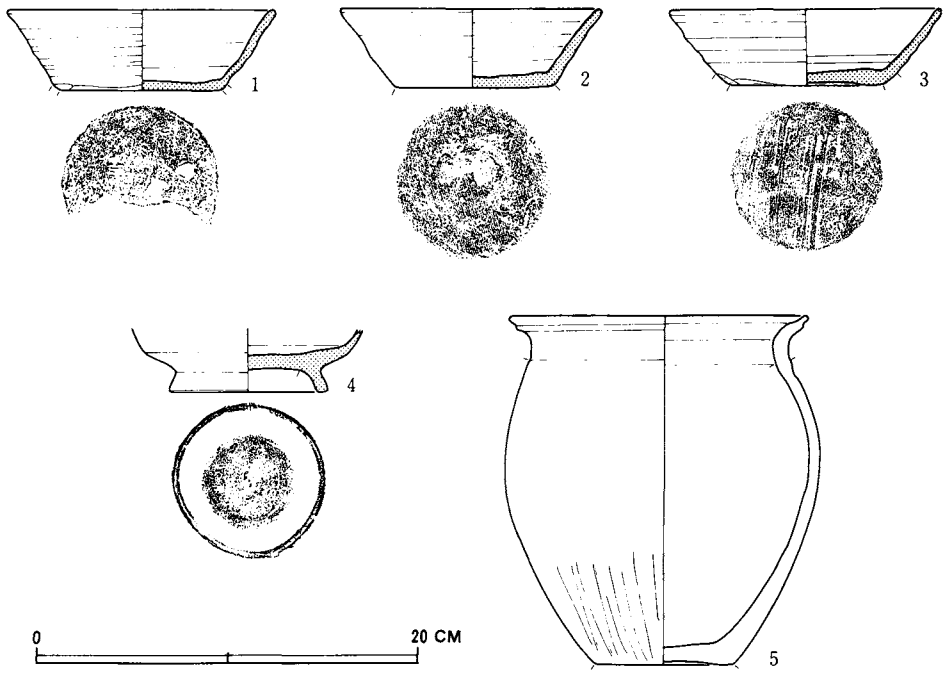
第333図　磨石・敲石・石錘





第334図　020住居跡及び出土遺物





第335図　023住居跡及び出土遺物

020住居跡

プラン　隅丸長方形　**規　模**　3.4×4.6m
主軸方向　N－108°－E　**現在壁高**　27～50cm
カマド　東壁の南隅　**柱　穴**　8本
周　溝　北壁の一部に幅20cm，深さ7cm
所　見　焼失住居で炭化材は放射状に遺存する。柱穴はいずれも掘りの浅いものである。南壁の一部は高さ15cm，幅25cm，長さ80cm程のテラス状となる部分が認められる。カマドの遺存状態は悪く焼土，粘土，炭等が混入して，崩壊した状態となっている。

023住居跡

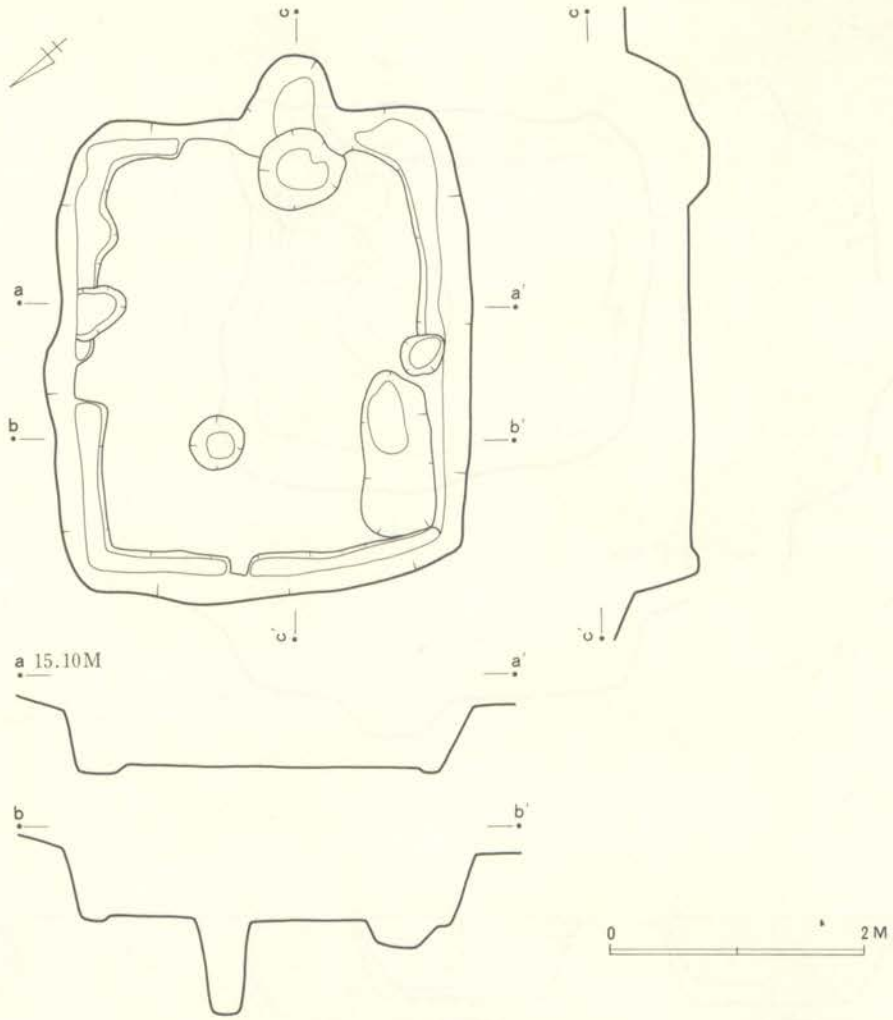
プラン　正方形　**規　模**　2.1×2.2m
主軸方向　N－15°－E　**現存壁高**　40～45cm
カマド　北壁の東隅　**柱　穴**　2本
周　溝　なし
所　見　小形の住居跡である。遺物2・4・5は床面直上から出土する。

020住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（須恵器）	12.7	4.0	7.8	口縁⅓を欠く	体部内外面－ヨコナデ 体部下端－手ヘラ削り 底部－回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	砂粒，石英－多	良	灰色	0034	R 体部下端から底部はスス附着 図版137－1
2	坏（土師器）	12.8	4.5	7.9	完形	体部内面－ヨコナデ後，ヘラミガキ 体部外面－ヨコナデ 体部下端－手ヘラ削り 底部－回ヘラ切り，二方向の手ヘラ削り	微砂粒・雲母－多	良	外形½赤褐色 ½黒褐色	0041	L 内黒 図版137－2

023住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（須恵器）	13.8	4.2	8.4	口縁⅙を欠く	体部内外面－ヨコナデ 体部下端－手ヘラ削り 底部－回ヘラ切り，不定方向の手ヘラ削り	砂粒・石英－少 雲母－多	やや甘	灰白色	0136＋0138＋0141＋0143	R 図版137－3
2	坏（須恵器）	13.6	4.1	8.0	口縁⅓を欠く	体部内外面－ヨコナデ 体部下端－摩耗の為調整不明 底部－回ヘラ切り，不定方向の手ヘラ削り	砂粒，石英－少 雲母－多	やや甘	灰白色	0140	R 図版137－5
3	坏（須恵器）	14.0	3.9	8.0	½	体部内外面－ヨコナデ 体部下端－手ヘラ削り 底部－切り離し不明，一定方向の手ヘラ削り	砂粒，石英－少	良	灰白色	0137	R 体部内面上半部の剝離が著しい 図版137－4
4	高台付坏（須恵器）	底径8.3	高台高1.1	現高〈3.3〉	体部を欠く	体部～高台－ヨコナデ高台貼付 底部－回ヘラ削り	微砂粒・石英・雲母－少	良	暗灰色	0141	R
5	甕（土師器）	15.4	18.2	胴最大径15.6	ほぼ完形	口縁部内外面－ヨコナデ 胴部内面－ナデ 胴部外面－二次焼成の為か風化著しく器面調整不明下半部にかすかに細いヘラ削りの痕を認める 底部－木葉痕有り	砂粒・石英－多 雲母－少	良	暗褐色	0139	図版137－6



第336図　024住居跡

024住居跡

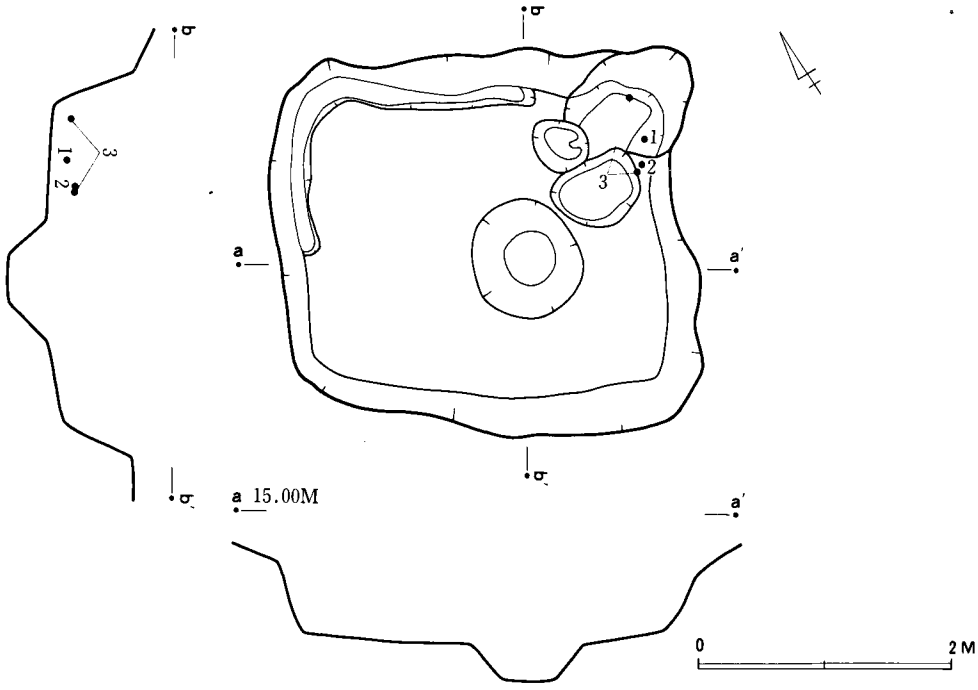
プラン　長方形　**規　模**　3.2×3.7m

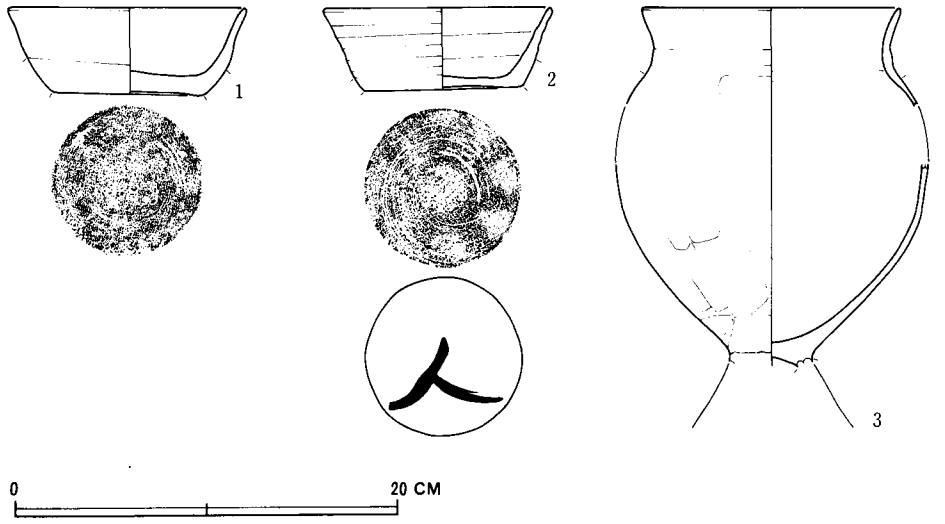
主軸方向　N－135°－E　**現存壁高**　42～50cm

カマド　東壁中央　**柱　穴**　中央より西寄りに径45cm，深さ75cmの深い柱穴が１本ある。

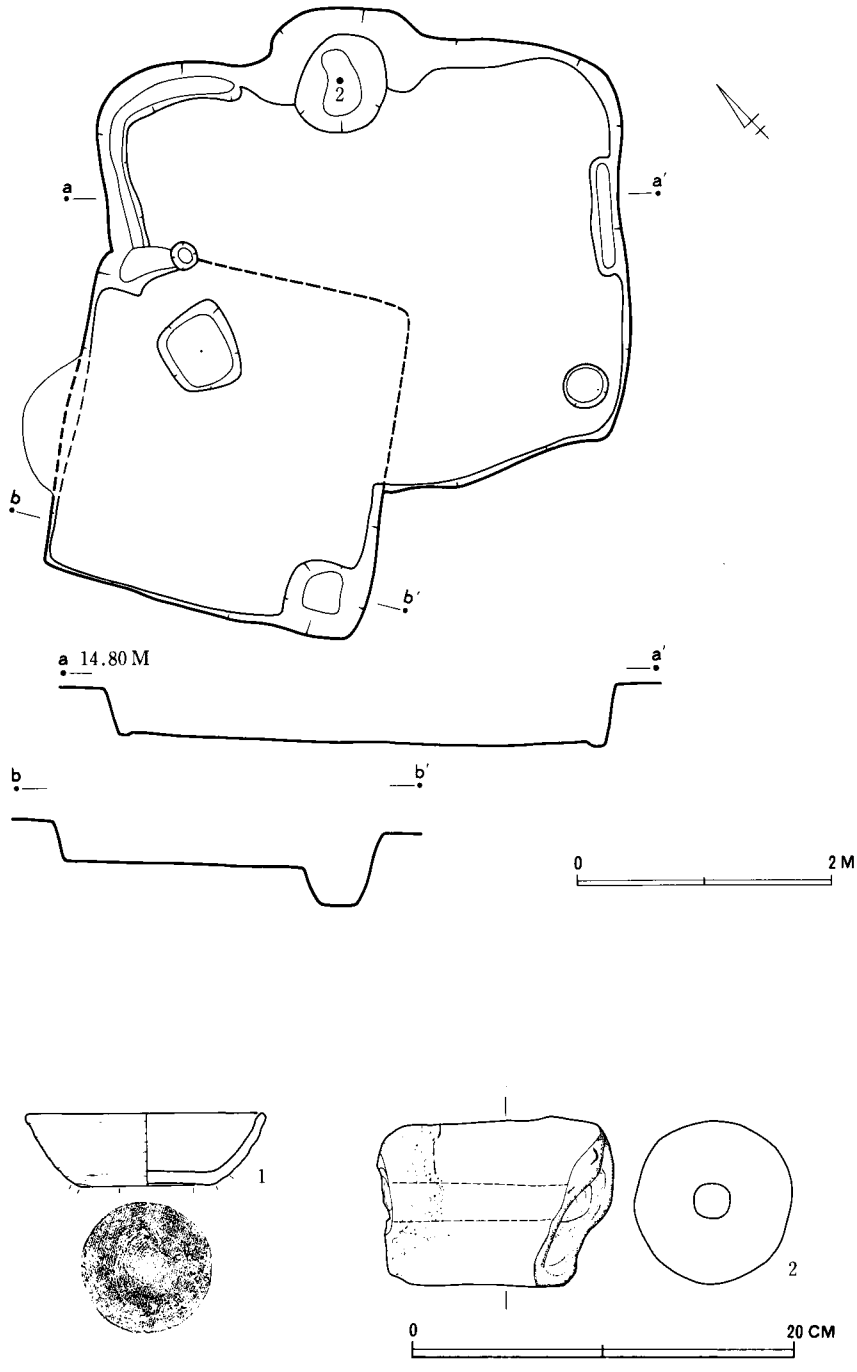
周　溝　カマド部を除き，ほぼ全周する。幅18cm，深さ８cm

所　見　カマドの遺存状態は悪く，袖部の痕跡も残っていない。また附設される位置も東壁となり特異な方向を示す。





第337図　025住居跡及び出土遺物



第338図　026・032住居跡及び出土遺物

025住居跡

プラン　長方形　**規　模**　2.8×3.2m
主軸方向　N－35°－E　**現存壁高**　55～60cm
カマド　北壁の東隅　**柱　穴**　柱穴と考えられるピットはないが，中央部に径80cm，深さ30cmの大きなピットが検出された。
周　溝　北壁から西壁にかけて，幅10～15cm，深さ5cm程の浅い周溝を設ける。
所　見　図示した遺物はすべて，カマド内と，その周辺から出土している。2の土師器坏底部には「人」の墨書が書かれている。

026住居跡

プラン　正方形　**規　模**　2.6m四方（推定）
主軸方向　不明　**現存壁高**　30cm
カマド　不明　**柱　穴**　なし
周　溝　なし
所　見　南壁の西隅には，一辺60cm，深さ30cm程の正方形の掘り込みがある。この住居跡は032住居跡を切って構築される。

032住居跡

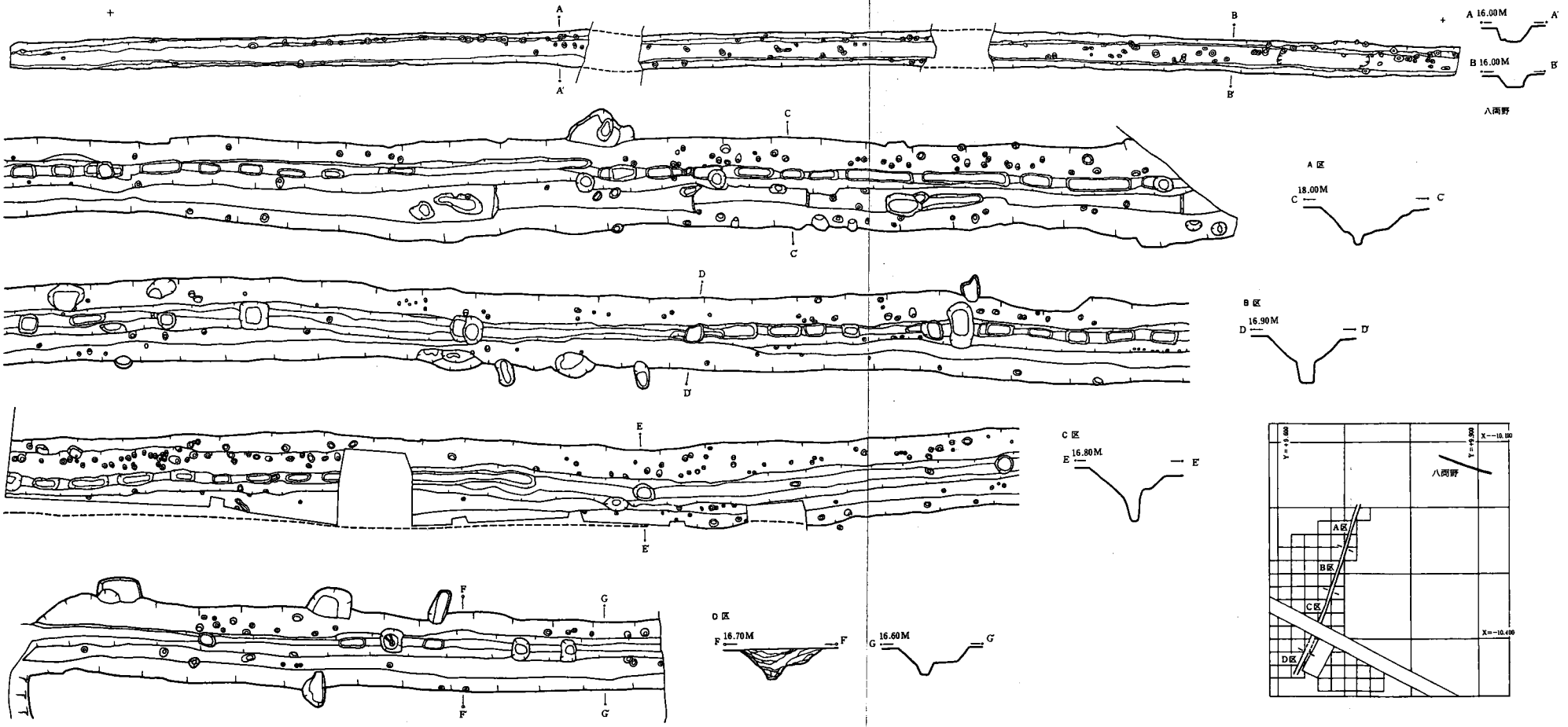
プラン　長方形　**規　模**　3.4×4.1m
主軸方向　N－36°－E　**現存壁高**　35～40cm
カマド　北壁中央　**柱　穴**　南東の隅に1本
周　溝　東壁と北壁から西壁にかけての一部に幅10～15cm，深さ5cm程で掘り込まれる。
所　見　026住居跡に切られる。カマドの遺存状態は悪いが，ここより図示した羽口が出土する。これは支脚として利用したものと考えられる。

025住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,（ ）推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（土師器）	12.4	4.5	8.0	口縁½を欠く	体部内外面－ヨコナデ 体部下端－回ヘラ削り 底部－回ヘラ切り，回ヘラ削り	微砂粒，雲母，スコリアー多	やや甘	明褐色	0040	L 図版137－7
2	坏（土師器）	11.9	4.3	8.4	完形	体部内外面－ヨコナデ 体部下端－回ヘラ削り 底部－切り離し不明，回ヘラ削り	微砂粒－多	良	淡黄褐色	0042	L 墨書「人」 図版137－8
3	台付甕（土師器）	13.5	〈18.5〉	胴径16.6	口縁・胴部½	口縁部内外面－ヨコナデ 胴部内面－ナデ 胴部外面－ヘラ削り 甕底部－ナデ	微砂粒・雲母－少	良	暗褐色～赤褐色	0039+0042	

026　032住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,（ ）推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	坏（土師器）	12.2	3.8	7.0	完形	体部内外面－ヨコナデ 体部下端－回ヘラ削り 底部－回糸切り，外縁回ヘラ削り	微砂粒・スコリアー少	良	淡黄褐色	0128	R 図版137－9
2	羽口						砂粒石・石英－多	甘		0044	



第339図 野馬堀 (1/200)

野馬堀

今回検出された堀は，調査時に031の番号が付された溝状遺構（中山新田II－1・II－2遺跡検出部分）と，八両野遺跡で検出された溝状遺構とを統合して，中山新田II遺跡検出野馬堀として報告する。

この二遺跡で検出した堀は連続するものであるが，中山新田II－1・II－2遺跡で検出した堀の幅は約4.2m，深さ約1.8mとなる。断面形態としては箱形となるが，中央部にテラス状の段がつき，そこからさらに深く堀り込まれている。床面には幅0.6×1.2m，深さ0.6～1.0mほどの長方形のピットが設けられている。

八両野遺跡検出の堀は幅2.0m，深さ0.7～1.0mと小さくなる。この部分の調査前の現状は道路になっており，そのための工事等で削平を受けるために，中山新田II－1・II－2で検出した溝よりも規模が小さくなっているものと思われる。

堀からの出土遺物には少量の近世陶器と古銭（寛永通宝）がある。

調査では堀だけしか検出できなかったが，この堀に並行して土手が構築されていたものと考えられる。馬土手（野馬堀）は，馬の放牧場を囲い，馬の逃亡を防ぎ，また村落や耕作地を荒されることから防ぐためのものであり，江戸時代において，下総の国では小金牧と佐倉牧が設置された。今回検出した堀は，この小金牧の内牧である高田台牧を画する部分の堀と考えられる。

第3章　小　　結

1．先土器時代

今回の調査で検出されたユニットは，計23ユニットである。これらは，207点を出土した第16ユニットから，計4点の第10ユニットまで量的にも異り，また，その出土した遺物の内容についても様々であり，さらに，出土した層位についても異なっている。

まず，各ユニットの属する層位について述べる事とする。

III層に属するユニットは，第10，19，21ユニットの3か所である。第10ユニットはナイフ形石器4点のみ，第19ユニットはチョッパー1点の他は剝片のみ，第21ユニットはスクレイパー3点，調整剝離の施された剝片の他は剝片である。

IV層に属するユニットは，第5，16，17ユニットの3か所である。第5ユニットは計4点のうち礫が2点のもの，第17ユニットはチョッパー1点，ナイフ形石器1点と比較的小規模なものであるが，第16ユニットは，ナイフ形石器3点，スクレイパー4点，調整剝離の施された剝片3点，使用痕の有る剝片3点，石核1点を中心として，総計207点を出土した，内容的，量的にも非常に豊富なユニットである。また，第16ユニットからは，大小の礫11点も出土している。

V層中からは，第13，14，15ユニットの3か所が確認されている。第13ユニットは総数174点と比較的大形のユニットであるが，ナイフ形石器1点，スクレイパー2点，チョッパー1点，調整剝離の施された剝片1点と石器は比較的少なく，剝片を中心としたユニットである。第14ユニットは剝片のみのユニット，第15ユニットはスクレイパー1点の他，同一石材の剝片が出土したユニットである。

VI層からVII層にかけてのユニットは，第3，6，12の3ユニットである。第3ユニットは礫1点の他はフレイクのみ，第6ユニットはナイフ3点，調整剝離の施された剝片1点のもの第12ユニットはチョッパー1点，石核2点，調整剝離の施された剝片1点のものである。

VII層に属するユニットは，第1A，1B，1C，2，4，7，8，18，20の各ユニット計9か所である。これらは，ナイフ形石器2点調整剝離の施された剝片1点，使用痕の有る剝片4点，敲石2点を出土し，量的にも多い第1Aユニットから，接合資料を中心としてすべて剝片のみの第1Bユニットまでその内容は異なる。

VII層からVIII層にかけての第11ユニットが，今回の調査で確認できたユニットのうち，最も古いものと考えられる。主としてVIII層中に分布しており，計101点と量的にも多い部類に属する。また，接合資料に見られるように，単一の母岩の剝片が中心となっているユニットである。

これらの成果を見ると，III層からVIII層に至るまでのユニットが認められ，また，内容的にも様々の在り方を示し，各ユニットの性格，ユニット間の関係を知る好資料であろう。

2．縄文時代

阿玉台期の住居跡について

検出された9軒の住居跡は主として阿玉台式土器を伴うものであるが，伴出する遺物にはIb式からIII式までの型式差があり，住居形態等からも数期に分かれるものと思われる。そこで以下住居の形態を中心に伴出土器を踏まえてその段階を考えてみたい。

各住居の平面プランは円ないし楕円形を呈するものが大半であるが029住のように隅丸の方形を呈するものもある。床面の状態はほとんどが平坦であるが015住・056住のように床面より一段高くテラス状部分を設けるものもある(1)。また，住居内の炉については057住が住居中央部に埋甕炉を持つ以外は認められていない(2)。

これらの形状に伴う，柱穴については大きく2つに分けることができる。中央に主柱穴を設け，他に浅い柱穴を付随させるA型と数本の主柱穴を設けるB型である。A型は002住・029住・043住，B型は015住・039住・055住・056住・057住・061住に相当する。

B型は柱穴の配置によってさらに2分される。住居中央部に空間を設けず中央に集中する1類（015住・039住・056住）と中央部をあけ周囲に廻らせる2類（055住・057住・061住）である。

以上の事を構造別にまとめたのが第340図である。

A型はその構造からして大形のものはなく，形状も円形に近いものが多い。壁高は他に比較すると深いものが多い。伴出する土器は002住（Ib～II式）・029住（II式）・043住（？）であり，043住については遺物の大半が黒曜石のフレイクで，拓本で示したIII式の土器片は覆土の上層より検出されているため（？）とした。なお，床直上からは無文の土器片を検出している。

B型1類（中央集中型）はA型に比較してやや大きく，形状は柱穴の配置からして楕円形や

段　階	構　　造	平面形	ベッド状	炉	住　　居
I	A　1本柱		—	—	002住・043住
			—	—	029住
II	B　複数柱		—	—	039住
	1（中央集中型）			—	015住・056住
III	2（周囲配置型）		—	—	055住・061住
			—		057住

第340図　住居分類図

一方向に長軸をとる形状が多い。また，テラス状の構造を有するのもこの型に多いようである。伴出する土器は039住（II式）・015住（II～III式）・056住（II～III式）である。015住で検出された円筒形の2個体のIII式土器（1・2）は覆土の上層に集中するもので，床面付近ではII式の土器片が検出されている。056住は半截竹管による2列の押引文を施すII式が中心となるが，復原可能な土器には無文が多く，破片では格子状に沈線を施した五領ケ台式土器や，勝坂式土器も混入しており覆土中の遺物に関してはかなり異質な様相を呈している。

B型2類（周囲配置型）は整った形のものが多く，円形や楕円形を呈する。また，この構造によって始めて住居内に炉を設けることができる。伴出する土器は055住（II～III式）・061住（III式）・057住（III式）であり，全住居とも勝坂式を確実に伴っている。この内055住に関しては住居の西半分が検出できなかったためその全形は明確に捉えられていない。

以上，各住居の構造及び伴出土器について述べた。

A型については前回報告した水砂遺跡をはじめ，松戸市子和清水貝塚，千葉市蕨立遺跡，千原台ニュータウン，高根木戸遺跡[3]等で検出されており，いずれも阿玉台Ⅰb式～II式土器を伴うものが多く，阿玉台期でも古い形態として捉えることができる。子和清水貝塚では029住のような隅丸方形を呈するものが多く見られる。

B型1類については，蕨立遺跡（2・9・26・34・47住）などで一方向に2～3本の主柱穴を設け，隅丸の長方形プランを呈する住居跡があり，A型をさらに一段階発展させたものと考えられる。伴出する土器は阿玉台II～III式が多い。また，ベッド状を呈する住居については子和清水貝塚（1・160住），蕨立遺跡（29住）等が挙げられるが，やはりII～III式土器を伴出している。

B型2類は千葉県内でも一番多く見られる。阿玉台期の住居形態であり，阿玉台III～IV式土器を伴うものである。炉を中心とする形状と柱穴については1つの方則まで考えられており[4]，阿玉台期では最も安定した形態と考えられる。また，いわゆる「ベッド状遺構」はこの段階の初期に位置づけられるものと思われる。

以上，今回の資料を基に各住居形態の段階を考えてみた訳であるが，阿玉台期前半における住居は阿玉台特有の住居構造をもつものであり，伴出する遺物にも勝坂式土器の混入はさほど見られないが，後半においては住居規模の拡大や住居内に炉を設置しようとする住居形態の変化が見られ，それと共に阿玉台式土器にも勝坂式の影響が大きく及んでいるようである。特に両形式の狭間に位置する東葛地区においてはこうした土器の変化をどう把握してゆくかが今後の問題であろう。また，勝坂式の影響を受けてゆく反面，最近では町田市木曽中学校遺跡[5]のように阿玉台Ⅰb式の土器が炉体土器として使用されている例があり，阿玉台期前半の様相を考える上で重要な資料と考えられる。阿玉台前半期については特有の住居形態があるので伴出土器と合わせてさらに検討する必要があろう。

竪穴状遺構について

今回検出された033遺構はA型の住居とほぼ同形のものであるが,明確な柱穴が認められず遺物も検出されなかったため「竪穴状遺構」として報告した。類例としては，市原市草刈遺跡等の報告がある(6)。草刈遺跡A区では阿玉台Ⅰb期に属するものが，また千葉急行線内草刈貝塚では覆土中に多量の焼土とイノシシの頭蓋骨を伴うものが検出されている。

住居以外の遺構として捉える考え方もあり，ここでは一応住居跡とは分けた。

註

(1) これらは一種のベッド状遺構として考えられるものであり，阿玉台期後半に見られる住居内をさらに一段掘りくぼめるベッド状遺構の先行形態として捉えることができる。

(2) 一般に阿玉台期の住居は炉を持たないものが多く，炉の存在は阿玉台期でも後半（III式以降）にしか見ることができない。

(3) 松戸市教育委員会　1978『子和清水貝塚』松戸市文化財報告第8集

遺跡研究会　1982『遺跡研究論集II』—蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究—

(財)千葉県文化財センター　1983『千原台ニュータウンII』

岡崎文喜他　1971『高根木戸』—縄文時代中期集落址調査報告書—

(4) 渋谷文雄　1982「竪穴住居址の柱穴位置と規模について」『考古学雑誌』第67巻第4号

(5) 町田市教育委員会　1983『町田市木曽中学校遺跡』

(6) (財)千葉県文化財センター　1983『千原台ニュータウンII』

(財)千葉県文化財センター　1983『研究連絡誌』第6号

3．歴史時代

本遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡は6軒と，野馬堀1条である。

竪穴住居跡は，調査区南端の小支谷に南面する緩やかな斜面に位置する。6軒の住居跡のうち3軒（020・023・025）は隅カマドとなり，024住居跡でも東壁にカマドが設けられる。このように北壁以外にカマドを附設する住居が多い点が特異である。

次にこれらの時期についてであるが，先に分けた花前Ⅰ編年を利用して次のように分けることができる。

花前II期＝023，花前III期＝020，025，花前Ⅴ期＝026となり，024，032については不明である。

野馬堀は南北方向に伸び，八両野地域で東西方向へ走る。土手部はすでに削平を受けて現存しておらず，堀だけの調査になってしまった。野馬土手やそれに付随する堀については，部分的な検討を加えるよりも，牧全体と関連して把握すべきものである。このため今回は，この検出された堀が，小金牧のうち高田台牧に属することを指摘するだけにとどめることとする。

第IV篇　中山新田III遺跡

第１章　調査の方法と経過

中山新田III遺跡は中山新田II－２遺跡（217—008）の西側，緩やかに傾斜した台地の縁辺部に位置する。（第341図参照）

調査は昭和55年３月１日から３月31日の１か月間行なわれた。調査の方法は公共座標に合わせて20mのグリッドを設定し，包含層中の遺物はグリッド一括，各遺構に際しては各グリッドの座標に基づき測量・記録した。

グリッドの名称については昭和54年４月１日より調査を行なっていた聖人塚遺跡のグリッド座標の原点がA—01が当遺跡の西側に位置したため，設定外に当たる部分については第341図のよう設定した。

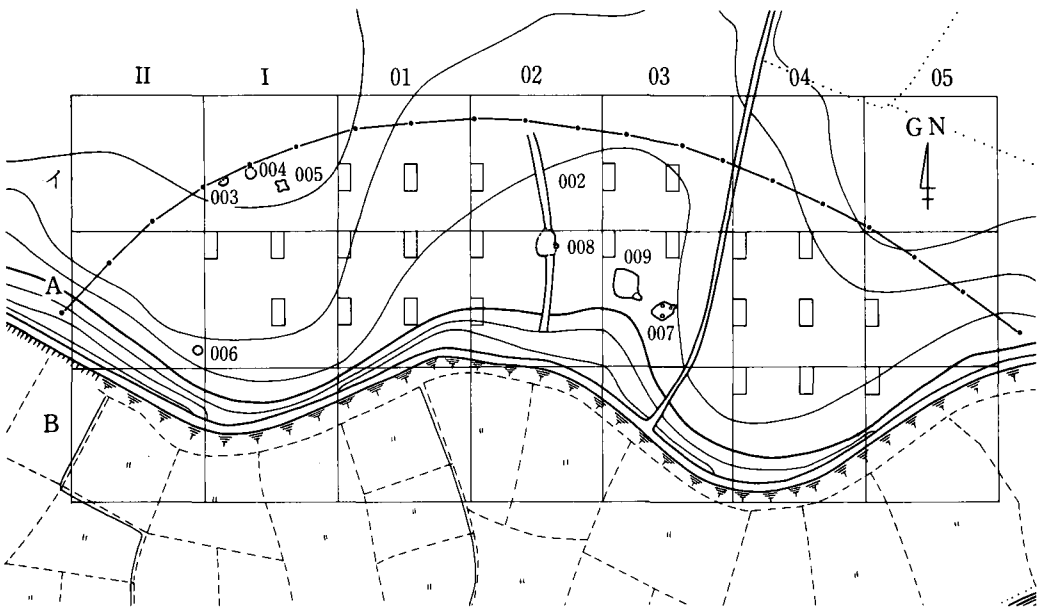
概要

遺構・遺物は先土器時代・縄文時代・歴史時代にわたって検出された。

先土器時代の遺構については特に検出さられなかったが数点の遺物を検出した。

縄文時代の遺構は早期の炉穴が１基，前期黒浜期の土坑が１基，時期不明な土坑２基を検出し，包含層からは早期・前期・中期・晩期の遺物を少量検出した。

歴史時代の遺構は住居跡３軒を検出した。



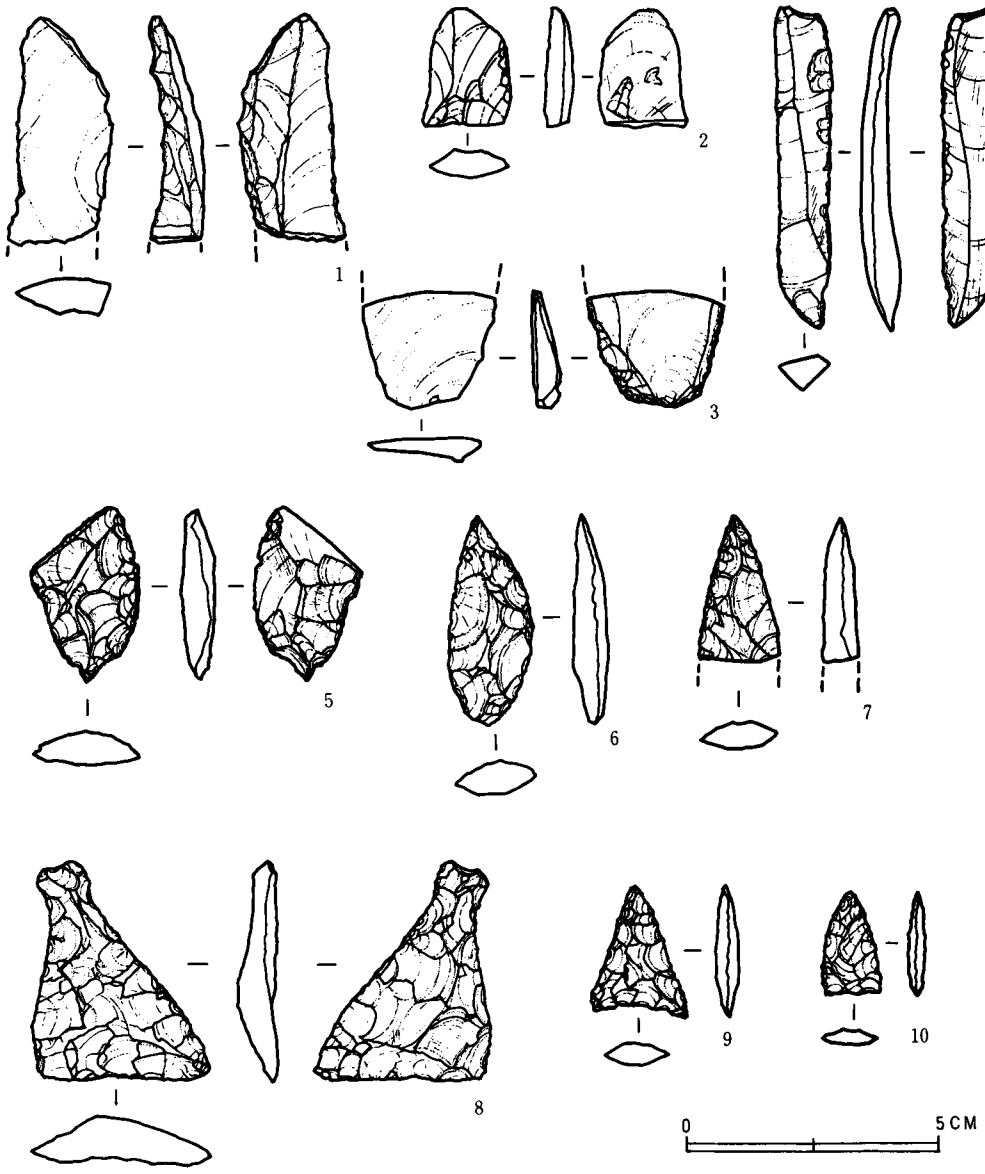
第341図　中山新田III遺跡グリッド，遺構配置図

第２章　遺構と遺物

１．先土器時代

中山新田II遺跡などと比較すると一段下がった台地の縁辺部であるせいか遺構となる石器類集中地点は検出されなかった。したがってここではグリッドより検出された一括遺物のみを扱った。

（第342図１～５）総数５点を数える。１・３はナイフ形石器で１は先端と基部に調整痕を残している。３は基部に相当する。２・４・５は周囲に調整痕が認められる。



第342図　グリッド出土の石器

2．縄文時代

検出した遺構は早期の炉穴1基，前期黒浜期の貝層を伴う土坑1期，他に時期不明の土坑2基の計4基であった。遺物の総量も少なく土器は整理箱でおよそ1箱半，約15kgで石は半箱6.5kg程であった。

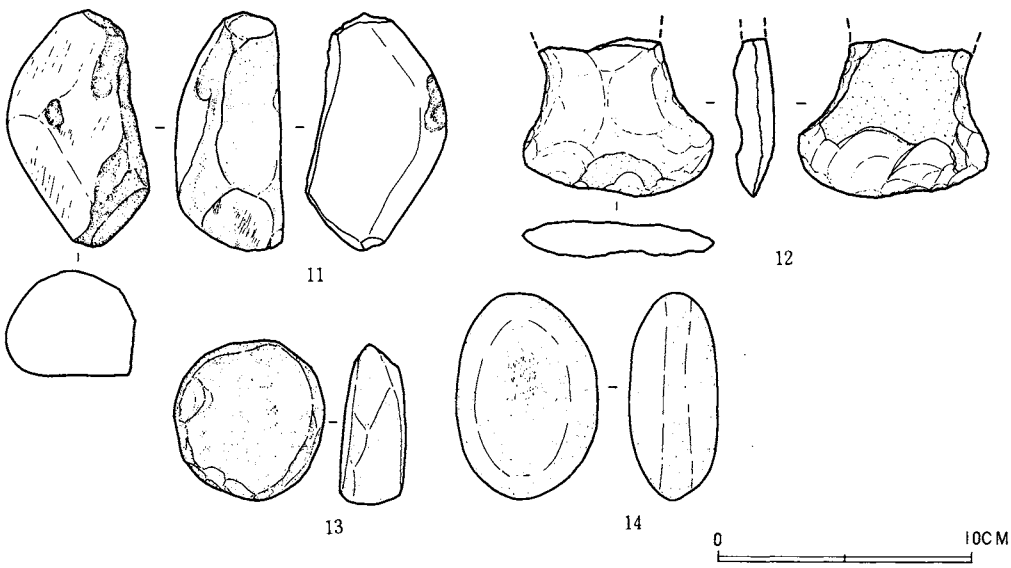
グリッド出土の遺物

土器　(第344図)

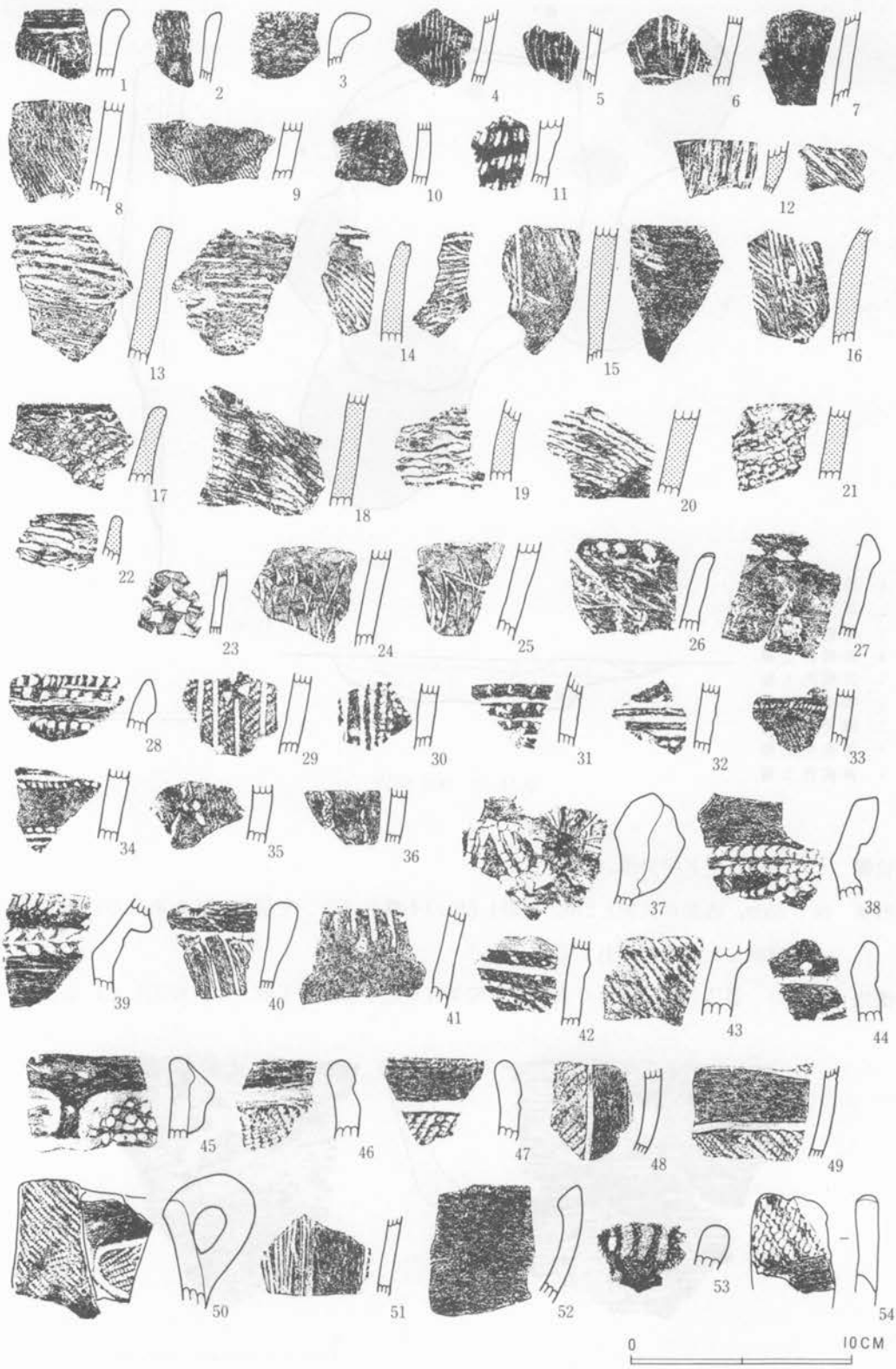
1～10は撚糸文土器である。3は口唇部を肥厚させ外方に突出させている。11は絡条体圧痕文を施している。12～16は貝殻条痕を施す茅山式土器である。12～15は表裏に条痕文を施している。17～22は胎土に繊維を混入する黒浜式土器である。23～27は浮島式土器で，23～25はハマグリ，26・27はアナダラ属の貝殻腹縁文を施している。28～36は五領ケ台式土器に比定されている。28は口唇部から口辺にかけて細い半截竹管による縦方向の刺突を行っている。35・36は縦位の結節回転文を施している。37～44は阿玉台式土器，45～51は加曽利E式に比定される。50は橋状把手を有する口縁部破片で，橋状部にも縄文が施されている。53は安行IIIa式に相当する。54は土器片錘である。

石器（第342図6～10，第343図）

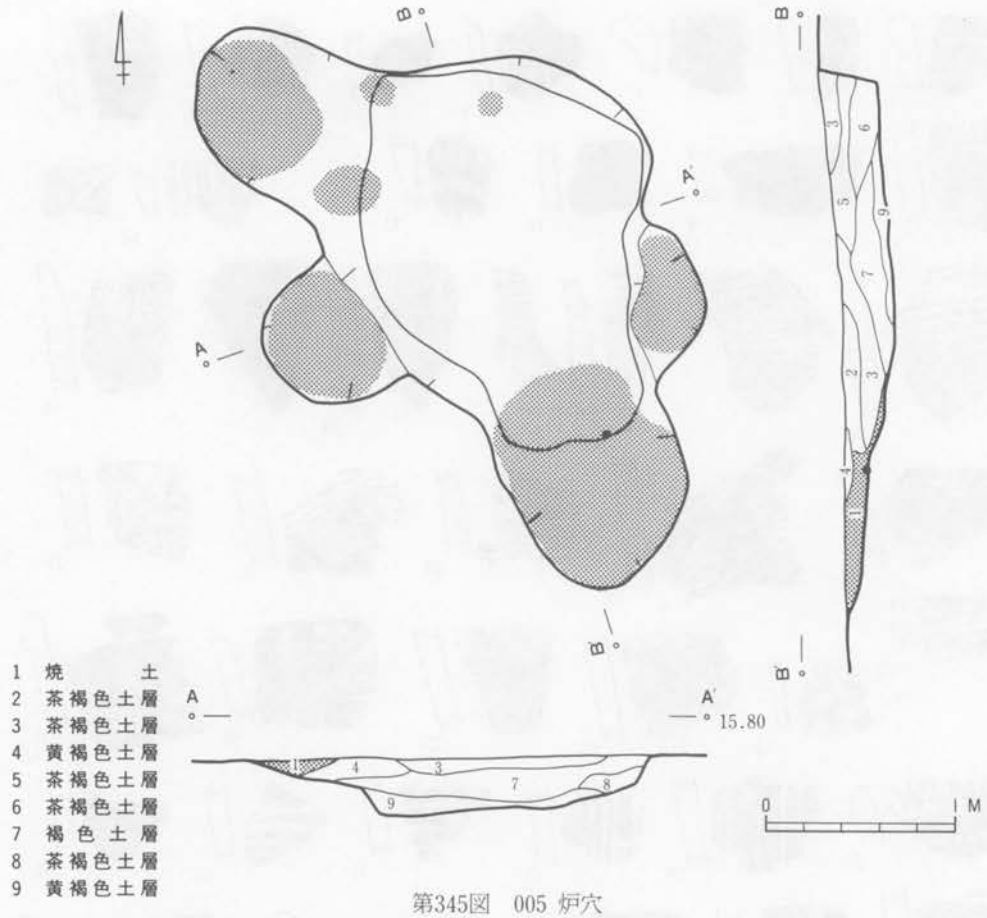
6・7は木の葉形を呈する玄武岩製の尖頭器である。8は長身で縦型の石匙である。9・10は三角形状を呈するチャート製の石鏃である。11・13は側面に敲打痕を有する敲石である。12は分銅形を呈する打製石斧，14は磨石である。



第343図　グリッド出土の石器



第344図　グリッド出土の土器

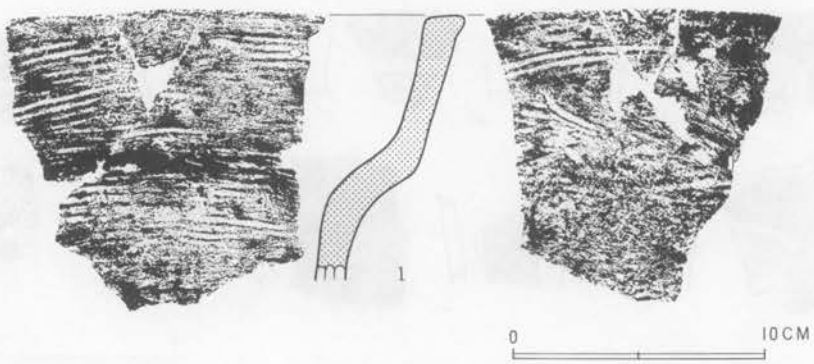


第345図　005 炉穴

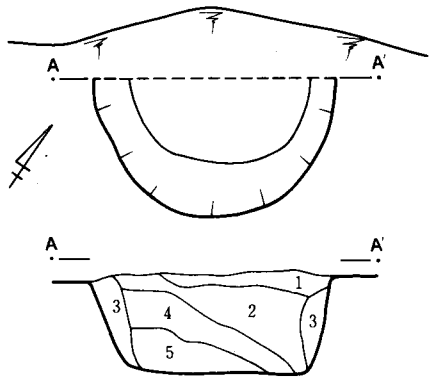
位置　イ－Ｉグリッド中央部。

形状　深さ26cm，底面が長軸2.2m，短軸1.6mの不整形プランを呈し，４か所にわたって焼土の堆積した張出部を有する。

遺物　南側の一番広い火床部より表裏に貝殻条痕を施す条痕文土器を１点検出している。



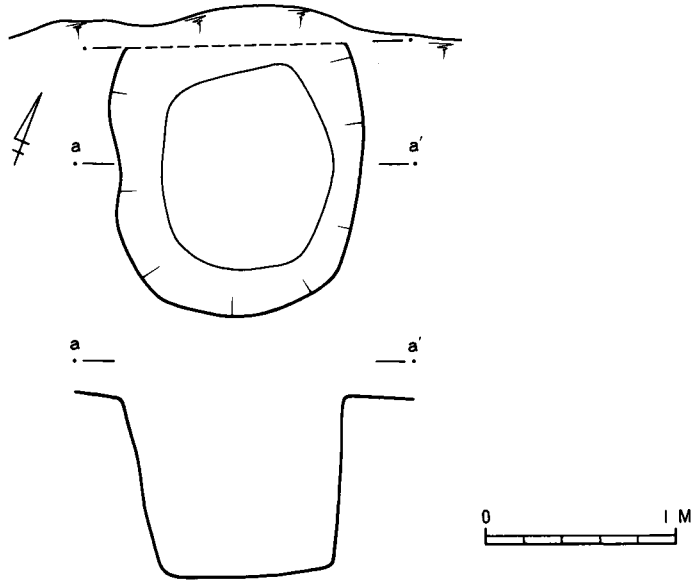
第346図　005 炉穴出土土器



1　褐色土層　ローム粒をまばらに含む。
2　暗褐色土層　ローム粒、炭化粒を含む。
3　明褐色土層　ローム粒にて構成される。
4　茶褐色土層　ロームブロックを含む。
5　茶褐色土層　4層よりロームブロックを少量混入する。

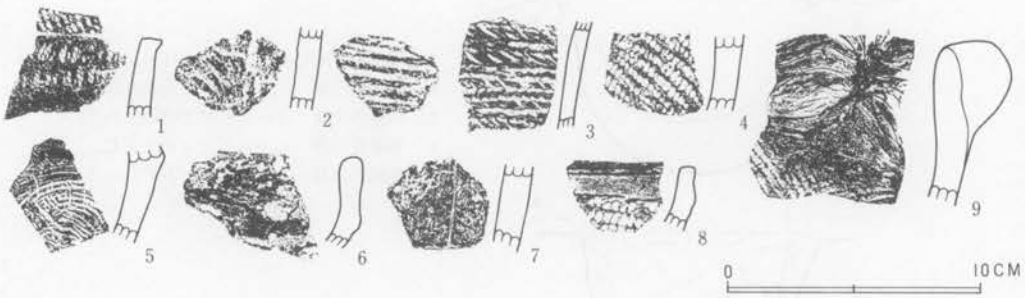
第347図　003 土坑

位　置　イ－Ⅰグリッド西側中央部。発掘区域内に半分ほど検出された。004 土坑と近接する。
形　状　幅1.3m，壁高50cmを測る半円形プランを残す。
遺　物　土器小片を18点程検出している。

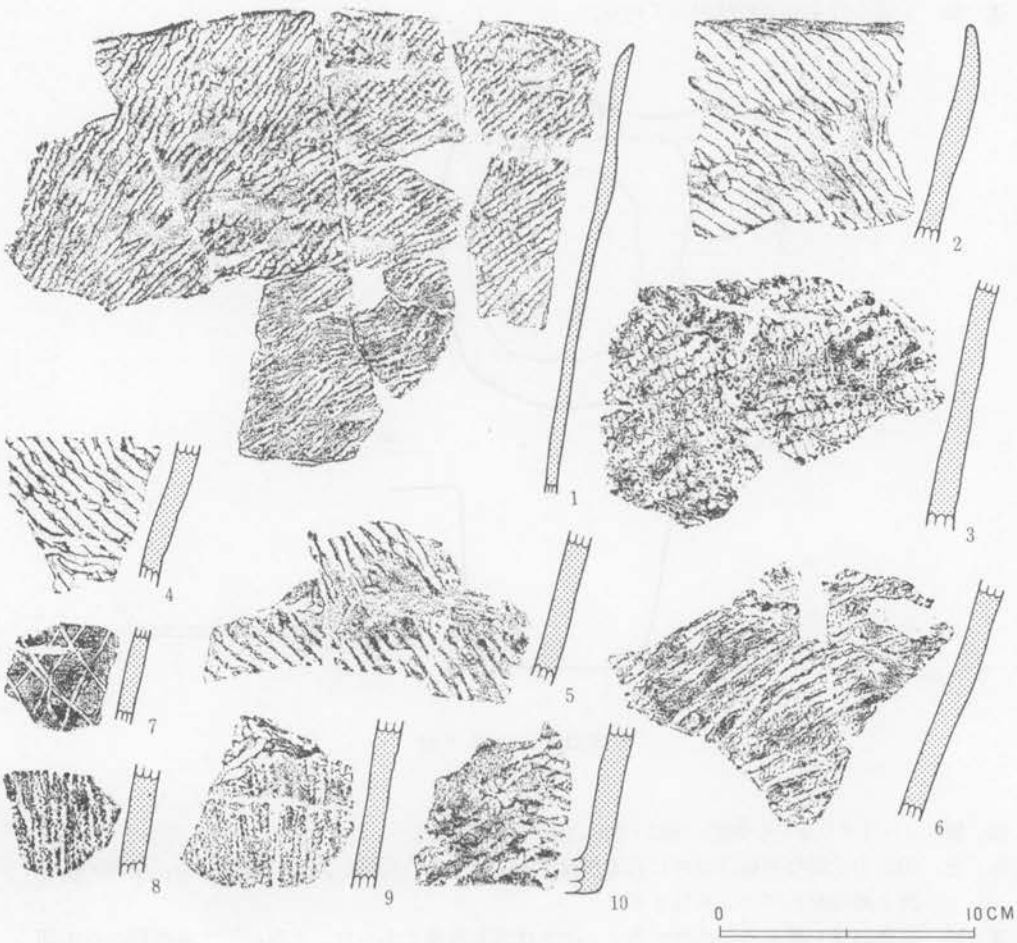


第348図　004 土坑

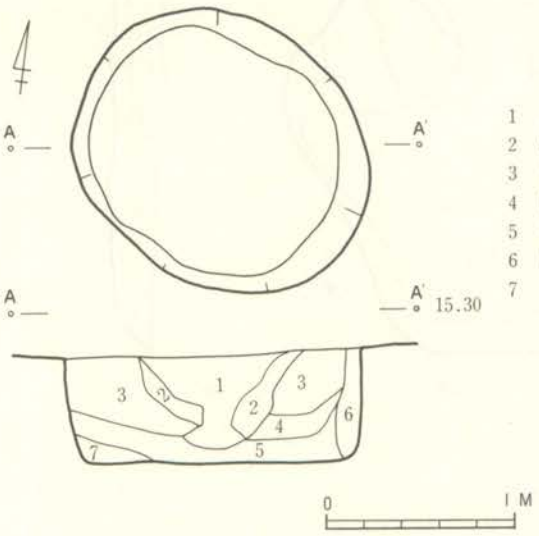
位　置　イ－Ⅰグリッド中央部。003・005 土坑に近接する。
形　状　003 土坑同様発掘区域外に若干残存する。検出した長軸1.2m，短軸1.3m，壁高95cmを測る楕円形のプランを呈する。
遺　物　総数48点を数えるが小片が多く、出土状況も散漫であった。土器の形式も早期から中期に及んでいるため、土坑自体の時期は不明である。1は口唇部から口辺にかけて絡条体圧痕を施している。2は条痕文土器，3は浮線文に刻みを施す諸磯b式土器，5・8・9は加曽利E式土器に比定される。



第349図　004 土坑出土土器



第350図　006 土坑出土土器



第351図 006 土坑

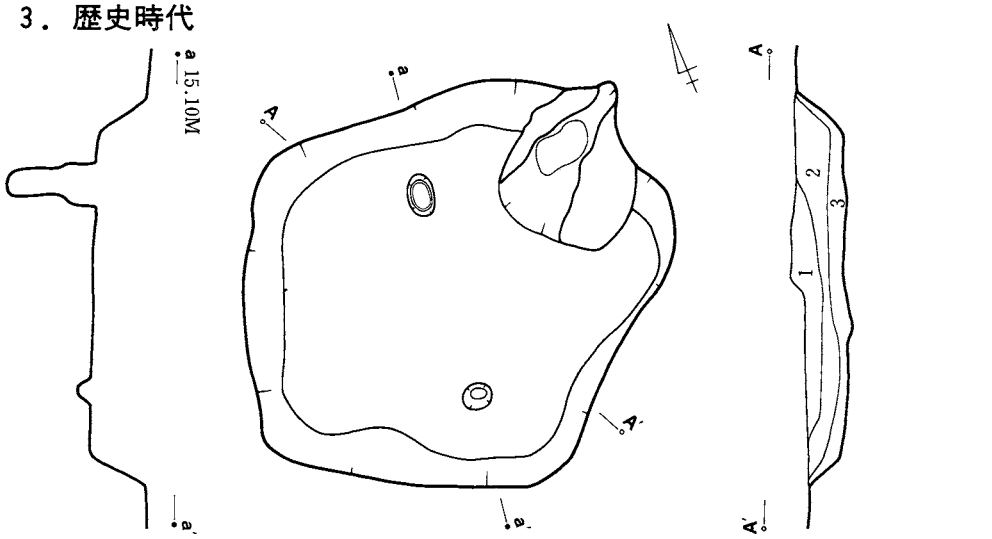
位 置 A－Ⅱグリッド東南部。

形 状 長軸1.6m，短軸1.36m，壁高58cmを測る楕円形のプランを呈する。

貝 層 かなり埋没した段階で投棄されており、その主なものはサルボウ，マガキ，ハマグリの3種類で，他にイボキサゴ，ダンベイキサゴ，カワアイガイ，ウミニナ，アカニシ，ベンケイガイ，イタボガキ，オキシジミ，アサリ，シオフキガイ等を検出している。

遺 物 総数100点を数え，すべて胎土中に繊維を含む黒浜式土器であった。
遺物は大半が底面に近い部分に集中しており，明らかに貝が投棄される以前に廃棄されている。
7は格子状に沈線を施している。8・9はサルボウ等による貝殻腹縁圧痕を縦位に密に施している。

3．歴史時代



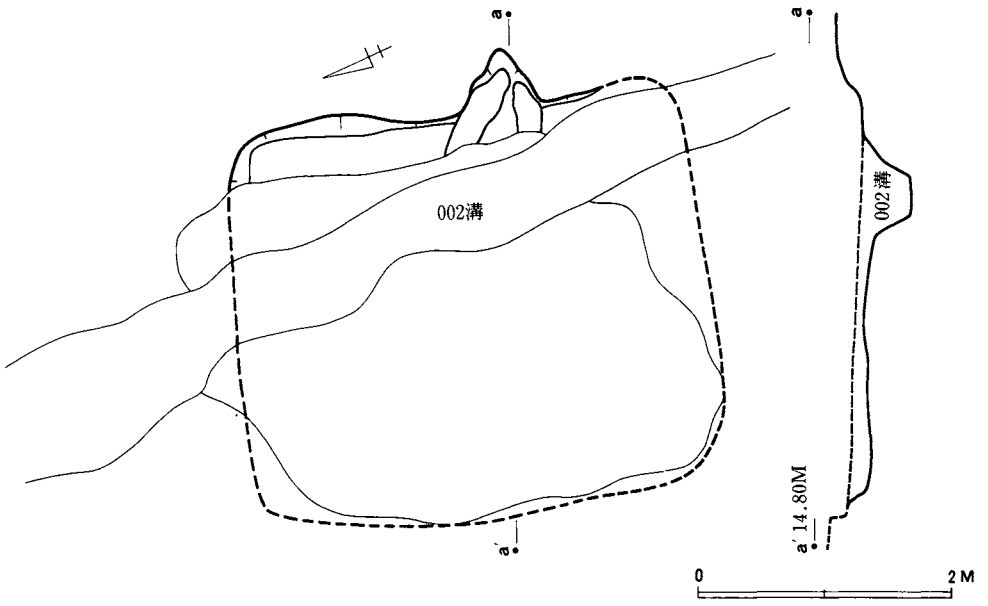
007住居跡

1　黒色土層　　焼土粒を少量含む
2　褐色土層　　炭化物，焼土粒を少量含む
3　黄褐色土層　　炭化物，焼土粒を多く含む

第352図　007住居跡

007住居跡

プラン　不整方形　　**規　模**　2.5×3.2m
主軸方向　N－22°－E　　**現存壁高**　27～45cm
カマド　北壁東寄り　　**柱　穴**　2本　　**周　溝**　なし
所　見　平面形態は大きくくずれ不整方形となる。出土遺物は少なく図示できるものはない。



第353図　002溝及び008住居跡

002溝

調査区の中央を南北に走り，台地縁辺までのびる溝である。幅0.6～1.0m，深さ25～40cmを測る。時期不明

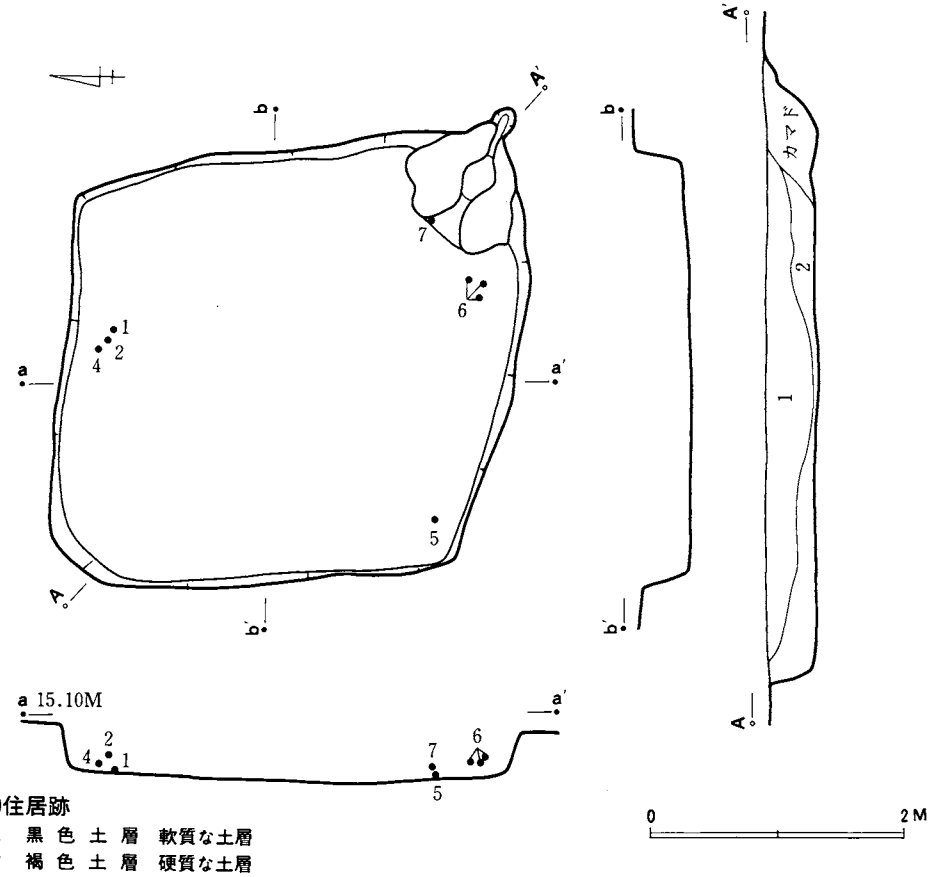
008住居跡

プラン　方形　　**規　模**　不明

主軸方向　N－107°－W　　**現存壁高**　20cm

カマド　東壁　　**柱　穴**　不明　　**周　溝**　不明

所　見　南北に002溝に切られ，住居跡西半分は大きな攪乱を受ける。このため住居の全体を知ることはできない。



第354図　009住居跡

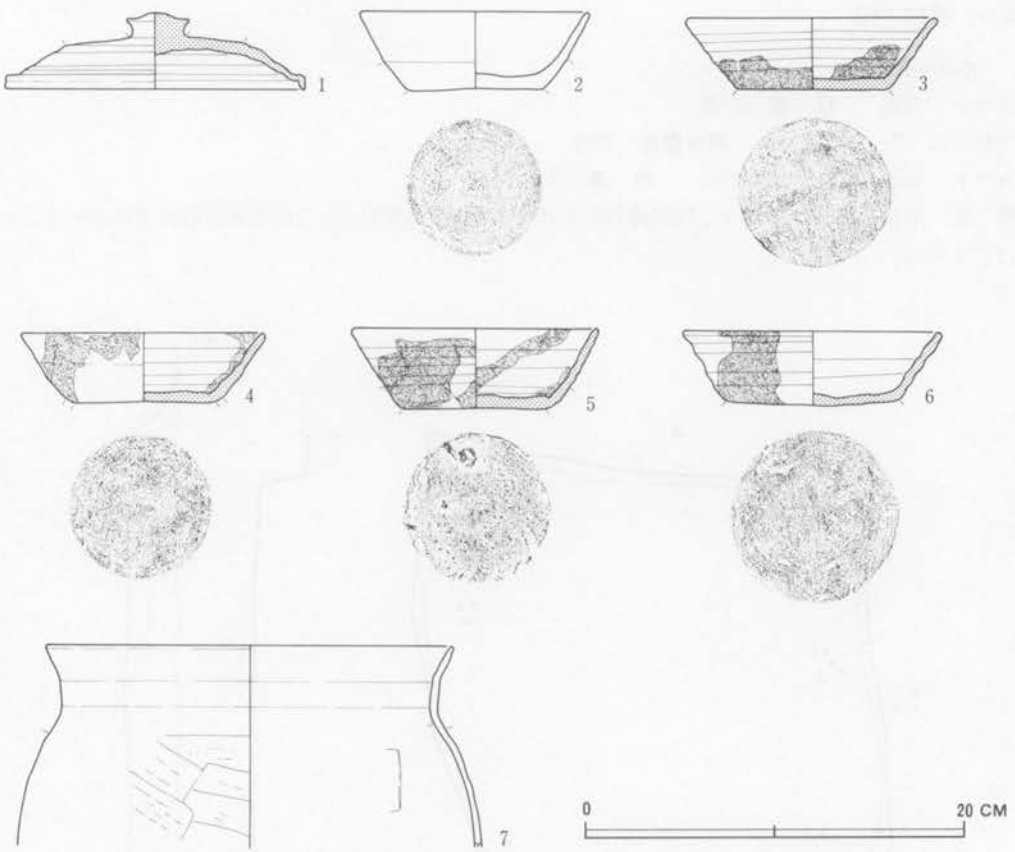
009住居跡

プラン　不整方形　　**規　模**　3.2×3.6m

主軸方向　N－90°－E　　**現存壁高**　30～36cm

カマド　東壁の南隅　　**柱　穴**　なし　　**周　溝**　なし

所　見　遺物は全て第2層から床面にかけて出土する。カマドは東壁の南隅に設けられ特異な位置関係を示す。



第355図　009住居跡出土遺物

009住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量,( )推定〈 〉現存 口径	器高	底径	遺存状態	成・整形手法	胎土	焼成	色調	遺物番号	備考
1	蓋(須恵器)	15.8 つまみ高3.3	4.0 つまみ径1.3		ほぼ完形	つまみ—ヨコナデ 天井部—回ヘラ削り 内面～口縁部—ヨコナデ	微砂粒・長石・石英—多	良・堅緻	青灰色	0005	図版148—1
2	坏(土師器)	12.0	4.2	7.1	ほぼ完形	体部内外面—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—切り離し不明，回ヘラ削り	微砂粒・雲母—多 長石	やや甘	明褐色	0010	
3	坏(須恵器)	13.1	3.8	8.1	ほぼ完形	体部内外面—ヨコナデ 底部—切り離し不明，一定方向のヘラ削り	微砂粒・長石・石英・雲母	良	暗灰色	0001	体部内面全体，及び外面⅓と底部付近に油煙有り。R，図版148—3
4	坏(須恵器)	12.7	3.6	7.3	ほぼ完形	体部内外面—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	微砂粒・雲母—少 長石・石英—多	良	暗灰色	0004	体部内外面共に，全体の½に油煙有り。L，図版148—4
5	坏(須恵器)	12.9	4.2	7.5	完形	体部内外面—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回ヘラ切り後 手ヘラ削り	微砂粒・石英・長石—多	良	暗灰色	0003	体部内面½強，及び外面½に油煙有り L，図版148—2
6	坏(須恵器)	13.4	3.8	8.7	ほぼ完形	体部内外面—ヨコナデ 底部—切り離し不明，一定方向の手ヘラ削り	微砂粒—少 雲母・長石・石英—多	良	明灰色	0002	体部内外面共に，全体の⅓に油煙有り。L，図版148—5
7	甕(土師器)	21.4	〈10.4〉		⅛	口縁部内外面—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ削り	微砂粒—多 雲母—少	良	明褐色	0006+0007+0008	

第3章　小　　結

1．縄文時代

今回の調査では時期の確定できる遺構は早期の炉穴と前期の土坑1基であった。早期の炉穴は，隣接する中山新田II遺跡において検出されなかったものの，対面する聖人塚遺跡や中山新田I遺跡においては同時期の炉穴群が検出されているため，当該期の生産活動や生活領域等を考える上で重要な位置を占めるものと思われる。また，前期黒浜期の土坑についても周辺においては検出例が少なく，花前I遺跡のような立地条件とは全く異なるため，炉穴同様その生活領域等を考慮する上で重要なものといえる。

2．歴史時代

本遺跡で検出された遺構は竪穴住居3軒と溝状遺構1条である。

竪穴住居は，中山新田II遺跡で検出した歴史時代の竪穴住居が立地する台地斜面部と連続する斜面部に位置する。

本遺跡での住居跡も隅カマドもしくは東壁にカマドが附設され，中山新田II遺跡で検出した例と同様のことが指摘できる。

時期を決定し得る資料を出土した住居跡は009だけで，これは花前III期に属するものである。残る007・008の2軒については不明である。

溝状遺構は008住居跡を切って南北に走るものであるが，時期等不明である。

結　　語

これまで報告してきたように，本報告書は，柏市に所在する花前Ⅰ，中山新田Ⅱ，中山新田Ⅲの各遺跡の発掘調査報告書である。

たびたび述べているように，この地域は，現利根川，江戸川，手賀沼などの水利にも恵まれ，また，標高約25mの平坦な台地が拡がり，人間生活の場としては絶好の条件を備えた地域である。したがって，遺跡も多数所在し，また，良好な資料も多く得られてきている。

今回の報告では特に，花前Ⅰ遺跡を中心とした，奈良時代，平安時代の資料の中に，特筆すべきものが多い。

花前Ⅰ遺跡では，8世紀から11世紀に至るまでの竪穴住居跡が25軒，掘立柱建物跡11棟などが検出され，多量の土師器，須恵器の他，灰釉陶器，緑釉陶器などの類例の希な資料，そして，柄杓形銅製品が出土している。また，鉄滓や鉄製品などの状態から，この地域が，製鉄を生業として成り立っていた事を知る上で，重要な遺跡である事が判明した。また，中山新田Ⅱ遺跡で8世紀中葉から9世紀前半の竪穴住居跡が6軒，中山新田Ⅲ遺跡では8世紀後半から9世紀前半の住居跡が3軒検出され，製鉄を生業としていた集落と，これをとりまく集落の関係を知る上での貴重な資料となりえた。

好資料を得たのは奈良，平安時代に限らず，先土器時代，縄文時代についてもやはり得られている。

先土器時代では，特に中山新田Ⅱ遺跡で注目すべき資料が得られている。計23か所のユニットが検出されたが，これらは，Ⅲ層からⅧ層上部に至るまでの各層から検出され，石器群の変遷を知る上で果す役割は大きい。また，各ユニット間の遺物の組成について，第10ユニットのように，ナイフ形石器のみ4点出土したもの，ナイフ形石器，スクレイパーなどの石器類が多く，さらに大小の礫が11点と割合多く出土した第16ユニット，単一石材の接合資料が中心の第11ユニットというように，内容的な差も大きく，これらのユニットの実体，またユニット間の関係を知る手掛りとなるであろう。また，花前Ⅰ遺跡のⅦ層中からは片刃礫器が出土しており，希少な例である。

縄文時代では，前期，中期，後期の資料が得られている。花前Ⅰ遺跡では前期黒浜式，浮島式土器と出土する住居跡が計11軒確認され，また貝層を含む土坑2基も検出されている。中山新田Ⅲ遺跡でも黒浜式土器を伴う土坑が検出されている。中山新田Ⅱ遺跡では，中期阿玉台式土器を伴う住居跡9軒と，この時期の土坑も検出されている。これらの成果は，類例の乏しいこの地域の前期，中期を知る好資料である。

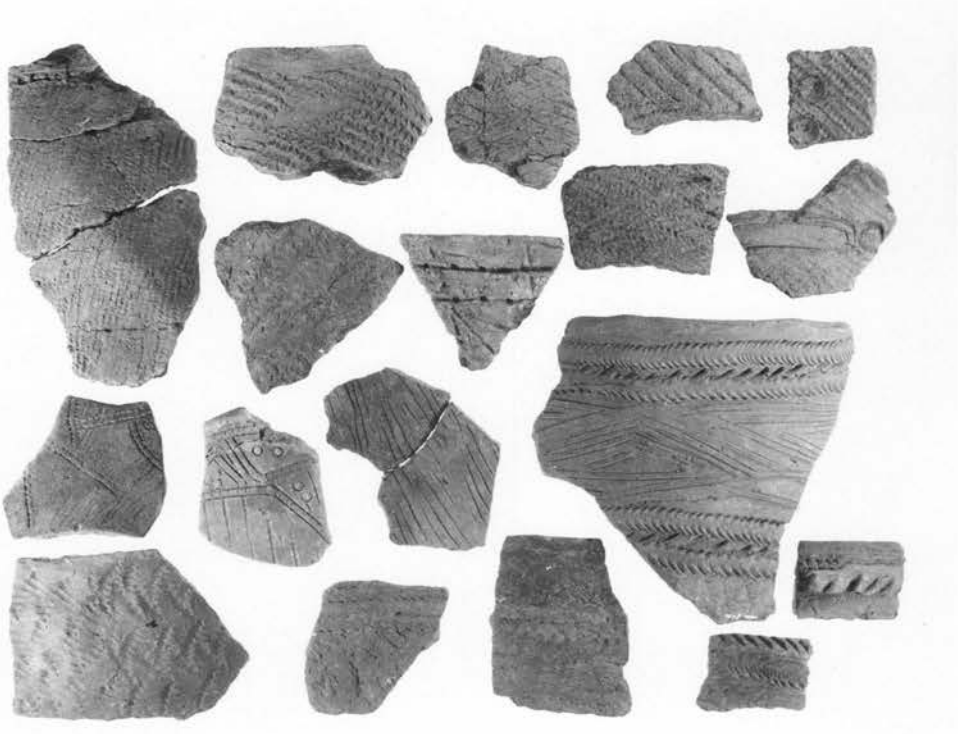
写真図版

遺跡遠景（西上空から）

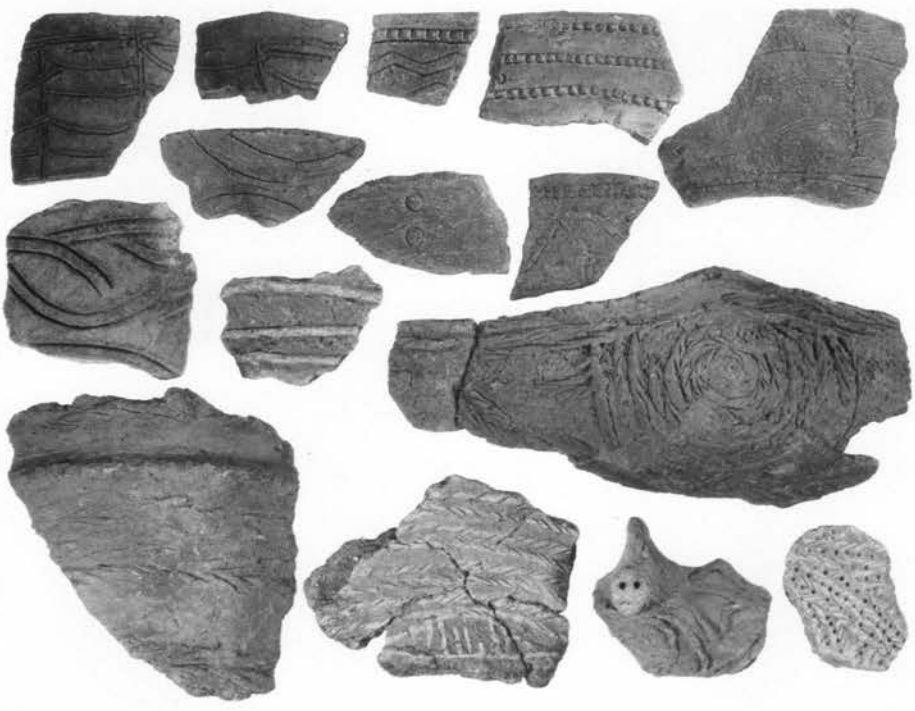
遺跡全景（北上空から）

007住居跡

007住居跡出土土器

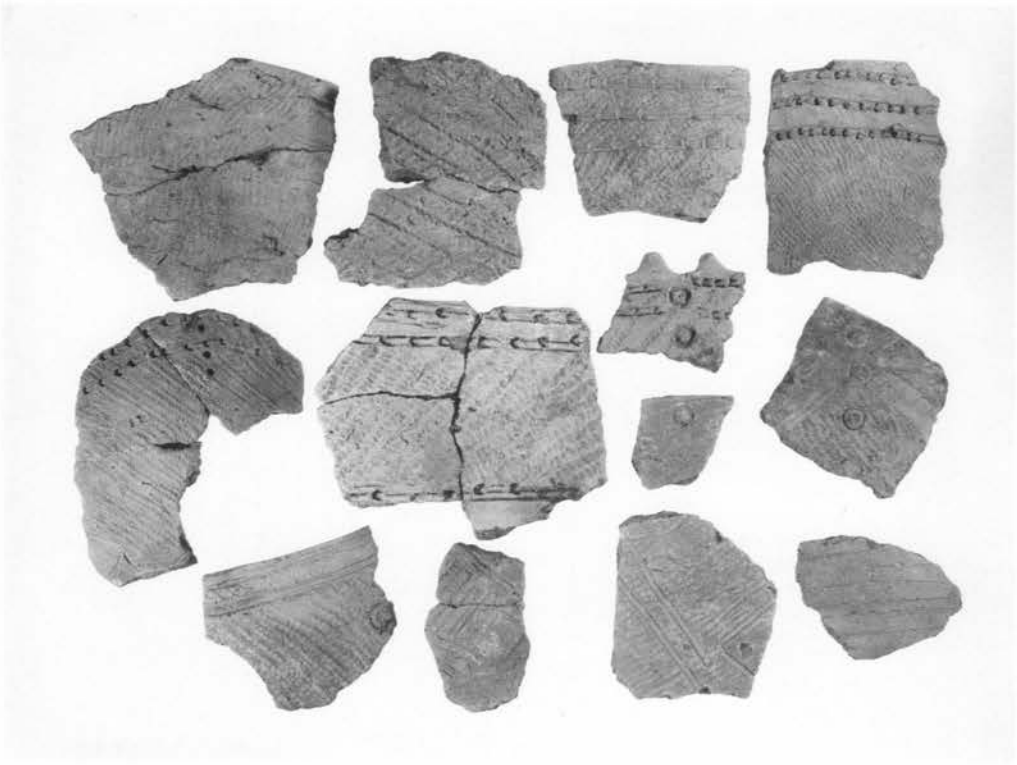


007住居跡出土土器

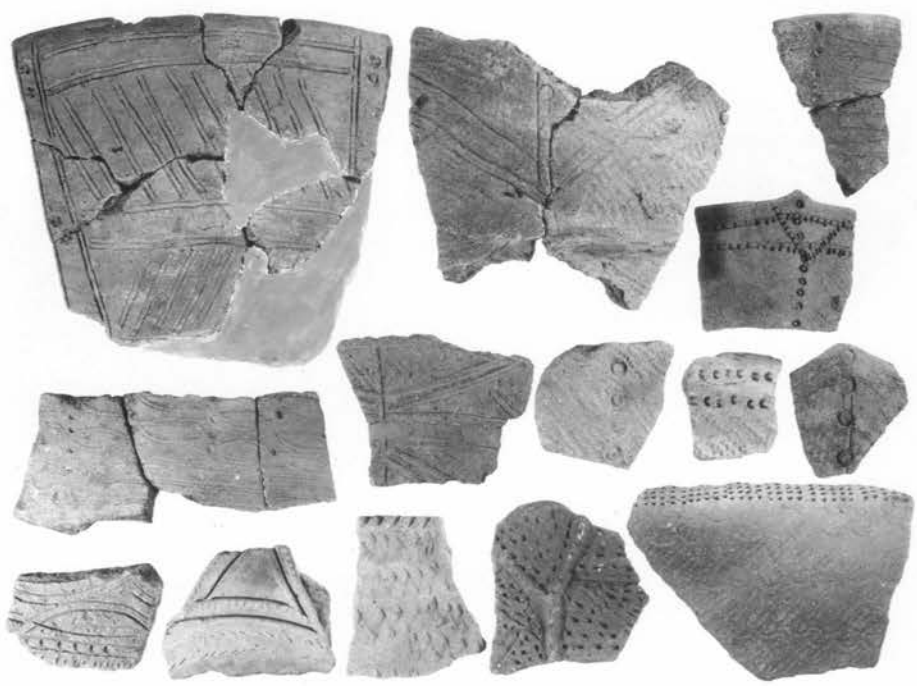


007住居跡出土土器

008住居跡（上）及び出土土器

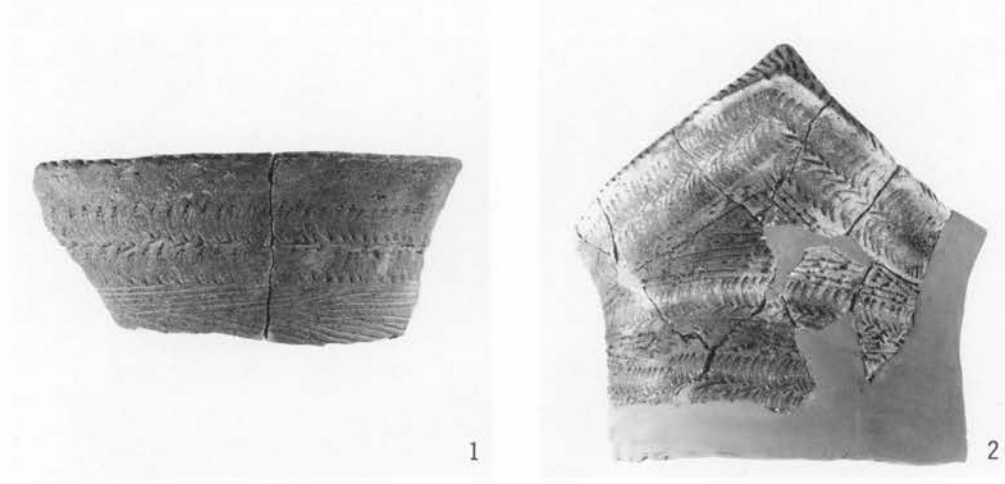


008住居跡出土土器

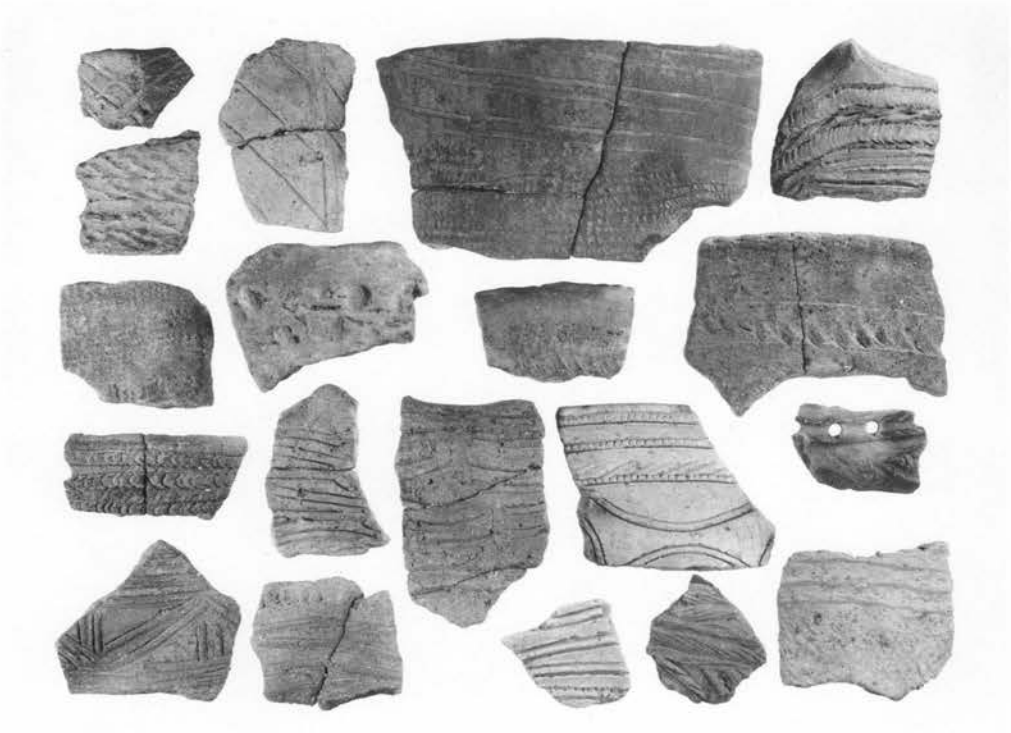


008住居跡出土土器

021住居跡

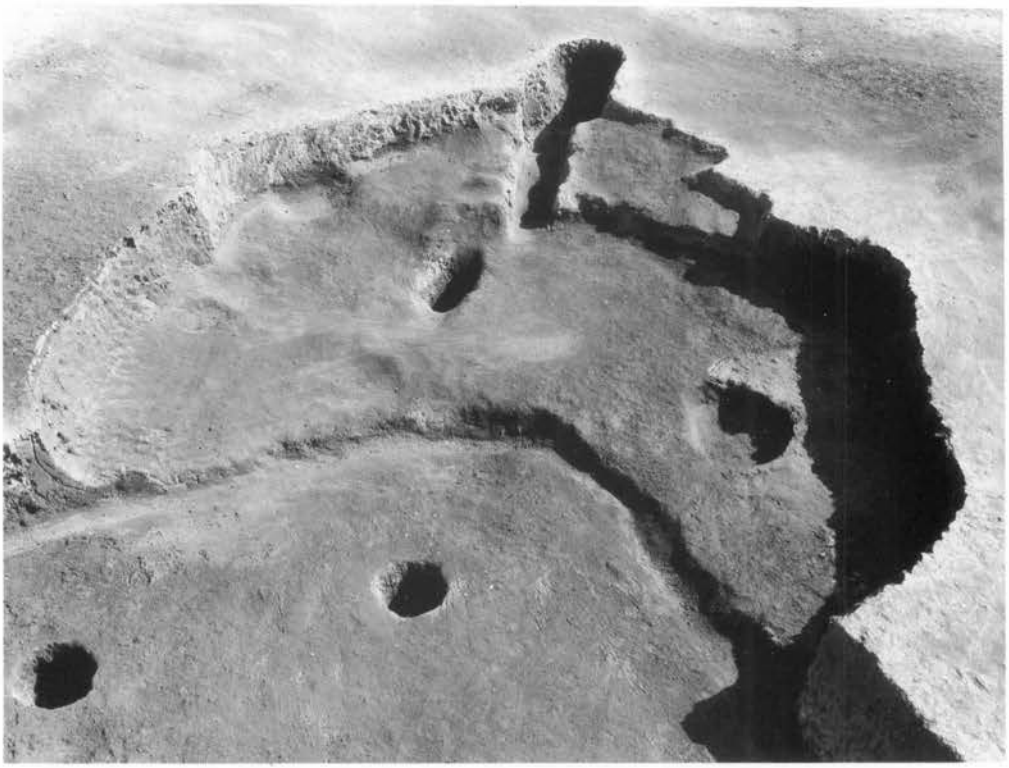


021住居跡出土土器

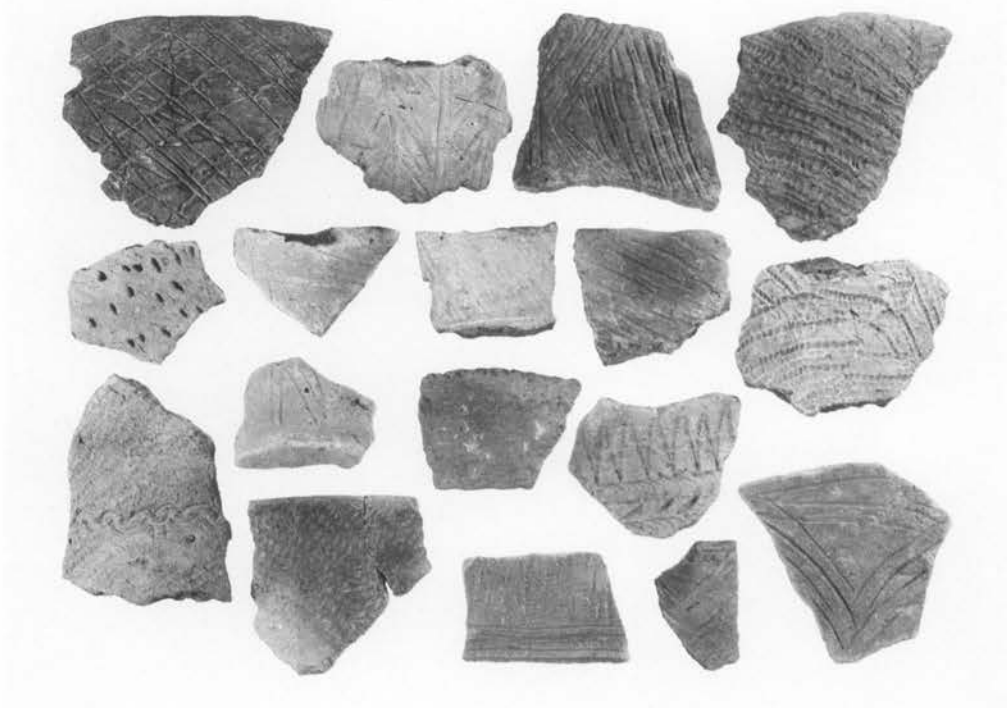


021住居跡出土土器

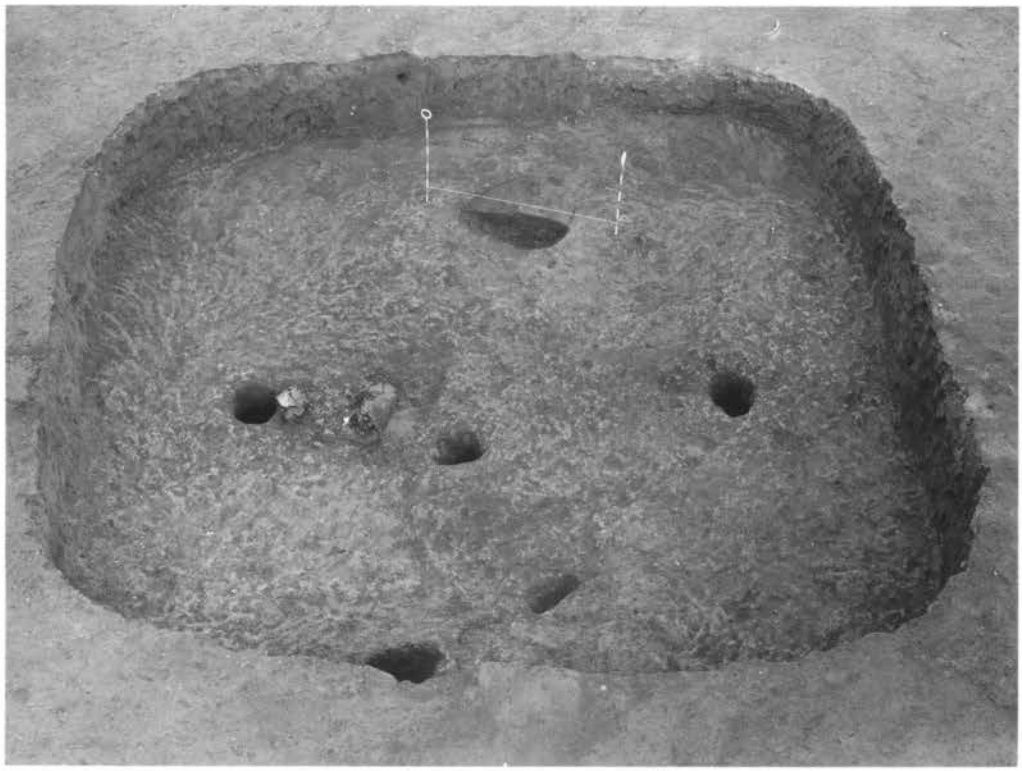
025住居跡出土土器



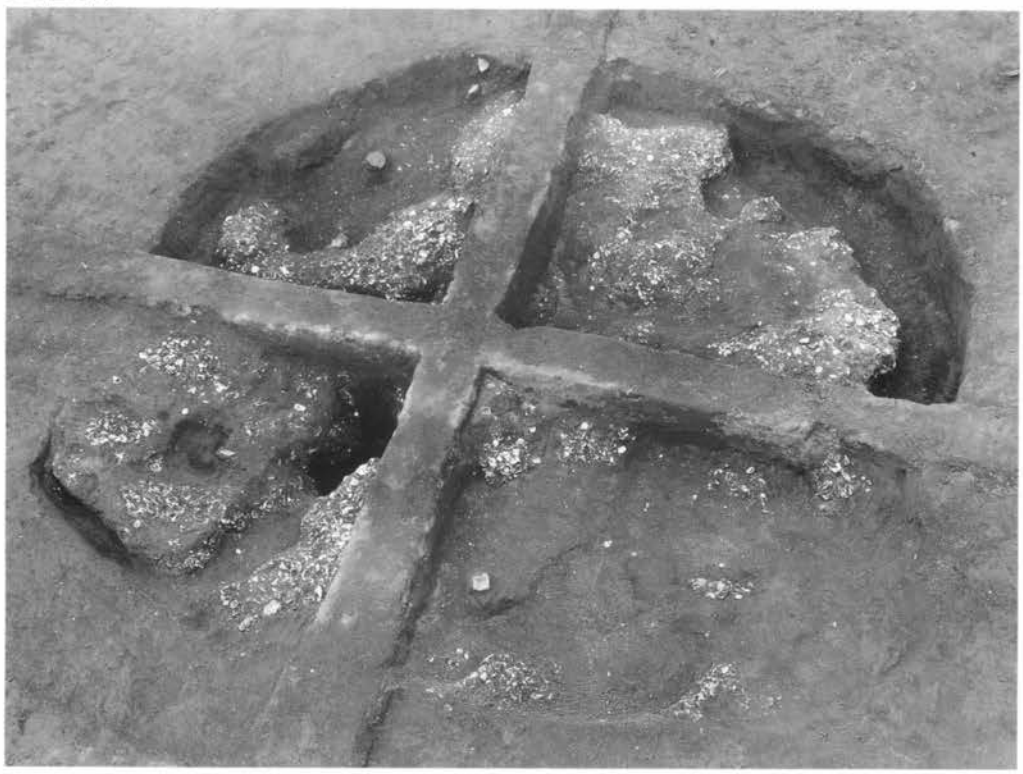
025住居跡



025住居跡出土土器



026住居跡



026住居跡貝層検出状況

1

2

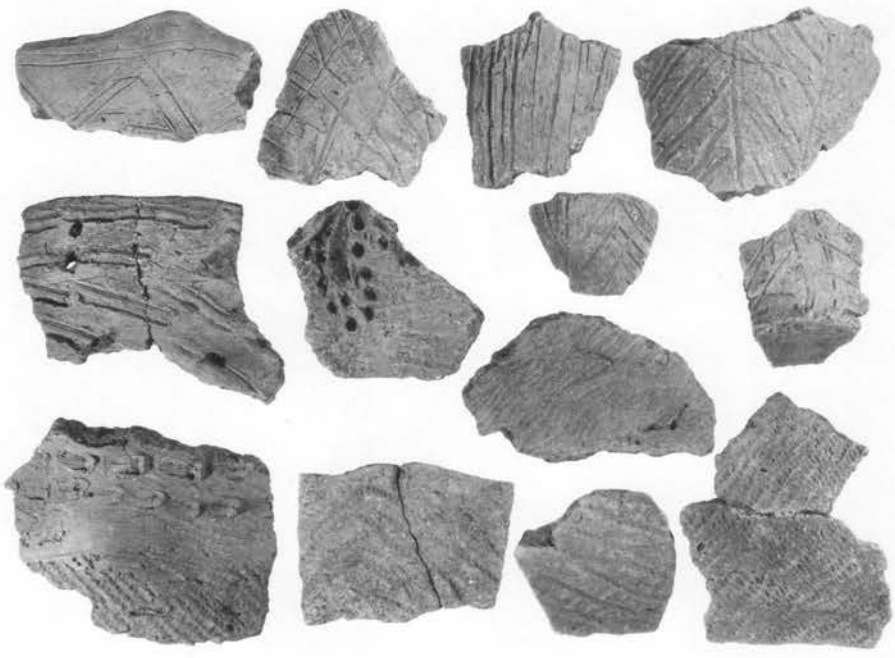
3

4

5

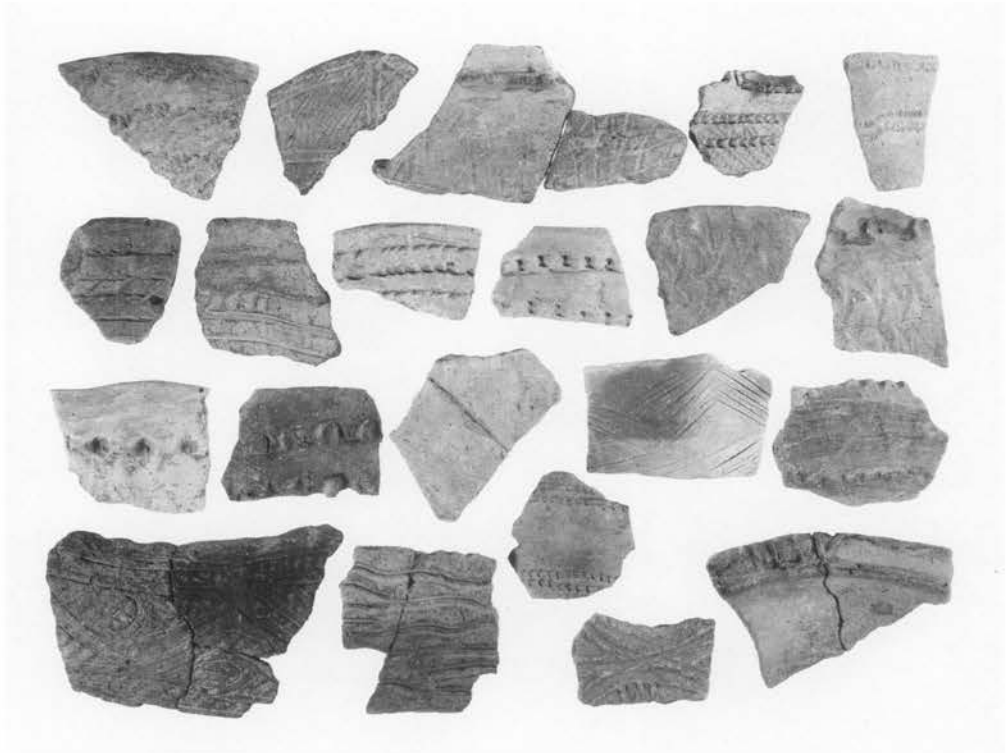
026住居跡出土土器

026住居跡遺物出土状況



026住居跡出土土器

031住居跡



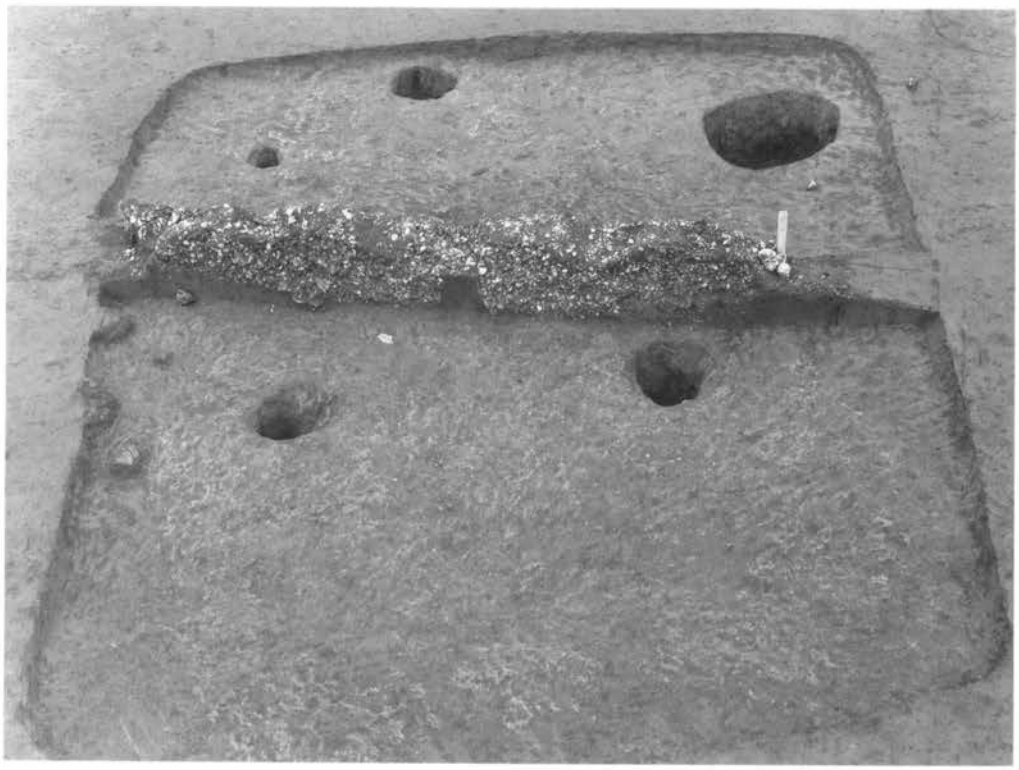
031住居跡出土土器

052住居跡

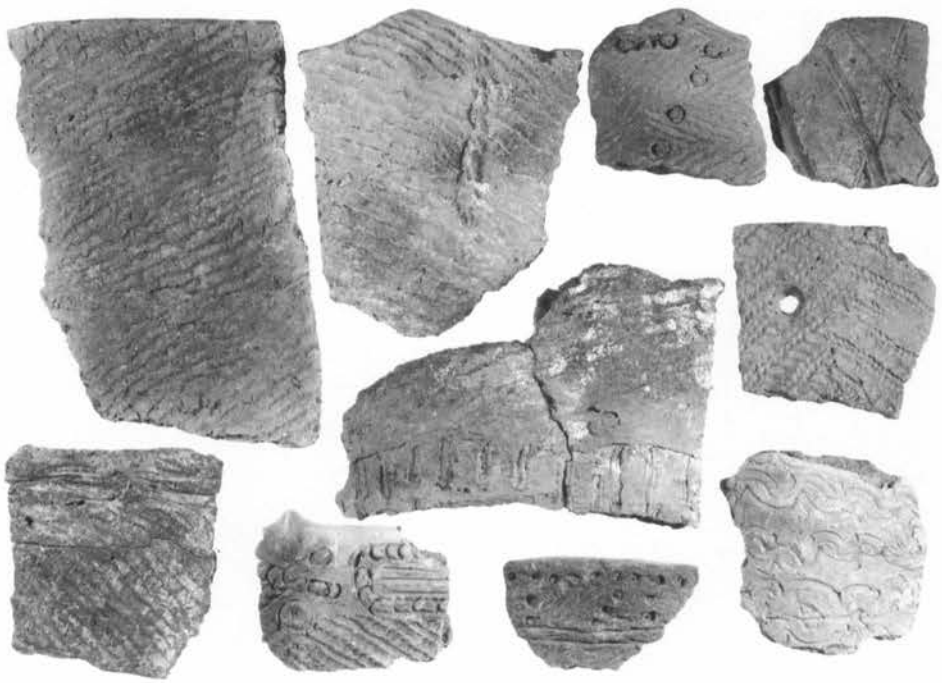
052住居跡貝層検出状況

103住居跡

103住居跡貝層検出状況



103住居跡貝層断面



103住居跡出土土器

1

2

3

4

5

6

103住居跡出土土器

1

2

3

4

5

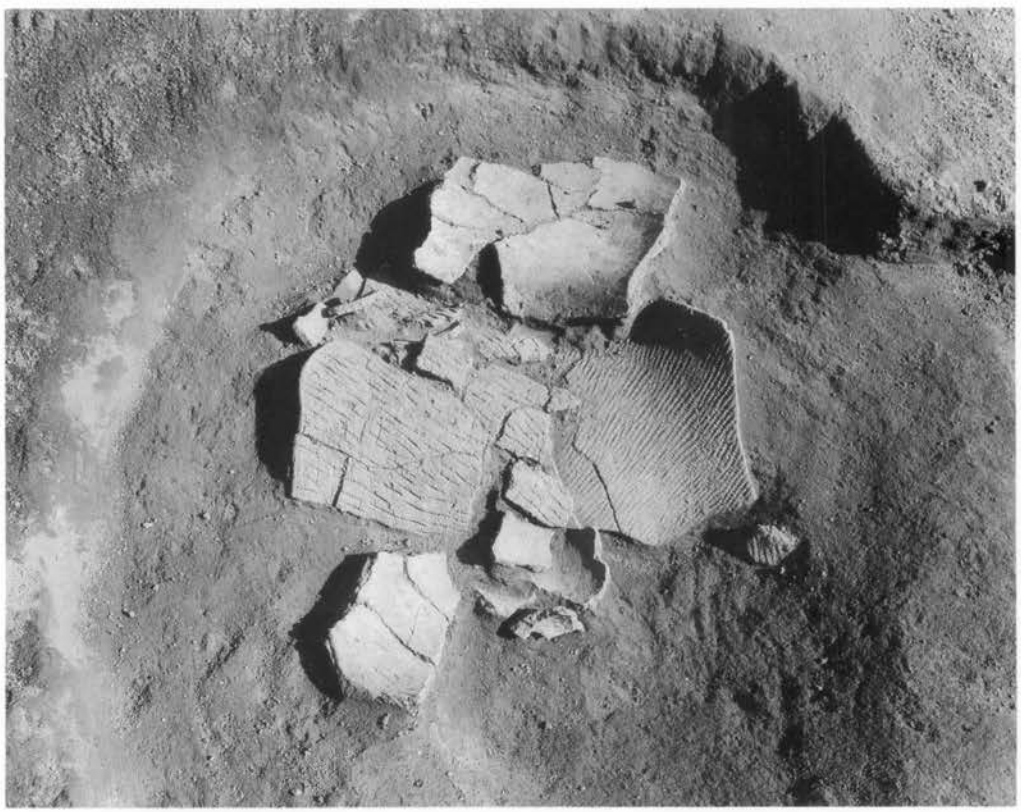
6

103住居跡出土土器

1

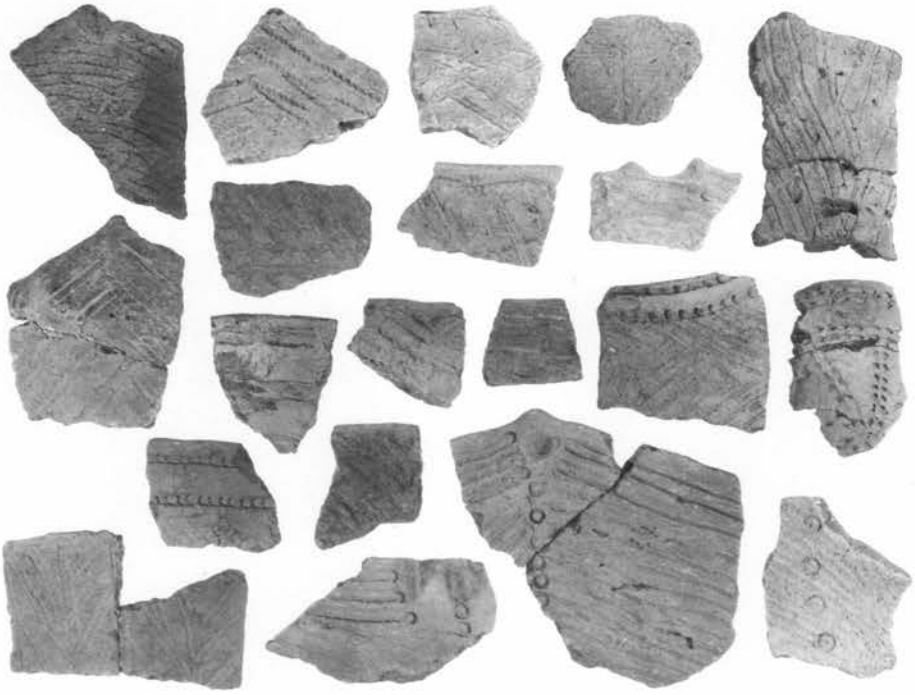
2

103住居跡出土土器



118住居跡遺物出土状況

118住居跡



118住居跡出土土器

1

2

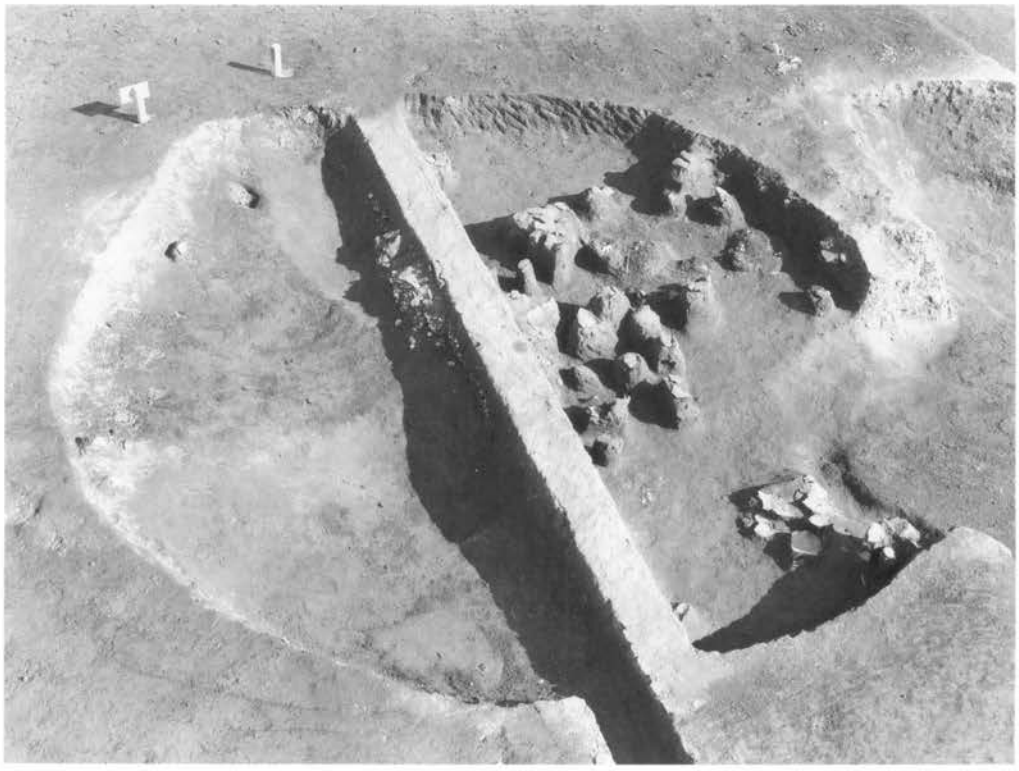
3

4

5

6

118住居跡出土土器



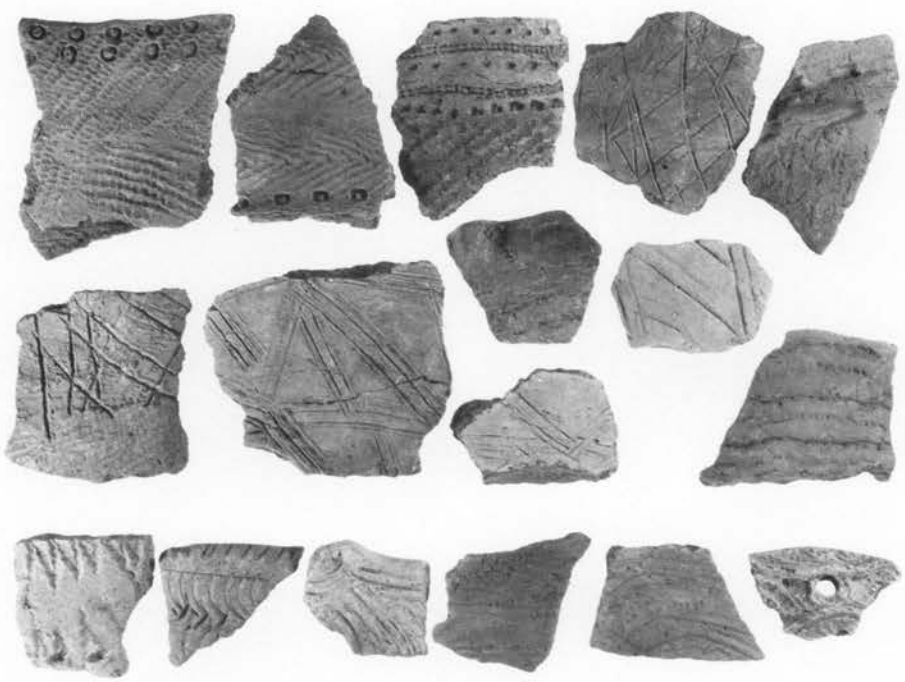
119住居跡

1

2

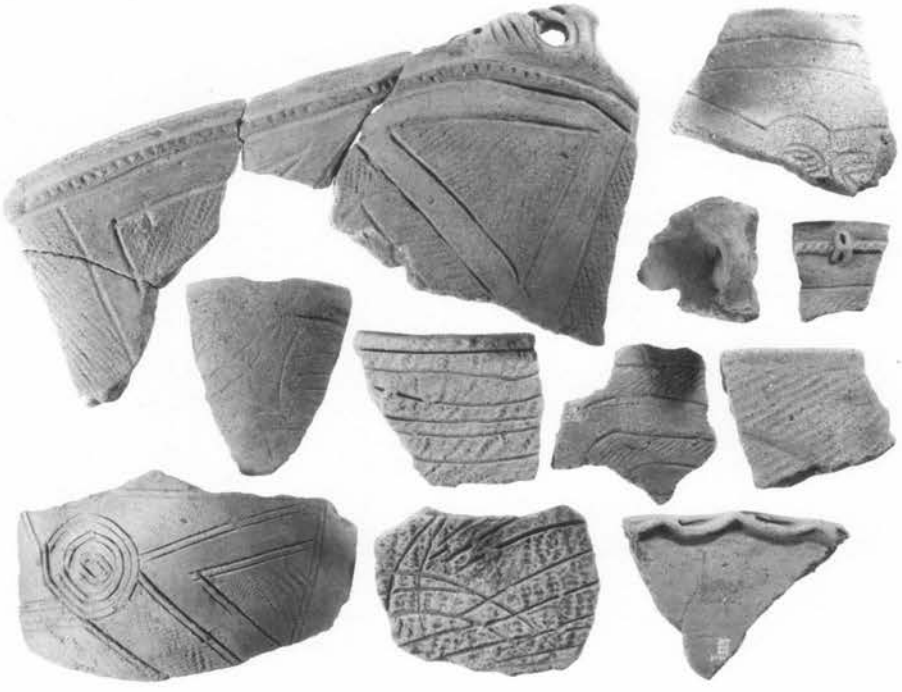
119住居跡出土遺物

119住居跡出土土器

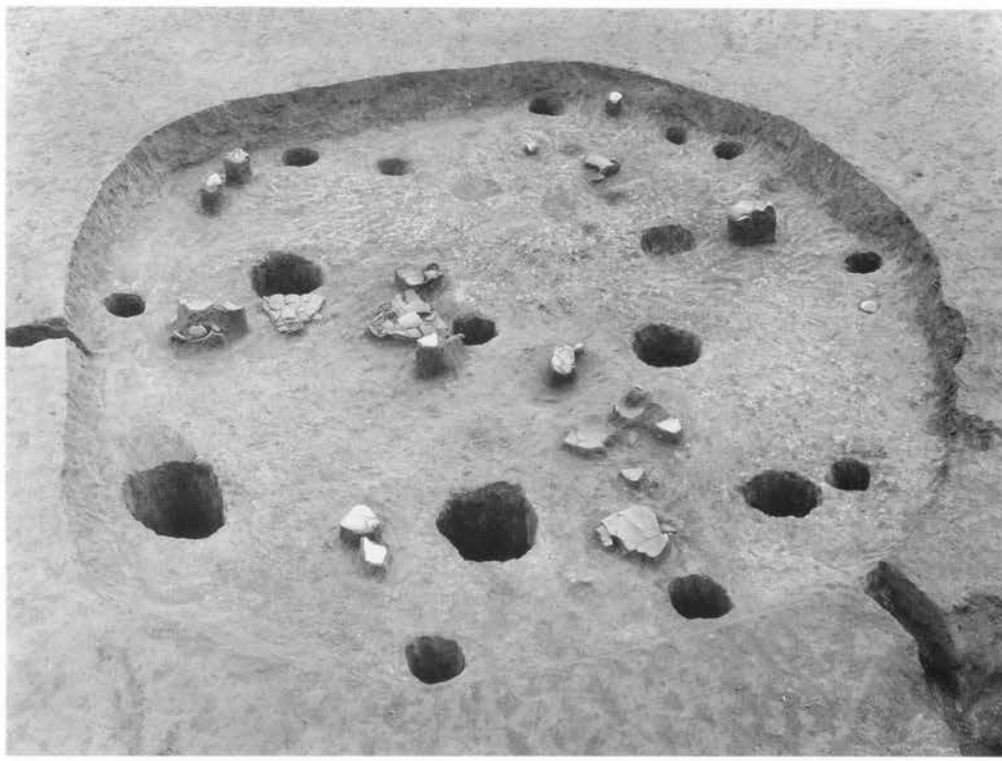


119住居跡出土土器

017住居跡



017住居跡出土土器



034住居跡

034住居跡遺物出土状況

1

2

3

4

5

6

034住居跡出土土器

034住居跡出土土器

034住居跡出土土器

1

2

3

4

5

6

グリッド出土の土器

1

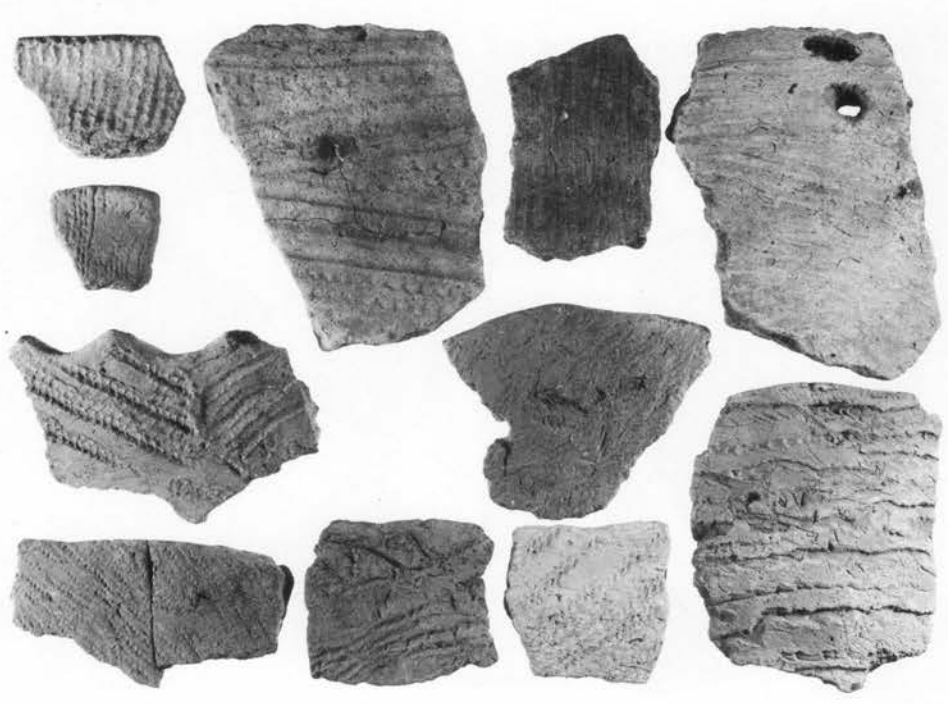
2

3

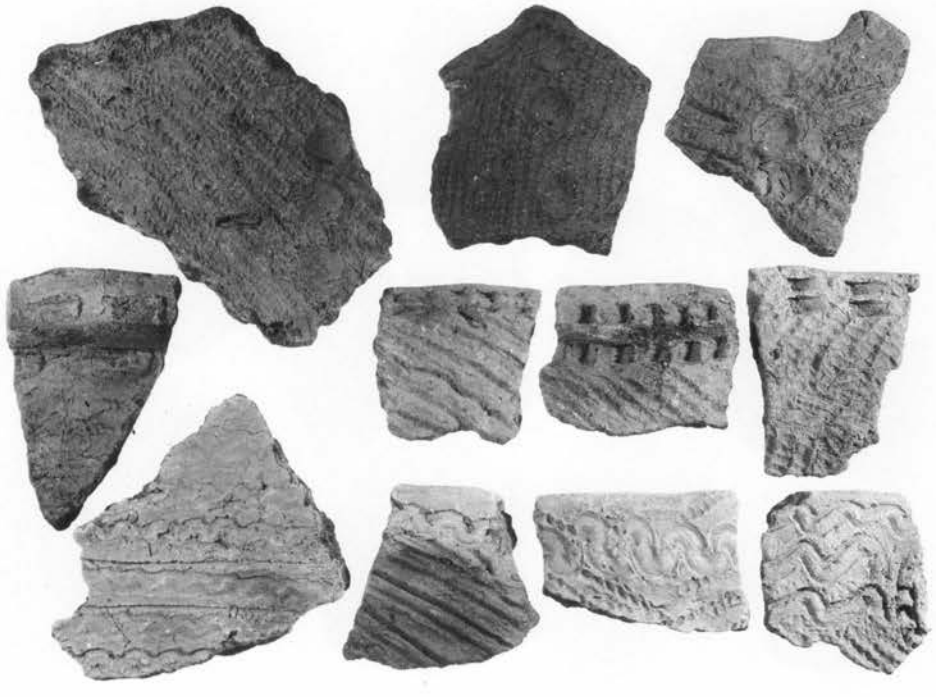
4

5

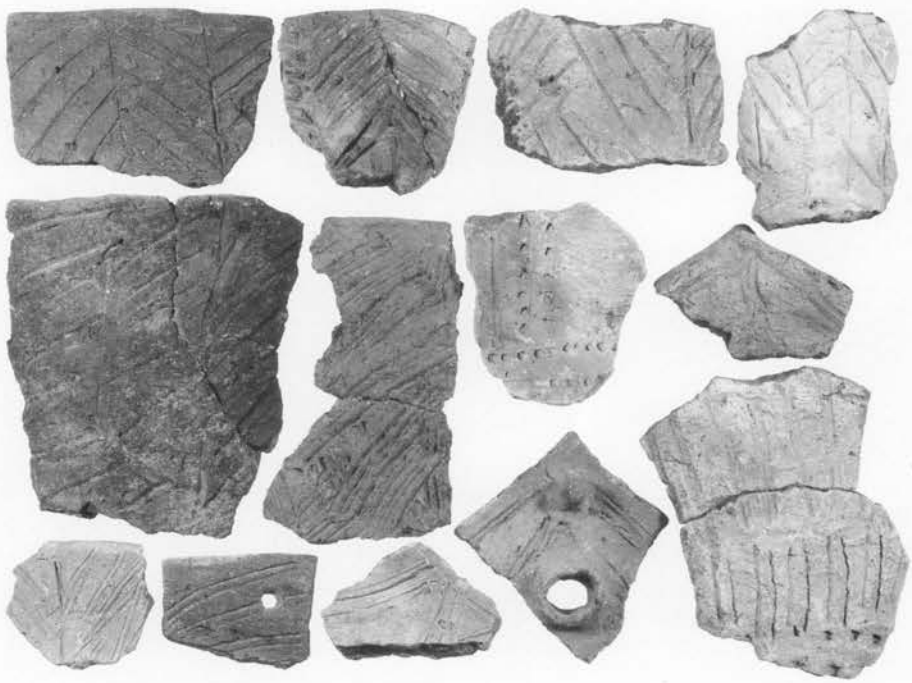
グリッド出土の土器



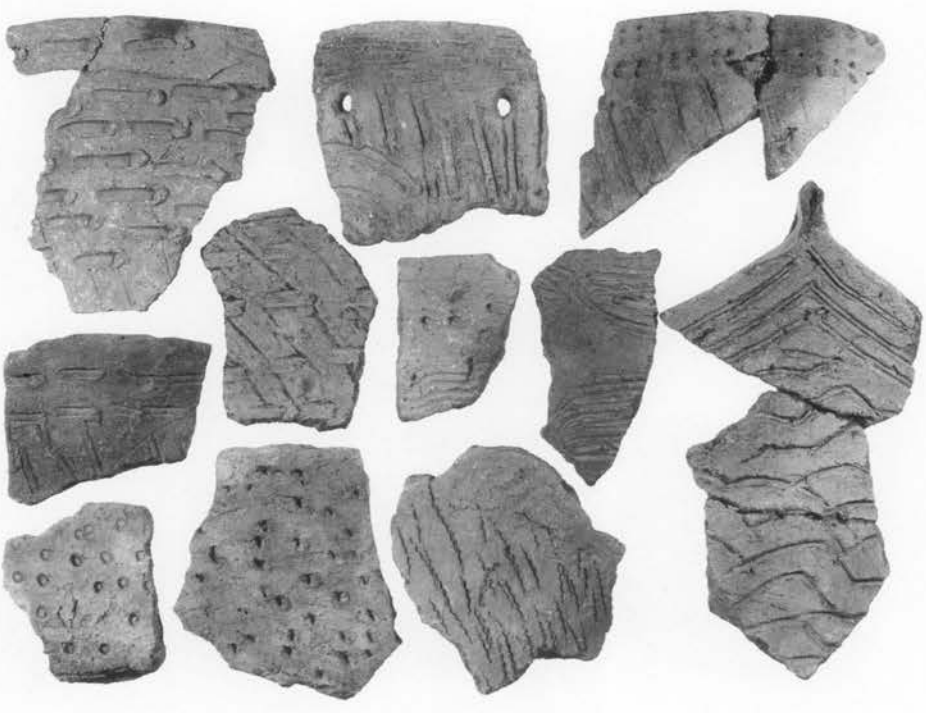
第1群・第2群A類土器



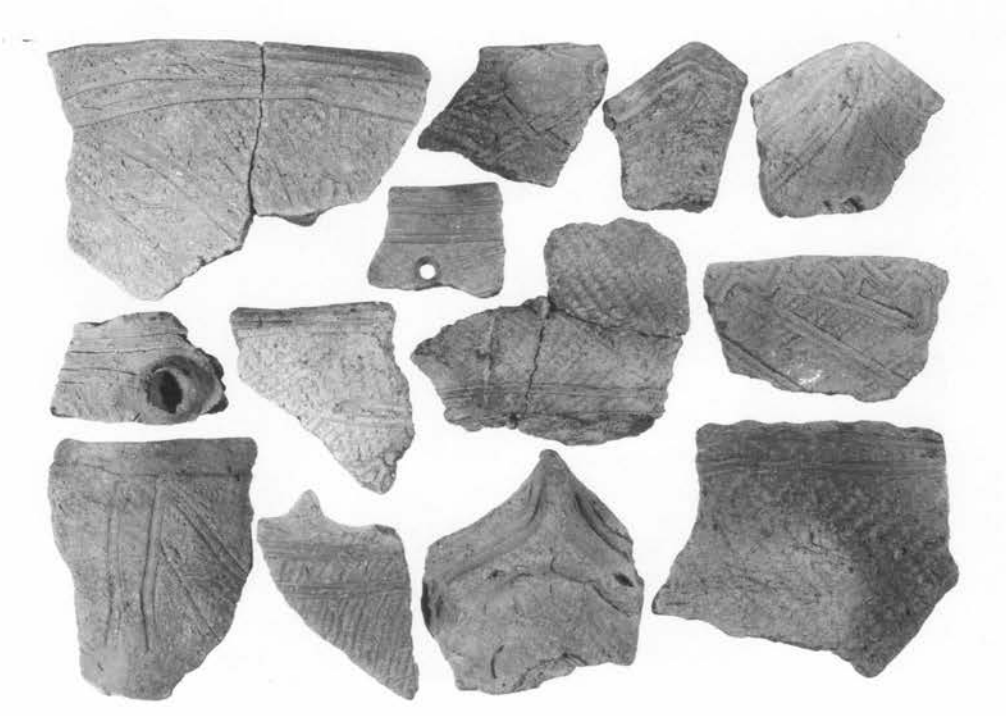
第2群B～D類土器



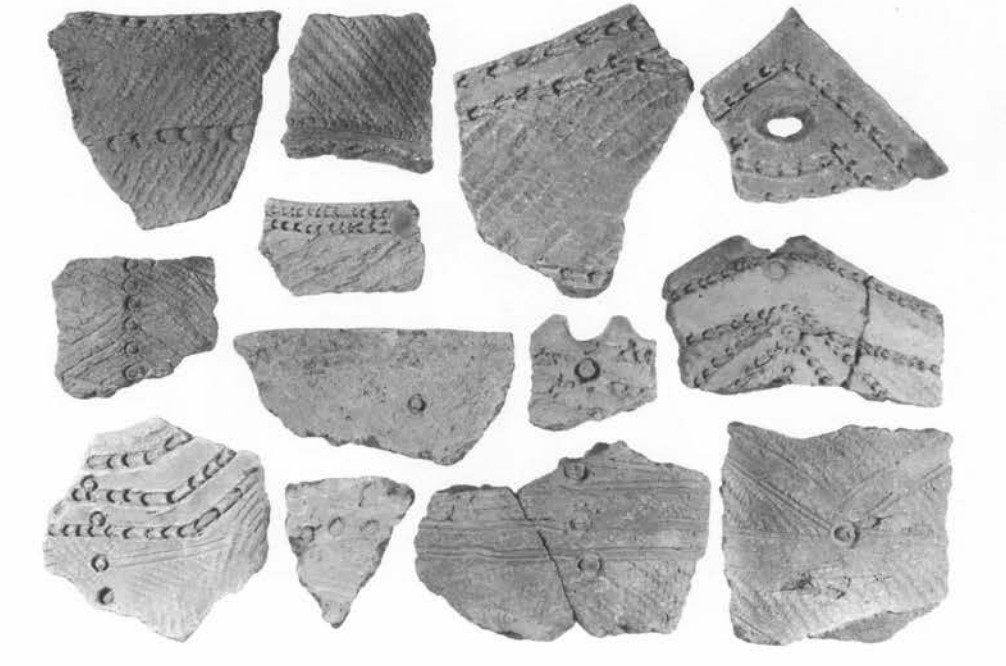
第２群Ｅ・Ｆ類土器



第２群Ｆ～Ｈ類土器

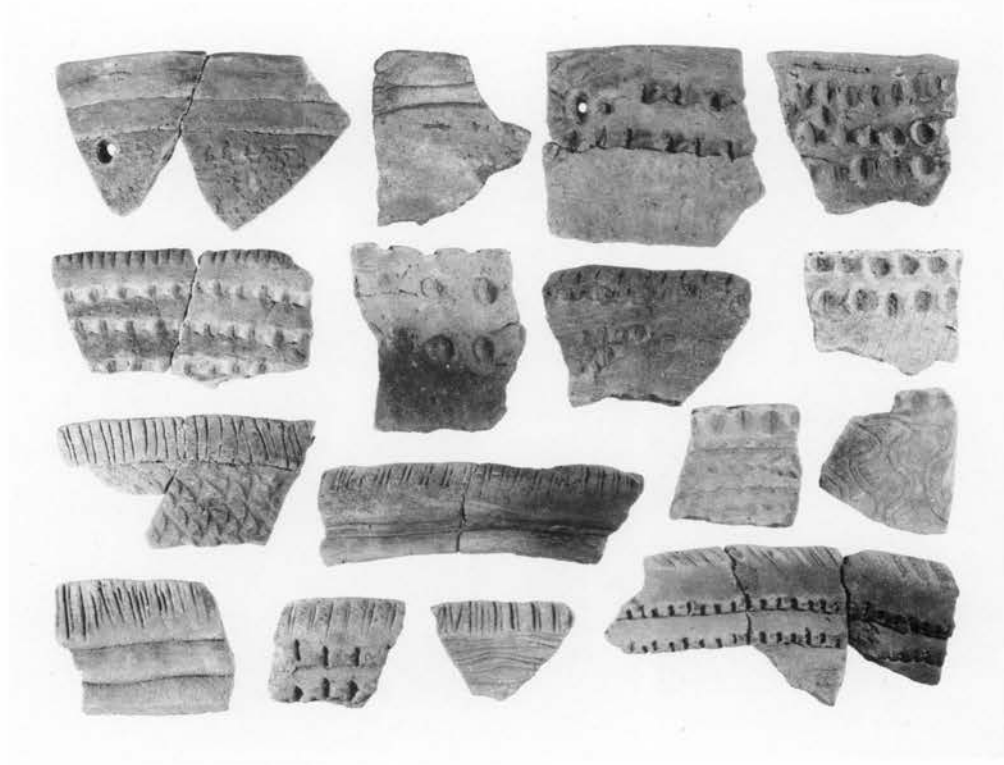


第２群Ⅰ類土器

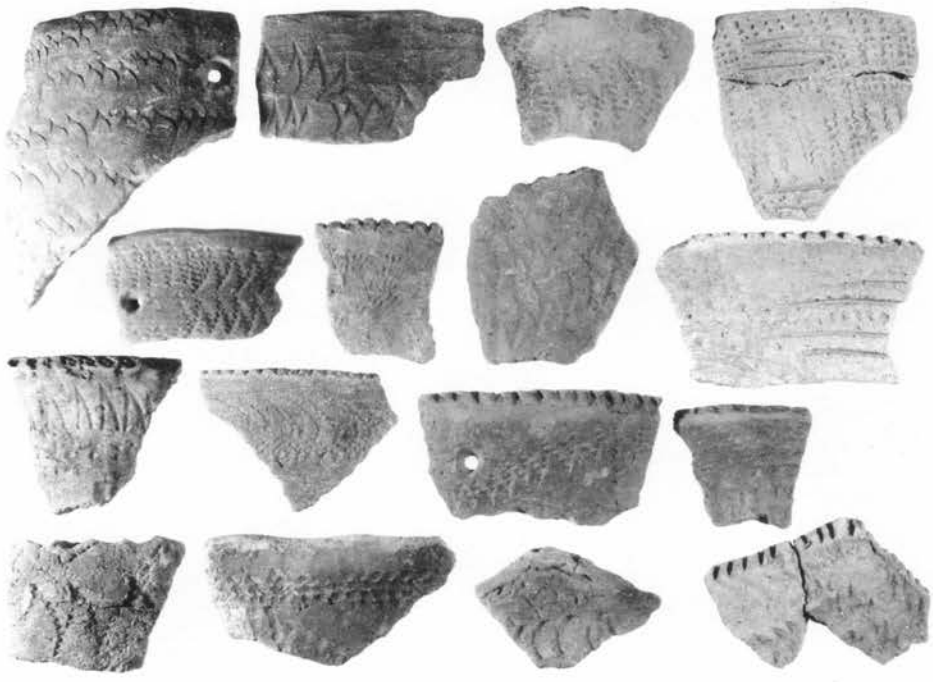


第２群Ｊ・Ｋ類土器

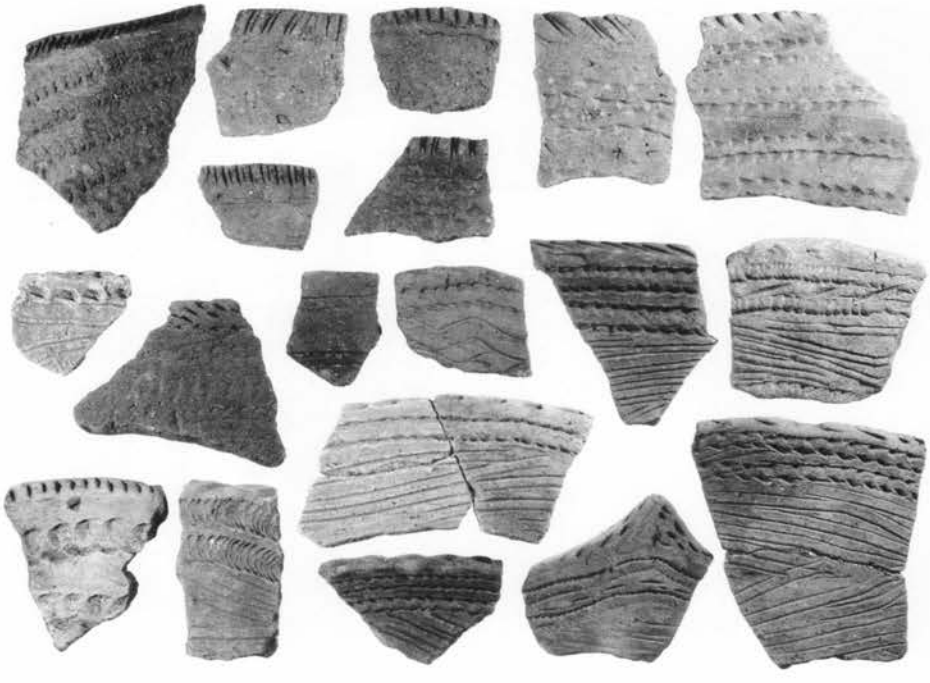
第2群K・L類土器



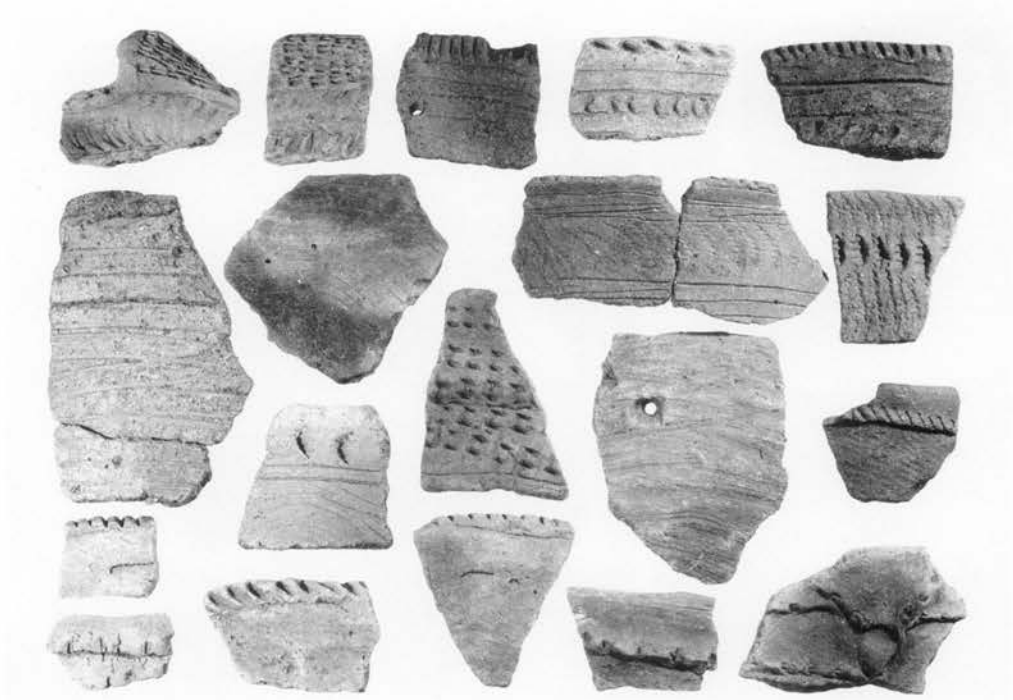
第3群A～C類土器



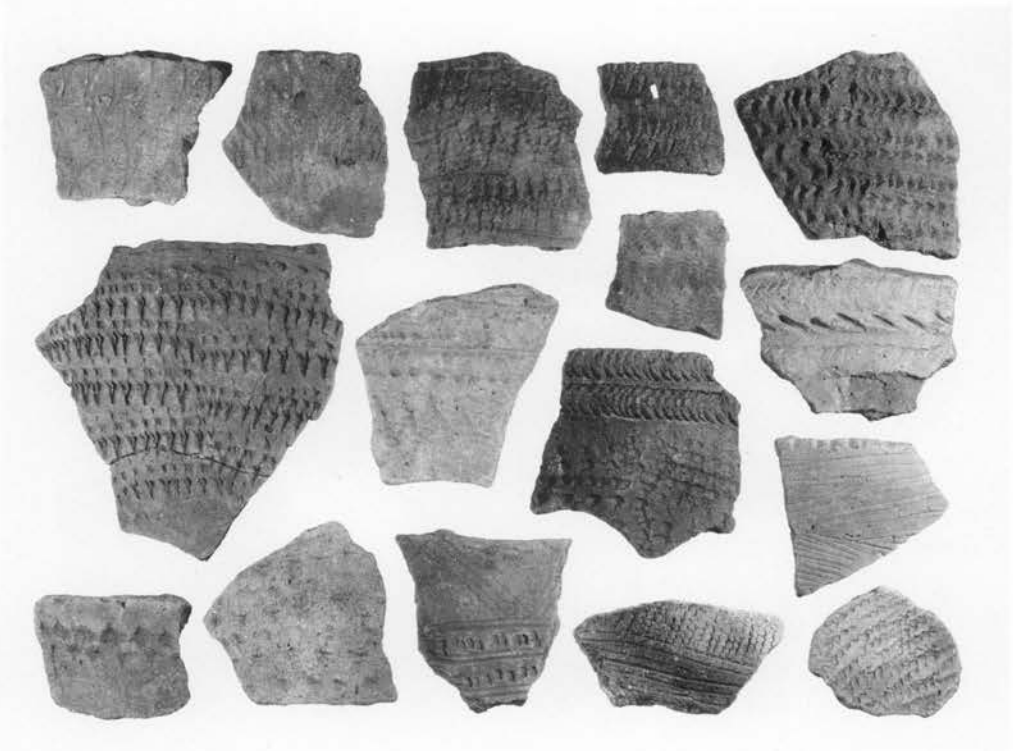
第３群Ｃ類土器



第３群Ｃ～Ｅ類土器



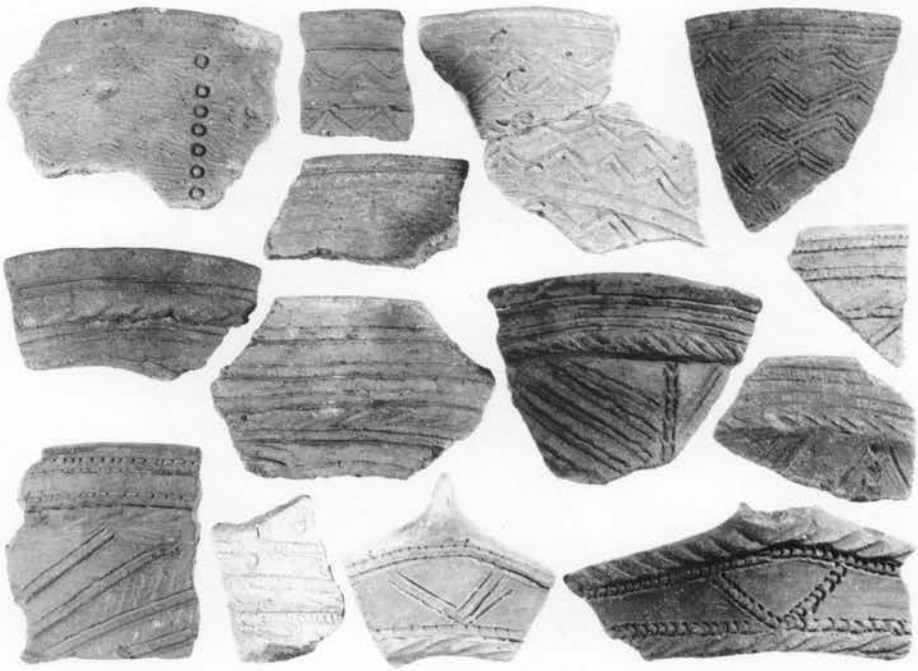
第３群Ｅ・Ｆ類土器



第３群Ｇ類土器

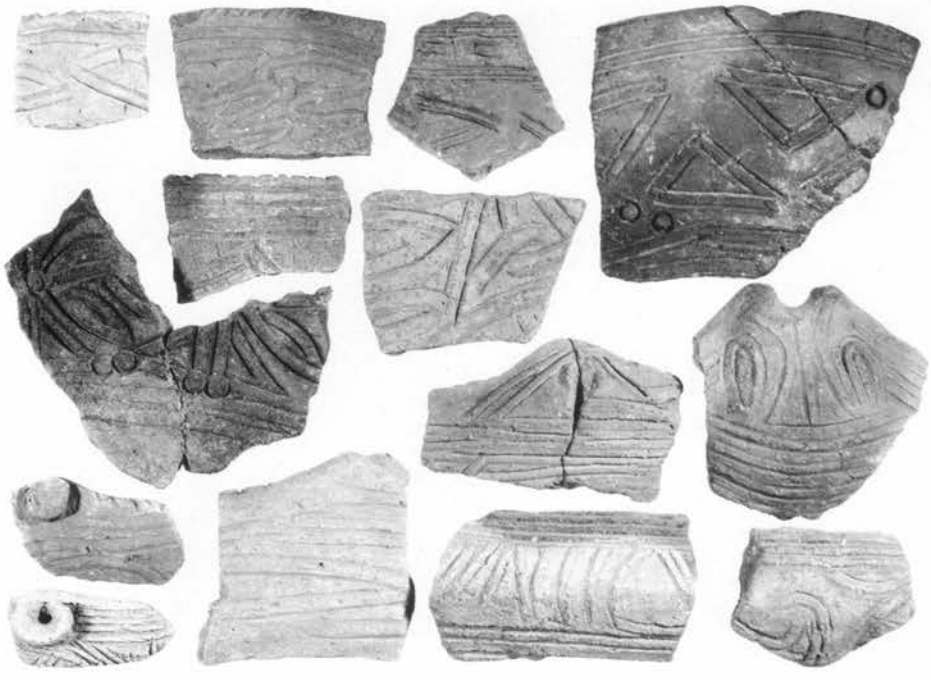
第３群Ｈ類土器

第４群Ａ・Ｂ類土器

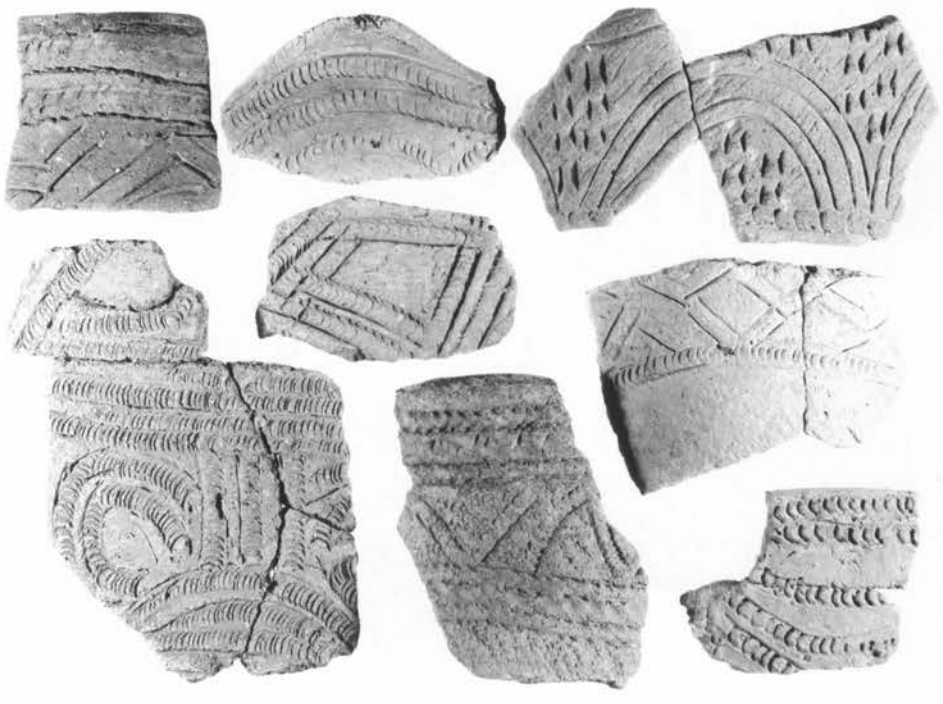


第4群C・D類土器

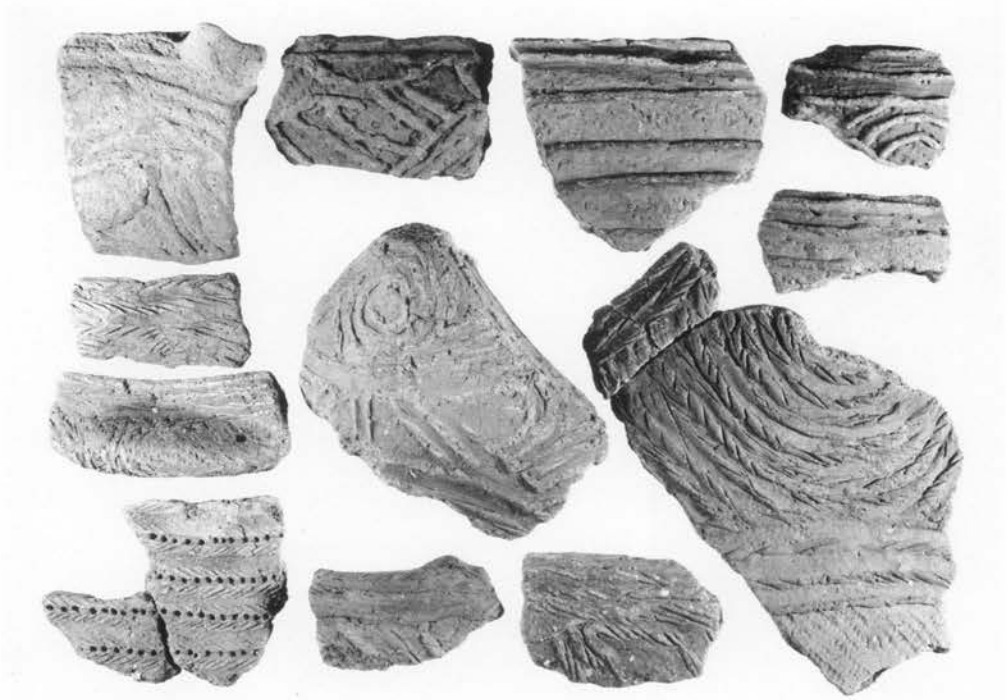
第4群E類土器



第4群F類土器

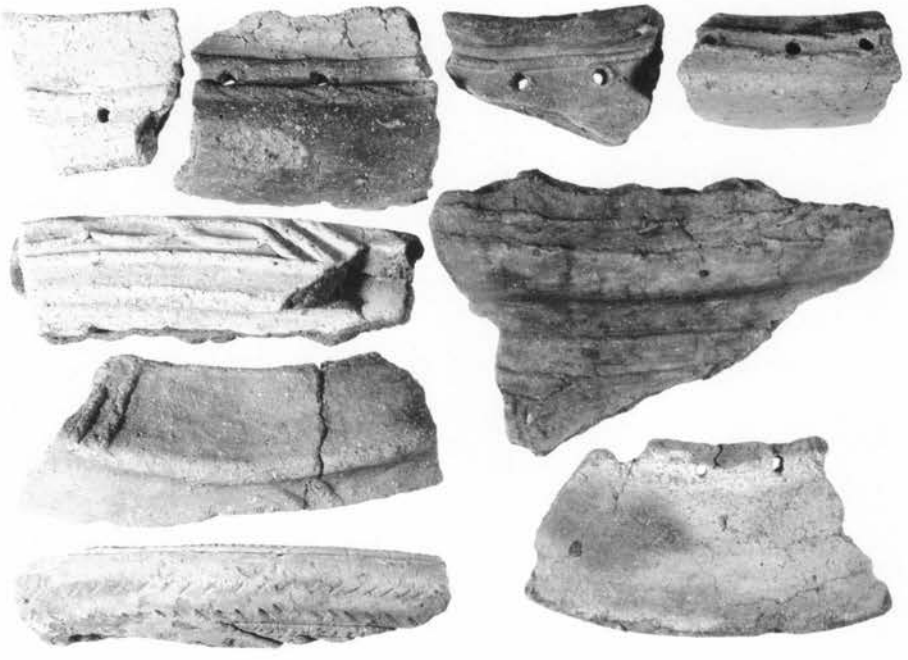


第4群G類土器

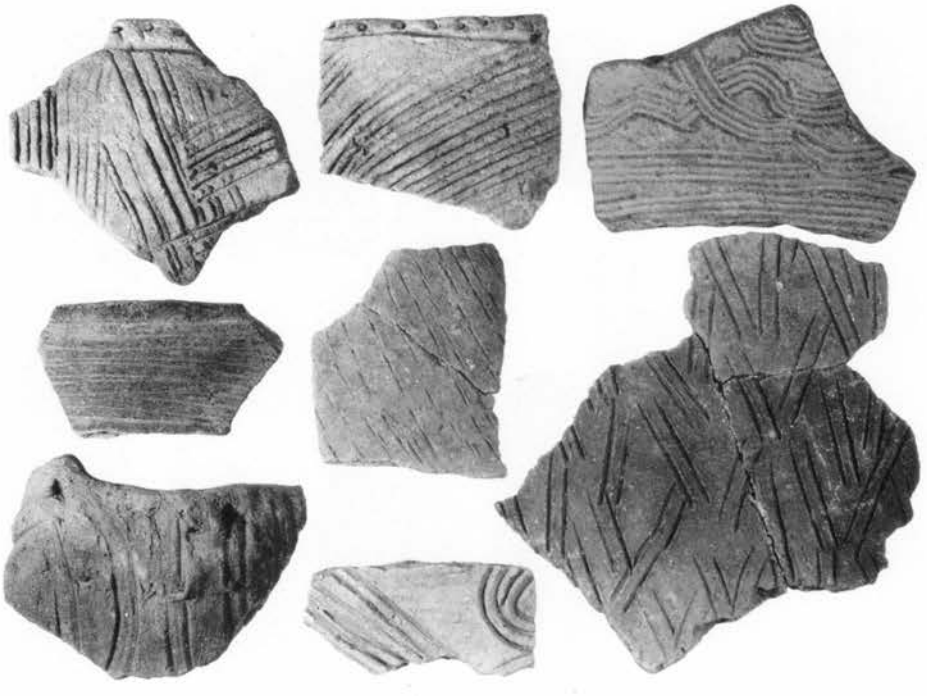


第 4 群H類土器

第 4 群 I 類土器

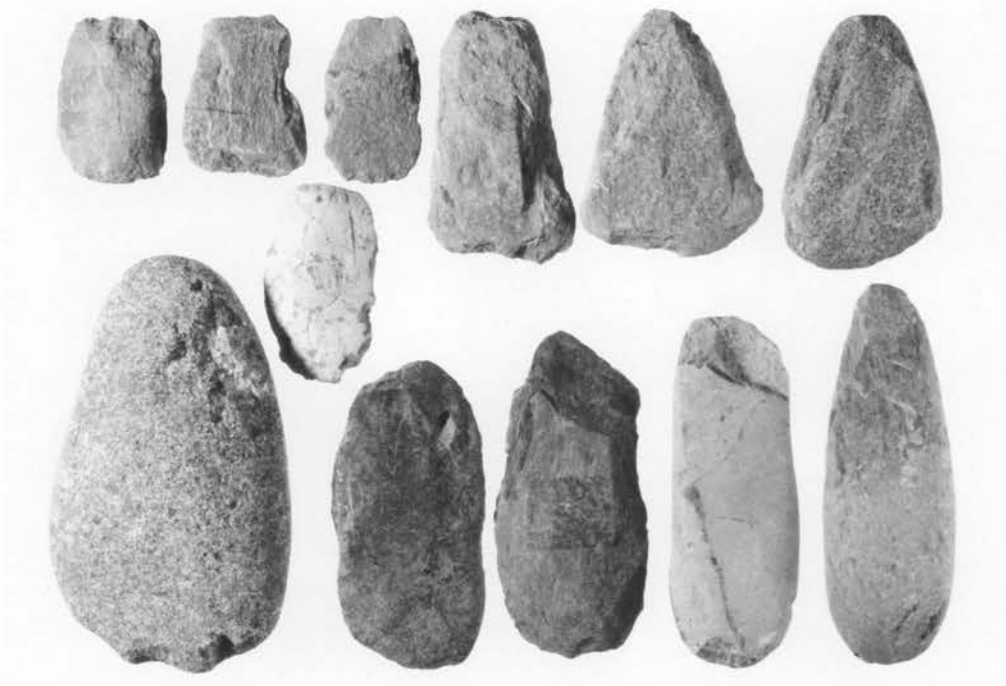


第4群H類土器

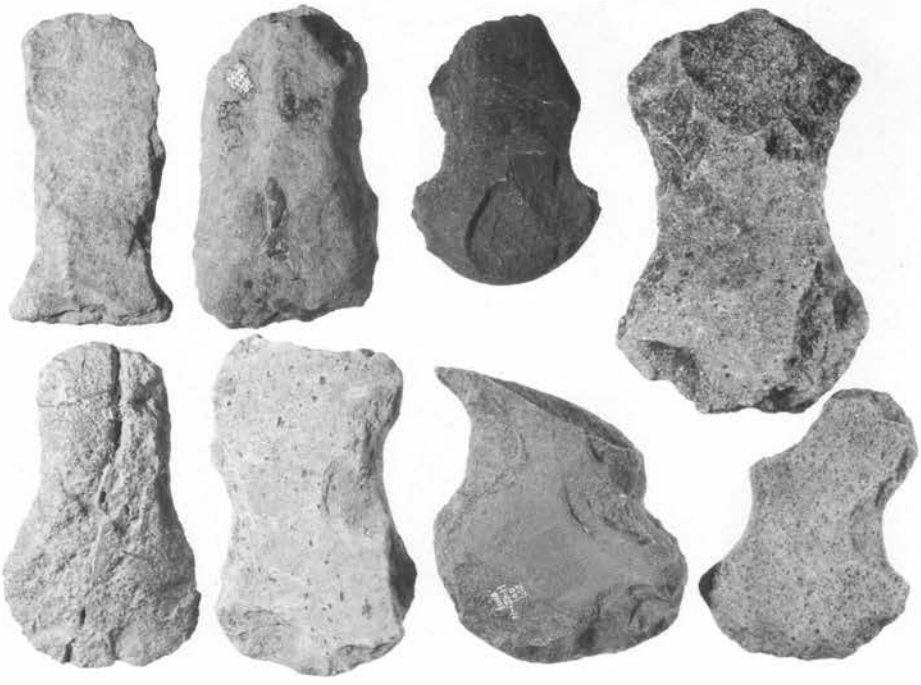


第5群土器

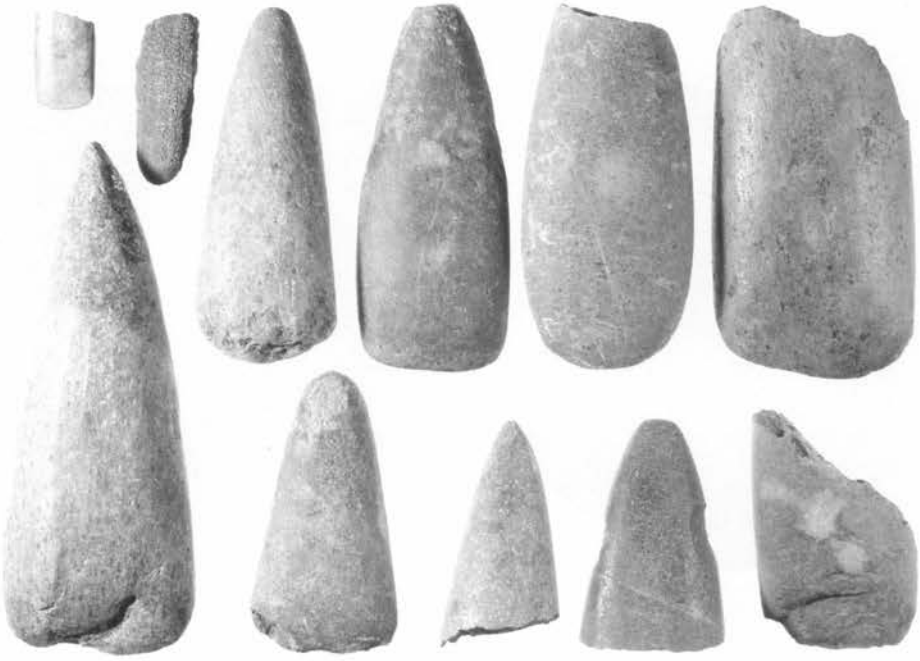
土器片錘



打製石斧

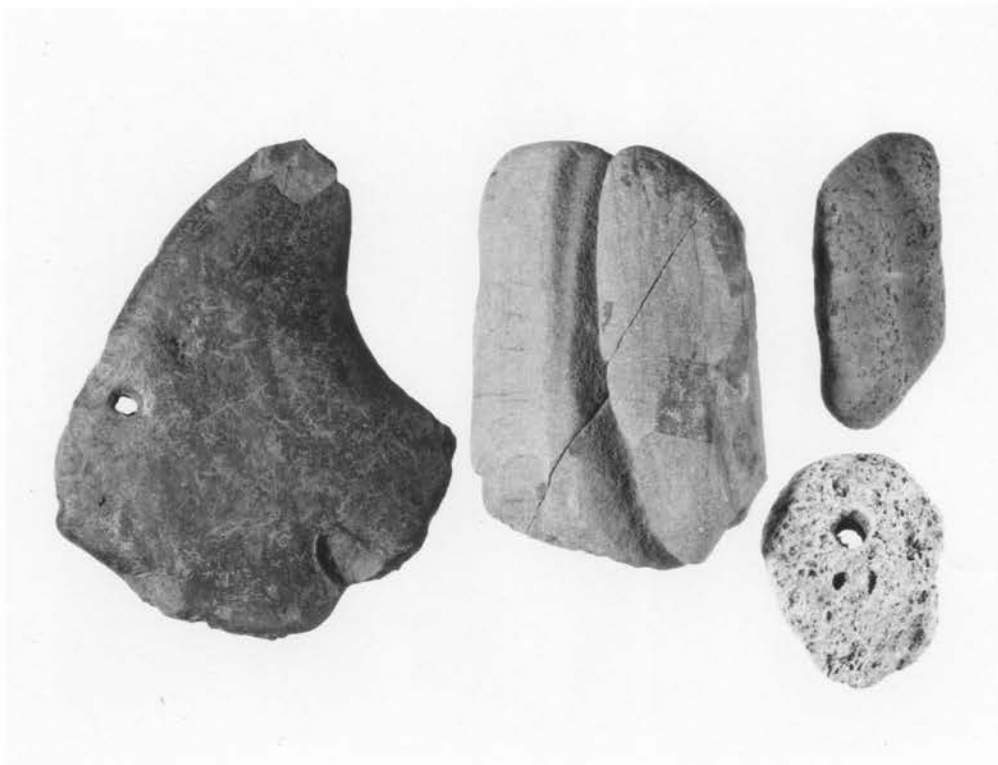


打製石斧

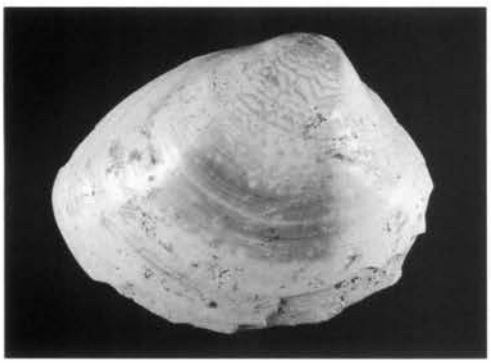


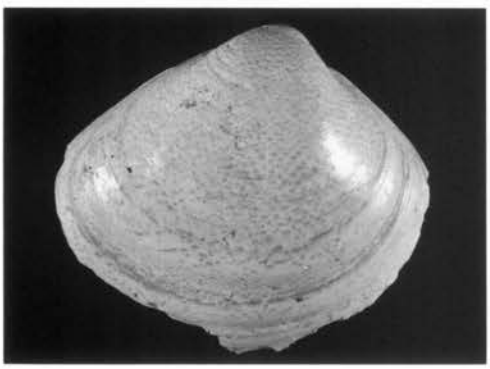
磨製石斧

凹石・磨石

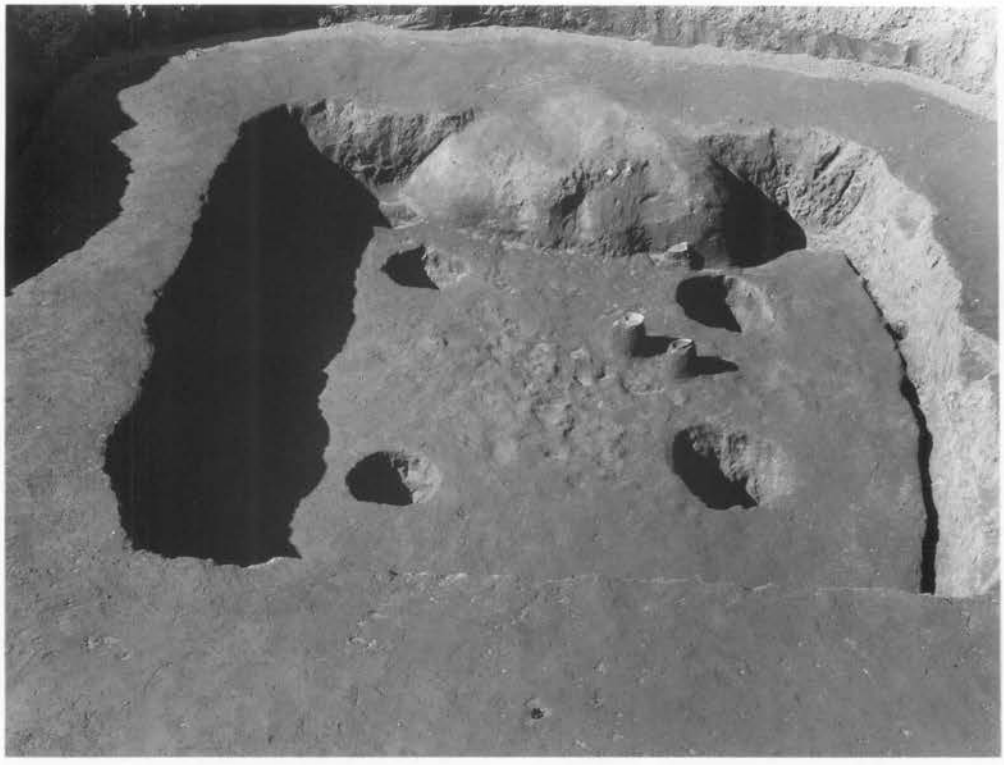


特殊石製品





103住居跡出土貝刃



001住居跡

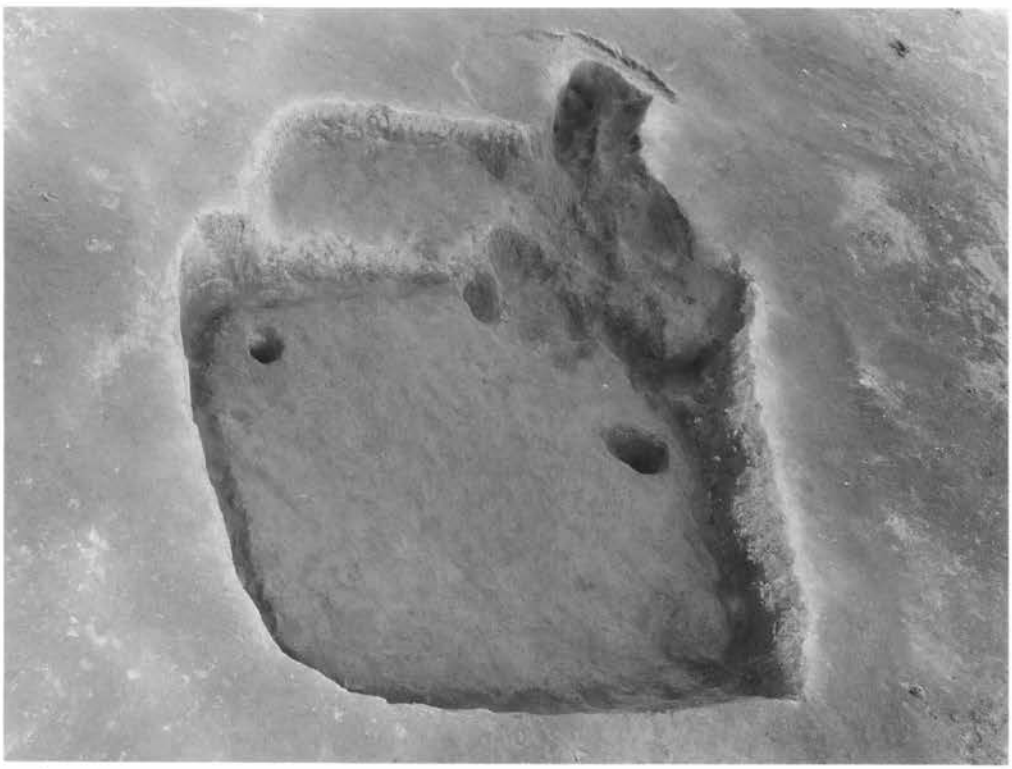
003住居跡

004住居跡

011住居跡

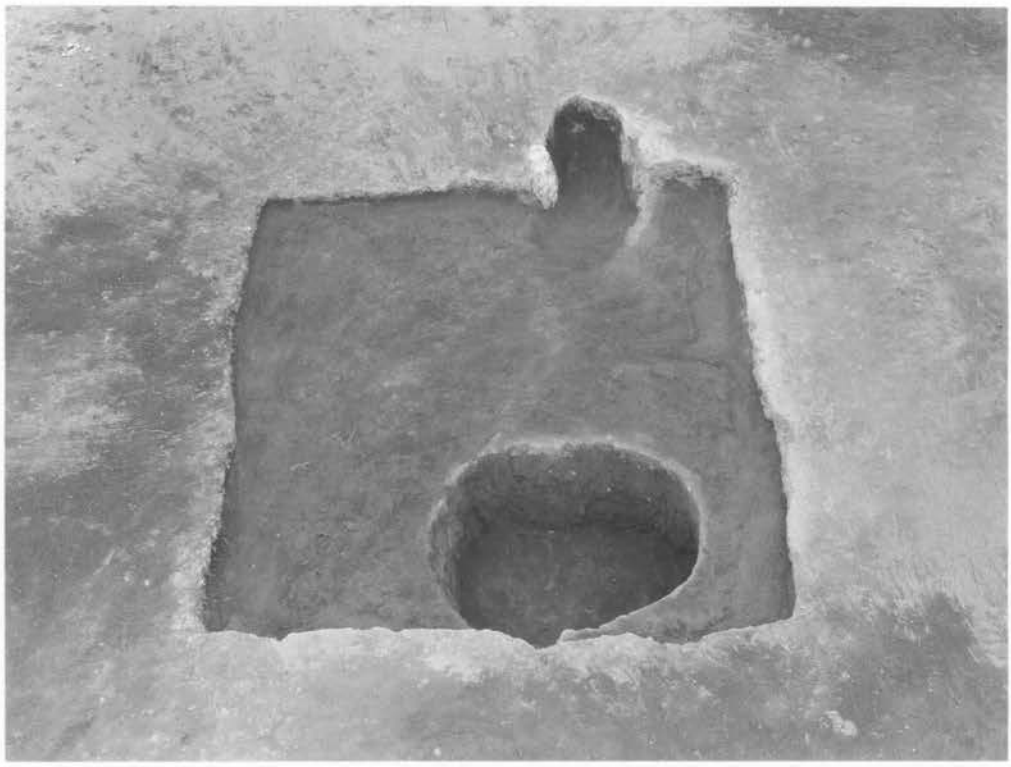
012住居跡

016住居跡



019住居跡

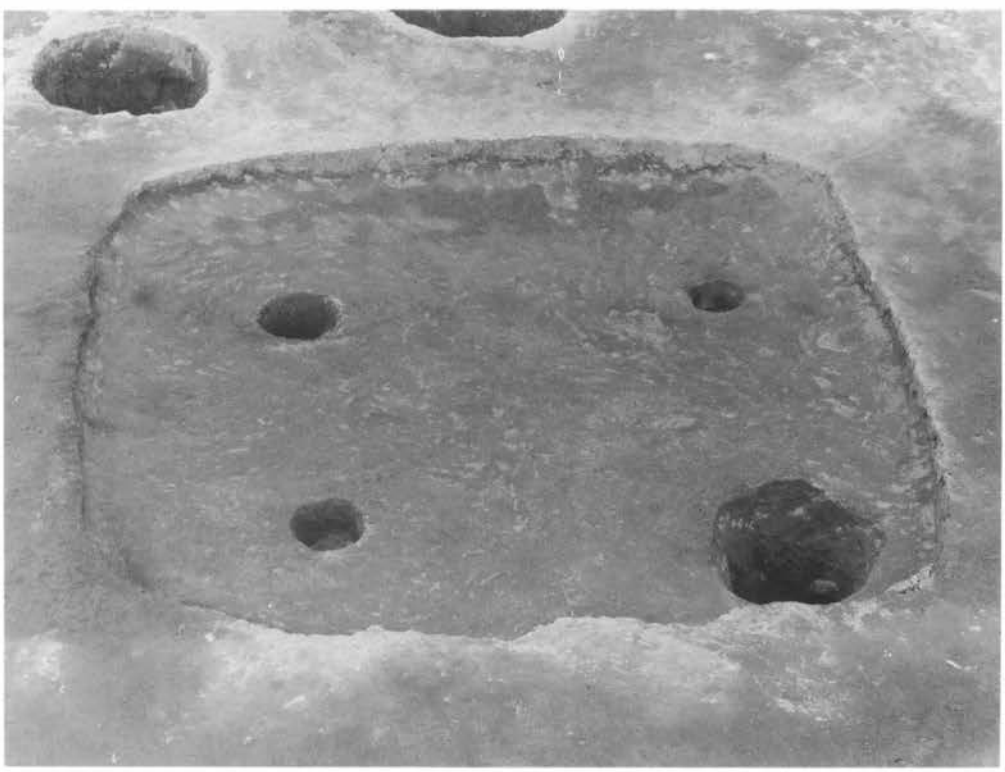
024住居跡



027住居跡

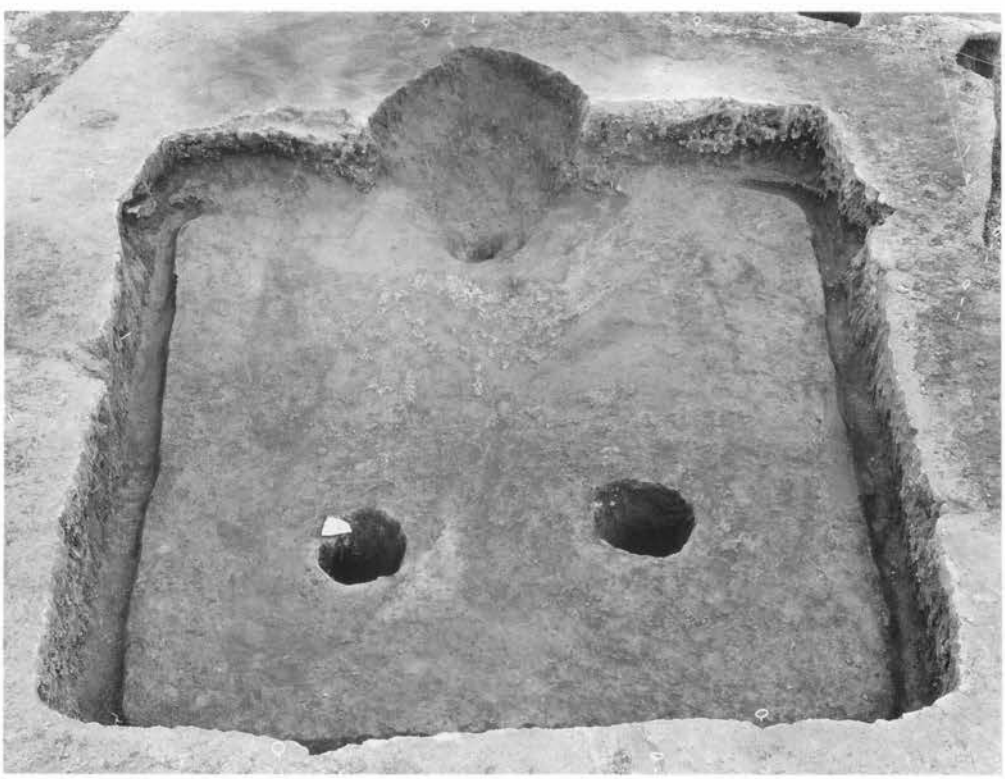
028住居跡

030住居跡



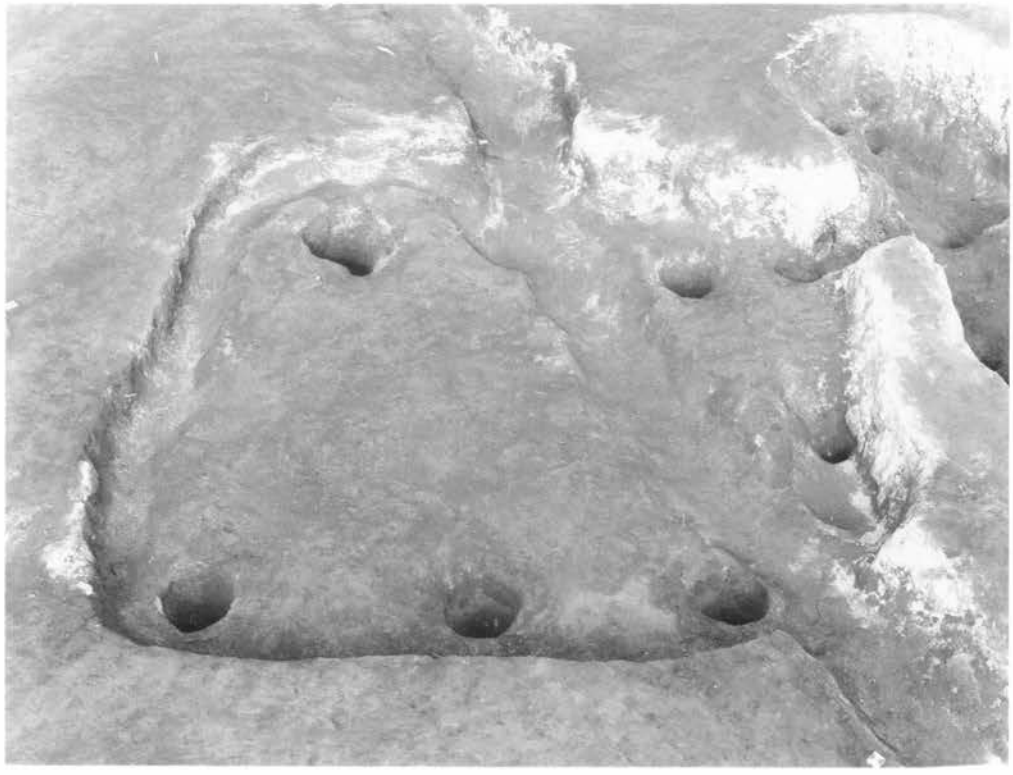
033住居跡

037住居跡

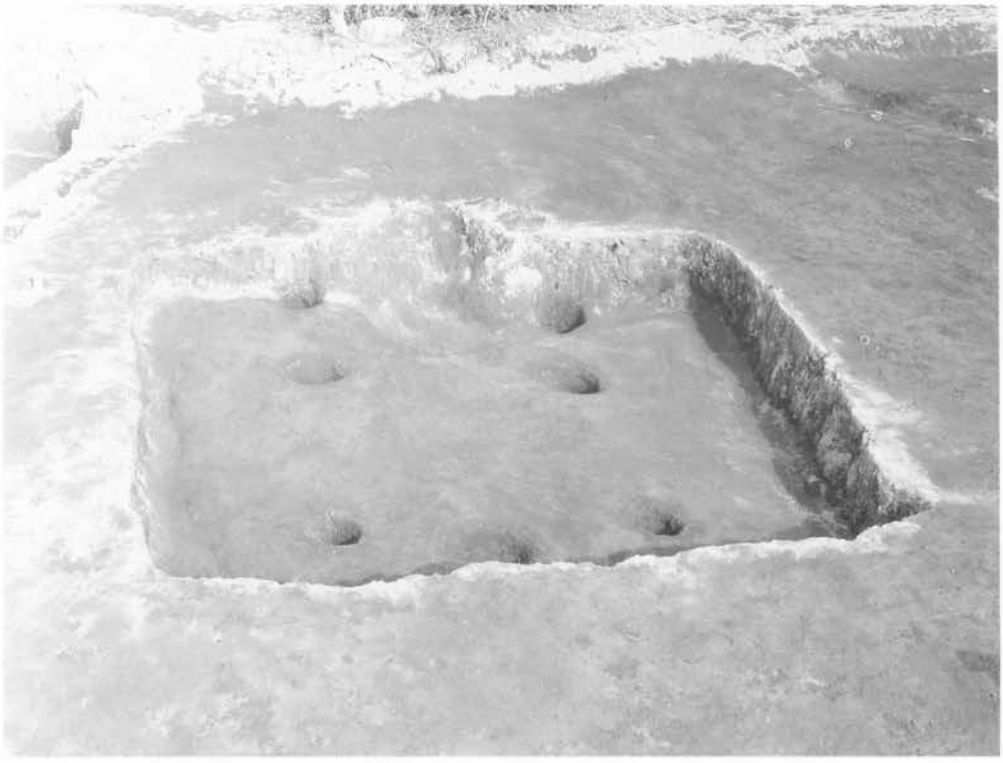


040住居跡

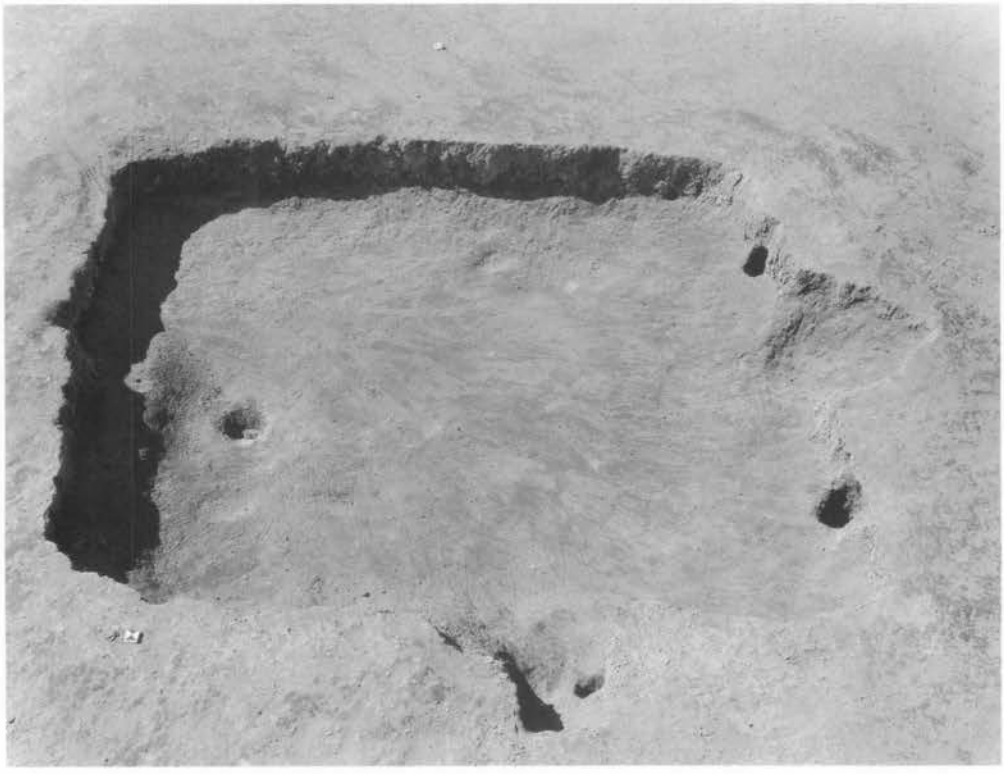
041住居跡



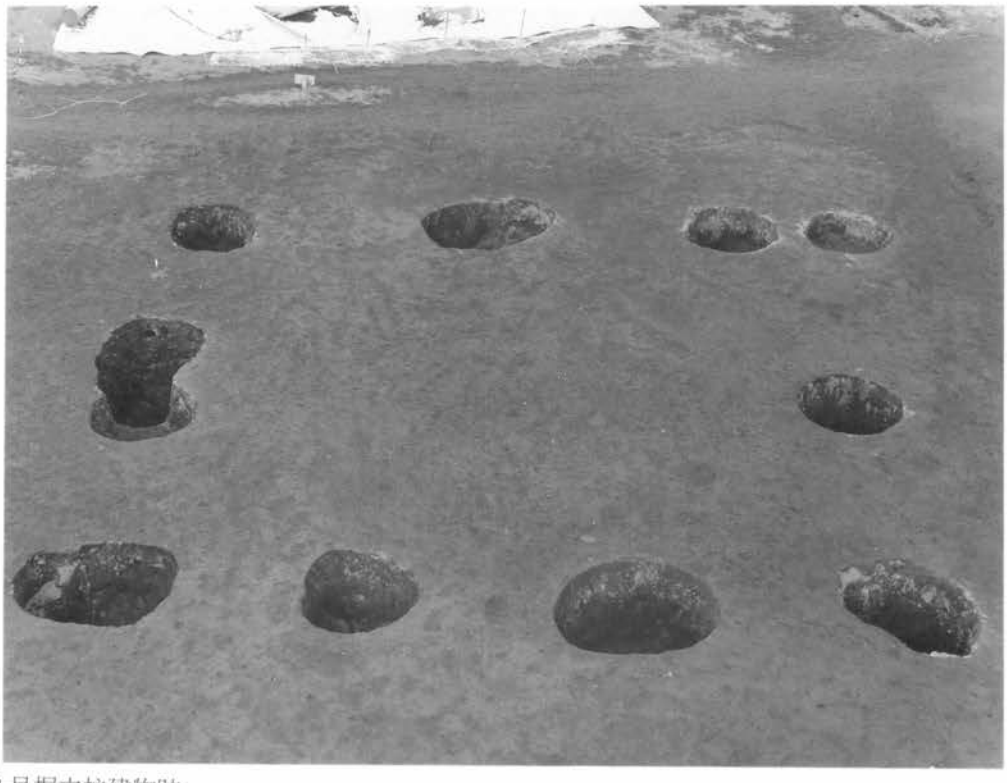
045住居跡



046住居跡



047住居跡



8 号掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡

051地下式土坑

061地下式土坑

1

2

3

4

5

6

7

8

9

001住居跡出土遺物

1

3

2

4

5

9

6

10

7

8

002(1～4)・003(5～10)住居跡出土遺物

1

2

3

4

7

5

6

8

004(1・2)・011(3～8)住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

011(1・2)・014(3)・019(4～6)・033(7)住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

016住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

024(1～4)・028(5)・030(6・7)・037(8～11)住居跡出土遺物

1

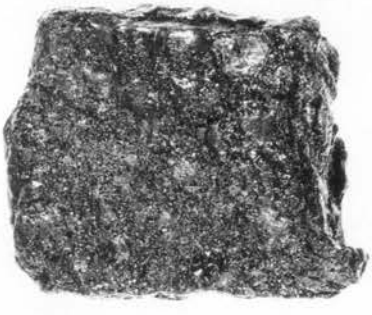
2

3

4

5

6



7

039住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

040住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

040住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

041住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

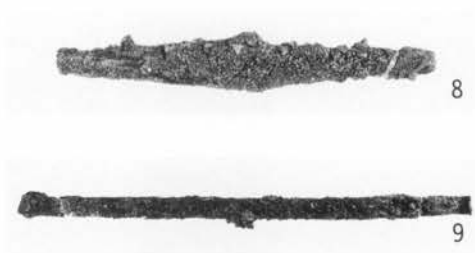
6

7

8

9

041(1～5)・042(6・7)・045(8)・047(9)住居跡出土遺物



046(1～6)・057(7～9)住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

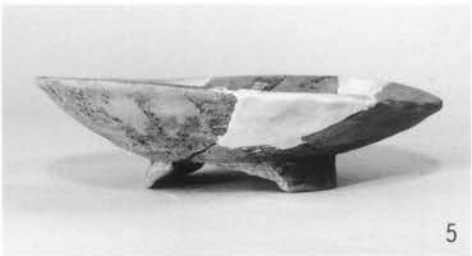
058住居跡出土遺物

1

2

3

4


5

6

7

8

9

10

11

058住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

グリッド出土遺物

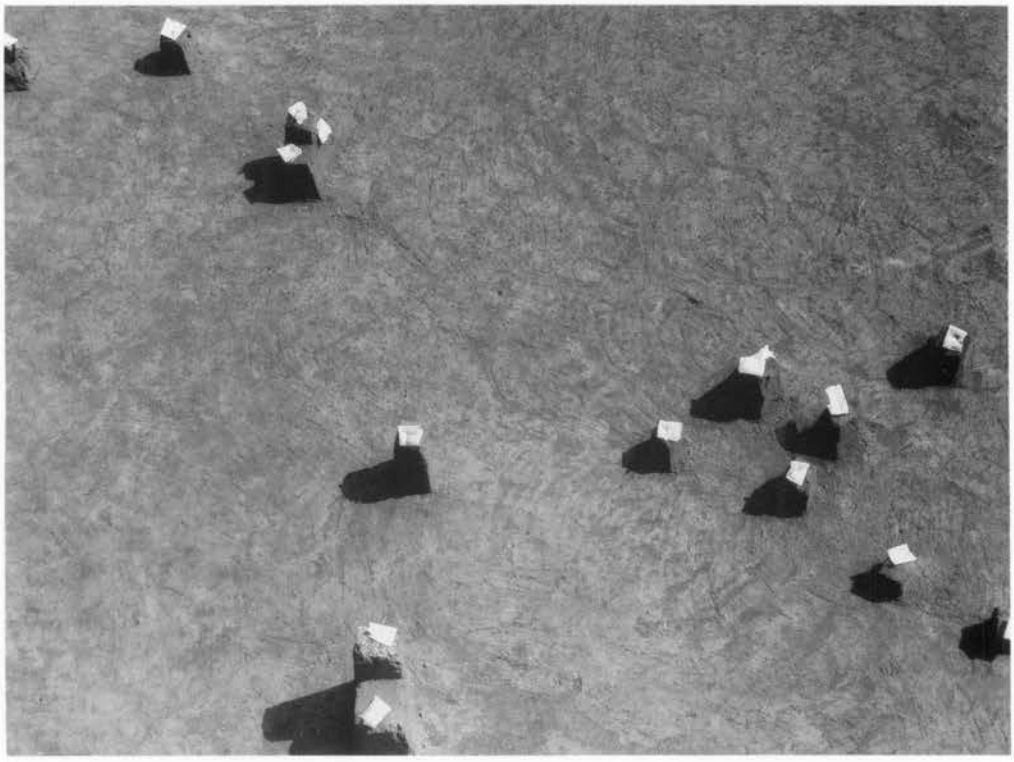
中山新田II－2・III遺跡を望む全景(東から)

中山新田II－1・2遺跡を望む全景(西南より)

中山新田II遺跡層序

C—09炭化粒検出状況

C－07炭化粒検出状況

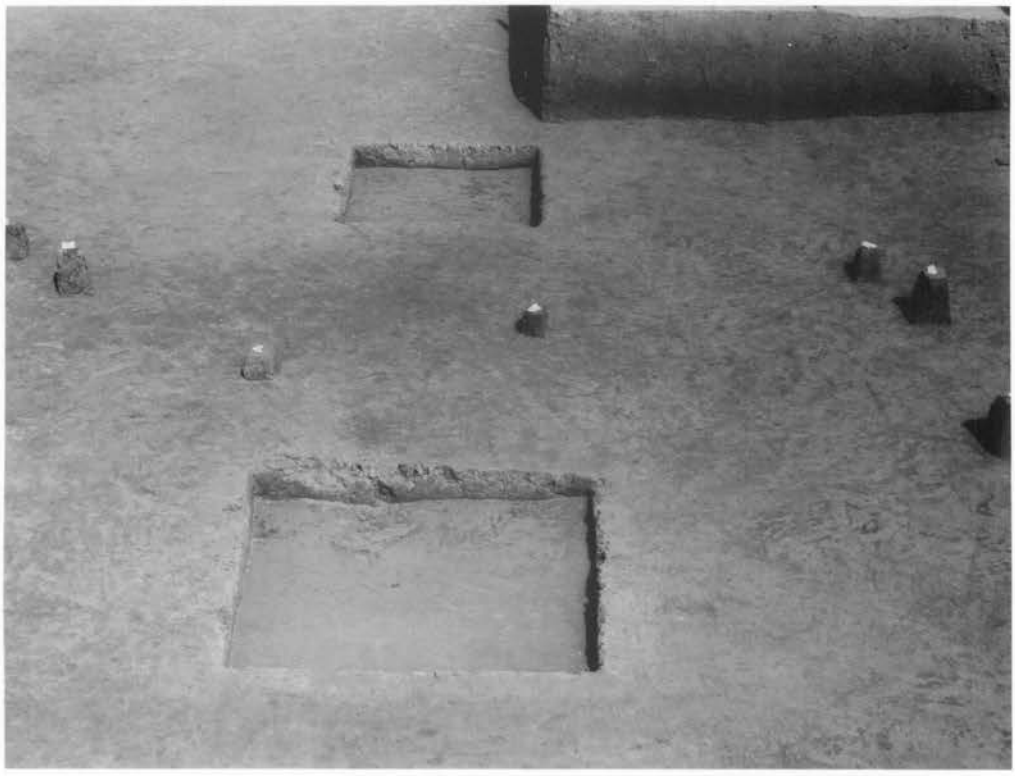


第1ユニットA

第1ユニットC

第8ユニット

第 8 ユニット



第 9 ユニット

第11ユニット

第12ユニット

第12ユニット

第12ユニット(左)第13ユニット(右)

第13ユニット

第13ユニット

図版 78

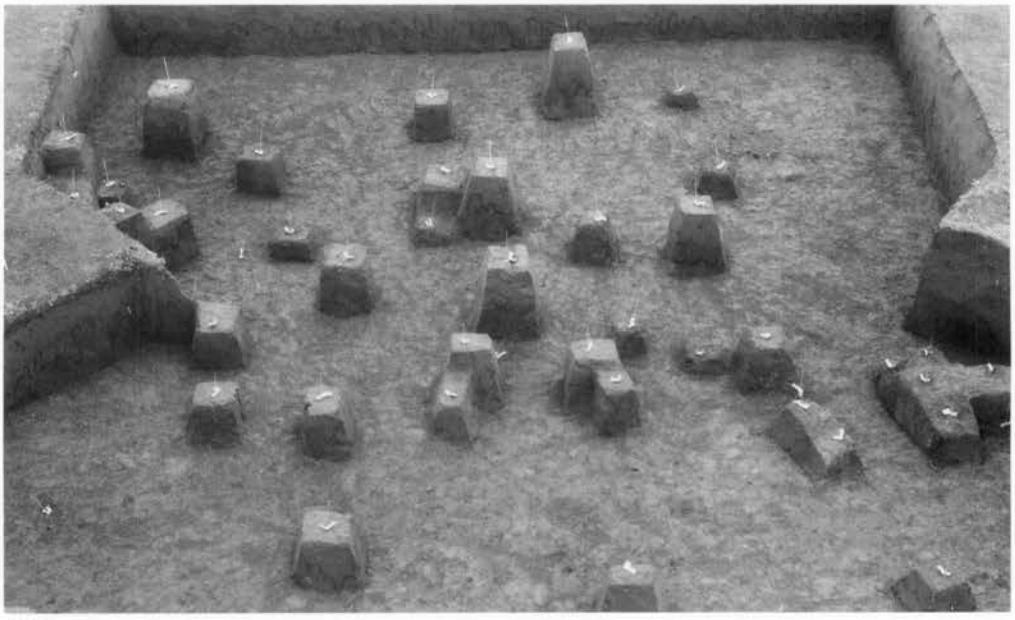
第16ユニット

第17・18ユニット

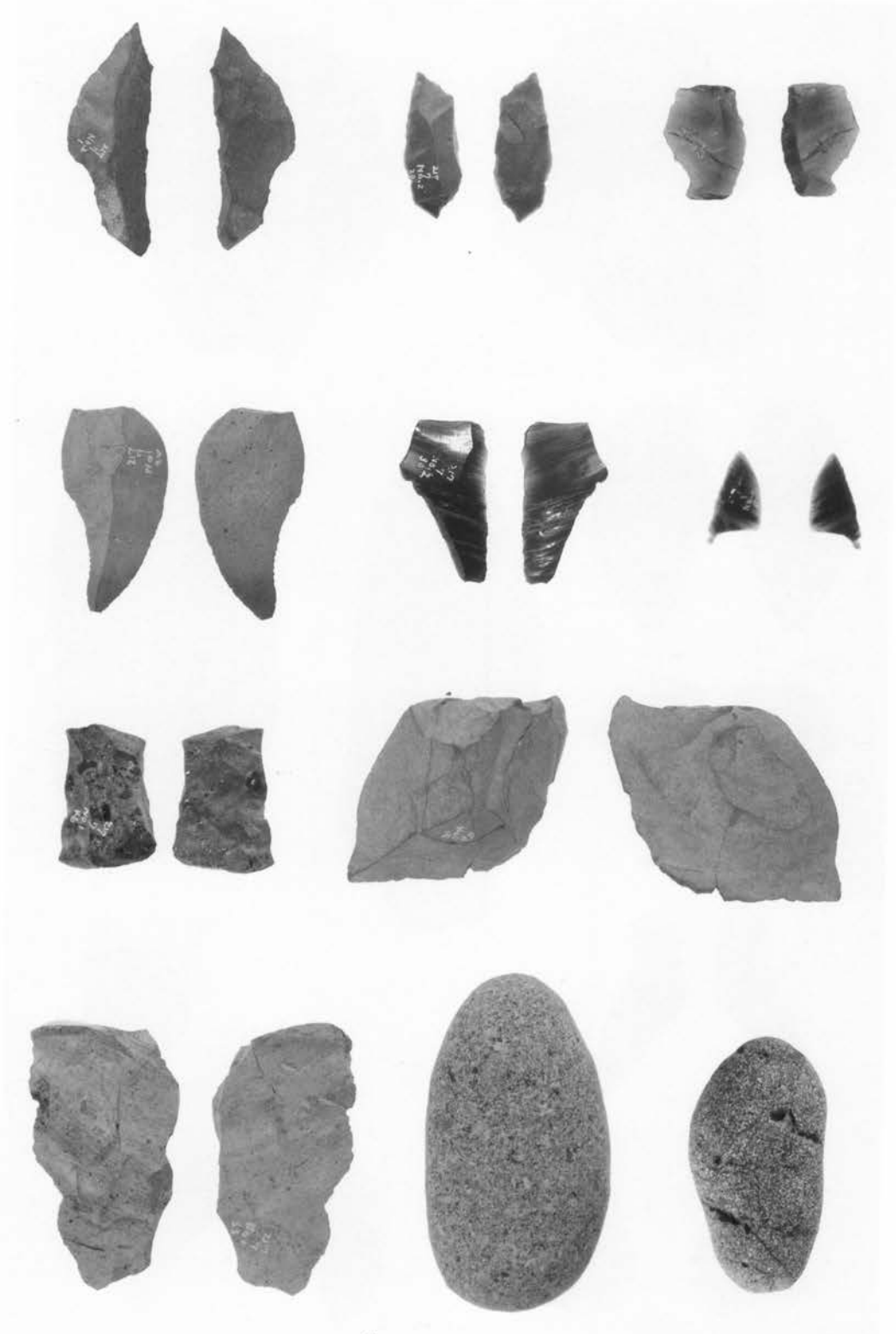
第16ユニット

第16ユニット

第19・20ユニット



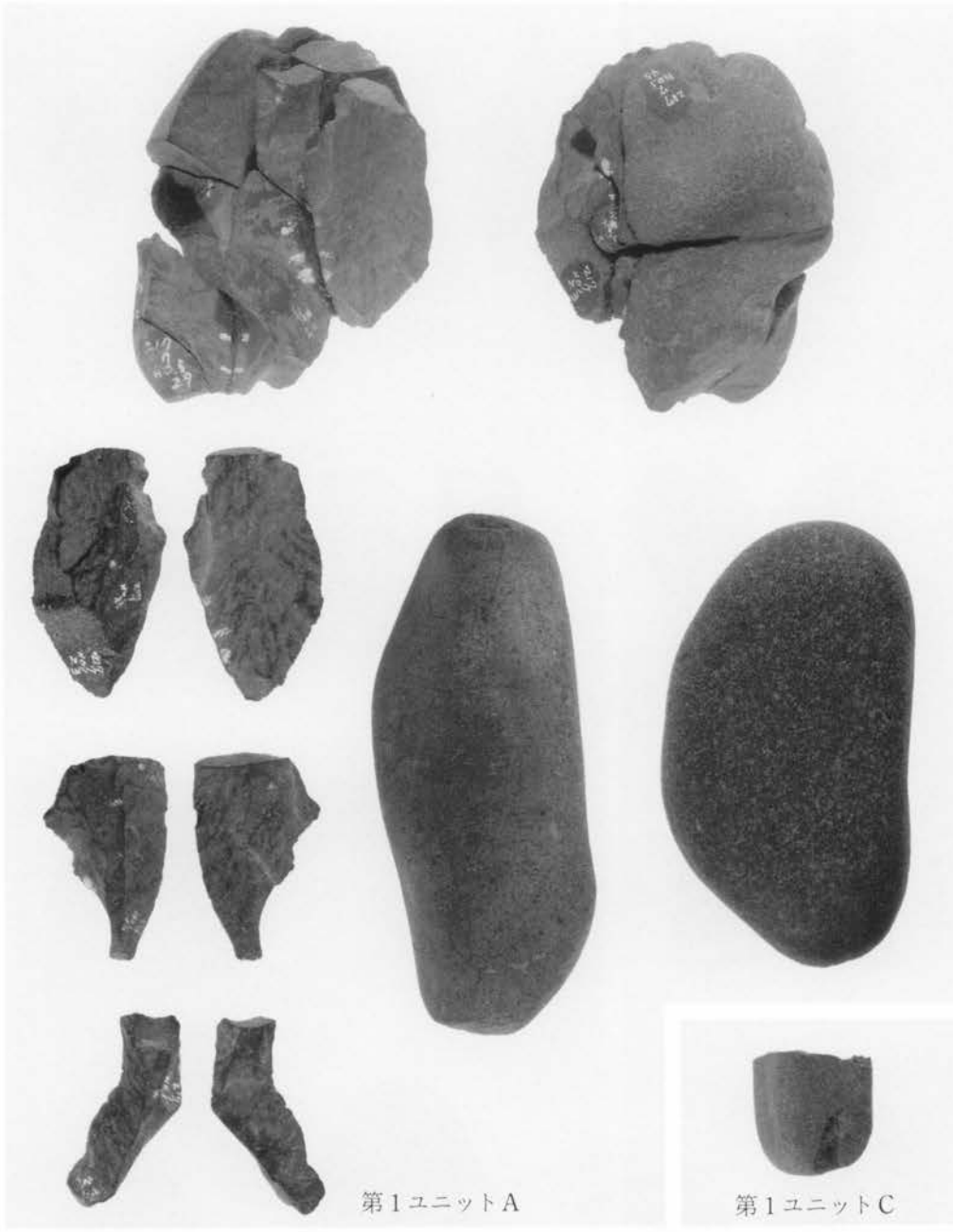
第19・20ユニット



第1ユニットA

(約2/3)

図版 82

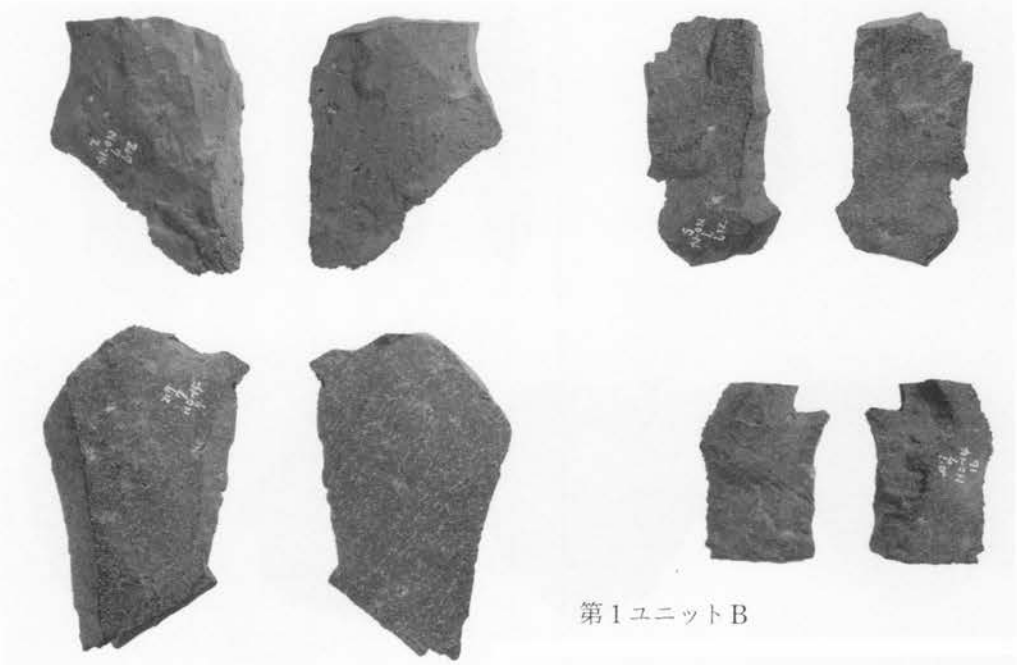


第1ユニットA

第1ユニットC

第1ユニットA・C接合資料

(約2/3)



第1ユニットB

第1ユニットC

第1ユニットB接合資料

(約2/3)

図版 84

第2ユニット

第3ユニット

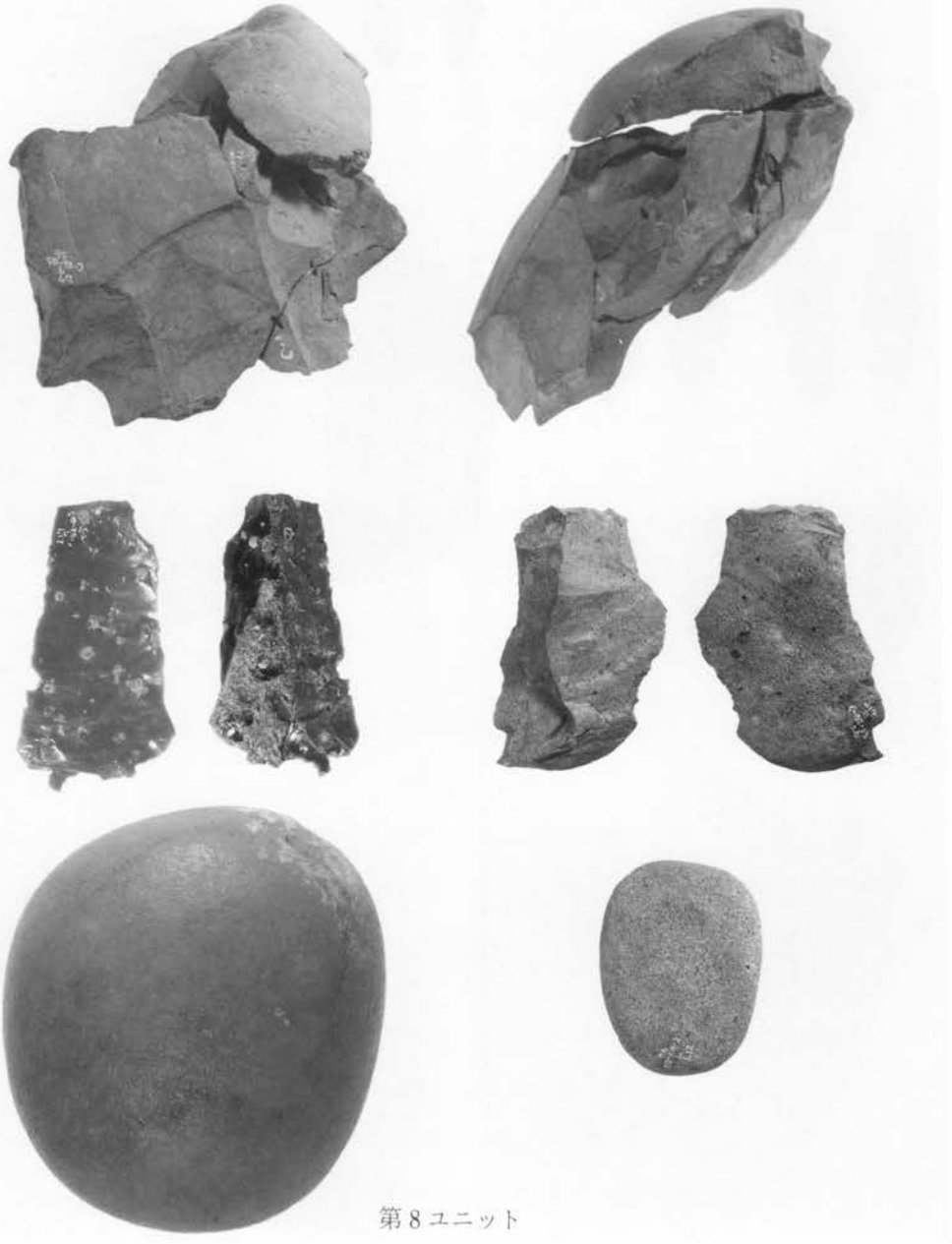
第4ユニット

第5ユニット

第6ユニット

(約2/3)

第7ユニット



第8ユニット

(約2/3)

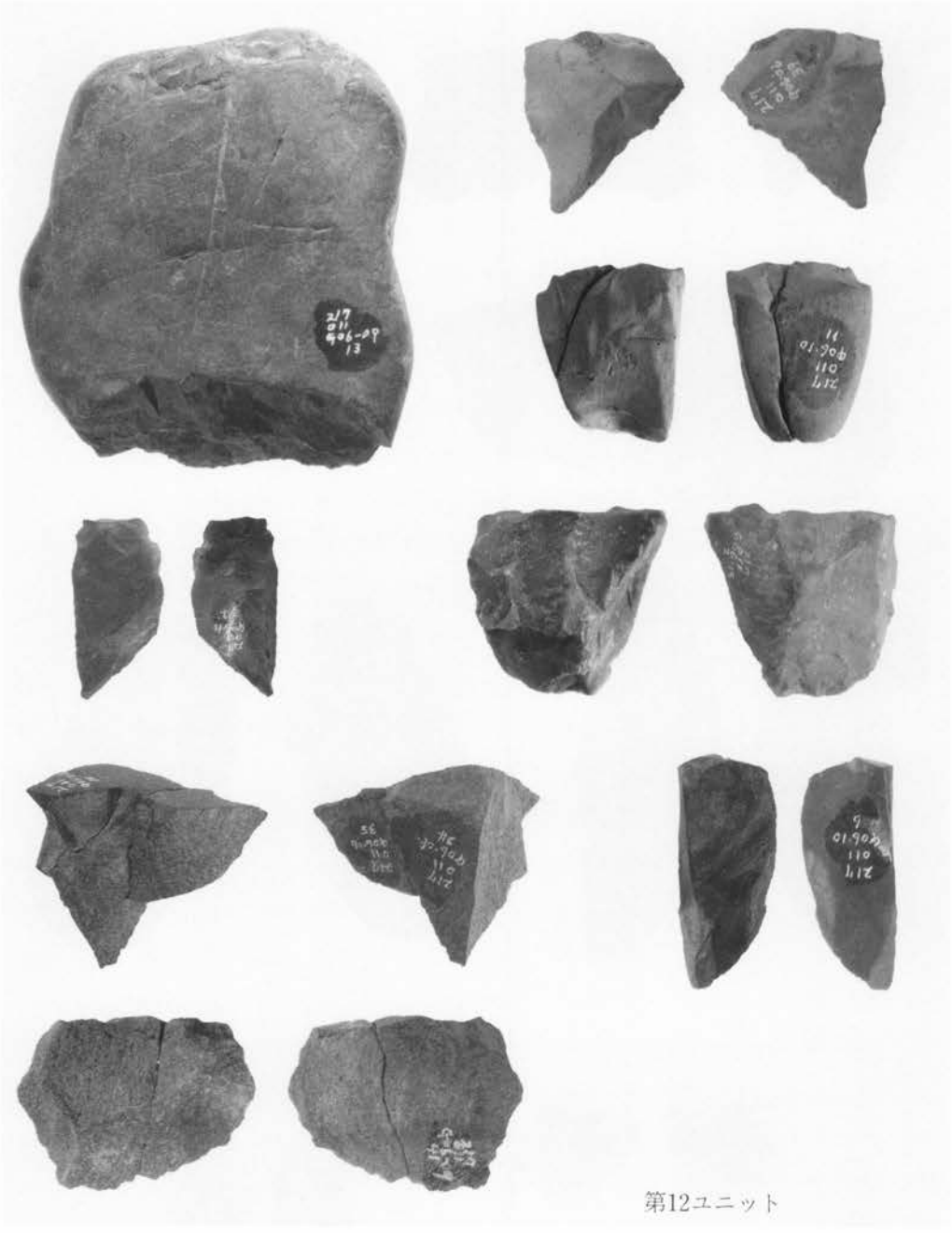
第10ユニット　(約⅔)

(約½)

(約⅔)　第9ユニット

第11ユニット

(約½)

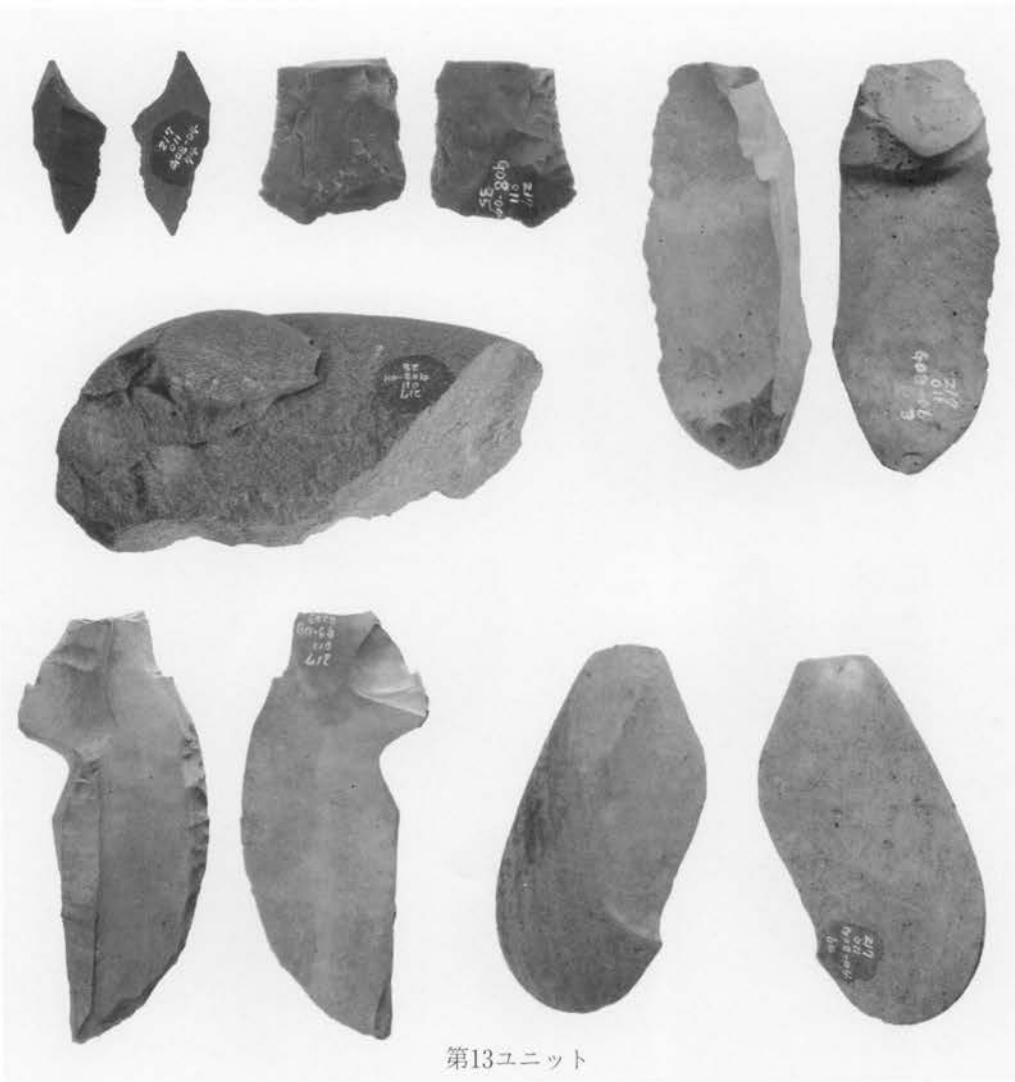


第12ユニット

第14ユニット

(約⅔)

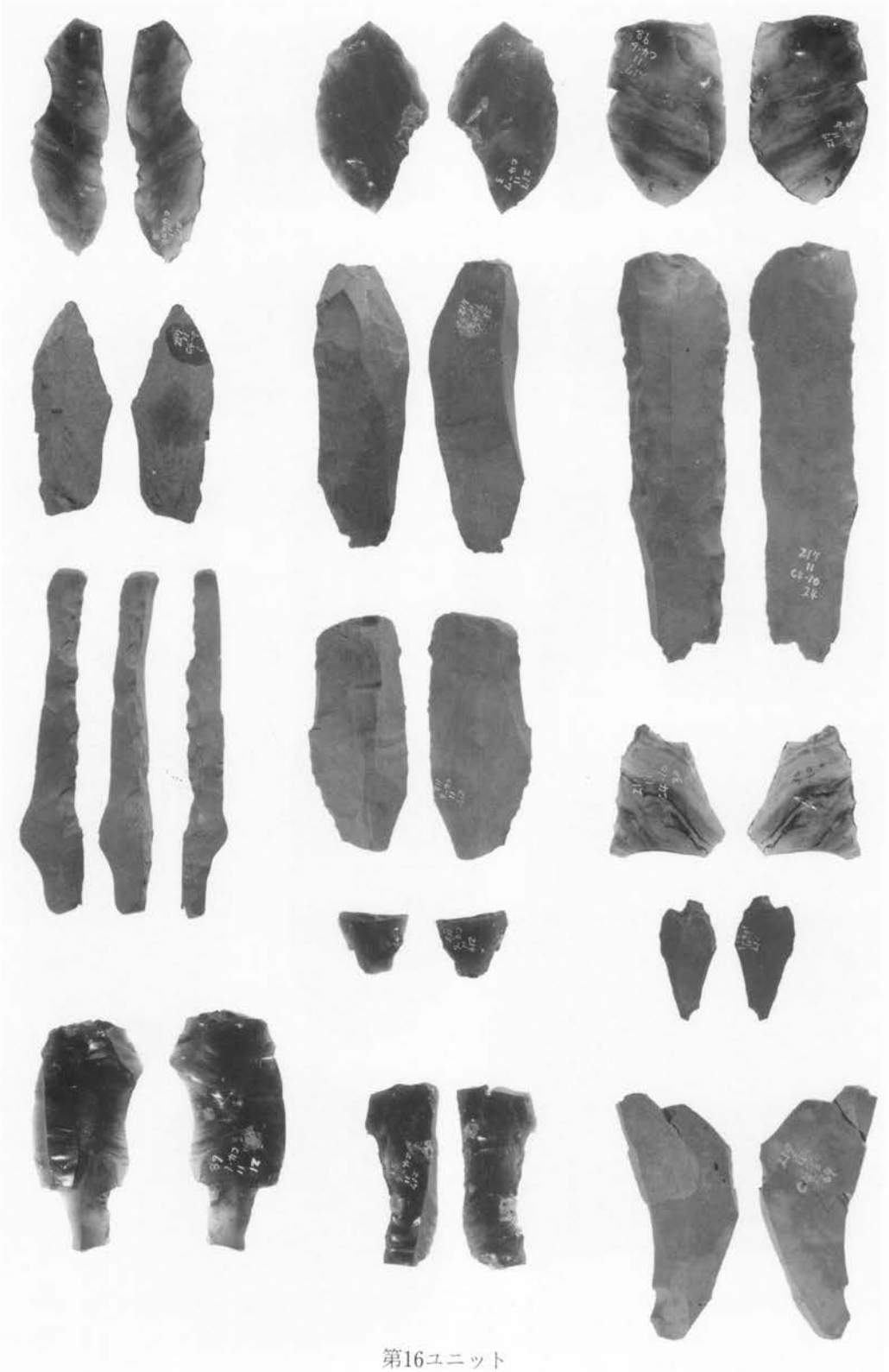
図版 88



第13ユニット

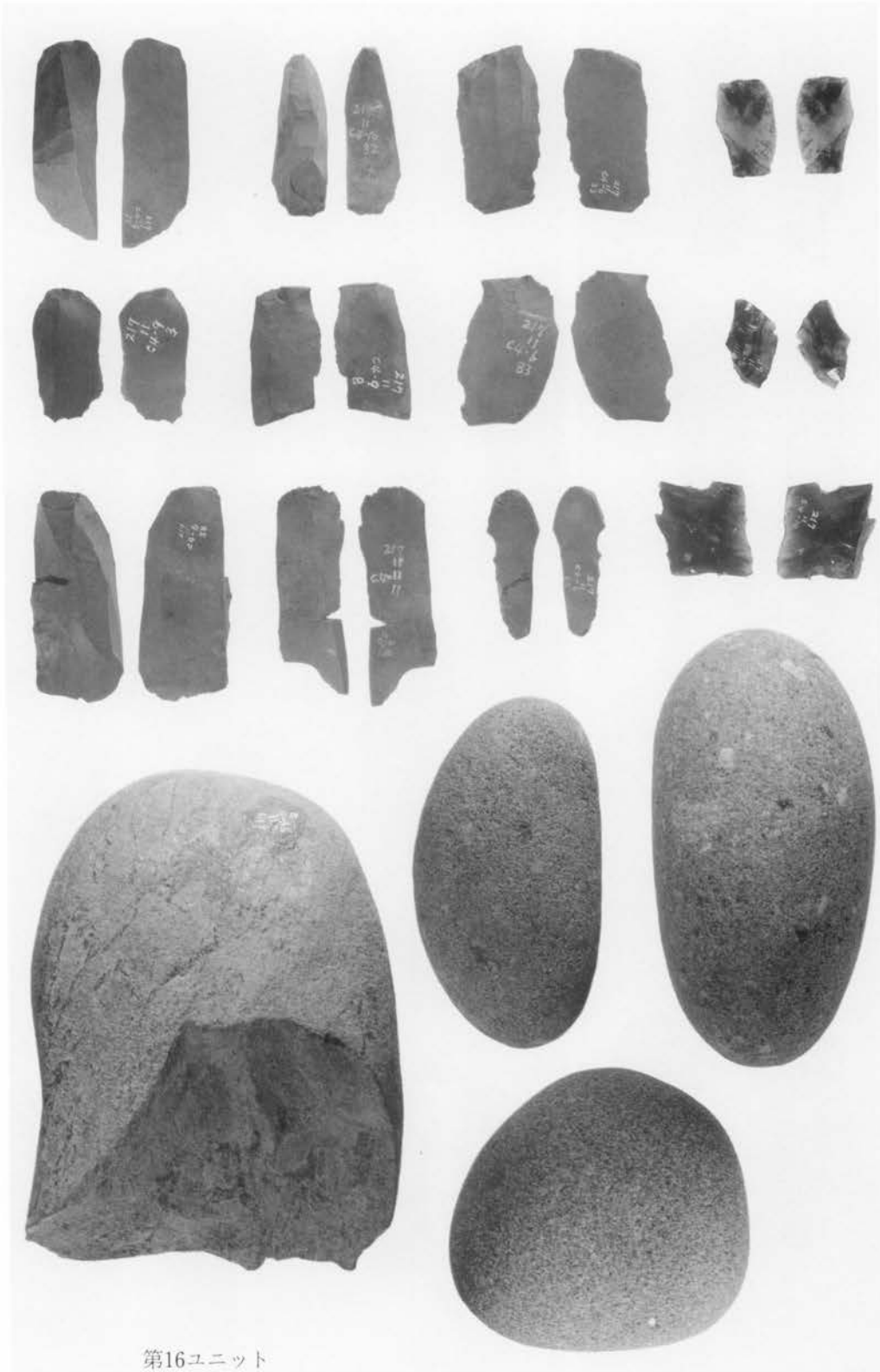
第15ユニット

(約2/3)



第16ユニット

(約2/3)



第16ユニット

(約2/3)

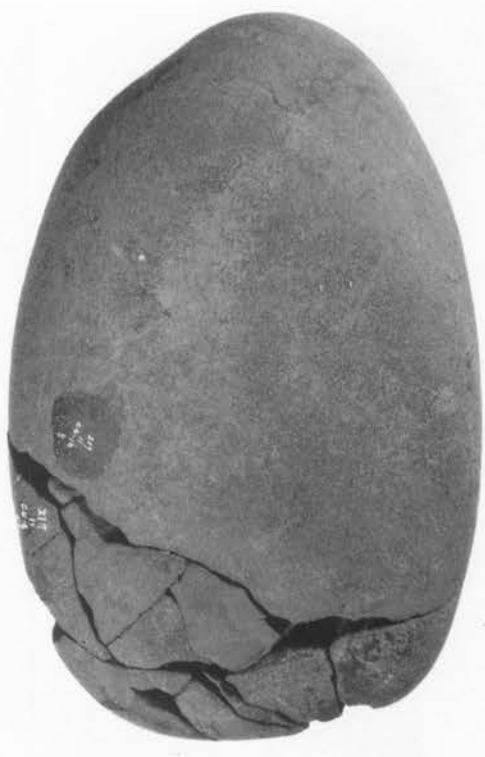
第16ユニット

(約½)

(約⅔)

(約½)

第16ユニット



(約⅔)

第16ユニット

(約⅔)

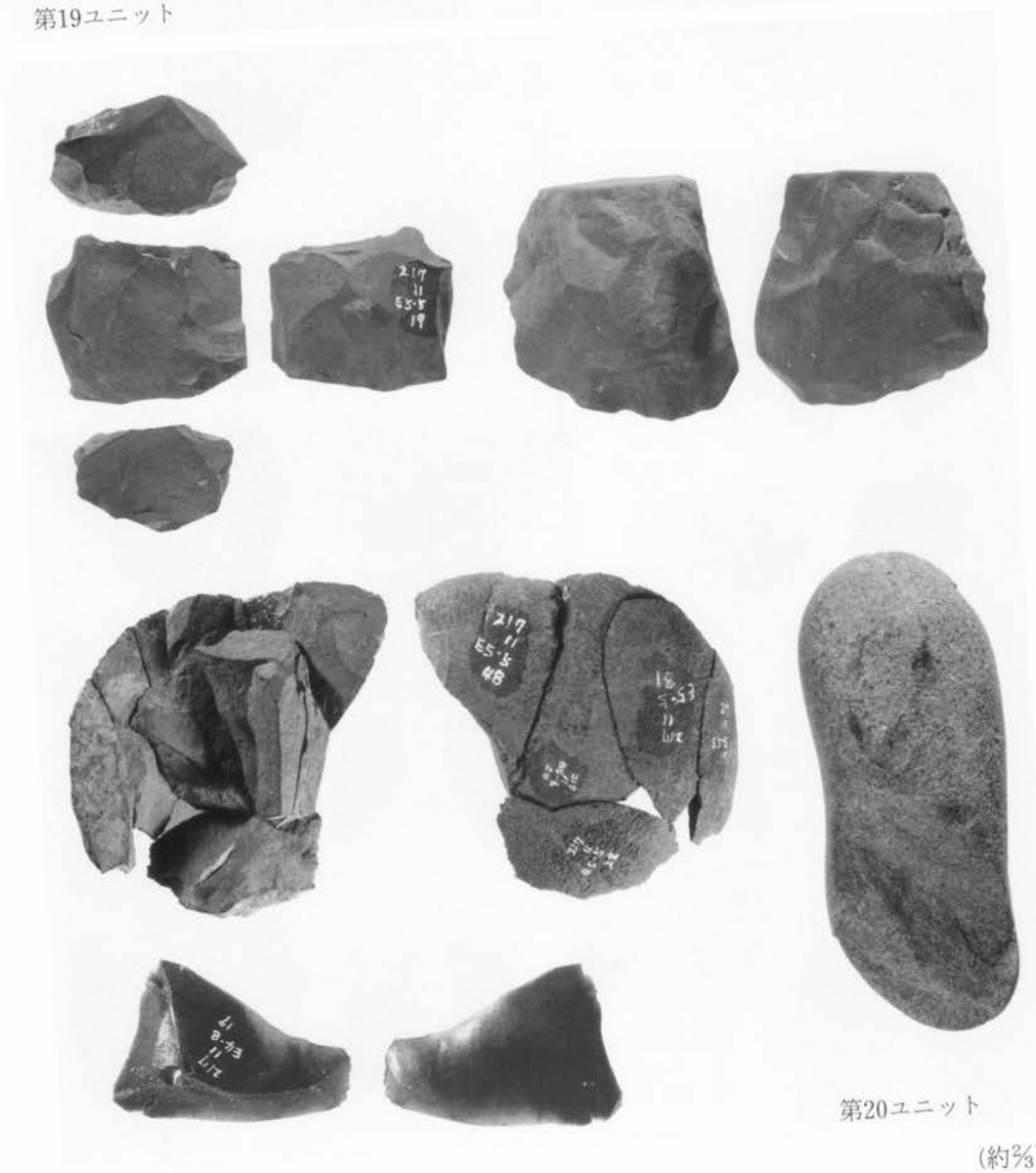
(約½)

第17ユニット

第18ユニット

(約2/3)

第19ユニット



第20ユニット

(約⅔)

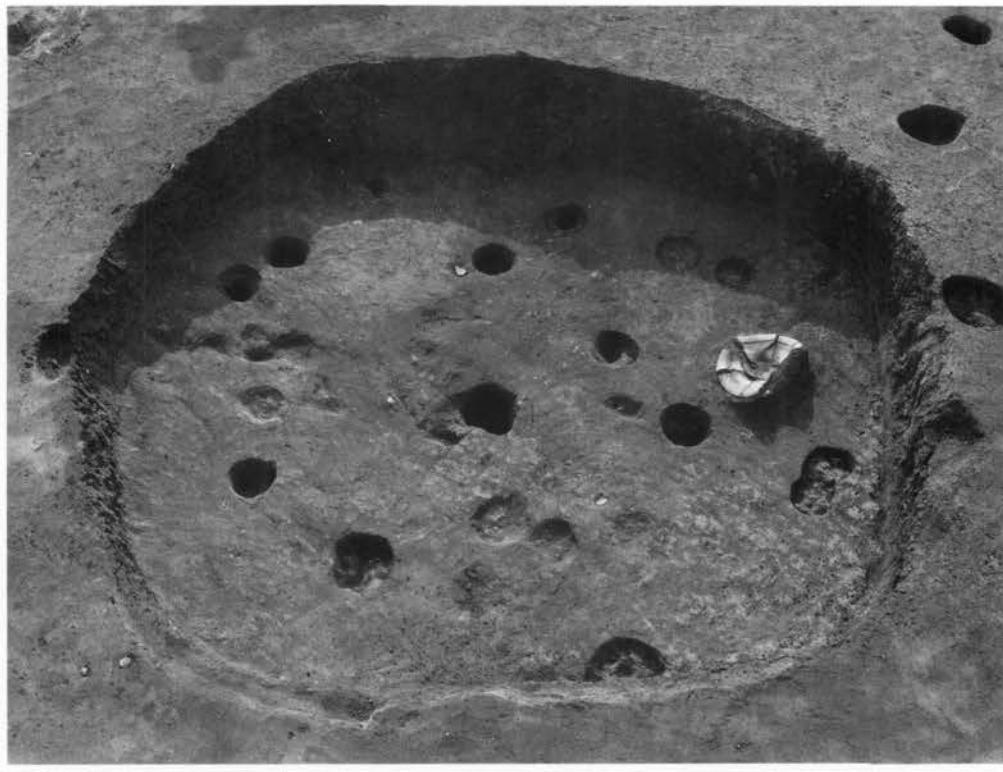
第20ユニット

第21ユニット

単独出土

(約2/3)

061住居跡(手前)と対面する聖人塚遺跡



002住居跡

022住居跡周辺出土土器

002住居跡出土土器

1

2

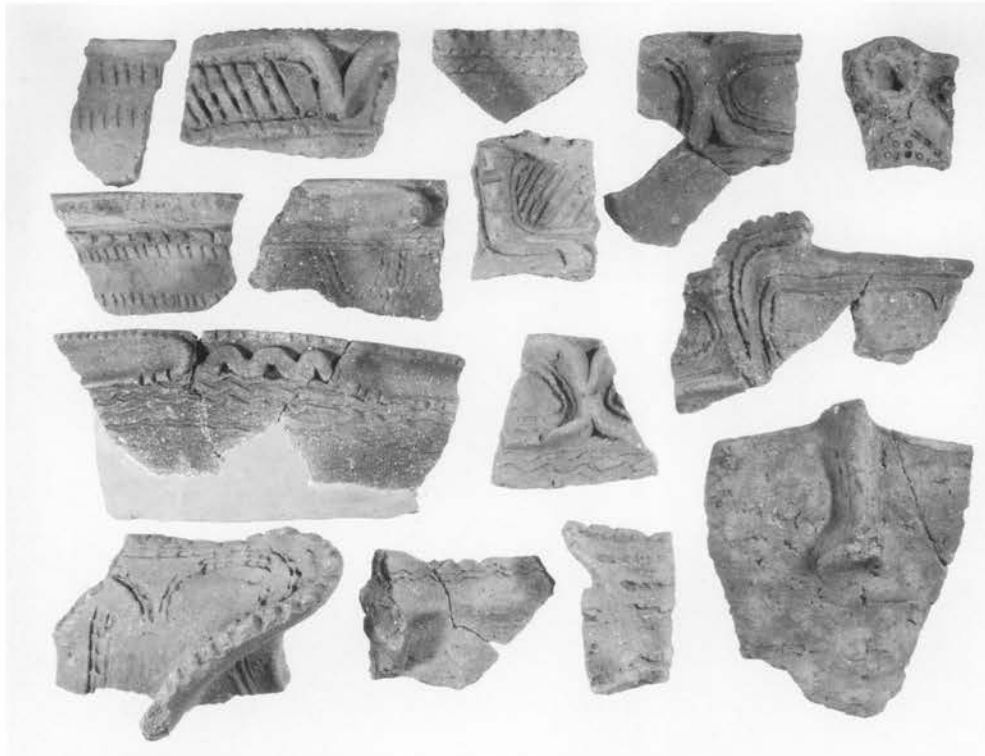
3

4

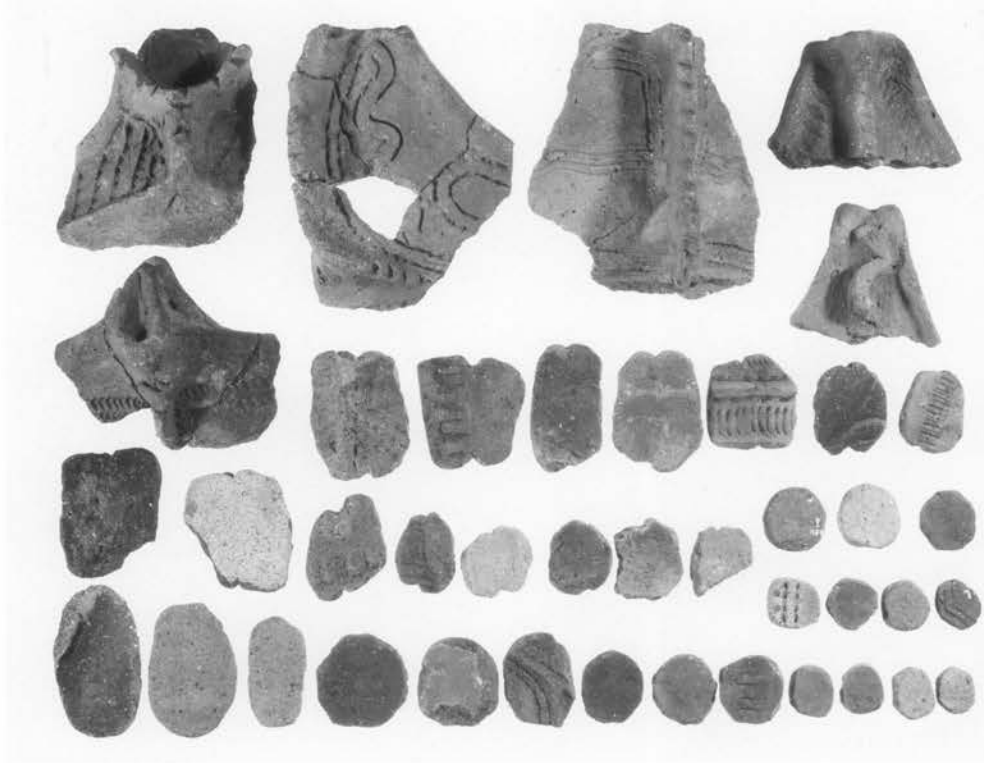
5

6

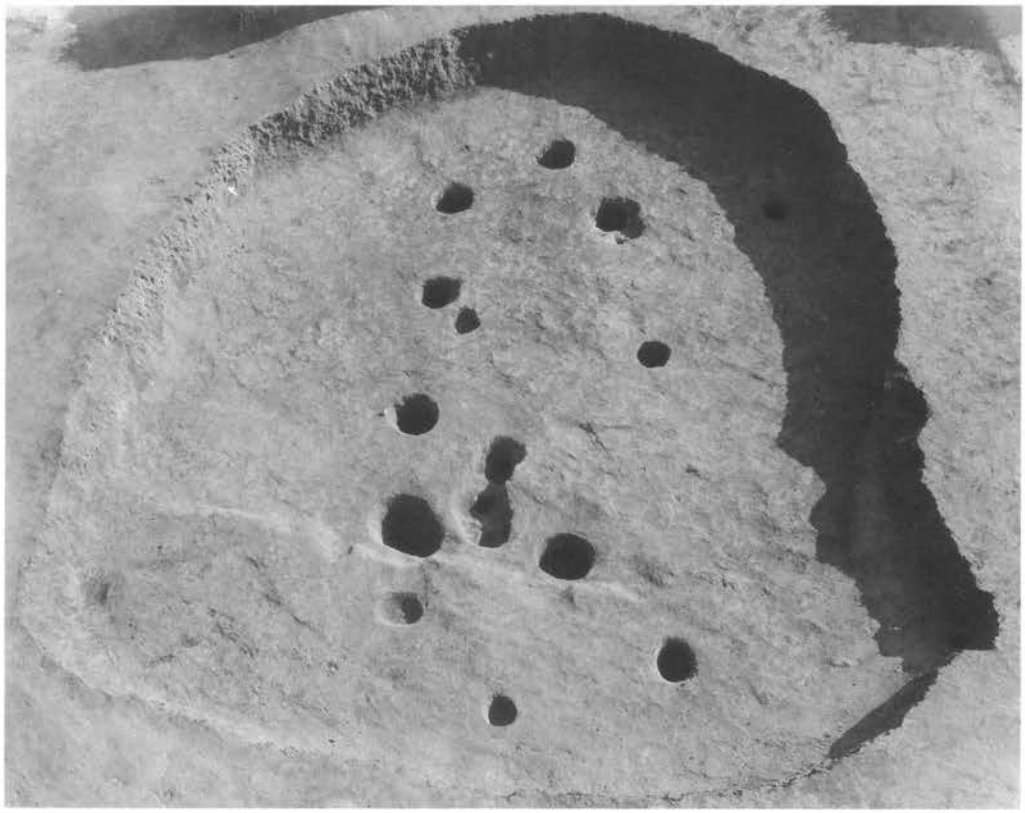
002住居跡出土土器



002住居跡出土土器



002住居跡出土遺物

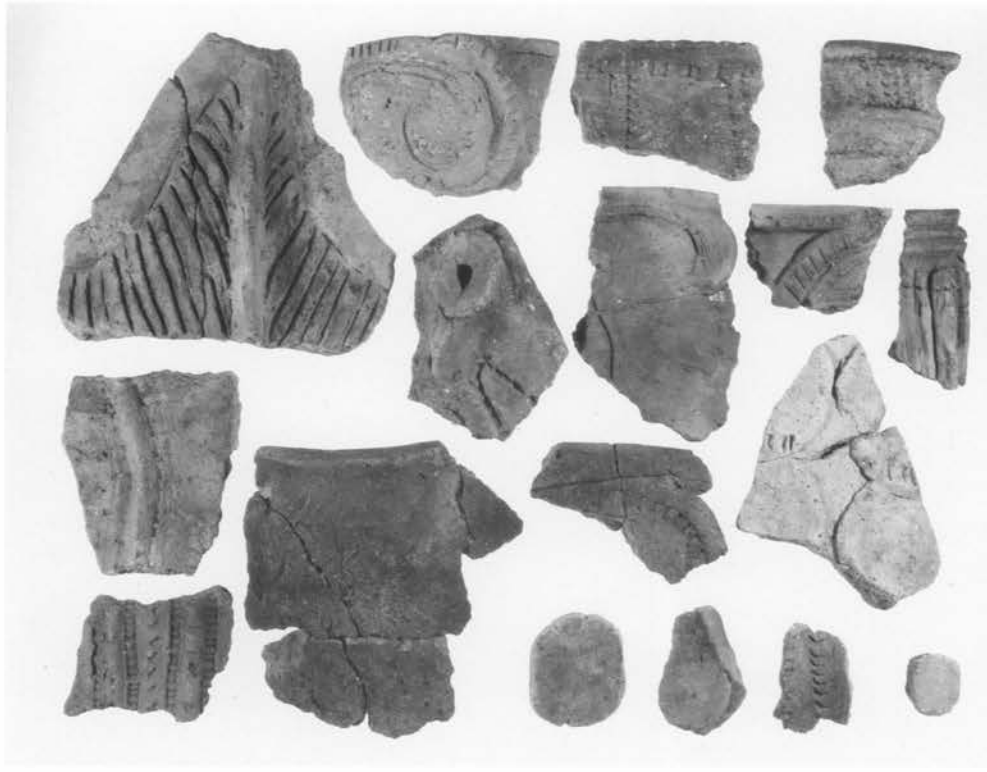


015住居跡

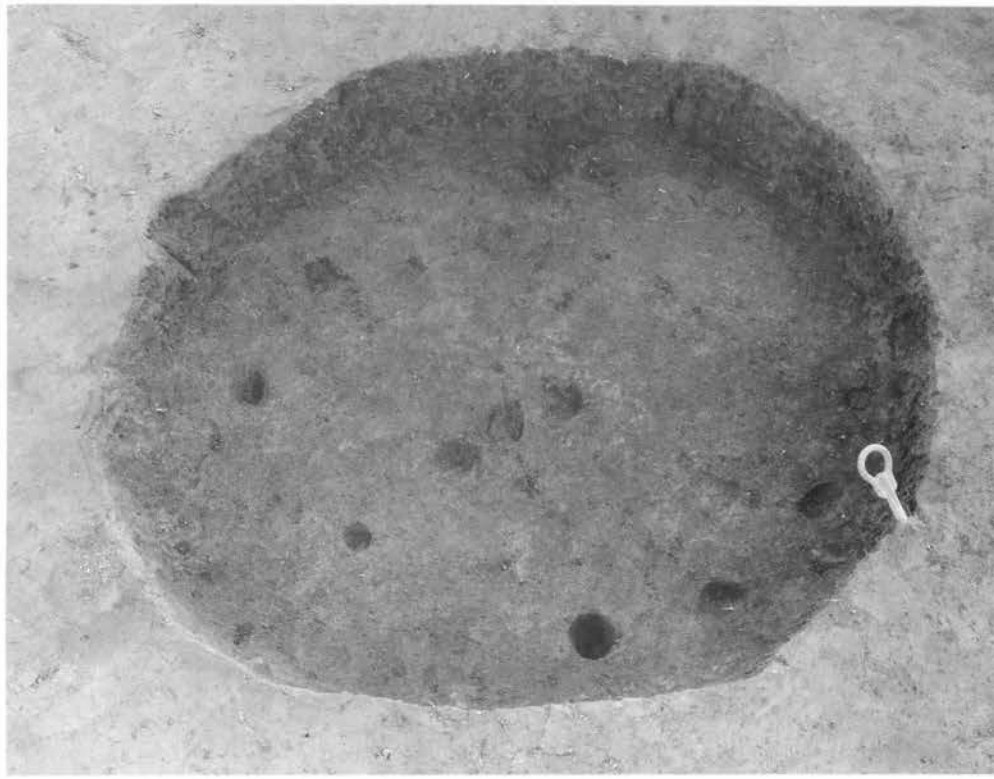
1

2

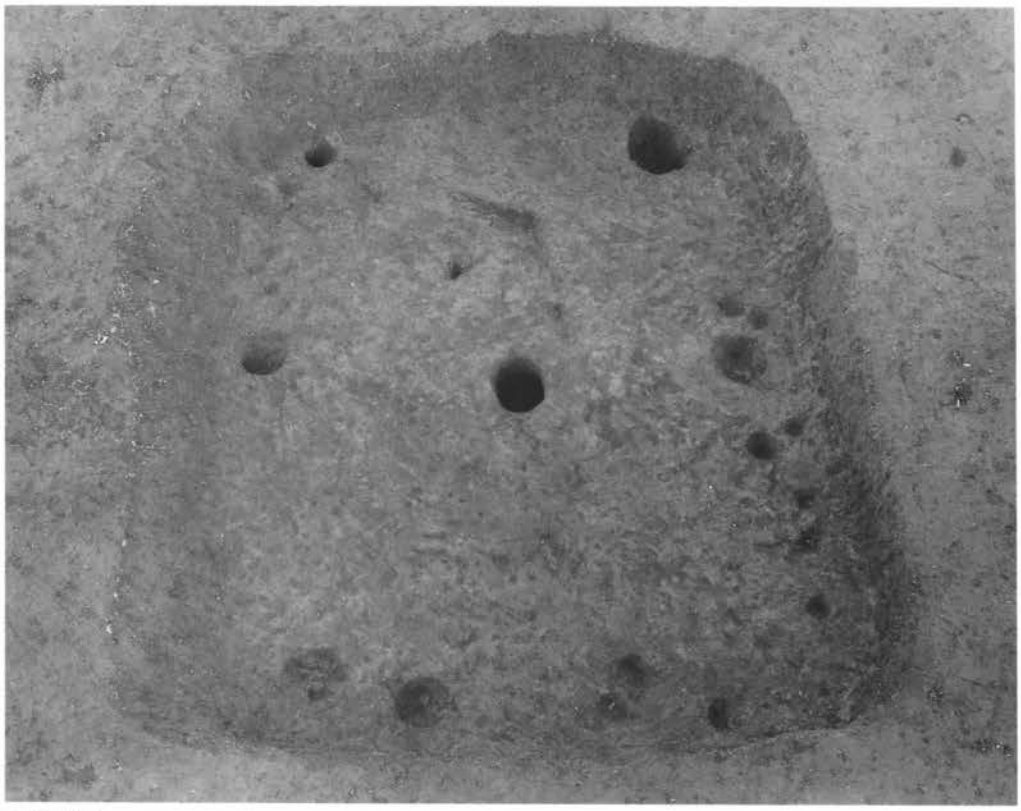
015住居跡出土土器



015住居跡出土土器



033竪穴状遺構

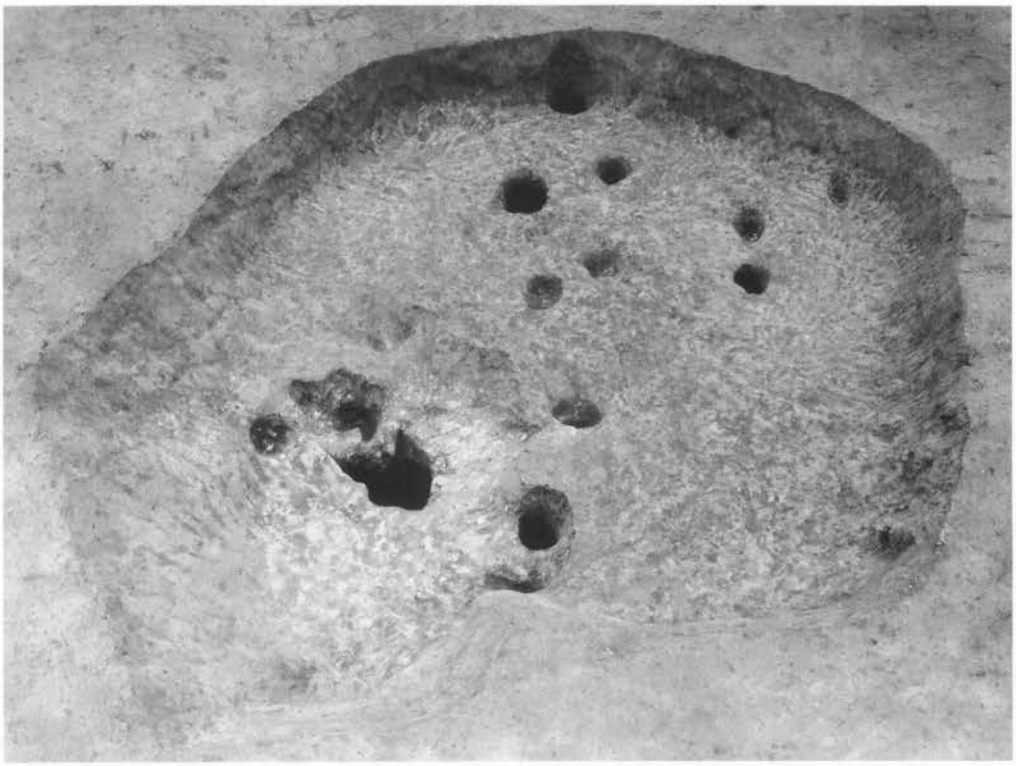


029住居跡

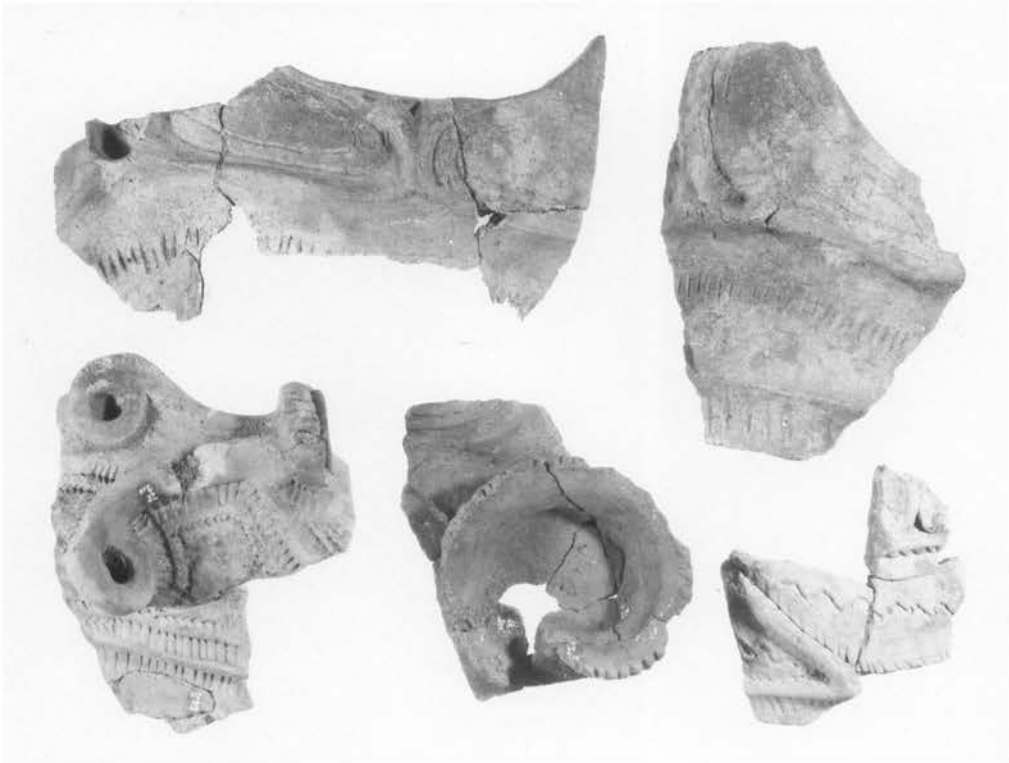
1

029住居跡出土土器

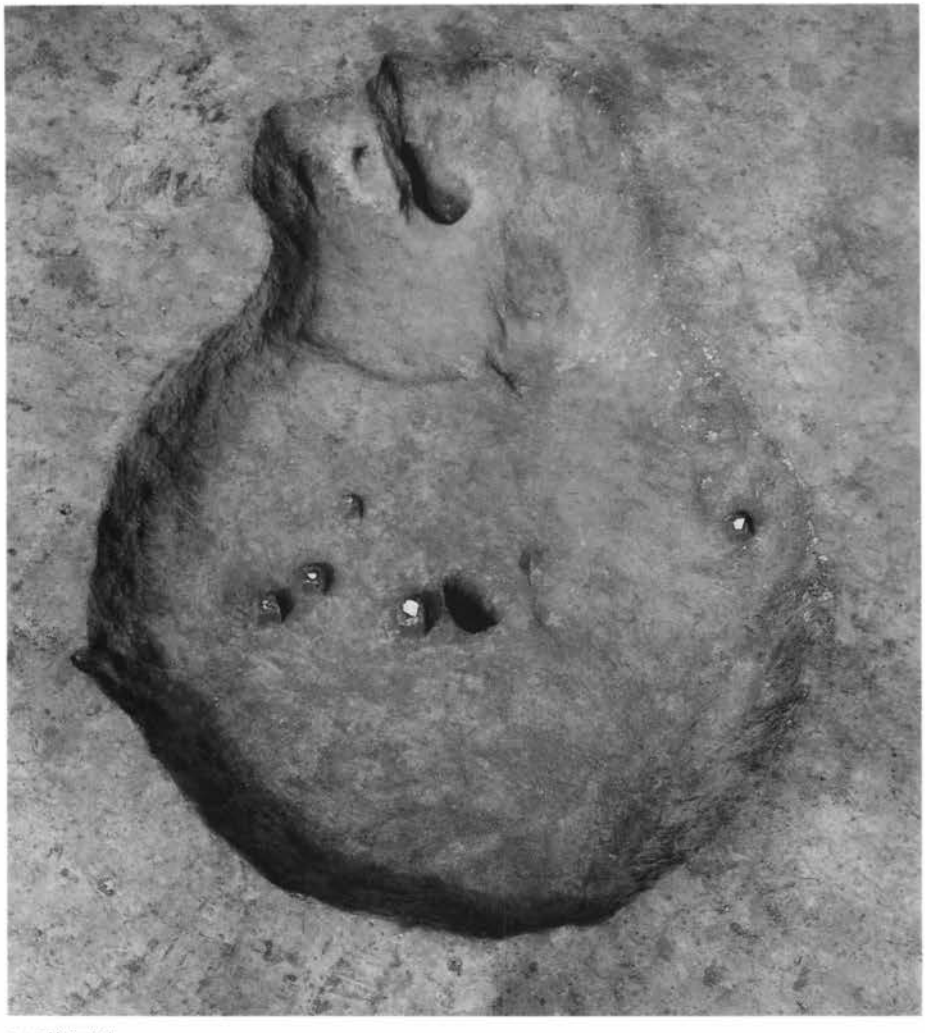
器内面に見える条痕文



039住居跡



039住居跡出土土器



043住居跡

055住居跡

055住居跡出土土器

1

2

3

4

5

6

055住居跡出土土器

1

2

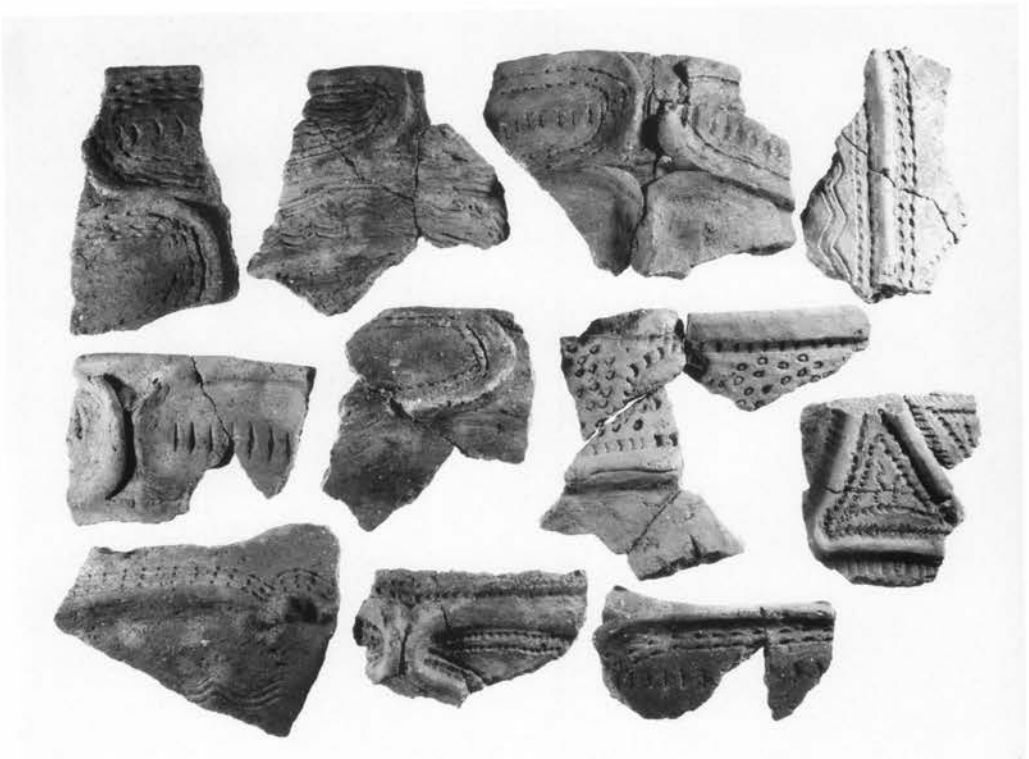
3

4

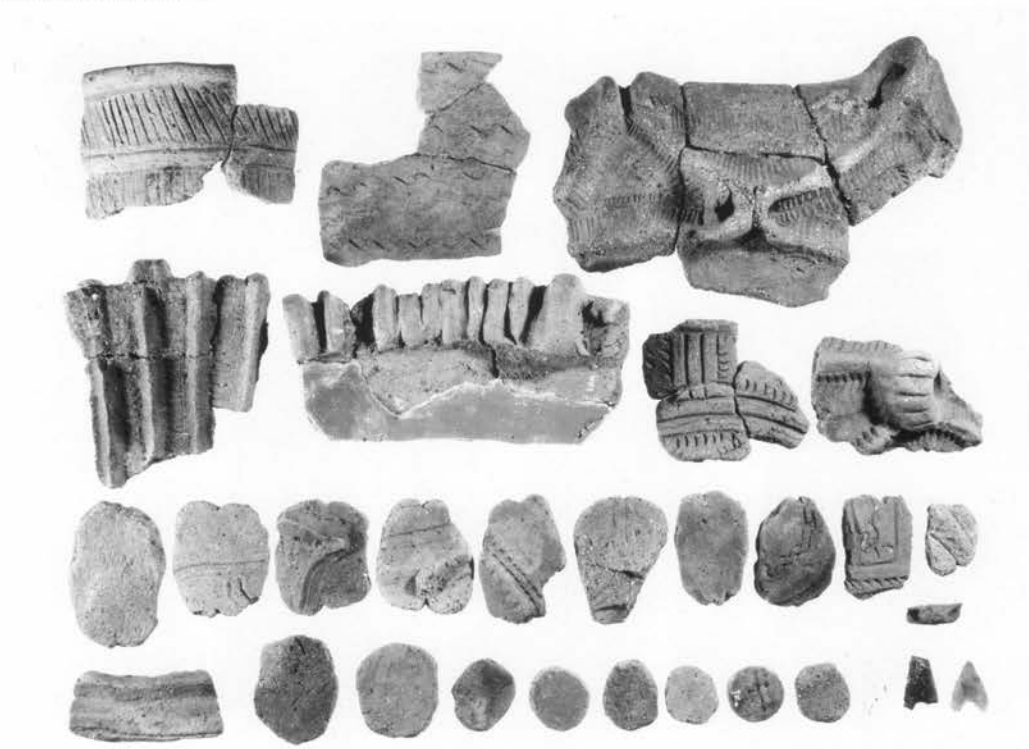
5

6

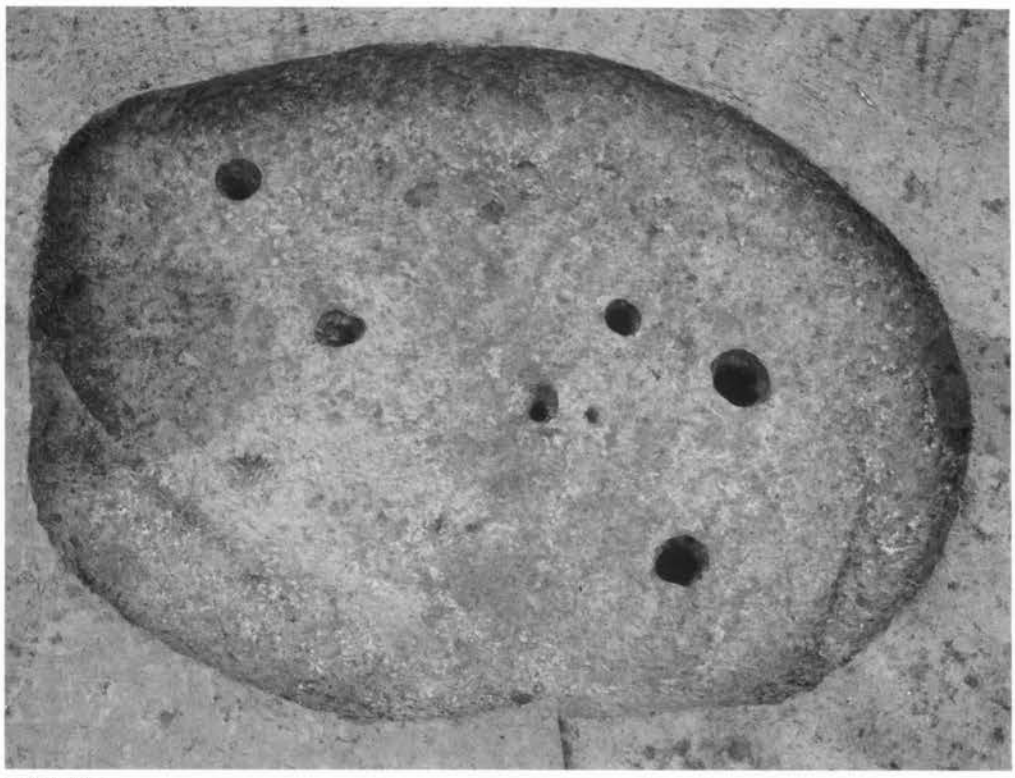
055住居跡出土土器



055住居跡出土土器



055住居跡出土遺物



056住居跡

056住居跡出土土器

1

2

3

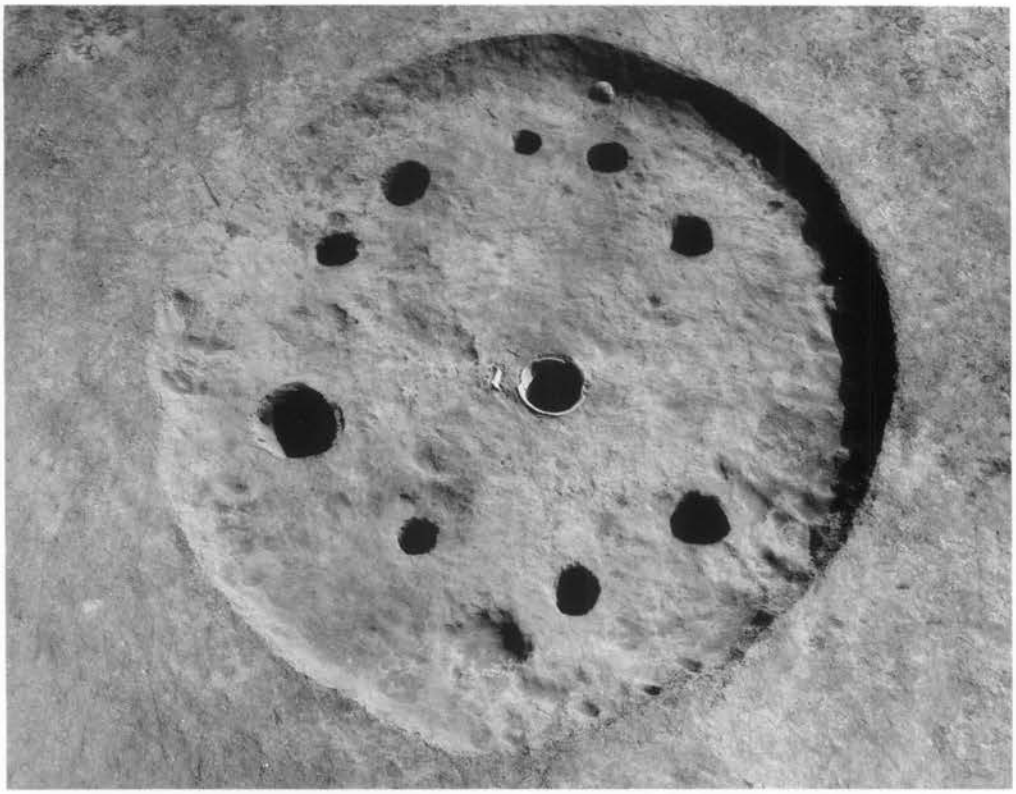
4

5

6

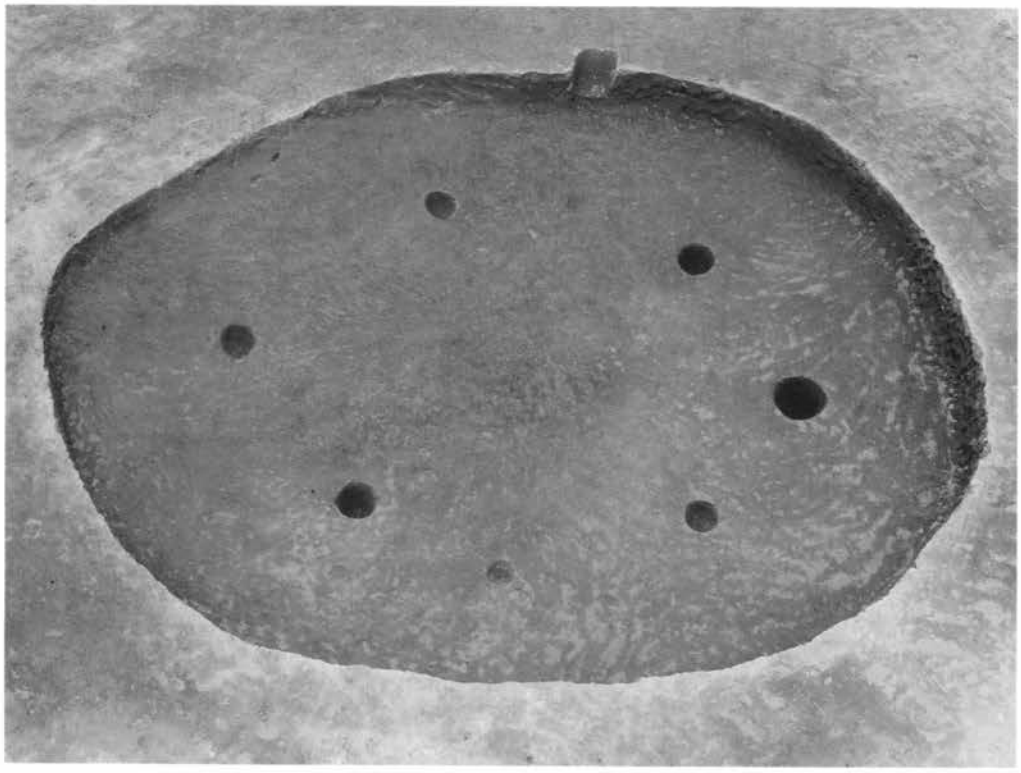
056住居跡出土土器

図版 112

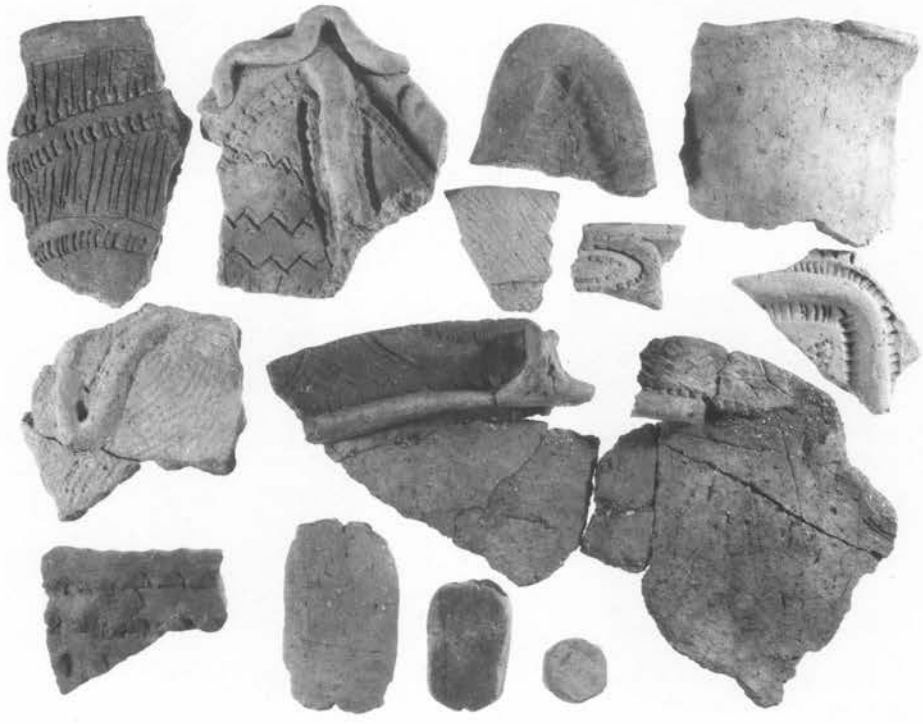


057住居跡

057住居跡出土土器



061住居跡



061住居跡出土土器

1

2

3

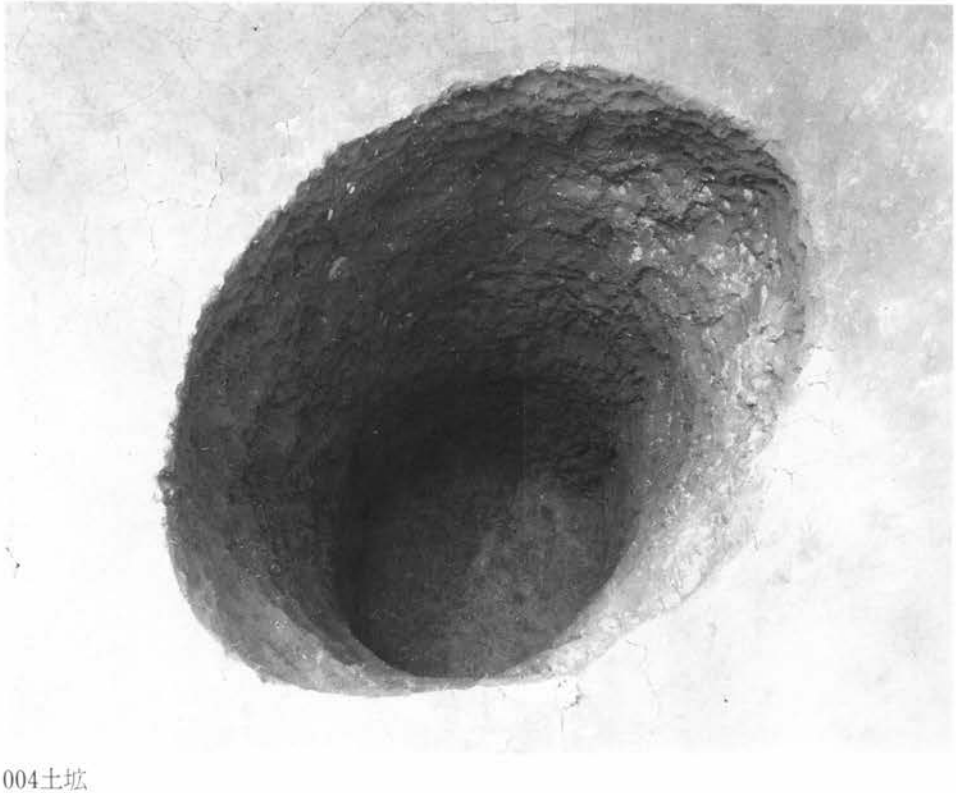
4

5

6

061住居跡出土土器

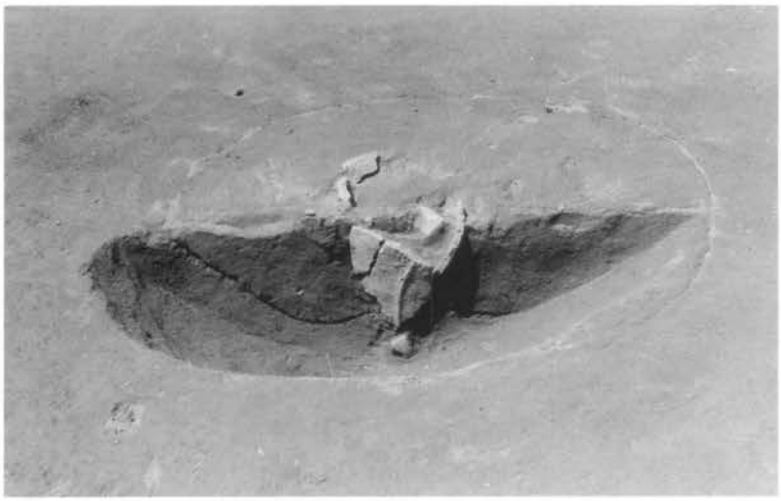
002土坑



004土坑

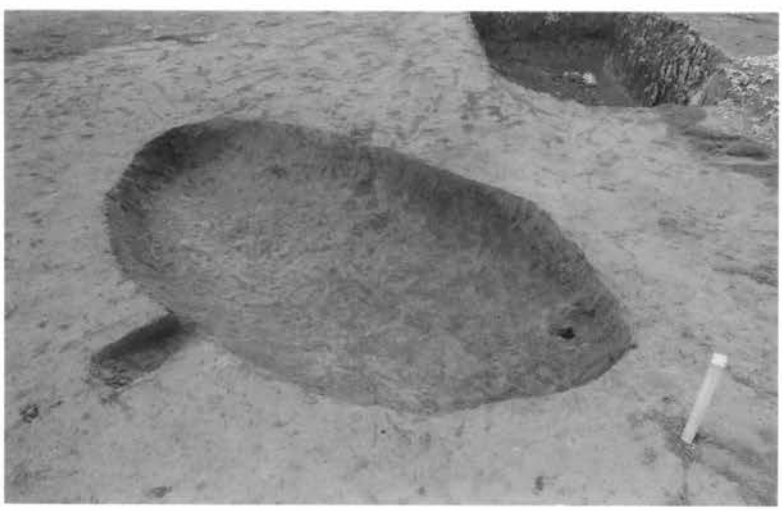
040土坑

050土坑



054土坑遺物出土状況

054土坑出土土器



066土坑

067土坑

067土坑遺物状況

067土坑出土土器

1

2

3

4

5

6

グリッド出土の土器

1

2

3

4

5

6

グリッド出土の土器

1

2

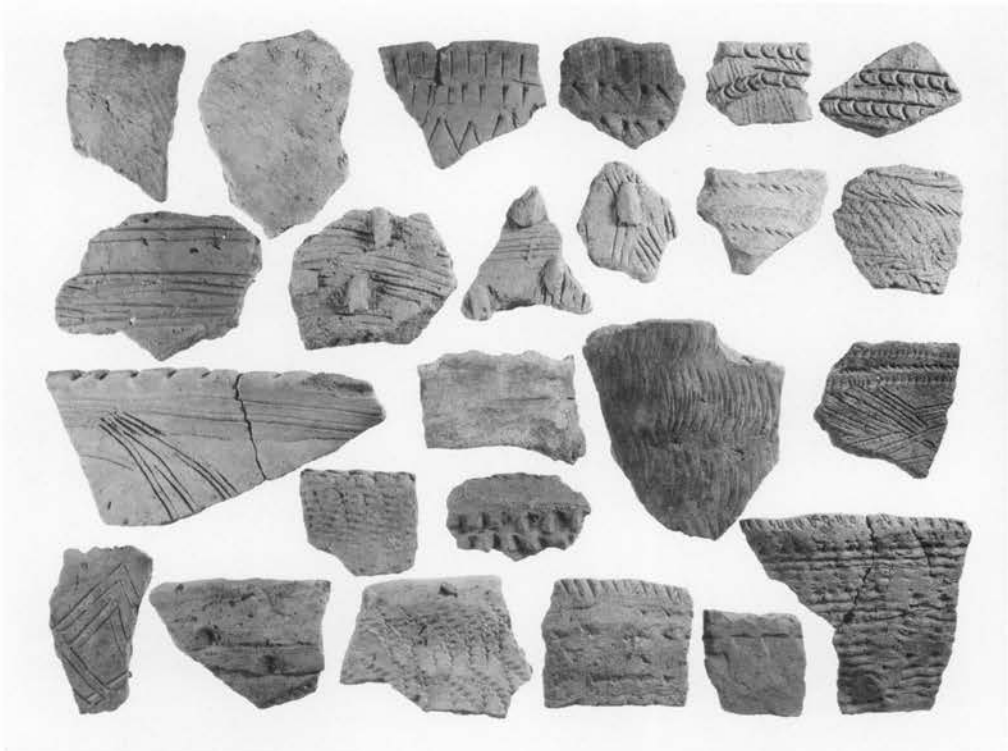
3

4

5

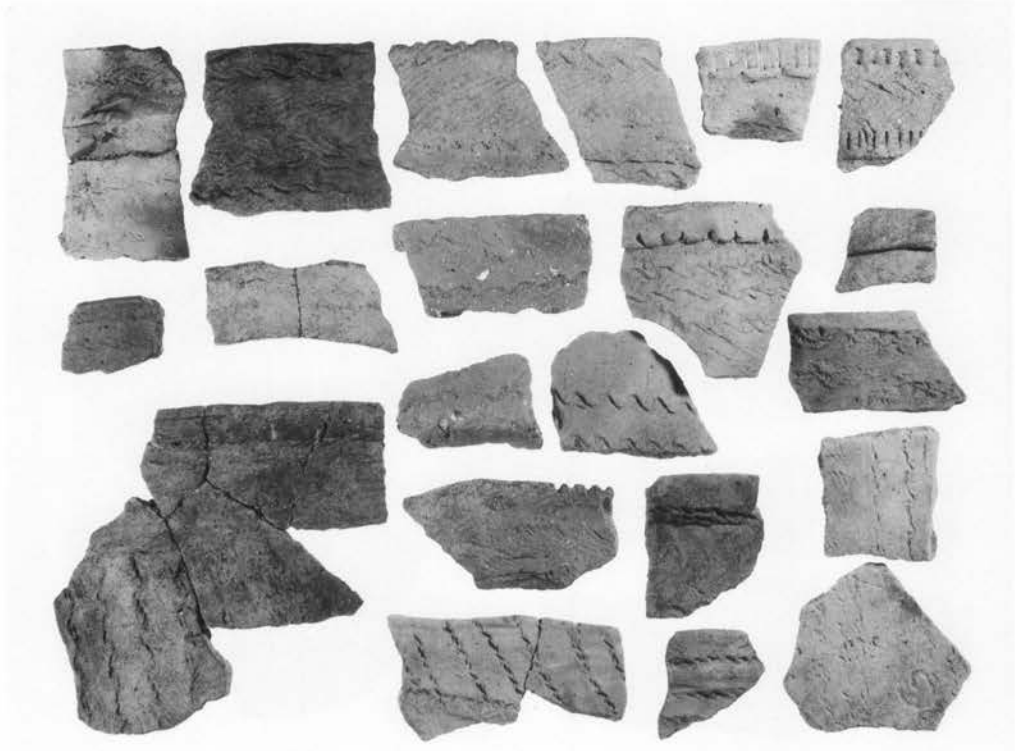
6

グリッド出土の土器

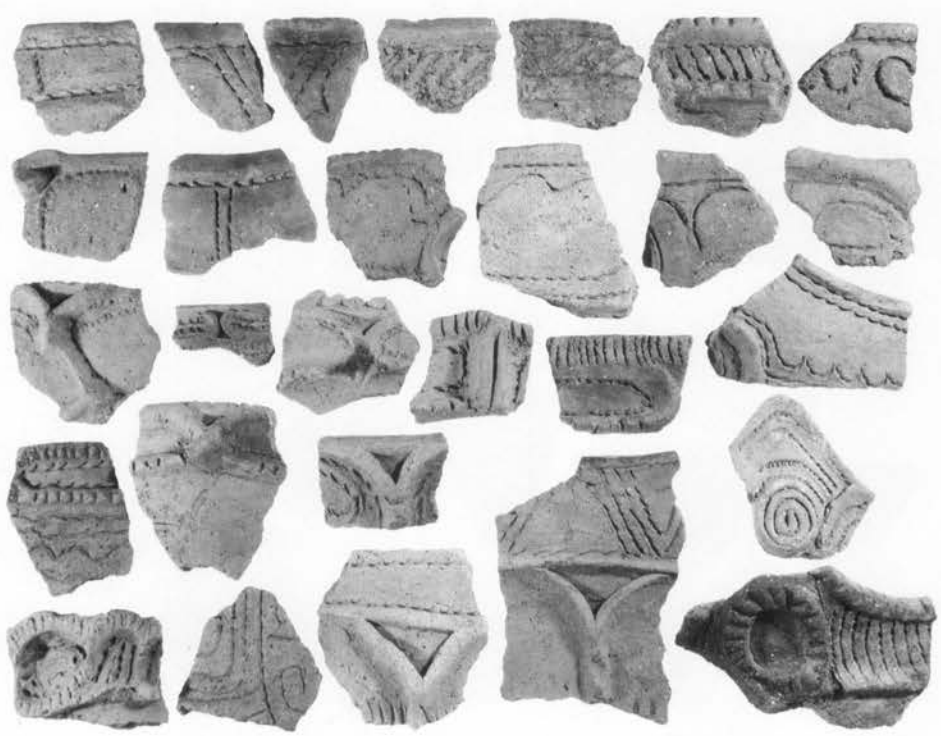


第1群A～C類土器

第1群D類・第2群A類土器

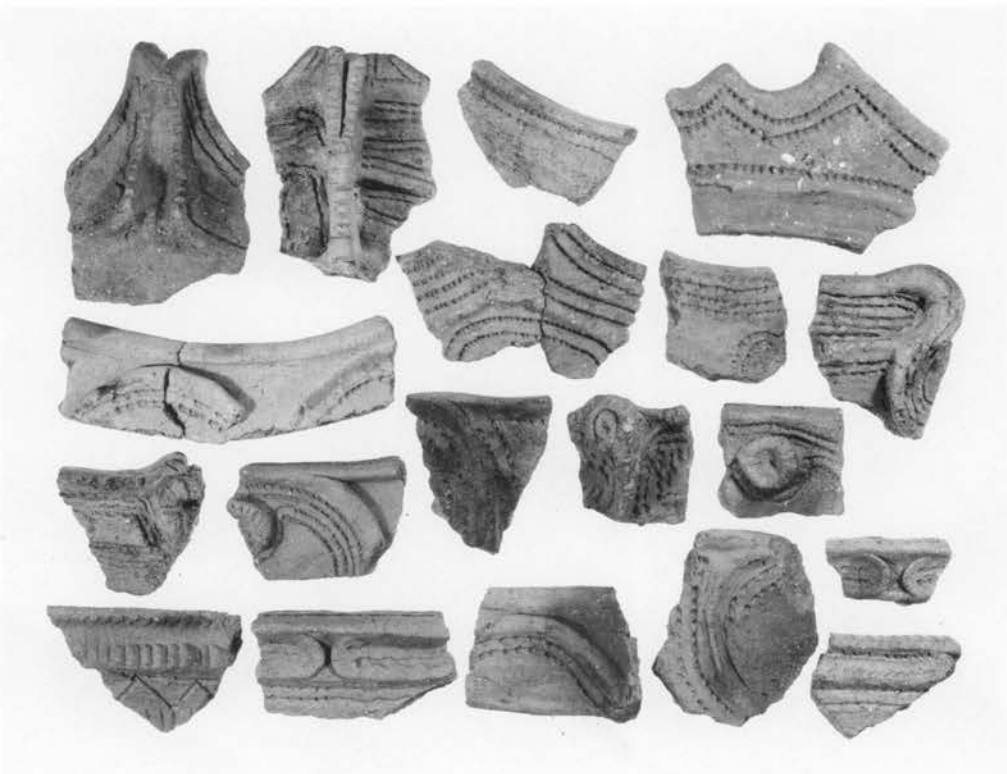


第２群Ｂ・Ｃ類土器



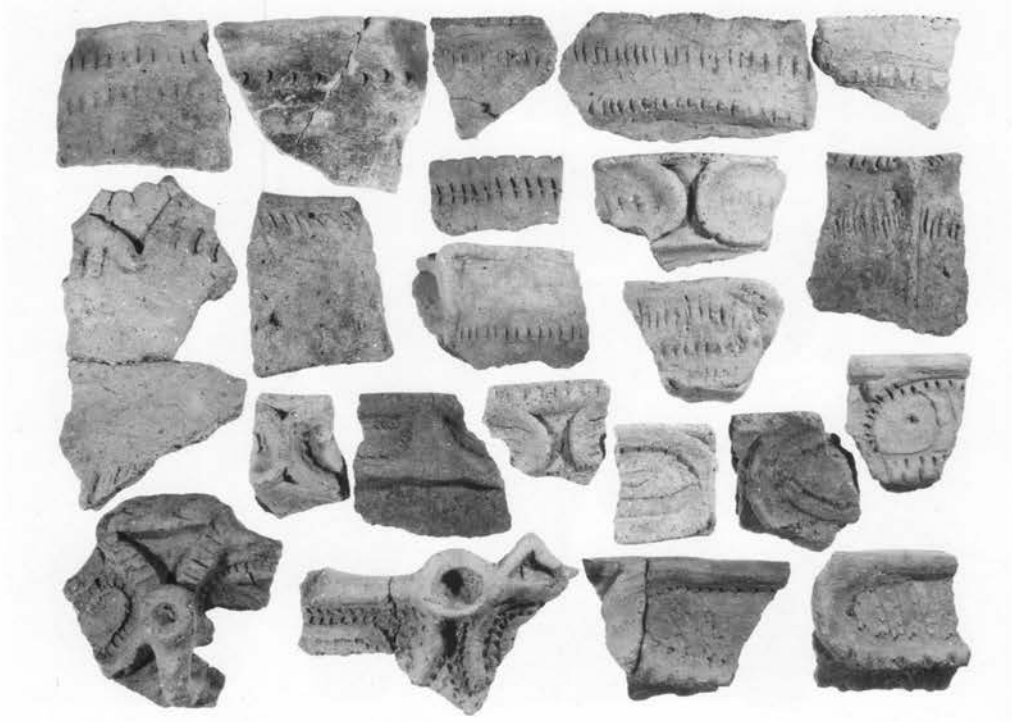
第３群Ａ類土器

第3群B類土器

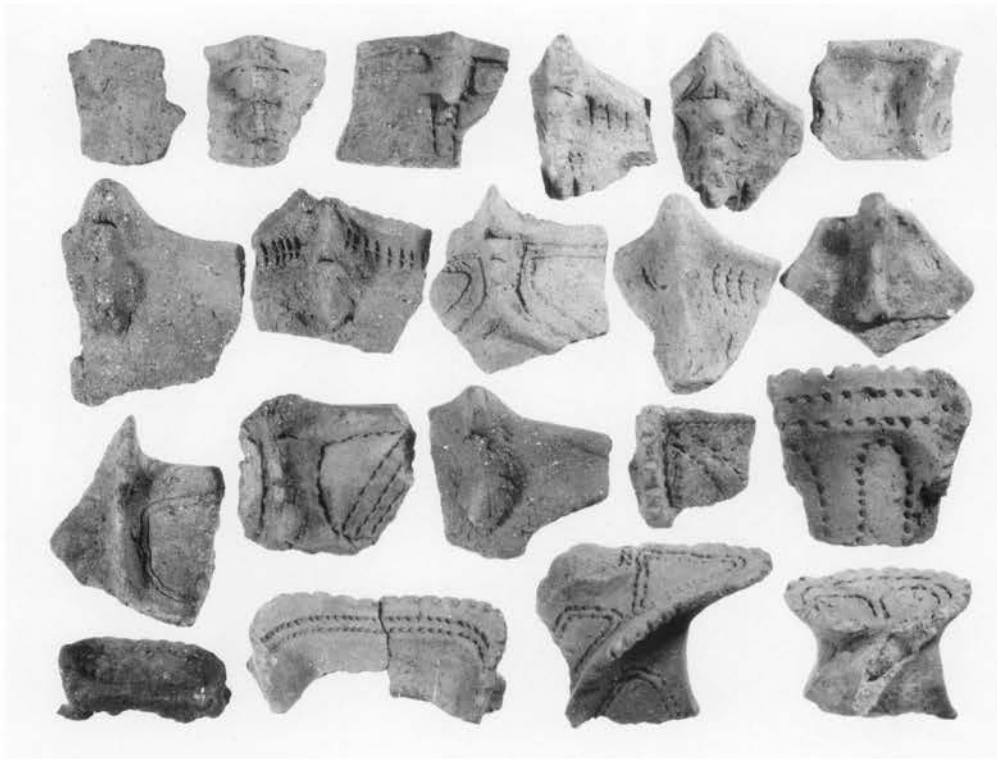


第3群B類土器

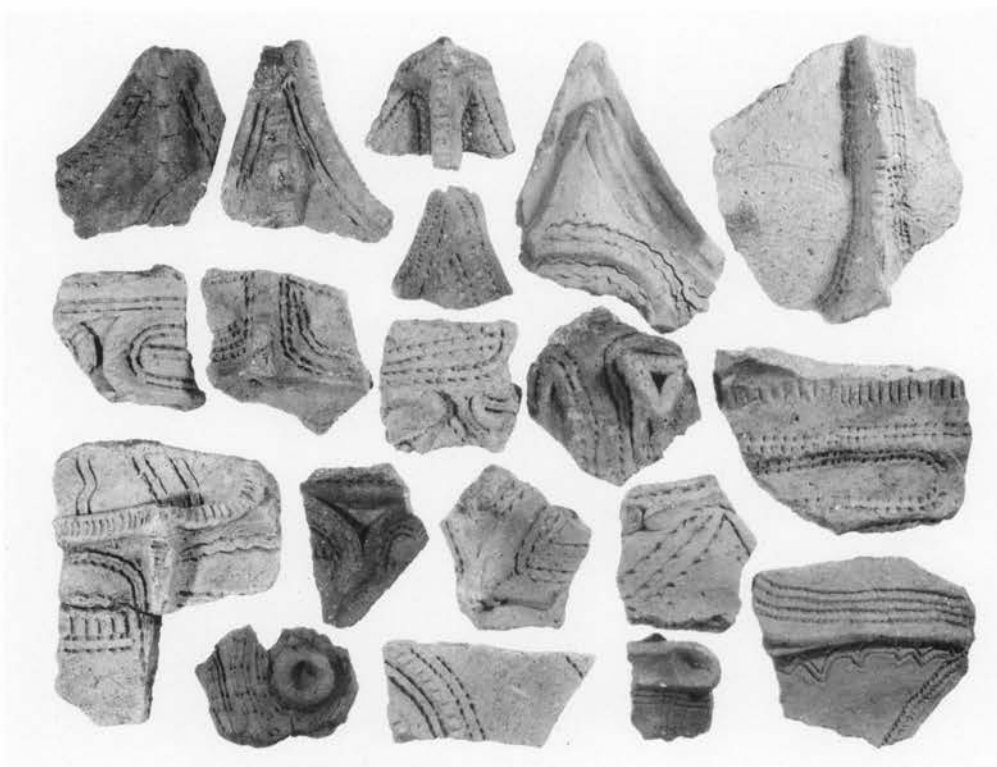
第3群C・D類土器



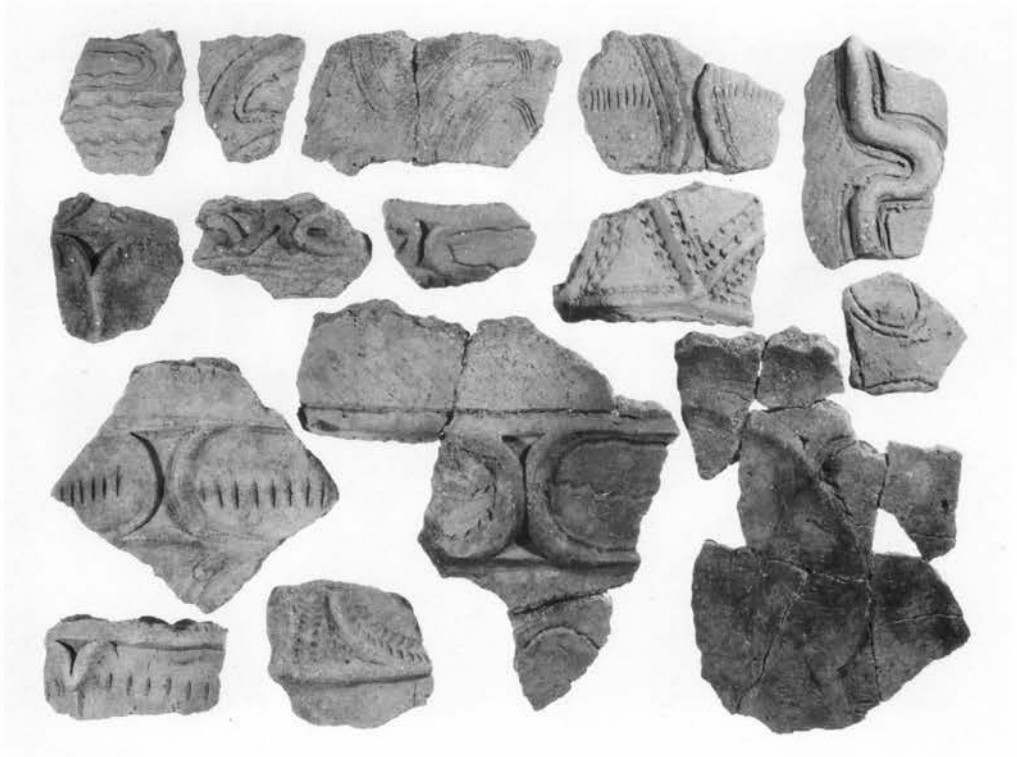
第3群E・F類土器



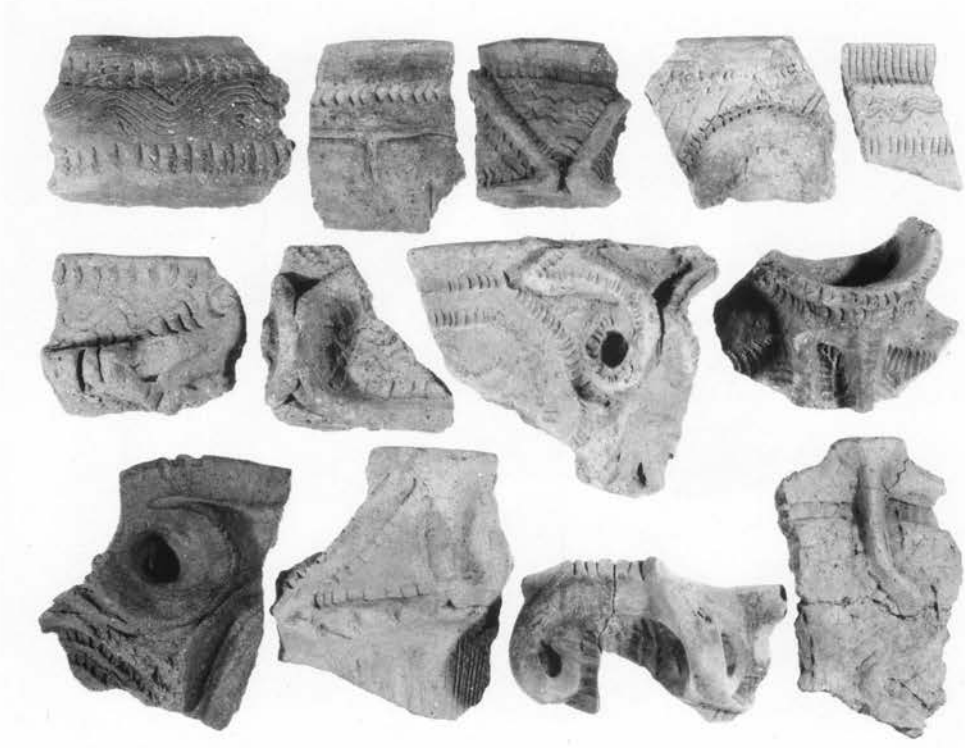
第3群G～I類土器



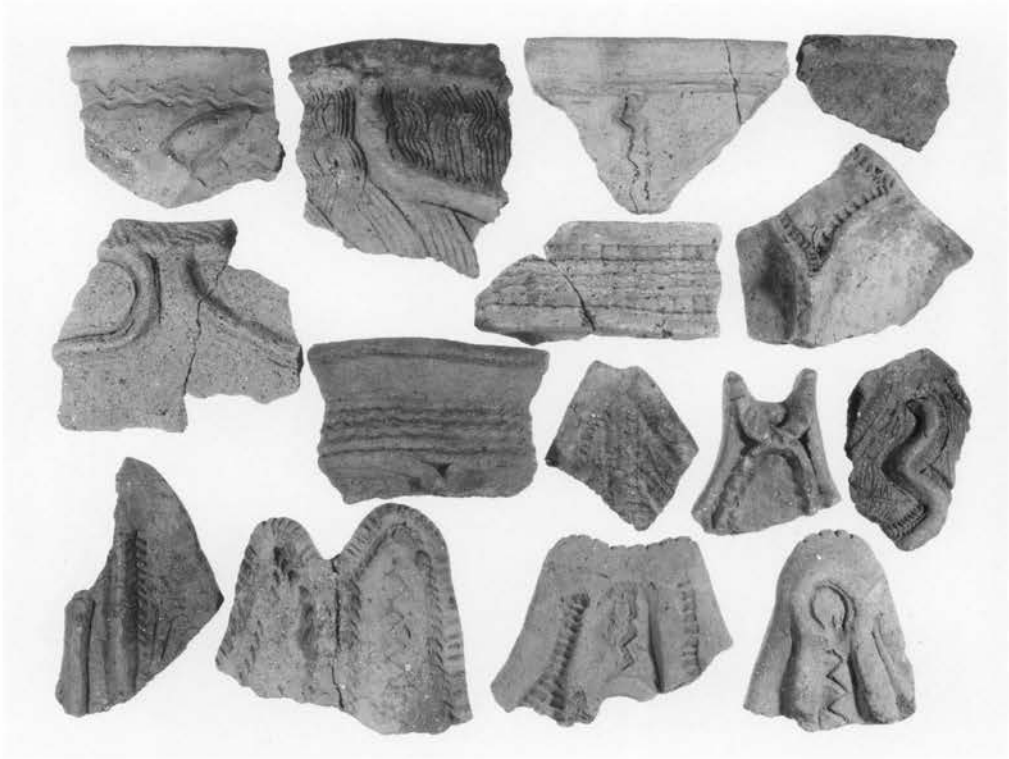
第3群I・J類土器



第3群J・K類土器

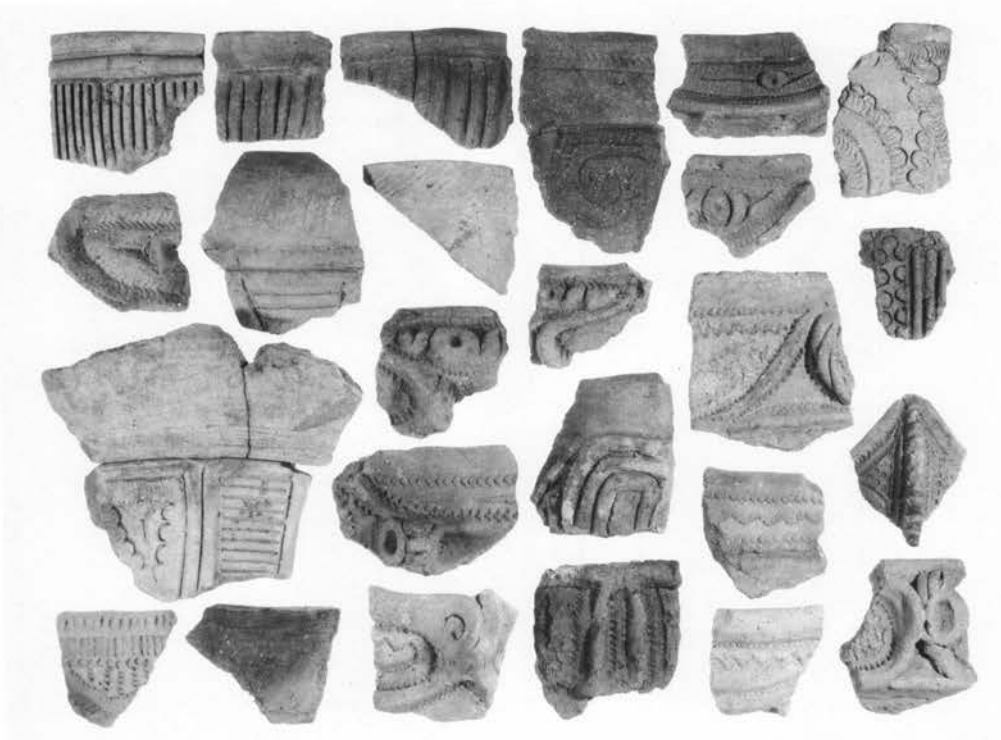


第3群L類土器

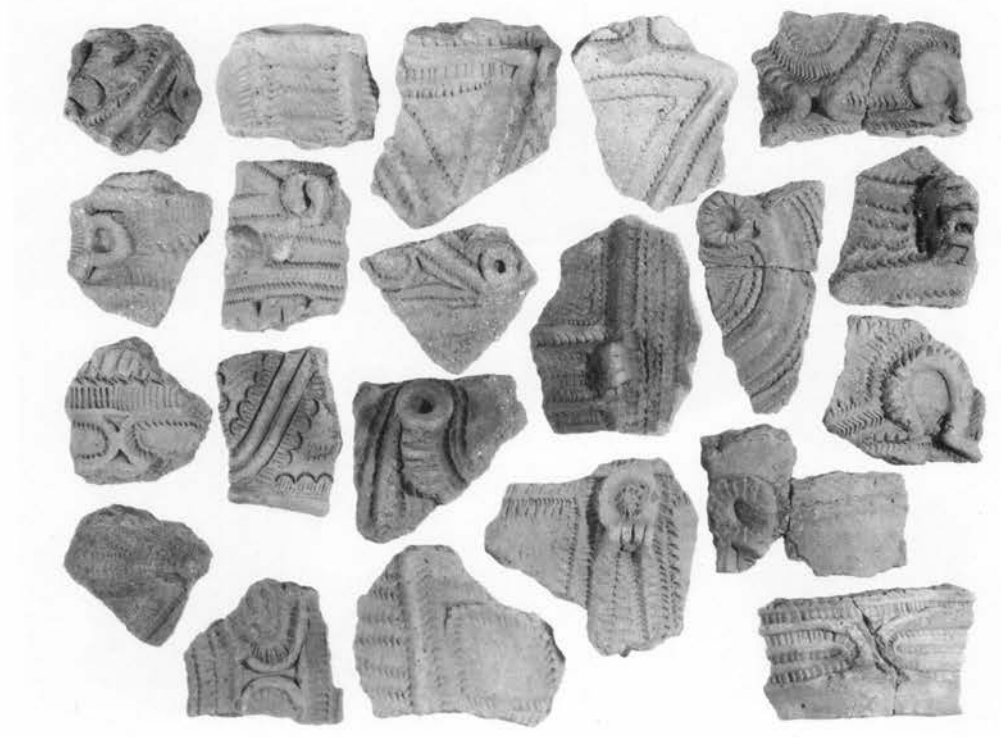


第３群M・N類土器

第３群O類土器

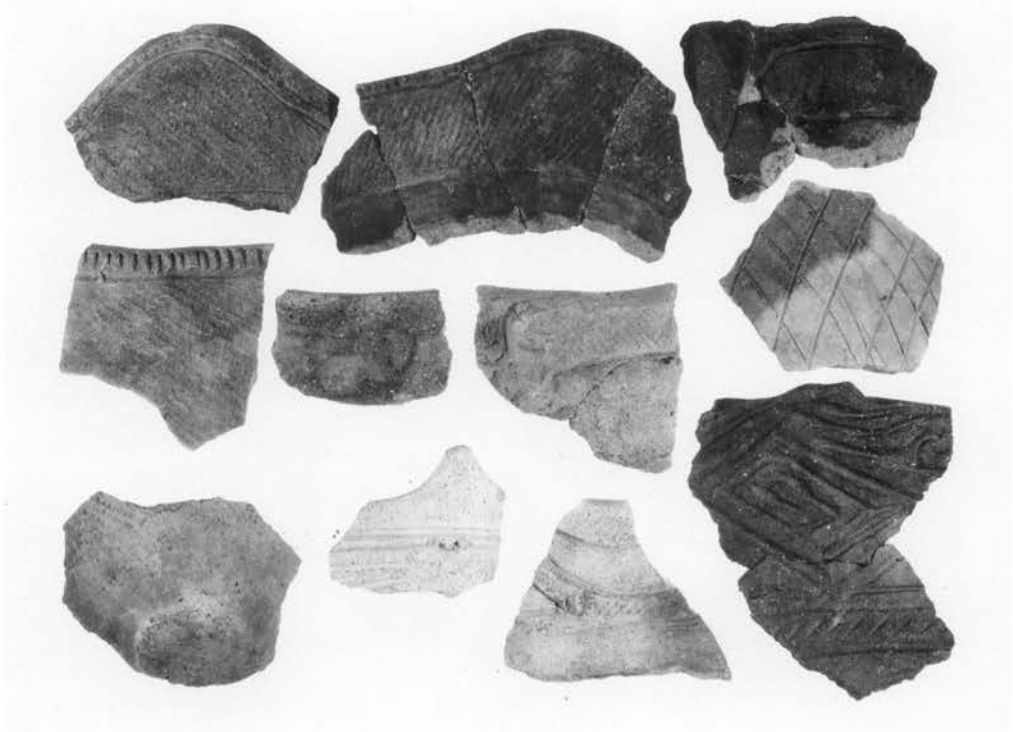


第4群A～C類土器

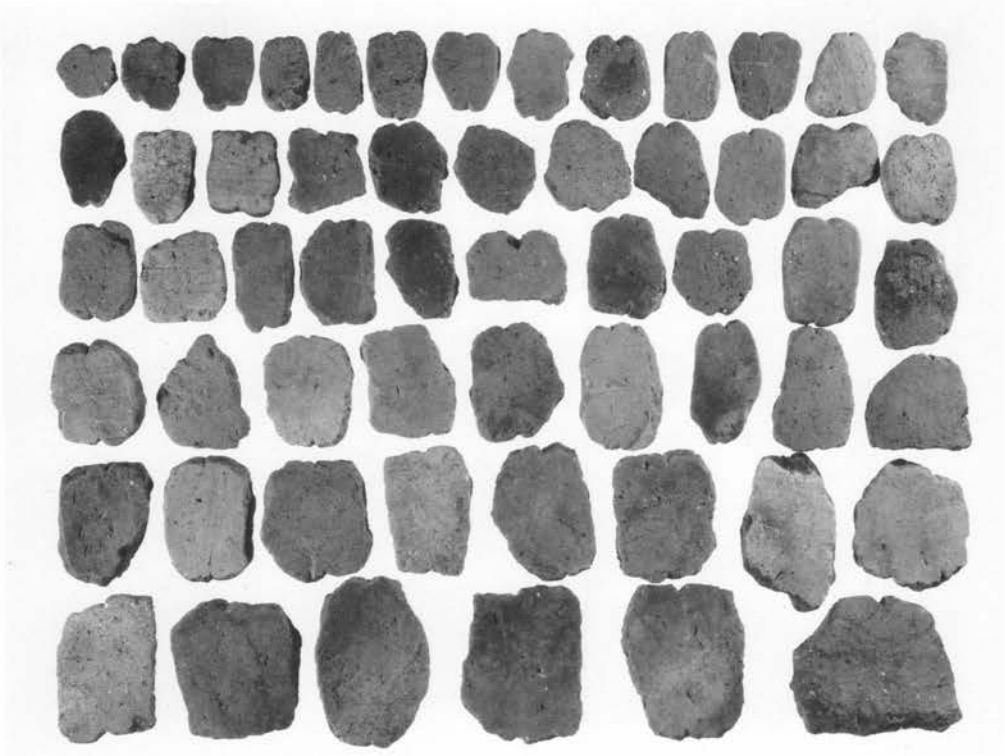


第4群C・D類土器

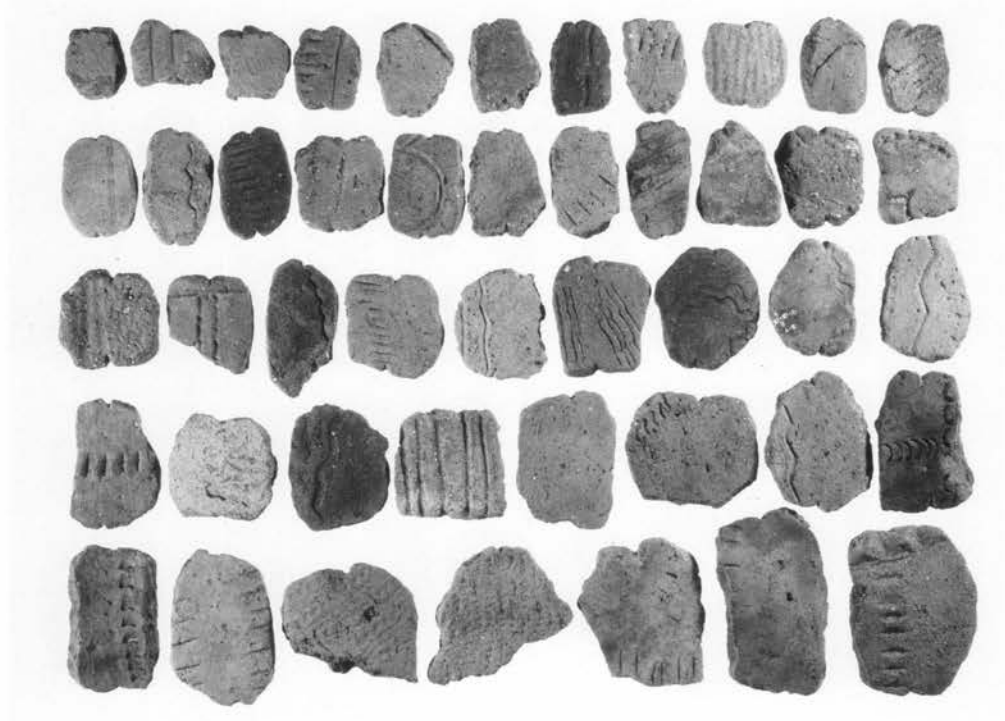
第 5 群土器



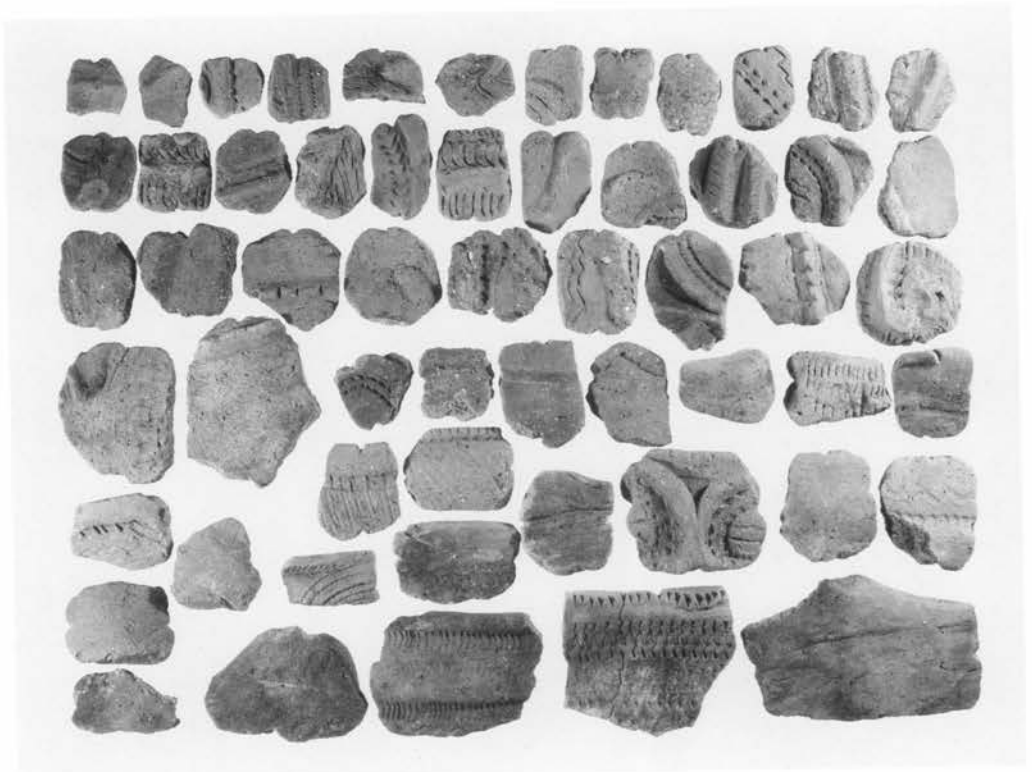
第 7 群土器



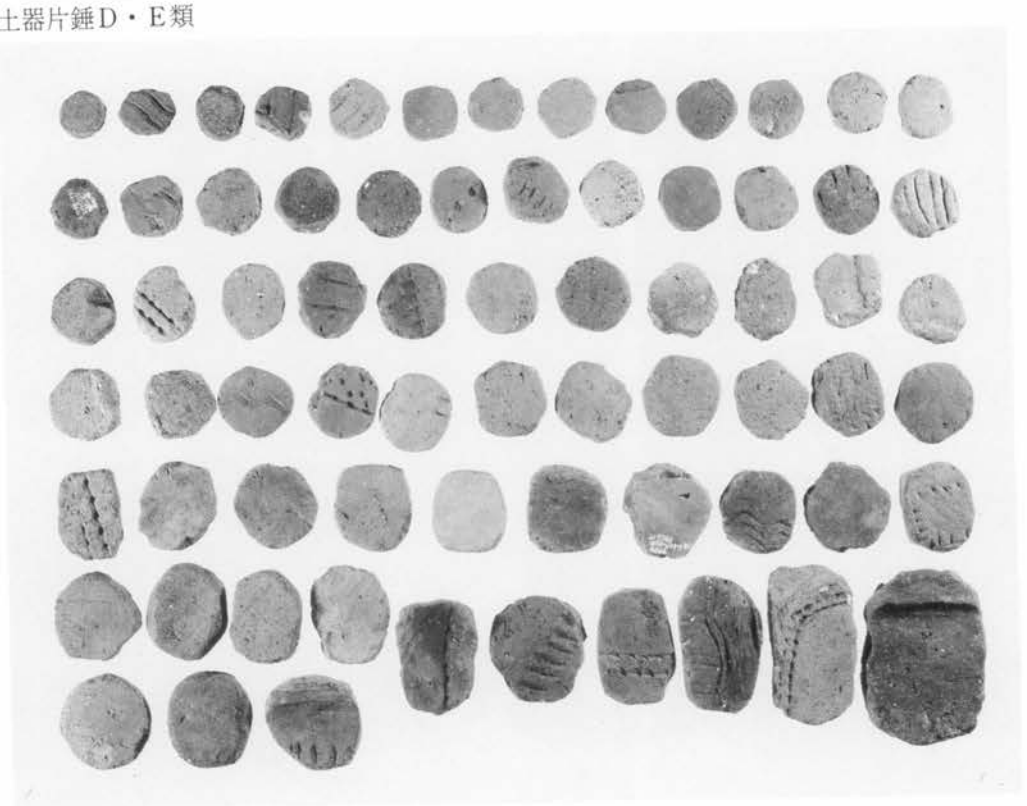
土器片錘A類



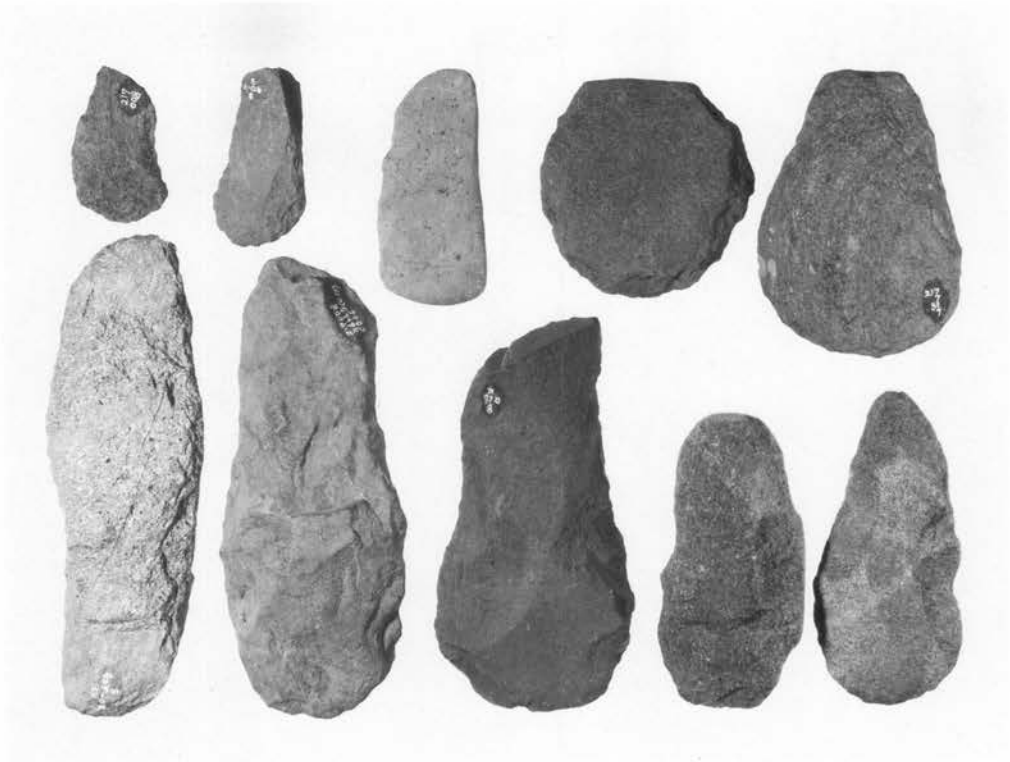
土器片錘B・C類



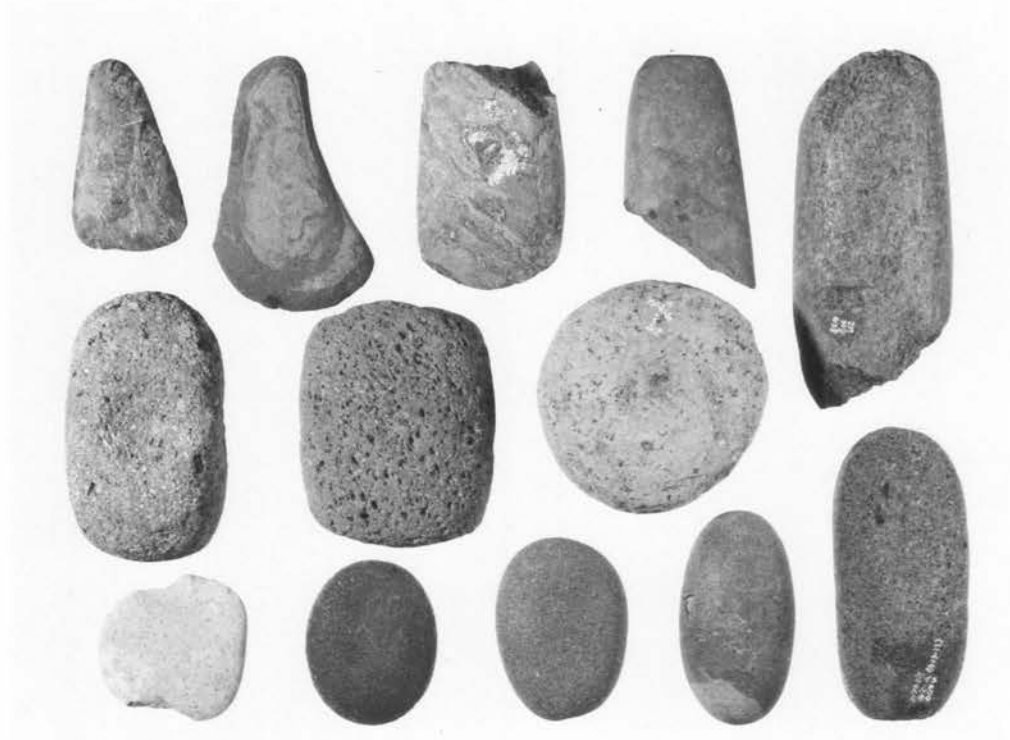
土器片錘D・E類



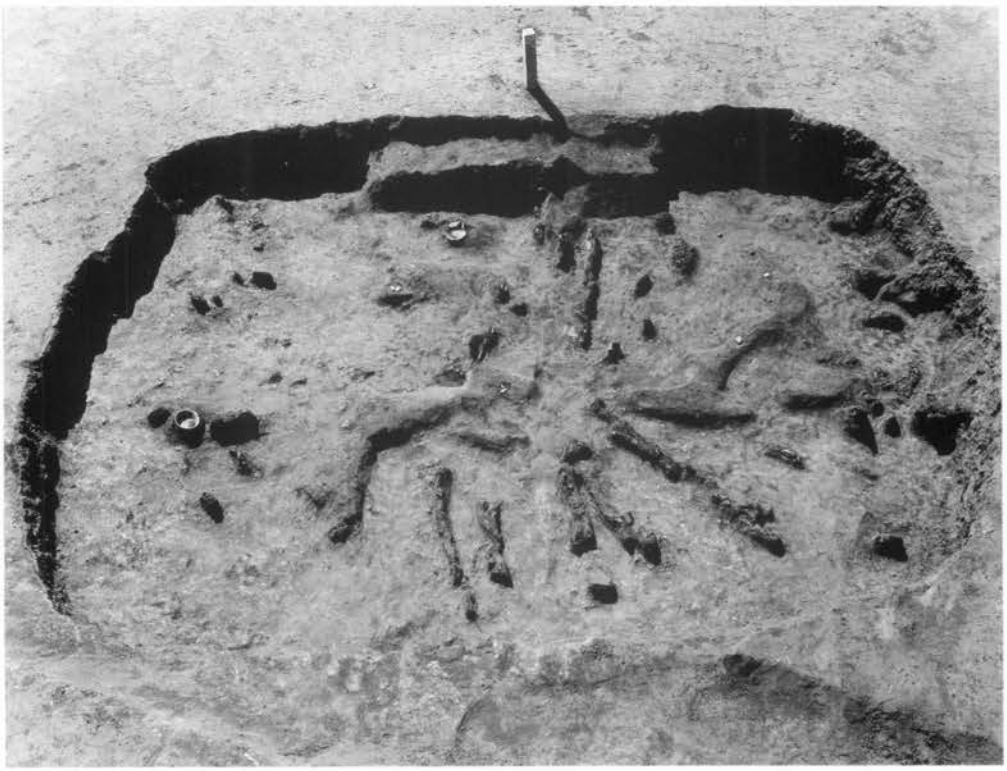
土製円板



打製石斧

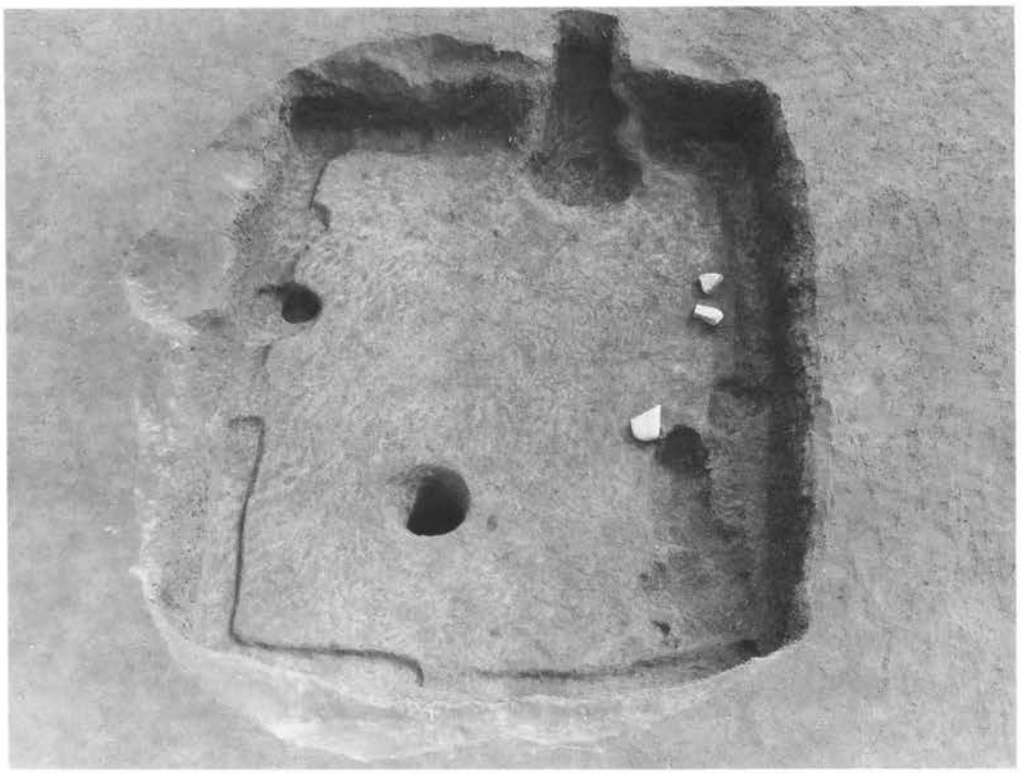


磨製石斧・凹石・磨石・敲石・石錘

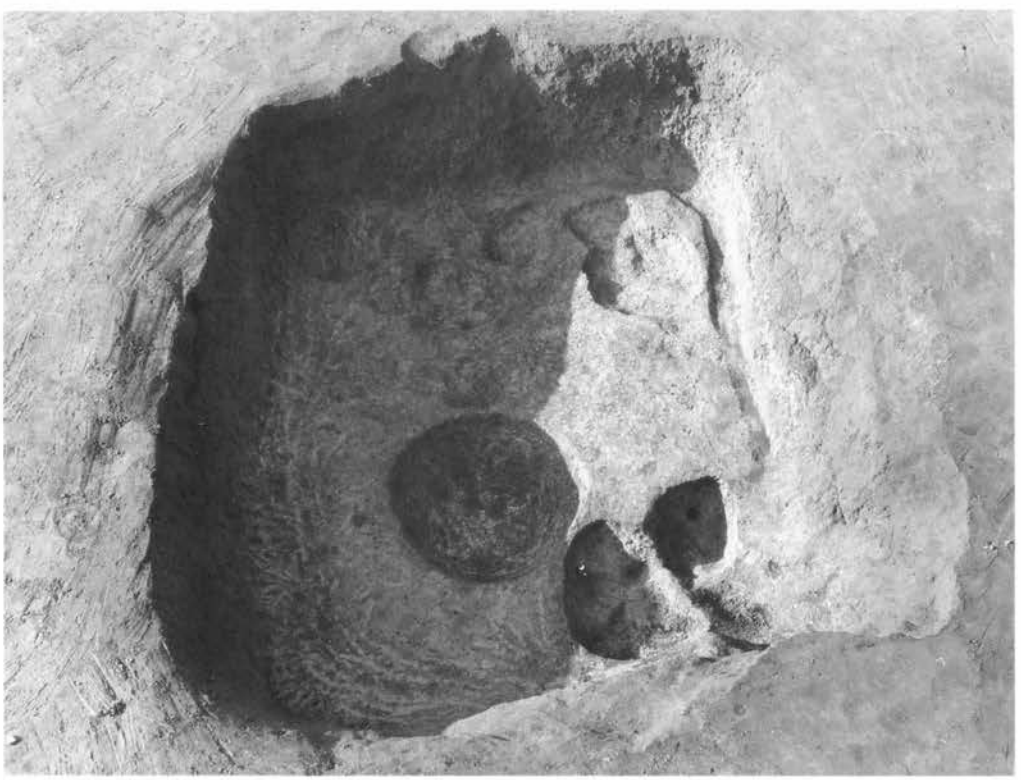


020住居跡

023住居跡



024住居跡



025住居跡

026・032住居跡

1

2

3

4

5

7

6

8

9

020(1・2)・023(3～6)・025(7・8)・026(9)住居跡出土遺物

野馬堀(中山新田II－1遺跡内)

野馬堀土層断面(中山新田II－1遺跡内)

野馬堀調査前全景(八両野遺跡)

野馬堀土層断面

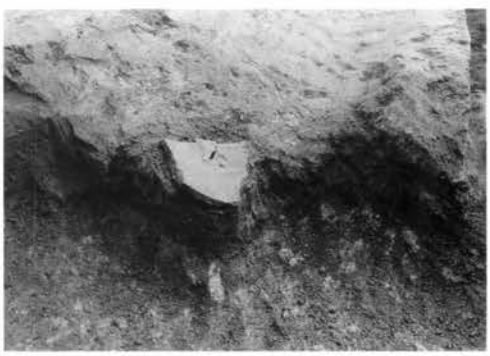
野馬堀土層断面

野馬堀調査後全景

遺跡全景(調査前)

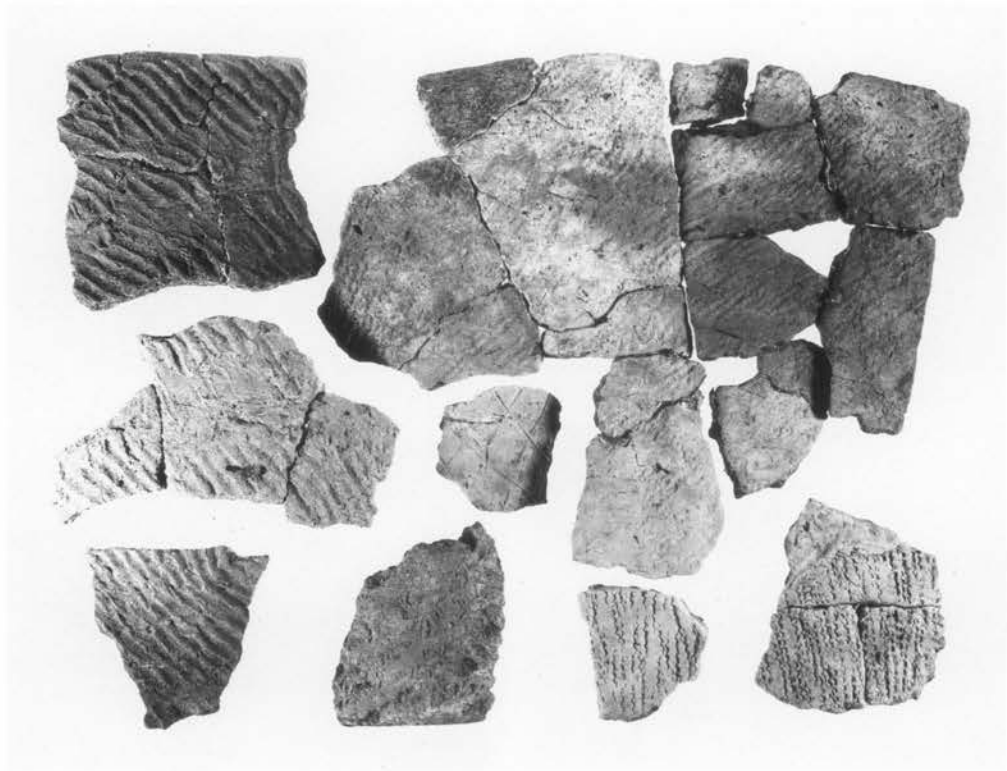
遺跡全景(調査後)

005炉穴



005炉穴遺物出土状況及び土層断面

006土坑

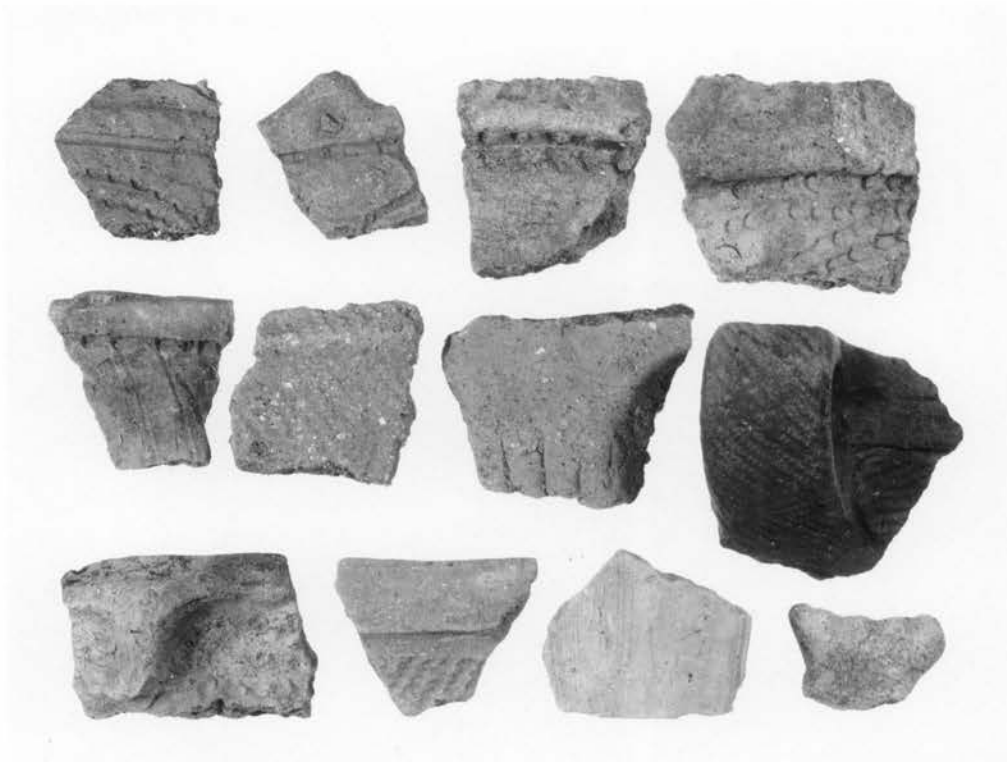


006土坑出土土器

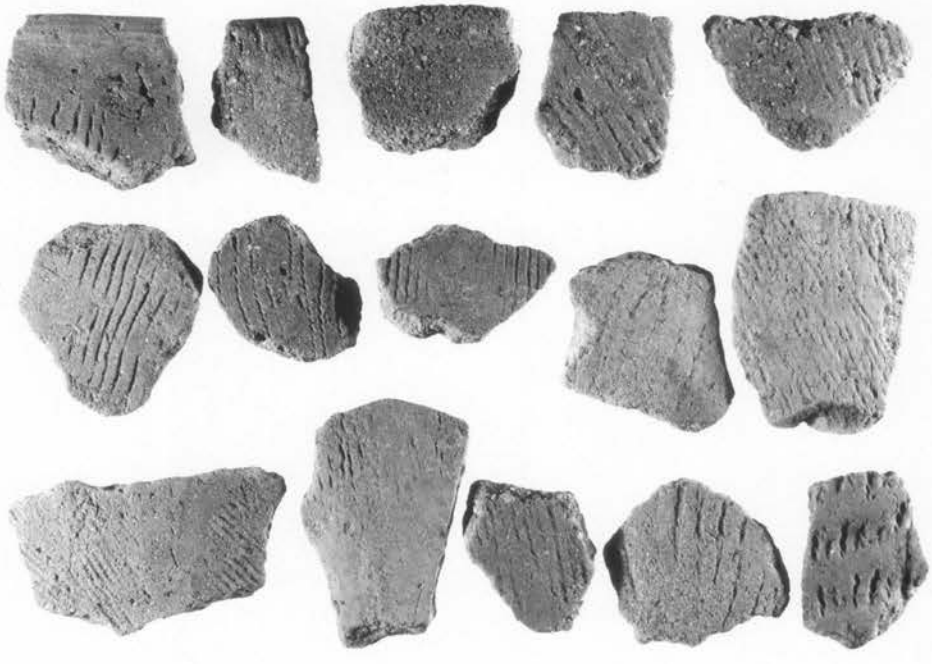
006土坑貝層断面

006土坑貝出土状況

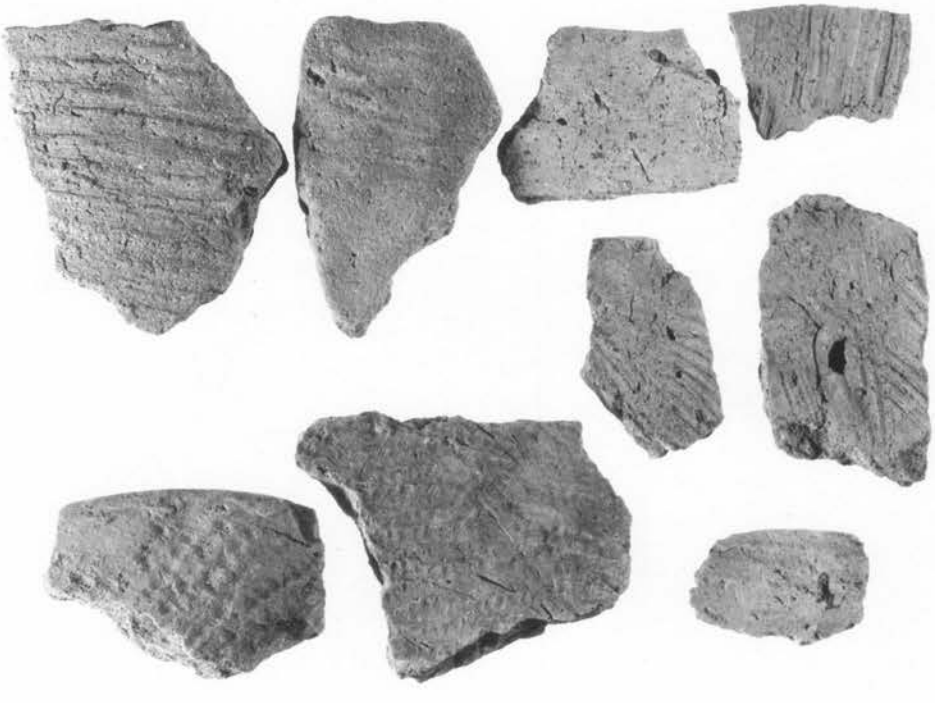
グリッド出土の土器



グリッド出土の土器



グリッド出土の土器



グリッド出土の土器

007住居跡

008住居跡

009住居跡

009住居跡遺物出土状況

1

2

3

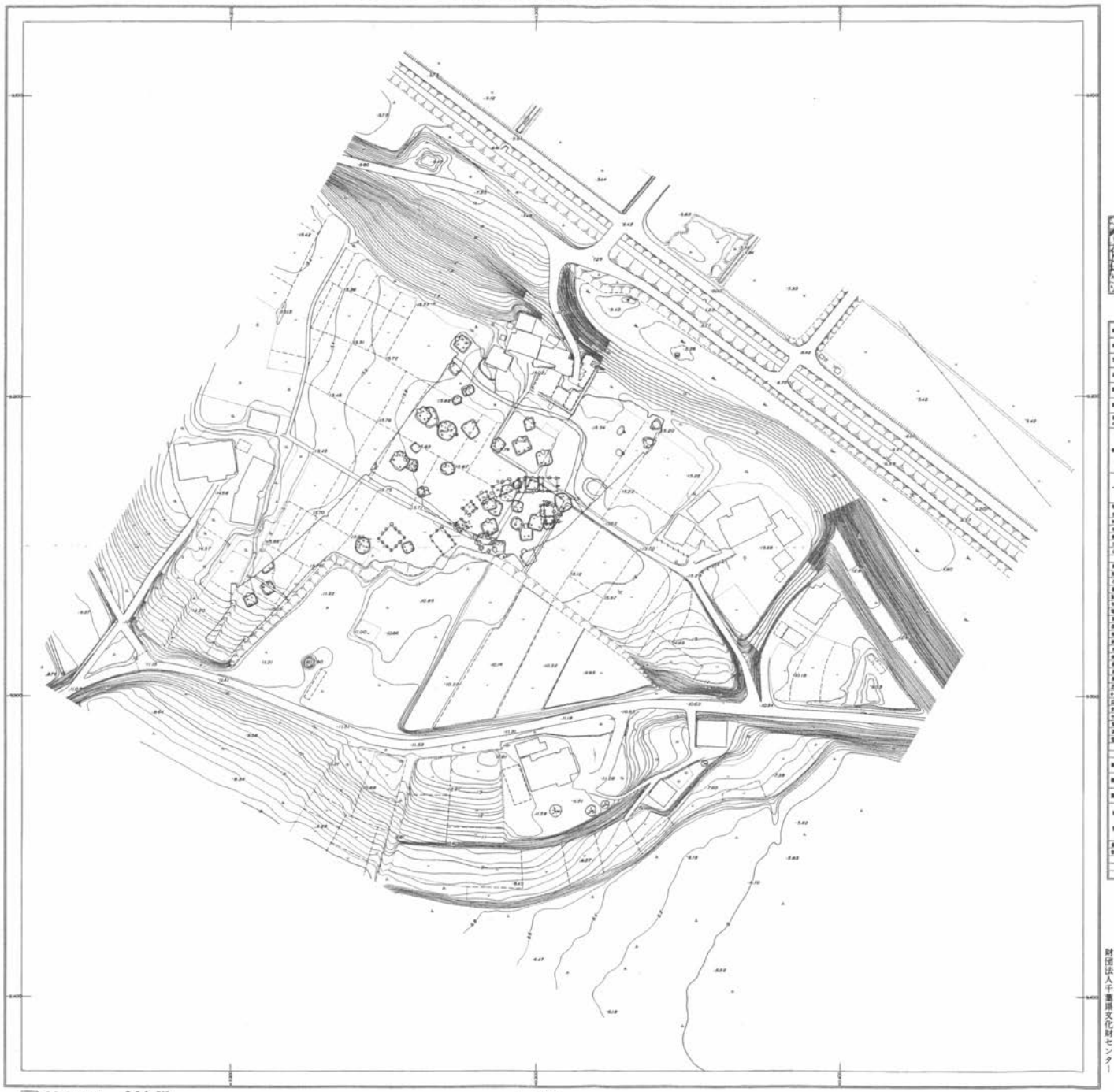
4

5

6

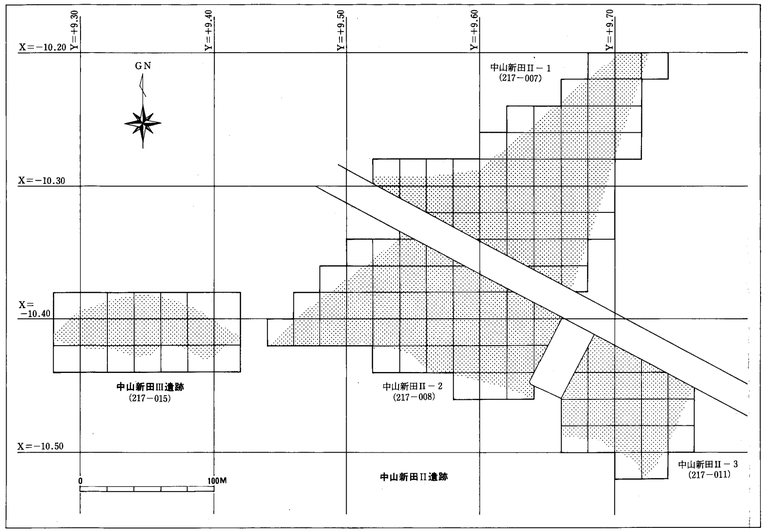
009住居跡出土遺物

付図１　花前Ⅰ遺跡周辺地形図



財団法人千葉県文化財センター

付図２　中山新田Ⅱ・Ⅲ遺跡周辺地形図



常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II

印　刷　昭和59年３月20日
発　行　昭和59年３月31日

発　行　日本道路公団東京第一建設局
東京都港区虎ノ門１－18－１　(03)502－7431
編　集　財団法人　千葉県文化財センター
千葉市亥鼻１－３－13　(0472)25－6478
印　刷　株式会社　太陽堂印刷所
千葉市末広１－４－27　(0472)22－1121㈹